

AC

Gunsho ruiju

145

G855

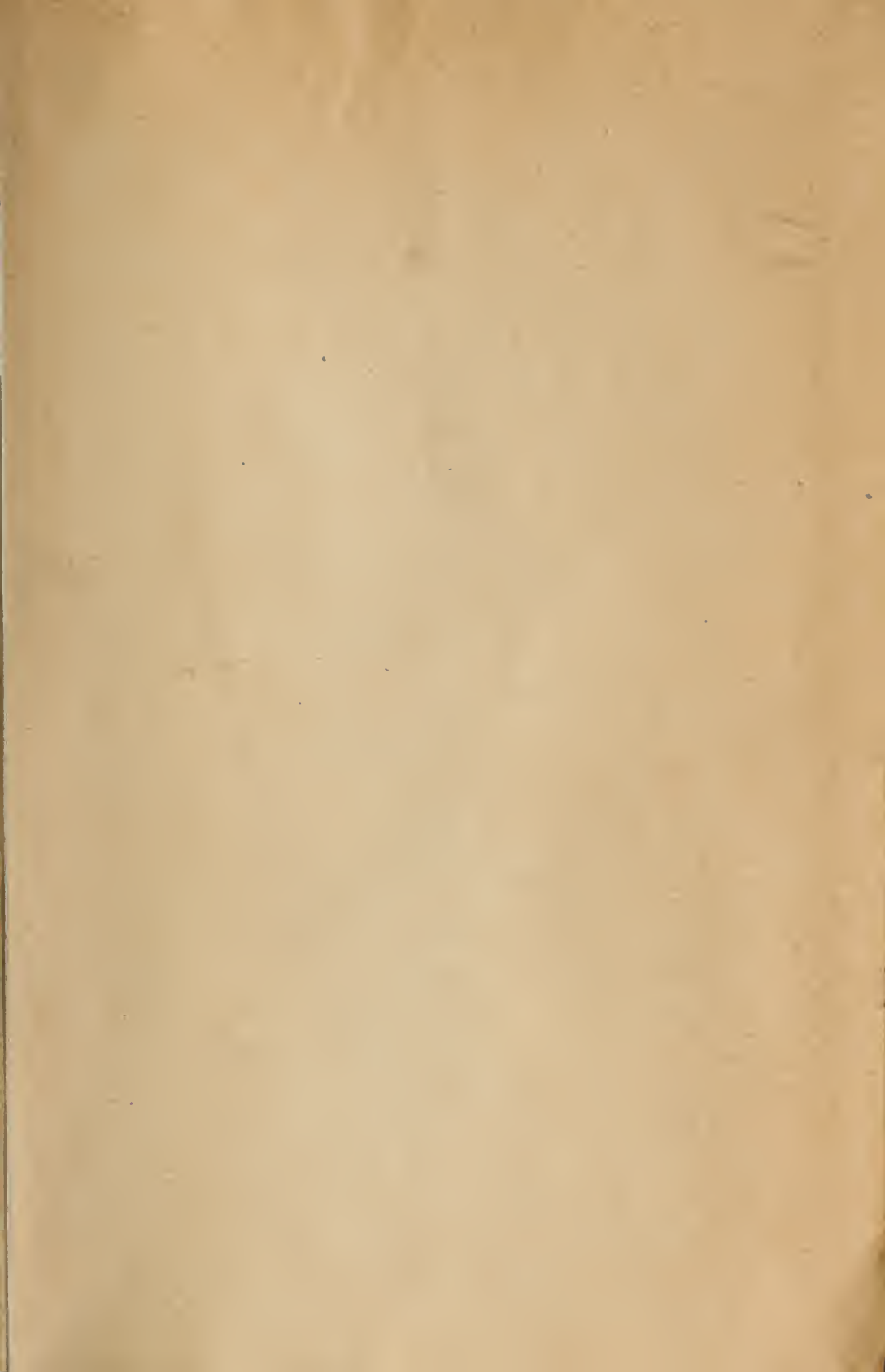
1939

v.15

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

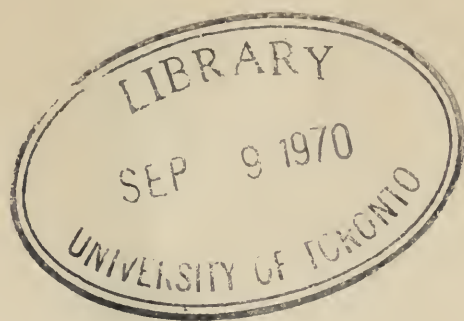
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



羣書類從

第拾五輯

東京
續群書類從完成會



AC
145
G855
1939
v.15

群書類從第十五輯目次

和歌部家集

卷第二百五十四

散木奇歌集

源俊賴

一

卷第二百五十五

藤原爲忠朝臣集

八〇

式部大輔菅原在良朝臣集

九三

藤原基俊家集

九五

卷第二百五十六

清輔朝臣集

一〇五

源師光集

一二二

卷第二百五十七

源有房朝臣集

一二六

平忠度朝臣集

一三一

惟宗廣言集

自永曆
至壽永

一三六

鴨長明集

一四〇

卷第二百五十八

藤原隆信朝臣集

一四四

卷第二百五十九

藤原隆祐朝臣集

一九三

藤原光經集

二〇一

卷第二百六十

源孝範集

二二二

常緣集

二二八

慕景集

太田持資

二四二

桂林集

源直朝

二四五

卷第二百六十一

赤人集

二五三

躬恒集

二六一

興風集

二七四

卷第二百六十二

忠峰集

二七六

忠見集

二八一

曾彌好忠集

二八九

卷第二百六十三

櫻井基佐集

三〇五

卷第二百六十四

出觀集

覺性親王

三二一

卷第二百六十五

北院御室御集……………守覺法親王……………三五〇

遍 昭 集……………三五六

源賢法眼集……………三五九

夢想國師御詠草……………三六〇

卷第二百六十六

慶運法印集……………三六五

堯孝法印集……………三七五

卷第二百六十七

素性法師集……………三八九

惠慶法師集……………三九三

安法法師集……………三九九

登蓮法師集……………四〇五

登蓮法師集補遺……………四〇六

卷第二百六十八

林葉和歌集……………俊惠……………四〇八

卷第二百六十九

寂然法師集……………四四二

寂蓮法師集……………四四七

兼好法師集……………四五八

兼好法師集補遺……………四六九

卷第二百七十

元可法師集……………四七〇

宗祇法師集……………四八〇

卷第二百七十一

嘉喜門院御集……………四九三

齋宮女御集……………四九九

經信卿母集……………五〇四

俊成卿女集……………五〇六

卷第二百七十二

小 町 集……………五一五

檜垣姬集……………五一九

本院侍從集……………五二三

小馬命婦集……………五二五

厩內侍集……………五二九

卷第二百七十三

伊 勢 集……………五四〇

中 務 集……………五六〇

卷第二百七十四

加茂保憲女集.....五七〇

小大君集.....五八一

清少納言集.....五八九

紫式部集.....五九二

卷第二百七十五

和泉式部集.....五九九

卷第二百七十六

相模集 玉藻集.....六三三

卷第二百七十七

赤染衛門集.....六五四

卷第二百七十八

伊勢大輔集.....六八六

康資王母集 伯母集.....六九三

弁乳母集.....七〇一

出羽弁集.....七〇六

祐子內親王家紀伊集.....七一二

卷第二百七十九

二條大皇太后宮大貳集.....七一六

待賢門院堀川集.....七二五

待賢門院堀川集補遺.....七三一

二條院讚岐集.....七三二

二條院讚岐集補遺.....七三六

小侍從集.....七三八

卷第二百八十

建禮門院右京太夫集.....七四六

群書類從第十五輯目次終

ふはの關あしみの駒に教へゆく聲はかりこそ霞まさりけれ
伊勢に侍けるころむつきの四五日の程よもの山邊か
すみわたりたるをみてよめる

都へといそきて春は過にしをいかなる霞立とまるらむ
田上なる所に侍ける頃みやこの方より何事かいかに
霞わたりて心ほそくあはれなる事どもあらんと人の
申たりけるかへりことにいひつかはしける

花さかぬみ山隠れは霞めとも敷ならぬ身のはるかともみる
伊勢の國に侍ける比むつきののはつねの日ねいみとい
ひて家をいてゝ野にいきてひねもすにゐくらしてか
やをかりてこかひするおりにえひらといふなる物に
すなるをそのついでにことのもとなれば松をなをさ
りにひきてかへるとよめる

春たては初子のいみにたひゐして袖の下なる小松をそひく
別當實行の六條の家にて哥合せられるに子日のこ
ころをよめる

春日山麓のをのに子日してかことをかみにまかせてそみる
むつきののはつねの日身のあやしきをおもひつゝけて
よめる

なに事をまつ身共なきあやしきに初子はくれと引人もなし
百首歌の中に子日の心をよめる

祝ひつゝけふしも松を引つればはつ子そ春のはしめ也ける
雪中子日といへる心をよめる

子日してよはひをのへに雪ふれば二葉の松も花さきに梟
百首の哥の中に若菜をよめる

千載
春日野の雪を若菜につみそへてけふさへ袖のしほれぬる哉

むつきの七日中宮亮仲實かもとへなゝくきのなつか
はすとよめる

岡見河む月に映るるこの畦をつみしなへてもその御爲そ
返し 仲實朝臣

心さし深きみにゝつみためていしみゆすりて洗ふね芹そ
屏風の繪に雪ふりたる野へにわかなつみたるかたか
ける所をよめる

春日野の雪のむら消かきわけて誰ためつめるわかなゝる覽
人のもとよりわかなをゝくりて侍けるかへりことに
よめる

類ひなき心ひろさをかたみにてなけの情をつみてける哉
七日卯杖にあたりたりける日常陸守經常も兼かもと
よりわかなにそへてをくりける哥

老らくの腰ふたへなる身なれとも卯杖をつきて若菜をそ摘
返し

鳩のゐる杖に縋りて摘みければそのしるしきへ頼もしき哉
人のもとへわかなにそへてつかはしける

君かため夜こしにつめる七草のなつなの花をみて忍ひませ
人のもとよりわかなをゝくりけるをみてよめる

いか許り嬉しからまし身につめる年を若菜と思はましかは
伊勢に侍けるとしむつきの一日卯日にあたりければ
みうちに卯杖なとたてまつるをみてよめる

けふそしるこえくる山の嶺しきに年もう杖をつくにや有覽
はつうの日よめる

あさましやはつ卯の杖のつくゝと思へは年の積りぬる哉
おなし心をよみて人のかりつかはしける

とへかしなけふの卯杖に縋られてよによるほへる老の姿を
伊勢に侍けるころいつきの宮にてあをむまひくを見
てよめる

ひく駒の松の緑の色なれば干とせをすくす庭かとそみる
むつきの十五日にあかつきかゆの見ゆるを見て人々
哥よまむなといふを聞てなとかよまさらん兼盛か集
にもある心地こそすれとてよめる

初春のもち月にもるかゆなればなへてならすはあかき成鳥

山家春雪といへる事をよめる

山里はつもれる雪のいつしかと消るそ春のしるし成ける

雪はふれともつもらさりけるを見てよめる
いかにせん花待ほととの淡雪はまなくふれともつもらさり鳥

百首哥中に残雪をよめる

立かへる春のしるしはかすみしくをはつせ山の雪のむら消

餘寒の心をよめる

衣手次郎のうすきや冬の關ならん我身はいとゝしみこほりつゝ

いつしかの杜の鶯といへる事をよめる

鶯は春待つていつしかの杜のたまゝにこゑならず也

鶯告春

春新物そとは霞にしるし鶯は花のあたりりかいをそことつけなん

鶯のこゝろをよめる

いとゝしく聲なつかしき鶯はねもや梅の香にかほるらんにほふい

山家鶯といへる心をよめる

鶯新後のきなかさりせは山さとにたれとか春の日をくらさまし

百首哥中にうくひすをよめる

かすならぬ身を鶯とおもへともなくをは人の忍はさりけり

山家鶯といふ事をよめる

雪消ぬ谷かくれなる鶯のなにをしるへに春をしるらん

おなし心を殿下にてよめる

山里はつれ／＼になくうくひすの聲より外に友なかりけり

皇后宮に人々まいりて歌つかまつりけるに雨中鶯と

いへる事をよめる

春雨金葉はふりしむれとも鶯のこゑはしほれぬ物にそ有ける

東北院の花さかりなりと聞て人々あまたくして見に
まかりたりけるに梅花もさかりにておもしろかりけ
るに鶯のをとつれてすきかたかりければたちとまり
て侍けるに人々はすきにければよめる

かくはかりすけなき梅を鶯のいかにしてかはかさにぬふ覽

梅花夜薰

梅千載の香はをのか垣根をあくかれてまやのあたり本集に臨求む覽

梅花遠薰

心新古あらはとはまし物をむめの花たかりよりか匂ひきつるとらん集

大殿より哥繪とおほしく書たる繪をこれ歌によみな
してたてまつれと仰ありければ屋のつまに女おとこ
にあひたるまへに梅花風にしたかひて男のなをし
うへにちりかゝりたるにおさなきちこむかひるて散

かりたる花をひろひとるかたある所をよめる

梅花ちる木のもとに風ふけはかさねぬさきに袖そかほれる

百首哥中に梅花の心をよめる

梅の花色をは闇にかこへともかはもれてくる物にそ有ける

皇后宮亮顯國朝臣家に梅花落水といへる事をよめる
散積る花こそいはによとむとも香は流れてやせにかほる覽

二條帥俊忠のもとより雪の朝にをくりたりける

千載 咲そむる梅のたちえに降雪はかさなる數をとへと社おもへ

返し

千載 梅かえに心もゆきてかさなるをしらてや人のとへといふ覽

紅梅をよめる

次郎 くれなるの梅かえに鳴鶯はこゑの色さへことにそ有ける

梅花風にかほるをよめる

かきこしに吹くる風のにほひにて花のありかを空に知かな

月照梅花

色にこそ影をもそへめ梅の花かをさへ月のもてはやすかな

柳隨風

いつかたへ吹とも風の見えぬ哉なひく柳のさためなければ

法成寺の花さかりと聞て人々あまたくして見ありき

けるに柳の木のもとにゐて侍けるに人々は花のもと

にあそはれければ柳の木にかきつけて侍ける

青柳のいとしもなしと思へはやわれより外にくる人もなき

百首哥中に柳をよめる

もかり舟ほつゝしめなは心せよ河そひ柳かせになみよる

二月

いまたさかさる花といへる事をよめる

次郎 めくむよりけしきとなる花なれば兼ても枝のなつかしき哉

賀陽院殿の哥合に櫻をよめる

金影 山櫻さきそめしより久かたの雲井にみゆる瀧のしら糸

修理大夫顯季卿六條の家にて櫻の哥十首人々によま

せ侍けるによめる

三輪の山すきまを分て尋れば花こそ春のしるしなりけれ

嵐やは霞もつらし散そむるはなをそ風にたちへたてまし

櫻はなちる木のもとに風ふけは水のほかにも涙はたちけり

しからみに風し障らは花のちるあたりの空にかけまし物を

風をいたみまつらの山にちる花やふりけん袖の名残なる覽

しら雲のみねこす風にたゞふとおもへは谷に花を散ける

おしとたにいはいはれさり鳧櫻はなちるをみるまの心まとひに

芹摘しもをいはいはしかりなる花の夕はへみける身なれば

けさみればきそちの櫻咲に鳧風のはふりにすきまあらすな

惜みかね我も散なはこん世にも花にむつるゝ虫とならはや

遠見櫻花

神山にまゆふのぬさをひきかけてさらすや花の盛成らむ

中宮の御堂の八重櫻をおりて修理大夫顯季のもとに

つかはすとて

ぬひめなく八重かさなれる花みれば春も梢にきくは咲けり

返し

修理大夫

きくといへはやへやは咲ぬ櫻花おりたかへても思ひける哉

殿下にて雨中櫻といへる心をよめる

雨ふらは枝にさゞせよ櫻花おのかみかさの山にはあらずや

中宮亮仲實花見にまかりけると聞てつかはしける

うき身をは花みる人もいとひけりこゝろは春の風ならぬ共

齋院にて花下忘歸といへることを

吾妻路のおいその杜の花ならばかへらんとを忘れましやは

深山櫻といふ事をよめる

山櫻谷ふところにこかくれて風そよめにて花もとむなり

遠山櫻といふ事をよめる

雪きえぬふしのけふりと見えつるは霞にまかふ櫻なりけり

華花日暮

干載

暮れはてぬ歸さは遅れ山櫻たかためにきてまふとかしる
北山の邊にまかりて花見ありきてやう／＼暮ぬる程
に木のもとにてさけなとたへけるついでにかはらけ
取てよめる

我こゝろ花の梢に旅りして身の行衛をも知しとすらん
堀川院御時鳥羽殿の花見の御幸に池上花といへる事
をつかうまつれる

渾たてる櫻のみかは池にさへ花のみふねをうかへてそみる
中宮の御堂の八重櫻さかりなりと聞て亮仲實なとく
してまいりてみればまことに心もこと葉もめてたさ
に人々哥よみければよめる

八重櫻見るにけかるゝ身の程を思ひもしらすたつねくる哉
色みれば櫻なれともかさなれるけしきはやへの山ふきの花
をされてやもひもそするとてあたりの木ともをきり
はらはせ給を見てよめる

もきたつる梢をみれはいとしくあたりをはらふ八重櫻哉
やへ櫻ちらす風そと思ふよりつらきながらもなつかしき哉
身のほとを何おもふらんやへさける花見る程の心うつしに
花見にまかりけるを聞て修理大夫顯季のもとよりを
くられて侍ける

春風にあらぬ身なれと櫻はなたつぬる人にいとはれにけり
返し

君か身は花にかへしとみる物をかせならすとも思ひける哉
堀河院の御時花山といふ所の花さかりにて面白かな
りとさこしめして女房たちを見せにつかはしけるに

くしてまかるへきよしおほせ有けるにいたはること
ありてえまいらぬよし申させたりければ猶ためらひ
てまつうちまてまいれとおほせことありと藏人のつ
けければためらひてうちまて参りたるを御らんして
馬つかさの御馬をめしにつかはして速にいけとおほ
せ有ければ宣旨そむきかたさにまかりてよめる

又人にかはりてよめる
梢には名殘もあらし山さくらおらてはかへる人しなれば
澗庭花といへる事をよめる

妹背山こもリイ谷ふところにおひたちて木々のはくゝむ花を社みれ
二條帥俊忠のかつらの山里にて櫻柳交枝といへる事
をよめる

あすもこんしたり櫻の枝はそみ柳のいとにむすほれけり
深山櫻といふ事をよめる
風たにもかよはさりける山なればちらてや花の春を過らむ

花色留人
人はさそいはねとゝまる櫻はなおしむ梢に名殘あらせよ

堀川院の御時賀陽院殿におはしましける比中宮の御
方の女房たちを花してかざりたるふねに乗させ給て
あそはせ給けるにまいりて池のみきはにさふらふを
御らんして俊頼さふらふめりふねよりさりぬへから
んこといひかけよなとおほせ事有ければみふねより
たまはりたりける哥

君か代のはるかにゝほふ櫻花梢にかけて干とせみえける
故源中納言おまへにさふらひてその岸なからつかま

つれとせめられければつかうまつれる

いへはけに花のみふねと見えつるは君か千年をつめる也
梟修理大夫のかつらの山さとにまかりたりけるに庭の花
おもしろくさきたるもとに人々居なみてあそひける
にあるしかはらけとりて

今年よりちとせの春を頼む哉花のゆかりにとはると思へは返し

人しれす思ふ心はある物を花のゆかりといはれぬるかな

風おこりて心地れいならす覺えける頃花の散を見て
あけくれば風に煩ふ身なれともちるをは花の上とこそみれ

大貳長實の亭にて哥合せんとしけるによめる

花か共けふそおほめく雪ならは梢にのみはふらしと思へは花をよめる

次郎風ふけは梢もいその心地して花のしらゆふなみそこえける

尋花越山

はなみんと思ふ心にひかされてすかるゝもかきのほる哉
攝政殿下にて人々に十首哥よませ給けるに櫻をよめる

遠近に花咲ぬれば驚のあるそなれの松に見そまかへける
大裏にて南殿のさくらをみてよめる

九重にたちかさなりて春かすみ風になみせそ花のにほひを
おもふ事ありける頃大貳長實卿のもとへつかはしける

山蔭にやせさらほへるいぬ櫻おひはなたれてひく人もなし

返し

大貳

春のゝちは君かなけきに花さきて思ひひらくるおりも有南

權僧正永縁か花林院にて哥合し侍けるに致縁にかはりてよめる

誰か又あかすみるらんさは山のかすみにもれてにほふ櫻を

曉尋花

かすみもや花のありかを尋ぬらんよをさへこめて棚引に梟

見山花

さほ山に花咲ぬれば白妙のあまの羽衣ぬきかけてみゆ

大貳長實卿の白河の宿所にて花下旅宿といふ事をよめる

やさしやな苔のしとねにちりそむる花を衣に重ねてそぬる

花をよめる

咲はちる花をときはの物とみて心しつかによをすくさはや

越山見花

白妙の花の梢にめをかけていそしのみねをおりそわつらふ

金繁

堀河院御時中宮の御方にて風靜花香といふころを

梢にはふくともみえて櫻はなかほるそ風のしるし成ける
顯仲の君の八條の家にて人々十首哥よみけるに櫻をよめる

をのれかつ散をや雪と思ふらんみのしろ衣花もきてけり
落花滿庭といへる事をよめる

詞

はく人もなき古里の庭の面は花ちりてこそみるへかりけれ
大貳長實卿白河の花見にとてさそはれければまかりてよめる

詞

しら河のこする空をみわたせは松こそ花のたえま也けり
花をおしむといへる事を

同

櫻花たをれとちらぬものならば梢に人のゝこさましやは

落花隨風

跡たえてけはしき谷のいはのうへに花こきおろす春の山風

夜思落花

春の夜の闇にし風の吹さらは見ぬまに花をちらさましやは

對花厭風

青柳の糸もて風をゆひとめて花のありかへやらしと思ふ

池上落花

梢より風にもまるゝ花なれはちりても池の涙そおりける

土御門前齋院にて水上落花といふ事をよめる

かせふけは散ぬる花も水のおもにうつれる枝に又咲にけり

雪山花

高砂のおのへのさくらきてみれば時しも風のもてさはく哉

かは堂の櫻さかりなりと聞て人々あまた参りて惜落

花といふことをよめる

われよりも櫻そ花をおしむへき枝をし忍ふ人しなけれは

雲居にて花下述懐の心をよめる

厭ひても猶もいとほんさかりなる花に風ふくこの世也けり

花下日暮

櫻はなをのかもろさのゆふはへに心をさへもちらしつる哉

落花留客

たちかへる心そつらきさくらはな散をは見しと思ひし物を

白川の花見にまかりたりけるにことの外に散をみて

隆源阿闍梨に申かけゝる

身にかへて惜にとまる花ならはけふや我世の限りならまし

花漸少

はかくれはしはしもすまへ櫻花つるには風のねにかへす共

花下述懐

櫻はな散かふほとはなみかけて洗ふ小嶋のひさきとそみる

圓宗寺の邊にまかりて冒雨見花といふことをよめる

散花のしづくにぬるゝ袖なれは乾くもおしき物にそ有ける

左京大夫經忠のもとにして山花隨風といへることを

よめる

山嵐のみねこそすくれに散花を空行くもと思ひけるかな

大貳長實卿白川にて殘花誰家といふことをよめる

覺束なたかふる里の花なれはふく風にさへしられるらん

堀川院御時きさいの宮の御方にてかたをわかちて花

をおりにつかはして御前のいつみにたてならへて哥

よませ給けるによめる

吹風をいとひてのみもすくすかな花みぬ年の春しなけれは

又人にかはりて

九重にうつさゝりせは山さくらひとりや苔の上にちらまし

水邊落花といへる事を圓融院に人々まかりてよみけ

るに

花のちる下行水のそこみれは影にはなみそ風となりける

雲林院の花のもとにて人々哥よみけるによめる

散花を風にまかせてみる時をよはうき物とおもひしらるゝ

攝政殿下にて十首哥よませ侍けるに櫻をよめる

心ともちりける物をさくら花なにぬれ衣を風にきせけん

おなし殿下にて探題の哥よませ給ひけるに櫻をとり

てよめる

續古今

こゝろあらは風もや人を恨ましおるは櫻のおしからぬかは
ならの歌合に教縁にかはりてよめる

よしの山花咲ぬれば谷川のなみはたかねの物にそ有ける
散花をさそふとみつる春風のうはの空にもすてゝける哉

三月

三月三日人のかりいひつかはしける
君か爲彌生になれはよつまさへあへのいちゝにはゝこ摘也

三月三日の心をよめる
たれもみなけさは櫻をうちすてゝもゝを尋てすくす成けり

同日もゝさくらさきあひたるをみてよめる
櫻にも枝さし交すもゝなれば空さへけさはさかやもひせり

はるかに桃花を見やりてよめる

^{次郎}誰か又みて忍ふ覽山かつのそのふのもゝのはなのよそめを

百首哥中にかへるかりの心をよめる

^{千載}春くれはたのむの雁もいまはとてかへる雲路に思ひたつ也

かへる雁の心をよめる

あちきなや小山田をこそかへしつれ雁金さへも思ひたつ哉
思ふとかなふ身ならはかりかねの返る雲路に關すへましを

百首哥中に早蕨をよめる

春くれはおる人もなき早蕨はいつかほとろとならむとす覽

同百首中に春駒を

とりつなけたまたよこのゝ放れ駒躑躅（かへたにイ）の岡にあせみさく也

春駒をよめる

春駒はあさかの沼にあさりしてかつみの浦はふみしたく也

攝政殿下にて十首哥よませ給けるに春駒をよめる

春の野におはなあしけの見えつるは引違へたる心地社すれ

百首哥中にすみれをよめる

わきも下か花の袂をかたみにてつめるすみれを心（ことなるイ）してみよ

殿下にて雨中のすみれをよめる

たれとみて忍ひかはせんつれ／＼とこし雨ふりて葦咲野を（にイ）

百首哥中にかきつはたを

にほとりのすたくみぬまの杜若ひとへたつへきわか心かは

苗代

秋かりし室のをしねを思ひ出て春そたなるに種もかしける

たなかみの山里にてたかのみねといふ所をよめる

今こそはきゝもあはすれ雉子なく遠の高根はたかの峯かも

雉子をよめる

^{次郎}いとゝしくをのかありかへやる稻をこゝに有とや鳥の鳴覽

屏風の繪に春山里に人々なかめてゐたるに野にたか

かりする所をよめる

雉子なくすたのに君かくちすへて朝ふます覽いさ行てみん

百首哥中に欸冬をよめる

風吹はなみをりかけてかへりけり岸にはうへし山吹のはな

家綱かもとよりはまくりをゝこすとてやまふきを上

にかさして書付て侍ける

山吹をかさしにさせは蛤を井手のあたりの物とみるかな

返し

心さしやへ山吹と思ふよりはまくりかへしあはれとそ見る

水邊のやまふきを

みなそこにしつめる枝のしつくにはぬる共おらむ山吹の花

伏見の山里にておなし心をよめる

をる波のうしろめたさにめもかれす立るふしみる山吹の花

修理大夫顯季の六條の家にて欸冬藏橋といへること

をよめる

山吹をおるとや人の思ふらんはしたとるとてわくるま袖を
堀川院御時に肥後かもとによきやまふきありときこ
しめしてめしたりければまいらすとて花にむすひつ
けたりける

千載

九重にやへ山吹を移してはいてのかはつのこゝろをそくむ
かへしつかうまつれと宣旨有ければ

山吹の名残をこひてけさよりはたれとか井てのかはつ鳴覽
故源申納言國信の坊城の堂に中宮亮仲實か住ける頃
人々まかりてあそひけるに池のみきは山ふきさか
りにておもしろかりければ人々哥よみけるによめる
山吹の汀もすまに咲ぬればあらふさなみいとなかりけり
左京大夫經忠の八條の家にてやまふきをよめる
あかすのみ思ふ心のかさなれはいくへともなし山ふきの花
百首哥中に藤花をよめる

春來ては心の松にかゝりつるふちのはつ花咲そめにけり
堀川院御時御前にて雨中藤花といへる事をよめる
雨ふると藤のうら葉に袖ふれて花にしほるゝ我身と思はん
二條關白殿にて池邊藤花といへる事をよめる
藤の花みきはにほふ池水はふかむらさきに涙をたちける
観音寺の藤の花のもとにて晚見藤花といへる事をよ
める

紫にいくしほそめて藤のはなゆふひさかきのはひをさす覽
殿下にて十首哥よませ給ひけるに
かすか山さかゆくふちいとしく驚なきつ春の明ほの
屏風の繪に藤さきたる家に老人たちたる所を
はふくもくるとたへし梅かえに藤したる宿とみつれば

修理大夫顯季觀音寺のふちの花さかりなりと聞て見
にまかりけるにさそはれければまかりてよめる
吹風にふちえのうらを見わたせばなみは梢の物にそ有ける
なしの花さかりなりけるをみてよめる

新古今

櫻あさのおふのうらなみ立かへり見れ共あかぬ山なしの花

加賀守顯輔のもとにて關路花殘といへる事をよめる
さもこそはなこそ關のかたからめ櫻をさへも止めける哉
三月盡花色春深といへる事をよめる
かそふれば春も梢に成にけり花とゝもにや散まかふらん
やよひのつこもりに鶯のなくを聞て

見るまゝにうらなみかけて鶯よ人のとゝめぬ春ならなくに
三月晦日時房かもとにあるきたかはしてまてにしわた
りにあるきてあそはむといひつかはしたりけれとう
ちのさはりにこめられてえまからさりける程にくれ
にければかれよりをくり侍ける

立かへり春思ふたにあるものを君をさへけふ待くらしつる
はしかきにざとをはかれすとかけり
返し

暮てゆく春をおもふもこぬ人を待にもまさるゆかぬ心は
おくにあまのをふねもとかけり
栖霞寺の羅漢供へまいりてかへさに旅中春暮といへ
る事をよめる

わかれゆく彌生の空に暮はれてしらぬ人にもまとふけふ哉
三月の晦日人々哥よみけるに
とゝまらむと社春の難からめ行衛をたにもしらせましかは
人許にて三月晦日の心を

春こそはかきりもあらめみよしのに霞は残れかたみ共みん

百首哥中に三月の晦日の心をよめる

我宿を厭ふかところ思ひつれ野へにもけふを春はくれける

殿下にて三月晦日のころを

金衆
歸る春卯月のいみにさしこめてしはしみあれの程迄も見む

散木奇歌集第二

夏部 四月

百首哥中に衣かへの心をよめる

夏衣たちきるけふのしらかさねしらしな人に裏もなしとは

ならの歌合に人にかはりて餘花の心をよめる

暮にける春のほかにもちらすてふなをさへ花の殘しける哉

櫻たに散のこらはいひしかと花見てしもそ春は戀しき

餘花隨風

いとしくみる空そなき櫻花わかれし春のかたみと思へは

百首哥中に卯花をよめる

卯花も神の昨解きてけりとふさまたはにゆふかけてみゆ

源中將の八條の家に哥合しけるに卯花をよめる

雪の色をぬすみてさける卯花はさしてや人にうたかはる電

殿下にて卯花をよめる

卯花の身のしらかとも見ゆる歳賤かかきねもとしよりに髡

卯花作牆

卯花の垣根なりけり山かつのは月にさらすけふとみつれば

卯花隣隣

うの花のかきねはかりそ諸友にかよふ心のへたてなければ

浦卯花

卯花の頃はひなれや磯の浦にたつしき波のおるかと思へは

左京大夫經忠の六條家にてよめる

卯花の盛になればしらとりのさきさか山のしほりとそみる

卯花をよめる

卯花よいてとしかけしまの涙もさこそは岩をこえしか

遠見卯花

卯花のよそめなりけり遠近にいつかは涙のゐせきこえける

卯花留客

卯花のさかりならすは山里にくる人となかるせましや

卯花をよめる

卯花はいはこす浪にかほれ共おるてはぬれぬ物にそ有ける

卯花誰家

何かとふ己か垣根の卯花をみぬにてしりぬものゝふそとは

百首哥中にあふひを

けふくれはしとろにみゆる山賤のおとろの髪も葵かけたり

桂の枝にかけて人のかりつかはしける

人しれすあふひを待としらせはや桂の枝のおりもよからは

百首哥中に橘をよめる

橘のきのまるとのにかほるかはとはぬになる物にそ有ける

人のもとよりたちはなを送とて

限りなく思ふ心をしらするははなたちばなのにはひ也けり

返し

いとしく花たちはなを懷かしき心さしける匂ひと思へは

初聞郭公

時鳥は山のすそを尋ねつゝまた里なれぬはつねをそきく

ならの哥合に人にかはりて郭公をよめる

時鳥初音は空にとまらねとあかぬなこりになかめつる哉

垣根郭公

數ならぬ我とはなしにほとゝきすよをうの花の垣根にぞ鳴

郭公をよめる

みそのふにむきの秋かせそよめきて山郭公忍ひなくなり

郭公未遍

時鳥つきわかしとやおく山のこぬれかくれに聲ならすらん

五月

夜聞郭公

明はまつちらさておらんほとゝきすはな立はなの枝に鳴也

伊勢に侍けるととき五月一日郭公のいたくなきければ

かひの君のもとよりいひ送りて侍ける

郭公けふは五月といひかほにしたりかほなる聲を聞ゆる

返し

ほとゝきすをのか五月の空ならは所もわかすしたり顔なれ

殿下にて郭公の哥人々によませ給けるに

はしめなきみのはしめより郭公あかてもよゝを過しける哉

なかく共なきつといはん時鳥人わらはれにならしと思へは

郭公こゑ待つてきく程や人に我身のうらやまるらん

しとみ山風はおろせと時鳥聲はこもらぬ物にぞ有ける

ほとゝきす待しわたらは入橋のくもての數に聲をきかはや

ほのめかすうきたの杜の時鳥思ひしつみてあかしつるかな

時鳥なかぬなけきの杜にきていとゝも聲をほゝめつる哉

垣根にはもすのはやにへたてゝ覺しての田長に忍ひ兼つゝ

郭公のうたとてよめる

なけかしなたむけの山の時鳥あをはのぬさもとりあへぬ迄

夜深聞郭公

ほとゝきす己かね覺の初聲にまつ人さへそおとろかれぬる

郭公留客

たかために旅ねをすれと郭公又ともなてさよふかすらむ

關路郭公

時しもあれなにあふ坂の杉かえに山ほとゝきす關かたむ也

山里にて郭公を聞てよめる

ほとゝきす主怪しとてよかれすな山の景色も空はかはらし

曉郭公

もろともに今を鳴なるほとゝきす八聲の鳥は己かつまかは

百首哥中に郭公を

五月こは信太の杜のほとゝきす木つたふちえの數とになけ

待郭公

時鳥まつらさよひめたちゐしてひれふる里に聲なおしみを

毎夜待郭公

時鳥まつにしるしのあらはれてねぬよの數に聲を聞はや

賀陽院殿の哥合に時鳥を

待兼てぬるよもあらは時鳥きかぬためしの名をやたゝまし

大貳長實卿の家に哥合せんとしけるに郭公をよめる

未途

時鳥あつさのそまのそま人にこゑうちそへてみや木引なり

山中郭公

時鳥をのかね山のしゐしはにかへりうてはや訪つれもせぬ

郭公驚眠

またすてふ我名もたてしほとゝきす鳴おこしつと人に語るな

郭公をよめる

ときつ鳥なかね雲井にとゝろきてほしの林はうつもれぬ覽

雨中郭公

これきかむこせのさ山の杉か上に雨もしのゝにくきら鳴也

鳥羽殿にておなし心を

柴の庵にあまやとりせよ郭公かよふかきねもおなし梢そ

待郭公

歎かしなふな木の山のとゝきす月のてしほに浦傳ひして

堀河院の御時二間にて殿上のおのことも哥つかまつりけるによめる

ほとゝきす鳴ねにかけしうつらねは鏡の山もかひなかり曇

船中郭公

追風にもとるもたゆしほとゝきすいたかさこの松の梢に

修理大夫顯季の六條の家にて連夜待郭公

ほとゝきす待夜の数は重なれと聲はつもらぬ物にそ有ける
皇后宮權大夫師時の八條の家にて歌合しけるに郭公
をよめる

ほとゝきすなかつそいろの鶯にまれになくてふとな習ひそ

雲居寺にて未飽郭公といへる事を人々あまたまかり
てよめるに

干殿

さしもなそ思ひそめけん時鳥雪のみ山のゝりの末かは

八條入道の泉の家にまかりて十首哥人々よみけるに

金部

待かねて尋さりせは郭公たれとかやまのかひになかまし

又人にかはりて

朝ねかみゆふのみ山の時鳥はやうちとけねおもひみたれて
故大殿の北政所より歌繪をたまはりてこれに哥よみ

あはせてたてまつれと有ければにはにへといふもの
すゑたる所に鶴むかひてたり空に郭公なくを女な
かめてゐたるをよめる

ほとゝきすなく一聲をしるへにて心を空にあくからしつる

堀河院御時中宮の御方にて人に物申けるにほとゝき
すのほのかに聞えければ女のよめる

君と我もかたらへは郭公しのひねすると人やきくらむ

返し

今夜さはねにあらはれね時鳥かたらふ事のしるしと思はん
五月はかりに人のもとにまかりて夜もすからものか
たりしけるに郭公のなかな事なと申ければ女のよめ
る

夏の夜は山ほとゝきす待かねてゆふつけ鳥のなきぬへき哉
返し

人はいさわれはよひよりあふ坂の夕つけ鳥のねをのみぞ鳴

郭公催戀

いとゝしく袖のしほるゝ郭公なくねや戀のしるへなるらん

終夜待郭公

あけぬなりつゐにはなのれ時鳥待にはなかなぬ物としらるな

修理大夫顯季の八條の家にて郭公まつといへるこゝ
ろを

我身を恨みつる哉時鳥またすはなかなぬなけきせましや

大貳長實卿白川の家にて郭公をよめる

響吉

をとせぬは待人からかほとゝきす誰おしへ劔數ならぬ身を

時鳥鳴うれしさをつゝめとも袖には聲もとまらさりけり

左京大夫經忠の八條の家にてよめる

ほとゝきす聲待かねてゆふけとふ道のうらにもとよき物を
ならの歌合に人にかはりて郭公不_レ乏といふ事を

今こそはふたむら山の時鳥聲をりはへてあやになくなれ

待郭公

なきをくれこちこせ山の郭公きなせの里のまつ_のたえまに

殿下にて晩聞郭公といへるをよめる

みくまのゝはまゆふかけて時鳥鳴音かさねよくへなり共

暮山郭公

暮にけり聲おさめてよほとゝきす己か小倉の山にあらすや

閑中郭公

なきつとも誰にかいはん時鳥かけより外に人しなけれは

晩聞郭公

ほとゝきす末の松山風ふけはなみこすくれにたちる鳴なり

曉聞郭公

明にけり月みる空のほとゝきすたえすも物をおもはする哉

修理大夫顯季卿のもとよりひさしうをとつれすとして

さみたれのころをくられたりける

五月雨

空をなかくてすくせともたえてをとせぬ郭公かな

かへし
毎夜待郭公

時鳥よころ心をつくさせてけふそかすかにほのめかしつる

をとほの山の時鳥をよめる

ほとゝきす音羽の山になきつとはまつあふ坂の人にかた覽

左京大夫經忠の八條の家にてかはつをよめる

おくろさきぬたのねぬなはふみしたきひもゆふまじ蛙鳴也

中宮の御堂にて人々歌よみけるに蛙をよめる

あさりせし水のみさひにとちられて菱の浮葉にかはつ鳴也

百首哥中に早苗を

初苗にうすのたまゝを取そへていくし待らん年つくりえに

十首歌中に早苗を

流れつるけこのみわもり数_をなてさやたの早苗取もやられす

おなしさなへをよめる

早苗取たこのも裾のひたすらにおり立渡る身をいかにせん

けきたにもよをこめてとれ芹河や竹田の早苗ふし立ちに覺

五月五日春宮大夫公實のもとよりあるきたかはてあ

れものへいかにくせんと有けれとはきにれいなら

ぬと有てえまかるましき事なと申けるついでによめ

る

ありくへき方社なけれ柴の庵に更てかもきの歴なるれは

左京大夫經忠の八條の家にあやめをよめる

岩の上に生るみぬまのあやめ草つめるみこしや萬代のため

殿下にて五月五日の心をつかうまつれる

なかきねも花の袂にかほる也けふやまゆみのひおり成らん

仁恵法眼の妹の許よりくすたまをくるとてよめる

菖蒲草君か淀のゝねならねとこめつらにも思へかしなと

返し

嬉しさのねをさへけさはかくる哉何のあやめもしらぬ袂に

五月五日の心をよめる

あやめひくみぬまをみれば唐國にけふや鏡のかけを増らん

あやめにいはひの心をそへて

み垣もる衛士の玉えにおりたちてひけは菖蒲のねも遙か也

百首哥中にあやめをよめる

我宿は軒のしのふし繁ければふける菖蒲もみえぬけふ哉

あさかの沼のあやめといへるをよめる

菖蒲かるあさかの沼に風ふけはをちの旅人袖かほるなり

あやめ草かけ水底になみよりてあさかの沼も深みとりなる

五月五日男女のもとになかさねをこせたりければ女にかはりてよめる

袂にはかりにもかけし人心みぬまにひけるあやめと思へは

皇后宮權大夫師時八條の家にて哥合しけるに五月雨の心をよめる

五月雨は降からをのゝ忘水をしひたすらのぬまえとそみる

五月雨の心をよめる

さみたれはもりこし水も岩こえて庭もぬまえのそこと成堯

百首哥中に五月雨

おほつかないつかはるへきわひ人のおもふ心は五月雨の空

五月雨はなつかしかりし水の音の夥しくもなりまさる哉

別當實行家哥合に五月雨心をよめる

雲はれぬ五月きぬらしたま衣むつかしき迄あましめりせり

源中納言雅定の家にて五月雨の心をよめる

五月雨の晴せぬ頃^{程イ}は引さらす瀧のしらぬのいくのそふらん

おなし心をよめる

さみたれは軒のしつくのつくく〜と降つむ物は日數成けり

五月雨のこゝろを

五月雨は河そひ柳みかくれてそこのたまもと成にけるかな
降初し日をかそふれはみつかさの久しくなりぬ五月雨の空

堀河院御時中宮御方にて閏五月郭公といへる事をよ

める

ややまたきなけ御空の時鳥さつきたに社をきかへりけれ

大貳長實の白河の宿所にて五月盡日郭公歸山といへる事をよめる

時鳥ふたむら山を尋みんいりあやの聲やけふはまさると

おなし心をよめる

尋ぬともかひやなからん時鳥跡を五月のつこもりにして

百首哥中にほたるをよめる

あはれにもみさほにもゆる螢哉聲たてつへき此世と思ふに

山家曉瑩といへる事を

山里はさはへのほたるとひかひて音には鳥の初音をそきく
蘆のやのひまほの〜としらむ迄もえあかしてもゆく螢哉

ほたるをよめる

遠近のよ川にたけるかゝり火とおもへは澤のほたる也けり

百首哥中にもしをよめる

ともしするは山の原に立鹿のめもみせぬよを恨みてそふる
ともしに戀の心をよすといへる事をよめる

逢事はともしの鹿の今宵しもめをみせつればくるにや有覽^{るイ}

六月

皇后宮權大夫師時の八條の家にて水風晚涼といへる事をよめる

風吹ははすのうき葉に玉こえて涼しく成ぬ日くらしのこゑ

夏日越關

夏くれば行かふ人をあふさかの關はしみつに任せてそ見る

月前逐涼

しはつ山檜のわか葉にもる月の影さゆる迄よはふけぬらし

月前自秋涼

衣手もやゝはたさむし夏の夜の月のひかりは秋の空かは
夏夜短

夏の夜にはかにてらすいなつまの光の間にも明ぬへら也
春宮大夫公實の許にて對水待月といへる心を

山のはをたまえの水にうつしもて月をも波のしたに待かな
宇路のふけとのにてよめる

山里のこやのえひらにもる月の影にもまゆのすちはみえ
別當實行の家の哥合に夏月をよめる

ひかりをはさしかはしてや鏡山みねよりなつの月はいつ覽
殿下にて夏夜の月をよめる

紫陽花の花のよひらにもる月を影もさなからおる身共かな
夏虫をよめる

燈火にいる夏虫のはかなさを身にたとへてもあかしつる哉
堀河院御時に二間にてかなまりをうちならさせ給て

そのひゞきのうちに雨中瞿麥といへる事をよませお
はしけるにつかふまつれる

古は塵をたにこそいとひけれ雨にしほるゝ^{れイ}なてしこの花
なてしこをよめる

なてしこの花みる程の心にて彌陀のみくにを願はましかは
雲居寺の聖人のもとにて瞿麥帶露といへる事をよめ

る
朝露のおきゐる庭のとこにしきたかししまのやまと瞿麥

けさは又いさみにゆかんさゆりはに枝差かはすやまと瞿麥
やまとなてしこをよめる

晚風如秋

夕されは玉まく葛のうら風をはかへる秋とおもひけるかな

春宮大夫公實ひくちの前齋院にて哥よまれけるに竹
風如秋といへる事をよめる

秋來ぬと竹の園生になのらせてしのゝをふゝき人はかる也
避暑といへる事をよめる

水はよしあたりはしみよ吹過くる風さへさゆる玉の井の里
左京大夫經忠八條の家にて泉爲友といへる事を

辰の市のうるまの清水涼しさにけふはかひある心地社すれ
泉邊納涼といへる事をよめる

ひさきおふる山片蔭のいしるつゝふみならしても進む頃哉
六月はかり世のたへかたき事を申つゝけてよめる

世中のあつかはしさをあけかけはきなる泉におもむきぬへし
水邊納涼といへる事を

せく手には涼しき事もよとみけり水をとのみも思ひける哉
泉をよめる

いしるつゝ隙もる水にたはふれてつてにも夏を聞わたる哉
百首哥中に泉をよめる

さらし井のこのしたかけに行ふれば衣手さむし蟬はなけ共
氷室をよめる

すへらきのみもの末しきえせねは^{けふも}氷室におものたつ也
おなし心をよめる

さえこほるとを氷室に残しをきていつこへ冬の立かくれ劍
夏の日も思ひの外にさえゆけはひむろそ冬のかたみ成ける

皇后宮權大夫師時の八條の家の歌合に野風を
しほみてはの鳴か崎のさゆり葉に波こす風の吹ぬ日そなき

樹陰風來

ひさかりはあそひてゆかむ影もよしまのゝ萩原風立にけり
蟬をよめる

石はしるたきのよとみにうちそへて木とに蟬の聲きこゆ也
せみのからを見てよめる

空蟬のいてからくてもすすす哉いかて此世に跡をとめまし
人々まうてきて哥よみけるに蟬をよめる

女郎花なまめきたてるすかたをやうつくしよしと蟬の鳴覽
二條關白殿にて雨後野草といへる事をよめる

金葉 此里も夕立しけり淺茅生に露のすからぬ草の葉もなし
右兵衛督伊通卿家にて雲隔遠望といへることを

新勅 とをちには夕立すらし久かたのあまのかく山雲かくれゆく
百首哥中にかやりひをよめる

世中をあくたにくゆるかやり火の思ひむせひてすす頃哉
左京大夫經忠の家にて蚊遣火をよめる

山かつのかを厭ひけるすくもひに心をさへもそへてやる哉
おなし心をよめる

かやり火の煙になるゝこもすたれ物むつかしき我こゝろ哉
くる人もなき山里はかやり火のくゆる烟そ友となりける

くゐなをよめる
柴の庵たゝく水雞に夢さめてたかならはしにおきてとふ覽

心からたけたの里にふしそめて幾夜くるなにはかられぬ覽
修理大夫顯季の六條の家にて曉水雞といへるを

誰しかも水雞ならては叩くへきくろとのみとのひま白む迄
くるなにもたゝはかられよ横の戸を誠に叩くおりも社あれ

夏くれは幾夜水雞にはかられて竹のあみ戸をあけてとふ覽
山里にて夕かほを見てよめる

山かつのす^{こい}とかたけかき枝もせに夕顔なれりすかみゝに
六月廿日頃に秋節になるひ攝政殿よりくたしつかは
したりける哥

金葉 水無月のてるひの影はさしなから風のみ秋のけしきなる哉
御返事かしこまりて參らせさりけれとしきりにめし

ければ二日はかり有てまいらせける
をのつからはき女郎花咲そめて野へもや秋の氣色成らん

夏草をよめる
日さかりは垣根かくれへなみよりて誰を戀草もえたてる覽

次郎 鵜川をよめる
篝火のは影にみれはますらおは秋いとなくあゆこくむらし

もかり舟おとすう船の水馴棹さしてもいかにはやきなる覽
丈夫はう河のせゝに結とるとひくしらなはのたえすも有哉

別當實行の哥合にうかはをよめる
となせより下すう舟のみなれ棹るくひをとなふ心してとれ

水風如秋
さはへなる螢も風にはかられてけふを秋とや鷹につくらん

旅中螢
あらち山螢の影をしるへにてたとるはたにのこすゑ也けり

蓮花をよめる
玉水をはすのわか葉にまきこめてこほすや花の光なるらん

百首哥中にはすをよめる
雨ふれははすのたちにはにるたまのたえすこほるゝ我涙哉

夏風といへる事をよめる
玉かしはすゑす風にはかられてまたきに鹿や聲たてつ覽

こかけといへる事をよめる

秋もまたたちこぬさきに衣手の杜のしたひはほのめきに覺次郎

野望草滋

むさし野の蘆のおきふを分ゆけは葉末より社空はみえけれ
みな月はらへをよめる

身のうさを思ひなこしの秋して世になからへん祈をそする
百首哥中にみな月はらへをよめる

さはへなる淺茅を刈に人なしして厭ひし身をもなつるけふ哉

散木奇歌集第三

秋部 七月

百首哥中に秋たつ日をよめる

千年ふるみそきは昨日せしか共今朝はうき世に秋立にけり

夕風といへる事をよめる

秋來ては忍ひなあへそと思へはや風をとつれて暮かゝる覽

晚風告秋

夕まくれ戀しき風に驚ろけは萩のはそよく秋にはあらずや
のこりのあつさといへる事を

秋きては風ひやかなる暮もあり暑さしめらんむつかしの世や

秋たちていくかもあらぬに風ひやかにものこゝろは
そくおほえければよめる

千載 秋風や涙もよほすつまならんをとつれしより袖のかはかぬ

百首歌中に萩をよめる

萩のはを草の枕にむすはすはよそにや風の音をきかまし

風底萩聲といへることを

おきの葉の軒のあまりに音つれて人の心をかきみたるらん

逐夜風涼

軒ちかき萩のうは風聞そめていく夜か人に忍はれぬらむ
人のもとにて七月七日をよめる

彦星のみけしのあやをいそくとや機をる虫の今宵しもなく

修理大夫顯季の六條の家にて七夕をよめる

七夕はひまなく袖につくすみをけふやあふせに薄すつらん
みふに侍ける頃人々まうてきて歌よみけるに七夕の

こゝろを

たなはたの天のたまゆる今宵さへ流れやすらんあかぬ涙に

七月七日孝清かかつらの山里にて帥中納言基綱をは

しめて哥よまれけるに

一夜にはいそあひみける七夕をしらてや人の恨みそめけん
おなし心をよめる

とりにも木にとも昔契しはこよひなほしのあふせ思へは

千載 おいぬれば七夕つめにとよせて鳥も渡らぬみつわをそくむ
たなはたの天の河原のいは枕かはしもあへすあけぬ此夜は

昔よりいかに契りてたなはたのひとやりならぬ物おもふ覽

織女恨曉

たなはたの逢夜は空を恨めしき明すはあかぬ名残せましや

百首哥中に七夕のこゝろを

たなはたのかへる袂のしづくには天の河浪たちやそふらん

織女朝

たなはたは雨のをしてのやへ霧に道ふみまとへ又や歸ると

八日人のもとへつかはしける

逢見てはたちもはなれぬ心をそ七夕つめにかすへかりける

八月

百首哥中に野をよめる

^{千載}さま／＼に心をとまる宮城野の花のいろ／＼虫のこゑ／＼

晩見野花

暮ぬとも花のあたりにやとりして秋の野守と人にいはれん

野花留客

^{千載}秋くれば宿にとまるを旅ねにて野へこそ常のすみか也けれ

百首哥中にかるかやをよめる

朝夕になつゝおふす刈萱をしかへて君かみまくさにしつ
大殿哥繪の中に秋の野におとこ筆をまへにをきてか
るかやをかりたる所にこといふものを二をきたる所
をよめる

とにかくに亂れてみゆる刈萱は物思ふことのしるし也けり

百首哥中に露をよめる

をみなへしあさをく露をおひにして結ふ袂やしはれしぬ覽

野花隨風

かくはかりはけしき野への秋風におれしとすまふ女郎花哉

をみなへしをよめる

みよしのゝかたちののをのゝ女郎花たはれて露に心をかゝるな

霧隔女郎花

女郎花うちたれかみを夕霧にかくれて誰としほれふすらん

雨中女郎花

心から誰にたはれてをみなへし雨にうたれて袖しほるらむ

女郎花をよめる

をみなへしあかぬ餘に袖ふれて花の名おると人にみえける^{ぬイ}

左京大夫經忠八條の家にて女郎花をよめる

しかも社しからみにくれ女郎花はきのあたりは心してさけ

丹波前司季^重房の家にて人々秋の花をよみけるに

女郎花をよめる

咲そむる萩たちかくせ女郎花しのゝをすゝきめもそきたなき

草花隠水

秋萩をたれみなかみにこきすてゝいはこそ涙の色をそむ覽

中納言俊忠の許にて草花露重といへる事を

秋萩も露のしからみかけてけりいくしほ庭をそめかへす覽

四條宮の扇あはせに人にかはりて

露をおもみいとゝたはなる萩かえに心をさへもかくるけふ哉

秋情寄萩

秋萩を心にかけてをかききのおほみあしちをなつみてそ行

百首哥中に萩をよめる

秋はきの末葉の露になつさひてさまにもおはぬすか衣きつ

基俊の君の堀河の家にて人々哥よみけるに草花露深

といへる事をよめる

あたし野の萩の末こそ秋風にこほるゝ露や玉川の水

殿下にて野風といへる事をよめる

夕されは萩女郎花なひかしてやさしのゝへの風の景色や

同殿下にて水邊萩をよめる

風吹けは萩のはいゑに波越てえもいはぬまのみはきをそみる

萩花靡風

をく露にしほるゝたにもある物をたはなるはきに秋風を吹

琳賢法師の大原の房にまかりて萩女郎花おもしろか

りけるを人々よみければ

山里はすとかたけかきさきはやす萩女郎花こきませてけり^{こ懸}

堀川院の御時殿上人々秋花をさくりてよませ給けるに薄をとりてつかうまつれる

金葉

うつら鳴まのゝ入江の濱風におはななみよる秋のゆふ暮

田上の薄かせになみよりてをみなへしめつらしくたてりければたちとまりてよめる

さしこえて薄は外にまねけとも女郎花をそたをりにもくるをのにて薄をよめる

かきわけてまねく袖にはむつるれといふともなき花薄かな
百首哥中に薄をよめる

花薄まそほのいとをくりかけて絶すも人をまねきつるかな
殿上よりイ下よりイにて哥繪に秋野に女ともあまたあそひける

に薄の風になひく所をよめる
まねけともうれしけもなしはな薄風にしたかふ心と思へは

観音寺にて雨中草花といへる事をよめる
まくまのに雨そほりて木隠のつかやにたてるおにの醜草

蘭をよめる
さゝかにのいかにかゝれる藤袴たれを主とて人のかるらむ

百首哥中に蘭をよめる
そめかけてまかきにさほす蘭またきもとりのふみちらす哉

きりくすをよめる
蠡斯をのかゝきねに夜もすから鳴音身にしむ秋は來にけり

家の蓬にきりくすの鳴をきゝてよめる
蠡斯わかよもきふにおひたちてなとや主に音をなかすらん

百首歌中にすゝむしを
かすならてふりぬるを鈴虫となきかはしても明しつる哉

松むしを

夕されは野へもや物を思ふらん松むしなきて露しめり晁虫爲夜友

秋のよを誰と共にかあかすらん虫の音きかぬ人にとはゝや
百首哥中に虫をよめる

よりはりゆく虫の聲にや山里は暮ぬる秋のほとをしるらん
たなかみにて長月のつこもりかたに虫の聲々よりはり

行をきゝてよめる

霜さゆるおとろのゆかのきりくす心ほそくも鳴よはる哉

四條の宮の扇合にはつかりをよめる

初雁は雲井のよそにすぎぬれと聲は心にとまる成けり
百首哥中に雁を

雁金も羽しほらんま管おふるいなき細江にあまつみせよ

旅雁鳴雲

初雁のなきつる空のうき雲をとりの跡ともおもひけるかな
殿下にて旅雁といへる事をよめる

殿下にて旅雁といへる事をよめる

限り有て急きたちぬる庵のうちにたれを頼むの雁したふ覽
田上にてたのかりたる跡より雁の鳴てたつをみて

秋の田のほくとも雁の見ゆる哉誰おほそらにかきちらす覽
露草のさきたるに風の吹けるを見て

いかばかりあたにちるらん秋風のはけしき野への露草の花

殿下にて庭露といへる事をよめる

庭もせにさきすさひたるつき草の花にかゝれる露のしら玉
百首哥中にあさかほをよめる

百首歌中にあさかほをよめる

朝かほの花のすかたをみつるより暮を待へき心地こそせね
露草葉珠といふ事を

露草葉珠といふ事を

草の葉にしはしもとまる玉ならは何をか露に置ならへまし

田上の山里にてくはの木に露のをきたをみて

露にさへしほるゝくはの枝みれはこきたてられし我身成鳧

やとりたる家にこもをしつらひにしてかけたりける

を風の吹ならしけるをきゝてよめる

柴の庵にはこものかこひそよめきてすとをる物は嵐也けり

嵐のほけしさに屋のいたくなるを聞て

横^柴の戸をみ山おろしに叩かれてとふにつけてもぬるゝ袖哉

田上にて山田の方にしかおとろかすをとにめをさましてよめる

さよふけて山田のひたのこゑきけは鹿ならぬ身も驚かれ鳧

鹿の聲を聞て俊重かよめる

山里につまよふ鹿の聲きけはわれも都のかたそ戀しき

これを聞て和し侍ける

われもしか都の方の戀しさは聲ふりにてゝなかぬはかりそ

又田に鹿のなくを聞てよめる

秋の田のあせふみしたき鳴鹿はいなむしるをやしき忍らん

百首歌中に鹿をよめる

夜もすから待かね山になく鹿はおほろけにやは聲をたつ覽

田上にてしかのこゑのはるかに聞えければ

妻こふる鹿のと聲におとろけはかすかにも身の成にける哉

夜深聞鹿

木のはちる峯の嵐に夢さめて涙もよふす鹿のこゑかな

旅宿鹿

草枕このはかた敷ねさめにはしかの聲さへさひしかりけり

殿下にておなし心をよめる

けふこゝに草の枕をむすはすはたれとか鹿の妻をこひまし

野亭聞鹿

さを鹿の鳴ねは野へに聞ゆれとなみたは床の物にそ有ける

鹿をよめる

園原やふせやに忍ふ小男鹿も帚木をさへ見えすとやなく

殿下にて鹿を所の名に寄てよませさせ給けるによめる

る

よと共にすむはつまきの山なればなかくや鹿の秋をすく覽

鹿の聲嵐にたくふといへる事をよめる

みむる山鹿の鳴音にうちそへて嵐ふくなり秋の夕くれ

四條の宮の扇合に

此頃はみふねの山にたつ鹿の聲をほにあげて鳴ぬ日そなき

鹿をよめる

さかりなるこ萩か原の夕露に鹿鳴ころとたれにかたらむ

殿下にて原土鹿といへる事をよめる

秋くれはしめちか原に咲をむる萩のはひえにすかる鳴なり

障子の繪にまふしといふ事書たる所をよめる

まふしさすつをの笛の聲そもしらてや鹿の鳴かはす覽

河内守經國かのくにゝ面白所有と申ければ師^{師懸腰}

忍ひておはしけるにあまの河といふ所にてさい中將

の七夕つめにとよめる所なりとて舟をとゝめて河の

ほとりにおりてあそはせ給けるにかはらけとりて

おのゝ哥よませ給ひけるによめる

千鳥なくあまの河邊にたつ霧は雲こそみゆる秋の夕くれ

霧の朝にあさひさしてやうゝきえけるを見てよめる

る

旭さすをかはの霧のむらきえてたけからぬ身に世をを恨る

右兵衛督伊通のもとにて秋霧隔水といへる事をよめる

音羽河きりの外なるたきならはいはもる玉の数はみてまし
田上にて霧のたちふたかりてせゝのをとはかりしけ
れはよめる

旅人はきりをわけてやとほらまし河せの涙の音せきりせは
同所にてとふ人もなき旅のすみかに霧降ふたかりて
いふせかりけるにみやこの人うらめしかりければ
とへかしな霧間を分てかみ山のこしけきたちの下の朽葉を
四條の宮の扇令に霧をよめる

春日野にたつ朝霧も君かため松のちとせをこむる也けり
殿下にて田家霧といへる事をよめる

山里は晴せぬ霧のいふせきにをたのをくろにうつらなく也
障子の繪に駒迎したる所を

道すからゆきあふさかの旅人に駒のたちとをとひつゝそ行
百首哥中に駒迎をよめる

走井のかけひのきりはたなひけとのとかにする望月の駒
もちつきのこまをよめる

望月の駒のけつつけ逢坂のすきまのかけにあはせてそみる
田上にて船にのりてやしまといふ所に霧のいふせか
りけるをみてよめる

河霧の煙とみえてたつなへになみわけかへるむろの八嶋に
百首哥中に搗衣をよめる

松風のをとたに秋はさひしきに衣うつなりたま川のさと
搗衣のこゝろを

秋かせの音につけてそうちまさる衣は萩のうはゝならねと

搗衣驚眼

ころもうつきぬたのをとに夢覺てとそともなくぬるゝ袖哉
田家秋興

山田もるきその伏屋に風吹はあせ傳ひしてうつゝをととなふ
八月はかりにくれかゝりける程に風のけしきなども
あはれにおほえければよめる

草の葉にかせ音つれて夜とゝもに涙すゝむる秋のそらかな
田上にてたかるをみてよめる

浮身には山田のをしねをしめて世をひたすらに恨みつる哉
秋の田をよめる

山里はいていこのへるたもとに風をよめきて袖しほる也
いねのたふれたるをみて

覺束なたか袖のこにひき重ねほうしこのいねかへし初けん
船にのりてあそひけるに神山のわたりにて夕つく夜
をみてよめる

曇なきゆふつく夜をもみつるかなこや神山のしるしなる覽
白川にて水上月といへる事をよめる

白河のよとみにやとる月みればなひく玉藻をくもと也ける
四條の宮の扇令に

君か代を空にしりてや久かたのあまてる月もかけをそふ覽
詠月

木葉ちる秋にしなれば照月もあはれをかけにそふる也けり
田家待月

はやく出て門田にやとれ秋の月はのほろ露の数や見ゆると
大貳長實の八條の家にて水上月といへる事をよめる
あすもこむのちの玉川萩こえて色なる波に月やとりけり

おなし心をよめる

わきかへるいはまの水にすむ月は浪に碎けぬつらゝ也けり
八月十五夜遍照寺にて翫月といふ事をよめる

空もそら月もよころの月なれとこよひになればひかりも也
殿下にて八月十五夜の心をよめる

ひきわくる駒そいはゆる望月のみまきのほらや戀しかる覽
あかしにまかりて月のあかゝりける夜浪のたつを見
てよめる

水上月

秋の夜は月もあかしのうら風になみの花さへ咲そひにけり

こかくれて波のをりしく谷河のみなむしろにも月はすみ曇

翫明月といへる事をよめる

あまの河いはこす波やあらふらんきよくもすめる月の影哉

高陽院の哥合に月を

山のはに雲の衣をぬきすてゝひとりも月のたちのほるかな
すみイ

月のあかゝりける夜肥後君か許にまかりてよめる
あくかるゝ心の空に通はすはたれとか月のにしへゆかまし

前齋宮にまいりて人々物申けるに萩の露に月のやと
りておもしろく見えければ

秋萩のしたはに月のやとらすはあけてや露の敷をしらまし

殿下にて月秋友といへる事をよめる

思ひくまなくても年をへぬるかな物いひかはせ秋の夜の月

津の國にしほゆあみにまかりて月のもりいりたるを
見て

あしのやのあれまをわけてもる月を涙の床に宿してそみる
下藪にこえられてなけき侍ける頃月のあかゝりける

夜周防内侍のもとにまかりて物かたりしてことの次のありけるに奏せよとおほしくて

いとゝしく心つくしの秋しまれ世を恨みても月をみるかな

あかき月をみてよめる

わか頼む草のねをはむねすみそと思へは月のうらめしき哉

翫明月

吹風にあたりの空をはらはせてひとりもあゆふ秋の月かな

別當實行の許にて月前思遠といへる事を

今宵もや主をもとはてかへりけんみちの空には月のすみ曇
ヤイ

月あはれたる家をてらす

ねやの上のひまを数へてもる月は空よりもけに隈もなき哉

重服に侍けるとしの秋月のねたりける所にもりきたりけるをみてよめる

月影は物思ふ宿のあれまよりもとふらひにもるかとそみる
た

人の歌合せんとてこひければ

きの國のふきあけの濱に照月はさはく真砂の敷をみよとや

閏九月ありけるとしの八月十五夜春宮大夫公實のも

とよりをくられて侍ける

秋はまたのこりおほかる年なれと今宵の月の名社おしけれ

かへし

つもればといふものはも有物をなをさへ人のおしみける哉

九月

九月十三夜於前武衛泉亭詠閑見月副隔一夜戀和哥并
小序

にしの宮のうち。月のかつらのひんかし。いくらもさらさる程に。さもやさしきすみかあり。わきかへるいつみの水もき

よく。たてたるいはもかとあるさまに見ゆ。稍もなひやかに。くさむらもよしはみて、あるしのおさ／＼しさもあらはれ。くる人の心ころも見えぬへければ、なさけあるものは。よと／＼にもとなひ。さまたけなきものは。いさ(さい無)なふとも見えず。いなは風になみよりて。秋のはな色をつくせり。夕のむしのこゑをとへて。朝の露袖をぬらす。こゝにやまととはにたへなるともから。薄のおはなになねかれ。よふこ鳥の聲につきて。そのかすあつまり給へ。ころなりけふなり。たゝにてやはあがし給はんとて。しつかに月をみるといふとに。戀の心をそへて。おの／＼たてまつり給ふ。うれしきかなや。けふのまとのやともしみにそいむれてゐたる事を。心をはしまの松のほつえとをゝにさかへたるけしきなれば。抑(おさ)あはれむかし。すへらきやすみをしろしめして。こゝのへにまし／＼し時。よもしつかに。民もやすらけく。雨のあし。風の音。みな御心になんまかせ給へりし。あまのみそらには。たなひけるくも／＼なく。政の庭には。みやをまもる神。ちからをあはせ給ふあまりに。糸と竹とのこゑたえず。はちのをと。つめひ／＼き。時としてをとなはすといふとなし。春のあしたには。春の鶯の囀を盡し。秋のゆふくれには。あき風のたのしみをふかせ。花のもとにては。さくら人をうたひ。月の前にては。たかきこのしらへをと／＼のへ。あそはせ給ひしとは。あさゆふの御いとなみとなむみえし。この事にたつきはれる人をは。そのむしろにめして。もてはやさせ給ひ。そのすちをこのみならはさりける人をは。ふみの道につけ。歌のかたによせて。またすさめ給はさりき。しかある御時に。雲の上人とりそへられて。たまの

うてなになれさふらひしころ。これらのみとのりをうけ給りし時。肝にとをり。むねにと／＼まりて。涙の雨とふらす。としよりは。つかさくらゐはひきく。面のしは／＼たかし。かしらのかみはうつろひゆけとも。心はかはらさりけるものなれば。見るもの聞事につけて。あくかれうせぬるにや。たきのなかれにひかされぬれば。池のみきはにやた／＼よふらん。あらしのをとにたくひぬれば。よもの山へにやまとひぬらむ。さ／＼かにのいかにしてかは。はつ鴈のかきつらぬへき。よろつには。かりのせきの。かたくなはしき身のありさまとはおもひ。なからはしのひさしきなにもやのこらむと。はつかしの杜のはつかしく。その葉ことにしほめるけしきなれば。あまのたくなはくりかへし。うけひかぬ人もやあると。ま／＼まのおそろしけなれと。むかしのつたへやまのかひなくて。やみの夜のにしきの心ちすれば。こよひのとはすかたりをして。あすのあさけりをはかへりみさらんかも。そのとはにいはいはく。

すみのほる心や空をはらふらん雲のちりぬ秋のよの月
幾歳にきまして人のなりぬらんと思へはいなや昨日計りか

九月十三夜大井河にまかりて船にのりてきよたき河
のわたりまてのほりてかへきに頭弁のむめつにてあ
かき月を翫といへる事を人々よみけるによめる

紅葉ダイちる清たき川に船てして名になれたる月をこそみれ

大貳長實の家にて歌合せんとしけるによめる

誰か又心の空に雲はれてえもいはぬ夜の月をみるらん
殿下にて五首のうたよませ給けるにたにそこの月と
いへる事をよめる

てる月の旅ねのとこやしもといふかつらき山の谷かけのイのかは水

月前懷往事

ありし世をむかしかりになしはてゝ傾く月を友とみる哉

百首哥中に苔をよめる

むくらふのけかしき藪の苔の上にあら月をも宿しつる哉

顯仲の公の八條の家にて人々十首歌よみけるに月をよめる

まそてもてのこへる空の清き上に磨ける月を澄せてそみる

又人にかはりてよめる

いさ今宵行ゑしられし月みては遊ぶこてにそ歸らさりける

明月如畫

くまもなき月の光にはかられておほをそとりも晝となく也

あかしにて月をみてよめる

あま小船とまふきかへす浦風に獨りあかしの月をこそみれ

漢霽明月

はれぬれは残れるくまもなかりけり空こそ月の光なりけれ

神祇伯顯仲のもとにて九月十三夜人々哥よみけるに

たちいか南今宵の月の隈なきをみるへき程の我身ならねは

殿上おりたりけるころ月をみてよめる

てる月をみる空そなき雲の上にもへたてたる我身と思へは

月前落葉

嵐をやはもりの神もたゝるらん月にもみちの手向しつれば

別當實行家の哥合に月をよめる

軒端よりもりくる月をわきもこが玉もの裾に宿してそみる

雲居寺にて月前述懷といへる事をよめる

さよ更てくもらぬ空にすむ月はたちかくれなき我身成けり

殿下にて野徑月といへる事を

おほつかな心は月にあくかれていかていくのゝ里をすく覽

月まもにくまなくておもしろかりければ東三條殿の

池のみはしのうへにて夜もすからあかさせ給て歌よ

ませ給けるにつかうまつれる

てる月の影にもあそふいとあらは今宵の空に見えまし物を

百首哥中に月をよめる

こからしの雲吹はらふたかねよりさえても月のすみ登る哉

修理大夫顯季の六條の家にて九月十三夜月といへる

をよめる

村雲や月のくまをはのこふらんはれゆくたひにてり増る哉

ならの歌合に人にかはりてよめる

吳織ふたむら山をきてみればめもあやにこそ月はすみけれ

月前遠情

いつもにははれぬ八雲にとちられて今宵の月や朧なるらん

月あかりける夜前中宮に詣て人にも申けるにむ

かしの事なと申いたして女

中々におほ宮人のかけみればむかしこひしき夜半の月哉

返し

君はさは月みてのみや思ひ出るわか面影ははなれぬものを

月前落葉

月影のかゝらさりせは紅葉はをちると計りや音にきかまし

田上に侍けるころ九月十三夜つねの年よりも空はれ

ておもしろかりけるにしかの聲さへあはれなりけれ

は

いかにせん今宵の月に妻こふる鹿の音をさへそへてきく哉

殿下にて詠山月といへる事をつかふまつれる

こよひしをはすて山の月をみて心のかきりつくしつる哉
田上にて月のあかゝりける夜むかし帥殿のおはしま
しゝおりの事なとおもひ出てよめる

いにしへの面影をさへさしそへて忍ひかたくもすめる月哉
月の前のいりえにうつりて魚のあそふもかくれなく
みえければ

濁なきみの月に月の宿らすはいかてあさちの敷をしらまし
月のいらんとするをみてよめる

月みれはすくなみかみを恨めしき西には山を作らさりせは
月の夜いかにも空にたなひける雲なかりければ

月の行あたりはいはしおほかたの空にも雲のなき世成けり
九月十三夜殿下にてよめる

續古

おほつかないかなる昔さえそめて今宵の月の名を残しけむ

おなし心を人のもとにてよめる

昔よりなそなか月のこよひしくもらぬものと空もしり劔
秋の山の月をみるといへる事をよめる

さほかはにちる紅葉はをてにさへて三笠の山の月を社みれ
田上にてかはのほとりにたちなみたる柳の木にそま
むきといふものをかけたるか月夜にくらく見えけ
れはよめる

河柳さしも覚えぬすかたかなそはゝさみつゝ月^{にイ}みたてれと

なか月のはつかあまりの月のあかつき方にほそくか
すかに見えければよめる

たちのほる有明の月を人しれす心ほそさの友とみるかな
九月九日菊してかほなてよと人の申ければよめる

ちりこにて凋める顔の花なればなつとも菊の驗しあらめや
菊帶霜

きくこそは契も有てさきそめし霜さへいかてけふをしる覽
田上に侍ける頃九月九日にもなりにければそのもと
と菊もとめてすきけるついでによめる

竹の葉に浮へる菊をかたふけて我のみしつむ嘆きををする
歌繪に菊のさかりなるを女のみたる所をよめる

菊の上に心をゝきてみつるかな我身は秋のしもならねとも
修理大夫顯季の六條の家にて殘菊留秋といへる事を
よめる

惜まれて花ふく秋も移るへる菊をはえこそみすてさりけれ
百首哥中に菊をよめる

忘れては雪にまかへる白菊をよなく霜のをさかへてける

菊花映霜

やへをける霜のしたなる白菊は葉をさへ花とおもひける哉

左京大夫經忠の許にて殘菊薰衣といへる事を

うつろへる色をは霜のへたつれと香は我袖の物にそ有ける

殘菊帶霜

はつ霜のをき殘したるしら菊を露やぬすみにうつろはす覽

ふしみにてつねよりも物心ほそかりければよめる

なにとなく物そかなしきすかはらやふしみの里の秋の夕暮

秋の夜のなかき心をよめる

秋のよの鳥の初ねはつれもなき人まちし夜の心地こそすれ

柿の木の枝のほそきにみのなりたりけるに風のいた

く吹ておちぬはかりにゆるきけるをみてよめる

心してこのみもおらんゆふされはよをうみかきに嵐吹也

蓼といふ草にもみちのしたりければよめる
 蓼のはも紅葉しぬればよめには唐錦とそみえまかひける

十首哥中にもみちを

もみち葉をみくらの山に初霜は朝とあけてやおきそめつ覽

又人にかはりてよめる

雲はれぬあさまのたけも秋くれは烟をわけて紅葉しにけり

田上にてはした山をみてよめる

をく霜やそめはつす覽もみち葉の叢濃にみゆるはした山哉

源中納言雅定の家の哥合に紅葉をよめる

もみち葉をきてみる人の數多あれは主も定めぬ衣ての杜

田上のみなみの山にて椎ひろひけるついてもみち

を折てきたりけるをみてよめる

椎をのみこのみ拾ふにもみち葉を明らさまにも誰折りつ覽

百首歌中に田家をよめる

秋の田にもみち散ける山里をこともをろかにおもひける哉

障子の繪にあれたる山さとに紅葉障なくちりたる所

をよめる

故郷はちるもみち葉にうつもれて軒のしのふに秋風そふく

殿下にて五首の哥よませ給けるに水邊紅葉といへる

事をよめる

もみち葉の影にちらぬ物ならはたれか汀を立はなれまし

秋の暮にきり／＼すのなくを聞てよめる

鳴かへせ秋にをくる／＼きり／＼すくれなは聲の弱る物かは

つれ／＼に立出てあそひけるにかれ野に女郎花のた

たひとものこりたるをみてよめる

たれかはなかれ野を忍ふ女郎花をのれもしたへ秋の暮をは

河のむかひにむしの聲々きこゆるくれかたに今いく
 よかは聞へきなと思ひてよめる

をちかたに虫も聲々おしむ也すきゆく秋に船てせさすは

秋もつるにくれ宮この人もかへりぬれはとゝめかね

てよめる

何かさも花ふく秋にかはりある冬はみゆきをもたぬ物かは

九月盡

草の葉にはかなくきゆる露をしも形見にをきて秋のゆく覽

百首歌中に九月盡を

暮て行あきしお花の末ならはたおりてもたんたちや止ると

雲居寺にておなし心をよめる

あけぬとも尙秋風はをとつれて野への景色よ面かはりすな

散木奇歌集第四

冬部 十月

百首哥中に初冬の心を

千載

いかばかり秋の名残を眺めましけさは木のはに時雨降すは

時雨をよめる

同

木葉のみちるかと思ひし時雨には涙もたえぬ物にそ有ける

田上のむかひの山つねよりももみちおもしろかりけ

るすくれによめる

しくるれはすくれなるの花衣たかそめかけしをちの高ねそ

都のかたより人まうてきて歌よみけるに旅宿時雨と

いへるを

とへかしな都戀しきたひのいほにしくれもりそふ草の枕を
はしの紅葉をみてよめる

いため山痛しやはしも時雨れは木々のまねして色變りゆく
はした山のやうく色つくをみてよめる

時雨するはしたの山のもみち葉の色つく程のなに社有けれ
時雨染紅葉といへる事を

ふりちらす時雨にたへて鏡山影みるはかりもみちにけり
殿下にて時雨のこゝろを

覺束ないかに時雨るゝ空なればうらこの山を形見なせなる
田上にてさふの山にのほりてあそひけるにまゆみ
のもみちを見てよめる

もつてのいそしのさふ時雨してそつ彦眞弓紅葉しに晝
おほしの山の時雨をよめる

いかばかり涙のしくれ色なれば嘆きおほしの山をそむらむ
雨後落葉

名殘なくしけれの空ははれぬれとまた降物木葉イはもみち也けり

田上にはへりけるほど俊重も侍けるかのほりてのち
みやこよりをくりて侍ける

紅葉せしお山の里の戀しさに時雨てのみもあけくらすかな
かへし

もみちする梢にさへそ怨みつるちらて待へき心地ならねは
たつたの山をよめる

都にて誰にかたらん紅葉ちるたつたの山の峯のけしきを
百首哥中に紅葉をよめる

立田河しからみかけて神なひのみ室の山のもみちをそみる
殿下にてちる紅葉をよませ給けるによめる

雲のゐるふしのなるさは風こして清見か關に錦をりかく
四條の宮の扇合に紅葉を

金華音羽山もみちるらしあふさかの關のをかはに錦をりかく

山花落葉

荒はてゝむねまはらなる山里はちる紅葉はを床にこそしけ

大井川逍遙に水上落葉といへる事をよめる

風ふけはとなせにおとすいかたしのあさの衣に錦をりかく

小野山家にて旅宿落葉を

吹まよふ嵐とゝもにたひねするなみたの床に木葉もる也

水上落葉

水上にもみちるらし神なひのいはせのさ波紅にたつ

山花落葉

山里は芝のかこひのひまをあらみいりくる物はこのは也梟

ちるもみちを

はけしさのみ山嵐はてもなきにいかて木のはをこき散す覽

落葉隨風

木枯の烈しきうれにおりくつてけふしも脆き紅葉をそみる

深山落葉

新古ひくるればあふ人もなしまさきちる峯の嵐の音はかりして

左京大夫經忠の八條の家にて嵐送山葉といふ事を

もる山の嵐のつてにもみち葉をたれおもはすにみて忍ふ覽

柞をよめる

はくゝみし梢さひしくなりぬ也はゝその杜の散ゆくみれば

いく田の杜のまへをすくとてよめる

こきもとれみても忍はん夕されは生田の杜にこのはちる也

終夜聞落葉

獨りぬるふせやのひまのしらむまで萩のかれはに木葉散也

大井河遙道に人にかはりてよめる

となせよりなかつ錦は大る河いかたにつめるこのは成けり
神無月の十日頃田上より都へのほとと紅葉のめて
たかりしよし都の人にかたりちらさんなと申ければ
よめる

嵐とや都の人はおもふへきもみちの色をかたりちらさは

聞風述懷

吹まよふ嵐のをとやわひ人のなみたの玉のをとはなるらん

ひつち田をよめる

よしさらは生るちちのかしけつゝ物にもならて霜枯ねとや
田上に侍ける頃俊重かくたらむなと申ければとみえさ
りければいひつかはしける

たれにまた思ひしらせん君まつとたゝすむにはの木枯の聲

いしらのせにあしろうつと聞て

ひをも世を過難しと思ふらんいしらのせにも網代うつ也

百首哥中にあしろをよめる

束のまに積る網代のこの葉にてひをへてよらん程をしる哉

あしろにひをのおほくよるをみてよめる

網代木のいかちもすまに寄るひをはかきやる方も無身成晁

都の人まうてきて落葉浮水といへる事をよめる

三年まで人もすさめぬにしき木とみれば網代のこのは也晁

故帥殿田上におはしましたりしくしきうされたる

人々哥よまれけるに月照網代といへるをよめる

あしろには月の光もある物をなますらおのかゝりたく覽

落葉滿網代

み山には嵐ふくらしあしる木にかきあへぬまで紅葉積れり

十一月

山里にすみさひしくてとふ人もなきにつけても誰と
もなくうらめしさによめる

都にはわすられにける身なれとも寒さはかりは尋ねきに晁

野行幸

紫の御かりはゆゝしましるなるくちのはかひに雪散ほひて

人々十首哥よみけるにたかゝりをよめる

はし鷹をとりかふさはに影みれば我身も共にとや返りけり

又人にかはりて

御狩するまのゝ萩原ころにしてはふしに鷹のふやかはる覽

左京大天經忠の八條の家にて鷹狩をよめる

日をへつゝ狩り暮しても歸る哉はとにかはりし人も有世に

皇后宮亮顯國の君の家にて鷹狩の心をよめる

夕まくれ羽もつかれにたつ鳥を草とる鷹にまかせてをみる

おなし心をよめる

夕間暮やまかたつきて立鳥のはをとにたかをあはせつる哉

百首哥中に鷹狩を

日影さす豊のあかりの御狩すと交野の小野に今日も暮しつ

野徑寒草

道すから枯野にたてるかほかはなふりわけ髪も霜をきに晁

ふけ井のうらの千鳥をよめる

沖つかせふけるの浦のけはしさになことゝもに千鳥立也

しほみては磯こす浪にあらはれてふけ井のうらに千鳥鳴也

千鳥をよめる
難波潟あまのいさりにたつ千鳥幾たび磯をひるかへす覽

鹽釜の烟にまかふ濱千鳥をのかはかひをなれぬとやなく

百首哥中に千鳥を

あなし吹をしまかいその濱千鳥いはうつなみに立さはくも也

百首哥中にあしをよめる

難波潟つなてになひく蘆のはのうらやましくも立なをる哉

田上に侍けるにかりそめのすみかとはいひなからあ

やしきにつけておほえける

あし火たくまやの住家は世中をあくかれそむるかとして成覺

百首哥中に神樂をよめる

からかみに袖ふる程は殿守のとも宮つこみひしろくたけ

五節といへる事をよめる

日影さすをみのあかひもうち解て立まふ人をもてはやす哉

新院の御時臨時の祭の陪従したりけるに御物忌にあ

たりたりければ地下の人も藏人とまちははへりける

に雪ふりておもひいつることともありてかへりにか

きつけ侍ける

山たかみ雪ふりぬれば跡たえてみし雪井ともおほえさり覺

十二月

百首哥中にうつみ火をよめる

いかにせむ灰のしたなる埋火の埋もれてのみ消えぬへき哉

山家嵐をよめる

嵐のみたえぬみ山にすむ民はいくへかけゝるとふのつか波

あられをよめる

荒はてゝゝねもくもらぬ宿なれば霞ならてはもる人もなし

いなうけし霞なれとも程ふればさもあらぬ人の袖ぬらし覺

みそれをよめる

寒にはゝなたの秋かへる共わかとをつまをふれすはやまし

大殿哥繪に女のおもひをもちてゐるに水鳥のまへ

にある所を

身をつめはしたやすからぬ水鳥の心のうちをおもひ社やれ

月光映水

池水にかよひて影のすみぬれば氷を月のつまとみるかな

殿下にて冬夜月を

霜のうへに光さしそふ月影をこの身なからもなめつる哉

依月不忘秋

はらの池のあしまに宿る月影はわかれし秋のかたみなり覺

月のあかゝりける夜うちわたりよりさとの月はいか

ゝと人のたつねたりければ

蓬たにしもかれにける宿なれとこよひの月はとこめつら也

衾をよめる

君こはと埴生のこやの床の上にあさてこ衾引きてこそをれ

百首哥中にすみかまを

すみかまの煙ならねと世中を心ほそくもおもひたつかな

さえてたへかたかりける朝に伯のもとにあはちのす

み尋ましたりければをくるとて

炭かまの烟たえたる時にしもやくとこふ社わりなかりけれ

かへし

炭かまの口あけつれはいはす共ひをへてもまたおこす計そ

山家冬閑

跡たえてさひしきやとの冬の夜は山した風にとまらさり覺

百首哥中に水鳥を

しほれ蘆のふしはか下に漁りする鴨の浮世を流れてそふる

おなし心をよめる

次郎をし鴨のかつくいはまの薄氷けさやうはけのにイとちかさぬ覽

氷閉水鳥

夜をさむむすふ氷や水鳥のかつく岩間のせきとなるらん

氷閉水

せきりせしまのゝなからは氷ゐていくひに波の聲絶にけり

眞野池氷といへる心を

まのゝ池に氷しぬれば蘆なるはしも尋ねて鳴つたひしつ

氷閉河水といへる心を

飛鳥川ふちは氷にとちられていかてかせにもなり變るへき

池氷といへる事を

夜もすからまのゝかやはらさえゝて池の汀も氷しにけり

氷をよめる

つらゝゐてまもる岩間のせきなればよをへて堅く成増る覽

氷満池上といへるを

けふよりはみはらの池につらゝゐてあちのむら鳥隙求む覽

殿下にて初雪を

いそのかみ昔の跡も初雪のふりしきぬればめつらしきかな

おなしこゝろを

次郎めつらしき花の都の初雪をこゝのへにさへふらせてそみる

百首歌中に雪をよめる

むは玉の黒かみ山に雪ふれはなもうつもるゝ物にそ有ける

山雪をよめる

年ふれとふしの高根をみぬ人や雪をあたなるものといふ覽

高陽院殿哥合に雪をよめる

雪ふれはたにのかけはしうつもれて梢そ冬の山路なりける

加賀守有國よりことしは雪つもりて人もかよはれね
はとしかへりてなんのほるへきと申たりければいひ
つかはしける

冬はさはこしちの雪をなかつゝ春は都の花をきてみよ

かへし

家道朝臣

春としもわかれぬものを都には心をとめてこしちとをしれ

大貳長實卿の家にて歌合せむとしけるによめる未途

雲かゝるたかねも雪にうつもれて烟をふしのしるし也ける

殿下にて雪中遠情といへる事をつかうまつれる

煤たれるのイあしよりも雪やみしゝほこしのひにも有南

頼仲か長をか家に故帥殿おはしまして一夜とゝま

らせ給て山家冬夜といへる事をよませ給けるによめ

る

ひとりぬる宿は吹雪に埋もれていはのかけみち跡たえに覺

田上の山里にてふしたる所に雪の積りきたるをみて

よめる

柴の庵のねやのあれまにもる雪は我かりそめのうはき也覺

山雪をよめる

けさはしもあをねか峯に雪つみて苔のさ蒔しきかへつらん

冬夜の月をよめる

みかさ山積れる雪をかき分てさし出る月の光をそみる

雪のあした女のかりつかはしける

いかてもと思ふ心は積れともゆきならぬ身は人もすすめす

十首歌中に雪をよめる

雪さえぬふしのたかねは夜とゝもにたつ烟にも煤けさり覺

又人にかはりて

千載

衣手のさえゆくまゝに、神なひのみむろの山に雪はふりつゝ

雪與歳深

山里は積れる雪のふかさにやくれ行年のほとをしるらむ

丹波前司季房の家にて雪中待友といへる事をよめる

こぬもうしいきゝはまたし山里に積れる雪は友ならぬかは

ならの哥合に人にかはりて

雪ふれは青葉の山もみかくれて常盤の名をやけさはおる覽

雪朝眺望

眺めやる箱根の山をたかためにあくれば雪のふりおほふ覽

雪の朝に修理大夫顯季の許よりをくられて侍りける

哥

雪ふりてふまゝくおしき庭の面は尋ねぬ人もうれしかり覺

がへし

我心ゆきけの空にかよふ共しらさりけりなあとしなけれは

行路雪

雪を重み垂るみさの枝なればさはる小笠にしつれおつ也

山路雪

春きなは思ひもかけしあらち山雪おれしつゝみちまとひ覺

雪埋寒草

いとゝしくしとろにみゆる刈萱のうれもとろはに降る白雪

歳暮述懷

物思ふ年は我身に積らすはまたみとりこといはましものを

佛名をよめる

みよのしのみな唱へつるしには罪もや今宵残らさる覽

歳中立春

かすそふとなけくもしらぬ年のうちに急きたちぬる春霞哉

おなし心をよめる

淡雪もまたふる年にたなひけはころまとはせる霞とそ見る

百首歌中に除夜を

とたまの覺束なきにをかみすとこするなからも年をこす哉

晦日よめる

ゆく年も今宵はかりに成にけりはてなき物はわか身なり覺

歳暮の歌とてよめる

さらひする室の入嶋のここひに身のなりはてん程をしる哉

程もなきひとよ計りを隔にてけふをもこそといはむとす覽

散木奇歌集第五

祝部

堀川院御時に立春の朝に御前にて今日の心をよめと

宣旨有ければつかまつれる

君かためみたらし河を若水に結ふや千世のはしめなるらん

百首歌中に祝の心をよめる

君か代は松のうは葉にをく露のつもりてよもの海となる迄

高陽院殿の哥合に祝の心をよめる

おちたきつやそうち河の早きせに岩こす波は千世の數かも

鳥羽殿にて松契還年といへる心をよめる

誰か爲と岩根の松はいはね共景色はみよのしるしとそ見る

歌合によめる

龜山のいはかき沼にゐるたつは久しきみよのしるし成けり

治部卿通後の八條の家にて水石契久といへる心を

そま河を誰そのかみにせき染てたえぬ岩間の瀧となしけん
中納言雅定の家の哥合に

たむけ草しけきたまえのそなれ松よに久しきも君か爲とそ
修理大夫顯季のひつめの山里にて松久友といへるこ
ゝろをよめる

君もしか松もふたはの昔より久しくも世を過にけるかな
堀河院御時中宮はしめて堀河の内裏にまいらせ給て

松契還年といへる事をよませたまひけるによめる
雲のゐる松のうは葉の木高さに空にそ君かほとはしらるゝ
郁芳門院の根合にあやめをよめる

君か代をいはぬにひける菖蒲草ねとにみえぬはるか也とは
みふに侍ける頃人々まうてきて五首の哥よみけるに
祝の心をよめる

君か代はち船のよするおほわたに立さゝ涙の数もしられす
二條關白殿にて松陰浮水といへる心をよめる

石はしる瀧のそとものそなれ松かけをならへて幾世經ぬ覽
堀河院御時所衆ともの哥よみけるに行遠にかはりて
松樹契久といへる事をよめる

くらゐ山久しき松のかけにゐて頼む身さへも年をふるかな
中宮の近衛の御堂にわたらせ給て松久縁なりといへ
る事をよませ給けるによめる

松影のうつれる宿の池なれば水のみとりも千世やすむへき
祝の歌とてよめる

君か代をくちにまかせて祝ひつる言葉もおちす年積りませ
堀川院御時御前にて人々祝の心をつかうまつりしに
よめる

千年ともみよをはわかし數囀や大和しまねし動きなけれは
新院より御扇を給て歌かきまいらすへきよし仰あり
けれはつかうまつりける

いつくしきすへらはしかも御寶の群に群ても千世をふる哉
春宮大夫公實の許にて祝の心をよめる

かすか山いはねにおふる榊葉はいく萬代のしるし成らん
攝政殿下の中將と申ける時東三條殿にて池上鶴とい
へる事を人にかはりてよめる

あしたつのきゐるいはねの池なれば波もや千世の數に立覽
又おなし心を

池にさす松のはひえにゐるたつを波のおるとも思ひける哉
伊勢の齋宮に侍ける頃宇田といふかたにあげほのに
しきのはねかくをとのしけるを聞てよめる

曙にうたのくろよりたつ鳴のはねかくをとや萬代のかす
祝のこゝろを

祝ひをきし思のつくしめの内にひき廻してもみゆるみよ
水かきにしろのとをゆふとりしてゝ遊ぶも君か萬代のため
君か代はおほはつせちのもゝえつき百え乍らも榮へます哉

松契還年

神代より久しかれとや動きなきいはねに松のたねをまき劔
春宮大夫公實の鳥羽殿の宿所にてあそはされける夜
月おもしろかりけるにかはらけとりて哥よめとせめ
られければよめる

くもりなき君か千とせに盃の光をさへもさしそふるかな
中納言雅定の家にて鶴契還年といへることをよめる
松影のいはたむけにすぐひするたつの落葉にみよを知哉

堀河院御時竹契週年といへることをよめる
うれしやなみよな橋のかはたけもそよと答へて風渡る也
人のもとにて祝のこゝろを

君かへんやを萬代の数とりてあまのみ空にをきたらはさん
大貳長實卿の白川のとのる所宿所にて歌合せられ
けるになてしこにいはいの心をよせてよめる

君か代の例にひかかんかすか野のいしのたけにも花さきにはさきけり鳧
祝のうたとて

月にたに扇をこそはたとへけれ君をはちよの竹によそへん
殿下にて祝の心を

春日山さかへし藤の末なれは君もうらはのうちとけて見ゆ
小野大僧都證觀白河の房にわたりていはひのこゝろ
をよめる

藍よりもあをくそめなす色もあれば千年の宿に萬代をませ
伊勢齋宮に侍ころいしなとりの石あはせといふ事せ
させ給けるにちいさき草子のいしなとりの石のおほ
きさなるをつくりて十の石にひとつゝかき侍ける

曇りなくとよさかのほる旭には君そつかへん萬代までも
ときはなる竹の都の石なれば嬉しきふしを數へてそしる
君か代に御裳裾河をきてみればもうゆたけにそ涙も立ける
君か住くした河にやみたれたる神の心もうちとけぬらん
大淀の濱のまさこを君か世の數にとれとや涙もよすらむ

君か代は千年にひとつとる石のとをこにならん程を社おもひまで
ゆるきなき大内山の石なれば千年とるともおちしとそ見る
ふえかはの石なとりつと見えつるはねに萬代を吹流せとや
君か代に神もかたよる石なればうちまくよりそ數は積れる

別離

百首哥中に別をよめる

忘るなよ歸る山路に跡たえてひかすは雪のふりつもるとも
帥中納言基綱のくたり給けるにをくりにまかりて河
尻にてかはらけとりてよめる

行末にいきの松原なかりせはなにゝ命をかけてまたまし

修理大夫行宗和せられたりしかともわすれにけり
彼中納言つくしにてかくれ給にけりと聞て修理大夫
のうへのむかへにくたらるゝと聞てつかはしける

戀しさに都へ靡く植木あらは手折りてきませ形見ともみん
むかしはしたしかりし人のよのありかたさに人につ
きてはるかなるほとになん思ひたつといはせて侍け
れはまかりてわかれおしみつるついでによめる

あたにゆく水の心にさそはれてなをうき草と人にかたらむ
あつまのかたへまかりける人のをくりしてあふさか
の關よりかへるとよめる

なにしかも猶頼みけんあふ坂の關にてしもそ人はわかるゝ
高階經般か相模守にてくたり侍けるに父經成かもと
へつかはしける

都をは心にかけてあつまちのさやの中山けふやこゆらん
おとこにさそはれてとをき所へまかりける人の程は
くもゐにと申たりければ

人はいさ我は忘れし秋の野にむしのなくゝ契りしことを
五節の頃とかたらひて侍ける人のはてゝまか出ける
夜扇にかきつけて給はせける

けふよりは誰も夢路に人見えはあかす別るゝ我としらなむ
みちの國へまかりける人にわかれおしみてよめる
行末にあふくま河のなかりせはけふの別をいきてせましや
はしめて伊勢へくたると聞て修理大夫顯季のもとよ
りむまのはなむけすとてをみなへしにつけてをくら
れて侍ける

今年よりかさしはしむる女郎花千よの秋をは君かまにゝ
かへし

をみなへしうれしき涙おちそひて露けかるへき旅の道かな
加賀守顯輔のくにへくたりけるにつかはしける

悦びをくはへにいそく旅なれば思へとえこそ止めさりけれ
かへし 加賀守

悦びをくはへにいそく旅なれと心は君にとめてそゆく
物へまかりけるにあまり夜ふかくいてゝ露けかりけ
れはよめる

夜をこめて朝たつをのゝ草しけみしほるゝ袖は露の玉水
百首哥中に曉の心を

明ぬなりしはしまされよかり衣たつねむ程に猶なつさはむ
別の心をよめる

まるのくまはなつ日くれは別る共賤のみなはにあはさらめやは
常陸守經兼かくたり侍りけるにさうそくてうしてつ

かはしける帯にむすひつけて侍ける
なそもかく別れそめ劔常陸なるかしまの帯の恨めしのよや

かへし 經兼

別とも思ひわするな千早振かしまのおひのなかはたえせし
中宮亮仲實熊野へまいりけるにつかはしける

雲のゐるみこしいはかみ越えむ日はそふる心にかれと思ふ
なるをなる所にしほゆあみにまかるとて人のもとに
まかりてわかれをおしみてよめる
あすよりも戀しくならは鳴尾なる松のねもとに思ひをこさん
とをき所に思ひたちける人の秋風ふかはといひたり
ければつかはしける

秋迄もいかゝは待たん飛鳥井の水はくむ迄なれる身なれば
あふみのいかこといふ所へまかりける人の許へつか
はしける

いはゝやなしらてや人の急く覽いかこの浦はみるめなし共
伊勢の國へ事のえん有てまかりけるに大貳長實の白
河のとのゐ所にて人々饑せられけるによめる

わかるなといふに先たつ涙こそまとはん後のしるへ也けれ

羈旅部

肥後君と修理大夫行宗といひかたらふ中にてつねに
哥よみかはすと聞けるに津の國にしはゆあみにまか
りてかの國より彼大夫のもとに

草枕さゝかきうすきあしの屋はところせきまで袖を露けき
とよみてをくりたりけるをみて此哥の心にてはたゝ
のかたらひにてはあらさりけりと見えければよみて
つかはしける

さゝかきの薄き蘆屋の露けさにしほれに覺とみえもする哉
かへし 肥後君

蘆の屋にしほれもふさすかりにても露に心を何にをくらん
右兵衛督伊通の家にて六首哥よみけるに羈中曉思と
いへる事をよめる

いとしく旅ねの床の露けさにしきの羽かき泪そふなり

修理大夫顯季のなきさの院にて旅宿郭公といへる事をよめる

郭公たひねのところに忍ふともしらてやうはの空に鳴らむ

熊野に詣けるによとにて船にのりてくたりけるにとりかひといへる所にて舟のゐてくたらしりけるに日くれにければ

をきへなき高瀬の舟をさし据てとりかひにても暮しつる哉又の日船よりをりてあゆみけるに雨のふりければみのかさきるとてよめる

うちきるに身の飾とはみえねとも雨のあしとは覺さりけりみわの山をよめる

三輪山杉のしほりを導にてたつきもしらぬかけちをそゆく

清見關

あなし吹清見か關のかたければ浪とゝもにもたちかへる哉筑紫へくたりけるにたかとみといふ所にてみさこのいをとるけるをみてよめる

夕まぐれたかとみつれば荒磯の波間をわくるみさこ成ける攝津國なりける所にまかりてのほりけるにおとこのあやめかるをみてよめる

眺めやる心もともにさみたれて空はれぬまに菖蒲をそかる伊勢へまかりけるみちにてあのといふ所にてあまの家にとまりてよめる

いせのあまの菅屋の床のかち枕あらふさ浪にめを覺しつるつくしよりのほりけるにはかたといふ所に日ころ侍けるに箱崎の神主のりしけと香椎の神主よりもちと

まてきてともにうれふる事有て互に論しるたるをきゝて此事いかにもいはんにしたかふへくはさためんと申せはともかくもいはんにしたかはんと申けるをきゝてよめる

はこ崎の松はまことの縁にてかしの方もつみはきこえず興してをのゝたちにつけるとぞ。

あかまといふ所にて日ころになりける程に春もくれて四月になりければよめる

風をいたみ春もやけさは舟出して思はぬかたに泊りしつ覺龜のくひといへる所をいてゝまかるとてよめる

たつのゐる龜のくひよりこきいてゝ心ほそくも眺めつる哉うしまとゝいふ所にてくるなのたゝくをとのしけるを聞てよめる

うしまとをたゝくるなのをとす也波打あけて誰かとふ覽むさけのせとゝいふ所にてよめる

頼もしやむさけのせとをいる程は立しら浪もよろしと思ふふちとゝいふ所にとまらむとしけるにをひ風ふきな

とす日もたかしとてよらてすきければよめる定なき空の景色にをひ風をまつにふちとをかけてさりぬる

かはねしまを見てよめるむかし人いかなるかはねさらされて此嶋にしもなを残し劍

哥の嶋といふ所にて女のうたをうたひてものこひけるに明意阿闍梨の船に經よむをとのしけるを聞てよめる

うたの嶋のきの下にはをとつれて舟には法の聲を聞ゆる高砂にて風いたく吹ければおきにひさこはなといへ

散木奇歌集第六

悲歎部

るものゝたちけるをみて
ひさこ花さける氣色によそなから底の心を汲みてしるかな
明石の浦にとまりて夜もすからなめあかしければ
月まことによふくるまゝにくまもなく晴わたりて面
白かりければ山のはちかく成て心ほそかりければよ
める

おしめとも明石の浦にてる月の思ひくまなくかたふきに鳧
一のすにことなく入てよろこふ程にとゐといふもの
のまうてきて酒なと心さして侍けるを人々いそぎの
みけるにことの外にすかりければのみさして侍ける
を見てよめる

いりぬるを悦ひ顔にのむましや一のす酒をとることもなく
みてくらしまといふ所をすくとしてよめる

夕かけてみてくらしまを過行はその川上にたむけてそさす
百首哥中に旅の心をよめる

しなか島ゐなのは山に旅ねしてよはの干潟にめを覺しつる
海路の心をよめる

もとめ塚おまへにかゝる柴船のきたけに成ぬよる瀉をなみ
關をよめる

いとしく都こひしき夕されは^{くれにイ}涙のせきもるすまのうら風
田上に侍ける頃八月はかりに風のけしきなとつねよ
りも身にしてみてよめる

草の葉に風をとつて夜とゝもに泪すゝむる秋のそらかな

帥大納言(經信)つくしにてかくれ給にければ夢などの
心地してあさましきにかゝる事は世のつねの事そか
しなとおもひなくさむれとこれは旅の空にてものお
そろしさもそひ人の心もかはりたるやうにてわか身
もたひらかにとりつかん事もありかたかたぬへきや
うに覺てほけすくる程にをのつから涙の障に覺えけ
る事をわきとにはあらねとかきをきたる中にきぬの
色なとかへける次によめる

すみ染の衣を袖にかさぬれはめもともにきる物にそ有ける
ことかきりありてとかくのこともせんとて有にしめ
しのやうなるものをきせければおほえける
しめしには涙にぬるゝ藤衣しほるさへこそかはらさりけれ
ゝわさのことはてゝかへりけるにすいたのゆのむかひ
に有ければたちよりてあみんとはなけれどもあしな
とすゝきけるついでによめる

悲しさの涙もともにわかへるゆゝしき事をあみて社くれ
なに事をかはすへきとて經をのみ書ておほえける
涙をは硯の水にせきれつゝ胸をやくともかくみのりかな
事はてゝ僧ともをのゝゆきわかれければいいいよ
かなしさそふ心地してよめる

あすよりは袖の雫やひまもある涙もけふははてときかはや
はかなくすきにければさりとてやはとてのほりける
になにこともおほえさりければ馬にまかせてまかる
とてよめる

今はとてかへる心はまとへとも馬こそ道はたとらさりけれ

はかたにはへりける唐人とものあまたまうてきてと
ふらひけるによめる

たらちねに別ぬる身は唐人のこととふさへも此世にはにぬ
かゝるほとにはるも暮にければうくひすのこゑとも
耳にとまりてよめる

鶯も春とはして今朝よりはおなしとまりに聲をくるなり
あしつをいてゝかねのみさきといふ所をすきけるに
やうくつくしをはなれぬることなと心ほそきにつ
ゝみもあへられぬ心ちして

をとに聞かねのみさきはつきもせずなく聲ひく渡り也
あしやといふ所にてひは法師のひはをひきけるをほ
のかにきゝてむかしを思ひいてらるゝ事有て
流れくる程の雪にひはのをとをひきあはせてもぬるゝ袖哉
はまにあみの見ゆるをみてよめる

吹迷ふ風もとまらぬあみのめにかて涙の浮ふなるらん
雨ふりければとまといふ物をふくをみてよめる

わか袖にとまひきかけよ舟人よ涙の雨のところせき身そ
夜もすからおもひつゝけてよめる

筑紫船怨を積みて戻るには蘆屋にねてもしらねをそみる
もしの關過るにせきやに人のみえさりければよめる
ゆき過る心はもしの關屋よりとゝめぬさへそかき亂りける
あかまといふ所にて

君こふとをさふる袖はあかまにて海にしられぬ涙を立ける
ひくしまといふ所のあまともくたりにもまうてきて
ものとも心さして侍けるかこのたひもまうてきてた
ひといふ魚をとりいてゝ侍けるを見てよめる

たつ浪のひく島にすむ蟹たにもまたゝひらかに有ける物を
むへといふとまりにてさきの木にゐてなきければと

ころからにや身にしみてよめる

鳥の音も涙もよほす心ちしてむへこそ袖はかはかさりけれ
くちなしといふ所にて

くちなしの泊ときけは身に沁ていひもやられぬ物を社思へ
むろつみといふ所をいてゝかまとゝいふとまりを過
てまかるとてよめる

むろつみやかまとを過る船なれば物を思ひにこかれてそ行
しらいしのすをすくるとてよめる

とへかしな沖の白石しらすとも物思ふねのなきこかるゝを
ともといふ所に泊りけるをまた目たかしさりぬへか
らん泊あらはすきはやなといへとも船ともみなとゝ
まりにければいかゝはせんとてとゝまりてよめる

舟ともはともにとまれとわひ人のななく心はすきぬる物を
にはかにこち吹とてこしまといふ所にとゝまりてく
たりにはこちはよかりしものをなと思ひてそれさへ
ことたかひたる心地してよめる

思へともこちたき旅の涙かなはしめこしまは歎きやはせし
みやましりといふ所にとゝまりて船人由にまかりて
木これなといひけるを聞てよめる

尋てもみやましりをそさそふへきなきころには道惑ふ也
きにはといふ泊にて雨のふりけるにちかき程によき
とまりあらはすきはやといひけるをきゝてすきけれ
はよめる

をやみせぬ涙の雨はかゝれ共きにはとまらぬ物にそ有ける

きにはをいてゝまかるにをひ風立てはしるによめる
おふ船のほにあげて物を思ふには走るゝそ袖はぬれける
はしりけるに風ゆふはりてほはしらおれなとしてさ
はきけるを見てよめる

けふも又よをうみ渡る帆柱のおれぬる船の身をいかにせん
むろにまかりて日のあければ日來ありてよめる

淺ましやむろはうきつときゝしかと沈みぬる身の泊也けり
船よりおりてたゝすみけるにちかき程にしけること
く見えてくきぬきなどあたらしくしたるはかのあり
ければよめる

うきことはまた有けりな朝夕にたれすみ染の袖ぬらすらん
鏡を船のみすにかけて人のあたりけるにをのつから
かけうつりたりけるを見て

なけはなく涙も袖もうつりけり影には聲そきこえさりける
小夜ふけて郭公の聲の聞えければ

わか心なき慰めよほとゝきすさてもや袖のかはかぬとみん
れいならぬ人のふねにあるかくるしかるときゝてそ

ひ船にのせうつすをきゝて
いとおしやまたうき事をそひ舟にうつし心もなくなりに覺

むろには日ころとゝまりてたまゝいてゝこき行程
になころなをたかしててきもとるを見て

なころには漕き戻りけり哀れわか別れの道にこちもふか南
又の日高砂にまかりて船よりおりてはまにこゝろな

くさめけるになにきこゆる松はいづれそとたつねけ
れはかれて久しくなりぬといふを聞て

高砂の松にをくれてたつなみのかへるけしきを我身成ける

風たちてあかしのうらに日ころに成て浪の音たえす
つくゝとおもひつゝけてよめる

藤衣袖はあかしの浦なれやかへるなみたそ時そともなき
くたりさまにあはちのゑしまを面白と聞置たる所也
かゝる次にみんとておはしましたりけるにかしこに
守爲隆かかりやなとつくりて御まうけなとしけるに
二三目計あそはせ給ひし事なと思ひ出て袖のしつく
ひまなきまゝによめる

思ひきやゑしまみしよの曙にけふの明石の袖のけしきを
すまの關といふ所にて千鳥の鳴を聞てよめる

日くるれは須磨のもしほ火立のほる空もなききに千鳥鳴也
わたのみさきにて都鳥のあまたみえければよめる

名にしおはゝしらしなわたの都鳥心盡しのかたはそことも
おまへといふ所にて風吹なとすなころと申ものたつ
といひさはくを聞てその神にみてくらたてまつると
てかきつけゝる

さのみやは人の歎きを白波のたつはお前のしわざとそみる
あかしを過ていくたの杜をすくとして

しなはやと思ひ明石の浦を出ていくたの杜をよそに社みれ
なるをゝ過てはへりけるに松の見えければよめる

羨ましなるをにたてる松ならは浪かけぬ間もあらまし物を
かしまを過けるにあそひとものあまたまうてきて
うたひけれともかゝる思ひをかうふりてのほれはえ
あそはぬよしなど申ていさゝかものなと心さしてつ
かはしたりければまたよるまうてきてきこえかゝり
ければよめる

かしまへは遊びしにやとつきぬ^{ツイ}覺戯れにても思ひかけぬを

江口にてしろといふあそひのむすめのとをくして
これ又おさなきものなればあはれにせよと申けれ
は物語などしてはるかにをくりてこよひはとめは
とまりけに申けれと猶おりふしあしとてかへしつか
はしける次によめる

止めよとしろくいへとも折節のあしわけにても過しつる哉
みしまへといふ所にてあけほのに岸の上にあやしき
物をはしらにあをき竹をしてさくけたりけるをみて
よめる

岸の上をさよとみれば味氣なく竹のふしめに流れぬる哉
この道になからといふ所聞ゆるはすきぬるか人
のたつぬれば船人のなからはくまかはのかたになんは
へるといふをきゝて

涙のみ大河しりのかたなればよもなからへは床しと思ふ
まてといふ所にてしはしとまりてつなでのも
ものに物くはせけるにきしの家ともより人々あまたき
てみればよめる

思ひきやうかりしほを過しきてけふ迄人にみえん物とは
あまの河といふ所にてむかしあそはせ給し事のおも
ひいてられてよめる

戀しさにあはれ昔の面影をあまの河せにやとしてそみる
山さき近くなりてそのたひなはの海といふさいはら
をうたひてのほらせ給ひし事の思ひ出られてよめる
人しれぬ涙を下る今すこしのほれといひしわたりと思へは
山さきの山里にて左大弁まいりあひてそのおりのこ

となくくひなとしてくれかたにをかれたり
ける琵琶などをしのこひ笛のはこなるふえのこひて
をきけるついでに

くり返しいと竹とも心あらはうかりし節をとほまし物を
水おちといふ所をすくるとてよめる

さしかたを思ひ出れば水おちをわかめの外の物とや見る
淀のわたりに付て車にのりうつりて日來の船にさへ
わかれぬるかなしきによめる

涙もやとむと思へはあやにくに關たにあへぬわたり
五月五日にあたりたりければみつの草蒲とりにや
りてたもとにかけなとしけるついでによめる

ひきかくるみつの御まきの草蒲草ねにねをそへて玉と貫く
あやめのふれはふにつけても衣の色めにたちて

なきなかつ袂にかけは草蒲草ねも墨染にうつれと思ふ
引かへのうしをよはせけれと見えさりければよめる

たち返る都にたにも引かへてうしと思ふ事なからましかは
雨のふりければ笠さゝんとしけるに馬のおとろきけ
れはよめる

さし交す身をからかさのあやしさに我駒にさへ驚かれぬる
もとの三條にかへりつきて見まはせはつねにゐさせ
給し所にもみえさせ給はさりしかはあさましきに

ことくたつおもかけは人しれすおつる涙のか言也けり
この家のならひにて仁和寺にあかさかといふ所に骨
をちらしければ送り奉りて又の日おほつかなきにま
いりてひねもすにさふらひてよめる

古も涙をとものにちらしてやあかさかとしも名をなかしけん

人のもとよりいつしかいはゝやなをなみたのひまに
はたちよれかしなと人つてにいはせ侍ければつかは
しける

まことにや隙もとめける墨染のころもかきらすぬるゝ袂を
服ぬき侍りける日よめる

みそきして衣をとこそ思ひしか涙をさへもなかしつるかな
むかしのあまうへにをくれたりし時人のもとよりを
くりて侍ける

音せぬに覺束なさはならはれぬ哀をこそはとふへかりけれ
かへし

思ひ出るたひに心のくたくれはとふ人さへも恨めしきかな
又人の許より

風の音もいかにやよその哀たにわきてしらるゝ秋の夕くれ
返し

とはれてはうれしきたひの涙さへ朽にし袖にかゝるけふ哉
おなし頃月のあかゝりける夜人のもとより

山のはにうつろひかゝる月見ても泪やさらに袖にひつらん
返し

思へたゝひとりなかるゝ月をみてをそふる袖のなれる姿を
いみの程に結縁經供養しけるに四卷にあたりけるに
身つから書て表紙に服なる男のなきたるを書てあま
のむかひたるに經の文字よりひかりをさゝせて尼の
項にかけたるかたはらにあしてにてかける哥

君こふる涙の瀧におほゝれてふりさけさけふ聲はきこゆや
清家みまかりぬときゝて永實かりつかはしける
仇に置ししもとにたにもぬれしかはいとゝや袖の朽果ぬ覽

尼上うせ給ひてのちみゝらくのしまの事をおもひ出
てよめる

みゝらくの我日の本の島ならはけふも御影にあはまし物を
年こえにければ

あらぬ世にふる心地して悲しきはまた年をさへ隔てつる哉

神祇

郁芳門院の根合に人にかはりてよめる

いつよりの誓ならねは君か代を大たらしめに任せてそみる
一品宮の天王寺にまいらせ給て御念佛せさせ給ひけ
るに御供の人々住吉にまいり御社にて歌つかうまつ
りけるに

いくかへり花咲ぬらんすみよしの松も神代の物とこそきけ
山里の障子繪に所々のかたかきたるにすみよしのか
た書たる所をよめる

住江に神さひにける松なれば波もしつえに木綿かけてみゆ
百首哥中に霜をよめる

住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をき迷ふ冬はきに覺
悔離別といへる事をよめる

今更に妹返さめやいちしるきあすはの宮にこしはさすとも
遇事をくやしふといへる事をよめる

古を思へは悔ししめのうちにさかさきすまはおかまし物を
戀の心をよめる

身をはつとわたしもはてぬ我戀やかつらき山の岩のかけ橋
たるみの明神のやしろをみてよめる

たかのほる人の爲とやこゝにしも跡をたるみのあけの玉垣
春宮大夫公實の許にて戀の心を

いかにせんうさかの森にみえす共君かしもとの數ぢぬ身を
いろなる人のしたしき人々をかそへけるにそのかす
にもいらさりしこそおもはつなりしかと人のいひけ
るをきゝて

いかにせむつくまの神も埋もれてつみ^{ユイ}劔なへの數ぢぬ身を
別當實行の家にて隠家といへる事をよめる

あたりをは猶仄めかせ神垣やみわのしるしは絶も^{ありイ}こそすれ
左京大夫經忠の家にて社櫻といへるを

けふみれば花もすきふに成にけり風はいなりに吹とみれ共
前齋宮の閑院におはしましける頃月のあかゝりける
夜まいりてみれば女房たちあまたくして月にあそひ
ければ南おもての杜のしたにかくれてみれば女房た
ちむれてこのもりは神の社にゝたる物かないさおほ
しき事申むとてよき男給へと申を聞てとらせんとこ
ゑをかへていらふればおちてみなかへりにけり又の
日つかはしける

思ひかね社もみえぬ杜に來ていのりしものはよいかにそや
かへし ゆりはな

あまくたる神もしるらん思ふも空しき杜にゆきていのらは
榊をよめる

榊葉を神のみむろとあかむればゆふつけ鳥のねくら成けり

春日祭

如月のはつさるなれや春日山みねとよむまで戴きまつる

加茂祭

引つれて渡るけしきを來てみればいつきて神のかさり成ける
稻荷にまいりたる人の杉をこひければ遣すとてたゝ

うかみにかうかいのさきして書つけてつかはしける
人しれすいなるの神に祈るらんしるしの杉と思ふはかりそ
返し扇のつまにかけり

君をとはいなりの神に祈らねはしるしの杉の嬉しけもなし
田上に侍ける頃かみのさとゝいひける所にゆわかし
て人のむかへければまかりけるに鳥居の有けるまへ
に道するへのものゝおろしければいかなる神のおは
しますそと尋ければもちろの宮と申神のおはします
と云を聞て俊重かたはふれて申ける

あれ社はもちろの宮と聞からにつくゝと思ふ事を社祈れ
といふを聞て和し侍ける
あれと見はさしてそれ共參らましよそにもちろの宮仕へして
と申てすきにけるとそ

釋教部

左京大夫經忠の許にて寺の櫻といへる事をよめる
風ふけはみたのみきりに散花を法のむしろとしき忍ふかな
論議講したる所に捧物に扇をつかはすとてよめる
たか罪も法の扇にあらそひて風のまへなるちりとなしつる
結縁經かきたる人の法師品の心をよませけるに
君かためかけるみのりの水莖に我身をさへもすゝきつる哉
神力品の心をよめる

大空をみのりの風やはらふらん雲かくれにし月を見るかな
經の文を各とりて歌よみけるに提婆品の勤求於大法
といへるをよめる
誰かために求てえける法なればけふまで此身かすにもり劔
法師品の心をよめる

ひとやりの御言ならねは玉章の心をかりにかけぬ日をなき
隨喜功德品の心をよめる

法のうみ磯つたひきて浪の音をつゝむにさへもぬるゝ袖哉
陀羅尼品のこゝろを

うちはへて頼む深山のあをつゝら苦しみなきはわれ獨かな
授記品の心を

名残なき物とや花を思はまし身になるへしと教へさりせば
信解品止宿草庵の心をよめる

おひたちし程をしらすはかりにても草の庵に宿らましやは
人記品の心を

諸共にさき始めける花なれといかなるこのみなりをくれ劔
四卷經功德天品中に有聞兩功德花光といへる文を

二つなき今日の誠をしるへにて法のみそのゝ花をしらはや
大光普照の文をよめる

この身しもまなき光にもれけるはまとひや空の雲と成らん
人のもとより雲居寺の大佛おかみ奉らんにくせよと

有しかはいひつかはしける
雲井にてかみなき人のしなゝらば靜かに思へみはゆかす共

十二光佛の名を人々よませしによめる
無量光佛

心して数はかりなき光にもきらはれぬへき身をいかにせん
無邊光佛

吾といへは限り有にそにたりけるそこともさゝぬ光なれ共
はイ
無碍光佛

へたてなき彌陀の光につみ人の心のくまをさきはり成ける
無對光佛

類なき光のうちにやさまらて數の外にやもれんとすらん

炎王光佛

名にしおはゝ炎に光さしそへて闇に惑はむ道しるへせよ

清淨光佛

いとしく頼もしき哉哀その潔よきよりたつ名と思へは

歡喜光佛

むかへとる彌陀の光の嬉きは名にあらはれぬいひたてね共

智惠光佛

わひ人の心のうちをよそなからしるやさとのひかり成覺

不斷光佛

誓ひをきてみちひく人の隙なきに光もたえぬ物にそ有ける

難思光佛

人はいさ光のすちをしるそとおなし佛やしらはしるらん

無靜光佛

たとふへき言葉も道もたえぬれはいふ方もなき光とぞ思ふ

超日月光佛

月日すらまちつけつればある物をみたの光を思ひこそやれ

極樂にはもろくのくるしみなしといふ心を

苦みをなしとも更にいはしみつ名に流れにし彌陀の御國は

池中蓮花おほきさ車輪の如しといへる事をよめる

むまれはや廻るとならは小車のわに紛ふなる池のはちすに

常に大空には樂の音なるといへるをよめる

笛の音にことの調へのかよへるはたなひく雲に風やふく覽

常に曼陀羅花といふ花空よりふるといふ事をよめる

色々にたへなる花の散かひはあまのみ空やまたらなるらん

たへなる花とりてつねに佛に奉るといふ事をよめる

もる人は誰共なしにさま／＼の花にものを供へてそみる

さま／＼の鳥あつまりて法を説といふ事をよめる

何となくさえつるたにも有物をいかなる鳥の法をとくらん

極らくに生るゝ人は皆佛の道をゝこたらずして心思
のとくになんあるといへる事をよめる

蜘蛛のいとさる身とはならず共暫しかきつく方をしらはや

心みたらすしてたのみをかくればかならず極樂に生
るといへる事をよめる

その國を忍ふもちすりとにかくに願ふ心のみたれすもかな

佛の御したはひろく長くしておほ空になんはゝかる
といふをよめる

み空にも吹通ふらしおほくちのまかみか原のこのした風は

觀無量す經文十六相觀いらんとする目を見て佛のみ
くにおもふ

色々の雲のはたてをかさりにている日や彌陀の光成らん

水想觀

思ふより心のちりをすゝきつる水につけても流れぬる哉

彼國の地はるりや金をしきて各光をはなつといふと
をよめる

光さするりのこけちにいとゝしく黄金のまさこ數かさぬ覽

その國のうへ木は花もときはにて枝とに光をさすと
いふ事を

さま／＼の植きは花もときはにて枝もとをゝに光をそさす

極樂の池は浪の聲にみな法を説といへる事を

池水のものにすむ身とは思へともわれから法にむつれぬる哉

大方ふさねて彼國たへなる事を

きゝめてゝ願へと法にときつれば何かみ國にたへならぬ物

つくれるほととの有様をみてまことの佛のすかたをを
しはかれといへる事を

ほのかにも月みる程はなくさまで心は猶そ西へかたふく

阿彌陀佛の御身は世中にみちてはかりうへからすと
いへる事をよめる

みたの身も天のみ空に憚かりてよもせはしと思ひしる覽

觀音の御身は阿彌陀佛にもまさりたるといへるを
よめる

すくるとはかりそめをの篠薄ほに出て誰も人におらるな

勢至は彌陀の迎へさせ給人をきよくすゝき玉ふ誓ま
しましてかならずくし給といへる事を

人すくふ心きよさは現はれて彌陀のむかへにいさなはる覽

極樂の蓮に生てみたをみてまつらん事を思ふ

限り有てはちすのぬみと生れなは終に思ひの開けさらめや

まとの佛は池になんあらはれ給といへるをよめる

世中にしつむとならはてる月の影をならひの池にすまはや
三業を調へて生たるは花とく開といへる事をよめる

思ふと三のおしへをとゝのへてはすの初花みるよしもかな

その蓮には戒をたもちたる人なんむまるといふ事を

津の國の難波のもたもたれは惡からぬ身とならまし物を

雙觀經文四十八願の中その國にはきよくさととりてい
かにもあしきおもむきのとなしといへる事をよめる

あし様のものゆかりは大方の耳のつてにもきこえさり是
その國に生ぬる人はむかしのををさるさとりをえて
そのかみのををさるといふ事をよめる

淺ましやちよの法にもあはすして六の道にもまとひぬる哉
彼國の人はそらをとひわたるさとりをえてよろつの
國を見るといへる事を

あくかるゝ心に身をは從へてゆくてによもの國をみるかな
阿彌陀佛の御光あまねくてらしてよろゝの佛の御
くにをてらすといへる事を

いつくにも有明の月はさやけきにいとゝ旭の影やそふらん
佛の御命ははかりうへからすといへる事をよめる

其程とみたの御よをは限らねはいくそうきとも如何數へん
法をたもつ物はとほきくさとり深くなるといへる事
をよめる

流れくる法の浮木をこす浪はきよきのみかは音もさやけき
かの國のかゝみのをくしてよろゝの國を照し給ふ
といへる事を

極樂は法やかれてみかくらんよものうつれる鏡とそみる
佛の御名をさくもの女の身をかへて男になるといへ
る事をよめる

かの岸にわたらん物はあすか河さはりの淵や瀬になりぬ覽
名をさくもの佛の道を退せすといへる事をよめる
年ふれとくちせぬ榎の宿なれば降とも雨のもらしと思ふ

九品往生經文十二光佛

何しかはかけても程をしるすへきあふ計りなき光と思へは
佛御光ほとりもなしといへる事をよめる

つま籠し神のやへ垣しけくともみたの光のさゝさらめやは
さはる所もなき光といへる事をよめる

法の船にみたの光やさしつ覽浮瀬をこせとそこもさはらす

たくひなきひかりといへる事をよめる

さりともとなをかことにも頼む哉積れる罪も類なければ

炎王光佛

ならくかの底迄させやけゝらなくほにてる光闇もけすかに
きよき光といへる事をよめる

わきかへる清たき川の瀬を早み洗むみくつを浮へさらめや
よろこひの光といへる事をよめる

嬉しさの光を袖につゝみてもうらなる玉をみるよしもかな
さとのひかりといへる事をよめる

いりかたき人も悟のひらくにはのそむ光そさはらさりける
たえせぬ光といへる事をよめる

後の世はわれと都にまよはめやたえぬ光のちかひおちすは
思ひかたきひかりといへる事をよめる

そのほとゝ思ひ難きはよもの海にそこゐもしらぬ心成けり
無稱光佛といへる事をよめる

思ふには空をもなとかとはさらんみたの光そさはる隈なき
日月の光にもまさるといへる事をよめる

月も日も軒はかくれもある物をみたの光そさはるくまなき
一切經の阿彌陀佛偈文かの世界はきよきなのみあり

人わたす波の立るにあらへはや清見かせきとなをとゝめ劔
その國にはよろつたひらかにて高くくほなる所なし

なにことも心になふ國なればへたつる山の木末たになし
彼國はなかるゝ河の(なみ)ありて法をとくといへる

事をよめる

わか袖のしほるとならは流れつゝ法をとく覽水にぬればや
天人水にいりてたはふるといへる事をよめる

羨ましみのりの淵に戯ふれてたへにもあまのかつく成かな
もろくのみのりはみなかくれなん時にあみたの御
法のみのことといへる心をよめる

龍樹十二禮文

佛まことにたへにやすらかなる國におはしますとい
へる事をよめる

ぬしもぬしところも所たとふへき方も渚によするしら浪
佛の御身の色こかねの山のことしといへる事をよめ
る

時雨つゝ色つく山のこのまよりいつる光によそへてを見る
佛のむかひにおはしましたる光なん千の日のことく
になむ明かなるといへる事をよめる

誓ひおちすむかへをの朝つゝちへに集へる光さします
觀音の御頂におはしますあみた佛をおかみたてまつ
る事をよめる

峰たかきをはすて山の梢よりさし出る月のひかりををみる
佛の衆生をあはれませ給御意なんおほ空よりもひろ
きといへるをよめる

浮世には思ひの外にかへるとも心ひろさのうちにいりなん
もろくの衆生をみちひかんとちかはせ給ちからに
よりてなん此よにおはしますといへる事を

むらさきの雲のあたりもみえぬかな人をみち引心つよさに
もろくの佛の御國より参りあつまり給ひたる佛は
さつたちの御光あみたふつの御床にさしあへりとい
へる事をよめる

思へ唯こそりてきます光さへさしあはせたるみたの御國を
そらをかけるさとりをあらはしてかの國にきたると
いへる事を

嬉しくも心のまゝにきたるかなあまのみ空を玉ほこにして
極樂にあしき道なき惡き名なしといへる事を

流れくる御法の水に現はれてみつの道にはあしきもなし
かの國にはもろくのおもむきにあしきもなし
何事もともにくしてもみゆるかな心をくへき人しなれば
極樂にはいかにも惡き事をは名にいはすといへる事
を

惡様の事のみまなき身をすてゝ名をたにぬ國へゆかはや
よろつによき事のはとりもなきさまなん海のとくに
あるといへる事をよめる

よもの海たとふる國のかたなれば心も西へなみよりにけり
往生論偈

かの世界は廣き所なんおほそらのことくにあるとい
へる事をよめる

春雨のあしとは人のふりくれとさなくもみえす程の廣さに
その國の草やはらかにして鳥のたはふれあそふにな
んくるしみなきといへり

其國はふれけん鳥も羽やすみ草のはかいもすゑなひやかに
諸の花くさゝにさきみたるといへる事をよめる

そこはくの花の紐とく庭の面にをしのけたるははちす也
曇

たからのうへきにかうらんめくれり
いとしく菊の玉江の光れるを廻れるませやもてはやす
覽
たからのあみそらにあまねくあり

ひまもなきあみにも鳥の驚かてあそふ羽風に花やちるらん
諸のかうはしき香あまねくにはふ

極樂はおほ空さへそなつかしき匂ひかはらぬ物しなければ
心にも身にもなやましき事なんはなるゝといへり
くるしともうしとも物を思ひしはみし夢の世の心なりけり
佛の御聲たへにえもいはすといへり

稻妻の光のまにもなるかみの聲にとくらん法をきかはや
あまねくよろつつの佛の法とく國をてらしたまふ
よものくに法とく庭のしけきかと思へはみたのひかり成鬼

十住毗婆娑論偈文

たへなる蓮色にしたかひてひかりをさす

浪まよりさける蓮の色もに光をさへもかへてさすかな

若人種善根

うへをきし心のはちす開けなんねかふ涙をうるほひにして

見るものみなよろこひをなす

うれしさにたえぬ涙やつもりゐて我身をかさる玉となる覽

かのやつのみちの船にのるといへり

つみ人も法のみ舟にたすかりてくるしき海をわたるとそ聞

往生要集十樂よめる十首

聖衆來迎樂

珍らしくたてし誓ひの誠あらはひきゐてきませけのたえぬまに

蓮花初開樂

あやしくも蓮のうちにむまれなは開けぬともと思ひける哉

身相通樂

天とふやかりの社に身をなして祝ひし月のさかへてそみる

五妙境界樂

しかはあれと思ひたれぬ心こそ罪深き身のほたし成けれ
快樂無退樂

ことはりや潮のみちひる海にたにいりぬる水の返る物かは
引攝結緣樂

てをさへて結び止めし水のあはを嬉しきせにもかき流す哉
聖衆俱會樂

かけまくもかしこき法の聖とやかたしけなくも膝を交へん
見佛聞法樂

めもすまに守るしなるの隙をなみとけるみ法の聞もいとなし
隨心供佛樂

時となく花のあか水むすふての乾かぬまでもそなへつる哉
増進佛道樂

遙々ものほらんとそ急かるゝほとけの道やさかしかるらん
阿彌陀小呪

歌のはしめの字に阿彌陀の呪の字をける
おくろさき淺さとたゝのみを盡し立る姿にふりぬとはみよ

この身いかなるかたへかはされて思はぬかたへまとはんすらむといへる事を

武藏のにまちたる鹿のをはされて思はぬ方へゆかむとす覽
としのつもりにはあやしきものみかさなりてよろつ

にひきいらるゝ身のありさまによそふ
秋津島しほのとゝみに埋れてかくれ行身をとふ人もなし

身のあやしさにおもひくつをれて念佛をたにせぬによそふ

身の程のうきを思ふにまとはれてみたの教へも頼まれぬ哉
りんたうといふ花のかれののこりたるによす

りたうの枯野にひとり残れるは秋のかたみに霜やをく覽
たまゝ念佛はすれとも心もたゞれぬによす

誰爲のなをさりとにあみた佛と物うかるねに唱へしもする
心もたらぬ念ふつはかたゝにうたかはしきによす
てもたゆく繰返しつゝ唱ふれといさゝあみたのみな知らぬや
もしもやとたのみをかくるをよす

いさゝめに哀と見ませときまつとみたを頼まん心はせをは
思ふとのみたかふ身なれば後世もいかゞと思ふによ
す

せりつみし心ならひの悲しきはみたの誓もたのまれぬかな
極樂のかたはしに君かたにまいりなはと思へともな
を佛にならましきとのおほゆる事をしはかりてよめ
る

如何にゝとみ向へてはありなめよなをしまなき品ぞ欲けき
後の世のともこのよの有様にてをしはからるれば涙
つきせぬ心ちして

葛飾のわさ田のをしねこきたれてなきも絶えしと盡ぬ涙か
女の旁に障あるたにねかへはまいるなりまして此身
はあやしけれと男のまねかたなればなとかはとおも
ほえて

乙女すら願へはすにむまる也うへしせなにてなに歎らん
彌陀のちかひは人きらはす給はすと聞でたのもしさ
によめる

迎ふるはせつりもすたも嫌はねはもれしもせしな敷ならす共
世中のさためなきにつけても船なとにのりて風にゆ
らさるゝ心地してよめる

散木奇歌集第七

戀部上

そゝきする嵐かさるにゆらされぬ迎へにきませみつの蠻人
女などの後の世の事思はて何ともなくてすくるにあ
はすれば時々も思ひいられておそろしきによめる
はしけやしなれ社榮へいな我はみたの御國を好もしと思ふ
かみには眞言の文字をゝきてよめればたはむれなれ
とたのもしさによめる

上にをけるもしは眞の法なれば歌もよみちを助けさらめや

百首哥中に初戀の心をよめる

灘波江のみに埋もるゝ玉かしはあらはれてたに人を戀はや

忍ひたる戀を

あさてほす東乙女のかやむしろしき忍ひてもすすころ哉

初遇戀

芦のやの賤機おひのかたむすひ心やすくも打とくるかな

不逢戀

あふ事のかたなのはをもあゆむかな人の心の危ふまれつつ

旅戀

したひくる戀のやつこの旅にても身のくせなれや夕蟲きは

後朝のこゝろを

とへかしな誰もさそとは知ぬらん今朝しもしぬる心弱さに

遇不會戀

山賤の芦屋にかけるたかすかきふしくしとも思ひける哉

思

むやひするかまのほ繩をイの絶はこそ蟹のはし舟ゆきも別れめ

片思

いはみ濁をイとたか磯による浪は碎けてかへる物としらはや

恨

何事にうらむと波はあやかりていとふ涙のしのにちるらん

長月の十日あまりのほとに女のかりつかはしける

かつらきの神ならぬ身の悲しさはくるれば物を思ひます哉

人のかりつかはしける

芦間行たなし小船人しれすこかるとすれとさはりかち也

人のもとにまかりたりけるにこよひはかへりねと申

ければいひつかはしける

数ならぬ我身はよるの衣かはきつれば人のまつかへすらん

かへしをんな

なをさりにきたる人をやさハイよ衣かへす計りの戀によそへむ

戀のうたよみける所にて

君かため日（れ）つきたてにたてにしきゝの下くつ計り成にける哉

さゝめかるあら田の澤にたつ民もみの爲にこそ袖も濡らめ

信濃なるすかの荒野にすむ熊のおそろしきまてぬるゝ袖哉

御園生のまをのあさ萩な（ハ）たくりたくるにつけてをくる君哉

革つむ賤のたふさにしなへたる形見にたにもこふと聞はや

わすれ草しける宿をきてみれば思ひのきよりおふる也鬼

夏の戀のこゝろをよめる

つらしとも思ひなさは夏衣たゝひとへにや戀しからまし

物申ける人のつねにあやしきもの有ければうらむる

を聞てくせくしきなとたくひなさと申ければまゝ

きのやたてのひらなるにむすひつけてつかはしける

まるならぬやたての竹も節とにくせくしくてよをは過鬼

人にわすられてはらたつといふ（ハ）（る）事をよめる

よし思へとかくに戀の忘られてなけくやわろき君や賢き

殿下にて戀の心をよめる

夜とゝもに戀をおほめく人にこそ我姿をはみすへかりけれ

みなくゝり網（ハ）のかひもなく人を雲井のよそに見る哉

年へたる膝のうへきのこちたさをしらても人に身をかふる哉

君こひて我せここにさへうとまれぬこや羨みてあゆみせし人

みさこたに（ハ）うやまふ磯を打曝（ハ）しあらふる鹽をなこめ兼つる

戀しさに涙の色もかはり行つもりはいかゝならむとすらん

たまさかにくるとはすれとめを渡る鳥の早くも歸りぬる哉

寄衣戀

唐衣ふちのまろやはあやにくも重（ハ）ねも敢すぬきすてゝこし

ふみをみぬこひ

文みすと聞につけてもうたしめのはしたなき迄ぬるゝ袖哉

ゆふへのこひ

みくまのゝはま夕暮になる程はいくへか人をこひ重ぬらむ

殿下にてこひの心を

秋かへすさやたにたててゐなくさのねもにも身を恨つる哉

戀催舊意といへる事をよめる

初瀬河いはもとさらす行水のわきかへりてもぬるゝ袖かな

こひの歌よみける所にて

先きては人めもしらすあたらしを何さま悪とはしたなめ劔

ある人のもとになそゝ物語をあまたつくりてとか

せにつかはしたりけるをときまにときたりけるを又

つかはすとてよめる

いかでもと思ふ心の亂れをはあはぬにとくる物とやはしる
殿下にてこひの心をよめる

日くるれば忍ひもあへぬ我戀やなるとの浦にみつしほの音
人にさはるこひ

逢事はまれかの浦にあさりする蟹もさのみや人めもるへき
殿下にて

戀し共さのみはいかゝかきやらん筆の思はん事もやさしく
待人といへる事を

次郎
いつとなくこぬみの濱に君待と漂よふ波のたゝぬ目をなき
人のもとよりたひ／＼申せと御かへりなきはいかな

るゝともし文をみぬかなといひたる人の返事にしけ
る

いさやまた文も見られすともすれば跡絶の橋の後めたさに
遠き道をへたてたる戀といへる事を

すくせやなそいなむやの關をしも隔てゝ人にねをなかつ覽
且見戀

ひえの山その大だけは隠れねとなを水のみは流れてそふる
隔月戀

かきたえてみつきに成ぬこれやさは心盡しのかとてなる覽
みつきといふは。つくしのふのかとてなり。

隔年戀

年こえぬさのみはまたししな鳥るなのみそかは過しとな覽
隔一夜戀

隔一夜戀

笛竹のあな煩らはし一よをもこぬをつらさの節にせよとや
しのひたる戀

奥山のくきかくれなるはたつもりしらね戀になつむ頃哉
はしめたる人のもとへつかはしける

けふつるに争ひかねつ我心いはて慰むことしなけれは
うたかはしといふ人のもとへつかはしける

心みよもつらからし播磨なるしかまの市に人はたゆとも
郁芳門院の根合に戀の心をよめる

戀佗てねをのみなけは有馬なるいてゆゝしけの袖のしほれや
人のもとにまかりて後いかなる事が有けん送て侍け
る

音なしの瀧とはいかに流れまし冬ふかゝらぬつらゝ也せは
かへし

岩くゝる瀧のうはへは氷る共とゝろきおちん程はたえせし
かたらひける人のもと人に物申と聞てうらみ侍りけれ
はあれはむかしよりいひをめたればなと申を聞て

春たてはめくむ垣ねのみやつこき我こそさきに思ひ初しか
人のもとにまかりたりけるにおまへにいとゝまゝふ
たかりてえおりすと申たりければいひつかはしける
終夜たきりておつる涙かなこやまちかねの山河のみつ
返し

岩間もる絶まをまつはくるしとおもひしかし山川の水
堀河院の御時中宮の御方にて殿上人々歌つかうけ
るに戀の心をよめる

夜と共に苦しと物を思ふかな戀のもちふとなれる身なれば
おとこかれ／＼になりてなけきける人にかはりてつ
かはしける

通ひこしまのゝ繼橋ほと／＼に音たえぬへき身をいかにせん
後とイ

十月はかり人のかりつかはしける

佗人の袖ははゝその杜なれやしくるゝまゝに色かはりゆく
雖契不來

いさまたし人の憎きに己か身の言葉にさへも見するはち哉
計哉イ

かたはら（こ）になき名たちてなけく人にかはりて
人のかりつかはしける

色々に（か）かきせたるぬれ衣はいつはりしてやぬひかさぬ覽

中納言國信の家にて戀哥合しけるによめる

初戀

風吹はたちろく宿の板しとみやふれにけりな忍ふこゝろは

後朝の心を

契有てわたりそめなは角田河かへらぬ水のこゝろともかな

遇不會戀

戀しさにたえすなかるゝ我袖のなみたを人の心ともかな

夜戀

よとゝもに玉ちる床のすか枕みせはや人によはのけしきを

經年戀

君こふとなるみの浦の濱ひさきしほれてのみも年をふる哉

殿下にてわれ人をこふといへる事を

下の帶のいひ惑はせといきもあはづ短かゝりける我すくせ哉

人戀我

くちぬらん袖そゆかしき我駒のつまつく度に身をし碎けは

もの申ける人のはゝに申へき事の有てまかり（てい）

たつねけるにたひゝなしと申てあはせさりければ

つかはしける

幕木はおもてふせやと思へはや近つくまゝにかくれゆく覽

人のかりつかはしける

大かたは思ひたえなん池のあまの釣のうけ引事しなければ

人のもとにまかりてきぬへたてにふしてかへるとて
申かけゝる

隔てつる衣の關のかたければ恨みてそふる人のこゝろを
もい

人のもとにまかりたりけるにこよひはかへりねと申
ければよめる

佗人は風のしたなる葛なれやよひイなくれと返りのみする

人を尋けるにうへにといはせてあひ侍さりければよ

もすからたちあかして歸りにければあれよりいと

思へ唯袂は露にそほぬれてたちやすらひし夜半のけしきを

あるましき事なといへる人のかりつかはしける

遙かなる雲井をわたる雁金もつるには澤におるとこそきけ

春宮大夫公實の家にて戀のこゝろを

水の海とおつる涙は成にけりあふへきしほもなきと聞より

戀の心をよめる

とかりするさつをの弓弦うちたえてあたらぬ戀にやまふ頃哉

殿下にて戀の心をよめる

いひ初し言葉と後の心とはそれかあらぬかいぬかからすか

よそにみて人をこふといへる心を

若草をたゞ假そめに見しひより束ねもあへぬ物をこそ思へ

人をうらむといへるこゝろを

恨むるも戀しといふもきゝとけはひゝきと聲と水と氷と

違約束戀

よもゝと頼めし君か言のはゝ秋立ぬればかれゝゝになる

歌繪に男の女にあひたるまへに思ひのやつ有所をよめる

思ひやる心やちゝにさそふらん頼めぬたひに君かきませは堀河院御時に女御殿の御方にまいりたりけるに人の扇に手ならひせさせければ書付侍ける

わきもこか姿の池をみつるより浪のたちるに物をこそ思へしりたりける人のゐなかにまかりてほとへぬれはいまは忘れたるらんといいたりければつかはしける忘れめや涙にそめし紅のやしほのころも色しあせすはたかきをおもふといへる事を

谷河のみかけにつくるまろすけも雲る峯のいは根をそ思人のもとに文つかはしたりけるに返事をせさりければつかはしける

誰をともし定めぬ山の山ひこもわれとしきけはこたへさり覺かへし

をしなへて答へぬ山の山彦をうはの空にもよふことりかな別常實行の家にて忘後人をこふといふ心を

かきたえし程ふる川の底みれば流れし身をそおもかけに立わすれたりける人のまた程へてかへらんといいへりけるをきゝて女にかはりて

かきたえし人はわすれて今更に思ひ泉のわきかへるかならんイ

大貳長實の白河の宿所にて被下戀といへる事を

小刀の東のまにたにあはゝやと思ふ身をしもたはさくへき戀のうたとてよめる

逢まてとたちも歸らて程ふれはおのゝえならぬ袖もくち覺胸はもえ袖は涙にしほれつゝひ水にいれるこひもするかな

思はんと頼めしとはあみのめにたまらぬ風の心なりけり雨中戀といへる事を

我袖をひちかき雨にそほぬれてさほすといはん君もイそおこる人のなくくうらみければかへりてつかはしける

せたの橋の馬ふみくちめおほみその泪を面影にたつ修理大夫顯季の六條の家にて七月七日に寄織女戀といへる事をよめる

七夕にかしつと思ふ戀しさをかへせはやなを袖のぬるらんおなしこゝろを

うかりける武士なれや七夕もこよひになればあふなる物をとはんなどちきりける人の久しうおともせさりければやらむとて人のこひければ

思はんと頼めしとの忘れなはとはれぬ身をも恨みさらましかたちよしといはれける人のもとへつかはしける

住吉ときくにもかゝる涙かなあふせ待まのいつとなければ物申ける人のあまたの人に物申と聞てよめる

武士のかりにのみくる秋の野をすみかと頼む鹿そはかなきさゝくみといふ物を女のもとよりみせにをこせたりければかへしつかはすとて

君と我むすほれなは河竹の流れてもみようきふしや有とツイ

つれなくのみ侍ける人のもとへつかはしける

明くれば物思ふ事をたくみにてわりなく胸をしる人そなきはるの戀といへる事を

思ひかねいくのゝ里をへたつれば霞をさへもうらみつる哉冬戀

逢事はさゆる朝の水なれやとゝこほりつゝとくるよもなし

堀河院御時艶書合といへる事をせさせ給ひけるにつ
かうまつれる

数ならてよに住の江のみをつくしいつを待ともなき身イ也身イ 中宮上總

流れてもあふ名はたてし住江のみをつくしにてたちははつ共
又をんなにめして男に給はせけるに

浮身なら人もつらしと知ぬれとことほりなくもおつる涙か
かへし 四條宮甲斐

かりそめのたえまをさへや恨むへきとはりなきは 泪のみかは
たかひてあはすといへる事を

玉ゆかのおましのはしに肌ふれて心はゆきぬ君なけれとも
夏戀

あふ事は夏野に茂るこひ草のかり拂へともおひむせひつゝ
ねさめのこひ

まとるむに戀しきもの慰まはねさめをさへは恨みさらまし
なをしはしなと申ける人のもとへつかはしける

ねらひするゐなの芝山ふゝきしてたえて待へき心地社せね
更衣の朝に人のかりつかはしける

けふよりは衣とゝもにつれもなき人の心もかはらましかは
大貳長實の白河の宿所にてよめる

來ても又かへる朝のかなしきにこぬをうしとも思はさり鬼
春宮大夫公實の家にて人々戀の哥よみけるによめる

つらゝゐて敷る汀のさむしろにおれふす芹のねをのみを鳴
男の女のもとに草子かゝみを忘れてこひにをこせた

りけるに返しつかはすとしてくすへき歌とこひければ
忘るゝに心のほとのみえぬれはかねてつらさの増鏡かな

大殿の歌繪の中に男のつらつえをつきてゐたるまへ
にこひ思ひあり又へといへる物あり鶴むかひてたて
りからの女ひとりある所をよめる

戀しともいさゞはいはし年をへてうきから人を思ひ出るに
同繪に女のかみをかきこしてなつる所を

かきやりし人の袂の戀しさにいくたひ髪をふりこしつらん
寄鳥戀

玉櫛笥ふたみの浦にすむ千鳥唯あけくれは音をのみそなく
人のかりつかはしける

うたゝねの夢路にみえし逢事を春のよとたに思はましかは
物へまかりけるみちに澤に鶴のさはきければ

いととしく物思ひをれば山かつのすけ刈澤にたつさはく也
修理大夫顯季の八條の家にて人々戀の歌よみけるに

山鳥のはつをの鏡かけふれて影をたにみぬ人そ戀しき
鳥羽殿にて人々戀のうたよみけるに人にかはりてよ
める

かはり行人の心はつらからて忘らるゝ身をうらみつる哉
哀なりこひにてよをはつくせとや身は淀川の底にすまねと

あし北のゝさかの浦のうつせ貝いもせそなへてそイ幾夜へぬ覺
雨中待人

雨降り日はあやにくにこし物をこは誰なれや訪つれもせぬ
寄虫戀

夕顔のしけみにすたくつわ虫おひたゝしくも戀さけふ哉
戀のこゝろをよめる

やへふけるまやにも雨はもる物をなをわか戀の隙なかる覽
とゝむれと不留といへる事を

秋風にすゝきのなます思ひ出てゆきけむ人の心地こそすれ
戀のこゝろをよめる

もろこしと何思ひけんさとられぬたまになきけん人の涙を

散木奇歌集第八

戀部下

修理大夫顯季の八條の家にて人々戀の歌よみけるに
よめる

増鏡うら傳ひするかさゝきに心かろきの程をみるかな
よへともかへらすといへる事を

御狩のかさなかれするはし鷹の聲にもつかぬ恨をそする
戀不遇

頼めつる言葉にことの變らすは辛さはかりや嬉しからまし
くれともあはす

心えつまのゝ萱原ふみからしくるもしるしのなき身也けり
思不言

心あひの風ほのめかせやへすかき隙なき思ひにたち休らふと
人を見てこふ

はねかつら赤裳の裾に繰ためてはなふく妹をふれすはやまし
中納言俊忠のかつらの山里にて戀のうた三首よみけ

るになき名たつといへるを
たちしよりはれすも物を思ふかななき名や野への霞なる覽

皇后宮權大夫師時の八條の家にて哥合によめる
これをみよむつ田の淀にさでさして萎れししつの麻衣かは
人々あまたまうてきて五首歌よみけるに戀の心を

しるしあれや竹の丸ねを數ふれば百夜は伏ぬしちのはしかき
殿下にて戀の歌よませ給けるにつかうまつれる

君こふとの刈藻よりね覺して編けるぬたにやつれてそみる
前左衛門佐基俊の家にて戀の心をよめる

てにとれは涙にそへる水莖のつかのまたらやかたみなる覽
前兵衛佐顯仲の八條の泉家にて人々十首の歌よみけ

るに
あちさるの花のよらはをとつれてなそいなめの情計りそ
淺ましやは何事の様そとよ戀せよとてもむまれさりけん

又人にかはりて
戀すてふ猶ねれ衣といふへきにやかてもきする我なみた哉

戀の哥とて
涙河かけにもはちすおりたちて老の浪にもぬらす袖かな

人にわかるゝ戀といへる事を
我を君心のまゝにすかしまのをなつみのうらみてそ行

障本夫戀
沖つ浪しはしなかけそみさこゐる磯傳ひきてつまゝたを覽

かへるをなけく戀
つくゝと思ひたむれば手束弓かへる恨をつるはへてする

思夫
をくれとてそふる心や道すから駒のつまつくはしと成らん

人にしらるゝこひ
槇の板をほろにあたして通ひこんぢひも敢す妹かしなひに

競人戀
誰をけふ心をしかにかけつればあひ遅れてはいられさり覺

難休戀

鳴海濁うのすむ磯に生るめのめもかれす社みまくほしけれ

戀遠人

ちつのほきとちのわたをもこえぬへしそれにおもねる心也せは

相思戀

我もしか戀しと計りいひつるや珍しけなきのこなるらん

隔月戀

あひもみて重ぬる月をわきもこか衣の袖とおもはましかは

後朝戀

道すからぬしなき戀やあくかれて歸る我身になりへきぬ覽

戀哥とて

朝おきて口にはなもと唱ふれと心は君を戀つゝそをる

不見書戀

年をへて隣のかへはくつせとも夢にも文をみぬそかなしき

寄鯉戀

おろさせてなますてありとみつるよりみつのみさへこいしさやなそ

戀のうたとてよめる

ねぬなはに枝さしかはす丸小菅まろをこすとや妻と定めし

殿下にてかへさるゝ戀といへる事をよめる

秋の田の刈程もなく返されて忍びもあへぬねにそそはつる

寄小兒戀

逢事の片言しけるみとりこはなこそいふもことぞ聞ゆる

寄鳥戀

君をゝきてことこひするか奥山に水戀鳥のみつこふかこと

みおとろへたるはなと申ければ

かたらひせる人のこの頃はいかなるもにか色もあを

戀草にしみかへりたる色なれば思ひ初けむ日をそうらむる

き

稀通戀

ひる鹽のとゝみならずはやそ島にたえま勝なる恨せましや

殿下にて推量戀といへる事を

大かたの心憎さをしるへにてあやうくものを思ふころかな

海路戀

戀草をさしにゝつめる舟なればかしもみとろし心せよなみ

女のかりつかはしける

戀しさに身のうき事も忘るればつらきも人は知しかりけり

大殿の哥繪に山里と覺しき屋のつまに女ひとり詠て

ゐたる所におさなきちこふしたりそのかたはらに女の

のきる裳といふものをゝきたりまへに田の有にかも

といふ鳥ひとつゐたりまたいもしとおほしきてい

かりこゝのつとひたる所をよめる

君まつと玉藻の床におきふしていくたひ鴨のうきねしつ覽

人のかりつかはしける

冬の池の入江の蘆まさえゝていつかは霜のうちもとくへき

つれなくのみ侍ける人のかりつかはしける

佗つゝも頼めたにせよ戀しなん後の世までも慰めにせん

こひのうたとてよめる

露を重みたはゝに匂ふ萩のえのえもいひしらぬ戀もする哉

なこそその關のこひといへる事を

東路のなこそその關も我こふる人の心の名にこそ有けれ

人のかりつかはしける

今そしる人こふる身のかなしきは涙に袖のくつる也けり

殿下にて戀の心をよめる

きのふ迄きひねにみえし姫百合のいつたち馴て人しみの覽

とねぬイ

寄花戀

我こふる人に、ほひの庭櫻おれは心のゆきもするかな
はるの戀

霜かれの野へともなしに春たてはもえても物を思ふころ哉
梅の花にむすひつけて人のかりつかはしける
匂ふかに思ひよそへて梅の花おるにつけてもぬるゝ袖かな

寄水雞戀

水雞をは鳴をたゝくと聞なして我をはとはて空を尋ぬる

後朝心を

夜をこめて歸らざりせは葛のはのあく共けさを恨みさらまし

寄酒戀

よの人はとひ慕ふ共すまさらはみきとなひを暫しもらさし

經年戀

年ふれとこすのきけきのたえまよりみえつつ浪は面影に立

修理大夫顯季の觀音寺にて歌よまれけるに寄躑躅戀

といへる事を

いなゝらはいひも放たてもち躑躅やにかけたるはひこしらへとや

加賀守顯輔家にて人々哥よみけるに戀の心を

かりつめる我戀草はもゝしらへこまにあはねはつくるまもなし

初戀

ふりはてゝいひ初つれば紅のあくけなくともかへりぬる哉

神祇伯顯仲家にて逐日増戀といへる事を

日をへつゝあくらの濱の志貝わすれはてぬとみるを悲しき

中納言俊忠か家にて戀歌十首人々よまれけるに逢む

事をうらなふといへる事を

神風やみつの柏にことゝひてたつをま袖につゝみてそくる

くれとも不留

思ひ草はするに結ふ白露のたまゝきては手にもかゝらす

ふしなからまことなし

小車のわつかにところをみつれ共錦のひもとけてかへしつ

祈とも不遇

うかりける人を初せの山下しよはけしかれとは祈らぬ物を

追從戀

おかみ河ねしる高かやふみしたきとる足つきもせなか篤とそ

すかひてあはす

假初にいろとや鹿の思ふ覺あふひとすれば身をかくしつる

いやしきをいとふ

怪しきも嬉しかり覺おとしむる其言のはにかゝると思へは

かたきをとく

遙けくと思ひかけては山水の分てもつるにおちさらめやは

別當實行の六條の家にて戀の心を

いつとなく戀に焦るゝ我身よりたつや淺間のけふり成らん

かたこひのこゝろを

遙々とやさたつ妹はこひもせてつたなきせなそなきも絶ける

戀の心をよめる

身の程をもて塞せ共君みてはめてもやするとあされをそする

隔障も本夫戀

手枕をくけてしくれば恐るしみはやはひましねみつかとより

殿下にて寄水鳥戀といへる事をつかうまつれる

羨ましいかなる鴨のわきもこか姿の池にうきねしつらん

美作守顯輔家にて戀を

君をこそ淺はの原にをはきつむ賤のいしみのしみ深く思へ

或所にてゆふへの戀といへる事を

いつとなく鹽たれ山のさゝれみつくれ行まゝに音そへつ也
殿下にて十首哥よませ給ひけるに戀の心をつかうま
つれる

心のみくたくる戀や玉つ島いそこすなみのかへるなるらん

おなし殿下にて人を恨といへる事をよめる

石はしるとかはの瀧も結ふてにしはしはよとむ物と社きけ

修理大夫顯季のかつらの山里にて戀の心を

雲はれぬふしの烟も風吹はなひくけしきはみゆなる物を

關戀といへる事を

くるとにあひつの關もわれといへは固くなくとも袖哉

中納言國信の坊城の堂にて人々哥よみけるに戀のこ
ころを

玉ゆかの花の褥にいつくしき君をしなへてしたにたにねん

別當實行家にて戀のこころを

戀しとはかきやらしとそ思ひしに浮身はそれも叶はさり覺

修理大夫顯季の樋口にて戀の心を

別れにし手束の弓のしらとりをきのかはゆすり戀ぬ目そなき

皇后宮にて會有けるに院宣にまいれと催有ければま

いりて雨中驚といへる事をつかうまつりけるに久し

き戀の心を

浅からす思へは社はほのめかせ堀金ののつゝましき身を

大貳長實の八條家にて戀のこころを

なこそてふ言葉はいかことくさを關の名そとも思ひける哉

奈良の歌合に人にかはりて

嬉しとやなくをも人の思はまし涙にこひのくつるよならば

戀の哥とてよめる

つれもなき人のゆかりに夜もすからぬめをさへ恨みつる哉
なく涙おそふる袖はくれなるに色このみとや人は見るらん
大貳長實の八條の家にて晚戀といへる事を

住よしと人をみてくらゆふしてゝまつに涙をかけぬ目そなき

左京大夫經忠の八條の家にて戀の心を

あひそめよゝもたゝにてはと計のこむと頼めし程は過ぎし

中納言雅定の八條の家にて共（公）有障戀といへるこ
とを

浅ましや君のみとにことつけて人のてまをはしらぬ成けり

修理大夫顯季のなききの院にて戀の心を

哀てふ人も涙におほゝれてともしき袖をくたしはてつる

雨中戀

隙もなくもりくる雨のあしの音を我とをつまと思はしかは

物ねたみして男にさられて獨有人におとこのものい

ひ渡ると聞て母（女）のおほしくていひつかはしけ
る

このわにはよもめくらしなかへりにし先の車の譬ひ思へは

寄月戀

今そしる戀する比の月影はさも身をとる物にそ有ける

寄山戀

あまきりあひ夕るる雲に閉られて妹惑（は）せるなにおふせの山

中納言雅定の六條の家にて哥合しけるに戀のこころ
を

さもとたになけの情にいつしかな有のさ（さ）の程とやはみる

を

寄草戀

を

谷ふかみ水かけ草の下露やしられぬ戀のなみた成らむ

別當實行の六條の家の哥合に寄泉戀をよめる

我戀はおほろの清水いはこえてせきやる方もなくて暮しつ

殿下にて寄海戀を

ちぬの海浜に漂ふうきみるのうきをみるはたゆゝしかり鬼

おなし殿にて三首の歌合有けるに戀の心を

口おしや雲井かくれにすむたつも思ふ人には見えける物を

修理大夫顯季の六條の家にて雨中戀といへることを

降雨のあしかれとしも思はねと繁き恨みはたゝならしかし

戀の心をよめる

戀す其身の氣色たに變らすはいはぬに人のあやめましやは

をとなしの瀧のこひ

君こふと名には流れてをとなしの瀧のしら糸さは絶ねとや

いはてのせきのこひ

人めもるいはての關は固けれと戀しき事はとまらさり覺

大貳長實の白河の家にて戀の心をよめる

淺ましやなみしはの野にたつ鹿のつめの我のみぬるゝ袖哉

寄馬毛戀といへるを

隙もあらは小畔に立る青鷺のこまゝと社いはまほしけれ

又おなし題にて

我といへはあれてそみゆる春駒の心は人につきけなれとも

左京大夫經忠の八條の家にて戀不依人といへる事を

よめる

紅の袖にはつれしまみよりもなれかつゝりのわらけをを思

修理大夫顯季の六條の家にて戀不知程といへるを

よめる

せきもあへぬ涙にて社我戀のつもれる程をしるへかりけれ

男にわすられてなけく人のまたなき名をさへたちて

恨みけるかその人のかりつかはさんとて哥こひけれ

はかはりてよめる

いとゝしくちぬる袖にぬれ衣をひきかさねても歎く頃哉

皇后宮の弘徽殿におはしましける頃ほそとのにて人

に物申けるに女房のうへへのほとと道見くるしお

はしてと女官の申ければたちて殿上の方へまかりに

けるをのちにまいりやすると待けるにみえさりけれ

はかれよりをくりて侍ける

大貳君

おほつかな春の夜深きはなれ駒跡を尋ねんかたもしられす

かへし

とりつなけみかきの原のはなれ駒浮世にあらて跡も定めす

長月の晦日人のもとにまかりたりけるになしとてあ

はさりければ有所を尋ねければしらすとて申さりけ

れは書あつめて家にをかせ侍ける

おしめともたちもとまらぬ秋霧の行衛もしらぬ戀もする哉

風吹は空にたな引うき雲のゆくゑもしらぬこひもするかな

山のはにあかすいりぬる秋の月ゆくゑもしらぬ戀もする哉

さほ山の嶺ふきわたるこからしの行衛もしらぬ戀もする哉

さよなかに友よひかはす雁金のゆくゑもしらぬ戀もする哉

秋の野のもとあらのかにをく露の行衛もしらぬ戀もする哉

山河のぬくひにかゝる白浪の行衛もしらぬ戀もする哉

よさの浦に鳴かくれ行釣舟の行衛もしらぬ戀もするかな

もしほやく海士の苔屋に立けふり行ゑもしらぬ戀もする哉

夕されは空にわかるゝむら鳥の行衛もしらぬ戀もする哉
戀の哥よみける所にてよめる
木をささみ繩を結びし昔よりつるにはとけて見えける物を

散木奇歌集第九

雜部

はるのつかさめしに俊重か式部丞申ける文にそへて
頭弁重資のもとへつかはしける

日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かくれつゝ
是を御覽して周防内侍をめてこれかかへしせよと
仰られければ心はいかやうにかさもさふらひぬへき
さまにやしきふらふへきと申ければさこそはと御氣
色有ければつかまつりける

金
なにか思ふ春の嵐に雲暗てさやけき影は君のみそ見ん
そのたひなりにけるとそ。

おもふとありける比よめる

終夜かはかぬ袖を友にして身のうき事をうれへつる哉
下臈にこえられてなけき侍けるころ人のかりつかは
しける

年をへて身はしつめとも世とゝもにうきたつものは心也鬼
同ころ朝かほにつけて人のもとにつかはしける

程もなき朝かほにをく露の身のなにうき事を思ひしるらん
ものゆかり有て伊勢の國にまかりて久しう侍りける
においをとるへぬる事を思ひつゝけてよめる

鈴鹿山關のこなたに年ふりてあやしくも身の成まさるかな

堀河院の御時御前にて探題歌よませ給けるにしほか
まをとりてつかまつれる

すまの浦にやくしほかまの煙こそ春にしられぬ霞なりけれ
百首の哥中に松をよめる

雉鳩ある磯まに生る松の根のせはしくみゆる世にもふる哉
鶴

網引するみつの濱へにさはかれてあけをさへたつ歸る也
山

いくしおりこえてか人に岩かねのこりしく山を顧みるへき
河

大井川みなはさかまく岩ふちにたゝむ筏のすきかたのよや
橋

朝夕に傳ふいたたの橋なればけたさへ絶えてたちろきに鬼
懷 舊

戀しともいはてそ思ふたまきはる立かへるへき昔ならねは
夢

新古
さゝかにの糸かゝりける身の程を思へは夢の心地こそすれ
雨

つくゝと思へは悲し數なぬ身をしる雨のをやみたにせよ
よふことり

東路のなこそその關のよふこ鳥なにゝつくへき我身なるらん
元 服

髻髪子かはなちの髪を取たてゝまさそめかはよ淵瀬變るな
志賀の山こえ

志賀の山心はれにそこえつれと霞にさへもまかひつるかな

雲

くちなしの色にたなひくうき雲を雪けの空と誰かみさらん

笛

あを竹を雲の上人ふきたてゝ春の鶯さへつらすなり

こと

琴の音のうちにむせふ夕されはけもいよたちぬ心さむさに

のりゆみ

ひき流す手束の弓のやを速みともねにまとのなりかはす哉

産七夜

君かよを七彦のかゆなゝ返り祝ふ言葉にあえさらめやは

臨時祭

たつ程の車ね土器なかりせはおほえてよとの渡りせましや

曉

明ぬなりしはしまきれよかり衣尋ねん程になをなつさはん

あけほの

岩のめは岩のかけはしほのくし暫し休らへまつならす共

寺

始なきつみのつもの悲しさをぬかの聲々くときたつ也

猿

たかみこのいとも怪しと見まし梟猿丸をしも引立てしとや

さゝ

山河の岩間のさゝのひたすらに忍ひしふしはあらはれに梟

遊糸

さゝかにの曇らぬ空の糸なればあそふ氣色のたえすも有哉

くも

さゝかには苔の袂にふるまへと泪ならてはくる人もなし

おきな

しくち引あこのは山に年ふりていかみになれはしめられに梟

水海

夕つく日ゑ湯の浦のいりましに雲すはえして簑もすゝけぬ

薪

枯はてゝもきゝに成し昔よりたきすてられん日を数ふる

石

石はさもたてける人の心さへかたかと有とみえもするかな

海人

ひく島の網のうけ舟浪間よりかうてふきとゆふしてゝかく

池

よにわひて浪たちまちに有なれとあそのみ池にぬさ奉る

瀧

七夕のをりなかしける布なれや空より落る瀧のけしきは

しゐしは

夏そひくうなかみ山の椎柴にかし鳥なきつ夕あさりして

をとめこ

乙女子かとみのおもにひれふりて返すま袖を忍はさらめや

みつきの

みつき物にゐくはまゆの糸をもてくるても絶す供へつる哉

やしろ

祈る事なゝのを社こうくことなはせよくちはしる也

となり

垣こしにほのつくたにも有物をねたくも梅のあるしなる哉

つた

契有てはひかゝるともみゆるかなつたや梢のいもせ成らむ

船

なこかれよみすりもすまに焼つみてあかふま袖の灘と思ひそ

うき草

かきやれは浮て流るゝうき草の世を早くして過ぬへら也

仙宮

たちぬはぬ衣の袖しふれければみちとせへてそ桃も咲けり

おいぬる事をなけきて

われ舟のよをうみ渡る積りにはおもての波におほゝれに晝

思ふ事侍けるころよめる

せきもあへぬ涙の川ははやけれと身のうき草は流れさり鬼

無常のこゝろを

しつのめかゑくつむ澤の薄氷いつ迄ふへき我身なるらん

人に忘られてなけきける人のかりきくにつけてつか

はしける

菊のみとなに思ひけん秋くれは人もうつろふ物にそ有ける

田上に侍りける比つはきをきりてはひにやかむ

とてからすをみてよめる

我身とも椿の枝のみゆるかなはひに成へき程のちかさに

思ふ事侍りけるころよめる

風をいたみゆらの戸渡る柴船の暫し逃れて世をすこさはや

るなかへ行人のもとにふみやつくとたつねければ

よめる

雁金の跡なき身とは知なからいかゝみきりに文もつくへき

色このみたてける人のおとこかそへけるにいかゝあ

るなど尋ねられてたはむれてよめる

打わたるひとしおほのゝみなせ河淺き心をたれかみさらん

山城守なりける人のめをある人忍ひて物申すときこ
えけるを程もなくかれゝになりぬと聞て遣しける

石川やはなたの帯の中絶は狛のわたりの人にかたらむ

夕くれかたに何となく物心ほそくおほえけるにのき

近き竹にすゝめの鳴ければよめる

日くるれば竹の園生にぬる鳥のそこはかとなき音をも鳴哉

みたけへ参りけるに吉野川のほとりにてよめる

よし野河岩のめせきをわきかへりしらゆふ花や瀧のしら玉

とねりこといへるきのしたに草の有けるをひかせけ

るを見て

とねりこの下にはゆる駒馬イひゆを引すてちは主やのるへき

下臈にこえられてなけきける比

うき事は珍しからぬ身なれとも旅にも袖のぬれまさるかな

隆源阿闍梨七條坊に申へき事有てたひゝまかりけ

るにいたはる事有とてあはさりければかみさうし

(無障子)にかきつけ侍りけり

こりはてぬにゑの初雁あさにする宿にもあら人かへしけイつる

かへし

初雁のにゑの書けのつかなりとはかけそすへきいか返さん

住吉にて旅の心をよめる

住吉のしきつの浦に旅ねして松の葉かせにめをさましつる

田上にてつれゝなりけるにかはのをとつねよりも

をとつれてともしなきこゝちしてよめる

河の瀬のおちまふ水のゆくゝとおもふ心を人はいはゝや

澤に生るますけの苗をふみしたきあさゐるたつの聲聞ゆ也

七十になりて後むかし見し人のもとにまかりてふる
き物かたりなとしけるつゐてによめる

數ふれば車をかくる齡にてなをこのわにそまはりきにける
皇后宮弘徽殿におはしましける時にしおもてのほそ
とのにてたちなから人に物申けるにくるしかりけれ
はつちにゐたりけるをいとをししたゝみをしかはやな
と申ければ疊は石たゝみしかれて侍るめりといふを
聞てよめる

大 貳

石たゝみ有ける庭を君にまたしく物なしとおもひける哉
かへし

名にしおはゝ身もさえぬへき石たゝみ片しく袖に衣重ねよ
もの思ひける女のしぬとそたゝにとなかむるを聞て
よめる

とはりやいかてか戀もしなき覽あふくま川に水のたえなほ
田上にて物いひけるつゐてに松たけの有けるををそ
くやくなといひけるを聞てよめる

ほともなく取いたせとや思ふへき松と竹とは久しき物を
よふけてむかひの山に猿の鳴けるを聞てよめる

さらぬたに寢覺の床のさひしきにこつたふ猿の聲きこゆ也
殿上をりて侍りけるころうちわたりになに事かなと
人に尋けるつゐてによめる

古しへは人にとはれし百數のことをも君にたつねつるかな
下臈にこえられて叙位のおくにかき付侍りける
數ならぬ我身はいちのみそなれやゆきかふ人のこゑぬ流は
よのありかたきにいかゝせんすると申を聞て人のい
かゝおもひなりぬると尋たりければよめる

いさやまた港のさきの心地して思ひたゝれぬ歎をそする
なこのうらといへる事をよめる

なこの浦の音さへけさは烈しきにかに鳴戸の沖さはく覽
障子の繪に海のつらに人なかつてゐたり船のゆくを
みる所をよめる

葛飾のまの、浦はの沖つとにあけのそを舟からるをすなり
あるあまのくちあしとてもものゝくはれぬにしたい
ふものこそ思ひ出らるれといひけるを聞てもとめて
くはせけるにからみといへる所はからしとてくはさ
りければよめる

よしと思ふ心の願ふにしなければからみ成共まいらさらめや
中宮亮仲實かことをあたらしくつくりてみせければ
ひきならしてよめる

ひき鳴す聲そさやかに聞ゆなるくちにし船のみとならねと
をとはにまかりてたきのもとにて人々かはらけ取て
うたよみけるによめる

人のもとにあまたるなみてよふけぬるよしをよめる
今はしもあかぬまとるにさよ更て水の流も花咲ぬらん
權僧正永縁かもとより牛を心さして侍りければかへ
り事に遣しける

嬉しさをきかする程はこゝのつの牛のむづのけにも及はす
かへし

古のたきつしま姫ならねともあかすおほゆるわかかな
五位して殿上おりて侍りける頃家道君のもとよりつ
れゝはいかゝなと訪て侍りけるに少將などのきた

る事を思ひ出てつかはしける

三笠山さはなれにしあしたより泪の雨にぬれぬ日そなき
かへし

家道朝臣

三笠山たちはなれにしそのかみの袂は我もさこそぬれしか
田上にはへりける比山のかひに人のあまた物ひくを
とのしけるをとほすれば山よりふねつくりてくたす
なりといふをきつてよめる

山彦はこのもかのもにこたへつゝ音たかさこに船くたす也
伊勢に侍りける比正月廿八日に齋宮おりさせ給ぬと
聞てむろ山の入道かもとより送りて侍ける

故郷と成ぬる宮の夕かすみ思ひかけすや立かはるらん
かへし

思へたゝたけの都は霞みつゝしめの外なるみよのけしきを
みやこへのほると聞てをくり侍りける

かへるへき君かおしさに都路の花さへつらき春のそらかな
返し

限り有て立かへるには櫻花かりかねをたにえやはとゝむる
大毳にてかみくあはせといふことせさせ給けるに
師のこひければよめる

君かよを神々いかに護るらんしけきめゆひの敷にまかせて
あそひ侍りける所にて隆源阿闍梨いたくねふりけれ
はかはらけきすとてかけゝる

おひ茂るねふりの森の下にこそ目覺し草はうふへかりけれ
人のもとより巻物に手ならひしてとてをくられたり
ければかたのことく書ておくに書付侍りける

芥るてきたなきみその水華はかき流せともしとろもとろに

田上にて八月許につれゝなりければ何となくあゆ
み出てさくらたにのかたへまかりけるに道のとをか
りければやすむとて式部の大夫のよめる

春ならて櫻たにをは見にゆかしあきともあきぬ道の遠さに
といふを聞て和し侍りける

櫻たにまことに匂ふころならは道を秋とは思はさらまし
水くるまのほとすきてすてたれはめくらぬをみてよ
める

捨られてうき瀬にたてる水車よにめくる共みえぬ身なれや
つかなみといふものゝうへによこねてたひかさな
るまゝにあやしけに成けるを見て俊重かよめる

藁藉の上によるゝ旅ねしてくろつての里になれにける哉
とよめるを聞て和しはへりける

つかなみの上は黒つになるれ共下のねよきにしく物はなし
させる事なくは京へのほらしと思ひけれといつしか
宮このかた思ひ出られてよめる

身なからもならぬ心は程もなくいとふ宮古の方を戀しき
つれゝには詠やるかたにくわといふ木のたちなみ
てよろつをさふれとあるしのおしけに思ひたれば取
さらぬ事をよめる

詠やる方をもいかゝさへき覽はかなき事にくはゝなれねは
山にあそひあるさけるにしかのひしるこゑのしけれ
は

かせかけてひしるを鹿の聲きけは狙ふ我身を遠さかりぬる
つくしに侍ける頃肥後守盛房か劔身のよきありたま
はんと申けるかをともせさりければいかにかと幸は

るに忘れにけりと申を聞てよめる

なき影にかけたるたちも有物を鞘つかのまに忘れはてける
神祇伯のあきたりけるを修理大夫顯季にものつゐて
有ける時にのそみ申よし申されなんやと申たりける
に後にいかやうにかなと幸ければ申きなと申たりけ
れはそうせよとおほしくていひつかはしける

よきさまに事はしかな日にそめつるたきゝの下の憂を

正月五日叙位事なと思ひつゝけてよめる

ゆくゝとけふ又誰にこえられてうき身そ河の流れくらん
田上に侍りける比むかひの山きはおほきなるもの
しゝのみえけるを小牛とこそみつれと人のいひける
を聞てよめる

鹿を見てむまといひたる人たにもゐをは牛とや思はさり劍
河よりいかたのくたるかくひのたてるをみてをし
けてくたるをみてよめる

筏士にあふくま川ソイの身をつくしをしをのけられて過るころ哉
まへのすひつにするともなくてかなはといふものゝ
たてるをみてよめる

いかにせんいつちゆけとも世中の叶はぬ様そにる物もなき
宮古にすみわひて田上にまかりてよめる

あしひたくまやの住家は世間をあくかれ出るはしめなり鬼
むかひの江にわらはのあそひたはふるゝを尋ぬれば
みそかひといふ物ひろふなりといふを聞てよめる

江のよとにみそ貝拾ふうなひ子か戯れにてもとふ人そなき
身のあやしき事を思ひつゝけて涙くましきによめる
ともすれば先つくらるゝうつせ貝空しくてのみよをや過覽

すいかんを人のよませ侍りければよめる

宮木野の雫にかへるかり衣忍ふもちすりみたれしぬらし
狩衣はやの薫すりたちかへてあけのゆひゝも結ひしてたり
人のもとにまかりたりけるにかみゝゝをひきてもの
にとりいてゝ侍りければよめる

嬉しさの天のみ空にみちぬれはいとなくかみを仰きみる哉
大殿の哥繪に男のかゝみをもちてかたはらにある女
に見せける所をよめる

是をみよますみの鏡きよければ萬代ふへき影そならへる
同繪に尼のゐたるまへに兒のはすのはをもちてゐた
るところを

世中をそむくとならばはちす葉の濁にしまぬ心ともかな
身のあやしさに何となく人のうらめしきやうにおほ
えければよめる

誰となく恨めしき哉宿世にて身のあやしきは人のとかゝは
伊勢に侍りける比祭主親定かいはてといふ家おもし
ろしとてまかりてみけるにまともおもしろかりける
中にもかはむかひの山つらいふなりけるか思ひ出ら
れてよめる

をちこちのと山の裾を戀し共いはて思へはしる人もあらし
あそひける所にある人のきたりければよめる

嬉じやなきなるかはせやすみぬ覽君か光ののそむしるしに
天王寺へまいりけるになからにてゝそ櫓の跡など
いふをきゝてよめる

行末を思へはかなし津の國のなからの橋も名は残りけり
人のおさなき子の四五はかりなるをゐてきていみし

うまひする童なりといひてはやしけれとまはさりけれはほいなけに思ひてにくみければ名は何とかいふと尋ればつるとなん申といふを聞てよめる

よもまはしけふは人みる昔よりつるはてきみの物としちや男のかれくまかりなりて歎ける人のもとにまかりてとふらひけるにおとこのあふきとみゆる物のみえければかたみに置たるかといへはわすれたるなめりといふを聞てよめる

つかのまもをさかたかりし扇こそ秋風吹は忘られにけれありける事をあらかふ人にさりととも男にとはかくれもあらしといひけるついでによめる

風吹は靡く尾花にさゝかにのいかにはかなくかくすなる覽肥後君か哥をよみてかやうなるふる歌や有とたつねたりしかはつかはしける

吳竹の筒をのみるせはしさによも此ふしはあらしと思ふうちへまいりけるに陣にまもりをみつたりけるをかゝる物なん有といふを聞て藏人家時こそまもりはおとしてわふれと人の申ければつかはすとて隨求のたまのもとに結びつけてつかはしける

求るにしたかふもりの玉なれば光さすかにうせぬとをしれとしおいぬらんと思ふ人のとしをかくしてわかやくを聞てよめる

君はしもきゝ渡りけん津の國のなからの橋を造りそめしもむかしもの申ける人がある人の物申と聞てつかはしける

袖ぬれてわたりし物をふるせ河ふかくも人のおもひける哉

人のもとにまかりたりけるに扇を忘れて侍りけるをかへし送るとて人をもかくやあたに忘るゝとかき侍りけるを見てよめる

さやはさはあたにも人を忘れけりあやしや君か心ならひにしりたる人のもとより梅花貝といふ物やあるとたつねたりければつかはすとてよめる

春風になとやおりけんみちのくのまかきか嶋の梅の花貝はなかつみといへる事がある人のよみたりけるをいかにいふとそと尋ければようもしらぬ事をしりかほにいふと聞えければ心のうちに思ける

嶋のゐる玉江におふる花かつみかつよみなからしらぬ也覺つくしよりのほりけるころ式部大輔正家か子の俊信かこけいの前駆しけるれうにとらのかはのしたくらや有と尋ねたりけるにそへてつかはしける

こまなめて狩する人は狩鞍の虎ふす野へそゆかしかりけるさやうによきはなかりければえつかはさてよめる

虎ふせるこのしたくらく成ぬれば狩ゆるともかたき成けり身のあやしさにあらましを思ひつゝけてよめる

つくくゝと獨りゑみをもしつる哉あらまし事を思ひ續けて探得船字

漕戻れかしもみとろしすはえしてすゝけにけらし興津嶋舟うちわたりて夜更であるきけるにかたちよしといはれける人のうちとけてしとしけるを聞てしはふきをしたりければちていりにけり又の日つかはしける形こそ人にすくれめ何となくしとする事もをかしかりけり人のもとにてあそひけるに酒なとのみて椎の有ける

をつみなとしあるひしりのあやしき事なとくちく
そしるを聞てよめる

きよみきのひしりを誰も傾けてしゐの罪えぬ人はあらしな
人のもとにまかりて夜もすから物かたりして歸りけ
るまたの月かれよりをくりて侍りける

匂ふらんよもの山への花よりも戀しき物は君かことの葉
かへし

たとふらんはな心には言の葉の秋にならばや色かはるへき
契りし事共をわすれにけるにやとさまに思なりにつ
るときこゆる人のかりつかはしける

契り置しをはずての山なればよもさらしなと猶頼むかな
ものつゐて有けるにさらしなをよめる

さら科はをは捨山の麓にていかて都に名をとゝむらん
琳賢かおほはらの瀧にまかりて飛瀧音清といへる事
を

雲井より聲高砂におちたきつなかれそいはの衣なりけり
修理大夫行宗か往生要集をかりてかきうつしけるを
ほとへにけりとしてしきりにこひかへされければかき
はてゝとおもひていひつかはしける

樊於期か荊軻にかうへかしけるもこそは遂に返さゝりけめ
かへし

燕丹か深意を盡せはる〔樊〕於期も首を蘇よけむ

或人の堂〔堂〕の障子の繪に天王寺の西門にて法師の
船のりてにしきまへこきはなれていくかたかける
をこれとおほしきなりと堂の主のいふを聞て

阿彌陀佛と唱ふる聲のかちにてや苦しき海をこきはなる覽

おほえの橋かける所をよめる

遙かなるおほえの橋はつくり劍人の心を見えわたりける
かはしりに受領のくたり船にあそひの船こきよせた
るかたかける所をよめる

うたひくる蘆まの聲はちりならぬ心もうこく物にそ有ける
なるをに松の木一本たてる

なるをなる友なき松のつれゝと獨もくれにたてりける哉

にしに宮に神民の船にほこさきしてぬされうとい
ふ物とりて風のいのりするかたかけるをよめる

柴を舟まほにかきなせゆふしてゝ西の宮人かさまつりしつ
もとめつか

たらちねも求めさりせば乙女子か跡にも影を並へましやは
すまの浦にもしほやくけふりたつ

すまの浦にたくもの煙たなひけは岸うつ浪の立ぬ目そなき
布引瀧

山姫のみねの梢に引かけてさらせる布や瀧のしら糸

ふねてらに僧ゐて經よむ所かけり

ふね寺にのりうかふなり終夜聲をほに上てよみすましつゝ

わたのみさきにはあけたるをふねおきよりはしるか
たあり

にしけには和田の岬もある物を影さかりぬる身をいかにせん

右兵衛督伊通の家にて浦嶋か子といへる事をよめる
浦嶋を浪もあけくれうつせかひあまの笛のみ空しと思ふに

田上に侍りし比かたひなたにゐて手のかさむしりて
よめる

怪しさは源とこそ思ひつればたへはこせの内にそ有ける

川に釣する翁の有を尋ぬればこさいのなければもと
めさふらふなりといふを聞て

よそ人のつくれる罪と思へ共わかれうすると聞そかなしき

式部大輔のむかひの山田のかきねにふみはつしといふ
事をして鳥をとり侍りけるを人もみぬ程にかゝりた
りけるにやけなとちりてそのちかゝらざりければまも
らざる人のおとろきてかゝらぬよしを申けるを聞てよめる

思ふ覽しり括りたる鳥ならはふみはつしてもかゝるめみしと

伊勢に侍りけるころ別當實行公卿勅使にて大神宮へ
まいられたりけるに齋宮のくたらせ給ひしおり行事
弁にて侍りけるか事はてゝ京へかへるとて宮に参り
て日來なれてまかりかへるこそ心ほそく候らへかや
うにまいらん事も有かたくもし命候らはゝ公卿にな
りて勅使にて下らん時そかやうにも参るべきと申て
のほりけるに十年ばかり有て勅使にてくたられたり
けるかむかしのあらましこと忘れすはかならずまい
らんすらんと仰られけるにまいらて過られければを
ひてつかはさむとてその比の哥めしければふたつを
よみてまいらせたりけるをこれをつかはしたりける
昔せしあらましのかはらぬを嬉しとみえはいはまし物を
御返し

いせの海のしほひの方へ急く身を恨みなはてそ末も遙けし
此歌はいかにそやある男女の中のうらみたるににた
りとしてつかはさゝりける

みちこはと待つる汐もすぎぬれば浮身わたりを恨てそふる
おいたる人のよきゝぬともをきてわかやくを見て

若々となりはへしてもみゆる哉くひせにもとはまも也けり
むかしおとこなと有しおりの事なと思ひ出けるけし
きをみてよめる

子共あらは空夢みてや語らましなすらひならぬ影を忘れて

伊勢に侍りける比たよりにつけて修理大夫のもとに

つかはしける

とへかしな玉櫛のはにみ隠れてもすの草くきめちならす共

返し

しらすやはいせの濱荻風吹は折ふしとにこひわたるとは

殿下にて上陽人の心をよませ給けるに、簾畫眉々細

長といへる事をよめる

さりともとかくまゆすみの徒らに心ほそくも老にける哉

もの思ひ侍りけるころ

老はてゝなけきする身はもかみ川流に棹をさすにそ有ける

屏風の繪にあれたる家のむねに草や木などおひしけ

りたる下に家あるしとおほしき人のおいたるかたか

ける所をよめる

我宿のかはらの松の本高さに身のふりにける程をこそ思へ

伊勢に侍りける比みやこのかたよりしりたる人のも

とより扇にそへてをくりて侍けり

音もせてこゆるはしるし鈴鹿山ふりすてゝける我身感とは

かへし

ふりすてゝこえさらましか鈴鹿山扇の風のふきこましかは

すゝか山は扇のこほりにあり。
大貳長實白川にて川邊興といへる事をよめる
をかみ河やきのはひえに鮎釣りて遊ぶもさめぬそのね思は

伊勢に侍りける比室山入道と申ものゝもとよりをくりて侍りける

いさゝめにみしま計りを慰みてえもうらなれぬ萎れあし哉かへし

いへはけに萎れ蘆とぞ聞えけるたれうらなみのなこり成覽同人のもとより松たけにそへてをくりて侍りける

長らへん君かかきはのほるけさにちよ松たけをそへさらめや返し

めつらしき心さしをは松竹の末のよまでや袖につゝまんのへまいりける道に草のふみつけられて有けるをみてよめる

みちのへにふみしたかるゝ翁草かる人もなき歎きをそする前齋宮の内侍の逆修しけるに講師中納言律師たうとくしければにはかにおほきなる鏡を布施にしけるに歌よみてかゝみのしたにいれはやといひければ俄によめる

君にけふますみの鏡みかゝれて移れる罪のかけやきゆらん金葉集の奥に御らんしあはれへとおほしくてかきつけてはへりける

なく空にみちぬる汐の濱ひさき久しくもよにむれぬる哉恨躬耻運雜哥百首 沙彌能食上

三日月の影にかゝふかけけるふのほのほかにてもよを過す哉おふの海にしよの蟹のかつくてふ風の鏡のたか方の世やあくた河みくつと成し昔より流れもやらぬ物をこそおもへなりも出ぬ此身と思ふになにのゐて月日に添て海をよむ覽いかにせん遂には山と積るなるその塵ひちの數ならぬ身を

をしねほすたのきにかよる丈夫の心元なき身をいかにせん我といへはあための山にしほりする挽木の枝の情なのよや世間はうきつの浦につらゝるてすかの群鳥あくかれぬへし年ふればけかしき溝におちふれてぬれ鹽とけぬいとをしのみや佗る山世にふる道をふみ違へ惑ひつたよふ身をいかにせんをひ風に世をうみ渡るまはしまや早我が身は思ひすてゝき蘆手なき蟹の大野に放たれてする方もなき身をいかにせんつはりせしふたこの山のはゝを原よにうみ過て消ぬへき哉厭はれてよにふる雨のなかりせは類なき身と成やしなまし疊み置るいは間をすくる涙河おひたゝしくもたきなる哉物思ひの心くらへのかた人になるともはせたくひなき身は荒つ磯にさき出るせの搖きなくつゝたてられて世にもふる哉明くれば身をつけたてゝ世中をきこのはしても過しつる哉世中のそむきかたさに身の程を思ひしらすと人にみえぬるさりともと思ひはれとも梓弓いるへき方もなき身也けりふしつけしおとの下にすむはえの心幼なき身をいかにせん清水山ならの眞芝にかゝれてぬふさつをのたゆみなよや怪しとや人はみる鹽佗をたてぬきにしてをる身と思へは何となくくち木の杣の山くたしたくす日暮はね（本々）流れける時きはるしゑやと云ひてけなましを我身は幸もしこりさまねち川に岩こす棹のとりもあへす落す筏のいちはやのよや世中の心とけても覺えねは結ほゝれてもすくしつる哉紅葉ちる首は時雨にたくへともまきさるゝ方もなき身也けりふし芝に宿れるはやの巳のときはかきはに物をこそ思へ世中を思ひはなてははなち鳥とひ立ぬへき心地こそすれ思ひ佗おつる涙はくれなるにそめ河とこそいふへかりけれ

くちみ山くちたてりとや思ふ覺しられぬ谷の松のふる枝を
 淺ましや哀うき世を忍ひつゝなにとまかよふ我身成らん
 道のへのこほりか下のつゝ草論されし身のたへかたのよや
 しみ承る諏訪のとのちの渡り打とけられぬ世にもふる哉
 身の程をそよなきそとは思へ共猶恨めしきよをいかにせん
 世の中のかたちにみゆる物ならは引とゝめてそ恨みかけまし
 はかへせぬ歎きの森は冬くれと常にもかもなとこしなへ也
 誰とかはわきてもいはむ我爲に恨めしからぬ人しなけれは
 さらぬたにかはかぬ袖を清見かたしはしなかけそ涙の關守
 立出れはひちつかれつゝはし鷹のすゝろはしろき我身成覺
 何事の忍ひかたきに初雁のうき世中にまたかへるらん
 世中のありしにもあらずなりゆけは涙さへ社色かはりけれ
 我といへはいはきの山の峯高み雲のかゝらぬ時をこそまで
 世中をおもひしりけりとと思ふよりきえぬ霜のあはれ成哉
 ときはなるうきとの葉はこからしの烈しきにさへちぬ也覺
 橋のはのかれはに風の吹つれはいつそよくともなき身成覺
 わひ人の涙は海のなみなれや袖しのうらによらぬ目をなき
 嬉しさは夢計たになけれともかへにむかひてよをすくす哉
 するしさを渡るあきさの音なれやさゝめかれてもよを過す哉
 うは玉のかみのすちきる程計心のうちを人にみせはや
 世中を思ひつゝけて詠むれば身はくつをるゝ物にそ有ける
 よの中を恨みてするたかせ舟聲うちそへてからるをす也
 とひちかふ鳴の羽數を數ふ共我物おもひにまさりしもせず
 忍ひては誰かは誰といひてまし我身をわれと思ひしらすは
 心には心をそふとおもひしに身は身をしほる物にそ有ける
 世中に沈むとならしくはした川なかれうせぬる我身ともかな

流れあしのうき事をのみみ島江に跡とゝむへき心ち社せね
 我心身にすまはれて故里をいくたひ出て立かへるらむ
 心には思ひすてゝし世なれとも身は歎かれぬ物にそ有ける
 世中はをそのたはふれたゆみなく包まれてのみ過す頃かな
 猶も猶ひいてもいはむけふもけふ思おもひの積るつもりを
 柴の庵にはひおほられる青つらむつかしけ成よにもふる哉
 すへしけみ煙にむせふ芹のやのふすへられてもあけ暮す哉
 わひ人は風の下なるちりなれやおちあられても覺えさり覺
 山賤のつくしにゐたる我なれや心せはさをなけくと思へは
 いため山さかゆく身かは玉鬘苦しくてのみ世を過しつる
 遁れてしはにまならねと世中を妬くもとのみいはれぬる哉
 我心千々八千種に思へともなりはつるみはたゝひたすらに
 みすりせく玉津を河のどこなめに思ふ思ひにおも變りせよ
 世中をいてや何かはと思へ共しなへうらふれなつみてそふる
 なけきつむ力車のわをよほみ立めくるへきぞちこそせね
 あはれてふ身のともくさは霜かれてこもろき物は涙なりけり
 身にかへてひく人あらは膝にふす玉の小琴もならまし物を
 さきのよも今もこゝろの身の程もけふのさまにて思ひしる哉
 こからしの吹たゝよはす浮雲はなまれぬ世にふる身也けり
 なりはつる姿をみれば悲しきにしほゝと社ねは啼かれけれ
 み狩する犬たにかけしせこなはや思ふ心はいつかたゆへき
 いをさきのこのみの濱のうつせかひもに埋れて幾世へぬ覺
 何事も思ひいたらぬ世中に身はあまりぬる物にそ有ける
 世中は思ひくまなき物なれや頼む身をしもいとふと思へは
 われか身は歎きこりけるうけ棹やはき集めつゝ人となし劍
 難波かた芦間の水けぬかうへに雪降かさぬおもしろのよや

我とく世にすみ侘て秋山のしたひかしたにさをしかなくも
此世をは假ともいはん青丹吉習はぬ身にはそれもそふなど
東路に有といふなるにけ水のにけのかれてもよをすくす哉
今よりは嬉しからせよをしかへてあふきさの我身と思はむ
雨にまた水そひぬなりよもすから物思ふ宿にぬえの聲しつ
よのふしといひたてね共竹の音に現はれぬよを恨むとは
かけのみや立そふ物と思ひしに歎きも身をははなれさり覺
醒のよにまたまへとや悲しさをこれを此よの思ひ出して
兼てより思へは悲しみちのくのたてふに骨のされんとす覽
かきつむる老その杜のとの葉をきえなん後の思ひ出にせよ
朝いてにきひの豊みきのみ返しはいはしとすれと強て悲しき
飛鳥川せきりに結ふ水の泡の消うせぬへき身をいかにせん
人なれし浦のかもめもあれぬるに知られぬ物は我身也けり
はたけふに黍はむしゝめしゝめきて暮しき迄よをを恨むる
よもの海ををちのけして汲乾さむ時にそ此身なりもいつへき
いかてかは此よの闇も照さまし光あかさのつえなかりせば
佐藻古曾齒無智文盲衛生計和布人非人庭可成畢哉

散木奇歌集第十

雜部下 長歌

百首哥中述懷をよめる

下載

もかみ川。せゝのいはかとわきかへり。思ふ心はおほかれ
とゆくかたもなくせかれつゝ。そこのみくつとなるときは。
もにすむ虫の我からと。思ひしらすはなれれとも。いはては
えこそなきなる。かたはれふねのうつもれて。ひく人もな
きなきすとなみの立るにあふけとも。むなしきそらはみ

とりにて。いふ事もなき悲しさに。ねをのみなけはから衣
をそふる袖もくちはてぬ。何事にかはあはれとも。思はん人
にあふみなる。うち出の濱のうちてつゝ。いふともたれか
さゝかにの。いかさまにてもかきつかん。をを軒にふく風
の。はけしき比としりなから。うはの空にもをしふへき。あ
つまのそまに宮木ひき。みかきかはらにせりつみし昔をよ
そにきゝしかと。さすかにみよのはしめより。雲の上には
かよへとも。なにはの事も久かたの。月のかつらしをられね
は。うけらかはな。咲なから。ひらけぬものいふせさに。よ
もの山へにあくかれて。このまかものもにたちましり。うつふ
しそめのあさ衣。はなのたもとにぬきかへて。後の世をたに
とおもへとも。たのむ人々ほたしにて。行へき方にまとはれ
ぬ。かゝるうきみのつれもなく。へにける年をかそふれば。
いつゝのとなをになりにけり。いまゆくすゑはいなつまの。光
のまにもきためなし。たとへはひとりなからへて。過にしは
かりすくすとも。夢にゆめみる心地して。ひまゆくこまにこ
とならし。さらにもいはす。霜枯のお花か末の露なれば。嵐
をたにもまたすして。もとのしづくに成はてん。ほとをはい
つとしりてかは。くれるもたにしつむへき。かくのみつ
ねにあらそひて。猶ふる里にすみの江の。しほにたゝふふう
つせかひ。うつし心もうせはてゝ。あるにもあらぬ世中に。
又なに事をみくまの。うらののはまゆふかさねつゝ。うき
に堪たるためしには。なるをの松のつれくといたつら事
をかきつめて。あはれしれらん行末の。人のためにはをのつ
から。しのはれぬへき身なれとも。はかなき事を雲鳥の。あ
やにかなはぬくせなれば。これもさこそはみなしくり。朽葉

か下にうつもれぬ。それにつけても津の國の、いくたのもりのいく度か。あまのたくなはくりかへし。心もそはぬ身をうらむらん。

返歌

世中はうき身にそへるかせなれや思ひすつれと離れさり覺

中納言國信の坊城の堂にて人々長哥よませけるに向
泉述懷といふ事をよめる

よそねしまいはの浪をよとひまよふ。し水をみればあすか
あと。なになかれたる末なれや。すめるけしきにたえせぬ
は。ありすかはとは思ひなし。まつのはるねをおるなみも。
こつたふはねとおほめかる。むすふ雪はこる露のころたか
へたる心地して。くたるみなはしらたへの、雪のしつれと
あやまたれ。忘つゝゆくとたえをは。なかれ氷のあくかれ
て。うきたちぬると思ふにも。わかときわけのあき衣。あさ
ましきまでさえゆけは。今又さらにむかひして。爪木こりた
くほとなれや。それをみるにもみつかさの。かきやるかたも
なきさ成。人なみくになちるつゝ。なけきゐるともしらま
ゆみ。しらてやたれもひかさらむ。あはれむかしはこたくみ
を。つかさとりしものきはうつ。ましろのたかのそりはて
て。をかれぬ事のかなしきに。をそふる袖もくちみやま。か
ひなき身とは知なから。なからへにける身のほとに。いくら
の物と思ひつゝ。人をもよをもうらめしと。いふきのもりの
下草の。しけれおもひにやくもたつ。いつもやへかきかさつ
めて。のちせのうらにかつさする。あまのあまたのみるめに
も。はつからぬまの花かつみ。かつみるさまはまこもにて。
なをかへけるもうら山し。やましきことはいはつゝし。いは

〔名譽〕

ねはこれあれ心には。思ひあまりて故郷に。しなへうらふれ
なつみおる。身をみつ海のおきなから。なをからさきのから
すてふ。おほをそとりの。聲きけは。おこなふ事をするかな
る。ゑみのかたをかおかしとも。きこゆる事はあらはれぬ。
さはひとかともおほしきに。あらすとよにはあらそひて。き
たなむほとになつたつの。たつきなきさにおちふれて。こに
こもりたる身にしあれば。よはになくねをよそ人は。こを思
ふとやおもふらん。そもぬれきぬにあらはこそ。ひるまをた
にもなくさめ。いてやよろつにあしひたく。あしのしのや
のしつはたに。をりしなへたるあやくすの。ぬきのつくそも
ひとつたに。みたれぬとは有物を。なそしもうきにはひち
れる。みくりのわかばかり返し。身をひとくつに思はれて
くつをれるたるあちきなさ。なさけ有身と思ひせは。花を友
とて日をくらし。月のまへにてあかせまし。さもいたつらに
うみたて。人となしけむたらちねそ。おもへはつらきつ
らゆきか。跡にねかへるかたきしに。ねをはなれたる草のは
も。たとへていふは久堅の。そらもとゝろきふく風に。すか
れる露の玉よりも。えならぬ身をもおもさはくなり。

返哥

身の憂にしみかへりたる歎きをは玉江の水もえやは清むる
刑部卿政長の入條にて人々あつまりて長哥の會せら
れけるに初冬述懷といへる事をよめる

山里は。冬こそとにかなしけれ。みねふさまよふこからし
の。とほそをたゝくをときけは。やすき夢たにむすはれす。
時雨と共に。かた岡のまきさカイのかつらちりにけり。今は我身
の歎とを。なにゝつけてかなくさめむ。雪たにふりて霜かれ

の草葉のうへにつもらなむ。それにつけてやあさゆふに。
我まつ人のわれをたつぬる。

返歌

いくかへりをきふしゝては冬のよの鳥の初音をきゝそめつ覽

旋頭哥

中納言通俊のかつらの山里にて人々旋頭歌に戀のこ
ころをよせてよまれけるによめる

新曲

つれなさをおもひあかしのうらみつゝあまのいさりにたく
ものけふりおもかけにたつ

百首の哥に無常の心をよめる

あすか川うきゝにつもるあは雪の涙たちくれはたのもしけ
なきよにも降かな

前下總守仲正くによりのほりて送りて侍りける

あつまちのやへのかすみをわけきても君にあはねはなをへ
たてたる心地こそすれ

かへし

千歳
かきたえしまのゝつき橋ふみみれはへたてつるかすみもは
れてむかへるかこと

混本哥

こひの心をよせてよめる

いかでもと思ふ心はありす川うちなかれてもふるかな

草花によせてよめる

をみなへし心にかけておもへともおりふしもなし

折句哥

中宮亮仲實かもとにうしかりにつかはしけるついで
にはきの枝につけてつかはしける

恨む共しらてや鹿のしきりには萩のはひえを水柵にくる
かへしうしにくして

沓冠折句哥

はるつれゝに侍りければ春宮大夫公實中納言國信

刑部卿顯仲などのおほむもとへ奉りける哥

果敢しなをゝ小山田作りかね手をたにも君はてはふれすや

春宮大夫のかへしをばせて使につきてをはして。

いさはは花尋にとてさそはれしこそ。むかしひろ

はたのみやすところのたきものたてまつられたり

けん心ちして。おかしかりしかとそ。

なそゝ物かたりよくとくと聞えける人のもとへつ

くりてつかはしたりける哥

小倉山峯より出て行月もあふ坂まではくまなかりけり

隱題

柳

すまの浦やなききにたてる磯馴松はひえを波のうたぬ目そなき

拾遺抄

しとねにはしういせうとそ思ひつるしたり顔にも積る花哉

桐火桶

あるかきり日をけになかく思ふ覽とふ人もなき春のすみかは

すみれ

散花をあかすみれはやたひ人のしらぬ山路に目をくらす

卯花

篝火にうのはなしとはみゆれともみなるゝ事は劣らざり覺

櫻

思ひかねあふ契をそうらみつる名殘成らんとをおもへは

菅 菖 蒲

君かきふちかはらならは春日山岩根の松にかゝらさめや

しもつけ

恨みても何にかはせん花みると今朝しもつけぬ心せはさは

なてしこの花

朝ねかみかさなてしこのはなれな思ひ亂れて戀やわた覽

きやう

あやまたぬ花の都をのれからうき京なりと思ひけるかな

はきはな

常盤木のはなれて獨みえつるはならひなしとや身をは知覽

薄

まねけともたちもとまらず過ぬれはしほれやす覽花の袂は

はたをりめ

薄をはたをりめしてよほに出てたてらぬ人を招きもそする

かるかや

我駒をしはしとかるか山城のこはれの里に有とこたへよ

をみなへし

ちる花をみなへしもちて行秋の戀しき時のかたみとやせん

もちつきのこま

形をはみてや忍はて怪しくもちつきのこまの戀しきやなそ

きくのはな

春くれはたなひく煙たえせすと菊の花にのくさかもゆらん

からかみのかたき

よと共に心をかけて頼めとも我からかみのかたきしるしか

けふそく

思へともけふそくやしき人心見ぬよりさきに何たのみけん

田上に侍りけるころこもりかいねといふ物をもちる

にしてとり出て侍りけるをまたのひみそうつにして

侍るを見てよめる

法師このいねとみしまにもちぬれはみそうつ迄も成にける哉

しほゆあみにつくくに戚所へまかりたりけるにしり

たる人のものをこせたる中にはまくりにしせといふ

もの又いかかきめみるとむくさの物を送りて侍ける

をとりをきたるをみて戀の心をそへてよめる

我袖はまくり手にして隠せ共いかてかきめにぬるとみる覽

すみはこのふた

こぬすみはこの二人こそこのむらめなそや我身を疑はる覽

からすのす

いつみからすのすきひたり尼君にあまのりあふれさし申さん

みたらし川

いかにして心みたらし寢なくいての山吹散まかふとも

つるふちのこま

咲出るふちの小松にかゝらすはいかて千とせの程を過まし

くるみのから

老のくる身のからくのみ覺ゆるはおもてに涙をたゝむ也覺

こまつふり

春の野にこ松ふりつむ淡雪をけたすておりて家つとにせん

まゝきのやたて

みくら山楨のやたてゝすむ民は年をつむともくちしと思ふ

からかうし

夜と共にてつからかうしあけおるす曜に我身の成にける哉

はりはこのふた

針箱のふたつの袖にさしつれと一つもみえすおちにける哉

あしたかきりかけ

覺束なあしたかきりかけふも又くれ行空にみそまかへつる

たくみとりのす

姫小松ねたくみとりのすかたをはたちへたてける春の霞か

とくさむくのは

程もなくとくさむく野は成にけりむしの聲々よりはり行まで

このしまのみやしる

明石にはこのしまのみや自妙の雪にまかへる涙は立らん

連歌

殿下中將にておはしましけるころ人々に連歌せさせ
てあそはせ給ひけるにせさせ給たりける

かりきぬはいくのかたちしおほつかな

これの人々つけおほせたるやうにもなしとて後に人
のかたりければ心みにとてつけゝる

しかさそいるといふ人もなし

堀川院御時うりふねかきいたりけるをみて肥後君

うりふねはうみすきてこそまいりたれ

まいりたりときこしめして御前にめされてつけよと

仰を有ければつかまつりけり

なみにふられてみなそこに見ゆ

殿下にて人々に連歌をせさせてあそはせ給ひけるに
あけかたに成て鐘の聲ほのかに聞えければ

安藝守重基

こゝのつものちのこゑ遠くきこゆなり

つく

わかむつのねのつみやきゆらん

能登守公俊か家に中納言基綱したしきあひたにてわ

たらせ給へと申たりければくせよと有しかはまかり

たりけるにいてゐにてこゑつくらせけるに長大夫と

いふ物のつくりけるをみて

長濟律師

このみちにほうちやう大夫長したり

おいたる翁のむかひてれうりするをみればたれと

か申ととへはみよしのすけとなん申といふを聞て

みればみよしのすけるれうりも

堀河院弘徽殿にわたりてあそはせ給ひけるにくろお

とこといふ笛ふきのこゑしけるを聞しめて

御製

くろおとくろとのほとにをとすなり

中納言御前にさふらひてとくつかまつれとせめられ

ければくちにまかせてつかまつりける

ひこのしろぬしゆきさたかるい

中納言重資藏人頭にて侍りける時殿上の人々あまた

くしておほ井にまかりてふねにのりてきよたきとい

ふ所までのほりてあそひけるにいはともけはしくて

なみたかしとてかへりけるに

隆源阿闍梨

きよたきはんせきせんのところかな

つく

なみたかせふねわきかへらすな

北山の邊にまかりけるにみちしるへに入くへしと聞
えけれと見えさりけるにきつねさるといふ所に馬に

のりてはしらせていきたるをみて

中宮亮仲實

わつかにきつねさかにきたれり

つく

こうくといひけるしるへはしらせて

全助敦隆かのりたるもの外にやせよはくしてををか
りければをくれたりけるをまちつけていかにとへ
は

敦隆

ほねあかりすちさへたかきこまなれや

つく

ひにゆくことはしかへしそきみ

中宮亮仲實備中の任にくたりける時に備前國にあふ
すきのくるといふものゝたちなみたるさきにうとい
ふ鳥とさきといふとりとゐたりけるをくしたりける
六波羅別當といふ僧の申たりける

とりとみつるはうさきなりけり

これをかみ仲實えつけて京にまうてきてかたりけれ
はつけゝる

このみかとかきはまくりもきこゆれと

昔七大寺をかみに故帥大納言殿ならにおはしました
りけるに東大寺の長濟律師か房にとゝまらせ給ひた
りけるに房主かこのむ事にて今宵和歌會さふらひな
んと申ければよませ給ひて講するおりにきりとうた
い尋られてなかりければさはきけるを聞て

備中守政長朝臣

とうたいのとうたいしとも見ゆるかな

俊頼つけよと人々有ければ
やましなてらはさてはやましな

くらまにまいりたりけるに師の房にてあしのきたな
きをすゝかむとてたらひをもてきたりけるをみて房
主の僧にいひかけゝる

たらひしてあしをはいかゝすゝくへき

僧のつけたりければかへりて申ける
みつかめにゆはわかぬものかは

さかのゝ邊にまかりてあそひけるにはきをみなへし
の有けるを

はきはゝしふちはかまきよをみなへし

平大進基綱

まねくすゝきにみもそあかるゝ

すゝめのさきはしの男はしらにゐてなくをみて

肥後君

すゝめこそおとこはしらになきあたる

つく

さきはしたなくいひやしつらむ

中宮亮仲實か家に人々あまたまかりてあそひけるに
たるきにとりをさしたりけるを見て

たるきにはやまのうつはりさしてけり

慈雲房

のきはに海の月をやとして

うといふ鳥の有けるをみて僧のしたりける

あらうとみればくろきとりかな

人もつけさりければのちに聞て

さもこそはすみのえならめよとゝもに

人々あまたやはたのみかくらに参りたりけるにこと
はてゝ又の日別當法印元(元イ)清か堂の池のつり殿に
人々ゐなみてあそひけるに元清連歌つくることなむ
えたることとおほゆるたゝ今連歌つけはやなと申る
たりけるにかたのことくとて申たりける 俊 重
つり殿のしたにはいをやすまさらむ

元清しきりにあんしけれともえつけてやみにしこと
なとかへりてかたりしかはこゝろみにとて
うつはりのかけそこにみえつゝ

堀河院御時年中行事の御障子のもとにおはしまして
あそはせ給けるにさとよりまいりたる人の殿上にあ
て物申を聞て中納言國信のしもにおはしますにあし
うのほりたるかなとみそ申けるをきこしめして御く
ちすさみのやうにおほせられる 御 製
雲の上にくものうへ人のほりぬ

俊頼つかまつれと中納言申ければ
しもさふらへにさふらへかしな

修理大夫顯季あるかれけるにおほちに車の輪のかた
わもなくてかたふきてたてるをみて

忠清入道

かたわにてかたわもなしとみゆるかな

後に彼大夫のえつけさりしとかたられければつけゝ
る

こしへくるまもいかゝしつらむ

月のあかゝりけるに宇治のあしろにて

治部大輔雅光

月はひる目をはよるとも見ゆるかな

かゝる連歌有けるをつくる人もなくてやみにけりと
人申ければ

いつかあしろにはなかるへき

ある女房のくらまへまいらむとてかたへの女房にし
たうつをかりければ一日うつまさにまいりしにはき
たりしかはみなやふれにけりといふを聞て
けふみればしたうつまさにやれにけり
と申たりしかとつくる人もなかりしかはかの女房に

かはりて

くらまされにそいまははくへき

堀河院御時ゆは殿にてあそはせ給しに

源中納言

はるくれはゆみはとのにてまとゐせり

とうつけよとせめおほせられければ

番にあたりてまいる人々

人のさいくにものをせさせけるかわろくしたりと腹
たちていひける

貧窮にさいくをしたるすいくかな

いと連歌ともなかりけるをきゝなして

死苦もきたりてさめむものをや

法橋なりける人のこの比人にいはるゝ事有けるをた
はふれて

隆源阿闍梨

法橋しきりに案しけれとほとへければ

むへきたなけに見ゆるなりけり

時 房

よしの山の君といふ僧の房のたきのかみ障子にかき
つけたりける

たきのいと見にくる人もなし

これを聞てするにかきつけ侍りける

谷川の心ほそにかきたえて

平大進基綱

身になけくも侍りけるころ

つ く

須臾もころのなくさむばかり

山上に侍りけるころ日の暮かたにいし山のかたに鐘

の聲の聞えければくちすきひに

いし山のかねのこゑこそきこゆなれ

俊 重

たかうちなしにたかくなるらむ

かきねにいたちはしかみといふもの、おほるをみて

降源阿闍梨

かきねにはいたちはしかみはえてがり

つ く

ねすもちのきよころしてさけ

藤中守政長八條の家にて人々あまたあそひけるに泉

すこしひてつくにもあまらざりけるにやくする侍の

はきにひるのくひつきたりけるを 玄蕃大夫隆成

いつみのひるはみえもするかな

つ く

のそけともみつのそなるけしきにて

いちにいちめかさ多かるをみて

いちみれはいちめかさこそつきもせね

きなるうりをつきならへたるをみてつく

うりかふためのみつとへは

おさなきちこのちまきむまを持たるをみて

承源法師

ちまきむまはくひからきはそにたりける

つくる人もなしときこえしかは

きうりのうしはひきちからなし

前の中宮に連哥といふ女房にしのひて右中弁伊家も

の申と聞えけるかほとなくをとめせすときゝてふち

なみといふ人のしける

こゝとしや連哥をしてはをとめせぬ

右中弁のゆつりてつけよと申しかは

一はしもやとにすゑつけよかし

すみとりのすみなきをみて

すみとりのすみもとられてゐたるかな

つ く

ひもおこされぬひをけのつらに

ようもしらぬ事をとへはえしらぬよし申を聞て

肥後君

難儀をはかりにも人のいはぬかな

つ く

せりつみにしてよをしすくせば

人のもしたりけるにくた物の中になしの有けるにこ

との外にかたかりければしける

仲實朝臣

けふの事かたなしにてそおしはかる

つく

みなみのところにかゝらんとは

太政大臣殿のこのゑの家に新院の東宮と申ける時おはしましけるころ大夫公實の宿所にてあそはれけるに人々ゑひさまたれてまはるゝをみて

参議爲房

さかもりのことくらくともみゆるかな

彼の大友のつけよとありければ

たうとくりきてまひよろほへは

堀河院御時主殿司あたらしくいてきたるをみて

少納言懷季

ねすみをいにもおひにけるかな

つく

かはほりのすゝたるかほとみゆるまで

長如來といふこうちのこうつをみて

隆源阿闍梨

長如來こをりやくともしけるかな

つく

天王寺なる凡夫にはま

たかさいふ物きたる男のはたけにかよふを見て

津守國基

たかさきてはたけにかよふおきかな

つく

うしにむまくはかけたるもあやし

刑部卿道時のしほあみに津の國なる所へおはしけ

るにくしてまかりてしほはてゝ京へかへるかはしりにふねをこきいれたるにふねのおほくつきてひしめくをみてわきとならねとも

かはしりにふねのへともの見ゆるかな

刑部卿としゝけにつけよと有しかはつけたりける

しほのひるとてさはくなるらん

大風にたてしとみなとをふきたをしたるをみて

承源法師

大風にたてしとみこそふしにけれ

つく

庭はらむもんひしかたにして

ふしみにくゝつしさむかうてきたりけるにさきく

さにあはせて哥うたはせんとてよひにつかはしたり

けるにもとやとりたりける家にはなしとてまうてこ

さりければ

家綱

うからめはうかれてやともさためぬか

つく

くゝつまはしはまはりきてをり

人々あまたくして觀音寺のかたへまかりけるにひき

かへのうしのことの外にちいさくやせてえひかさり

しかはいほうしりとつけてわらふほとにかたはしさまにたふれぬへくよろほへはうしろさまにあゆはせ

てたふすなと人々あるを聞て

くひほそくいほしゝりしてたちなをれ

つく

いなこまろひてみそにおつるな

ひくちのみやの御堂供養に殿上人院よりまいらせ給
たりけるにことはてゝゆりはなにあひたりけるにつ
いてある事有て

ゆりはな

みやき野のりんたうくやうことをへぬ
つく

き郷のとのふせとりにして

皇后宮亮顯國人のかりおはしたりけるにあはさりけ
れは

やり水のこゝろもゆかてかへるかな

後にこれをえつけさりしことのはちかましかりしと
人にかたりけるをききてかういへなとてつけゝる
たてならへたるいはまほしきに

ならにしりたる僧の論議しけるかいとしもせずと聞

えければ

承源法師

論議をはみそひしをにそしたりける

のちにきゝてつけゝる

たうさうなりと人はいへとも

ある所にあそひけるにたかうなまいらせよといふを

きゝて

橘成元

たかうなとたかうはいはてもてまいれ

つくる人もなかりければ

きしにおひたるたてきしたてゝ

十月はかりに月のあかうりけるよ四條宮にまいりて
女房達に物語してあそひけるに俄にくもりて時雨の

しければ申たりける

おほそらはなみたほうしになりにけり

つく

甲斐公

しくれもうやかほにかゝれる

堀河院御時出納か腹立てへやのしうといふものをみ
くらのしたにこむなるを聞て

源中納言國信

へやのしうみくらのしたにこもるなり

つけよとせめありければ

おさめとのにはところなしとて

仲實朝臣のもとにて役する侍のものをこほしたりけ
れは

仲實

しろたへにしろてもみゆるおとこかな

つく

腹くろしとは名をえたれとも

堀河院御時内侍所へ供御まいらせさせ給ひけるに内
侍の日来はへりけるかさはる事有て俄に出へしとき

こしめしをきたりけるをえしらて藏人は候と申たり
けるによく尋よと仰事有ければおとろきて尋けるに

出にけるときこしめして仰事ありける

内侍こそ支度の内を出にけれ

つけよとせめ仰られければつかまつれる

外記はおもひの外にまいれと

つくしに侍りける比すゝくらにほしゐの有けるをみ

て

有僧

すゝくらにふるきほしゐるそつきもせぬ

人のかたりけるをきゝて

たか領々にならむとすらむ

山女をみて

仲實

けふみれは山の女そあそひける

つく

のゝおきなをやらむとおもふに

西山に五節の命婦といふことひきのもとに人々あまたくしておはしましゝにみちにてときはを過ぎ給とて
帥大納言殿

ときはゝすぎぬいつらかきはく

刑部卿政長のつけすとしてゆつられしかは

みちすからまもりさいはいたまふれは

伏見の山さにてあそひともをあるしのをこしたりけるをあそへなとかうてはなといひけるをついてに

六郎大夫孝清

あそひをたにもせぬあそひかな

人々つけよとありければ

さもこそは哥もうたはぬ君ならめ

ひとゝあまたくしてしもわたりへまかりけるにたかはたけといふ所にてくしたりける人のしたりける

人もつけさりければ

くほたもかくやくほならさらむ

これはおほくきこえしかとも。わすれたるをはえしるし申さす。

右散木奇歌集以織部正乗尹本校合了

群書類從卷第二百五十五

和歌部百十家集廿八

藤原爲忠朝臣集

親月中の二日はかりに友とちひとりふたりかたらひ
てくらまの山にもうて侍りけるにふもとの賤か家の
いとあはれなる垣ほに梅の花いとにほひやかに咲わ
たしけるをみてよみ侍りける

山かつのかきほも春の色みせて匂ひみちぬる梅の初はな
かへさに谷川のみきはに梅の咲たるをみて少將かく
よめりける

みわたせは梅かゝうかふたに川の流れもおしき花のうは波
或處にて人々あつまりて歌よみ侍けるに梅かゝとい
ふことを

そことなき野へにそ向ふ梅かゝはまたみぬ方の盛とをしれ
大貳の家にて人々十五首の歌よみ侍けるに霞を
煙かと今朝とえわたる春霞やまのこのめもゝえやしぬらん

あるしの男かはらけさしおきてかくいへりける
みよしのゝ嶺のしら雪きゆるかとたちし霞に驚かれぬる
花をまぢわふる心人々よみ侍けるに

またしを思ふこゝろに詠やるねてもさめても花の面かけ

庭の櫻のさかりなるをみてよめりける

我そのゝ咲し櫻をみわたせはさながら春のにしきはへけり
花のころ人々法性寺へまかりてひねもす哥よみあそ
ひくらしけるにやうやく花も散しきければ法師のい
て、昨日の嵐はけしくてなといふほとに

春風にちりしく花のこの本は峯のあらしに恨みふくめり

柳

朝あけの露のみむすふ玉柳かせにくたけてものやおもはむ
西山へまかりけるにやなきの谷河にふしかゝりて水
にひたれるをみて

河柳のせきにこしを打かけて流るゝ水に髪あらふとか

やよひのすゑつかたひえの山へのほりけるに行道の
さしの跡かたにつゝしのあまた咲けるをみてかねか
たのきやういと興し給へは

よち登るさかしき山のとるてには覺えず手折つゝし也けり
ある所にてすみれを人々よみ侍りければよめる
春雨のいくしほそめてつほすみれうす紫の色やみすらむ

祐里僧都すみれをよめりける

春くれはかたのゝ原のすみれ草摘しかた手につはなぬく也

西山の山莊へまかりけるに人々ひとひふつかここに
あそびをりて哥なとよみ侍りけるにあしたのうくひ
すといふ事をよみはへりける

朝来氣かすみをこめて鶯のなく音に寢屋の窓はあけゝり

ある人の屏風の繪にうくひすの梅の花をちらすかた
をかきけるをみてよみ侍りける

あさ露にこぬれはたゞく鶯のちらまくおしき梅の花かも

また屏風の繪に雁のあまた雲をはるかにとひゆくか
たをかき侍るをみて

春くれは雲まを分て歸る雁こちをたてゝひきそつらなる

はるのゝをとをりはむへりければ草の中にきゝすの
鳴けるをきゝてよみ侍りける

雨出る草のゝ原にこもるてふこれややけのゝきゝす成らん

歸雁

時きぬとふる里さしてかへる鴈こそ北みちへまたむかふ也

歸雁を

ふるさとへ霞の衣きかさねて寒きこしちへかへるかりかね

又

春たちて都の空を思ひやりつはさうちたれかへる雁かね

おなし

薄かすみ棚引山のたえまよりかへりし雁は雲のいとすち

雄子

さゝす鳴春の大のを見渡せはさはらひあざりほろゝうつ也

三月三日あるやむことなき女房の桃のはなを一えた

□きとなんいひおこせければかくよみてつけ侍ける

三千とせの齡をのふといふ桃の花をは君におしけくもなし

雨にしとゝあひたる櫻のはなを按察公よりおくられ
はへるとてよめる

けふしもを雨ふりそめて櫻花くれなるふかく色やみすらん

かへし

ふりそむる雨の手かすにあふ花の色の深さをみまし社すれ

ひとゝよりて哥よめるに花のちるといふこゝろを

櫻咲こするの花を風ふけはうすくれなるにさゝ波をたつ

春駒

萌いつる尾花あしけの春駒はつめもおしますあれわたる也

戀

かをいろの契は深きつはめたに二人とことを語らひはせす

醍醐にすめる僧のわらひを籠につみておくるとてか

くよみ添ておこせたりける

年つみて老をしらする早蕨のすゑをかゝみよ人もわかみも

かへし

春毎に老をしらする早蕨のかゝみるすゑのよこそつらけれ

ある處へいきけるにあるしつれゝなる事をいひ出

てやかてすゝりをよせたとう紙をいたして春雨とい

ふ心をよめといひければ

はる雨のとしふる軒に落きてはおもひの玉のかすそをひ行

とかくいひかたらふほとに三位侍従たつねいりはむ

へりぬしはしよのわきなどいひてのちかくいへりけ

る

さゝかにの軒端にすかく糸すちに春雨つなく露のしら玉。

彌生のはしめつかた人にいさなはれてひむかし山の
ほとりへ花みにまかりてものとも哥よみけるに人に

かはりて

なに事もおもひわする、春くれば齡を花にはこくまれぬ、
おもふとち三人かたらひて横川へ花みにまかりけ
るにあるしの僧いて、さいつこる雨風はけしくてな
こりなく散侍るとて青葉ましりにところ、残りけ
るをみてみな人ほいなくおもへり興もなからん所に
時をふへきにもあらずとてうち出侍りけるにみち
にいての山吹のいとにほひやかに咲けるをみてとり
あへすよみ侍ける

花もはや散てしあとのなこりにはこやみて過む井ての山吹
こゝろさすことありてにし山の法輪寺にまうて侍け
るに例の食口をとまひて三月末に山につきぬ院主
の坊にいらて侍りければとかく物して時をうつし
侍る程に遠山寺の入會のかねもつけれたる程に僧等
小法師など佛の御前にまうていて陀羅尼なといとた
うとくよみはへるともに念誦して小夜かたふくまで
ありて坊にかへりぬ夜あけぬれば院主うしろの山の
尾上にしなひ三尺にをよひぬる藤のいとにほひ（ひ）魅
やかなるか枯木に咲みたれてみるに興ありいとたへ
かたくて

いつよりかすみそめぬらん紫のいまおりさかるやま藤の花
かくして山をおりて大井川をみわし侍ればおりふ
ししつおのいかたをくたしけるをしはしみやりて
大井川くたす筏の水さきは波もくたけて下と散ける

中將きゝたまひて

さしくたす筏のかけに驚きておちくる鮎のひれふるもみゆ

夏

衣かへのこゝろを

けふよりは蟬の一重に成ぬてふ春をはかへす賤かふるきぬ

卯花

雪とみる賤かゝきねのうの花はさなから冬の心ちこそすれ

ひとりのみよをはあかしの磯のやにあはれとゝひし郭公哉

郭公きゝつるといふことを人々よめるつゐてに

伊吹山おるせる風に聲こもりきたかならねと聞ほとゝきす

五月五日あやめふくをみて

今日は、や園の軒はに菖蒲葎てまはらにうつる朝日かけ哉

しけたかの家へ人々よりて哥よみけるにあやめを

いつよりか菖蒲の草をいはひそめねも長きよにひき傳ふ寛

早苗とるといふ事を

遠近の里のをとめ子さなへとる手もとにくれて日影なき迄

おなしこゝろを

里人は山田のくろにしめはへてとりし早苗をまつ手向けり

植殘す早苗を

早苗とりうへもわたさぬ田面こそかた淵にゝて小波そよる

盧橘風かほるといふことを人々よめるつゐてに

匂ひくる風にそ忍ふ橘のかをやむかしと袖にとめまし

雨中盧橘かほるといふ事をよみ侍ける

しめやかに花橘はかほれともなかゝしきは雨はれもせず

ほとゝきすはしめて聞といふことをよみ侍ける

此ころと待おりふしにほとゝきすう月五月はをのか時とて

辨のかたにありける女はうさみたれにほとゝきすを

きゝてといふ事をよみはへりける

五月雨に聲もきたかに鳴わたり羽さきしほれぬ時鳥哉
ある人のもとにてほとゝきすをよみ侍けるに三井寺
にすめる僧のよみ侍る曉郭公

よゝ雲のわかるゝ空に子規こゑをつれ行山のはしゝ

ある人の子規によするこひをよめりける

さつき山こすゑもたかき戀をしてなく音そらなる時鳥かな
はしめてほとゝきすを聞といふことをよみ侍ける

あし曳の遠山のはに時鳥なくねならに今朝そきゝつる

女はう侍従ほとゝきす待わふるといふことをあふき
にかきはへりける

まちつくす夜はの契をほとゝきす我のみ鳴て聞よしもなき

人々うつまさへまうて侍けるに別當の坊月のよに時
鳥の鳴といふことをよめりける

時鳥月につれてやいてぬらんおもはぬ宿の軒はにそなく

ある所へまうてゝ雲外郭公といふ事をよみ侍ける

時鳥雲の外にてなきぬ共たれきゝとめてあはれとはいはん
雨中のほとゝきすをよめと人のいひければ

村雨にはぬ打しほれほとゝきすけふは鳴音もしめりてそ聞

御牧といふ所にしれる人侍ければたつねまうてける

にあるしのよみ置る哥ともとりいてゝみせ侍て後岡
のほとゝきす盛樂といふ事をよめと云ければ人にか

はりてよみはへりける

うき身にはとふ人もなき時鳥うれしと聞し岡のへのいほ

あるしのゝほとゝきすといふことをよめりける

こしかたはいつちなるらむ時鳥山かはとをのむさしのに鳴

關のほとゝきす

逢坂の關のこなたにほとゝきす山田の杉によひとなけかし

あるとき河内守まうてきぬ人々哥よめといひはんへ
りければ浦郭公といへる事をよめりけり

時鳥をちくる汐に聲やみてからきめをすきいそやにそなく

宰相のもとに上達部二三人よりて甘首の哥よみはむ

へりける中に朝郭公を

くやましな朝寝なからに時鳥しのひに聞て枕うらむる

あるひとのきんさたのもとにてあしたの時鳥をよめ
りける

時鳥ちつくしてそ朝いねるきけといきめてのきになく也

人のもとへ五首の哥よみてやりける中に夕時鳥を

物おもふ暮につれなき時雨あはれととふか今の一こゑ

ひむかし山にすむ人のきやうへたよりあるついでに

せうそこをくるとてなかな雨につれゝなる事ともか

きてはしかきに月のかけたになきなといひて

晴まなき空そものうき此ころは月のかけてまかくる五月雨

かたゝよりなれば此返しもせずなりぬ後四五日をへ

てたよりあればかへしをかきてやりける

山すみはさこそあるらめかた岸のくつる計りに思ふ五月雨

過こしかたをかけておもふことのほへれば又

つれゝにむかししのふにをく露の泪にまさる五月雨の空

五月雨を

さみたれに淀の渡りは水まして汀のまこもそこにふしけり

おなしこゝろを

さみたれに大江の汀波たちて高根のきしに舟をつなける

としかたの朝臣の家にて人々廿首のうたよみ侍りけるに五月雨を

さみたれにみかさそ落る太山川なみにつれてそ蛙なくなる
山川五月雨を

さみたれに山田のくろを押流し岸もたいらに眞砂あらへる
山五月雨を

きはもなき不二の高根の五月雨は雲と共にそひたずとそみる
舟中五月雨

さみたれに筈ひきかこふ海士をふね竿さし分る蘆の葉末を
加茂の山庄にまうて侍りければやむことなき人々うちよりて歌よみひねもすあそひ暮しける三十首はかりの中にくはへよといひはへれば橋によする五月雨を

水まさりわたりも絶しなからなる橋のゆきけたみえぬ計に
江五月雨

まのゝ浦入えの方のわかすゝき波にもまるゝさみたれの比
或屏風のゑにおほきなる瀧のかたをかきけるをみて
よみはんへりける

さみたれに堤の瀧の水まさり岩うつをととはたんゝとなる
山五月雨

さみたれは朽木を流すみ山河まつおりあひてかたよせに覺
川五月雨

降つゝく河水まして小田のはらひとつに成ぬさみたれの頃
藤中納言こゝち例ならずとて過にしころより宇治へ
おはして氣をはこくみ給ふとなんわかき上達部殿上人
なと思ひゝにとふらひまかるほとに少將とつれ

て宇治へまうてけり中納言きそくおしなをしぬとて
いとゝこゝちよけにみえてひねもすあそひくらしけるに宇治河の流れ朝日山こしまかさきの夏のけしき
なとみるにいと興ありまきのしまさきあをみわたれる
にところゝに駒おしはなしてわか草などをすさ
めるをみて

春過て夏にあさるはなれ駒こゝろのまゝに草すさむ也
おなし心を少將

ぬしもなき夏のゝ原のはなれ駒こゝろの儘にかけつ戻りつ
杜の夏草を

おひしける森の夏草かる人のわけいるこしのかまみえぬ迄
水にうつれる螢火をよみ侍りける

さは水にうつれるほしと螢火といつれわけぬ玉とみえぬ
夏の野の草かるをのこをみてよみ侍りける

しけりける夏の夏のゝ草薺は水入にひとし見えつかくれつ
少將の家の國になてしこの花さかり□ければやかて
すゝりをこふて

咲いつる若葉も同じ朝夕にみれとめかれぬやまとなてしこ
三位入道の家にて人々よりてなてしこをよみはへり
けるついでに

撫子はわか身のすゑとおもへればをく朝露をまつはらひ覺
夏月をよめりける

夏なれと影こそすゝしよひ月のゆふたち過るあとの庭かな
法性寺のはす池の汀にならひゐてすゝみ侍りけるに

ゆふ月いけのおもてにうつろひ給へるに水草しけく
月をかくしかちにみえ侍りければ人々訝ける月に雲

のたちをほふこゝちにやなとたはふれてまことに興ありければ

池の波こゝろのあらはうき草をはらひてみせよ水底の月

雨後夏月といふ事を真意僧都よめりける

夕立の過ゆくあとの雲まよりかりあきらかに月をすみぬる

ゆふたちを

黒雲に風おちきては夕立の雨やとりする木々のむら鳥

水邊納涼

夏の日のあつさをしのく不二河の汀のかたは冬こゝちする

西空法師といへる僧よはひ七十にかたむきけるかい

とたうとき僧にてをりゝゝ人のかたへおはして哥な

とよみ侍りけるかかねさたの朝臣のかたへ法會のさ

たにつきてまうてきたれるに上達部哥よめとしゐて

ければ杜邊納涼といふ事をよめりける

年つみて暑さ苦しもいてやさはともにおいその杜に涼まん

又あるひと河邊の納涼を

山川の水かさもふかき汀にてすゝみくらせる夏の夕くれ

おほ井のすけといふ女房いみの事ありてこのころさ

とにおりる侍りけるかある人の杜蟬といふ事をよませ

ければよみ侍りける

夏の森のこすゑ吹なるゆふ風に蟬のはかへるころもての杜

藤はらの刑部少輔の家にて哥よむ人々あつまりて廿

首よみ侍りける中に樹陰蟬と云事を

椎の葉のうこくはかりに鳴蟬のこゑさへきけは涼しかり鳥

夏の蟬といふことを女はうしんすけよみ侍りける

夕立の雲風さはおろからにこすゑの蟬もこゑしきる也

御 萩

みそき河瀬さきにいてゝ大麻にはらへることを神も聞らん

夕 貌

賤か屋のまかきに咲るゆふかはの花は秋をく露にまかへり

水 鶏

蟹のとをすからに叩くおきみれば水鶏たち行しのゝめの空

おなし

明かたのときつけ鳥と諸共におきよとたゝく水鶏也けり

二條殿へくきやうかむたちめあつまりて哥よみてま

いらせけるに

涼しくも衣手かろし御萩川あつけはらひてかへるさのもり

秋

早秋のこゝろを

春夏も思はすくれて今朝ははやけしきも秋の色そみゆめる

初秋はしの三日はかりにある人來てくれにおよひて

あそひたりけるによめる秋風といふ心を

人すまぬあれやの軒にはふむくらかたまくりする秋の夕風

萩の葉かせになひくこゝろをよめりける按察公

萩の葉は吹秋風をつまやらんとひとしくねころひに覺

あるところへまかりければ老若うちよりて哥よみけ

り萩を題にてよめといひければとりあへす

秋風にすそのの萩はおしあひて聲のこゑをしたてゝ露をはらへり

苧 萱

秋風はいかにおもへは苧萱のもちける露をふきはらふらん

西山へ人にさそはれてまかりけるになにかしの僧と

かやきこゆる所にてしはしあそひをりけるに庭の風

情ことさまにかはりていとおもしろしいろ／＼の干
草とも植ける中に菊かやの露おもけなるか風にみた
るゝもいと哀にみえしかはよみ侍ける

薄

露ふかき大河島のはなすゝさまねく心はなにゝかあるらむ

原薄

分ゆけは尾花かうへの露おもすそのゝはらにしほる袖哉
花山にすめるひしりのもとよりをみなへしのいとに
ほひやかなるを一本おこせるとてかくよみて付ける

返し

女郎花きみやしのふと一本をゝくる心をあたになかめそ

野女郎花

をみなへし露ふき結ふ浅茅原みるにえならぬこゝち社すれ
ある女はうの萩をよめるとてかきつけておこせける
秋風の末こすまゝにした萩の露きえかへりふしそわひぬる
梅津の坊へまかりけるに露はかまのほころひわたり
ていとやさしくみえ侍りければとりあへす

露深くあれたる庭のふち袴たれうけはりてみるよしもなし
侍従房のしら河にすみ侍りけるかやゝひさしくをと
つれもなとなきそといひおこせけるにあるときまか
りてければしはゝ物かたりなとして後すまゐるをみ
わたすにまことにおさゝしからすいとわかくてよ
こもれる事よとあはれさまさりぬにしのかたをみを
れぢあさかほの朝またきより露ふかくささいてけさ

はよめりける

世中のはかなき事は朝良のたゝ一とさとしらせてしかな

おなしこゝろを

あるとみれば其儘きゆる朝顔の花みてたにもしる人そなき

女房ゑもむのかみ草むらの虫をよめりける

秋のゝの草むらことになく虫のかれふと共に聲かはりゆく

人々よりて十五首哥よみける中に松むしを

秋もはや末の落葉に松むしのこゑうつもるゝ野への哀さ

おなし心を

初霜にかるゝ草はをたのみてもかひなくよはる松虫のこゑ

あるひとのまかりて哥よみけるに葛をなんよめりけ

る

片岡の秋の夕風ふく時はうらみやはせむ葛のうら葉も

北山にて人々よりて百首の哥をよみ侍りけるに雁わ

たるといふことを

天の原つらなり渡るはつ雁は雲すちかふて横をれにけり

雁友にをくれてひとり嶺こすといふことをゆけひの

つほねよめりける

そことなく數ある友を先たてゝひとり峯こす初雁の聲

侍従の君すなこをまけるあふきに雁のつらなりきた

るかたをかきけるによみてある人にとらせける

つらなりて渡れる雁の羽も窮み天つ空にそしはしやすめる

或ときかむたちめ殿上人なとよりてひねもすあそひ

くらしけるに遠聞鹿聲といふ事をなむよみける

いふき山遠く聞ゆる鹿の音はたにの外なるつまやこふらむ

夜鹿を

山もとの里人いかに聞わふる夜るなきたつるさをしかの聲

月

淡路かた浪にうきねのなかき夜は月に心のやとる也けり

人々月の歌をよみけるに舟によする月を

こきはなれ行月かけはあかししかた心をすまのうら迄もみゆ

月

すみほる月の行衛をみるときは山また山によは更にけり

おなし

浦々をつとふなるをの松かけにくまなくすめる月をみる哉

八月十五夜

名にしおふ今宵の月ときくければいつにすくれて詠ます哉

おなし月を

月をみは今宵の月にしくはあらし入迄みはやよはなかく共

月のかけの水にうつらふといふことをよみ侍ける

影宿すみたらし河のすむ水にさなから月のあまくたるかと

住よしにまうて社頭の月といふ事をよめる

曇なきやしろのうへに照月はけにすみよしと猶もたのもし

雪間月

照月のまへのみとをる黒雲をせきをすへてみる由もかな

望月

雲もなく山遠くして照月の更行そらを惜むかねの音

八月十五夜

月をみは今宵の月にめてやせむ老ゆく末の秋の最中に

嶺月

峯かけていさよふ月のほるをは旅ねの床にふし乍らみる

世中にかはらぬ物は月はかりなむる人はいくかはりしつ

庵月

世をうしと草のいほりに忍へ共かはらすとふは月の影なる

あはらやの月といへる事を内侍すけよめりける

荏はふあれやの月をなかわれば風はら／＼と影もすさまじ

おなしこゝろを

人すまぬ草のいほりはあるれとも住ものとは秋の夜の月

月によする述懐

月影はまためくりも逢へきにあはさるものはすきし事共

紅葉

時雨にそまつ染てけるもみち葉のあたりの松も錦うつめり

おなしこゝろを

もみち葉も千入に染て山姫のきかさねたりし衣笠の山

紅葉如錦といふことを人々讀はへりけるに

故里にきてもかへらは時はいま紅葉のにしき心まかせに

擣衣

秋更て寒さ増れる賤かいほにうちあかす也あさの狭衣

擣衣聞といふ事を

夜もすから聞も佗しき賤のめか衣うつ手のたゆくあるらむ

菊の花を一もとある僧のおこせるとて

千よのふる菊の齡を君にそとおくる心に花はありけり

山路落葉

木葉ちる岨のかけ道うもれともかきそ拂へる里のわらはへ

冬

時雨

音信る櫛のいた戸に音あらしくれそ冬のはしめとはしる

旅人によする時雨を西空法師よみ侍りけり

思はずもしきつの浦に時雨して織いなむしろかつくたひ人

行路時雨

時のまに時雨は過て日は照ぬゆく／＼ほさむまのゝすけ笠

おなし

秋かけてそむる紅葉のほともなく時雨と共にふれる太山へ

あられ

あられ降杉の板やの音たかく夢うちさます夜半の寒けさ

六條藏人の家にて哥よむ人二三人はへりて十五首よ

みけり其中に時雨を

さやかなる月と思ひし空なるをしくれてきたの黒雲をうき

時雨

照曇りまなく時雨るゝそら社は冬のはしめと先しられけれ

時雨

はけしくもひらの高根の時雨ては麓の里にはやめぐりけり

霜

草も木も霜のおきなと成にけりからきめにあふ野への色哉

松霜

行としのつもれる松の霜みれば下葉かしけてみる空もなし

暮天霜

くれかゝる夕の空の霜の氣はかさゝきわたす天の河はし

閑庭霜

朝しもの庭白たへに置をみておい行としのかしらなつめり

女房すけ

みしま江や蘆のかれ葉を氷とちふくうら風もやふらさり晁

おなし

哀なりみなとかはらは冬枯にのこるますけも氷しめけり

雪

雪ふれはきそ路のかたは埋れてかけにし橋もみえず成けり

おなし

あらち山梢の雪に風吹ははるゝとすれとまたはふり／＼

横川にすめるいとたうとき聖のまうて來てひとひふ

つかあそひ居て歌なとよめる中に閑庭雪といふ事を

よみ侍ける

雪つもる庭の柴かき色がへて先さきそむる梅とみえけり

社頭雪

かけ寒る神のみまへの榊葉は雪のしらゆふかけてこそみれ

よみ侍る

ある家にて人々歌よみ侍りけるに旅の雪といふ事を

野宿雪

降雪にふねこそわたせ藤川におりゐる鷺をしる人もなし

野宿雪

宿りとる野へのいほりの寒けきに思はぬ夜はの雲そ降そふ

野徑深雪

雪つめと鳥羽の通ひち道そあるひまなくやりし小車の跡

みまきといふところに住僧のようの事ありて京にし

はらくありてある暮かたにきたりてよろつみし事と

もかたりて後やゝさむくおもほゆるまゝ障子あけて

み侍りければ雪のいたうふりけり僧とりあへすよめ

りける

音もせて降つむ雪の暮よりも老ゆく末の我そ猶なる

太山雪

木々の色もしろたへなれや山姫の雪ふる袖もひかり増とは

冬神祇

袖寒き田中のもりの辻やしほたきをはやす聲きほらむ

古幸殘月

曉のかねにかたふく月影はかさきの山にいりかゝりけり

歳暮

暫しとてとむる手もなくゆく年の早くもあすは春に成にき

祝

何ことも恵みあまねき御代にしてたかやの軒も苔のむす迄

戀

思はすや結はぬ清水かけみえてしつくを袖にかくる我みそ

おなし

うかり梟根もあらはれし菖蒲草さみたれわたる戀もする哉

逐夜増戀

戀そめて夜とに夢もみしかとも今はいをたにねられさり梟

待不來戀

ちきり置妹を今やとまちぬれは更行鐘のねすそあけゝる

女ほうすけ雨中増戀といふことをよみ侍ける

君こふと思ひくらせる夜の雨は人しれすしも袖そぬれぬる

戀

思ひ河思へはうけることの葉も終によるせのたのもしき哉

五月五日戀をあやめによせてよめる

少將

あやめ草ねたくも思ふけふの日は君か心に我ひかれつゝ

草によする戀を

しほれぬる尾花かもとの思ひ草はかなく消むのへの露とそ

こゝろにおもふ戀を

人しれすおもふ心を君にさはおほるにうつせ春の月かけ

契りたゆるといふことを弁の君よめりける

契りこそくちやしぬらむ末のまつ涙もこす也袖のたまくら

戀

思ひいてよ伊駒の山の峯の月おもはぬかたに影やさすらむ

刑部卿の家にて五十二首哥を人々よみける中に忍ふ

こひといふ事をよみ侍ける

くちなしの色にも似たる我戀はいはての森にさてやはてなむ

船によするこひ

言つてむ海士の小舟のたよりにもそなたのかたに焦る我身と

戀

水莖のかきもつくさぬ思ひをはせめては君か夢にてもしれ

おなし

君とわれなれこし秋のかたみには置し扇をそれとこそみれ

人にしられぬ戀といふ事を女房ゑもんのかみよみ侍

りける

我戀は垣ねかくれのをさゝにて人もしらねはうきふしもなし

わかるゝこひ

いてゝゆく我つまかたの横のとををしあけかたの別悲しも

おなし

こふるみは罍の小ふねにあらねとも我からかゝる袖の泪に

夢にかよふ戀を

思ひねの夢路やかよふ君かふす枕のもとにうらみかほなり

あらはるゝ戀

すまのうら鹽やく煙立のほり焦るゝものつまはしりにき

忍ふこひを人々五首よみ侍りける中に

我戀はしのふの山の芝やまのけふりと消てあとかたもなし
水によする戀を

我思ふ心のそこはわきかへるいはまの水のあまりなるきみ
おなし戀を三位入道よみはへりける

戀しのひ朽なむあとの枕なる露もゝらすなくはてにきと
不遇戀

片糸のよりゝ君をせとるみは思ひ細りてあふへくもなし
戀

照月のかけたにみえぬ泪こそくるればまぢてあはぬ恨みに
おなし

物おもふ宿はしくれの心地してかはくまもなき袖の涙に
三位よしすけの家にてかむたちめ殿上人よりてうた

よみはむへりけるに戀の十首の中に
思ひかけていはんも辛し玉の緒のあはすは何の心はかりを
おなし

ゆくゑなき戀もする哉しら雲のわかるゝ峯とくらふ思ひを
あるめのよめる

〔此間野興〕

今宵そと契りてあはぬ夜はの月まはらに移るかけもそれそと
後朝戀

あとゝめて別るゝよりもはかなきは詞残りて明るしのゝめ
逢不逢戀を人々よみ侍りければとりあへず

面かけを我身にそへて別るゝは月みるよはのふくる也けり
此間歌

湖

にほの海かすめる沖にたつ波を花にそみするひらの山風

山家といへる事を人のよめりけるに又

山深み静かにいねる寢覺にはまともる月にこゝろすませり
旅泊

くたひるゝ旅の泊りの曉はそこはかとなくみけるふるさと
旅

ゆく旅の空すさまじき山路には袖にをきそふ木々のした露
野路

行さきはそこともみえぬ草のはら心細くもとをるあせみち
山居人といふ事がある女はうのよみ侍ける

あすしらぬ身にしあればと假寝する今宵はのへの苔の小庭
おなしこゝろを

篠ふきのいほりをとちし草枕しける草はの露のよそうき
又

風もなくしつかなる山に住人のまた聞わふるさると鹿の音
眺望

武藏野や草はのうへをこす風のそらにのほりて降かむら雨
述懷

かすゝに過にし事はくやまねと思ひそ出る老のつれゝ
おなしこゝろを

行衛なき雲ゐにすみし蘆たつも道を求めてかけるときあり
又

數ならぬうきみの上やとゝまらん昔とをりしあとのいひわさ
春

ひさくらをよめりける
梓弓はるはもえたつ草の原もゆともなきをいかにひさくら
按察公

花を

春くれは花のしらゆふ咲かけて手向の山はに起きたつなり
りやうにん法師あるところへきて人にすゝめられて
よみはへりける

ふる里をおもへは夢かうつの山花みてしたふ春の旅人
紅梅をある人の一えたおこせけるをその返しに

くれなゐにうは染したる梅花あめ降そむる色とこそみれ

花の散ける心をよみ侍りける

よしの山花のなかにはに風吹て空はにしきのなみそたちける

おなしこゝろを

春行てみわのひはらにやすらへはまれなる花をちらす春風

おなし

木末うつ雨も憎しなちる花のふる程おつるなさけなくしも

夏

春過てしつか麻衣ときちらしきはへせはしとすかく里人

葵

けふそとて賤機をりし山かつもおとろの髪に葵かけたり

ほとゝきすを

早苗とる比しも小田にをりはへてうちしきりなく田哥鳥哉

横川にすめる良禪法師哥よむ人にてつねは京にあり

て人々に會し侍りけるかこゝちわつらはしきと聞て

まうてけるにいさゝかはるゝけしきにてよろつもの

しける程にうちつゝきをやみもあらぬ五月雨になと

いひいてゝ此僧よめりける

五月雨にふりてゝなけや時鳥はるゝともなきあけくれの空

若きをのことともあつまりて哥よみけるついでに五月

雨を

船つなく淀の川きし棹たてゝうはなみはやしきみたれの頃

かうちのそれかしといふ人にひとゝ哥よめとあな

かちにいさめければよみ侍りける五月雨を

五月雨のおやみもなさに小男鹿の上毛のほしは猶みかき

少貳のかたよりせうそをゝこせけるはしかきに五

月雨をよみてみせ侍り

みなと川岸うつ波のあらくして鹽さきにこるさみたれの比

ある人雨中のつれゝに侍るとてひねもす哥よみあ

そひける中に五月雨を

五月雨にみなとのかたへ氷越てつなける舟をゝしなかし

秋

七夕雲といふ事を

たなはたの舟まちつけて天の川岸のこなたは雲をひれふる

おなし

一とせにひと夜といへと昔より契たえせぬほし合の空

又

天の川はし打わたすかさゝきの羽さきにのふる草むしろ哉

又

銀河わたるせひろくのる舟のをそしとまねく雲の手ふりは

辨のかたにすむ女はう七月七日たなはたの哥とてよ

み侍ける

うらやまし今宵はあはむ七夕のさゝめとせむつもののは

七夕

今日は早もゝはた立てをりあへるみけしの衣たちやきせ南

安養寺にて人々らうにやくうちよりてひねもす哥よ

み侍りけるに秋風をよみはむへりける

秋風はなにのうらみに野山なる草木をなへて吹てたふせる
荻

そよ／＼と秋の夕風ふくときは誰ともしらすまたし荻はら
侍従の公簷の荻といふ事をよめりける
よもすからそれかと妻戸たゝかれていねもやられぬ軒の荻原

冬

袖雪

太山には雪こそはやく積るらしみほの袖人冬やすみする
きた山にすむ人のをとつれて侍るおりふし或人の繪
を持出て歌つけてたへとあなかに望みければみる
に木々の枝に雪の降かゝれるかたをかきたりこの人
辭しかねて

常盤きと人やみるらむ木々の枝に雪の花さくゑのみちらしな
やむことなきかたに初て御子むまれ給へり人々よろ
こひにまかりて歌よみはへり

宴逝

萬代もつきぬ岩ねの松かえにすたつは鶴のひなにこそあれ
めてあかぬ雪をめぐらす袖のかにうつる心や面影にたつ

遊樂

千代よるつよをのみこる園の竹ふしをそへぬる松の調へに

公事

霧はらひ霞をこめて君かためつかふることも又はよのため

祝

北のふちみなみの山に月さえて光たえせぬよろつよのかけ

又

春秋のひらきをそへて風の音うこかぬ國をあふく君か代

鳥五首人にかはりて鴨

きのふまで蘆まに巢たつ鴨の子のけふはねにのみ現れに覺

百舌鳥

うの花の咲とみしより百舌もはやしてのたおさの時と鳴也

雀

田つらにそ羽けふり立るむら雀はなみかたよす風にまかせて

鶺鴒

住あらし鶺鴒たにこぬ宿なればこけふか草の露もたまらす

鶯

筑波ねの峯にすむなる鶯のねに騒きてみゆる猿の手つかひ

あるとき松公のきたのかたよりも唐の繒を此國の繪
師にうつさせて侍る翅のたくひをこせて和歌をく
はへよとのそみしかは

鳥

暮かゝりむれる鶯はみ穂のうらたゝしら雲の棚引とみゆ

鶺鴒

むら鳥たそかれときに打つれていそく羽なみは遠の山もと

鶴

よは更ぬ時をおもへは遠山の鐘よりさきにつくる庭鳥

鶴

松たてる千歳の宿りありとみて雲をしのきておるゝひな鶴
また仙水のかたを書たる鶴を

顔鳥

繪にかきし庭の洲濱の鶴をみてとていぬへき思ひけもなし
朽木はしる杭にとまる顔鳥のつかひしはしや水にすゝける

鴉子鳥

轉りしあとの聲に時過て桑かふ事をうちわすれけり

鶴 鴿

神代より岩ほに馴し石たゞき人のためしに成にけるかも

鴨

ななきひの茂きの枝に喧すなくひよ鳥にねふたけもなし

神 鳥

ひらの嵩曇るとみれは雨ふりてしとゝにぬれてやとる椎の木

尾長鳥

とひかふにさはるや辛き尾長鳥しこきておるゝ松のうは枝

鷄

かやくきの賤やの軒にむら立て拾ふ落穂にはしやつかゆる

鳩

追たてゝ小鷹をはなす小原野の里よりうへにゝくるやま鳩

右爲忠朝臣家集以村井敬義本書寫一按了部立等不審姑從舊貫

式部大輔菅原在良朝臣集

花落薰衣

散かゝる花やむかしのわきもこかかさねし袖の匂ひ成らむ

花影浮水

水そこに春やとまると尋みむうつろふ花のかけにならひて

三月盡夜

春霞たちかへりゆく通路をしはしとゝめよ雲のかけはし

夏夜於秘書閣同詠雨中早苗和歌

かく計りをやみたにせぬ五月雨にいかてかたこの早苗とる覽

夜深待郭公

子規まつとせしまにふしまちの月こそたかく空に成ぬれ

山家郭公

都人まつらんものを山里に聞ふるしたるほとゝきすかな

臨晚有涼

ゆふされはなひくをさゝの音にこそ思はぬ秋の風は立けれ

山家早秋

山里のくすのうら葉を吹かへす風のけしきに秋をしるかな

七夕

さよ深くあふせたつぬる彦星は其睦ことのほともあらしな

同

天河はしあひの空も見ゆはかりたちなへたてそ夜はの秋霧

月前掃衣

月かけに秋のよすから起るつゝうつ衣手に霜やをくらん

九月十三夜對月惜秋

つき故になかきよすからななむれはあかすも惜き秋の空哉

月契千秋

いつよりも月のゝとかに見ゆる哉千とせの秋の初と思へは

月照紅葉

よるきたる錦とは見よ散かゝる紅葉も月も隈しなけれは

終日對菊

白菊のかきほの花をなかつて住家ならてもくらしつる哉

秋夜陪三吏部大王文章詠臨曉聞虫

かたしきのねさめの床の虫の音は哀みにしむ物にそ有ける

秋日於三遍昭寺詠野徑尋花

女郎花匂へる野へを尋ぬとてぬれこそきたれ道しはの露

九月十三日夜詠終夜見月

名に高き今宵の月にあくかれて露とをさいてあかしぬる哉

翫紅葉山寺

思ひきやむなしきとに尋きて紅葉のにしきふまん物とは

初冬於三羽林藤原次將文詠戀秋對菊

なさけなく別れし秋の戀しさに露そたちうき菊のあたりは

山路時雨

山深みしくるゝ空を眺むとてはかなくけふもくらしつる哉

夜思時雨

うたゝねに衣のさゆる景色にてよしのゝ山の雪をしそ思ふ

雪埋寒草

老ぬれは我身とのみも見ゆる哉蓬かうへにふれるしら雪

栖霞寺冬意

淋しさはいつにもまさる小倉山ふもとの里の冬のけしきは

寄掃衣戀

諸共にたちきし人を戀わひてかたみの衣なくゝそうつ

故李部大王令通或女御問予爲其媒介而女未

成配偶之禮王忽催告別之悲女以二首被投予

其詞曰

宮城野にかれにし花の悲しきはおられぬ萩のうへも露けし

予以戀君之趣更綴答女之詞

宮城のゝ小萩か末のかれしより鹿をかひなき音をやたてける

法華經神力品

くさゝとをのしるしをしらせしも一つ御法のゆかり成覺

松樹蔭池水

岸ちかくおひたる松の緑こそ池に千とせの影はとゝむれ

松樹契還年

嬉しさの行末とをくみゆるかな千歳をまつ宿のしるしに

冬日雲居寺

紫の雲をねかふ身にしあればかねてむかへを契り社をけ

松樹契還年

いく千世と契りをきけむ我宿の年に生そふまつの梢を

夏日於三右武將軍小野別業詠池水久澄和歌

池水もいひやもらせる千とせまで流れてすまむ君か宿とは

右在良朝臣集雖多不審依無類本不能按合

藤原基俊家集上

正月朔日女のもとにつかはしける

物もとに新まれとも戀しきはまたふるとしにかはらさりけり
同じ一日ころに物申ける女のちかことたてゝ侍しに
つかはしける

初春のときのみことゝ天地の神うちつくし君かちかひは
おなしころものこしにて物申ける女のもとにつかは
しける

老らくの心まとひぬ鶯のわかれ聲をきゝそめしより
七日わかな人のもとにつかはすとて

年をへて若菜はつめと老にけりかしらに春の雪つもりつゝ
柳

春風に吹なみたりそ我妹子かかつらにすてふ青柳の糸

年ころもの申わたりけれといと心かたくてやみ侍け
る女のいかゝ思ひけむいとおもしろく咲たる花をつ
かはじたりしかはいひつかはしゝ

いかにして花の下紐とけにけむ人の心はありしなからに
大宮の左大臣うせ給ひて又のとし南おもての櫻に鶯
の鳴けるを聞て

ちらぬさきは何なゝ鳴そ鶯よたのむかけなき吾そよにふる
花作春友

たのめともいてや櫻の花心さそふ風あらは散もこそすれ
三條大納言花みにまかるとてはしめてさそひ侍りし
かはまかりて又のひかくいひつかはしたりし

山さくら尋し人の心こそ散はなよりも今朝はおしけれ
かへし

さかさらは何ゆへ人にしられまし花うれしかる春も有けり
さきのおほいもうちきみうせ給てのはる花のいとお
もしろく咲たれとみる人も侍らさりしかは獨山寺に
まかりてくるゝまてなかくて三條大納言のもとにつ
かはしし

此春は人もすさめぬ山さくら心おしくやとくにちりぬる
かへし

きくに社いとゝおしきは増りけれみる人なしに花のちる覽
雲林院にまかりたるに花のはしめてちりてしをみて
人しれす我やまちつる櫻花みるおりにしも散はしむらん

田家三月盡
小山田の苗代水はひきながら春はこゝろにえこそまかせぬ
うの花かき

今はよに故郷人もたつねこし身のうの花をかきにしたらは
卯花隔隣

賤の庵あまたの小屋もみえぬ迄中垣かほにさける卯花
右近の馬場にて人々尋子規といふ題をよみ侍りし
いつこよりいつちいぬ覽子規尋ぬとたにもしらせてしかな
雨のうちの子規

さして行かさと山のとゝきす今宵はこゝに雨宿りせよ
卯月十日頃久しく音もせぬ女のかりいひつかはしゝ
時鳥

誰里のかきね忍ふと子規けさわかやとを過かてになく

山近聞時鳥

ゆめかと隣の岡の子規しのひもあへぬさよの一こゑ

曉聞子規

朝くらや木のまろとのゝ明かたに山子規なのりてそゆく

夜々待月

五月雨よさるは月よを此頃はいかにせよとかなゝよふりぬる

あめのうちのたひのやとり

五月雨にあまのとまやに旅ねして哀露けき草まぐら哉

盧橘夕薫

袖ふれし昔の人そ忍はるゝ花たちはなのかほるゆふへは

山家蚊遣火

夏のよを下もえあかす蚊遣火の煙けふたき遠の山里

竹風如秋

夕されはさゝむら竹に吹風のそよく音こそ秋かよふらし

雨中待人

雨降といかてか人をまたさるたか爲かけるわれかまゆねそ

五月五日三條大納言のもとにくす玉つかはすとて

あやめ草いはかき沼の長きねを君かためにそ玉にぬきける

對水待月

夏のよの月まつ程の手すさみに岩もる清水いくむすひしつ

雨中木繫

玉柏しけりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで

五月の晦日つれなき女のもとにつかはしける

山里のならの外面にをくかひの下もえおれと知人もなし

五月ふたつ侍りし年の後の一日修理大夫顯季朝臣の

もとよりかくいひつかはしたりし

なをきなけいまた五月を子規思ひたかへて山へかへるな

返し

つけさらはこそにならひて時鳥ほとゝ山に入やしなまし

夜深思牛女

このよひのふけ行まゝに七夕のむかしの契いまやくやしき

閑庭露滋

庭の面にしける蓬にことよせて心のまゝにをける露哉

萩のうへの露

つまこふる鹿の泪か秋萩にこほれぬはかりをける白つゆ

女郎花

朝霧のたえまにみゆる女郎花こよひの露にねくたれにけり

薄

秋風に色に出にけり花すゝきかはかり露はむすひをけとも

林中月

まきもくの檜原の山のこのまよりのこまたらにもれる月影

むしのうらみこひによす

ゆか近しあなかま夜はのきりゝす夢にも人のみえも社すれ

月のまへの旅の心

あたら夜をいせの濱萩おりしきていも戀しらにみつる月哉

衣うつ

たか爲にいかにうてはか唐衣千たひやちたひ聲のうらむる

山さとのあかつき

山さとの尾はなさかふく軒端より有明の月はさし出にけり

旅のやとりに月をみて

月みれば思はぬ山をなかりけるいとゝわりなき旅の空かな

九月九日三條大納言のもとにつかはしける

長月のけふの爲にと菊の花露しもおひて咲にける哉

九月卅日ころ久しく煩ふこと侍りて心ちたのもしけなくおもひしに久しくをとせぬ人のもとにつかはし

秋はつる枯のゝ虫のこゑ絶はありやなしやを人のとへかし

草上露

〔蜀山雜下〕
何事に思ひさゆらん朝露のうき我身たにあればあるよに

船中落葉

ちりまかふ紅葉ほにあけて行舟を秋もてゆくと人やみる覽

雪埋古橋

わかこまよ心してふめ降雪につきめもみえす淀の繼はし

雪の朝雲居寺膽西かもとよりかくいひて侍りし

常よりもしのやの軒そうつもるゝ今日は都に初雪やふる

返し

ふる雪にまことは篠やいかならん今日は都に跡たにもなし

山家雪

雪のうちにけふはくらしつ山里は爪木の煙こゝろほそくて

月あかきよ雪いとおもしろく降はへりしかは友たちのもとにまかりて夜ふけてまかりかへりしに

かへるさの宿たにみえす降雪に道しるへせよ冬のよの月

池水作鏡

吾宿の池の水をかゝみとてみれば哀に老にける哉

舊年立春

老ゆけとおしくもなし年の内に春はふたゝひあひぬと思へは

梅告春近

たちよらは陰ふむばかり春きぬと梅の匂ひのほめかす哉

十二月卅日に昔あひしりて侍りける女に人のもとにてまかりあひて物申けるほとに白河にせうとのもとへとていそきかへりしをとゝめかねて

おしめとも行としたにも悲しきにしはしとゝまれ白河の水雪をかきあつめてをき侍しを人のこひにつかはした

りしかはつかはすとて

戀

とけむともまたみえぬ哉白雪のふるやはこれそとり所なる

秋風に葛のうら葉の打かへし思へは戀のうらめしき哉

はふりこかかみより板に引杉のくれゆくからに茂きこひ哉

逢事はかた結びなる吾妹子かゆはたの紐はいつかとくへき

なそもかくゆらのと渡る海士船の梶とるまなく物を思ふは

誰故に迷ひ初にし心ともことはりしらぬいなふちのたき

河上にさらす細布けふたにもむねあふはかり契りせよ君

如何にして君恨む覽おはたゝのいたゝの橋の桁よりもこて

初てあへる女に鏡をかりて返しつかはすとて

みて後はいとゝ心そます鏡かけすむ人になりやしなまし

こゝろかたき女のもとに

波よする磯邊の芦の折ふして人のうきにはねこそなかるれ

いとしもなき女のいかなることかありけむ

山城の水たのこなき己さへあなことゝしわれなすさめそ

終夜物越にて人と物語し侍りしにしはしをとせさ

りしかはねいりたるかととひはへりしかは

思へたゝまた引よせぬ梓弓ひとり人は人のねいるものかは

はしめの戀

あしたの戀

月草にすれる衣の朝露にかへるけさへこひしきやなそ

あひてあはぬ戀

たはれにし妹にあふやと道のへにとひし夕けそ人頼めなる

よるの戀

波よる岩ねにたてる磯馴松またねもいらてこひあかしつる

としへたる戀

人心何を頼みてみな瀬川せのふるくひくちはてにけむ

あした

をしてるやよさの浦波打かへし今もみまくのほしき君哉

はしめて人のもとにつかはす

いかてくと思ふ心はおく山の苔むす岩のとしそへにける

筏おろす柚山川にうきしつみ君にあふへきくれをまつかな

雪いたう降たるあした女のもとへつかはし

音せぬはあな覺束な白雪のふりおほふ竹のよの程はいかに

申ちきりて久しくをとせぬ人のかり

濱千鳥まつかひもなし曉のめさましきまでなとかをとせぬ

忍ひたる女のもとへつかはし

おほなこ草かる岡のさゆりはのしめふ返は人にしらすな

おなし心を

久しくは程やはへぬる程へねと又こはいかにみまほしきそ

又の日後朝

いかなれは短き冬の日なれ共けふあやにくに長くなるらむ

初ていひそめて女のみや恨にけむといへりければ

葍ちもる岩垣清水むすひかねあくへくもあらぬ君にもある哉

住よしに参りてよみはへりける

住よしのまつとはむ神代より我をしつむ人はありやと

一品宮仁和寺にあたらしき堂をたてさせ給て觀音の

むらさきの雲にのりて紫金臺さけて西の空よりい

たり給へるかたをつくらせ給へりおかみにとてまか

りたりしに是に哥つかふまつれと仰られしかは

紫の雲のおりる山里は心の月やへたてなからむ

御かへし

へたてなき心の月は紫の雲とにもにそ西へゆくへき

佛供養したてまつりしに四條の宮の筑前のきみ忍ひ

て聽聞すと聞て車にいひいれ侍ける

たつひとつ門の外にはたてれとも鬼こもりたる車也けり

備中守仲實朝臣國に侍りし時いていひつかはし

君かあたりみつゝ忍はむあまさかる吉備の中山雲な隔てそ

五月いたう煩らひし比妹のもとよりとて侍りしかは

あたしのあさちをしなみ吹風に露の命のをき所なし

世中はかなく聞ゆるころ左京權大夫俊賴朝臣のもと

へいひつかはしける

かたらはや草はに宿る露はかり月のねつみのさくまに

山寺に入あひの鐘をき侍りて

いりあひの遠山寺の鐘のこゑあな心はそ我身いくよそ

三條大納言聞ゆる事侍りて人につかはしたるにちか

ひてかれよりかくいひをこせられたりし

限りあれば富士の高根に鳴澤の我をとつれに何まさらめや

返し

玉筥にむれる雀朝ことに我こそ先はおとろかしつれ

やすなりの朝臣のもとにいふ事ありてのち首もつか

うまつらざりしかはいひつかはしゝ

人しれす思ひこめたるされ石の打いてしとはいかゝ成にき
しるを人のもとにつかはすとて

落積る朽はか下をかきかへしたかため拾ふ木のみとかしる
住吉のくにもといとちかくゐたりと聞にをとせさり
ければいひつかはしゝ

みこもりに一目もおちす思へとも我わすれける住のえの松

おもひをのふ

荇根はふ浮よわたるとせし程にやかて深くもしつみぬる哉
年をへて歎く嘆きの茂りあひて我みおいその森となりぬる

季仲卿太宰帥になりてまかりくたりしに馬の饑に扇
つかはすとて

千とせまで契れるをを忘れすは鶴のは風に思ひいてよ君

或所に哥合せむとて哥よみもとめさはくと聞てたれ
ともなくてさしをかせ侍りし

吹風に和哥の浦こそさはくなれ浪よいづくに我みよせまし
雲居寺瞻西家の門を過とてかくいひ入てまかりける
いへはありいはては過し玉つさのかけて思ひを哀とはみよ
かへし

ことならはたゝには過て玉章の中々也やかりにをとする

春宮大夫八講行ひ侍りしに捧物つかはすとてよみて
つかはしゝ

うらやまし心の雲や晴ぬらむわしの山路に照月をみて

三月朔日清水寺にこもりたりしにしのひたるけしき
にてこもれる人にいひつかはしゝ

もろ共に旅のそらには出たれとあなおほつかな春のよの月

きくの花おもしろく咲たるを山寺にうつしうゝとて
心なき草木なれとてみるなれと法の庭にも移しぬるかな

是は堀河院の御時集めしゝかはまいらせし。これ
より後の歌はいにしへ今のをかきあつめたる也

藤原基俊家集下

みちのくにのかみもとよりのあそむのもとより久し
うあひみさるよしひいていつのほとともいはざりし
かは

かへりこむ程をふるにも武隈のまつ我みこそいたく老ぬれ

季仲の帥なかれて後九月十三夜月のおもしろく侍
りしを思ひ出てたよりにつけていひつかはしゝ

みるたひに昔のことのおほゆれは又其まゝに月もなかめす

東宮大夫うせ給て又の年のはる植られし紅梅のいと
さかりに咲て侍りしかはものへまかりし道にていそ
かしく侍りしかと人かけもせさりしかはむかしおも
ひいてられてたゝう紙に書て木にむすひつけて侍り
し

昔みしあるしかほにて梅か枝の花たに我に物かたりせよ

後に見侍りて少納言さねゆきかくいひおこせて侍り
し

根に歸る元の姿の戀しくはたゝ木のもとをかたみにはみよ

又かへし

戀しきにはこのもとに立よらむ昔にゝたる匂ひあるやと
むかしあひしりて侍りし女いと久しくをとせぬ忘れ

にたるかといひおこせたりしかは

白浪のいらこかしまの忘れかひ人わするとも我わすれめや
十月朔日比大原よりまた紅葉ぬ楓をしきてくた物い
れておこせたりし人のもとへいひつかはし

折けるはいかなる山の山人を紅葉もあへぬあたらしこの葉を
思ひかけぬ人のもとよりむまのとなむいふ人のある
よひて見よといひたりしかは

きりたちのたれ柚山の木の本にいさまたえ社思ひ出られぬ
或女八月ふたいの念佛に女郎花を奉るとて哥こひ侍
りしかはかはりてよみ侍りし

我ことく五つのさはりある花をいかゝ蓮の身とはなすへき
雲居寺瞻西かせつ經を聞て侍りし人にかはりて
いひつかはし

岩ま出ていつる泉のわくかこと法の言葉もつきせさりけり
十二月廿日ころいと寒きにむすめに面白きふること
うたゝとも書あつめてとらすとて草紙のおくに書付
侍りし

昔人むへもいひけむ子を思ふ心のやみはさうとなりけん
たいうしといふ子を僧につけて侍りしか久しうをと
もせさりしかはかくいひつかはし

かそいろのひきもはなたぬうなひ社我思ふことなを思へ君
小法師といふ子を南都の永縁僧都につけて侍りしに
僧都ならにまかりてかくいひおこせて侍りし

我をさへ千代とを祈る春日のゝ二葉の松をみそめてしより
かへし
君か代は千世ともいはし春日のゝ二葉の松も神さひんまで

三月十日はかり六波羅に講行ふと聞て女車にのりま
しりてまうてたりしに口惜くはてにければ經よむ尼
のもとにまかりてかへらむとするに引出物にとて櫻
のいみしう咲たるを折てえさせしかは

家つとにさのみな折を櫻花やまの思はんこともやさしく
越前守仲實朝臣妻にまかりをくれてけてのことし侍
りし諷誦ものをくるとて

曉の夢となりしに君こふとつきおとろかすかねのこゑかな
雪中待人
氷りあへぬ山田の澤に降雪の下きえかへり君をこそまで

戀
こりすまになをもまつ哉冬の夜の有明の月のいとやと思へは
のこりのはな

夏山に一枝はるのみえつるはのこれる花の匂ひ也けり
ほとゝきす
から衣たつ田の山の郭公うらめつらしきけさの初こゑ
久しく音せぬ人に

とよみ餘り二よみみよみ思へとも猶まとをなる木曾の麻衣
うの花
うの花のさける垣ねは布さらすさかみの市の心ちこそすれ
ほとゝきす

來鳴ぬもことほりなりや時鳥まつ人からの夏のよなれば
詞書久
戀すれはうつし人社わりなけれかひすゝ妹をそなふてふ哉

正月ついたち大安寺僧都のもとにゆつる葉やるとて
霜やたひをけとしほまぬ初春の千歳を君にゆつる葉なれば

九月十三夜同じ僧都のもとにまかりて夜一夜物かたりして侍りしつとめていひをこせて侍りし
〔玉響秋下讀人不知〕
あかさりし君か名残に久かたの月ををいるまてなめつる哉

かへし

〔同基慶〕

我もしかあかてかへりし月影の山のはつらき眺をそせし
おなし僧都の母のために八講を行ひはへりしに捧物
つかはすとて

わしの山ふもとはるかに照す月しらぬ山路の道しるへせよ
南都におさなきこをやりて雪のふりしかは師の僧の
もとにやり侍し

さらぬたに覺束なきに春日山子を思ふ道に雪さへそふる

あひしりて侍りし女のもとより

さすかにそ夢の中なるゆめはかり見しよのとは忘れさり覺
かへし

現こそ秋のねさめは悲しけれ中々夢と思はましかは

初て女にまかりあひてその夜ほとなく明てからすの
鳴はへりしかは

君かある夜明もはてぬにあくへしやいてさかにくき子持鳥よ
かへし

人を厭ふけしきの空にしるければまたきあけぬと鳴鳥をも
みちの國のかみもとよりの朝臣馬えのせむといひて
任やゝはてかたになりぬれとをとせさりければ

あら玉の年のいつとせ待わひぬ我よもしらす馬はたのまし
風のうちの女郎花

さらぬたに心色なる女郎花むへなひきけり秋のゝ風に
女のもとよりかくいひて侍りし

忘らるゝみをしる雨は音もせて忍るにしもぬるゝ袖かな
かへし

忍るは苦しきものを我妹子か身をしる雨となりやしなまし
正月朔日郎賀阿闍梨のもとよりかくいひおこせ侍り
し

鳥の音も谷の氷も打とけてのとけき春に成にける哉
返し

鳥のねものとけき春に成ぬれと我もとゆひの雪は消あへす
月ころ煩ふと侍りてしほゆあむとて津の國のかたに
まかりてゆあみはてゝのほり侍りしかと猶やまひや
み侍らさりしかは心ほそくおもふたまへ侍りしに松
の木あまたたてる處をすき侍りしにこゝはいつくそ
と問侍りしかはみかけの松となんいふと人の申しか
は

〔續古雅下〕

よにあらは又かへりこむ津の國のみかけの松よ面變りすな
月のおもしろきよならに侍る子の戀しくはへりしか
は永縁僧都のもとにいひやりし

いときなき我こをならの里にをきて今宵の月の面影にたつ
十月朔日のころ時雨するひ雲居守臈西かもとよりある
尼君のもとになと久しくはをとせぬといひたる
にかはりていひやりし

しくるとも紅葉ふみ分たつねみむわひたる衣袖かさにきて
わつらふこと侍りしころあひしりて侍る女のもとより
りとふらはて右近の馬場のひをりのひとは何事そと
とひて侍りし返ことに

いつくをか君たつねまし道芝のをく白露に消なましかは

七夕あかつきをおしむ

たなはたの雲の衣の袖ひちておしむそらなき朝ほらけ哉

しほゆあひて人のむかへにまかりしに曉にむやとい

ふ所に鹿の鳴はへりしをきゝて

朝ほらけあしまを分てこえ行はかりはのみのにをししか鳴也

ある女四月のついたちころもちつゝしを折てえさせ

しかは

おく山の岩ねかくれのもちつゝしねはやゝとみゆる君哉

よるの雪月にゝたり

月かとしてぬ人まては冬のよの降をける雪のはかる也けり

長月つくるひ大藏卿匡房の卿のもとへつかはしゝ

行秋をとめつる哉おく山の紅葉のにしきたちやかへると

かへし

おしめとも紅葉も散ぬひもくれぬかへらし物をよるの錦は

同じひ雲居寺にまかりて急き歸りしかは瞻西かくい

ひて侍りし

行君かせめておしきにくらふれば秋はかすにもあらぬ也覺

かへし

またしらぬこむよそ今は頼まるゝ秋にもおちす人の忍ふに

前齋宮のゆりはなかに尼になりぬと聞て

彼岸にこきつきぬともあま小舟こなたにしのふ人を忘るな

かへし

あまを舟きよき渚にこきつきて忍はむ人もわたしこそせめ

十二月つこもり小法師といふ子のもとに永縁鏡もち

るをこすといひつかはしたる

年をへてつかさ位をますかゝみ千代の影をは君そみるへき

かへし

萬代によろつよ添て十寸鏡きみかみ影にならへてやみん

はしめのこひ

す守このいひ出ぬ事のいふせきにかひこめくつる身や成なむ

こひ

さしてくるつげの小櫛のかひもなしなたの鹽焼いさ歸りなむ

あひしりて侍る女久しうをとつれつかうまつらさり

しかはかくいひおこせて侍りし

いかなればしめちか原の冬草のさしもなくては枯はてに劔

かへし

なを頼めところは誰にも契りしかとはりしらぬさしも草哉

おなし女のもとより

いかにせむわくらはにたにとはゝこそ思ふ心の程も語らめ

かへし

神風や伊勢の濱荻いつのまに汐たれ衣人のきるらん

正月七日女のもとにつかはしゝ

澤にいてゝいさ諸共に芹つまむねよきは君かことゝ思へは

またあはぬ女に久しうをとめせさりしかはかくいひ

おこせたりし

渡らぬに絶え久しきまろ橋のふみみる事もつゝましきかな

かへし

まのゝ浦のとたえかちなる丸橋をふみ心みよけにや危うき

また外にてはかくしく見さりけるむすめの嬢なる

人のかくいひおこせたりし

故郷に種まきをきし撫子の花のさかりをいかゝみるらん

かへし

さかりにも成にける哉ふる里に我種まきし花の匂ひを
二條宰相よろしき哥よみたと聞いていひやりし

老らくは忍びもあへすなには渴あしまの風のそゝる寒きに
前木工頭俊頼朝臣のもとより九月十三夜かくいひ侍
りし

澄わたる月にたなひく浮雲のおほるけならす恨めしきかな
かへし

なに高きあたらし今夜の月かけを立かくすらん雲の心よ

八月雨いたくふるころ女にかはりて男のもとに
雨ふると移るふなゆめ我せこか衣にすらむ秋はきの花

ある女のもとにいきたるに瓜のかたかきたる扇帯を
えさせたりしかは

瓜つくるこまのあたりに尋ねきて君かゝたにもなる心かな
或人熊野にまいりてわかのうらにて哥よめりと聞て

和哥の浦にきみかいひをく言の葉をいかに聞けむ玉つ嶋姫

丹波守季よしの君いみしうあひかたらひて常にまう
てきをとつるゝ久しう音もし侍らさりしかは霜のい
みしう降たるにいひつかはしゝ

ほともなく今朝をく霜の消ぬれば人の心をみはてつる哉

美濃守もとふさの朝臣身まかりて後の事つかうまつ
りしに誦經物つかはすとて文のおくに書付侍りし

今日まさに泪にくれてとはむとはかもの豫ても思はきりきや
はやうあひしりて侍りし女の今は老はてゝ頭の雪は
らひもあへすなむあるといひたりしかはかくいひつ
かはしゝ

わきもこかかしらの雪も寒けきに猶や昔の戀しかるらむ

霜のいみしうふりたるあしたならの子を思ひやりて
永縁僧都のもとにいひつかはしゝ

〔玉葉冬〕

ならのはに霜やをくらむと思ふにもねて社冬のよを明しけれ
りうき〔靈義〕請申僧のうたかきて奥に書付し

春の日の光もしらて雪深き谷のまつこそ年老にけれ

十二月晦日永縁僧都のもとよりくたものをこすとして
尋ねつゝしらぬ山路に白雲のかゝるこのみを拾ひいてたる
かへし

白雲のしらぬ山路のこのみをは君かためにそ我ひろはまし

はき

〔玉葉秋上〕

小男鹿のけさうらふれて鳴なへに野原のこ萩花ちりぬへし

二月はかり或處に八講行ふと聞て女車にのりくはゝ
りて聽聞し侍りしに前なる紅梅の風にいたく散侍り
しかはせむせいか導師にて侍りしにたれともなくて
さしをかせし

春風のいかにふけはか梅のはな君か御うへにちりかゝる覽

ある女の埋火はなたちはなといふ題よみて見せよと
いひはへりしかはおもふこゝろありて

よもすから下消かへる埋火のいけらは君にあひみてむやと
はなたちはな

たち花のはなちる里の風とめは昔の人とねぬへしや君

此主のかへしをやさしくしたりしか

君といへはなとみまほしき波まなる沖つ小しまの濱楸かな

追考出

鶯

夜をこめて鳴鶯のこゑきけはうれしく竹をうへてけるかな

山寒花遅

みよしの山井のつらゝ結へはや花の下組おそくとくらん
かやりひ

鹿

さらぬたに夏は伏屋のすみうきに宵の煙のところせき哉
宮城のゝ萩やをしかの妻ならん花さきしよりこゑの色なる
さかにまかりて鹿のなくを聞てよめる

女郎花

をしか鳴この山里のさかなれはかなしかりけり秋の夕くれ
あたし野の心もしらぬ秋風に哀かたよる女郎花かな

時雨

霜消て枯ゆくをのゝ岡へよりならのひろはにしくれふる也
戀

別

笛竹のあな浅ましのよの中やありしやふしのかきりなる覽
あさちふに今朝をく露の寒けくに枯にし人のなをそ戀しき
朝露のたちわかれぬる君によりはれぬ思ひにまよひぬる哉

雨後山水

よしの山うしやむら雨降ぬらむ岩まを瀧つをとゝよむ也

遙望漁船

さゝ波やひらの山風早からし波まに消る海士のつりふね

竹

今年生の籬のうちの呉竹も秋はよなく成やしぬらむ

苔

奥山の岩ねかうへのこけむしろたちある雲の跡たにもなし

右藤原基俊集以織部正乗尹本校合了

群書類從卷第二百五十六

和歌部百十一家集廿九

清輔朝臣集

春

立春

〔新古今〕
いかばかり年のかよひち近ければ一夜のほとに行かへる覽
いつしかと霞まさりせは音羽山をと計りにや春をきかまし

立春曙

けふ社は春はたつなれいつしかとけしきとなる明ほのゝ空

山家早春

をの山の春のしるしは炭かまの煙よりこそかすみそめけれ

社頭子日

松はいな神のみむろの子日には櫛をちよのためしにはせん

霞

〔新古今〕
朝かすみ深くみゆるや煙たつむろのやしまのわたり成らむ

海上晚霞

夕しほにゆらの戸渡るあま小舟かすみの底にこきそ入ぬる

鶯

春のくるこのあかつきの鳥の音をはつ鶯とおもはましかは
かた岡に谷の鶯かとしてして羽ならはしにくちすさふ也

鶯のなく木のもとに降雪ははかせに花の散かとそ見る

なに事を春の日くらし思ふ覽かすみの庭にむせふうくひす

ひめもすに己かなきをる聲の綾はけにもゝひろに成もしぬ覽

天の戸をゝしあけ方にうたふ也こや鶯のあさくらのかゝる

谷の戸にかへりやしぬる鶯の花のわくらはちりつもりつゝ

早鶯猶若

鶯ははなの都にたひたちてふるす戀しき音をや鳴らん

若菜

白妙の袖ふりはへて春の野の若なは雪もつむにそ有ける

梅

梅の花おなしねよりは生なからいかなる枝のさきをくる覽

ちれはおし匂へはうれし梅の花おもひわつらふ春のかせ哉

みるたひに軒はの梅の匂ひこそ宿の物ともおほえさりけれ

春くれはすそのゝ梅のうつりにいもせの山やなき名立覽

なさけあらん人にみせはや梅花折々かほる春の明ほの

あしかきの奥ゆかしくもみゆる哉たかすむ宿の梅の立枝そ

梅度年香

かにそしる雪の下より咲そめて霞のうちにゝほふ梅かえ

梅有色香

うらうへに身にそしみぬる梅の花匂ひは袖に色はこゝろに

是。はらからとも。みなあるへかしき程なるを思ひてよめる也。

法性寺殿の大北（龜通）のまん所此哥をあはれかりて春のはしめのみゆき有けるにかくいたはせたりけるをよろこひて家の女のもとへ

梅のはな枯ぬる枝とおもひしをあまねくめくむ春も有鬼

きさらきのころ三條の女御の御もとへまうてたりけるに雪ふれるあしたなりければたゞにはいかになと女房申されしかは軒ちかき梅を折てさしいるゝとてよめる

〔玉鬘春上〕梅の花匂ひも雪に埋もれはいかにわけてか今朝はおらまし

返し 女房

同君みすはかひなからまし梅の花にはひは雪にうつもれす共

柳

我門のいつもと柳いかにして宿によそなる春をしるらんわきも子かすそ野になひく玉柳うちたれかみの心地社すれ

垂柳臨水

さる澤の池に浪よる青柳は玉もかつきしあさねかみかも

櫻

をとめ子の袖ふる山を來てみれば花の袂もほころひにけり

おもひねの心やゆきて尋らん夢にもみつる山さくらかな見る度にこそにことは咲まさる若木の花の末を床しきをはつせの花の盛やみな河峯よりおつる水のしら浪〔玉鬘春上〕老らくは心の色やまさるらむ年にそへてもあかぬ花かな

からくくの虎ふす野へにゝほふとも花の下にはねても歸覽〔玉鬘春上〕神垣の三室の山は春きてそ花のしらゆふかけて見えける

惜む身そけふともしらぬ仇にみる花は何れの春もたえせしかさしをる三輪の檜原の木間よりひれふる花や神の（やとめ）

待山花

よも山の花待ほととのしら雲は□やそれとそおとろかれける

晚望山花

みよし野の水わけ山の高根よりこすしら浪や花のゆふはへ

見花述懷

身をつめは老木の花そあはれなる今いくとせか春に逢へき

南殿のさくらを見て

よしの山峯つゝきみし花さくら一木かすゑに咲みちにけり

宇治左大臣（龜子）花見給てかへりて後人々に哥よませ

たまひけるに

あかす思ふ心は花にとめつるをとまらぬ人に身をは委せて

落花曝砌

けさみれば軒はとめゆく雨水のなかれそ花のとまり成ける

遠尋殘花

散はてぬ花の梢のよそにてはうす雲かゝる峯とみえけり

殘花何有

しら雲にまかひし花や残るかとうのはの空にも尋ねゆくかな

春駒

〔子駿春上〕みこもりに蘆のわか葉やもえぬらん玉江の沼をあさる春駒

春鴈向北

初雁は越路うれしくみし物をけふはかへるの山もうれしき

電歸鴈衣

にしきともみえぬ霞の衣きてなに故郷へかへるかりそも

杜若

こやの池の汀にたてるかきつはた浪のおれはやまはら成覽
澤畔苗代

鶴のすむ澤邊にかへす苗代はよをなかひこの種やまくらん
藤松樹花

藤浪のさきかゝらすはいかにして常盤の松の春をしらまし
池邊藤花

風吹はみきはの藤の紫になみのしら糸よりませてけり
大臣の家にて藤の花のうたよみけるに

一たひはしるしみえにしむらさきの雲のなをたつ宿の藤波
歟冬

我宿に八重やま吹をうつし植てちとせの春を重ねてやみむ
歟冬繞池

山吹のくちなし色にとちられていひ出す方もみえぬ池水
雜春

梓弓はるの山邊にいりぬれば身のいたつきもしられさり鳥
暮春

大かたも春そくるゝはおしきかと花なき宿の人にとはゝや
旅宿暮春

あけゆかは我も立なむ假の庵にとまらぬ春を恨むへしやは
夏

卯花
柳葉にゆふしてかけてつはつかみまつる垣ねと見ゆるうの花

卯花混月
卯花のうはひてもてる雪の色を又月かけにとられぬるかな

時鳥
何事をぬれきぬにきて時鳥たゝすの森に鳴あかすらん

あはてのみ此世つきなは時鳥かたらふ空の雲とならばや
ほととぎす心のまゝに尋ねとて鳥のねもせぬ山にきにけり
いさやまたなきもやしけむ時鳥けふそ我には初音成ける
郭公よこ雲わたる山のはにさもほのめきて過ぬなるかな
いくとせそきくとおもへは時鳥待につけても老そかなしき
時鳥聲香

かきこしを夕こえくれば時鳥ふもとの雲のそこになく也
千載夏

垣根時鳥
時鳥垣ねかくれのしのひ音も我はかりにはへたてさらなん

獨聞水鶏
とはすへき人たになくて休らへは叩く水鶏に聞そなしつる

社頭水鶏
夜もすからあけの玉垣うちたゝき何事をねく水鶏なるらん

端午述懷
人なみに袂にかくるあやめ草うきにおひたる心地こそすれ

照射
ことほりやさ社は辛く思ふらめともしの鹿のめをも合せぬ

五月雨
時しもあれ水のみこもを茹あけてほさてくたしつ五月雨の空
千載夏

たこの浦のもしほもやかぬ五月雨にたゝぬはふしの煙成鳧
二條院の御時このうたをよろしとやきこしめしたり

けん御さうしかきにたまはせたりけるなにかみに
かきてさしはさまれたりける哥

ふしの山煙はかりを雲の上にならせることはうしと思へは
此御うたの心はうへゆるされぬことをおほしめしけ

るになむさて御かへしに申

雲の迄ふしの煙ののほらすはむせふ思ひもしられさらまし

船中五月雨

五月雨のせとにほとふる友舟は日影のさゝむおりを社まで

田家夏雨

かりしほの外面のむきも朽ぬへしほすへき隙もみえぬ五月雨

盧橘遠薫

たか宿の花立はなにふれつらんけしきとなる風のつてかな

風靜盧橘芳

君か代に枝もならさて吹かせはな立花のにはひにそしる

海邊螢

濱風になひく野嶋のさゆりはにこほれぬ露は螢成けり

瞿麥滿庭

庭の面のからなてしこの紅はふみているへき道たにもなし

夕立

〔新古夏〕
をのつから涼しくも有か夏ころも日も夕立の雨の名残に

水邊納涼

河嶋の松の木陰のまとゐには千世の齡ものひぬへきかな

夏月浮泉

何事に涼しく物をおもはまし岩間の水の月みさりせは

夏神樂

河やしる浪のしめゆふ水の面は月の光もきよく見えけり

夏狩

夏の野をゆすゑふりたて駒なへてあさふませ行人やたか子そ

山路草深

とやまには草は絶たるかたもなし芝かる賤の音はかりして

水草隱橋

まこも草たつきもしらす成に鳧いはけのすゝや沼のまろ橋

荊野草

花さかむ草をはきよ夏の野をなへてなかりそ賤のをたき

夏萩

河の瀬におふる玉もの行水になひきてもする夏はらへかな

秋

旅泊秋來

もゝつてのなみちに秋や立ぬらんせとの汐風袂すゝしも

早秋

山里は庭の村草うら枯て蟬のなく音も秋めきにけり

七夕

おもひやる心もすゝし彥星のつままつ宵のあまの河かせ

花染の衣はかさし七夕にかへる色とていみもこそすれ

おもひやる今朝の別は天河わたらぬ人の袖もぬれけり

〔新物秋上〕
天河水かけ草にをく露やあかぬ別のなみたなるらむ

たなはたやをのかきぬく成ぬ覽空なる雲の中のだえぬる

たなはたはあまの玉床打はらひこゝろもなく暮を待らむ

けふはかり天の河風こゝろせよ紅葉の橋のとたえもそする

七夕言志

七夕はわたりもやらし天河もみちのはしのふまはおしさに

たなはたの雲のはたてに思ふらん心のあやも我にまさらし

萩

我宿のもとあらの萩の花さかりたゝ一むらのにしき成けり

萩花露重

ふしわふる萩の立枝をはかりにて懸れる露の重さをそしる

秋花勝春花

小萩原柳さくらをこきませし春のにしきもしかしとそ思ふ

あきの比人のもとへゆきたりけるにあるしはなかり
ければせむさいのおもしろかりける中に女郎花のお
ほかりけるを一むらおりとりて哥をよみて残の花に
むすひつけゝる

さもあらはあれ主はいかに思ふ共女郎花には身をもかへてむ
薄

むさし野にかねて薄はむつましく思ふ心のかよふ成へし
草花纔開

糸薄するはにをける夕露の玉のをはかりほころひにけり
秋野逍遙しけるに薄の風になひくを見て

たつねつる心や下にかよふ覽うちみるまゝに招くすゝきは
風底萩

萩はらとよそにきゝつる風の音の袂にちかく吹そふるかな
穂花

うす霧のまききに花の朝しめり秋は夕と誰かいひけむ
題しらす

秋の野はこほれぬ露にしるきかな花みる人もまたこさり鳥
あきのころ世の中はかなかりけるに花を見て

まかきなる花につけても思ふ哉今いくとせの秋かみるへき
朝望旅鴈

いつちとてさして行らん山高み朝ゐる雲にきゆるかりかね
鴈聲遠近

天の原とわたるつらにくせよとやたのむの雁の聲あはす覽
鹿

高砂のおのへの風や寒からんすそ野の原に鹿をなくなる

深山聞鹿

いかなれはいもせの山にすむ鹿の又かさねては妻をこふ覽
題しらす

おもふと残らぬものは鹿の音を聞あかしつるねさめ成けり
露

立田姫かさしの玉のをゝよはみみたれにけりと見ゆる白露
露秋夜玉

たつた姫をける物とやおもふらんあくれはきゆる露の白玉
霧

霧の間にあかしのせとに入にけり浦の松かせ音にしるしも
山家霧

秋かせにあれのみまさる山里は霧のまかきそくもり成ける
月

山のはの月待出て見るのみや思ふにもものたかはさるらん
行こまのつめのかくれぬしら雪や千里の外にすめる月かけ

谷川にやとれる月のうき雲は岩間によとむみくさ成けり
今よりは更行までに月はみしそのもとなくなみたおちけり

よもすからおは捨山の月をみて昔にかよふわかこゝろかな
雲なきますみの月や雨にますとよをか姫のかゝみなるらん

しほかまの浦ふく風に霧はれてやそ嶋かけてすめる月かけ
同三十首の中に

夜とゝもに山のは出る月影のこよひをむる心地こそすれ
月みるとねやへもいらす白妙の袖かたしきてあかすころ哉

行末の人にもいかゝかたるへきいはんかたなき夜半の月影
いそかへり我世の秋は過ぬれとこよひの月そためし成ける

いかなれや花も紅葉も折こそあれ年の一とせあかぬ月かけ
さよふかく月にあけたる横の戸に人の心のうちをそみえける
世中のなさけも今はうせにけりこよひの月に人のさはねぬ
人毎によもさらしなと思ひしに聞にはまさるおはすての月
伊勢の海おふのうらなし慕はれてなりもならずもみゆる月影
から衣そてしの浦の月影はむかしけたる玉にやあるらむ
山里の紅葉も月もあかけれとおなし色には見えすそ有ける
ゆふたすき思ひかけすもみゆる哉野森に澄る月よみのかみ
何となく心すみてや出つらん月に棹さすよさの浦人
光をやさしかはすらんもろこしの玉つむ舟をてらす月かけ
しきたへの枕に出る月みればあれたる宿もうれしかりけり
手枕にかきやるかみのみたれまて曇りもみえぬ秋の夜の月
くまもなき月をもみてやあかすらん伏里の里の人を床しき
紫のねはふよこのにてる月はその色ならぬ影もむつまじ
人しれすかたはれ月そうらめしたれに光を分てみすらむ
夜もすから人をさそひて月影のはては行衛もしらて入ぬる
見るからに影馳しき身なれとも月にはえこそ忍はさりけれ
みな底に宿れる月の影をこそしつめる人はみるへかりけれ
今よりは心のまゝに月はみし物おもひまさるつまと成けり
月みれば誰も泪やとまらぬとおもふ事なき人にとはゝや
かく計りくまなくみゆる月影の心のうちをてらさましかは
更にける我世のほとそ哀なるかたふく月は又も出なむ
久方のあめのをしてや是ならん秋のしるしと見ゆる月かけ
ひたすらに厭ひもはてし村雲のはれ間そ月はてり増りける
千よの秋を一夜になして眺む共あかてや月のいらむとす覽

旅中月

うき雲は麓にかゝる高根にて行衛もしらす月をみるかな
山寺明月
初瀬山峯をやとなる旅ねには枕よりこそ月はいてけれ
月夜逢友
今宵こそ雲間の月にさしそへて又めつらしき影はみゆなれ
月前聞虫
めもあやにみゆる今宵の月影にはたをりそふる虫の聲かな
三日月
三日月は山のあなたの里人のおしむをわれて出るすかたか
山中晨月
ほの／＼とあらしの聲も成にけりしら月山の有明のそら
八月十五夜
大かたは秋の半とさく物を月のひかりはみちにけるかな
昔よりいつはりならぬひとことは今宵の月の光なりけり
虫
日にそへて聲よりはり行きり／＼す今幾夜とてつゝりさす覽
叢夜虫
もろ聲に秋の夜すから鳴むしは花のねくらや露けかるらん
菊
かきりなき齡のみかは見るからに心ものふるしらさくの花
菊綻禁庭
八重菊の咲る所の名にしおはゝ今一重をはそへてみてまし
九月九日にさくのかさかりけれは
花さかて老ぬる人のまかきには菊さへ時にあはぬ成けり
紅葉
露むすふ秋は幾日にあらねとも岡のくす葉も色付にけり

またきより景色の杜の下紅葉なへてならずも見えもする哉
もみちするおなしみ山の梢にて獨さめたる岩ね松かな
〔千載秋下〕
今そしる手向の山はもみち葉の幣とちりかふなに社有けれ
をくら山木々の紅葉のくれなるはみねの嵐のおろす成けり
もみち葉も麓の塵と成にけりなにはの事もはてそ悲しき

紅葉繞牆

山おろしに四方の垣ねやいかならん紅葉のみ社臺なりけれ

山路秋深

ふみ分る山の下草うら枯て秋のする葉に成にけるかな

野風

秋の野の花吹みたる夕かせにたもとよりさへ露そこほるゝ

晚見稻花

夕日さす秋の田面をみわたせはほなみそ風の行衛成ける

暮秋

鳴むしの命とみゆる秋なればくるゝはさこそかなしかる覽

田家秋暮

をしねかる山田のひたに言よせて過行秋をひきもとめはや

雨中九月盡

大空は秋の別をおもふらしけふのけしきはうち時雨つゝ

冬

山居時雨

〔新古今〕
柴の戸に入目の影はさしなからいかにしくゝ山邊なる覽

菊花繞殘

むらさきの雲間の星とみゆるかなうつろひ殘る白きくの花

老思殘菊

すきにけるわか盛をそおもふへきうつろふ菊は又もさか南

月前落葉

出るよりさえてそみゆる木枯のもみち吹おろす山のはの月

山家落葉

〔新古今〕
をのつから音する物は庭の面に木のは吹まく谷の夕かせ

閑庭落葉

山里にちる紅葉葉のくれなるはふむ人もなき物にそ有ける

落葉埋路

ふみしたきゆかまくおしき紅葉葉に道ふき分よ山の下かせ

落葉水紅

降からに谷の小河のもみつるは木の葉や水の時雨なるらん

羈中霜

朝またき初霜しろしむへしこそお花かりしく床はさえけれ

霰

いそへには霰ふるらしあまのかつく白玉數やそふらん

雪

吉野山はつ雪今宵ふりにけりあくれときえぬ峯のよこ雲

〔千載冬〕

きゆるをや都の人はおしむらんけさ山里にはらふしらゆき

きのふけふふしの高根はかきくれて清見か關にふれる初雪

〔新古今〕

おほとりの羽かひの山の霜の上に重ねてみゆる今朝の初雪

雲井より散くる雪は久かたの月のかつらの花にや有らん

世をわたる心のうちそ哀なる雪ふみわけていつる山人

何方へあにこきいてゝなこの蟹の雪をかつきて歸る成らん

世中のうきたひことに思ひたつ山路も見えす雪降にけり

朝またきしのふもちすり打はらひあたちか原の雪みるや誰

いか計りふりつみぬ覽あらち山岩のかけちに崩れおつる雪

旅宿初雪

はつ雪に我とは跡をつけしとてまつ朝たゝむ人を待かな

山家雪

つま木こる人さへ雪に跡たえてみしみ山路の事もかよはす

旅行雪

都人おもひしもせしふゝきしてさよの中山けふはこゆとも

夜聞水鳥

誰きかむ友ねにあかすをしたにもさゆる霜夜はいかゝ鳴なる

氷

すはの海や氷すらしも夜もすからきその麻衣さえわたる也

氷逐夜厚

すはの海浪にくたけし薄こほり渡るはかりに成にけるかな

寒夜千鳥

秋おふるあその河原の河おろしにたくふ千鳥の聲のさやけさ

蘆礙舟

霜枯の芦間にしふくつり舟や心もゆかぬ我身なるらん

炭竈

すみかまの煙にかすむをの山はとしにしられぬ春や立らん

冬月

白妙の雪吹おろすかさこしの峯より出る冬の夜の月

森間寒月

冬枯の森のくち葉の霜の上におちたる月の影のさやけさ

池上寒月

冬の池の玉もにさゆる月影やあくれはさゆる氷なるらん

野徑寒草

ひくまのにかりしめさしゝ淺茅原雪の下にて朽そはてぬる

冬夜

君こそは獨やねなんさゝのはのみ山もそよにさやく霜夜を

さゆる夜に衣かたしき思ひやる冬こそまされ人のつらさは

閏十月ありけるとし松のみちたりけるを人にをく

るとて

神無月時雨る月のかさなればたへすや松も下紅葉する

十月十日

比に山のもみちをみて

神無月もみちの山にたつねきて秋よりほかの秋をみる哉

除夜

はかなくて今年もけふに成にけり哀につもる我よはひかな

戀

戀のうたの中に

白らゆきあひのわせを菊そめにみし人故やいねかてにする

我戀をいはて知らする由もかなもらさはなへて世にも社ちれ

なゝわたの玉にも緒をはぬく物をおもふ心をいかて通さん

難波めのすくもたく火の下こかれうへはつれなき我身成鳧

かくはかり思ふ心は隙なきをいつこよりもる泪なるらん

あふ事をいなきさほそ江のみを盡し深きしるしもなき世成鳧

年ふれとしるしもみえぬ我戀やときはの山の時雨成らむ

戀しなん命は露も思はねとためしにならん名こそおしけれ

露深きあさはのゝらに小萱かるしつの袂もかくはしほれし

あふ事のかたき岩ともなりけるをいかなる戀の身を碎く覽

中々に思ひたえなむと思ふこそ戀しきよりも苦しかりけれ

あちきなや思ふかたこそ足引の山櫻とも身をはすてしか
心には岩木ならねは思ふ^{〔手越戀五〕}實たゝあやにくにかけぬなさけか
朝夕にみるめをかつくあまたにも恨みはたえぬ物と社きけ
ますらおのはとふく秋やはてぬ。忍ひし人は音たにもせず
たか山にはなれし鷹のかさなかれ行ゑもしらぬ戀もする哉
やそ嶋やちしまのゑそか手束弓心つよさは君にまさらし

これや此いせおの螢のすて衣あなあさましの袖のしほれや
思ひやる心はなれぬから衣かさぬと人に見えぬはかりそ
^{〔鶴古戀五〕}

戀しさの慰むかたやなからましつらき心をおもひませすは
鐘のをとにそゝや明けぬとおとろけはたゞ獨ねの枕なり晝
我戀をなかゝ人はしのひけりなさは人の物にそ有ける
^{〔手越戀三〕}

しはしこそぬるゝ袂もしほりしか泪に今はまかせてそ見る
河千鳥なくや澤へのおほひ草すそうちおほひ一夜ねにけり
あふ事のとをちの里は大和かは思はぬ中にありとこそきけ
^{〔玉葉戀二〕}

そなたより吹くる風をなつかしき妹か袂にふれやしつらん
秋の色や思ひの色のはひならん今一しほそしむ心地する
岩根ふみかさなる山を行よりもくるしき物は戀路成けり
^{〔手越戀二〕}

なみた河うきねの鳥と成ぬれと人にはえ社みなれさりけれ
忍戀

^{〔新古戀二〕}
人しれすくるしき物はしのふ山下はふくすのうらみ成けり
初言出戀

秋風にうへ野の薄打なひきはめかしつるかひもあらなむ
近隣戀
くれなるのすそ引程の宿なれと色に出ねは人にしられし
失媒介戀

よそ乍らはめかしつる飛火さへなとかき^{〔ちて〕}みえぬ成覽
不慮會戀

契をきし樹のはしき見えね共みとのまきはひ月日へに鬼
逢不會戀

鳥の子をためしにいひし程よりも君か辛さはかさなりに晝
老後戀

はし鷹のしらふに成て戀すればのもりの鏡かけもはつかし
終夜戀人

獨ねて床のうらはに夜もすからむせふ煙はあまのたく火か
夢會戀

夜と共にかへしてきつる唐衣いくといふにしるしみつ覽
旅宿戀

故郷をしのふね覺の草まくら露につゆそふ心地こそすれ
いもをゝきて都へしまの舟てにはうち泊こそ涙はかけゝれ
見書戀

鴈かねの雲のよそなる玉章に心もそらになりそはてぬる
乍隨不會戀

水ゆけは川そひ柳うちなひきもとの心はゆるきけもなし
每書會戀

かくしつるよるは古巢に行鳥のかりのねくらや我身成らむ
毎夜契戀

あたならす頼むるさまはもゝよ草言のははかり見ゆる君哉
毎夜違約戀

よなゝの空頼め社嬉しけれ忘れすかほのなさけと思へは
留信失戀
中々にかくれのをのゝをみなへし露の形身を何にをきけむ

稀逢戀

つきもせすくもてに物を思ふ哉とたえ勝なるふるのなか橋

寄源氏戀

逢事はかたひさしなる横はしらふす夜もしらぬ戀もする哉

寄社戀

夜とゝもに泪をのみわかす哉つくまのなへにいらぬ物ゆへ

寄花戀

面影にたつたの山のさくら花あかてやみにし人そかゝりし

寄更衣戀

おほかかなうすくやけふは成ぬ覽人の心もころもかへして

寄瓜戀

山城のこまの渡りの瓜よりもつらき人こそたゝまほしけれ

思高戀といふ事を

谷水に空なる月もすむ物を雲井の中におもはすもかな

契後隱戀

あふ事をたのむの雁のいかなれは思ひかへりて雲かくる覽

閑居増戀

つくゝと思ひ残せる事もなきなめは袖そぬれ増りける

題しらす

あひみてはかはる心もある物をつれなき中にたえせさり晁

人を待とてよめる

こしといはゝまたてぬへきにあらね共思ひ餘にとふゆふけ哉

さうしをならへてみかはしなからつれなかりける女

のもとへ

かつきするちかの浦には住乍らみるめ刈へき方もしられす

けさうしけれと心かたかりける女に

つれなしとかつは三河の八橋をなをこりすまに戀わたる哉

心かるき聞え有ける女のつれなくあたりけるに

我といへは兒手柏のおもてゝとくひもろきも結はゝれつゝ

宮はらに侍ける女に草のはにかきてさしいれける

いかにせむにゐはえまさる戀草の繁らぬ程にあふ由もかな

いかにとおもへと色にいてかたき女に

しのふ山下水のたえかねてむせふ思ひをもらしつる哉

しのひてたゝ一夜物申て後心ならすかきたえける女

のもとへ

【新動戀三】
いかにねてさめし名残の悲しさそ又もみさりし夜半の夢哉

宮つかへしける女のつねにもえあはさりけるに

しほみてはいりぬる磯と眺めつゝ袖のひるまもなき我身哉

つねにあひかたかりける女の是よりいはむときをま

てといひてやゝ久しく音もせさりければ

覺束ないせの濱萩をりよくはほのめかさむと言しいもはも

人にうたかはるゝ女にかはりて

杉くれをひく柚人はあまたあれと君より外によこめやはする

女をうらみていまはあはしなとちかことたてゝ後も

とよりけに戀しかりければあをきすちあるかみにて

かへるのかたをつくりてかきつけてやりける

ちかひしを思ひかへるの人しれすくちから物を思ふころ哉

女のもとにゆきてかたらひけるによもやまにたのめ

けれとなをうたかはしきことをのみいひてかりのこ

をひとつさしいたりければそのこゝろをとりて

鳥のこのかへるゝは契れ共十つゝとをもいふかわりなき

いひたえたるおとこのはてにはなきなをいひつくと

きゝてうらみむといふ女にかはりて
なきなにそうきも忘れてとはれけるたえにし人にいひやてまし

冬比女のもとにゆきてかへりてつかはしける

獨ねの心ならひそ冬の夜はなかし物とおもひけるかな

ねむころに思ひける女をえむしければいつれの神に
かいのりて心さしの程をしらむといへりければ

水上のしるしならねと山河の淺きけしきはくみてしりにき

人のむすめに物申わたり侍けるにおやかくともしら

ておもひたつとありときゝてわりなくおほえければ
〔宝藤三〕

我ためは雪にゝこる山の井のいかなる人にすまむとすらん

物いひわたりける女にほいにはあらてつかはしける
のちわすれかたくや思ひけむよみてつかはしける

戀しさのたくひも涙に袖ぬれてひろひ侘ぬるわすれ貝かな

かへし

戀しさに袖ぬるはかり思ひせは忘れ貝をもひろはさらまし

宮はらなる女のなさけなきけしき成ければいひやり
ける

哀をもかけてやみにし白浪のなこりをしのふ我やなになる

かへし

あたによる涙の心をわくからに哀しらぬに成にけるかな

人あまたかたらふときこゆる女のもとへ

うらうへに風吹磯のあまを舟いつれのかたに心よすらん

かたらひける女のいつちともなくゆきかくれたりけ
るかたみにや裳はかりをゝきたりけるをみて

ぬきをける袂をみてねをそ鳴いつこの浦のあまに成けむ

祝

週年屬石

君をのみときはかきはに祝ふ哉外には千世もあらしと思ふ

寄神祝

たらちねの神の賜ひしとたまは千世迄まもれ年もかきらす

祝兩人

武隈のふた木の松と祝ふかな陰をならへて千年のよとて

松不知年

幾世にか松のみとりの成ぬらん我みてたにも年は經ぬるを

竹久友

よふれと變らぬ竹のなかりせは千年の宿に何をうへまし

鶴契千年

君かすむ宿になれたるあしたつは千年の友と思ふなるへし

松殿關白〔基〕宇治にて河水久澄と云事を人々によま

せたまひけるに

〔新古賀〕

年經たる宇治の橋守ことゝはむ幾世になりぬ水のしら浪〔みなかみ新古〕

日吉福宜祝部成仲七十賀し侍りけるによみてをくり
ける

〔同〕

七そちにみつの濱松老ぬれと千世のゝこりは猶そはるけき

人の娘の着裳の所にて蘭花を折てよみける

乙女子かいまきの岡の藤袴こしゆふつゆやいはひをくらん

女の子うみてうふきぬこひければ松の枝にかけてや
るとて

千世に又ちよや重ねん松かえに巢たちはしむる鶴の毛衣

おさなき子をいはひていひつかはしける

千世ふへき二葉の松の縁子はおもかけさへそときは成ける
人の子の百日に

行末を思ひやるこそはるけけれけふそ千年のもゝか成ける
いもうとのはらに中攝政（兼實）のおほんむすめむまれ
給へる事をよろこひて重家のもとへ

我かとに小驢の松の生ぬれはをよはぬ身迄千世をこそまて
かへし 重家卿

思ひやれくらゐの山に枝しけくさかへ行へき松のけしきを
山階寺に萬僧供養して御卷數奉ける臺のおほひにあ
してにてかくへき哥とてこひければ天曆帝の四十賀
のとき彼寺御卷數の臺にかきけるうたは平兼盛なむ
よめりける例をおもひてよみける

かく山のいほつ眞櫛するはまて常盤かきはに祝ひをきてき
慶賀

君か世は遙に見ゆるわたつ海の限れるはてもあらしと思
平家の人のつかさなれるよろこひに

おひのほる平野の松はふく風のをとにきくたに涼しかり
四位してのち年をへて従上したりける折に人のよろ
こひければ

山かけにおひしらけたる椎柴のわかはへいつる春も有けり
隆信朝臣四位して侍ける悦につかはしける

紫のはつしほそめののに衣ほとなく色のあかれとそおもふ
返し

いつしかと色まし染むることのはにいとゝ身にしむ紫の袖
二條院御時中宮に哥合あるへしとて殿上ゆるされた
りけるよろこひ申とて重家のもとより

わかぬ浦に年へて住しあしたつの雲ゐに登るけふの嬉しさ
かへし

芦たつのわかの浦みてすきつるに飛たつはかり今を嬉しき
二條院位におはしましける時殿上にはへりけるに世
かはりて六條院御時殿上かへりゆるさるゝ人のもと
へ

立かへる雲ゐのたつに言つてむひとり澤邊になくとつけ南
重家若狭より能登にうつれる比よろこひ申とて
もしせはき國にや沈むと思ひしによく登りぬと聞そ嬉しき
離別一首

（蜀古別）
行末をいはひていつる別れちに心もとなきなみた成けり

蜀旅

我ひとり急く旅とそおもひつる夜をこめてのみ立かすみ哉
はしりゐのかけひの水の涼しさにこえもやられす逢坂の關
二條院門うせたまひて御はふりの夜よめりける

萬代とたのみし君を宵の間の空の煙とみるそかなしき
（玉璽雜四）

ありしよに衛士のたく火は消にしをこは又何の煙なるらむ
美福門院うせ給ひて後さるへき人々はみな色になれ
るをとおもひて俊成のもとへつかはしける

人なみにあらぬ袂はかはらねとなみたは色に成にけるかな
かへし 俊成

墨染にあらぬ袖たにかはるなり深きなみたの程をしらなむ
齋院いまた本院にもいたりたまはさきりける時わつら
ひておりたまひにけり其後ほとなくかくれたまひに
ければよみてかのおほちのもとへ
柳葉の移ろふたにもうかりしをいふはかりなき心地社すれ

五宮うせさせたまひて後御室へまいりけるに庭の松
を見ておほえける

うへをきし君にそ千世をゆつらまし神さひにける庭の松哉
中攝政〔兼實〕うせたまへる事をなけきて重家卿のもと
へつかはしける

泪川その水上のいかならん末の身をたにせきもあへぬに
かへし 重家卿

かけてたに思はさりしを泪河かゝる浮世にあはむ物とは
故北政所の御はてに法性寺殿にまいれりけるにこと
ともはてゝたかきいやしきちりゝになりたまふに
この葉の残りてあらしにちるをみて

今はとてちりゝになる故郷は木葉さへ社とまらさりけれ
花蘭左大臣有正北方うせられにける比はゝのおもひ
にて侍をそのわたりなる人のとへりければよめる
〔新古今集〕
世中はみしもきしもはかなくてむなしき空の煙成けり
としころのつまにおくれたる人のもとへつかはしけ
る

いもせ川かへらぬ水の別れにはきゝ渡るにも袖をぬれける
かへし

きゝわたる袖たにぬるゝいもせ河水の心をくみてしらなむ
とし比すみける人にをくれて後のはてのとなんといと
なみけるとき人のもとよりわかれし月日に成にける
あはれさなといへりければ

ありし夜の月日はかりは巡れ共昔の今にならばこそあらめ
物いひわたりける女のみまかりける後誦經すとてよ
める

けふや君後の世までも忘れしと契し事をおもひ出らむ
物申ける女身まかりける家にまかれりけるに梅花さ

かりなりけるえたにむすひつけゝる
きてみれば泪の雨もとゝまらすぬしなき宿の梅の花かさ
いとけなき子にをくれて侍けるを人のとふらへりけ
れは

おりゝに物思とはありしかと此たひはかり悲しきはなし
三歳なりける子にをくれてよめりける

いとけなき人おりたゝはわたり川淵瀬といはず水もひなゝむ
子にをくれたる人のなとかとはぬなとらみて侍り
けるかへりことに

夢とのみみゆる此世のはかなさは驚き顔にとはれやはする
したしきものにをくれてとかくしてつきの日よみけ
る

今朝よりは夜半の煙のなこりかと山の霞もめにそたちける
僧都教智ゆかり有てとし比したしく侍りけるかう
せて後四十九日のわさしける誦經文に書つけゝる

君をとふ鐘の聲こそ悲しけれ是そとするはてと思へは
雅重朝臣萬葉集をかりてはかなく身まかりにければ
かのあとをたつねたるにかへしつかはさんとてせう
そこはかきくしてをきたりけるをかなむといへり
けるをみていひつかはしける

濱千鳥はかなきあとをふみをきて身は何方の雲に消なむ
神祇〔を千〕

天の下のとけかれとや柳葉のみかさの山にさしはしめけむ
はふりこかさす玉串のねき事を亂るゝ神はもあらしと思ふ
釋教

世中は千草の花の色々に心のねよりなるとこそきけ

徒にはかなき道にいりにけり返すくもけふそくやしき
何事もむなしき夢ときく物をさめぬ心になけきつるかな
ふたつなき御法の舟を頼もしき人をもさして渡すと思へは
埋れてくまなき玉はある物をちりを拂はてねかふはかなさ

閑居夜雨

思ひ出ぬ事こそなけれつくくと窓うつ雨を聞あかしつゝ

暮鳥宿林

夕されは竹のそのふにぬる鳥のねくらあらそふ聲きこゆ也

朝望旅客

あさ霞ひなのなかに立にけり墨繪にみゆるをちの旅人

龍門 廿五名所中

やま人の昔の跡をきてみれば空しきとこをはらふ谷かせ

長柄のはし

歎かしな長柄の橋の跡みれば我身のみやはよにはくちぬる

住吉社

住吉の河松かえのゆふ烟はれぬおもひは神そしるらむ

是も卅五首名所中若浦哥

はるくといつち行らむわかの浦の浪路に消るあまの釣舟

二十五名所中に浮嶋を

わたつみの波にたゞよふ浮しまは宿も定めぬ海士や住らむ

述懷

としを経て梅も櫻もさく物を我身の花にまちそ侘ぬる
うきなからいまはとなれはおしきみを心の儘に厭ひつる哉
つくくとし面影を數ふれば哀いくらのむかし成らむ
夢のうちにいそちの春は過にけり今行末はよひのいなつま
こもり江においぬる芦の風吹は折ふしに社ねはなかれけれ

述懷百首のうち

世中を今はかきりと見る月の心ほそくそなめられける
よもきふの露と終には成物ををき所なく身を歎くらむ
初瀬川谷かくれ行さゝれ水あさましくても住わたるかな
わふるやま岩間にねさすそなれ松わりなくそのみ老や果なん
瀧火のほにこそ物をいはねともあまの恨はたえせさりけり
たくなはのくるしと人はおもはすと

賤のおのきその麻衣ぬきをあらめもあはてのみ明しつる哉
今はたゞ力車もつきはてゝやるかたもなき歎き成けり
我獨からなつなこそ悲しけれ身をつみてたにとふ人もなし
唐衣みさをも今はかなはしを何にかゝりてすすべき身そ
あるへしと思ひなるおの一つ松たくひなく社悲しかりけれ
むさし野のうけらか花のをのつから開くる時もなき心かな
恨めしと思ひはてぬる世中をしのふる物はなみた成けり
夕間暮お花吹こす秋かせの涼しきとにあふよしもかな
みこもりのゑくの若なにあらね共物思ひつむ袖はぬれつゝ
世中のつらゝはいつもわかねはや心とけたるおりもなか覽
うき汐の波にたゞよふ濱千鳥跡ととむへき方もしられす
いしふみやつかろのをちにありとさくえそ世中を思ひはなれぬ
立かたき思ひのつなにもとはれて引かへさるゝ事を悲しき
奥の下のひかしたに鳴鳥の音にもいかて人にきかれし
今はたゞをとなし河に身をなして浮世も人に見えしとを思
よも山を眺めてのみも暮すかないつれの峯にいらむとす覽
はかなしや雪のみ山の鳥たにも世にふるもは思はぬ物を
愁る雜哥のうちに

驚のいつも都へいてしかとこの春はかり音やはなかれし

ふる里をしき忍ふにもあやむしろおになる物と今ぞ知ぬる
三笠山立はなれぬるあま雲のかへしの風をまつ空そなき
故郷をしのふもちすり限なく思ひみたるゝさまをみせはや
徒然とより所なき心ちしてあしるに日をもかそへつるかな

いにしへおもひいてられけるころ三條大納言内大臣
いまた中將にておはしける時つかはしける

〔新古今下〕
なからへは又このころ忍はれむうしとみし世を今は戀しき

物名 からにしき

〔新勅〕
睦言もつきてあけぬときからに鳴の羽かきうらめしき哉

五宮にまいれりけるにいつみ殿の御所の御前なる田
にきりの所々たちたるをみて

朝霧のたえ／＼かゝるそも田はむらほにてたる心地社すれ

人のもとへつかはしけるふみをとなりに太皇太后宮
のおはしましける時かの宮の人とりいれてつゝみか
みに哥を書いておこせたりけるを次日その心をととりて
ちかの浦にふみたかへたる濱千鳥思はぬ跡を見しそ嬉しき

俊成入道うちきゝせらるゝときゝて我とのほのいり
いらすきかまほしき事を尋ぬとて

さをしかのいる野の薄ほのめかせ秋のさかりに成はてす共
讃岐の院に加階のそみ申と侍りけるか二とせ三年す
きにければしはすの廿日あまりのころほひよみて奉
りける

くらゐ山谷の驚人しれすねのみなかるゝ春をまつかな

此事鳥羽院にまうさせたまひければ哥のあはれに

とてたまはりにけり。

人のもとへまかれりけるにあるきたかへたるよしを

いひていれさりければいひいれける

はる／＼と山路をこえてくる月に宿かす雲のなとかなるかきからんい覧

みあれの日友たちのもとよりあふひをくくりていか
にしそめたりけることにか昔のちきりこそうれしけ
れといふ心をいへりければ

古の契りはしらすあふひ草おもひかけたる今日そうれしき

うへゆるされける比侍従代と云事にもよほされける
時少納言入道信西かもとへつかはしける

澤水になくたつの音や聞ゆらん雲ぬにかよふ人にとはゝや
返し 信西

蘆たつの澤邊の聲は遠くともなとか雲井にきこえさるへき
兵衛のつかさなる人におほやけに奏することありけ
るに申ける

もらさてはあらしと思へは柏木の杜のわたりを頼む計りそ
臨時祭の哥人にたひことにせめられければ

われ獨としを重ねてかさすかないくへになりぬ山吹のはな
哥のしるしにやゆるしにけり。

二條院御時殿上番かきたりとしてしはすの廿日あまり
にめしこめられにけり一めくりのほとはゆるさるま
しくてあくるとしまてあるへかりければ雪のふりけ
るによみける

年ふかく雪にこもれる山人は春に成てやいてむとすらん

太皇太后宮の大進にてとしひさしくなりにけるを亮
のあきたりけるをのそむとて

吹あくる風もあらなむ人しれぬ秋をみ山の谷のふるはを
しのひかたきなきけある人のもとへうれしきよしを

ふへみずしとて

此世には忘れかたみにつみもちて老のつとなる忍ふ草かな
おはやけによきと奏し申ときく人のもとへよろこひ
にたへかねてましける

嬉しさの袂にあまる心ちして涙さへにもこほれぬるかな

二條院御時中宮のおほむ方へ夏も涼しきはあきの宮
のちかきしるしにやといふ心のうたさしをかせたま
へりけるかへしを女房にかはりて

昔よりきよく涼しき宿のうちに秋の宮ゆへと思ふへしやは
したしき人に殿上ゆるされぬときつてそうせよとお
ほしくて女房のもとへつかはしける

ゆかりまで哀をかくる紫のたゝもとのくちそはてぬる

御返し

二條院御製

紫のおなし草はにをく露のその一もとをへたてやはせむ
讃岐のさとの海士庄に造内裏の公事あたりけるを守
季行朝臣はしたしかるへき人なりければいひつかは
しける

松山の便うれしき浦かせにこゝろをよせよあまの釣舟

此うたのとくにゆるしてけり。

四位申けるをゆるされさりければおとうとゝも四位
にて侍にいまゝてゆるされぬよしなと申文にかきて
奉るとて

やへゝのの人たにのほるくらゐ山老ぬる身には苦しかり覺
此たひなむゆるされける。

四位して侍し時重家卿のもとより

むさし野の若紫のころも手はゆかり迄こそうれしかりけれ

かへし

めつらしきわか紫の衣手は老の身にしむ物にそ有ける
左大臣經あはへ下られけるとともにまかりけるものゝ
る中人になりてくちはてなむすることをかなしひて
柳によせてうたよみてをくりける返事に

何かおもふ流になひく川柳そのねはつよし朽もはてしそ
天王寺にまうてゝかめ井にてよめる

こうふともきえしと思ふ露にても龜のの水に結ふ契りは
新院御位におはしましける時臨時祭の四位の陪從に
めされて侍りけるに弘徽殿のほそ殿に立よりて先帝
中宮女房をたつねいたしてひあふきのつまをおりて
かきつけてとらせける

〔風雅雜下〕

昔みし雲のかけ橋かはらねと我身ひとつのとたえ成けり
返し

八島もる雲の懸橋かはらねはたゆと名残はふみゝさるへき
四位の正下したりけるよろこひをわかき人々のいへ
りければよめりける

けふこそは位の山の峯までに腰ふたへにてのほりつきぬれ
かへし

くらゐ山老の坂ゆくしるしには猶峯までものほらさらめや
四位の後荷前使と云事にもよほしければよめる
あまた度靡きてさきに過にしをしるのもち夫に我を思へる

あたらしき四位おはかるにふるきものをしもかくつ
ねにおとろかしければよみてつかはしける

世にしけきわか紫をかきわけて古根を何に堀もとむらん
成範卿しもつけへなかされて後めしかへされたりけ

後つかはしける

鳥のこの有しにもあらぬ古巢にはかへるにつせねをや鳴覽
かへし

かた／＼になきて別し村鳥は古巢にたにもかへりやはする
みあれの日あかたへゆきける人に葵をつかはすとて

けふはよき手向をくさを程後のあふひを神やおもはむ

法性寺殿にて人々侍ける中に女房のたき物をいたさ

れけるを後にみければあらぬ物にて有ければわらひ
てやみにけり又の日昨日の心をそさなと女房のいへ

りければよめる

玉たれのみすのうちより出しかは空たき物と誰もしりにき

これを女あるしめてゝ。まとのたき物をたまはせ
たりけりとなむ。

人のもとより雉子をゝこすとしてよめりける

是を見よ春のきゝすの我もさを妻戀かねてなれるすかたを

かへし

妻戀になれる雉子のさまみれは我さへあやなほろ／＼と鳴

わらはともたちの受領になりてくたるに馬のはなむ

けすとして

二葉より花咲迄にみなれ木のとせの春やかすみへたてむ

臨時の祭に四位陪従といふ事にめしいたされてかも

にまいりてよみて人のもとへつかはしける

こもりぬに沈むかはつは山吹の花の折にそねはなかれける

里海士と云所をしりけるかたかふ事有けるをとふら

ひたまふとして宇治前大僧正覺忠のもとよりつかはし
たりける

夜とゝもに心はかりやこかるらん舟なしたる里のあま
かへし

はるかさむかたもおほえす里の蜚の焼もの煙下むせひつゝ

このいのりにかしこにいまする神にあふきを奉ると
てかきつけゝる

浦風はよみに吹とも里のあまのもしほの煙うるはしみとて

そのゝちほとなくなをりにければ。神のしるしと
よろこひけらし。

靜蓮入道昔おとこにておなしく出家せんといひけ

るかとしをふるまでをそき事をはちしめて世をすつ
るは人のためにはあらぬものをなといへりければか

へりことによめりける

我身とはおもはぬ物を世中も人のためこそすてまほしけれ

沙彌觀西となある文をさしをかせたるをみれば藤原

資基かてにてありあやしみて使にとへはかしらおろ

したるよしをいふによみてつかはしける

昔にもあらぬなくさの濱千鳥跡はかりこそかはらさりけれ

やまとの國いそのかみと云所にかきのもとと寺と云所

のまへに人丸かはかありといふをきゝてそとはをた

てたりかきのもとの人丸墓としるしつけてかたはら

に此うたをなんかきつけゝる

〔玉葉雜五〕

世をへてもあふへかりける契り社苔の下にも朽せさりけれ

そのゝちむらの者とも。あまたあやしき夢をなん
みたりける。

右清輔朝臣集百花庵宗圓本書寫校合

源師光集

霞の心を

朝またき霞にけりなむこの浦に出る友舟かすかくれゆく
こゝろある海士のすみかのいかならん霞こめたる松か浦島
置しくしきつの浦のうけのをは心あてにやたつね行らん

雨中鶯と云を

うくひすは梅の花笠きたれはや雨にも聲のしほれさるらん

隣家鶯

春の來ぬ宿としりてや鶯のこなたの竹に枝うつりせぬ

行路鶯

鶯の都にきし聲す也なれもやたひの空にいてつる

梅を

色も香もしるにはあらず梅の花見れはなけきのわする計そ

さくら

みよし野の花にまかふる白雲のはるゝはそれもおしき也鳧

中將有房朝臣家哥合に櫻を

人しれぬ心の行て見るはなは残る山へもあらしとそおもふ

故郷花

ふりにけるしかの櫻の春とに幾よの人のこゝろ見るらん

宰相入道教長家哥合尋山花

浮世には思ひもいらて吉野山はなゆへならず岩のかけみち

はな

山さくら咲にけりとも見ゆるかな春の目くらしきえぬ白雪

見よし野の花の錦に春風にはほひをさへも織つけてけり

籠り居て侍ける比白川の花見になむいきたるとて左

大將（所定）さそはれしかは法性寺にて

いさやまた月日の行もしらぬ間に花の春ともけふ社は見れ

花尋樵夫

爪木をは花の陰にや休めつるさらはいつくと我にをしへよ

白川に侍けるに花のさかりに左衛門督家道のもとへ

申つかはしける

山里の花のあるしを尋ねても宿からなれやをとつれもせぬ

かへし

左衛門督

あやなしや花のなたてを思ふよもとはて日數の過ぬる物を

雨中柳

春雨になを立のほる煙かと思ゆる柳のこすゑなりけり

白川にて殿上の人々花見侍けるにいさなひくして歸

鴈といふをよみてやかてうちへかへりまいり侍し

に

むかし見し雲井ははやくたえにしを羨しくも歸る鴈かね

春のくれを

花を見てうき世の中も慰めし春にさへまた別れぬるかな

卯花

我宿の月のひかりとおもふらんをのかさとくさける卯花

時鳥

ほととぎす待えぬ年はなけれとも思ふはかりはまた聞ぬ哉

左大臣家歌合時鳥

郭公こゑなおしみをあやめ草玉にぬく日をけふとしらすや

五月雨

五月雨の日をふるまゝにさはた河その高橋はなのみなり鳧

聞五月郭公

ことしたに聲なおしみる時鳥をのかき月のそへるしるしに
山里に侍けるころ郭公はなくやと人の尋侍りしかは
いたく鳴てあまりなるよし申たりしかは

經正朝臣

今もさは昔もきかすほととぎす厭ふためしに君やなりなん

返し

足引の山ほととぎす古も物おもふ人はいとひやはせぬ

夏虫

夏虫をはかなくよそに思ふ哉これは此よにもゆるはかりそ

夏月

夏のををうらみもはてし月影の名残は秋もかくそ惜みし

橘寄無常

見むといひし君もまちえぬたち花は花の盛もあちきなき哉

七夕

秋にしもゆきあふとは七夕のなかきよとてや契りそめけむ
棚機にあひそめ衣ぬきかさなかへる色はいみもこそすれ
としに待あふとよりも七夕はなか／＼けふの暮や久しき

雁

斯はかりいとふうき世をいかにして又かへりくる初雁の聲
夕まくれ旅の空ゆく雁かねはふしみか田井やとまりなる覽

此期關

重家卿哥合戀

戀しとも又つらしとも思ひやる心いつれか先にたつらむ

戀のこゝろを

つらかりし言の葉をなと恨み劔それをたに社きかす成けれ
早く見しその面影のはなれねは君ゆへ身をも捨ぬとをしれ

久しくをとすれすとして——小侍從——
文見ぬも歎きにあらす岩橋の渡しそめたるとたえならねは
かへし

葛城の神の心をあはれともとけぬつらさに思ひしるかな

寄水鷄戀

槇の戸をたゞく水鷄のそれか共驚かぬまでとはぬ君かな

こひ

汐のみつ磯への草も限りあれば見る日は少しありと社きけ
後の世と契らは身をも捨ててむおしむ命もたれかゆへそは
打歎きしなはやとのみいはるゝは逢見ぬともいけるとかかは

雨中戀

辛き社雨にはいとしられられかくふりにしもぢかさはりし

秋の比しはゆあみになにはのかたへまかりたりしに
頼政卿もわたのへかかたに侍ると聞て申つかはし侍

し

旅ねするかたは浦々かはれともおなし都や戀しかるらん

返し

君かすむうら悲しくそ我はおもふしのふ都も誰かゆへそは

京へかへるとて

此里もうらなれにけりあきたては都を出し心地のみして

難波よりかへりて侍しに左大將實定のもとより

都たに秋のあはれは有物をひなのなかちのものかたりせよ

返し

思ひやれひなのなかちの淋しさはいとふ都へかへる心に

定長なにはのかたにしほゆあみにまかりてかれより
申をくりて侍ける

定長

尋てもなとか厭はぬ芦のやのなたのしはやの秋の旅ねを

しほのゆにまかりたりしをこの人もとはす侍しか申
たりし

君にこそならひそめしか旅ねする秋のあはれをとほぬ心は
中將隆房朝臣雪のいみしく降侍るに月おもしろかり
しに内女房あまたくして法勝寺へなんとて立よりて
いさなひ侍りしかはまかりてよもすから遊てかへり
てかれより申つかはしたりし 隆房朝臣

あはてこそ昔の人はかへりけれ月と雪とをともに見てしか
返し

月寒る雪かき分てとふにこそふるきかひある宿としりぬれ
その夜大鳥といふ風俗なとうたはれて侍□いてらて
そへてつかはしける

くまもなき月と雪とに大鳥の羽かひのしもをいつか忘れむ
月あかく侍しに隆房朝臣のもとより

君にあはて日數ふるやのいふせきは今夜の月も朧にそもる
返し

月見てもまつおもひやる我心かけとなりてや朧なるらむ
此間闕

大將になりて正月に雪の降たるつとめて左大將のも
とより

雪つもる年のしるしに花のさくはねのはやしをなとか尋ん
かへし

はのはやしはなさく春の嬉しさをつゝむほとなり谷の埋木
賀茂重保禰宜になりたるに申つかはしける

千早姫その神山のかひありて木たかくなるを聞そうれしき

かへし

神山のみねの櫛をとりもちて君かいふこそうれしかりけれ
いはひを

君かよの數にはたらしもゝつてのやその落路の眞砂なり共
秋比兼雅朝臣宇治に侍と聞て申つかはしける

時しもあれ都のたつみ打しけれ君かなかめを思ひこそやれ
返し 兼雅朝臣

詠めやるよを宇治山も打しけれ昔を忍ふけしき成かな
久我内大臣家にて植梅待花といふとを

春まての命はさためなけれとも若木の梅をねこしつるかな
右大臣家哥合述懷

今は唯いけらぬ物に身をなしてむまれぬ後のよにもふる哉
廣田歌合同心を

行末のかゝらむ事もしらすして我たらちねのおふしたて劍
(身とも猶動)
述懷十首中に

憂事をおもひしらすと思ふらむ思ひなからにする我身を
さりと共とはかなく世をも頼む哉有へきほとは見ゆる我身を

憂なから猶おしまるゝ命かな後のよとてもたのみなければ
慰る方こそなけれ身のうさをいひ合すへきたくひなければ

例ならぬと大事に侍ける比七月七日大輔かもとより
七夕にかす衣手のぬるゝかなこれやかきりのたひと思へは

と申たりしかは

此間闕

皇嘉門院近江世をそむきぬと聞て申つかはし侍し也
人はみな苦しき海に沈むまでのりうかひぬるあま小舟かな
かへし

しりしらぬ苦しき海の人をみて渡さんとおもふ海士の釣舟
二條院かくれさせたまひての比三河の内侍かもとよ

り
よと共に昔をこふる泪のみつきせぬみとはしらすや有けむ
かへし

見せはやな昔こふらん泪にも物おもふ袖のまさるたもとを
人々歌かき集むると侍るに集つかはすとして

季能朝臣

人なみに打いつるかなせたえにし淺澤水のなけれなれとも
かへし

古しへのなかれわすれす思ひ出る心の水のふかさをそしる
海上眺望

朝なきにしほちはるかに出にけりかもめにまかふ沖の釣舟
別

こゝろとの別をなにも歎くらむやかてかへらぬ旅も有世に
陵園妾

松の戸を一たひさしてあけねとも猶いりくるは有明の月

右源師光集雖有不審依無類本不能校正

群書類從卷第二百五十七

和歌部百十二家集卅

源有房朝臣集

春

子日

野邊みれはまた二葉なる姫こ松いつくに千世のかけ籠る覽
賀茂哥合に霞を

見わたせは明石もすまも霞していづれなるらんをのか浦々

橋邊霞

春霞かつらき山をよこされはひとりとたゆるくめの岩はし

海邊霞

霞たつゑしまのはなをみ渡せはたみかへしたる心ち社すれ

雨中鶯

雨ふれと聲もしはれぬ鶯は梅の花かさきてや鳴らむ

梅香渡水

心のみ池のあなたにかよふかはむめも匂をこちをこせけり

山家梅

誰みよとありかもしらぬ山かつの垣ねの梅のさかりなる覽

對山待花

これやこの花のためしと思ふよりめかれせられぬ峯の白雲

櫻を

春はみな涙をこえけるさくら花山やさなからすゑの松山
春とによしのゝ山の花見にとわけなれにけるすゝの篠原

日吉歌合に花を

花ゆへにしらぬ山路のあらは社いるさかへさの葉をもせめ

重家卿歌合に花

ねにかへる時をみんなこそ悲しけれ花にさきたつ命ともかな

櫻誰家

たかりの梢としらぬはななれと散はよそなる心地こそせね

水上落花

山河のなかれを見すは水上に花ちりけりといかてしらまし

二條院の御前にて遠尋殘花といふ事を

ちりぬらんと思ひおもひを尋ねこし嬉しかりけるをを櫻哉

關路歸雁

出雲なるてまの關やにきこゆなりやくもを分てかへる雁金

喚子鳥を

さらぬたによのうき時はいりなむと思ふ山路によふこ鳥哉

藤花

我宿のふちのはつ花さかぬまは心のまつにかゝるなりけり

春暮

しぬはかり暮ゆく春のおしければ命もけふやかきり成らん

夏

郭公

かへりぬる春のおしきやわするゝと山時鳥はやもなかなむ
前中納言師仲右近馬場にて人々郭公の歌よませられ
しに

雨中郭公

ほとゝきす里なれそむるいてたちは山路に歸るとな習ひそ
ぬるとてもいそきなすぎそ郭公いつも雨の下としらすや
水雞を

菖蒲

今こむといひおきて人のいぬるよは敲く水雞に答えをそする
菖蒲
早苗

五月雨

春かけてうちしをきたるゆひなれは門田の早苗とる程もなし
五月雨は田中のいと水こえてこなきつむへき方もしられす
五月雨は水まさるらしそま河におろす筏のさほもかよはぬ

社頭盧橘

舞さぬかあたりに匂ふたち花はいよくすゝの心地社すれ

故郷螢火

古里はあしのやへふきくちはてゝ螢のみ社ひまなかりけれ
樹陰晩涼といふとを
涼しさは秋にかはらす松かねに夕なみかくる天のはしたて

秋

旅宿七夕といふとを

七夕になにをかさまし旅衣かたしくほかの袖しなければ

草花未遍

秋をあさみあらそふ花もなきのへに獨も歩むをみなへし哉
經盛卿家哥合に草花を

小萩原わけゆくほとは古里へかへらぬ人もにしきをそきる
皇太后宮御方にて霧間野花といふとを

われといへは野原の霧にかくろへて風にはなひく女郎花哉
高松宮の哥合に雨中草花といふ事を

龍田姫をのれは雨にぬれぬ共おはな袖をまくりてにせよ
萩

夕まくれおき吹風のおとせすは秋の哀となにをいはまし
閑居萩といふとを

哀とも誰にかいはむ夕まくれひとりのみきくおきの上かせ
雁

むれてくる雁そなくなる哀又かへらはかすのたえしとす覽
經盛卿家哥合に鹿を

むへしこそをしかなくなれ妻こひぬ人もかなしき秋の夕暮
田家秋霧

霧のうちにとはとふけうなる尋ねゆく山田の庵の道のみえぬに
鳴 董

故郷明月
古里のなはのつふらえもとはむ昔もかゝる月はすみきと

高松宮の哥合に依所月明といふ事を
これやこの明石の浦とはすとも空にしらるゝ月の影かな

乍臥見月といふ事を
月みれと枕にちりもるさり覺ねやの板間のひましあはねは

故郷秋風
秋風は葎のかとをたゝくとも萩の葉ならてたれかこたへん

紅葉未盛

山姫か木々のもみちの色衣まつかたへとはそめはしめける

落葉

山河はわれと柵かけすともみち吹おろす風にまかせん

羈中落葉

まゆみちる安達か原に朝たてはこの葉くつはく駒のつま音

海邊秋暮

やよや秋こよひはこゝに旅寐せよはまゝつかねに枕並へむ

羈路秋暮

ふるさとの人のみとこそ思ひしは秋も別るゝ旅にそ有ける

冬

時雨

ふらす共みのしろ衣きてゆかむ時雨はかねてくもる物かは

山居初雪

み吉野のきさ山陰のすゝの庵に雪のうはふきけきとしてける

羈中深雪といふ事を

まくりての袂もぬれぬたひ衣かゝる深雪のはれまなければ

行路雪

過にける駒のあとめに任せつゝ我とは雪をけかしやはする

雪中客來

冬のうちはとひくる人を厭はるゝ跡つけまうき庭の雪ゆへ

雪

まきもくの檜原の木末すきぬらん雪の下をれをとしきる也

よも山になへてみ雪のふりぬれは何れか甲斐の白ねなる覺

晩頭千鳥

須磨明石をのかうらく定めおきて暮れはかへる千鳥鳴也

曉千鳥

しほの山かよふ千鳥の聲すなりさしてか磯の明くれのそら

驚かす千鳥のこゑのなかりせは明るもしらしいねのあま

千鳥を

とをかに鹽やみつらん友千鳥たつなるたひに聲の近つく

湖上水鳥

たはれいつるしかつの浦になれぬれ汀はなれぬかすの村鳥

冬月

妹背山ゆきけの雲やはれぬ覽よしのゝたきに月のさやけき

社頭冬月

霜さゆるちきのゆきあひにもる月の幾よかみつる住吉の神

水邊冬月

冬河のかものうはけに照月ははらへとむちぬ霜にそ有ける

戀

初戀

いかてもと思ひ初つるその人の袖にはけふやすみのつく覽

忍戀

我戀は沼のみくりのみ隠れてねはふと人にしられすもかな

つれなかりける人のもとへ

袖によもあふなはたゝし歎きたに頼めよしはし心やすめん

はしめあらはれてのちしのふこひ

もらしてし袖の雫をいかにせん又いまさらに忍ふもちすり

朝遲歸戀

見る儘に伏屋の隙はしめ共なをきぬゝになりそわつらふ

遇不遇戀

逢事はたか心よりありしかはまたひきかへてつれなかる

隔衣戀

鳥の音を聞てのゝちもゆるさぬは妹か衣のせきにそ有ける

花下戀

一すちに人や見るらん散花を惜むにのみもぬれぬたもとを

春戀

春さてはまつのはとのみ思ひしに我戀草も色まさりけり

戀遠所人

思ひやる心はみちに旅ねしてかつく君を夢に見つらん

高松宮の哥合に隔關戀といふことを

清見かた涙さへかへる關なれとかよふ心はとまらざりけり

契不遇戀

ひたすらに恨みもはてしあひみむと頼めし事も情ならずや

女許へふみつかはしたるに返事にはあらてもとのふ

みをかへしつかはしたればたちかへりつかはし

思ひきやうちに藻鹽もかき添ぬもとの千鳥の跡を見んとは

被返書戀

玉章をひたちの帶と思ひせはかへるにつけて嬉しからまし

隔物談戀

つの國のこやとはいはて語ふはたゝ蘆垣のとなたてれとや

住吉の岸ともいはしわすれ草人のこゝろにおひけるものを

寄萩戀

風わたる籬の萩をかことにて人まつよはいこそねられね

寄檉戀

頼めをく人なき身こそあさかほの夕をまたぬたくひ成けれ

戀のこゝろを

戀しさは心つからのとなればかこつ方なきねをもなくかな

いつか君なかな黒髪のねきたれをわか手枕のたはと見るへき
戀にこそ沈みはてぬる身なれとも泪はまたもうきぬへき哉
戀はたゝふたもしなれと玉章にかきも盡さぬ心地こそすれ

雜

殿下はしめて閑院つくらせ給て人々に哥よませさせ

給ひしに對松爭齡といふ事を

春日山常盤かきはに榮ゆへきふちにはちよの松もいかにそ

住吉哥合

國々の民のかまとを見渡せはみなうるはへるあめの下かな

刑部卿範兼卿三位してのちはしめて歌よみしに松伴

榮久といふ事を

千歳まで榮ゆる松のなかりせはなにかは君か類ひならまし

二條院の殿上にさふらひしに藏人を御つかひにて歌

よみてまいらせよとおほせられしかは

津の國の難波のみとくたらまし和哥の浦浪たてぬ身ならは

むすめにおもひをかけてはゝのもとへたひゝふみ

つかはすとて

はては皆そのこの本につもら南はゝその森にちらす言の葉

天王寺なるわらはのたいこのさくらゑにまはしてか

へりしに申つかはし

ふる袖の名残をおほみ從はんはの海にてみるめかつけよ

古みやらはに女房あまたして花のうたともよまれけ

るに心ならずまいりあへしをやかてよきおりなりか

さねよとせめられてにはかによみてまいらせてのち

のこりのうたゆかしきよし申せはねうはうの中より

みれば皆花のなたての言のはをかき集めつゝいかゝらん

返し

君たにも花のなたてといふならは我ちらしけむとぞ悔しき
殿上の人々あしるへまかるとてたいこに侍しをすぎ
さまにいさなひあはれしにちゝの入道わつらひしか
はたちさりかたきよしを申てひわりこはかりをつか
はすとてかきやりし

諸共にゆかましものを網代木にひをまつ老の波なかりせば
わつらふ事ありてたいりへひさしくまいらざりしに
女房藏人にふみをかゝせてとひたりしかはかへりこ
とに

ひとつとも嬉しからすはなけれ共その玉章と思はましかは
したしき人々はつせにまいるに中將所望せしころお
まへにをしつけよとて

この瀬をはせく人もなし初瀬河さのみはいかゝ沈みまへき
除目のころのそむ事有て細劔をやはたへまいらすと
てつゝみかみにかきつけし

男山たむくるたのかひなくは此世のことを思ひきれとや
高倉院かくれさせ給て諒闇のとし經家朝臣おやの服
にてありければ四月一日申つかはしゝ

誰もみな衣かへせぬ年なれば我身ひとつとおもはさらなむ
同年七月七日中將泰通のもとへ故院の御事をおもひ
いてゝ申つかはしゝ

なき影をいつかみるへき渡り川けふも逢瀬のあらは神あらめ
父の服ぬきしときいもうとなるひとのもとへ申つか
はしゝ

麻衣なとひとつせと限りけむ是ばかりこそかたみなりつれ

信解品のころを

子と思ふ泪のたまをぬきかへしもとの衣のかざりとやみる
右有房朝臣集一冊。元祿己卯冬以ニ花山院入道右府院鑑
公本一寫之。

右源有房朝臣集以百花庵宗固本書寫一校了

平忠度朝臣集

春

立 春

東路や一夜かほとに來る春にいかて先たつかすみなるらん

霞

いかなれはおなし霞のなめやる遠ちの里は深くみゆらむ

經盛卿家哥合に霞をよめる

さいたつまうら若みよし野の霞隠れにきうす鳴なり

子 日

千世ふへき子日の松に袖かけてひくまの野へにけふはほしつ

若 菜

雪分てゑくの若なも生にけりけふのためとはいかてしり劔

雪中若菜

いかてわか野中の雪に跡つけて下もえ渡るわかなつまうし

殘 雪

年の内は亦ふりなむと思ふたに消るは雪の惜くやはあらぬ

梅

香をとめて人はこすとも梅の花よきてをわたれ春の山かせ

夜思梅花といふ心を人々よみ侍りしに

むめの花よるは夢にも見てしかな闇のうつゝの匂はかりに

故郷梅花をよめる

古郷はそこともみえす梅かえの匂ふや宿の軒端なるらん

柳

青柳の糸染かけて佐保姫は見にくる人のなきやうらむる

櫻

惜かねちる花ことにたくふれは心も風にさそはれにけり
みよし野の花咲にけり常よりも朝ゐる雲の晴るゝまもなき
賀茂哥合に花をよめる

爲業哥合に故郷花

さゝ波や志賀の都はあれにしを昔なからの山さくらかな

東山の花見侍りけるに家つとはおらすやと人の申侍

りければ

家つともまた折しらす山さくら散ぬに歸るならひなければ

呼子鳥

聞佗て我かとはかり答ふれとさもあらずとやなをよふこ鳥

苗 代

苗代にせきやとむらん垣ねもるいささいら小河の音よはるなり

人々三月盡の哥をよみ侍りしに

我身にはよそなる春と思へとも暮行けふは惜くやはあらぬ

明るまてなかめあかして

暮ゆくもさすか名殘やとめつらむ哀かはらぬ明ほのゝ空

夏

卯 花

心あらむ人もかくこそ植てみめ賤か垣ねにさけるうの花

卯花藏水

もり出る音にてそしる卯花のしつ枝しからむ玉河の水

郭 公

待えたる心地こそせねほとゝさす遠里小野の夜半の一こゑ

海邊郭公

卯花と浪やみゆらんほとゝさすまかきか鳴にきつゝなく也

菖蒲

あやめ草たつぬる人の心にそまつ長きねはかゝりそめける

夏草

小萩原また花さかぬ宮城野に何を妻とて鹿のふすらん

隣家盧橘

匂ふなる花立はなやいにしへをやとの隣にさそひきつらん

螢

身の程は思ひあまれる景色にていつちともなく行ほたる哉

瀧下螢火

秋近くなりやしぬらん清たきの河せ涼しくほたる飛かふ

夕氷室

ひむろ山あたりの外やいかならん夕風すゝしみな月の空

秋

立秋

秋きぬとしらて聞とも大かたはあやしかるへき風の音かな

月前草花

萩かはな手折はぬる袖にさへ露をしたひてやとる月かけ

薄

花すゝき靡くけしきにしるき哉風ふきかはる秋のゆふくれ

萩

衣手に吹くるかせもおきの葉に音信てこそ身にはしみけれ

故郷萩

萩原と見るそ悲しきたかまとの尾上の宮の昔ならねと

河原院にて故郷鶉といふ事を人々よみ侍しに

鱧かまの昔のあととはあれはてゝ淺茅か原にうつらなく也

鹿

さよ更て鹿の音遠くなり行は峯の嵐や吹よはるらん

さらぬたに秋のね覺は悲しきをいかにせよとか鹿のなく覺

霧

旅人にあらぬ我さへ夕きりにわたせわするゝみなれ河かな

駒迎

小夜更て世田の長はし引わたせ音もさやけし望月の駒

月

宵のまも空やはかゝるいかなれは更ゆくまゝに月のすむ覽

月影はいつことわかし物ゆへに宿に心のとまらざるらむ

おしか野のたかはかりしきさる夜を後も忍へとすめる月哉

野徑月

月影の入をかきりに分行はいつこかとまり野原しのほら

關路月

月影もうつしとゝめすあふさかの關は清水の名に社有けれ

九月十三夜

おしといへと秋の半の月はなほ今宵もありと思ひなされき

遍照寺にて人々月見侍りしに

あれにける宿とて月はかはらねと昔の影は猶そゆかしき

旅宿擣衣

旅ねする竹田の里にうつ衣一夜の程にきゝそなれぬる

法金剛院にて池邊紅葉といふ事を人々よみ侍りしに

青葉をは池のみ草にまかへつゝ色つく枝そ影は見えける

山家の秋の暮といふ事を

山里にすみぬへしやとならはせる心もたへぬ秋のゆふ暮

冬

初冬

萩の葉に哀しらせし風の音の今朝はいつしかと烈しかる寛

落葉

峯つゝき吹こす風にさそはれてもみち散かふ常盤木のもり

霞

うちはらふ心ちこそすれ旅ころも袖にたはしるけさの霞は

雪

かさこしの峯にたまらぬ白雪ははれゆく空に猶そふりける

海邊雪

うちそよく水のむら芹下折て浦さひしくそ雪ふりにける

千鳥

うさねする磯間の浦のさよ千鳥友よひかはす聲きこゆ也

月前千鳥

小夜更て月影さむみ玉の浦のはなれ小嶋に千鳥なくなり

曉更千鳥

ねさめするわれしもともととおもはてや野嶋か崎に千鳥鳴か友としもイ寛

炭竈

山高み雪けの空と見ゆるまで幾すみかまのけふり立らん

除夜

人数にあらぬをなけく我身さへ春とあすよりいはふへき哉

戀

初ていひ出る戀といふ事人にかはりて、

わか身より戀はよそなる物なれや忍ふ心になはさるらん

互忍戀

戀しなむ後の世までの思ひ出はしのふ心のかよふはかりか

失本心戀
かゝらしと思ひし事を忍ひかね戀に心をまかせはてつる

戀遠郷人

こひわたる妹か住家は思ひぬの夢路にさへそ遙けかりける

隔河戀

まれにたにあふ夜もあらは天河隔つる星やたくひならまし

月前戀

月影や深き戀路のしるへなるなかむるまゝにおもひ入ぬる

神かけてちかひ侍ける女のさうしなるよしを申あひ

侍らさりければ

思ひきやかけて誓ひしその神のいもゐによせてたえむ中とは

忍ひて人に物申けるにかねもうちつなりといさめけ

れは

鳥の音をしはし待みよさゆる夜は霜にもあへす鐘もなる寛

浮世をは歎きながらも過しきて戀に我身やたへすなりけむ

いかゝせむこはよの常の習ひそと戀しもなそや思ひなされぬ

おもひ出る人なき夜半の袖たにもたゝなる物か秋の寢覺は

經盛卿の福原の山庄にて寄松戀といふ事を

頼めつゝ日數積りのうらみても待より外のなくさめそなき

寄名所戀

身をすては哀共みよ猿澤のいけるよにこそなさけなからめ

寄源氏戀

あふとみる夢さめぬればつらき哉旅ねの床にかよふ松かせ

夢中會戀

夢さめて名殘に堪すなりゆくはあふとみつるにかへん命か

年をへてつれなき女に

恨みかね背きはてなむと思ふより浮世につらき人を「も」嬉しき

絶後悔戀

忘れに心をのみを恨むへき人はたえねといとひやはせし
 なにとなくいひかはしける女にしたしきさまに成へ
 きよしをいはず侍て後心うきたるさまに見えければ
 いとはるゝ方こそあらめ更に又よその情は變らさらなん
 (正體)
 雑

風之音 閨冷夢驚といふことを人にかはりて
 ある所の屏風の細にあらたる家に老人花みたる所を
 人々よみ侍りしに

夏淋し昔にあらすふりぬるをしらぬ翁と人やみるらむ
 女房大輔に初てあひて哥よみ歌談などしてあくるあ
 したにつかはしける

難波津のふるきなかれをせきとむる心の水を深くみしかな
 友たちの今まうてくると申て言もし侍らてあくるあ
 したに月みる人にいさなはれて心の外なりしさまと
 ことなしひけしたりける返事に

月をみて侍れぬ夜はのあらは社頼めてこぬもわきて思はめ
 法輪寺にこもりたる人の申送りて侍りける

思ひたつ心よはくもぬるゝかな草の庵にすみそめの袖
 返し人にかはりて

草の庵は思ひやるたに露けきにさそ墨染の袖はぬるらん
 なけく事侍りける頃おなしさまなる人のもとより申
 をくりて侍りける

他人の涙にぬるゝ袖に又秋は露さへをくそかなしき
 かへし

さもこそはおなし歎といひなから露もかはらぬ袖のうへ哉

世のはかなき事なと侍従に申て侍りしほとに山里に
 籠りぬるを聞て申送り侍りし
 あやなしな世をそむきなは忍へとは我こそ君に契り置しか
 長恨哥のこゝろを

冬來ては何をかたみに眺めまし淺茅か原も霜枯にけり
 盛方朝臣書置たるたりけるも萬葉集を彼人身まかりて
 後後室のもとへ返しつかはすとて

有し世は思はさりけむ書置てこれをかたみと人しのへとは
 返し

見ても猶袖そぬれぬるなき人のかたみと忍ふ水莖のあと
 忍てもの中ける女心にもあらす絶侍りにける後こと

人にあひかたらひてほとなく身まかり侍りにければ
 誰ともなくて母のもとにさしをかせ侍ける

諸ともに心のまゝに歎くらん人さへはてはうらやまれつゝ
 親のいさめければ中たえにける女の身まかりぬと聞
 てよみ侍りける

わかる共有しなからの中ならはふたゝひ物は思はさらまし
 法華經品々の哥よみし中に信解品

たらちねときかぬ先より大方は怪しき迄をなつさひにける
 提婆品

よそに社仇とみゆとも千年までつかへし中は隔てしもせし
 安樂行品

そのたまを結びこめける元結もとくへきほとの有ける物を
 観音品

おり立て頼むとなれば飛鳥河淵のせになるものところきけ
 八幡臨時祭

神さひて猶やさしきはもろ人のあさくらかへす春の明ほの
賀茂哥合に述懐の心を

述 懷

〔玉麟集五〕
なからへはさり共と思ふ心社時につけつゝよりはりはてぬれ

祝

千年とそ先いはれたる君かためおもふ心はかきりなけれと
三位中將重衡のもとより内の御大はん所へ梅につけ
てまいらせむとてこはれて侍りしに

〔そい〕

千世經へき君かゝさしに此春は手をりそめつる宿の梅かえ
右之本者。薩摩守忠度朝臣。俊成卿のもとへ遣し侍り
し。白筆の本を大樹より出され。兵部卿宗綱卿にかき
てまいらすへきよし仰らる。然るに予彼卿の學席に行
て。後世の證本にそなへんかため。みしかき筆にまか
せて。寫留めよみ令侍りけるとなん。

文明十六年春三月中の三日

羽林藤原基春

右忠度朝臣集以古寫二本比校了

惟宗廣言集 自永曆至壽永

春

元日のこゝろを

けふそとはよのまに誰かつけつ覽あくれば臆て春めきに覺

行路子日

子日とも思はてする春の野に松に引れてたちとよりぬる

霞哥十首よみ侍し中に

見わたせはあしたの原のうす霞うすきや春のはしめ成らむ

名所霞哥林苑

連やなからのやまに雪きえて志賀の渡りはかすみこめたり

霞藏關路人

春かすみたなひきぬれは浪こゆと音にやさかむすゑの松山

海邊霞

あふ坂のせきゆく人は誰ならん霞のうちに聲のきこゆる

鷺

もしはやく煙になるゝあま人は霞に春をわかすや有らん

曉 鷺

春くとはまかきの梅に見えぬるをわれつけかほに鷺のなく

山家鷺

我宿のまかきの梅をねくらにてよをこめてなく鷺のこゑ

山家鷺

宿ちかき谷のふるすは雪きえてまたうちとけぬ鷺のこゑ

百首中殘雪

おく山の谷のふゝきのこけむしる春さへ雪を降しきにけり

山家殘雪

人はいさわれとはふまし若菜つむそもの野への雪のむら消
歌林苑の哥合わらひ

春くれはおとろかしたにもえいてゝおりしる物は蕨なり覺
宰相入道教長哥合山家をたつぬといへることを

花かとしてたつねきたれば白雲のたつたの山の梢なりけり
同こゝろを

我こゝろなくきめよとや山櫻たつぬる峯にかゝるしら雲
侍従家隆家哥合花を

よし野山かすみはれゆく絶まより立かはりぬる花のしら雲
日吉哥合花を

朝またき春の木すゑを見渡せはかすみにきゆる花のしら雪
公卿殿上人あまたひきくして白川にて鞠會ありてこ

のしたにてまどゐしてかはらけさしていまやうなと
侍しに今日和哥のなきこそ遺恨なれと人々侍しかは

女の哥しかきてこのしたにおとして侍しに人々けふ
にのりてふるくなり給へるともからはなみたおさへ

かたくてをのゝやさしき返歌とも侍き
花ゆへにみ雪ふりにしわたりをは思ひやいつるしら川の水

刑部卿頼輔朝臣家哥合歸鴈を
難波潟つらねてかへる雁金はおなしもしなるあして成けり

歎冬を讀岐院御會
いかなれば春を重ねてみつれとも八重にのみさく山吹の花

夏十五首

更衣

夏衣人めはかりはかふれとも花になれにしををしそおもふ

禁中更衣

九重にけふわかきつる夏ころも猶うすきなやたゝむとす覽
名所卯花

下枝まておりある鸛とみゆる哉ゆるさのもりにさける卯花
日吉哥合郭公を

尋ねかねかへる山路にほとゝきす一こゑなくやなさけ成雲
侍従家隆哥合時鳥を

一こゑをきゝての後も時鳥またなくことはかはらさりけり
暮天郭公

聲よりや姿や人に忍ふらんくるれはなのるほとゝきす哉
馬上郭公

郭公あかてすきぬる一聲に思はぬかたへ胸をはやむる
海邊郭公

小夜ふけて一こゑなる郭公きかすやあらんいねのあま
歌林苑哥合五月雨を

五月雨にそことも見えぬ難波江は芦の末葉そみを盡しなる
連日五月雨

つゝと軒の玉水をとつれていくかに成ぬ五月雨のそら
旅宿五月雨供花

五月雨に旅寐の床のうきぬれはいかたにやみる心地社すれ
連夜照射百首

ともしするすそのゝ原のかり衣この下露にぬれぬ夜そなき
早苗夾道哥合

秋ならは稻はの露にぬれなましさなへをわくる小田の細道
鳴邊壺

鵜舟をはかゝりもしらすいてにけり鶯飛かふまきのしま人
水風似秋供花

吹風に芦の葉をよく夕暮はあさちに虫のなかぬはかりそ
秋二十首

閑庭秋來哥合

あれはてゝとふ人もなき宿なれと庭のあさちに秋はきに梟
雨中七夕哥合

かさゝきのはしよりわたる七夕はこよひの雨や急かざる覽
夕草花哥合

夕霧のたちわたりぬる小萩原にしきをたゝむ心地こそすれ
野徑女郎花

露しけき野路の篠原わけゆけは袖ぬらさするをみなへし哉
鶉なくいはたのをのゝ女郎花おらてすくへき心地こそせね
夕萩

さらぬたに露のこほるゝ萩の葉に風わたるなり秋のゆふ暮
承安二年なか月の十日ころにふしみの山庄に御幸な
りて侍しに女房のつほねをすきてとをり侍しにふし
みのおもしろさはいかにとたつねいたされて侍しか
はかみのはしにかきてつほねへさしいれて侍し
とふにいとと思ひかねゝ鶉なく伏見の里の秋の夕くれ
月哥十首よみ侍る中に

天の原いまはいとはし秋の月こゝろにいるも苦しかりけり
野徑月

見渡せはおほえの山に雲はれていくのともなくすめる月哉
日吉歌合月を

月清み志賀のからさき見渡せは氷をあらふおきつ白なみ
海上月

名にたてるゑしまか崎を見わたせばは空行月をうつす成けり

雲間明月哥合

雲をいてゝくもにまたいる月影やふれは消ぬる庭のしら雪
九月十三夜供花

月の舟秋のなかはをこきすきてなに流るゝはこよひ成けり
百首中鹿を

思ひきや妻よふ鹿の聲故にさもあらぬ袖をぬらすへしとは
鹿のこゑいつれのかたそ哥合

何方と聞わかぬとも身にしむは鹿の音おろす木からしの風
山家曉鹿 山哥合

さひしさを何にたとへむを鹿なくみやまの里の明かたの空
出哥合

露しけき淺茅か原に鳴むしはよその袖をもぬらす也けり
庭菊似雪哥合

ませのうちにまたき降つむ白雪の移るふに社菊としりぬれ
終日見紅葉 白河會

朝またきけさ立いてゝもみち葉をよるの錦となる迄そみる
福原京にみやこうつり侍しころ故郷暮秋といふとを
人々よみ侍しに

うつり行都のかたをしたひてや秋もこよひは西へくれぬる
冬十五首

田家初冬
いつしかとそもの小田に風冴てもりこし水もうす氷けり
海邊落葉

磯ちかくもみちを拂ふ立田姫またいくしほか染むとすらん
羈中落葉 賀茂

しくるとて柞か下に立よればふれとぬらさぬこのは成けり

野徑時雨賀茂

さらぬたに朝たつ袖は露けきに時雨てわたるのちのしの原
・ たなかみにて網代輿といふ事を人々よみ侍しに
日をへつゝ波の花さく網代木に紅葉をさへもよせてける哉
冬哥あまたよみ侍中に寒草を

冬かれの淺茅かすゑにをく露のきゆる雪はたるひせけり

内藏頭季能朝臣の家哥合山庄初雪といふとを

今朝よりは松の葉しるく雪消てさひしき増るみやまへの里

行路雪深賀茂

雪ふかみ駒はこゆれとあふ坂の關の若かとふみもならさす

雪中客來賀茂

降つもる雪ふみ分てくる人は心さしさへふかきなりけり

湖上水鳥賀茂

つらゝゐるまのゝ入江に漕舟の跡としめつゝかつくにほ鳥

月前水鳥賀茂

すはの海の月のこほりにゐる鴨はさえぬ折にや思ひとく覽

月前千鳥賀茂

やよやいかにかたふく月を眺ればふけるの浦に千とり鳴也

旅泊千鳥

千鳥なく浮寝のとこのとまやかたとまらぬ物はなみた成晝

爐火夜賀茂

埋火のなからましかは小筵にひとりや冬のよをあかさまし

寄蓮懷除夜

數ならぬ身には積らぬ年ならはけふの暮をも歎かさらし

戀甘首

初戀賀茂

思ひあまりかきもらしつる水莖に戀渡るとはけふやしる

忍戀賀茂

よと共につゝむ袖しのうら波は心にかけぬときのまそなき

日吉歌合に戀の心を

ちらさしと袖に泪をつゝむまに戀をかれしといふに成ぬる

河内守隆親の哥合戀の心を

あふ事は心なくそたのまれぬたれも命をしらぬよなれば

ふれてのちまさる戀といふとを

しるらむや谷のいはまの埋れ水もらすに袖のぬれ増るとは

被妨人戀賀茂

かけ初めてまたねもなれぬ琴の緒をいかなる人のひき違ふ覽

戀三人

我戀はたゝみつふするかたし貝みなあふ事のなきを悲しき

馬上戀賀茂

思ひかね駒にまかせていてぬればこひちの末は逢人もなし

月前戀賀茂

月のはれゆくまゝにいかなれば涙の雨のふり増るらん

老後戀

思ひきやおいその杜に身はなりてあはぬ歎の積るへしとは

愚會他人戀

なをさりの契はわれにとしをへてねたしや誰にあふの松原

哥林苑にてやくそくの目をのふる戀といふとを

逢事をそふとてけふものひぬればあすもあふといふとす覽

後朝戀賀茂

片身とて袖にしめつる移りかを洗ふはけさのなみた成けり

同ころを

あはて社恨もせしか葛の葉のかへるけさまた露のこほるゝ
互怨戀哥合

恨むるも我ならひにて頼まるゝ戀しきとのあるかと思へは
寢人戀人哥林苑

きぬゝにならむ歎といひなしてあらぬ涙を君にかけつる
二世ちきる戀

はかなくそ後のよ迄と契りけるまたきにたにもかはる心を
遇不逢戀

あふもの露はかりみなかれぬればこれや歎きのもりの下草
もの申ける女かしらおろしつと聞いていひつかはしけ
る

まことにやそりはてにける梓弓おもひかへらん事も社あれ
引すへてわかつてなれにし箸鷹のそりにしとをいつか忘れん

雜十首

祝

君か代はなかるの浦のさゝれ石の松おひしける山となる迄
王照君

心から玉藻のくつとかゝれにき何かゑしまの恨みしもせん
上陽人

まゆすみも姿もあらず成ゆくをいかにかはらぬ涙なるらむ
旅

かくしつゝつひの住家と思ふにも野への旅ねは露を零るゝ
述 懷哥合

黒髪のみたれてものゝかなしきはおもふ筋にもなき世成鳧
かく計り數ならぬ身のいかなれは人よりさきに物は悲しき
世中しつかならず侍しころ宗圓法橋しのひて哥合す

とて懷舊哥こひて侍りしかはつかまつりし
世中を思ひみたるゝたひことに昔をのみぞ忍ふもちすり
無常

露の身の仇なるををしれとてやためしにひけるさゝかにの糸
即身成佛

この身にてひかりをさゝむさゝしとも心ひとつに有明の月
和光同塵

やはらくる塵はかり社かはるらめ神も佛もおなし身なれば
廣言家集。以三阿佛眞蹟不違三字書寫。遂再按畢。

貞享二年初冬中澣

前内大臣經光

右惟宗廣言家集以無類本不能按合矣

鴨長明集

春

歳内立春

春といへはよし野の山の朝霞としをもこめてはや立にけり

霞隔浦

もかり舟漕出てみればこしの海のかすみに消るよさの松原

梅花誰家

われも今しのはんやとに梅植しまた見ぬ花の面かけにたつ

花をおもふ心をよめる

思ひやる心やかねてなかも覽またみぬ花のおもかけにたつ

關路花

春くれば不破の關守いとまあれやゆきゝの人を花に任せて

依花不厭風と云こゝろを

吉野河しからみかけて櫻さくいもせの山のあらしをそ待

父身まかりてあくる年花をみてよめる

春しあれば今年も花は咲にけり散をおしみし人はいつらは

花

よし野山高根に花や咲ぬらんはれゆく中にとまるしら雲

はる風に雲のしからみむらさえて高ねをあらふ花のしら浪

よし野河あさせしらなみ岩こえて音せぬ水はさくら成けり

三月盡をよめる

立とまれ野への霞にことゝはむをのれはしるや春の行すゑ

夏

山家卯花

山かつはかきほに咲るうの花の手折ほとをそ惜むとはみる

夜見卯花

てる月の影をかつらの枝なからおる心ちするよはの卯花

郭公

ほとゝきす初音聞つる名残にはしはし物社いはれさりけれ

社頭郭公

ほとゝきす鳴一こゑやさかきとる枝にとまらぬ手向なる

五月雨をよめる

五月雨の日數つもればしら菅の葉末をうつむ井出の下水

螢火照橋

芦の葉にすたく螢のほのくくとたとりを渡るまのゝつき橋

蚊遣火盡といふを

蚊遣り火の消行みるそ哀なる我したもえよはてはいかにと

夏月映泉

はしゐつゝ結ふ雪のさゝ涙にうつるともなき夕月夜かな

樹陰納涼

夏くれば過うかり鬼いそのかみふるから小野のならの下陰

水掬ふならの木かけに風ふけはおほめく秋そふかく成ゆく

樹陰晩涼

ましてしはまた夏山の木の下にふくへきものか秋のゆふ風

秋

萩をよめる

花見つと人にはいはいし小萩原わけつる袖の色にまかせて

水邊草花

さをしかのしからむ萩の下おれにあやなくよとむ谷川の水
浪まくらにしきの袖をかたしきてみきはにねたる秋萩の花

家の女郎花さかりなるときとをきところへまかると
て

あるしはとふ人あらは女郎花宿のけしきを見よと答へよ
閑庭蒨葢

わけてくる人なき庭の蒨葢はをのれみたるゝ程そみえける

鴈をよめる

行水に雲井の雁のかけみればかすかきとむる心ちこそすれ

雁聲遠聞

玉章のうらひきかへすこゝちして雲のあなたに名のる雁金

鹿をよめる

風わたる眞葛か原のさひしきに妻とふ鹿のこゑうらむなり

夕されは身にしむ野への秋かせにたへてや鹿の聲を立らん

霧隔行舟といふ心をよめる

音すなり野嶋か崎の霧のまにたかこく船のともなるらん

月

あらしふく有明のそらに雪消て月すみのほる高まとのやま

月かけの雲かくれ行秋の夜はきえてつもりぬ庭のしら雪

なかむればいたらぬくまもなかりけり心や月の影にそふ覽

荒屋見月

海上月

くまもなき鏡と見えてすむ月をもつたひみかく沖つしら波

玉と見るみさきか沖の浪間より立出る月の影のさやけさ

下總國にみさきといふ所あり。日本の東のはてな

れは。月の浪まよりいつるやうにて。みゆるなり

となむ申侍。

擣衣音遠

契りあらは重ねもやせん遙々とうつをのみきく衣なりとも

海邊擣衣

月清み磯のまつかねきぬたにて衣うつなりさとのあま

紅葉映池水

秋山のうつれる池の水草こそ梢にみえぬ青葉成けれ

女郎花の霜かれゆくを見侍りて

くる人も枯々なれや女郎花秋はてゆくはをのれのみかは

長月の晦日のころ鹿のなくを聞てよめる

霜にうつむ眞葛かしたのうら枯て淋しかるねのをしか鳴也

虫聲惜秋

秋したふ虫の聲こそよはるなれとまらぬ物と誰かをしへし

冬

時雨

山のはになれてきゆる薄雲はあらしのをくる時雨也けり

音するも淋しきものと槇の板に思ひしらするはつしくれ哉

落葉

山嵐に散もみち葉やつもるらん谷のかけひの音よはる也

大井河にまかりて落葉をよめる

殘菊

あすもこむとなせ岩なみ風ふけは花に紅葉をそへて折けり

霧

冬來れは星かとみゆる花もなしみなむらさきの雲隠れつゝ

杉の板をかりにうちふくねやの上にあたろく計霞ふるなり

霞ふる蘆のまろ屋の板ひさしね覺もよほすつまにそ有ける

深夜千鳥

さよ更て千とり妻とふ松かけにこぬみの濱や淋しかるらん
ね覺する波の枕になく千鳥をのかねにさへ袖ぬらせとや

水逐夜結

薄氷つはさにかけし鳩鳥のいく夜つもりて隙もとむらん
水鳥をよめる

水草ゐる汀をかへて鴨とりは上毛さへこそみとり成けれ

曉千鳥

月影のかたふく磯にゐる千鳥かたはにのこる霜かとそみる

月前水鳥

くもり行月をはしらてをく霜を拂ひえたりとをしそ鳴なる

社頭冬月

片岡のならのまき葉も散はてゝ枝にとまらぬ月のしらゆふ
ある人の北野にて歌合せんと侍しにおなしこゝろを

寒蘆隔水

いつはりをわきて咎むるしめのうちに晝となみそ冬夜の月
霜はらふ羽音にのみそには鳥のあしまの床は人にしらるゝ

歳暮のこゝろを

おしめとも過ゆく年のいかて又思ひかへりて身にとまる覽

戀

袖にちる露うち拂ふあはれわかしらぬ戀路とふみそめて鳥
忍 戀

不被知人戀

うき身にはたえぬ思に面なれて物や思ふととふ人もなし

初見返事戀

いかにせんい
なになにせむに覺束なさを歎きけん思ひたへねと告げる物を

後朝戀

越かねし逢坂山をあはれけさかへるをとむる關守もかな

成疑心戀

うちはらひ人かよひけり淺茅原ねたしや今夜露のこほれぬ
毎夜他行戀

思二世戀

新續古今集三
我は世にこむ世の闇もさもあらはあれ君たに同じ道に迷はゝ
並床不逢戀

契曉戀

よそにのみならふる袖のぬるはかり涙よ床の裏つたひせよ

誓言契戀

たのめつゝ妹を待まに月影をおしまて山のはにそかけたる
神かけて頼むればよし心みむさてもつらくは人たのめかは

夢中會戀

うつゝには暫し袖をも引とめてさむる別をしたふかひなし

互精進戀

中にまた人をはふせし神垣やならふかひなき丸ねなりとも
蒙示現戀

對泉戀人

おもひ出て忍ふ涙やそひぬらん色に出なる山の井の水
寄草花戀

朝露に小はき分てもならひにき半も色もそれはものかは
戀のこゝろを

恨みやるつらさも身にそかへりぬる君に心をかへて思へは
戀しさの行方もなき大空にまたみつものはうらみ成けり
消かへり押へてむせふ袖のうちに思ひ殘せるもの葉をなき
する墨をもとき顔にもあらふ哉かくかひなしと泪もやしる
みてもいとへなにか涙をはちもせんこれ戀てふ心憂もの
今よりはこりぬや心思ひしれさるそやしらぬ人にうつるは
秋の夕に女のもとへつかはす

雜

忍はんと思ひしものを夕暮の風のけしきにつるにまけぬる

やもなき人の若君むまれ給へる事をいかゝとあれは
ともかくもえ社いはねの松かえに木高く巢立鶴の子なれば
津の國へまかる道にこやといふ所に泊りて侍にねや
のさうしにあやしけなる手にて手ならひをして侍る
かたはらに書付け

津の國のこやの蘆手そしとるなる難波さしたる蟹の住るそ

山里なる所にあからさまにまかりてよめる

かりにきてみるたにたへぬ山里にたれつれ／＼と明暮す覺
ものおもひ侍るころおさなき子をみて迷懷のこゝろ
を

奥山のまさきの葛くりかへしゆふともたえし絶ぬなけきは
あれは厭ふそむけはしたふ敷ならぬ身と心との中を床しき
心にもあらでなにとそのふるかひはよし賤の身消はてね唯
何事をうしといふらん大方の世の習ひこそきかまほしけれ
うきながらすき野の雉の聲立てさをとる計り物をこそ思へ

霜うつむ枯野によはる虫の音のこはいつ迄か世に聞ゆへき
世は捨つ身はなき物になし果つなにを恨むるたか歎きそも
うきはいかにせんとて惜む今朝ネマそと人にかはりて心をそとふ
花ゆへに通ひしものをよしの山心ほそくもおもひたつかな
哀ともあたにいふへき歎きかと思ふか人のしらすかほなる
住佗ぬいさはこえむしての山さてたに親の跡をふむへく
これを見侍りてかも輔光

と申侍しかは

情あらは我まとはすな君のみを親のあとふむ道はしるらん

懷舊の時子といふとを

思ひ出て忍ふもうしや古へを今つかのまにわするへき身は
淨土の相かきあらはしたる中にはなのふれるところ
を

たえすちる花も有けり故郷の梅もさくらもうしや一時

ある聖のすゝめにて百首の哥を厭離穢土欣求淨
土によせてよみ侍し中に鷹を

白雲に消ぬ計りそ夢の世をかりとなく音はをのれのみかは

對月忘西

朝夕に西をそむかしと思へとも月待ほとはえこそむかはね

承元元年五月日

散位鴨長明判

右鴨長明集以一本及流布印本校合了

群書類從卷第二百五十八

和歌部百十三家集三十一

藤原隆信朝臣集上

春上

文治六年女御入内屏風に小朝拜にむれたちたるところを

かはたけの千世をこめたる庭に出ておきふし君を祝ふ諸人
後京極殿^{食經}左大將ときこえ給ひしとき百首歌合ありしに元日のせちもゑ
いつしかと袖をつらぬるも、敷に萬代めくれ春のさかつき
五條三位入道^{賴阿}四季の題にて十首歌人々によませ
られしに春たつ心を
きのふまで雪降つみしみよしの、山も霞てみえにける哉

大納言實國左衛門督と申し時歌合せられしにはるたつ心をよみ侍し

逢坂のせきのしみつ^薄こほりとくるや春のこゆる成らん

正治^{北河門}二年院^{後鳥羽}人々に百首歌めしゝに

逢坂の關のしみつ^のをとほ山をとにもしるし春のけしきは

二品法親王^{皇尊}人々に五十首歌よませさせ給ひしに

朝戸明てはるたつ空をなかわれはおもひもあへぬ驚のこゑ
後京極殿左大將御時百首歌合春水

きゝなれし峯の嵐にいつしかをとつれかはる谷のした水
西行上人伊勢百首とて人々にすゝめ侍し
すゝか河せゝのいはかとうちたゝき氷し水も春をつくなり

院百首に

あと絶し雪よりその庵までふきあらたむる春の山かせ

千五百番哥合に

春日山松のみとりはほのみえて消あへぬ雪に春風を吹

君かへむちよのためしに引そめし野への小松も敷そひに見

引たひに千年をそふる小松原いく萬代を野邊にきぬらん

春歌中にねの日のこゝろをよめる

けさみれは子日の松も雪消ていつ引かふるけしき成らむ

文治六年女御入内屏風にのゝへんにこまつかきたる

に子日しに人々いてたるところ

今年より千とせの陰をならへよと二葉の松をためしにそ引

殷富門院大輔人々に百首歌よませ侍し中に

雪とくるのへのした草下もえて霞たなひく春はきにけり

人々十首哥よみ侍し中にとをきむらの霞といへるこ

ゝろを

宿かりしわたりやいつく春かすみへたつる程に我はきに是
院百首中に

はるきては人もとふへき三吉野に雪よりふかき朝霞かな
建保元年和歌所哥合にかすみとをきうへきふかくす
といふとをよめる

霞たつふる河のへのうすみとりみえ社わかね二もの杉
おなしころつちみかとの内大臣通親家にて人麿の影
供に野霞

浅みとり霞にけりないそのかみふるのにみえし三わの杉村
海邊霞

浦つたふはまちの末もあと絶てしほひにみつる霞也けり
文治六年女御入内屏風に山野にかすみたちわたりて
すみよしの松なと書たる所

山高み霞をわけてなかもれははるかにみゆるすみよしの松
後法性寺殿金堂右大臣ときこえさせ給ひし時哥合せ
させ給ひしに

やまたかみそこともみえぬ梢かな霞のそこやみやこ成らん
つちみかとの内大臣家にて人丸のえいく侍しにとを
きしまのあしたのかすみ

今朝みれは沖つこしまも浪路にて霞むとたにもみえ分ぬ哉
西行上人いせの百首とて人々にすゝめ侍りしにかす
みのこゝろを

たひねせしやとの梢やそれならむ霞にもるゝたまのを柳
春かすみ霞こめたるをの山は人のあはれもかゝるなりけり
わけし秋のけしきにかはれとも霞もふかし萩のやはら

和歌所にてかすみゆくみちをかくすといへるこゝろを
霞わけまよふ山路はやま人の歸るしるへそしほり也ける

二品法親王人々に五十首歌よませたまひしに

蘆の葉はまたもえなくに霞こめこやもあはにみえぬけさ哉
後京極殿左大將と申し御とき志賀のうらをはるの
心によせて

袖さえし志賀の浦かせ吹かへて霞たちそふさゝなみのこゑ
後徳大寺實定左大臣大納言と申けるとき人々に百首
歌よませられしにかすみうらをはたつといふとをよ
める

よさのうらの霞はれゆく絶間より梢をみゆる松の村たち
院百首に

花ゆへにまたれし春のけしきにも霞むはつらし峯の月かけ
鶯のこゑにもしるきけしきかな春きぬとしもなかぬ物ゆへ
和歌所のうた合にせきのうくひす

古巢をはいつかれてあふさかの關戸出るうくひすの聲
後法性寺殿右大臣とまうしゝとき人々に百首歌よま
せさせ給ひしに鶯

雪おれし籬の竹のよのまにもうちとけにけり鶯のこゑ
文治六年女御入内御屏風にはなの中にうくひすのゑ
たる所

鶯の聲の色さへ身にしむは花のたよりにきけは也けり
よしみつの大僧正慈尊家人々に百首うたませられ
しにのこりのゆき

奥山のいはもと雪のめつらしくまた春めかぬわたり成けり
つちみかとの内大臣家にて山家ののこりの雪
花をまつ山に春はしるけれとなを雪ふかしみよしのゝ里

院百首に
いかなれはつむへき物とまたる覽種まく事も知らぬ若菜を

おしなへてよもの梢はかすめとも梅かかのこす春の明ほの
秋よりも梅かほるよの月をみむ鹿こそかね袖はつゆけし

和歌所歌合に梅花あかつきの袖にほふ

春の衣のやみたにあるを梅のはなかほるたもとに在明の月

後京極殿にていけのきしの梅といふ題を

はるかせにきし打浪やおりつらん池の底まてにほふ梅かえ

つちみかとの内大臣家にて哥合侍しにとりなるのむめ

梅かほる宿のねやにやうらむらん垣ねのほかにわくる句を

三位中将資盛歌合し侍しに梅をよめる

むめのはな色も心にそむれともとまるは袖のにほひ成けり

院百首に

浅緑いともりかくるたまやなきぬくしら露のなに社有けれ

二品法親王五十首に

野も山もとりははるの色なれとなをめつらしき青柳の糸

後京極殿左大將御ときの百首にはるのあけほのを

なにとなく心うさぬるひとりねに明ほのつらき春の色哉

おなし歌會にひはり

雲にいるぞなたの空を眺むればひはりおちくる明ほの空

春歌中に

大とりのほかひの山を朝ゆけは春日の原にきくすなくなり

和歌所哥合に春山月

春とても花をやはまつさらしなや朧月夜のをはすての山

しら河にて人々哥會し侍しにはなをまつとこひのこ

としといへるころを

片敷の袖をかへさぬこと社あれ花待頃もいやはねらるゝ

つちみかとの内大臣家にて人麿のえいく侍しにはる

のかせところをわかす
吹風の春をしらする句ひこそいたりいたらぬ里なかりけれ

春下

後京極にて十首のうた合侍しにあしたのはなをよめ

る

またれつる花やよのまに咲ぬらん朝日にかほる峯のしら雲

おなし心を

いつる日は山のは高く空晴てくもらぬ雲はさくら成けり

大納言經房歌合し侍しに山のはな

あかなくなはたつねても山さくら心わくへき花の陰かは

五條三位入道十首歌人々によませられしに花をよめ

る

高砂のおへの櫻さくまゝにくもかくれゆく松の村たち

花歌中に

みよしの花のよそめにまかひけり春はたちのけ峯の白雲

名残なくよを厭ひてをいりし身の花にけかる三吉野の山

わけきつる峯の白雲それなからかはるや花の梢なるらん

後京極殿左大將ときこえ給ひし時の百首哥合にしか

の山こえ

春はた雲ちをわくる心地して花こそみえね志賀の山こえ

正治二年院百首

尋ねいる花はそれともしら雲のへたつとみればかはる山風

しるきかなのとけき春の花さかりちらぬ櫻にかほる山かせ

文治六年女御入内屏風に山野人の家などに花さきた

る所

野も山もあまねき花の匂ひきて思ひひらくる春を知らない

八幡わかみやの哥合に花をよめる

いはねふみしらぬ山路を尋ねても春の住家は花にまかせつ
人々十首歌よみ侍し中にはなかくをとむ

きのふ今日なれぬるひとの心をは花の散なむ後をみるへき
後京極殿左、將ときこえ給ひし時とをくちかく花を
みるといへるをよめる

峯は雲龍は花とよふまににほひをかはす花の山かせ

後法性寺殿半治一切經にいらせ給ひて侍しついでに

歌よませられ侍しにはなかくをとむといへるを

夏衣たちかへりてもわするなよ春のやとをは花にまかせつ
太宰大貳重家歌合し侍しに花をよめる

としをへてつくす心を哀とやにほひをそへて花も咲らん

二品法親王の五十首に

よしさらはさても心をなくさめよ花ちる峯に残るしらくも

正治二年院百首に

かく計りおしむゝ残にたへぬみを誰とへとてか花のちる覽

千五百番のうた合に花をよめる

散花を浪かとみれば高砂のおのへもけさは末のまつやま

尋ねこし山路は花をしるへにて散木のもとやすみか成へき

かものしけやす哥合し侍しによみてつかはし

山高み風にしたかふ白雲のたちはなれぬや櫻なるらん

さかのしやうしむ上人律師と申しときうた會せら

れしに花をよめる

〔三首〕

あたにちるもらいかで櫻はなのときき春の色をみす覽

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひしとき百首哥人々に

よませさせ給ひしにはなをよめる

あたにのみ移るふ花の色なれとそめし心はかはらざりけり
按察公通十首歌人々によませられ侍しに落花のこゝ
ろを

散までもちしと花を惜みをきてさながら風にまかせつる哉
和歌所にて十首御歌會侍しに落花を

ちらさしと惜みし花はそれなからみるになくさむ庭の雨哉

千五百番哥合に

たつねつる花の雲に袖ぬれてそらなつかしき春雨の雲

雨そゝく色こそ春にあひにけれ人もわけこぬ庭のよもきふ

いまはとてよそに成ゆく雁金も春の哀はなをのこしけり

春といへはいまはの心つくはねの峯をはるかにかへる雁金

後法性寺殿右大臣御とき百首の中にはれたるそらに

かへるかり

くもりなく月すむ空を行雁はかへるのみや秋にかはれる

同百首にもりの問のすみれ

うらわかみつみやそめまし紫のすみれにまじる杜の下草

正治二年院百首に

佐保姫は夏は緑をそむれともすみれにかはる野へ色かな

文治六年女御入内屏風に人のいへにふちのはなさか

りにきたるところ

世々をへて絶えせぬ藤の花さかりかゝる春にもあひにける哉

白河にて人々藤のはなをよみしに

おきつかせ吹ともみえぬ高砂の尾上の松にかゝるふちなみ

和歌所哥合にあめのうちのふち

春雨にぬるとしも社みえわかね浪になれたるたこのうら藤
同哥合に水邊のつゝし

紅葉せしとせの瀧のあきの色をうつして咲るいはつゝし哉

後京極殿左大將ときこえ給ひしときの百首哥合にのこりのはるといふことをよめる

かくしつゝ積れはをしき春の日をのとけき物と色眺めけむ

二品法親王五十首うたの中に

行春のあかぬ名残をなかもても猶あけほのや面かはりせむ

正治二年院百首に三月盡心を

おしみかね春の名残もさよふけぬあとなき空を眺め殘して

ふねのうちの三月盡といへるをよめる

こきよせよ難波わたりに舟とめて今宵計りの春をなかもむ

夏

二品法親王人々に五十首歌よませさせ給ひしにころもかへのころを

花の色にそめし衣よましてしはし霞の袖はたちかはるとも

西行上人伊勢百首とて人々にすゝめ侍りしによめる

限りあればひとへにかふる夏衣花の色にはなをやそめまし

正治二年院百首によめる

夏こたち青葉ましりの花もあれば猶たちかへしけふの衣は

千五百番哥合に

心には春のなこりを恨みてもかひなき袖のひとへ成らん

若葉さす君かひかりに葵くさよろつ代かけて神やうへけむ

吉水の前大僧正家百首に

いかなれは二葉なかに年をてけふのみあれにあふひ成らむ

後京極殿左大將ときこえ給ひしとき歌合に新樹

面影はしくれし秋の紅葉にてうすもえきなる神なひのもり

大宰大貳重家々にて閏四月にほとゝきすをまつとい

ふとをよめる

數ふれば鳴へきほとと時鳥をのかきつきのなはかはれとも

按察公通十首歌人々によませられしに郭公をまつといへるころを

待ていかにかすへき時鳥なかぬとみゆる明くれのそら

後京極殿百首歌合になつのよの心をよめる

ほとゝきす鳴一こゑに明るよもまつには秋の心地こそすれ

大納言經房歌合し侍しにはしめの郭公のころを

なをきなけ尋ねそきつる郭公里なれぬねはきかまほしきに

二品法親王五十首に

尋ねつるやまちくらしして郭公なをおくにきくさよの一こゑ

建保元年和歌所哥合に郭公

けふもなを山路くれなはほとゝきすいかに尋ねむ一聲の空

あめのころのほとゝきす

五月雨にぬれゝこそはたつぬれと雲まゝちける郭公かな

人麿のえいくの歌合にあか月のほとゝきす

またよひの月待つるほとゝきす鳴一こゑに有明のそら

文治六年女御入内屏風に人のいへに郭公なきたると

ころ

すきぬとや人は聞らんほとゝきす心にとまるあか月のこゑ

八幡歌合にほとゝきす

さ月やみ夜深き聲はほとゝきすをのかものから哀とやきく

吉水前僧正家百首中にあやめ

いつれをか哀とは思ふあやめ草たもとの露と軒のしのふと

正治二年院百首に

さらぬたにかけなつかしき夏のよのねさめにゝほふ軒の橘

千五百番歌合に

菖蒲草けふかりそめにふきつれはしのふそ軒のあるし顔なる
ななきねを結ふあやめの枕にも猶ほとなきは夏のよの夢

和歌處にて十首うた合侍しに

すゝしくも袂にかよふ匂かな軒のあやめを風やふくらん

後京極殿左大將御ときの哥合に池菖蒲

あやめ草いかにつきせす長きねそ池は昔のあとゝこそきけ

千五百番歌合に

軒ちかき花たちはなに風すきてにはひを残すせみの羽衣

後法性寺殿右大臣御時百首哥人々によませさせ給ひ

しにさみたれ

〔賦〕

五月雨はしのまのあまのねやくちてこや鹽たるゝ姿成らん

正治二年院百首中に

蜚ならていかゝかるへき五月雨に沼のあやめはなみの下草

千五百番歌合に

五月雨はふしみのために水こえて庭までつくうちのかは浪

河原院にてけむせう法し哥合し侍しに故郷のなてし

こ

うへてみし笹は野邊とあれ果て淺茅にまじる常夏の花

按察公通十首哥中に夏くさ

庭の面を蓬かそまとなしはてゝ虫の音きかん秋を社まで

後京極殿百首哥合に夏草

わか宿の蓬のにはゝ夏深したれわけよとかうちもはらはん

白河にて人々水邊夏艸といふ事をよみ侍しに

色めかむ秋ちかくなるをみなへし軒はのみつや鏡なるらむ

正治二年院百首に

夏草のしけみにやとは埋もれて露にもくもる宿の月かけ

二品法親王五十首に

をととはかはせゝの岩浪たま散てもゆる螢も影そすゝしき

後白河院御時供花のついでに歌よませられしに江邊

のほたる

そこきよき玉江の水に影そへて猶あらはすは螢なりけり

西行上人伊勢百首中に

夕暮の露も散そふ草まくだいづれの玉かはたる成らむ

正治二年院百首に

身をこかすよはの螢の思ひにもちかつく秋は涼しからめや

山のはに入日の影はさしなからひとむら曇るゆふたちの空

かきくらすとはかりみゆる夕立にられの里かあさちふの露

おいかよは猶のこりける夏のよをねぬに明ぬと何恨みけむ

人麿のえいくの哥合海邊夏月

夏衣たちよるなみに月さえて秋にやとかす袖のうらかな

後白河院御時供花の會に水風あきのことし

夕まくれまたきに秋をさそひきて袂にやとすまののうら風

後法性寺殿右大臣ときこえたまひしとき十首哥人々

によませさせ給ひしにいつみのへんの月

袖ひちてすゝむ清水にすむ月は我てに結ふこほり也けり

いへゝの納涼といへるこゝろを

宿とにせく水上のにこるかなたかむすふ手の雪なるらむ

殷富門院大輔人々に百首うたよませ侍しに

嵐ふくとなせの瀧の涼しきは秋の紅葉のちらぬはかりそ

和歌所にて十首哥合侍しに松のものとゆふすゝみ

立よれば夕浪すゝし住吉の松をあきかせふかぬものゆへ

千五百番うた合に

深山かけ夏なき年やこれならむ月を清水に松のしたかせ

後京極殿左大將ときこえたまひしとき百首うた合に

あふき

うたゝねに扇やならす床の上に月と風とはあきの物ゆへ

せみ

鳴すさむひまかときけは遠近にやかて待とる蟬の聲々

西行上人伊勢百首に

みそきするいくしのしてに風過て涼しくなりぬ水無月の空

文治六年女御入内屏風にかはのへんにみなつきはらへしたるところ

さほ河のたえぬ流にいくしたて祈るみそきも君かよのため

秋上

後京極殿左大將ときこえ給ひしとき百首哥合せさせ

給ひしにのこりの暑さ

をとにのみ哀をそへていかなれは袖にしられぬ秋の初風

二品法親王人々に五十首哥よませさせ給ひしに

今さらにきけはなをこそ悲しけれかねて思ひし秋のはつ風

吉水大僧正家百首に

秋の色も年にそへてやまさる覺けさ吹風にゝるものそなき

和歌所にて六首哥合侍しにはしめの秋のあか月のつ

ゆといへるを

秋きぬとまたしら露の置もあへす風に玉ちる野への明ほの

千五百番哥合によめる

秋の色をいつしかみする夕つくよさすや岡邊の松かせの聲あきらけき庭のともし火のこに雲るにかよふこほしの影

正治二年百首に

秋をへてなき契りはたえねとも明る苦しきたなはたの糸

西行上人いせ百首に

秋風を聞ほとしはしひまもかな物思はても身にはしむやと

後京極殿百首哥合に

むはたまの闇をあらはす稻妻も光のほとはゝかなかりけり

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひし時の百首に草花の

心を

かせふけはこはきか枝に玉散てうつら鳴也宮城のゝはら

同御時草花野にみてりといへる心を

ひくらしにわけ行野邊のかり衣いくしほそめつ萩か花すり

文治六年女御入内屏風にのゝ花さかりに咲しを人々

おりたるところ又ほりたる所なとかきたるを

都人ちくさなからに移しうへは野へには残る花やならん

同御屏風に山野人家などに秋風吹たる所

をしなへておき吹風の音さへそのときき秋をしらせ顔なる

千五百番哥合に

しら露のをくとはのへの花をみてぬとはしのはむ萩の上風

秋といへは心も色になりぬへしおはなにましり咲花をみて

秋哥中に

はけしきを恨みやすらん女郎花なひくは風をそむく成けり

六條入道左大臣大納言と申しゝときの百首歌による

のおき

我せこを待つるよひの風ならはあやしかるへき萩の音かな

二品法親王五十首に

なくさめてあすの暮をもきくへきに哀を告る萩の音かな

秋哥中に

慰むる友ならなくによもすから宿とふものはおきの上かせ
後京極殿十首歌合に野風

山高み分こし道をなかもれはすそのゝおきに秋風そふく
百首歌合にあきのあめ

萩はらやのへの秋かせすゑわけて又をとするは夜半の村雨

後法性寺入道殿右大臣ときこえたまひしとき後百首
におきのをとねふりをおとるかす

一たひは袖ぬらしつる萩のはにまところめはまた風わたる也

あれかこうちの三位季經あきの心野徑にありといへ
るたいを人々によませ侍しに

我ながら行ゑもしらぬ心かないつれのゝへの花に成らむ

按察公通十首うた人々によませられ侍しにのゝかせ
旅衣やゝはたさむき秋のよに風こそわたれをのゝしのはら

正治百首に

秋とてもたれかはつらき直葛原こはなにゆへの恨み成らむ

夕暮はのはらのけしきたらならて露吹かへすくすのうら風
みる儘にやかてきえゆく野への色をまた仄めかす夕月夜哉

後京極との左大將の御ときの百首うた合に秋夕

野邊の色はみなうすゝみに成に鬼しはしとみつる夕霧の空

中納言兼光らう詠のうたとて人々によませ侍し中に
秋の夕のこゝろを

なかもれは悲しきものと知ながら猶うとまれぬ秋の夕くれ

西行上人伊勢百首に

鳴子ひく門田のいなは霧をめてそよくときけは鳴そたつなる

後京極殿百首歌合にしき

明ぬるか鳴のはねかさねやすきて袖に月もこ深草の里

秋田

夕つくよはのめくかけも哀也稻葉のかせは袖にかよひて

文治六年女御入内屏風に山野にしかなたてるとこ
ろ

風の音ののとけきみよはさをしかの聲のみ秋のけしき也鬼

二品法親王五十首中に

萩の音にしかのそへて秋はきぬ風よりほかにとふ人はなし

人々十首うたよみ侍しによるのとまりのしかといへ
るを

うさねするゐなのみなとにきこゆ也鹿の音おろす峯の松風

三位中將資盛歌合し侍しに

秋の夜はち草の花もある物を色なきしかのねこそ身にしめ

供花會に關路曉鹿

月の頃須磨のあさけの鹿の音にゆるす關ちもゆかれさり鬼

西行上人いせ百首に

そてぬらす鹿のねはかりをとつれてとふ人はなし秋の山里

正治二年百首に

心なきのへのをしかのいかなれは秋の哀を聲にたつらん

秋はたゝさなからよはのねさめて鹿の音きかぬ曉そなき

民部卿經房歌會し侍しにしかをよめる

をのかねに秋の哀はある物をなにゆへ鹿の聲をたつらん

中納言資實すみよしにて哥合し侍しに鹿をよめる

あやなしやをのか盛りの野へに出て秋を恨むるさを鹿の聲

人々山家あきのけふといへるをよみ侍し

うつしうへて都にもみし野へなれと朝たつ鹿の聲はなかりき

正治二年百首に

横雲のはれゆくあとの明ほのに峯とひわたる初雁のこゑ

二品法親王五十首に

昔みしあともみえずあれはてゝうつら鳴のやふか草の里

吉水前大僧正家百首に

霧のまにこまにまかする磯傳ひいつく成らん松かせのこゑ

西行上人伊勢百首に

霧深きとしまが崎のゆふしほにとも恨むなるたつの一こゑ

文治六年女御入内屏風に海邊きりたちわたる所

磯つたひそこともしらぬ夕霧にたちこめられぬ涙のをと哉

和歌所にてきり古きはしをかくすといへるを

きゝわたる昔なからのなのみして跡なきあとも霧こめて晃

同御歌合にせきのみちの極風

都出てかさなる山の秋かせに昔のあとをしらかはのせき

文治六年女御入内屏風にあふさかのせきにこまむか

へにゆきあふところ

ひく駒やちかく成らん相坂の關のいはかとをとひゝく也

中納言兼光らうゑいの歌よませさせはへりしにあさ

かは

はかなしと思ひもはてしなかゝに日数はへけり朝顔の花

和歌所の哥合にゆくみちのむし

時のまにやかて名残や惜むらんゆきかふ人を松虫のこゑ

和歌所にて六首哥合侍しに故郷虫といへるをよめ

る

はかなしやたれに契を深草の野となるあとに松虫のこゑ

後京極殿左大將ときこえ給ひしときの百首歌合にの

秋下

夕まくれむらくもまよひふく風にまくらさためぬ花の色々

後法性寺入道殿右大臣ときこえ給ひしとき百首歌よ

ませさせ給ひしに月をよめる

出ぬより月みよとこそさえにけれをは捨山の夕暮のそら

文治六年女御入内屏風に人のいへのいけのへんに月

みたる所

よろつ代もすむへき宿の池水にのとかにやとれ秋のよの月

八月十五夜和歌所哥合に月おほくの秋のとも

きみならて誰か契らん秋の月ともにすむへきよろつよの影

海邊秋月

秋かせのふけるのうらに空晴て涙のをとまてすめる月かな

河月こほりにゝたり

秋やあらぬ月や氷をむすふらん光さえたる玉河の水

西行上人いせ百首中に

くもりなく月すむみねにきてみれば千里は山の麓也けり

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひしときの百首に

あくかるゝ心を月のさそひ出てたか住む宿をとほむとす覽

二品法親王五十首に

月きよみ心すむよはいづくにも有ける物ををはすての山

後徳大寺左大臣大納言と申しゝ時の百首に月のまへ

のをきこゝろといへるを

更科やはすて山もまたみぬに思ひしらするよはの月かな

正治二年院百首に

曇りなき月をなかめぬ心にや千里はほかのものとしらん

天のはらおもへは秋を哀なるひとよも月のあたにすまねは
建仁元年三月和歌所哥合に山家秋月

このまもと山分きてなかわれはのきはさやけき峰の月影
後京極殿左大將ときこえ給ひしとき同八月十五夜を
よめる

なかつ月のつきよりさきに今よひこそ秋の二夜を詠そへつれ

按察公通十首歌人々によませられはへりしに水月
さとをみ人も結はぬいたるにもみ草をわけて月はすみ鬼

おもふ事侍しころ月を見て

何事を思ふともなき人たにも月みるたひになかめやはせぬ

和哥所歌合に田家月

門田ふく稲葉の風をそよとても月よりほかにとふ人はなし

同うた合にふかき山のあかつきのつき

よしさらは鳥の音もせぬ山ちとて明るも知ぬ月をなかめん

海邊月

ほかとしもあかしの名をはしらしかし月に心をすまの浦人

八幡わか宮會にふねのうちの月

こきよする同し磯へに影とめて月も浮寝やさひしかるらむ

おなしこゝろを

漕よせてとまれは磯にやとり鬼おきのふなちをくる月影

つちみかとの内大臣家にて人々ふるきてらの月とい

ふとをよみ侍しに

わしの山てらす光をわけとめてさかの露にやとる月かけ

後京極殿左大將の御とき月にむかひて昔をとふとい

ふとを

見し世よりみぬ昔まで尋ぬればこたへぬ月そいふに増れる

しらかはにて人々歌合し侍しにくものあひたの月と
いふとを

あかなくに雲かくれゆく月影のはれまをみれば傾きにけり
正治二年百首に

すみのほる心やゆきてなかわらん月のみやこの有明の空

千五百番哥合に

秋の夜はくももこゝろや在明のかたふくまでもすめる月影
明ぬるかときやまのはらの秋の月かたふく空に鳴のはねかき

後法性寺入道殿右大臣ときこえ給ひしとき哥合に

山家月

よもすから在明の空を眺むればしかなくみねに月傾きぬ

後京極殿左大將ときこえ給ひしとき四季の題にて哥

合せさせ給ひしにもりのあひたのあかつきの月

夜もすから木間わけゆく月影のしつえにもるや明かたの空

千五百番哥合のうた

しほ風や秋はよさむになるみかたあまのときやも衣打なり

後法性寺殿右大臣御とき後百首にころもうつこゑは

るかなり

たえく／＼に音を聞ゆるさよ衣うつ手やたゆむ里やはるけき

つちみかとの内大臣家にてあめのちのきくといふ

とをよめる

ぬれてはす露に千とせをかけみよと山路の菊に雨過にけり

正治二年百首に

白菊の花になくさむ日かす哉秋にかきらぬにはひと思へは

おとらしとをのかさまくよはる也秋はすゑの虫の聲々

和哥所にて十首歌合に山嵐

山かけや音しつかなる嵐こそ烈しきよりも身にはしみけれ
同心を

軒ちかきみ山おろしの烈しさをきゝなれなはと思ひける哉

後京極殿百首歌合につた

今朝み^れはつたはふ軒に時雨して忍ふのみこそ青葉なりけれ

民部卿經房歌合哥こはれしに紅葉

物とにさひしき秋のみやまへにかゝるもみらの色も有けり

正治二年院百首に

立田山すそのゝ霧はへたつれと空に紅葉をあらはれにける

眺めてもいかにしのはむ紅葉々は時雨降ぬる秋の日かすを

後法性寺殿右大臣御とき百首にもみち

秋山のもみち葉さそふ風のをとによつちるものは心なり鬼

三位入道十首歌中に九月盡

こすゑにも秋のおしさやかよふらむ涙とゝもに散木のは哉

後京極殿百首歌合にはゝそ

山科のいはたのをのに秋くれて風に色あるはゝそはらかな

西行上人いせ百首に

わか袖をしくるゝ空にめなれてや哀もかけす秋のゆくらん

大納言實國十首歌人々によませられしに九月暮のこ

ころ

けふのみと思はぬ萩の風にたにたへなるものか秋のゆふ暮

冬

二品法親王人々に五十首歌よませさせたまひしに

永き夜のさゆるねさめに袖ぬれて床さへこほる冬はきに鬼

冬來ぬとしはかりをみせ顔にこはれはとくる山河の水

正治二年院百首に

わけすきし露をは霜に置かへていくたのをのに冬はきに鬼

つちみかとの内大臣の家にて歌合侍しにしくれ

秋はくれ冬の日数は淺茅生の露はす袖に時雨ふる也

後京極殿にて十首うた合侍しに田家時雨

夢さむる聞よりやかて時雨る也かりたの面のいなくきの音

きたのゝ歌合に山家時雨

雲晴て後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松のしたつゆ

正治二年百首歌たてまつりしに

たれすみて宿のこすゑとなかむ覺時雨にくもる遠の山もと

千五百番歌合うた

時雨こそ音も雫もよそならめ月さへもらぬあしのやへふき

宰相入道教長人々に東西のしくれといふをよませ

侍しに

なか空の月をよきてや時雨るらん出入山に雲をかゝれる

三條宮にてしくれねふりをおとるかすといふことを

人々よみ侍しに

うたゝねは夢やうつゝに通ふらんさめても同じ時雨をぞ聞

二品法親王五十首に

散積るこのうへは時雨する音さへ庭のものとこそきけ

落葉のこゝろを

ちりしをと哀と聞しならのはを又うらかへす風わたる也

後白河院御くまのまうてのるすの間法性寺殿にて人

々歌合せられしに關路落葉と云とを

をと山紅葉散かふ梢よりあらしをこそぬせきもりもかな

故郷落葉といふをよめる

音にこそ時雨もきゝ古里のこのはもるまであれにける哉

正治二年百首歌たてまつりしに

色々に散しもみちもとたえて月影さむきこからしのそら
つちみかとの内大臣家にて歌合侍しに月かむさうを
てらすといふを

置霜にしほれなはてそ眞葛原秋のうらみをつきに残して

冬哥あまたよみ侍し中に

片岡の萱かしたねにをとつれてよはりし虫の聲もいつらは
萩のをとほ風にのみやは聞えける枯葉のうへに霞ふるなり
建仁元年和歌所哥合にあらし寒草をふくといふとを
萩はらやよはりし虫の聲もなし露も嵐の音はかりして

後京極殿右大將ときこえ給ひしころ十首歌合侍しに
野徑寒草をよめる

をく霜に野への草葉は結はれて暮なはなにのかりねをかせん

文治六年女御入内屏風に海邊ちとり書たるところ

やちよとそ千鳥鳴なるしほの山さしての磯のあとを尋ねて

正治二年百首歌たてまつりしに

沖津風よはにや寒きとも千鳥くもにつきてそ浦つたふなる

千五百番哥合うた

なにゆへのうらみをすまの友千鳥浪にしほるゝ曉のころ

後京極殿左大將ときこえ給ひし時の御うた合に海邊
ちとり

すまの關千鳥の聲はうつゝにてとたえかちなる夢の通ひち

同歌合に湖上水鳥

とをさかるしかの浦浪磯ちかく猶よせくるやあちのむら鳥

文治六年女御入内屏風にいけの水鳥をりて氷なと
したる所

をしのある池の汀のうすこほりふかき契をむすふ也梟

千五百番哥合に

寒けしやつかはぬをしのよもすから浪にかたしく霜の毛衣

和歌所哥合に水鳥

さゆるよは蘆のはかくれ浮ねして旭にいつるあちのむら鳥

えいくのうた合に寒夜冬月

冬のよはの中の清水こほれともわすれすやとる月のかげ哉

西行上人いせ百首に

水の音も氷れはたゆる山里を人めはかりとおもひけるかな

冬歌あたまよみ侍し中に

よる浪のかへりもあへす風さえて蘆のは末にたるひしに梟

後京極殿左大將ときこえ給ひしとき歌合侍しにわた
りのこほり

都おもふ心そいとゝすみた河こほりをわくる袖はさえつゝ

左大臣の御とき池の水なかは氷るといへることを

旭さす池のこしまのこ松はらかけよりにしは猶氷けり

百首哥合にみそれ

慮ふく木葉こきませみそれふりさひしかりける山のおく哉

西行上人いせの百首中に

霞ふるは山のすその柴の庵に夢みしとてはすまさりし身を

正治二年百首歌たてまつりしに

音さやく風のまに／＼霞ふり夢路たえぬとなれるころかな

深山へは雲けのけしきたゝならて積らぬさきとふ人をなき

三吉野の冬のすまひを哀なる日かすは雪のふるにまかせて

雪埋む山ちのそこの夕けふりしはおりくふる誰かすまひそ
それをたに埋みなはてそわくらはにとはれしあよも雪の下道

千五百番歌合に

春の花秋の月かとなかむれは雪やはつもる庭のこすゑも

後法性寺殿法性寺新御所にて御會侍しにゆくみちの
あしたのゆき

ふる雪に我よりさきの跡なくは迷ひやせましけさの山ちを

八幡歌合にゆきを

雪ふかみ古さと寒きみよしのゝおくにはたれか冬こもる覽

後京極殿にて哥合侍りしににはのゆきを

人をさへとはて社みれ庭の雪を我ふみそめむ跡のおしさに

さかの正信上人律師と申しゝとき歌こはれしに雪を

野も山も雪降ぬればあとたえてふなてにのこる冬の通路

二品法親王五十首に

淋しさは冬そみせけるをしほ山小松かはらの雪のあけほの

春秋の花も紅葉もおりすきてはてはさながら雪のむれ木

ふる雪に麓のみちはあとたえてたれおく山に冬こもるらん

民部卿經房哥合せられしに深雪

今朝みれは梢も庭もひとつにて雪のそこなるみよしのゝ里

後京極殿左大將ときこえ給ひし御とき四季題にて歌

合侍しにふかくさの里を冬によせて

なくさめし花の色々雪つみてのとたにみえすふか草の里

ちかもり入道哥合し侍しに雪

穴師河をとまざる也まきもくの山のしら雪したやとくらん

八幡哥合に月前雪

空はなを雪けのなこりおほるにて庭にさやけき月のかけ哉

文治六年女御入内屏風に五節のまいりかきたるとこ
ろ

久堅の天つをとめこひきつれて雲のかよひち尋きにけり

後京極殿百首歌合に野行幸をよめる

みゆきせし野へのふる道ふみ分て跡たえせぬはせり河の水

正治百首に

大原やこゝろにやく炭のけふりはひとつ空のうき雲

後法性寺入道殿有大臣ときこえさせ給しときの後百

首にとをくちかきすみかま

炭竈にめなれてする山賤もほかの煙はあはれとやみる

後京極殿百首うた合にさむきまつ

いかなれば冬にしられぬ色なからまつしも風の淋しかる覽

同百首うた合に佛名

冬ふかき有明の月のあけかたになのりて出る雲のうへ人

後法性寺入道殿有大臣御とき後百首につこもりのよ
の佛名

あひ難きみよの佛のみなをさへ年とゝにもつくすよは哉

正治二年百首に

春の日を秋のよとこそなめしかさてもほとなき年の暮哉

何事を待としもなき深山へは今年もかくてすきのむらたち

後京極殿十首歌合せられしに山家のとしのくれとい
へるを

祝ふへき明日の春をもしらなくに松こそたてれみ山への里

賀

後法性寺殿宇治一切經會にいらせたまひて侍しに哥

かうせられしによめる

千世ふへき君か光を待そへてけしきことなる朝日山かな

とはのきたとのつくりあらためられて御わたりのゝ

ち御會侍しに、いけのうへのまつ風のいふを
よろつ代もすむへき君かけみよと池のみくさを拂ふ松風
和歌所にて十首歌合侍しに庭のまつ

聲たつるやまへは遠き庭までもよろつ代しるき松風そふく
二品法親王五十首中にいはひ

出る日に光さしそふ君か代はちよへむことも曇りなきかな
後京極殿にてまついるをあらためすとふをよま
せさせ侍しに

松はなをときはなからちきる覽色ますふちの千世の行末
五條三位入道人々に十首歌よませられしに祝

ちよふへき齡も今はたけくまの松もうらやめ君かちとせは
日吉のなり仲九十賀し侍しによりてつかはし
老の波猶しつかなれ君かよをこゝのそちまてみつのほま風
正治二年百首に祝

今はわれ惜からぬ身を惜まるゝ君かやちよにあはれと思へは

萬世もつきせさるへきわか君をはるかに頼む身社おいぬれ
昔よりさこそはいはふ萬世も君そまことのためしなるへき
五位正下ひさしくをさへられてあまたのとしををく
りてのちゆるされて侍しに清輔朝臣のもとより

くらゐ山むすはれつる谷水はこの春風にとけにけらしな
かへし
くらゐ山春待えたるたにみつのとくる心はくみてしらなむ

同よろこひにおほはらのゆきの入道寂然のもとより
春霞たちのほなる位山よをへたてゝもうれしとそきく
かへし

位山のほるにつけて人しれす誰もいてけるいへをしそ思ふ

民部卿經房正二位せられたりしにつかはし
峯近きくらゐのやまにさく花の色をかさぬときくそ嬉しき

かへし

たれもおる位の山の花なれとふにそ色はふかくなりぬる
よりまさの卿五位の正下して侍しに

わかの浦に立登るの浦に立登る浪の音はこさるゝ身にも嬉しとそきく
かへし

いかにして立登る覽こゆへしと思ひもよらぬわかのうら浪
かゝゐして侍しよろこひによりすけの卿もとより

色まさる君かころもの嬉しさはよその袖にも包むとをしれ
かへし

つゝむなるよその袖にて思ひやれみに餘りぬる色の深さは
四位して侍しに大貳重家卿もとより

よそにたに嬉しときけはむらさきの衣の袖をせしと思ふ
かへし

身にあまる若紫の色なればさこそはよその人もきくらめ
よりまさの卿のもとより

さか中に暫し休みしくらゐる山のほりたちぬときくそ嬉しき
かへし

やすむまにすきにし君をくらゐる山峯のしるへと今は頼まむ
清輔朝臣のもとより

紫のはつしほそめのに衣ほとなく色のあかれとそおもふ
かへし

いつしかと色をましつる言のはにいとゝ身にしむ紫の袖
のりよしの卿兵衛佐になりて侍しにちゝのなりのり

の卿のもとへ申をくりし

いへの風ふく柏木のこのもととはよそにきくさへ涼しかり覺
かへし

我もみしその柏木のもとなればこのもとまでもたえぬ也覺
四位従上して侍しによりすけの卿のもとより

紫の衣のいろをますはひのさしもうれしとしらすや有らん
かへし

嬉しさの色もましけるはひになをさしそふ物は君か言の葉
けむせうかもとより

色まさるわか紫のころもてはうらめつらしく身にやしむ覽
かへし

いろ増るわかむらさきの袖よりも猶めつらしき筆のあと哉
二條院御ときのまゝにたいくしつみて年久しくつ

もりてのち殿上ゆるされて侍しにのちの徳大寺の左
大臣大納言と申しゝとき申をくられたりし

いかばかり嬉しかるらんとたえして又渡りぬる雲のかけ橋
返し

とたえして又渡りぬるかけ橋はけふみゝてそいと嬉しき
院のくらゐの御時殿上ゆるされて侍しにおなし左大

臣のもとより
ふみなれし雲のかけはし春くれは又花さくときくそ嬉しき
かへし

更にまた君かことはの花さけはとたえも嬉しくものかけ橋
としをかさねてかゝいて侍しに人々迷懷哥よみ侍

しに
こそといひ今年と登るくらゐ山峯は猶こそゆかしかりけれ
中納言親宗おさなきこのありきそめにくるまひきい

れられて侍しにいしをつゝみてそのつゝみかみにか
きてはへりし

三千歳の數にとれとて包む石の苔むすまては君をみるへき
かへし

苔むさんみちよの數に包む石のいかなる宿の庭にかある覽
正治二年百首にとり

かゝるよにあふそ嬉しきいかるかやまの小河の跡し絶ねは
和歌所のよりうとにまいりて吉書をうすとして

嬉しくそわかの浦風のとかにてむれるるたの數にいりぬる
よをのかれてのちなをかへりまいるへきよしおほせ

られしかはまいりてまた吉書に
嬉しさを猶たちかへりつゝみてそ苔の袖にも色はそへける
後白河院御供花のついでに人はうたよみ侍しに寄仙

家祝
幾千度ぬれてはすらん君かよを山路のきくにをけるしら露

旅
後法性寺殿右大臣ときこえ給ひしとき百首うた人々
によませさせたまひしに旅の心を

夕ま暮みやこのかたを眺むればこえこし山を出る月かけ
柞原したはをりしき山科のいはたのをのにわひつゝそぬる

西行上人いせ百首とて人々にすゝめ侍し中にたひ
藻鹽草しきも習はぬ寢覺して蛭ならぬ身もしたれよとや

蛭のすむ宿をはからし沖津浪立をときけはめをさましけり
二品法親王五十首にたひ

朝なゝゝいくへこえきてなれぬらん重なるやまの峯の松風
正治二年院百首歌に

古里はいくへの雲にあとゝちてかさなる山のみねの月かけ
としいまたいはけなかりしにかむつけのかみにてく
たるとてあふみのみつうみを舟にのりてこき出るほ
となにとなく心ほそくおほえてみやこのかたのみか
へりみらるゝになみのたつを見て

ゆくかたは都へとしも白浪のかへるてふなはむつまじき哉
こまつといふところをまかりてみればまことにちる
さきまつはらおもしらく見わたされたるに月いとあ
かきをなかめいたして

風わたる梢のをとは淋しくてこまつかおきにやとる月影
つきの日もくれぬれはつるかといふところにとまり
しにうかれめともあつまりて哥うたひなとせしに心
ほそきもすこしなくさみて

忘れぬ都もけふを忘れぬる君ゆへとてはこしちならねと
そのよも明ぬれはすい一のわたりとてしほうみのな
みもとけはしけなるふねにのりてこき出るもわた
りとこそいへといとはるかに見わたされたるほとお
そろしくさへおもひつゝけられていそにつきてあみ
ひくをみて

をくあみの沖をはるかにめくれとも都にのみもひく心かな
くにてかみゝのたむけなとすきぬれはせうよう
しありくとてしらやまをみて

音にきくこしの白山しらねともみるにもしるく雪つもり鳧
みやこへかへるとてふなきのやまにもみちさかりに
こかれわたりしうみのおもてにもちりたるを見て
紅葉ちるふなきの山はよそなれと沖を遙にこかれてそゆく

ちくふしまにけふりのたつをみて
よを海とおこなふほとやいまならん煙そみゆる沖津しま山
なかつきのころ天王寺にまいれりしに又人々まいり
あひたりしかすみよしにまうつるよしきゝていひつ
かはしゝ

思ふとちかけならふなる住の江にさふ水たになとなる覧
かへしわかみつ

誰とともさそはぬものを住吉はひとをもわかつ待とこそきけ
ひとゝにいさなはれてかはしりのかたへあそひに
まかれりしにうかれめなとあまたきあつまりたりし
中にきひめかむすめとかすくれてめとゝまりしかは
かへるみちよりたよりにつけていひやりし
浅からす心をかけし浪路よりぬれにし袖のかはくまそなき
そのゝち又たよりにつけてかれよりをくりたりしか
へし

浅からぬ心にはあらし大かたの浪路に袖はぬれもしにけむ
關白殿にて哥會侍しにきよみかたをたひのこゝろに
よせて

清見かた磯のせきやに音すみて月になれたる浪まくらかな
たひのうたあまたよみし中に

ふりすてゝ都はいてぬ鈴鹿河やそせのなみに袖はぬれつゝ
はるゝといくのゝ道の末遠みいり日さすは 駒はなつみぬ

正治二年百首に

松浦濁こはよにしらぬうきねかな袖も枕もなみはかけつゝ
わかれのこゝろをひとゝよみしに
はるゝと行ゑもしらぬ別路はとゝまる人もまよふ也けり

あつまへゆく人に

東路の野はらしのはら分ゆかはこひむ涙をおもひおこせよ
光行あつまへくたり侍しによみてつかはしゝ

歸りこむ日敷の程をかそへつゝ人をも身をもいはふけふ哉
すみよしの歌合に旅宿時雨

住よしの松かしたねのたひ枕時雨も風にきゝまかへつゝ

海邊旅宿

千鳥なくよさの浦風こゝろせよ都こひしきたひのねさめに

哀傷

とはの院かくれさせ給ひて世中みなりやうあむなり
しにつきのとしの春とはとのゝ花さかりなりしころ
花のしたにたゝすみありきしを女房のなかより花一
えたおりてとこはれたりしかは花の枝にむすひつけ
てつかはしゝ

宿もやと花も昔のはなゝれとかさす袂の色そかなしき

美福門院かくれさせ給ひて御しやりはかうやの御山
へわたしたてまつりし御ともにてくさつといふとこ
ろより舟にのりてこき出るあけほのゝ空のけしきな
みのをとまてもおりしりかほにかなしくきこえ侍し
かは

朝ほらけ漕行あとにきゆるあはの哀まるとにうきよなりけり
はるゝと又まいる人もなきこゝろほそさもたくひ
なきに御山へいらせ給ふ日雪いたう降しかは

誰か又けふのみゆきを送りをかむ我さへかくて思ひ消なは
四十九日の御はてに御かたゝゝそうなともみなちり
ちりにかへらせ給ふへき心ほそさもかきりなきにお

りしも雪のふりしかは

はかなさは花も紅葉もためしあれと雪ちる日社悲しかりけれ
常はあひかたたく侍し女のみまかりぬときゝてつねに
つかはれしわらはのもとへつかはしゝ

君たにも有ていとほゝわひつゝも身のうきのみや歎ならまし
この人かきりなりけるおりにわかなからんあとにと
ふ人あらはこれを見せよとてあつたりけるをはゝ
にもとりいたしてみせければたくひなく哀なるこゝ
ろまとひいまさらにさしそふ心地してみけるにくや
しくや成にけむはゝのかへりことそへてむかしのて
にて

人しれす思ひしを契りをかて浮名をとめむあとの悲しき
さてこれははゝの
通ひける心をしらすいとほせて後は悔しきねをさへそなく
みとせはかりすみなれにし人のみまかりにしをとふ
らひて侍し人のかへりもにそへてこれより

行衛なき別れの道のかなしさはとまるもやみにまよふ成覺
かへし又たちかへりて
とまるらむ心のやみの悲しさはきく人さへも迷ひぬるかな

後徳大寺の入道左大臣少將公綱にをくれけるよしき
きて申つかはしゝ

思ふ人なきかおほくはなりぬともこの別こそ悲しかるらめ
かへし

身のうさも此もに社まゝぬれあらましかはと思ふのみかは
同ころ八月十五夜くもりたりしつきのあしたかの太
納言のもとより

もの思へは心の闇やくらしけむなにもにさりしよはの月哉
かへし

なかむへき人の心を月影も空にしりてやかきくらしけむ
大納言のふみのおくにやとからにやとかへれたりし
をまたかへりともやとからはまともにもや侍けむ
とかきてわか身にも思ふを侍しころにてかへしのお
くにかきそへし

たれもさそやとからとみし月なれと心くもらぬ人にとは南
又たちかへりてかれより

たれかいはむ人の心も晴くもりさためなきよの月と思へは
かくてまたなをそのふみのおくにかやうにきこえな
れぬるもこのよひとつのには侍らしなといとね
むころにかきつゝけられて又かきそへられたりし
をのつから世を背く身と成ぬ共うきを厭はぬ友とならなむ
又かへし

此よをそうしとは厭ふ身にしあれば背くをすむ友としら南
そのあきのくれにまたかれよりつかはしたりし
先たちて散しこののかたみとも思ふ秋さへまた別れぬる
かへし

ときは木の梢おほかる宿なればなにかは歎く秋のわかれを
うは(祖母)にて侍し人みまかりて法性寺といふ所にを
くりをきて月あかゝりし夜

すみのほる月も煙に曇りけりこやなきかけのしるし成らん
あけほのかへるとて

のほりぬるよはの煙やみちぬらん霞そふかき春の明ほの
はゝのかのふくきられし日やかて我身もとりわきこ

ころさしふかくておなしくふかきいろをそむるに又
こにて侍猷圓もおなしすちにひる(暮)までそめ侍
てそのほか又そむるたくひもなかりしあはれさと思
ひつゝけられて

悲しさは又たくひなき鶴のこのたゝひとすちにそむる毛衣
としころはひとへにかのかけをのみおやさまにたの
みて世中のともわかみにはしらてとしのつもりにけ
るをも思ひわかさりけるにいまさら思ひしらるゝこ
とおほくて

なきあとはたゝみとりこに變らねと頼みて年の老にける哉
みなみおもてのむめのはなさかりにさきたるを見る
につけてもこそのはるよはひのほともしらすみてう
へさせもてけうしなとせられしおもかけもいまのこ
ちちして花のえたにむすひつけし

墨染の袖こそあらめむめの花かはらぬ色をみるさへそうき

春雨にしほるゝ花もすみそめにかはれる袖を哀とやみる
をさなきものとものはゝみまかりにし哀さはこれに

はしめぬうきよのならひとひなからわかくいはけ
なかりしよりあさからぬさまにのみ思ひならはして
世中のつゝましきなともあまたつもりぬるゆくすゑ
はるかならむをこそもろともにいひちきるほとに
めもあやにむなしくみなしつるかなしきはうつゝの
こゝちもせすなからかきりある世のならひなりけれ
はくわむをんしといふかたの山にをくりをきて五十
日はやかてその山のふもとなるしはのいほりにれい

しせむほう（例時體巻）なとをもおなしくはきこえかは
すほとにと思てあかしくらすになかつきの廿日ころ
なれはやゝ冬のけしきにもなるあらしのをともしと
ものかなしくて

よもすから夢たにみせぬ風の音は送りし山のあらし成けり
時雨のをとはしたなくきこゆるにつけてももりこん
たもとにもまさりてのみしほりかねつゝかの山のう
へおもひやられて

露をたにあてしと思ひし君をゝきてきも悲しきやもめぐり哉
いろをそむるにつけてわれこそさきたちてきすへき
いろをさためなきよのならひといひなからおやこの
よはひなる人にをくらされてかくそめつることもし
をつきせぬこゝちして

わかために君をゝめましふち衣きるにつけても夢かと思
さるほとに十月中の十日ころにもなりぬこのよにて
はうちつゝきさむ（産）なともしけくみとりこはしり
あそひなとしてなにのよのことはりわきまふへくも
あらざりしにあしたことにみたの名號をとなへ經な
とをよみつゝ月ことの十五日には佛の御まへにて人
人をすゝめて一晝夜の念佛をとなへなといとなみし
とをこの十五日にもそのまゝに念佛をまうさするに
そのよのあかつきかたにつゆはかりまゝとろみたるゆ
めに天人のすかたなる人うしろはかりみえてそらへ
のほりぬるをわかこゝろにこの人と思はとにうたを
すむする聲にてたうしたうりてん土となかゝきこ
ゆるにきとおとろきたれはこのうつゝに念佛となふ

るそうのころにきゝまかへつるをいとめつらかにお
ほえて僧をよひてかの普賢品にはたうしやうたうり
てむ（當生初利天）上とこそ侍るをこれはたうしときこ
え侍つるはいかに心ゆへきにかとゝひ侍しかはたう
しとはへらんはいたるといふもしにこそとこたふる
にさらになみたこほれまさりてめてたくあはれにお
ほえて

頼み有てきたかにみつる夢をなを深くそいのる思ふ餘りに
後法性守入道殿有大臣と申し御時御とふらひに給せ
しに

悲しさをたゝよそなからとふよりはわれ幻にならまし物を
御かへしかしこまりながら

悲しさはたゝとふたにも畏きをまほろしまても思ひける哉
かきつたふるにつけてもさまいかにそやうちまかせ
ぬきまなれと又あはれもさしそふこゝちしてこのむ
かしのひといはけなかりけるより民部卿しけのり思
こゝろありけれとかやうにきたまりにしかはかひな
きもにてやみにけるをつねになれあそふ人なりしか
はのちにはむかしさる心のありしなといひてわらひ
たはふれしをこのゝちとふらひにつかはしたりし
朝夕になれしをこふるきみよりもよその別はなを悲しき
かへし

よそにて哀かくへき君なればあやなく今はかたみと思ふ
僧正範玄のもとより五十日すきて

限りあればとふらふ鐘も音たえて昔のあとやいとゝ悲しき
かへし

今はたゝよなく獨ね覺してさもあらぬ鐘の音のみそきく

山の入道かのくわん音寺へとふらひにおはして五十日かほとはおはせしかかへりてのちいひつかはしたりし

あさとにをきぬしくきの庵よりも猶ふるさとは袖や露けきかへし

草の庵にきえもはてなて露のみのなに古里にをきあかす覽つきのとしのはるみなみおもての梅のはなあやにくにつねよりもほひとにさきにけるも日ころはたいてゝみるともなかりつるにたかあり(座懸)わらはにて七さいに侍しかうつくしくさきたるえたともをおりてゆくをなにわさにかとみるほとにはしりきてこのはなはこそ母のほとけにまいらせんおりてことおほせられしかはおりて侍ほとけにまいらせはやといふをきくにそいまひときはいろをそふる心ちしてはかなくて散にし梅のこのもとに昔をのこす色そかなしきつきのとしのはてに佛事せしにさたいへ(定家)のあそむのもとより

さてもなをたゝけふ迄を名残にて鐘の音さへつきや果ぬるかへし

けふまでや限と思ふかねのをとに猶盡せぬは涙なりけり
正日にはかへまいりて日もゆふくれになりにしにこそをくりをきしもいまのこゝちして

またしらぬ山路をふみし頃よりも猶まとはるゝけふの暮哉はゝに侍し人こゝろさしはかたみにをろかならずなから中將なりいへ(成実)少將さたいへ(定家)などそのいもうとたちもあまたうちつづいてきてのちはわか

みひとつちゝかはりたるみにていと心ほそなからそれにつけてもいよゝこゝろさしは淺からす思ひかはしてすき侍しに心よりほかなるをによりてとしのみとせまであひむかふをもなかりしをたまゝなかくよくなりてひころ月ころのうらみもわすれてあはれにかなしくのみおもふほとにそのとしのきさらき(定家)のころはかなくみなしつるをかゝりけるものゆへみとせまでいふせくてすきにけるかなしさもいよよよかきりなくまたありゝてかくいまはのときにもなかくなりてのちのわきなどはいのまゝにみやつかひつるおやこのちきりのふかきもひとかたならすおほえて法性寺といふところの山のおくにをさむとてなくゝおほえける

みとせまでこひつゝみつる面影をあかてや苔の下にくち南をのゝいみにこもりあへるなかに少將さたいへこのはゝのおほえなりけるをかの少將ことはりもすきて思かなしみてわかみひとつのことになむ侍けるとていとそなけきしつみてひとつうちなれとふみにかきつゝけていひつかはしたるをみるにつけてもいとかなしさまさりてかへりことにかきそへ侍し

數ならぬ身にたに餘る悲しさは君をとふへき言のはもなし
少將これをみるにいとゝせきやるかたなきとなとかきて

墨染におなし袂をやつしても我をやとへと思ひをきけん
まことにたれよりもさこそはおもひくつをれ給ふらめとかきて又これより

やつれぬる袖にもなをや増る覽思ひをきけむ色のふかさは
かくてはるもくれぬれはなこりさへいとつきはて
ぬるこちしてうつきの一日又かの少將のもとへ
ことしこそおしまて春をすくしつれ増る別に心くたけて

二日は四十九日なりければかへし

すきはつる名殘社けに悲しけれきのふの眺め明日の程なさ
かものしけやすみまかりてのち人々かのふるさとに
てともにあひてとをこふといふをよみ侍しに
まとゐして契を結ふみたらしになき影のみそうつらさり梟
民部大輔のりまさの朝臣のむすめにとしころすみ侍
しかほいならぬさまになりてのちとし月つもりてか
の朝臣もみまかりていと心ほそきさまにて侍よしき
きてとふらひにまかりて

物名

すみなれし昔の跡をきてみれば面影のみそあるしなりける

さくら ほとゝきす 月 雪を戀のこゝろによめる

君かうさくらくなるほとゝきすきて心つきぬと行て恨みむ

おとこ をんな 無常のこゝろに

入相の鐘のをとこそ悲しけれけふをむなし暮ぬと思へは

しとね

情なく絶にし中をはかなくも忘れはてしとねのみそなく

ものこし

つらしとて我さへつらくあたるまに人の恨も殘しつるかな

したひも

味氣なや我身のみこそ苦しけれしたひもはてぬ人を慕ひて

うつをはしら

夜もすからこれはなにそと唐衣うつをはしらてめを覺しける
からかみ

味氣なやこひせしとのみみそきて我心からかみを恨むる
しのふくさ

慰めし人めさへこそかれにけれよはの嵐のふくさかりしも
くれのをも

色々の花さく秋の夕まくれのをもるともにみるかひもかな
しかのうら

妻こふる秋にしなれば小男鹿のうら悲しくもきこゆなる哉
からすかひ

ことはりと思へは人もつらからすかひなき物はうきみ也梟
へにさら

たひくにあふは嬉しきけふさへにさらにも迷ふか心哉
すもゝの花

よをすつと何かいふ難けふあすもゝのはなに故思ふ我みそ
殷富門院大輔人々に百わかうの花の名を法文によそ

へてよませ侍しに

有とても有にも非すなしとてもなきにも有ぬ世に社有けれ
はゝこ

悟らはやみ法にとける言のはゝこのよをうしと教へけり共
きく

このよにてきくにつけても思ひやる法のはなる花の匂を
しふれ

のりにとく言のはとにをしふれと猶はかなきは心なりけり
くたに

消はてむ我身の末をいかにせむきくたに悲しあなうの中

折句歌

まつかさき

待出る月の光のかひ有てさやけきそらにきみそなかめん

こむあをに

こひくゝてむつとつくす明ほのゝ惜き名残にゝる物をなき

こしかたな

こりすまに慕ひきつらんから衣たちはなれては泪こほれぬ

沓冠

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひし御とき御會のついでにさよふけぬとくたゝむといふ事をくつかふりに

をきてこひの心によめと仰られしかは

さめくゝとよる晝しけくふる泪けふの暮はたぬれやまさ覽

同御時まいれと仰られし日をわすれてや有らむとてたまはせ侍し いひしひを たかふなよ

いかにまた獨り明すか忍ふてふ人はつらしな思ひこりねよ

御かへし あすの目を たかへめや

飽て只するわかなかのへて思へ晝社あらめ思ひこりめや

たむこのこかやとよりにしにかはをへたてゝすむよしきゝてちかきわたりよりとてひとをやりてたつね

しをいつくよりにかとおほめくよしきゝてやりける

うた二首ちかしとはこれよりそ

近きとこかくこそ有けれしりもせよ隣に隣はしわたるまそ

まめやかに たのまむよ

槇のいためならふ人の宿は今かくれさらなむ西のわたりよ

かへしはふたつをひとつにとりあはせたるなるへし

たのめかし まちかきに

頼め今のへの中みちめくりしかかはかり近きしるし計りに

さて又中將さたいへ侍従ときこえしころひころもよ

そのしる人にていひかはされけりときゝてなをまた

つかはしゝ しゝうには をとらしを

しる人をするとはきけどうす櫻にほひもあらし花の匂ひを

かへし しゝうには にしものを

しかすかにしらぬ人なし浮雲もにたる櫻の花ときゝしを

廻文哥

白浪の高きをとすらかなはまはかならず遠き方のみならし

茂るはもかさしていはいまやみくたく深山はいてし坂も遙けし

長きよのゝも遙にてそまくらくま袖にかかるは物のよきかな

はらあける舟なる棚はいをとると老はなたるなねふるけあらは

品玉もをかなまひも〔脱懸〕また暫てまもひまなしかをまたなし

せむとう哥

昔より花を是谁も惜め共いと斯計り歎く例は又もあらしな

小夜更て今も鳴南時鳥我より外に又まところまで待人もなし

心あらは光をそへよ秋の月今宵社名に流たる夜半と聞つれ

衣手はむへもさえ鳧朝とけく今朝みれば雪降にける野原篠原

重なれば行衛も知す成ぬ覽契し事は我も忘れず君も忘れし

世中は厭ひても猶厭はゝやと思ふ心は何に向ひて過る成覽

五條三位入道むかしはまものおやにもまさりてこゝ

ろさしあさからすたのみきこえしをやうくとしつ

もりてのちはゝなともなくなり侍りてかの入道もや

そちにあまりわか身もまたむそちにあまりてのち世

をのかれて侍しにいとあはれにむかしいまのとなと

りに哥に一句をそふるよしなと侍りて
緑兒と思ひし人も老ぬとて背く世をみる悲しさは夢か現か
かへし

有てなき夢も現も誰にかく問れまし君かみるよに背かさりせば
このかむるいつきせすをさへかたきあまりにこれよ
りかへしのおくにかきそへ侍りし

諸共にとはまし人もなき跡に君獨哀かくるも夢かと思ふ
かへし

諸共にあらまし人のなき跡の悲しさは夢ち計りにあふをまちつゝ

藤原隆信朝臣集下

戀一

西行上人いせ百首とて人々をすゝめ侍しに戀のうた
あさりする磯まの蟹の袂社いりそむるよりかくはぬるなれ

正治二年院百首に戀

色深く思ひたつたの山路にもかくや時雨のひまなかるへき

和歌所哥合にはしめの戀心を

しるへとて風のたよりを頼めとも猶あともなき涙のうへ哉

はしめの戀のこゝろを

つらからん人の心もしらぬよりあやしや袖の先しほるらん
戀の道いつなれ顔にしるへして心はさきにまよひそむらん

後法性寺殿(兼)

右大臣ときこえ給しころ人々百首歌

よませさせ給しにはしめの戀のこゝろを

獨りねの床の山なるいさや河いさや戀路もけふよりそしる

後京極との(良經)左大將ときこえ給ひしころ歌合侍し

にみしまえを戀のこゝろによせて
渡るせをいかに尋ねんみしま江のみしより迷ふ夢のうき橋

百首うた合中にみるこひ

花の色にうつる心は山さくら霞のまよりおもひそめてき

五條三位入道(俊成)十首歌人々にすゝめられしにこひ
戀路にはしるへとたのむ我心まとひにけりなゆく方もなし

後徳大寺左大臣(實定)大納言時の百首のうたに文をみ
てまさる戀

我といへはいなみのうらの忘貝ふみていとゝぬるゝ袖哉

後法性寺殿右大臣御時の後百首になれてあはさるこ
ひ

まことには逢も涙のよりきつゝなるゝにつけて袖濡せとや

吉水前大僧正家(基圓)百首にあはぬこひ

なをさりに頼めてたにも慰めよあはぬは常の習なれとも

西行上人いせ百首に

あふさかもまたこえぬより思ふかな忍ふの山のおくの通路

法住寺殿にて哥合侍しに時にのそみてやくそくをた
かふるこひといふことを

頼めつゝ逢ぬためしはよにもあれとさやは契しけふの暮迄

毎夜に契戀といへる心を

契をくその言の葉のまゝならは幾夜かゝれぬ中とならまし

後京極殿百首哥合にまつ戀

こぬ人をなにゝかこたむ山のはの月は待いてゝさよ更に見

同歌合によるの戀

たのめつゝふけ行よはを歎きても鳥の音をやは待明しつる

正治二年院百首に

待程はいける心もなきものをいつくにのこるうらみ成らん
千五百番歌合に

今はたゞ思ひたえたるよな／＼の契りもしらぬ松のかせ哉
後法性寺殿百首にあふこひ

夢ちのみ逢とはみえし中なればこれもうつつの心地社せね
よそにてもあさゆふ馴し面影のこよひはさらに珍らしき哉
君やそれ有り辛さの誰なれば恨みけるさへけふはくやしき

後京極殿百首歌合にあふ戀

夜を重ねかへす衣の恨みてもうつゝまてとは思はさりしを

吉水大僧正家百首中に逢戀

慰まんためと思ひしあふとはみをいたつらになれと成けり

同百首にのちのあした

なにとこは明ぬと告る鐘のをとそ心のやみはまた夜深きに

あふてのちまさる戀といふを人々よみ侍しに

逢みても又きぬ／＼に成ぬれば思ひのみこそ猶かさねけれ

後法性寺殿右大臣御とき後百首にのちのあしたのこころを

あはさりし思ひもおなし君ゆへをけさやは戀の始なるへき
とゝめつる我心にやちかふらん歸るををくるけさの面かけ
床の上に置つる今朝の露よりも歸る我身そまつきえぬへき
朝かすみ立別れゆく雁金のなきてかへるといもしるらめや

後百首中にかへりてふみなき戀

道しはの露は君こそわけつらめふみゝぬ袖のなとしほる覽
はしめのこひ

いつのまの露に袂のしほる覽戀路はけふそかと思ふに
戀のこゝろを

戀二

哀ともたれか心をなくさめむ身よりほかにはしる人もなし
殷富門院大輔人々をすゝめて百首歌よませ侍しに戀
のこゝろ

わか戀は霞のうちの梅か香の色にはいてし身にはしむとも
春風になひく柳のむすほれてをとにたてぬはくるしかり鬼
我戀はまたほにいてぬをかわ原したに亂れて露をこほるゝ
狩人のいる野にたてる鹿たにも聲たてゝこそ妻はこふなれ
人心あしのまろやのむら時雨をとにはたてし袖はぬるとも
つゝみかねおつる涙や古里のしのふにあまる軒のたま水
あつまちやはるかに聞し里のなは心のおくに有けるものを

後法性寺殿右大臣の御時百首にしのふ戀

人しれす思ひそめてし紫のなたかのうらの名にたてめやは
こひしなはそれゆへ人やあやむると思ふにおしき命なり鬼

正治二年院百首に

思ひねの夢も氣色やしるきとてえそまろまぬ人の あたりは

千五百番歌合に

袖の色はわかむらさきにあらなくに心を染る忍ふもちすり
忍ふ山うつゝにたにもまた見ぬをはかなくたのむ夢の通路

和歌所哥合にしのふ戀

あらはれてつらさしらする人もかな忍ふる中の泪かこたむ

同こゝろを

逢ぬまのつらき恨みもなき物はしのふる中の日かす也けり
修理大夫經盛歌合し侍しに戀心を

しのひても心は通へよそなから思ふに人のあた名やはたつ
吉水前大僧正家百首にしのふこひ

現にもさらはいかにそ我戀をあやむる人の夢にみえつる

後京極殿左大將ときこえ給ひしときの百首歌合に忍

戀

あくかるゝ心の誰かとこにゆきてあやむ計りの夢にみゆ覽

後法性寺殿百首にあふてあはぬ戀

さりともと待ともなく悲しきはあひみて後のつらさ成けり

大輔か百首にあふてあはぬ戀

夢にたにあはてうかりし古もおもかけにたつ歎やはせし

よを重ね靡き果にし秋の田のいねとはさらに厭ふへしやは

思へともあひも思はぬかた糸のくるかとみれば猶たえに寔

今さらにあはてのうらの忘れ貝ふみゝるをもたえ果ぬとや

いまそしる後の世かけて契しはいけるをいとふ心なりけり

西行上人かいせの百首に

契置しこむよまで社かたからめ變らぬみをは厭ふへしやは

院百首に

あかぬまに別を告し鳥よりも獨かなしき鐘のをとかな

千五百番哥合に

忘れしの露の情をしのふくさなをこふるまでおいにける哉

戀をのみ賤か門田のひたふるに音たゆる迄あきはてぬとや

和歌所歌合に山家あか月の戀

こよひ君みやこにたれと眺むらんれし名残の有明の月

むかし月をみて戀をますといふを人々よみはへり

しに

もろともに契しよはのむつことをおもひ出よとすめる月影

前播磨守隆親哥合し侍しに

かきくらす涙を袖におさふれば移りかさへもくちにける哉

かとをすきていらさる戀といへる心を

忍ひつゝかよひ馴にし黒駒のすきわつらふも人やかめん

むまのうへの戀

いもかりと早めならひし駒の足のさもあらぬ道を何急く覽

六條入道左大臣大納言と申しゝ時の百首にうつりか

をよめる

しのひつゝ重ねしよはの移り香にあまりしみける我袂かな

後京極殿百首哥合にわかるゝ戀

くれはまたと思ひし程の別れたに名残はいける心地やはせし

同百首にたゆるこひ

しらさき今はと言しあか月をやかてまもの言の葉そとは

まれなる戀

いかて猶かゝる絶間を過す身の一夜をたにも明しかねけん

夕戀

あやにくに物を悲しき待し日は曇る空さへうれしかりしを

戀三

師光入道歌合し侍しに戀心をよめる

戀しなむ後の浮世はしらねともいきてかひなき物は思はし

太宰大貳重家歌合し侍しに戀哥とてよめる

我ゆへの泪とこれをよそに見は哀なるへき袖のうへかな

白川にて人々歌合し侍しに戀

うき乍ら身をも厭はて世中にあればそ人をよそにてもみる

親盛入道歌合し侍しに

面影はわか獨りねの床におきていつくにたれと夜を明す覽

人々たひの戀心をよみ侍しに

戀をのみすまの浦ちに衰へて浪まにわふといかてしらせむ

戀心

野も山も草木もこひやしけるらん露をこほさぬ曉そなき
後法性寺入道殿右大臣御時たひにて會戀といへる心
をよませさせ給ひし

ならへつる枕も假の草なればなにかは床のかたみなるへき
のちの百首に

君とわかかはす心はあふさかの關にやふたり立とまるらむ
後京極殿百首歌合旅戀

ましろまぬそのよな／＼をかそふれば夢路もとをき草枕哉
とをき戀

尋ぬへき程をきくにもいと／＼しく心の道にまつまよふかな
吉水大僧正家百首に恨戀の心を

うしとでもたえやはつへき限りなく思ふより社人も辛けれ
正治二年院百首に

朝ゆふの露のみふかきおもひ草色をみすへき言のはもかな
わひつゝも幾夜になりぬしきたへの枕定めぬうたゝねの床

千五百番哥合に

いくしほとそむる心を人とは／＼かはる泪のいろをこたへむ
いかにせむ思ひは深い海の釣する蟹のうけひかぬ身を
朝ゆふにうき面影をみなれさほさすかにさても慰みやせん
戀せしのみそきもいさや夢にたに御手洗河の忘れかたみを
明ぬとてはかなく忍ふなこりかなあふとしもなき夢の契を
とへかしな哀と迄にあらず共扱もやいけるとはかりをたに
和歌所哥合に久戀

後京極殿御哥合に夏戀

夏なからあしかねぬるねさめかな人の心のあきやきぬ曉

百首うた合にたつぬるこひ

尋ぬればためしやはなき幻のよをへたてたる涙のうへにも
あらはるゝ戀

人しれす心のうちに染し色もちしほになれはかくれさり息
恨戀

露しけき秋のものせの眞葛原いつ迄よそのものとき／＼けん
ふるきこひ

年へぬる辛さに絶てなからふときかれむさへそ今は悲しき
曉戀

あふとみるなさけもつらし曉の露のみふかき夢のかよひち
おいたるこひ

色にそむ心はおなし昔にて人のつらさに老をしるかな
寄月戀

月よなをくまこそなけれかきくらすこひの泪は雨とふれ共
寄雲戀

おのつからねやもる月もかけ消てひとり悲しきうき雲の空
寄風戀

色に出しものはもみなかれはて／＼涙をちらす風のをとかな
寄雨戀

獨ねのとこにしもなとをとすらん靜かにそ／＼あか月の雨
寄烟戀

つれなさにたへす也なむ煙をも我ゆへとやは眺めしもせむ
寄山戀

夢にたにまたふみもみぬしのふ山深き戀路をいかて尋ねん
寄海戀

岩根うつ荒磯なみの高きこそまたよそなら袖はぬるなれ

寄河戀

はるかなるほととそ聞し衣河かたしく袖のなにこそ有けれ

寄關戀

逢坂の關のこなたになをとめてこれよりすぐる歎きせよとや

寄草戀

よと共にかはくまもなき我袖やしほひもわかぬ涙のした草

寄島戀

面影をはのみしまのに尋ぬれば行衛もしらぬもすの草くき

寄獸戀

いかてわれふするの床にみをかへて夢の程たに契むすはむ

ことによする戀

なをさりにはかなくすきむ琴の音も松には通ふ物と社きけ

あそひ(遊ぎ)によする戀

浪の上に浮ふ契のはてよりも戀路につまむ名こそうからめ

くゝつ(偶偏)によする戀

さまゝにうつる心もかゝみ山影みぬ人をこふるものかは

あまによする戀

戀をのみしたの浮島うきしつみあまにもにたる袖のなみ哉

きこりによする戀

浅ましや心をしほる山人もみにおふほととなけきをそする

あき人によするこひ

尋ねはやほのかにみわの市に出て命にかふるしるし有やと

絶久戀といへるこゝろをよめる

人しれす結びそめてしわか草の花のさかりはすきやしぬ覽

後法性寺殿右大臣御とき百首に

戀四

よしさらは我や苦しき逢みての後にたえぬるよその人めは

二條院東宮と申し、時おなしよはひなる人をしのひ
わたりし程に人々あやしきさまにもてさきくよしを
きゝていひつかはしゝ

春霞かすみの衣ほころひてしのふのみたれあらはれやせん

かへし

人こゝろ花としみすは春霞あらはれゆくもなけかさらまし
としのわかゝりしころ女のもとへいひつかはしゝ

世中の色をもかをしらぬ身にいかにそめける心なるらん

かへし

なをさりの心の程は淺くともそめける色をいかゝかへさむ
としいたうわかゝりし人に文なとはかよはしなから

なをふかくはおもひしれるさまにもきかさりしをう
らむへきにもえなくといひつかはしゝ

戀にたに身をならはせる君ならは思ひしれ共いはまし物を

かへし

戀の道心にもあらずふみ初てくやしとのみそ思ひしりぬる
越前守にてくたりしに思ひのほかかめつらかなる人

をみいたして

これやこの花の都をふりすてゝゆきとまりけるこしの里人

かへし

花の色に心とめしや都出てかひなきこしのすまゐ也けり

みやこへかへるとてもろともにといさなひしをたの

まぬさまにいひしかは

諸共にかへる山路をさそへともかりとや人のたのまさる覽

かへし

淺からず我はたのむの雁なれとなきくにいかゞ身を任すへき
又おなしくにゝて思ひかけすかたはらのくになる人
にゆきあひてこまかにかたらひゆくほとにむかしみ
やこにてみし人にてありしかは

かへし

いかばかり深き契を結ひてかふたゝひこゆるあふさかの關
深しともえこそしらね相坂の關のしみつの絶しちきりは
かくてのち程なく京へのほりけるに女のもとより
たち歸りまた逢坂やへたつらにいづらふかしといひし契は
かへし

思はすにゆきあふさかの關もあれは又こえ歸る道も有なん
人のむすめのいはけなきをみてにけなき心をかけつ
つとし月をすきしほとに世中あちなきなきとおほくて
いかなるすちにか思なりにつけんをこのわかおひ
(若生)すかたわすれかたかりければ

おひたゝむ盛ゆかしき若草にはかなくかけし露や消なん
身にもあはぬおもひに心をくたきてつかひ人のかた
らひてつかはしける

もしほやくあまの苦屋のしたよりも煙はたく立のほる也
かへしはなくてもとのふみをかへしてそのうたのそ
はにしものくはかりをかきそへられたりしを見れば
ふかき煙や立のほるらんと有しかは又

泪河人めつゝみをせきかねてもらすにてしれ深きこゝろは
かへし

かねてより淺き心のしるければむすひはそめし山河のみつ

西の五條わたりにかつらといふさとにすみ侍しをん
なのつれなかりしにうつきのころいひつかはしゝ
ゆき通ふ桂の里はなのみして逢日はいつとしらす有ける
かへし

言のはにかけないひそ葵草かつらの里は月のみそすむ
月あかき夜女のいへをすきけるにしのふ所にてかく
ともえをとつれてあしたにいひつかはし侍し

人しれす心はとめし月かけのうはの空にもすきにけるかな
かへし

西へゆく月に心はそへしかとうはの空にやあくかれにけむ
心にかけてとしひさしくつもりにし人のたまゝち
きるもありけるよしもひんあしきをありてゆきたり
けれとえあはてかへるとてこゝろにおもひける

つらきかな三年まちつる逢坂のせきの關もりたれもらす覽

あるひとに心をかけていかてそのゆくゑをたにきか
んと思てたつねし程に小侍従そのゆくゑよくしりた
るときゝてまかりてとひしにさまゝのともこま
かにかたりてなにとなきものいひまでもなきけおほ
くいたき人さまなる物からおもひかけすにくいけあ
りし人をうちみやりていきのしたにしぬといひて打
わらひしけしきなとをきかせたらはいとゝいかはか
り思ひまとひ給はんといひしをきゝていよゝせむ
かたなくおほえて歸にし朝に小侍従か申つかはしゝ
しぬといふ事はよそにぞ聞し身のあやなくけさは消ぬ哉
かへし

しぬといふ其人毎に身をかへてさらはるゑの尼とたになれ

いとわりなうしてはしめてあひたりし人につきの日は五月五日なりしにいひつかはし

昔よりおなし菖蒲の長きねもけふかけてこそ露けかりけれ
かへし

年をへて濡にし袖も菖蒲草かゝるうきねはあらしと思ふ
世中いみしうつゝみし人のもとへつかはし侍し

今は唯よその人めをつゝみこし心も身にはそは、社あらめ
かへし

今よりはいとゝ思ひそたえぬ〔き聖〕ぬその心さへそはす也なは

つねはあひかたくてのみさすかにとし月もなれにし
人のあたならぬ心さしはもろともにかさなりゆくあ
はれもさまゝに思ひつゝけられてあふよの涙さへ
をさへかたかりしをこの人心にはねんころに思ひし
れるけしきながら又おもふ心なきにしもあらぬさま
にてまくらなる硯をひきよせて月のひかりにかきつ
けし

ぬるといひし袖を重ねる今夜さへまたゝれゆへの涙なる覽
かへしやかてそのはしにかきそへ侍し

かつみても猶いひしらぬ思ひには重ねてしもそ袖は濡ける
いと心つよかりける人をいひおもむけて歸て後たひ
たひ文をやれと返しもせざりしかは

水蒸のなかれてのよの思ひいてに唯一筆のなくさめもかな

かへしたゝこのたひはかりいまよりはゆめゝとん
このよにはたゝ一筆をかたみにて今はかきりの契とをしれ
忍たる人ちきる事ありてなかつ月のなかのとをかこ
に山さとなるところへゆきてよもすからまちふせ

しにしかの聲風の音のみ身にしみて夜もあけかたに
なりにしかははしらにかきつけてかへり侍し
頼めをさしいも待かねてねたるよの秋風さむみ鹿を鳴なる
つきの日けふなんかの山さにと侍とて

待つらん心のほとはしらねとも我もしかこそなき明しつれ
後白河院〔七十七〕くらゐにおはしまし、時二條院〔七十八〕
心東宮と申し、御方にまいりて月あかゝりし夜れ

いせい殿のひろひさしなとたゝすみありきしにせむ
えう殿のそりはしに女ふたりたちたりしをすくるさ
まにてひきとゝめしにいまひとりにはにけにしあとに
この女いとわりなうおもへりしかともとかむへき人
なかりしかはゆるさすなりにしをいとあはれにおほ
えてゆくゑをとへとたれともあらはさゝりしかは
心をは雲の月にとめなから行衛もしらすあくかれよとや
かへし

ゆく衛なき月も心しかよひなは雲のよそにも哀とかみん
かやうにいふ程に夜もはしたなく明にしかはまたま
たもなと契をたのみてゆるしてのち又たつねへきか
たなくて人しれす心をつくしてすくる程にたか松の
院の東宮の女御にてしけいしやにおはしまし、御か
たにいせのこといひし人これをきゝてゆめかうつつ
かなとうちなかめてやすくし給ふなといひしかは
たれとかは夢うつゝをも定むへき君やこしとも訪人はなし
かへし

夢か共けふこそしらぬ契あらは思ひあはするよにもあひ南
かくてとしも十よ年に成ぬれば思ひたえたることに

てやみにしを又あるところにて物いひわたりし人の
こゝろさし淺からてすみなれし程になにとなきむつ
かたりなとかたらひかはいつゝこまかにきけはこの
人ならむかのせんえう殿にてみし人なりけるを女日
ころ月ころもよくしりなからかくともあらはさゝり
けるをさてのみすみなれにけるも哀にさまゝに覺
て歸にしあしたにいひやりし

今そしるありし雲井の月影にめぐりあひけるよゝの契は

かへし

さもこそは雲井のよそにとしへなめ契し月をさやは忘るゝ

またこれより

面影はさやかにそれとわかねとも契し月をわすれやはする

かへし

さやかにみさりし月の影なれは忘れて社は年もへぬらめ

また

年ふともいかゝ忘れむ月かけのすみなれてたにあかぬ哀を

かへし

すむにたに哀のみます月影の曇るたひにはうちしくれつゝ

此かへしは思ふこゝろありけるにや。

二條院くらゐにおはしましゝ時月あかゝりしに梅つ

ほのかたに女たちたりしをみれば日ころいかてもと

おもふ人にて有ければいとゝうれしくて

今宵よりかけを並へよもろともにくもるもみえず在明の月

かへし

くもりなき光はともになかむとも影はならへし有明の月

かやうにいひかはしていとほしたなからねはかたら

ひなれて歸にしつきの朝つかはしゝ
あくからす月とはなにゝ思ひけん戀のしるへと成ける物を
かへし

月かけもいかなる人をしるへして心のやみに我まよふらむ
女のもとへしぬへき心地なんするといひやりたりし
返事にこひには身をもかふるものそなといひたりし
かはまたをししかへして

戀しなむ身を惜むにはあらね共同しよをたに別れすもかな

かへし

戀しぬときは哀もかけてまし情なきよになからへむとや
おとこ有ときく女に時々物いひわたりしをあやなく
たえまかちなりなと恨み侍しかは

一すちに靡かぬあまの煙をはたか恨みとかいふへかるらん

かへし

人しれぬ思ひはかりは靡けともけふりは空にしられさり鬼

女のもとへまかりたりしに又おとこ有ける人にてき

あひにけりいとあさましくてもものゝはさまにかくさ

れてするかたなかりし程におとこいかゝ思ひむやか

てたちかへりにしかははひいてゝ

狩人のいる野にたてる鹿たにものかるゝみちは有と社きけ

かへし

遡るへきかたなき野への鹿よりも我こそいたく思ひ消ぬれ

あなかちに忍わたる人を心にはおもひなからをとつ

るゝことたにもなくてすくるを女はまた恨るよしき

きてわりなきゆかりを尋てつかはしゝ

とへはえにとはねはうしと恨む也かくてや人は思ひきゆ覽

かへし

とはるゝもとふにつけても裏うへに泪のみ社^{せき}もやられぬ

戀五

春ころ山しなわたりなとあくかれありきしに梅花さ
かりなる人のいへをすくとてあるしをとほせしにも
の外にいひしかは申しれし

梅かゝはしるへかほなる春風のたかゆくゑ共なとや吹こぬ

かへし

しらるへき行衛ならねと梅かゝに誘はれてこはいかゝ厭はむ
かやうにいひつゝいりてたいめむなとしてまたもゆ
くへきかたゝ有て歸にしつきの日又いひやりし

色深くそめし心そわすられぬみやまのさとの梅のにほひに

かへし

かへりにし心の色の浅ければあたにそめける花とこそみれ
そのくれにやかてゆきてかたらひなれにし程にこの
女又しのひわたる人あるよしきゝていひたえにしを
花のさかりにさくらちりたるをものゝふたにいれ
てかれより

あるしゆへとふものはゝかれぬ共ちりぬる花の行衛尋ねよ
かへし

ありふれはのちうきものと世中を思ひしりてや花も散らむ
とて猶又をとつるゝ事もなかりしを猶女のもとより
さこそうとみはて給とも花の散はてぬ程になとてか
道のたよりにもおしみ給はさらむなとことはゝかり
にていひたりしかはその返事にそへて
哀しる人たに辛き身にしあれば惜むと花のとまりやはせん

かへし

いさやその花の心はしらねとも思ふにつらき人はあらしを
物いひわたりし女の伏見里にかくれてすむよしきゝ
てまかりてたつねしを猶かくれしかは

尋ねつゝ伏見にきつるかひもなし身をうち山の詠のみして
かへし

都人たれに契をすかはらやふしみにきけるなめ成らん

すかはらとよめるそこのふしみにはあらねと。女なれ
は。こまかにはしらぬにや。

さてからうしてあひにければ夜もすから日ころ月こ
ろのむつことなとかたらひあかして曉かへるとて

曉のならひもすきてかなしきはふしみのさとの別なりけり

女かへし

曉のならひにすきて悲しきはふしみの里をかへらましやは
とし月すみわたる人にいとまをこひて南山しなす
む女のもとにまかりて朝に歸てみれば枕にかきつけ
たりし時はさ月なりけり

ほとゝきすこしけき闇に山科の岩田のをを今やすくらん

これをみるにいとあはれにてそはにかきつけ侍し
ほとゝきす今はかよはし山科のこしけき道は露けかりけり

八條院とは殿におはしましゝころそのわたりにみす
せりかはといふさとゝをあそひありきしにかやゝ
のあし簾といふものかけたりしにいと思ひの外なる
女をみいたして

かけてたに思はぬ宿の簾簾みすに馴けるしとそ思ふ
かへし

蘆簾おもひなかけそかけてたに行衛もしらぬみすのさと人

つの國なにはわたりにて思ひのほかなる人を見いたして又たくひなき心地しければ

つの國のあしよし今は尋ねみしなにはのとも君にとゝめてかへし

つの國の長らへてしもあらしみを蘆よしともいかゝ頼まん

この女我も人もいもろしやうしにはゝかりたりし程におりしもおやのおとこあはせんといふとて女もいみしうあやなきことゝ歎きつかはしたりしかは仇浪のかゝる契をしらすしてなにか難波のうらなれにけむかへし

あた浪のかゝる汀にしほれても更になにはのうらめしき哉

内わたりなる人にひさしくたいめむ給はらぬといひしをさらぬたになき名たつなれはとてあはさりしかはこせちのころ雪ふりにしくしつゝみたるさまにてかの女のすみけるさうしのみすのへりにさしはさみてにけにし

今は唯ふみそめよかし白雪の跡なきなのみ世にやふるへき

つらかりし女のもとへいとうしと思ひしりながら身の程をしりてなんえうらみぬとてつかはしゝ

うき乍らうしとはえしもいはれねは心なき身に成やて南

かへしいたう思しりぬるよしなとねんころにいひて

恨むらんそのよりはしるものを心なしとは誰かいふへき

とてそのゝちはいかにも身をまかせんといひたりしかはまた

けふよりは身をまかすともすきゝにし深き恨は猶や残らむ

又かへし

世中に深き恨のなくもかなけふよりのちとたのむ身のため

ある宮はらにて女あまた物かたらひて歸にしあした中にすくれてきこえし人にいひつかはしゝ

思ひわくかたも渚による浪のいとかく袖をぬらすへしやは

かへし

思ひわかてなにと渚の浪ならはぬる覽袖のゆへもあらしを

又をししかへして

君ならて誰にか袖をかこつへき猶思ひわくかたはなければ

この返事はいかにいふへしともおもほえずとて

移ろはん事こそかねてうかりけれ色なる人のちらす言のは

またこれより

うつろはむもな思ひそ淺からぬ色をは色にそむとしらすや

またゝもこの女のもとへたひゝゝ文をやりてねむ

ころにいひわたりしに返事もいとこまやかにてたく

もの煙にはいかゝ思たつへきをあつまときゝしかは

とて思ひたえなんもいかゝはせんといひたりしをき

くことや有けむ

浦山しいかなる風のなさけにかたくもの煙うちなひくらん

かくいひても猶あかす覺えて

東路ときくにいとゝそ頼まるゝあふくま河にあふせ有やと

をろかにはあらすなから心ならすおとつれをたにせ

て日數つもりにし人に五月五日

あやめ草ねのみなかれて心にもあらぬまに社日數へにけれ

かへし

けふそしる袂にかゝる長きねをあひ思はぬにひけるものとは

女のたのめし日をいひのへつゝ後の日をまてといひ
しかははしめ契し日のくれかたにくもる空もけふう
れしからましをなとうち詠くらしてかくなん
今日といひし暮は猶こそたゝならね契しをなをたのめ共
かへし

逢事を頼めしけふの暮なればさそあらしに物そかなしき
時々物申わたりし女のもとよりねさめに郭公をきゝ
てかくなんおほえつるとて

諸共にとかたらひしあか月のおなし聲なるほとゝきすかな
かへし

思ひ出てねさめし床の哀をもゆきてつけゝるほとゝきす哉
五月五日女のもとへつかはしゝ

思ひきやあはぬまにひく菖蒲草うきねをそへかけん物とは
物いひわたりし女のもとより花たちはなを文につゝ
みていかなるすちの心とををしはかり給へとかきた
りければいと心えかたくかの昔の人の袖のかそする
といひけむたくひにも思ひよそふへきかたなくまた
はむあんしん遷安の車にいれけむためしをおもふ
にもこの身のあやしきにはもたかひたれはいひやり
し

昔思ふにほひか何そを車にいれしたくひの身にあらなくに
女かへし

何れとは思ひもわかすなつかしくとまる匂のしるし計りに
物いひわたりし女のはらからにてわかき人の侍しを
ある近衛つかさの文なとをこせけるをいとつゝまし
く思ひて哥のかへしなともせさりけるに猶しゐてい

ひおこせたりければ
淺ましやあはての浦の浪たにもよらぬに袖をぬらす物かは
さのみかへしせすときゝしもなさけなくやとてかの
人にかはりて

いかなればあはての浦のあた浪のゆへも渚に袖ぬらすらん
女のもとへふみをたひゝつかはしゝ返事をせさ
し程にいひつたふる人のもとへ文にてみよともいひ
かほにいとやさしくかきちらしたりければいひつか
はしゝ

なをさりに散くる風のつてなれと色あるものは社身にしめ
かへし

つてにても今は散さし言のはの色にみえ劔うしろめたさに
戀六

五條西のとう院わたりにすみ侍しころかはをへたて
て宜秋門院のたんこすむよしをきゝてつねにいひか
はし侍し程にかのすみかはは西殿といひて文のうは
かきにもかきてやりなとせし程にかれよりかく西の
すみかの侍けるも人をみちひくはしにもやなとされ
いひて

願ふらん西へみちひくはしなれば此よひとつの契ならしを
かへし

西にひく心のはしは踏そめつ渡らん日こそしらまほしけれ
かくたゝことにいひける程にその河にいとひろき橋
をわたすときゝてこれより

なか河の水にせかれしみちはしを渡してけりと聞そ嬉しき
この返事にはしいてきなはこれよりのちわたらむ人

は心さし淺くやといひて

桁よりも通ひやすると待へきになに渡す覽なかのみちはし
猶これより又をし返てかのいたゝのはしのくつれな
はといふ古歌もはしのあるうへのかねことにこそも
とよりなからんにはなにのけたよりかはわたりもそ
めむといひて

朽はてゝ桁になるとも年をへて渡りたゆへき橋ならなくに
この返事に猶又いたゝの橋柱すこれは人の心をもみ
むとのこりたりつる橋はしらのなをりぬととくにく
ちはてむまでの命もしらねは心の程もしられてこそ
はやみぬへかむめれとてさるは又かたはらたちはな
れぬおひ人もかきりなくいさとに侍れは人めつゝみ
のしけさもたえまかちなる中かはにやといひて

朽はてゝけたをもはしは渡る共人めつゝみに猶やせかれむ
かやうにいひかはす程にれいならぬと有てやいとを
なとしたるに又この女もひるくふよしをきゝていひ
やりし

朝露のひるまはいつそ秋風によもきのあとも思ひみたれぬ
かへし

亂るらん蓬のあとの苦しさに露のひるまもいつとしられす
猶たひゝとひたつねしかといさと人も所せしひる
もいつはつへしともなといへは

よなくはいもねぬ人も有とさく晝間をたにもいつといは南
かへし

うちもねぬ關守たえぬ宿なればひるまをいつといかゝ頼まむ
又これより

白浪のよる計り社もりもせめひるまはなとかうちもねさ覽

またかへし

夜を重ねうちもねさ覽關よりはひるまをとも許しやはせむ
なをまた申つかはしゝ

きゝ渡るなをさへいとゝ頼むかなすみよからしや天の橋立
かへし

なのみして住よからしをなかゝにきゝのみ渡れ天の橋立
心のほとをしらせはやと思し人に秋ころいひつかは
しゝ

初時雨よにふりにける言のはをいかなる色にしらせ初まし
かへし

初時雨世にふりにける言の葉は色にいつとも頼むへきかは
女のもとより夢かたるへきにもなければ人にもしら
れぬへくもなきをいまさらにかくないひそといひた
りしかはこれより

諸共にかたらぬ夢を契にてこはいかにして年の經ぬらん
かへし

年をへてあはするももなき夢をこはいかにして驚かすらん
つれなき女の心はかよはすしもあらぬさまにみえな
から人めつゝましければたゝよそのしるへにてとい
ひたりしに

よそなりと人めはかりは白雲の隔てぬなかと思はましかは
かへし

思ふらん人の心も白雲のへたてぬなかといかゝなるへき
秋ころ物いひわたりし女のつれなきものみ侍ければ
かく計り深き契をしきのふすかりたにたてるなをきかしはや

かへし

秋の田のいな共いかゝいはさらむ假初ふしは辛からしやは

またこの女のもとより秋のくれに

暮てゆく秋の限りのけふなれば言のはさへそ盡はてにける

かへし

秋の田のいなてふ言のはゝつきぬ雪ふる道を今はたつねん

このつきの日は神無月のついたちの日なれば又これより

言のはもけさより深き色そへよ朽にし袖もころもかへしつかへし

今朝よりは々ちし袂もかはるなり心の色もさやうつるらむまたこれより

けさよりはひとへにくちしさよ衣かさねんを思ひたつ哉またかへし

重ねてもたち別れなはから衣わか袖のみやくちはてぬへき女のもとへいつかさはりなき日といひつかはしたり

し返事にむくらにとちられていつとなしといひたりしかは

茂るとて人こそとはね八重葎さはらぬをさへいとふ物かはかへし

思ひなき人こそとはね八重葎しける宿には袖はしかすや

此かへしはひしきものには袖をしつゝもといへる。ふる歌のこゝろなりけり。

これよりはあらぬさまに人こそとはねなといひたりつるを又をしかへして

さはりかと思ひけるかな八重葎袖しく宿といひけるものを

かへし

ふりにけるひしきものさへ忘れめや偽ならぬ思ひなりせは

またこれより

ひしきもの忘れてたにも葎にはさはらしと社言しわれしも

女のもとへ文つかはしたりし返事にむさしあふみとおほえてとはかりかきたりしにこれより又をししかへして

うるさしといふたに辛し武藏鐙しねとはかけて思はさら南

かへし

とはぬたに辛しと聞し武藏鐙しねとはかけて思ふへきかは

とてうるさからぬむさしあふみになんとかきたりしかは

かけてたに辛くはあらし武藏鐙ふみうるさしと厭ふなる覽

かへし

よしさらはかけてもいはし武藏鐙ふみうるさしと厭ふなもたつ

女のもとより曉のねさめにすゝめありきつるあみたのひしりのころも我身ひとつにしむこゝちして思を

なきとこにはよもきゝ給はさりつらむなといひたりしかは

我は唯あか月にねさめして耳なれにけるみたのとなへを

かへし

羨ましかなる人の夢さめてみたのとなへに耳なれぬらん

つれなかりし女はいひそめし日はけふそかしといひたりしかはこれより

いひそめしとはゝかなく成ゆけと日数は君も忘れさりけり

かへし

みる度に心にとまることは、日數をとて忘れやはせん
日をかゝす文やりし女のもとへひとひつかをとつ
れさりしかはかれより

なをさりにちりこしものはなれ共かれゆく程は悲しかり
返し

逢事を待てふものはにしあればかれにはかれし色はます其
うらみむと思ひし女のもとへふみをやりたる返事に
我身にはなを露のなきけもかけぬさまにいひて中將
さたいへ侍従ときこえしころそれもかの女によその
しる人なりければかの侍従の涙にしつむよしありし
いとをしきなといひたりしをきくにもかくこそ人の
哀をはしりける心につきせすなきけもかゝらぬ身の
程いよ／＼思ひしられて又いひつかはし、
君ゆへに沈むかひなき浮身にはよその涙をうらやまれける
女かのしゝうのをかくて思ひきこゆるもひとと
とゆへにこそなといひて

君ゆへに哀をかくるむさし野の草葉の露はよその物かは
後白河院の御ともに日吉にまいりこもりてみやこな
る女のもとへいひをくりし

つきもせぬ戀路はいと逢坂の關こえて社まよひましけれ
かへし

いかばかり苦しとかしる相坂の關こえしより迷ふころは
この返事のおくに猶かきそへたりし

歸るへき日を數へてもかひそなきとをさかり行しかの浦浪
猶かの返しはみやこへ歸てのちいひつかはし、
とをさかるな社たてれ君かため急きてかへる志賀の浦浪

みやこへ歸ても猶さはること有ていつしかもまから
さりしかは女のもとより
都にも猶あふみちはへたてけりみるめ渚のうらならねとも
かへし

都人ゆきあふ道を急きてそみるめなききのうらはすきにし

ひさしくをとつれさりし女のもとよりことははな
て歌はかりよみつゝけてつかはしたりし

かくてさはたえける物を白糸の苦しきほと／＼に思ひけん
くやくも人めつゝみをもりいて、淺きなそたつ山河の水
君とわれいくへ隔つる關なればまぢか乍らもはるける
たえぬるかざりとともところ頼みしかふかく契しな河の水
佗つゝもこのよひとつの思ひ河もえむ煙のはてはいかにそ
たまゆらも命をかけしことのはの絶はてぬるや限り成らん
いかにしてまゝむ程に慰めて夢計りたにあふとみるへき
誓ひてし人の命に取かへてこひしぬる身といかてきかれむ
都へはいてぬときを郭公まつにはなとかをとつれもせぬ
誰にかは身より外には憂ふへきうきことはる人しなけれは
かへし

かくてしも絶はつましき白糸のくるしき程をなに亂るらん
山川のあさくみゆとも流れてのその心はしられさらめや
夏なから霧のみ深き關なれば間近しとてまいかてあふへき
恨むなる深く契しな河のめぐりあふへきせをまたすして
諸共にもゆる煙のはてならは同じそらにやたちものほらん
諸ともに命をかけし玉の緒の絶ぬほとこそ人もうらむれ
よを重ねあくかれ出るわかたまの夢の枕にみえさらめやは
裏うへに弱りのみゆく我をきて戀しぬるみといかきかれん

いつしかをとつれしをも郭公またぬ宿にやをそく聞らん
よそ人のとふとのみさく仲なれは憂ふる程もなとかなか覽
後法性寺殿にて月をみて戀をますといへるこゝろを
諸共になかむるよはのむつを思ひいてよとすめる月かな

雜一

二條院の御時殿上のそかれたりしつきのとしの春臨
時祭の舞人にてまいりたりしに南殿の櫻を見て花の
えたにつけて女房のもとへ申入侍し

わするなよなれし雲の櫻花うき身は春のよそになるとも
かへし

思はずに身こそ雲井のよそなめなれにし花は忘れしもせし
寂蓮中務少輔とまうしゝ時花のさかりにさくらもち
いささえたにむすひつけてつかはしたりし
きてみよと更にもいはし山櫻残りゆかしき程にやはあらぬ
かへし

心をはまつさきたてゝ山櫻たつねゆくまもめかれすなとて
六條三位經家くらのかみと申し時家のはなさかりに
さきたりしを一枝とこひにつかはしたりしかは花に
さして

君かため宿の櫻を折つればみにくやとたにまたすなりぬる
かへし

おりてくる花の匂をみるにこそもとの梢はゆかしかりけれ
みやこうつり有し年花のさかりに法金剛院に上西門
院おはしましゝにまいりて兵衛のつほねにたいめむ
きこえてまかりいてにしつきの日花のおもしろかり
しよしなと申て

たくひなき花をみしにもしるかりき昔のにはひ残る宿とは
かへし

花はかり有し昔にかはらねとふるえに残ることのはもなし
花のさかりに人々まうてきてあそび侍しなかに寂蓮
中務少輔とまうしゝ時つねの春よりもことしはいた
うなこりおほくて花の散なむのちのうさなとまうし
しかは

散うさは花のみもあらし誰も皆我故とまるなさけならねは
かへし

心あらむ宿の櫻をおしむにそなへての花はみつゝすきにし
四位してのち臨時祭のかへいしう(加賀從)にてまいり
たりしに舞人つとめしとなど思ひ出られて小侍從の
君のつほねを尋て申いれし

年をへてかさしなれにし櫻はなおなし庭にてよそにみる哉
かへし民部卿成範おりふし小侍從にたいめむしける
程にてこの返しはわれせむとて

さしかふるかさしの花は位山のほれば誰もさこそみるらめ
又の春臨時祭のかへいしう(加賀從)にたかふさ(隆房)の
卿の藏人頭にてもよほされしに返事のはしにかきそ
へし

心には雲のふちをかけなからさのみやさゝむ山ふきの花
かへし

山吹をこの春はかりかさしては雲井のふちも咲かゝりなむ
とありしかとへいしうはゆるされにけりその後いく
程なくて殿上ゆるされて臨時祭の使つとめ侍しにか
の隆房卿のもとへ

藤の花かきすけふこそ思ひしれ君か言のはかけしなさは
かへし

行末をかけて思ひし藤なれば春待えたるかきしとそしる

卯月の十日ころ三條の宮に御とのゐして居たまひし
に郭公の初音をきゝて衛門督公光

いつかたときゝまとはして郭公うのは空にやなかも明さん
かへし

郭公きゝてなかもぬ夜はにたにさ月の空はまよふころを

又五月五日やへうの花にあやめをくしてつかはしゝ
左衛門督

珍らしきやへうの花のめうつりに心もひかぬあやめ草かな
かへし

敷しらぬ身をうの花はめなれつゝいと菖蒲のねをかけつる

平忠盛朝臣のもとに五月五日人々まかりて歌なとよ
みて歸にし程にそのつきのとしかの人世中つゝむと

有て又五月五日こそをおもひ出けるにやいひをくり
たりし

袂にはさもあらぬねをかけ添てこそそのけふのみ忍はるゝ哉
かくてつかはしけるにちかひてまかりけゝをりしに

唯今かくなんいひやりつるといひしかは

とはぬまにあけて久しの菖蒲草こそを忍ふにねを通ひける
さ月のなかの十日ころしもわたりにすみ侍しにその

かたはらなる所に頼政卿わたりるたりけるをさもし
らさりしほとにかれよりまうしつかはしたりし
となりとはしるやしらすや郭公有とはきくに語らひもせぬ
かへし

音もせてとなりにきける郭公かたらふに社初ねきゝつれ

七月ついたちころに小侍従人につたへてつかはしゝ
文をゝきて七日にしもみせたりければその返事にけ

ふの文のおもはすきなとはちしめたりしといとあさ
ましうのへやるかたなき心ちして

逢事をならぬ身には七夕のけふの契もしらぬなりけり
かへし

たまきかにあふをいむとや七夕の契をしらぬ心なるらむ
さ月のころ内にまいりて人々こたちなと夜もすから

あそひ侍しにしむ大夫のつほね大夫とのとよふをな
し名なりとて郭公ともすとはおなじなにてわかなを

よふなといふすゝることをいひ出して更に郭公とな
につけんなどいひつゝいてにしまゝにいと久しうわ

つらふも有て秋までにもなりにければかのこたちの
御中へとて

秋ふかき霧にむせひてほとゝきすなれし五月の空を戀しき
なとやらむ。この文をはあけて見て。返事もなくて。

おひかへされにけり。

あきころわつらふも有て山里にすみ侍しに後徳大寺
の左大臣大納言ときこえしとき常に申つかはしゝか

ひさしくとはれさりしかはこれよりおとろかし申す
とて

思ひやれ心はいつも秋なれと霧さへはれぬみやまへのさと
かれにもわつらひたうひける程にて

われもしか霧にむせひて目をふれば秋の心の深きとをしれ
八月十五夜くもりたりしにさりなからもし人なとま

いるともやとおもひて後法性寺殿（兼實）右大臣ときこえ給ひし時まいられしにそのころわつらはせ給おりふしなりければまかり出しをたいはいむ所よりとて

諸共にこよひの月やなめまし霧にむせはぬわか身成せは御かへしもとすけの朝臣にあつてまかり出し

名に高き今宵の月にしるかりつ君かあたりの晴ぬけしきとは殿のひかむの御念佛の番に宿所まではまいりながらわつらふと日數つもりしなこりなを心よからてためらひしほとに十五夜の月いとあかゝりしにきた家朝臣番つとめてときゝしに申つかはしゝ晴やらぬ霧にむせひて眺めねともりくる月の影そさやけしかへし

秋のそら名にあふ月のくまなさに心のうちの霧もはれしや大納言實國左衛門督と申しときいさなはれしかは白河なる所にてかくらうたひあそひし程に曉かたにほしになりてこよひの月はたゝこゝにますなとうたひし程におもしろかりしなこりあかすおほえて歸りしものちふつかみか有て月あかゝりし夜申をくりしあか星のあかていてにし曉はこよひの月におもひいてすやかへし

只爰に只こゝにとこそ思ひしを出しは月のかひもなかりき月あかゝりしよある宮はらにてきよみちの卿やすみちの卿なとかくらうたひてあそひし程にたれもいとけふなきさまにすさひつゝいそきたちしかは女房の中より

もろ人の心もとけぬこよひかな天の岩戸も明すや有らん

かへしすへきよし人々すゝめられしかは天の戸の明ぬとみゆる月影の心とけてやたれもいつらん北白河なる所にて唯心房西行なとさそはれしかはまかりて歌よみ連哥なとせしに上西門院の兵衛ときこえしふるひとおはしあひて曉かへりしなこりをおしみて道にをひつきてつかはしたりし

いつかまためぐり逢へき長きよもあかて明ぬる月の名残はかへし

誰もさあかて明ぬる月影のよにすみなれば今めぐりこん九月十三夜小侍従のもとへまかりてあそはんと契たりし程に又さりかたきこと有てほかへまかりてそのつきの日かの侍徒のもとへつかはし侍し

人しれぬ心は空にあくかれて思はぬさとの月をみしかなかへし

雨ふれとわひつゝねにし月影をいかなる里にさは眺めけん後徳大寺入道左大臣大納言ときこえしとき九月十三夜に大皇太后宮にまいりてあそふへきよし有しかはまいりたりしにかの大納言又も人にいさなはれていてられにけりときゝてまかり出しをこたちよひとゝめてしはしと有し程に又やかて程なくさてとくいてねとありしかは心もえられすなからまかりいてし程に車に文の入たりしをいつくよりそと尋ねしかはたいはん所のかたよりさうしたちたるわかきものゝ出てなむいれてかへりぬるといひしを明てみれば尋きてあはぬものゆへかへりけん昔の人のこゝろをやしるかへしたいはん所へまいらせおきし

月にのる心はかりそ變らねとまたれぬうさのたくひなき哉
左京大夫修範いへのとなりにてつねにたいめんきこ
ゆへきよしなときこえなからなにとなくてのみすき
にしを九月十三夜月をにあかゝりしに申をくりし
諸ともになかめまほしき月影は宿のへたてそ隈と成ける

かへし

月をみる心は誰もかよひけり宿のへたてはくまとなれとも
又十三夜月おほるなりしにもろみつのきみのもとへ
申つかはし

君にあはて日を古里のいふせさはこよひの月も臆にそもる
かへし

月みてもまつ思ひやる我こゝろかけと成てやおほろ成らむ
九月廿九日後徳大寺左大臣大納言ときこえし時徳大
寺におはせしにまかりてたいめんたまひてよもすか
らあそひてかへりしつきの日かれより

君に逢て名残を惜むけふしもあれ暫しとまらて秋もいぬめり

かへし

暮て行秋よりも猶あかさりし名残をいはゝいともかしこし
九月つこもりの日ある所に人々まかりあひて歌よみ
連哥などして歸にしに女房中より

年毎に秋のわかれは有ものをけふはしめたる心地こそすれ
あまたのなかなりしかとも人々かへしなくてほとへ
しかは

年毎にかはらぬ秋の暮もなをあふ人からとけふこそはしれ
かくてかへりしをなをよひとゝめて

尋ねくるかひこそなけれゆく秋の別にそへて歸るけしきは

かへし

ゆく秋の別れにそへて歸らすは何ゆへ君をしむへき身そ
法性寺殿にて人々歌合せられしに關のみらの落葉と
いふををよめりしうたまけにきためられしを清輔朝
臣とに心よせ有てまくへくもあらぬよししたひへ申
されしかともなをまけにししかはいとはいなくていて
にしつきの日かの朝臣のもとへ申をくりし

いかなればふき捨られし言のはをきくよそ人の情かけん
かへし

大方の關にゆるさぬものはゝ心にとまるかひもなかりき
はつ雪のあした寂蓮中務少輔とまうしゝ時文をつか
はしたりしかはおりしもこゝろときめきせられてあ
けてみるにさせるもなき文にて有しかは戀さめに覺
てかへりとにそへて

庭の面に雪をなかつて待人はふみゝて後そくやしかりける
かへし

眺めても我を待ける雪なればふみゝて何かくやしかるへき

もろみつのもたとより雪の朝にいひつかはしたりし
とふ人もなき我宿のすまるこそ雪ふるまゝに思ひしらるれ
かへし

庭の雪に跡こそつけね思ひやる心はゆきてとふとしらすや
俊恵に久しくをとつれさりしころ雪の朝にかれより
庭の面にあと踏つけし昔こそ雪ふりぬれば戀しかりけれ
かへし

かき分てとはぬはかりそ白雪の降ゆくまゝに深く社おもへ
後徳大寺左大臣雪ふりし朝たらよるへきよし有しに

そのころおもくわつらひてえまからぬよしきこえし
返事のおくにかきそへ侍し

思へたゝ身の常ならは我宿にひとりみるへき今朝の雪かは
つきの日又かれよりわつらふよしえきかさりける事
なとねむころにの給て

へたつるか霧にむせひてとはす共雪ふりにたる宿な忘れそ
又かへし

雲深き宿を隔つるいふせさにいとを霧にむせふとをしれ
かもの臨時祭の使にかへりたちのみかくらはてゝろ
く給ていてにしおりしも雪うちゝりしかはかのとし
ゆきの大うちきたまはりけむともおほえて
かねてより春やきぬらんふる雪のみのしろ衣きつるけふ哉

としころまい人かへいしうなとつとめしをを思てそ
のつきの日かの社の神主しけやすかもとへ申をくり
し

君みすやさくらやま吹かさしきて神の恵にかゝるふちなみ
かへし

かさしこし花の匂にしるきかなみしな色に登るへしとは
おなしころ山の入道のもとよりいひつかはしたりし
老のなみ松にかゝれるかひ有てふちをかさすと聞を嬉しき
かへし

山ふかき哀をそへよ藤のはなかさすにつけてかけし心は
ないし所のみかくらのひやうし(箱ぎ)とりて曉かへり
たりしにたむこのこかもとより

こゝにみる月には猶や増るらんあかほしきゆる明かたの空
かへし

あかほしにこよひの月の影そへて心もはるゝ明かたのそら
おなしあしたに後徳大寺の左大臣のもとより

九重にひゝきけらしな朝倉のかへすゝもうれしとそ聞
かへし

色をます言の葉にこそ朝倉のかへすゝも身にはしみけれ
按察入道資賢のもとよりよへのみかくらあやまりな
くつとめとをし給へるよしつたへうけ給なむいとい
とよろこひ申とて

曇りなく雲のよそにもきゝし哉すみのほりけるあか星の聲
かへし

つたへきく君なかりせは雲の上にすむかひあらし赤星の聲
雑二

俊恵か白河わたりにすみし所を人々かりむゑとつけ
て哥よみ所にしてつねにゆきあへりし程にのちゝ
にはをのゝさまゝのまめやかのもとゝもなとまで
とふらひあひたるよしをきゝてはるのはしめのころ
いひつかはしゝ

花咲しわか浦浪ことしより身さへなかなぬときくはまもか
かへし

をのつから立よる涙も花さけはかひあるわか浦と社みれ
おなし所を人々雨たまらすとてくれといふものをと
ふらひてふかせむとせしにをそくつかはしゝかはか
れより

つれゝとあれゆく宿を眺むれば暮待ほとそ淋しかりける
かへし

あれまさる宿にすむらん月影をくれ待つてとはむとを思
かへし

又いかなるを有けるころにか世中あちなきよしな
といひてあとをくらくしてうせなんと思なといひた
りしかはその返事にそへて

とまりゐて闇に迷はむ我爲やあとをくらくといふにや有覺
かへし

そよやけに浮世をすてゝいてぬ共君ゆへ闇にまたや迷はん
ある人のもとにまかりてよもすから哥よみ連歌なと
して曉かへりし程に牛をゐて歸にけるとてまちし程
やすらひしに女房中より

今よりはうし共いはしあかなくに歸るをとむる物に有ける
かへし

飽なくに歸るをとめぬ宿なれはいととうしと思ひなりぬる
中將さたいへ年むけにわかゝりしころよまれたりし
百首をみていとめつらかなるまでに驚かれしかは返
しつかはすとて

ことのはゝ絶せぬいへの風なれと身にしむ色を哀とそみる
かへし

人しれすそむるかひなき言の葉も哀をかくるけふを嬉しき
さて又かの中將のもとより家集をみよとてつかはし
て心につかむにしろしつけよと有しをいつれもゝゝ
もすてかたく覺なからさのみもいかゝとてことにす
くれてみゆるはかりにしろしつけてつかはすとて
色とに身にしむ言のはなれとも深き淺きのしろしはかりそ
かへし

ふかしてふこのことはや光なきことはの露の色と成らん
又ひむにつけてつかはしゝ

色々のことの葉たにもあたならは光もそへし露のしらたま
僧都全眞とをき國よりいひをくられたりし

思ひ出るもや今はなかる贗よになからへぬ數にいれつゝ
かへし

巡りあはんをまつたに悲しきよになき數にいかゝいるへき
あきかぬの朝臣さい宮のれうとうにてくたるとて申
をくりし

いせしまやしほやき衣なれぬよりとはぬ恨も袖はぬれけり
かへし

袖ぬらす涙もかけしを神風やみもすそ河のちよのかけには
大原のゆいしむ房のもとへまかりて歸てのちみやこ
よりつかはし侍し

古里へかへるはかりのなのみしてとめし心はおほ原のさと
かへし

都人まれにいはねのしはゐしてかへる名殘をおほはらの里
近衛院御時のないしにひさしくたいめむきこえてた
またま大原に入たりしにもいそくと有てそのすみか
ははるかなるおくの山もとゝきゝてえまからさりし
かは歸るとてゆいしん房につたへて巾をくりし
年つもるものはしけきみ山へを猶よそながら歸りぬるかな
かへし

尋ねぬき草のとさしにあらすとも同じ山路をなとかよき劔
山入道ひさしくをとつれぬおほつかなきなとらみ
つかはして

深山木のくちはのちらぬ程たにもとはて年ふる君にも有哉
かへし

千年とも遙に頼む影なれはこのもとまでものとかにぞ思ふ
いかの大進爲業よをそむき侍けるををそく聞つけて
かくともつけ給さりけるをなとをうらみつかはすと
て

人はいさ誠の道に我しいらは君にそまつはつけんと思ひし
さきのいつみのかみたかゆきよをそむきて大原にと
さゝてまかりてさまゝのむつことなとつくしても
さてのみ日かすをすくすへきならて又秋ころなんま
かりいるへきと契て歸にし後かの入道のもとより
くるゝまの程たにしらぬ露の身のたのめし秋を待そ果敢き
かへし

誰もさそくるゝ待まはしらね共あらは秋とも頼むはかりそ
寂蓮よをそむきて後いつしかも申さまほしかりしを
うちつゝきさはることゝも有て程へてのち申つかは
しゝ

なれしにも變らてあはむ身のうさに人の姿をみぬそ悲しき
かへし

あひみぬは變らぬ身にも包む也とはぬや何のうきになす覽
世中さまゝにかはりゆきしころ二條院の御事なと
を思ひ出たてまつりけるにやみかはの内侍のもとよ
り雨ふりし朝に

見しや夢さくやうつゝと思ふまの眺にぬるゝ袖をとへかし
かへし

みし夢に思ひあはするよのなかの眺は誰もをとりやはする
雜三

むかしすはうの内侍のふる里のはしらに我さへ軒の

しのふ草といふうたかきをきたるあとのちかころま
てやふれゆかみなから有しを人々まかりて故郷懷舊
といへるををよめりしに

これやその昔のあとゝ思ふにもしのふ哀のたえぬやとかな
後法性寺殿右大臣におはしましゝ時夢のゝちのふる
きおもひとといふを人々によませさせ玉ひしに

ふたゝひと歸るかたなき昔にも夢路はかよふ物にそ有ける
二品法親王五十首に述懷

いかにこは背きもやらぬよなる覽人やは惜む身やは進まぬ
さきたてし心よ今はしるへせよ吉野の山のおくのかよひち
いつならんこのよの夢の闇はれて悟りひらかん山のはの月
住吉の會に述懷

山ふかく心のいろは墨染のたもとはかりをかへやらぬかな
おなしこゝろを

みよしのゝ山のあなたにさきたちし我心こそわれを待らめ
後京極殿食經左大將ときこえさせ給ひしときうきた
の杜を述懷によせて

ならふきもこたかき中に年ふりて獨うきたの杜のしるしは
述懷うた中に

世中は漕ゆく船のあとの浪うきたる身をはなににたとへん
何かいはむ夢の中なる夢のよは厭はすともなからへし身を
よとゝもにし水に袖をぬらしつゝいつかは春に逢坂のせき
此世をは厭はても唯過ぬへしつゝの住家もそこしらねは
はかなくて夢に成にし古を猶ゆめにたに見るよしもかな

いかなれは長柄の橋にたくふ身のけふ迄も世に跡をとむ覽
二葉より引入もなきむれ松ひとりも年のふりにけるかな

惜からぬ身には年こそ積りけれあれなと思ふ人はなき世に
わかぬ浦に年ふるたつのねをそなくこさるゝ涙に類はぬれつゝ
ありはてぬ程はうきみと歎きてもえむ煙のはてを悲しき
無常

なへてよの習ときくもめの前に憂ためしみし後そしらるゝ
消ぬまの暫しはとまる露の身もなををきかたきこの世也鬼

山寺の懷舊といふことを
朝夕の友と成ける鐘の音をいとひし夜はのつみいかにせん

山家

都出てこのよをいとふ住家ゆへなかくとまるわか心かな

正治二年百首に山家

都人とはぬもいかうらむへき雲にわけいる宿のかよひち
とはやな猶山ふかき宿もあらはこれより月や淋しかる覽
をとしるき柴のさ枝にしほりして軒はの岡を人かよふなり

千五百番哥合に

ねさめとふ深山の里の松の風きくもきかぬもさひしかり鬼
我宿をとふ人あらはしるへせよいはふむ道になるゝ山もり
うらちかきみねの庵のさひしきは麓の雲にゆふなみのこゑ

二品法親王五十首に閑居

とふ人を待し家ゐは苦しくて山路たえてそすみよかりける
かくて猶浮身なからもきえなくに草の原こそ道たえにけれ

眺望

山ふかくいりぬるみねに雲消てふもとゝみゆる古里のいほ
たれとしもしらぬ別のかなしさはまつらの沖を出る舟人

千五百番歌合のさう難の中に

明ぬとやつりする船も出ぬらん月に棹さすしほかまのうら

ふるさとの池はみくきにとちられて心に月をやとしつる哉
おいかよのあたは光のあきのそら雲のよそにみつる月哉
なかめてもむそちの秋はすきにけり思へは悲し山のはの月
くらゐやまのほりたちにし椎柴の道に迷ひて老にけるかな
世をそむきなんと思ひ侍しころかねて人などにはち
らさゝりしを後法性寺入道殿御邊にはほのめかし申
たりしに九月十五日とくへきよしをきかせ給ひて十
三夜にたれかもとよりともなくて

御かへし

まつことのありとしもなき人たにも月に心はすみぬる物を
空にみつ光をちかくかそへてもふかき山ちの月をしそ思ふ
院にいとま申とて土御門内大臣のもとへたかのりか
事なと申て

老かよはふけるの浦のたつのこをいかて雲の數に連ねん
いとまの申入たれば御けしきかたしけなきさまに
なん侍る命をいきて和歌所なとへもまいるへきよし
ねむころに侍て

蘆まよりふけるの浦を立いてゝ雲井にかへれたつのこ乍ら
さまかへてのち月あかりし夜あさりしむけんのも
とへ

かへし

六十路あまりまたみぬ程にすむ月はいへを出たる光なり鬼
家を出てみるたに明きよはの月いらむ山ちに辿りあらずな
この返しにそへて入道殿うけ給はりとして
いかばかり月も哀と照すらんかゝるへかりし人のさまかは

御かへし

かくてしも髪身はしらす夜はの月てらす光を頼むばかりそ
女房たむこのこかもとより

おもひやる秋の哀もかきりかないへを出ける夕暮のそら

かへし

おいかよにいへをいつるは習ひにてあきの哀を猶盡もせぬ
日ころわつらふもなをこゝろよからさりしかは月あ
かゝりしに少將さたいへのもとへ申をくりし
霧はれぬ身をも今こそ照しけれこれやうきよのほかの月影

かへし

あきの月うきよのほかの霧晴てきこそはあらぬ光そふらめ
吉水前大僧正御房より

なれし露の消にしあとを拂ふにもそめけむ袖を哀とそきく

御かへし

散くるもかしこき君かことの葉にそむる袂の色をますかな
三位すゑつねのもとより

かへし

先たゝむと思ひし道を今までに遅れてけふはとはるへしやは
前少將たゝゆきの朝臣のもとより

かへし

とひみはやこのよの色をたちかへて清き心やすみそめの袖
かへし

山ふかき色ばかりをはたちかへてなをこの世にそ墨染の袖

宗圓かもとより

別れける道をはなとかつけき覧したひはつへき心ならねと

かへし

かくてしも背きも果ぬ世中を厭ひかほにはいかゝつくへき

小侍従のもとよりとひて侍しに哥の侍らさりしかは
大方のわかぬ浦浪よせずともそむく哀はかけよと思ふ

現世後世しえたる事なとかきて侍しかは

數ならて哀へまさる身の果は後のよをたにと思ふばかりそ

かへし

うき世を我もさてこそ背きしかまた思ひし人も有けり
としころをしを池にはなちたりしかほかへもまから
てほかのともをさへひきくしておほくなりて侍りし
かおりしもみなまかりにけるに宗圓かたひて侍しは
かりはねをきりたりければのこりたるをぬしにかへ
しやるとて

家を出る主をみてや住馴れし浮寝のをしもあくかれぬらん

かへし

年をへてなれこし池のをしとりも變る姿をおとろきやす
おなしころ中務大輔伊綱のもとより

かへし

厭ひえぬ憂身のみこそ悲しけれいへを出ぬと人をきくにも
いとひえぬ世を悲しとしる人そ家を出ぬる友には有ける

後法性寺殿右大臣御時百首に述懷

憂身とは思ふ物からすてやられてこれさへ人におとりぬる哉

雜四

人をうらみかねてつかはしゝ

かすかのゝわかむらさきのいろふかく思ひそめては
としふれと忍ふもちすりしのふれはこゝろのうちに
みたれつゝやるかたもなきいふせきにもらして後も
いけ水のふかきおもひをくみてしる人しなけれは

かすならぬ 身をうき草の ねをたえて よにもすましと
おもへとも 山のおくまで たちそはん そのおもかけの
くるしさに あるにもあらで よにふれは 心はそらに
かりかねの ねをのみなきて 夜もすから かたしく袖の
露けさは 秋のゝへとも 成ぬれば こはきかもとの
さほしかの こゑたつばかり かなしきを おもひしつめて
すくせとも かくてのみよに 有明の 月よりほかに
ともなくて 我みかけとし なりぬれと 人にはそはぬ
ものゆへに こゝろにふかく 君をのみ しめちかはらの
さしも草 さしてたのむる むつことの たのむへきをも
きかねとも 此よひとつの 契りにて かゝるおもひは
よも山の 谷のした水 あさからし と思ふばかりに
きのくにの なくさのはまの なくさめて しはしもいかて
ありそ海の そこのこゝろを しら涙の しらすばかりの
そのはもかな

美福門院のかくれさせ給ひてのち御なこりの君たち
につかへたてまつりてとし月ををくるにつけて人は
みなむかしよりけにかひあるさまにて我身ひとつし
つみはてぬるかなしきもつくつくと思ひつゝけられ
て

いそのかみ ふりにしよゝの ひさかたの 天津みそらと
あふきこし ことをおもへは あら玉の としをあまたも
かさならぬ 我身ひとつに さまゝの うきことおほく
あひきつゝ いへはかなしも 山しろの とはのみかけを
むねとして このゑのみかと たてをきし 春のあしたの
花さかり やかてゆふへの 雲となり 秋のみそらに

なかめこし 月の光も いりしより わかよのやみは
かきくもり しくれそめにし 宮のうちも をのかちりゝゝ
紅葉々の とまるひとなく 冬くさの 霜かれゆきし
さひしさを あはれとみつゝ すみかまの はてはけふりと
のほりにし なをはたかのゝ 山にとめ あとは今にも
たえすして むかしのにほひ かけたくも いまもわれらか
人しれす たのむ心は かはたけの なかれひさしき
つるのこの すゑはるゝに つかふへき 心はふかし
よゝまでも おいすしなすて かくれたる しるしはなくて
葦引の 山した水の なりゆくを おもへはくるし
すきたてる 身はかすならす 打しけれ おほそらをのみ
あま雲の はるゝまもなく

このもとは昔のかけにかはらねと我袖のみそ時雨もりける
此なかうたをみてきたいへのもとよりいひをくれり
し

春日山 ふちのしたえの かれはてゝ かゝるかたなき
すゑにしも むすひ置ける 契りさへ あらぬよまでも
うかりける みくつはそこに しつみつゝ 玉もかつくと
袖ぬらす あまのすむてふ わたつ海の よるへなきさに
ふなてして たゝよふほと はかなきに 吹まふ風の
かたゝゝに 心をかけて たのむへき 君かゆくゑを
尋ぬれば たかのゝみゆき 消かへり むかしかたりに
成にけり かひなきこけの したをのみ こふるたもとも
朽はてゝ ひく人もなき 宮はしら われうきふしを
しのひつゝ 猶よのなかに すむ月の かはらぬかけを

たのみても したはにやとる 露の身の おきふしねのみ
 なかるれと 思ひねにぬる 夢にたに みぬよのことの
 いふせさを かきをく君か ことのほに かはりそめけむ
 すみ染の 夕のそらの かなしさも とはたのおもに
 ひかりたえ てる日しくれと かきくもり 定めなきよの
 やみなから やかてくらせる 程をさへ みのりの竹に
 吹かせの 更にみぬよに 立かへり なくさめかたき
 こゝちして 程なきあけの ころも手の 色になりゆく
 なみた川 せゝのしからみ かけまくも かしこきことは
 いはし水 いはしかけしと おもへとも たきつ思ひは
 せきあへす 心のうちを もらしつるかな
 うきなみの 立まふ風のあらきにも 哀昔とかけぬひはなし
 このかへしはやかてそのつかひをとゝめてつかはし
 しかはかきとゝむへくもあらねとおりしもおさなき
 ものとはゝみまかりにしつきのとしにて心はか
 りあはれそひぬる心地してふてにまかせてかきをき
 けるはいとゝみくるしくや

ふりにける たかのゝやまの みゆきより 思ひきえつゝ
 つもりぬる あまたのとしを はるかすみ へたつる空に
 かきくらす こゝろのやみは 夏山の こしけき中に
 すゝきても よゝの雲井の 月かけの 晴まをまちて
 いたつらに おいにけるみは あきふかく なりゆくむしの
 なく音さへ よはりゝゝて いつをまつ 命とたにも
 しら菊の 霜かれはてむ あとをこそ おもひをくへき
 み山きの 朽葉はちらて さかりなる わかえかれにし
 このもとを あはれゝゝと みくまのゝ うらめしき世の

ならひとは 思ひなからの はしはしら くちはてぬへき
 衣手の いろをそへつる 君ゆへに 昔もいまも
 おとろかれつゝ
 見しよをもみさりし君か言のはのかて昔を今になすらん
 世をそむきて侍しを五條の三位入道の夢かうつゝか
 なと侍しあはれはなをつきせぬこゝちしてそのゝち
 ふつかみか有て申をくりし

しのふ草 しけりのみます むかしにや うき世のほかは
 かよふらん いてにしいへの ふるもの のこるくまなく
 いまさらに 露と消にし おもかけも あとにとまれる
 ものはも 袖のみぬれて かなしきを 有ともなくて
 あり明の あかしかねつゝ 秋のよも やゝくれかたの
 虫の音を ともたのみて なくさむる こゑのいろさへ
 よはりゆく 心ほそさは さゝかにの いとひても猶
 いとふへき うきよにかくて すみそめの 衣はかりは
 そめつれと はれせぬきりに むせひつゝ なかき夢路の
 さめぬまを 今はむみやうの くも消て こゝろの月も
 はれよとや おなしはちすを ねかふへき さとりあらはす
 君かことのとは
 ひらくへきさとりや近く成ぬらんさらに昔の夢そかなしき

三位入道かへし

あさちふの 露けきやとに なかめつゝ 秋のくれにも
 成ぬれは たゝおほかたの こゑたにも なくさめかたき
 よのなかを そむきにけりと きくときは いかはかりかは
 哀おほき ましてうちはへ こひわたる むかしのことを
 しのふ草 かけてしのへる ことのはゝ かきなかしける

水くきの 契ありて 花につけ かほるかに おもひねの さらしなや 山のはに おもふには はかなきは これはみな ねかはくは ひるかへし ことをしと思ふ
あとことにこそ かなしけれ 思へはひさし かなしけれ 思へはひさし
なれにし程を 立わかれにし 夏にもなれば 軒ちかき 花たちはなの
むかしの袖を ^{〔古歌〕} よそへつゝ まとろむときは 秋の月には
ゆめしにのみそ なくさむる をはすての 山より出てゝ
更にもいはす いりぬるかけを こひかねて すくる月日を
とゝせの秋に なりぬれと こふるこゝろの
きのふけふとそ まよはるゝ かゝるなけきも
まといなり 今はいとへに うるの思ひを
ふくあめに さとりひらかむ
すましつゝ

宣陽門院の御領おはりの國なりけるところをさせる
あやまちもなきにめされてみとせまで返給はらさ
けるをいまはさてやみぬへきにこそと思たえぬる心
ちしてさまなともかへてのちこのことをよきやうに
申せなといひつけたりし人のもとよりかくよをそむ
きぬときこしめしていとむあはれにおとろきおほ
しめすその御しやうはかならず返したまはるへきよ
しなん御けしき侍といひつかはしたればその人のも
とへよろこひなからこのなかうたをよみてなむきこ
えけるかつは故院の御ゑいなとをもかきとめまいら
せてあさ夕の御おこなひなとをもその御まへにてせ
させ給よしをきゝければ

かけまくも かしこきみよに つかへつゝ としへにしみは
とまりゐて むなしき跡に つきもせず かへるこゝろは
ふかきうみ たかき山とも あふきこし はこやの山の
おもかけを 今もなこりの 君か代の よろつよまでの
かたみとて かきとめてし 水くきの あとをしるしは
みえねとも 猶たぢいてゝ おいのなみ ふけるのうらに
おとろへて ゆきかくれなむ あとまでも 君かやちよに
つかへよと おもふあまりに つるのこの やしわこ迄も
をしへをく こゝろのうちはいはしみつ かものかはなみ
そこ清し いまは我身の おはりなる 哀をかけは
すみそめの たもともせはき うれしさを 身にあまるまで
つゝみてしかな
老の浪立かくる共わかの浦の蘆たつのこをかたみとはみよ

釋教

後法性寺殿右大臣御時百首うた人々によませさせ給
しに般若心經を

花嚴經

あかねさす日の出初るしにはあをねか峯を色變りける

阿含經

ありとやは風まつほとを頼むへきをしか鳴のにをける白露

法花經

つねにすむ月の光そへたてなきわしのみ山も鶴のはやしも

泉堂寺如來白蓮法身

ひらくなる悟の花はよのなかのにこりにしまぬはちす也鬼

未得眞覺恒處三夢中

結ひける夢ともしらぬ長きをけふきとくや覺る成らん
廻故上口花

あさひまつ暫しの闇はなけかしな入にし月のあとを眺めて
序品

色々にふりしく花のにはひにて法の庭にはかねてしりにき
入於深山思惟佛道

化城喻品

そのかみに結ふ契し有ければけふとてのりもたえぬ也けり
神力品

いくかへり出て此世をてらす覽わしのたかねにすめる月影
法華經講するところにて

草木まで普くかけしたねしあれは法の花さくけふの庭かな
はの紫式部かれうに一品經せられしにたらに品を

とりて

夢のうちも守る誓のしるしあらは長き眠をさませと思ふ
來迎の心を

よにそめし色をかへしてむらさきの雲待えたるあか月の空
てらすへき光りやちかく成ぬらん心にかゝるむらさきの雲

神祇

和歌所にて十首御哥合侍しに神祇の心をよめる

かねてよりわかの浦路にあとたれてきみをや待し玉津嶋姫
同ころ新宮にて神祇心を

君かよをはるかにみつの濱風や吹かよふらん池のさなみ
後法性寺殿御百首に神祇

おほかたの恵はかけよ三笠山させる數にもあらぬみなれと

たつねつゝ頼みをかけんみわの山祈しるしも有とこそきけ
闕白殿左大臣御時十首歌合ありしに

くもりなく神やしるらん春の日はれゆく末の萬世のかけ
おなしころ御うた合ありしに春日山をいはひのこゝ

ろによせて

君か代は光そまさる春日山くもるときなく照す日かけに

右隆信集得之浪華書鋪未得異本比按云

群書類從卷第二百五十九

和歌部百十四 家集三十二

藤原隆祐朝臣集

先日御尋候愚詠少々令進候。度々蒙仰候之間書貫候也。中々とかく申候はんに付て。片腹痛覺候へ共隨仰進候。所會はあまたよみて候しかとも不書留候。只是は覺候はかりを書て候也。如此仰につけてこそいまは尋かきてやと存候へ。又人まねに愚詠を左右に番て候。奥にかき候。返々尾籠に候得共中々かすに非ず候へは。人のみとかむへきにもあらず候歟。勝劣は人々の合點にしてたかひて候也。くるしからすと承存候得は。可有御披露候也。他事見參之時候。恐々謹言。

三月六日

隆祐

九條大納言三十首御會永仁三年三月

早春霞

今日といへは思ひそめてやかすむらん雪降山に春はきに鳥

澤春草

時しあれば海の春風さそへともなひかぬ程は波の下草

曉梅

里わかぬ隴月よのありあけにちきりて匂ふ軒の梅かえ

花満山

咲つくに四方の霞のこのまより山をそいまは花と尋ぬる

江上暮春

けふまては入江の春の夕くれにみちくる鹽も猶かすみつゝ

溪卯花

うのはなの咲ぬる波は音もせて猶たえゝのたに川の水

野郭公

ふる里はまたほと遠し時鳥しらぬ野中のまつとせしまに

雨後鷯川

うかひ舟をのかちきりをゆふやみに曇のこさぬ村雨の空

月前萩

萩の葉の露ふき過る秋風にひとりしほれぬ月のかけかな

夕虫

ゆふ露のやとりあらさぬ淺茅生に古きまかきのまつ虫の聲

海邊鹿

うら風にさそはれいつる月影をむかひの山にをしかなく也

閑庭薄

とへかしな籬の秋の花すゝきなひくかたには露そこほるゝ

名所擣衣

絶にけるふしみの夢もあらはれて一夜残さすうつ衣哉

朝寒蘆

霜こほる玉江の蘆のあさなくはらふもさむく吹あらし哉

深夜千鳥

更のほろあしちの空の月かけに數あらはれて千鳥なくなり

故里雪

みよしのふるき都のみ雪とて跡なき庭に昔をそしる

聞聲戀

我こひは夕きり深くたつかりのこゑのみそらにきく渡る哉

稀戀

更にまた契りし月もしのはれすまれなる夢のありあけの空

増戀

數ならて過にしかたの袖の上はいかなる色に露の置けむ

怨戀

つれもなきそなたの風に眞葛原うらむを人の心ともかな

被忘戀

僞もわすれぬ迄のゆふ暮を猶うきものと何うらみけむ

旅行

けふは猶都も近し逢坂の關のあなたに知人もかな

旅宿

一夜とも宿かる程の契あらはいかにうきねの恨みはてまし

旅泊

故里になれこし月の契あらはいかにうきねの恨みはてまし

山家橋

人はこす谷の岩はしをのつから雲はれわたる月影もかな

山家松

山深き草の庵の軒はにもおもひゆるさぬ松風のこゑ

山家苔

こけの色も猶ふかゝらしみよしのや是よりおくの秋の山里

寄神祇祝

春日山ちとせのまつの梢まてたのむ心にかゝる藤波

寄水懷舊

なかれこし昔や遠きわすれ水うつる計のかけもたえつゝ

寄雲述懷

雲の上を今年もよそに詠つゝ身をしる雨にぬれぬ日をなき

此哥詠出して候之時。故入道不惡之由申之。京極中

納言入道之許へつかはしゝかは返狀如此。

侍從殿御哥拜見驚目候。今度三十首以ニ此御哥詮候歟懸

點雖ニ無念候。任意加ニ之候。且長短表ニ所存ニ候。一首洩ニ之

候。何事の故ぞと定被ニ寄ニ思食ニ歟。全無難候。只皆懸ニ合點ニ

無念候へは。咸定ニ十首許ニ可抄ニ之由。不及ニ力。大切之御

詠由候へは。次第にかくかひ負まいらせ候之間。甚しるし候

はんと。深慮候そ非ニ公事。力不及候得共。明に御倉小舎人

一命と不參候はんすること悲候へ。いつこにても御詠候へ。

あはれ面かけみるやうに覺候事の懷舊思欲暮候。眞實不可

思議候也。得て候ける題とも。さも案候ける物かな。凡心中

迷惑合委事候。恐々謹言。

御室御會とて京極中納言入道定家被申るゝに

浦霞

時わかぬ田子のうら波夫ながら春は霞もたぬ日そなき

新花

はなの色もくるゝものとは白雲のみねの別を猶うらみつゝ

夕郭公

過ぬるやけふのなたての時鳥いましはしあらはよはの一聲

初秋月

草も木も色とる程はおそけれと月のまちける秋の初風
搦衣稀

秋風に身にしめやらぬ里人のぬるよあまたにうつ衣かな

曉雲

はつ瀬山あらしはたゆむ明かたに雲わけのこるかねの音哉

溪雲

秋のよの月もなかもぬ谷の戸は雲のあるしをとふ人もなし

嶺松

峯たかき松の下かけいたつらにふもとそ人め宿はとひける

庭苔

散かはる花も紅葉もはては又苔のまかきに残るしら露

窓燈

かきりある秋のよのまもあけやらす猶きりふかき窓の燈火

又同返狀

侍從殿御歌悅給候了。明旦かけ法眼之許へ候。此御風躰眞實

毎度驚レ日候。皆別御風情あたおろかならぬ事に候歟。御教

訓の趣にて申候らめとも。かゝる事やは候。此道さすかにた

のもしく候。霞もたゝぬ日もなきと候ける。不思議候。嶺の

わかれうつくしく候けふのなたておもしろく候。月のまち

ける。殊勝候。雲のあるしめつらしく候。苔のまかきやさし

く候。

七首 本定 心中に霞花月すへきとおほえ候。恐々謹言。

定家

如此度々被レ申候しかは。今の歌よみにこそ候けれと思て候

しほとに新勅撰集沙汰聞え候し頃より。隆祐哥よみさかり

たるに世中に聞え候しに合て。彼撰に一首入て候し。面目

なから末哥よみとも聞及はぬ人も。あまた入て候へしにこ

そ。誠よみさかり候ける。同さらはよく讀候はん時の哥も入

候へかし。彼は又一首も入候はぬか。いかに候やらん。とか

たかた不審にて。此道物うくなりて候し程。遠所より忍たる

朝霞

朝日かけまたいてやらぬあし引の山は霞の色そうつろふ

山櫻

櫻花そらにあまきる白雲のたなひきわたるかつらきの山

郭公

しからきの外山のすゑの時鳥たか里近き初音鳴らん

萩露

みや城のゝ木の下風や過ぬらん露におくるゝ秋萩のはな

夜鹿

烏羽玉のよや更ぬらんさを鹿の聲すみのほるをのゝ草臥

時雨

神無月くもらぬかたの寒るまで風にみたれて降しくれ哉

忍戀

思へとも岩ねの松に波かけてかはらぬ色にぬるゝ袖かな

久戀

徒に年はへにけり玉のをのなからへはともちきりやはせし

羈旅

けふはまた明石のとよりこき出て心をつなくよものうら浦

山家

都にて人にしられし我身とも忍はてなるゝ山のおくかな

此哥まいらせて候しに。遠所の返事に。故入道の許へ。此道

深夜千鳥

更のほるあしちの空の月かけに數あらはれて千鳥なくなり

故里雪

みよしのゝふるき都のみ雪とて跡なき庭に昔をそしる

聞聲戀

我こひは夕きり深くたつかりのこゑのみそらにきゝ渡る哉

稀戀

更にまた契りし月もしのはれすまれなる夢のありあけの空

増戀

數ならて過にしかたの袖の上はいかなる色に露の置けむ

怨戀

つれもなきそなたの風に眞葛原うらむを人の心ともかな

被忘戀

僞もわすれぬ迄のゆふ暮を猶うきものと何うらみけむ

旅行

けふは猶都も近し逢坂の關のあなたに知人もかな

旅宿

一夜とも宿かる程の契あらはいかにうきねの恨みはてまし

旅泊

故里になれこし月の契あらはいかにうきねの恨みはてまし

山家橋

人はこす谷の岩はしをのつから雲はれわたる月影もかな

山家松

山深き草の庵の軒はにもおもひゆるさぬ松風のこゑ

山家苔

こけの色も猶ふかゝらしみよしのや是よりおくの秋の山里

寄神祇祝

春日山ちとせのまつの梢まてたのむ心にかゝる藤波

寄水懷舊

なかれこし昔や遠きわすれ水うつる計のかけもたえつゝ

寄雲述懷

雲の上を今年もよそに詠つゝ身をしる雨にぬれぬ日そなき

此哥詠出して候之時。故入道不惡之由申之。京極中

納言入道之許へつかはしゝかは返狀如此。

侍從殿御哥拜見驚目候。今度三十首以ニ此御哥詮候歟。懸

點雖ニ無念候。任意加之候。且長短表所存候。一首洩之

候。何事の故ぞと定被寄思食歟。全無難候。只皆懸合點

無念候へは。成定三十首許可抄之由。不及力。大切之御

詠由候へは。次第にかくかひ貧まいらせ候之間。甚しるし候

はんと。深慮候是非公事。力不及候得共。明に御倉小舎人

一命と不參候はんするこそ悲候へ。いつこにても御詠候へ。

あはれ面かけみるやうに覺候事の懷舊思欲暮候。眞實不可

思議候也。得て候ける題とも。さも案候ける物かな。凡心中

迷惑合委事候。恐々謹言。

御室御會とて京極中納言入道定家被申るゝに

浦霞

時わかぬ田子のうら波夫ながら春は霞もたゝぬ日そなき

新花

はなの色もくるゝものとは白雲のみねの別を猶うらみつゝ

夕郭公

過ぬるやけふのなたての時鳥いましはしあらはよはの一聲

初秋月

草も木も色とる程はおそけれと月のまちける秋の初風
擣衣稀

秋風に身にしめやらぬ里人のぬるよあまたにうつ衣かな
曉雲

はつ瀬山あらしはたゆむ明かたに雲わけのころかねの音哉
溪雲

秋のよの月もなかもぬ谷の戸は雲のあるしをとふ人もなし
嶺松

峯たかき松の下かけいたつらにふもとそ人め宿はとひける
庭苔

散かはる花も紅葉もはては又苔のまかきに残るしら露
窓燈

かきりある秋のよのまもあけやらす猶きりふかき窓の燈火
又同返狀

侍從殿御歌悦給候了。明日かけ法眼之許へ候。此御風躰眞實
毎度驚目候。皆別御風情あたおろかならぬ事に候歟。御教訓の趣にて申候らめとも。かゝる事やは候。此道さすかにたのもしく候。霞もたゝぬ日もなきと候ける。不思議候。嶺のわかれうつくしく候けふのなたておもしろく候。月のまちける。殊勝候。雲のあるしめつらしく候。苔のまかきやさしく候。

七首本定 心中に霞花月すへきとおほえ候。恐々謹言。

定家

如此度々被申候しかは。今の歌よみにこそ候けれと思て候しほとに。新勅撰集沙汰聞え候し頃より。隆祐哥よみさかりたるに。世中に聞え候しに合て。彼撰に一首入て候し。面目

なから未哥よみとも聞及はぬ人も。あまた入て候へしにこそ。誠よみさかり候ける。同さらはよく讀候はん時の哥も入候へかし。彼は又一首も入候はぬか。いかに候やらん。とかたかた不審にて。此道物うくなりて候し程。遠所より忍たる御歌合めされしに。

朝霞
朝日かけまたいてやらぬあし引の山は霞の色そうつろふ

山櫻
櫻花そらにあまきる白雲のたなひきわたるかつらきの山

郭公
しからきの外山のすゑの時鳥たか里近き初音鳴らん

萩露
みや城のゝ木の下風や過ぬらん露におくるゝ秋萩のはな

夜鹿
鳥羽玉のよや更ぬらんさを鹿の聲すみのほるをのゝ草臥

時雨
神無月くらぬかたの寒るまて風にみたれて降しくれ哉

忍戀
ふ事イ 忍 戀 若イ
思へとも岩ねの松に波かけてかはらぬ色にぬるゝ袖かな

久戀
徒に年はへにけり玉のをのなからへはともちきりやはせし

羈旅
けふはまた明石のとよりこき出て心をつなくよものうら浦

山家
都にて人にしられし我身とも忍はてなるゝ山のおくかな
此哥まいらせて候しに。遠所の返事に。故入道の許へ。此道

むかしより父におよふこと稀なるに。隆祐相傳て御覽するや。猶よく／＼たしなむへき也と被仰て候しにこそ。父はをのつからよく讀たるにと申も。悲しみのあまりおもひ出すかともうたかはれ候。他人はまた折節による事もやと不審に候に。君の御けしきに置ては。何の歎もかはす。あまたをろかならぬ事に思ひ候て。勅撰にすくなく入候。恨もわすれはて。故入道も此道計心やすき事に思ひ候也。また入道逝去して候し年。同御所より十首の歌。めされ候しに。野春雨。
 名所花
 よしの山ひとつにみえし花の色うつれはかはる峯の白雲

名所花

江菖蒲

菖蒲草ことしはかけぬ袖のうへに猶おなし江の波ぞ立そふ

湖上月

しかの浦や氷らぬ波の音はして月のみふねを遠さかりゆく

山紅葉

紅のこそめの糸のむらしくれ山のしきをゝらぬ日そなき

閑庭雪

とへかしなあとも厭はてまたれ鳧また空はれぬ庭のしら雪

寄木戀

つれもなき軒の松のいつはりはたのまぬ暮も猶そかなしき

寄草戀

いかにせん人の契りの月を見てあさち色つく庭の秋風

夕懷舊

いく度かけふも暮ぬと眺めつゝかへらぬかたを忍びきつ覽

曉述懷

明方の山のは近き月のみそ何おもかけをそらにみせける又此哥の返事。少輔爲泰書候て。今度十首故入道かありし時よりも。猶かさまさりて御らんするや。他事なく好たしなむへき之由被_二仰下_一て候し後は。しつみえて候。歎も物ならす覺えて新古今集の時。生あひて。數あまた入候。同事に思て候也。

撰歌の外聊有_二子細_一哥。

是は大殿御會百首に五月雨五首中に

入江なる海士のすて舟うきはてゝうらに流るゝ五月雨の比

光俊朝臣よませ侍りし千首歌に芭蕉を

故里の庭のはせをのかいろはをあまたになして秋風そふく

西國に十禪師いはひ奉りたる所にて百首哥合し侍り

し中に月を

天の原むら雲とほくなるまゝにはやくも過ぬ秋のよの月

日吉社にたてまつる千二百首中十禪宮百首に長歌を

つくりて其詞をうへに置いて侍りしによの字にあたり

て侍る歌に山家春を

世の中に厭はぬよりもとはれけり花のたよりのみ芳野の奥

西國に下侍しころきつきの社へ詣て侍りし道にて社

に奉らんとて讀てはへりし哥の中に旅宿嵐といふこ

とを

きゝなれて戀らぬよはのあらし哉わかすむ浦も都ならねは

五條二位公賴のもとより念佛を申さんとして立華の料

に高倉大納言經通の許なる梅をこひに遺すに哥の相

添たきよし故入道のもとへ申させて侍りに隆祐讀て

送へきよし仰られしかは

いろに出て契りもふかき宿ならは折袖ゆるせ春の梅かえ

明る日念佛聽聞すへきよし彼卿の許より申されて侍

りしにまかりて聽聞し侍に彼大納言の許より亭主へ

花よりも御法のこゑを匂ひこしおくるは風のふかきよの空

ひとりなをにしに心を残すらんさそはゝたれも山のはの月

心なきあまのしわさのもしほ草法のひかりに書てすて南

やかて返事すへきよし申され侍りしかは筆をとりて

色ふかく手折し花の便こそみのりのこゑも身にはしみけめ

君とわれにしに心をかきつればさそはゝたれも山のはの月

時しもあれあまのしわさのもしほ草法の光にさへる波かな

住吉の方に侍し頃或處より虫とりてまいらせよと仰

られしに虫やのうへに書侍りし

君か爲かねてうへてし里なれば千よの秋しる松むしのこゑ

おなし所に侍しに故入道へ萩の葉といへるひえ鳥を

所望して侍しに葉山といふ鳥を是もおとらぬよし仰

られて給りて侍し心につかす覺えて返上すとて

涼しさは葉山のかけもわかねとも猶吹送れ萩の上風

返事彼萩のはにつけて

是も又秋の心そたのまれぬは山にかはる萩のうはかせ

于時七月。

又同所に住侍しに故入道より隆祐か哥某か跡ありと

御覽するよし遠所より被_ニ仰下_一侍る也今は心やすき

よしこまかに仰たりし返事のたよりに

世中にしつむと何か歎きけん和哥のうら波かゝりける身を

御返事

きく度の花のなみたもさをはれて跡ふきたえぬ和歌うら風

新勅撰にすくなく入たるとふらひの次に白川 三位伊時

入道のもとより

色深き森のこの葉はかるれはあるかなきかに人の見る覽

返し二首入て侍人の合點にもはつれし殊に見所なき

物に侍れは

數ならぬ數こそあらめ朽はつる言のはをしもなとかかく覽

五位正下して侍しに右中弁光俊のもとより

たちのほる春まちけりとみゆる哉一しほまさるあけの衣手

返し同下名に權弁より右中弁にあかりて侍しに

たちのほる君か心の春にあひていとゝいろそふあけの衣手

同日祝部忠成かもとより

そめまさるあけの衣の色にみつめくまん春のゆくすゑの空

返し

我たのむ春の日よしの行末をあけの衣のいろにみるかな

春のころ平の行胤天王寺に詣て住吉へ申送り侍し

すみ吉のまつ人もかな尋みんかすみにうらは道しらすとも

返し

霞め共まつみる浦もしりなから心のうちをいかゝへたてん

少將伊成朝臣住のえにて一兩日遊びてかへさの道よ

りたか犬をこひ侍るとて

箸鷹のこの朝はかり引そへよいまにもよりも鳥やたつまと

少將また都より

今よりはおもひしそむな住よしの松の嵐の音のはけしき

住吉のあまのたく繩うちはへて忘るゝ草はかれやはてなん

思ひ出る心そふかき住吉をあさゝは小のと誰かいひけむ

返し

今よりの松の嵐のはけしきにきかましかはとまつ覺えつや
住吉のあまのたく繩くる人のかるればかれぬ草の名そうき
おもひ出て深き心もたのまれすあさゝはをのに残る面かけ
雪のふかくつもりて侍し夕にいつくよりとなくて置
侍し

降くらし跡たえ果る庭の雪にとはるへしとは思ひやはする
さやらんとおほゆる所にさし置せるに返し
雪のうちにうきみの跡や厭ふとてとはてそ人の心をはみる

同頃雪のあしたに藏人俊定か許より
跡たえてとはぬ日數の故里に恨もつもる庭の雪かな
返し

ひかすふる恨もいまはわすられて心のゆきの跡や見ゆらん
夏のころ胤行行風鑑鎌倉より

春秋の花と月とのあひみてもわすれぬ人は猶そこひしき
返し

春秋の花と月との詠たにわすらるゝ程ときみをこひつゝ
そへて

山の井のにこらぬ水を結びてややかて別し面かけそたつ
月の明に侍し夜住のえの釣殿にて連歌し侍しに神主

國平か許より
かすならぬ言の葉にのみ埋れてよそにそ忍ふ住のえの月

返し
すみのえの月も色そふことの葉によそなる人の心をそしる

鎌倉なる人の和琴のかたうつしてと申たりし遣すと
て返事の次に

都よりとふへき人のいかなればあつまのををしらぬなる地

返したまへて鎌倉より或人

あつまには都のことのかはるか尋ねてみれはひつゝいそのはかこつ也見

住吉に侍しに都より知たる女房あまた天王寺に詣て
て侍しかは住吉の神主經國女におほひかひこはんと
おもふに哥のそへうきよし申侍しかは讀てつかはし
侍し

波よするつもりの浦による貝を拾はぬ袖にうつせとそ思ふ
返し貝にかきて

尋ねきてひろはぬ浦のつられければ袖に包むにかひやなか覽
入道殿天王寺にて四月九日はかなくはなし侍し歎の

内にもさいの日七首のうた讀てゐながら念佛久しく
申て落させたまひにしこと世に往生のよし聞え侍し

に未聖人みえす侍しかは申送り侍りし數多の歌の中
に

むらさきの雲のむかへの跡にこそ藤の衣の名にはたちけれ
曇なきみたのみかほの月かけに露の置ゐて消ていてにし

遊心聖人
同時淨忍かもとから

同年左衛門尉時朝か父往生のよし聞え侍しにすかた
やつれて時朝鎌倉より上りたるよし聞え侍しに申送

返し
西へ行ききりは同じ別れちを思ふ涙のたれまさるらん

法皇隱岐國にて崩御夢とのみ承後程へて守護左右衛

門尉泰清かもとより年頃あひ奉りし御所は目の前の
煙となりはてゝ露の命とまりかたく侍し人々をさそ
ひくして都へ送り奉りし心の内心なき海士の袖まで
も朽ぬへくみえ侍しよししくはしく申送りて侍し返事
の次に數多書付侍し中に

たちのほる煙となりし別ちにゆくもとまるもさそ迷ひけん
なれゝて沖つしま守いかばかり君もなきさに袖ぬらす覽
よの中になきを送りし御幸こそかへるもつらき都なりけれ
このよには數ならぬ身のことの葉をいさめし道も又絶に鳧
返し

たちのほる煙の後の別ちをみしはまよひの夢かうつゝか
よの中になきから歸る行幸にはあらぬ衣の袖もはつれき
嶋守もむなしき舟のうかひ出て殘る歎きのすむかひもなき
和歌のうらの道のおほせ劔君のみ跡をさそしふへき
前宰相中将景此御事によりて遁世のよし申送りて
侍し女房のもとへ

熊野社に奉る百首の哥の中に廻文哥海上眺望

なかとをき方は南のすこきさきこすのみなみは高きをと哉
十禪師に奉る百首の上置長哥もしにあたりて侍廻
文

みかきよりかさす枝にはきの花は軒にたえす盛りよきかみ
相傳して知侍しかは備後の吉備津彦宮に奉りし百首
中におなし廻文哥を慶

日頃よのともしき住家のそむ覽其かみすきし元のよろこひ
月中にことなきやうに聞なし侍りき此等の善惡によ

らす折節思ひ出され候はかりをかきて候抑御尋候故
入道か自讀哥并人々撰る自讀哥新古今中

思ひいてよたかかねことの末ならんきのふの雲の跡の夕暮
明はまたこゆへき山の峯なれやそらゆく月の末のしら雲、
近きころの哥中遠所御哥合萩露

またやみむまたやみさらん白露の玉おりしける秋萩の花
百首中懷舊のこゝろを

翁さひ人なとかめそのうちにむかしをこふるつるの毛衣
此四首をすこし哥と覺しき物にてあると申き人々の撰
貴人并名人なとはみも候へは所詮申候雨中盧橘

左衛門尉俊村

ぬれゝも花橘の匂ふかなむかしの人や雨と成けむ

是はゆかしき秀哥とて京極中納言入道の許へ被注
送候き或撰中に被書入人數候又此邊に見え候も
のともて歌をよませて候つればさもありぬへく候ら

ん有のまゝに仰をかふむるへく候皆當座雨中立春

立かはるけふのけしきにしろきかなのとかに霞む春雨の空

雲間冬月

雲こほる山かせあしま雲まよりもれ出る月の影の寒けさ

僧

わしの山入ぬる峯の月なれと法をつとふるころを聞ゆる

浦蚊遣火

法橋康賢

藻蘆やくすまのうらはの蚊遣火にたつる煙も色そかはらぬ
思

烟ともならぬ我身の思ひをはいかてか人のそらにしるへき
無常

三月盡

なかきよにまた夢さめぬ世中をうつゝと人の思ひけるかな
けふのみと春を惜て詠へきおほろ月よの影たにもなし

菊

いろかはる千草の花はちりはてゝまかきに残る秋のしら菊

田家夕雨

山田もる草のとさしも亂れつゝむら雨しけき秋の夕暮

戸外秋風

杉のやの草のあみとに吹風の秋はいかなる色もそふらん

綱代

白波の岩きりとをす早き瀬につれなくみゆる宇治の綱代き

後朝戀

宵のまはともに詠し月かけの残るもつらきしのゝめのそら

螢

難波えや入江のあしの外も又よなゝすたく夏むしのかけ

峯眺望

旅人のいく山こえて見渡せはふもとにのこる峯のしら雲

鶴

いまよりはきつゝ馴なん我君の雲井にとをき鶴の毛衣

梅

つれもなく雪はふれゝと春のしれかほれる梅の花の下風

蓮

池水にはちすの花はふかけれと猶たのまるゝ法の道かな

菖蒲

よそにみし淀のわたりのあやめ草こよひ一夜の枕とそなる
歌よむものあまた有よしに書付らるゝとやおほしめ

しさふらはん一首も直し不_レ入候思は佳吉の大明神
御照覽候へし以外によあひて近來いまゝしきこし
おれの中に好よみ候詞

山又山

隴夜おほる月上といはて無下に そみかくた古き詞に候へ共うけ
す候山臥とてはわさともよく候

のたをさ又時鳥にて候へし

有明の月夜のもしなくてははいまゝしく候ひちて かてらこのほどは候

はね共不_レ宜詞 春の明ほの 明ほのゝ空 冬の夕風 山の夕風

露の下草 雪の下草にはよく候 軒はの山 水はのみね

初五文字に。かなといふ詞。くれな_レの山。うすかきさくら

心ちこそすれ、是らはうけられす候。故入道も申き。位よ

き哥もよみ出しけむに。此詞置て叶かたからんには。はゝ

かるへからず。さきに注申詞よむへからす候へし也。つも

なとは不_レ宜。かもは難に申候に侍れとも、宜覺候よし申

き。哥をよまんには。心をあたらしく詞をふるくすへし。

よき事を案し出して。古き詞のやさしきを得へし。めつら

しくよまん有明の月なとを。月のありあけといひつれば

無下也。歌はよき歌をよみたりとも 書付て後能々なふり

て。文字ひとつも。いかにして。いま少しの能様になると

みるへきよし候しを。隆祐などは。大かた叶ひかたく。讀

出し候ぬる後。善惡なふり引なをす事は。いかに候やら

ん。こん叶かたく候て。いかなる晴の歌をも。たゝ一兩日

になりて。よみ候しかは。あさましくあふなき事に申候

き。

右隆祐朝臣家集脱誤錯簡義不通者多々姑仍舊貫云

藤原光經集

建保六年八月十三日中殿御會に池月久明といふを
もゝしきや玉しく庭の池水に千代を重ねてみかく月哉

同年の十二月五日内裏哥合に冬山朝を

朝またきさすや日かけのうつるより霜にぬれゆく山の下草

冬海夕

白妙のふちえの浦は名のみして夕霜をかぬ浪の上かな

寄風祝

限りなき大うち山の松かせに千年を契る雲の上人

建保七年正月廿七日内裏御會に松上霞

よしの山花にさきたつ花なれや霞にまかふ松のしらゆき

翫梅花

移し植し若木の梅の花さかりめかれぬ色にならひそめぬる

おなしき年の二月十一日内裏當座の哥合に春風

朝日さす山のしら雪きえそめて霞にゆるき春のかせかな

春雨

かきくらしこのめ春雨ふる時はみとりにぬるゝ山の色哉

春月

たつね來てみる人やなき花さかぬ朽木のそまの春のよの月

春雪

雪ふれはみ山や寒きしからきの外山にいつるうくひすの聲

春野

朝なゝきゝすなくなり武藏野の霞のうちにつまや籠れる

春山

春水

よし野山さのみは花もなかりけり人たのめなる峯のしら雲
すみよしのあき澤をのゝわすれ水たえゝならぬ春雨の比

春里

もしはやく煙と人やなかむらん霞たな引あしのやの里

春戀

春の日のななき契や菅のねのかれにし色に消るあは雪

春祝

君そみんときはかきはの色なから松と竹とのよろつ代の春

同二月十二日内裏當座哥合に深山春

春霞たちにし日より青柳のかつらき山そみらくすくなき

夕歸雁

夕暮にいつくをさして歸るかり霞のうへに遠さかるらん

水邊秋

秋霧のふかき夕にせり川の千世のふる道たれたとるらん

朝野鹿

朝霧の深き野原にたつ鹿のをのれとぬれてなかぬ日はなし

被知戀

たちにけるわか下もえの夕けふり心にけたぬ時のまそなき

曉更(笑)戀

有明の月をその夜の形見とてなくさむほととの契たになし

同二月十七日殿上に出御ありて當座の御會侍しに行
路梅といふを採題にて

玉ほこやゆけとも末は遠き野の霞にしろき梅の初花

不見戀

夢にたにまた見ぬ人の俤をさそふもつらき夜半の月哉

同二月廿三日内裏當座哥合に早春朝

あら玉の春に明行山のはによこ雲かけてかすむそらかな

夏曉更

有明の月にうかるゝほとゝきすしのはぬこゑを雲に鳴かな

暮秋夕

かせませにしくれてくるゝ足引の山の紅葉の秋もすくなし

冬深夜

むは玉のよはの山風ふけぬらしこほりによはる瀧のしら浪

羈中月

露おもき我袖をくるひかりかなこえぬる山のあとの月影

後二月四日八幡宮哥合に雨中柳

春雨にぬれて色こき青柳のはなたの糸にかゝるしら露

月前霞

山かせの霞吹はらふたえまよりさくらにしろき月を見る哉

寄春雜

春のよの月かけうつる石清水濁なき世と神もみるらん

同日鴨社哥合に朝野堇

朝霞たてるやいつこ武藏野の草のゆかりにすみれつみつゝ

水邊鶯

霞む日はそこともみえぬ瀧のうへのをくらの山の鶯のこゑ

社頭風

神代より色もかはらぬ榊葉のかをなつかしみ春風をふく

同日賀茂社に奉られし哥合に曉山櫻

あけぬるか櫻へたてぬ山とりのをのれもしろきよこ雲の色

浦歸雁

歸るかりそれともみえぬ春霞かすみのうらの夕くれのそら

社頭松

治れる御代のためしに神山の松ふく風は枝もならさす

承久(順德)元年五月廿一日内裏哥合に野徑霞

白たへの袖もみとりに移りけり霞わけゆく野ちのさゝはら

深山花

みよし野の山のかすみや晴ぬらん花もあらはにゆく嵐かな

暮春雨

さひしさはやよひの雨の古里にぬれてものうき鶯のこゑ

曉郭公

天の戸ををしあけかたの郭公よこくもなから聲そきえゆく

水邊草

夏の池のみきはもすこき松かけのあたるもあをき風の色哉

秋夕露

鳴鹿のなみたにまかふ夕かなをのかすむ野の秋のしら露

聞擣衣

あし曳のみやまおろしにたくふ也ふもとの里に衣うつこゑ

庭紅葉

山里の庭のまゆみのうす紅葉しくるともなき秋の色かな

冬夜月

むは玉のよるは重ねてさえけらし枯のゝ草の霜のうへの月

杜間雪

神なひのもりの木からしこゑもなし下草かけておもる白雪

承久二年二月十三日内裏御會に春山月

山櫻よこ雲ながら吹風につれなくかすむ有明の月

野外柳

青柳のこすゑそ高くかすみぬるみつのうへのゝ春の明ほの

おなしとしの三月廿三日内裏當坐哥合に曉落花

櫻ちる山のあらしやはらふらんかすみにはるゝ有明の月

朝歎冬

山吹のはなの朝露うちはらひおる袖ぬちす井手の里人

暮春霞

よし野山花ちりはてゝ行春に霞はかりやたちのこるらん

絶怨戀

こぬ人を思ひたえたる夕暮は山のは出る月もうらめし

被忘戀

わすれ行人の心そあとたえぬとはれしやとは庭のよもきふ

同廿四日内裏當坐哥合に鶯歸谷

鶯のかへるいへちもはなやなきたけのはやまの谷の夕かけ

朝藤花

朝露に色こきませて春風の吹かた見ゆる池の藤なみ

三月盡

をのつから深山にのこる花もあらしけふを限の春かせそ吹

狀忍戀

さのみやはしのふの山の下露にしはれよとたに契やはせし

惜曉戀

曇れかし言葉のこして明るよのゆふつけ鳥の聲もうらみし

おなしきとしの七月七日の夜詩哥管絃の人々をの

をの七人めして御遊侍しに仁壽殿にて和歌御會侍き

題七夕惜夜といふこゝろを

庭上秋風

七夕のあふ夜はこよひ更にけり惜むなみたや露とをくらん

同としの八月十五夜内裏御會待月
秋は猶なくさめかたきゆふへかな月待やとの萩の上風
見月
徒にいく夜の夢か絶ぬらん月のさかりのさらしなのいは
惜月
あちきなく思ひもいれし山のはにかたふく月は誰もみる覽
承久三年二月廿一日内裏御會に春風
このほとは霞になひく春風の音こそきかぬ萩のやけはら
春雨
あし引の山のこのめもはるさめにぬれてとけ行花の下ひも
九月九日中山御所にて姫宮御節供役送にまいりて侍
しついでに庭上菊といふを
植しよりともに千年や契るらん菊咲庭の松かせのこゑ
月前菊
うつろはぬまかきの菊のしら露に光そへたるやまのはの月
伊平朝臣貫首に成侍しときつかはし侍し賀札のついでに
返し
色まさるみかさの山の峯の松いく千世ふへきはしめ成らん
みかさ山日影にもれぬ峯の松もとふにそ深き色は見えける
先帝位の御時昇殿ゆるされ侍らざりしかは
いつ迄かよそに見るへきみとせ餘り雲井になれし雲の上人
新院(順德)殿上ゆるされ侍らざりし比
雲井より君かみかけになれそめてはこやの山の月を戀しき
前右少弁光俊筑紫に配流後ふみつかはし侍しついでに

月のいるそなたの空を眺めても君ゆへ袖のぬれぬよそなき
返し

月影の山のは出しよなくはかはきやはせし藤のたとも
新院佐渡國にうつらせ給て後康光かもとへふみつか
はし侍しついでに前途程遠おもひをそなたの雲にな
くさみかたきよし申て

思ひやるそなたの雲のはてもなし都の山も見えずや有らん
物かなしきゆふくれは鹿のねもいとこころをなや
ます心地して

物思ふ此夕くれに心あらはおのへの鹿よこゑなきかせそ

あか月のしくれいつよりもあはれにおほえて

都たに夜半の時雨は悲しきにはぬ里のねさめをを思ふ
羈中山海景氣月紅葉もいかはかりさひしかるらんな
と申て

旅の空いつれさひしさまさるらんみやまの紅葉浦の月かけ
當番公宴の夜なとは禁裏月をとみにみし事までおも
ひ出られて

諸共にみし百しきの夜半の月うらめしなからかたみ成けり
去年八月十五夜大炊御所にて御會侍しことたゞいま
の心地して

雲のうへにたれ待出てなかもけん去年の今宵の山のはの月
九月十三夜よもすから月を見てむかし思ひ出るなか
にひとゝせの十三夜御會に心あらは衛士のたく火も
たゆむらんと侍し御製ことに心の底にとまりて難
忘よし申て

をのつから衛士のたく火はたゆみ共誰か今夜の月を見るへき

しきしまの道は殊に有御沙汰事にて中殿御會など
いふ希代事までおこしたてられしに此比は和哥のさ
た聞えねは

和歌の浦とふ人もなしもしば草かきをく跡もさてやくち南
月は都もかはらすなからいかなる浦にて眺望か有な
と申て

思ふたに悲しき物をみやこ人いか成うらの月をみるらん
をのつから御遊などのおりくはさふらん人々のこ
ころもすむらんとをしはかられて

いか斗心すむらんまつかせのふく夕くれのいと竹の聲

貞應(後醍醐)二年三月十七日前右少弁光俊勸修寺にて
詩歌合し侍しに花開古寺中といふことを

をのつから花やあるしとゝはる覽ふるき野寺は住人もなし
軒あれてしのふそあをき白妙の花のしたはる春の山寺

暮山霞色多

立まよふかすみを分て出にけり山のは遠きゆふ暮の月
花の色はさなからこもる山のはの霞にあまる夕附日哉

水郷春望滿

大井川くたす筏のをとはして霞に見えぬあけほのゝ空
あけほのや霞はれ行うら風にみとりにのこる志賀のはま松

同題を女房にかはりて花開古寺中

初瀬山ひはらの霞吹風にたえくしろき花のむらきえ
たつね來て花みる人のまたもあれなふるき野寺の春の夕暮

暮山霞色多

よし野山まつふく風の音はかり霞にもるゝ夕くれのそら
山人のかへる夕へやまよふらんかすみそたてる峯のかけ橋

水郷春望滿

玉しまやこの川かみのもとつゝきけふりにまかふ春の青柳
かすめらん千世のふる道あとやあるみゆき絶にし芹川の里

同夜當座にて探題を人々よみ侍しに野外殘鶯を

しめをさしねくらの花の散しよりひとり春なる野への鶯

河 風

みちのくのゝたの玉川行人の袖に吹こすうらの鹽かせ

池 鷺

こやの池のあしまにたてるみと鷺のをのれもあをき曙の色

同夜又詩歌令侍しに山水落花多

この比は散敷はなに埋れて音はかりするやま川の水
こきませし櫻なるらし山河にみなかみ青き玉のを柳

春の歌とてよみ侍し

ゆくてにも結ふはかりはなかりけり雪間に青き野への若草

あけぬるか櫻吹おろす山風に霞かゝらぬよこくもの月

あらし吹よし野の奥をいとへともいつれの山も花はちる覽

霞むよの月やこすゑにはれぬらんたえく白き花の下かせ

鳥部野のかたへまかりて古き墓所とををみてよみ侍

し

みし人のけふりと成し野邊に來て古きそとはを哀とそ見る

夕 花

たつね來てみる人もなき夕暮にいたつらにちる山櫻かな

夏歌とて

鳴蟬のこゑもあきなる氣色かな夕日冷しき山の下かせ

郭 公

ほとゝきすはのかたらひて夕附夜あか月やみの空に過ぬる

内裏女房花合にまけて花にさしていたすへき哥こひ
侍しかは

吹風も治れる世は音もせてのとかに匂ふ花さくらかな

萩 風

萩の葉にしはしはかこつ秋風の尾花によはる野への夕暮

夕 鹿

我のみや哀ときかん掉鹿のなく夕暮のみねの松かせ

戀

さきの世の契しらるゝ身の程を思ひしらてや猶うらむへき

關 風

あらし吹きの關守にことゝはん心とさむる夢やすくなき

橋本社に讀て奉り侍し秋十五首の哥

をのつからよるをく露や残るらんあさひかくれの庭の萩原

をのつから露も残らし秋風の吹みたれたるをかのかるかや

軒ちかきまかきに萩を植しより秋かせきかぬ夕暮そなき

山のはのきりとひわけて行雁の羽風にしろきいさよひの月

さよふかき松のあらしに聞そへて鹿の音つらき秋の山里

あけぬとはゆふつけ鳥やしりぬらん霧によふかき逢坂の關

花すゝきはさかの駒やまかふらん玉しく庭の月の光に

いたつらに月も水草に曇りけり見る人もなきふるさとの池

さひしきは人もをとせぬ山寺の月に更ゆく軒のまつかせ

あけぬるか山のは遠きむさし野の尾花か末に月を殘れる

たれか又近き枕にかこつらんわかさと遠き衣うつこゑ

散つる紅葉色こき庭の面にをのれまされる白菊の花

あら玉のすこ^と竹垣みえぬまで茂れるつたも紅葉しにけり

さらてたに秋のゆふへはかなしきに心してふけ庭の松風
朝花

をのつから霞にこもる色もなし山のはしろき明かたのはな

夕花

かすみつゝそれとも見えぬ夕暮は花ゆへにまつ山のはの月

夜花

むは玉のよるのあらしに散はてゝあすは梢に花やなからん

三月つこもりころ法輪寺にまいりて

さひしとは紅葉の秋もみしかとも花散はつる春の夕暮

けふも猶人めまれなる山寺に住らん人の心をそしる

日比より三月盡日は可^レ惜よし前右少辨に申ちきり

て侍しほとにさはる事ありてほかに侍しにまうて來

て書てをきかへりける

諸共におしむへきけふの春の色を浮身ひとつに暮しつる哉
數ならぬ我身をしらて君かたゝ露のかことをたのみける哉

返し

もろともに契し春の暮にしもあしわけをふね我もうらみき

眞葛原うらみなはてそをのつから露のかことは心ならぬを

夏山殘花

夏山のみとりも深き木かくれにやよひの花の色そまれなる

夕待郭公

里遠きたなかの森の夕間暮またれすとても山ほとゝきす

書絶後信

見る度に落るなみたの玉つさやありしむかしのかたみ成寛

水草隔船

こきかへる難波入江のあしの葉にかくれて見えぬ蜚の釣舟

旅宿曉夢

旅枕ならはぬ山の松かせにみるとしもなきあかつきのゆめ

浦月

あかしに霧吹はらふ秋風にたえゝしろき浪のうへの月

建保五年四月比れいならぬこと大事に侍りしにおも

ひかけす隣家に侍きねに詫言ありて太田社にこよひ

のうちに哥合して奉りたらは平愈あるへきよし申侍

しかは凌^ニ甚雨^一奉り侍き

雨中郭公

ほとゝきすなくや卯月の夜の雨に草の庵を思ひこそやれ

卯花似月

有明の月のひかりとみるまでに卯花さけるあまのかく山

社頭述懷

ふして思ふ心も苦しあすよりは太田のすきのしるし現はせ

此歌。やまひのむしろにしつみなから。詠盡て次

日より平癒侍き。

貞應二年四月廿六日雲居寺の邊にまかりて夕くれい

つよりもあはれにおも^{（佐藤賢）}えて

家を出は爰に庵をむすふへき雲井の寺は心すみけり

女のもとにまかりて侍しあかつき雨いとはしたなく

ふり侍しかは別もやらぬ折しも山時鳥鳴わたるを聞

て

郭公ことそとなく過ぬなり雨にやすらふきぬゝの空

海路秋

和田の原ゆくへもしらぬ夕霧に我うらたとる海士の釣舟

六月十九日勸修寺にまかりて前右少辨のもとにて夏

水といふを

みな月のてる日もしらぬおく山のこかけ冷しき谷河の水

夏 草

秋風のふかぬゆふへもそよきけり軒端に近き庭の夏萩

夏 月

ほとつきす鳴ていりぬる山のはに替りて出る夕暮の月

宮道明神によみてたてまつりし歌の中に春山

霜かれも春はみとりのあしを山そかひの霞みせぬ比かな

夏 水

山かけの岩もる清水結ふまは秋にそかよふ峯の松風

秋 雨

かせませにしくるゝ山の夕日影うつりもあへす散紅葉かな

冬 松

みちたゆるふもとのさとに聞ゆなり外山の松の雪折のこゑ

旅 夕

玉ほこやゆくをかきりの夕かな野にも山にも宿はあれとも

述 懷

もらすなよわか古寺にちきりある宮道の神の廣き恵みを

春

天の原そらは雪けの雲なから霞にしるき春は來にけり
ねの日する野中の松にことゝはん古たれか引もらしけん
あけぬるか枕のうへに音すなり軒端の山のうくひすのこゑ
鶯のねくらの花も白雪のふりまかへたるあさほらけかな
明ぬるか鳴うくひすのこゑなから枕にかほる窓の梅かえ
難波湯かすみかくれにをとす也あしわけ小舟いまや出らん
鹽竈のかすみ吹はらふ春風にをのれまかはて立けふり哉

夢さめて玉の簾をまきもくの檜原のにしに月をかすめる
山里の窓よりきたは雪とちてにほひそそうすき春の梅かえ
春風に花もにほはぬまきもくのひはらにひとり霞む月かけ
春くれは浅間のたけや霞むらんとかむ計のけふりたになし
住吉のうらよりにしも霞めとも夕日にのこる松のむら立
鶯のこゑするかたをたつねすはたれかみ山の花の下かけ
この頃そまことの雲の色ならん櫻またしきかつらきの山
朝かすみたつたのこすゑつほむより春をいそかす初櫻かな
初瀬山かすみもふかき夕暮のはなにたまらぬ鐘の音哉
山姫のかすみの袖も白妙にうつるはかりの花の下かせ
降雪に萩のやけ原道たえてあさるきゝすのあともすくなし
山ふかみ櫻にもれしときは木の緑も見えすかゝるしらくも
春のよの月吹風に音さえてまかきのすゝき淡雪を降
浪まよりそれかとみえし松もなし霞にしつむよさの大しま
たつねすは山よりおくの山さくら重る雲とみてや過まし
花かつら今やみたるゝ乙女子か袖ふる山にはるかせそふく
かつらきのくめちの神やいとふらん柳のいとよるの月影
櫻はなさけはかつ散山風にこすゑをうすきかゝるしら雲
葛城のくめちのかみやいとふらん柳の糸のよるの月かけ
よし野山かすみこきませ吹風にそれとも見えす花やちる覽
早蕨のもゆる野はらの夕かすみ春は絶せぬけふりとそ見る
春雨はふるともみえてふる里の軒の忍ふにつゆそこほるゝ
故里の軒端の櫻吹かせにしのふもしろく花やちるらん
みよし野のまきたつ山の呼子鳥花よりおくのこゑを淋しき
吹まよふよものあらしは夢なれや花の散をも現とは見す
春の日のなかるのうらの朝なきに霞で出るあまのつり舟

くれて行春のかたみやよし野川青葉ましりの峯の山ふき

夏

自妙の色こそまかへ乙女子か袖ふる山にさけるうの花
あか月はたゝ大かたもうき物を山ほとゝきす聲なきかせそ
あやめ草軒のしのふにふきませてみとりそふかき故里の色
早苗とるかけひの水やあまるらんふしみの里の五月雨の比
あなし川水まさり行五月雨にゆつきか岳は雲そかゝれる
山かつの庭のかやり火きえすさみけふりすくなき夕暮の空
奥山のいはかき清水せきとめてこの下なからけふも暮しつ
夏ふかく茂る青葉をもちかねてこのしたくらきもりの月影
おく山の岩かきかへて夏ふかくいつ色そめて秋の木からし
をのつから草もゆるかぬ夏の日も野中のもりは冷しかり鬼
あはつのゝすくろのすゝき打靡き秋風またて露そこほるゝ
夏草のしけみわけゆく旅人の袖のみしろきむさし野の原

秋

秋きぬと音こそかはれ山里のまとよりにしの峯の松かせ
この秋もあふ瀬たかふな天の川こそその渡りはうつろひぬ共
たなはたのあふ夜はこよひ敷妙の玉のまくらや露けかる覽
秋萩の枝もしたりてをく露に月かけおもき宮城野の原
朝なゝ野原の萩にをく露をかせよりさきにみる人もかな
秋風に朝日そにはふ小山田のいほの外面のをかの萩はら
花すゝきもとあら萩にこきませて野原も秋はにしき也是
掉鹿のなく夕暮の秋かせに山のは寒くいづる月かけ
移しうへし昔をとへはあともなしひとむらすゝき故里の月
みよし野や花の盛も見しかともちくさのたけの秋の夕暮
あし引の山たちのほる夕霧のたえまにしるき秋の三日月

冬

心あらはよもの秋かせ吹はらへ月まつ峯にかゝるしら雲
眺むれば月はくまなき山風に木の葉の雨のふらぬよそなき
秋風にみたれて靡くさゝのはのみやまもさやにすめる月影
まかひつる夕のけふりたえはてゝ月にそ霧の色は見えける
ふけにけり庭の尾花の露ながら軒はにしるき山のはの月
あかしした浦より西にこき出てかたふく月を送る舟人
をのつからまゝとるむ夢もなかりけり隣の月に衣うつ夜は
眞葛原うらかれにたる夕霜にありとはかりの松虫のこゑ
我宿は松ふく風に聞なれて時雨する夜も夢はみえけり
神な月あすは時雨と思ふより秋の別の袖はぬれけり
神な月時雨は色もなかりけりぬる・はかりの峯のときは木
自妙の霜をく夜半は篠竹の大宮人も袖やさゆらん
これのみや秋のかたみと残るらんまかきの尾花庭のしら菊
山川にいくへ氷の結ふらん岩間にむすふなみのこらす
冬くれはもる人もなき小山田のかりほの庵のあれて淋しき
山かつのそともの岡のならの葉をこたあり顔に吹あらし哉
山里のまとふり埋むもみち葉につれなく残る軒の松かせ
木の葉ちる冬は來にけり足引の山かつらかき風もたまらし
山里はよもの草木の霜かれてその色となき冬そさひしき
散つもる木の葉わけいる冬のしかをのれあらはに山を成行
はれくもり時雨ころも久堅の月のかつらの色はかはらす
まゝとるまで今夜もふけぬまきのやに住うき程のむら時雨哉
うつしうへし一村すゝき霜かれて虫の音きかぬ冬を淋しき
山里の窓より北の竹の葉に朝霜むすふ冬は來にけり
たひ人の朝行袖や寒からし霜打はらふまのゝかや原

戀

山人の山わけころも寒からし霜の朝けの峯の松かせ
 初瀬山ひはらしろくをく霜にあか月寒き鐘の音哉
 家々の垣ねの竹も埋れてたかさとわかぬけきの白雪
 旅人のこえぬもしるき山路かなわかあとつくる今朝の白雪
 風の音もさえゆく夜半の月影に浮雲まよひつもる白雪
 をのつからみとりに残る色もなしけき雪白き山のときは木
 あとやある冬草わけてまとりすむうなての森のけきの白雪
 浪のうへはかつそけぬらし降雪のしほひに白き伊勢の濱荻
 難波江やあしわけを舟こきとめて雪にとまふく冬の夕暮
 此頃はとやまのまさ木散はてゝならのひろはにつもる白雪
 旅人のまたあとつけぬ雪のうへに月のひかりも白川の關
 あさあけの山の白雪吹かせにやかてはなるゝよこ雲のそら
 あしからの山路やいまはたえぬらし關の戸ふかく埋む白雪
 さゆる夜の月もたまらぬさゝの戸に霞ふきいるゝ山嵐の風
 旅人の菅のをかさもかひやなきみそれに濡るゝのちの笹原
 あり明の月もあけゆく櫛の戸にあられみたれて吹あらし哉
 難波かた入江の月の影さえてうら風のこすあしのむらたち
 きりかくれ姿はみえす川千鳥すむや澤邊の曙のこゑ
 をのつから畢ににこるかけもなし氷にむすふ山の井の水
 あし引の山田のかけひ音たえて氷にむすふ冬は來にけり
 さよ更てなつみの川やこほるらん山かけ寒きをしの一こゑ
 冬の池の月影寒し水鳥の青葉の山も霜やをくらん
 月影はたなかみ川にこほれともあしろに残る浪の音かな
 狩くらしかへるかた野の道もなしとたちの草をうつむ白雪
 冬かれの梢にさはくむさゝひのたけあらは成もりの月かけ
 龍田姫そめし紅葉は散はてゝ山もあらはにすめる月かけ

としをへてまたあふ事やなからまし命そ人の契なりける
 まとろまで待夜はさらに明にけりたのめし人や夢のせき守
 山鳥のをろのはつおのます鏡見るかけつらき戀もするかな
 はかなくそ命にかけて頼みけるしなぬ別れもかりけるよを
 君かすむそなたの空の夕かすみわか人しれぬ心へたつな
 忘れしその頃人にわかれなて頼めし未はかゝりけるみを
 草枕たひねの袖の露けきにおもかけぬらす山のはの月
 人しれぬわか下もえの夕けふり心のそらにたゝぬ日そなき
 我思ひたれかはしらんよひゝの徒ふしはまくらたにせず
 たれとまたおなし枕に詠らんだのめし夜半の有明の月
 わか戀はふる野の澤の埋れ水人にしられて年もへにけり
 命あらはめぐりあふへき形見とて袖の別にぬるゝ月かけ
 あか月の夕つけ鳥も心あれこよひそ人にあふ坂のせき

雜

とまり舟おなし菴のうきまくらあくれば是もわかれてそ行
 すむ人の心しらるゝゆふへかなこけのとほその松風のこゑ
 山ふかみ谷しつかなる夕暮はまたもえきかぬ鳥の一こゑ
 高砂の尾上のかねに月さえていとゝさひ行まつかせのこゑ
 さよ更て山ものとかにすむ月にをのれひとりとましら鳴也
 朝夕の煙にもしれあしのやのなたの鹽やきいとまなしとは
 あか月は木々の雫のしけゝればやまわけ衣ぬれまさりけり
 なにとなく都戀しき山里にきゝも習はぬまつかせそふく
 をのつから人もとひこぬ山里の庭の石はし苦おひにけり
 みやまへや心すみける曙にたかよしれとてぬえの鳴らん
 風ふけはゆるきの森をたつ鷺のねくらあらはに散木葉哉

けふりたつ里の夕はとひすきてしらぬ野原に宿もとめつゝ
故郷はあれてしのふやしけるらん軒もる月の影そすくなき
住吉の松にあらそふ君か代を何れも千世と神ぞ守らん
墨をすり筆を染つゝすへらきにおやのつかへし道を違ふな
わかか浦や誰をしるへにこき出て深き鹽路に迷ふ舟人
あま小舟をのかうらゝこき出て釣するおきの月やみる覽
朝夕に雲のかげはしたちなれて君につかふる道をしらはや
思ふ事するもとをらぬ沼水に洗める月やうきみ成覽
山里に時雨せぬ夜は月を見てなみたはかりにぬるゝ袖哉
みたらしや井堰に迷ふうたかたの哀うきみの果をしらはや
忠信卿住吉哥合とて人々すゝめ侍しとき山春を
よし野山春のけしきの朝じめり霞にぬるゝ故郷の花
里 冬

旅戀

しからきのとやまの里の淋しさは時雨せぬよも松かせの聲
あまさかるひなの別そうかりけるおなし都の契たになし
御室五十首の哥に初春
たましきの都にはるは立にけり束のかたや先かすむらん

雪中鶯

山ふかみ猶空さえて降雪に春も稀なるうくひすのこゑ

橋邊霞

白妙の濱なの橋も見えぬまで遠方こめて立霞かな

行路梅

道のへの垣ねにさける梅の花たか袖わかす匂ふ比かな

春月

久かたの空吹はらふ春風にかすみかゝらぬ山のはの月

岸柳

神なひのみむろの岸の柳かけみとりも深き水の色かな

旅春雨

ふみまよふ山路のこけの色そこきわか袖ほさぬ春雨の比

遠歸雁

歸る鴈かすめる空にかすきえて山のあなたに遠さかりぬる

山花

三輪の山春のかさしの櫻花ひはらをわけて誰かおるらん

關花

心あてにそれかとそみる櫻はなかつみの關の春の夕くれ

庭花

をのつからとひくる人も見るはかり花ちる庭の朝清めすな

河歎冬

山吹の花ちりしより吉野川岩なみはやく春そくれ行

社卵花

神山の青葉ましりに咲にけるはつうの花の色そすくなき

早苗多

けふ幾日田子のもすそのぬれながら千町の早苗とり暮す覽

里郭公

春秋もしらぬ常盤の里人に夏をきかする郭公哉

岡郭公

水壺の岡への里のほとゝきすねてのあさけにきかぬ日はなし

夜盧橘

夏のよもやゝ更ゆけは橘の下吹かせの袖そすゝしき

籬罌麥

きりゝすなかぬ夕も哀なり籬にさけるやまとなてしこ

江 螢

大井川くたす鵜舟のかゝり火に入江の螢かすまざるらし

早 秋

いつもさく庭の松風吹かへて衣手寒き秋は來にけり

萩 露

鳴わたる鴈のなみたとをく露といつれかそむる野への萩原

萩 風

植すてゝ聞人もなき故里のまかきに殘る萩の上かせ

尋虫聲

松虫のこゑする野へを尋ぬとて草村ことに袖ぬらしつゝ

山家月

をのつから風もさはらぬ笹の庵みやまもさやに月はもり梟

野徑月

むさし野や行旅人のあともなし月の光の秋の白雪

船中月

みなといたりあしわけを舟こき出て難波のおきの月をみる哉

曉 鹿

夕附夜あか月やみのくらふ山木のしたゝとる鹿や鳴らん

河 霧

もかみ川霧の下こくいな舟ののほるも見えぬ秋の夕暮

擣衣幽

秋のよのなかなきねさめの月影に遠きさぬたの音の淋しさ

夕紅葉

をくら山夕日かくれや時雨つるぬるゝ顔なる秋のもみち葉

殘菊句

打はらひ折袖さむく匂ひけり霜のまかきにのこるしら菊

朝時雨

神な月時雨てあくる山のはにはなれもやらぬ横くもの空

竹 霜

なかきよのねさめの窓の竹の葉にあかつき寒く霜や置らん

池水鳥

冬の池の水草をしなみ降雪にをのれも白き鴨の村鳥

鳴千鳥

さゝ嶋の磯こす浪にたつ千鳥心とぬれてなかぬよそなき

松 雪

しからきのとやまはうすき白雪の埋みもはてぬ松のむら立

湖 雪

志賀のあまの釣する袖や寒からし雪に成行比良のやま風

惜歳暮

うつり行月日そおしき飛鳥のあすかもあらは年やくれなん

寄雲戀

諸ともにかよふ心やへたつらんいもせの山のなかのうき雲

寄露戀

別れにしそのあか月の名殘とてかならず露は袖に置けり

寄煙戀

するかなるふしのしは山しはしたに消ぬ思ひに立けふり哉

寄草戀

我戀は軒の忍ふのうす紅葉たえぬなみたや故郷の秋

寄鳥戀

尋みる野へのかよひ路あともなしたか偽のものすの草くさ

寄枕戀

數妙の枕の下にをく露はなきてぬるよのなみた成けり

曉述懷

徒にわかよふけぬとなかむればはつかあまりの月そ出ぬる

閑中燈

何となくむかし戀しき夜の雨におなしかたみの窓の燈

山旅

あし引の山路や遠き旅人のあとよりうつむ峯の白雲

海旅

たひねする磯のとまやに月をみて涙のまくらに夢を少なき

野旅

草枕むすふ野はらの里遠み鳥の音きかぬあか月のそら

寄松祝

いく千代もときはかきはと契らし竹の園ふく松かせのこゑ

人にかはりて旅宿月明といふを

旅人の草引むすふむさし野に山のは遠くすめる月かけ

秋花催興

秋は猶鹿の音きかぬ夕たに袖に露をく庭の萩はら

藏在所戀

宿をたにおしへぬ里にとひくれぬ誰しるへなる余所の杉村

前右少弁光俊春日社哥合とてすゝめ侍し時春風とい

ふとを

山さくら霞もしろく明る夜の横雲なひき吹嵐かな

夏雨

里遠きたなかのもりの村雨に山ほときすぬれて鳴也

秋雲

山のはに入きたいそく光かなあらし吹よのうき雲の月

冬月

降雪にかれ野のすゝき埋れてのこるくまなき冬のよの月

社雜

春日山はるの光のあまねきにもらしなはてそ谷の埋木

北野宮にのみて奉り侍し述懷十首哥

春の色はよそなる山のかくれにみを鶯のなかぬ月そなき
かきりあればをのれもさきぬ遅櫻うきみや春をしらて過南
物思ふ心のうちは夏草の茂みにもゆるほたるなりけり
思ひきやむとせなれにし秋の月雲井のよそに眺むへしとは
位山あふけは高き月を見てひとりふもとに袖そしほるゝ

かすならて世にすみかまの夕煙な中々に立のほるらん
いつかわれ神の恵のあらはれて衣のいろはあけのたまかき
たのむそよあけはみそちの年のうちに神は誠の教はかりを
とにかくに思ひきたためぬ身の程を夢にもみせよ菅原のみや
いかゝすへき世に住わひはよを捨て入へき山の庵たになき

山家月を

時雨とは月見ぬ人や思ふらんこの葉かつちるみやまへの里

海邊月

鹽かまのうら吹はらふ秋風の秋かせよふけてイに月にけふりの色そすくなき

月明隱士家

くもれたゝあまりくまなき宿の月みる佗人の影も耻かし

月前擣衣

物思ふ心のやみのくらきよも春の宿の月そさやけき

月影はまたやまとをき秋のよの夢を残さすうつころもかな

賀茂神主よしひさつくしにて身まかりける後久繼かもとへ文つかはし侍しついでにいりかたの月もむかしはかた見なりけんたと申て

たらちねの遠き影見と詠めけんをなたやつらき入かたの月返し

憂なから今はかた見と頼むかなそなたの空のいりかたの月
秋のならひは大かたの袖も露けきにかはかりかし
ほるらんと申て

この比の露もなみたもふち衣秋の夕やぬれまさるらむ返し

袖の露は秋のならひとかこちてもたえぬなみたの置所なき
とはぬ日數もあやなく積りぬれと中々ふかき夢のう
ちはなといひつかはして

うき夢を驚かさしとしのふまにとはぬうつゝも日數へに鳧
かへし

うき夢を夢ともわかぬ心にはとはぬ日數もけふそしりぬる
一日百首の哥よみ侍りし中にかすみを

山姫の霞の袖を吹かせにたえゝみゆるみねのしらゆき
うくひすを

青柳に枝うつりする鶯はをのれまされてこゑのみそする
花

みよしのゝ山に住人それもなを花にはあかて春やくるらん
故里のおい木のさくらあはれなり何れのようにか植はしめ劔

郭公

山かつの園のあふちの花盛りたえすもきなくほとゝきす哉

五月雨

うちわたす沼のうき橋水こえて人もかよはぬ五月雨の比
なかむへき月のさかりに成に鳧よるたにはれよ五月雨の空

紅葉

この比は紅葉色こきやま里にしくれもしらぬ竹の一むら
雪

降雪にそことしらてややみなまし野中のいほに煙たゝすは
難波渦うらかせ寒き夕暮にあしの葉しろく雪は降つゝ

忍戀

をのつから慰む隙もありなまし人にもかたる思ひなりせは
不遇戀

曉

契りあらは何れの世にか巡りあひて同じ枕の月を見るへき
あか月はたゝ大かたやうからまし夕告鳥のこゑなかりせは

海邊

さくらあさのをふのうらなし花咲て立白浪にまかふ頃かな

述懷

世中をさなから夢と思ふよりのむうつゝもなきよ成けり
見し人は夢に成にし世中をうつゝありともないたのむらん

山家

山里は枕におつる瀧のをとにをのつから見る夢そすくなき

懷舊

何事もむかし語りの世中になからのしやかたみなるらん
かへりきて昔をそ思ふ故里のいた井の清水誰か汲けん

旅

關の戸ををし明かたに出つれと猶雲くらしあしからのやま

五十首哥よみ侍るとき野春駒

あはつ野の草やみとりに成ぬらん霞のうちにあるゝ春駒

雨後月

時雨つる山の木のはにうつる也ぬるゝかはなるむら雲の月

關路雪

清見かた關の戸出る旅人のうらちにつゝ雪のあけほの

寄水戀

わか戀は山の下草しけゝれは人にしられぬ谷川の水

寄衣戀

物思ふなみたやそむるからあるのやしほの衣いろかはる迄

古寺曉

初瀬山あかつきことの鐘の音にかならずぬるゝ我袂かな

海邊松

たましくしけ二見か浦の松かせに浪路はれ行あけかたの月

橋上苔

あれはてゝ人も通はぬをはたゝのいたゝの橋は苔おひに鳧

夜瀧水

みよし野の山たちのほる月影に玉ぬきちらす瀧の白糸

貞應二年十月廿六日津の國のをはやしといふ所にゆ
あみんとてまかりて侍りしほとなれあそひし遊女に

十一月九日小屋野より別るとて

旅人のゆきゝの契り結ふともわするな我を我もわすれし

霰

夕間暮うらかせさえて難波江のあしの枯葉に霰降也

旅

東路やかくるゝまでにかへり見る都のやまはあとのしら雲

山寺

尋ぬれと人も音せぬ山寺のあかるの水にすむ心かな

家隆卿家哥合に野亭時雨を

秋の野の花にこもりし宿あれて時雨るゝ比はとふ人もなし

古江寒草

難波江や行衛もしらぬ鹽風のこゑ吹とむるあしのむら立

閑庭冬月

霜枯の葎の軒をもる月のまかきの竹に影そすくなき

旅山雪深

あけほのや遠方人のあとやなき雪にともよふあしからの山

寄冬松戀

かたしきの袖の泪やこほるらん霰ふるよの松のあらしに

貞應三年三月廿七日九條新大納言基家御會に關路花

あふ坂の山の春風こゑたてゝ花に成行すきのむら立

海上螢

あけゆけはいかになるみの浪の上によるゝ計りとふ螢哉

野宿月

白妙のをはなかりしき今宵さへ猶むさし野の月をみる哉

河邊雪

玉しまや此川かみの道たえてわか里まよふ雪のゆふくれ

暮山戀

戀衣きなれの山のゆふつゆにおもかけなからぬるゝ袖かな

前右少辨もとにて當座十五首よみ侍りしに春山雪

春河風

春も猶あらくま山はかせさえてゆつるはしらく雪は降つゝ

春野遊

川かみやゆつのはのむらの夕けふり霞にませて春風そふく

春關月

おもふとちすみれつむとて住吉の遠里をのにけふも暮しつ

秋の空あかしの浦にみしよりも霞の關の春のよの月

春橋霞

行人の袖こそみえねをはたゝのいたゝの橋の霞む夕暮

春岡草

岡野へやなをしら雪もふる草ににる草ましり春は來にけり

春嶋雲

此比もさくらはあらしやまとちやきひのこしまは唯の白雲

春旅雨

旅人や行なやむらんをかさきのおほみあしちの春雨のころ

春浦松

春の日のなかるの浦を見わたせばのとかにかすむ松の村立

春庭竹

庭なかのあすはの神のうゑてけるいさゝむら竹鷺そなく

春池鳥

花に鳴こゑも物うきいかるかのよるかの池を人のとへかし

春里煙

立のほるあさけのけふりまかひけりたか住里の玉のを柳

春瀧水

瀧のうへのみふねの山の花盛りそれまで白し水のみなかも

春夜戀

起もせずねもせぬ此のうたゝねにみるとしもなき春のよの夢

春述懷

諸共に今年のはるや春しりてみしもゝしきの花をみるへき

あまた哥よみ侍りし中に

心なききの關守もいとふらん花ちる比のはるのあらしを

あふさかの山のあらしは寒くとも花のふゝきは打も拂はし

雪ふれば四方の木草も白妙ににほふまつちのやま川の水

人は猶つれなき山の夕時雨わか袖はかり色はありけり

前右少弁いづもちに侍し頃まかりて探題を人々よみ

侍しに水邊花を

春の池のみきはの櫻風ふけは浪よりうへにつもるしら雪

春寺

もるかなをかさきの山の春の雨こけの衣のいとゝしほるゝ

寄火戀

きえねたゝ思ふも苦しわきもこをほのみの崎の蟹のも鹽火

同所にまかりて三首題を人々よみ侍しに遠村梅

梅の花咲にけらしな遠方の霞にしろきさとのひとむら

浦歸雁

歸るかりをそれかあらぬか白くもに櫻ふきまく浦のやまかせ

春竹風

故郷のまかきの竹も青柳のおなしみとりに春風そふく

新大納言基家歌合に羈中霞

春はまた草の露なきゆふへさへ霞にぬるゝ野への旅人

曉歸鴈

歸る鴈ゆくかたしらす夕つくよあか月やみは聲はかりして

山家鷺

山ふかみ鷺はかりをとつれて花なき里はとふ人もなし

朝春雨

なかむればあさるる雲のとちはてゝ山のは遠き春風のそら

名所花

よしの山こそ降雪のおもかけや花のふゝきの明方のそら

勤修寺僧正成寶池邊に水閣をかまへて管絃あるへき

よし先日對面の時かたられ侍しをそのゝち心にかゝ

るよし申侍しつゐてに

思ひやる池のみきはの松かせにたくひやすらん糸竹のこゑ

五月二日勸修寺の僧正の坊にて曉郭公といふ事を

ほとゝきす鳴てもおしめ山のはにあげぬといそく入方の月

夕早苗

山里のかとたのさなへ打なひき夕暮すゝしかよふ秋かせ

寄山祝

ときは山おなしみとりの色乍ら松にそ千代の程は見えける

おなしき三日池の邊にてをのゝ哥よみ侍しに山家

夏

なかむれは軒端の山の雲消て青葉すゝしき風の音かな

池邊松

池水のあたりによをやつくさましたゝまくおしき松の下影

寄舟戀

とへかしななみたの海の深きえに沈みはてぬるあまの捨舟

賀茂久繼玉津嶋に参りて講へきよし申侍しかは行路

郭公といふ事を

たとり行しらぬ野山の夕くれにまたて聞つる郭公かな

海邊夏月

和歌の浦や蘆の葉わけてよる舟のうきね涼しき夏のよの月

馴後増戀

知さりき人の心のおくまでもなれて悔しき戀の道哉

新大納言家庚申會に故郷五月雨

かせ渡る軒のしのふのさみたれに故里人の袖はぬれつゝ

庭樹蟬

鳴蟬のなみたの露は色やなき木の下青き庭の夏草

見不逢戀

きえねたゝ契りもしらぬ我妹子をみそめの崎にくゆる藻鹽火

北野宮哥合に春野雪

霞ゆく遠方人やぬれぬらんみそれにまじる野へのあは雪

夏瀧水

布引の瀧のしら糸よるはなを螢かすそひ玉そみたるゝ

秋浦風

消のこるかけもつれなし燈のあかしのうらの秋風のころ

冬山月

あられふるならのひろはに夢さめてみ山の月を誰かみる覽

社述懷

千早振きたのゝ宮のゆふたすきかけてそ頼む行末の空

勸修寺哥合に深山花

雲や花はなやしら雲みよし野の山もかすめる明ほのゝ色

古寺郭公

佗人のわきてはまたぬほとゝきす雲の林にこゑなおしみそ

海邊月

清見かたふしの山かせふけぬらし煙まかはぬ空の月かけ

羈中雪

敷妙のいへなき山にこえられて里とひわふる雪の下道

夕松風

山高み夕日かくれの松の葉にこゑふきとむるよもの木枯

花のさかりに法勝寺にまかりて侍しに讀て人につかはしける

しるしらぬ人やわく覽花盛この下かけの春のまとるに

返し

曉戀

しりしらぬ誰かはわかん花さかりたちよる人を松の木陰に
歸るさの袖になみたの餘るより月をそしほるしのゝめの道
花哥とて

今朝みれば絶まも雲やかゝるらん花に残らぬかつらきの山
よし野山花と雲とに埋れぬ昨日は見えし峰の松はら
春きぬといかて知らん花さかぬまきのをやまの鶯のこゑ

七夕

久かたの天の川かせ吹ぬらし紅葉のはしをこゆるしらなみ

秋

おく山の岩かきもみち染はてゝつれなき松に時雨降也

冬

朝ほらけすゝきをしなみ降雪にけに淋しきは冬の山里

あさ露にみのしろ衣ぬれにけりさゝわけまよふ野への旅人
今朝みればすむにほとりのあともなし氷を清き冬の池水
山かつのかきほもしつむ夏草にをのれまされぬ撫子の花
庵結ふ誰かまかきのあとならんふるき山路に残る白菊
移ろはてしはしはにほへ庭の菊ことしまた咲花もあらしを
あふ事を思ひ絶たるゆふへさへ心よはくもぬるゝ袖かな
ひのひかりやふしわきける世中に花咲春をまつそ久しき
難波かた鹽路も遠き朝なきにたみのゝ嶋を出る船人
眞砂ちる吹上のはまのはま風に岩打浪のこゑしきる也
身のうさにいとゝ泪ももろこしの吉野の山に宿もとめはや
旅人のあさたちくれはうねのゝにをちかた遠き鶴の一こゑ
我かとのいたるの清水むすはすは袖の物とや月をみるへき
まかねふくきひの中山うつもれてほそ谷川も雪のした水

鹽かまのまかきの嶋の松風にのこるけふりの色そすくなき
春の日のうらゝ遠く霞むよりもしほの煙をのれともなし
若菜つむ野への春風猶さえてかたみもおもくたまる白雪
雲の色も明かた寒き山のはの松の葉こしに残る月かけ
あはれしれみを浮草のうきなからさそふ水たになきよ也晝
さゝなみや志賀の山こえいそくとも花の雪に猶やぬれまし
見すしらぬ故郷人もたつねけり花の盛のみやまへのいほ
散花はのこる梢もある物をやよひの月の入かたのそら
秋の野のみくさかりふきぬぬる夜は枕に近き松むしのこゑ
あさほらけ霧晴わたる河上に一村みゆるねししたかゝや
あか月の時雨の雨やそめつらんけさ色まさる軒ののみち葉
玉ゆらの露ものこらし秋風の草葉そよきてふかぬ目をなき
いたつらに露にをかるゝ秋萩の花ふみしたき鹿を鳴なる
散つもる木葉かくれに行水のなかれもやらぬ我思ひかな
あさかみの思ひみたれてあちきなく我のみ物をおもふ比哉
おく山のいはか草にをく露や人にしられぬなみたなる覽
たひ衣たもととをりてぬれぬらんをさゝか露を猶や分まし
みなと風寒く吹らし舟人のうきねあらそふあか月のこゑ
打よする浪の花すり色もなし袖のみぬらすいそのあま入
柴の庵やひとり住うき深山へにともありかほにましら鳴也
鐘の音をなと夕くれと思ひけん月さへのこるあけほのゝ色
物思ふこゝろなくさはま千鳥浪の枕になくゝそきく
六根之中意根
うきしつむ後の浮世を思ひしれ心の外のこゝろやはある
右衛門權佐親俊會し侍しに春曉月を
み吉野の山も霞みてあくろよの花にいさよふいりかたの月

夏庭草

花さかぬこのころ色やまさるらんおなしみとりの庭の夏草

秋山松

山姫の紅葉の袖もみゆはかり霧吹はらへみねの松かせ

冬河風

降雪に宇治の川かせこゑたてゝあさといそかぬまきの嶋人

寄煙戀

人しれす忍ふの里にやく鹽のけふりふきけつ浦かせもかな

霞問花

立まかふかすみはかりははらふとも花吹のこせみねの松風

寄葵祝

みあれやまけふ諸人のもろかつらかけてそ祈る千世の行末

野徑鹿

鹿の音をもちかたならぬ夕霧に人こそみえね宮城のゝはら

曉時雨

鐘のをとのあかつきつらきね覺より我袖ぬらすむら時雨哉

初祈戀

思ひたつけふみてくらのたむけ草末葉もあたに靡くよも哉

河朝柳

あさ露の玉しき川の玉やなきにゐ嶋もりのかさし成らし

杜郭公

ほとゝきす鳴や泪の下露にぬれて冷しきころもてのもり

草花露

秋風にさながら露やこほらんまきになとか庭の萩はら

行路雪

あち山やたのわけ行たひ人の袖に吹まく雪の夕かせ

誓契戀

あたならぬ其かねことを頼めとやいさまたしらす人の心は

寄竹述懷

百敷やみきりの竹をみし秋もみとせ隔てつ雲の通路

潮歸雁

志賀の浦沖にかすみて行舟や遠さかりぬる春のかりかね

故郷螢

ふるさとの庭の夏草ふくかせにをのれみたれてとふ螢哉

山中月

人も見ぬみやまのおくの月かけにいたつらに吹松の秋風

夜千鳥

岩にうつあら磯なみの夜の月かたふく浦に鳴千鳥かな

恨絶戀

忘らるゝ身を秋かせに眞葛原うらみはてゝも露そこほるゝ

寄石述懷

味氣なく浮瀬に洗むさゝれ石のこまかに物は思ひくたかし

前伊勢守清定舞女いさなひて吉田に詣來て遊び侍て

乙女子か雪をめくらす袖のかにうつりはてにし我心かな

返し

をとめ子かたちまふ夜半の袖のかの心に残る色そあたる

故郷月

故郷の忍ふの露をふくかせにかけみたれゆく軒の月かけ

海邊戀

等閑の契りはかりを松しまやおしまれぬ身もとしはへに晝

羈中夕

たか爲と結ひはおかし草枕これも契りの野への夕くれ
曉擣衣

あらし吹遠山もとの里つゝきあか月さむく衣うつなり

暮山鹿

さひしさはしくるゝ雲のたつた山夕日かくれに鹿も鳴なり

濱殘雪

おほとものみつの濱松あらはれてふれとたまらぬ春の淡雪

鳴柳

ことし行にる鳴守の玉やなき花まつ程のかさし成らし

珠簾葵

玉簾かけてむかしそ忍はるゝおなしあふひのかさしなれ共

十三夜

數ふれはけふ長月の十日あまりみよともすめる山のはの月

澗底鹿

わか庵の枕のしたに聞ゆなりたにかくれ行棹鹿のこゑ

里初冬

菅原やふしみの里に冬の來てけさ吹かはる松かせのこゑ

山路戀

人めのみ忍ふの袖の道はあれとかよふ心のしるへたになき

海路戀

我戀はやへの鹽路をこく舟のうきて契りの何をたのまん

夕聞法

歸るさの家ちわするゝゆふへかな聞にうれしき法の庭人

曉無常

みし人を夢になしてもねぬるよのあか月かたそ物は悲しき

名所月

月影の氷しきつのうらかせにをとはしくれの住よしの松
曉擣衣

この比のあか月寒き月影に里も殘らすうつ衣かな

月

をく露にぬるゝかほなるひかり哉よやふけぬらん袖の月影

おもふ事なくさめかねて詠むれは更行月も袖ぬらしけり

わか袖のなみたに月そのこりける草葉の露に嵐吹よは

秋の夜はかならず露や結ふらん袖になれ行山のはの月

秋のよは露もなみたもあまるとてしほらし袖にやとれ月影

無常

はかなしやいつまで草のいつとたにしらぬ命や殘るしら露

ありはてぬ命も露もあたし野の草葉になひく風やまつらん

春野風

野へ見れはこそしら雪むらきえてなひかぬ草に春風そ吹

自妙のはなのゝ霞ふきわけてさくらいさよふ春のゆふかせ

あはれ秋露もなみたもいかならんそよかぬ萩に野への春風

行路夏

玉はこのゆくてもたゆき夏の日に山陰もなきむさしのゝ原

夏草の露わけころも吹かせにしはし冷しき野へのかよひ路

見渡せはおちかた白き旅衣ひもゆふかほの花にそあるし

秋山雨

村時雨もる山かけにをのつからぬれぬ紅葉も色そさやけき

たつた山小倉のみねは雲とちて殘る紅葉を時雨にそみる

秋も猶すきの葉青きあしからのやへ山しくれ何を染らん

閑居冬

人とはて木のはに道は絶にしを猶ふり埋む庭のしら雪

をのつからとひこし人の道もなしすゝきにおもる庭の白雪

社述懷

春日山花咲はるもよそなれはうきみはかりや谷の埋木
春日山花さく藤のなかにしもなと春しらぬうきみ成らん

野朝露

あさほらけ草葉におもき白露をさながらこほす野への秋風
初瀬川河瀬も見えぬ夕きりのたえまに青き二本の杉

寄虫戀

我のみや鳴てもきかんきりくすひとりね覺のあか月の空

五百弟子品

女郎花おひぬ野原の朝露にうきこときかぬ袖もぬれけり
朝夕のけふりもしらしおく山にのとかに法を聞そうれしき

前宮内卿家隆卿人々すゝめて彌陀四十八願をよませ

侍しとき聞名具徳のこゝろを

あひかたくうれしき御名を聞しより早く悟を得ぬ人そなき

月

月すめは秋も氷を敷妙のまくらもしらていくよへぬらん

無常

あらし吹花や紅葉の色をみてわかよをしらぬ人もはかなし

月前鹿

秋萩の花に起臥なく鹿のかげあらはなる宮城野の月

月前戀

いかにしてしはへてみせんさよ衣月の雪はなみたなりけり

清水の地主明神に奉り侍し述懷哥

のほるへき道はあれとも位山ふもとにまよふ雪の夕くれ
住わひて浮世をむかんみやまへの草の庵にけふりたゝすは

前右少辨百首哥みせにつかはしたりしおくに
もしほ草かきすて難き中にまたたまに聲あるわかのうら浪

宰相中将公賢卿よをのかれて侍し頃前右少弁光俊の
もとにつかはし侍りし

八座やはねの林も何ならしさとるはちすのこゝのしなには

返し

ことほりやうき言葉のしけゝれは羽林をとひわかれける

隱岐院(後鳥羽)御のほりあるへしなと申侍しころ

哀としてしつむもくつをかきなかせ興津しら浪立もかへらは

返し

興津浪たちもかへらはもしほ草かき置跡も空しからしを

雪中驚

雪とつる窓より北の梅かえに花を遅しと驚をなく

山花

みよし野の山にゐる人山にても花にはあかて花や散らむ

河上月

ぬきとめぬ玉しま河の波のうへに秋の氷を結ふ月かけ

曉燈

かきりあれば月は入ぬる秋のよの長さねさめに残る燈火

閑庭露

松かけのあさちかうへの白露をたまゆらをかぬ庭の秋かせ

寒夜水鳥

風の音のさゆる霜夜もあしかものさはく入江は凍らさり鳥

朝氷

山川の岩にせかれてたつ浪のさなからこほる冬のあけほの
いつまでそ草に忍ひし沼水のあらはにこほる冬のあけほの

野雪

をのつから秋の名残のむらすゝき埋みはてゝそ野への白雪
山家叢

寄鳥戀

こゝろさし人は淺せに河鳥のうきみしほれて啼ぬ日そなき

被忘戀

忘らるゝ宿の垣ねのあをつゝらくるものとしてそ人も待れし

河

そま川やおとすいかたの瀬をはやみ棹も取えぬ涙の通路

古寺月

はなすゝくあか井の水に影みえてこけの軒もる山のはの月

述懷

徒にみそちあまりの春の夢おもひ覺てもおなしよそなき

世をのかれて後さかの草庵にて

よしやたゝ草の庵のかたひさし久しかるへき此よならねは

三月晦ころ修行に出侍しあとに母みまかりにけると

聞ていそき都へ歸りて侍しとき俊成卿女のもとより

みやこ出し春のわかれの旅衣やかてそふちの色に染まし

返し

ふる里にかへれば染るふち衣たひねの袖はぬれし數かは

八月十日ころ月あかきよ嵯峨の草庵におろしこめて

侍しを俊成卿女入堂のついでに人をつかはしさしも

あかき月をもみぬうたてしきよし申されて侍りし返
しに

むらさきの雲に心をかけしより月の行衛もしらす成にき

返し

紫の雲まつ人は山のはの月のひかりにさしてこそゆけ

右藤原光經集得古寫一本按正了

群書類從卷第二百六十

源孝範集

和歌部百十五 家集三十三

わかの秘事をかきて守實（號熊野堂眞成氏ノ弟）にたてまつりける時つゝみ紙に

敷嶋の道のひかりもおくあれと八千世の君にかきそ傳ふる
いなかわたらひに侍けるころ冷泉大納言入道許にふ
みたてまつりけるに

おほけなき心を和歌のうら波にかけていたつら袖を朽ぬる
十七日いにしへは征夷大將軍家御弓はしめけふそかし
と思ひてゝ

梓弓けふひきをむるいにしへに春もさそひて立かへりなむ
雨夜もすからをとつれて寒き明方にと山の雪を見て
明わたると山は雪の色そへてふもとにさゆる夜のはるさめ

ささらきの中の十日あまり花をこそなとまつころに
風さむく空かさくらしてはては雪ふりいてゝひめも
すふゝきなとこしちにいふらむもおほうにやとなか

め暮したるにとなりわたらひしめたる宗春法師のく
れもかゝる空を心あらんわかきものなと尋とふらん
又した待もすらんなとたはふれて申をくるとて

ふりかくす雪の心をうらみてもしたにや君か花を待らん

と申をくりたる返事につけて

春さむみ花はこゝろもかけぬよにふりくる雪を情かほなる
その夜空もさりけなくはれて曉ちかきほとさすかに
なさけあるひかりの春とも見えす又冬のおもかけと
はいひかたきに雪のはるゝとつもりたるなかつゝ
ゝさえかへるをも忘れたる折ふしよみ侍りける

月はけさ霞をよきて在明に春ふりかくす雪の色かな

とし久しくなれたる友たちの侍しかおのわらはにめ
てゝ子にてあれなと申けるに扇を出しける玉かつらの
の君のためしもなとたはふれこと申て哥よみけるを
さらはこの哥扇にかき付よとすゝむる人のと葉にし
たかひて

もとたちのはふき忘れぬ玉葛ざりとて人にかけやはなれん

二月十三日いつも聖廟法樂とて靜勝軒太田道灌にて
一續侍しに梅盛

薄くこき色香もわかぬ梅のはなひとつにかはる春の明のは
世中はうつろふかたをねたむならひも侍らんにかの
わらはに扇はなのえたつかはしけるもはゝかりおほ
く老の波たちかへりわかやかなるやうにみくるしか
るへきとをくひて

逢坂はまたさうき名のくるしきにかよふ心の關やすへなむ
種玉庵宗祇老後に京より下りきたりける（安永二年下向江戸館）ほとなく立歸り手向のぬさなどになすらへてつかはしける時

なれこしか齡もともにふる河や又も逢みん立わかれても

かまくらのさとにまかりて見るにあらぬさまにあれはてし處々に神の御社なともかたはかりなる中にかの宮にまうてゝむめの咲たるをみて

京進之内

里ふりぬなに中々の梅かゝは春やむかしも忘れぬる世に月うちくもりさすかに梅もうちかはれる折ふしにうちくもり置にたる月影にはるのものそふ梅の下風

宗祇のかたへつかはしける

こしの空いや遠さかる傳もうし鴈は秋ともたのまるゝ世にとしゝの節會には禁中の御かきのもととなにたゝすみてまつりことのおもむきなとおかみたてまつりしに公卿殿上人などのなれたてまつりしも思ひ出て戀しきに世をはやうしたまう人もあまた傳へきくにまたおなし世におはするも都の外所なるをおもひやりて

この比の月こそあらめみし友を霞へたてゝすむ世なりけり春のはしめ空さむく前の河邊も永るてむかひの峯は雪ふりかゝり春ともおほへ侍らねは

春とおもふころの外に色もなしみきはの氷みねのしら雪曾祖父貞範建武二年藏人になりてふた月はかりみやつかへけるころみちのくにゝゑひすのをむきたてまつりけるしつめにつかはされければ藏人を辭申てか

ふむり給はりて左近將監にてくたりていくほとなくゑひすをせいしてかへりいりけるに賞はのそみにまかせんとの給なりけるに昇殿を申ゆるされてありしとなどおもひいてゝ

京進

よもきふや枯にし跡のひこはへを我身に頼む春をまたるゝ

かくて其年のくれにわつかに箭をたまはりける。みやこにすみ侍りし比世間みたりかはしきによりて主上仙洞室町殿にすみわたらせ給ける比大夫判宮みはしのもとをまかり過とて折たるよし申て橋のえたにつけて

政行

三馬堂

咲匂ふ花たちはなも君ならて誰にみはしの梢ならまし返し

たちはなの匂ひも深きなきけにてけふを昔とのちは忍はん心敬法師の違忌に對橋問昔

墨染の袖のかたみの夕かせはけふのむかしをさそへ立はな

月前郭公

郭公かたらふ月もそれなからみし世の人はいさよひのそら秋のはしめつかた音響上人へつかはしける

この里をいく田の杜の陰ならは秋はいかにと人もこそとへむさしの國としまといふ郡に入江かけたる所に住侍りけるまへはよし蘆なとしけりて鹿のつねにたゝすみける山とをき所なればめつらしくきゝるまゝにちかきあたりに都人のくたりて住けり夜ふけはめさましてきゝたまへと申つかはしたるによなく枕をそはたてけれとも聞侍らす人の聲なとのとをきを聞なして申にやとかこちをこすとして都人のうた

曉のふなもよひするあまの子のかひよといふを鹿と聞らん
返し

軒ちかく鹿立ならす宿とひて侍しよころのかひよともさけ
守實より九月盡菊をくたさるとて

けふのまの花とはかりに君もみよ此一えたの秋のこゝろを
此御返り御つかひをまたせて

菊に君かなさけをおりとめむ秋こそけふに暮て行とも
しも月廿三夜ふけ行けしき松のあらしとしほのみつ

にこゝろすこくて
月まつとおほえす更る冬のよのしほにことふるうらの松影

ともたちなりける人かみつふさにまかりて久しくた
ひねしけるにつかはしける

しも拂ふしるの浦風身にしめてうなかみかたに月をみる覽
四品なとゆるさるゝ事三代中絶しにわつかに叙爵

のまゝにて年をへけるをを歎きて百首歌よみし中に
おち瀧つ渦まく水にゐるをしの浮てそ廻るのほる瀬もなく

ある人の旅にまかりたる宿に時雨ふる夜とまりて
心あるやとのかたみの板ひさし時雨ふるよそ思ひしらるゝ

八月の末ばかりこそこの逢見をめしなと申つか
はすとて

なかめわひぬ新手柄のきぬゝに露かけそめし有明のそら
都にすみ侍し時一條攝政家御歌合に閑庭虫

日くるれば虫のねきをふ心地してあさちかたよる庭の秋風
逢恨戀

あひ見ても有しつらさをかたる夜は枕ふたつの中河の水
殿下をはしめたてまつりて各なのめならす褒美し

たまひしなり。

和哥所御哥合に哥たてまつるべきよし仰られしかは
よみてたてまつりし内戀東西人

逢坂京のこなたかなたに契りきて行もかへるも人や恨みん
攝政殿をはしめ申てみな感嘆なされし。おもひて

になん侍りし。
三位入道常關許に暮秋山

京小松原おはなましりの山のへに波こそ末の秋かせそふく
大納言持爲卿ことの外褒美ありしなり。

初秋月
くる秋をまちとる桐のはつ風に木の間もとむるよひの月影

招月庵正徹書記感嘆ありし哥なり。このほか所々
にての哥あまたあり。しみなもらしにけり。

石山の座主の坊に杲守僧正の花をうへ給て
年をへはたかうへ置し木するとも知られぬ花や庭にのこ覽

とありし櫻のさかりにむかしのあはれにもよほされ
かりまかりてよめる

花さけはたかうへ置し梢をとたつねみる世をなと恨みん劔
千首哥すゝめて人の太神宮にたてまつりけるに花

しら河やさくらを春の關ならむこれより花のおくは有とも
みなみのはてにいつくともしらぬ山陰のやうなる處

よりけふりのたつをみて大原山などの面かけうかひ
て

大原やすみやく色にまかへつゝたかかくれ家に眞柴たく覽
山舎烟なといふ趣のあらん時あらはしたくそ侍る

冷泉大納言入道兼頼遠忌に

さても世に人はふりにし長月の時雨はかりそ廻りあひぬる
平常縁百ヶ日に

三嶋法樂之内

我君のはつもとゆひの黒髪よ千世ふる霜のしらかなるまで

豆州主君様御理髪申侍りしことをよめる

よそなからつねは申かはしける人のもとへはしめて
まかりて庭松

袖京かけてけふそめなるゝよそにもも風のつてきく庭の松かえ

京進不入入哥。題次第不同。

早春

きのふこそ忍の岡の春の色世にあらはれて立かすみかな

梅

誰か袖にちきりをきてかむめの花夕の空を匂ひゆくらむ

梅浮水 竹間聞鶯

瀬をはやみ流るゝ水も心してしはしさかまく梅の一ふさ

吳竹の葉分のひかけもるかたにえたうつりして鶯そなく

花盛 花薰風 歸鴈

花さかり山のならひは風さえて下おれきかぬ雪の暮かな

吹風のいどによらるゝ物ならは花の匂ひやくりためてみむ

夕暮の軒端にちかく亂れきてしのふにすれるころも鴈金

夕雲雀 燕 晴天歸鴈

すたつ子にはねならはせて夕暮の空にひはりそ諸聲になく

羨やまし古巢ふるさぬつはくらめ人は人をも忘れぬる世に

月きよみ秋もわすれぬ中空に行かたかはる春のかりかね

春曙 野亭草

みなせ河山もとしらむ波の上に夜ふかくかすむ有明の月
春雨の名残つゆけき木のまより明る光を花やそふらん
いつまてか草はかりの枕をもとはれぬのへの春にくらさむ

暮春曉月

散花はかせにつけてもかこちきぬ春はやよひの有明の月

郭公

深山いてゝ天つ空ゆくほとゝきすつはさやすめよ宿の梢に
ほとゝきす雲のかよひち吹とちてしはしとゝめよ雨の夕暮

庭橘 梢蟬

夕かせは松のうらやむおもかけに花立はなの雪はらふらむ
陰くれて梢いろくこく残る目をおのれ染ぬとせみそしくるゝ

江螢

夏かりや入江のあしの又はへのみしかき夜半に行螢かな

夏草

露散てむしの音ましる草村はしのひて秋やかよひきぬらん

深山納涼

さゝの葉に霜こそあらね短夜をいつとみやまの月の下かせ

月前雪 獨惜月

よしの山有明の月にならひきていさや白根の秋のはつ雪

傾ふけはみるおに月を慕ふよにあらましかはの人そ古にし

山家月

秋行はかつちる山の下庵にこの間もりそふ月をみるかな

としをへてしめつる山の下庵に心ありても月はすむらん

紅葉

薄霧にゆふ日のなこり照そひて松の色こき峯のもみち葉

立田姫そめすは露のはへもなくふる葉乍らや秋の木からし
過やすき時雨をとめて岡のへの梢にみする秋の明ほの

秋別

歸りこむほとをはいつとたのめともあきやは人に夕暮の空

秋漸暮 暮 秋

よなく影ほのかなる長月の月をさそひてあきや行らむ
朝なしくくるゝたひに染まざる草木につけて秋を暮行
虫のねも野への眞葛もかれはてゝとまらぬ秋を我を恨むる

暮秋思人

行あきに衣々ならふ有明のあかつきばかりうき身ともかな

初冬 落葉

年の内にふたゝひかへて立田姫そむるころもに冬は來に鬼
神な月はるてふけきのうすくもり霞とみればしくれ來に鬼
あし引の山したかせの吹上に雲のはかけて散梢かな

千鳥

から衣うらさしくくす夕しほにさはく千鳥の跡のしらなみ
軒ちかく夕しほのほる川くまに浦よりかよふ千鳥鳴なり

雪 松雪

花の色月の光にたくへしは消てはへなき雪の明ほの
松の葉に氷もとめぬしら雪のなたれておつる夕暮のこゑ

冬嵐 冬掃衣

ひとときほひうすまく雲のゆふあらしいつれの峯に霧を吹覽
神無月松かえしほる木枯はこの葉みたれし夕くれもなし
冬ふかき月はみなからうき秋をわすれかたみの衣うつ也

七夕別

七夕のわかる、袖のなみたをや水上ならむあまの河なみ

草花色々

石山法樂

をみなへししをに朝顔藤はかまいつれを秋の色としもせん

掃衣

月下掃衣

手枕のすきましらする秋風におとろかされて衣うつなり
衣うつひきき袖の露ちりてかたしく月の宿そあれ行

南北掃衣

霧隔船

梅のはた咲ちるえたはかたを分夜さむはおなし衣うつ也
こゝろしてかちこたへせよ夕きりに行かた見えぬ波の友舟

秋山 秋橋

もみち葉の色にわかる、山松はみとりなからや露のそむ
秋をまつ逢瀬やいつこ山おろしに紅葉をかくる波のうき橋

遠草虫聲

暮にけり所定めぬむしのねにわけこしかたは霧かくすまで

山家聞虫

高低月

とふ人をしはしと思ふ柴の戸に心もしらぬ日くらしのこゑ
かせしほる外面の竹は末ふして松のみたかきにはの月かけ

忍戀

苦しさをしめてもたへしあちきなく我身獨の浮名なりせは

祈戀

初瀬河かへらぬなみに物おもふ心をすつるみそきをやせむ

連夜待戀

こよひかと月の姿のかはるまで頼めぬ空をなめなれぬる

忍草縁戀

色かへぬ松や檜原のしる人をまつたつてそ三輪の山もと

俄初逢戀

逢夢戀

おほるけに朧月夜のためしとはたのためぬ空にしく物をなき

夢のうちの夢のたはふれ夢ならて慕ふ衣々なとうつゝなる
思

うちなひくお花かもとの草の名はなを枯やらぬ秋の夕しも
いつよりか人のつらさの種そへて尾花かもとの草をつむ覧

寄露戀 寄關戀

秋の色になへての草もかこたれて袖のゆかりや武藏の、原
面影は身をもはなれすなれゝて別れしかたはしら河の關

寄獸戀

小車のわすれはてしと忍ふまに牛かふほととの庭のよもきふ
袖のうへにひのくま河は流れても水かふ駒のかけやなか覽

寄扇戀

たつねても又や櫻のみへかさね霞める月の行衛しらねは

旅戀

出てこし程は雲井の有明にさそ今こむとなかめわふらん

恨 追日増戀

かけはなれ思はぬ人はつらからす辛きも契うきもなくさめ
松のみか時雨もかけし袖の上こゝろのいろのあさなゝに

曉嵐 晚汀筏

ふかき夜のね覺の枕そはたてゝよもの嵐をきゝあかすかな
筏士のつなくねりそもくたけよと汀におつる夕あらしかな

夕 雨中綠竹

のき近くねくらの鳥はしつまりて竹ふく風の夕くれの聲
をやみなくみとりを洗ふ雨の中にもとの色をふ庭のむら竹

山家

山人のゆきゝとたゆる朝夕は雲のみわたるまへのたなはし

關旅

逢坂の山の山守いとまれや關の戸さしを御代にまかせて
ふるさととしたふもかりの世中に草の枕のなとうかるらむ

曉鶴 江雨鸞飛

霜まよふ空にしほれてなく鶴のまくらにおつる曉のこゑ
こと色はふりくる雨にくれはてゝ入江を渡るさきの一つら

梢猿

みねの松のほりつくして鳴さるや月の桂に枝うつりせむ

閑居

莓むしろしかし浮世は獨りてちりをもすへぬ庭の松かせ

述懷

仕へつゝ榮へし方も忍はしよ道はありても身ををろかなる

濁るとも世をは思はすをろかにて心つからの身をを恨むる

愚かにも思ひは捨したらちねに受る此身ををのつからなる

寄浦祝

二道にわかれしわかの浦千鳥君か八千世にこゑかはすなり

右孝範集未得異本無由按正姑傳疑以俟他日耳

常縁集

春

初春霞

あしひきの山の嵐の朝な／＼よはれはかすむはるの色かな

霞

をちかたの山のたかねをはしめにて軒はに近く霞きにけり

山霞

春のくるいつくはあれとあしひきの山よりしるく立霞かな

子日

梓弓はるの子日にひく松やかはらぬ世々のしるへ成らん

若菜

きみをおもふ心はおのか爲そともしらすや賤か若な摘らん

田若菜

若なつむ賤かゆき／＼の跡ならんかへさの小田のあせの通路

鶯

春なから氷は結ふ谷の戸にとけて音にのみ鶯そなく

春雪

昨日けふと消るをみればふりそめしたかねに歸る春の雪哉

かきくもる空とはみれとふるほともたまらぬ物や春の淡雪

題しらす

きさらきや猶も雪消の雲まよひ花にはふかぬはるの山かせ

梅

咲花は千種にあれとこのころの梅の匂ひにしく物はなし
行末の春をしらねは梅のはなおいの爲にと猶匂はなむ

梅の花春にかはらぬとはかり色をともしはなさしと思ふ

梅風

とりとむる物にもかなや梅か香を枕のうへに過るはるかせ

梅花夜薫

誰か又枕にすきて思ふらん梅か香匂ふ床の小夜かせ

梅久爲春友

なれきつる春を幾世の末かけてかはらぬ梅の匂ひ成らん

梅欲散

散ことは風た／＼ぬまを待はかりうつろふ梅のはなの色かな

柳

かせた／＼ぬ朝けの庭の青柳もひかけに露のたまらさるらん

柳露

こきちらすかせや吹らむ青柳のいとにたまらぬ露のしら玉

門前垂柳

朝またき分入人の跡しなく露うちばらふかと柳かな

春雨

あふきみる心を花に先たて／＼今日もや雨になかめくらさむ

待花

つれもなき花に心をさきたて／＼いくたひか／＼る峯のしら雲

いまはとて心いくたひ通ふらん花にさきたつみねの白くも

世を捨て住身を人のとひやせむ花さかぬまは三芳の／＼おく

雨中初花

わきてなを雨もや花をいそくらんよそに先たつ庭の一もと

あすまではまたれしとてや春雨のけふ降そらに花の咲らん

朝花

あさな／＼雲たちをひて小倉山みねふく風は花の香をする

題しらす

ひのひかり月の影をも朝夕にそふるとみゆる花さかりかな
夜花

春のころ故郷にかへりて

うかりつる昔のたひもふる里のことしの花に猶やわすれん
霧こめし秋の月こそよそならめかさしに匂へふるさとの花

故郷夕花

世は何と移ろひかはるふる里のむかしなからの夕くれの花
題しらす

歸りこん君か爲とや古里の花も八重たつ錦成らむ
うき世とていてしとやおもふ山櫻春のいくよを冬籠して

栽花

うつし植る花や咲らん山里の軒はにつくみねのしらくも

春植物

山さくらあかぬなかめにくるゝ日の心や花の陰にとまらん

落花

もろく散花もやおもひなくさまん終にとまらぬ習あるよに

落花滿庭

降雪にうつもればはてし庭またゝ花散はるの暮方の宿

遠歸鴈

みるまゝになをかけ消て遠かたの霞めるそらにかへる鴈金

歸鴈運雲

春の鴈分入末もしらくもの重るそらに音をや鳴らむ

春月

すむ影はそこともみえず天のはらおなし雲井に霞むよの月

へたてゆく昔の春も月かけは分ぬこゝろになと霞むらん

美濃守なる人尋わたりて哥よみ侍しに

あふきみる心のまゝにくまそなきそら行月の天津はるか

故郷春月

月ならてむかしの春の面影は有としもなきしかのふるさと

歎冬

山吹の花なる露やいひ出ぬおもひにうかふなみた成らん
こゝろこそ行衛もしらね山吹の又咲までの春をなかつて

河歎冬

山ふきの花のなかるゝよしの河とまらぬ春のしるへ成らん

古詞歎冬

やまふきの色より外もいにしへをいはて過ぬる志賀の花園

松下躑躅

色にいてぬ松のおもひや下露に濡るゝつゝしの心成らむ

藤

かけうつす軒端の藤やむらさきの色によりくる池のさゝ浪

松上藤

暮て行春より外は年経てもいろにはいてぬ松のふちなみ

暮春

今はとて古巢にかへる鳥の音や暮行春のとまり成らむ

今はとてくれ行春を東路のかすみの關にとゝめてしかな

夏

更衣

人もなをきかへまおしく思ふらむ花になれこし春の衣手

餘花

春くれしおもかけなれや夏山の青葉に残る花の一本

新樹

雪にたに埋もれはてぬ松の色をおなしみとりに茂る山のは

卯花

草も木もかれぬをうつむしら雪や卯花咲るまき成らん

卯花似月

夕暮やかたわく月の影ならむ卯花かきのさとの一むら
卯花のさくをみなから暮ぬれは月の影わく里のひと村

社頭卯花

朝ことにかけぬもしけきしらゆふや卯花咲る神垣の内

田家卯花

卯花の咲る田中のかきねにはまたしら雪の消ぬとそみる

葵

神山にいつひきそめて葵草けふもかはらぬかきし成らん

漸待郭公

夏山のこするを深みほとゝきす初音も今はせとそまたるゝ
つれもなき名をやおはまし郭公をのれ鳴へき比は來にけり

待郭公

月にたになく音つれなき郭公たれにまたれぬ恨なるらむ
月夜よし夜をさへあかす郭公なく音をしるて誰にまたれん

久待郭公

ねになきておもひも出よ郭公またれしほと跡の日かすを

郭公

一聲におとろかされて曉のまくらにまとふ山ほとゝきす
足引の山たちはなれたかさとのねさめをかけてなく郭公
待との心よはくはほとゝきすあり明のそらの今のひとこゑ
影ふけて月にまといふほとゝきす明やすき夜のうらみ成らん

曉郭公

在明の月を残して足曳の山ほとゝきすいつこにかゆく

郭公數聲

かすゝのをのかなかねに思ひしれするさつきの山郭公

閑居郭公

ほとゝきすこゑやまきるゝ友ならん有とは見えぬ草の下庵

盧橘

いにしへは忘れぬものを立はなの花に思へと猶匂ふらむ
わすられぬ心をなをやさそふらんむかしに匂ふ軒の立花

早苗

さなへをは田つらの雨にとりわひて賤かたもとや濡増る覽

早苗多

浮業と思ひや知らぬますらおか小田の早苗にけふも暮しつ

民戸早苗

ひき植る門田の早苗けふよりやまちかく馴て秋をまたまし

五月雨

日影さへもらぬきつきの空の雲雨はいつこをよきて降らん
つなてひく淀の河舟いたつらにのきはに繋く五月雨の比

みるまゝに猶かき曇り入相のかねよりくるゝさみたれの空
入相の鐘にやしらんくるゝ日の影もみ分ぬさみたれのくも

山河や岩こすなみのをとしくはれぬたかねの五月雨の雲

降初したかねの雲を其まゝに晴間もみえぬ五月雨の空

入相の聲より暮てけふの日ももる影見えぬ五月雨のくも

五月雨久

かきくればかねの雲もさみたれの空に重ねてふる日數哉

夏月

入相の鐘きゝて、みるほともあらずかたふく夏のよの月
いくたひか明やすき夜と恨きて月にはあらぬおもひ成らむ
夏ふかみ軒端をかこふ蓬生にみしよ戀しき月の影かな
轉寝の夢もむすはす枕にもいさとにふくる夏のよの月

樹陰夏月

立出てよそにやとらむ夏の夜の月にしられぬ木の本の庵

夏草

紫のおなしゆかりとむさし野の茂る草葉にわくかたもなし

庭夏草

あさちふの淺からぬ夏の色より庭に人めの遠さかりぬる

夏地儀

茂りあふをかやくれを行水の有とはみえず音ばかりして

鵜川

よなくに鵜河のかゝり焼わひて心の暗や猶かさぬらん

むくひある我後の世や篝火のうかはの波の底に燃らん

哀なる夜半の鵜舟のかゝりかな心の暗のあかりならぬは

螢

草ふかき賤か仕家はをのつからすたく螢やともし成らん

水邊螢

早河の水にもよれて石の火の打いつるか飛ふほたるかな

叢螢

身をかくす宿やなからん茂りあふ草むらことにもゆる螢は

夕立

あしひきの山の尾上を隔にて夕立くもるをちのひとむら

かせさはくたかねの雲をはしめにて軒はおほふ夕立の雨

蟬

吹かせや空にかよへる夏山の峯よりたかき蟬のこゑかな

納涼

山陰の茂みか下に吹風はよそにしられぬ秋かとそおもふ

秋

初秋

草も木も洩ぬ思やはつ秋の桐のひと葉に雨そゝく暮

初秋風

落初る桐のひと葉の音なからやかて身にしむ宿の秋かせ

いつしかとこゝろの底にこたふらむけふくる秋の萩の朝風

早涼至

秋きぬとおもふ心をしるへとやけふふくかせの涼しかる覽

七夕

あまの河何につゝみを棚機に秋よりほかはたかくみるらむ

待七夕

銀河あふせそなをもいそかるゝたなはた妻の心つくしに

乞巧奠

男星のくへき宵とやさゝかにのいとしもことに引や添らん

萩

踏分てことゝふ人のたのめねは秋かせならて庭の萩原

身のうさは秋の夜ならぬ時もあれとあかつき遠き萩の上風

閑庭萩

をのつからなひくを風のやとりそと思ひなさるゝ庭の萩原

萩

心ある人の行衛の跡ならん野はらのわきてはきの下道

萩露

色かはる秋の眞萩をもる露や錦をあらふ雲なるらん

かせたにも音せぬ宿の夕とやをく露ふかき庭の萩原
分ぬれし小鹿の跡かひとゝをり花に露なき秋の萩はら
打わひていくたひ露をはらふらむうつるふ萩に秋を恨みて
行路薄

女郎花

明なはとしめをく野邊の女郎花うしろめたくや露こほる覽

露

袖をのみ宿とはしらて秋くれはのにも山にも露みたれつゝ

題しらす

桐の葉に秋かせ立て道芝の露もおもひもふかき比かな

秋夕

つれなくもなからひにける我身かな人さへつらき秋の夕暮

秋夕風

夕暮もかせもなれにし物ならずおもひなさるゝ秋のそら哉
更になと露をは袖に残すらむとても身にふく秋の夕かせ

題しらす

なかめやるほとは千種のイに雲かけて夕の山の色そかなしき

虫

蛭なく音もしるゝ蓬生の露もたまらぬ庭の秋かせ

鴈

故郷をなれもやおもふ旅枕むすひもあへぬ初かりの聲

初聞鴈

秋かせや身にさむからん初かりの鳴こゑしけし更るよの空

麓 鶺鴒

いつとなく麓のをさゝ色みえて露ふくかせに鶺鴒鳴なり

月かけはたかねに更て明わたる麓ののへに鶺鴒なくなり
うつらなく麓の野への夕暮やなを秋かせも身にしみぬらん

鹿

岡邊なる早田に霜のむすふまでよなゝあかぬ小男鹿の聲
うきとを思ひいてよとさをしかはねぬよの床に音をや鳴覽

遠聞鹿

吹をくる軒の嵐やさそふらんへたつるみねのさをしかの聲

寢覺鹿

山ふかみ峯の嵐のあかつきもおもひしらるゝさをしかの聲

秋田

おしね刈暖かこゝろのくるしさや秋よりのちのたのみ成覽

霧

明やらぬ夜半とやおもふすむ人の立霧ふかき山陰の里

月

夕暮の秋をはたへすおもへともこゝろのくまも月に残さす
人はいさ心や千々にかはるらんなむる月はむかしなれ共
うき秋もなくさむ夜半の月影を千々に誰はた物思ひけん
つくゝと思ひ續けてこし方はけにさそありと月をみる哉

月のすむ雲井に行をはしめにてかたも残さぬ我心かな

すむ人もいかになかくてなくさまむ淺茅か宿ののきの月影

長月の色にも成ぬ松の葉のいつとも分す誰なかむらん

九月十三夜くもるといふこゝろを入々よみ侍りしに

うたてなと今宵のそらの曇るらむ月に名たかき秋も残さす

終夜見月

いにしへをおもふ心のはてそなきなかむる月は影更れとも

月多秋友

秋を経てかはらぬ友や久かたの空行月のひかりなるらむ
秋を経てかはらぬ月にことゝはんたへて我すむ庭の蓬生

名所月

花ちりしうき夕暮を秋かせの月にわするゝみよしのゝ山

河月

山河や岩うつなみの數々にやどりをくれぬ月の影かな

山居秋月

月たにも我うき世をや隔らんもるかけきよき楨の下いほ

搦衣

かせさえてねぬの床の曉をおもひたゆます衣うつらむ

聞搦衣

おもふそよふけ行夜半に衣搦里の淺茅か宿の秋かせ

菊

朝しにもそれともみえぬしらさくの花は日影やしるへ成覽

紅葉

あひに逢て色こそ増れ夕日かけうつろふ山の峯のもみち葉

露ふかく過にし方の梢をも染ての秋の色にこそ知れ

夕紅葉

暮るゝ日のおも影なからたつた山峯の紅葉の色に見えつゝ

暮秋興

今はとて暮行秋を山かけやこの葉に迷ひ小鹿啼らむ

九月盡

秋ははやけふを限としりなから入相の鐘に驚かれぬる

冬

時雨

けさよりや音つれ初て楨の屋の軒にひまなき時雨ならまし

いねかてに更行床はよろつたゝ思ひ殘さぬさよ時雨かな

山時雨

三室山しくれふるらしもみち葉の風に亂れし跡をとひつゝ

峯時雨

龍田山みねのもみち葉散はてゝ淋しき色にしくれてそゆく

谷時雨

谷河や岩とかしはに降しくれふるとてかはる色をやはみる

野時雨

霜かるゝ野邊の眞葛葉しくる共秋の色にはえやはかへらむ

杜時雨

神南備の杜のしくれに行人の袖さへほさぬころにも有かな

河時雨

佐保河の梢のもみち散初てのちはまもなくふる時雨かな

關時雨

須磨の關在明かたのたひ枕なみたをそへてふるしくれかな

里時雨

誰さともしくれ降らし吹かせの行衛に木のは散まかひつゝ

閨時雨

むら時雨ふるや軒はにもる露の閨のまくらに幾よともなき

落葉

露にくれあらしにあけてをのれのみもろき木葉は何を恨む

曉落葉

しくれそと打驚けは板間にももらぬこのはの曉のこゑ

朝落葉

朝とに木葉の深くなるまゝにとはれぬ暮そおもひわひぬる
夕落葉

木枯のこのは吹まく山陰のゆふへをみても人の難面き
山落葉

あし曳の山のあらしにさそはるゝ木葉や人めまたからす覽

谷落葉

絶々に流れし水の音もせず峯より落る谷のこのはに

落葉混雨

木のはにも雨にも染て龍田姫過にし秋や思ひ出らむ

落葉隨風

いつくとも方は定めず散この葉さそふ嵐のこゑにまかせて

冬木

足引の山はあらしの聲もなし一葉のこらぬ冬の梢に

霜

深きよの庭白妙にをく霜や明ぬとみえし光なるらむ

枯野

野をさむみ秋より後は刈人もかれて懼ふる霜の下草

寒草

さゆるよの枕にふかき雨の音やまかきの草のつらゝ成らむ

岡寒草

霜をわく色なりけりな小笹原をかへの草のかれ初しより

谷寒草

岩かねの苔に霜ふり水こほり谷の戸とつる山かせそふく

野寒草

一本も残る色なき武藏のや草はみなからしもかれにけり

原寒草

草のはら下葉残らす霜をへて小笹ならては風も聞えず

庭寒草

庭もせに夏はみえつる蓬生のかけあらはなる霜の夕くれ

池寒芦

しほれ葉は水にとちて村芦の色なを寒き池の面かな

江寒芦

枯わたるあしの葉陰は氷ゐて入江の汀なみも音せず

難波えは舟もさはらす成ぬらん枯たつ芦も霜にしをれて

湊寒芦

みなと江のあしの下葉はかけもなし霜に汐かせ氷かさねて

氷

小夜更て氷やすらし山河の岩うつなみはをともしこえす

潮氷

波の音は絶て聞えず志賀のうらや沖まで遠く今氷るらし

瀧氷

こほらめや那智のみ山を流れ出るたきの白浪あらし吹とも

谷氷

驚のなみたの氷とちそひてさそなと思ふ谷の戸のうち

田氷

水こほりあらしまもなき小山田の庵のかよひち逢人もなし

懸樋氷

絶々の懸ひの水も氷る也いかゝはすらんやまに入ひと

冬月

くもるへき影とはみえす山たかみあらしを分る冬のよの月

冬月寒

ねられめや月はみすとも木からしの聲より後も霜氷るよは

冬澤月

茂かりし草に霜ふるよなくは野澤の水に月ぞ澄らむ

千鳥

霜さゆる老のまくらにねをそへて啼は千鳥のいつを戀らむ
我のみとおもひやすらん啼ちとり河邊の風のさゆる夜の床

曉千鳥

河かせもなく音もともに小夜千とり曉かけて猶も寒けき

夜千鳥

小夜深くねさめさりせは千とりなく河邊の哀思ひしらめや

池千鳥

氷ある池のみきはを浪のよる濱の眞砂となく千鳥かな

河千鳥

やむこともなくて幾夜か佐保河のなみに濡つゝ千鳥啼らん

汀千鳥

水こほり月の流るゝ汀にておもひかねてやちとりなくらむ

浦千鳥

こよひもや妻を見ぬめの浦かせに浪をかたしきちとり鳴也

濱千鳥

松にふくかせは氷で千とりなくはまの通路あふひともなし

冬動物

さゆるよの霜のふるとさまゝにおもひ残さすなく千鳥哉

水鳥

夕暮の外にねくらやもとむらむさゆるなみ間にさはく鴛鳥
おもひしりぬすむよの程ををし鴨のたかせの浪に浮沈とは

網代

あしろもる枕はさそな田上の河かせさえてふくるよのそら
網代守いはねの床も敷妙のまくらもさそな宇治の河かせ

夜網代

衣手の田上河のあしろもり我こそならめ月をみるへく

網代寒

あしろ木にいさよふ波のそのまゝに氷てさゆる宇治の河風

霰

烏羽玉のよはの霰はまはらなる檼のいた屋の床のさむしろ

寢覺霰

あかつきのねさめはなれぬ霰ふる檼のいた屋の枕ならねと

屋上霰

芦ふける宿の軒はにふる霰をとにはたてす冬のけしきを

篠霰

玉さゝは霰ふる日の名なりけり冬のみ庭に植てみましを

竹霰

吳竹にあられふりくる夕かせはたまをあつむる窓のうち哉

柏霰

しらかしの枝にも葉にも風こほり霰降くる山のおくかな

初雪

時雨ふる行衛の雲に山かせのさえしやけさの庭の初雪

雪

心なき峯のあらしよいかならん雪にみそむる松のひとむら

遠かたの山邊の雪や積るらむあさく成行木々の下陰

山たかみあらしや絶すかよふらむつもりもあへぬ松の白雪

花にすぎ紅葉に暮れし恨をも埋むは雪の明かたの山

曉望雪

宿の戸を明ぬとみれば更る夜の軒はの山に積るしら雪

朝雪

散花の梢にかへるころかなみねのあらしの雪の明かた

山雪

雪のふるいつこはあれと久方のふしのたかねの明ほのゝ空

遠山雪

我宿のまかきを見てそしられる道へたてつる山のしら雪

峯雪

冬ふかみ峯にも尾にも雪ふれば待人もなし誰をとほまし

谷雪

くるとあくともかれぬ谷の岩の本雪に光のある心地する

柚雪

柚人のとらて残れる梢とてやすくはみえぬゆきのこのころかなイ

杜雪

今やまた生田の杜の千枝にさすそれもひとつに雪の降らむ

野雪

冬ふかき野はらの草や降雪のつもるにつけて春を待らむ

野邊みれば雪をひとつにいろゝの色は残らぬくさの上哉

關雪

關の戸は鳥の音よりも先たちて雪に明行相坂の山

河雪

いたつらにふるとそみゆる飛鳥河水をはよきて積るしら雪

湖雪

鳩の海汀のこほりはるゝと雪にきこえぬなみのをとかな

浦雪

浦風によりくるなみの音はかりつもれる雪にかはりぬる哉

濱雪

吹上のはまの濱かせこゑ満れてけふもしら雪積ぬるかな

嶋雪

すみよしの松のあらしの音さえて淡路の嶋に雪をみるかな

田雪

秋風に立し穂なみのおもかけはさすかにのこる小田の白雪

都雪

大ひえやをひえを雪のはしめにてけふは都の庭になかむる

禁中雪

百敷や衛士のたくひも打しめりゆきに眞砂の色もわかれす

社頭雪

祝子かいをかきをしむるみしめ縄ゆきはへたてぬ色に降つゝ

古寺雪

ふる雪の積れはかねの響さへよそに尾上の小初瀬の山

故郷雪

ふる里のよしのゝ宮は今もかもみしよなからに雪は降つゝ

里雪

山さとはとふ人稀にしら雪のけふも降しく庭のおもかな

閑居雪

住とたに人にしられぬ宿なれと冬は來にけり雪の降ぬる

旅宿雪

分きつる道のほとこそしられられ宿の夕に積るしら雪

竹雪

夜なから竹の林は降雪のつもれるほとこのゑにしらるゝ

松雪

高砂の尾上の松にふる雪をうらよりかよふなみかとそみし

杉雪

かせもなく横河の杉は雪とちて木の下庵や佳よかるらん

檜雪

卷向のひはらはかせもなかりけりゆき折しけく聲の聞ゆる

冬 夕

みるまゝにとはれぬ庭の夕昏を雪もこゝろとふり積りつゝ

冬 山

所から冬の空をやいそくらむ雪にみそむる越のしら山

冬 里

愚にて住よのほとやしるらん雪に跡なき里のかよひ路

冬 禽

雪をもる園生の竹にしられけりねくら求むる鳥のこゝろも

冬 獸

紅葉さへ踏分わひし小男鹿の雪に鳴ねをなと絶ぬらむ

夕鷹狩

みかりはや雪うち散て寒き日のかたふく方に鳥立をそみる

野鷹狩

今もなを嵯峨のゝ雉子音をそ鳴みかりせしよや思ひ出らん

狩場風

檜柴の木からし吹てけふも又交野の原に狩暮にけり

炭竈煙

すみかまの煙はかりに立のほり風なき山にゆきの積れる

遠炭竈

立騰るけふりあらすはみやま木の陰の炭かま誰かしらまし

爐 火

いつかぎて色にも出む埋火のかきあらはさぬ下のおもひを

あらしふく冬の枕もわすられてのとかにあくる埋火のもと

神 樂

大内や霜に月さへ榊葉をうたふこゑのみそらに聞ゆる

年内早梅

雪降て年はいくかもあらすとや匂ひにしるき梅の咲らん

佛 名

年暮てみよの佛の御名のこゑ又きくはかり積る日數歟

年欲暮

影こほる月は幾夜もあらしかし霞める空に年の移らは

惜歳暮

行年のをしきのみかはわすられぬむかしの遠くなれる心を

夜歳暮

一年はひとよ計の手枕に残れるゆめのおもかけそみし

老後歳暮

年くれぬ又や我身の老のなみ立かさねつゝ春に逢まし

山歳暮

あしひきの山より年は暮にけり松をむかふる人のゆきゝに

河歳暮

飛鳥河なかれてけふそ年くるゝ昨日にかはる思ひほとなく

路歳暮

たまほこの道ゆき人のけしき迄年の暮こそしるくみえけれ

山家歳暮

松むかふ人しあらすは山ふかき庵りに年の暮をしらぬや

閑居歳暮

つくくゝと眺めし折の積るをも年のくるゝに思ひしりぬる

歳暮松

春のくる門に千とせをむかふとて年の暮には松をとる也

除 夜

鳥羽玉のひと夜を春に隔てはなをあやにくに惜き年かな

戀

初戀

つくはねの峯の木の間_に落初る水や我身の思ひ成らむ
よそ乍ら人にこゝろをかけ初てけふより後の思ひにやせん

忍戀

心からおもふなみたのさのみなとつゝむ袂にたまらざる覽
人しれす心にたにも難波なるみつとは更にかけしと思ふ

忍親昵戀

さねかつら末葉にむすふ露かけてもとつる人の在と知れし
題しらす

題しらす

春くれば咲ぬ千種の花もなし思へこゝろのしのひかたさを

聞戀

偽のことはなからおもふそと人の心をきくよともかな
いひ侘てつらき心の有とたにまたきゝあへすぬるゝ袖かな

見戀

朝夕にみるめばかりを浦かせにたゝふなみや我身なる覽

せめて思ふみるめの浦による涙のよせてかひなき心成とも
難波江や青岡をわけてみつ汐のみるめに思ひ増よ成らん

あしへよりみちくる汐にあらねともみるめに増る我思ひ哉

忍望戀

もらすなといひしを今は我からの心よはさにおもひ侘ぬる

待戀

つれもなく思ひよはらぬ心かなまつよの床の在明の空
まちなれし夕の鐘のこゑなからたのめぬ床も塵拂ふらん

毎夕待戀

待なれし入相の鐘やさそふらんだのめぬ暮に思ふこゝろを

待空戀

打侘て今宵も又やまつことを入こゑの鳥におもひ絶なん

題しらす

たのめてもとはぬ心は誰かしらん待夜いはてそうきも泪も
哀にもまつよを残すこゝろかなかせのことゝふ窓の吳竹

初逢戀

年月をつらさひとつにつくしてもあふ手枕はもの葉そなき
嬉しさのあまり成らん新まくらむすふたもとにかゝる涙は

別戀

わかれちのおもかけなから有明の月はつれなくなと残る覽

惜別戀

わかれちに更行夜半や曉のかねより先のおもひ成らん

後朝戀

夢ならは覺る枕や頼まゝしおもひにたとる朝の別路
契れけさ逢もおもひのほかなれは又行末もいのちならすや

逢不會戀

しらさりしこひしとはかり一かたに逢ての後に思ひ有とは

題しらす

思ひいつやあなしの山の山かつらかけてつきせす歎く心を
わすれすよもすの草き霜かれに跡ものこらぬ契はかりも

遠戀

わするなといひつる人のことの葉もいさしら雲の遠方の空

旅戀

かへるさそなを急かるゝ古郷にありて別れし人をみんとて

恨戀

こゝろ共なりける物を眞葛はらことゝふかせのすこき夕暮

わすれ行人に我身のつらさをも思ひしらするうき世共かな
たのまはやまつよの床に偽の露の情のこゝろ成とも

互恨戀

をろかさを恨る人のこゝろをは絶てののちや我もかこたむ

互恨絶戀

朝露のさえぬは有と恨しやおもひ絶へきはしめ成らん

恨絶戀

さりとともと思ふ程こそつらさを猶こりすまに頼よもあれ

戀天象

在明のつれなき空やよなくにまちもよはらぬ心成らん

戀地儀

たのむそよ人のこゝろの行末に氷とけ行山河の水

冬戀

降雪にとはぬとみえて偽の人のこゝろもうつみやはせぬ

寄雨戀

つれもなき人もさすかにおもふらん夕の雨のつらき心は

寄里戀

ゆきかよふ心へたつなあしひきの山より遠の里にすむとも

寄草戀

かくてやはふるされはてん忘草うへしを人の心ならねは

寄鶏戀

あふ坂の夕附鳥の聲よりそうきといはるゝ曉のそら

寄鐘戀

たのまれぬ人のこゝろを恨てもさすかまたるゝ入相の鐘

寄枕戀

さりとともあふ夜を頼むおもひねの枕は夢をさそはさる曉

打佐てぬる夜とならば現をもまぐらの夢に残さすもかな

寄衣戀

ちきりつゝ送りしほとのを経はこよひや中の衣かへまし

寄床戀

年をへてとはれぬ床の塵ならてつらき心やなを積るらむ

雑

曉

をのつからさむる夢路や更る夜の鐘より先のしるへ成らむ

關路雲

關の戸や今明かたに成ぬらむ横雲ふかしあふ坂の山

橋

住すてゝ誰又とはぬ山ならん苔に跡なき谷のかけはし

橋 苔

すゑ絶てわたらぬ先にあやうきやこけのみふかき岨の梯

湖水眺望

行舟に俤はかり唐崎の沖津夕に残る松かせ

夕陽映嶋

浦かせも猶音さひて殘日の日かけにむかふ淡路しまやま

鹽屋煙

蘆の屋のもしほの煙たゝぬ日も猶やすからす世に住ふらん

草菴夜雨

心からすむ身なりとも夜の雨はさそなすかの草の庵を

鶴聲近枕

かせわたる蘆間の鶴の啼聲にぬぬよの床の心をそしる

遠寺晚鐘

絶々におのへにひゝく入相や寺あるかたのおくの山かせ

田家老翁

昔をあらみ小田もる老の心にはなをたへかねて露はらふ覽

山家

松の風谷の流れの音ならてきゝこそなれぬやまの下いほ

あしひきの山下陰やをのつから花にまちかくなれて待らん

山はふかく心はあさき恨のみいつとも分ぬまつの戸のうち

山家人稀

踏分ぬ苔路におもひしられけりとはれしほと山陰のいほ

山亭人稀

ふみわけぬ岩根の苔のかよひ路にとはれぬ山の程はみえ晁

山家述懷

浮世とていとふこゝろに任せつゝ雪もあらしも山もとの庵

述懷

をろかなる心の程ををのれのみおもひしらぬや浮世なる覽

愚なる身を知ながら世中の思ひにたへぬことそうらむる

年たけてなを愚なる心ともいはてなれこし人もはつかし

つくゝと身を思ふ時そ恨なる人やはつらき世やは悲しき

獨述懷

よろつたゝおもふに絶ぬ世中は我身ひとつの爲ならずやは

述懷非一

今そしるうき身の上のことはりに一かたならぬ思ひ有とは

世中すてやらぬ事のみなけき侍りて思ひつゝけゝる

よしやよと思ひなくさむ折もあれと絶ぬはつらき心成けり

芳野山よしやとおもふ折もあれとこゝろの果を岩のかけ道

題しらす

とはすふる程そとふよも世にあらは思ひしるへき庭の苔哉
故郷にをくるゝ松の色をみてこゝろそつらき明ぬ暮ぬと

齋藤入道忘念に山田庄押領せられし後よみてつかは
しける十首

堀河やきよきなかれをへたてきてすみかたき世を歎計そ
いかばかり歎とかしる心からふ迷ふ道の末の宿りを

かたはかり殘さんことも今かゝるうき身は何と敷嶋の道
おもひやる心のかよふ道ならて便もしらぬふるさとのそら

便なき身を秋かせの音なからさてもこひしき故郷の空
木葉チイふる秋のおもひよあら玉の春をわするゝ色をみせなん

たよりにはあるゝと計聞なれし我古里よいふかひやなき
みよしのとなく鴈金といさきはひたふるに今君によりこむ

今更にたのむにしりぬうかりしは行末遠きちきり成けり
我世經んしるしと今も頼かな美濃のおやまの松の千年を

かへし

齋藤入道忘念

ことの葉に君か心はみつきの行衛とをらは跡はたかはし
かくて山田の庄もとのことくかへして侍りける後い

ひつかはしける

故郷のあるゝをみても先ぞ思ふしるへあらはいかゝ分けこゝ

かへし

忘念

この比のしるへなくとも古里に道ある人そやすくかへらむ

題しらす

寄月述懷

(恐有懸字)

影きよき雲間の秋かせもこゝろのやみははらふよもなし

宗祇法師より和哥の事尋ね侍りけるによみて遣しけ

乙

今更に身のをこたりそしられけるとはすはいかに敷嶋の道
題不知

和哥の浦や江の藻くす拾ふにも猶敷ならぬ色をみせぬる
宗祇法師都へ登りけるを餞しけるついでに

もみち葉のなかるゝ龍田しら雲の花のみよしの思ひ忘るな
題しらす

横雲は先立こえて逢坂やをくれてすくる關のたひびと

旅行

こよひもや小萱かもとにかりねせむ末しら雲の武藏のゝ原

旅泊

興津舟あまの浪路はしらくもに漕くるかたや泊なるらん

旅泊重夜

楫まくらうさねの床の数そひておもかけ遠きふるさとの空

佐夜中山にて

月にゆくさよの中山なかゝに明てはくらさきりの下道

永曾路にて

いつまでかかゝるよをしも明じなん床の小庭塵にまかせて

題不知

あつま路や都のそらの戀しさに更てなかむる夜なゝの月

暮わたる入江のなみも捨舟も在とて明日も誰かすさめむ

今朝の山路きのふの野へも忘られて夕波荒き濱邊をそゆく

松しよや小嶋の苔屋くれはてゝなをおもかけに浦風そふく

やよひの末つかた陣に侍る比蒲庵老母身まかりける
をゆかり尋ていひをこせける
道 虎

暮かゝる春に先たつ別路はいつより露の色やそふらむ

かへし

やふしわかぬ露の恵の嬉しきをあふくたもとそ色は猶をふ
題しらす

いつまでか生死のうちを思ひ草葉末の露を身にしらすして
極樂はいかはかりなる光にてこよひの月のうちにすむらん

祝

へたてなき君か恵や直なる世にふる人のこゝろならまし
靜なる世にまた立やかへりなん神ときみとのめくみ盡せず

鶴契齡

あし田鶴のすむよの程に靜なる宿のこゝろを任てそふる
題しらす

苦むしろかはらぬ色を見てもなを行末ちきる宿の若松
北の空七のほしの八百萬まもりとならむ宿はしるしも

神祇

神もさそなかれての世を守るらむみもすそ河の清き心に
妙に見神もうてなに世々かけて直き心にきみ守るらし

山田庄栗栖の社にて

花さかり所も神のみやまかな

宗祇法師

さくらに匂ふみねの榊葉

郡上郡那比の新宮といふ社にて

神もこゝに幾世か夏を杉の杜

みやゐはなれぬ山ほとゝきす

宗祇法師

慕景集

源持資

立春

山かつらいやとしの葉の末かけて霞むかたより春や立らん

庭鶯

吳竹のみとりにはふく鶯の聲も色ある庭のはるかせ

簾外梅花

露ならはみたれんものか玉すたれ月にひまもる梅の下かせ

正月廿日あまり上杉常頼入道京にまうのほりみことのりのかしこまり申のへしとて消息傳へし返しことせしふみのはしに書送りける

ふたつなきをほりしらは武士の仕ふる道はうらみなからむ氷川社奉納の和哥すゝめられ侍りて殘雪といふとをよめる

おいらくの身をつみて社武藏野の草にいつまで殘る白雪

氷始解

今日とても及はぬ筆は塵なからけさはすゝりの海も氷らす

谷鶯

君もさみ臣も臣てふ世にしあらはいかにさなか鶯の聲

二月の釋菜金澤の文庫にて行ふよし三好日向守勝元の許より申こされければ隣家梅花といふ題を聖供にそへてつかはし侍るとて

はななれやよゝ友垣の近きにはとをきもなるゝ梅の下かせ

深夜歸鴈

待花

いさとても枕の鳥のこゑに幾夜やきそふ天津かりかね待あへぬいのちに花をみよしのやよし立かくせ峯のしら雲

朝花

嵐ふく高根は雲の色かへて花よりあくる朝熊の宮

小田原の驛をつとめて已々かへり侍りけるに箱根の別當長巽法師が酒すゝめてあるしまうけしけるとき驛のやとりに花の散けるをみて法師酒すゝめられけるに

思はずよおもひの外に見る花のちれ餘波をなと惜むらん

返し

長巽法師

ちる花の名残をなとかおしむらん心のまゝの春にあふ身は

横見隼人正夢想の哥勸進せられし時夕藤を

紫のゆかりもにくむをほりやわすれてたとの藤のたそかれある人さかしらにて横見氏屋形をおそふなと聞へてけれともはやくより跡なきといちしるくてそのぬれ衣をあらひしあるしまうけのときによみてつかはしければむらさきのゆかりの色なとたはふれてしかなるへし深夜歸鴈といふをを神田の社にておのゝよみ侍るとき

啼つれて聲より聲もますらおの心にかへる夜半のかりかね北條豊前入道則圓主箕田といふ處に山庄めくしつらひ心やさしうしなして伊達忠春二階堂治部大輔など我にしたしきをまねきて百首の哥すゝめられしに峯新樹といふををよみ侍りける

まぢわひし花になくさむ川に又かゝる青葉の峯のしらくも
嘉元元年五月京にのほり侍るに屋形のかしこまり申
のへて阜のみことのりいたゞきつゝかへらむとせし
ころ畠山持國首領へしたしきえにし侍りてふりはへ
て暇ものしにまかりし時今川氏兼朝臣の御もとへみ
そかこと傳へねとてなん御はなむけたひしに駿河の
府にいたりて鵜殿但馬守盛重をして申傳へしに氏兼
朝臣檢ひつゝ二日府の國分尼寺菩提樹院にやとりて
こゝにてあるしまうけうつ高し遠山左衛門尉宗植一
色勘解由貞俊など觀しきゆかりなりければこゝらの
宮寺にまふて侍りぬ惣社やしる雷宮健穗の高嶋のや
しろなとにこゝろさしのぬき手向侍りてよみ侍りけ
る

ねきことや志津磯山の郭公旅ゆくわれをゆふかけてとへ
梓弓かへる袂にもろ葉草かけていのらむかもの神垣

飛鳥井中納言雅世卿へ消息し奉りて添削の詠草奉る
とき

一聲の夢をももらせ東路の關のあなたの山はとゞきす

秋たつ日上杉幸丸元服せられ侍るを賀してやるとて
けふといへは初もとゆひに萬代の秋の契りを結びこめぬる

月前往事

梓弓思ひなれしにもくみしもたへて我のみ月をみるかな

月前述懷

なをからぬ心をかくす我かけにいとて照す月をそつかし
權中納言爲富卿の許より三井寺の僧永覺僧都のみち
のおくへ下りし次に消息つたへてたまはりしをふり

はへてその返事奉りしそこのはしに
千里てふ都の空の月もかくおなしつらさに人もみるらん
細川勝元朝臣武備の要を草子めくものに調しまいら
せよとのたまひこされ侍れば三卷となして更に益な
しと申送り侍りしときよみて奉りける

武士の道やはかけんはし鷹のこもつちこえを心にもせは
勝元朝臣短慮不成功といふ昌黎の作し詞なと消息の
はしに書付てこのこゝろはへを問ひ給ひしかは

いそかすはぬれさらましを旅人の跡よりはるゝ野路の村雨
人しれぬ心のあたにいそききてつかれてともにふし柴の露
北條加賀守直元の許より雪のいとあつくふりてあし
た酒肴など取そろへて是をなん友まつ雪のとはりに
もせさせよ問むはやすけれとも跡つけむものうし
なとゞねもころなる消息なればその返し言せし紙の
はしに

跡つけて雪にとへかし天地に先たつ春のやとゞ思はむ

康正元年の冬藤澤の役に至り侍敵も味方も入まじり
三日をかさねていとみあらそふ事になりぬされとも
屋形の武威つよくして北條(上杉)憲宣(定)のぬし終
に自服して餘兵おのかしゝ空しうなるあるはあたに
あたりてかたみに死するも侍る時藤澤のかたへの松
はらのむれにてたゞかふ男あるに中村治部少輔藤原
重頼とて京家の人の世に沉て屋形に扶持せられて侍
りしになんかたきの男は栗毛なる馬に乗て二引龍の
のほり龍の紋つけたるさしものなりけり遠目ながら
鎧の毛いかめしう見えけるにしはし戦ふて鎧をあは

せしにめの前にかたきの男つきとめて「符」懸られてや
かて中村手つから首を取て我陣に來りてかふく／＼な
んと語りけるにいまた壯年にもたらぬ男の色白うし
てたけたか「く」るへき心地したり髪のアたり唯なら
すたきしめつゝ哀もいやましあなからにくからぬ
侘なり中村重頼此心はへのやさしき哥ひとつものし
て手向にとすゝめ侍りければその首にむかひて
かゝる時さこそ命の惜からめかねてなき身と思ひしらすは

返し

治部少輔重頼

なき身とは誰もしれ共諸ともに今はにおよふとをしそ思ふ

梅

人ならは浮名やたゞんさよふけてよなく通ふ梅の匂ひは

寄鳥戀

よの中にとりも聞えぬ里もかなふたりぬる夜の隠家にせん

絶不會戀

心さへそらにやならふ西に入ひかしに出る星のちきりは

文安四年の夏飛鳥井中納言雅永卿の許より故郷橘と

いふををよむへきよし仰を侍りければ奉りける

おもはくか野中にとては植をかし昔は誰かのきのたちはな

持兼か妻三つになり侍る子をとみのなやみにてうし

なひぬるつとめての年後のわきともいとなみ侍るむ

まこのわきに逢ぬるをいのちなかければ耻しき世の

返すくも口おしきなと書くときてよめの許へいひ

つかはしける

なつかしく又恨めしき月日かな別れし去年のけふを迎へて

持兼の妻返し

去年のけふ別れし時も今とても忘れは社はおもひ出さめ
らゝ
逃懷の哥詠しけるとき

君におき民にふしつゝ朝夕に事へんと思ふ身をおほけなき

右太田伊豆守源持資後備中守入道道灌駿河藤軒詠帥。以三詩勝

軒靈西堂藏本寫之。

天正二年三月

侍從藤原朝臣共宗

一本云

右一卷太田伊豆守持資入道道灌之平素詠帥也。以三前靜
勝軒靈西堂之藏本。而寫之畢。

天正二年三月下旬

侍從藤原朝臣共味

桂林集

やまと歌は、世をたすけ國をおさむることわざにして。色にそみ香に匂ふ草木も。詞の種より出。聲にたて音になく鳥獸も。こゝろのもとをあらはさすといふ事なし。今の世中時しありて、蘆原のみたれしふしをあらため。花洛のふるき跡をおこして。弓をかくし劔をもおさむへき御代と成にしかは。まして戸さしせぬ關のひかしは。この道のさかへにあへるを。よろこひ侍へきもとはりになん。從五位下源直朝は。征東細柳營下股肱の臣たりしかと。功なり名とけ(遂)てかうふり(冠)をかけ(掛)しより。風に吟し月に嘯きてみつから月庵と稱す。遠くは遍昭か跡をたつね。ちかくは西行か風をしたふ。今古道へたゞれりといへとも。その心さしは一致なり。こゝに年ころつもれる濱の真砂の中に。花さける金をもとめ光ある玉を探りて。家の一集となし侍らまほしきよし聞えつけ侍き。古のひしりの御代にあつめられたりし千うたはた卷も。いまた貫之かこゝろには満足せさりしによりて。纔に三百餘首を捨て。今のゑらひ玄の玄なりといへり。譽をうる事は。歌の數おほきにはよらずと聞え侍れは。今此集の本意もそのこゝろひとしかるへし。仍て數百首の中に。崑山の瑕なき片玉をみかき得て。類をわかち部を定めて一卷となし。久かたの月のかつらになそらへて桂林集といふ。かゝりければ。一枝の外に。折のこすもとつ葉の残りおほきうらみあるやうなれと。みてるをかく事は。天の道にしたかふ社とはしかいふ。

桂林集

源直朝

春部

早春

いつしかと山は雪けにたつ雲の消るかたより霞む空かな
つもりこし尾上の雪のむら消は所々に春や來ぬらん

霞

横雲の別るゝきはの山のはのおほつかなきや霞なるらむ

朝霞

今朝は猶霞にけりなあしひきの山のはとの遠さかる迄

鶯

みやまへや木末の雪はそれながら先打とくる鶯のこゑ

梅

梅のはな咲にけらしな鶯の谷のふる巢をいつる初こゑ

故郷梅

ふる里の難波わたりの梅かゝにいまもむかしの春かせそ吹

柳營瑞泉寺の梅御覽しけるととき梅村聞笛といふこと

を

春くれは宿とふ人のふるの音に吹あはすめる梅の下かせ

梅の哥の中に

このねぬる袖のまぐらの朝露にのこる月さへ梅かゝとする

道のへの花は一本の梅なからおほくの人の袖そ匂へる

梅のはなかさしにさせはをのつから袖に消せぬ雪を降ける

若菜

打むれてわかな摘なり春日野の雪はみとり成にけるかな

柳

田家柳

うちかすむ柳の糸や佐保姫の朝氣のまゆのみたれ成らん
山腰の門田の柳春はまつ水のみとりの種やまくらん

春雨

大空は霞ながらに春雨のふるえの柳いろそそひゆく
春雨はその色としもみえさりし霞の下露の若くさ

歸鴈

いかなれは越路の月をよそにみてかへるか鴈は花の盛りを

春月

はるの夜は木の間かくれをもる影の霞てふくる有明の月

花

春はなを暮かたをそし山櫻入日のかげの花にのこりて
むかしなと雲にまかへて詠けん花より外の花はあらしを
久かたの月は霞のはるのよに花の光そさやか成ける
峯の月なめあかしてけさみれば木末の花になりにける哉
山櫻先ひにゆかんあらましの友さそふまに散も社すれ
とふ人の有ともいまは我宿の花散庭に跡やいとほむ
あるまゝに山の櫻のあるはなくなきは數そふ花の陰かな
色も香も花はむかしのまゝながら我身ひとつの春の夕暮
吹送るかせのたよりの遠ければ花は匂はすみねのしらくも

夜思山花

霞む夜の月はかりさへある物をさそな太山の花の明ほの

雲間花

山さくら盛になれば折々のくもや雲間の花とみゆらむ

河花

みよし野の古野の河に淀はあれと花の波には山陰もなし

聖護院准后あつまにくたらせ給ひし時花の下に立よ

らせ給ひて行人も道まとふかにうつもれぬけふは宿
かせ花の下陰とのたまひかけしを

蛙
行やられてけふも暮しつ山櫻君かためとや雪とふるらん

雨ふれば山田のつゝみ水越て草の葉末に蛙なくなり

杜若

いかなれは淺澤沼のかきつはたこきむらさきに花の咲らん

藤

日にそへて波やかく覽むらさきの藤江の松の枝もたはゝに

藤埋松

陰たかき松の梢に咲藤の花の聲さく春の夕くれ

老人惜春

老か世の末をおもへは年々にまさりておしき春の暮かな

三月盡

山のはのそれともみえすけふの日の暮るや春の露の成覽
けふははや四方の山邊の春かすみ衣々にしも成にけるかな
暮はつる空を悲しき老らくのこんといふなる春もしられす

夏部

更衣

なれくし春を残して夏衣かへても袖は花の香そする

卯花

うのはなの咲る垣ねはよなくに雲かくれせぬ月をみる哉

菖蒲

ふるさは庭の蓬をそのまゝにあやめに添てふく軒はかな

郭公

待しよりぬぬ夜の空の一こゑを夢とはきかし山ほとゝきす
郭公なかぬよころにならひ来てそれともわかぬ今の一こゑ
ほとゝきす月の桂にやとるらし空さりけなく聲の落くる
ほとゝきす悲かとたとる一聲に猶まゝとるまん心地こそせぬ

武藏野に長陣せし時ほとゝきすをきく

武藏野は本陰も見えずほとゝきすいくかを草の原に鳴らん

盧橘

故郷の草はみなからひとものはなたち花の香に匂ふらむ
むかしにもあらぬね覺を慰さめてまくら匂はす軒の立はな
昔思ふさよの寢覺の袖の上に我も有とやのきのたち花

五月雨

五月雨はそれならぬ方も八橋や水ゆく河の瀬々のしらなみ
けふいくかふるえの柳打なひきなみに波よる五月雨のころ
風にあれて月もるほとはふかさりし閨の板まの五月雨の頃

早苗

田子のとるさなへのつゆの玉たすきかけて心に秋やまつ覽

夏草

露をたにやとしかねたる若草の結ふはかりにしける頃かな

野夏草

夏のゝはかやか緑もひとつにて花なるくさや秋を待らん
一本のそれともわかす武藏野の草はみなからしける頃かな

短夜月

峯ちかき小川の舟のみなれさほさすほともなき月の影かな
夏かりの玉えの苜のもとをあらみいさよふ影や短か夜の月

夏月涼

手にならす扇の風もわすれつゝ月にまかする夏の夜のそら

鵜川

大井川岸にいきよふかゝり火はるせきにかゝる鵜舟なる覽

沼螢

むらゝのまこもつゝきの沼水にみえかくれつゝ飛螢かな

螢似露

はたる飛汀の芦のよなゝにをかぬ露ちるかけのすゝしさ

蓮

紅にほへは花もにこるとや玉もてみかく蓮葉の露

池蓮

池のおものはすの浮葉の茂りあひて水も濁れる影のなき哉

遠夕立

遠かたの空のむら雲それかともいひあへぬまにかゝる夕立
すゝしさの今誰かたに成ぬらん遠さかりゆくゆふたちの雲

水風晚涼

夕されは池の玉藻にあそふ魚の沈むばかりにかけも涼しき

竹風夜涼

我門の竹の葉をよく風の音によなゝ宿の夏をかくるゝ

御被を

水上にみそきやすらん麻の葉のしからみかくる瀬々の白波

御被河なかるゝ水に夏はゆきあきはこえくるせゝの夕波

秋部

初秋朝

今朝ははやいかなる人の心にも秋のいろをし思ひわくらん
松高風有一聲秋といふ心を

いつもきく高根の松の聲なれとけさしもいかて身にはしむ覽

七夕

天河なかるゝ水にことよせてかへらぬ中のちきりとまかな

七夕別

天川曉の空にたつ雲の消かへるをやこゝろなるらむ

萩

下ふしもたえて物おもふ夕ともしらてや軒の萩の上かせ
萩の葉にかせ打そよくゆふ暮は波こゝもとの秋の故郷

萩

起われぬすりの衣うらふれてしほるかのへの萩の下露

霧中鴈

尾上をは月にこえ來て明かたの麓の霧にまよふ鴈かね

鹿

小男鹿の妻戀すらしむは玉の夜寒かさなる山の秋風

虫

露霜は消かへりてもありぬへし哀いのちを松虫の啼

故郷虫

出ていにし人はかけせぬよもきふの宿にはかなき松虫の聲

月

さやかなる月には猶もくもるらん心ある人の秋の夜すから

のそイ

今まではたのめすとても秋はへぬ老のたもとにやとる月影

詠つゝ哀もまさりうきことも思ひなくさむあきの夜の月

相州三浦郡漣子里にしろよして行けるに明石とい

ふ所にて十五夜の月のくもりければ

かき曇月も詠るかひそなきこよひ明石のとまりなれとも

人の國に侍けるとし

今夜しも我身はもとの秋ならてみるをや月もさそ思ふらん

九月十三夜義氏將軍家の會に月前祝といふことを

千々の秋みるともあかし君か代はそらゆく月の影たえぬ迄

野月

春の山も忘れにけりな秋の野の月と花とのゆふくれの空

名所月

難波かたしほみちくれは汀なるあしの末葉にかゝる月かけ

遠山霧

そらはれてあくる麓の霧のうみにうかひ出たるおきつ嶋山

河霧

秋ふかみ霧たちこめて山河の岩こすなみも下むせふなり

山家秋風

山ふかみ露しく袖もわかぬ夜のねさめならはす松風の聲

草花露

ゆふされは尾花か波もくたけつゝつゆを分ゆくまのゝ浦風

野分あらかりしのちのあしたに

露ふかさのきのむくらの風はれて庭もまかきも野への秋風

河の霧を

落瀧津河せのなみの行かたに霧の聲きく秋の夕暮

紅葉

時雨ゆく雲の衣ををりかけてから紅にそむる山のは

河紅葉

淵も瀬ももみちになりぬ立田河くれなぬくゝる水や絶なん

月照紅葉

夕しくれ過ぬるあとの木々の色をまた一入の山のはの月

籬菊

しらさくの花もてゆへる庭の面のまかきそ秋の盛り成ける

しら露の衣手匂ふさくの花たそかれとさきの霧の籬に

大樹より菊の花を給はりけるに
よみてたてまつれる
君の代にあふへき秋はおほけれ
とまつ社おらめ菊の一えた
此御かへりとて。手折つる心の
色はもの葉の露に
のこれる庭のしらさくとのたま
へるとなん。

惜秋

わすれてはたゝおしまるゝ心かな
我やはよ所の秋の夕暮

野草秋

かせさむき尾花かすゑの波の間
に添もあへぬ秋の日の影

九月盡

けふもはや暮はてにけり今朝の
露残るもはかな秋の形見に

冬部

初冬

山河や日敷うつろふ紅葉はの
なかれもあへす冬は來にけり

時雨

住あらず草の庵の小夜時雨おも
へは月ももらぬかけかな

落葉

柴の戸に木の葉吹おろす山かせ
もなるれば餘所の夕暮の空
冬ふかくなりけらしな山里の
木のはは閨の月もらぬまで
尾上より風にちりゆく紅葉は
ゝ空もくもらて降時雨かな

夕落葉

秋の山染し時雨はふりはてゝ
嵐色つくゆふ暮の空

霜

淺ちふの小のゝ冬草すゑ葉にも
餘りてみゆる霜の寒けさ

寒草

をく霜はあらしやはらふ冬草
の枯なてのこる野への松陰

寒芦

難波江や霜をかさねてしほれ
蘆のはのかにかせの残る頃哉
枯わたる芦の葉したり降雪の
ほなみにかへす秋の夕かせ

水鳥

さゆる夜は芦のほかけを衾に
て下にかたしくをしの毛衣
みたれふす芦のしほれ葉ふ
みしたき雷打拂ひ鶯のなく聲

千鳥

くれかゝる浦のとまやに宿か
れば我友ちとりなみになく也

浦千鳥

月さえてあかしの浦の友ち
とりほのゝみゆる島つたふ麗

薄氷

山かはのさむく日とに眞管
おふる岩ねの水をかつ氷ゆく

湖氷

影やとす波は氷て志賀の浦
や松はいまこそ一本成けれ

池氷

池の面にうつろふ月のみか
ゝれてあまつ空まで氷る夜半哉

冬月

宿はあれぬ淺茅葎の霜のう
へになを影寒し冬のよの月

雪

をとつれも絶て程ふる我や
とにさりとて人はけさのはつ雪

朝雪

問ぬとて人なうらみそ我も
又跡たにおしき今朝の初雪

雪埋竹

軒ちかきまかきの竹の雪折
にふしのまもなく明す夜半哉

炭竈

大原や小野の炭かま風吹は
やかぬ峯にもたつ煙かな

埋火

うきときは身にたくへつゝ埋火の消なて残る世にも有かな
歳暮

月日たゝ流れもあへす暮はてゝ我年なみにしからみそなき
戀部

初言戀

ことに出はかくと思ひし言の葉も打むかひては忘れはて覺
忍戀

かれねたゝ軒のしのふの紅葉して色に出ぬと名のたゝぬまに
しらしかし木の葉散埋む谷川の水のなかれて下むせふとは
忍契戀

はかなくも後とないひそ我袖の色をし人のあやしめぬまに
契行末戀

ちきりをく秋より先の露の命いかまほしくも成にけるかな
待戀

入まてはあらしいまはの心かな山のは遠き月をなかつて
逢戀

うつゝとも夢とも更にわきも子かきてぬる夜半の袖の枕は
逢夢中戀

さめぬ間に消はてねたゝ鳥羽玉のはかなき夢も又は現も
見戀

我かたのよるへしらせようきみるの浪にたゝよふ袖の浦風
月前戀

かならずといひしなからも更行にたゝめぬ月の夕暮のかけ
後朝戀

たち出てゝ見をくるそらに有明の月も消ゆく人のおもかけ
ともに見しそのおも影は残りけり忘れかたみの今朝の月影

曉戀

夕戀

しもやいかに幾夜あけ行篠目のしのにをりはへ物思ふとは
はてもなき心の空のうき雲をよその夕に何なかめけん
おもひやるあたりの空の果もなく夕はかゝるうきも添らん

久戀

名立戀

こふるまも思ひそめける月日さへわするゝ程に成にける哉
よしやたゝうき名いとはし空のくもはては消なん跡の夕暮
遇不逢戀

寄月戀

寄艸戀

ともに見し人の心はさもあらてむかしの秋にかへる月かけ
またれつゝつれなしとても山のはに人たのめなる有明の月
いまよりや露も身にしむ若草のつまにこもれる末の秋風

聖護院准后鷹の繪をあるわらはにたまふけるに思ふ
とはしらふの鷹のしらすやはうちいてぬとも戀の心
をとのたまひけるをそのわらはにはにかはりて

雑部

曉

夜雨

山

有明の月の光もあし曳の山のはちかき横雲のそら
よなくの枕の下に聞なれてよそにそおもふ軒のむらさめ
我心いく重の峯を越ぬらんなかむる山のゆふくれのそら

河

すみた河むかしいかにととへはわたらぬ浪にぬるゝ袖哉

池上松風

立ならふ池のみきはのまつ陰は風と浪とのやとり成けり

浦煙

もしほやく海士の衣のうら里のうら悲しくも立けふりかな

關

あはれにもゆく年波はしら河のせきどめかたき旅の空かな

音羽瀧

雪消の水のしら浪岩越て音羽の瀧の名こそ高けれ

旅宿風

行暮てこよひ篠屋のふしの間をかりねくるしき風渡るなり

山家

春は花秋はもみちのあたなれば浮世はなれてすむ山をなき

山家水

柴の戸にまた住なれぬ山の井やくみたにしらぬ心くらへん

とて

浦ちかう侍る所よりみるといふものを人につかはす

寄松述懷

朝夕は海士のしはさを見るからにうきてふ世をぞ思知ぬる

寄鳥述懷

淋しさも世にふるほとを思ひにきたかならはしの宿の松風

寄河述懷

芦ねはふ入江につくる鳩の巢のうきながら社世には住けれ

よしやよはけふのうき瀬も飛鳥河わたりしられぬ末の白波

鏡裏堪^レ驚雨^レ曇霜といふこゝろを

増鏡みればかしらに霜ををくなくゝ年のふるにそ有ける

十如是の哥人々よみ侍りける時に本末究竟等のこゝろを

山のはに出入かけと人はみつ月はひとつにすめるこゝろを

大樹圓覺寺にて追福のみこゝろさしおはせし時一品

經卅首の中にて如是展轉教といふとを

名にしおふ法の心をつたへ聞てやすく住へき花のうてな

一切有爲法如夢幻泡影

うたかたの哀とみすやむは玉の夢幻の人のよの中

彌陀の第十八願のこゝろを

今そしる五のとかは其儘にねかふ十聲のたのみある身は

地獄

我からとけたはやけたん心より燃るほのほも閉るも氷も

畜生

此世には契ありても天かけり地にふすたくひ何うまれけん

修羅

いつまてか荒き浪ちにまよふへき果なき海の底のすみかは

人間

むまれくる人の心のやみなればさむるともなき夢のよの中

天上

いかゝ思ふとの羽衣きては又撫るいはほのはてしなき世を

縁覺

詠わひぬもろき木の葉の夕風に常なき世とは獨しりても

菩薩

渡りえてうへなき空にすむ月のあたりは近き雲のかけはし

母の十三年にあたりける春よみ侍ける

枯はてゝいく春かふるはゝそ原忘ぬいろはねにそ残れる

もとみなれし人のもとにゆくての便に立よりて侍ければこのちかきころ身まかりぬるよし申けるを夢のこゝちしてかの塚のもとにむかひて

ありし世の心ならひに宿とへはおもはぬかたの苔の細道

兼載法師か墓所は古河の北野和田といふ所に有里人にとひければ是なんその塚なりといふくさ深く暮とちて露分る人もみえさりにそのかみの新菟玖波集などのふることゝもおもひ出て

つくは出しけき言葉の花の露苔の下にも光みゆらむ

藤原の孝範朝臣詠草にけふ十七日にしへ將軍家御弓はしめそかしとおもひ出て梓弓けふ引をむるいにしへに春もさそひて立かへりなんとかきける（脱數）をみて

梓弓春の都をへたて來て東のかたにゐる空やなき

後奈良院の御時 宣旨下し給はりぬる秋よろこひにたへてよみ侍ける

聞えあけて名をもたのむの鴈の聲身はしもなから雲の上迄大樹かうふりせさせ給ける時まうけのものとを見侍て

かけ高き逢か島（山）は君か齡をつむにそありける

松歴年

植をきし松も木高くなる儘におとろかれぬる我よはひかな營下にめし出されて神祇を

昔か代はもとよりなれや石清水神もにこらぬめくみのみして

此一冊依二月菴所詠。於ニ彼家集中。探レ花拾レ實。撰爲ニ一集。（旨趣詳ニ）況潮信甚急。仍不レ及レ廻ニ思慮。纔凌ニ老眼。令ニ書寫ニ訖。鳥跡之狼藉。鳥焉之失錯。旁以似レ招ニ耻辱者乎。重可レ遂ニ清書ニ而已。天正第三曆季秋吉辰。

權大納言實枝

花にさきもみちに染るとの葉は
手にとる月のかつらとそみる

羣書類從卷第二百六十一

和歌部百十六 家集三十四

赤人集

山ふかみふりくる霧にむすはれて鳴鶯のこゑまれら也
あづよりは鶯
春たは若菜摘んとしめし野にきのふもけふも雪は降つゝ
我せこにみせんと思ひし梅花それともみえす雪のふれゝは
〔以下百餘首は大江千里集がまぎれ入りしなり〕

鶯の鳴つる聲にさそはれて花のもとにそわれはきにける
靜なる垣ねもとめていつくわか春のありかを共にもとめん
花の枝を折つるからに散まかふ匂ひにあかすおもほゆる哉
神さひてふりにし里にすむ人は都に匂ふはなをたにみす
花をみてかへらんとを忘るゝは木たかきかけによりて也
年月にまさるとしなしと思へはや春しも常にすくなかる覽
あかてのみ過行春をいかてかは心にいれてをしまさるへき
かねてより別をしみし春はたゝあけんあしたそ限り成ける
春とのみ所ゝに惜めともみなおなし色にすぎぬるかうき
はるゝにあひておひぬる身なればや更に泪の流れさる覽
今ははや歸りきなまし藤の花みきとせしまに年そへにける
木つたひしみの糸のよりければ鶯とむるちからなき哉
花をのみ尋ねこしまに春はたゝ深さあさゝもしられさき
はかなくて空なる風の年をへて春吹おもることそあやしき

あたらしき春の山への花のみそところもわかす咲にける哉
あと絶てしつけき宿に櫻花ちりはつるまてみる人もなし
年ふかく老ぬる人のかなしきはさける花をもたとるなり
ちかゝらぬ時に一たひわかるれば年の三年にへたゝりに
別にし君か身をすて徒にかたちのかはる身こそつらける
白雲はわかるるとに立ぬれと君ともにこそゆきかくれぬれ
別ての後もあひみん遠くとてこれをいつれの時とかはしる
人をゝくる共に春さへ過ぬればこれから――あひた也ける
ふたつとてみえぬに月の山をにたり渡りつゝあきらけき哉
暑からす寒くもあらずよき程に吹くる風の止すもあらなん
くもりなくたきは山さへ晴ゆけは水の色さへあらたまり行
白雲のなかをやりつゝ行水のめてたきとは山にそありける
獨して雲のかけ橋こえゆかんいつこのかたか山はさかしき
行水のをき山より落くれはしら雲たつとみそまかへつる
おきつより吹くる風はしら波の花とのみ社みえわたりけれ
〔此歌續後撰集雜上に赤人、初二の句「あしへよりふきく
る風に」とあるは此本より採られしなるへし「おきつ」は
「おきへ」「風は」「風に」を誤りしなり。赤人の歌にはあ
らて、大江千里か歌なり〕
わひて行やとは光のくれ行は吹風のみそ戸さしなりける

よそにても花を衰とみるからにしらぬ川へにまつ入にけり
さしわかつて深くあはれとみえければはれてしつべき所成堯
かけしけき水のあたりに年をへて過にけれども哀れなる哉
吹風の光をとほし思へはそしはしもこゝにあそふへらなる
あやしくも年をなからへ獨してあくかれ渡るもとや成なん
あまつ空高くはれつゝみえつるは暮行山も遠くそありける
やととに花のにしきをおれゝはそみるに心のやすき時かな
谷水のその音絶すあしゆればはときのまにたるふたゝす聞
なく涙ふる袂にしうつりてはくれなるふかきやとゝ社みれ
わかる時いひつる年の遙けきは近きをみるそ能しかりける
あはれとも我身のみ社思はゆればかなき春を過しきぬれば
一年にまたふたゝひもこし物をたゝひる中に春はのこれる
鶯は過にし春を惜みつゝなく聲おほきころにもあるかな

空蟬の身としなりぬる我なれば秋をまたてそやみぬへなる
うくひすと時ならねはそ鳴聲の今はまれらに成ぬへらなる
かきりとて春の過にし時よりそ鳴鳥のねもいたくきこゆる
秋近く蓮はひらく水のおもにくれなるふかき色そみえける
吹風に草もおなしく成ゆけはおつる花こそまれにみえけれ
なく鳥の聲ふるくのみきこゆるは残れる花の枝をこふるか
月影になへて眞砂のてりぬれば夏のよふかき霜かとそみる
我心しけき時には吹風のとはあらねとすゝしかりけり
山ふかく谷をわけつゝ行水の吹つる風をすゝしかりける
天河ほとのはるかに成ゆけはあひみるもの空めなきかな
秋の夜の霜にたとへし我髪は年のはかなくおいしつもれば
(古今上よみしらす)
大かたの秋くるからに我身社悲しきものとおもひしりぬれ

おく霜に草のかれゆく時よりそ虫のなくねもたかく聞ゆる
一年にひと夜のみこそ棚機の天のかはらをわたるてふなれ
物思ふこゝろの秋に成ぬればすへては人そみえたりける
大かたの秋を衰れとみるもあてなる人はしらすそ有ける
常よりも秋の木葉はおつらんにくれなる深くみえわたる哉
かすかなる艸のはみゆる秋のには物思をそすくなかりける
すきてゆく秋のかなしくみえつるは老なんを思ふなり堯
もみちはの色紅にみえつるはなく蟬のみやなくなりぬらむ
秋のよをさのみなきつる虫のねは我宿に社あまたきこゆれ
行かりの秋過かたに獨りて友にをくれてなきわたるかな
吹風の音たかくのみ聞ゆるはおく露かたてさむくも有かな
木葉皆からくれなゐにつゝるとて霜のまゝにも置まさる哉
秋のよをさむみ鳴つゝ行雁のつゆをのみまで立かへるらむ
しのゝめにおくしら露のさむければたゝ獨して蟬の鳴らむ
秋の夜を雁は鳴つゝ過れともまつとてはみゆるよもなし
空にかり飛とはやくみえしより秋はかきりとおもひしり堯
なく鴈の聲たかくのみ聞ゆるは旅なる人はおもひまさりぬ
鳴蟬の聲たかくのみ聞ゆるは軒ふく風の秋をしるらし
いつしかと春を迎ふるあしたにはまつよき風の吹そ嬉しき
小夜更けて猶ねられねは春風の吹つる事もおもほえぬかな
一年に冬くる年はけふそ知ふしおきてみれとあかし難さに
物を思心はこひにくたくれとあつきおきにはおよはさり堯
わかゝみのみな白雪になりゆけはおける霜にも劣らさり堯
年とに數へこしまにはかなくて人は老ぬるものにそありける
あく迄にみてなさけらに寒きには人のみましに暖まり堯
老ぬればあははや覺てとゝなしに夜半に過ればねてのみふる

人にもまたおく霜のさむければ草葉をたにそからせさり梟
獨りて燃るほのほに向へはやのきをともしき身とそ成ぬる
かくはかり老ぬと思へは今更に光のすくのかけをしめます
かさゝきの峯とひわけて飛行はみ山かくるゝ月かとそみる
雲はれて清き月影けふならすあらむかきりはをしみ社せぬ
別れての後はしらぬをいかならん時にか人のあはんとす覽
そこ井なく物をそおもふあかてのみ別れし物を思ふ我身は
世中を思ひしりぬる心こそ身よりも過ておもひしりけれ
心をし蟹のうけらになしつればなかるゝ水にしつまさり梟
はかなくて何も我身の獨してあした夕へにしけくかるらん
したなくて空に浮へる心こそ夢みるよりもはかなかりけれ
我身をは浮へる雲になさゝらは行方もなくなはかなからまし
まほろしのほとゝしりぬる心には春くる夢とおもほゆる哉
假初にしはしうかへる灯のみなあはとのみたとへられける
黒かみのしろく俄に成ぬれば春の花ともみえわたりける
われか身も春のかきりに人しらは草木なるとて思しりなん
夢にても嬉しきとをみる時はたゝに憂ふる身にはまされり

(本ノマヽ)

しほにけてわすてくる雁も春にあひてそ飛かへりける

春とにあひてもあかぬ心哉花雪とのみふりまかひつゝ

春のみや花はさくらん谷さむみうもるゝ草は光りをもみす
しら波のたちかへりくる數よりも我身をなけく事は増れり

かなん古今

あしたつのひとりおくれでなく聲は雲の上まで聞えつる哉
あま雲の身を隠すらん日の光我みくらせとみるよしもなし
おもふとなく驚かつけたらは色もかはらぬ我身とやみむ
時鳥さつきならねと鳴にけるはかなく春を過しきぬらん

(以上大江千里集)

和歌の浦に汐満くれはかたをなみあしへをさしてたつ鳴渡

春のゝにあさるきゝすの妻戀に己かありかを人にしれつゝ

久かたのあまのはやまにこのゆふへ霞たな引春立くらし

あつき弓春やまちかくやとりせはつきてきくらん鶯のこゑ

打なひき春さりくれはしかすかに空くもりあひ雪は降つゝ

いにしへの人の植けん杉の葉に霞たな引はるはきにけり

子らか手をまきもく山に春されはこのはしのきて霞たな引

春霞なかるゝともに青柳のえたくひもちて鶯なきぬ

かけろふの夕さりくれはかり人の弓いるかたに霞たなひく

むらさきのねはふよこ野の春のゝに君をこひける鶯をなく

わかせこそならしの山の呼子鳥君よひかへせ夜の深ぬとに

朝もにきてなくことりなれたにも君に戀らし床夏になく

春なれや妻やもとむる鶯の梢をつたひなきつゝそふる

かすかなるはるひ山よりさほの上さして行なる呼子鳥そも

こたへぬによひなをかしそ呼子鳥さほの山へを登り下りに

朝露にしとゝにぬれてきなん鳥かみ山よりも鳴わたる也

今更に雪ふらめやはかけろふのもゆる春へと成にしものを

ふゝきつゝ雪は降れともしかすかに霞たな引春はきぬらし

山きはに驚なきつ打なひき春と思へは雪ふりしきぬ

みねのうへにふりおく音は風のとおと音に散らし春は有とも

つくは山をよめる

君かため山田のさはにゑくつむと雪けの水にも裾ぬらしつ

梅かえになきてうつろふ鶯のはね白妙にあはゆきをふる

山たかみ降くる雪を梅花ちりかもくるとおもひけるかな

この哥はよみかはせるなり。

霞を詠す

きのふこそ年はくれしか春霞春日の山にはやたちけり
冬すきて春はきぬらし朝日さすしかの山へに霞たなひく
梓弓春になるらし春日山霞たなひくよめにみれとも

鶯の木つたふ枝のうつりかは櫻の花のときかたまけぬ
霜かれの中のやなきはみる人もかつらにすへく思ほゆる鴨
淺みとりそめかけたりとみるまてに春の柳はもえにける哉
山もとに雪は降つゝしかすかにこの川柳もえにけるかな
青柳のいと細きを春風にみたれんいろにみせんこもかも
うめの花折もてみればわか宿の柳のまゆもあはれなるかな

花を詠す

さくら花ときはすきねと鶯のこひせさるねは今や鳴らん
わか里の柳の糸を吹みたるかせにやいもか梅のちるらん
年とにうめは咲とも空蟬の世にわれしもを春なかりける
うちつけにとは思へともはしめてもまつみまほしき櫻花哉
あしひきの山の端てらす櫻花この春さめにちにけるかな
あの山の櫻の花はけふもかも照みたるらんみる人なしに
うちなひき春立ぬらし山もとのわか木の末に咲ちるみれば
かはつ鳴よしのゝ川の瀧の上にあせみの花を咲てあたなる
春のきしなる瀧もとに櫻花散ぬへらなるみる人もかも
春雨はちらまくもをし櫻花しはしさかなんをしみてし哉
春雨はいたくな降そ櫻花またみぬ人にちらまくもをし
春雨にあらそひかねて我宿のさくらの花は咲そめにけり
春の野に葺つみにとこし我を野をなつかしみ一夜ねにける
いつしかもこよひ明なは鶯の木つたひちらす梅の花みん
みわたせはかすかのゝへに霞立ひらくる花はさくら花かも
のと河のみなそこさへにてるまてに三笠の山は咲にける哉

ゆきみればまた冬なるをしにかすかに春霞立雪はふりつゝ
去年咲し草木今咲いたつらにつちにやちらんみる人なしに
月を詠す

朝霞みる日くれなは木間よりうつろふ月をいつかたのまん
春霞たなひくけふの夕月夜きよくてゐるらむたかまとの山
春されは木かくれおほみ夕月夜覺束なしや花のかけにして
雨を詠す

春雨にありけるものを立かくれ妹かいへちに此日くらしつ
かすか野に烟立めりやをかしは春のおほきふ雨のふるらん
野にあそふ

春の野に心のへむと思とちこしけふの日はくれすもあら南
百敷の大宮人はいとまれや梅をかさしてこゝにつとへる
住吉の里ゆきしかは初花のまれにみん君にわれあへるかも
かうへをめぐらすうた

春日なる三笠の山の月も出ぬ鴨關山に咲る櫻の花も見へく
ふるきことをなけく

冬はすき春はきぬれと年月はあらたまれとも人はふりゆく
春のあひきゝ

春山にゐる鶯のあひわかかれかへるまつまのおもひするにも
我やとの春さく花の年とにおもひますともわすれめやわれ
梅花さきちる野へに我ゆかん妹かつかひはわれをまつらん
春の野に霞たな引櫻花うち散まてにあはぬ君かな

わかせこをわか戀らくは奥山のあせみの花の今さかりなり
梅花したり柳に折ませて春にそふるは君にあるらむ

女郎花さく野へに生る白つゝししらぬもていひし我と
しもによす

春立は草木の上におく霜の消つゝわれは戀やわたらむ

かすみによす

春霞山にたなひきかくすいもゝあひみて後そ戀しかりける
春霞立にし日よりけふまでに我戀やます人めしけきに

あをつゝ妹を尋ぬと春の日の霞たちまふけふしくらしつ
みわたせば春日の野へに立霞みまくのほしき君かあたりを

あやしきは我宿にのみ立霞たてれぬるとて君かこゝろに
戀つゝもけふは暮しつ霞たちあすの春ひをいかゝくらさん

雨によす

我せこにあひてすくなき春雨のふるわさしらす出てくる哉
春立はしけし我戀わつたつみの立しら波にちへそまされる

おほつかかな君にあひみてすかのねのなき春日を戀渡る哉
今更に君はよにこし春雨の心をひとのしらさるなくに

春雨の心もひとにかよはんや七日しふらは七日こしとや
梅花ちらす春雨おほくふるたひにや君かいへおせるらん

雲によす

しらま弓いま春の野にゆく雲のゆきや別れん戀しき物を
かつらをゝくる

ますらをかふしる歎きて作りたるしたり柳のかつらせよ妹
松によす

梅花さきて散なはわかいもとくみにこんとわか松の木そ
別れをかなしむ

朝とあけて君か姿をよくみればなき春日を戀やわたらん
とひこたふ

春山のあせみの花のにくからぬ君にはしめやよかれは戀し
石上ふるのやしろの過にしをわれさらゝゝにこひにあひ覺

此人哥返しあらすとてかへせり。それはこのついでに
いりたるなり。

さのかたはみにならすとて花にのみ咲てなみえそ戀の櫻を
さのかたはみに成にしを今更に春雨ふりてはなさかんやは

梓弓ひきつへきやは夏草の花さかぬまであはぬ君かな
河上のいつもの花のいつもゝきませ我せこ絶すまつはた

春雨のやますふりおちて我こふる我いもひさにあはぬ頃哉
我妹子を戀つゝおれは春雨のたれもるとてかやます降つゝ

春くれはまつ鳴鳥の鶯のとききたちし君をしまたん

あひ思はぬ人をや常にすかのねの永きはる日を立や暮さん

あひ思はすららんかゆるゑに玉のをの長き春ひを歎き暮しつ

たとひうた

春霞たな引野へにわかひけるつなはまをつなえんと思な

夏の哥ともを詠す

ますらをの袖たちむかひしめしのゝ神なひ山に鳴く時鳥
たひにして妻戀すらし時鳥神なひやまに小夜更てなく

これはふる哥の中に出たり
時鳥鳴はつ聲はわれきかんさつき玉にまきてぬきてん

朝きりのたな引のへの足引のやま郭公いつきてかなく
藤浪のちらまくをしき時鳥いまきのをかになきてこゆらん

朝きりの八重山こえて時鳥卯花かくれなきてゆくなり
木かくれて今そ聞なる時鳥なきひゝかして聲まさるらむ

あひかたき君にあへる時郭公とゝきよりは今こそなかめ
こかくれて夕くれなるを時鳥いつこをいつと鳴き渡るらん

月きよみ鳴郭公みんと思ふわか心のもみん人もかな
時鳥けさの朝霧なきくるを君はえきかすいやはねつらん

ほとゝきす花橋の枝にゐてなきしひゝけは花はちりつゝ
さつき出うの花月夜郭公なけともあかす又もなかなむ
よひのまにおほつかなきを郭公鳴なるほとゝきの音のはるけき
卯花のさくまでをしき時鳥野にて山にてをれよとそおもふ
やまとには鳴て待らむ郭公中へそのなきもおもほゆ
物おもふとねさる朝けの時鳥我衣手になきしほりつゝ
こん人と時鳥をやまれにみん今やはかくるこひつゝをれは
橋のはやしを植ん時鳥つねに冬まですみわたるへく
あまはれの雲まにたくふ時鳥梢をさしていまなきわたる
かくはかり雨のふるをや時鳥うの花やまに猶やなくらん
蟬を詠す

たゝならんをりになかなむ空蟬の物思時になきつゝはをる

はしはみを詠す

おもはしふらみの心も秋に匂ひぬと鳥のはしはみあきたゝねとも

花を詠す

風にちる花橋を手にうけて君かみためと思ひつる哉

かくはしき花橋を衣にぬひおちこむ妹をいつかとまたん

郭公なきてひゝかは橋の花ちるやとにくる人やたれ

わか宿の花橋はちりにけりくやしき事にあへる君かも

野へみればなてしこの花散にけり我まつ秋はちかつきに晁

わきもこにあふちの花は散にけりきていもさけると有と聞

春日のゝ藤はちりにき何をかもみかりの人の折てかさゝむ

時ならて玉をそぬける卯花の曉さつきをまたはイはまたひさしかるへし

うの花のさける垣ほに時鳥なきてそわたる人はきゝつや

きゝつやとわかこひつるを郭公さらになれつゝいま鳴渡る

人とは夏のゝ草のしけくとも妹と我としたつさはりなは

此ころの戀のしけらく夏草のかりははつともおひいつるも
たくひあらはねなつものしけみ打拂ふ人わか命常ならめやは
我のみやかく戀すらん杜若つくとふ妹はいかゝあるらん
橋の花ちる里にかよひなは山ほとゝきすひゝかさらむか
なつなれはすこく鳴なる時鳥ほとゝきいもにあはてきに晁
五月闇花橋にほとゝきすかけそふ時にあくる君かな
此哥人麿集にあり。

花によす

かたよりに糸をこそよれ我せこか花橋をぬかんとおもひて
時鳥かよふ垣ねの卯花のうきも有や君かきまさぬ

卯花の咲とはなしにあた人の戀わたるらむ(かた)思にして

われこそはさてしもあらめわか宿の花橋をみにはこしとや

此哥人丸集にあり。

人しれす戀れはくるしなてしこの花に咲てよ朝なゝみむ

夏草の露わけ衣またきぬに我衣手はひるよしもなし

日によす

みな月のつちさへさけて照目たに我袖ひめや妹にあはすて

此哥人麿集にあり。

秋のさふの哥

天河水底までにてらす舟つひに舟人いもとみえつや

久かたの天河原にぬる鳥のうらひれをりつくるしきまでに

我こふる妹ははるかに行舟のすきてくへしやをもつけなん

大空にたな引あめのかすみれば人の妻さへ妹にあひぬへし

漢河やすの川原に舟うけて秋にまつとは妹につけよとて

空よりもかよわれすら誰ゆゑに天の川みち歎きてそくる

八千矛の神の御代より妹もなき人ししらせし來りつけゝん

我戀にはにあげてみん今宵我あまのつはしのいみかしまゝと
 己か紐長きとは聞つ手に巻てまたきてねよ君正にとかなし
 なからふる妹か姿はあくまてに袖ふりみえつ雲かくるまて
 ゆふつゝのかよふ空まていつとてかあふきてまたん月人男
 天河みつくもり草ふく風になひくとみれはあきはきにけり
 我まちし秋はきさきぬ今たにも匂ひにゆかんおちかた人に
 わかせこにうらひれをれは天河舟こきいたすちか聲聞ゆ
 天川そこのわたりのおつろへは河原をゆくに夜を深にける
 昔よりあけて衣をかへさねはあまの河舟うかみあけぬらん
 遠き妹と手枕やすくねぬる夜は庭とりなくな明は過とも
 あひみまくあれともあかす東明の明にけらしな舟出せん妹
 萬代をたつさはりゐてあひみんと思へしやは戀ならなくに
 萬代を隔つる月か雲かくれくるしき物そあはんとおもふは
 白雲を幾重へたてゝ遠くともよふさをそみん妹かあたりを
 我爲と棚機つめのその宿にをるしらぬのはおひとかしかも
 君にあはてひさしく成ぬおひにせし白妙衣あかつくまてに
 天河梶おと聞ゆひこほしの棚機つめとけふやあふらし
 天河やすの河原にさたまりてかゝるわかればとくとまた南
 棚機のをはたたてゝおる布は秋まつ衣たれかとめきん
 年にありて妹かまた南うは玉のよるより曇る遠きわたりは
 わか待し秋は來りぬいもせと何とあるらむひさむかひるて
 あはすしてけななき物は天河へたてゝまたや我戀をらん
 彦星と棚機つめとこよひあふ天河原に波たつなゆめ
 しみゝもあひみぬ君は天河舟出はやせよ夜深ぬ時に
 秋風のきよき夕に天河舟こきわたせ月人をとこ
 あまの川きり立わたり彦ほしの梶音聞ゆ夜の更ゆけは

君か舟今こきくらし天河きりたちわたる此河のせに
 秋風に河のせきよしひこほしのけさこく舟に波のきはける
 天の川かはへにたちて我まちし君きたるなり紐ときてまて
 あすからはわか玉床を打拂ひ君とふたりはねす成ぬへし
 此夕ふりくる雨はひこほしのとわたる舟のかひのしつくか
 あまの川やそせよりあふ彦ほしのときに行舟今やこくらん
 天河うちはしわたす妹かいへとまらすかよへ時またすとして
 月をへて我思いにもあへる夜は此七日のつきせさるかも
 年にきてわか舟わたる天河風は吹とも波たつなゆめ
 天河かせは吹ともわか舟はとくこきよせよ夜の深ぬまに
 よし今宵あへるときたにとはむ待もせずこしよを深ぬ覽
 あまの河白浪たかくわかこふる君か舟ては今をすらしも
 はるかなる君もて行て天河うちはしわたし君もあはすは
 天河霞たちのほり棚機の雲の衣のあへるそらかな
 いにしへのをりにしはたを此夕衣にぬひてきみまつ我を
 あし玉も手玉もゆらにおるはたを君か衣にぬひきせんかも
 よき月日あふよしあれば別路の惜かる君はあすさへもかな
 天河わたるせふかみ舟うけてさしくる君か梶音そする
 あまの河わたせるものみてくらの心は君をゆきてませとよ
 久かたの天の河原に舟うけて君まつ我はあけともあらぬか
 あまの川あしぬれたゝむ君か身も枕もせねは夜の深ぬこそ
 わたしもり舟わたせよとよふ聲のゆかぬ成へし梶音もせぬ
 此哥人磨集にあり。

戀しきはけななき物を今たにも短くも哉あひみる夜たに
 まけなから河をへたてゝ有し袖今宵まかむと思へるかよさ
 人さへやみつからくらむ彦星の妹よふ聲の近づきぬるを

あまのたなはた
あすか川かはよとさらす立霧と思ひすくへきとならなくに

天河せをはやみらんうは玉のよるは明つゝあはぬひこほし
わたしもしり舟はやわたせ一年に二たひかよふ君ならなくに
戀するはけなかり物を今宵たに暮るへしやはとく明すして
棚機ちいのこよひあかねは常の戀やわたさん棚機わたせ

あまの川棚機わたしたなはたのこれわたさむに棚機わたせ

天の川をうきやりついつれをか君かうけをも我まぢわかん
秋かせの吹にし日より天河せに出たちてまつとつけこせ

天の川こそわたりは有けるを君かきたらむ道のしらなく
彦ほしの妹よふ聲のひきつなのたえんと君を我思はなくに

わたし守舟出しゆかん今宵のみあひみて後はあはぬ物かも
あめつちのそめし時より あまの川 むかひに出て

ひととせに ふたゝひあはぬ つまこひに 物思ふ日は

あまの川 やすの河原に かよひぢの かよふわたりに

くほふねの ともにへにも ふねよそひ まかいもしけく

いきの目も とはれぬ物を 秋かせの 吹くるよひに

あまの川 白波しけき おちたきり はやまさりたる

わかくさの つまた枕に おほ舟の おもひたのみて

こきくとも 此おのこらか あら玉の 年のを長く

おもひこし 戀をつくさん ふんつきの なぬかのよひの

わかれかなしも

返し哥

つぎまつよりぞイ

こまにしき紐とき易きあま人のまつらくるにそ我も思はん

あめつちと わけし時より ひさかたの あましるしとは

あまのはら 天河原に あら玉の 月をかさねて

戀る妹に あふ時まつと たちまちに わか衣手を

秋かせの 吹しかへさは たちあつゝ たつきをしらぬ

躬恒集

延喜三年十月十九日仰によりて哥みつ奉る女一のみ
この裳き玉ふ時に内よりさうそく玉ふその裳にみつ
くきかたきにすれる哥

なかれ出る山をしおもへはよしの河深き心もたえむ物かは
わたつ海の神も知覽ゼイ同しくは蟹のかるをも我にかさなん
白雲のたちのみわたるくらはしの山に心をおもひつめつゝ

延喜五年二月十日宣旨によりて奉れる和泉大膳四十
賀のれう屏風四帖内より始めて内侍督殿に給ふ哥

山たかみ雲井にみゆる櫻花心のゆきてをらぬ日そなき

大あらしのもりの下草しけりあひて深くも夏の成にける哉
すみの江の松を秋かせ吹からに聲うちそふるおきつしら浪

河上に時雨のみふる網代にはもみちさへこそ落まさりけれ
朱雀院女郎花合の哥をみなへしといふ五文字を句の

かしらにおきてよめる

をゝぬきてみるよしも哉なからへてへぬやと秋の白露の玉
をりつればみて秋の日は慰めつへて此花をしらせすもかな

清涼殿の南のつまにみかは水なかれていたりその前
裁にさゝら河あり延喜十九年九月十三日に賀せしめ

給ふ題に月にのりてさゝら水をもてあそふ詩歌心に
まかす

もゝ敷の大宮ながら八十島をみる心ちするあきのよのつき

亭子の帝の大井におはしませる時に九の題のうた秋
水にうかへり

此河に木のはと浮てさし歸りみはけふよりそみなれ染ぬる
秋の波いたくな立をおもほえすうき木にのりて行人のため
秋の山にのそむ

けふなれは小倉の山の紅葉はロイそそこさへてりてみえ渡る覽
秋霧のはるゝまにロイみわたせは山の錦はおりはてにけり
もみちおつ

水の面のからくれなるになる迄に秋にあひかね落る紅葉は
菊のこれり

きくの花けふをまつとてきのふおきし露さへ消す今盛なり
君かため心もしるく初霜のおきて殘せる菊にそありける

鶴洲にたてり

鶴のゐるかたにそ有ける白妙のあまの濡衣はすとみつるは
うらわきて風や吹らんおきつ波おなし所をたちかへりつゝ

たひのかりゆく

故郷をおもひやりつゝゆく臍のたひの心は空にそあるらし
としとに友ひきつらねくる臍をいくたひきぬと問人そなき

かもめなれたり

なれてこしおきの鷗はつけなくに後の心をいかてしるらむ
すにをれはいさこの色にまかふ鳥でにとる計なれにける哉

猿かひになく

わひしらにましらな鳴そ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ
心あらはみたひてふたひ鳴聲をいとゝわひたる人に聞すな

江の松おいたり

深みとり入江の松も年ふれはかけさへともに老にけるかな
老にける松ぞ知らんあゆ川のみゆきもかくはあらずや有劔

夏の雑の哥

五月雨にみたれそめにし我なれば人を戀ちにぬれぬへら也
水の面におひてわたれる浮草は波の上にやたねをまくらん
はしめて

逢ぬよも逢よもまさしいをねねは夢のたゝちはなれやしぬ覽
こしのかたに別る人に

行君を道もたひらの都にはまたきかへれる山をありけむ

冬日人に送る

もみちはや秋なるらん神な月しくるゝとに色のまさるは

ひらの山

かくてのみ我思ひらの山さらは身はいたつらに成ぬへら也

うちやま

わたつみの涙うちやまは濱にいてゝ拾ひおきてん戀忘れ貝

ひえの山

夏ならぬ草とり捨て植し田はひえのやますも生にけるかな

かみやかは

住の江の岸のまにゝ昔より神やかはらぬ松はうへけり

水無瀬川

遠近にわたりかねてそ歸つゝみなせかはりて淵になれゝは

さひかは

昔よりありのまにゝあらせぬはわかすさひかは人の心を

しらに

山ちかみ人にもみえぬすゝむしは秋わひしらに今そ鳴なる

日くらし

松の音は秋のしらへに聞ゆ也高くせめあけて風そひくらし

しをに

宵のまと思ひつるまに秋のよはあけしをにしに月のみゆ覽

ちゝこくさ

花の色はちゝこくさにてみゆれ共一つも枝に有へきはなし

かりやす草

鶯の心にはあらて春をたに鴈やすくすとひかへりゆく

わかれの哥

かたかけの舟にやのれるしら波の立はわひしく思ほゆる哉

雨の降日人に送る

衣手のけさはぬれたる思ひねの夢ちにさへや雨はふるらん

雑の哥

君みてはあかぬへしやと心みにたゝまくもうきから錦哉

大空をなかくそくらす吹風の聲はすれともめにはみえねは

いつらなる山にかあらん鴈かねの音のほのかに聞はつる哉

神無月紅葉の時はやまとまてからくれなるにみゆるさほ山

思へともあひもおもはす思ふとき思ふ人もや思はさらなん

下紐のとけしはかりを頼みつゝたれともしらぬ戀をする哉

生ふれとも駒もすさめす菖蒲草かりにも人のこぬか佐しき

山寺にありて人にやる

世をうしと山に入ひと山なから又うきときはいつちゆく覽

雑の哥

新玉の年のよとせをなましるに身を捨難みわひつゝもへぬ
徒に生ぬへらなり大あらきのもりの下なる草ならねとも

歎きのみおほえの山は近けれといま一さかを越をかねつる

ことさらにしなんと社かたからめいきてかひなく物思身は
けふくれてあすかの川の河千鳥いまいくせをかなき渡る覽

秋

秋の夜の朧にみゆる月よにもみちの色そてりまさりける
久方の月をさやけみ紅葉はのこさもうすさもわきつへら也
露けくて我衣手はぬれぬとも折てをゆかん秋はきのはな

七日

秋風はいつしかとのみ待しかとあひてぬるよは只ひとよ也
夜をさしてぬる君なれば天河ゆふまくれにもいさわたり南

九日

老はみのからき物なりけふはしもぬれてもぬれん菊の白露
打はへてやすきいもぬすきりくす秋のよなく鳴渡る覽

山こえ

共に我かへる山ちの紅葉はのおのちりくわかるへら也

秋霧のはれぬ朝の天空をみるかともみえぬ君かな

秋のゝに日暮しつるを女郎花よるやとまらん花のなたてに

萩のはのそよとつけすは秋風をけふから吹と誰かいはまし

秋はきの中に立てしましりても我をは人の花とやはみぬ

もとの色はいつれなるらん白露の下にうつろふわか宿の菊

神無月水にうつろふ菊の花いつれかものと色にはあるらむ

藤の花ちりなん後もかけしあらは池の心のあるかひはあ覽

とさらにみにこそきつれ櫻花道ゆきふりと思ふらんやそ

夏

玉ほこの道ゆきふりにさくら花折とや花のわれをおもふ覽

雜歌

月みつゝ待としらすや時鳥こてはたほかにゆきてなくらん
年をへて思ひくゝてあひぬれば月日のみこそ嬉しかりけれ
よと共に人を忘れぬむくひにやけふは嬉しくあひみそむ覽
みつゝわれなくさめかねつ更科の姥捨山にてりし月かも

秋

天川舟さじわたす棹鹿のしからみふする秋はきのはな
くらへみんわか衣手と秋萩の花の色とはいつれまさまれり
あら玉の年ふりつもる山里のゆきあかれぬは我身なりけり

春

あひ思はぬ花に心をつけそめて春の山へになかるくらしつ
常葉なる松をはおきてあちきなくあたなる山の櫻ををみる
をしめともとまらなくに櫻花雪とのみ社ふりてやみぬれ
散ぬともかけをやとめぬ藤花池の心のあるかひもなき
わか宿の池の藤浪咲しより山ほとゝきすまたぬ日そなき

夏

時鳥鳴五月雨のみしかよは月かけさへそとしかりける
五月雨のたそかれ時は月かけのおほるけにやは我人をまつ

冬

み吉野の山の心はけふやしるいつかは雪のふらぬ日は有し
梅か枝になく鶯の聲聞はよしのゝ山にふれるしら雪

秋

我宿の秋はきの花咲ときそ尾上の鹿も聲立てなく

七日人に送る

打はへてすくめる人はたなはたの逢夜計はあはすもあら南

秋のゝの花の色くとりそへて我衣手にうつしてしかな

立かへり又もみにこんもみちはおとしなはてそ山河の瀧
水の面のふかくあさくもみゆる哉もみちの色を淵せ成ける

菊花みつあやなくなほもあらて人の心ようつるふなはた

山ちかくめつらしけなく降雪のしろくやならむ年積りなは
山のはまた遠けれと月影ををしむ心をまつさきにたつ
久かたの月人男ひとりぬるやとにさしいれり人の名たてに

みるほとにいつほせよとか月影のまた宵のまに高く成ゆく
久方のあまつ空なる月なれといつれの水にかけなかるらん

夏

五月雨の月のほかにみゆる夜は時鳥たにさやかにをなけ
いらぬまにこんと云しかは今宵社われて惜けれ夏のよの月
あたらしくてる月影に時鳥ふる聲しるく鳴わたるなり

冬

花とのみ雪のみゆれば冬なから心のうちの春にやあるらむ
年ふかく降つむ雪をみる時こそしのしらねにすむ心ちする
降雪とまつしりなから匂はねとなかはすきては花と社みれ
枝の上に雪をおき年くらふ共誰かは梅にあらすとはいはん
雪の上に思ふ心はいちしるくつれなき人のめにもみえなん

春

よそにのみみてややみな山櫻花の心のよのましらひに
鶯の谷の底にて鳴聲を山ひこたにやつたへきかせむ
青柳のはなたの糸をより合せてたえずも鳴か鶯のこゑ

延喜六年六月廿一日壬生忠岑日次警使としてかとの

かはのにへ殿にあり躬恒宣旨かひの使として忠岑か
かへらむとするに此哥を送る

とむれととめかねつも大井河のせきをこえて行水のと
忍びて御をひかせ給を聞て

秋風のふきもてこすは白雲の天つしらへをいかてきかまし

七夕の朝に
棚機をあかて別し今朝よりもよるさへあはぬ我はまされり

八日の哥

行かへり今こん秋を戀そへてこよひ計りはあひやしなまし
ひをけの銘

夢にたにねは社みえめ埋火のおきゐてのみを明しはてぬる
火はしの銘

冬すきはなけおかれなん物故に君か手にはたたなるへら也
朱雀院の鶴のはかなくなるを

蘆たつのよはひはかなく成にけりけふや千年の限なるらん
わかれををしむ

君を思ふ心は人にこゆるきのいその玉もけふやからまし
さほかけ

何れ共思ほえなくに覺束ないさほかけにてひとめみしかは
くれのおも

いつしかとまつ夕暮の面かけにみえつゝみえぬもの侘しき
延喜十三年十月十五日内裏菊合に右大弁の仰により

て奉る

菊の花こきもうすきも今までに霜のおかすは色をみましや
初しくれ降をめしより菊の花こかりし色に又そはりぬる

もとよりの色にはあらねと菊の花色にいてゝも年へぬる哉
あたなれと我には菊の花のみてうつろふ色のこさ増りける
君がため心もしるく初霜のおきて残せるきくにそありける

たか ことり

おり立てうへすはありと殊更に秋のかりにはあはんとを思

人の家のほとりのやまの井

過かてに人はとまれと山の井の便りと思へは浅くそ有ける

月影にわきかたきよの白菊は折てもをらぬ心ちこそすれ

十月

紅葉はの落くる瀧はかけてのみたえぬ錦をほすかとそみる

散紅葉

風にちる葉紅の色は神な月からくれなるのしくれこそすれ

春

春にあふと思ふ心は嬉しくていま一とせの老そそひぬる
聲きけは老のまさるに人憎くきつゝのみなくよふことり哉

夏

五月雨の夜は暗くとも時鳥さやかにたにもなきてこぬかな
時鳥一聲なきていぬる夜はいかてか人のいをやすくねん

春

思ひをは松のみとりに染しかと花のかりのみゆくこゝろ哉

みのゝすけのくたるに送る

一日たにみねは戀しき君かいなは年の四年をいかて過さん

延喜十五年二月廿三日仰によりて奉る御屏風の哥み

つ

わか宿の梅にならひてみよしのゝ山の雪をも花とこそみれ

ちりまかふかけをやともに藤花池の心そあるかひもなき
時鳥よふかき聲は月まつとおきていもねぬ人そきける

延喜十五年三月廿一日左衛門督の家にて三河守のう

まのはなむけによめる

なにしおはゝ遠からね共みやき山是を手向のぬさにせよ君
くすり送る哥

別るゝか苦しき事もやまなくに何か薬のあるかひもなし

春

降雪に色はまかひぬ梅花香にこそにたるものなかりけれ

秋

秋風の吹ぬと思へはいてゝこし家地の方そこひしかりける

秋田かる所

み山田のおくての稻をかりほして守る刈穂に幾夜へぬらし

惜めともつひに散ぬる紅葉ゆゑふかぬ風にも物をこそ思へ

延喜十七年仰によりて奉る御屏風の哥雪の中の杉

雪の内にみゆる常盤は三輪の山山のしるしの杉にそ有ける

鈴鹿山

おとにきくいせの鈴鹿の山川のはやくより我戀わたるきみ

まとかた

梓弓いるまとかたにみつ鹽のひるあひかたみ夜をこそまで

網代のはま

鹽みては入江の水もふかやめの網代の濱によする興津なみ

うはせ河

うはせ河下の心もしらなくにふかくも人のたのまるゝかな

はり川

から衣ぬふはり河の青柳のいとよりかゝる春やみにこむ
たけ河

もみちはのなかるゝ時は竹河の淵のみとりも色かはるらん
わたらひ

玉くしけふたみのうらに住あまのわたらひ草はみるめ成晃
みつ

殊更に我はみつらんこさゝ原さしてとふへき人はなくとも
うさしま

いさやまたこの浮島に泊なん沈みてのみも世をふれはうし
なはい

なかはま

なか濱にいてしはたるゝ時鳥五月はかりはあまにさりける
此十首は延喜十六年四月廿二日わたくしごとにつき
ていせの齋宮にまかりける時則察頭國中をつかひに
て國々所々の名を題にてよませ玉ふのののぞみて

女郎花いかに思ふらん秋の野に一夜そねにし花のなたてに
はん

同十六年九月廿二日遠江介のせうそくに法皇明日石
山に御幸有べしいとまあらばけふ中にくべしと云々
仍まかりたれば屏風障子ありこれに所々のおもむ
きを題すべきとあればよのうちにかくべし其題も汝
かけとありいなぶれど

皇御舟にて瀬田にのぼらせ給ふ橋の本に舟つなぎて
介けふ物とも奉る介かたらひて舟にのりて御舟にぐ
してさぶらふべしと則此哥

いつみにて沈み果ぬと思ひしをけふそ近江に浮ふへらなる
その屏風障子に哥所々の題にしたがふ

足引の山への道はいかなれやゆくとみれとも過かてにする

我よりも先に生ぬる松なれば千とせの後にあはさらめやは

梅花さきてかひなき興つ波立よりてたにみる人もなし

あまのゝるたなゝしを舟あともなく思ひし人を恨つるかな
こそ

もしはやくあまのたく火の煙より思ふかたには立のほり鬼
はめかたに

山里に年はふれとも瀧つせのはやく我みし人たにもこす
かに

下にのみもえわたれとも打はへて我思ひをけつ人もなし

紅葉ちる秋ならずとも棹鹿は山のねたかく今もなかなかん
ね

紫の色しければ藤の花松のみとりもうつろひにけり
ふ

かへる鴈雲路のたひにくる時は何をか草の枕にはする
つぎ

さらしな山より外にてもなくさめかねつこの比の月
そ

雪の中に思ひをのふるさこの中將に送る

ほかにもや雪はふるらむ今までに春こぬ宿は花とたかみむ
に

延喜十八年八月十三日右大臣家八講おこなふ夜于時
佛法僧といふ鳥なく有感此哥奉る

あし引の 山にすらも このとりは 谷にやはなく
おほかるを たかき梢も

いかなれば しけき林の とひすきて 春夏冬の
もみちはの からくれなるの

あまたあれと羽打はふき きかせをめつる
に

時もあるを 君か秋しも

ふりいてゝ なくねきたかに

山にすら稀に聞ゆる鳥なれと里にも君か時よりそなく
あ

其人も君はつけしもせし物をいかてか鳥のかねてしりけん
と、御返し

法を思ふ心しふかく成ぬれば里にも鳥のみゆるなるらん
い

同年晦日夜雨の降をみて

おにすらも宮の内^{このうち}とてみのかさをぬきてや今宵人にみゆ覽
同年の九月廿八日殿上の人々ちぎりていちじく山の
ほとりに行てありけんなどちぎりしにさこの少將其
日になりてほのくさはりありてきたらす二首の歌
をつかひにつけて送る

いつしかと待しるしなき紅葉はの己^こかちなりやしなまし
宮人の數はしりにき女郎花^{つこ}いくらとはいいかこたへん
山のほとり尋ぬる道にそうのいへあり紅葉ちりしき
たりぜんざいに花すき風にしがひてなびく人を
まねくにたり源少將馬よりおりて

人しれぬ宿にな植を花すき招けはとまる我にやはあらぬ
そうにかはりて

今よりは植こそまさめ花薄ほにいつる時を人^{とまり}よりきける
夕くれに東光寺座主阿闍梨にあへり木のもとに庭を
敷池のほとりに灯をつらねてまつ人かめのゑひすす
むべきにあまたの盃酒あり一村の菊を家の前に植た
り感題て哥あり夜深てかへらんとする頭少將のより
馬を座主阿闍梨に送りてつきの夜乗てかへる

菊の花秋の野なからうつるはよふかき色を今宵^{るか}みましや
同年十月九日更衣たち菊の宴し給ふ其日さけのだい
のすはまの銘の哥女水のほとりにありて菊の花をみ
る

菊の花をしむ心は水底のかけさへ色のふかくもありける
同年十月十九日舟岡に行幸有し時に御乳母の命婦ま
へにめしてもみちは折て奉れとあり一枝折て此哥を

むすひつけて奉る

けふの日のさして照せは舟岡の紅葉はいとく赤くそ有ける
野に出たりける人を思ひやりてうちにて
語るをもきかまほしさ^きに秋のゝの花みにいにし人のこぬ哉
人のむすめのもきるによめる

此春そ枝さしそむる行末の千とせをこめておふるひめまつ
七日の日の朝美濃守におくる

君にあはてひと日ふつかに成ぬれは我彦^{けさ}ほしの心ち社すれ
かへし

あひみすてひと日も君にならねは棚機^もよりは我を増れる
同廿年二月廿七日遠江守の饅に右近少將にかはりて

別るとも君をしらねはけさまては散花をのみをしみける哉
かつらとさくら木とより藤の花のはひかゝれる哥

かつらより香をうつしつゝ櫻花なをうしろにも藤を咲ける
くれの春東國にわかるゝ人に送る

はる雨に君をやりては相坂の關のこなたに戀^なやわたらむ
春くれてさひしきやとはつれゝと庭白妙に花そちりける

人めをも今はつゝまし春霞野にも山にもなはたゝはたて
秋

ちくさにも霜夜^にはうつる菊の花ひとつ色にそ月はそめける
色とにみつ菊の花よるといひておほつかなくもてらす月哉

一もとの菊にはあれと露霜^そにわきてとゞ色はそむらし
いままてに相坂山の紅葉はのちらぬは關やさへてとめける
菊の花をりて夜深ぬ白露はわかつてなからにおきやしぬらし

白妙の妹か袖して秋の野にほにいてゝまねく花すゝきかな
秋の野の花みにくれば白露にしとゝにも我ぬれにけるかな
さやかにもてる月哉菊の花ひるのこと社よるもみえけれ

春

いかにしてけふを止めんをしと思ふ花の道より日は暮に覺
春霞立出て野へにこしかともおいて若なはつむ心ちなし

櫻花のとかにもみん吹かせをさきにたてゝも春はゆかなむ

春くれば吹風にさへ櫻花庭もはたれにゆきはふりつゝ

梅かえに雪のふれゝは何れをか花とはわきて折てかさゝん
雪とみて花とやしらぬ驚のまつほとすきて鳴すもあるかな

うちにて時鳥をさゝて

久かたの空ちかければ時鳥雲井の聲のとをからぬかな

春

をしとのみ思心にひとへつゝ散りのみまさる花にもある哉

春

驚のなきいにしかは梅花さけるとみしは雪にそありける
年にもなけとしるしもなき物をくれゆく春を何よふことり

春

濁江に生ふるすかこもみかくれて吾戀ふらくは知人そなき

大の川せきてしからみかけてのみ思ふ心をとゝめかねつも

とも角もけふ社きかめ後はいかゝあす共しらぬ身をは頼まし

おもひをのぶ

身をわふる涙がいまそいつみなるたかしの浦にみちし鹽哉

春

梅の花たゝにやはみん春雨にぬれゝそなほ折やしてまし

青柳のいとめもみえす春ことにはなのにしきを誰かおる覽

春霞立ながらよをあかしてはかりと共にそ鳴て歸りし

梅花いろはめなれて吹風に匂ひくるかそとこめつらなる
春のたつけふ驚の初聲を鳴て誰にかまつ聞すらむ
はるたちて日はへぬれとも驚のなく初聲を今をきゝつる

夏

老ぬれは頭にしろく卯花を折てかさゝん身もまかふかに
夏草はしけく日とに成ゆけとかれにし人のみえぬわかやと

春

年とにとゝめかねてそ散花のさきにもたゝぬくひをする哉

日くらしに雪とふらすは櫻花人にもみえてよにもをしまし
盛をもみる人ならは櫻花ちるゝかくおもはましやは

ひんかしの國に別る人に送る

足からの山ちはみねとわかれなは心のみ社ゆきてかよはめ
櫻花散なん後はみもはてすさめぬる夢のこゝちこそすれ

すかのねのななき日なれと櫻花散このもとはみしかゝり覺

春の日は暮やしぬらむ花をおきて歸らんとそ物うかりける
紫の色のかきは水底にみえつる藤の花にそありける

いかるかにけ

とそ共聞たにわかすわかなくも人のいかるかにけやしなまし

ゆふかみ

戀すれば瘦社すらめものこしのゆふかみしかく思ほゆる哉

あしぶち

おそき馬はあしふちならてあふれ共心のみ社さきに立けれ

あを

このめはる時になるまで苗代の青田になるもつくらさり覺

かすけ

棚機にわかすけふのから衣袂のみこそぬれてかへらめ
雑

かへる鴈雲井遙にきく時は旅の空なる人をこそおもへ
年に逢て我をきませる君をおきて又名はたし戀はしぬ共

君なくてふるの山へに春霞いたつらにこそ立わたるらめ
延喜七年五月晦夜内の仰とにより奉る哥

五月雨はこよひはかりか時鳥聲もやけふのかきりなるらし
おなしくは山ほととさす宮人のまつ時にやはなきてわた覽

春

よしの山雪は降つゝ春霞立はかすかの野へにそありける
散といへは人かと思ふ櫻花めならぬ色のまたしなけれは

夏

白妙にさける垣ねの卯花の色まかふまで照す月かな

秋

千年ふる尾上の松は秋風の聲こそまされ色はかはらし
秋ふかき紅葉の色のくれなるにふり出てのみそ鳴鹿の聲

年とにあきくる雁のたよにもわか思ふ人のとつてもなし
月をあかみおつる紅葉の色もみゆ散おとのみは聞えさきり

冬

神代より年をわたりてあるうちに降つむ雪の消ぬしら山
暮てまたあくとのみ社思ひしか年はけふ社かきりなりけれ

ちはやふる神かき山の榊葉は時雨に色もかはらざりけり
なくなりける女をこひて哥を送れりそのかへしに

初雪

黒髪の白く成ゆく身にもあれはまつ初雪をあはれとそみる

春

とさらに君はこしかと櫻花あかてそ今はかへるへらなる
藤のはなかけてそ思ふ紫のふかくも夏になりぬとおもへは

夏

時鳥けふとやしらぬあやめ草めにあらはらて鳴もこぬ哉
うは玉のよやふけぬらむはらへの河へ遙に千鳥しはなく

七日

久かたの天の河きり立時は機棚つめのわたりなるらん

雑

狩にくる野へはたよりに我宿をとふ人あらはなしと答へよ
秋述懷

かへし

草も木ももうへはかれ行秋風にさきのみまさる物思ひのはな
としけき心よりさく物思ひの花の枝をやつらつえにつく

ついでに

同年の八月十三日の夜左衛門督殿にてさけなとある
秋の夜の哀はこゝにつきぬれはほかの今宵は月なかるらん

あたらしく女郎花を植て
故里の野へや戀しき女郎花しはしはかりそ旅はくるしき

らに

秋風に香をのみそふる花なれば匂ひからにそ人につまるゝ
霧くもる道はみえすもまとふ哉いつれかさほの山ちなる覽

夏

五月雨にみたれて物を思ふ身は夏のをさへ明しかねつる
藤原遠中朝臣しなのへまかる人に

にしへ行月をしめは東路にわかるゝ人をまたいかにせん
 秋の日ぬしなき家をすくるに

何せんに菊を植けん生るまであらしと君かおもひける哉
 秋風におとはすれとも花すゝきはのかにたにもみえぬ君哉

雑

夢にたにさやかにみえぬ人故におほつかなる戀もする哉
 我戀はしらぬ道にもあらなくに惑ひわたれとあふ人もなし
 ひとりぬる人のきくにそ神な月俄にもふる初しくれかな

亭子院にかつらの木を堀て奉る時

みかくれてふけ井の浦に有し名は老の涙にそ現はれにける
 言のはを月のかつらの枝なくは何につけてか空につけまし

女郎花

主もなき宿にきぬれは女郎花はなをそ今はあるしとそ思ふ
 大空のかけのみゆるを山の井の底のふかきと思ひけるかな
 さはた河せゝの白いとくりかへし君うちへて萬代はへよ
 濱千鳥あとふみつくるさゝれ石の岩ほとならん時をまつ君

春

木のもとにこよひはねなん櫻花またよこめても散も社すれ
 草枕旅行人はたれならむしりらすともやとはかしてん

田舎の家の櫻

さくら花都ならねと春くれは色はひなひぬ物にそ有ける
 かりにきてたよりにをかは玉はこの道行ふりに花や思はん
 千鳥なく濱の眞砂をふみわけて行旅人はあはれたれそも
 かりかねを雲る遙かにきく時は旅の空なる人をしそおもふ
 いさりするあまの心もしらなくにひろひやを宣こひ忘れ貝
 梅かえにきすむあかすの鶯はなきまに花ををらせつる哉

香をとめて誰をさらさむ梅花あやなく霞立なくしそ

春の野に衣かたしきたかためかならぬ夢に若なつむらん
 わか宿の花のたよりにとふ人は散なん後にまよおもはむ

春くれと花の心もなき物をうたてもなくか鶯のこゑ

あちきなく花の便りにとはれるは我さへ仇に成ぬへらなり

とはるゝもあたにはあれと我宿の花の便りそ嬉しかりける

春霞たちにしものを今も猶よしのゝ山に雪のみそふる

五月雨のよも絶ぬよにつけてとてや晝から月のまたきみゆ覽

七日

天川つまむかへ舟さすきをのさしてはあれとしに一たひ
 明行は露やおくらん棚機にあまのはころも袖しほるまで

我のみそいつとしらぬ彦星はあはて過せる年しなれば

屏風の歌人の家海のはとりにある所

野へに社若なは常につむときけおきのみるめは時々そよる

行舟

波の上にほのみにえつゝ行舟はうら吹風をしるへなりける

やな

春のためうてるやなにもあらなくに波の花にもおち積る

女のある家におつる花をみる

花盛りこんとかいひし人よりもさきに櫻はちりぬへらなり

秋

聲にのみ散と聞ゆる紅葉はのよるの錦はかひなかりけり

冬

年ふかく積れる雪に跡たえて人かよひちのみえぬわかやと

除目の朝に思をのふ

都にて春をたにやは過してぬいつちに雁のなきてゆくらん

法皇六條の御息所春日にまうつる時に大和守忠房朝臣あひかたらひて此國の名所の和歌八首をよむへきよしきたらふによりて六首送る于時延喜廿一年二月七日

故里の春日の野への草も木もふたゝひ春にあふもしかなきくに猶かくしかよふと石上ふるの都もふかぬとおもふ春霞かすかののへに立わたりみちてもみゆる都人かな春日のゝけふのみゆきを松原の千年の春は君かまにゝ年とにわかなつみつる春日のゝ野守はけふや春をしるらん櫻はな雪も降なり三笠山いさ立よらんにかくるやと

花見

鶯はいたくな鳴を移香にめてゝわかつむはなゝらなくに

草合

櫻花わかやとにのみありとみはなきもの草は思はさらましあかすしてけふのくれなは藤花かけてのみ社春をしのはめ

つこもり

そこみえて流るゝ河のはやけくもはらふる事を神や聞なん

七月七日

けふの日は曇らさらなん久かたのあまの河霧立わたるへく彦ほしのつまゝつよひの秋風に我さへあやな人そ戀しき

八月十五夜

いつこにか今宵の月のみえさらむあかぬは人の心なりけりかりてほす山田の稻をかけそへておほくの年を積てける哉

忍ひてかよひ侍ける人の家の柳を思ひやりて

妹か家のはひ入に立る青柳に今や鳴らんうくひすの聲

あつさ弓春立日より年月のいにしかともおもほゆるかな

かりの聲を聞てこしのかたにまかり侍にし人をこひて

春くれば鴈かへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

月夜に梅花折てと人のいひたりければ

月夜にはみるともみえし梅花香を訪ねてををるへかりける鶯の谷の底にて鳴聲を嶺にこたふる山ひこもなしわかなつむ春日の野へは何なれや吉野の山にまた雪そふる

御屏風

水の面にうきてなかるゝ梅花いつれをあはと人のみるらむ今ははや根ありてなまし草のねのかはらてつひに春を待哉春のゝに心をたにもやらぬ身は若なはつまで年をこそつめ吹風を何いとひけん梅花ちりくる時そ香はまさりける春くればうつる心の色にいてゝあたにあやなく人に知るゝ

櫻見にまうてくる人に

わか宿の花みかてらにくる人はちりなん後を戀しかるへき

春の野にあたる駒のなつけには草はにみをもなさんとぞ思

足引の山吹の花山なからさくらかりにはあふ人もなし

いつれをかわきてをらまし梅花えたもたはゝにふれる白雪

いまゝてにちらすはあらむ梅花こき物とのみおもひける哉

わか宿にさきたる梅の立めくりすきてにいぬる人もみる覽

舟岡に花つむ人のつみ出てさして行方いかてたつねむ

しるしなきねをも鳴かな鶯のことしのみちる花ならなくに

花のちるをみて

あひ思はてうつろふ色とみる物を花にしられぬ詠めする哉

ゆきとのみちるたにあるを櫻花いかにせよとか風のふく覽

興風集

寛平御時中宮哥合に

古今春に藍原好風

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやちりけるとみん
春霞はな引野への若なにもなりみてしかな人もつむやと
櫻花ちくさなからにあたなれと誰かは春をうらみはてたる

春霞色のちくさにみえつるはたな引のへの花のかけかも
山風の花の香さそふ麓には春の霞をほたし成ける
きつゝのみ鳴鶯の故里はちるにも梅のはなにそありける

きたやすの親王后の御五十賀に奉給ける時の御屏風の
繪に梅花見たる所

いたつらにすくる月日は多けれと花みて暮す春をすくなき
聲絶すなけや鶯一とせにふたゝひとたにくへきはるかは
睦ましくかこひへたてぬ杜若誰かたにかはうつろひぬへき
折からに我名は立ぬ女郎花いさおなしくははなゝとみむ
ちきりけん心そつらき棚機の年に一たひあふはあふかは
白波に秋の木葉のうかへるをあまのなかせる舟かとそみる
木葉ちる浦に波たつ秋なれは紅葉に花もさきまかひけり
あたらしく我のみやみん菊の花うつらぬさきにみん人も哉
山河の菊の下水いかなれはなかれて人の老をせくらむ
寛平御時ふる哥奉れと仰ことありければ立田川もみ
ちはなかるといふ歌をかきて中におなし心を

み山より落くる瀧の色みてそ秋はかきりとおもひしりぬる
浦ちかく降くる雪は白波の末のまつやまこすかとそみる

君こふる涙の床にみちぬれば身をつくしとそ我は成ぬる
しぬる命いきもやすると心みに玉の緒はかりあひみてし哉
わひぬれば強て忘れんと思へとも夢といふ物そ人頼めなる
おやのまもりける人のむすめにいとしのひてものい
ひけるほどにおやよふといひければいそきていりけ
るにもをすてゝ入にけるかへすとる

あふまてのかたみとて社とゝめけめ涙に浮ふもくつなり晝
恨てもなきてもいはん人そなき鏡にみゆるかけならすして
我戀をしらんとならは田子の浦にたつ覽波の敷をかそへよ
思ひにはきゆる物そと知なからけさしも何におきてきつ覽
何かその名の立とは惜からむしりてまふは我ひとりかは
身をはかつおもふ物から戀といへはもゆる中にもいる心哉
身は捨つ心をたにも失はしつひにはいかゝなるとしるへく
たれをかも知人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに
鶯はあさむきやせん白雪の花とみるまでえたにふれゝは
うすくこき色は分ねと花といへは一つかほにもみえ渡る哉
あかすして過ゆく春に便あらはとしはかりの宿やからなん
山里は春のほたしにとちられてすみかまとへる鶯そなく
夏の夜の月は程なく明なからあしたのまをそかこちよせつる
夏の月光りをしますてる時はなかるゝ水にかけるふそたつ
秋のゝ露におかるゝ女郎花はらふ人なみわひつゝやふる
女郎花はなの心のあたなれは秋にのみこそあひわたりけれ
山の井は水なきとそみえわかぬ秋の紅葉のちりてかくせは
大空の月の光にあしからの山のこなたはあきにそありける
小倉山秋の紅葉は散にしをてりてそみゆるしきにしければ

あらし吹山のふもとに降雪はとくちる梅の花かとそみる
白波にをゆはへあまのこく舟は命にかふるみるめかりにか
夢にたに人の思ひにまかせなんみては心のなくさまん物を
涙川そこはかゝみにきよけれと戀しき人のかけもみえぬは
戀しとも今は思はすたましひもあひみぬ先になく成ぬれは
あひ見てもかひなかり覺うは玉のはかなき夢におとる現は
あしたつの何れの朝かなかさらむ思ふ心のゆかぬかきりは
夢にたにあひみぬなから消ねとや戀しきものこゝにせむ覽
なきわひて身を空蟬と成ぬれはうらむるとも今はきこえず
わひぬれは強て忘れんと思へとも夢てふ物を人たのめなる
うきてぬる鴨の上毛におく霜の消て物思ふころにもある哉
萎れてもあはれたとへて慰めしなからの橋も今は聞えず
戀しきに身もなけつへし慰むることにしたかふ心ならぬは
浦ちかく立朝霧はもしほやく煙とのみそあやまたれける
筑波ねの蔭におひにし里なれは光りのおほふ物とたにみす
雲の上にあと踏とむる濱千鳥行衛もなしとなきのみそする
みつれとも心もゆかぬ夢ちをははかなき物とむへもいひ覺
なけきころをのゝ響の聞えぬは山のやま彦いつちにしそ

群書類從卷第二百六十二

和歌部百十七 家集三十五

忠峰集

兵衛佐貞文か家の哥合に

春立といふはかりにやみよしのゝ山も霞みて今朝はみゆ覽

たゝみねおほせありて奉る

春雨のほとふるとも時にあへはひもとく花のつまと成けり

春日の春のまつりにみける女車の下すたれよりすき

てみえけるにつかはしける

春日野の雪まを分て生出くる草のはつかにみえし君かなもイ

はるの初に右大將の屏風哥

春さぬと人はいへとも鶯の鳴ぬかきりはあらしとそおもふ

はるのゝはおひぬ物なくみゆれとも思出草はなき世也けり

あつさ弓はるさめとにみゆるきのめもめつらしき鶯のこゑ

いとゝくもうつるいぬるか櫻花あなる人もみてこりぬへし

夏後撰貞藤原高經のよはあふなのみして敷妙のちり拂ふまに明そしにける

いたつらにをのか聲かとほとゝきす鳴ては人に恨みらる覽

から衣行かふ人のさしはへてくる里もあらし山ほとゝきす

暮るかともれは明ぬる夏のよをあかすとや鳴山ほとゝきす

夏夜ほとゝきすをきゝて

哀てふ人はなくとも空蟬のからに成まてなかつとそ思ふ

秋の夜月のいみじうあかゝりしに

久かたの月のかつらも秋はなほもみちすれはや照まさる覽

秋夜は人をしつめてつくゝとかきなす琴の音にそ明ぬる後撰秋中上人しらす

山田守あきのかりほにをく露はいなおほせ鳥のなみた也なきイ

これさだのみこの哥合に

松のえに風のしらへをまかせては立田姫こそ秋はひくらしねイ

神なひのみむろの山を分行は錦立きることちこそすれ

中宮の御屏風に

山里は秋こそことに悲しけれ鹿のなくねにめをさましつこひイ

風さむみ衣かりかねなくなへに萩の下葉も色つきにけり

もみち葉の流るゝ水の紅に染たる糸をくるかとそみるたきはイ

秋の野の女郎花を見て

人のくることやくるしきをみなへし霧の籬に立かくる覽

山さとに秋きり分てなく物は妻まとはせる鹿にそ有けるこみたかくイ

ある女につかはしける

あき風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人の戀しかる覽

しら雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ

后宮哥合に

女につかはしける

かきくらしふるしら雪のむら消にきえても物^{もの}を思ふ^{おも}比^ひかな

后宮の哥合に

みよしの山^{やま}のしら雪ふみ分て入にし人のをとつれもせぬ
むかしものなどいひし女のなくなりしか夢に曉かた
にみえて侍りしを

命にもまさりておしく有物はみはてぬ夢のさむるなりけり
我玉を君か心に入かへておもふとたにもいはせてしかな
もろくともいさ白露に身をなして君かあたりの草に消なん

女に

瀧つせにねさしとめぬ萍^{はらひ}のうきたる戀も我はするかな

難波なるみつゝ濱^{でふい}の夢にたにみつと思はむね覺せらるな

から國のきそのはまへにやく鹽の思ひはるけき我や何なり^{るい}

うれしくて後うき事^{もの}はぬるもに我身をはかる夢にそ有ける

鳥ならばあたりの木々に隠れるてほれたる聲に鳴まし物を

風ふけはみねにわかるゝしら雲のたへてつれなき君か心か

田子の浦に君か心をなしてしか^{異本} ふしてふ山も思ひ知せん

駿河なるうつ^{そい}の山への現にも夢にも君をみてやゝみなん

ゆめにたにつれなき人の面影をたのみもはてし心くたきに

かくてしも有へき物かゝさゝきの渡せる橋も隔たらなくに

かせさむみ聲よりはり行虫よりもいはて物思ふ我を悲しき^{まされるい}

たこの濱すさきのちとり心して底の玉もを我にもらせよ

吉野山よしよつれなくしのはれよ耳なし山のしらす顔して

日暮れは山のは出る夕月の〔星とは見れど遙けきやなそい〕

あひしりて侍ける人の身まかりにけるとき

ぬるか内に見るをのみやは夢といはんはかなき世をも現とはみず

雨ふれとみなと立出ぬ白鷺のぬれ衣をたにきせんとそ思ふ^{るい}

ある女に物いひたりときはかれし比

みちのくに有といふなる名取川なきなとりては苦^{わび}しかり覺

ある人のかりのたよりにつけて

かくれぬの底より生るねぬ繩のねぬ名は立てしくるな厭そ^{した}

世中はいかに苦^{いは}しとおもふらんこゝらの人に恨みらるれば

やまかき

露さむみよるやまかきのきりゝす聲ふり立て鳴増るらん

かるかや

さく花のはかなかるかや匂ひつゝ人の心をあたになすらむ

天津風ひろく涼しきおほとのに野へにならひて聲立なむし

かひの國へまかり申とて

君か爲いのちかひへそ我は行つるてふこほり千世をうる也

ひえ坂本なる音羽の瀧をみて

おち瀧つ瀧の水としつもあり老そしにける黒きすちなし^{にけらしな}

右大將の四十賀の屏風に夏

大あらしのもりの下草しけりあひて深くも夏の成にける哉

秋萩はまつさす葉よりうつろふを露の心はわくるとなみそ^{のい}

七月八日

けふよりは今こむ年の昨日をそいつしかとのみ待渡るへき

これさたのみこの家の哥合に

秋のよの露をは露とをきなからかりの泪やのへをそむらん

中宮の御屏風に山 ある所

かはつ鳴ゐての山田に蒔いたね君まつなへと生立にけり

あき人菊の露に袖ぬらして有といひ侍ける

おひきくの雫をおもみわか行にぬれ衣を社老の身にきれ

有明のつれなくみえし別れより曉はかりうきものはなし

ある女のいみしう心つらく侍りしかは

ひとりして思へは苦しいかにしておなし心に人ををしへん

女にはしめてあひていみしうあはれにおほえ侍しか

はその女に

思ふてふ事をそねたくふるしける君にのみ社云へかりけれ

中宮の御屏風にあまのかづきたる所

心さし深く水底かつきつゝむなくいつなおきつしまもり

あひしりたる人のみちの國へすまひのつかひにまか

るに

瀬をせけは淵となりてもよとみけり別れをとむる柵そなき

仲春中宮の御屏風に

春はなをわれにてしりぬ花さかり心のとけき人はあらしな

右大將四十賀の屏風に

にこりなき清たき川の岸なれば底よりさそとみゆる藤なみ

内侍督の左大將の四十賀にうしろの屏風によませし

千鳥なくさほの川霧立ぬらし山の木葉も色まさり行

これさだのみこの哥合に

雨ふれは笠とり山のもみち葉は行かふ人の袖かとそみる

内侍督の左大將の四十賀せさせ給し屏風に

夏草の上にしけれぬま水の行かたもなき我こゝろ哉

一人ゐる我數妙は鹽かまのうきたるなれやよるかたもなし

女のもとにつかはしける

月かけに我身をかふる物ならは思はぬ人もあはれとやみむ

友則がうせにける時によめる

折しもあれ秋やは人の別るへきあるをみるに戀數物を

いみにこもりたる人をとふとて

墨そめの君かころもは雲なれや絶すなみたの雨とふる鹽

あひしりたる人の住吉にまうづると聞て

住よしとあまはいふともなかるすな人忘草おふといふてふ

あひしりたる人ひさしうとはすしてまかりたりしに

うらみ侍しかは

すみの江の松に立よるしら浪のかゝれる時やねはなかる鹽

三月三日ある所にてかはらけとりて哥令ども

みちとせになるてふもゝはとしより花咲春に成そしにける

しほのなかりける夜よめる

鹽たてはなへてもからき世中にいかてあへたるたゝみ成覽

國にある所ゝのかたを繪に書てさひえといふ所に

かゝむとてよませける哥

年をへて濁りにせぬさひえには玉もかへりて今そ住へき

ふるき哥にくはへて奉るなかうた

くれたけのよ、のふると なかりせば いかほの沼の

いかにして おもふ心を のはへまし 哀いにしへ

ありきてふ 人まろこそは うれしけれ 身もしもなから

との葉を 天津空まで 聞えあけ 末の世までも

あとなし いまも仰の
 ちりの身に つもれる事を
 けたものゝ 雲にはゆらん
 おもほえす 心ひとつそ
 てるひかり ちかきまもりの
 くるかたに あさむき出て
 みかきもり おさくしくも
 うちにては あらしの風も
 ちかければ 春は霞に
 なきくらし 秋は時雨に
 せめらるゝ かゝるわひしき
 しるせれば いつゝのむつに
 わたくしの 老の数さへ
 としたかき ことのくるしさ
 なからへば 難波のうらに
 おほゝれん さすかに命
 しらやまの かしらは白く
 をとにきく 老すしなすの
 わかへつゝみむ
 ふるうためしゝをりにそへて奉る
 君か世にあふ坂山のいは清水こかくれたりとおもひけるかな
 梅かゝを櫻の花につけたらは思はずに行鳥あらましや
 むかし住し家にて時鳥を開て
 いにしへや今も戀しきほとゝきす故里にしも鳴てきつらん

秋の野の萩の白露けさみれば玉やしけるとおとろかれつゝ
 あき山をのぞむ 大井行幸
 秋山の紅葉みしまに日もくれて立田姫にや宿はかるらむ
 人ゝもろともにはまへよりまかりけるに山のもみ
 ちを見やりて
 いく木ともえこそしらね秋山の紅葉の錦よそにたてれば
 紅葉おつ 大井行幸
 色ゝの木のはおちつむ山里は錦にとめるなきな立らん
 秋風にくらふの山の女郎花こゝろをおもみあはれとそみる
 菊 大井行幸
 霜わけて咲へき花もなき物を色を残して人を尋る
 たひの鴈 大井行幸
 むかしより春立かへり秋はきぬいつこを旅の光といふらむ
 ひくらし奉る時のうた
 山里にわひくらしゝを九重のみ山いりして我はわするな
 左大將の御賀のうた
 鹽かまの磯のいさこを包みもて千世の数とも思ふへらなる
 女のもとにはじめてやる
 すまの蟹のたれる鹽釜もゆれとも人にしられぬ我戀ならん
 秋のゝに妻なき鹿の獨りふしふせとねられぬみ社すへなみ
 うしと云て怪しやなとかみをなけん生て有身のよとは増れり
 風吹は空にむらちる雲よりもうきて立する人はまされり
 侘人の衣のうらにくらふればふしの山へはしたこかれけり
 あひ思はぬ人の心は山なれやいはほよりけに動かさるなむ
 夢の路とこまとひなる世をへつゝ歎く詠めに世々をふる

一たひも戀しと思ふくるしさは心そちにくたくへらなる
しのひて女のもとにまかりて侍しにいくはくもなく
て明侍しかはまかり歸るとて

夢よりもはかなき物は夏のよの曉かたのわかれなりけり
くみゆるイ

筑波嶺の陰をたに見しかひもなく今はまつ山浪なとかめそ
とどめイ

みつねとよみかはせる

待程はたのみも深し夜をこめておきて別るゝとはまされり

かひの國にまかりたりしほとにたのみたりし女の人
に名立と聞侍りしを歸まうてきて

忘るれは又も渡らぬうき事の忘れゝのみもおもほゆる哉

二葉よりわかたてしを哀なるいくその秋にあはむとす覽

あきはかり泪かたくも成にし物かなしと深くおもはし
秋霧は立ぬをりありはれもせて降なん名をはいかゝ咎めん

いとまにてこもりゐて侍るに人のとはねは

大あらきの森の草とや成に劔かりにきてとふ人もなきみは
けるイ

藤衣はつるゝいとわひ人のなみたの玉のをとそなりぬる
けるイ

みつねとよみかはしける

身をしれは出る涙もあはれなり春のなかめはつねにふるゝ
のイ

同 哥

秋はつることは哀もまさりなん入ぬる月はよのまばかりを

同 哥

思ひやる心のほとははてもなし風のいたらぬくまは多かり

伊せのみちのすゝか河にて

名にはいへとたかにもすへの鈴鹿河せゝの浪社訝けかりり
かへぬイ

からさきといふ題を

いかて人たれからさきに渡りけむ水の面にあともつかぬに
大井の行幸

年ふかくねさし入江の松なれば老のつもるは波やしるらん
リイ

同 題

水かけをえにける松はいとしく波の上にやおひまさる覽
かしの木

あら玉の年こそまされ秋とにむかしの霧や今も立らん

躬恒とよみかはせる

鳥の子はかさねて暫し有ぬとも人を頼まんことのはかなさ

鶴すにたてり 大井行幸

眞鶴をたちゐなかせるかたのすに千年の跡を残さゝらめや
ちイ

鷹

山深みすかけせしより心有てまもりかへけるやかたをの鷹
かもめなれたり 大井行幸

白浪のこせともたゝす群あつゝ人になつかてみなれたる哉

うつせみといふ題をありはらのしけはる返し

袂より離れて玉を包まめやこれなんそれとうつせみむかし

陽成院の御つかひにしてかひの國にまかりたりしほ

とにたのみたりし女の人に名立と聞てかへりまうて
來て遣はしける

つイ

こそこのこゝろきのかかり 有しとき さきのすへらの
おほせにて 白雲まなる かひかねに さしつかはしゝ

時にわか いひしと葉も よひことに ちきりしとは

和田のはら ふかきみとりに ありそ海の あた浪立など

いふことは おり返しつゝ いひおきて 時雨とゝもに

ふり出にし まなこはちりに 立かへり あつまの道も
のイ

右忠峯集以肥後守經亮本掾合了

忠見集

御屏風に春よし野山に霞たてり

霞たつよしの山を越くればふもとそ春のとまり也ける

春日野所くやく

焼すとも草はもえなん春田野をたゝ春の日に任せたらなむ

石上山田つくる

看くねにまづそちみる石上めづらしけなき山田なれとも

もるやま

みくまのを野はせてはまゆふとる

みまのなナ
われい
すのす
い

みくまのゝ浦の落ゆふたか舟の何かはいくへつみてかへ

なかにのし

人しむす述しそぬいも椿なわや思なからに糸にいゐるかた

まかするを

秋すまの關あり

和一の関次このるに

高砂たひ人ゆく鹿たてり

鹿なくあきのあらしには

佐保山紅葉あり霧立ち

のもみちの錦いくらと

こゆるきのいそあまいさりす

きの蛋はあさりに変れつゝい

冬むさし野旅人たてり

行くらす旅のやとりもむさしのゝ草結ふよはおもはしき哉
浅香のぬま

月わたる浅かの沼の水清み夜は玉藻のなひくをそみる
やとイ

うさしま

おきつ浪よせはよせなん浮島に年ふる松をこゝなからみむ

こしのしら山

年ふれはこしのしらやま老にけりおほくの人の雪積りつつ

同御時御屏風に正月子日若なつむ

若などとおほくの年をわかつめは君そ子日の松にゝるへき

二月はつむまいなりまうて

戯の身にしあらねは稻荷山祈る日よりそさかはゆきける

三月櫻の木のもとにかちゆみいる

心にもいるひの弓はやまならぬ花のあたりに的そことふる

四月池の藤松にかゝれるをもてあそぶ

池近くうつりにけりな藤の花こゝのそこのといかて惜まん

五月時鳥なく山道に女車いく

深山いてゝ都へならは時鳥よひなきそへてことつてにせよ

六月河のはちすをり

みな月のなこしはらふるかみのと水の心はなきやしぬらん

七月七日川あむ

浪の立水のあやをもけふみれば七夕のともおもほゆるかな

八月相坂駒引

さやかにもみえずそ有けるあふ坂の駒よりみゆる望月の影

九月九日菊

萬代をわかゆるきくそをく露のまゆをひらくる時はきに覺

十月大井川井關に紅葉なかる

色ゝの木葉なかるゝ大る川しもはかつらの紅葉とやみん
とぞみるイ

十二月りんしのまつり

姫小松イ

ひねむすにみれとも飽す木綿つけて鴨の社におひやつかまし
かけイ

十二月なやらふ

年とにやらふなはして有つるを今年や終にゆきゝえぬへし

又屏風によしの山

みよしのゝ山のわたるを分くれは春のわたりに成にける哉

春日野のわかな

春日野の草はみとりに成にけり若なつまんと誰かしめけむ

井手に山吹ある家ありおとこ籬に立よりてせうそく

いはす

折てたにゆくへき物をよそにのみ見てやかたらむ山吹の花

返し

よそにても井手の山吹みきといふな語らは外に散も社すれ

難波に蘆舟あり

なにはかた行かふ舟のつなて繩くる社みえねすイ芦のまをなみ

さらしなにやとりとる旅人あり

更科にやとりはとらしをは捨の山まててらせ秋のよの月

筑波山に紅葉あり

常陸なる筑波の山のもみち葉のなにかかすとか露のをく覽

筑波山このまかのもの紅葉はは秋はくれとも飽すそ有ける

須磨の關

ときせちはすまのせきにもかはらねは都に秋の風や吹らむ
ぬイ

いなりまて

神のやとみつの社に祈すとけふより君か坂はゆかなむ

水のほとりにかくらする

水上のこゝら流れて行水にいとゝなこしのかくらをそする

ある所の御屏風に正月せちする

春かすみ立といふ日を迎へつゝ年のあるしとわれや成なん

二月子日に女の出たれはれいけさうするおとこあひ
てせうそこす

子日とも契らて君か野へくれは松に懸りて世をやつゝさむ

三月春おしむ所

人の身にきつゝはとまる春ゆへに惜こゝろのまとひける哉

四月いへの神まつる

年毎に祭らんとてはきねはみむいたゝくかみのしらけ行迄

五月五日菖蒲蓬家にふきたり

夜半にのみ鳴郭公おほつかな菖蒲とるへきけふはいつそも

七月七日ほしまつる所

彦ほしのかけを待夜はおほつかなほのかに照す月の入かた

八月駒をみる女車あり

みまほしと思ひし駒にひきむかへ君か車にあふさかのせき

九月九日に菊のわたおほひたり

花の香をけさはいかにそ君か爲まゆひろけたる菊の上の露

山里なる女におとこ来て物いふ

ゆふ暮になれは聞ゆるすゝむしを思ふはかりのたより成晷

十月うちのあしろに女車物みる

底深きしきつの淵に住すして網代によれるひをのみやみん
諸共にくれとかひなき網代かなよそ白浪にひをしへぬれは

十二月佛名する所

つみとかはめにしみえねは降雪のきえむ朝をみるはかり也

御障子の繪にふかき山に鶯の聲聞人あり

うくひすの鳴ねをきけは山深みわれよりさきに春は來に晷
霞立る山より瀧おつ

水上のわたにかすみたな引ははるのくるよりたきのしら糸

岸のほとりに藤花さける

手もふれてことに出れと藤の花庭にうつれる浪をおりける

柳櫻ある家

青柳の糸をそよれる櫻花はころひはてゝちらんよのため

霧立て紅葉の木ともかくせる所

いろゝの紅葉の錦霧立て残れるはしはいく木とかみむ

山里なる女鹿のねを聞て

妻こふるしかなくときに成に晷わかひとりねを誰に聞せむ

おきないねはこひをかする所

年とにかりつむ稻はみえくれと老にけるみそ置ところなき

麗景殿の哥合に左方にて霞を

あら玉の春をもしらて故郷は立田の山のかすみをそみる

風

かせ寒みこはれる谷のみつしもそ春くるをとくと待らん

若菜

ふりはへて君か爲にと春の野につめるかたみの若菜なり晷

あやめ

春雨は降そめにしかうつたへに山を縁になさんとやみし

うくひす

わか宿の梢をたかみ朝ほらけ鳴うくひすの聲ほのかなり

梅

香をとめて人も見にこぬ梅花まちくらしつゝ獨をるかな

柳

櫻

あをやきの糸はみたれて春ことに露のたまぬをとや成覽
おしむへき庭の櫻はさかりにて心を花にまつうつりぬる

山吹

山吹の花なき里の住るこそふりはへとをく出つとおもはめ
ふちいりてかつ
をそく咲藤の花ゆへいつしかと我さへまつにかゝりぬる哉

あはぬ戀いりてかつ

かきりなき戀をのみして世中にあはぬためしを我や殘さん

あひての戀いりて持

夢のとなとかよるしも君をみむくるゝ待まも定なき世を

右方をまた霞

あさみとり春をきぬとやみよしのゝ山の霞のおひそみゆ覽

若菜

春くれは若菜摘野そ思ほゆるかたみにもらぬ人のなければ

風

山河のなかれまさるは松かせや谷のこほりを吹てとくらん

雨ふりてぬる

春雨そ山のみとりは染でけるいさ今よりはぬれ衣きむ

梅

わかやとに梅の匂のみちぬれはおりてつめると人や思はむ

鶯

うくひすの初ねほのかにあし引の山へとひ出る聲聞ゆなり

櫻

我やとのものともいはし櫻花折てくらふる人もあらなん

柳

青柳のいとよりあふるほともなくとくしる物は月日なり覺

山吹

やまふきの花の汀に匂へはや澤に蛙のこゑ聞ゆらむ

藤

わか宿の松にひさしき藤の花紫野にはさきやしぬらん

あはぬこひ

くれとにおなし道にもまとふ哉我身のうちに戀はもえつゝ

あひてのこひ

別れてはくるゝもしらす戀しなは君やほとなき物と思はむ

屏風梅花ちれる所に女ともあそふ

折もあへす散ぬるむめの花によりよそなる人や我を恨みん

三月柳おほかる家

我やとのやなきの色も春くれはみとりの糸に成にける哉

八月十五夜の月にあそふ人あり

大空を照す月をはおきなからかつらの影はくらくや有けん

朱雀院の御屏風に

子日する野邊に小松のなかりせは千世の例に何をひかまし

おりゝの哥梅のつくり花を

梅花はる待わひて咲にけりいまは匂ひのそはる計そ

いつのおりとしらす

まつはたゝ千とせ社つめひく人は幾その子日かそへわた覽

行かへるほとさへとをき子日哉千世の松引かめのおの山

一もとをちとせはみてん松なれとあまた多くも引てける哉

ひきてくる千日の松の干とせを待^へみん君そ久しかるへき
ひく松にちとせわくとも龜山に残るよはひのおもほゆる哉
殿上の人々女藏人どもの松原に出て子日しけるを
宮人の子日する野を九重に霞の立^{たつ}とよそにみるらん

若菜

若菜調野にはからきもなかり晝まつにしるへき君に任せて
春をあさみかたみの底にみたね共君か爲にとつめる若菜そ

御前のさくらよませ給しに

朝もにはさけむ物を櫻はなけふより後やちりなから見む

さくら人のおらせて侍けるに

もろともにわれをしらねは櫻花誰かとも枝にしらすも有哉

人のこのさくらの折たる枝をもたるを

このおれる櫻のえたの残れるはあらし風をもあてしと思
木なからそみるへかりける櫻花折まにおほく散にける哉
櫻みるに有明の月に出たれば我より先に露を置ける

柳

ちる花をぬきもとめなん春くれはいとよりかくる青柳の枝

東宮御屏風山吹の繪に

井手にのみ有と聞えし山ふきの九重ちかく咲にけるかな
われを思ふ人そあるらし故郷にゐての山吹おりなからみつ
山吹をおるとはなしに夕暮の蛙なくまで立る霞か

鶯

うくひすの鳴こる聞は深山出て我よりさきに春はきにけり
六月になくを
尋きて聞は有けり鶯のなくなる夏とおもひけるかな

春の別をおしむ

春ゆかは花と共にしたひならんをくれは何の身にか成へき
はかなくも花のちり／＼まとふ哉行衛もしらぬ春に後れて
大空と山路をたのみ春くれはたひゆく雲を霞とおもはん

御前の前栽より螢の飛立を

いつちとか夜はほたるの登らん行衛もしらし草の枕に

菊の賀せらるゝ又の日

吹かせに散ぬるならは菊の花雲井なりともあひはみてまし

あまたあらはそふへき物を神な月残れる菊の限なりけり

菊の花うつらぬ枝のましれるをけふより後に霜はをかなん

すはまにすいへるつる立り

千歳ふる霜のつるをはをきながら菊の花こそ久しかりけれ

またやあるととふ人あれや菊の花かきりなしとも惜るゝ哉

住の江雪の松書たる繪に

住の江の松は老ぬと思ふらんかけにも浪のよりてみゆれば

山たかき瀧おつる所

水底のわくはかりにはくゝる覽よるひともしなき瀧のしら糸

初雪をみて奉る

はつ雪にけさはおきても思かなさても有つる我身ふりぬと

物にいく人にぬさやるとて

ぬさよりもなく／＼我そたくへまし涙を／＼くる手向有やと

別路をいつかたへ共しらぬ身は行人をこそとふへかりけれ
ぬさよりも我やゆかましみちのおくの忍ふ計のかたみ送に
遠ければ思はずとも忘れなにかたみをわけて送るまされり

露にたにあてしと思ふ人しもそ時雨ふるころ旅に行けり
をくれしといはぬ涙も手向にはとめ兼つる物にそ有ける

こしのかたへゆく人に

忘れすは人は越路と思へ共今はいかへるの山をたのまん
行道をうみちとのみは侘はてしかへるの山の松をたのみて

此哥三條のおほい后宮の御哥なり

旅人の露はらふへきから衣またきも袖のぬれにけるかな

物にまかる人にきぬさ給とて

君か爲なてしもしるく此たひの手向の神と成そうれしき

是もおなし宮の御哥なり

右馬助すけのふの朝臣信濃の湯にまかるに

あし曳の山くるしくて下るともくたりて山はひとり越なん

ある人の土佐へまかるに

月影に道のあひたはあかくともこよひは共に出んとそ思ふ

つのかみきたひらの朝臣きの國に下に中宮ぬき給ふ

朝に

都出て難波のかたに行人は住よしと聞浦にとまるな

但馬湯に人のまかるに

たちまちの手向の神もしらすして袖に霧たつ旅のぬき哉

いつこにか有けむかるかやを題にてよみ侍しに

白露のかるかやことにいさしらす草はも玉の櫛けならまし

美濃國にてかつまたの道（湯イ）を

此山の道のかきりとおもへともかつまた道は遠き成へし

播磨のこうにやとれるに時鳥のなくを

誰をかはこの山邊のほときす草の枕にたひくはなく

同國なるふなさかに

風おはぬ舟さか山はとし月もおなし所そとまり成ける
布引の瀧を

みねのうへに絶す雲のみ棚引は白くおちくる布引のたき

つくしにくたるにあきの國あこ山を雨のふるにこゆ

るとて

一たひもまたみぬ嶺にまとはぬは雨のあしこそ指南成けれ

しけみちの中將殿の所にきくをうへをきてうつろふ

まてまいらさりければ

菊ならぬ花にありせは散なまし植て霜にはをかせたれ共

はりまのゆめさき川をわたりて

わたれともぬるとはなしにわかみつる夢さき川を誰に語覽

藤原きよたか紀守に成て殿上おりてとし頃になりて

小貳命婦にやるにかはりて

天津風ふけ井の浦にゐるたつのか雲ゐに歸らさるへき

この哥ろくたふへしとあるにをとなければおとろか

し申

やそうらのいたく雲の物なれば久けれともまつは頼もし

昔かたらひ侍し人の年比ありてあひはへるつのくに

たまさかといふ所にあるにすむしの鳴けるに

たまさかにけふあひみれと鈴虫は昔なからの聲ぞ聞ゆゑ

津守なる人に

君か代に難波の浦は茂りあひぬあしかる事をせねは成へし

同人にも葉

難波津のあなたの事は住よしの年ふる松そしらはしるらん

伊豫に下るによしあるうかれめに

音にきゝめにはまたみぬ播磨なる響のなたと聞はまもか
返し女

年ふれは朽こそまされはし柱昔なからの名にはかはらて
田舎人なる家のやけたる見にまかりて

我宿は煙と成て雲井なるいつこそをさしてゆかむとすらむ

ある人のひたゝれえさせむとあるかうらをなむうし
なひたると申

住よしの岸ともいはてしら涙の猶打かけようらはなくとも
よそにみて歸るとて

雲よりくれはかなしき故郷をかりの道と思ふへらなる

と申ければ打かけてをみなへしになまみるをかけて
たまへるに
たまるに
かゝるに

みるめゆへ蟬にしたれと女郎花けふは我にそかつきをとれる

おさめ殿よりなつそ給へるに

空蟬はさもこそ鳴め君ならくるゝなつそと誰かつけまし

かへしよみ人おほく侍らす
えい

かゝるこころ
せみの聲くるゝなつそと思へとも秋も立やとなとかきさ覽

かりの子を奉とて

妨なくて親となれたる雁のこをみやたてしても思ふへき哉

ある所よりひめし有ける

きえねはや時にあはせん春風にあたられてわひし谷の水は
かい

ある人の山吹奉るに

春とをくあれともゐての山ふきは心のゆけは折なからみつ

うへのくちは色の御あふきにたゝつるのかたをおも

てにかゝせ給へるいまかたつかにあしてかゝせ
給へるに

浦に住鶴のあふきをわかかたの風かとのみもおもひける哉
なにそむる秋の扇を女郎花さきにけりともみゆる色かな

おほやけにさふらひし田舎へまかり歸るとて
さしにはい

いにしへのにきしはものか九重のきつゝかよふと思ふ心は
百しきをい

おほやけよりせにふたつ給へるを

鳩とりのかよふ水たにあさきせに浮へる鴨は二つつらねて

きぬ二疋(ふたむち)給はせて返事申せと仰られければ

昨日まで恨みし風は天空のうき雲はらふつかひなりけり

人のしら露とておらせたるを

白露に置きたるまゆみをし折ていかにつけとてみする成に

をのゝよしふるの朝臣の大貳にてもろこしのひとの

よすめかひておちつくもといはれけるにそのことい

ひ出したる人をさもいひけるにあひかはり侍りて

夢をこそねさめの程に語りけめみたてまてにも聞えける哉

つくしにまかりけるにある人に馬をかり侍けるにか

さゝりければ

夏の日の暮方に社あやしけれみのときもなくともみえねは

是を聞てなりくにの朝臣馬を給へれば

よそ人の馬にわか名は立はてぬこれにはつけむ物もなき哉

人にきぬかりて返すとして

濡さしとつゝみをととも大空のかはきぬなれは露やをく覽

津國に年比身をつめて侍けるに大やけきこしめして

めしあけられてよゐにさふらひてまかり歸りて又の

日少將ありとしの朝臣をして被仰たる

見しかとも誰ともしらす難波湯浪のよゐみて歸りにしかは
此返事にまかすへしとありしかは

住江の松とほのかに聞しかはみちこし鹽やよるかへりけむ
延喜の御時躬恒かさふらひける例にてみつし所にさ
ふらはせんと仰られてせしの三月までくらねは人

の許にいひやる

櫻花たかき梢のなひかすは歸りやしなをりわひぬとて
ある人に

折わひて歸らむものかたきかけの山のさくらは雲井成けり
そかつらぎのイの宮よりとて藤の花給へるに

いかてかはちらさてくへき藤の花風によりてそ浪も立らめ
はしめてめしあけられけるに

君か世にさか行へしと思ひせはしらまし物をたゝみねの道
あるみやす所のさつきたよりありてうへのきぬ給へ
りけるがうらなとやなかりけむ

浪高み寄へくもあらぬ舟なれや浦にもつけておき乍らみん
同御息所のまかて給けるにしはしとまりてある女の
出にけるに

すもりこも立にけるかとみるに社時はイかひなき身さへ恨有けれ
此返しうち有けるにつけて

有へくは人につつゝ今はなをたよりなきみと思ひける哉
返し

人にます心つかひもある物をたよりなくてふ事をつくさん
又かへし

いつこにか尋てあはむ身を分て君かゆるさぬ心つかひを
女に

よそにしてわふる涙に我ならぬ人はしくれと思ひなす覽

年かへりて同人のうらみたるに
いつかたに立よれとてか春霞おもはすにのみまづは知らむ
人に

誰ならん我名はかなイ乍ら願願イはるゝかくても終にあらしと思へは
はかなくてうきてみゆれと白雲の山にもかゝる心としらすや

水くきの行てかへらす成ぬるをなになかるゝ我身なる哉
傳にてもとひける物をはてもなくよりなき身とも思ける哉

人を思心のそこはいけなれやいひそむるより戀のつもれば
ほのか成聲許りにやきりゝすねなくに秋の夜を明しつる
音にのみ聞てわたらぬあふ坂の關のし水になかれぬるかな
そこにして深しといふは頼まれす淺くて影の絶せすもかな
ある御息所の御かたの人をかたらひて廿日はかりの
ほとにつき出してさとは出むとすると人のいひけ
れは

月影に道のあたりはあかくとも今宵はともに出んとと思ふ
雨のいみしうふるはしめたる人に

一度もまたみぬ道のまとはぬは雨の下こそしるへ成けれ
物いふ女のとをたてゝ入を見侍て

音に聞なるとのうらにかつてふあまや佗しき君をみる哉
とて道にてわたりける人にあひて

都にはありわひぬれは津の國の住吉といふかたへこそゆけ
京の人にひたり

つの國のわか頼めりし住吉にたより涙こそまなく立けれ
ふる哥めしけるにかさそへたりける

言のはの中をなくゝもとむれば昔の人にあひみつる哉

右忠見集以肥後守經亮本書寫校合了

曾禰好忠集

あらたまの年の日かすをかをふとて。すかのねのなかしとおもふ春の日すから。まなこをはかすむ山へにきはめつくし。心をはすくす月日にたくへつ。風にかたよる青柳の。いとまのひまもなきまでに。鳥のなくねをさけは。我も哀とよそに聞。花のゑめるをみれば。誰もおかしとみるらめと。人はかしこきかほをつくり。我ははかなき事をのこしをきて。花のちるはるのあした。木のはのおつる秋の夕。月のあきらけき夏のよ。風のさひしき冬のあかつきまで。おこなれと。おやのつけてし名にしおは。なをよしたと人も見るかに。

正月

春のはしめ

後拾 春のはしめ
みしまえにつのくみ渡る芦のねの一よはかりに春めきに覺あなし川ふる山かけて來春のしるしとけさは水をぬるめるなる瀧の岩間の氷いかならん春のはつ風よはにふく也
みねに日やけさはうらゝにさしつ驛軒のたるひの下の玉水
雪消はるくの若なも摘へきを春さへはれぬみ山邊の里雪きえし嶺の嵐の吹なへにけさ山河のみかさまされり
心より春のあらしにさをはれてとくる水やいつら成らん
山のかひ霞渡りし朝よりわかなつむへき野へをしそ思
香久山の瀧の水も解なくに吉野の嶺は雪消にけり

かものゐる入江の水うすらきて底のみくつもあらはれに覺
正月申

かつまたの池の水のとけしよりやすの浦とそには鳥もなくすまの蟹も今は春へとしりぬらし何處共なくなへて霞める春日野に村消のこる雪よりも今はいつまでふへき我身そひはらもる布留の社の神やつこ春きに覺としるらめやをもあらためし神の御てくらさせるかと澤邊に田鶴の群ゐたる哉けふりかと四方の山へは霞たちいつれのこのめもえ残る覽打震たつきもみえぬ春の、に聲をしれとやうくひすのなくね
新拾 片岡の雪まにねさす若草のはつかにみえし人そ戀しき
新古 片岡の雪まにねさす若草のはつかにみえし人そ戀しき

正月をばり

新勅 朝なきに棹さす淀の河長も心とけては春をみなるゝあさ日さすけさの雪けに水まさり世をうき橋の行衛しら波朝みとり山は霞にうつもれて有かなきかの身をいかにせんにははねとほゝゑむ梅の花をこそ我もおかしと折て眺むれ春とに澤へに生る芦の葉を年と共にそ我はつみつゝ梅つ河岩まの浪の立かへり春は花かとうたかはれつゝ
たか染し色にか有らん春くれとめなれすみゆる松の緑りは花みむと命もしらす春のゝに萩のふるえをやかぬ日そなき我みても春はへぬるをなよ竹のそれより先にいくよへぬ覽
やま里の梅のこ原に春はかりいほりておらん花も見かてら
ぬさもこか穴ささらき風寒みありしに増る心地かもする
中の春二月のはしめ

我宿の板ゐの水やぬるむらんそのかはつそ聲すたくなる
 さくきつにすかさほせり春とにゑりさす民の仕業ならし
 梅花こよひ嵐のやまさらはなけきてのみもあかすへきかな
 我みをはみる人すてゝすみぬを哀にもはたよふことり哉
 ゆふたすき花に心をかけたれば春は柳のいとまなみこそ
 木のめはる春の山邊をきてみれば霞の衣たゝぬ日そなき
 山かけのうつき垣ねに消殘る雪をそ花によそへつゝみる
 宮木きるをのゝ河原を見渡せはめもはるゝと淺みとり也
 あつさ弓春の霞はへたつれと入さの山の月そさやけき

二月中

かすかのゝわか草山に立きしのけさの羽音にめを覺しつる
 松か崎いづもみとりの色なるをいとゝし春は霞たちつゝ
 わか宿のもとあらゝの櫻さかねとも心をかけて見れば頼もし
 をたひつるかるものあまも春くれは浦ゝゝに詠をそする
 のほり船こち吹風をすくすとしてよをうしまとに歎てそふる
 煙り立春の浦ゝゝみる時そまたみぬあまのありかをそしる
 色かへすみゆるさぬきの松山も春は緑のふかさまされり
 あふものかたみをせはみ春の野の若なにつけて年を積つる
 荒小田のこそ古ねの古よもきいまを春へとひこはへに覺
 春山に木こる樵夫の腰にさすよきつえされや花のあたりは
 二月をはり
 新後拾
 たゆるよもあらしと思ふ春をへて風にかたよる青柳の糸
 かりかねぞ鳴かへるなる世中をうしとみつゝも秋は厭はて
 はるゝと浦々烟立わたりあまのひよりにもしほやくかも

花の時いきたらはみむ吉野の萩のやけふはなへてみつるを
 山櫻はやもさかな吹風にみねのしら雲立かともみむ
 わか苗を宿もる人にまかせ置て我は花みるいそきをそする
 春雨のふるのみやまの花見にと三笠の山をさしてのみこそ
 花にのみ妹かわさたに手もふれてふるすなからに暮す春哉
 鳴かへるかりの泪のつもるをや苗代水と人はせくらむ
 冬かひの手なれの駒も放ちてむ岡への小笹はへぬとならば
 暮の春三月はしめ

はゝこつむ彌生の月になりぬればひらけぬらしな我宿の桃
 花みるといとまを春の山にいれて木のもとに詠をそする
 わらひ生る矢田の廣野に打むれており暮しつゝ歸る里人
 道とをみ物うしと思ふ春のゝも花みる時そ心ゆきぬる
 あさなゝ庭草とるとせし程に妹か垣ねはうすらきにけり
 宮木野や焼生の萩も下葉よりもとあらに咲む花をしそ思
 花により今宵の風にいをねすはあやなくいもや心へたてむ
 かさなしに花見にきたるけふしめ四方の山へは木闇かり覺
 色みむと植しもしるく山吹のおもふさまにも咲る花かな
 櫻花みるに心のゆきぬれば春はいそきし名をそたてぬる

三月

聞の上に雀の聲そすたくなる出立かたに子や成ぬらん
 花さかりあまたの春を過しつゝ我身のならぬ歎をそする
 玉かきのみつのみなとに春なれば行かふ人のはなを手向る
 二葉よりみつゝなれにし花櫻何をうしとてかくすかすみそ
 雪かもとみれば櫻のたまらぬはさくほとなしに散はなり覺
 やま姫のゑてはさほす衣かと思えるまでにはふ岩つゝしかな
 花みむと古郷さして行道をなかひくほとに風もこそふけ

山隠れ風にしらぬ花しあらは春はすくともおりて詠めむ
わかために霞の花をかくせともあらき風にはしたかひに覺
たくひれのさきさか岡の躑躅原色てゐるまてに花咲にけり

三月をばり

道芝もけふははる／＼青み原おりる雲雀かくるへぬへみ
みそのふのなつなの華も立に覺今朝の朝なに何をつま／＼し
過ぬらん月日も知す春はた／＼淀のわかこもかるにてそしる
あらはにて焼ふにみえし春の／＼も草ふかけにも成にける哉
みほの浦のひき綱のつなのたくれ共長きは春の一日なり覺
やす河の早瀬にさせるのほりやなけふの日和に幾ら積れる
つはなぬく淺茅か原も老に覺しろわたひけるのへとみる迄
淺ちふも雀かくれに成にけりむへ木のもととはこくらかり覺
春ふかく成にけりとは住吉の岸の藤なみおるときをそしる
梅つ川春の暮にそ成にけるせ／＼のあせきに關もとめなん

夏

四月

梅津川 春のくれにし あしたより 庭の木陰は
ひまもなく もりの下草 しけ／＼れは 露もぬるけみ
をきわたり 風ものどけく なかき日の あくれは今日を
すこしかね 暮れはあすを なけくまに かきねに咲る
卯のはなの めも白妙に 色わかす 雪よりけなる
おもとしの ちふさのむくひ するほとに くる夏とに
あひくれと ときにしあはぬ みにしあれば草はをつめる
ともなく きい うきみひとつの つたなきを なをよした／＼と
名つけつ／＼ はく／＼むもの かなしさに 世を捨てたみ

ふるほとに もの／＼みいまは ほしけれと 夏のこゝろを
つくりたるかも

四月はしめ

榎後拾とる卯月なれは集になりぬ神山のならのはかしはもとつはもなし
見るま／＼に庭の草はは茂れ共今ばかりにもせなはきまさぬ
み草おひしあさかの岩る夏なれはたふさをひちて結くる鴨
夏の日ば空さへ永くなればにやあまてる影の過かてにする
時鳥ほのに初音を聞しよりよるとしなればめをさましつ／＼
野へみれは草わく許なりにけり我なはしろもおひやしぬ
夏引の自糸のてくりまたしきによるはみしかく成にける哉
世中のなり行さまも同じ事いつらはそこら立しかすみそ
三笠山さしてもみえす夏なれはいつこ共なく青みわたれり
かりにくと思ひし人の絶にしを草葉につけて忍ふ比かな

四月中

大荒木の下の草までに風ふけは靡きてかみを祀りあへるかも
みあれ引賀茂のみとしる引うへて今はとしのみ祈る計りそ
やほたてもかはらをみれば老に覺辛しや我も年をつみつ／＼
うつき原てこなか布をさらせるとみえしは花の咲るなり覺
河上後拾のあらふの池のうきぬなはうきとあれやくる人もなき
夏衣後拾たつた河原のこのかけに今はゆきつ／＼す／＼む計そ
かをかけは昔の人の戀しさにはな橋に袖をしめつる
夏のよの／＼ときき雨を足引の山の松風ふくかとそきく
芦風のはに隠れてすめは難波めのこやは夏の年こそ涼しかりけれ

夏あきの下葉の草のしけさのみ日とにまざる比にも有哉

四月をはり

なつ衣うすくや人の思ふらん我はあつれて過す月日をかきねには卯花うへむ雨夜にも我やと守る人とみるへくかりにくる人につけてそたはれぬる長閑き夏の草はなれ共蛙なくる手の若こも刈ほすとつかねもあへす亂れてそふる日くるれば下はこくらき木のもとの物おそろしき夏の夕暮よの中は浅茅か原もおなしことしけれ夏と何かたのまんなつかしく手にはおらねと山賤の垣ねのむはら花さきに晁すくもたくみほの浦人舟なれていくその夏をこかれきぬ覽野中には行かふ人もみえぬ迄なへて夏草しけり合にけり夏の日のかねよりも長きをそ衣ぬきかけ暮しわひぬる

夏中五月はしめ

後拾

みたやもりけふは五月に成にけりいそけや早苗老も社すれおりに立て忍ひによとのま蕪蒨あなましましぬ人のきかくに驚たてて五月の澤のあやめ草よそめは人の引かとそみる名にしおへはたのまれそする我戀る人に棟の花さきにけり菖蒲引賤のははかまぬれくゝて時にあふとそ思ふへらなる瓜うへし狛野の原のみそのふのしけく成行夏にも有かな詞花淡ち生る小野のしのはら草深みさゝの宿りを誰かしるへきそま川の筏のこのうき枕なつはすゝしきふしとなりけりとけてすらぬる程もなき五月雨にね覺かちにてあかす比哉入日さしく空蟬の聲きけは露のわか身を悲しかりける

五月中

山賤のはたにかりほす麥の穂のくたけて物をおもふころ哉わか蒔し陸葎の種をけふみれば干えにわかれて陰そ涼しき

大原やせか井のみ草かき分ておりやたゝまし涼みかてらにをたまくりかけて手引し糸よりも長しや夏のくるゝ待間は長閑にて涼しかりける夏の日も思ひあつかふもなきみはかりにても思へはこそは夏草のしけれの中を分つゝもくれ蟬のはのうすら衣になりしより妹とぬるよのまとをなる哉詞花きたりとてぬるまもあらし夏のよの有明の月も傾ふきに晁影清み夏のよすから照月を天のと渡る船かとそおもふみるイ我せこかきませりつるかみぬ程に庭の小草はかたまよひ晁

五月はて

小山田のみたえせしより天にます岩戸の神をねかぬ日そなきさゝら浪たつ山川は浅けれと深く成行夏にも有かな庭たつみなかれて人やみえくるとくもれば頼む夏のゆふ暮茜ねさす岩戸の山もみえぬへくめをさはめてもてれる夏哉花散し春の嵐をおしみ置いて夏の日よりにふかせてしかな庭におふるあさちか花をはやしけん昔の人そみねと戀しきこかるれと烟もみえす夏の日は夜そはたるはもえ増りける隙もなく物おもひつる宿なれとするわさなしに夏そ涼しき上そよく竹のはなみのかたよりをみるにつけても夏そ涼き手もたゆく扇の風のぬるければ關の清水にみなれてそ行

六月初

けふよりは名こしの月に成ぬとてあらふる神に物なるな人かく計草はも夏も深けれとあらはに置る浅茅生の露詞河上に夕立すらしみくづせくやなせのさ波立さはくなりかこはねと蓬の籬夏くれはあはらの宿もおもかくしつゝ里遠み作る山田のみもりすと立るそほつに身をそなしつる

新古今

蚊遣火のさよ更方の下こかれくるしやわか身人しれすのみ
夏はきのあさのをからとあた人の心かるさといつれ壇れり
こはなしによるはたみゆる夏むしの晝の有かやいつく成覽
なかりすらなめて夏を過す哉吹くる風にみをまかせつゝ
さゝら波立てをりくる水のあやは夏の河原の涼みころもそ

六月中

わかせこか夏の夕暮みえたらは涼しき程にひとよねなまし
うとまねと誰もあせこき夏なればま遠にぬとや心へたてむ
燃れとも煙もたゝぬ夏の日のあつきぬるさを忍ひてそふる
わきもこかひまなく思ふ聞なれや夏の晝まは猶そふしうき
年ふれは老ぬる人のしるかみを夏も消せぬ雪かとそみる
入日さしいつか夏の日もくれは紐打とけて妹とぬへきを
萩のはに風のそよめく夏しもそ秋ならねとも哀なりける
きてみよといもか家路へつけやらん我ひとりぬる床夏の花
夏河の瀬々にあゆとるますらはは我うき影を自らそみる
みそきするかも河風吹らしも涼みにゆかむ妹をともなひ

六月終

わきも子か汗にそほつるねより髪夏の晝まはうとしとや思
下紅葉秋もこなくに色つくはてる夏の日にかれたるかも
夏の池の水の面かくす蓮葉にたゝよふ露の身をいかにせん
妹と我ねやのかさとに晝寝して日たかき夏のかけを過ぎむ
隙もなくしけれ夏山路かな明ぬにこゆる心地のみして
むしのねもまた打とけぬ草村に秋をかねてもむすふ露哉
入日さし日くらしのねを聞からにまたきねふたき夏の夕暮
夏はかりかも河瀬に過してむ古郷人はこゝろをくとも

ゆく道をあやなくまたきとまる哉日暮しのねは定なき世を
村雲のうきてさまよふ大空を詠しほとに夏はくらしつ

秋

すゝみせし夏の暮にし ゆふへより 野への草葉を
かきわけて よもに吹くる こからしの やゝはた寒く
成までに 年月を思ひの 外に過しやり かひなき身をは
心のうちに 歎きつゝよを 長月の末迄に みゝにき
めにみる事を しるしをかは 露の命は きえぬとも
ゆく末水の たえぬとはを 流れての 秋の かたみともみよ
うちわたし岸へは浪にくつるとも我名はつきしあまの橋立
はじめの秋

七月

山城の鳥羽田のおもを見渡せはほのかに今朝は秋風をふく
ほたちする秋はきに覺おりそほち早苗東ねし袖もひなくに
遠山田去年にこりせす作置てもとせしまに妹はたかれぬ
空を思ふをとめの衣ひとひより天の河なみ立そよらん
新古今
おきてみむと思ひし程にかれに覺露よりけなる朝かほの空
朝ほらけ萩の上葉の露みればやゝはた寒し秋のはつかせ
秋をへて雲ぬにきゝは渡れ共波にくちせぬ天のうきはし
田子の浦にきつゝなれけむ乙女子か天の羽衣さほすやそ
我思ふ色にはさける撫子の露に心をゝかるへしやは
蟬のはのうすき衣しかはらねは秋きたり共おほえさりけり
七月中
我守るなかくの稻ものきは落てむらゝ穂先出にけらしも

久かたの岩戸の關も明なくに夜半に吹しくあきのはつかせ
 いつこへによなく露はをけとてか稻はを人の急きかる覽
 たかをける玉にか有らむ秋の野の草はをよきす置る白露
 我宿の門田のわせのひつちほをみるにつけても親の戀しき
 武藏野の岡への原の秋萩も花咲かたになりにけるかな
 くればとく行てもきかむ古郷に我を待むし鳴とつけたり
 木枯の秋と立にし其日よりいなはのそよといはぬ日そなき
 秋の野の草村とに置露はよるなくむしのなみた成けり
 共かみに岩にも種を蒔りせは秋の田のみをよそにみましや

七月をばり

我せなは妻こひすらし遠山田守るとつけて日數へぬれば
 秋風舊古のよにも吹くる立田山何の草木のをとは集のとけかるへき
 むつまじきいもせの山としらねはや初秋霧の立てへたつる
 人ならば語らふへきを思ふ事の薄はそこといふかひもなき
 秋かせの草はを分て吹くれと野へには跡もとまらさりけり
 こし人のおきて別れし朝より秋きにけりとしるくみてしを
 二葉にてねさししの秋くればよなかに成てね覺勝なる
 あれはありとなけしよそにみし人の秋風吹はそれる戀數
 おほひえやをひえの山も秋くれば遠めもみえす霧の籬に
 女郎花にほへる野へとみるなへにはたをる虫もよはに鳴也

八月上

くる鴈の夜半の羽音におとろきて野への白露をきぬる哉
 むしのねそ草村とにすたくなる我も此よはなかなぬはかりそ
 ねたるまも露や置つゝしほる覽引板うちかはて守る山田を
 我せこかわれにかれにし夕よりよさむなるみの秋を悲しき

くつわむしゆら／＼思へ秋の野の藪の住かはななき宿かは
 みし人のたのめしとをたのめつゝ秋をはよその物と社みれいけ
 とをつ山宮城か原の萩みるとあきははかなきたはれなそ立
 枝もたはに萎れぬるかと思ふ遠いくそかをける萩の上の露
 かみなひの三室の山をけふみれば下草かけて色付にけ
 打むれてと渡る雁の羽風かも天の河浪さはくらむかも

八月

とやみれば我夏かひのかたかへり秋きに覺とおはそしなへる
 さむさのみ夜とにまさるなよ竹の風にかたよる聲の悲しさ
 散つるもとこは山と成ぬへし秋のよをへてぬる人もなみ
 くまとにこゝらさやけき秋の月小倉の山のかけはいかにそ
 望月の駒すらとしにひかるゝを我すくしる秋を悲しき
 あしけなるおくての稻をまもるまに萩の盛は過やしぬらん
 後集 續後集
 はた寒く風は夜とに成まさる我みし人はをとつれもせず
 みとせおひの駒を手とになつてつゝ引くる秋の今朝の關風
 拾 我せこかきまさぬ宵の秋かせはこぬ人よりもうらめしき哉
 待よひの風たにさむくふかさらはみえこぬ人を恨ましやは

八月をばり

みちのくのあき田の山に秋霧のたちのゝ駒も近付ぬらし
 衣うつ碁の音を聞なへに霧立空にかりそ鳴なる
 秋風はまたきき吹そ我宿のあはらくせるくものいかきを
 かせによりうては衣を手のたゆく寒さに急く秋のよなく
 いさともをくさもかきに露ぬるゝ風に昇閑き秋のひよりに
 なげやなげよもきかそまの蜚くれ行秋はけにそかなしき

身に寒く秋のさよ風ふくらにふりにし人の夢にみえつる
我身こそいつともしらね中／＼に虫は秋をそ限るへらなる
いつしかも聲は絶せし樟鹿のをのかうきみの秋をしもなく
我せこかいたやのすゝこかけさけて絶ぬを待そ秋はよみなき

九月上

いとしくよを長月に成ぬればね覺かちにてあかすへき哉
よそみゝにしかのしらねをとこし聞しより秋は悲しき物と知にき
はやまきはゆふへになれはむらこ也誰をりそむる錦成らん
秋風のふくさ衣をとりみたりさほす程にそ寒きめはみる
評言人はこす風に木のはは誘はれぬちひてよなくむしは聲かはり行
住吉のならしの岡の玉つくり數ならぬみは秋そかなしき
み山には村ゝにしきひけるかと見るに付てもあき霧そ立
あつま山みのゝ中道絶しよりわか身に秋のくると知にき
老にけるよはひもしはものふ計菊の露にそ今朝はそほつる
まふしきし鳩吹秋の山人はをのかありかをしらせやはする

九月中

きゝす鳴かたのゝはらを過行は木のはももに色付にけり
わきも子か衣薄れてみえしよりたはれねせしと思ひ初てき
まねくとてたちもとまらぬ物故に哀かたよる花すゝきかな
きる人も世になき物は秋山に風の吹立にしき也けり
長月の秋のうれはに置露は花をしのふる鹿のなみたか
そならは山ともはやく成なんこゝらの紅葉散つもりつゝ
あしるもる宇治の川長年つもりいくそ月日をかそへきぬ詞覺
山里はかいとの道もみえぬまで秋の木のはにうつもれにゆき覺
くらふ山秋の月よにみればあかし峯は紅葉やいとゝてる

妹かりと風のさむさに行我を吹なかへしそさ衣の裾

九月をはり

我家は行ほとゝをしさほ風のしはしはをやめ妹も待らん
箱根山ふた子の山も秋ふかみ明くれ風に木のはちりかふ
新古入日さすさほの山への杵はらくもらぬ雨と木のはふりつゝ
弄干とやまなる正木のかつら色こきをみにくる人も見えぬ秋哉
秋ふかみ山のにしきもつきたゝはきる人なしにちりぬ計そ
我せことさよのね衣重ねきてはたへを近みむつれてそぬる
田上やせたの早瀬にやなさして寄年なれはうきねをそする
ともしすと秋の山へに入人の弓の矢風に紅葉ちるらし
篠おろすあとのはや水せきとめて暮行秋をみるよしもかな
秋はてゝ我せな君の絶えしより聞のよとをとりそたてゝし

冬

神無月時雨ふりくる みやまより風さへことに
をくれねは 四方の木のはの のこりなく なかむる空も
はれすのみ くもり渡れば なよ竹の なかきよなく
思ひあつめ くれたけの くれ行冬の ありさまを
心のうちに しふるもの くるしさに 人のそしりも
しらすして とはすかたりを あつめたるかも
耳に聞めにみる事をうつし置て行末の世の人にかたらん
冬のはじめ 十月

詞何事もゆきて祈らむと思ひしを社サに神無月にも成にけるかなはありて祈無月かな
しくれつゝ人めまれなる我宿は木のはの散を誰かとそ思
烟たえ物さひしかるいほりには人こそみえぬ冬はきに覺

のかひせし小笹か原も枯にけり今はわかこま何になつけん
同化
草かれの冬までみよと露しものをきてのこせる白菊の花
しくるれば待そ悲しき我宿のねやの板まのあふなければ
白露の凍らは玉と手に取てぬかれぬまでもぬきてみましを
長き夜にすたきし虫を厭ひしに今はあらしの音そはけしき
風早みつまこひなりし鹿のねをなと我上と思はさりけむ
平勅
露ばかり袖たにぬれす神無月もみちは雨とふりにけれ共

十月中

吹ちらす冬のあらしそうらめしき木のはをきぬと頼む山人
人つてに寒しと聞し風の音をわかうたゝねの耳なれにけり
増格
ひとりぬる風のさむさに神な月しくれ降にし妹を戀しき
詞
とやまなる柴の立枝に吹かせの音きく時そ冬はものうき
み室山木のはふりにし朝よりあらはにみゆる四方の玉垣
河上や笠きの岩屋けを寒み苔を藎とならすうはそく
とさおきめをみるイ
ねらひする冬のかり人待かねてをのか心に寒しとやおもふ
ふる郷の道は草葉もかれにけりこととし人はたふれしぬ覽
岩戸山よにあけかたき冬のよのあまの關守誰かすへけむ
更さぬと有しなからも冬のよのせなとしねなは寒か聲やは
十月はて

冬くれはおり立人もなかりけり有しにまさる水の上のあや

柴木たく庵に烟立みちて絶す物おもふふゆの山里
ふゆ集

草の上にてそこら玉のししら露を下葉の霜と結ふ頃かな
ふゆ集

さむからてぬ覺すしあらは冬のよに我待人はこすはこす共
みたれつゝ絶なは悲し冬のよを我ひとぬる玉のよはみ
ふちふのに柴かる民の手もたゆく束ねもあへす風の寒さに

さむしとて道は休らふ程社あれいもかりとたに思ひ立なは
すむねやも木のは隠れにせしわさも冬きて後そ顯れにける
蘆の葉の散にし日より難波江に通ふしなさをさしてみへつゝ
つはイ
鵜のちかふる橋の間遠にてへたつる中に霜やふるらむ
おく集

中の冬十一月上

新編古
龍眼木葉もとりに行へき神山のみちは雪にやうつもれぬ覽
藪隠れ雉子のありか覗ふとあやなく冬の野にやたはれむ
風寒くなりにし日より相坂の山の岩井はみくさおひにけり
こゝにたにかはかり氷る年なればかひの白根を思ひ社やれ
秋はてゝ時雨ふりにし我妻を冬のよすからこひあかしつゝ
ふ殿
楸おふるあとの河原のあさちへは殘らす霜にかればてに晝
あし鴨のきゐる岸へのふちよりも深く成行ふゆにもある哉
見渡せばこしの高ねを雪積りいさしら山のほとはいつれそ
冬はきて草はをからしはてゝ晝御狩の野守もるかひもなし
きてはイ
しつのめのあさけの衣めをあらみ烈じき冬は風もさはらす

十一月中

後拾
岩まには氷のくさひ打てけりもりこし水も絶てをとせず
たまのし水も今はもりこし集

新古
冬草のかれにし人の今さらに雪ふみ分てみへむものかは
は集

よは寒しね床はうすし古郷のいもかはたへは今を戀しき
新古

露霜のよはに起あてふゆのよの月みる程に袖そこほりし
新編

千早振かみなひ山のなら柴を雪ふみ分て手おるやま
のは

秋たにも風にうらみし葛のはのいとゝ枯ぬる冬そかなしき
のほ

かまと山雪は隙なくふりしけと火のけを近みたまらさり晝
ふりまけて集

おき中にこかれわたれと冬なれば浪路を寒みいそく舟人
のさかしイ

待かねて妹やねぬらむふゆのよはふけにたり共猶や行まし
久かたの空かきくもり時雨つゝこほりの隙もみえぬけさ哉

十一月をばり

さよ中にせな^こかきたらは寒く共はたへを近み袖もへたてし
けをさむみさえ行冬の終夜めたにもあはす衣うすれて
^{詞花}ふかくしもたのまさる^{ちなん集}覽君ゆへに雪ふみ分てよなゝそ行
炭かまの煙にみをやたくへまし我たらちめもさてそ絶にし
ひとりぬるわか身はあれて草村の野ら風よりも寒くも有哉
降ふゝき雪まもみえぬ冬の日はれぬ雲井に鴈を鳴成
おほ原やまきの炭かま冬くればいとまなけきの數やつも覽
小鹽山おのへの松の枝とにふりしく雪は花と見えつゝ
御鷹居ふゆ野を分る狩人のいつれの山かこまはかくさん
あたこ山檣の原に雪つもり花つむ人の跡たにもなき

くれの冬

十二月初

うはそくかあきなにきさむ松のはは山の雪にや埋れぬらん
あはなりし瀧のしら糸冬くれば解へくもあらず氷むすへり
君まつとねやの板戸を明置てさむさもしらす冬のよなゝ
み山には山の嵐^{恐有説}あらけ也椎の風おれいくそかくれり
山人の露とむすへる柴の庵雪ふみ分てたれかとふへき
しみ凍る木のねをとことならしつゝをこなふ人を佛とも成
うつみ火の下にうき身と歎つゝはかなくきえむ事をしを思
冬籠りきぬゝ山を見渡せははるゝよもなく雪はふりつゝ
寒ふり曇れる冬のはれすのみ盡せぬ物やまろか身のうさ
氷りするみはらの池の池つゝみおほはぬはこの鏡とぞ思ふ

十二月中

風さはきあられ降りしき寒き夜に何をあかすと結ふ氷そ
筑波山はやましけ山しけゝれとふりしく雪はさはらざり
冬やまの炭やき衣なれぬとて人をは人のたのむ物かは
雪ふればゆる木の森の枝わかすよるひる鶯のゐるかと思
^{氷りするイ}鴨のゐるすさきのみより氷とちよりこし波も沖におりつゝ
へつくりのかきねの雪をよそ人は鶴の上毛と思ふらんやそ
荒磯にあら浪立てあるゝかも君かれはたはなつかしき哉
とをつかはよしのゝ瀧を分くれは氷そあはと浮てさまよふ
^{新拾}みやこにも道ふみまよふ雪なればとふ人あらしみ山への里
大荒木のおほくの枝もなひく迄よはにさひしき冬のよの風

十二月をばり

年ふれはうはの玉もゝおひに覺からすのかみに雪積りつゝ
くゆりつゝ世に炭かまのけふたきを吹つゝもやせ冬の山風
にほとりの氷の關にとちられて玉もの宿をかれやしぬらん
すゝか川八十瀬の浪の音なきは氷やせゝに結びとめつる
鶯の行あはぬまの程さむみあかてわかれし中を悲しき
^拾太山木を朝な夕なにこりつみて寒さをねかふ小野の炭焼
鳥羽の上毛に雪の降りくはわかにはとりのふゝきかもとそ
數ふればこゝらへにける年月のゆきつもるらん方や何れを
いとまなみかひなきみさへ急ぐ哉みたまの冬とむへも云
玉まつる年のをばりに成にけりけふには又^ややあはむとす
^詞序
あら玉の年のみそちにあまるまで。春はちりほ^ふふ花
をおしみかね。秋はおつる木のはに心をたくへ。夏はうは

ひもさゝて風にむかひ。冬はさひしき宿にむもれるて。
 あれたる宿の隙をわけ。過行月をかそへつゝ。明ては暮る
 久かたの月日をのみもすくす哉。哀たつきありせは。百數
 の大富つかへつとむとて。すへらきのみかきにおもなれ
 て。あした夕になくさめましと。こゝろのうちになげくま
 に。朝には窓にさえつる鳥のこゑにおとろき。夕にはまか
 きにひらくるはなの色を詠つゝ。よもきの門にとちられ
 て。いてつかふるもなき我身ひとつは。うけれとも。ひ
 をむしのひをくらし。草はの玉のかせをまつほとなれば。
 水のあはよりも。とに春の夢にもとならず。きのふ見した
 からの宿も。今日は淺茅か原と露しけくて。あしたにかよ
 ひしたまのとはそも。夕には八重葎にうつもれて。空行雲
 のはてもなく。みしもさゝしも。なく成ゆけは。なかれて
 つきぬ水くきのあとにしるして。敷ならぬこゝろひとつ
 をなくさめむと。もゝちのかすをよみつゝけ。あまたのこ
 とにいひつらねて。しきしまのみわの社のふもとなる。す
 きくしくもなりにけれと。松の木の手とせふるも。つる
 にはかれくちぬるをや。あさかほのかたときにしもかれ
 うせぬれと。ひらくるほとを榮へとするをや。雲になくた
 つも。つゝにむなし。みそにはふむしも。心のゆくゑは。へ
 たてなしとおもひなせは。なにはなるあしきもよきもお
 なしと。すくもすかぬもことならず。なをよしたゝとつけ
 てけれと。いつこそ我身。人とひとしきとてや。

百首和歌

春十

きのふまで冬籠れりしくらふ山けふは春へと嶺もさやけみ
 くまもとにけふは春へと霞ゆくみねのわらひももえぬ曉やそ
 新勅
 卷向のあなしのひはら春立は花かゆきかとみゆるゆふして
 山さとの梅の蘭生に春たては木傳くらすうくひすの聲
 しらましや明にけり共春のよのねやの妻戸に朝日さゝすは
 我妹子かけきの朝いにひかされてせなさへ餘かひたゆき哉
 鴈かねそ霞をわけて歸るなる來む秋までの我身いかにせん
 花みつゝ春の山へに暮してん霞に家路見えすとならは
 庭のおもになつたの花の散はへは春まで消ぬ雪かとそみる
 たちなから華見くらすもおなしとおりてかへ覽のへの早蕨
 むはらこき手にとりためて春のゝの藤の若葉を折て束ねん

夏十

春霞たちしはきのふいつのまにけふは山邊のすくろかる覽
 新勅
 花ちりし庭の木のももしけりあひて天照月の影を稀成
 夏ころもきときになれと我宿に山ほとゝきすまたぞ聲せぬ
 せみののはのうすら衣になり行になと打とけぬ山ほとゝきす
 草まかふせな草苗を搦分ていとせしまに裳裾ぬらしつ
 夫木
 よそにみしおもあら駒も草駟てなつく計に野は成にけり
 五月やみ雲まはかりの星かとして花橘にめををつけつる
 くもりなき大海の原を飛鳥のかけさへしるくてれる夏かな
 みな月の名こしを心ふ心にはあらふる神そかなはさりける
 なつかしく吹來風にはかられてうはひもさゝて暮すころ哉

秋十

新勅
 さくら麻のかりふの原をけさみればと山かたかけ秋風ぞ吹
 秋かせの吹衣手のさむければかた敷かたに涙を立ける

止里の鶯の色へたてすは遠り人の袖もみてまし

同鶯の鶯かかせすしくなる時は誰か旅ねの衣かへさぬ

やまさにと葛はひかゝる松かきの隙なく秋は物そかなしき

夏萩のおふのしけりをみる時そ秋きにけりと程はしらるゝ

遠山田はなみ打過出にけり今は見もりも詠すらしも

みよしのゝささ山かけにたてる松いく秋風にそなれきぬ覽

ひとりもぬ風もやゝ吹まさる也ふりにし妹か家路たつねん

松風のうらさひしかる秋すらにわれをは人のしのふ覽やそ

冬 十

から錦山の木のはをきりたてゝぬさとは風を四方に手向る

しけかりし蓬の垣のへたてにもさはらぬ物は冬にさきける

楸生るひさのゝ原も冬くればひはりの床を顯れにけり

白雪のふり行冬をかそふればわか身に年の積るなりけり

かゝみかと氷とちたる水そこにくかく成行ふゆにも有かな

神まつる冬は半になりて覺あねこかねやにさかさきおしき

ふけるとて人にもみせむ消さらはあはらの宿にふれる白雪

いは山とゆふしてかけていのりこし櫛をしまみをける霜哉

うはまたらけさしも聞に見えたるはむへ社よはに袖はさえけれ

高瀬さす淀の汀のうは氷下にもなけく常ならぬよは

戀 十

由良のとを渡る舟人かちをたえ行衛もしらぬ戀の道かな

わきも子かゆたの玉すら打なひき戀しきかたによれる戀哉

戀佗て我ゆふ帯のほとみれば身はなきまでにとるへに覺

ましろなるおきのまは雪みる時そ妹かてせはゝいとゝ戀敷

やしほちの波の高きをかき分て深く思ふとしるらめやそも

味氣なし身にます物は何か有と戀せし人をもときしかとも

君こふる心はそれにくたくるをなと敷ならぬ我身成らん

君こふと忍ひゝにみを焼て風のあなつるはひとなしけむ

をたまきはあさけのまなわかとや心の内にものはおもはし

わか戀はつけてなくさむ方そなき何處も歎く同し世なれば

是は此天の下の神代より人の心の淺きかけさへ。しるき

山の井にみかねとよせし。なにはつにさきてにはへる花

と。おほくの人のくちのはに。覺る事をしるしたるなるへ

し。

ありへしと歎く物から限りあれば泪にうきて世をもふる哉

さかた川ふちはせにこそ成にけれ水の流は早くなからに

かすならぬ心を千々に碎きつゝ人をしのはぬ時しなけれは

やつ橋のくもてに物を思ふかな袖はなみたの淵となしつゝ

松のはのみとりの袖はとしふとも色戀るへき我ならなくに

かきくらす心の闇に迷ひつゝうしとみるよにふるを佗しき

けふかともしらぬ我身を歎くまに我黒髪も白くなりゆく

さゝ浪や長良の山のなからへて心にもものゝかなはさらめや

へしや世にいかにせましと思ひかねとはゝ答よ四方の山彦

みよしのにたてる松すら千代ふるを斯も有哉常ならぬよの

夢にても思はさりしを白雲のかゝるうき世に住むせんとは

るいよりもひとりはなれて飛鳥の友にをくるゝ我身悲しな

八重葎しけれる宿に吹かせをむかしの人のくるかとそ思ふ

まろ小菖しけれる宿の草の上に玉とみる迄をけるしら露

のとかにもおもほゆる哉常夏の久しく匂ふ大和なてしこ

ゐての山よそなからにも見るへきを立なへたてそ嶺の白雲
のちおひのつづくむ蘆のほともなきうき世中は住うかり晁

細後拾

あれはいとふなければ忍ぶ世中に我身一つはすみ侘ぬやは
さはた川流れて人の見えこすは誰にみせましせゝのしら玉
草深きふしみの里はあれぬ覽こゝに我世のひさにへぬれは
はな薄ほにいてゝ人を招く哉しのはん方のあちきなければ
人こふる泪のうみにしつみつゝ水のあはとそおもひ消ぬる

細十

とふとりの心は空にあくかれて行衛もしらぬ物をこそ思へ
おしからぬ命心になはすはありへは人にあふせありやと
思ひやる心つかひはいとなきを夢にみえすと聞はあやしき
もくすやく浦には海士やかれにけん咽たつとも見えず成行
故里はありしまにもあらずかと云人あらはとひて聞はや
もとつめに今は限とみえしより誰ならすらむ我ふしゝとこ
の飼せし駒の脊よりあさりしにつきすも有哉よとの眞薦の
かひなくて月日をのみそ過しける空を詠て世をしつくせは

詞集

さのえ

ふた葉にて我ひきうへし松の木のえたさす春に成にける哉
さのと

壇告

冬深く野はなりに晁あふみなるいふきのと山雪ふりぬらし
ひのえ

ひのと

あふくもや空に棚引渡る覽てる日のえしもさやけからぬは
かすならて思ふ思ひの年ふともかひあるへくもあらず成行
つちのえ

小山田のひつちのえしも穗に出ねは心一つに戀しとそ思ふ
つちのと

人をもみ世にはまつちのときは山みねの葛葉の恨てそふる
かのえ

いくよしもあらしと思ふ世中のえしも心になはぬそうさ
かのと

人のつまとわかのとふたつ思ふにはなれこし袖は哀増れり
みつのえ

行水のえにたにあらは藤川のなかれて人にすまさゝらめや
みつのと

近江なるみつのとまりを打過てふなてゝいなむとをしそ思
一日めくり

定なく一日めくりにくるてふ神のやしろやいつこ成らん
一よめくり

みし人よ巡りたにこはありへても野中の清水結ふとやみん
ひんかし

故郷のうしろめたさに打忍びむかし戀しきねをもなくかな
たつみ

涙のたつみしまの浦のうつせ貝むなしきからと我や成なん
細後撰

人は皆見しも聞しも世中にあるかはなきはなきかは
ひつしさる

袖ひつしさるも哀といはゝ社袂をふちとなしもはてゝめ
にし

さほ山のにしき成紅葉を風よりさきに見にやゆかまし
いぬる

山吹もまたちらなくに春もいぬ井手の蛙に身をやなさまし
きた

何もせて若きたのみにせし程もみは徒に老そしにける

うしとら

世中をうしとらいはゝかた時もあへりなむやと忍ふれば社

つらねうた

戀しさを慰めかてら心見にかへしてみはやせなか袖をも
おもひつゝふるやのつまの草も木も風吹とに物をこそ思へ

思へともかひなくてよを過すなるひたきの島と戀やわた覽
わたらんと思ひきさして藤河の今にすまぬは何のこゝろそ

圓融院の御子の日のひめしなくてまいりたりとてさ
いなまれて又の日奉りける

よさの海内外の濱は浦さひてうき世をわたるあまの橋立

と名は高砂の松なれと。身はうしまとに。よする白浪
の。たつきありせは。すへらきの大みや人と成もしな

ましの心になふみなりせは。何をかねたる命とか
しる。

はしたてと名は高砂の松なれとみは牛窓によするしらなみ
白浪のたつき有せは皇の大みや人と成もしなまし

しなましの心になふ身なりせは何をかねたる命とかふる
よさの海はひまのこまにはあらね共雲まを過す程そ苦しき

世のうきは春にそあはぬみ山へのむもれてゆかぬ谷川の水
谷川の涙のしほに朽ぬへし世にはからくて住のえの松

すみの江の松は緑の袖ながら名をたにかへは物は思はし
思はしや名をはうつまぬ世成とも煙とたゝはわかむ物かは

源順これを見てかへししたりとなん。

此比おかしき事あんなり。余社の海の天の橋立わたりよ
り。中絶てほとへにけるをいひおこし。しるもしらぬも。

耳にも目にも。おかしきときかせ。面白しとみせて。心の
うちに思ひけることを。言の葉にあらはし。思ひつゝへに

ける戀を。歌の内にそなへたる。その中にも。草のはの風
をまち。あさかほの花の夕ふるほとより。はかなきよと

あるを。みてしより。いしまの水の立かへり。あを柳のい
とをくりかへしみれば。心にそなへる百千の哥。ひとつす

つへきなく。あまたの言のはのうちに。くもの聲の空をみ
えす。なにはをみれと。人にまされることなしと。あると

のみそたかへる。螢をひろひ。雪をあつめて。おほくの
しをへにけれと。かひなき身もこそあれ。かゝれとなそ

や。あみのめすきたり共いはゝいへ。たれも千年の松なら
なくにといふを。けにはかなきも。かしこきも。千年の

後は。あちきなし。物いはぬ花鳥にも物をいはせ。心なき
草木を。心有かほにいひなしてたに。常ならぬ世をなくさ

めんと。おもふ心しもあれ。むねの水もとけ。心の思ひも
消。またさはのまつをのみきりて。月のかつらををらさら

むもくるし。花さく春もくれやすく。紅葉する秋もとゝま
らす。年へぬるみよりの袖の。忍ひにおつるくれなるの。

泪にそほちにけるを。春も秋も心うしとあれば。今は時し
らぬをはりを。うしのすみそめにやなしとましとそおも

ふ也。

春 十

山川の薄氷わけてさゝ浪の立は春への風にや有らん
うねひ山ほとかに霞立からに春めきにける心地かもする

東路の行かふ道のはるたゝは花みて心やらさらめやは
古道の雪ふりしきて此春はいさやわかなもまたを摘みぬ
見渡せは淀の若こもからなくにねながら春を知にけらしも
子日すとみし程もなく草枕むすふ計に野は成にけり
花ゆへに身をやすてゝし草枕ちゝにくたくるわか心哉
澤田河井てなる芦の葉はかれて陰さすなへに春更にけり
あし引の山よりよそに打みれは人待わたる春暮にけり
ともすれは歸る春をも惜む哉めつらしけなきとゝしるゝ

夏十

夜半を分て春暮夏は來にけらしと思ふまもなくかはる衣手
時鳥うゐたつ山をさとしらは木のまを行て聞へき物を
大荒木の小笹か原や夏を浅み旗巻く葛はうらわかみかも
いさせと小倉の山に家ゐしてみしかき夏のよをもうらみし
御被する賀茂の河浪立日より松のかけこそふかくみえけれ
ゆふやみにあまのいさり火見えつるは笹のしまの聲也けり
岩清水手にむすひつゝわかきぬる木の下陰もかれにける哉
五月やみ峯にも尾にも空蟬の鳴聲きけはたゝならぬかな
ゆふ立にやゝ暮にけり六月の名こしの被せてやすこさん
大かたに暮行かたをおしみ置て心のうちは秋をしと思ふ

秋十

秋霧の立つるすから心あてに色なき風そき衣にしむ

〔三疊〕

誰をししか行てみつ覽さは姫のひとはをほせる山のさかしき
花ゆ穂にいつとまたきつくなゆめ秋にまたける我きかなくに
山田もるそほつとも今は詠すなふねやかたよりほさきみゆめり
白露の萩のうらはにをける朝はかりの羽風もゆゝしかり晝
杳人のならさゝりせは秋山の軒はも今はもみちしなまし

忘れこし野中のつまはさほしかの聲きく時や思ひいつらん
神無月ちかつきぬらし思はすになとよも山の立かはり行
あさのをはあれとたつ覽かたしらすとしも秋を過しつる哉

冬十

冬きぬと人はいへとも朝こほり結はぬ程はあらしと思ふ
朝なゝ君に心をゝく霜のきくのまかきに色はみえなん
をし鳥の羽ふきやたゆき冴るよの池の汀に鳴こゑのする
さゝすなく野へになこひを冬こもりかるへき物か人の心は
神まつる櫛はさすに成にけり夕つくよにそ大ぬさにみし
神無月しくるゝたひの山ひこに紅葉を風の手向くる哉
暮行とよそのほのかに聞しかと我身をこゆる年ならなくに
あかねさす朝日に消る雪まよりきさしやすらんへの若草
春たゝは氷とけなむ沼水の下戀しくもおもほゆる哉
としの内に花咲にけり打忍ひ春ふく風にまたきちらすな

戀十

色に出は人しりぬへきをたえたの沼よりもけにうへそ難面
晝まなくよるはすからに絶すのみいしくの原のしけき我戀
かつまたの池のうら浪打はへて立てもゐても物をこそ思へ
うつゝにも身は數ならは云へきを夢の中にも人めみしゆへ
偽にありはすらめとわかさくに思ふといふをえこそ厭はね
時のまもゆくめつらしに思はへてみまくほしさに誘れに晝
袖におつる玉はいくらそちりすらも積れは山と成と云物を
あまの原をちこちにすむ七夕もわか物や思ふらんかも
忍ふれといくその神のつみなれや忍ひもあへす戀まさる覽
戀わひてへしとそ思ふ世中にあらぬ所やいつこ成らむ
これはあさかやまなにはつ

あさましやあさかの沼の櫻花かすみこめてもみせずも有哉
さはた川瀬ゝの埋木あらはれて花さきにけり春のしるしに
かをとめて鶯はきぬたな引のかくすかひなし春の霞は
宿ちかく櫻はうへし心うし喉とはすれとちりぬかつかつ
まさもくのひはらくく社おもほゆれ春を過せる心ならひに
蚊遣火の下にもえつゝあやめ草あやめもしらぬ戀の悲しさ
けふよりは夏の衣になるなへにひもさしあへす子規なく
さみたれて物思ふ時はわかやとのなく蟬さへに心ほそしや
へつくりにしらせすも哉なにはえの蘆を分て遊イふ鶴の子
みとりなる色こそまされよとにも猶下草のしけき夏の
行雲のはたてよりこそまづはみれ秋の初になれるけしきは
るりの壺さゝらぬさきは蓮葉にたまれる露にさもにたる哉
やそしまの都とりをは秋のゝに花みて歸るたよりにそとふ
待とをに思ひし秋は更にけりしるくそみゆる萩の下露
のもやまもいるかはり行風寒みいかて尋ん忘にしせこ
井せきよりもる水の音の聞えぬは冬きにければ氷すらしも
のきはなる梅さきぬとてはかられぬ人たのめなる雪や何也
あら玉の年暮行は老にけり心ほそくもみゆるくものい
さす草もえぬ覽やそ春きては若菜摘むへきふちかたの山坂夫
くる春は何をしにかみむ梅花ふるとしなから散行みれば
はるかなる人まつとは忍ふれとしるくやみゆる我衣手は
一度も物をわかなく思ふにはむねも千々にそ碎くへらなる
ときのまも心もこゝろ戀しきは後うき物と人をこそ思へ
鶯鷺のみなるゝ言はつれなきを下くるしとはしらるめや人
思ふともおもはずといひて味氣なく人を恨るものわりなき
もる山になけきこるみはをとめて煙もたえぬ思をそたく

吹風の便りにとはむ玉たれのみすもうこかは我としらめや
物思ふに苦しきよはゝさし置つあけはみにまさせさし櫛の箱
長閑なるとき社なけれ富士の山いつかはたえむもゆる思の
かく戀ん物としりせはひとめみる人に心をつくる身なれば
はつかしに人に心をつけしよりみそかなからに戀わたる哉
きのえ
たこの浦のまつりとひと百敷のえらひに入てなれる成へし
きのと
小夜更て何か戀敷のとかにて年へはしるしあらさらめやも
ひのえ
心にもうしとぞ思ふ我戀のえらはぬやなそよきもあしきも
ひのと
きのふ迄冬籠れりしかまふのに蕨のとくもおひにける哉
つちのえ
籠るのこをしなくかは思みつちのえあはねは有にそ有らし
つちのと
風吹はゆるきの杜のひとつ松まつちのとりのとくら也けり
かのえ
花のかの枝にしとまる物ならは暮る春をもむしまさらまし
かのと
心うし深きやまにも入にしかのとかにをりてうきを過さん
みつのお
春立たは先松植しこゆみつのえすはさひあしきてや止なん
みつのと
一目みつ長閑に今は有へきをあふにかへたる命とやいはむ
一日めくり

わか一日めぐりく^{ら歌}せし程にしきまひする年はきに晁

一よめぐり

みちの一夜めぐりかへし文を猶さへ有ものそいて立もする

ひむかし

つらく共わすれすこひむかしまなるあふ隈川の逢瀬有やと

長巻

たつみ

霞たつみむろの山に咲花は人しれすこそちりぬへらなれ

みなみ

いなり山みなみし人をすきくに思ふくとしらせてし哉

ひつしさる

戀するに衣手ひつしさるかひのあらは絞りてみすへき物を

にし

玉篋

いさやまた戀にしぬてふともなし我をや後の例にはせん

いぬる

きてはいぬるては長閑にゐもあへす猶人妻はかひなかり晁

きた

よのなかにかはかぬ物は戀くてぬるしきたへの枕なり晁

うしとら

浅茅生のなをうしとらはふすなれと秋は人より先にかるれば

このほかよしたうかうたとはあり

詞花

水上のさためてければ君か代に二度すめる堀川の水

物かたりつくとくところにてよめる

拾遺

わかとはえも岩代のむすひ松干とせはふともとけしと思

を

誰かといへき集

すはへする小笠かはらのそよさらに人わするへき我心かは

右曾丹集以三本校合丁

群書類從卷第二百六十三

和歌部百十八 家集三十六

櫻井基佐集上

春

長閑なる比龍泉寺へまかりけるに哥よむ人々方丈に
あつまりて野霞といふ事をよみ侍ける

山よりもおほ野をかけて春霞たつとみしより草ももゆめり
おなし心を或人のよめりける

びと霞野中の庵にたな引て煙にまかふあさあけのそら
霞にかくるゝ舟をよみ侍りける

へたてつる船はあはちの鳥さきや霞かくれに帆さき見え
初聞鶯

かすかなる谷の戸さきも鶯の今朝のはつ音に氷とくとは
きさらきのはしめに久瀬の家のみさかりなりけるを

物こしに見侍りければ折ふし兒侍出て哥よめといひ
て袖をひかへければとりあへず

梅の花香こそはあらめほゝゑみていかに往來の人にみゆ
曉梅鶯といへる事を

山かつらまた星かけに鶯の羽たゝきて鳴梅の枝末に
道利入道の暫端の梅咲けるに鶯の鳴けるをきゝて

鶯の聲におとろく梅の花枝末まはらに咲初にけり
又一日ありて入道かくよみて梅に付侍りける

鶯も匂ひによるや我宿の梅におちくるあさなくに

或所にて軒梅を
梅か香のしのひくゝに軒の妻さをひて入しこすの追風

かきねの梅の雪を

匂ひくる梅かゝおほふ淡雪のをのかはたへにとむと成へし

坊門の宰相の家なる柳風にみたれていと面白かり
けは

枝からそなかめもふかき青柳の風にとはれて心みたせり

川柳

えたたれて水せきとむる河風にうつ白波を花とみるかな

池柳

池水のみきはのかたの青柳は浪にもまれて露やまくらん

朽木柳

たふれふすくち木の柳一かたにかすゝくすむすゑの若枝

やよひのはしめつかた常にしたしみ侍る人の御枝と

いふ所に住侍りけるかこゝちなやましくて既に身ま

かりぬへくおほゆれは今一度うき世にあるうちにみ

まくほしきなとかきて文おこせておくに

春風にさそはれやせん櫻花ちらさるうちにみむ人もかな

いとゝあはれにおほえて返しをかきておくに
またしとそおもひし物を櫻花ちりかゝれるときくはまとか

芳野の花さかりなる頃二三人うちつれてまかりて終日詠暮して

芳野山花の盛は寒けくみるから雪のこゝちこそすれ常之入道

吉野山かつちる櫻袖とめてはらへは花の雪にまかへり

南園堂にまうて侍れば花の盛にみえしほとに

補陀樂の淨土は春にあらはれて枯たる木にも花や咲らん

折早蕨といふを

春の野の芝草分てわらひおる賤か袂の隙もなきかな

岡のわらひといふをよみ侍ける

袖はへて人はならしの岡野へに暮かたかけて蕨折なり

或人の家にて歸る鴈をよめる

春くれは霞を分てとふ鴈のこし路のかたへ羽むけするなり

遠山鴈

雲を凌ぎ遠山こえて歸鴈梢かくれに跡きえにけり

曉歸鴈

かへるとて曉かけて天のはら行かりかねにめをさましつゝ

おなしこゝろをよめりける

越路へとかへりし鴈の跡はたゝすちりもちりと霞消行

花

よし野山花の盛に山守へ一もとゆるせいへつとにせむ

同

櫻さく頃はたちこむ花のもと袖ひきはへてちるをかきりに

花を待心を

春は花遅しと山路狩くらしちりてのちは心いかにそ花をたつぬる心を

(の脱野)

花みむとたつね往來の人毎にかなたこなたと問かはしけり

花を狩といふ事を

花咲と散まて我は狩くらしのちは心にのこる花の香

落花

櫻花はなの白浪たつときは風をうらみぬ人はなかりき

葦

いくしほか春雨そめつつほ葦ふかき色をはわきてこそつめ

或人の歎冬を瓶にいけをきけるをみてよめりける

河岸の八重山吹もおりくれはかめの日にも咲とみてまし

夏

更衣のこゝろを

春もすき夏きてかふる薄衣ひとへにかろき我身とぞしる

内大臣の屏風とてすなこまかせたる繪に山さとの賤

かやのまかきに卵の花のさかりなるかたを書て花の

もとに旅人二三人たちよりてみるところをかきはん

へりけるに

朝露にしつえたはゝの卵花は行かふ人のめをやとむらん

又月の夜の卵花といふことを

白妙にかつみえわたる卵花の光は月のかげにまかへて

卵花誰家といふを

咲みちし垣ねのかたの卵花にあるしはたそと問れこそすれ

菖蒲草と云ことを

幾歳をかけてふくらん菖蒲草けふはねこめに軒をふきつる

池のあやめ露ふかき心を

露ふかき池のあやめを引人の袖にあまるは玉かとそみる初聞郭公を人々よみ侍りけるに

この頃と待夜かさねて杜鵑今朝といふけき聞そめにけり
隔山聞時鳥

嶺たかくかすかにきこゆ時鳥吉備の中山よこに鳴なり
ほとゝきすをあやめによせて

あやめふく軒に鳴ける時鳥ねをはなくもひけと思へり

杜郭公

いつくより鳴つゝくらむ時鳥老曾の杜にしはしやとりて

たつぬへき人ありて酸酏へまかりけるにほとゝきす
の鳴をきゝて

とめはやな音もめつらかに郭公過かてになく聲をしそ思ふ
侍従といへるうつまさへまかりけるに道にてほとと

きすをきゝてたゝ一帝といふことをよめりける

空たかく鳴過けりな時鳥たゝ一聲とかすかなりける

郭公の初音をきゝて

朝あけに聞初にけり子規いかに思ひてこゝら鳴らむ

相模坊といへる人哥よむ人にておはしけるかほとゝ

きすのはつゝをきゝてよみ侍ける

時鳥またうらわかき初聲はまたさとなれぬしるしとを聞

窓のもとにひとりこゝろをすまして侍りけるおりふ

し時鳥のなさわたるをきゝてよみ侍りける

ねかはしなわかある園に時鳥心のまゝに聞よしもかな

或人の家にて

あまひこのゝるかたに子規雲のよそをや鳴て過らむ

或人の家にて雨中の時鳥といふとをよみ侍りける

晴やらぬ雨氣の空に時鳥いつこをさしてふりてゝは鳴

三束宗俊の家にて人ゝ哥よみけるに曉の子規をよめ

る

郭公曉かけて鳴聲をかた耳にきく枕つらしな

待時鳥

ほとゝきす曉かだの一聲を夢うつゝともわかつて過けり

朝のほとゝきすといへるを三位中将よめりける

朝あけに鳴て過ぬる時鳥聲はさたかに聞おほせけり

夜のほとゝきすを定教と云人よめりける

夜はすてに更ぬと思ふに時鳥あはやときけは聲消にけり

或所にて時鳥遅しといふ心を人ゝよみ侍るによめる

時鳥なく頃しもになかされはあさな夕なにつかふ空耳

待ほとゝきすを人のよめといひければとりあへすよ

み侍りける

子規鳴もやすると曉にまたぬ八聲に鳥の音を聞

池上の草庵にまかりて一夜をあかし侍りけるにつら

ねうたよもすからにのみて遊びおるおりふし時鳥の

鳴ければ

橘のほひによるや時鳥鳴て過ぬる聲そかはれる

ほとゝきすまたぬ人はなしといふ事をよみ侍りける

夏くれは世はをしなへて時鳥聲に思はぬ人はあらしな

ある女のよみ侍りける

いく聲もきかまほしきに時鳥今一聲となと思ふらん

或桑門のよみ侍ける

郭公かたらひくらすあた人の野路と山路と送る夏の日

播磨守といふ人小野にしはらくこもりて侍りけるを

したしき人三人はかりともなひてとふらひけるに山

にて聞時鳥と云とを人々よめりけるによみ侍りける

時鳥とを山かけてなく時はいふきの山のそま人をきく

近聞ほととぎすをよみはんへりける

庵近く名乗そならは時鳥あすもきなけと思ふ計そ

野ほととぎすといふことを藏人少將よめりける

廣き野の草の茂みにおりはへて鳴郭公心ありやと

卯花

闇の夜もはれやかなれや垣はなる卯花月のてるにまかせて

松井の下里によりて人々哥よみけるに卯の花を

夕風にゆるきの杜の卯花は神を祈の四手かとぞみる

卯花風にちるといふを別當阿闍梨よめりける

篠かきにさく卯花を夕風のちらすなおしとらみこそすれ

六條念西院にて哥よむ人々あまたつらなりて葵

神まつるけふはみあれそ葵草かさしにかくる賤のめもさへ

おなしあふひをよしかたの入道よめりける

神業のたえぬみあれに葵草いく代かけても色はかはらし

或幸にて村雨のはれまをまち侍りしに廬橋薰風とい

ふとをよみ侍りに

匂ひをは袖につみしたち花の昔の香をは今ぞ忍へる

仁和寺のほとりにしたしき人のはへりけるかあると

きせうそこをおこせるとて何とて久しく見えざるに

やこの頃は霖雨によりて一しほつれくにてくらし

かたく侍るけふあすのほとに越させたまへなとかき

こしたるやかて立こえしはらくこゝにありてよろつ

そこはかとなく事ともいひ出てあそひわりけるにあ

るし五月雨をよみ侍りける

五月雨にふるやの軒の玉水はとくくきてを老を問ける

船によする五月雨を

かこへとも螢の小舟の咎をもてうきねくるしき五月雨の比

北山せうをん院にて人々よりて哥よみけるに弁の君

五月雨をなんよめりける

有馬山いな篠原水出て根もあらはれし五月雨の頃

舟によするさみたれを

舟もなき五月雨比の角田川すむこともなくにこるさかなみ

安稱寺の住僧えんけい五月雨をよみはんへりける前

のこゝろを

五月雨につなかね舟やなかるめり峯のうは手をうちし白浪

久下入郎橋によする五月雨をよめりける

きほひくる水やこすらむ宇治橋のけた打波は五月雨の比

あるとき兵庫へまかりけるにさるへき人々さんくは

いし侍れはこの浦の政所哥よむ人なれはいさといひ

てぐしてまかりぬきてこゝにてひねもす哥なとよみ

侍りけるにあるし江五月雨をよみ侍りける

難波湯入江のまこも水こえてをこともしれぬ五月雨の比

夏草

夏の野に茂る草葉の露ふかく鳴きりくす聲もさたかに

あるし野草を

夏の野に大野の原の草茂りはなし飼ける駒もいさめる

かゝる所へ客人のきて夏草ふかしといへる事よめり

ける

露ふかき草野に牛を追込てくるればそこと尋わひぬる

罌蓼をよみ侍りける

朝夕に袖のみ添て惜みつるこのなてしこをいかに思はむ

をなし心をさぬきの坊よみ侍ける

いつしかにみれとめかれぬ撫子の花の色香を我あかなくに

宗林庵といへる人澤邊の螢をよみ侍ける

みたれぬる澤邊のかたの螢火に道もまよはす往來するこ

やんことなき人のもとにて終日哥よみはんへりける

に螢を人々よめりける

夜もすからいねぬるねやの灯につゝみ置なり螢火のかけ

客人来て二首よめる中に一首は螢をよめりける

とふ螢風にまかせていつちとも鳴音しのふて胸やもゆらむ

旅宿螢

うき旅のやとりの床の灯にかけあきらかにみゆる螢火

こゝろある人々暑きころやうあんしのえんにひねも

すすゝみるて暑氣をはらひけるに俄に空かきくもり

て夕立のしければときゆきといふ人よめりける

かきくもり風すさましく落やめは跡ははけしき夕立の雨

わかき僧のこれをきゝてやかて行路夕立といふとを

よめる

夕立にあふさか山のこなたなる杉の木かけにやとる旅人

井むらの家にてらうにやくあつまりて半日より夜に

入てあそひおりけるに折ふし哥よむ人一兩人來りけ

れはこれをちからとしてよみはんへりけるおりにふ

れて松下泉といふとを

みるからに涼しさまさる松陰の岩井の清水むすひあける

樹陰納涼

夕風のそよ／＼吹は檐のはの雫の落るかけを涼しき

おなしこゝろを民部少輔よみはんへりける

いさ暑忘れやはする常盤木の影そすゝしき日さかりの比

河邊納涼

しら浪のなかれも涼し河水にひれふるうをの遊ぶゆたけさ

或人とぐして鴨へまうてはんへりけるに杜の木すゑ

に蟬のかまひすしく鳴侍りければ

打しきる蟬の鳴音にみたらしの杜のうちには鳥の聲なし

御破

今日そとて辛崎濱の大麻は皆人ものらはひなりけり

秋

秋立こゝろを

けふははや秋立初ておとつるゝ風そ身にしむたそかれの比

おなしこゝろをよみ侍りける中村刑部丞

草も木も面かはりせり今朝ははや秋の景色は空よりもして

荒屋の秋風といふ事を

葛かつら茂るはかりのあはらやは音さへあらし秋の夕風

萩をすなこしける扇にかきたるをある人の北の方哥

つけてたふへきよいしいひおこせたりければよめる

萩の葉の露うちはらふ秋風にすらぬく玉をまくかとそみる

たゝすけ入道の女よめりける

風により妻戸叩くをいかなれは萩のわさとはいひ立にけむ

西山にすむ人おはしけりいとわかきころより世をし

りそいてかた山陰に光陰をおくり侍るかある人にい

さなはれて秋のなかにはまかりけるにそのすまゐい

とあはれにやさしくきたにしは山ふかくみなみひん

かしは野につゝきたり西は笹かきに竹のあみ戸をし

めほそ道を二十間はかりさし入てみければひとつの

かや屋見ゆ小柴かきゆひまはしたるさまいと興あり
眞木の戸ひらきてみ侍れはさま／＼の秋草をあつめ
たり竹の簀子におましをのへてしはしこゝにやすめ
りやゝありてあるし出ていさなひいれて和哥集など
あまたとり出てみせはんへりぬかくしてこゝにひと
夜うちあかしたるに所の萩すゝき風にあてられてさ
はきあへるといとものかしかましくごゝろうこきけ
れはとりあへすよみ侍り

袖かはす尾花か下の萩の葉はすからに吹し風やうらみむ

萩の葉風にちるといふとをよみ侍りける

秋風にちりしく庭の萩の葉は尾花か露にしめりてそみゆ

薙萩

我庵の軒の寝覺に萩の葉のやゝとおこして間かとそきく

野萩をよめりける

秋の野の道のかたへの萩の葉は何を招くとうたかはれぬる

しやうりん庵の沙彌野萩といへる事をよみ侍りける

萩原や立入みればあかなくも宮城か原に日をくらしてん

おなし人行路の萩をよめりける

野を遠み行はてなき眞萩原なをあかなくてかへさ忘れき

庭萩

露おもき萩か上枝はかたふきて花の雪をなかくとそみる

鳥崎の萩といふとを沙彌よみ侍りける

音にさく野鳥か崎の眞萩をば舟の便にけふみつるかな

えんりうの洲にて人よりて哥よみけるに萩移水と

いふとをよみ侍り

音羽川きしのかけなる萩の花うつれる水も花の香そする

玉泉寺にてさるへき人よりて哥よみけるに露をよみ侍りける

霧ふかき秋の野原の朝露は光みかゝぬ玉をまきける

ゆきとし庵主吉祥寺にゆかりありて此所のかたへに

草庵をむすひて心になふともとちをかたらひほと

けの御名をとなへて折／＼ゐて和哥をすんし世にす

さめられてはなにか朝晩のつれ／＼をなくさむへき

にとおもひてこよなふ一すちに庵のうちに足をかゝ

め侍りあるとき人のすゝめられて心に任せてそこは

かとなき事とも互にいひ續けて後折によせて露如玉

といふとをなんよみ侍りける

秋のみの庵の草葉に置玉はありとみゆれとけつにほとなし

又すゝきをよめりける

あはれけにすゝきをみても人心風にしたひて世をや渡らむ

岩田の家にて七月七日牽牛織女の哥よまむとて人々

あつまりけるにまかりてよめる

彦星の妻こし舟をまちなねて雲のはそてをふりまねきける

人よめるおなし心を

秋風に濱邊すゝしき銀河こよひあふせの浪まくらとは

おなしこゝろを

天河契もふかしたなはたのいつの世よりかいつの世までそ

七夕雲といふ事を侍従公よめりける

秋風の雲霧はらふ天川あふせまかはぬ空のけしきは

霧によする七夕をひろるたのなにかしといふ人よみ侍

る

明方にたつ河霧におほれつゝよこ雲ともにわかるたなはた

七夕のわかれを

きぬくわかれやしたふ織女の立かへりみる天の川なみ

ある人をみなへしの咲けるを見て興してよめる

あたにふく風になひきそ女郎花うはのそらなる便ありとも

おなしこゝろを

朝露のおもけにみゆる女郎花いさ立よりて拂やはせむ

蘭

花のひもとくきてみれば藤はかま葉とに深く露をむすひて

或人の女ふちはかまを見て

藤はかまきてみる人を待わひて風のためにや露しほれけり

小栗栖と云所にちやうかん法師とて世すて人のはん

へりけるほとけに心さしふかくして常はせうみやう

念佛しよるつうき世のわさにかゝはらす名をつゝみ

徳をかくして露命をおくりはへりけりあるとき此聖

のもとへちかつける僧の有けるかいさなひまうつへ

きよしたひゝいひをこせはれととかくしてまか

らさりけるにあるときせうそこおこしていとねんこ

ろに聞へはんへれはいかて心さしをむなくせん

まかり侍れはけにもたうときすまるにてそのこゝろ

さしまめやかにみゆふるき事ともかたりいてゝ夜も

すから打あかして夜明ければ庭に出てみけるにまか

きにあさかほの花うるはしく咲みたるゝをみてすゝ

りをよせてかくよみ侍り

世の中のはかなきとは朝貞のたゝ一時の花としらすや

といひはんへれはあるしきゝ返しとおもひて

朝貞の花みてたにも知ぬ身は何にかならん猶そはかなき

又草むらのむしを

住あらず秋の千草の枯まよりかれゝなりし虫の音そうき

おなしこゝろを

秋更てむしの音茂き草の原いかに夜寒の風や身にしむ

松むしを

秋くれば風をうるさき松虫の聲ふきからすあへの松はら

或人の屏風に葛をかきけるに哥つけてとのそみ侍り

しによめる

秋風に出あひぬれば重葛原露ふきはらひうらみてそみゆ

箕浦ちかまつよりからの紙にかきける鴈をよめとい

ひはんへりければ

三越路のいく山越てくる鴈の秋の田面につかれやすめり

又初鴈を聞といふ事を

鴈わたるけきを聞つる天の原遠しといへと鳴にまかせて

或人よこに行鴈といふ事をよめといひければ

遙なる嶺うちこえてくる鴈は風にふかれて横へきれけり

月

今宵しも隈なき月と詠め入てかたふくまてに見送りそする

八月十五夜

名にしおふ最中の月を心ある人こそうはの空にならまし

なかはら伊豫介の家にて人々よりて三五夜中の月を

みるとて哥よみけるによみ侍りける

花はすき月を松山はるかなる嶺にさやけき望月のかけ

しけもちの母よみ侍りける

いつとても月の御影はあかなくにこよひは猶も詠めます哉

しんせうゐんの老僧よめりける

更るまでこよひの月をめてゝなんなかはに及ふ秋の老の身
雲間月をよみ侍りける

さやかなる月のみ隠す雲簾かくるそつらきみるとしらすや

山月

はるかなる娥垢山の月影をふもとの里にみすましとする

或人の家にて哥よむ人四五人かたらひて暮まであそ
ひわりけるに障子のはしまちかく月のかげさしけれ
はあな月罷出たまへなといひてみな人々えんに出て
いかにといひはんへりければとりあへすよみ侍りけ
る

たそかれに山の端いてゝ泣けくも月の影さす庭のおもかけ
まらうとのきたりてしはしほとありてよめりける嶺
月といふをを

かひか根にいさよふ月の更る迄いねもやられぬさよの中山
夜擣衣をなかはらしゆきといふ人よみ侍りける
小夜更て霜夜の鐘も泣けきにいつこにうつそ床のさむしろ
おなしこゝろを

よもすから世の憂わさを賤の女かたえまもあらず衣擣なり

あつまさ入道の家にて人々哥よみけるに遠聞鹿とい

ふををなんよみ侍ける

まつち山夜寒の風もいとほすすからに鹿の妻そこひける

客人よめりける夜の鹿

さし人もきゝ侘ぬらん秋の夜は山より里へさをしかのこゑ

おなし人山鹿

大江山秋のみくれはとよむなり妻こふ鹿のこゝもかしこも

或としの秋の末つかたせうゑほうしの庵にてかなた

こなたよりてひねもす哥よみくらしけるにかきの紅
葉といふをよみそへ侍りける

尋はや篠垣しめし庵の内ににしきはへたる庭のもみちは
ひなたあきさたの家にて秋の名残おしまんとて心あ
る人々あまたよりて哥よみ侍けるに軒端の紅葉を

住なれし軒はの紅葉今ははやあたりの草木てらすはかりに
又簾のもろちといふ事をよみ侍りける

よそめをも忍ふにあらず我宿の簾の紅葉は秋にあらはる
ある人の屏風にきくをかきける繪に哥かきてといひ
ければ硯をよせて

初霜にうつろひやせん菊の花いろ／＼ともに秋そあらはす
又ある屏風に秋田の面をかきけるに讀はんへりける
秋の田の稻かり初て引むすひ田守の神にまつりをく

あるとき修學院をとをりけるに秋のなかはとみえて
稻をこき磨けるありさまをつく／＼みてよみ侍りけ
る

賤の女か茹こむ稻を隙なくもする手いそかし玉擣して

或人の落葉浮水といふをよめといひはんへりけれ
はすきし比かつら川の逍遙を思ひ出てとりあへず

大井河錦をなかすうは浪はみねの紅葉やなかは散るらむ

秋のはての比をよみ侍りける九月盡

けふとてもさ夜かた迄は秋なれば名残にのこすとの葉草を

櫻井基佐集下

冬

桂のふもとにしる人ありてまかりければこのあたり
にやんことなき人の世をそむきておはしけるかとし
こるねかはしき人おはせよかしとおもひくらせし折
からそやとて二三日うちかたらひてよるつものし侍
りけるに折にこゝろをよせて時雨を
をとつる杉の板戸のしくれには暮行としとなれぞ知ぬる
あるしきゝて

年々に時雨の雨にとはれしかあす社しらねふりし身なれば
まちかき庵にひしりのすめりけるか來りてよめる行
路時雨

思はずも往來の人の時雨してしはし立よる檐の下陰に
或人きたりて

晴間なく降そふ今朝の時雨には木葉も露も降にこそふれ
客人の中にいとわかき簪のはんへりけるか人ゝに
すゝめられてよめりける時雨を

かきくらす雲のはこねにひと時雨跡は日影のさしゝ山もと
おなし時雨を

時雨つゝかつ散嶺のもみち葉は山のあらしやこきおろす簪
やんことなき人の屏風にもみち書たるをみてよめり
ける

時雨する比良の高嶺の紅葉はゝ嵐そふともえこそちらしな
又しくれを

浮雲のはれ間ゝの夕日かけさすと思へは又しくれけり
或老翁の窓前のしくれといふをよみ侍ける

我庵の窓うつ時雨しはゝも音つれきては夢もむすはす
神無月のなかには心むつかしくてふせりおりけるに
とし比ともなふ人のたつね入てければつれゝなる
折からによして思ひてよるつものなとかたりあひて
時をうつしけるに空うちくもりてしくれはしたなく
し侍ればまらう人歌よみ給へといへるにかへりてこ
の人にしろはへりしかはよめりける

山深み茂みのかたにむら時雨木葉とつれてふりもをやまぬ
河内守かねしけと云人ある所にて時雨をよめる
めくり來る雲の手さきのしくるれば跡は日かけに通ふ衆人
浦時雨をよみ侍りける

陸奥のちかの浦半のしくるれば猶しほたるゝ海士の袖かも
又峯の時雨を

風はけし伊吹かたけのしくるればふもとの里に人も通はす
せうわるんにてかなたこなたの人ゝよりて夜もす
からつらね暫興行しはんへりけるかのちうたよめと
いひければ松霜といふ事をよみ侍りける

あさとに松の上葉にをく霜は老のかしらにさもとといふらめ
又松間の霜といふをよみ侍りける

かすなる老のかしらにさも似たり松の葉分の朝霜を見て
しやうかほうしときこふる人篠の霜といふ事をよみ
侍る

くらふ山篠の葉にをく朝霜をはらはてかよふ山かつの枝
暮天霜といふをよみはんへりける

暮かゝる空よりおるゝ夕霜は野への枯葉にをくにそ有ける
なかさといふ所にやむことなき人のすきし比より
ひきこもりていつちへも出す山谷のけしき麓川のふ
せひ草木のうつりかはれるありさまを友としておは
しけるに或ときたつねていりはんへりて世のはかな
きわさ(や魔)とたかひにいひつゝけてのちかくよみ
てはしらにをく閑居霜

朝露を庭の軒端のかれまにそをきて年をは送りけんとは
ある谷川の橋のうへに霜あつくをきけるをみて
はかなきはうき世を渡る浮橋に猶もをくなりからき朝霜

冬の日のいとさむけてつれゝなる折ふしよみは
んへりける寒芦

うら風に氷てみえし汀なる芦の枯葉もねをのみそなく
寒草

冬かれすそかの川原に残りぬる眞苔も今は跡はかりみゆ
雪

降雪に木曾路の旅は道たえてそことも見えぬ橋そあふなき
藏人のかみみつするといふ人哥よむ所にきて山雪と
云事をよめりける

冬つかたあちの山を越くれは梢の雪をまた降にける
ある人の北のかた旅雪といふを人にすゝめられて
よめりける

船わたすあふくま川に降雪のたまりもあへす袖そはらへる
曉雪

歸らんと曉かけてをきみれば往来もたへむ大雪そふる
ちやうをん入道峯雪といふをよめりける

雪降て山の立木もみえされは花の春とそ人はまかへり
野宿雪

ふる雪にあさ野の宿にやとゝりて先うちはらふ笠のあは雪
ともなふ人の雪ふるにせうそこおこしてけふの雪は
いかにやそこら見玉へるなとかきてはやく立こゆへ
きなとくれゝかきはんへりしまゝにうちこえけれ
は例の哥よむ人ありてすゝりなとひかえいかにをそ
く立こゆなとたはむれて庭前の松に雪のいみしう降
けるを題にてよめる松上雪
千とせふる松もとしゝ冬くれは雪をや綿にかつく上枝
ある僧のきたりてよめる雪

空さむく風はけしくも吹落て雪降さとの道うつみける

寺法師のまかりあひてひねもす人ゝ哥を吟してあり
けるにすゝめてければしはし有てよめる篠雪を

ふる雪に篠の青葉もうつもれてはらへはみゆる寺の藪垣
おなし人また

うるさは冬たつ旅の空にしてくるゝもしらぬ野路の大雪
大みやのにうせんの家にて一夜こゝろある人ゝよ
りて哥よみ侍けるにこのころあつまのかたよりのほ
れる人として侍りけるかこしおれをもこゝろかくる人
とあるしいへりければしあてよませにけり

雪とのみなかむる方は都人あつまかたにはふしにみなれて
常盤井ちかのりか息あふきをあたらしくおらせてあ
る禪智識に雪の詩を所望してかき玉ふに和にせよと
のそみ侍りければ辭すれともきかてよみ侍りける
冬はまた雪おもしろし木々の枝に春の花咲なめすればそ

鳥羽のなにかしといふ人哥よむ事をこのみはんへり
であるときうちにまかりけるにたちよりてよめりけ
る山家初雪

冬そとはけさを知ぬるかやの庵軒はにあつき雪そつもれる
龍泉寺に年ひさしく住し喝食のいまたはやほうしに
なりていとたうとく人もてかしつき侍りしかちかき
ころ和歌にかたふきて六義のみちをなけきはんへり
とかくて苦勞してかたゝにて哥よめりけるか人々
すゝめければ遠山雪

白雲につゝきてみゆるとほ山につれる雪はまかふ明ほの
(風懸)

しやうあんしの沙彌太山雪

冬くれは光をまざる山姫の雪はゝたへにすきとほりける

おなし人袖雪

木曾山の袖人今はやすむらしかりやの雪をけつ煙たつ
かんでゐんのえんにて人ゝ遊て庭の梅をみやれば
けさ降し雪をえにところゝもちしかはよめとすゝ
められて

(歌關)

おなし人ゝ霞

篠の葉にをきし霞のくたけても消せてちりし玉あられかな
おなしあられを刑部少輔たかむらよめりける
玉あられ篠にあたりてちる時はさこそくたけて物を思はん
ある人の家にて小夜ふくるまで埋火かきおこしてあ
そひおりけるにあるしよめりける冬神祇
過かてに道ゆくわきの辻社はたきいさむるもりの木からし
夜の神樂をよみ侍りける

いさめける庭火のかけに月まちて雲井にひゝく朝倉の聲
ある所にて佛名

心さす三世の佛をたのみにておのれをいのる雲のうへ人
ねんさい法師よめる古寺殘月

鐘の音にのこりてさしし有明の月の輪さえし西の山寺

歳暮をよみ侍りける

いつとなく暮行としの今日は又思ひかへりて春にあふらん

歳暮によする逃懷を

いつとてもかはらぬ年をいかなれば送り迎ふと急く我身そ

戀

逐夜増戀

君をのみ思へば夢もみしかとも今はいをたにねゝはそあ覽

待不來戀

待わひて妹かすみかを尋ればあふくま川のあなたえけり

かひなき戀といふことをよめりける

おもへともかひこそなけれ白濱の鹽干にひろふ空貝かな

朽木によする戀を

山ふかき谷の朽木の心して知る人もなくなけきくらせり

川によする戀

君ゆへに仇名を我は立田川たつ波にもあらてうきに沈めり

寄袖戀

現とも夢ともわかぬ我戀はなにとなるみのしほたるゝ袖

寄烟戀

人をも思ひ暮せとあさまなる烟となりてむねそこかるゝ

なさけなき戀といへるをよめる

蟬の羽のうすき情もあすしてさて果しなき跡に思はん

(脱塵)

涙によする戀

君をのみ思ひこかれてなみた川袖のみなとに我そしつめる
糸によする戀

我戀は賤かあきその心してなか／＼しくて身はほそりけり
かきやる文をしほによせて

君を耳おもひあかしの浦にして鹽のひるまにかき集めけり
かよふ戀を

寄鏡戀

見るたひに形見の鏡つらきかなそれと思ひ心うこきて
あたにおもはぬ文を

かきつむる心もあるを君はさて仇なる風と思ふつらさよ
文によせて

これを見て哀と思へ水莖の跡はつかしき戀もするかな
はしによせてうらむる戀をしけゆき

をはた／＼の朽たる橋の君にして楯よりゆかん人をつれなき
枕によする戀

押なて／＼恨をまさるわか閨の小菅の枕た／＼ひとりねて
水によする戀

我戀は岩もる水にさも似たり思ひあまりてなかつ涙を
旅によする戀

獨ねの夜半の床こそかなしけれ旅としなれば妹を戀しき
月によする戀

松島やおしまて月さへすむ物を君は情をなと惜らん
螢によする戀

聲はせて思ひこかる／＼螢より猶もこかる／＼我か胸のうち

従おもふ戀

遠からてやかて住家をかへん時いかに哀と君やおもはん
浪によする戀

しつみにき今はたちかの浦波に消ても君に心うかれん
したふ戀といふ事を

あれはいとふなければしとふ人心しらて思は／＼君や思はん
待夜あはすしてかへるこゝろを

いかに君またせ／＼て今ははや横雲ともにあはてわかる／＼
神に祈る戀を

あらきたの野坂の浦に戀をして君を三島の神に祈らん
かなはぬ戀

されは又命のほともしれたるに叶ぬ戀に身をそやつせる
一夜契りし戀を

君をのみおもひ入間の里にして一夜契りてたつもつらしな
逢別戀を

わか戀はひとつみなとを出船の逢て別る／＼ゑそとつしまへ
笛によめ／＼戀

君に我中そかはらぬ笛竹のそのふし／＼はねもあはすして
竹によする戀

よ／＼ふれと思ひとをらぬ吳竹の末葉の露と今は消なん
寄氷戀

わか戀はさの／＼中川いてぬれはこゝろも氷とくるよもなし
寄鳥戀

曉にもしもやとると松の戸に妹はこすして鳥の聲きく
時鳥による戀

時鳥まつにねぬ夜はつもれとも妹をまつほと苦しくはなし

花によする戀

花を見て思ひ忘るゝ時あれと立されはまた思ふ君かな

きゝわふる戀

聞てしもきかまほしきは君のうへいかゝあるやと心盡せば

柳によする戀

春風におもひみたるゝ青柳のいとたへかたきにも有かな

嵐によする戀

さよ更ぬ妹はこすしてむこ山のおろす嵐に身はひえにけり

風によする戀

山風の行手の君に有ならは吹くるたひにことつてやせん

五月雨によせて

さみたれの軒の雫にあらねともとくゝ通ふ夏の夜にして

郭公によせて

みしか夜の軒にしにふそ時鳥聲をきくやと待あかしける

あやめによする戀

わか戀は五月なかはに思ひ染あやめも知すねこそなかるれ

あふてわかるゝ戀

おもへともゆき逢坂の關なれば訣れかなしき君にも有かな

荷によする戀

山路行衆人なれや我戀は君をおもにゝ持そくるしき

夢によする戀

思ひねの夢にそみける君かかけさむれは辛し跡もなければ

ある人としころ思ひける女のもとへ文をつかはしける

るになにゝよりでひさしくをとつれもきかぬなとう

らみてよめりける

けふそみる菖蒲の草も君にしてねたくも思ふ恨こそあれ

あるやんことなきかたに宮つかへはんへる女のとし

ころかたらひしおとこのやゝおとつれもきかさりけ

れはあやしく思ひて文をやりけるに哥よみてたはせ

よといへりければかはりてよみてつかはしける

秋風の吹にや君を松の戸にをとつれもせぬ人そうらめし

ときふきときこへし人ある女をこひてたひゝせう

そこつかはしけるにある時女返しをし侍り

池水にしけりあひたる水草のうきたる君はねこそとをらね

にしに京にやんことなき人のむすめすみけりとし比

かたらひしおとこはいさゝかのふしをいひ出てとた

えしたゝひとりゆかりのもとにありけるをある人の

きゝてあやしきさまにやつれて見にまかりけゝにな

へてならぬさまなれはいとゆかしくてのちたよりを

もとめて文やり侍り

久かたの月は哀にみたれとも心にかゝるくまをかなしき

女返し

久堅の月の光はきよくともうはの空には曇こそすれ

坊門のさゑもんのすけ戀のうた四五首よみてとあり

ければほとへてよみはむへりける二こゝろある戀を

五月雨に思ひ亂れんあやめ草かなたこなたへ靡くつれなさ

小田によする戀を

時のまもわすればせしと春の田をかへすゝも人を戀しき

雪によする戀

こよひとて妹を待まに雪降んつもる思ひに消る心ちす

川によする戀

深山川あやすきなりな君なればすちりも散て浮名なかせり

野によする戀

野も山も人し待なは我ゆかんとひしぬるも君ゆへならは
すさかのほとりに住ける人ありけりある時まかりて
哥なとよみけるにあるし戀の哥をよみてければ契
り初し戀のこゝろを

月によする戀

君をのみ思へはくもる我心さやかな月も霞てそ見る
我よりたかき人をこふるこゝろを

天の原雲井遙にすむ君を心たかくもこふる我かな
しのひまとふ戀を霞によせて

又

忍ふ夜の道さまたけの霞ゆへそこともしらね行空もなし

雜

夕霞立もつらしな君かすむやとの軒端をみまとひにけり

かた／＼にてすさみ侍りし江上春月
すみわたる玉津島江の春の月空は霞におほろなれとも

歌

春曙

餘寒氷

春といへは夜のまに氷る池水の汀の芦はあとをとちにけり
餘寒の風といふ事をかえん法師よめりけり
濱松の立し緑に吹風は春としもなく音そそやけき

せうこんしのそうあんにて哥よむ人／＼あつまりて
殘雪をよみはんへりけるに

永き日も猶そ氷れる岩かけにのこれる雪の春のむら消

又

消のこる雪のかた山むら鳥たそかれ時につれて行みゆ
おなし人雪きゆるといふを

ゆき消て水かさまされ太山川瀬くの岩ねをあらふなりけり

岡殘雪

長閑なる春の日うらの岡のへに残れる雪も日／＼にきゆめり
きやうふのせうとてとうこくよりもはれる人の
んへりけるか哥よむ人になんありければすゝめてよ
めりける草殘雪

又

春の野のすゝろの薄萌出て又泡雪にあひきはのはら

又山に殘雪を

春きても茂みのふかき太山野は所／＼に雪そのこれる

とくけんしにてかた／＼よりて哥よむ人のあつまり

て朝時雨

うちつ／＼春雨なれや花のため遅しといそく雨のあしかも
安房守さんよしのいゑにてひねもす人／＼哥よみ侍
りけるに夕雨をよめる

つれ／＼となかめかちなる春の日に夕の雨は猶そさひしき
三位の局岡雉をよみはんへりける

長閑なる岡へのはらに鳴き／＼す聲あらはににも妻乞をする

おなし人雲雀

空にかく雲雀鳴なる春の野に霞立そふくれの山もと

いはむらの重雄おなしひはりをよめりける

梓弓春や雲井になくひはりやといふよりいやす落にけり

雲雀を

打つて雲雀立なる紙屋川羽風にさはひさゝ波そたつ

よしみねの僧歸鴈知友といふをよめる
歸る鴈濱の眞砂におりつゝ都の名残しはしおしめり
人にかはりてあかつきの鴈を
さぬゝの別の泪たれ有て曉かへる鴈の羽をとそ

歸鴈

鴈歸るとくにもしらは玉章をこしのしらねの妹につてなん
せうあんしの僧歸鴈雲につらねてゆくゝと云事をよみ
はんへりける

行雲の羽袖をかけて明暮とこしのなからへ雁かへるらん

おなし人歸雁をよめりける

天の原雲すしたてゝかへる雁薄墨もかな繪にもうつさん

嶺歸雁

雁かへる嶺のつゝきをめあてにて行手もはやく跡消にけり

ある家にて鴈を

今はとて花をはすてゝ立鴈の匂ひを残す跡をしる思ふ

雨中のつれゝなるころしたしき人二三人もものへま
うてゝかへるさにたちよりあそひおりてすすりをよ
せ筆をまさくりけるかたう紙ありとり出てかくよみ
侍り春田

行道のかたへにはへしみしめ繩水せきいるゝ小田の苗代

又人

出こほる春のあら田をすき初てけふよりしては野にぞ立覽

おなしこゝろを

賤の男か堅き山田の一返しちからいれんと休む鋤の柄

えいくわう法師春鐘と云事をよめりける

永日と思ひ思へとけふの日も暮かたつくる入會のかね

或人の家にて春の眺望をよめといふけれ（かたければ）
峯たかく谷の岩根をくくる水末は落あふ春の川波
春述懷

世にあるは春は春めく人こゝろ世になきなれば心つねなり

ある人春神祇をよめといひければかはりて

千早振神代のためしいつまでもつきぬしるしにさかゆ神葉

春釋教をえいせうあん（僧都）とかやよめりける

草も木もなへて花さく御法には嶺の嵐も成佛の聲

哀傷

或人亡父の三箇忌にあたりて追善として七日僧尼を
くやうしはんへりけるによめりける

わかれにし歎も今は忘れ草みとせになりてけふそつみつる

餞別

さぬきの守ちかいへといふ人公用によりてやよひの
はしめに伊豫國へまかりなんと用意しけるかやうや
うおもひたつ日にもなりはんへればすてに首途しけ
るによみてつかはしける

思ひやる波ちはるかに行舟の跡の思ひはいつれともなし

親家返し

けふ出てかへらむことも白浪の立をかきりのとし思へは
そのうち三つきはかりほとへてたよりありて人ゝ
のかたへ文おこせけるによみて侍る

鴈ならぬ身こそつられ雲みにも心はかりは通ふとをしれ

山科にとしころすむ人の有けるかとうこくしもふ

さのむまれにてにわかにはかりのためにまかりな

んといへりければしたしむひと名残おしみてはな

東路のゆく末とをき別には又あふ坂の關そたのめる
 西院のもとにすめる梁閑のいほにて人くひねもす
 あそひをりけるにつねにわりなくむつひける僧にせ
 んるんほうしふとまかりてたたいまみちの奥へまか
 りはんへるなこりこそおほかれといへば人くはこ
 れをきゝて空ををさへつきくしくもいへる僧かな
 と一とうにけうさめてはへりけるもいとこちたしさ
 れともまめやかなりければ名殘もなくたちて行程に
 袖をとらへてよめりける

みちのくへ思ひたつ社名殘あれいつも旅の身にはあれ共
 これをきゝてたちもと袖をかきあはせてかくいへ
 りける

わかれ行あとの名殘にのこれとてすさひ捨たる道の一字
 這上下卷者櫻井中務丞基佐 法名永仙 詠歌也。藏ニ深窓。雖ニ秘
 本。令ニ懇望ニ書寫畢。

右櫻井基佐集上下二卷雖不密不少以類本無之不能按正

群書類從卷第二百六十四

和歌部百十九 家集卅七

出觀集

入道二品親王覺性詠

春

立春のころを

山風によこさる雲のいつそとてみとりゆるけき春の立らん
雪きえて春たつ空のうらゝにも鏡の影の霜はさむけし

うちきけはこそと今年と遠けれと思へはきのふけふと成覺

春たては峯のかけひの霜くつれ 〔 〕 なをす水もりくとて

をの山は霞にけりなすみかまの煙はきのふ絶にしものを

いつしかと二見の浦の霞めるは明ゆくとしのしるしをけり

春のくるよはの旅ねのかたゝかへ歸あしたの道をかすめる

春初祝

立春をみよの千年のはしめとや天のこやねにさため置けん

春來望海上

春きては淡路島やま見えわかす波もてゆへるかたも霞みて

幽栖春到

春風にほをのうけくき打靡き谷のとほそにたるひとくこ

題不知

春かせに入江の氷とけしよりあをみわたれる淀のわかこも

子日

霞

子日する岩ねの松はいはねとも二葉にしるし千世の景色は

朝霞すそのゝ里を立こめてそことも見せずすの草くき

すまの浦をこむる霞のかたよりになひくやあまの煙なる覺

ふしの山麓めぐりの霞こそ峯にしられぬ煙なりけれ

しからきのとやまを霞こめしより空にそをのゝ音は聞ゆる

三輪の山峯の霞のしるしにやすそのゝ里は春をしるらん

題不知

をちの山松はすそこに見ゆる哉麓の霞みねのしら雲

行路霞

立歸り宿の梢を見渡せばよそに思ひし霞こめたり

さかにすみ給ふころ野徑霞といふとを

春されはさかのやきにと打むれて霞にきえぬ遠の里人

關路霞

にはつ鳥聲にあげつる關の戸を猶もゆるさす霞こめたり

霞籠歸鴈

かすめともこしのそなたのしるき哉あま飛雁の聲を尋ねて

山路入霞

麓にてふりさけみれば久方の霞にとつる春の山みち

霞裏聞松風

霞せぬおりや昔もむすひけん聲計するいはしろの松

霞隔社頭

峯つゝきたな引とみし朝霞かたをかをさへこめてける哉

鶯

鶯ははつ音いかゝとおもふらん花もちりぬとみゆるあは雪
花もまたにははぬほとは鶯の初音はかりそ身にはしみける
鶯の聲かゝりける山里をとふ人なしとおもひける哉
鶯のうはひはたけにまかへとも聲の色にはにる物そなき

閑居聞鶯

ともかほに鶯はかり音つれて霞にむせふ春の山さと

竹近聞鶯

風吹はまかきの竹のなひきゝて手にとるほとに鶯そなく
鶯の竹のぬくらに横の戸をあけあはせつゝ初音をそ聞

春日遊覽

おもふとち春の野邊みにあくかれぬ宿に鶯なかはつけなん

山家春興

山里は春の朝あけそ哀なる霞のそこの鶯のこゑ

題不知

たにのすをくもにつけては打とけてさえぬ都にきなけ鶯

船中聞鶯

住古のおきにみいてつほそえ舟まつに鶯きなくかきりは
ありまにて旅宿鶯といふことを

曉月聞鶯

月のこる谷の鶯をとつれて野寺のかねに山あけにけり

竹畔殘雪

日をさふるまのゝ若竹影うすしいつまで残る去年の雪かも
雪深冴白冬

冬もきしあきてこふすまいさらに薄くおほえて積る雪哉

若菜

小山田は雪けの水の深ければあせつたひにて根芹つみけり

正月七日ゆきふりたるに 法印有觀

かめ山のはるけきのへのわかなをば君か爲にと雪を降つむ

御かへし

雪のつむわかなはよそにみつれとも我爲にとは今ぞ知ぬる

春日携絃

さたまらす聲くうたふ鶯にもちあけさけつけてこすかな

梅有簷 題懸速

いかばかりかつちる梅を惜まゝし立枝に雷む花なかりせは
わきて猶露あたゝかにをきければかた枝に梅の花咲にけり

月前梅花

八重梅の立枝かちなる木間よりもる月さへや香にかほる覽

白梅勝芳

くれなるに染ぬ色社梅の花かはなかゝに身にはしみけれ

題不知

梅花うすくれなるのしたかきをむらゝそむる春霞かな

霞中嶺梅

紅は春の霞のいろなれはかほるに峯の梅をしるかな

もつめにすみ玉ふころ閑人翫梅といふとを

つれゝとにはに佇すむ山里はなつそふ梅も花ものいはす

隔牆見梅

葦垣にこそかくろへし梅か枝のみこすはかりに成にける哉

民村梅

をのゝかしりへの道のせはしまよそめは一つ園の梅かえ

梅花夜香

八重梅の匂ひにしめてさよ衣ふせこをよそに思ふ比哉

柳

春はまたひきくらふへき物をなき一もとたてる青柳の糸
朝ねかみ亂れてかゝる玉柳たれとふしきの姿なるらん

題不知

若艸のしけるつゝみをみわたせは柳の枝にさきそむれぬる

河邊柳

つなてこす川をひ柳いかなれば水の心にひかれそめけん

柳色透霞

緑なるいつもと柳ほのみえてかすめとしるき君かかとはは
朝霞柳のまゆにたな引て亂れにけりなうすく見ゆるは

池塘皆柳

こやの池はいひもかくれて青柳の糸より外の物なかりけり

邊柳

朝夕に鹽のさせしやしけからん籬の島の玉のを柳

垂柳遮路

ふし柳したのくひせのはへしより末もとをらす谷の細道

二月廿日ころに雪のいたくふりたりければ

雪ふかみさらにとちてそ冬こもる春にあげてし旗の板戸を

早蕨

出てみよ野への早蕨もえぬらし雪の消まにきゝす音そふ

山櫻遅發

ひらけてもうしろめたなき山風を思か花の咲もやらぬは

春意有山花

山櫻まつとおしむとかはれ共つくすはひとつこゝろ成けり

望山待花

またきより高ねにことし櫻花めにたつ雲を始なりける

山花未遍

み山木の絶まの花とみえつるはつほみかち成よそめ成けり
山櫻またもきて見ん人のためおらてそ歸るまれの初花

題不知

のにみゆる春ならませは聞てまし初花さける山は有やと

問樵夫尋花

妻木こるしつおにとへは花は見ゆ朝日あたりの峰にとそ云

花綻山家遠

麓にて高ねをこえてみし雲は我住宿の櫻なりけり

夜戀山花

夜もすから花のけしきを思ひやる心や峯に旅ねしぬらん

題不知

櫻咲春にしなればつくはねのこのもかのかゝるしら雲

山櫻たれかこすゑとしらねとも心は花になれそしぬらん

紅のうす花櫻咲ぬれば雲も色をはえこそぬすまね

櫻花咲みちぬれば立田山雲のきぬはたはるゝまそなき

花をみな心の儘にあくかれはいつくかつるの住家ならまし

翫花日曛

朝霞わけてみつる山櫻おりてそかへるくれのあらしに

花影寫水

さくら咲谷の小川に影見れば思はぬ花のかさしをそさす

山花透霞

一枝に霞の衣下繪してみゆるは峯のさくらなりけり

山近見花

都より尋てみしを山櫻すたれをまきてけふもなかめつ
曉更見花

有明の月の光に朝戸明ていつしか花のねかほこそみれ

花色同昔

あかさりしそのゝみ山の櫻花みしにかはらす咲にけるかな

花近民家

あつまの柴木の煙心せよあたらし櫻の匂ひやつすな

春高野よりいて給ふみちに舟のうちにて遙憶都花と

いふを人々によませさせたまふとて

花の色に思ひなしつゝなくさむは都のかたの八重の白雲

落花

都にて庭にふまゝくおしかりし花こそ春の山路成けれ

さのみやは風のとかともおほすへき心止まる花もあらなん

かみなひの三室の山に散花はたつたかはらにつもる白雪

あら磯の浪に櫻のよりくるはしかの花園風や吹らん

櫻咲しかの山こえ風吹は麓のいそに花をなみよる

庭もせにしけみにちたひ散花をやかてくたすはこのめ春雨

よる花をあさこき出て早ればおきつのいそのわかきなり晝

尋ゆく峯の櫻はちりぬらしさ山もよそにあらし吹なり

花誘ふ風を思へはつらからぬさこそは誰もおらまほしけれ

櫻さく峯にあらしやわたるらん細谷川のはなのうきはし

春すくと風にもちらぬ花もかなさてもこのよに物や思ふと

はかなさを恨もはてし櫻花うき世は誰も心ならねは

題不知

つらしともうしとも花を思ふこそたゝ春風のゆかり成けれ

落花満庭

なかめつる人の跡こそ櫻花ちりしく庭の絶間なりけれ

春日同詠溪流落花和歌并小序

夫紫金臺寺之上方者。紅塵華洛之西畔也。樓殿之任ニ

峯巒一也。添ニ綵畫於霞色。池沼之遶ニ左右一也。疊ニ

瑤於浪文。干ニ雲閣之勢一矣。假ニ天近ニ而究ニ壯觀。望ニ

月臺之様一焉。縮ニ仙室ニ而在ニ咫尺一ト。兔婁於擯俗

之地。孔ニ鷲王於經行之砌。彼金谷園。風煙雖傳ニ德

殖ニ香一。山寺之水石遠不知兄手出。如ニ長栖橋蹤絶。

馴瀧川名流一。外土之得勝無益ニ子尋。斯庭之蘊奇有

便ニ子見一者歟。於是屬ニ蘭若之閑暇。萃ニ櫻花之樹陰。

之者濟々焉。僉相語曰。何奇折ニ得繁艷一以悴ニ銅瓶。

何空捨ニ輕葩一以供ニ金仙一而已哉。若暫移ニ繩床於ニ苦

上。旁列ニ薛襟於ニ花前一。座客靡然。若ニ不ニ眼臂一。是以

諷詠夕靜。懸ニ思於ニ出雲一之以觴吟。春深ニ恐有說脫。

宴於暮月。之三月不可不賞。不可不惜。千時

錦花數千片。目不暫捨。玉盃兩三巡耳。如今溫。

依花勸醉。杖ニ醉翫花。溪嵐北與之時。張油號偷

立。山月西落。曉褰臺號尙望。遂以溪流落花ニ爲ニ題

目。各呈ニ佳什。如予者。久雖學赤人之詞。徒欲

覃ニ白頭之齒。締ニ交傭。記事ニ云爾

かほるかをかけひの水にさきたてゝ流を淀む谷のさくら

は花ゆへにさらぬ別をしられぬるあかて散行ひとへこゝろを

落花埋路

ましかる裾野の道のみえぬこそ花こき散す山おろしの風

雨裏不見餘花

あめもよに思ひもしれと遅櫻山わけ衣しほらてそ見る

春深花不殘

このもとに山さくらとをひきたてゝ思そ出る春のにはひを

春草漸滋

春ふかくなり行まゝにあげにけり野中のし水草かくれして

やまさきの國明寺にて海邊春駒といふことを

濱おきの若葉をあさる春駒はいせをのあまやとり繋くらん

春駒をしそく三寸のほとに人々よませ給ふとて

いはへつゝ雲に入ぬと見ゆる哉野澤をあさるつるふちの駒

湖邊春草

若草のもえ出しより磯なつむしかのうら人たゆるまそなき

あかつき歸雁のなきけるにむかしのとおほしいてゝ

思ひ出る人あり明の月影に心ほそくも歸るかりかね

旅行歸雁

かりかねのかへさの道を尋れば我行こしのしらね也けれ

曉天歸鴈

明やらて行衛見えぬと歸る雁雲の北に聲をたえぬる

ありまへおはするみちによふことりのなきければ

山路ゆく我をとめてよふこ鳥いふことならす谷をすく也

閑宵呼子鳥

さよ更て隣の音のしつまれば人よふこ鳥聲もまさきす

苗代處々

苗代の水を濁れる小山田のかみのせまちもあせやせくらん

左右有苗代

小山田にくるをへたてゝかくうへに苗代水をひきわかつ哉

苔庭堇菜

つほすみれ花咲庭は紫のゆかりに苔もむつまじきかな

題不知

山里は賤のくひかきしたしけみあさちましりにすみれ花咲

閑居春日永

事もなき窓のねふりもあきぬれとまた傾ふかす春の日影は

春日の心を

雲雀上る麗らの影に窓開てわかしものかみこゝらぬけころ

杜若

そこ清き淺さは水の影そひてふたへに見ゆる杜若かな

躑躅

岩つゝし咲かた岡のよそめこそとよはた雲の立とみえけれ

躑躅映水

岩つゝし枝のたはむと見えつるは移れる水をくめは也けり

深山躑躅

きひの山ほそ谷川をおひにしてしたもと色に咲つゝしかな

暮春躑躅

花ちりて人め絶にしかた山を思ひすつなとさくつゝしかな

藤花

紫のかけいとかけてそなれ松たてるや藤のさかり成らん

旅宿藤花

獨ぬるなこの鹽千の機枕なみたかくみゆたこのうら藤

藤花籠寺

藤浪のまつのかとよりかゝりきて月のみ顔も雲かくれせり

朝見藤花

朝日さすまつの梢の横雲のはれぬや藤の盛なるらん

藤花藏石

藤の花咲しかゝればむらさきのうへにそふるゝ峯のしら雲

當座歌合に近對歎冬といふこゝろを

橘のこしまのくまの遠ければ植てこそみれ八重の山吹

雨洗歎冬

山吹の雨にしほるゝ花ゆへにゐての川なみなき名をそたつ

更衣漸近

つき草の花色衣ぬきかへてひとへにならんことはいくかそ

卯花先夏開

玉川の峯の卯花咲ぬとてまたきかきねに神まつりする

山家春暮

春くれて谷にかへれる鶯を宿にうけとるけふそやさしき

題不知

思ひやれくれ行春にをくれたる霞の里の心ほそさは

三月盡

花をこそ風のとかとも思ひつれ何ゆへにまた春もとまらぬ

かねてより思ひしかとも春の暮けふはにはかの心ち社すれ

けふは猶恨むにとまる春也と花の名残のあらはこそあらめ

夏

更衣

夏衣めつらしければしかすかに心は春の花にしもなし

卯花

玉河のそのみなかみの早ければゆふかけて見ゆ岸の卯花

夏の夜はかきねつゝきの卯花のおられぬ枝や有明の月

山里は谷の小川に音はして卯花かきに波を立ける

我宿もいそのとまやの心ちしてよせつる波とみゆる卯花

玉河と音に聞しは卯花を露のかされる名にそ有ける

卯花掩路

山人は花をふみてや通ふらんうつきかきをのそとの細道

卯花露

こさめふり露をきすかる垣ねには枝かたふかぬ卯花そなき

卯花藏宅

卯花の枝のひまよりたつ煙くゝめやかたに朝けすらしも

卯花爲隣隔

山里は卯花さける中かきにうらうへにほすしつのでつくり

對樹定春花

かさしつゝ歸りし花の形見にはしつえおれたる櫻をそ見る

題不知

岩越るみかさやこゝに掛けとまたき山井をさしつてそ見る

まつりのころ

けふくればひとつ社のもろは草こゝらの神の物とこそなれ

題不知

夕顔のかゝる垣根にこかけとりふせれはすゝしむきの秋風

郭公をまつこゝろを

いつしかもきなくへしとは思はねとけふこゝろまつ郭公哉

初聲をきゝやはしつるきかねともまつも嬉しき時鳥かな

每人待郭公

さそひつゝ花をゝしみしもろ人は山郭公まつもかはらす

雨中尋郭公

時鳥きかぬ物からみやま路に又さしくもりこさめふりきぬ

郭公遅語

忍ひねの程そ過ぬる郭公なくへきさ月なくはなさけそ

山陰待郭公

ねらひするさつをかききに時鳥はやまか下に待あかすかな

待郭公勝例

郭公みにかへて待ことゝしもしなはしねとや音つれもせぬ

側聞郭公

うらめしく又嬉しきは郭公ありなし聲のよはのかたらひ

題不知

時鳥なくかた岡のはふりこはみあれのあふひとる空そなき

月前郭公

卯花のかけとおもふか郭公月の残れるかきねにそなく

ほとゝきすの心を

郭公とをちの里の一聲はいさきかぬよのうちにかそへむ

なれまつといねぬあさけに郭公あふちの枝に今こそはなけ

あくかれて尋そせまし時鳥山かたつきていほりさゝすは

谷ふかみ雲のかよひ路近ければ軒に鳴なる郭公かな

柴の庵のかけひの水の音とめよ谷のすきこに時鳥なく

此里はなきけるものを時鳥いつくもおなしき月と思ふに

あら熊のすむてふ山も郭公きなくときけはいらさらめやは

もろ共に住山なればほとゝきすねくらは梢やとはこのもと

かうやの山にこもりたまへりける比或上人の五月は

かりにみやこへ出けるに

まつ里へかりにいらん時鳥ありすのみやま わするな

隔林聞郭公

時鳥ひはらを過て尋ればちかひて谷のとにそなくなる

郭公山寺友

ほとゝきすよかれする夜ははつせ山獨こそすめ笹のかり庵

題不知

夢はかり聞て過しを郭公おもひあはするこのさ月かな

與客聞時鳥

時鳥君もろともにきゝつれは又もきませとみましをそしく

ほとゝきすを

つくは山しけきかひなし郭公よはになく音は絶まかち也

時鳥鳴にうき身をなくさめてあたし心もなきさ月かな

時鳥もかたらへはひとりねの淋しからぬはこのさ月のみ

おりはへて今を鳴なる郭公さ月のさよの空もとゝろに

さ月きてまたまとろます時鳥こゑを聞よも聲きかぬよも

郭公なくよは月やねたからんてらさぬやみの空をなかむる

夜半郭公

時鳥曉近き一聲はけふとあすとにわけてきけとや

待與月郭公

月はなを山端もあり時鳥いつれのかたの空をまたまし

聞郭公看月

時鳥名残おほかる聲になをそへてそおしむ有明の月

題不知

おしましとおもひやなれる郭公聞もならはぬよはの聲哉

五月雨の空にしもこそ時鳥聲くもりなく鳴わたるなれ

時鳥忍ひかたきは五月雨のやへ雲かくれ過るひとこゑ

五月雨にはかひの露やおもからん過かてになく郭公かな

松上郭公

時鳥きなくなるをのひとつ松聲のたくひも有しと思ふ

松かえに時鳥なく曉はたかさこふねのいてやしぬらん

海邊郭公

あまを舟うらはの里にことつけよおきつ島山時鳥なく

旅宿郭公

哀なる高瀬のよとのこも枕又いかにとはほとゝきすなく

曉聞郭公

有明の月に鳴音を時鳥よをうらみてもひとりきくかな

題不知

わすれ草しけれ軒を時鳥思ひ出てもなきわたるかな

待賢門院かくれ給ひて後法金剛院におはしてむかしの御あとあはれに見たまひけるおりしもほとゝきす

のなきければ

ふる里をみにこさりせは時鳥たれとむかしを戀てなままし

水鶏

人かとやよひのくひなを思はまし柴のとはその板戸也せは谷深み何とてたゝくくひなそもむくらの戸さしあけぬ物故

月前水雞

夢しや聞へもいらて詠むるを月をみよとてたゝく水雞か

船中聞水雞

とまの上をよはの水鶏にたゝかれて枕の下に浪をととする

水草藏橋

めもはるになにはの芦のしけゝれは尋そわたるまきの板橋

菖蒲薫風

我宿のねやのつまなるあやめ草ねたくも風のかをぬすむ哉

題不知

草の庵の軒に菖蒲をふきつればひとひさしさす心ち社すれ長きねの無てならぬは菖蒲草えもいわぬまにひけは之けり長きねをいとゝみつるは菖蒲草ひきたかへても思ひける哉

池故菖蒲繁

八重ふきのあしならね共年ふれは菖蒲ひまなしこやの池水

早苗

けふ既にをたの早苗はうへつめり垣根はみゆく駒入なゆめ

山田早苗

かみしもの谷の心のせはければそしろのたこの數も習はす

川邊早苗

しはしとれやそうちかはの水車門田の早苗うさもこそすれ

連夜鵜河

草の庵に枕さためすうかひ舟いく夕やみか世をおとすらん

箒廻島

箒舟いつれのかみにゝへたてゝみてくら島をこきまはる覽

照射

ともしすとみやきか原にたつせなはまつほと苦し山の下露

むなわけに繁る夏草踏したきほくしをまもる鹿そはかなき

題不知

ゆく鹿の萩のはすりの音きけはあはれしつをのやころ成覽

五月雨

五月雨にしからみかけて庭もせにみゆるや竹の籬成らん

五月雨にはそ谷川の水こえてかさねは底の玉もとそなる

川邊五月雨

五月雨にかはかたきしのふし柳古くかけたるもくつ隠れぬ

舊宅五月雨

檼の戸も朽にしやとに五月雨のよはの雫のたゝく音する

窓あれてかへくのつれにはふ蔦の此五月雨にねさし添らん

鞆中五月雨

なつかしき都にてふりぬれぬへし時間をまたん五月雨の空
五月雨の晴せぬ程はなには瀉たみのゝ鳥をとまりなりける
花 橘

さ月にはかたえさしおほふ橘の匂ふ廂をすみかなりける

廬橘夜香

夜もすから花橘のかほりくる板間はふかし月の秋まで

廬橘誰家

かきしたの宿はいつくとしりかたし花橘のたてるこのもと

螢

こすのとなよひの燈きえやられてほのめく影は螢なりけり
玉水にやとれる星と見えつるは明ゆくまゝに消る夏虫
むら草のしたは飛かふ螢こそ風にこほるゝ露と見えけれ

螢照水草

夕風の玉ふきはらふ蓮葉はすたく螢の光りをそかる

曉螢火

明ぬれはすたく螢のともす火も枕にきえぬをのゝ草ふし

竹中螢

心しててらせ夏虫吳竹にねくらしめたる鳥もこそたて

隔竹望螢

板しとみおろさぬこすのうちのひは竹よりおくに燃る夏虫

蓮

はな蓮心にいれてなかむれば胸のうちよりひらくとをしれ

古池蓮

池の面にはすの絶間の一筋はかよひし橋の跡にや有らん

河風荷氣馥

蓮葉のなひて浪を打まゝに頓て汀の風そかほれる

氷室

春秋ものちのかたみはなき物を氷室を冬のなこりなりける
長さにけふいたすひのした消ておほする駒の汗と社なれ
依泉客來

まし水の枕にそゝく山里は大宮人もかたくなり

關路泉

逢坂のいはかきし水つゝむとて玉散かゝるみつひろまへ
逢坂の關のし水の清ければ影をとゝめてかみもすみけり

巖下泉

たにさしてすゝむ心もわすれけりいしふむ山の下のし水は
泉邊夜漸深

深谷泉

さらぬたに岩間の水のもる物をねよといふ鐘の聲聞ゆなり
谷ふかみ水こひとり聲すなりつゝのあまりの音をたつねて

夕立

高ねよりむら雲のほる程もなく夕立すなり空や神なる
夕立につゝみをくより水おちて瀧にそむかふ谷のとはそは

夏日越關

夕立にふしの芝山雲かけて清みかせきのなころをそ行
夏月浮江

夏月浮江

難波江に只ひとわれのつらゝゐて葦の葉とつる夏のよの月

泉邊月

天河雲のみをよりなかれゆく月は清水に猶やとりけり
月すめは氷とちたる岩間よりいかて山のなをなかるらん

戀月翫月扇

曇るかとなゝむにつけておもふ哉花田のかみにみかく月影

對月恨宵短

みしかよのつらさも色にあらはさし我を恨と月もこそ見れ

旅泊夏月

こなみ色のとまり涼しき夏のよは月にそひろふ浦の鹽貝

舟とめて影をあはれふ程もなく月傾ふきぬあまのまてかた

水路夏月

舟てしてやかて明ぬる夏のよは月にこきつる程かすくなき

月前聞鐘

なかもつる程なく鐘の音すゝ月のいく時おきてうつらん

題不知

さらぬにみるほともなき夏のよにまたれて出る月の影哉

(は脱麿)

夏のよたゝ時の回もなむれはやかて有明の月をこそみれ

瞿麥

こきはこく薄きはうすしとこなつの色まねふる花の上露

(を脱麿)

荒砌瞿麥

まとあれてくすはへちれる庭の面に猶なさけあり大和撫子

瞿麥滿庭

とこ夏のにはもしみゝに咲しより錦のしたに道はなりにき

庭上皆瞿麥

とこ夏のにしき織しく庭の面は浅茅もひとつはたの糸筋

題不知

夏草はさしも山路にふかゝらしとはねは社は跡もたゆらめ

林頂蟬

かけしけきやすのかはらの柳原こたかく蟬の聲さく也

林中邇涼生

涼さはなるやひさきのしたのみかなもしらぬ木の陰も有覺

山家林影多

はひそなるひさきまじりの夏木立夕日もさゝす慎の板戸は

題不知

波たてるくぬきか下に駒とめておきつかはらに暫し涼まん

山家晚涼

夏山の木の葉かくれの夕月夜もる影涼ししのゝかりふき

題不知

夕されは見るさへすゝしをさゝ原風に浪よるふか草の里

を山田は夏のくれこそ哀なれいなはの螢しつのかやりひ

水岸如秋

みわたせは池邊のこはき打なひき鹿鳴ぬへし岸の夕風

秋近月明

ほともなき夏の日數を月影のまたても秋になりにつけるかな

草花先秋

草深き夏野にさける小萩原また秋たゝぬにしき也けり

山家蚊遣火

かひたつるかきねむかひの細道は都の人に見せまうきかな

遠村蚊遣火

日くるれはをちのいまさとかひたてゝとはたの面に煙棚引

遙谷蚊遣火

この峰のあなたの谷をいりはてゝ人住けりとみゆる蚊遣火

雨後谷心涼

雨晴て入日の雲に虹ふけははたみさむしも谷の夕かせ

田家待秋

ひこほしもあはれとやみるみたやもり秋待ほと同し心を

晚風如秋

山風にこのくれ竹のはかられてそゝや秋ともさはく成哉
荒和菰

うき事は水の聲にそ成ぬらん清きなかれにいくしたつれば
淵もせにかはる流れに御菰しつ憂身もかくてやましとそ思

山家六月菰

山里はこよひすかぬく淺茅をも庭にかかるこそたより也けれ

秋

立秋のこゝろを

さゝてふすねやの板戸も今宵社ひきたてつへき秋風はふけ
都には思ひなしにそおもふらん山さと寒しあきのはつかせ
いつしかも我とき衣ぬはぬまによ寒の風の吹そわりなき
哀さも身にそしみける獨ねのすかきのとこの秋のはつ風
萩の葉にけふ秋きぬとなのらせて竹のとよりそ風は入ける

秋來夜始涼

けふこそははつ秋風そ小夜衣ひきかけそむるはしめ也けれ

初秋猶對泉

涼しさはむすふ泉におほすればねたくや思ふ秋の初風

七月五日近待七夕といふことを

彦星もいまふつかとや數ふらんあまのたまゆか獨ねぬよを

織女

天の河いつれのかたかふかゝらん逢嬉しさとあはぬ思ひと
七夕にあさひく糸のふししけみこれを逢よの契ともかな
たなはたは天の羽衣ひきかさねならへて玉の枕すゝしも
梶の葉にあまつ彦星思ふことかゝはかゝましあすの歎きを
織女のみけしのあやと見ゆる哉わき雲たてる星合の空

後朝

七夕の歸るあしたのうき雲やあかぬ思ひのけふりなるらん
いつよりも今朝露けきは七夕のをのかきぬゝなれる泪か

秋のはしめにあまのゝやしるにまうてたまへりける

に月のあかくて風のはけしかりければ

さもしるき月の光もあるものをなにとあらしの秋と告らん

これを人のかたりけるを聞てたてまつりける

行宴法師

雲はらふよはの嵐のあれはこそ秋行月の影も見ゆらめ

初聞鹿

今宵より秋の山里鹿なきぬ嬉しとやいはん淋しとやいはん

鹿聲告秋

我にしも秋とつけつるさをしかに返とこそいはまほしけれ
さをしかは風のけしきに心えて秋きぬと又人につくなり

題不知

さらすとしてあと留むへき今宵かは何とすゝむる鹿のねそこは
鳴たひに鹿の聲こそ遠さかれのへのあなたに妻やまつらん
獨ぬるとこの山への棹鹿のしのひもあへぬ聲きこゆなり
露しみえ風吹のらのさむけきに聲もみやひくすかる鳴也

さらぬたに山路も見えぬ朝露にこゝろまとはす鹿の聲哉

夕霧にこやのたちとや見えさらん横の戸近く鹿を鳴なる

山里は鹿の鳴音に夢さめてあるしの袖も露けかりけり

のへかこふ霧の籬やあたならんあたらし萩を鹿そしからむ

旅宿鹿

宮城のゝ小萩かはらにとまるよは鹿に宿かる心ちこそすれ

近聞鹿聲

此里に鹿の鳴音の近きかはをのか立とにそいてゐにけり

山邊聞鹿

峯になく聲もものにそ聞ゆるあなたへ鹿のおりぬ限は

夕秋思鹿

夕月夜ほのめく峯に鹿鳴はこのよをあらす思ひ立かな

雨夜聞鹿

もる山のさよの時雨に鳴鹿はこゝろの外の涙そふらん

夜長聞鹿

秋のよはかねより先に夢たえて幾度聞つ鹿のやこへを

月前聞鹿

遠かたにかたぬく鹿をさけふなるおなし心に月やみるらん

ふたかたに心をわけてあかす哉いさよふ月と鹿の鳴音と
月にはた鹿のよつまや契りけんかたふく儘に聲のうらむる

鹿聲久不聞

さをしかの妻もよはぬにしるき哉とこの山へに薪枕せり

草花未遍

衣手の萩か花すり色薄しわくるしつえのさきしやらぬは

萩

秋の軒をゆするふりたてわかゆけはころも懐かし萩か花摺

秋はきの上葉下葉の朝しめり心くるしき花のかほかな

草花藏路

秋のゝは花のえことをよくほとにおひあひぬらん道の芝草

曉露點萩

なつかしき色はかりかは小萩原露もうは葉に有明の月

草露纏へ腕

風渡る萩の葉にをく露はこゑなき玉をなくる也けり

水邊萩

えにあらふ錦と見れは野分する磯邊の萩のなひく也けり

霧中野花

霧ふかみ朝たつ鹿の聲せすはいかてしらまし野への村萩

霧のまも萩の上風音たかししらぬはのへの萩の下露

秋野晚望

夕霧におはなか末に鳴もすの聲はかりしてのへはまかへり

野花尋人

小萩さく宮城の過てきつるかと萩の色にとはれぬるかな

女郎花

露にねて風にはすまふ女郎花なとひとつ野にかた思ひなる

おきふしに露そこほるゝ女郎花野風やさむき秋やかなしき

薄

いふこともなきもゆへに道すからしのゝを薄人まねくめり

菫 萱

か懸懸

したおれはをの姿そかる萱の野原の風にことつくる哉

今宵たれ野へにとまりて菫萱の枕のあとのなをらさるらん

晚風在萩

夕風に萩の葉そよくこやのうらは芦間分行舟かとそおもふ

いそかれぬ獨ねとこに入やられて萩の上こそす風をこそきけ

萩近簷

野へ近き萩のはむけはくらけれと月にかえつる風哀なり

萩風似雨

むら時雨萩のまかきをわたるよは人にしらする萩のうは風

月

山里は枕の軒のかやまよりもりくる秋の夕つくよかな

山の端にさして月影見れば向ひの岡にふれる白雪、
こもりえのはつせの山に月さえて霜のそより鐘ほのか也
隈もなく空晴ぬとも秋といへば雲まの月のもるもさやけし
むら雲の晴行ひまの月見れば鏡のはこをあくる也けり
老ぬれば物うきものを今宵こそむかし月みし心ちのみすれ
何にかもよさのうらはの月みけんすくもたく火の煙立けり
我宿の駒のあしおるたな橋をたとすわたるよはの月哉
年をへて野中のし水ぬるけれとさえたる月の影そやとれる
なにはかた月の光におきつとり葦まのゝひこかすも見え晁
旅の空宿かす雲になかるせてはやく朝たて有明の月
住の江に宿れる月の影を見てまつをかつらと思ひけるかな
すかはらや伏見の暮に月待とをはずせ山にあからめもせず
月よゝし賤のをた巻ひきのけてはいりの庭に隈ならせそ
山の端に入ぬる後そ我心ほかの月見てかへりきにける
おしましよ山のあなたに待影を心せはしと月もこそ見れ
大井川はやせおちまふ水の面に流れもやらす澄る月哉
月影のいさよふ峰をましかねて山又山を越てこそ見れ
横の戸を軒端の月にをし明てあたねの床にこよひ明しつ
螢乙女月にをれもをかりにとや明石のとなみわけてたく覽
めもはるにいそさきいてゝみる月は花の湊の氷なりけり
くまもなきしかつの浦の夕なきに月あらふ也さゝ浪の聲
今宵こそ思ふことなく月はみれ雲ものこらすよもの山本
中く月にちかひて行雲はくまなきよりも嬉しかりけり
いかにして千種の露にやとらん空行月はひとり澄るに
なかめして過にしかたを憶ふまに峰より峰の月もうつりぬ
月清みやすのうら船掉させは夕なみ千鳥立さはく也

さらぬたにうき雲かけぬ月影の猶かさこしの峰にかたふく
よもすから天てる月の影さえてねこし山こし風わたる也
月ゆへにむかしの人も眺めけん心はつかしさらしなのやま
ひると見て猶もあやしきみ空かな月に心は澄とこそきけり
村雲の絶間をわたる月みればくまなき空もまたれさりけり
天の川せゝの岩間やしけからん流るゝ月のかたわれにける
かるかやのしけみか下に鳴虫はおほる也とや月を見るらん
月清み幾秋風かはらふらんをはすて山のみねのうき雲
うき雲の波よせかくる天川光さしゆく月のみふねに
よもすから清瀧川にすむ月はひれふる魚のかすを見よとや
かはかりの光はいまたみすとのみいはれのゝへに澄る月哉
秋のみね月おちかゝる曉に松かせさむみましら鳴也

八月十五夜

名に高き天津み空の月たにも入山のはゝえこそはなれぬ
ひさかふる今宵の月の光こそ秋のはしめにみし心ちすれ
いかなれば月すむ空のむかしより今宵は雲のたへま成らん

田家月

よもすからひた引ならす秋の田は驚くはかり月もすみけり
かた山のすそわのたるのひたの音は淋しき月のつまと成晁
高ねより出る月にそむかへたる西の山田にさせる庵は

月照野花

くまもなく月すみ渡る秋の野は花の影こそくもり也けれ

題不知

花のえにのへの夕露すかるよりやとらん月の影をまたるゝ

月前草露

秋の野は草むらことに玉かさりますみの鏡みねにかけたり

月影のうらなくやとる上露をなと打はらふ萩のはそこは
曉月映露

いつくにも有明の月はかゝるかと露滋からぬ宿にとはゝや

題不知

水の面は心してすめ秋の月池のぬなはの影やつすめり

稻妻のてらす影たにさやけきにはやたち出ぬ秋のよの月

殘月照松嶺

白浪はこすとも見えて有明の月そかゝれるするの松やま

月照遠島

松しまやをしまか沖のはなれ島しまつたひ行秋のよの月

近對山月

月ゆへに峰にむかふる柴の戸は秋より後そさすへかりける

九月十三夜

いにしへもかゝりければや天の川月は今宵となに流れけん

みちもてゆくふたよの影をゝき乍我となをえて澄る月哉

詠めつるよころの影にみわすれてあかぬけしきに澄る月哉

木間昇月

をとほ山木のまをのほる月影は折くそすむ關のを川に

月前眺望

山の端をいつ共月のみえぬ哉めちにかゝれるくまし無れば

與月栖山家

芦のやのこやのすかきの隙をあらみ月諸共に澄そやさしき

隱倫見月

わらひとるおりには雲も厭はねと月にはれけりみ山への里

老後見月

おきなさひあらぬ人にもあへる哉かゝみに向ふよはの月影

夜靜月明

さよふけてをのか家々しつまりぬ月こそ獨いねかてにすれ

閑者月

庭の面に行かふ人もなき宿は影にくもらぬ月をこそみれ

月閑中友

問人におもひよそへて見る月のくもるは歸るこゝち社すれ

貧不飢月

板まより月には見えて月を見んむかしの儘の袖もはつかし

乘月歸家

槇の戸にをくりつけつる月影を山端まではかはりにを見る

簾舊漏月

月のもる宿の底の玉たればすそのはつれも嬉しかりけり

禁中月

さやかなる月の光を明ぬとしてしめしやす覽衛士のたく火は

陰晴月不定

こゝははれかしこは曇る秋の空人めくるしく曇る月かな

山深月明

いまそみる谷よりおくの岩淵にすみける月の影のくまなさ

山家月明

山科やをかへのくるすゆきもみきかりにも月に何習へけん

月下聞法

宿あれて月の落たるこすの中に優しくならすつましらへ哉

池上秋月

心なく天のいはとのをし明て月すみはてぬこやの池水

月下問僧

月影はくまなきものを尋行人はいつくの雲にふすらん

棹舟見月

浪の上に映れる月をよきてこそ池のみ船はさすへかりけれ

月映瀧水

布引の瀧と聞しは雲より月の光の落るなりけり

題知らず

鹽風はなるをの松におとつれてわたの入江にやとる月かけ

月夜越山

よもすから共に連ても行はかり月めぐりあへ山のあなたに

寺閑月明

月ひとりすむ山寺にそみかくた誰に尋て宿をかるらん

雨後月明

雨はれて月の面は清けれと猶かた空の雲は消あへす

月宵通社頭

終夜浪の白ゆふ手向しておまへのおきを過る月かけ

過やらてつもりの浦の月見れば住の江のかたに松風ぞ吹

曉望浦月

月影の二見の浦にかたふけはかゝみをあらふおきつ白波

月似玉與鏡

鏡かと二見のうらに見し月のもる木の下は玉にまかひぬ

月前孤舟

月清み鹽干のかたのかせなきにこきはなれぬる天の友舟

題知らず

月きよみしかのから崎こく舟は氷に棹をさすかとそ見る

くまもなきあはちのみほの月影はたなゝしを舟浦つたひ行

月夜渡

てまもなくしまとのわたりみ棹とれ嵐の山に月も社いれ

月宵逢故人

むかし君なめしよはの月よりも老ての秋は猶や淋しき

橋路曉月

松風の音も淋しき曉に月にうたひてすくる山ひと

見月思往事

なかむればむかしも戀し我心かきなみたりそ秋のよの月

月光似昔

あをによしむかしあれにし都にもふりぬは月の光なりけれ

海邊鴈

玉章のことはゆるすもみゆる哉と渡る鴈の雲かくれして

關路雁

あふ坂を朝たちゆけは諸共にとこよの雁も今を鳴なる

題不知

露滋みあさふむ人もなき後はをそくをかやのおきなをる哉

海上秋泊

舟とむるたこの浦はの夕鴈にふしのみたけは霧こめてけり

霧

大井川となせも見えぬ朝霧にゐて日のなみの聲むせふ也

川霧に駒のあしみの音せすはすくともしらしうちの橋もり

ぬれ衣を牡鹿や妻にきせつらん隔つる霧のうしろめたさよ

山家霧

かすかなる住居も見えす霧こめて心にくきは秋の山さと

田家霧

朝霧も雲かと見えて小山田はねやに木葉の時雨もる也

今朝はたゝなるこもひかしいな雀立隔てたる霧にまかせて

霧隔山寺

霧中遠帆

朽たりし岡へのてらは霧こめて跡たに見えすなりにける哉
あはち濁かち音す也ちたの江の朝あけの霧にかたほ隠れて

林霧半收

秋霧のほりも果ぬ木々の色はひとのたゝぬ錦なりけり

秋行霧深

畔つたふ小田の中道霧こめてはたこの駒もあしみたとれり

霧中旅店閑

秋霧にたつきもみえぬかりのやは往來の人の訪たにもなし

秋夕遠望

立こむる遠の夕霧むら消てゐつゝさともちりくに見ゆ

槿花

朝かほのかゝる籬のなよ竹はをのか花とや人にみすらん

擣衣

夜もすから哀とそ聞山ひこの聲うちそふる賤のさ衣

月前擣衣

ころも打音をそなたに聞なして月見てそ行まきの鳥まで

擣衣天曙

明ぬるか夜すから千こゑ萬聲うつさ衣の音たゆむ也

秋思故郷

ふるさとにわかなれ衣かさぬらん秋風寒しひなのあらのも

題不知

日くるれは宿るかやの露けさに袖もかはかぬたひ衣かな

旅行秋興

行末は霧の籬にかこはれてあせのよこ道いなは露けし

疾かはらをかやか野へを分行は鹿もうつらもをのか聲く

うつらなくの山の薄わけいてゝ下紅葉する谷にやとりぬ
近聞虫

ねやのうちのかへの中なる蛭ひとつ枕になきあかすかな

故郷虫聲

古郷は秋そかなしき櫻麻のをふのした草きりくす鳴

夜虫聲多

さよ更てこゝら鳴なりいそのかみふるからをのゝ鈴虫の聲

さよ更てこのもかのもに聲す也かやか松虫はきかはたをり

秋高野へまうて給ふにほしかはといふ所にてむしの

いたく鳴ければ

秋の夜は旅のねさめそ哀なる岡のかやねの虫のこゑく

擣衣何方

風にうつ砧の音を聞わかぬふけはまちかしやめははるけし

閑夜虫聲近

蛭よもきかとよりくゝりきてしつまるよひの夢やふる也

秋閑虫響少

秋ふかみあさちか露を蛭はなれもはてゝ鳴よはるなり

虫聲漸稀

をのつからしりへの岡の風のまに有か無かにきりくす鳴

菊花帶露

花の上は露もをかすとみゆる哉玉をいたくませの白菊

我宿のしめさす菊の露けきはあるしの袖をまねふ也けり

閑中菊

わけてとふ人なき宿のしら菊はしけみさ枝の露もこほれす

月前菊

白菊の下はにやとる月影はおれふす枝の花かとそみる

をく霜と見ゆるや月の照すらんうつろふ菊の色もかはらず
ひまもなく咲満ぬればやへか上にやへ重なれるませの白菊
ませの内に稀にひらくとみし菊のけさは荅の敷そすくなき

折菊壽郷人

都人にをれるのみをみてこすは籬にとまる菊やうらみん

菊満池塘

古池の水もあまらぬつゝみより菊はかりこそ咲こほれたれ

老菊戴霜

うつろへる色もみえねは今さらに霜にませゆふ宿の白菊
朝霜の置かへしたる菊なれと香るにしろしみまれみすまれ

紅葉

初時雨ふるほともなくしもとゆふかつらき山は色付にけり
さま／＼に心そとまるむら紅葉薄きもこきも下の青葉も
秋にあへぬ木のは耳かはくたらのゝ萩の古枝も下紅葉せり
杵はらやゝ初霜のをくまゝにかた山つはきみとりのこれり
はれくもる時雨の敷をかそふればやしほの紅葉しほ過ぬ也
紅葉する秋の梢はみわの山杉こそこのこるみとり也けれ
うす霧のひとへたちでも見ゆる哉紅葉かさねの衣手の森
よのほとに紅葉しにけり立田山みねのうす霧色／＼に見ゆ
紅葉するやしほの岡の一人はけさのしくれや染わたすらん
もみち葉の色々をみなおりもちて手に社うつせ秋の山へを
山姫のあまつひれかも紅の末つむ花にそむるこすゑは

紅葉有淺深

色あさくはしの立枝のみゆるかなみな紅のみねのつゝきに

雨後紅葉

雨雲はなをはれぬ共紅葉する峯は入日のさすかとそ見る

紅葉勝花

おもへたゝ雲にまかひし花よりも錦とみゆる秋の木末を

蜀中紅葉

紅葉するならを花にかりませて軒ふきたるゝ旅のかり庵

古寺紅葉

はつせ山紅葉しぬれば鐘の音も紅になる心ちこそすれ

隔谷見紅葉

通ひ行谷の石橋ありといへとおらてむかひの紅葉をそ見る

隔河見紅葉

飛鳥川むかひの岸に紅葉してなゝせのよとの波そ色成

我宿はいさゝを川のはし紅葉こなたの岸のくひせともかな

山鹿與紅葉

さを鹿はまたふたけなる秋山にかはりはてたる菊の色哉

纔有落葉

大あらしの森の下風吹まゝに一葉つゝちるもとかしはかな

松間薦紅

松の色は霜の後社あらはれるれかゝれる薦のなともみつらん

紅葉掩松

紅にみゆる梢もこからしの吹にはまつ声そきこゆる

山家秋雨

ぬれぬとも槇の板戸もたてあへす野分にたくふ村時雨かな

山家秋意

月もらぬ谷のすきふの柴の戸を秋の嵐のとふそ嬉しき

題不知

山里はをのゝ草村風さえてくすのしたはむうつら鳴なり
賤の男かくる木のこや竹すのこいなほみたれてかゝる頃哉

田家秋風

山里はそしろのかたと刈ほして垣根のあけひゝとりゑみ晁
かり庵のいなはかうへのそて枕吹かへす風によ寒なるかな

題不知

風をいたみおろす枕のこも簾ひまよりそもる宵のいなつま
昨日けふをくろのはたりこり初て秋田のほたち刈み刈すみ
庵さすをくろのひたはてもふれてあま洩水のひく音をする

西七條にすみたまふころ山家秋暮といふ心を

秋の暮むしもうらむる山里にきくはかりこそ冬をいとはね

九月盡

おいゝては明し乗るにいかなれは秋過る夜のみしかゝる覽
谷川をみねの木の葉にむめさせて過行秋の道つくる也

人々に首首のうたませ給ひけるつるてに秋のくる

ゝこゝろを

すきぬるか難面き秋の心かな戀しかるへき野へのけしきを
あすよりは秋の花てふ名をかへて冬のゝ草と枯やはつへき

さかのをくらに住たまひけるころ

山里はみな冬かれて棹鹿の音にそわつかに秋はのこれる

冬

初冬の心を

冬こもり宿はけさよりたてつめり峯のましはに霰ふるとて
山里は竹のすかきに風さえてねさめかちなる冬そきにける
冬くれはをちかた野へのならかしは朝ふく風の聲を淋しき

院の御修法してとはにおはしけるか十月はつかころ
にてらへかへりいり給ひけるに今は紅葉もちりぬら

んとおほしけるにおもひのほかさかり也ければ

色くゝにやとの梢のみゆるかなまた此里は秋やのこれる
御かへし 源頼經

秋ははや過にしか共紅葉はのちらても君をまつとしらすや
落葉

山里はならのおち葉をふむ音にとひくる人そかねて聞ゆる
なこりなく紅葉散らしたつ田山ふもとの時雨紅にふる
峯わたる風なかりせはあはらやの上に木葉を誰かふかまし

山家冬閑

冬こもるやとは木の葉にうつもれて只松風の音のみをする

題不知

たとりたつ音はかりして山里はしめりを渡るをのゝしの原
山里はきくそひさしき明くれの雲打しくれたとりたつ也

落葉如雨

一葉つゝちるは降出る心ちして嵐に雨のこゑまさるなり

雨後落葉

雲はれてもらぬはかりそ板ひさし木葉の音は猶しくる也

水邊落葉

風吹は峯の紅葉は幾にほひ瀧のみなはの糸を染らん

紅葉はをひらのおろしの吹かせてしかのおほわた錦浮へり
谷川に木の葉つもればきひの山秋は錦のおひをこそすれ

落葉埋橋

紅葉はのつもるくもてのやつはしはやきれにをれる錦也晁
落葉藏水

池上落葉

今朝みれば立田の川も埋れて木葉にたてるみをつくし哉
池の面にあらふ紅葉の錦をは汀にたゝむこからの風

苔庭落葉

庭の面は埋れぬともしらしかし苔より上にしける木葉を

樵路落葉

今さらに道を木葉にふみあけておのへの松の枝をろすめれ

無風落葉

こからのの軋ともみえて音羽山紅葉にせかる谷の小河は

落葉埋路

此頃は木の葉にあとをふみつけてもとの道より來人そなき

閑庭落葉

ふみたむる庭の木葉をかきつめて又すみけりと煙みせつる

朝落葉

ひとりみる庭の木葉を心なく朝きよめする山おろしの風

不慮有落葉

思はすに冬の梢に見ゆるかなほやかしたなる蔦のみちは

古砌殘菊

昔みし籬はかりそあれにけるうつろふ菊の色はかはらて

池邊殘菊

紫のうつろふ色の影見れば松にもかけぬ池のふしなみ

月前殘菊

月はさし菊はまかきに霜かれてをのゝのこる冬の山さと

殘菊のこゝろを

雪の色をさきたてゝ咲花なれば冬まで菊はのこるなりけり

時雨

散つもるくち葉か上に時雨ふりうす雲かゝるしかの山里
はつしくれ梢そむらしかた岡のあしたのはらに雲かゝり行
眞寔はふそはのそこねの小やの上をぬらしもはてぬ山巡哉

偽にかにもいはゝ成ぬへし時雨てはるゝそらのけしきは
木の葉散とはかり聞てやみなましもらて時雨の山廻りせは

さよ深きまきの板やのむら時雨ひとりきけとや淋しかる覽
さしもあらぬ時雨なれ共玉河はことにとりなすよはの音哉

海邊時雨

をしてるやしまきに波のたゝよへは聴てずけく時雨降めり

旅宿時雨

時雨たにとまらさり覺旅ねするみつのはまはまはら也とて

霽中時雨

猶も又時雨しぬへき日影には旅のころもをぬかてこそほせ

時雨のこゝろを

旅ねするかたをか山に雲かけてしくるゝ空に月もさやけし

冬月

しくれ行雲にはつれて照月はひとつ空にもおほえさりけり
冬枯の木のもりくる影みれば霜さえにけり月のかつらも

古里はよもきかふるえしもかれて月はかり社澄もあらさね
朝ことに風の聲こそすゝるなれよをへて月の影しまされは

題不知

楨のはのとはすかたりも聞わかすゝとか竹垣今朝時雨きて

寒野月

冬のよのかやか下の寒けきに月もきゝすもいかて澄らん

山家冬月

霜さえてむねあらはなる柴のやは月を衣にかさねてそふす

寒夜獨看月
獨ぬるふすのゝにいたとををし明て霜に冴たる月を社見れ

旅泊冬月

むら雲に月のやとれる程もなくなみの枕に時雨すくなり

寒山月

落つもるならのおち葉に霜さえて峰の木枯月をふくなり

凌空望月

更にけりあられふるよの村雲のはれまゝの月を見る間に

寒庭月

霜氷いやかたまれる庭の面にさえたる月をやとしてそみる

梢透月光垣

木葉なき梢をわたる木枯は雲をそ拂ふ有明の月

蘆間冬月

伊勢の海鹽みちくれば濱荻のひまにたゞよふ冬のよの月

霰

風さえて村雲さはく夕されは氷の上にあられたはしる

さゝふきのまやの軒にはたるひして雲のそはえに霰ふる也
此冬は霰はかりに日數へて初雪といはん程そすきぬる

遠山初看雪

今こそはをものたか山み雪ふれ里にしくるゝひとつ雲より

題不知

晴のほるあさるの雲のしたもに初雪ふゝくひへの高山

もつめに住給ひける頃はつ雪を御らんして

初雪のひとつへ降にも跡たえてとひくる人もなきすみか哉

初雪未深

うす雲のかけてはれぬる初雪に野中の薄ふしあへぬかな

雪中尋山家

淋しさをかねて山ちにさきたてゝ霜の下なるすみかへそ行

山寺雪深

けさ見ればあかるも雪に埋れて雪をくみつゝかへるなり晁

雪朝客來

初雪のあしたに君かきませるはあるしをとしも問こさる覽

雪中惜別

降雪にひれふる袖もみえしかしあまさかり行君かふなては

松上雪

梢にそ雪はつもれる住の江の松のしつえは波にゆられて

故郷雪

雪ふれはあれにし里のやへ櫻かすかさならぬ花をこそ見れ

古さとはかみさひにけり浅茅原しらゆふかくるけさの初雪

山近對雪

宿近く妻木こるをのつえを見て山路の雪のふかさをそしる

山雪連雲

としへたる岩か上にやつもるらん雲ふれきたる峰の白雪

谷雪與水

谷川の氷におほふ岩ね松影さかさまにつもるしら雪

雪不擇處

降雪にみやもわらやも跡たえてひとつ心に淋しかるらん

雪を名所によせて人々にうたよませさせたまふとて

雪ふれとかはらさりける梢哉花ゆへにこし櫻井のさと

夜雪似月

雪ふれはこやのよとこのひま白み板まの月の洩かとそ見る

橋上雪

雪をふみ駒のあしみの深ければ橋も音せずせたのなかみち

江邊雪

難波江の芦への雪にしらたつのその毛衣やひとへそふらん
雪中見旅人

むら／＼にするとそみゆる旅衣雪ふりかゝる笹のこちかへ
雪埋遠樹

その原や伏屋も雪に埋もれて有とはみえしはゝきゝもなし
社頭雪

よしの川吹こす風のさえしよりかねのみたけは雪を積れる
雪埋寒草

降積る末はの雪やをもるらんかたなひき也まのゝかやはら
冬のなる萩のふるえを今更にしかより後は雪をしからむ
雪のこゝろを

さは山に柳のころもかけて見ゆこけの緑に雪をかさねて
山里はまたすみなれて埋もれぬ雪はえふらんもしらねは
むねよはみふゝく嵐しの音絶ぬつもらははらへよはの白雪
桂木や高ねの雪は深けれとかへるまゆみの聲はたまらず

とはれぬも羨もなき宿なあれや跡つきあへす雪のふれゝは
吹まよふ風にまかひて雪ふれは天のみ空にいさこみなきる
雪の中に見ゆる煙は大はらやせれうの里のわたり成らん

今朝見れはきその伏やの竹はしらたはむ計に雪ふりにけり
雪つもるこさかの道を踏わけて誰きてとはん深き山里
山里やかやまの苔のふかけれはうら緑なる軒のしら雪
うらかれしくるすの小野も雪ふれは花咲にけりかやか下折

海邊雪

すまの蛋の鹽焼ききぬはなれにしをけさ白妙に雪をかへたる
むら／＼に消るゑしまの雪みれはまた墨かきの果ぬ也けり
題不知

なには行みふねの棹の雪こそ蘆のほすへの露をゝきけれ
しほれあしの下葉とちませ氷して物淋しかるなには江の里

浦近聞千鳥
淋しかるすまの關やの旅ね哉うら波かけて千鳥鳴なり

深夜千鳥
鹽風に千鳥しはなくすまの關月おちかゝる沖つ浪まに

終夜聞千鳥
よひのまはひかたに鳴しとも千鳥曉しほに浦つたふなり

遙聞千鳥
遠さかり浦つたひ行きよ千鳥思つけなる聲に鳴なり

題不知
千鳥なくふけるの浦のかち枕又すまならぬ關も有けり

月前千鳥
みをき行よふねの棹やとゝむらん月のてしほに千鳥鳴也

水
住吉のきしの松風わたる也細江の汀つらゝるぬらん

池水のつらゝのとちし其日よりあしの葉音の波によすなる
大原やをかはの水ひまわれて炭つみ車わたちいるなり

終夜いふき嵐につらゝるて沖にうつなりしかのうらなみ
鳴のふすを田のかり田は氷してしみとけやらぬあせの細道

古池水
嶋つたふ池の汀はふりにしを氷をあゆむ道もありけり

たちろかぬ水のいたをふきそへて涙のふりたるこやの池水
氷閉橋

冬川の氷にたてるはし柱かたふきなからかためつるかな
河水凝舟

さゝ波やしかの浦かせさゆるよは氷に澄るあまのつりふね

池上水

水鳥

氷してうきねの床はたちけり外の池とてひまもあらしを

水鳥のあしにひかるゝねぬなはゝひとまとまりぬくり也晝

谷川のふしきにねふるをし鴨はつらゝのどこや寒けかる覽

水鳥のうきねの夜とこさえゝて下折の芦の籬寒しも

池にひつ松のはひ枝の下くゝりつれてそわたる鴨のむら鳥

さゆるよは芦間をあさき水鳥のかつくしら玉うす氷せり

霜枯のあしのもとつ葉落はてゝつたふかもめの隠家そなき

月影の晴くもる夜はをし鳥の上毛の霜ををけはきえ行

鳴鳥のかつくにわれぬ薄氷有明の月のやとる也けり

瀧邊水鳥

せかれつゝよとみかゝれる岩蔭にあちむらつたふ瀧つ山川

寒沼水鳥

むれてゐる鳥のさはきにぬま氷われもわれぬも打あはす也

雪朝水鳥

今朝見れはをしの上毛を斑なる芦間を分て雪やもりこし

寒夜水鳥

うきねして夢みるほとやなかる覽雪打拂ふよはのをしとり

古池水鳥

浅ちふにもとの汀は成はてゝそこにそつたふ池のむら鳥

網代

あしろ木に紅葉の錦をりかけてはつるゝ糸とみゆる白波

あしろ打やなせの波の聲すは月を氷とみてややまゝし

鷹

あはせつる手なれの鷹のそり行は鈴の音さへ空にこそなれ

雨後鷹狩

晴やらぬあまゝに出るみ狩野は雲のあなたに鈴そきこゆる

埋火のこゝろを

埋火に松葉かきつめ吹つけてあかしそかぬる冬の山里

連峯炭竈

此頃は峯つゝきやく炭かまにふしこそとの煙なりけれ

依煙知炭竈

今もかも山のかひより煙たつくちあけてけりまきの炭かま

雪のあしたさしきあけて御らんしけるにすみうりの

すきければ

雪はかりひこの内には見え乍ら炭やめすとて猶ありくめり

雪中寒梅

雪つもる垣ねに梅や咲ぬらんみのしろ衣かにそかはれる

海路歳暮

とし月は浪の枕にくれにけりおきつ島山雪ふかく見ゆ

歳暮のこゝろを

年の暮と山の里はいそかれすすそのゝ小松かとにたてれば

哀にもことしはけふになりけり何をいそきて過る月日そ

戀
人ゝに十五首のうたよませたまふとて初戀のこゝろ
を
祝ひつゝけふ書そむる言の葉にあやしやいかにもし習する

忍戀

よそにのみ戀てふものみなれさほけふは我手に取にける哉
さりけなき景色の森とおもへとも心のうちはたけくまの松
忍ひねの思はすかほやしるか覽君かけしきのたゝならぬ哉
思ふとくみてしれかし水莖にかきなかりてはもりも社すれ
戀のこゝろを

ね覺する時の哀とおもはすはしはしまとるむ程もあらまし
逢みんとはかなく書し一筆に身のいたつらになりける物を
うき人の心ともかなかつらきの神のたのめしよるの契を
あくかるゝ戀の道社はるかなれ逢より外のとまりなければ
つらさを忘れもしなん戀しきを思すつへき心ちこそせね
我獨り戀しといまはいひやらしとはぬはさても思しれかし
□まきてかたしく儘にさよ衣あなたの袖はなるゝよそなき
憂を猶戀る我身のつれなさは人のつらさにとりやはする
偽のたひにはらへるよとこそ中々塵はつもらざりけれ
同夜にすまはよそにも見るへきに暫もえ社ありふましけれ
君と我思ひはふかき契りかなさのみつらさをこふる心よ
戀しなん後はかならず思ひ出よさすかに絶てみえし物をと
君にわれ深き心はみえなましとらふすのへもこゝに有せは
逢みてのあらましを詠めして思つゝけぬよはゝあらしな
つれなくは人のとかとも思はまし言ぬそ戀のかきり成ける
うらかへし思は嬉し戀しきもつらきも人のゆかりならすや
よそなから心をとゝむ中々におもひ絶ぬといひも社すれ
なそもかくつらきはさらにつらからて思はぬ人を思ふ心そ
世中にあはぬためしの名取川きえわたりなんとそかなしき
逢みても思ふはかりはいはれぬを色に出ぬる袖を嬉しき

後朝

いかなれは戀しと斯はかゝるれと思けつにはけたれざる覽
こゝろから心のくねの苦しさにいはねはいはて戀わたる哉
我戀はことたか磯の浪なれやをのれ苦しくわきかへりつつ
限あれば阿鼻の焰の中にても我戀はかりこかるらんやも
心からほの見し人をするへにてけふは戀路に惑ひぬるかな
あやむし君を戀つゝ獨ねてをになるまでに歳をへにける
戀しきはなき所なく成にけり心の中につゝみしものを
あはてのみ年をふるやの板庇茂る忍ふそいふせかりける
逢ざりし昔は人そつらかりし又もこぬには身をそ怨むる
手枕にいれしかたみと思はすは涙にくたす袖はおしまし
夜かれしを悔しく何と恨みけん絶ぬほとりと契らましかは

夏初戀

明ぬなりはやかへりねといひなかなそや心を引とゝむ覽
歸りつる其曉にまたねして夢にそ見つるあかぬなこりを

冬夜戀

ぬきかふる蟬のは衣薄けれとおもふ心をえこそもらさね
夜もすから袖の涙のこほるかな人の心のとけぬかきりは

精進中戀

しめあけてはやもあひこは神よ神わかぬきとの印と思はん
いとをしとことふる聲のともよきに嬉しくも有すゝのみこ哉

問巫女戀

我戀はしける芦まのくち舟の人にしられて年をへにける
今宵又のせて返すなむかへ舟あふくま川のなもそけかるる

寄舟戀

今宵又のせて返すなむかへ舟あふくま川のなもそけかるる

隔河戀

今宵又のせて返すなむかへ舟あふくま川のなもそけかるる

尋失戀

君ませとやる小車はむなしくていかなるものにこよひねぬ覽

依雨返車戀

雨降ともつけ事のつらければ袖をぬらしてかへるをくるま

約雨霽戀

我は只菅のをかさも打きてんなとや雨間をまてとしもいふ

變約戀

立忍びまてとたのめしなかやりとかけてもしける空頼み哉

契不過戀

まとかと待にかはきし我袖のものと涙に猶ぬるゝかな

見獨寢戀

獨のみ我手枕もね覺するひかけのまみのねたくも有かな

戀不擇人

たま牀の花の薺もさもあらはあれ眞菰か内のつゝれ戀しも

互尋不過戀

みるめをはよみに尋てかたかひのあはて浦々に幾よねぬ覽

依戀怨隣

芦かきのまちかきになととはさ覺忍戀をもへたてやはせし

適會空曙

小車のひとつ床には臥なからさしのけられて明ぬこのよは

老後戀

哀にも思ひたつ哉木のちつかまつへき我よはひかは

閑人戀

戀せずは山里すみの獨ゐて淋しきのみやなけきならまし

忘憂戀

戀すれば筆を差置ひまそなきかくてふるよをかくへき物を

兩方送書といふとをわらはにかはりてよみ給ける
ほのみしとなれにし人の戀しきとこすみ薄墨書をやりつる

いとをしくし給わらはのさとにいてゝ久しくまいら

中絶てとしはへにしを夏引のいとかくはかり思はすもかな

人のもととなるわらはのもとへ

奥山のいはかきふちのかくろへてふかき心をしる人そなき

月前戀といふと

ねやの戸をさゝて幾よに成ぬらん君戀しきに月を詠て

夜もすから月に慰む我戀はいらは心のやみいかにせん

片思

人しれす磯間になみはよせくれとうしろむきなる岩ね松哉

思へ共心もくまぬいかたしのなにゝひかれてすきわたる覽

題不知

戀しさも數ならぬみのつらさをもふたつなけきを荷頃哉

ほのみせし姿計をたつのこかこひのなくさに打しのへとや

恨

いもせ山あらし吹よの月影にことのほとにうらみつるかな

旅戀

とへかしな露けきよはの草枕つらき人すら戀しき物を

のしまさきちへの白浪こき出ぬいさゝめと社いもか待らめ

みぬ人の其俤はうつゝにて旅ねは夢のこゝちこそすれ

都いてし其曉は數ならす旅のね覺をおもひをこせよ

夢に見て草の枕におとるけはいつら都の人とねたらん

雜

祝のこゝろを

いつとなくちとせを近き松か枝に吹はる風ものとけかり覺
行末を思ひしやれはわたつ海の遙にそくるあまのたくなは

御かへし

ことはりや皇御國の治まれは天のかこ山日影のとけし

まもかとけふより後をかそへみんいはねの松のちよの春秋

君かよはいつと渚に漕かけてさはく眞砂の敷もしられす

ちよふへき位の山の風なれば草木もなひく物にそ有ける

ありそ海の水はたゆとも廣澤の流はいとゝすみやまさらん

あつまちや都のふみはをそけれと心計は行かよひけり

都にはふたりなめし山端の月をみてこそ思ひいつらめ

こく程はさてなくさみぬなこの浦の磯のうきねそ哀之ける

露しけき軒に今宵そあかせとや賤のあるしの宿もかさねは

ねやのうへのあはぬ板間もとかならて月に嬉しき旅の庵哉

脂そく一寸のほとに羈旅のうた人々によませさせた

まふとて

うしつらし都はみしと思ひしは別ぬほとのことろなりけり

山路曉行

いくむまや越てきぬらんよをこめて鈴の音する山をすく也

つこの國のみのをにこもりたまへりけるかそれより高

野へまいりたまへりけるあか月有明の月を御覽して

このまもる有明の月のをくらすはひとりや山の峯を出まし

御をくりに天王寺へまいりたりけるものともの中に

賢知にたまひける

あくかれし都の人をむつましくみるにつけてもぬるゝ袖哉

上の雨下なる水に責られてつゝめるはすのみをいかにせん

うへしたの雨と水とはさもあらはあれ蓮開けんみをそ羨む

おなし人かうやへかへりのほるにはるなんまいるへ

しと申とて

とに角に老ぬる身こそ悲しけれ思へと又もいひもやられて

御かへし

月よめは幾程もなし老ぬともいつへき春をまたさらめやは

世にしつみたる事をなけかしくおぼえけるころたて

まつりける

よの中の□けてのよをもはなれぬは山の此方にすめは也覺

御返

心をはうきよの外にさきたてゝ人めは山のこなたにすすめ

釋教

尋れは我も佛もひとつみのまとひさとりのなのみ也けり

此よ迄吹つらしけん風ならはみのりの花はちりこさらまし

高瀬舟くるしき海のくらきにもりしる人はまとはさり覺

隨喜功德品の聞一偈隨喜のことろを

みのり聞こけのむしろの露けきは思あまりの涙なりけり

衆罪如霜惠日能消除

はかなくて朝夕草にをく霜のてらす日影に消さめやは

法花經あまた供養し給ふときゝて入道宰相三部と申

たるに一部をたまはせたりければ

この里はみつの車と思ひしをいつれのしなに我もれにけん

御かへし

始にはみつの車と聞しかとまとはひとつのりとしらすや
みのをにこもりたまへる比たよりにつけてたてまつ
りける

源頼經

露わけてあさつむ花に墨染の袖の雪を思こそやれ

御かへし

わけてつむしきみの上の露よりも都思ふそ袖はぬれける

法橋慶信

かきこもるみのをの瀧の白糸をくるくく君そ千世迄もへん

御かへし

命をはすてしみなれは千とせとも思そよらぬ瀧のしら糸

かうやにすみ給ふ比月あかきよ季正入道かもとへつ
かはしける

うらやまし心の月の雲はれてこよひの空のけしきともかな

御かへし

沙彌西善

ひとたひも思すまさはこよひにも心の月の何かをとらん

九月はかりに源俊重かもとより秋風身にしむよしな
と申たりければ

かくはかり峯のけしきのあしければさこそ都も夜寒ならめ
(る脱殿)

御かへし

源俊重

さこそはと思ひもすてぬ嬉しさを哀とみませ峯のひしりも

崇徳院よりかうやへをとつれ申させ給へりける御か
へりことに山路の雪に埋もれてなと申給へりければ

崇徳院

ふる雪は谷のとほそを埋ともみよの佛のひやてらすらん

御かへし

てらすなるみよの佛のあさ日には降雪よりもつみやきゆ覽

阿彌陀講のついでに十樂のこころを人々に孔子くは
りによませ給ついでに聖衆來迎樂をとり給て

露のみを苔のむしろに置すてゝかたふけよする蓮にそのる
道心追哉深といふこころを

古はあくかれいてゝすてしみを今は佛とかへしてそしる

心月輪

よとゝもに心のうちにすむ月を峯よりにしに何おしむらん

無常

哀にもひとりとゝまる人をなきをくれ先立事はあれとも

かくれなほ宿をは月に契をかん今そすむべき心と思へは
なからへぬうき世を思ふ曉はまぐらの下も露けかりけり

高野御室かくれたまへる比月のにしになるまでなか
め給て

山端にかたふく月をおしからぬ情なきよは思ひしりにき

おなしころよきむなりけるあしたむかしの御ことな
とを思ひ出したてまつるよしを申て

源俊重

冬さむみ山の煙し絶ぬればすみおほ原の里を戀しき

御かへし

すみかまの煙はかりはたてぬ共君をおもひはきえしとそ思
春に成て南院にまいりたるに昔うへをき給へる梅の

盛に咲たりければつけて奉りける

源俊重

俤もたちそふらめや花の色に君かまそての匂かとみよ

御かへし

なつかしくかほるにしろし梅花君かまそての匂なるへし

れいならすをはする御とふらひにまいりあへりけれ
はさうしをへたてたる處におのくよひいれ給てな

くさみぬへきわさなんありなんやとの給はせければ
あさくらをうたひたりけるかいみしくおほえたまひ
とくこゝちもをこたり給にければ

あさくらを聞に心もすゝしくてかみのめくみに逢こよひ哉
御かへし 前大納言實定

あさくらやかみの恵みのかひありて返くも君はちよませ

前左衛門督公光

畏くもなのりして晁朝倉やきのまるとのゝ近きあたりに

左大弁實綱

源はいつれも同しのりなれば神のめくみにあふそことはり

人のもとへきぬつかはすとして

厚衾なこやか下のおいねすみもとのかはきぬひきや捨らん

御かへし 法橋慶雅

かみふすまひきを捨つる老鼠ちよ迄きぬをかふるへければ

公通卿人ゝいさなひてまいりけるにをのゝ哥など

よみてかへりけるつきの日きのふの御うたはいみし

かりし物かなとかの卿のもとよりほめ申たりける御

かへりことに

人しれす谷かくれせることの葉をかたりちらすな木枯の風

御かへし 大納言公通

ちらさてはえそあるましき木枯にかゝるものは谷隠れせり

入道宰相のもとより桃をまいらすとて

あひ難き三千よの桃のけふよりは幾度みよにならんとす覽

御かへしにうちのくこになんたてまつりぬるとて

我君の爲そと高きさゝけをくみちよの桃のはつほと思へは

忝誇二仙洞之恩喚二添二老屈之壽算二爰故郷情忽動新詠

屢呈而已

觀 蓮

住なれし昔戀しき都へにいとゝ心のとまるたひかな

入道左京兆暫辭南山之幽閑之還岫二適訪二郡寂寥

之禪室二會面移二時言讀消二日歸駕之後幸投二佳什詠

篇二之處殊増二感情二不堪二握翫二慰以答和矣

我たにもあくかれぬへき都へにとまらし物を君かこゝろは

やよひの頃源賴經かさくらのかりきぬしほれてえな

んさしいてぬと申たりければ

ことはりや春の久しくなりぬれば櫻のあをはさそ凋るらん

二條院のくらゐにおはしましける時たてまつり給け

る

いそのかみ古きつかいを忘すはあはれ亂れん数にもれしな

谷かくれ朽て年ふる埋れ木のめくみめくます君かまにまに

さりともはおもふ計をしるへにて心をそやる雲のうへまで

御かへし 二條院

かけてたに思もよらす白浪のなれし昔をわするへしとは

頼まるゝ身そと報せてさりとともと思へとさくは嬉しかり晁

いつくともわかぬ恵の心にもとに思としらせてしかな

おなし御とき内裏にてかひあはせあるへしときこえ

けるにある人のうたを申ければ

もゝしきの玉の臺の簾具あじやかうらに波やかけゝん

雲の上にちりそまかへる春風の吹あけの濱の梅の花かひ

崇徳院の法金剛院におはしましけるにあめかためを

たてまつり給て

急きつる心のほとをなにつけて君か爲とそゆふへかりける

御かへし 崇徳院

いそぎ出て我ためにとし聞つればあまき心に受そ納むる

徳大寺左大臣のもとへさま／＼ののりをつかはした
りければ御かへりことに

さま／＼のみ法を見るそ頼もしき我身の罪は消やしぬらん
御かへし

罪はかりきゆとなとしも思けんみのりは不死の薬とをしれ
入道宰相いまた中將ときこえける時此よしをつたへ
きゝて 教長卿

さま／＼の法を廣むる治さは高きいやしきわかしとそ思
御かへし

み法をはいかゝたやすくちらすへき求むる人にひろむ計そ
漁舟何去

いさり舟かゝりのかけの消ゆくはいつれの方に島かくる覽
葦隔漁火

天つ星まかふ波間のいさり火はみなとの蘆に雲かくれしぬ
船裏曉風冷

曉のしほ風ふけはあさころもゆめひとつなりよさのうら舟
海路日徐久

またしらぬとまりのかすそ積りぬるわか敷島の方は何れそ
漁火遠去

あまを舟いさりたく火のいつく迄八重の鹽海こきはなる覽
夜泊波聲近

いそにては哀にきゝしおきつ波枕の下はおとろかれけり
側聞曉鐘

ひはらもる有明の月に聞ゆなり尾上の寺の鐘のひと聲
夕到古寺

山くれて雲のうちよりうつ鐘の聲を尋て今そきにける

湖邊群鶴

から崎に舟やよす覽白鶴のむれてしかつのうらわたりする

夜聞水聲

さよ更て絶ぬときけは又くなりものさひしさの水の音かな
よもすから軒に滴る水の音は難波のとにきゝそなさまし

閑居唯谷水

谷ふかみ人めまれなる柴の戸を猶さそふなる水の音哉
岩ま行谷のはそ川音つれてまときなしかの庵淋しも

雲隔山家

山人にをのかすみかを尋れば雲をさしてそ程をゝしふる
しかの里あさるる雲の深ければ尾上の木立みえみ見えすみ

松邊家

山里は思はぬ松にかこはれてかこひし柴のかきはくちにき
松閑中友

むかひるて幾とせ過ぬ此宿にあるしもひとりまつも一もと

松近聲

苟且の夕つめ渡す柴の戸は松をたよりにねりそをそゆふ
山家曉情

長河鷺

何となく心細きは明ほのに横雲わたるしかのやまさと
大る川みかさ増れはをちのせに驚たちさはく築くつれして
河やしる篠に白ゆふかけてみゆをちのいてるにきある群鷺

松風似雨

をと計り雨ふる磯の松風にいかてやあまのしほたれにけん
山家鶴馴

谷ふかみうつす栖は白たつのとなりをしむるところ也けり
天晴有鶴聲（飛鳥）

あさみとり空うらゝに聲す也とはには残るたつや鳴らん
竹風覺夢

風わたる籬の竹のそよ／＼とみえての夢をあはすなるかな
曉聞竹風

驚のよふによゑもきくへきに竹やすらかに風わたるなり
曉風入簾

いたしとみもとにうちこすあし簾有明かたの風を吹入るゝ
繞竹到山家

まはりたつ程はあれ共山里はうらあらは也そとのたかはら
寒夜曉情

とこさえて獨ぬるよは常よりもみゝにたつ也鳴の羽かき
題不知

難波江の蘆のはすゑのなみよるはしたはむたつのは風也覺
たかねより遙にみれば大る川となせはをちの梢なりけり

住吉のかみあひおひの松なればへにける歳も千世と限らす
神のますおまへにしける玉さゝのなひくそをみの衣也ける

天王寺にこもり玉へりけるに住の江の方へおはして
松風のをとにたくひて住吉のをきかけさかりからるをす也

市河といふ處にすみ給ふころ山家待客といふとを
忘るなとみせしらせてし櫺の戸を辿るか君か今にきまさぬ

山さきの圓明寺にて晴後遠水といふ心を
朝日はれあるかなきかのいな舟のみゆるや淀のわたり成覽

遠望在川
このまより淀のわたりを見渡せは汀に細くなかすやり水

嵯峨のをくらといふところにすみたまふころ山家晚
望といふとを

哀也軒にほのめく夕月夜かけさす人もなき柴の戸を
にし山のもつめにこもり玉へるころみむろちかき

あたりにかりのよをかかねてをりぬけるかをとせさ
りけるよよみ給ける

數ならぬうきみの程やしりぬ覽たのむの鴈もよかれしに覺
おなしころ人のもとへ

山里にすめは住とや思ふ覽かくてふるみはあるかあるかは
逆懷のこゝろを

世中を思ひさためし其日より我みは空にゆきなしらくも
物名むらさきのけさ

いかなればゆるきのもりの紫のけさしもにたちさはく覽
きりとうたい

秋くれはさやけき月とたつ霧と哥いつれをか先によむへき
右出觀集雖多不審依無類本不能接合

群書類従卷第二百六十五

和歌部百二十 家集三十八

北院御室御集

守覺法親王

春

立春

年なみの立かはりぬるしにや氷し水も下むせふなり

鶯

奥山の谷のふるすのうくひすもたかきにうつる時にあひ覺

梅喚鶯

梅か香をゝのかはふきにははせて友さそふなり鶯のこゑ

霞

春きても雪きえやらぬ吉野山かすみにもまた埋れにけり
夕かすみそことも見えす立こめて風の音にそさくの濱松

山霞

春かすみしるへかほにて朝たては中々まかふ山路なりけり

野望霞

朝日さす野

おりゐる雲雀

海路霞

おきかけて遠さかり行聲すなりかすみのうちにうたふ舟人

羈旅霞

八重まては今朝そ霞のこめてけるさゝかき薄き鄙のかり庵

梅

散かたになるともおらん梅かえの花の盛はやつれもそする
梅かえの花にこつたふ鶯のこゑさへにはふ春の明ほの

なにとなく世中すさましくおほゆるこる南面のむめ
の咲そめてさかぬかたも有をみて

梅の花咲をくれたる枝みればわか身のみやは春によそなる

春雪埋梅

をのか色は雪よりそこに埋もれて匂ふに梅はあらはれに覺

残雪未盡

根にかへる花かと見ればまたさかぬ櫻かしたの雪のむら消

櫻

花とみるよそめはかりのしら雪もはらふはつらき春の山風
吉野山うき世のほかとのかれきて中々花に心とめつる

瀧のうへのみふねの山の花さかり峯にもおにもかゝる白浪
かへるさの末ほと遠き山路にもいかゝ見すてむ花の夕はへ

山花未綻

かねてより猶あらましにいとふかな花待峯をすくる春かせ

野櫻

いはしろの松の常盤にことよせて野中の櫻ちらすもあら南

樹陰翫花

ともすれは木の下露に袖ぬらしなつさふ花よ哀とやみる
法金剛院の八重さくらのもとに人々日暮しあそひか
へりなむとて花歌よみしに

^{新編}わするなよ同じ木陰に尋ねきて馴ぬるけふの花のまどるを^{にイ}
海邊花

さくら咲春やなかるの浦ならぬ花にとまらぬ舟人もなし
顯昭かもとより八重櫻にそへて

^{新拾}君かへむ千歳の春をかさぬへきためしとみゆる八重櫻かな
返し

^同千世經へき例ときけは八重櫻かさねていと、仇に思はし^{あらずも有哉}

落花

花ゆへに世の儚さをしりぬれば散らすも風のなさけ也覺
みればおし花ちる峯の夕霞立へたつるもこゝろ有けり

鞆中落花

山さくら雪とふりつゝ跡たえて家路を駒にまかせてそゆく
やよひついたちころに東山を見ありきしつゝてに山

家春興といふ事をよめる

山里の柳さくらも折をえて都のみやは錦なりける

夏

更衣を述懐によせてよめる

數ならて年へぬる身はそれなから猶人なみに衣かへしつ

朝見卯花

今をみるうの花山のはなさかり明ても月の影残りけり

海邊五月雨

五月雨の日かすつもりの浦なれや下枝もひちぬ住の江の松

右哥。續古今慈鎮和尚哥に。今朝みれば雪もつもり
の浦なれやはま松かえの浪につくまで。相似歟。

深夜五月雨

月も今はかたふくほとに成ぬらむはれすは晴す五月雨の空
郭公

^五過ぬとも聲のにほひは猶とめよほとゝきすなく宿のたち花
軒ちかく一こゑはしてほとゝきすをちの木梢になこり鳴也

夜更て郭公のなくをきゝて

ふけてしも山ほとゝきす來鳴也よひにはまたぬ人も聞とや
杜郭公

うれしさは袖にあまりぬほとゝきす鳴かさねたる衣手の杜
時鳥なのるにしろしこれそこのたれその杜のありす成ける

暮天郭公

ほとゝきす猶はつこゑをしのふ山夕ゐる雲のそこに鳴なり

郭公聲稀

尋ねみてうらみははてむ時鳥いくもかくや夜かれしつ覽

草上螢

今こそやはたるともしれ散てなをかへりやはをく草の上露

螢照海濱

伊勢の海の清きはまへにてる影を玉とひろへははたる也覺

螢照船

葉すゑよりこほるゝ露の心地して蘆分船にほたる飛かふ

納涼

しはつ山ならの葉かけの夕すゝみわりにもあらぬ秋風そ吹

杜邊納涼

涼しさはひとへに秋の心地してゆふ風立ぬ衣手のもり

秋

初秋

浅^干ちふの露けくも有か秋きぬと目には涯かにみえける物を

初秋納涼

風さはく竹はかけ

七夕

秋とのみなにかまたまし彦星の逢瀬をやすのわたり成せは

たなはたの秋さり衣一夜のみかさぬる山となかななりけん
小夜更てしのふけしきのしるきかな霧立かくす星合のそら

萩

やつるとも一枝おらん小萩はら花ふみしたく鹿はなしやは

分^{新後}ゆかはたかたもとにかうつる覽我しめし野の萩か花すり
野へならはしからむしかにかこたまし我と散ぬる庭の秋萩

野花露

秋のゝの千くさの色にうつろへは花そかへりて露を染ける

霧

をとしるし鹿の通ひちこれなれや霧のあなたにこのは踏也

旅霧といふ題を人にかはりて

宮古島ありとみえはやことゝはむすみた河原は霧こめて晝

海邊霧

浦つたふさはのうたのみ聞ゆなりあまの友船霧かくれつゝ

霧籠曉天

あけぬとやくらき物から知ぬらむ霧間をわくる鳴の羽かき

虫

こからしに虫の音たくふ秋の野は露も泪もとまらさりけり

月

おほわたの浦半の風に霧晴て千船の数もみゆる月かけ
はるゝと千里のほかへ行月はをのか光やしるへなるらむ

峯にても雲のちりゐる月影を岩間にあらふ谷のした水

風わたるこすゑに雨の音はして月のみそめる松かうら島

筑波ねの茂きこまより月もれはこのもかのもの雪の斑きえ

駒とめてみれば心もうつりけりひのくま河にすめる月かけ

八月十五夜月の歌あまたよみし中に

逢坂のせき路はるかにひく駒の跡なき雪や夜半の月かけ

高野にこもりたりけるころ山居月の心を

世をいとふみ山かくれのすまゐには月さへ雲の塵なかり晝

野宿見月

秋の野にやとかる月をはな あたりの露をはらふ袖そふ

月澄海邊

しほたるゝ伊勢おのあまの さまにもおはすうつる月影

旅月

舟むやふをしまか磯の梶まくら月さへやとるとまりなり晝

對月忘愁

うきなからやとらむ月を待ほとにいつれは乾く袖の露かな

曉更月

おしみかねひれふるまでそしたはしき松浦の山の有明の月

あたにみし露は草葉に晨明の月そ中ゝ影はきえゆく

田家曉月

明^{新後拾}ぬとは宵より見つる月なれと今を門田に鳴もたつなり

ある聖人來りて夜もすから法文なといひてやうゝ

明かたになる程にさてもあらしとて人々月の歌よ

みに

なにとこのにしへは月のしるへせて事そともなく我誘ふ
鱗衣

紅葉

これはさはおきろの里か秋の夜の露まところまで衣うつなり
染殘す木々の紅葉もあらしとしてしうれは山をめくるなり
もみち葉のこかれわたるや秋をやくけしきの杜の梢成らむ

紅葉日淺

いつしかは色に出しとしのふ山下葉より社もみちをめけれ

水邊菊

白妙の色をうはひて咲にけりいつぬき川の岸のむら菊

野外秋盡

つねよりも哀はふかし秋くれて人もこすのゝ葛のうら風

九月盡

おしみかねはかなく暮て行秋のなこりにとまる袖の露かな

九月盡日會あるへかりしにはゝかる事出きてとまり

にしかは顯昭か許へ

諸共に惜むも秋はとまらねとさてはなくさむ方やあらまし

返し

行秋もおしむ人ゆへとまるかと君計にそけふはまかする

冬

初冬

冬きぬと水のこゝろやしりぬらん谷風さむみつらゝるに覺

山中落葉

さそひ行嵐を道のしるへにて峯うつりする木々のもみちは

水上落葉

龍田川瀬おちの涙も色つきて木のはの下に聲むせふなり

時雨

時雨つゝ過ぬるかたは雲消てひとつけしきにみえぬ空かな

行路時雨

遙々といくのゝ道の村しけれ駒とめつへき木の下もかな

雪

はらふともそのかひあらし吳竹の夜のまの雪に折ふしに覺

めもはるにみるそ淋き菅原やふしみの田井の雪の明はの

葉かへせぬ濱松かえも花さきてえもいはしろにふれる雪哉

雪のうちにさゝめの衣うちはらひ野はらしのはら分行や誰

なに事を月に見わかむかさこしの雲はれわたる峯のしら雪

野雪

まねかねと猶過まうき景色かなのへの尾花の雪のしたおれ

遍昭寺にて池邊雪と云事を

干
浪かけはみきはの雪も消なまし心ありても氷る池かな

山路雪

ふみわけむかたこそしらねみ山木の雪の下行稀のかよひ路

雪埋社樹

しらゆふを空より誰かたむくらむ今朝はつ雪のふるの神杉

曉天雪

はれやらぬ横雲まよひ風さえて山のはしろきゆきの明ほの

千鳥

はしたてやよさの浦松ふく風に聲をたくへて千鳥と渡る

群てゐるをのか羽風に浪たてゝこゝろとさはくうら千鳥哉

河上千鳥

夜を寒みさほ風をくるたよりには千鳥の聲も瀬くわたる也

水鳥

はねかはす友ねのをしは打とけて氷そむすふこやの池水

朝見水鳥

新婦あさ氷とけなむ後と契りをきて空にわかるゝ池の水とり

歳暮

行年の別れ計をなげきにて身にはつもらぬならひ成せは
細干ひと方に思ひそはてぬ春をまつ心におしき年のくれかな

歳暮に雪のふる朝敦經朝臣か許より

雪の内に暮ぬる年を惜まるゝ我身もいたくふりぬと思へは

返し

年暮る雪のうちにはふりぬともあけなは春にあはし物かは

雜

述懷

思ひてのあらは心もとまりなむ厭ひ易きはうき世成けり
細後何事を待ともなしになからへて惜からぬ身の年をふるかな

社頭述懷

我からや神の恵もへたつらむうき身のほとをみつゝの玉垣

曉の枕になにとなく過にしかたのはかなさなとおも

ひつゝけて

何事も夢になり行いにしへのおもかけのこる明くれの空

閑居

うらさひて葛はひかゝる横の屋に窓うちすさふ村雨のこゑ

閑居水聲

岩そゝく水よりほかに音せねは心ひとつをすましてそきく

山家晚思

暮はふしつかふせ屋の夕煙りはれぬ思ひによそへてそ見る

旅

故郷をいとゝよそにそへたてつるこゑこし山のやへの白雲
いなしきや鄙のかりねはめもあはて都を夢の内にたにみぬ
ふみなれぬ岩根をつたふ通路にしはしたちのけ峯のしら雲

山路旅行

よそにては通ひちなしとみし峯を雲ふみわけて山を越ゆく

旅宿松風

ふみゆけは濱松かえに風こえてなさけありその磯枕かな

旅宿言志

よしさらは磯の蓬屋に旅寢せむ浪かけすとてぬれぬ袖かは

和泉國新家といふ所にて鹽湯あみしに源中納言雅賴

卿のもとより

限あれば身社數にもいらさらめ心のゆくをいとはさらなむ

返し

言の葉のたよりのかせにちるときそ通ふ心も色にみえける

しほ湯あみはてゝ宮古へかへるとてよめる

日數へし鄙の住るをおもひいては戀しかるへき旅の空かな

住吉にて月を見てよめる

月のみそり明しつるもしほ草しきつの浦の松のしたふし

高野へまいる道にて

跡たえて世をのかるへき道なれや岩さへ苦のころもきてヒイ覺

香隆寺の邊なる所へ行たりしにあるしいつみから
舟をうけてさまゝの物ともつみたるを見てよめる

唐船につめるたからやあまるらむ今はの身をも玉を散ける

無常

はかなしやいかなる野邊の蓬生につゐには誰も枕さためむ
つねならぬ此世のはてそ哀なる思へは誰もよもきふのちり
なきあとの影をたにやは留むへき歸らぬ水の泡ときえなは

曉はかなき事とも思ひつゝけて

明方のねさめのところはうつゝにて浮世を夢と思ひしりぬる
秋の彼岸に故宮のため佛事せむとて泉殿へまいりし
に長尾の松原のまへをすくとして

有し世の松のみとりのけしきにてうき身は頼む陰なかり梟
御前にまいりつきて

はかなくて消にし跡を來てみれば露所せき庭のむら草

嵯峨の邊にとき／＼あそひなとせし所にあるしうせ
て後事ともひきかへてあらぬさま成しかは

昔みし住家ともなくあれはて／＼おもひしよりも淋しかり梟
天王寺宮六條の御八講にまいらむとてちかきわたり
をかりてやとり給けるにやまひおもくなりてもとの
すみかへもかへらてかくれ給にし後門この柳のあま
たある前をすくとしてよめる

一すちに物をかなしきかりにすむあるし絶にし青柳の糸
おさなくよりおふしたてたる童の日來おもくわつら
ひしか今はかきりとみなしてしかはさてしも有へき
にもあらてなるたきと云所にうつりわたりにきなく
さめかたきやとのさひしきに常にき／＼なれたる岩根
にそ／＼瀧のをとまても折からにや身にしむ心地す
れは

せきあえぬ泪はたくひ有梟とおりしもむせふ瀧つせのころ

はかなくなりて後雪のふるあした
をくれゐて獨なかむる庭の雪に心までこそうつもれにけり
ありし世にかきをきたりし文ともなところをはかなき

かたみともなるへけれと思ひてとりよせて見れば横
笛の謠神樂催馬樂風俗の謠とも又聲明法則までもい
たらぬくまなくくからすした／＼めをきたるさま未
の世のたから此道のか／＼みかなとためしなく見ゆる
につけておしさもひとかたならて

苔の下に笛の音までも埋もれて只名計を世にとまりける
袖の上になにのしつ／＼の残るらんたえにし物をさ／＼浪の聲
わか駒を何かはやめんまつち山まつと逢へき道もかやはし
おほとりのはかひの霜は消果て／＼名残の露もとまらさり梟
もろ共にとなへ馴にし法の聲そのふし／＼をいつか忘れむ
詩歌の藻の残りたるをみるにつけても

なきをさてかたみにとまる藻汐草浦さひて社波はかけ／＼れ
經かくとて人のもとへつかはしたる文ともをとりあ
つめし中にいつそや病のをやみたりしたえまをやみ
はてたるとやおもひけむそのよし人につけたる文の
ありしをみるにも常ならぬ世のさためなきも今さら
におもひしられしかは

迷ふへき闇をはしらて儚くも霧のたえまと思ひけるかな
法事の日むかしふきし笛を誦經にすとして
ふき馴し玉の横笛ぬしなくてきもあらぬかねの音を悲しき

遍昭集

春

花の色は霞にこめてみえすともかをたにぬすめ春の山かせ

西寺の柳を

あさみとり糸よりかけて白露を玉にもぬける春のやなさか

二月はかりみちをまかるとて

おりつればたふさにけかるたてなからみよの佛に花奉つる

やまとのふる山をまかるとて

いそのかみふるの山への櫻花うへけむ時をしる人をなき

雲林院のみこひえの舍利會にのほりてかへり給ひけるに

山かせに櫻ふきまきみたれなむ花のまきれに君とまるへく

春花山に法皇のみゆきありしとくかへらせ給なんと

せし時

まてと云はいともかしこし花の山暫しと鳴む鳥の音もかな

おなし山に人の入てゆふかたまかりかへりなんとせ

しかは

夕暮のまかきは山も見えなむよるは越しとやとり取へく

たいしらす

今こむといひて別し朝よりおもひくらしのねをのみそなく

うちわたりに侍し時人にこむとたのめて夜ふくる程にうしみつとそうするをきく

人こゝろうしみついまはたのましょ

といひ侍しかは

夢にみゆやとねそすきにける

五節のころまひゝめを見侍て

天つ風雲のかまひち吹とめよをとめの姿しはし見るへく

なにくれといひありき侍しほとにつかうまつりしふ

かくさのみかとかくれおはしましてかはらむよをみ

むもたへかたくなしくら人頭少將などといひてよる

ひるなれつかうまつりしなこりなからむ世にもまし

らしとてにはかに家の人々にもしらせてひえにのほ

りてかしらおろし侍しにもさすかにおやなとのとは

心にやかゝりけむ

たらちねはかゝれとてしもむは玉の我黒髪を撫すや有けむ

はしめて山ふみ侍て

今更に我は歸らしたきみつゝよへとさかすとはゝ答へよ

ふかくさの山におさめたてまつりしを思ひ参らせん

心のほとはおもひやるへし

うつせみはからをみつゝも慰さめつ煙りたにたて深草の山

ゆふくれにくものいとはかなけにすかき侍るをみて

つねよりもあはれにて

新古 さゝかにの空にすかくもおなしとまたき宿にも幾夜かはふる

世のはかなさいとゝ思ひしられて侍しかは

すゑの露もとのしつくや世中のをくれさきたつためし成覽

なと思ひつゝけてまかりありきしほとにとしもかへ

りてもろともに見し殿上人あるはかうふりえある
はつかさ給はりなとしてかはらにいて、御ふくぬく
所にあやしのほうししてつかはし、

みな人^古は花の衣になりけり苔のたもとよかはきたにせね^よ
かくていつこともなくありき侍てはつせのみてらに

さふらひつるほとにかたはらなる女の寺の僧をよひ
よせていふやうとしころの人なうなりたるをいかに
してもある物ならはいま一たびあひみせ給へ身をも
なけしにもしたらはみちをもなし給へたゝともかく
も此人のありさまをゆめにもうつつにも見せしらせ
給へておとこの具をおひたちまて誦行にせさすと
てえもいひやらすなくをはしめはなに人ならむとお
もふほとにわかうへにきゝなしてちかくよりてなを
きけはめのうへなりけり子ともゝそひていみしう泣
くいとかなしうてなそやはしりもいてなましとちた
ひおもへともいみしうかへされてよもすからなきあ
かしたるところはみのなともくれなぬになんしみた
りけるさてまたよにありともきこえぬを小野のこま
ちこもれりけるかはたらに經よむたれならむとてつ
れな人して見せければみのひとつきるほうしのさす
かにあてやかなるなむすみのかたにゐて侍といひけ
れはみゝをたてゝきくにいとたうとくあはれなりた
ゝ人にはあらず少將のたいとくにやあらむとおもひ
ていかゝいふとこのみてらになん侍いとさむきを御
こゑきこえ侍れはいとたのもしくなんみそひとつか
し給へ

いはの上^後にたひねをすれはいと寒し苔の衣を我にかさなん

といへるかへりことはかりを

山^同ふし^{世をそむく}

といへるたゝ少將なりけりとおもひてたゝにもかた
らひしなかなれば物はいんと思ひて訪ねいきたりけ
れとふと失せにけりときこしめして五條のきさきの
宮より内舍人を御つかひにて野山をたつねさせ給け
りからくしてわりなくかくれたるところにゆくりな
ういりにければえかくれあへて逢ひぬ宮のおほせこ
とになむみかとおはしまさぬにむつましくおほしめ
しゝ人をたに御かた見にと思へきをかくよにうせら
れたうひにたれはいとなんかなしきなとか山はやし
にいるともこゝにたにせうそこを云はさるましきみ
さと在所にもをとせられさらむなればなきてわふな
るいかなるところにてかくものせらるとなん侍しか
はこゝかしこわりなくたつねはへりてかしこくまい
りたるといへはおほせことかしこまりてなんみかと
かくれさせ給てのち世にふへき心もし侍さりしかは
かゝる山のすゑにこもり侍てしなむをまち侍にまた
なんあやしくめくらひ侍にいとかしこくとはせ給へ
ることわらはへのはへるところも心にはさらにわす
れ侍らすとて

か^古きり

なき雲井のよそに成ぬとも人を心にをくらさらめや
とな^え鷹^{中つる}とけいし給へといひける入道の顔
姿いとなんかなしかりけるそのほにもあらずなり
てたゝみのをのみなむきたりける少將なりしときよ

けなりしを思ひいてゝいとかなしかりけるかたとき
人のあるへき所ならねはかへりまいりてことのよし
かくなむとけいせきすれば宮かしこくしほたれさせ
給て御返つかはすに人々もみなせうそこつけてやり
給けれとかくれにければえたつねあはすなりにけれ
と僧正まてなりて後のことにや仁和のみかとのまた
みこにおはしましゝ時ふるのたき御覽せんとておは
しましけるみちに遍昭はゝの家侍りけるに庭を秋野
につくりでいとおかしう御物かたりのついでによみ
たてまつりし

里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野となる

おなしみかとの御をはの八十賀にしろかねをつゑに
つくりてたてまつり給ひし時このをはにかはりて

千早ふる神やきりけむつくからに千年の坂も越ぬへらなり
たいしらす

諸人のそこら祈りし印あらはやそちうき身に傳へさらめや
さかに侍し時ほうしの房のまへにせんさいの侍ける
を女どものたちとまりて見侍しかは

こゝにしも何にほふらん女郎花人の物いひさかにくき世に
さう／＼しう侍しかはむまにのりて物にまかりし
ちに女郎花の見えしをゝよひて折しほとにむまより
おちてふしなから

名にめてゝおれるはかりそ女郎花我おちにきと人に語るな
花とみて折んとすれば女郎花うたゝ有さまのなに社有けれ

秋の野になまめきたてる女郎花あなをくし花も一とき
ならへまかるみちにあれたる家に女のことひき侍し
をきゝ侍ていひいれてし

わひ人の住へき宿とみるなへに歎きくはゝるとの音をする
あき山の嵐のこゑをきく時は木のはならねと物そかなしき
のこりのもみちを

からにしき枝に一むら残れるは秋のかたみをたゝぬなり
雲林踪の木かけにたゝすみありきて

わひ人のわきて立よる木のもととはたのむ蔭なく紅葉ちり
くたにをたいにて

散ぬれは後はあくたになる花の思ひしらすもまとふ蝶かな
はもしをかみにてるもしをはてにてなかめをかく

花の中めにあくやとてわけゆけは心そともに散ぬへらなる
しかよりかへり侍し人花山に入てふちのはな見侍し
かは

よそにみて歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝はおるとも
はちすに露のをきたるを

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなとかは露を玉と欺く
我やとは道みえぬまであれにけり情なき人を待とせしまに
世を厭ひこのもとに立よりてうつふしそめの麻のけさ也

源賢法眼集

小山田の水のこほりのうちとけて今朝は蛙もゆるに鳴なり
春日野のゝへの霞に立ましりしるもしらぬも若菜つむらし
みなかみの岩間の氷とけぬらむるせきの清水こゑまさる也
梅のさきたるかきねをゆきすくとて

ゆきすりに梅かかきねに立寄てそらたき物を身にしたる哉
去年といひ今年といへと我は只きのふけふとも思ほゆる哉

正月六日夜

夜もあけはあしたの原に立出て雪のきえまに若なつみてん
いつのまにわき葉さしけん今朝も又雪降つめるのへの若に
さもあらはあれ人はみす共花の木は風隠れにそうふへかりける
春くれは木のもととの櫻花はなのふちともみえ渡る哉
櫻花みきはしらゝに散つもありあまもひろはぬ貝かとそ見る
むらさきのむらこの糸を染かけて風に波よる岸の藤なみ

やよひつこもりの日ぬせく所にて

逝春のぬせきにとまる物ならは先おりたちて我そせかまし
山路にて初音はきゝつ時鳥わかふる里にはやくなれなん
郭公はしめて程に京なる人のもとに

鳴出る山時鳥人ならはよきとつてのたよりならまし

二月十五夜に

さ夜中のたき木の煙立そひてはやしのかすみひまなかり晝
郭公をまちて

一聲にあげぬるものをほとゝきすきよ更るまで何またす覽
あさましくみしかき夜かな時鳥二こゑとたにえやは鳴ける
さらてたに伏かとすれば明る夜を何をあかすと叩く水鶏そ

いかばかり歎をつめる身なればかよをへてもゆる螢成らむ
我宿におほしたてたる花なれとふたはの心またしらぬかな

七月七日

たよせにやけふはかきまし七夕の空に棚引くさゝかにの糸
河風や身にさむからんさ夜中にねくらさためぬ千鳥鳴なり
わつらふ人のをこたりたるに

山のはにいりなんとせし月影をあはれ有明とみるそ嬉しき
わらはのほうしになる夜

ふりかけしねくたれ髪をかき探り人遠へたる心ちもやせん
京にのほるとてあまの川といふところにて

をとにのみきゝ渡りにし天のかは旅の空にてけふみつる哉
名にしおはゝ仇なやたゝん女郎花咲亂れたるのへに積りて
年をへてみゝなれにたる山ふしも夢さめぬへき鹿の聲かな
み山には風吹けりたきつせの水せくはかり紅葉つもれる

とし老ぬることをなけきて

年月の過にしかをた尋ぬれは我身につもる物にさりける
たむくとも手向の神やうけさらん紅葉のにしき(本マ)
みなそここにうつれる秋の山蔭はかゝみのはこの錦とそみる
よる紅葉おしみて

やすきいもねられさり晝紅葉散夜半の嵐のうしろめたさに

九月はつる日

秋はたゝけふはかりそとなかむれば夕暮にさへ成にける哉
いかてかは老せぬものといひをきし霜いたゝける白菊の花
をし鳥のはねも氷にとちてけり霜うちはらふ音たにもせず
みこもりていてむよもなき沼水のいや氷ゆく冬をかなしき
紅葉をわか心とは散すともよその嵐にまかせてはみし

としころもろともにあるわらはの京にのほるに

何をかもなくさめにせん冬山のふりつむ雪のとくる待間に
うつろふにふかさまされる菊花たれ秋はつるいろといひ劔

すみよしにて

すみよしの天くたりけむ其神のあはれ相生の松をしを思

音たえていかにとたにもいはぬまの水を深くも頼みける哉
我かとのほかなる車めくらさん法しらさらむ人のさとまで

雪 春野にふた葉したはのわかなつむらん

法華經とくところにて

むすはる蓮の糸をとかれすは葉末のいかで亂れさらまし

さいしやうらうといふまいを

露の身は草葉にのみか老ぬればつえにもかゝる物にさり暁
御狩野に朝たつきしのほろくくと鳴つゝそふる身を恨つゝ
すみすます人知らめや程遠み鳥のかけたにみえぬ山みつ

京にありしおり人のうみたりし子をもりぬとて人に
とらせたりしかはやりし

おもひきや我しめゆひし撫子を人のまかきの花とみんとは
よるよふこ鳥をきゝて

跡たえて人もかよはぬ山里のなによもすから呼子鳥そも

山邊の露をみて

葉をしけみ山邊にかゝる露の身をゝき所なき世にもふる哉

かたらふ人のひさしくをとつれぬに

さゝれ石の上行水のあさましくさらくさらにとはぬ君哉

右源賢法眼者。義祖滿仲朝臣愚息樹下集作者也。取家者

凡卑於道者雖三顧不堪。申三出禁裏御本。令三書寫之畢。

然而不審少々在之問。重可勘也。御判（常徳院殿）

夢想國師御詠草

甲州河浦と云所に山こもりしておはしましける庵の
庭の雪むら消て人のふみたるに似たりけるを御覽し
て

風雅雜七

我庵をとふとしもなき春の來て庭にあとある雪のむら消

相州三浦に船舶庵と云を結びてすみたまひける頃よ
み給ける

ひく驢のうらとをさかるをとほしてひかたもみえす立霞哉

鎌倉亞相魯氏并武衛直義朝臣臨川寺のまへに亭のあ

りけるにて法談のゝち嵐の山の花を見て當座の人々
歌よみけるに

誰もみな春はむれつゝあそへとも心のはなをみる人をなき

散花を梢のよそに吹たてゝあらしそしはし枝となりぬる

なをもまたあまた櫻をうへはやと花みるたひにせはき庭哉

みるほとは世のうきことも忘られてかくれかとなる山櫻哉

さくとみるまよひより社散花を風のとかとも思ひなれぬれ

いまみるはこそ別にし花やらん咲て又ちるゆへしられぬ

征夷將軍尊氏西芳寺の花の下にて法談の後人々哥よ

みける時

心ある人のとひくるけふのみそあたら櫻のとかをわするゝ

花のさかりに西芳寺に御幸なるへしときこえけるに

うちつゝき御さし合有てのひける程に花の散けるを

み給ひて

猶も又千とせの春のあればとや御幸もまたて花の散らむ

武衛將軍禪門惠源花のころ西芳寺に來臨のとき人々
歌よみしに

なからへて世に住かひも有けりと花みる春に思ひしらるゝ
新千種上
ちればとて花はなけきの色もなし我ためにうき春の山かせ
いきて猶ことしもみるになれゝて又こん春を花に待かな
數ならぬ身はあるしとおもはてや心のまゝに花ぞ散ゆく

征夷將軍同春來臨のとき

山陰にさく花までも此春は世にのとなる色そみえける
この庭の花みるたひにうへをきし昔の人のなさけをそしる
咲花は今もむかしのかたなるに我身はかりそ老かはりぬる
年たけて後庭の花をみたまひて

新拾遺舞上

七十の後の春まてなからへてこゝろにまたぬ花をみるかな

西芳精舎に御幸なりて兩株の佳花歴覽ありける翌日

に奉られける 竹林院内大臣于時大納言

めつらしき君か御幸を松かせにちらぬ櫻の色を見しかな

御返し

花ゆへの御幸にあへる老か身に千とせの春をなをも待かな
やよひの末にかゝりて花の咲けるとしよみたまひけ
る

はなも又春の名残をしたふとやことし彌生のするに咲らん

花散すきて後西芳寺に將軍おはしたりしに

さかりをはみる人おほし散花の跡をとふこそなさけ也けれ

又庭の花をみ給て

同しくは風にしられぬよしもかな我ともとなる隠家の花

左武衛將軍禪閣重義相公羽林義同道して來臨法談

の後於三庭前之花下一人々哥よみけるついでに

治まれる世ともしらてや此春も花にあらしのうきをみす閑
行春のとまりをそことしるやらん花をさそひて過る山かせ
これや又春のかたみとなりなまし心にちらぬ花のおもかけ
又もこん春をたのまぬ老か身を花もあはれと思はさらめや
ゆく末の春をも人はたのむらん花のわかれは老そかなしき
此年の九月晦日に入滅したまひけり。

征夷將軍于時顯相并典義西芳寺に來臨法談之後庭

前兩株之佳花賞翫之次に人々うたよみけるに

いつも見はかくめつらしきことはあらし散しも花の情也覺
いさしらす庭の梢やかけならん池の底にもはなそ咲ぬる
吹風のえたをならさぬ春なれはおさまれる世と花も知らん
春の夜といふとを

分出るひまもなきまでかすむよはおほろそ月の姿なりける

山居郭公といふ題にて

鳴出し軒はの山のはとくきす里よりかへる程そまたるゝ

彈正親王光臨の時題をさくりて人々歌よみける次に

夕暮は何いそきけん待出て後もほとなきみしかよの月

武衛來臨之時夏月といふ事を

月をみる心になかき夜はあらし更行うさは夏のとかゝは

納涼

暮ぬよりゆふへの色はさき立て木かけ涼しき谷川の水

題不知

山あひの木のまはしらぬ短夜になを明のこす谷陰の庵

當時侍者にておはしましける比圓覺寺を出ておくの

方の巡禮し給ひてうちのくさといふ山中に庵むすひ

て初てうつり居たまひける夜月くまなきを見給ひて
のかれきて今みる時はかはりけり思ひやれかし深山への月
二階堂出羽守道蘊亭にて中納言爲相卿曉月房なと參
會法談の後人々哥よみけるに迷情之中假有生滅と云
題にて

夜の程もいくたひ出て入ぬらん雲間つたひに出る月かけ
風雅輕教
いつるとも入とも月を思はねは心にかゝる山のはもなし
今はゝや心にかゝる雲もなしのかれきてみる深山への月
いつまてと霜枯を待淺茅生によはらぬ虫の音さへはかなし
葛はうらみ尾花はまねく夕くれに心つよくも過る秋かせ

瑞泉院の一覽亭にて雪のふりける日

まへも又かさなる山のいほりにて梢につゝく庭のしら雪

雪中に草木國土悉皆成佛の文を思出給て

わきて此花さく木をとうへけるは雪みん時のこゝろなり晁
初雪の日將軍雪を踏分て來臨し給ひしかは

新拾遺雜上

とふ人のなさけの深き程まてはつもりもやらぬ庭の白雪

たはむほとしはしは枝につもりつゝ二度にふる松のしら雪

天龍寺の方丈の集瑞軒より雪のふりけるととき嵐の山
をみ給ひて

雪ふりて花かとみゆる嵐山松とさくらそさすかゝはれる

いつくにもこゝろかなふ山あらは隠居にせむとおも

ひならひけるころ

世をいとふ我あらましの行するにいかなる山のかねて待覽

佛身無爲にして諸趣に墮すといふ心を

新後拾遺雜下

忘れては世をすてかほに思哉のかれすとても數ならぬみを

濃州虎溪といふ所に住給ひける頃參學の人々とふら
ひけるをいとひたまひて
世のうさにかへたる山の淋さをとほぬそ人の情なりける
また鎌倉山に人の住居たる庵に一夜とまり給ひける

に軒の松風夜もすから吹ければ
我さきにすみけん人のさひしさを身に聞そふる軒の松かせ

相模國にそこらといふ温泉に下り給ひけるに其山
の奥の人里もつゝかぬ谷の底に山賤の庵のありける

をみ給ひておなしく世をすてゝ社とよめる古歌をお

もひ出て又返して思へは世を捨たる人はいかにも世

を捨かほなるけかれもあり此山賤は中ゝこの理に

もかなへる心地してよみ給ひける

世中をいとふとはなき住居にてなかゝすこき山賤の庵

相州三浦の横須賀といふ所にいり海にのそみて泊船

庵とて住給ひける頃中納言爲相卿とふらひ來られた

りけるを舟にてをくりいたしける時によみたまひけ

る

かりにすむ庵尋ねてとふ人があるしかほにて又をくりぬる

又三浦の庵を捨て總州へおはしましける時其庵の檀

那三浦安藝前司貞連もとへつかはされける

うかれ出ることを恨と思ふなよありとても又有はてんかは

濃州清水といふ所に庵むすひてすみたまひけるをす

てゝ出給ふとて

氣難雜中

幾度かかくすみはてゝ出ぬらんためなき世に結ふかり庵

右武衛將軍西芳精舍に來臨法談のち人々哥よみけ

るついてに

をのつからとひくる人のある時も淋しさゝそふ山かけの庵
花室といふ尼寺の長老我身解によそへて暮みてたて
まつりける

遠近の海と山とはへたつれとおなし空なる月を社みれ

御返し

所からかはるけしきのある物をおなし空なる月とみるかな

總州の退耕庵にすみ給ひける時或人來て此住るのめ
つらしさに心のとまるよしを歌によみたりし返事
めつらしく住なす山の庵にも心とむれはうき世とそなる

舉足^不下足皆是道場といふ心を

^{風雅釋教}

故郷とさたむるかたのなき時はいつくに行も家ちなりけり

題不知

世にすむと思ふ心を捨ぬれば山ならねとも身はかくれけり
さとりとて常にはかはる思ひこそ迷ひの中の迷ひなりけれ
惜め共終にはある仇し身をかねて捨るそかしこかりける
我のみとかしこ顔なる儚さよ儚かりせはかしこからまし
捨るとて人を恨むる世はあらしなにゝさはりてうきを侘覽
吹たひにはやめつらしき心地してきゝふるされぬ軒の松風

甲州ふえふき河の水上に住給ひけるころ

流れては里へも出る山川に世をいとふ身のかけはうつさし

世尊不説之說迦葉不聞之聞といふ心を

^{新拾釋教}

様々にとけともとかぬ言のはをきかすして聞人そ少なき
成佛なしといへる心を

むすひしにとくるすかたはかはれ氷の外に水はあらめや
無輪廻中妄見輪廻といふ心を

山をこえ海をわたるとたとりつる夢路は閨のうちに有暈

彈正親王西芳寺におはして法談の後歌よみたまひけ
るついでに

さすか又人のかすなる身となりて老にはもれぬ年を積れる
思ひなす心からこそ身のうさを世の咎とのみかこちける哉

釋教

しるへとて深きしをりを頼む社まことの道のさはり成けれ

無常の哥をすゝめける時

あたなから心にのこる儚をけふりとならぬすかたなりける

後醍醐院御時金剛山といふ所にて合戦ありけるに公
家武家の人々おほく命をおとしたるよし聞えける頃
よみ給ひける

徒に名にかへてたに捨る身を法の爲にはなとおしむらん

俳諧

いもの葉にをく白露のたまらぬはこれやすいきの涙なる覽
月影にまかひあらそふ人あらはさたの外成身をいかにせん

花梨のなりたりけるか春のくれまて庭に残りたりけ
る枝を折て將軍へ奉りける時

さくら散て花なしと社思ひしに猶この枝に春はありのみ

有馬の温泉に浴したまひける時其山の麓に堂のあり
けるか舊損して雨もたまらずもりけるを御覽して

寺ふりて雨のもりやと成にけり佛のあたをいまやふせかむ

土岐伯耆前司入道存教よみてたてまつりける十五首

の中に

折にふれ時にしたかふことはりをそむかぬ道やまも成らん

返し

ことはりをそむきそむかぬ二道はいつれもおなし迷なり暈
夢の世と思ふも今の迷ひかなもとのうつゝのなしと聞には

夢のうちに夢と思ふも夢なればゆめをまよひといふも夢也
 花の色月のひかりをあはれともみる心にはいたつきもなし
 さかぬ花いてぬ月そとみる時はこゝろにかゝる春秋もなし
 いづくより生れくるともなき物をかへるへき身となに歎覽
 こし方も行末もなきな空にうかれても又さてやはつへき
 幻に暫しかたちをうくならは何と定てとかといふへき
 幻にしはしかたちをうけゝると思ふもけにはとかと知すや
 いとはしなもとより空に澄月はしはしへたてゝ雲隠るとも

新後拾遺集教

やはある集

雲よりも高き所に出てみよしはしも月にへたてありやと
 今こゝに向ふ山路のほかならて尋ぬるかたを迷ひとやせん
 めにかけてむかふ山路のおくに社人にしられぬ里は有けれ
 心をも身をもたのます今はたゝあるに任せて世をや置く覽
 何となくあるにまかせて住人もさすかうき世は忘れさり晝
 聞は耳みるはまなこのものならは心はなにのぬしとなる覽
 聞は耳みるはまなこと思ふなよ我にあまたの主はなかりき
 春そとてえしも草の色なれば枯葉の秋も何といとはん
 思ひなす心よりこそかはりけれおなし草葉の春秋のいろ
 よしあしの二つのみちはたえはてぬ心とてけに姿なければ
 心とてけには姿もなきものをよしあしとなと思ひわきけむ
 なく鴨の寒き夜すからかつくらん氷の下のこゝろしらすや
 鳴かものかつく氷の下までもけにとかはらぬ冬のよの月
 住はてん山の奥までともなへと月にそかねて契りをきけん
 世をすてん後とは月に契るなよあはぬとはの末もはつかし
 かゝる身をむなしき物と聞に社世のうき時は思ひなくさめ
 世のうさに慰むといふ言のはに身かゝれさる程をしらるゝ
 あはればや柴の庵のおく山にありとも知ぬ世をすくさはや

身をかくす庵をよそにたつねつる心のおくに山は有けり
 題しらす

此程は思ひをりつるぬのひきをけふたち初てみにきつる哉
 ける笠もおへるたきゝも埋もれて雪こそくたれ谷のほそ道
 世を背く後はなかもぬとならば月に暫しや身をおしまゝし

新後拾遺集下

羣書類從卷第二百六十六

和歌部百廿一 家集三十九

慶運法印集

春

立春

けふもなを雪けの風はあら玉のとしともわかつて春やきぬ覽
今日といへはゆきけの雲もうちなひき春くる空に霞ぬる哉

初春霞

棹姫のころもはる風空さえてまたゝちなれぬ朝霞かな

山霞

久方の雲井にたかく霞む也ふしの煙のはるのあけほの
さは姫の袖のわかれはしらねとも霞にかゝる峯のよこくも

浦霞

あま衣はるくる空のあさなきに袖しの浦はかすみこめつゝ

霞隔遠樹

はゝきゝはよそにさへ社みえわかね霞む伏屋の春の明ほの

鶯

谷風に春しりそめて鶯のうちいつる浪の花になくなり

くれ竹のふしみの里のあれまくなれもふるすと鶯を鳴

鶯のをのかはかせもふきとかていかにこほれる泪なるらん

若菜

見渡せは若菜摘へきかたもなしおきのやけはら雪は降つづ
ふる里となりにし後のかたみとやふしみのた井に若菜摘覽
さそはねとおなし心にうちむれていくさと人の若菜つむ覽

梅

むめの花またこの里に咲ぬまそよその匂ひもわきて知れし
梅の花いかにとめてかたをらましようはのそらなる風の匂を
梅かゝは我袖のかとなりにつけり鶯さそふかせのしるへに

春氷

名とり川氷ふきとく春風になみのはな咲せゝのむもれ木

松殘雪

しかの浦や松ふきしをる春風におちてはみつのあは雪を降

春雪

雲こほる空にはしはし消やらて風の上なる春のあはゆき

とけ初るこほりのひまの浪のうへにいつれば花と淡雪を降

二月餘寒

わきもこ衣きさらきころもへぬいつまでさゆる嵐なる覽

曉春月

春のよのあくる光の山のはにいとゝおほろの月そのこれる

川上春月

春はたゝみきともいはいつみ河わきて霞める浪の上の月

春雨

我身よにふるとしもなしかりとて袖やはぬれぬ春雨の空

旅春雨

袖ぬらすふしのすそのゝ春雨やよそにみえつる雪け成らん

柳

さほ姫の霞のころもうちなひき袖にすかとする青柳の糸

早蕨

はつくさのはつかにもゆるけふりにも猶埋るゝのへの早蕨

山歸雁

歸るさはぬさも取あへしゆふたゝみ手向の山の春のかり金

花

眺めやる遠山ひめの花かつらかけてまたれぬ時のまもなし

花たにも猶いつはりのあるよとや色なる雲のまつかゝる覽

木のもとにきてたに雲そまかひける何を櫻とよそにみつ覽

棹姫のかすみの袖をさく花の匂ひにそめて春かせそふく

詠めやるをちの高根の花の色に曇りもはてぬ夕つくよかな

閑山花

のとかなるすまゐともなし櫻花さきちる山の春の心は

大淀浦

大よとの浦より遠に霞む也かみちの山の花のしら雪

折花

おりとらは人やとかめむ櫻花たゝ一枝ととなしふとも

翫花

たかためと思ひもわかつて櫻はなあかぬ心にたをりつるかな

老か身の涙なからにたをりつるもろき櫻の花のかさしを

故郷花

みかき守なきよなりともさのみ又折はやつさししかの花園

惜花

花を社なをもうらみめさそひ行風のやとりはしる人もなし

散とみてあるへきものか山櫻まちしにたにもつくす心を

ちる花に心のひまのあらはこそ風のやとりも行てうらみめ

落花

吹く風にみかさをそへて石はしるよしのゝ川の花のしら浪

空にのみ降かとそみる春風の吹こす峯の花の白ゆき

吉の川花のかゝみのはやきせは散かゝるにも曇らさり晝

はなさそふかたのゝみのゝ春風に雲のみをなる天のかは浪

花の色にまかひし雲はかたみとてのちしのふへき空めえ晝

殘花

いまさらに誰かは問む山ふかみ風たにしらてのこる櫻を

遊絲

すかのねの永き日暮しいとゆふのいとなく空にあそふ比哉

春田

氷たにまたうち解ぬあらをたをあらすき返す春はきにけり

喚子鳥

うちむれて越行山のよふこ鳥我か人かといかて問まし

春駒

雪にこそ道もみえしか春駒のあれ行あとをいかに尋ねん

つなかれぬ春の心とさくらあさのをふのした草駒いはゆ也

いかなればさしも長閑き春の日に駒の心のあれまさるらん

雲雀

いつくよりあかるもみえす霞む日に鳴ね空なる夕ひはり哉

苗代

藤

暮春

船中暮春

夏

首夏藤

更衣

墨染の衣はけふもぬきかへし浮世にかへるなをもこそたて

卯
花

葵

遲櫻

郭公

宿かれと花橘はにほへとも心もとめぬほとゝきすかな

初郭公

人傳郭公

聞郭公

〔に既歟〕

郭公稀

早苗

雪
霜

しらるなよ身は懸れぬの
菖蒲草うきに盡せぬ
ねはなかる共

故鄉

五月雨

をとほ河にこりて落る五月雨に水の心のみえすもあるかな

夜々照射

水
鷄

鵜
河

大井川水のみなかみするくと山もとめくるかゝり火の影

蚊遣火

淋としてしはおりくへし面影を煙にのこす里のかやりひ

夏草

茂りあふみつのみまきの夏草に駒のすきめし跡たにもなし

夏月

残るへき影とはかねて知れけり入方とをきみしかよの月

夕顔

かくはかり賤かふせやのいやしきも盛りはみゆる夕顔の花

野螢

あふせまつ星かとみえて天河かたのゝみのにとふ螢かな

納涼

せきいるゝ岩まの水のたまゆらもたゝまくおしくすむ比哉

夏萩

御萩河なかれてはやき麻のはのよるへしら涙秋風そふく

秋

初秋

けふといへはかねて思ひし淋しさを猶身にしめと秋風を吹

早秋

いつのまに露はをく覽秋とたにまたしらすけのまのゝ萩原

乞巧篋

七夕に今宵手向んよつのをのきよきしらへも雲のにそすむ

七夕

天の河みつの心のわくらはにしつめかねてやあふせ待けむ

七夕に心をかさはよのうさも忘れなましな一夜はかりは
天の河渡る一夜はかひもなしとたえくるしきゆき合のはし

萩

宮城のゝ木下露もみえわかすもと荒の小萩ちりのまかひに

はなにのみあくかれはてゝ色かはる下葉もわかぬ庭の秋萩

草花靡風

花すゝき草の萩の露散ててたまもゆらに秋風そふく

袖露

心なき草木はさそなはらふたに袂にあまる秋のゆふ露

初鴈

よや寒きをのか越路の秋風に遙々きぬるころもかりかね

和田の原しほせ遙にとふ鴈のつはさにかゝる沖つしら涙

虫

霜むすふおはなかもとのきりゝすよ寒や秋の思ひ成らん

雨夜虫

ふかきよの窓うつ雨の音よりも猶としけき虫の聲かな

故郷虫

年をへて荒行さとの秋風にいとゝふかくさ松むしそ鳴

鹿

身を秋の山田のを鹿をのれきへうれはしきよとねをや鳴覽

秋たもるよひゝゝもの鹿のねはいとふにつけて哀とそきく

露けさはよそに聞ても知れけり妻とふ鹿のをゝ草ふし

ねにたてゝ鹿も鳴なりおく山のいはかきもみち時雨ふる比

待月

晴ぬまそなかゝかけも映りける月まつ山の雲はいとはし
ひかけたに残るもみえぬわたつ海のとよはた雲に月を待哉

雲間月

みれはなと心すむらん村雲のひま行月はのとけからぬを
たえ／＼にもりくる月の影よりも雲は晴まのみゆる空かな

霧間月

かくはかり稀なる霧のとたえとも知てや月の空にすむらん

山月

すみのほると山の月に聞ゆなりまさきかつ散秋風のころ
柴の戸に我身ひとつをさそひ置て月そみ山の奥を出ぬる
すみのほる程をはまたしおく山の嶺の葉しのき出る月かけ

河月

ふしの根の雪よりいて、麓なる川せにこほる秋のよの月
早瀬川月のこほりのけぬか上にあたたなみかけて秋風を吹

海月

いははらや松原とをく見渡せはみほの興津に澄る月影
里の蟹のあみのうけなはうちへて長してふよの月を見哉

船中月

吹風にたな／＼しを船こきわかれおなし江ならぬ月をみる哉
和田の原風そたよと思ひしを夜舟は月のさそふ成けり

坂月

ゆらのとは月もくもらてふちしろのみ坂ふきこす秋の汐風

松間月

山里のまやのあしふきもる月や軒はの松の木の間成らん

終夜見月

露なからかたしく床のすか藁すからによるは月を宿れる

閑中月

かくはかり月のすみける柴のとを雲のやへたつ山とみし哉

社頭月

石清水なかれもいと、澄るよをまちける月の影のさやけさ

月前旅

うつらなくいはたのをの、旅人や月まち出て山ちこゆらむ

駒迎

諸人の待かひありて雲のうへに今をいさよふ望月のこま
こよひこそ雲井にいつれ久方のそらになたかき望月の駒

秋時雨

みるまゝに外山の正木色つきぬ尾上の秋はさそしくるらむ

重陽宴

古のそのたに川の末うけて幾夜かさねつ菊のさかつき

掃衣

遠近の里のあき風ふくるよにたかいねかての衣うつなり
はつ霜のふる里人もいまよりやなれぬ夜さむの衣うつらん

さらしなのさとの秋風ふくるよの誰なくさめに衣うつらん

いく里のへたてなるらんきゝてたにまंतरむ程の衣うつ聲

山鳥の尾上のかねは明ぬるを心なくもうつころもかな

初紅葉

常盤木にまかふはかりもなかり晁また染あへぬ峯の紅葉は

雨後紅葉

もみち葉もいくしほまでをかきりとて晴ぬる空の時雨成覽

紅葉

をしなへてまた色うすき紅葉かないつれは、その梢なる覽

暮秋

かけるふのを、浅ちふうら枯であるにもあらぬ秋の色哉
おしからぬ露の命のなからへてなにそは秋をまたしたふ

冬

あさち原かつ霜かれてわかれてふとは色にもみゆる秋かな

初冬

はゝそちる岩田のをのゝ朝風に山路しくれて冬はきに覺

時雨

いつまてか袖ぬらす醫村時雨うきたる雲のほともなきよに

落草

たつた姫そめし千入もいたつらにあたなる色と散このは哉
紅葉はのうつる鏡となる水は散かゝるさへてりまさりつゝ

寒葉

^{新編}春日野の雪まにたにも萌いてし草はそ霜にあへす枯ぬる

冬月

淋しさも月になくさむ山里の煙をたにと何おもひけん

河邊霜

ゆふは河流行ゝ浪も氷るらしいはもとこそすけ霜さゆるころ

旅宿霜

あつまのゝおはなかりしきさぬるよの衣手寒し霜や置らん

冬夜

ふけぬるか蘆のはさやく津の國のこやの霜よに浦風を吹

霰

故郷の軒のいたまにふる霰をとよりも猶もりまさりつゝ

千鳥

みたれ蘆の枯葉をしなみ夕汐のさしこそす磯に千鳥なく也
ふけぬるか友なし千鳥をちかへり鳴や霜よのこの浦かせ

夜水鳥

よと共にいくへの霜か置そへん鴨のうはけを浪のこさすは
こやの池のかもそ鳴なる蘆の葉にかくれて住も風や寒けき

雪埋寒草

冬なからまつさく花とみゆる哉をち方のへの雪のした草

遠山雪

山高みいくへの雲を隔ても見ゆるは雪の光なりけり

雪朝望

柴の戸そなを雪深き詠めやる宮古の雪は朝日さすなり

雪

ふり初は道たにみえし山風のさゆる雪けをとふ人もかな
いとゝ又こやの蘆ふき隙もあらしやへ降りける今朝の白雪

降雪やのこる光となりぬらん入ぬる月のあとのやまの端

草も木も埋れはつる雪にこそなかゝ山はあらはなりけれ

たらちねのあつめしはかりあつめぬや光も薄き窓の白ゆき

鷹狩

みかり野のつかれの鳥の草かくれかくればてよと暮る空哉

いつまてかつかれの鳥のなからへんとはかたのに草隠る覽

さらてたに手にもたまらぬあら鷹の驚くはかり降あられ哉

冬風

まきのやにひと村雨を送りきて尾上を越る木からしの風

網代

あしろもる床はうきねにあらね共枕のしたに波をいさよふ

炭竈

いつくより立ともみえぬ煙かなゆきの底なるをのゝ炭かま

神樂

くり返しうたふ神樂の聲すなり正木のかつらなき霜よに

歳暮

大る河はやせにくたす筏しのつなかぬものと年暮ぬる

戀

初戀

色みえぬおはなかもとののはつ草に何そは露のまつみたる覽
しるやいかにいつしか袖は萎れつゝ思ひ染つといはぬ計を

忍戀

よしさらは人なとかめそせく袖に我たにしらておつる涙を
洩ぬへき袖のなみたと思ひしをいかに忍ひて年の経ぬらん
泪川はては淵とそなりにける瀬をせくたにも苦しかりしを
さすかまたつゝめは洩ぬ涙とやくちぬる袖を猶たのむらん
身にあまる思ひの程もしらるへき涙を人になにつゝむらん

思不言戀

數ならぬ身はもの葉もなきものを心にはつるおもひとも哉

初言出戀

忍ひこし月日をしらてうちつけに思へは洩すみとや聞らん
立無名戀

幾度かしらすとをいはん長らへて人としけき世にし住へは

顯戀

今はよに名さへなかれぬ涙河水のころのあさき契りに
いつ迄か耐て歎かむよにもるはなき名たに社苦しかりしを

不遇戀

うき人をいかに頼てあふまての命はかりはうたかはるらん
なをさりの契りなり共頼はやつれなきをたに慕ひこしみを
あふとにかへもやすると同じよにいけるをいとふ心とも哉

遠戀

逢事はかたしきころもへぬはるけき程の中の通ひち

切戀

夢にたにあひみぬ中を後のよのやみの現に又やしたはん
後のよをいかに頼みてうき中にいければ社と身をかこつ覽

祈戀

あふまてと神のしるへを頼まに我しめゆひし年はへにけり
人しれぬ我ねきとを頼むともいさやよるへのみつのは

契戀

いかにせんたゝなをさりにいひ捨て偽りとたにしらぬ契を
なれぬるはかねて知るゝいつはりを頼めと人や契りをく覽
偽りはよひゝゝとにならひきぬいかに契るかまとなるらむ

偽戀

しるて猶頼みこそせめうき人のいつはり計有なならぬは

待戀

偽りをまたしといひし我よりもこよひは人やまつわする覽
かくはかり待るゝ暮をいつはりになれて頼まぬみとや知
ひとかたにうき偽りの契りとも知ねはいひし暮を待るゝ

逢戀

今宵こそ露の命の仇ものもけにあたならぬ契りとはしれ
うつゝともよしやさためし逢とを夢と知てそまたも頼まん
とし月のうきにこりぬを契りにてなひく心のある世なり覺

語戀

かくてしもとをさかりなはいかゝせん心の奥は語り盡しつ

別戀

わかれ路をを葉殘らすしたへとやかねては鳥の驚かすらん
別れちのつらきにたにもかへぬみの命はいつの契りまつ覽

新續告

わかれ路をを葉殘らすしたへとやかねては鳥の驚かすらん

ひたすらに迷ひもはてね別れちを慕ふ心のみにやそはぬと
忘住所戀

尋ぬへき君かあたりそたとらるゝ我やかへて待し習ひに
通書戀

藻鹽草かきはやるとも浪花なるみつとはしはし人に語るな
稀戀

立かへり幾度袖にかゝるらんたえぬとみえしきゝかにの糸
驚戀

なにとまた驚かすらん關守のうちぬる隙を待しちきりに
隱戀

宿かへて待たぬ物ゆへよひくになしとは人のなと答ふ覽
恨戀

新編古
このはをつくして後は立歸り身をしろかひもなき恨かな
人傳恨戀

かくとたにせめてつたへよみを知は我社いはぬ恨なりとも
恨久戀

あまのすむ里とふ道のさゝれ石や今は波こすいはほ成らん
被忘戀

思ひやれうきをかたみの忘れ水わすられぬたにぬれし袂を
絶戀

面影の残るかたみもかひをなきありし一よも現ならねは
筏師のまさきのかつらたえて社暮まつよりも苦しかりけれ
絶後顯戀

我たにも洩すうきなと成に覺あひみし比のむかしかりは
絶久戀

いかなればあひみしとはこんよにもならぬ物ゆへ昔なる覽

寄風戀

いたつらにこよひも更ぬあすか風あすの契もしらぬ命に
いかにせん身を浮草の末葉より人の心のあきかせそふく

寄月戀

もしほ火の煙に曇る月もみすかひなき里のしるへとふとて

寄關戀

あふ坂の關のせき守なれをしそこえし昔のかたみとはみる

寄杜戀

色みえぬこゝろのはなもある物をつらきけしきの杜の秋風

寄宿木戀

たねしあれば梢にねさす宿木のかりそめなからかれぬ中哉

寄思草戀

露けかれお花かもとの思ひ草袖のうちなるなみたまかへん

寄夢戀

思ひねそあふともみゆるつれもなき人はいかなる夢結ふ覽

寄鳩戀

思ひやれあしのいとなきには鳥の上に苦しとみえぬ計を

寄獸獸戀

思ひやれあきたもるよの鹿のねもさすか哀ときかぬ物かは

寄筏戀

たかせさす筏のつなて引方のありともしらてくれを待哉

寄鐘戀

忘れしな入あひの鐘はつけすともあたに契りし夕ならねは

雜

二葉よりつかへし身社ふりにけれあはれと思へしかの濱松

竹

恵みなき名そたちぬへき竹のその我身空しき世にし住へは

山

久方の雲をもよほぬふしのねに猶そら高くたつけふりかな
幾代よりかゝけきぬ年のをのなからの山の法のともし火

杣

いかにせん我たつ杣の杣人とひとにはみえて數ならぬみを

杣河筏

杣河やたかせさしこすいかたしのたゝむか上にたゝむ白浪

布引瀧

久方の空にそさらす山姫の雲のころもの布ひきのたき

山中瀧

世のうさそ更に聞えぬ石はしる瀧のしらあはの音計して

生浦

いかにせんならぬ思ひに年をへてたゝ徒におふの浦なし

椿

玉椿かけも二たひあら玉のとしのをなかきためしにそひく

城〔都〕鳥

隅田河きりふかし都鳥ありやなしやとたとるはかりに

樵夫

山人のねりそのかつらくりはへて永々し日に妻木とる也

野寺僧歸

かねのをとに歸る袂も墨染の夕さひしき野への遠かた

眺望

ゆらの戸に漕出てみればふししろのみ坂遙に雲そかゝれる

餞別

とゝまるも袖こそぬるれ心のみをくれぬ旅の道しはの露

關路行客

もる人のおなし心に越かねついきうき旅のあふさかのせき

旅宿

草枕ゆく末いそくおもひねの夢も都はとをさかりつゝ

旅雨

しくれ降よはの旅ねに知れけり越へき山の槇の下露

旅宿夜雨

宿りとする海人の苦屋の村時雨たひねの袖も汐たれぬる

旅泊

わすれめや磯山もとに一夜わて浪のまくらのあけのそほ舟

旅泊重夜

風むかふかきねも知す宮こ人日かすかそへて我やまつらん

閑中煙

たえ／＼にたつる煙も淋しさのなくさむ程はみえぬやと哉

山家

都人とはてとしふる山里をつらきところと松かせそ吹

新後拾

のかれきて住はいかなる宿とたに人にしられぬ山のおく哉

山ふかみなをすみ侘ておもふには浮世の外もうきよなり覺

いかばかり淋しからまし世中をのかれて住ぬ山ちなりせは

なけかれし浮世はすてつ山にても心とまらぬいつち行まし

田家煙

あま人の鹽やく浦のみなとたに庵もるしつもけふりたつ也

田家

小山田のほにいてぬよりも初てかりほす迄に幾よねぬ覽
まゝとろまで菊田の面の月もみつひたのかけなは永き霜よに

述懷

いとせめて歎かんとめとなれるみや捨るも難き此世なる覽
和歌の浦やよるなく鶴の跡とめてをよはぬ道を身に歎く哉
さのみ又うしといひてもいかな覽捨るも易き此世ならぬを
はかなくも歎きける哉すつる心に叶ふ此そならぬを
數ならぬ和歌の浦はの藻汐草かくにつけても袖はぬれつ
わかの浦やもくつにまじるうたかたの哀をかけよ玉津島姫
うきよをは捨へきものとおもふにもいと身にそふ我涙哉
大る河はやせのいかた浮しつみわたれば渡るこのよなり晝
いつ方のいかなる山を尋ねてか思ふ計によをのかれまし

獨述懷

我たにも思ひ定めぬあらましをそむかんまては人に語らし

往事如夢

思ひてのありともかひやなからまし身の古を夢としりせは

懷舊

古も同じ身なからなからへてみるをのみやは浮よと思はん
かくてたになからふるみに古のよをうきものと何思ひける
さのみかくみし古の戀しきはいつより後の浮世なる覽
さのみまた忍ふもくるしいかはかり老て忘るゝ昔ならまし

懷舊淚

うきみには涙はかりをあひ添て親の守りそむかし成ける

無常

行水のあはれとそ思ふみつせ川渡らてやまん人しなけれは

寶塔品

出ているわしの高ねの夕附日ひかりならへて空にこそすめ

神刀品

卷向のひはらか峯のゆふ月夜かすみはつるもはる風そふく

釋教

かくはかりいるとかたき道なればとはにみのりの月も澄晃
何かその迷ひさとりとわきていはん愚なるみの心ひとつを
わしの山雲のいつこにやとるらんかくろひはてぬ月の光は

寄風空諦

吹風のめにみぬ色と成にけり花もゝみちもつゐにとまらて

胸消是非

ふたつなき心になにと求めけん迷ひの外のさとりならぬを

神祇

やはらくる光ときけはちりのみを捨ぬそ神の誓ひなるへき
照すへき神は日吉のかひもなし今は我身のかけやかくさん

康永の比將軍家に始て住よしの社壇造營ありて觀

勸懃請の時法樂に御會始に社頭祝

春祝

宮のするちきのかたそき君か代にあへるも神の心なるへし

祝言

松かえはいつともわかつて君かよにあへるを春と花やさく覽

君か代は年の幾とせかさねてもかへるそやすき昔なりける

右一帖。以二或之本一書三寫之。尤珍書々々。但入三撰集二而

不見三于此集一歌有レ之。左註レ之。

題しらす

新後拾冬
曇るともわかぬ山路の木のまより日影とゝにもなる時雨哉

雲雀

いは結ふ山のすぞのゝ夕ひはりあかるも落る聲かとそ聞

同雜春

堯孝法印集

春

立春

暮て行空におしみし年波のかへりてけふや春のたつらむ

つゝみあへぬ春のかすみのうす衣袖もかゝやく玉つしま姫

天か下春たちけらし今朝みれば三笠の山をかすみそめぬる

草も木もめくみの春を色に先なひきそめたるあさかすみ哉

初春山

雪なからおのへの松に吹たゆむ去年のあらしや春の初風

遙尋花

みよし野も立田のおくも猶あさし心の花の道をほるけき

霞春衣

いく春か空にかすみの衣手もつらねそめぬる千世の行末

河邊鶯

谷ふかみ岩まにむせふ河なみも聲たてそへて鶯そなく

谷鶯

聲はなを雪のふる巢に埋もれて春のよそなる谷のうくひす

求若菜

春日野のをとろにまじる若なをは道ある迎もいかて摘まし

野雲雀

夕日影をちかたのへは長閑にてあかる雲雀の聲のひまなき

初春見鶴

春くれは花咲色をまなつるの千世のすかくる峯の松かえ

前大僧正慈勝人々によませ侍りける千首前に田家
をしか伏門田の霜の冴る夜をもる頃よりもいねかてにする

山を

塵のみそをき所なき白雲のたな引山のおくはあれとも

秋の歌の中に

歳暮

かきりなく老ぬる後の一とせは身に積るともよしや歎かし

里梅

あれはてしなにはの里の春風に今はたおなし梅か香そする

題しらす

いつまてか迷ふ心のくまもに御法の月のかけをかくさむ

絶後顯戀

人しれぬ尾花かもとは中々にかれにし後そあらはれにける

題しらす

たかかたに行とも知すみよしのゝたのむの膈のはるの別は

暮春の心を

としゝにあかて別し名残までかこちそへつるおいの春哉

名所鶴といふ事を

をくれるて道迷へとはわかぬ浦に夜なく鶴やおもはさり劔

右之外に三此集本合十七首入集畢。付三驥尾一注之者

芸藁散人

鶯出谷

誰もみないてゝつかふる春とてや谷に残らぬうくひすの聲

都早春

百首卷頭雙雪消ぬみ山も遠くかすむより都のゝへに春そしらるゝ

梅薫風

にほひくる風さへうれし梅の花春にあふみの袖につゝまむ

瀧霞

ぬきやいかに霞のころもたてはかりはつれて落る瀧の白糸

鶯告春

長閑なる世のしるへかも鶯のさえつりそむる春のはつころ

岡早蕨

たれか今朝早蕨あさる春來ても寒き岡への霜のふり葉に

柳露

なをさむみなひきもあへぬ青柳にこほりてかゝる春の朝露

椿

島山匠作會ことの葉のつらゝ椿つらねきぬ千年の春を契る軒端に

歸鴈

歌合見すもあらずすみもせぬつてとしたふ哉霞かくれの鴈の玉章

初春松

將軍家御會三十首卷頭けふしこそ子日にかさせ春にひく心をたねの松のことの葉

山花

同心ある人たにすまは山路をもさのみひとり花に迷はし

對花

同なをさりにいひ出すへきかたそなきみる花のかけ聞鳥の聲

雲雀

朝夕にあかるひはりの心さしわか道しはにいかてまなはむ

遅日

色にそむ心のはなの咲ちるにのとけき春のかけを忘れし

梅薫

やとれ月梅のにはひにかすみてもまた光そふ花のうへの露

けふの子日の

道ひろき千世の例に引をめつけふの子日の松のことの葉

欺冬

露をかぬひまこそなけれ清瀧の岸の山ふき浪やかくらん

春暮方

をのつから永き日かけにまとゐして心のとけき春の暮かた

初春霞

春といへは猶のとかにて天津空かきりしられす立かすみ哉

春雲

しら雲の花にあさゐる朝ほらけ雪さへにはふ春の八重山

山櫻

いとゝまたわかつてやみまし山櫻雲もにはひの有世なりせば

月前霞

月は猶さやかに見えて秋の田のほうへ遠く霞夜半哉

霞知春

長閑なる春のこゝろのしる人と空になれきて立かすみかな

松残雪

猶残る雪さへあかすうすみとりなひき初たる春の松かえ

朝霞

天の戸をあくる光は霞にて春日のとけき御代にも有哉

梅薫袖

咲梅に神のむかしを思へとや今にもほひそみつの衣手

子日

子日せし春も忘れぬ松山の神やむかしに心ひくらん

春 羈旅

木遠く春をしめ野に敷島の道をもちきる草枕かな

名所花

いもせ山にほへる花のたきつせは中に落たる聲もむつまじ

春 山

春の日の名におふ神も峯高き君かみかけに光そふらし

夕春雨

かねの音はかすみのよそに暮果て春雨ちかし軒の玉水

歸 雁

長月のそのはつかりや春もまたをくるゝ空にかへり行らん

春 夜

心ありて花をはよきよかすむ夜の月のかつらをしほる春風

春 月

長閑なる光はそらに猶みちてかすむともなき夜半の月かな

河 柳

青柳の春のかけとや立田河からあるくゝる水のしら浪

歸 雁

越路をはおもふかたとて行鴈のなくねまかはぬ春のよの空

初 花

佐保姫の今や手にまくいと櫻吹とく風もにほひそめつつ

三月三日

けふとてや流も清き水くきにとりかはすらん花のさかつき

水邊躑躅

波よする磯の岩ほに咲躑躅あまのたく火のかけかあらぬか

早 蕨未遍

雪消るたるみのうへのもえそめてまた春しらぬ谷の早蕨

漸待花

行て先やとりやしめむ花さかは山のいつくも人まあらしを

山家暮春

この比はいつち行らん山にすむ山人さへに春をしたひて

社頭春

護れ神道ある御代の身の春にあふをかしこみなをも久しく

春 天象

のとかなるいは戸の關の明かたにかすみ吹こす春の初かせ

春 人事

夢ならて結ふへしやは春の夜のねよけにみゆる草は有とも

見 花

宿かりて春のいく夜をおしほきぬ月も折しる花の下ふし

夕落花

鳥新編古は今ねくらをしむる梢にも花はとまらぬ春風そふく

遠 尋花

みよし野もあさき山路に分なしぬ花ゆへしけき春の人めに

夜思花

櫻花あけゆく色やいそかれむ月さへにほふ今夜ならすは

曉 花

有明の月は木の間を出やらてまつ山端の花そみえ行

暮春磯

たえゝゝにかすむ磯邊の夕附日みらくすくなき春の影かな

暮春車

暮春旅

小車のめくる日かすに春もくれ花のにしきの組はたゆとも
われのみぞ猶峯こゆる行春の鳥は雪路に歸るゆふへも

庭の藤さかりに侍りしをたちよりて見侍しとて人
に一首を残し侍し時

かへるさそいとわするゝことのはに心をかくる松の藤波
親元筆をかきならす同日智溫夜前一座難忘侍るよし
にて

松風にゝほひし花の色ゝはおもかけにたつ宿のふちなみ
返し

色をふる君かとはの花なくはしほれやはてむ宿の藤浪

浦春月

霞さへおほふかた枝に洩月もえならぬ春のをふのうらなし

山寒花遅

さえかへる袖ふる山の朝ほらけいつか櫻の雲にゝほはむ

折花

家つとにたゝ一枝の櫻花かめにやさゝむかさしにやせん

花遍

我爲に花やはまたし日數へはよしひとかたは移ろふをみん

春杉

春をへてまたおひそふもふる河やいつれ昔の二もとの杉

春衣

あま人もしほやき衣ぬき置てかすみやかつく春の夕なき

春懷

身にはたゝ老のなみのみ數そひてみし世の春そ立も歸らぬ

寒嵐吹雲霞

夕くれの月はそれともみえわかつて霞そにほふ遠方のそら

花下友

なれにけりあかぬ一本の花の陰衰いく世の契なるらん

夕落花

今朝までは花にいとひしふけやたゝ夕の雪の庭の春かせ

水上花

なかれ行花はよし野の河なみの梢にかくるしからみもかな

人々ひねもす花にむかひ侍し時

夕日かけうつろひけりな今朝の間に思ひ立にし花のしら雲

夏

首夏

夏來てもさゝれにゝほふ岩つゝし八千世の春を残すとそ見

早苗

つくはねのしけき恵にあふ民やすそはの田井に早苗とる覽

朝夏月

月も猶残るみきりの朝きよめ夏さへ霜をはらふとそみる

初郭公

郭公ほのかなりつる夕暮の雲のはたてもたゝならぬ哉

聞郭公

ほとゝきす初音かたらふ枕にそ老のねさめのうさも忘るゝ

夕郭公

夕やみに雲路たとらは月かけて歸るほとなけ山ほとゝきす

夜郭公

きかまほし枕のうへのほとゝきす今一こゑに夢もむすはす

郭公

ほととぎす同じ雲間を洩月の冴かなるにもたとる一こゑ

待郭公

春は人をよふこ鳥たにある物をまたれてもこぬ郭公哉

更衣惜春

思ふにはかへらぬ色を夏衣うらなく花にいかてしらせん

山新樹

きのふかもさかきとりしは御影山其かけわかす茂あひぬる

曉郭公

心あれや曉をきをよほしてあかすかたらふ山ほととぎす

五月雨

鹽木たく煙のすゑもみえわかすあこきか浦の五月雨のころ

急早苗

花みむと春もいそきしきくら田に又初早苗とりやそへまし

野徑夏草

いにしへの水の心もえもしらす茂る野中に草や結はむ

卯花處々

花さかぬむかひの里のうつ木原我すむかたもおなし垣ほに

對月待郭公

ほととぎすなれもかたらへさよ更て月待いつる有明のころ

子規何方

ほととぎすききそさためぬ鳴聲もひとむら雨の雲まよふ空

湖郭公

舟とむるひらのみなとにうきねいて山ほととぎす枕にぞ聞

秋

立秋

秋はけきたつの市人いつしかと露もうるほす秋なるらむ

初秋

よなくのならばししらて手枕のすきまの風に秋は來に覺

菊

白菊のうつろふからにくれなるの花にいとほぬ秋のはつ風

早秋露

秋のくるかた野のみのゝ檜柴になれてをきちる露やまさ覽

朝顔

秋の日の影よりはり行ほとみえて夕露かけて残る朝かは

草花盛

もゝ草に心そうつる秋のゝのさかりに花の春もわすれて

秋人事

月をめて露をかなしむ夜なゝにつもれば老の秋と成ぬる

曉虫

露霜はまたふりそはぬ夜ころたに虫のさむしろ曉のころ

籬菊

むらさきの庭のまかきに咲菊や山路にこえて千世を重ねん

山秋

誰ためもうき名おもはぬ女郎花男山にはさかすもあらなん

盧橘

世をへてもその言の葉にたち花の匂ひ残れる陰はむつまじ

待郭公

山里にきけは晝なくほととぎすおもはぬ空に待やならへる

夏草

雪間よりみえしもそれか秋を待草のはつかのなてしこの花

蚊遣火

夏夕

あかりての世には及はぬ下もえに我身とくゆる賤か蚊遣火
月をそくいつるかたの夕つゝに聲も雲まの山ほとゝきす

秋河

たれも今あその河原にふむ石のかすもとらて月をみる哉

秋杜

夜や寒きいろやはうすき衣手のもりの露しもをきまよふ頃

月

道しあらは行てはらはむ久方の月のかつらにかゝるしら雲

月出山

山鳥のおのへさやかに出そめて松をへたつる秋のよの月

山月

かねの音も月もはるかにさよ更て雲そいさよふ小初瀬の山

十三夜晴

くもりてし秋の最中の空までもこよひはれぬる長月の影

南北掃衣

夜や寒き七の星のすむかたもむかへるわれも衣うつなり

紅葉

色かへぬ松にしくれのをしほ山もみちを分て染そつくさん

七夕

天河よりくる涙のたまゝに逢瀬にさへやこゝろくたくる

八月十五夜

名もたかくすめる今宵の月影に昔の秋そ空にしらるゝ

うき世とてそむかれなくに今宵みる月に慰むさらしなの山

月前杉

杉たてる門田の西のあきかせに月かけさひし三輪の山もと

野月

新續古
更にけり置そふ露も玉たれのこすのおほ野のよはの月かけ

澤月

そことなき野澤の水もあきからの秋の哀にすめる月かけ

夕出月

高根をはいつか出けん天津そら雲のはたてに月そいさよふ

秋夜

遠かたや河せの涙はみえわかつて月そいさよふ宇治の山もと

鹿聲何方

なく鹿も聞こそわかねつくはねのこのもかもの妻や戀覽

憶牛女

天の河思ひかはして世々やへし二つの星のふたこゝろなく

林霧

雪とみし花のところか秋はまた紅葉木かくれ霧迷ひつゝ

名所紅葉

染わたす秋のにしきを時雨にはほすともいはし天のかく山

秋夕傷心

うきともしけきむくらの門さしてあはさらましを秋の夕暮

霧

夕つく夜さたかにもなき松の葉に猶霧まよふ秋かせそふく

掃衣

秋寒き淺茅か末のあさ衣ゆふ日かくれの霜に打なり

山秋風

峯に生る松吹こして因幡山月のかつらにかへる秋かせ

萩

露になひき風にしたかふ萩をめてはきをうらやむ秋の夕暮

庭菊

仙人のかよはん道のおもむきをうつしそめたる庭のしら菊

江月

霧わたる空に猶吹すみの江の月をいてみの濱の松かせ

月前薄

あき風にまねくおはなもかひそなき月は入野のする遠き空

竹間月

打なひき竹の末葉にかけ晴て月ふき入る窓のあきかせ

夜萩

人しれぬ夢路の関や是ならんねやもる夜半の萩の上かせ

古寺嵐

とはゝやな思ふうき身の初瀬山峯の嵐のさもあらはあれ

夕出月

高根をはいつか出けむ天津空くものはたてに月そいさよふ

河霧

ひろふへきさゝれもみえすちくま河秋の汀は霧深くして

落葉殘秋

おなしくは花にをみはや秋の色のすこしき春に残る紅葉は

落葉

嵐こす麓のおはなうちなひき袖にこさいるゝ紅葉とそみる

冬風

ねくらとふ鳥もうかるゝ聲す也こからし寒き夕暮のそら

夕落葉

露霜のそめぬなみたも夕暮のおつる木葉にいさなはれつゝ

浦千鳥

わかトイの浦に友よひ通ふはま千鳥なを道ありてなるゝ世も哉

河落葉

西河やふるき御幸のおもかけに紅葉もつかふ水のしら浪

淺雪

新續古ふるほとも淺茅にましり咲花のなひくとそみる今朝の初雪

雪深

ねや寒み埋れふして聞はまたまかきの竹の雪おれの音

千鳥

もろともに鳴や千鳥も水鳥のかもの河原の霜の明ほの

雪朝望

これやこの一夜にかはる鳥羽玉のくろかみ山のけさの白雪

冬曉

さえにけり明るむかひの里かくら霜もをかへのさゝ歌ふ聲

山時雨

夜をさむみ月もいさよふ足曳の山のは分てふるしくれ哉

遠嶺雪

峯たかみ雪のひかりも月かけもおなし雲間に明ほのゝ空

千鳥

ちとりなく淀の河風寒きよに舟のつな手も引そわつらふ

なけやなけなれそせめては友千鳥獨ねさめの浦のとまやに

椎

庵寒み霜もをかへのしろしはをねての朝けにたれかたく覽

歳暮

事なくてことしも暮ぬ長閑なる春近しとそなへていそかん

佛名

さよもはや竹のともし火更に覺となふる御名や残り少なき

寒風吹雪

世を祈道をおもふに春をへてはこふあゆみは神もうくらん

入夜深雪

ふる雪は袖にさゆれと神のため春のゝにいてゝ若な摘也

野外雪

みつ鹽のをよはぬかたに降つもる雪やなるみのうへの成覽

冬雜物

こきかへり世々に汀の跡とめよ和哥の浦はの雪の友ふね

白雪散亂

此神に霜をいたゝき雪をわけつかへまつりて年ふけにけり

江月

さよふかき水草かうへの秋の霜むすふか月を古江にそしく

垣夕顔

かきこもる水のゝきしによるあはの消ぬも咲る夕かほの花

爐火

徒にぬやのうつみ火かたらひて窓の光をそむくへしやは

網代群遊

ひをよりもより來人やをほ舟のたゆたふへくもうち網代の「木脱懸」

掃衣

ころもうつ音も遠ちの里つゝきよさむ侘たる賤かあはれさ

夕かほのやとりのほとも中垣の枕にちかくころもうつ音

月前掃衣

鴈鳴て菊さくころは月影もなをしるたへの衣うつらし

時雨

窓あけてむかふ嵐の北時雨はれ行みれは雪のやまのは

浦霞

むろの木のみとりを分て霞むなり漕いつる舟のとももの浦波

浦鶯

その色とさたかならねとすまの浦の海士のさえつる鶯の聲

月前梅

春のよの木間の月の有明はおもひ出あれや梅かゝそする

梅交松

ちりうせぬ言葉の花を春そへて咲や梅かえにほふ松かせ

山中櫻

名にもにすふかぬ嵐の山さくら光のとけき花の色かな

加茂祭

いつ迄そいつきの宮の宮人もけふに逢ひをかさしせん世は

薄暮郭公

ねくらとふならひもしらて暮ゆけは猶あくかるゝ時鳥哉

郭公頻

此ころはもりの雫の遠近になかぬ日もなきほとゝきす哉

ともし

木間もるともしのかけやさをしかの心をつくす限なるらん

鵜河

うふねさすかゝりの影も大る河心のやみを身のわさにして

月はゝや入ぬるにしの河よとに山あひ出るうかひ火のかけ

名所鵜河

かゝり火のいきよふ波にしられけり夜河ふけ行宇治の山本

盧橘薰枕

にはひ來て夢はとまらぬ枕にも過しむかしを殘すたち花

峯照射

五月闇はかなき鹿のよるほとそ哀にみねのほかけいさよふ

夕立

夕立のふり行をともあらち山矢田野をかけて風の涼しさ
むら雲のいさよふ峯に山かせの音はけしくもゆふ立の空

五月雨

はし姫のかた敷衣はしやらてさそうち河の五月雨のころ

江 螢

難波江やあまれるいさりたくなはのうちはへもえて行螢哉

杜 蟬

なく蟬のはゝその杜は紅葉せむとこの山風たのみかたさよ

遠村蚊遣火

此里や山をもおへるかやり火のけふりのうへは峰のしら雲

落 葉

雪そるる冬はこの葉のかくろへもなき山姫の袖かさすらん

戀

初 戀

思しれはつとやたしの若鷹のなれぬみとりに遁れえぬ世を

契待戀

今夜たにいつしかゝはる心かな更るまてとは契らさりしを

立名戀

逢にしもかへぬ思ひのから錦たゝまくおしき名耳ふりつつ

相互恨戀

覺束ないつ方よりかくゆりけんつらき二見の浦のとし火

寄木戀

思のみこり積事をやくにして苦しくからき海士のもしほ木

契 戀

かはるなよたのめしまゝに聞えくる入あひの鐘は偽もなし

欲顯戀

いかにせんうき身とかむる犬かみの床の山風たのみ難さよ

寄組戀

いかにして人にしらせんをのつから下ゆふ紐のとくる習を

寄月戀

深ぬともこのならはしを人もしれ月は必待いつる夜に

戀 書

みるほとせめてなくさむ玉章に偽をたにかき盡してよ

稀逢戀

たとるなり年の三とせをへたてきて新枕そと思ふはかりに

契 戀

我かたに仇なる浪はこさねとも涙せく袖やすゑの松山

久 戀

契しも袖ふる山の例にてけにみつかきのみつからそうき

寄雨戀

なをさりに侘つゝねんにかこちしや月に慰む雨のかねと

洩始戀

いつしかといたま求むる初時雨さをやくたさん聞の寒しろ

戀 心

かきりなく塵ならぬ名も立やせん空にしめゆふ心つからに

祈逢戀

今そしる祈れはかなふことはりになひくみしめの結ふ契を

新編古

契經年戀

忘るなよさすか契りをかはしまに隔つる年の浪はこゆとも

稀 戀

たれにかは思ふ契をわくらはにとふこそつらき心なりけれ

寄枕戀

浮名のみたかせのよとにさはく也いつ薦枕かはしそめまし

祈身戀

長らへてうきみしめさへかくてこそくちぬ契の限ともみん

寄糸戀

逢みむの行末まではかた糸のよりくかこつ中のうきふし

寄藻戀

我そうき海士の茹藻の亂れても終に寄邊のなからましやは

聞戀

いもせ山中なる河をいかにせん吹こす風は聞わたりても

夕祈戀

情なくともとのみしめは朽に覺更に靡けとかけやそへまし

祈戀

うかりける我みのほとよ初せ路の苦しかれとて祈やはせし

忍戀

みえすうき身をは忍ふの蜚衣唯うらふれて世をやつくさん

契戀

草の名のさしも人やは思ふへき我はいふきのやます忘れす

寄雨戀

こよひしもかはらてとはゝいかならん哀くるしき雨の音哉

立名戀

うかりける名たかの浦に迷哉さて靡き藻はかつく世もなく

寄海士戀

心あるあまとなりてもいつまてかつれなき人をまつか浦島

來不留戀

うかりけるかりそめふしにさゝ枕一夜の夢も結ひはてなて

寄星戀

やとりきてなかるゝ星の影もなし涙の床のあかつきの空

媒思移戀

かけうつるつたの細江のつなて船引人にしも迷ふ身そうき

社頭櫛

御戸ちかく神のみけしや袖ふれて立る櫛も香にゝほふらん

栽松

宿りあかぬ心を種とうへをかは松の千とせの數もかきらし

名所松

今日よりそみきとカタらふ武隈の松の本立ゆかしかりしを

名所鶴

歸來て結ふも嬉し田鶴のすむいつぬき川のふかきなかれを

曉更鷄

時をしるやこゑの鳥も治まれる御代は今とや神につくらん

曉遠情

老のなみ夜のね覺の枕にはまつかよひけり和哥の浦風

雲浮野水

あま雲の迷ふ野澤もよそならぬ庭の清水の面かけにみゆ

名所

立かへれよろつの道も樂波や大津の宮のふるきためしに

月

おき出てなかつる哉月きよく風秋にふく明ほのゝそら

閑居

浮世にはかく優りける住居をも語覽とすればとふ人もなし

海村煙

もしはやく浦半も民のかまとゝやにきはふ煙立ぬ日もなし

野風

風ふけは道の行手の淺茅原あさくそみゆる野へのかり庵

旅宿

野へにふし波のうきねにあらぬたに旅の宿りは悲しき物を

山家水

かしこくも誰むすひてか住そめし水草きよき山の下庵

庭松契久

宿にしろ松のよはひの思ひ出を八千世の道にちきる春かな

竹週年友

ものはの花にもなひく千世の影を窓に友なふ春の吳竹

思往事

敷島の道にいらすはさのみかくおもひも出し世々のふると

名所鶴

末遠くおもひおきつの濱松に千世をあらそふあしたつの聲

閑中灯

今もたゞこれそむかしの面影よ哀なつかし窓のともし火

松經年

尋來る君を思へは我やとの松も千とせをふるの山かけ

名所松

みねに生る松吹こして因幡山月のかつらに歸る秋かせ

古寺鐘

鐘の聲もよそにやかはるとよら寺夢をも西にさそへとそ思

竹

ことの葉の花も咲くさ千世の春なひきそふへし窓の吳竹

竹風如雨

むら雨もよそには過ぬ竹のはに吹やむほととの風にまかせて

名所關

ふはの山里のいた井の板ひさし久しき道もあらはなる世に

旅

故郷にかよふはかりの道も哉すゑもつゝかぬ夢のうきはし

老心

木のもとにめてこし春の日數さへ積れば人の老となるもの

述懷非一

その葉も心のたねもつくは山わくる道には影しけくして

懷舊

時鳥しのひねをへてことつてんみし世の人の行衛しるかも

神祇

石清水あふく心の友かゝみ猶もかゝみて神を守らむ

寄道祝言

なを守れわかの浦浪かゝる世にあへるや道の神もうれしき

寄世祝

君かへむ世に有かひと神もまた八百萬まであらはれやせん

寄月無常

やとりけりはかなき草の末の露本の雫も月はへたてす

松歷年

七十や千たひも越むしら河の浪よりたかき松のよはひは

羈旅

草枕わかふる里の外に又遠つ飛鳥の都こひしも

戀地儀

たのみこし因幡の山のかひありて今歸りくる契をそまつ

寄神祝

まもるてふ道につかへて神も猶光たちそふ世をそ祈らん

浦鶴

和哥の浦にあまたむれるる友鶴のかすく契る千世の行末

如是我作

心ある民の草葉の品くもたかならはしに作り出けん

寄世祝

古のたしきみちをそのまゝに今も行なふ御代のかしこさ

祝言

萬代の例や引みる宮柱ふとしきしけむ杣木まつまは

神祇

かしこしな神の心もすなをなる道に任せてあらはるゝ代は

夕聞法

庵しめて聞は夕の鐘の聲ふかき御法にかよふなりけり

心靜延壽

數島の道に心のいる人そ老ても和歌のうらに友なふ

祝言

入すみしるそのかみたかき惠もてやすくや四方の國守らし

往事如夢

昔てふことはいかなる夢なれば又も結はすさむる夜もなし

親王

言の葉の花そふ竹のその陰や草にも木にもあらてにほへる

社頭松

いく春も松のものの葉松の春手向かさねて神をあふかむ

社頭祝

今年猶みちをもたてゝ宮柱ねかひのまゝにみかきそへまし

八幡

八幡山春をかさぬる春にあひてかすそふ神の惠をそしる

玉津島

歌合
道しある世にしらゆふのかけまくも畏き神を猶や頼まん

北野

心さへひらくる梅の色香をそいとゝ北野の神にたのまむ

住吉

すみよし松の恵のかしこさは道につかへて猶そあふかん

祇園

猶まもれ神のその世をそのまゝに残す八雲の道もたしき

稻荷

いなり山立そふ松のふかみとりかすみになひく春かせそ吹

日吉

神の名の日よしと今日を數へても春の手向や千世も重ねん

鐘聲何方

ねぬる夜の夢のたゝちも鐘の音もそこはかとなき曉の空

山

たかき世に風のすかたも立かくれふしの煙のたえぬ道とて

漢雲遠晴

神も猶光たちそふ春來ぬと空にしめゆふ朝かすみかな

松作友

年経てもなをき心のしるへとや松のみさをゝさして契らん

徑苦

いかなれば袂も庵も通來てふかきちきりの苔に有身そ

湖水眺望

さゝ波やよるとて歸るあまもなし月にこき向ふおきつ島山

山家煙

山すみの煙の末を見ても猶あらまほしきはあらましの道

河
いすゝ河ふるきに歸る音す也すめるとこ世の浪のまにゝ
書

雜

鳥の聲鐘のひゝきも老らくのむかしにかはるね覺しりきや
海路

むかしにも立かへるらん波の上も道廣き世の和歌のうら丹
紫花園にまうてゝ法事の後御室木守の神殿などの花
を只獨瞻望して

たくひなき色をしるへきうき身さへ獨みやこの花の影かな

雲浮野水

そことなき野澤の末の雲水のうきてたゝよふ身に社有けれ

水郷葦

みさひさへふるき堀江の芦の葉のむかしになひく浦風を吹

旅宿

やとりをもぬさをもとらぬ旅なれや手向もおなし花の下臥

人々終日花にむかひ侍し時

夕日影うつろひけりな今朝のまに思ひたちにし花のしら雲

三寶院門跡にて社頭祝君といふ事各々よみ侍るとき

此門は神のみむろのひとつにて老せぬ君そ千世をむかへん

紫花園の難波の梅盛に侍し時細川右馬介入道の本へ

一枝をくり侍し次にむすひつけはへりし

此花は難波たかつのたかき代にをよふ色香をしる人にせよ

返し

右馬介入道

言の葉のはなもたかつの梅かえにふかき心の色をしらるゝ
寶相院准后佳吉にまうて給て社頭の松の枝につけて
神前にて思ひつゝけ侍る

御返し

道に恵み神の心のしるければわきてそみする千世のなを

仰みる千世のためしに道を思ふ神と君との恵みしるしも

祭の日智蘊本よりかつらの枝に付て申侍し

ぬるか内に神のみせける花そとはけふのかさしに思合せて

返し葵に結び付て侍りき

夢のつけあふひを結びけふさへに心かけゝるほとそ嬉しき

將軍家御下知御施行等拜領之時細川右馬介入道家へ

申侍し

あふく哉みのゝをやまの松かひもありける御代の道の恵を

返しその日世務繁昌念劇無極侍るに即返事を殊更

書狀にそへて申たひ侍る

立かへるみのゝを山の松のたね猶さかゆへき千世のゆく末

けふも日くらし人々來て述三祝詞眞桑庄申三沙汰之

奉行三善爲數もとより

ふみわけし末あらはれて古にまたゝちかへるみのゝ中やま

と申侍し返事に

いにしへに歸るもうれし名に高きみのゝ中山道もたとて

出仕以前夜ふかくまうてゝ

長閑にも君か御影を祈るにそ神に夜ふかくつかへぬるかな

會の間に蘭の豆をおり出して侍しかは人々こほれく

ふ誹諧に紙のはしにかき付侍し

昨日夜に入て會果てかへりしに夕月夜其興侍き今朝
うす雪ふりて春の空いとえんに覺えければ

さえかへる夕の月のおもかけも忘れぬ今朝の春の雪かな
いく春も猶あきらかにてらさなん千世のかたみを神も待て

黒谷花の下に三寶院門主待奉る事有て寶地院法印皆
以下人々終日花にむかひはへりし時

夕日かけうつろひけりな今朝のまに思ひ立にし花のしら雲

淨光院法印堯孝集。世間稀有之者也。陽光院殿御所持
之間。懇望令ニ拜借。一日之内。灯下にて令ニ書寫一畢。不
可レ出ニ窓外一者也。穴賢々々也足

右堯孝法印集以堅田侯秘本校合之然不審多々姑闕疑而已

羣書類從卷第二百六十七

和歌部百廿二 家集四十

素性法師集

木に雪のふりかゝるをみて

^古春たては花とやみらん白雪のかゝれる枝に鶯のなく

梅のはなを折て人のかりやるとて

^同よそにのみ哀とそ見し梅花あかぬ色かは折て之けり

^同散とみて有へき物を梅の花うたて匂ひの袖にとまれる

^{後撰}梅の花折はこほるゝ我袖に匂ひは移れ家つとにせん

山の櫻を見て

^古見てのみや人にかたらん櫻花手毎に折て家つとにせん

^同見渡せは柳櫻をこきませて都そ春の錦之ける

^同まてといふにちらてしとまる物ならは何を櫻に思まさまし

寛平の御時后宮の哥合に

^同花散らす風のやとりは誰かしる我にをしへよ行て恨みん

^同櫻花ちくさなからにあたなれと誰かは春を恨みなれたる

^同花の木は今ほり植し春立はうつろふ色に人ならひけり

朱雀院の御時北やまにまかりて

^同いさけふは春の山へにましりなむ暮なはなけの花の陰かは

春の哥よみてと人のいふに

^同いつ迄か野へに心のあくかれん花し散らすは千世もへぬへし

^古音にのみ菊のしら露よるは置て晝は思ひにたえすけぬへし

^同秋風の身に寒ければつれもなき人をそ頼む暮る夜とに

^同はかなくて夢にも人をみつるよは朝の床をおきうかりける

^同今こんといひし計に長月の在明の月をまち出つる哉

^古秋風に山の木葉も色つけは人のこゝろもうたかよれけり

^同そこひなきふちやはさはく山河の淺き瀬に社うけ浪はたて

^古便なくなき名は沖に漕出なんよるへたもとに見かひもなし

^古思ふともかれなん人をいかにせむあかす散ぬる花と社見め

寛平の御時に屏風哥かゝせ給ひしよみて奉りし

^古忘れ草何をかたねと思ひしにつれなき人の心なりけり

三月に田うつを

山田すき春のたねをはまきしかと秋立身にはならしとそ思

あふ事のかたの涙に袖朽ぬ海士のたく火は胸にもゆれと

植て見る松と竹とに君か代の千年ゆきかふ色もかはらす

別なは後忍へとそ空蟬のよをあひかたみせめていはまし

鋪妙の枕にたにもふさはこそ夢の玉しひ下にかよはめ

山吹のきぬおほくきてまたきたりし人に

古 山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへす口なしにして

朱雀院の御ともにつかうまつりて手向のやまにて

古 手向にはつゝりの袖もきるへきに紅葉にあける神やかへさん

古 いくにか世をはつくさむ心社野にも山にも惑ふへらなれ

吹風にあつらへつくる物ならは此一枝はよきよといはまし

同 泉右大將四十賀の屏風に

春日野に若菜摘つゝ萬代をいのる心は神そしるらん

同 延喜御時月なみの屏風に

古 あら玉の年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲

我のみやあはれと思はむきりゝす鳴ゆふ陰のやまと撫子

同 今宵こん人にはあはし七夕の久しき程にあへもこそすれ

うくひすの鳴し日

同 木つたへはをのか羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴らん

仁和寺の中將御息所の家に哥合せむとせし時に花の

さかりに

同 をしと思ふ心は糸によられなん散花毎にぬきてとゝめん

同 思ふとち春の山へに打ひれてそこともしらぬ旅ねしてしか

杜鵑初て鳴くをきゝて

同 子規鳴こゑ聞はあちきなくぬしたまらぬ戀せらるはた

ならの石上のかたにて霍公(鳴しイ)を聞て

同 石上ふるき都の時鳥聲はかりこそむかしけれ

同 主知ぬ香こそ匂へれ秋の野に誰ぬきかけし藤はかまそも

後 かゝみ山やまかき曇り時雨れと紅葉あかくそ秋は見えける

延喜御時に御馬つかはして只今石山に参るへきよし

あふせもあるに参りて

同 望月の駒よりをそく出つればたとるゝそ山はこえつる

逢事のかたみをたにもえてし哉人はたゆとも見つゝ忍はん

古 いさ櫻我も散なむ一と盛ありへは人にうきめ見えなん

もとやすの親王五十賀し侍りけるうしろの屏風に

古 古にありきあらすはしらねとも千年のためし君に初む

法皇寺めぐりし給ふ御ともにて

同 ふして思ひおきてかそふる萬代は神そしるらむ我君の爲

かへての枝を折て

後 此御幸ちとせかへてもあらせなむかゝる山ふし時に逢へく

前齋院の後御くしおろしておこなはせ給ける時かの

院の中島の松をけつりてかきつけ侍りける

同 音にきく松か浦島けふそみる諸も心あるあまは住けり

相坂にてあんしちにすみ侍ける時に道行人を見て

これやこの行もかへるも別れつゝしるもしらぬも相坂の關

二條の後の御息所ときこえさせ給ひける時の御屏風

の繪に田つた河の紅葉なかれたるかた書たるに

古 紅葉はの流てとまる湊にはくれなる深き浪や立らん

泉大將四十賀し給しに屏風の哥人々よみしに

夕暮は匂ふ草木のなければや散と見えにし紅葉とまれる
花やまにて人々さけたうへけるに

後
山守はいはゝいはなむ高砂のをのへの櫻折てかさゝん
打たのむ人の心のつられは野にも山にもいさかくれなん
つらしとてものはの山に隠なは我山ひこになきて恨みん
尋れは杉のゝこえて三輪山の末ゝまつそ生そはりける
松山の水はかすともおもほえず戀しき君にしき浪を立
音にのみならしの間のさねかつら人しれす社くらまほしけれ
君か爲我やはつらきから衣かけてないひそいひかたきと
浦にやくもにすみつゝそ燃渡る海士のすさひに菊みるめは
錨おろす舟のつなは遅くとも命のかきりたえしと思ふ
獨ねはいかなる人か戀はする見つけてけるも煙もそ立
なにしかも袖のぬれけむ白浪のなこり有ても見えぬ心を
後朝思
いたつらに立歸りにし白浪のなこりの袖のひる時そなき
拾
いつかたによるとかしらむ青柳のいと定なき人のこゝろを
山吹のはなの盛りは過にしをかへすゝも鳴かはつかな
思ふとち折て暮さむ岩つゝしいはぬ事をしいひ盡すとも
春たにもありし心を夏衣いかにうすさのけふまさるらん
新古
惜めともとまらぬ春もある物をいはぬにきたる夏衣哉
拾
きのふよりかはれる事もなければともけふよりや待秋の夕暮
いかほのやいかほの沼のいかにして戀しき人を今一めみむ
おほつかなたれ島山と思ふにもをしのひしきも變らさり晝
見ぬ人を心ひとつに尋れとまたしらすこそ戀しかりけれ
思ひやり心になふ物ならは一日にちたひ君を見てまし

岩のうへに葎の衣はうしろめた戀の涙はもらすもあらなん
逢みてはしにせぬ身とそ成ぬへき頼むるにたにのふる命を
後陳
君により我身を辛き玉たれのみすはつらしと思はましやは
梅かえのくつる計にあらす共よそにも折てよを明さはや
戀しきを思ひみたるゝ世中にふかき夢路をうつゝともかな
稀なれはゆゝしと思ひし七夕にけふは劣れる身を如何せん
戀しさのなくさむ宵の明さらはしはしも物は思はさらまし
あふみのや深まの稻を菊つめて君か千年のありかすにせん
浪まよりおほくら山に積いぬの積とも盡し君か千年は

法皇宮の瀧御覽しにおはしましゝに御ともにさふら
ひて瀧を題にて仰とにて

後
秋山にまとふ心を山河の瀧のしらあはにけちやはてゝむ
よしみねのつねより四十賀し侍りけるに遣しける

古
萬代を松にそ君をいはひつる千年のかけにすまむと思へは
北山にまつたけとりにまかりたりけるに

同
紅葉はは袖にこき入てもて出なん秋はかきりと見ん人の爲
仙人のすみかに菊わけて入たる所繪に書たるに

古
ぬれてほす山路の菊の露のまにいかてか我はちよを經ぬ覽
立田山こえ侍しにしくれふりしに

雨降は紅葉のかけにかくれつゝ立田の山にかくればてなん
ふち井のためもと物よりかへるに

雲と見えて目を惑はすはなかれ出て瀧の門より消る水かも
山をのみあはれゝと見てくれは鳴ひくらしの聲を悲しき

しまのかもやたのからすを題にて哥奉れとおほせら

るれはやたからすを句のかみに居しまのかもを句の
しもに居て題のこゝろを

山闇

したひの雲の間雁金のらうたにもある霞かゝはるも

天曆の御かりせさせ給て河内の國にやすませ給にま
かりかへりなんと申しを惜ませ給ひてそせいかあさ
なをよしよりとつけさせ給に

旅に出てせしことの葉に云しかとよしより思へ心くたけぬ

さ月人々あれととまらす

雨よりも秋なき身となりぬへしたえぬ涙にくちぬへければ

御屏風にゆきくたる所

白雪と身はふりぬともあたらしき春に逢こそ嬉しかりけれ

春とのみ風はこしかとはかなくて老そしにける岸の姫松

秋風の吹上の濱の白菊は浪のよするか花の咲るか

みつのをの御門のかくれ給へるを白河にかへさのは

らへし侍しに

莖左大臣

人すます荒たるやとをきてみれば今そ木葉は錦也けるおり集

又こき紅葉を見るに折しもしくれのすれは

神同伊勢なみたさへ集無月しくれにそひて古郷は紅葉の色もこさまさりける

人々物かたりして世のはかなき事をいひて

みな人の昔語りに成行に布留の社の身をいかにせむ

山寺に籠りて哀なることを云て夜とまりて打なきな

としはへるほどにあめのふりければ

い後つれをか雨ともわかん山伏のおつる涙も夜ふり集はにこそふる

家集不見哥

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十賀しける時に四
季の繪かけるうしろの屏風についたりける哥

古今賀

山高み雲井にみゆる櫻花心の行て折ぬ日をなき

夏

めつらしき聲ならなくに子規こゝらの年をあかすも有哉

秋

住同の江の松を秋風吹からに聲打そふる沖つ白浪

千鳥鳴さほの河霧立ぬらし山の木葉も色まさり行

秋同くれと色もかはらぬときは山餘所の紅葉を風そかしける

冬

白雪同の降しく時はみよし野の山下風に花を散ける

さきのおほきおほいまうちきみをしらかはのあたり

にをくりける夜よめる

古今賀

ちの涙落てそたきつ白河は君か世までの名にこそ有けれ

古今賀

秋の田のいねてふともかけなくに何をうしとか人の菊らん

右素性法師集一卷以古寫一本校正畢

惠慶法師集

はしめのはる

あさりするよきの海士人ほこる覽うら風ぬるく霞わたれり

後拾
二月二日相坂こゆるほとにうくひすの聲をきく

ふるさとへゆく人あらはことつてむけふ鶯の初音きつと
關守にくちかためてそわれは行なきぬとつくな山の鶯

ある所に屏風のゑに正月山里に梅花ある家を男かい
まみたり

我宿の梅はときは匂はなん人めこひしとおもはさるへき

二月山さとにさくらある所を男見る
宮こにも花なきならす山櫻尋て惜む心しらなん

三月藤柳ある家を男ゆく

こむらさき柳の糸によりませて花のにしきは我やとのもの
四月神まつる所ほときす鳴

神まつるしるしありても時鳥けふ初こゑを待てたる哉

五月菖蒲ふける所を男馬ひかせてみる

わか駒のつねはすさめぬ菖蒲草引ならへてはけふ社はみれ
六月よるやとの戸あけてなかめたる所

あけてぬるかひ社なけれ我宿のまきの板戸に人しいらねは

七月たなはたまつりてたらひに水いれてかけみる

八月相坂に駒むかへ

後拾
望月の駒ひく時は相坂のこのしたやみもみえすそ有ける

九月しかのやまこえ

霧もたち紅葉もちれるうりふ山こえ惑ひぬるけふにも有哉

十月山さとにたかすへて人きたり

かりにくる人なかりせは昔みし都の事をいかてきかまし

十一月あれたる女琴ひく男きてとひたり

露霜もとまらぬやとにいとしくひく琴の音に袖を濡ぬる

(題闕)

こく船の岸の藤波たかけれはまつ心をそやすへかりける

花おもしろうさきてすのこに男あり

とはさりし人もとふへく我宿の花のさかりをすくさすも哉

海のほとりの社にまつる人あり

おもふ事みつしほよする浦にます神のみ社つかへてそゆく

山里の垣根に卯花咲て女みる

卯花のさかりとなれは山里のかたゑかくする住居をそする

はつ秋

新古
秋といへは契置てやむすふらんあさちか原の今朝の白つゆ

馬にのりたる人秋の野をゆく

秋ののゝ花に心をよせつゝそ駒うなかさぬけふにも有哉

人の家に女ともきたり

新拾
我宿のものとのみ見は秋の夜の月夜よしとも人につけまし

月夜に笛ふきて男ゆく

月かけに笛のねいたくすみぬなりまたねぬ秋のよや更ぬ覽

山さとの人の家に菊の花あるし折てつくるふ

霜雪にあてぬさきよりさくの花つくるふ人の袖を露けき

子日所

ふた葉よりあひ生してもみてし哉けふ契つるのへの小松と

人の家のやり水のほとりに山吹さきたる

ちとせすむ水にかけさす山吹の花をのとかに惜むへき哉

人の家に櫻さきたり

櫻花人の心のわりなさはあくともいはしちとせみるとも

やり水のつらに山吹のおほくさけり水鳥あそふ

水鳥のなかるゝ河の山吹はかけをのみこそいとふへらなれ

月おもしろき夜紅葉をみて人々ゐたり

もみちはを惜む心のわりなきにいかにせよとそ秋の夜の月

秋の月山にしかなく

秋の夜の月みるたにもあかなくに鹿の音さへも鳴そふる哉

秋山のほとりに人々ゆきてもみちみる

紅葉みに草の枕や結ふへきけふもくれなはあすもすくさむ

田のほとりにかりする人あり

早苗とりおのか作らぬ秋の田をかりにきぬとや田主咎めむ

正月ついたちころ人々もろともにはつせに参るみち

にて春日野をみやりて

霞わけ若菜つみにやとまらまし春日の野へもちかつきに晁

おなしころ近江へまかるみちにかゝみの山のもとに

雨にあひて

かゝみ山越るけふしも春雨のかき曇りてやふるへかりける

むかし人の家のありける所のまへなりける櫻のいと

おもしろかりけるをみて

あさち原ぬしなきやとの櫻花心やすくや風にちるらん

人ともろともにいちはら野の子日

二葉なるのへの小松にことよせてこ高くな覽かけを社まで

やまとにまかるにゐてと云所いとおもしろし

山吹の花のさかりにゐてにきてこの里人となりぬへきかな

中務の君山さとにゐて春哥十ありけるをみる其題は

みねの霞。谷の鶯。殘雪。春の風。さくらおそし。

〔柳。岡の松。若草。戀イ〕

なきぬやとたちゐまちつる鶯は谷の内より聲を聞つる

のこりの雪

春立てのこりの雪は消ぬとも花をかたみにみてもへぬへし

はるかぜ

あらたまのひと夜計をへたつるに風の心そこよなかりける

梅

にほふから〔下關〕

さくらおそし

山櫻まつに心をつくしてはをしまんほともいかにせよとそ

柳

はるかぜは梢もしらすあを柳のいとに心をよせみたる哉

をかの松

かたらばむ人もなきかな山里はをかの松風そよりほかに

はるをあさみ旅の枕を結ふへき草葉もわかき比にもある哉

こひ

古郷をこふる袂はきしちかみおつる山水いつれともなし

ある所にさくら惜むに

櫻花まつとせしまに春くれはそならぬ事はおもひやはする

山里に人の許にて櫻のちるをみて

新古今

櫻ちる春の山邊はうかり晁世をのかれにとこしかひもなく
としかへりて二月になるまで待人の音信ねはいひや
る

百千鳥聲のかきりはなきふりぬまた音信ぬものは君のみ
かうふりやなき

青柳の糸はみとりにあるものをいつれかあけの衣なるらん
東山に花見にありくとて山さくら

山櫻ちかくみんとの心にてけふはかすみにかくまるゝかな
いなり後拾に哥よみてたてまつるとしてしものやしるに

いなり後拾のやみつの玉垣うちたゝきわかねき事を神も應へよ
なかのやしる

いなり山みつすきなかにます鏡我とたてゝたのむかひあれ
かみのやしる

思ふ事ならさらめやは千早ふる神のみまへのみくまくさ也
ふかき山にすむひじりの許にまかりてたつぬるにあ

んしちの戸をとちて人もなければかへるとで書つく
草新古今のいほりさしてきつれと君まさて歸るみ山の道の露けさ新古今

ひしりかへし

あれはてゝ風同もはらはぬ草さばらぬの庵我はなくとも露はもりけん
ある所にかたわきて草合するに

種拾なくてなき物草はおひに晁まてふ集くといふ事はあらしと思
一月郭公まつ心

なかつともなくらんと社またれけれ山時鳥けふはいつそは
神なひのもりのまへをわたる

神なひの杜のありすの郭公一聲きかてわきやすきなんゆイ

かたらふ人の深草といふ所にありと聞てつかはすけイ

深草のいへゐたへぬツイとせしほとに袂さへこそ露けかりけれ
返し

あさかりし人の心は深草のなかをわけてはとはしと思ふ
ある人のかゝみのはこに

朝日さすかゝみの山は曇ねと峯の朝きりたえすもあらなん
かたらふ人つくしにくたりてとし比おとつれてたよ
りにつけていへる

花とりをみても君しもわすれぬは都の方の人にそありける
返し

都とり君にをくれし春よりも聲なきよはる我としらすや
おほしまのなるといふ所にてしほみちまさりて

都新勅にと急くかひなくおほしまのなたのかけちは鹽みちに晁
かたらふ人のとを國きイへまかるにかゝみとらすとて

わかるれとかけをはそへつますかゝみ歳月ふとも思忘るな
五月五日めつらしき所にまかりて

か後拾をとめて訪人もありや菖浦草怪しく駒のすさめさりける
あるを集

六月人海松院にすゝみにまかりたる

大井河岸にかけさすうみ松の風にやせゝの涙も立らん
梅津にてうふねのかゝりをみて

七月七夕

七夕サイのあふ夜のかつをいたつらに過す月日になすよしも哉
八月とをくまかる人にあふきをとらすとて

扇とてかりに羽風を吹ほとにわかれん程やつくへかりける

おなし人かりの聲をまつ

萩の葉もやうちそよく程なるをなとか鴈金音なかるらん

おなし比河原院にてあれたるこゝろ

すたきけむ昔の人もなきやとにたゞ影するは秋のよの月

むしのね

たもとかへするものにもか虫の聲衣の袖もそほちはてぬる

東山にて月あかき夜

ひさかたは手にとるはかり成に鳧雲のゐるてふ寺に宿りて

きりくすの聲

から衣夜風涼しくなるゆへにきりくすさへ鳴みたれつゝ

鳥のこのやうなるうりがある所にたてまつるとて

我君のますへき千世の印には鶴のこにこそうりもなりけれ

なてしこをあるところにてまつる

山かつのかきはなからにみるよりは色優るへき宿に移さん

返し

やとわかす露たにそむる物ならはもとの垣ほの色は替らし

或ところにてうりやるとて

うりふ山秋たつ鹿のかりもりに靈けきめをもみつるけさ哉

おなし人の許にあをつつらをこにくみてくりなつめ

まかりなとを花にませてやるとて

緑返しまかきの内に花つめはいとまかりにもありとやは思

返し

態と社くりはなつめ曲り木に這まつはるゝ青つつら哉

九月はかり花見に人々まかりて秋野の花(本ノマヽ)霧

を

玉鉾のみち行ちかふかり人のあとみへぬまてくらき朝霧

花すゝき

あき風にかすへてなひく花薄心よせある方やなからん

つゆ

ひろへとも袖のみ濡て留らぬは玉とみえつる露にそ有ける

しか

とを山のをにたつ鹿の聲聞てもてはなれてもぬるゝ袖哉

はぎ

こむらさきたか袖かけし衣そとみゆるは秋のゝはき成けり

きりくす

鳴聲も我にてしりぬきりくす浮世背きてのへにましらは

くるかり

珍らしと思ひしなかに初鴈のまつとせしまにおいはてに鳧

をみなへし

色に社われはみえけり女郎花なにもたかはぬ物にそ有ける

秋風においをなけく

秋風の吹につけてそ歎きつる世にへむ程はみしかゝりける

帥のおとゝつくしにくたり給ひて後西宮いきてみる

いとあはれなり

後拾

松風もきしうつ浪も諸ともに昔にもあらぬ音のする哉

なくなりたる人のにしの京に住し家にいきてみれば

籬のきくのあはれなるを

植置しあるしはなくて菊の花おのれひとりそ露けかりける

もみちをはしめてみる

から錦織つむ峯のむら紅葉みそむるけふはあからめもせず
かたらふひしりの隣なる所にきてとはさりければ
親きも疎きもなしと聞しかとわきてしもやはとふへかりける
返し

玉鉾のみちゆきすりにとはすとも常に心に行かふものを
十月はかりはつせにまうてゝかへるに日くれぬれば
さほ山の麓にやとりて夜なればもみちみへぬこゝろ
人々よむに

佐保山のかせの心もしらすして紅葉みすとや今宵あかさ
又のあしたに山きりにかくれたり

紅葉みにきたる我ともしらねはや佐保の河きり立かくす覽
ふかき秋

くれなひの色とる山の梢にそ秋のふかきは先しられける

十月大井河のもみちみに人々まかる所に

大井河河邊の紅葉ちらぬまはとなせの岸になかるしぬへし
十二月ある所の哥合せ給しに松にはの梅冬月池の
こほり

むらたつのやとれる枝とみるまでに松のみとりも埋む白雪
にはのむめ

白雪のふるとしなから庭の梅は花とかこちて匂ひやはせぬ
池の水

浪よするあしのうらはも音せぬは池の水やとちはてぬらむ
冬の夜の月

あまの原空さへさえやまさるらん氷とみゆる冬の夜の月
あふみにひらと云所に人々まかりて題とも出して哥

よみ侍るに山河の紅葉
唐錦あはなる糸によりければ山水にこそみたるへらなれ
よるのあらし

もみちゆへみやまほとりにやとりして夜の嵐にしつ心なし
ねさめのしか

人もこす隣たえわたる山里に寢覺のしかの聲のみそする

きしのほとりのきく

岸ちかくのこれる菊は霜ならて波をさへ社しのくへらなれ

水鳥浪にあそふ

みる人は沖津荒浪うとけれと態となれぬるをしたかへかも

はつゆきのみねをみて

氷たにまたやま川にむすはねと人のかきねは雪降にけり

つなてひくふねをみて

よとみなく浪路に通ふあま舟はいつこそ宿とさして行らむ

なみの聲をきゝて

いそほりに騒く波たに高ければ峯の木葉もけふはとまらし
風のをとのかかきをきゝて

ひらの山もみちよのまはいかな賢峯のむら風うちしきり吹
かへさに北山よりこゆるに紅葉いとおほくちりかゝ
るに

山しけみ木のしたゆけは紅葉も衣そほちぬ雨とこそふれ
あるやうことなきところより菊のうつろへるをいた
ゝきまいれば

山里にゝほふをみればさくの花たきとのまかき思こそやれ
年のおほりにこよみのちくのもとまでまきよせたる
こゝろを人々よむに

まきよするこよみの心恥しくのこりのひらにおいみえに晝

つこもりの夜としの行かふ心人々讀に

ふる雪にかすみあひてやいたるらん年行ちかふよはの大空

住吉に人々まうてゝすみよしといふこゝろをよむ

わかとはゝ神世のこともこたへなん昔をしれる住吉の松

河原院あれたるこゝろ人々よむ

草しけみ庭こそあれて年へぬれ忘れぬものは秋の夜の月しらつゆ集

とやまの軒はのみちよりたひゝきこゆるやうにする

をみて

みるからにきえこそしぬれ軒は行人は露けき道やわくらん

あるところにてなてしこを惜む

こゝろみにかへれば苦しなほさりに宿やからまし撫子の花

あるところすのあしくさのほたる夏の夜の月

あくまでもそこの月影みるへきに芦のうら葉の山に隠れて

くさのほたる

水莖のあとふみならず我ならは草の螢をよそにみましや

なつの夜の月

時鳥なにならぬかな夏の夜の月みるほにおもひあはせてか歌

しけゆきこにをくれてかなしふと聞てつかはす

契あらはまたは此世にむまるともおも變りしてみも忘れ南

或人かはらに出てせうようするに風のいみしう吹は

いひやる

青葉なるかもの河原にむれあつゝあけの衣は涼しかるらん

返しよしのふのあそうみ懸

夏衣立ちいてゝすゝむ河かせにかへりてけふは人を戀しき

さうしのゑに須磨の浦のかたを書たるにかみの社に
舟より行人の浪のたかければたよせにみてくらたて
まつる

たよせとは思はざらんわたつうみにいのる心は神を知覽

白雲に色みえ紛ふみてくらをたよせにうけよかみの此かみ

おなしゑにたひゆく人十月はかりにもみちのもとに

やとりたるを

行末も紅葉のもとにやとらまし惜むにたひの日毎數歌へにけり

せんさいあはせのところ

かちまけのかすには露を置いてやは花と花との色にくらふる

わらはへはかたてゝとりとる

おもふとなきよなるへし村鳥のけふは鳴ねもたえて聞えぬ

もみちにとりのゐたるところ

紅葉みてかへらんかたもおほえぬを呼子鳥さへ鳴山路哉

いしにうみまつのおひたるあるところにてたてまつるをの集

うこきなき岩ほにねさすうみ松の千年はたれに涙もよす覽續古

みなつきはかり河原院にかれこれあつたり

跡絶えて荒たる宿の月みれば秋のとなりになりそしにける

あるみこたちの御いかのすはまに

千歳すむ水のなかれはいとゝしくそこの梢のかすをさす哉

又

よろつよの涙のまなくもよする哉鶴と龜とのあそふ濱へに

或人以三家家卿自筆本二書寫。予又以其本寫之。魚

魯章草之誤可レ有之。重而得二證本二可レ有二校合二而已。

明曆二丙申五月廿四日

徵 碧

右惠慶法師集一卷以屋代弘賢藏本校正畢
右一卷押小路家舊藏の古寫本を以て校合す

品田太吉識

安法法師集

のちのよにみん人はすけるやうに思へけれとおほく
のとしにかのはらの山のすまる心ほそき折ふしの哀
なる事のたえかたければ春の花のさかり秋のもみち
の落るほとに川風のあはれ夜ふかき程をしとりのあ
かつきかたのこゑ月かけのいけみつにうかひ雁の草
むらにかゝり哀なる折ふしに人しれすいひあつめた
る事の葉さま／＼につけつゝおほかれとたゝふた
つそおほゆるを書あつめたる也ついたち春たつつこ
もりの夜

暮はつる年惜みかね打ふさは夢みんほとに春は來ぬへし
雪降と衣かさねし程もなく花のひもとく春は來にけり

春の日ある人たいゝたしければ

我やとの今朝の朝霧見渡せはさほの河原に立わたりけり

秋のあらし

秋の夜の夜半の嵐のなかりせはね覺の床に起るさえまし

花すゝき

籬より穂にいてゝみゆる花薄誰かふみ結ふえたと成らん

女郎花

吹風にたくひでなひく女郎花たはるゝさまに人やみるらむ

白露

萩の葉にそよときこえて吹風におつる涙は露やと集やわくらん

秋はき

ほり植むした紅葉する秋萩にしかなくほとは空に知るへし

鹿

何處にか鹿の初音はきこゆらん萩の下葉のみまくほしさに
來るかり

くや／＼としたにまたるゝ雁金は音つれつらし今を鳴なる
なく鹿

紅葉はや風の吹らんうち侘てうらこき聲に鹿のなくなる

きり／＼す

我がとく物思ふへしきり／＼すぬとも聞えてよもすから鳴
六條のかはらの院にむかしむつのくににしほかまの
うらうきしままがきのしまうつしつくられたりけれ
はおとゝかくれたまひてみつねつらゆきなときゝつ
ゝよめりければそれはいとかりなれば人のよま
ぬを心みにてしのひによめる

年ふりてあまそあれたるしほかまの浦の煙はまたそ残れる

うきしま

おき津波たてはたゝよふうき島は昔の風のなこりゑけり

筑前守つねみつのきみのくたりて九月一日の夜夢に
みえたりければあひおもふなかなれはいひやる

夢にても夢としりせはねさめしてあかぬ別の物はおもはし

前和泉守順のきみのつかさ給はらてあふみのやすの
こほりにあるにいひやる

世を海に思ひなしてやちかつえのやすのすまるへ君は行覽

山のそうしやう日のにともゆひといふ所にやとりて
いますかりける

船路にてともゆひ里に宿すれはとけてねられす浪の聲して
みかはのかみためもかもとより世の中のはかなき

よしなとかきつゝけて哀なる事ともいひおこせたり
けるかへり事のおくに

定めなき世をみの上に思ひつゝあかし暮すは誰によりてそ

おなしきみのきやうにありける時すやうをさけのれ
うとておけりければかくないいひたりける

ためもと

櫻木をおきてきつれば夢にてもうとからんとは思はさり覺

駿河守かねもりのきみあふところことに院のしほか
ままいりてよまんといゝけるをこてくたりにければ

ふみつくりてくはへてよめりけるやらすなりにけり
鹽竈の浦はかひなし富士の根を寫さましかは來てはみてま

和泉守やすひらのきみあやむしろにぶみつくりてく
はへてありける返し

打ふさすあやの蓆の中よりを錦に織れるふみもみえける

人ゝいつみぬるくして草の色春なりといふ題を讀に
岩間なるいつみぬるけになりぬれば水際の草に春は來に覺

つらゆきをよみあつめたる歌のしふを惠京かりてか
へすとして哥よめるにみな人／＼よみし

きの家のくせにのこれる言の葉は花社たむれちりの上まで

これは本あることなり。

天元二年(圓應)大風ふき大水いてゝみなきもなくいけ
もうつもれてのちきみのとへるよん(々々)

松もなく池もあせぬるやとなれば風も音なく月もかけせし
さかみのかみしけゆきのこむつの國にはゝきみのも

とにありけるか人にころされたりければはゝのかな
しひのうたともよめるをみていひやる

こゝにこひかしこに忍ふよゝ午夢ちならてはいかゞ逢みむ
さきたては藤の衣をたちかさねしての山路に露けかりけん
神なつきはかりにひたへいきけるにこしのを山をみ
るにもみちのなかりければ彼是してよめる

こしのをの山も紅葉のまたしきにほかより時雨くるまゝ
ひらにいきてつける程にやまにしら雲かゝりたりけ
るをみて

千早振ひらのみやまの紅葉はや夕かけ渡す今朝の白雲

つなてひきつゝゆくをみて

白浪のことけかれねは賤のをのつなていそける舟も行かふ

山河よりもみちなかるゝをみて

山河の水かさまる紅葉はゝ水上にこそあめとみゆらめ

ねさめに鹿のなくをきゝて

紅葉ふるこの下風に夢さめてうらなき鹿の音をも聞かな

時雨のふるにもみちのちりまかひけるをみて

おほ空に木末やこゝろあはすらん時雨と共に木葉ふりしく

八月十五夜にあみたの念佛しけるその夜

西に入月のひかりを今宵より露の身にこそやとしはしむれ

十二月廿日こよみのはてぬるを人ゝよむに

まさよする暦をみれば春日野の若菜摘へき程も來にけり

いなりやまのかけの池にうつるをみてゑしのきみよ

ませたまひけるに人ゝよむ

池の面にかけを移せは稻荷山みつのみかきに波やよすらん

惠慶といふ人のはしめて來てよみていれたる

ぬしや誰池も泉もむかしにてそれか何かは君そすみける

とあるかへし

みな人の栖の家はかはらねと身をしつめたる我をことなる
かへるかりのあかつきかたに鳴けるに人よみける
いまなんと別に鳴か雁かねは花をぬさにて我はたむけむ

正月一日

きのふまでいつこなるらん春霞年のかへれば立歸り來る

たれならむ藤の花をしまんといひし程にかくれにし

人をこひて

惜まんといひし花たに散らぬまになくなりける命えけり

そこの南やまにこもりていますに

新告

世をそむく山の南の松風にこけの衣やよさむなるらん

いつみのかみやすあきらのおやのふくににてにひいろ

のあふきおとして歸にけるにかきつけてやる

墨染の扇の風は秋よりも心すこさはよゝまさりける

ひんかしやまに鹿のはしめて鳴けるをきゝて

籬後拾なる萩の下葉いづをの紅葉みて思ひやりつゝ鹿を集の鳴なる

人ゝあつまりて初紅葉よむに

我やとの紅葉の錦たちつれば衣かへすと人やみるらむ

ほとゝきすさつきなくをきゝて

たをさしてゑひにけらしなさみたれにたちゐる亂て鳴郭公

月のいるををしむに

惜め共甲斐なく月の入ぬるを雲路をしらはおくれさらまし

六條の大納言殿の弁のきみのおはしてよみておきて

おはしける

池深み松の緑の色みれば今一しほは波そそめける

とあるかへし

風ならて問ふ人もなき古里の松にかひ有春も有けり

ひこの少將あふきに大井川にむまひやしたるかきて

よませ給へるに

望月の駒ひきたてゝひやしけるみはやかつらの渡り成らむ

たいともしてよむにあきかせをさくりたりし

夏衣^拾またひとへなるうたゝねに心して吹け秋の初風

いせといふ人うたどものたいかきあつめてやれるに

ひさき生る河原の宿の遠近にみゆるものゝ君にいはいせむ

いけつらにかしらしろきおんなのうきなきつみける
をみて

老人のつみつる物はさはへなるよをうきなきの下葉成けり

せんさい宮のれうとうもちきのあそむほうしになり
てひんかしやまにありけるにしゝう^{（薛從）}のおもとの

もろともにありてかくこゝろほそきすまゐをなん心
□るとておくに

世を捨る人におくれぬ人のすむ秋の山へを思ひこそやれ

大宮のすけのきみひはた色のうちもをほうしのため
にかりてかへすとてやれたりけるを

よもの海に年経る蟹のかつきつるもゝいとかくは亂れざる覽

とあるかへし

汐さして見えもしつらむ綿津海の蟹の茹もゝかる人からに

又かへし

年をへてよもの數多の土佐海にかくてみるめも乏からしを

又

とこの海に清き汀の年ふれとみるめもせん物とやはしる

つくしにくたる人おほくのうたこひたまへる人に

とまれ共いきの松原おもひやるときはにのみも詠むへき哉

宮のすけのきみまくらをこにうちとりて又のあした

におこせたまへる

五月雨のよも明かたくしきたえの枕さためていかにねつ覽

かへし

しはしこそ枕ともみめ又もこは夢かたりせしとおもふ枕を

九月

月かけも嵐の音もさえゆかは思ひあはせてこひんとすらむ

にしきやうにて

神無月紅葉ふる里あれにけり時雨とみえて袂ぬるれば

かせのもん梢の色のくれなるは霜のおくにそ色増りける

かへし

我はこの時雨のあとの雲をみておのれ梢の錦とそみる

しら菊のまかきのうちに咲みたれたるをみて

大空にこめたる菊のま垣かもほしまたらにて花のみゆるは

入道少將の御もとにはと集いひやりける

いまはとて世をのかれけむよゝりも思ひ社やれ木葉散頃

ある人のかすみきりをみてはしめよめるによみつ

たる

谷の霧峯の霞はいとことか春と秋とはいもせ山かな

ある人きみの御ふみとてとしの内ぬえに哥よみにく

はりて

古しへは待れし春もまたれすや花につけても問つへければ

たいこのさすのふみの山にこもりたまへるに

大空のゆかりと聞はまたみねと雲に埋る跡をゆゝしき

しはすにわかなのあつものをこせたれば

春日野はゆきまもあらしふる年はいかてにたるそ春の若菜は返し

君かため年をつまんとしめし野に若菜は雪を打はらひつる十月ついたちに山／＼ののみちわたれるをみて

おほよその野山の紅葉みるからにまつ身の上の霜を社思へかうしんにたいをさくりてかりまつころを

衣うつ音にあはする雁かねはいつこはかりにかりはきぬ覽そのかうしんの夜は七月七日なりけりたなはたのこころ

彦星のあかぬ別の涙ゆへあまの河波たちやそふらん秋の月一日のしくれに

いかならん奥山かとの初時雨都はたゝにこころほそきにてんわうしよりのほるとて舟にて

むかしみしなにはかたにそこかれゆくといふに惠慶

まつといふなりすみよしのきしさきの周防守もとすけむまのせうかねすみを題にし

てよむ花のもとにてめつらしき人にあへる春はたゝ花と人にと暮してんいつれもたえんことの惜さに

きた山にはなの折人のもとにゆきて花の色もまた鳥の音も夜深きにいかなる人の住家なるらん

歸るとて春山の花に折とる袂をそ宮古に問はゝつとゝいふへき

かれこれきた山に花みにいかんもろともにとあるをすそうなりとまりていひやる

身はとめつ心はおくる山櫻使りの風^{かわのたより}に匂ひおこせよ

ひんかし山の花をみて

山はるけ霞のなかの櫻花ちるも散らぬもみえぬけふかな三月十一日もとすけかねすみなとしてよめる

あれにける宿には花もしられねは山の櫻をよそにこそみれひやうふきやうの宮にてあめのうちの花といふころを

そはつとも花のしたちをやとはせむ匂ふ雪に心をむへく藤のはなをみて

年ふれは色こそまさる藤の花いせゆく笠の物とこそみれ三月つこもり

世にあらは又もあひなん春なれと命を捨てけふ惜らん天王寺にてなみのこゑをきゝて

宮古出ていくか計に成ぬらんおほか波の浦によするは返し

難波かた名にからき世も思ひ出む覺束なみに袖はぬるともおなしてらにしひのかしはきにいみしくなりたるを

みてかしは木もこのめもをいて有物を昔の人のみえすも有哉

ある人にかはりてある人に 惠慶

檜の葉のうすゝ程も君か来て問につけてそ露けかりける

かんきみのこのかはらの院にこむとちきりていませ

返し 松もおひ岩をも苦のむすふまで命くらへに問ぬ君かな

又 我也行て衣の袖にかきなては君かいのはの苔もみえしを

三千とせに一度なつる袂をば二葉の松もいかゝまつへき
四月一日

過にける花を恨むと詠れはおもかけにこそ花も詠むれ
春霞いつくはかりに歸らむたちとゝまれといひややらし

あめのちの花

霞たにもいかならなくに花を唯いかならなくに袖朽ぬへし

二月はしめてはな櫻をみて
けふそみるはるの櫻は咲にけり殘の雪と思ひける哉

おいを思ふて、三首

老にける身の上なけはおちとまる涙のかけにしはさみえ晝
老ぬれは南おもてもすさましやひたおもむきに西を頼む

四月廿日より郭公きくらむやといへるに

かきわけて鳴かはそこの郭公へたつる人のきかぬなるへし

左衛門とのゝ大らうきみのおはせんとしたまひける
にまたおはせぬにかくれたまひければ

かゝりける露の命を置ながら花みにこんといかていひけん

見ぬ人を惜む涙のためしには我袂をそのこし置へき

六月三日かゝのすけはなにことひとつのたまへとい

ひはむへれば

君くれて心細きもおもほえず秋のゆふへは我をととはなん

返事又かへり

秋まてと露のいのちの頼れす夜なゝとこそ云へかりけれ
何事をいひのこさまし世の中に老のかた身と人のいふへく

あきのひかゝのすけないきなとしておいをなけきて

新古

もゝとせの秋の嵐はすくしきぬいつれの暮の露と消なむ
むかしみし人みちにおいはてゝあひてともにおいた

る事をいふに

命あれば又老人にあひにけり誰さき立てこひんとすらん

なかかはのたえはてにけるあとをみて

なか川の水たえにけり末の世は秋をも待てかれやしにける

天元二年の大かせふきける折のうたのおいたるよし

を

けふまては昔なからに老にけりおくれさきたつ末を知れぬ

屏風のゑにたひ人のたかるをみて

我やとの門田の稻も菊かねて歸らん駒のためとまつらむ

おなし屏風につり舟おきに出たる

いく雲井漕いてつらんわたつみの海士の釣舟年をはこひて

ぐらの内侍いまはとてひむかしさかもとにいきける

をきゝてやりける

百敷によをへし君かのかれ行みまさはとこそ思ひやられる

このをとゝ弁のきみのこうませたまへりける七夜の

哥人よませたまへりけるに

高砂のむまこの松の枝なれば千年の風もあふくへきかな

あるとのはらよりひやうふにこまひきしらかはにし

たるをかくする所によむへきうたともまつりのかへ

さにきたのにゑひさまれたるさまとかゝするをな

ともいはししのひてよめとありければ

白河に水かふ青の駒ひきを波のたつとやよそめしつらん

後拾

とゝのへし加茂の社の夕たすき解るあしたを亂たりける

右安法法師集一卷以村井敬義藏本書寫一校畢

登蓮法師集

雷

櫻

霞たつ春のみ空とおもはすはけふも雪けの雲とみてまし

櫻花ちりなん後の面かけに朝ゐる雲のたゝんすらむ
〔と斷歌〕

落花隨風

櫻さくなからの山に風吹はそらにもみゆる志賀のうら波

曉時鳥

曉のしるくもおもはぬ郭公なれもやこゑを鳴わたらん

納涼

夏深みひはらのそまのいはま川結ふ手とに秋そこもれる

水邊晚風

難波かたあしの葉末に風吹て螢なみよる夕まくれかな

夏夜月

月かけは秋のみそらのこゝちしてよる社なけれ絶ま成けれ

草花

その色とおもひもわかす花といへは秋の野ことにちる心哉

朝遇野徑

遇かてに覺るものは白露の玉ゐる朝のまゝの萩はら

月照落葉

はゝそはら雨と木の葉の降まゝにもりのみ増る月のかけ哉

月前懷舊

諸千載ともにみし人いかに成にけむ月はむかしにかはらさり覺

旅宿月

續詞

故里をおもひやりつゝ詠れは心ひとつに曇る月かなけ集

刑部卿忠盛みまかりて後なかくの廿日ころにかのあたりの人のもとへ申つかはしける

秋風のにしむよはのね覺にはいかゝと問し人そかなしき

母のもにて山寺にこもりてゐたりける人をとふらふ

とて

嘆くらむすかたはみねと身をつめはいかゝ露けき秋の夕暮

九月盡

あすよりは小田の鳴子も引かへて時雨の音にならんとすら

深夜時雨

小夜深みしくれてわたる音聞は思ひもわかつて物そかなしき

旅宿雪

よそに社かひのしらねは消たつるいく夜に成ぬ雪の下ふし

戀

枝かはす契はこりぬ後のよもかゝるなけきの身とも社なれ

君もうし逢すは我も忘れなてつれなき人そふたりゝける

海邊旅宿

みさこゐる磯の松かねまくらにて鹽かせ寒くあかしつる哉

正實不滅度

世中の人のこゝろのうき雲にくもかくれする有明の月

海路晚冷

あはち島しほのとゝゐを待ほとに涼しく成りぬせとの夕風

海上晚望

ゐなのよりおまへの沖を見渡せは波まにきゆる海士の釣舟

無常

昔みし人はさなから薄氷おもひしとけはあちきなのやや
明ゆけは葉末にのほるしら露の風まつ程や我かみなるらん
山海空弔也

右登蓮法師集一卷以無類本不能校正矣

さりともとやへのしほりに入しかとそこにも老の波は寄覺

登蓮法師集補

陵園妾の心をよめる

續詞花雜中

松の月をさして歸りし夕へよりあけるめもなく物を社思へ

千載雜中

述懷の哥よみ侍りける時

かく計うき世の中を忍ひても待つへき事の末にあるかは

かさきのいはや

同物名

名にしおはゝ常にゆるきの杜にしもいかてか驚のいはやくぬる

同釋教

維摩經十喻此身は夢の如しといへる心を

驚かぬわか心こそうかりければかなき世をは夢と見なから

わかれの心を

新古離別

かへりこん程をや人に契らまし忍はれぬへき我身なりせは

新勅選秋上

八月十五夜よみ侍りける

數へねと秋の半はそ知られぬる今夜に似たる月し無ければ

續古今秋上

月照流水といふことを

月影を氷と見てやすきなまし岩もる水の音せさりせは

續拾遺秋下

清見瀉月すむ夜半の村雲は富士の高嶺の烟なりけり

玉葉戀四

題知らす

うき人にうしと思はれん人もかな思ひ知らせて思知られん

續後拾遺四

題知らす

鵜ゐるすさの入江にみつしほのからしや人に忘らるゝ身は

九月盡によめる

重刊秋下

年ごとに變らぬ今日の歎き哉をしもとめたる秋は無けれど

同旅

つくしへまかりける道より都へいひつかはしける

占里を戀ふる涙の無かりせは何をか旅の身には添へまし

題知らす

新千載卷三

結ひける契りそつらきともかくも人をは今はいはしるの松

題知らす

新拾遺卷上

くまもなき月見る程やわひ人の心のうちの晴間なるらん

新續古今旅

有明の月影見ればすき來つる旅の日數を空に知らるゝ

大納言公通卿家に十首歌人に讀せ侍りけるに郭公を

月詠四

いかで我思ひ知らせん郭公待つよなからにつもる恨を

仁安二年經盛朝臣家歌合に草花。月

秋の野の花に心をそめしより草かや姫もあはれと思ふ

承安二年廣田社歌合に海上眺望

なかめやる船路は跡も無かりけり恨や深き松浦さよ姫

治承二年賀茂社歌合に霞。花。述懷

入重深く野もせの霞たちにけりいつくか室の八島なるらん

新後遺卷下

年ごとにそむる心の印しあらはいかなる色に花の咲かまし

此世にも猶驚かぬ心哉いつを限れる夢路なるらん

羣書類從卷第二百六十八

和歌部第百廿三 家集四十一

林葉和歌集第一

春哥

花園の左大臣（看し）仁和寺にて立春の哥あまた人々によませられ侍しによめる

春きぬと人こそいはめいつのまに今朝驚のやとに告らん

驚は春となけともなよ竹の枝にも葉にも雪は降つゝ

山里はたな井の氷とけ行に春きにけりとくみて知哉

きさいの宮の御方に哥合あらんとて 九條太政大臣（伊邇）よませ侍しかは立春の心を

いつしかと朝日の影のしるきかな長閑かるへき千世の初春

左大將（實定）家にておなし心を

春といへは霞にけりな昨日まで涙まにみえし淡路島山（新告）

大納言（實國）家哥合に

春のくるところはわかし物ゆへにあしたの原の先霞むらん

皇太后宮太夫（後感）十首哥讀せ侍しに春たつ心を

春は今朝越ぬとおもふにあふ坂の關の杉むら猶霞むらん

中院入道右大臣（雅定）家にて人々十首哥よみ侍しに立

春の心を

打たゝき春やきぬらんこやの池の氷のときしはや明てけり

又ある所にておなし心を

驚の初音はやかて春なれはおひもなれをやしるへにはする

右大臣家人々に百首哥よませられ侍しによめと有し

かはおなし題を五首

雪のうちに春くるとしと驚もかそへけりとは今朝を知ぬる

いつのまにけさ引かへて難波かた今は春へと霞こむらん

年の内に咲にし梅にけふよりそをのか春ともつけよ驚

春來ぬとけさ告渡る驚は涙の氷まつやとけぬる

月よめは心のうちに立春をいかて霞の空に知らむ

元日の心を

哥林苑

昨日見し梢の雪も驚の鳴にしあれは花かとそみる

多春探若菜といへる心を 同

わか園の若菜をしめて都人いくらの春をつまむとす蘭

子日のこゝろ 同

君か爲子の日の松をひきつれて千世を手におさめつる哉

大納言（實志）家に十五首哥よませ侍しに霞を

外山には霞しにけり何方か我しめし野の荻の焼はら

師教朝臣家にておなし心を

春霞するのほらのをこめつればあさる雉子の聲のみそする
海邊霞 哥林苑

浪こしにみつゝこき行あはの島小松かくれば霞へたてつ
遠村霞 同

昨日われ宿かりくらし過てこしこやの渡はかすみ隔てつ
此里もさこそみゆ覽ささかたやあまのときやは霞こめつ

霞籠島

同

春くればまかきの島にかけてほす霞の衣ぬしや誰なる

清輔朝臣哥合し侍しに海上夕霞

夕霞のしまをかけてたつまゝに海人の友舟敷そ消行

大納言公卿家十首哥よませ侍しに夕霞を

ゆふなきに浦のと渡る海士小船霞のうちに漕を入ぬる

霞の哥とてよめる

宮木おろす杣山人に立そひてともにたなひく朝霞哉

よさの海は霞へたてゝいつかたか千舟よるてふ大わたの浦

あるところの哥合に

久堅の天のかこ山おしこめてつゝむは春の霞なりけり

經盛卿家哥合に

たつのるる蘆邊をさして難波かたむこの浦まで霞しに晝

加茂哥合に

しめはへて賤のあらまく小山田の春のかこひは霞なりけり

海邊の霞といへる事を人々よみ侍しに

難波かた夕あさりする蘆田鶴の聲は霞（の脱懸）ほかにそ有ける

石見かたふかく霞の成行に漕はなれぬるほとを知哉

夕霞しはしなこめそあひきする野島の蟹の袖かへるみん

よさの海に島こき出る釣舟を又立かくす夕霞かな
あゆちかた汐干に立る白鶴の聲は霞にまかはさりけり

又霞のこゝろを

何となくあれ田にかよふますらおのやかて霞に立隠れぬる
はゝこつむ乙女か袖は夕間暮霞にのみそたな引にける

さらぬたにおほつかなきを夕つくよいさよふ峯に霞棚引

苗代の水にをりたつますらおはなにと霞にたちかくるらん

中へに我は霞にまかひぬとをち行人のしらす顔なる

賀茂の哥合に人にかはりて

しな之路やみさかをのほる旅人は霞をこゆる物にそ有ける

霞の哥人々あまた讀侍しに

旅人や勢田の長はしたとるらん引わたしてもみゆる霞か

天さかるひなのなちをはるゝと絶まもみせぬ夕霞哉

春霞あへの市路をこめつれば姿を聲にかへてける哉

あさほらけ木曾路の橋を見渡せは霞もはやくかけてける哉

關路霞

哥林苑

何とこは音羽の山の夕かすみ人めはかりの關かたむらむ

源侍從師光君の家にて鶯の哥あまたよみ侍しに

うくひすの鳴て木傳ふ梅かえにこほるゝ露や涙なるらん

朝またきすみにむせふ鶯はをのか古巢をとめやかぬらむ

春雨にこぬれかくれて鶯の枝のまにゝうつるひそ啼（て歌）

梅のはな折てかさゝむ鶯や香をなつかしみ袖にきぬるを

鶯のものうかるねに啼なるは春にしられぬ宿のしるしか

ふるす出て梅かえになく鶯は宮古も雪の消すとや思ふ

經盛卿家哥合に

梅か香に思ひやわかぬわきも子か折袖ちかく鶯のなく

大納言（會）房家にて鶯を

鶯の鳴つる枝は手折とも聲の色こそとまらさりけれ

鶯爲春友

哥林苑

竹になく鶯ながら春くれはみな我友といふへかりけり

嘯鶯

をのれさへね覺にけりななよ竹にまたふしなから鶯のなく

右大臣家百首内鶯五首

梅の花咲やをそきと色も香も我しりかほにきぬる鶯

いくほとすみはつましき宿とてや花のねくらに鶯のなく

梅の花散しはてなは百千鳥竹のふしとに枝うつりせよ

絶すのみかくしきなは鶯の花ふみちらすとかはゆるさん

枝とにうつろひ鳴は鶯の花のねくらや住うかるらむ

曉鶯といふ事ある處會に

なきていぬる妹や折つる梅のはな咎めかほなる鶯の聲

雪朝聞鶯といへるを

雪をおもみ驚いたく啼なるははらひやあへぬ梅の花笠

哥林苑にて人々十首歌よみ侍けるに梅のはなを

吹風に梅のあたりをしりぬれば散すもえこそ恨さりけり

清輔朝臣家哥合隣家梅花

梅の花色はとなりの物ながら香はあるしをもさためさり晝

師光家にて人々梅哥あまたよみ侍るに

わきも子か袖やふれつる梅の花あやしきほと香に匂ふ晝

我せこは手折てもみよ梅花それやかむる袖のかならぬ

袖はぬれ香はうつるとも梅花おもてなき名をたゝむと思

雪の色をさこそうはゝめ梅の花妹か香をさへ盗むへしやは

やみなれとしるくは有を梅花色をもみよと照す月かけ

梅花ちりかふ時はめに見えぬ風にも春は色かやはなき

過かてにしつえを折は梅花あやな梢の露にぬれぬる

春風はやゝもふかなん梅花ちらぬものからにほふはかりに

社頭梅花といふ事

神垣のたよりに立る梅花鶯を來てねきと定むる

梅花悉開

哥林苑

鶯や木とにきつゝぬひつらん笠とも咲る花の風かな

梅花風靜

同

忍ひ妻くるかと思ふ吹風に枝もならさぬ梅のにはひは

梅花薰曉

梅かゝそねさめの床にかほなる今鶯や枝うつりする

梅花聚人

しるしらぬ人まねきけり春は猶梅の立枝もあるしなりける

心漸在花といへる事を

松もひき若菜もとりつ今は又思ひ立なん志賀の山越

故郷柳

古郷のかはらの松は常磐にてそとの柳春めきにけり

隣家柳

こち風になひく柳の糸みれば隣よりくる春かと思ふ

爲業入道哥合雨中柳

春雨の心ほそさを青柳の糸とも枝にかけてみすらん

柳夾水

見わたせは波のあやおる池水をぬひこめてけり青柳の糸

水邊柳

こするふく風もや水にやとるらむ底に涙よる青柳の糸

浪かくる立田河原のふし柳梢はその玉も成けり

青柳風靜

うるはしき御代のしるしか吹風にかたよりもせぬ青柳の糸

歸鴈をよめる

哥林苑

櫻咲山邊を過る鴈かねはこしの白根を越ぬとや思ふ

散かゝるこしちの雪にめなれてや花をみ捨て歸る鴈かね

刑部卿賴輔朝臣家の哥合におなしこゝろを

去年の秋の返をを雁かねのやかてをのれを書つらねける

春駒をよめる

詞花

まこも草つのくみわたる澤邊にはつなかぬ駒も放れさり晃

故郷の春駒といふ事を哥林苑

淺茅生と庭こそならめ主もなき駒さへあれてみゆるやと哉

遠見春駒

同

はなちつたるたなれの駒もみえわかぬ遠里小野の春の夕暮

殘雪

同

あやにくに春をしらす梅かえに猶ふるとしとみする白雪

春月

同

堇つむ野をなつかしみねたる夜は我ため澄る月かとそみる

すみをよめる

春の野に咲すさみたるつは堇つみゝつますみ今日も暮しつ

採堇日暮

哥林苑

堇草摘暮しつる春の野に家路をしふる夕つくよ哉

春日祭

哥林苑

すへらきの戴きまつる春日山けふはさる日と神も知らむ

稻荷詣

同

杉のはゝ霞にこめてみえすとも祈る徴はいなりかくれし

春野

同

雲雀あかる春の野もせに乙女子か袖をかゝくと摘は何そも

植木待花

我うへぬふるえの花を待たにも春は梢にめかれやはする

逢樵夫問花

同

咲さかすさこそ問とも山人よめくまん枝を折そへてくな

花をまつ心を

心有かこゝろのなきか吉野山花待ほとん卒の白雲

中納言(成範)哥よむ人々をすゝめて法勝寺にて十首歌

よませ侍しに花二首

千載
みよし野の山下風やはらふらむ梢にかへる花のしら雪

露ながら折てかさゝん山櫻雫に袖やしはしかはれる

いにしへ百首哥よみ侍し中に

よし野山峯こす風に散花や高しの浦によする白浪

忠盛朝臣家にて人々花哥よみ侍しに

花盛しかの山風吹ときはさゝ波よせぬ木の本そなき

清輔朝臣家哥合に

櫻咲春にしなれば遠近の山のはとにかゝるしら雲

重家卿家哥合に

みよし野の花咲ぬらしこそもさを峯にはかけし八重の白雲

左大將(實定)家にて花を

花の色をあかすなかむる俤やうつろひゆかん時なかるへき

大納言(公通)家十首會におなし心を

新後拾
待しよりかねて思ひし散ものけふにも花の成にける哉

俊成卿十首會に又おなし題を

續後拾

山高み峯の櫻をたつねてそ都の花はみるへかりける

中宮亮季經朝臣家哥合に

風をのみなにか咎めん櫻花手折は袖に散やかゝらぬ

師光君の家にて人々花の哥よみ侍しに

みよしのゝ花の盛と知ながら猶白雲とあやまたれつゝ

おらすとてちらてもはてし櫻花此一枝は家つとにせん

花みれば物思ひなしといひ置し人は散をやおしまさり劔

いとひつる春の山風けふはさは花のありかの道しるへせよ

遠近の峯の櫻をおしむまに春は心も空に散けり

花をこそ折てかさすにあやしくも袂に雪の降かゝるらん

夜とゝもに散ともつきぬ花ならは吹春風のまたれもやせん

ましてはしあたりの松はみとりにて櫻にのみや雪は降へき

待えたる花立かくす霞こそ月みる夜半の雲には有けれ

花を社はやも咲とはまたれつれ風もそへとはいつか思ひし

吹風をいとひゝて櫻はなはては手とに折てかへりぬ

右大臣家百首中花五首

新拾

さのみやは朝ゐる雲の晴さらん尾上の櫻盛成らし

よし野山ふかく入とも春の内は櫻か花をしほりにせし

咲みてる枝の傍なかりせは春のね覺や淋しからまし

月詠

とこととはにいつともわかぬ風なれと春は花ゆへ吹かとそみる

新古

なかむへき残りの春をかそふれば花とともに散泪かな

花みむと契たりし人のまうてこさりしかはよみて遣

しける

君こそと恨の色をふくみてそ花も我身もねにかへりにし

日の暮かたに房の花を人々まうてきて折けるを見て

暮ぬとて折なつくしそ櫻花月にも人の尋やはこぬ

空仁伊勢に侍ける時三月はかりにいひつかはしたり

ける

白川の花も我をはおもひ出よいつれの年の春かみさりし

返し

花のみや思ひ出へき年をへて我も君には馴にし物を

爲業入道哥合

故郷花

古郷の花の色さへかはりせは何にむかしを思ひ出まし

花

哥林苑

山さくら咲る盛は峯とに落けるものを布引の瀧

花下月明

月影のおほる成せは分て思ふ心や花のかたに過まし

有大臣家哥合に花下月明

新千

花よりも月をそ今宵おしむへき入なはいかゝ散をたにみん

日吉の哥合に華

月詠

葛城や高まの櫻咲しより春は晴せぬ峯の白雲

賀茂哥合

雲かゝる高根のさくら咲ぬればあせきを越る天の川舟

人にかはりて

おしみつゝ折て來つればあちなし風にまかすと花や散覽

或處哥合に花

しはしたに花をはなとやみせさらん月には雲をはらふ嵐の

花下逢古人といふ事を

たつねきて花みる時そかよひけるみし古郷の人の心は

社頭待花

或處會

かねてより風をは神にまかせつゝ白ゆふかけん花を社まで

又 花

山櫻かこめに風のさそひきてふもとの里に宿もとむらん

法勝寺の花をみて

散しける花みる時を思ひ出るみ雪ふりにし庭の氣色を

又おなし處の花をみて

あかすして此世つきなん後よりの春は櫻の匂はすもかな

立よりておれはおられぬ櫻はないつし我身の春によそなる

停船見花

花ゆへに思はぬかたにむやいして追風をさへいとふ今日哉

大納言實房家十首哥の中花

心からちらん櫻をみてのみそうしろやすくは風を思はん

水邊の櫻花といふ事を

影やとす花のした行山水をむすふは手折心地こそすれ

對花待友

白雲とよそにやみゆる山櫻折にといひし人のきまさぬ

また法勝寺の花見にまかりて

をしなへて花咲ぬれば白川の浪は梢をこすにそ有ける

またつきのとしまかりてよめる

散花をあかすも風の吹ときを世は愛物とおもひしりぬる

また次のとし

むかしよりみる白河の櫻花老のなみにもかはらさりけり

歡喜光院に人々まかりて花のうたよみ侍しに

かへらんと思ふ心のあらはこそ折ても花を家つとにせめ

新後鏡

宰相入道(教長)家哥合 山花

新拾

よしさらは導にもせんけふよりは花もてむかへ春の山風

山家花

哥林苑哥合

山の色をしむのみかは山里はいつかは人め又もみるへき

或處哥合に人にかはりて

咲ぬればほとなき物を櫻花いつをまてとか霞こむらん

花留客

哥林苑

我やとにしはしと鳥はなかねとも花をみすてゝ行人そなき

南殿の花の本にて

珍らしく雲井の花も思ふらんつゝりの袖に折てかさせは

左大將家にて

とならは手折てもたん櫻はな心とちらす物とみるへく

山家の花といふ事を

我ひとり折らんと思ひし山里の花を尋て人もきにけり

山さくらちりこさりせはかけにのみ花やさかまし谷河の水

花下待友

散さてそ人も見に來んなにしかは花のしとねを風の數く覽

故郷花

みよし野のみかきの原はあれぬとも花やむかしの色に散覽

山花の心を

さゝ浪やなからの櫻咲ぬれば花もしけりなしかの山越

みよしのは山路ふみ分行かゝり花のふゝきも人はとめけり

海路花といふ事を

風をいたみ響のなたとをる日も峯の櫻にめかれやはする

花のちるを見て

中へにいたれこめて花をみし散かふ時はうさまさり覺

華下競來といふ事

山路をは争ひきつる程よりも草のまとゐにむつれぬる哉

隣家花を待と云事

こえてさす一枝ゆへにかきこしの花を遅しと待そわりなき

尋花日暮といふことを

けふはまた尋くらしつ山櫻あらぬ木陰に旅ねせよとや

花落客稀

あかさりし花の名残を戀つゝそ青葉か枝を折くはくる

春雨をよめる

春雨の日をふるまゝに片岡の萩の焼原色つきにけり

大納言公通大内のふちつほの藤見んとてさそはれ侍

しかはまかりて

やすみしる君かみかきの藤の花むへ紫の雲とみえけり

藤花をよめる

頼政朝臣會

梢より越て落くる藤浪のるせきは松のしつえ成けり

隆房の少將のもとにて藤懸庭松と云を

軒端なる松の千とせを咲こめて我物にせる藤の初花

海路見藤花といへるを

風をいたみ田子の浦半を漕行は又よせかくるイくるか岸の藤なみ

大納言公通南殿の花みられしつきに藤花寫水といふ

事を人々よみ侍しによめる

藤の花うつれるかけをもちならしつえを浪の何とをる覽

探祿逢友

哥林苑

子日せし野邊にて君に契らすはけふ早蕨の折にこましや

行路蕨といふ事を

打やすむ道行すりの手すさみにおれる蕨はつかねたになし

をのつから家つとにこそ成にけり道のたよりにおれる早蕨

苗代をよめる

なはしろの水をひきくあらそひて心にくこそ任さりけれ

きくすをよめる

風聲
狩人の朝ふむ小野の草わかみかくろひかねて雉子鳴也

古池蝦蟇といふ事を

諸聲にうきぬの池に鳴蛙おなし心に何思ふらむ

さる澤の池の玉もに鳴かはつ昔を忍ぶ聲にや有覽

山家春暮といふを

花もはや根に歸りぬる山里にをくれて春のいつち行らん

海路暮春といふ事を

ともに社船出はしつれ暮る春なとやとまりをよそに過ぬる

三月盡の心を

さきたてゝおしみし花をやりしより歸らん物と春は知にき

小三月盡の心を

誰爲にかたみにあすをとゝめをきて今夜は春の立歸るらん

又三月盡の心を

いかにして散にし花に告やらん何ゆへけふもおしき春そも

已上百九十首。

林葉和歌集第二

夏歌

百首歌よみ侍しに更衣のこゝろを

おしみかね暮ぬる春を夏衣ひとへにけふぞ立へたてつる

大納言（會）家哥合更衣

立かへり春やうらみむいつしかと今朝ぬきかふる花の袂を

俊成卿十首哥よませ侍しに更衣

夏衣今朝は立きしをのつから散残るらん花もこそみれ

或處にて

夏衣立はきたれと花の色にそめし心を猶そかさぬる

百首哥よみ侍しに卯花を

雪かとして過て來ぬれば卯花を折しらすとや人のみるらん

重家卿家にて人々卯花の哥讀侍しに

みそらには雲もたなひけ卯花の月の有明すまぬ宿かは

卯花誰家そといふ事を

よそにみて過こし宿も卯花の咲る盛そぬしはとはるゝ

卯花藏門

哥林苑

雪とちし草の戸さしははらひしをえそ折のけぬあたし卯花

ある處の會

卯花の比にしなければ山里の垣ねそ月のすみか成ける

かき曇る空はいとはし我宿の卯花月夜照まさりけり

晩頭卯花左近中將實方卿家會

卯花の垣ねを過る夕暮は曇らはくもれ夏のよの月

夕見卯花

哥林苑

夕つく夜入ぬと思へと卯花の咲る垣ねは影を残れる

山家卯花

咲かゝる竹のあみとの卯花は夜をこめながら明るなりけり

遙見卯花

卯花の盛なるらし袖たれて遠かた人の波を分行

人々卯花の哥よみ侍しに

てれはちり曇れば咲ぬ月影に光あらそふ宿の卯花

卯花のさきしかはせる柴の戸はいらてやみぬる夏のよの色

望山戀花

隆房朝臣會

いかにせん山の青葉に成まゝに遠さかり行花の姿を

每家飭葵

哥林苑

けふといへは賤のあしすもおとらしと思ひかけける葵草哉

待郭公の心を

同

打なひき春にしより郭公ねぬ夜幾かに成ぬとか思ふ

按察大納言（公通）十首會に待子規の心を

聲をきゝてたに猶蜀魂あかぬ心はまたれやはせぬ

おなしこゝろを

哥林苑十首

待にしもやらぬ物とは思へとも猶そねられぬ山郭公

ならひつゝ尋やくるとなれも又まちもやすらん山時鳥

なきもせは聞もまかへし郭公いな人我にむつとなせそ

年毎にならひにければ子規卯月となれはいとそねられね

郭公ねぬ夜つもりぬさりとて雲のよそなる一聲はいな

曉は鳴もやするとほとゝきす八聲の鳥の音をさへそまつ

あちきなしさいさはまたしと思へともそれも苦しき時鳥哉

宵のまそ人をはまちし子規明るまでこそねられさりけれ

明ぬれと猶そ待つる時鳥いつとたのめし初音ならねは

谷近く住しるしとて郭公待れぬとしのあらはこそあらめ

尋郭公といふ心を 重家卿會

誰もさはまたさかぬほと時鳥人つてをさへ尋つる哉

右大臣家の首のうち郭公 五首

いにしへを忍ひ音なれや時鳥花立花の枝にしも鳴

是や此またれくて蜀魂心ゆかしのさ夜の一こゑ

聞てしもさかまほしきに郭公今一聲と今は思はし

を^{月詠}とつれむをそまぢし時鳥かたらふまては思はざりしを

かねてよりたゝ一こゑとしらませはきゝはまとはし山郭公

尋郭公歸聞 哥林苑

今こそは入ちかふなれ郭公尋かねつゝ歸る山路に

人傳郭公

聞つてふしるしは何ぞ時鳥人わきてこそうらやみもせめ

師光君のもとにて人々時鳥の哥あまたよみ侍しに

大あらきのうき田の杜の郭公草わかしとや忍ひ音に鳴

小夜更ぬ雲路もくらし郭公月侍とは宿にかたらへ

郭公花たちはなは枯ぬとも萩咲まては夜かれすなゆめ

霍公一こゑにてや過なまし花たちはなをやとに植すは

はたけふにむきの秋風吹たちぬはや打とけね山ほとゝきす

あちきなし我のみまたし郭公きなかは誰もきかん物ゆへ

思へはな山ほとゝきすよりほかに誰かはきつゝ我になの覽

あま彦はこたへつたへよ足曳の山郭公ほかに鳴なり

雲の上になのりて過る時鳥大内山やありす成らん

子規みつの濱邊にまつ聲をひらの高根に鳴過ぬしや

左大將(實定)家にて郭公幽聞

時鳥ほのめく夜半の一聲をまたぬ宿にや近く聞らん

大納言會馬十五首哥中に

もつてん人はなけれと郭公やよやしはしといはれぬる哉

ね覺時鳥といふ事を 哥林苑

郭公夢に聞やとまゝとろめはなれば寢覺を待ける物を

近聞時鳥

軒近く名のるとならは郭公またもさかなん程をかたらへ

遙聞郭公

ほかになく山ほとゝきすとはむ我にまさりて人は待かと

又ある處にて時鳥あまたよみ侍しに

み山いてはまつ音つれよ郭公けふは尋て我を聞つる

またれつゝまれになけとも郭公かたらふ聲にえこそ恨ね

蜀魂をのかね山に尋きて聞おりさへの一聲やなそ

なつかしき花たちはなにあかすしていとゝかたらふ郭公哉

五月雨の軒の雫のつくくゝと待をもしろぬほとゝきす哉

うきながら猶そまたるゝ郭公人傳にのみ聞くにつけても

心あらはいまもなかなん時鳥雲まの月に影やみゆると

郭公さ月も過ぬいつらさはかたらひ置しこそ情は

人傳に聞かさぬるや子規待夜のつもるしるし成らん

時鳥まつにはなかくすいさやさは行あふ坂の杉の手向に

範兼卿家哥合に時鳥をよめる

初こゑと人にかたらん郭公しはしはほかにきかなふるしそ

時鳥今一聲は久堅の天のかこ山おりはへてなけ

夜もすからきけともあかす郭公妻戀なかはつまつれなけれ

山家時鳥

宮古人來つゝもとはゝ郭公こたふはかりの一こゑもかな

山路子規

範支律師會

けふたにも聲なおしみる霍公をのかね山をすくとしらすや

隔山聞郭公

哥林苑

時鳥ふもとの里に今日そきく吉備の中山峯に鳴音を

又おなし處にて

おもひ寢の夢に啼つる郭公あはせてこそは二聲もきけ

曉郭公

尾坂歌合

我もさそ老曾の杜の郭公曉かたはいねかてにする

宇治前大僧正長谷に住給ひし比五月はかりによみ奉りし

君かますおまへのをかの郭公聲の色もやはしほ成らん

御返し

郭公やしほの岡に來なけとも聲の色こそまさらさりけれ

百首哥よみ侍しに早苗を

山陰にいくしまつりて取そめんむろの早苗ふしたゝぬまに

あやめを

哥林苑

にこり江のそこに引とも菖蒲草みかける宿の妻と成けり

菖蒲草かり行まゝにこもり江のまきの丸橋あらはれにけり

大納言(實應)家にてあやめを

なにか我たくひ成へきうきに生る菖蒲も人にひかれ社すれ

五月雨百首中

五月雨にみかさまされはこやの池のあしの末葉に蛙鳴也

師光君の家にておなし心を

五月雨はいなのさゝ原をしなへて皆ひたすらのこやの池水

又おなしこゝろを

さみたれに小田の岩垣水越てあさかの沼も名のみなりけり
右大臣家百首中五月雨 五首

五月雨のはれせぬ比はもかみ川瀬の岩かと舟もさはらす

さみたれは淀の澤水のみならず生ふるまこも深く成行

玉江にはみえし菖蒲も蘆の葉もかつみかくれぬ五月雨の頃

五月雨は大江の岸に水越てこやの軒端に船つなく也

山川の瀧もとさらす啼蛙いつちかいぬる五月雨のころ

旅泊五月雨

哥林苑

五月雨はふるともいてむ須磨の蜃の鹽たれ衣我にかさなん

船中五月雨

さみたれにたなゝし小舟湊いれは棹にそさはる芦のは末も

山家五月雨

五月雨は山田の畔に水越てこなきつむへき方もしられす

盧橋

實房卿十五首會

うつしうふる花立はなは行末に我を忍はん香にもたくへよ

おなし心を

哥林苑

昔みし人はあまたを匂ひくる花橋に誰をよそへむ

春も秋もいとひし風はにはひくるはな橋の折そまたるゝ

曉更盧橋

朝政朝臣會

板まもる在明の月をしるへにて花立はなを匂ひきにける

水鶏

百首中

天の戸を夜半の水鶏や敲くらん程なく明る夏のしのゝめ

水鶏驚夢

哥林苑

中ゝに夢にはみへき待人をたゝく水鶏にはかられにける

家々水鶏

同

横の戸のならへる敷をよそながら敲く水鶏の音にてそしる

連夜水鶏

同

しりなからとふをはしりて猶たゞ水鶏を幾よ我わかる覽

夏月

百首中

天の原くまなくすめる夏のよの月のかつらは折やたかへる

夏月似秋

月清み萩の葉そよく夏の夜は尾上の鹿のなかぬ計そ

水上夏月

影やとす水にて夏は忘れぬ何かは月の秋とあさむく

辨波江にやとかる夏の月影は蘆こそ草の枕なりけれ

よし野川いはねにさゆる月かけは水を夏のものとみよとや

夏の夜は月も清水にすゝむとや雲の衣をぬきて入らん

清水にや月の心もかよふらんもりくるまゝにともに涼しき

雨後夏月

千載のなはれやれぬ
白雨も晴あめぬほと雲まよりさもあやにくに澄る月哉

今そしる一むら雨の夕立は月ゆへ雲のちりあらひけり

對泉見月

内大臣雅通家會

むすひあくる清水に秋の來にければむへ月影の隈なかり晝

おなし心を

右大臣家哥合

手に結ふ清水に月のやとらすはほかへ心やあくかれなまし

おなしこゝろを

或處

松蔭の月は入ともむすひあくる岩井の水は猶やもりこむ

水邊待月

右大臣家

宿さむと岩まの水草はらふてにやかてむつるゝよはの月哉

袖ひちてせく手ににこる山水の澄をまつとや月のやすらふ

海路夏月

月夜よしおふの浦なし影もよし涼みてゆかん綱手ゆるへよ

樹陰納涼

哥林苑

おほあらしの杜の夕風夏なからまくりてに吐すゝみ成つれ

川邊納涼

水上に秋や來ぬらん大井河るせきにかゝる音を涼しき

河上やなひく柳のすゝしきは秋を招くと見えもする哉

山川のみかさを深くせくまゝに夏はあさくそなる心地する

夏深み涼みかてらに川やしろ夕かけてこそまつるへらなれ

わかあゆつる玉しま川の柳陰夕風立ぬしはしかへらし

百首の中に

千載
岩間もる清水をやとにせきとめて夏を外より過しつる哉

竹陰納涼

哥林苑

風さやく竹のこくれの夕涼み露さへ我を秋とあさむく

納涼

賴輔朝臣會

花ならぬならの木蔭も夏くれはたつとやすき夕間暮かは

おなし心を

哥林苑

立やとる櫓のひる葉に吹風は手にもならさぬ扇成けり

又範兼卿家會

新告
榎生る片山蔭にかくろへて吹ける物を秋の初風

吹過る木の下風のすゝしさに立そ休らふ衣手の杜

ひむろ

氷室山あたりは冬の心ちして梢の蟬を夏と告げる

夏草

公通卿十首會

秋はいさ尾花くす花みやわかんみな縁なる野へにも有かな

なつの野

夏ふかみ草吹わくる風なくはたとりやせましまのゝつき橋
夏の野は咲すさひたるあちさひの花に心をなくさめよとや
夏深く野は成に覺さはに出来るこくれの鹿のせなみゆるまで
水邊夏草

あやうしやみなはさかまく岩淵を何のそくらん大和撫子
夏くさをよめる

夏深く成そしにける難波女かあしまのこやの隠れ行まで
なつふかみ野原を行は程もなく先たつ人の草かくれぬる

又おなし心を 經正家會

秋ちかく野や成ぬらん草の姿の見え別れぬる

近見瞿麥 重家卿會

手にならす扇の風にあやなくも露そこほるゝ床夏の花

おなしこゝろを

朝夕のわか袖ふりにある鹿はいもうちはらへ床なつのはな

雨中瞿麥 範玄律師哥合

ぬれ色は露はかりにて有ぬへし何そは雨はやまとなてしこ

蓮亂晚風 哥林苑

夕されははすの浮葉に風こえてうつしそかふる露のしら玉

ともしをよめる

ともしすと葉山のすそに立かぬる我をやいもは待あかす覽

蟬をよめる

百首中

夏山の空ひくくまで鳴蟬の木のはもゆるく心地こそすれ

又おなし心を

哥林苑

山彦も答へやあへぬ夕つく日さすや岡への蟬のもろこそ

林近聞蟬

或處

夏木立軒はにしけく成まゝに數そひまさる蟬の諸聲

螢 百首

軒つたひすたく螢はさゝかにの糸もてぬける玉かともみる
大納言(賀茂)家にて螢火入簾といふ事を

あしすたれひまよりくゝる夏虫はなれし澤邊や思ひ出らん

竹裏螢火 賀茂會

小夜更て竹の園生にともす火は枝をかそふる螢成けり

旅宿螢火 賴政會

さもこそは草の枕をかりてねめあるしかほにもとす螢か

はたる橋をてらす 公通卿家會

たとり行いたゝの橋はくちめおほみ數々ともせ夜半の夏虫

社頭螢火 哥林苑

是やさはあくかれにける玉かとなかめし澤の螢成らん

螢火遮路 同

小夜更ぬ心はさきに急けともとす螢にえこそはなれぬ

窓ならぬ谷のせゝらきふみゝつる折もうれしなともす螢は

泉聲來枕

曉にはや成ぬらん岩間もる水の白玉音の涼しき

瀧の糸の風にみたるゝ音きけは枕に秋そくる心地する

泉邊秋近

岩そゝく谷の清水に打そひて秋も袂にもりそきにける

六月被 百首中

御被して立田川原の柳陰歸る物うき夕まくれかな

おなしこゝろを 哥林苑

飛鳥川あけはうきせやかはるとて今よひ汀に御被をそする

已上百五拾三首。

林葉和歌集第三

秋歌

秋立日よめる

^{月詠}花ゆへにいとひし風の哀にもけふ秋きぬと告て過ぬる

竹風告秋

笹の葉にそよや秋風音す也いつか夜なくならんすとすらむ

七月一日宇治前大僧正御許より

物とにさひしきさまる秋くれはとはぬ人さへ恨めしき哉

御返事

とふへしと思ひながらすさひしきは我宿のみの物と知つゝ

又立かへり

秋立て淋しきとは世の常を君かやとには時もわかしな

御返事

稻葉ふく風も音せぬ我やとは秋立ぬともよそにこそきけ

師光の君家にて七夕うたあまた人々よみ侍りしに十

首

七夕のたえぬ契をうれしとも今宵はかりや思ひ知らん

天川水かけ草の夕露にそふさへあやな袖なぬらしそ

七夕の秋さり衣ぬれぬまはけふのこよひの玉のをはかり

たなはたのわかるゝけさの袂にや秋のしら露置はしむらむ

こてすすす年はなけれと織女は夜の深行をいかゝと思ふ

影うつす水の心やあさからんすむほともなき星合の空

かさゝきの橋の渡りに七夕は夜も更ぬとやゆふけとふらん

彦星のあき漕出て歸るらんかちとる袖の雪いかにと
うれしきと憂とや思ひわかざらん稀に逢みてたへぬ七夕
一夜とも心よりこそ契りけめ立ななかりそ天の川波

或處にて七夕の哥あまた人々よみ侍りに

^{月詠}逢瀬こそ又もなからめ年の内にふみたにかよへ鵜のはし
年を経てあさひく糸は七夕のたえぬ契のしるし也けり

衣ゝに天の羽衣成やらてこよひはかりや鳥のねもうき

七夕の年の一とせ待得たるたゝ一夜さへ夜やはふくへき

七夕の百機たてゝ織あくるみけしのあやは今日やたちぬふ

頼輔朝臣家哥合に織女を

心から稀に契し織女はくやしきにさへ袖やかはかぬ

右大臣家百首内 草花五首

白玉をつゝめる萩の錦をは誰あたし野にこゝら置劔

^{續古}何事を忍ぶの岡の女郎花思ひなほはれ露けかる蘭

ふちはかまたゝ露計そむればやうす紫の色に咲らん

下おれはもとの姿を荇萱のあやなく風におほせ顔なる

^{月詠}萩の葉に風うちそよく夕暮は音せぬよりも淋しかりけり

萩 哥林苑

さをしかのむね分にする小萩原たゝきれゝの錦なりけり

萩満野亭

我やとは野はらの萩に埋もれぬ鹿よりほかに誰か分こん

女郎花近水

散玉に袂しほるゝ女郎花瀧津岩ねをすこし立のけ

薄當路滋

花すゝきしけみか中を分行は袂を越て鶉鳴也

古籬菊萱

ふりにける籬はあれよ年に咲なと菊萱のしとろもとろは

隣家夕萩

夕まくれあたりにもそよく萩の音に聲打そふる芦の中垣

人にかはりて野亭萩

我宿に圍ひこめすは大かたの野もせにみてる萩かとやみん

隣家萩

となりなる萩にはかくと首つれて宿をすとをり秋の夕かせ

女郎花

人にもたはれくゝて女郎花はては誰へ露けかるらん

草花待露開

しら露やあたにむすひし蘭うち置まゝにほころひにけり

萩

萩の葉の露をは風のはらひつゝあやなくも我袖ぬらすらん

草花纔開

野へみれば萩咲にけり時鳥たゝ一枝はしらす顔なれ

野花半開

夏と秋と野へには猶や行通ふかたえは花のほころひもせぬ

夕見草花

夕附夜しはしほのめけ咲そむる小萩か花の數もかそへん

草花先秋

くちなしの色成ながら女郎花先さき立て秋を告つる

夜思草花

女郎花おもひこそやれ我たにも猶寢覺の床は露けし

草花隨風

まねくたにうれしき物を花薄さのみは我になひくへしやは

心在每花

秋は猶萩をそ花と思ひしは野へをみぬまの心成けり

霧中草花

まゝらなる霧の笹をたのみつゝたはるゝ野への女郎花かな

心在野花

移り行心のまゝに手折せは野邊には花も露ものこらし

折草花供佛

いさ折てあかにそへなん女郎花をのか五つの罪やきゆると

秋野

おほつかな外山かすそは霧こめつ小萩か原の鵜なく也

家草花

我やとに萩女郎花植しかとね覺の友は萩はかりこそ

庭移野花

うつし植し主は誰とて萩のはのよひくゝとに我はかるらん

古郷草花

すたきけむ主はととへは女郎花口なしにして露そこほるる

經盛卿家哥合に草花

秋の野を我こそ宿に移しつれ誰さそひこしむしのねそこは

季經朝臣家歌合におなし心を

ほかをのみまねく尾花に心なくたはれもかゝる女郎花哉

野風

わかれけむ野邊ならねとも淺茅原秋ふく風は悲しかりけり

又

花の香をさそひて過る秋風を何としたひてなひく野へそも

岡のへのならの眞柴に風立はかへるは葛のうらはのみかは

風吹はまねかぬ花そなかりける野邊こそ秋は色には有けれ

から錦うらをみましや秋の野のそこ吹返す風なかりせば
旅亭草花

かりの庵にかこひこめたる女郎花思はぬ旅の一夜妻かな
柴の菴を何のそくらん女郎花旅の日数のやつれ姿を

野徑露深

或處

分行はこほれぬ露かおなしくは手折てゆかん秋萩の花

秋野

範兼卿家三首

花の色は千種なれとも秋の野を分るま袖は露もかはらす

丹葉は時雨そゝむる秋の野の花の色ゝ誰におほせん
いはれ野の花の千草の香をひとりさそひて過る秋の夕暮

庭前草花

或處

我やとゝ名にこそ立れ秋の野に萩女郎花露もかはらす

野花

明るまで猶くるゝ野の小萩原はや吹おこせ秋の初風
ひとりるの友と成ける萩のはを焼けん春そ今日は悔しき

月前野望

宇治前大僧正房

秋の野の花の夕露色ゝに照月影も亂あひにけり

虫をよめる

清輔朝臣家哥合

秋の野の千種の花の下もに虫の音さへそ色ゝに鳴

師光家にて

秋のうちに誰に契て宮城野にはた織虫の急く成らん

和哥曼陀羅講にむしを

とにかくにかやか下はふ青つゝらくる人なしに鳴松虫か
爲業入道家にてむしを

秋風の露吹むすふ夕暮に聲ゝ虫のみたる成かな

秋虫初吟

哥林苑

秋風の吹立ぬるにたへかねて誰松むしの色に出らん

夕聞虫聲

こぬそとも暮はてゝこそしるからめまたき恨る松虫の聲

虫聲滿野

哥林苑

大江山岑まで響く虫の音はいく野にこよひあまりきぬらん

虫夜友

我爲は明ぬともなけ蜚ひるとてひとり暮すへきかは

虫聲近床

哥林苑

きりゝす枕かはしてねにけるも此曉を聞はしめつる

田家晩望といふ事ある處にて

夕まくれ遠の山田をもる人もいなおほせ鳥になるこ引めり

月をまつ心をよめる

大空のくるれば月をまつ物を山のはよそに何おしむらん

月二首

哥林苑

あまの原雲つきぬればなこの海に光はみちぬ秋のよの月
すみのほる心や空に立そひて今宵の月の影と成らん

師光君の哥合に

天河やその浦半に雲消てなきたる夜半の月をみるかな

人ゝ月哥十首よみ侍しに

月清み軒はにすかくさゝかにの糸の亂の数もかくれす
簀おろす清瀧川にすむ月は棹にさはらぬ氷也けり

をのかため明るにもあらぬ天のとに急な入そ秋のよの月
見る人もなからんほかの月影は眺むる宿にそへてゝらなむ

月清み蓬かそまの下晴て聞もあらはに鳴きりゝす

空晴て月すむ夜半はこしの海の波にきえせぬ雪を降しく

月ゆへにおしむと待と山の端をいとふ心そいつれまされり
法性寺攝政家月の哥あまた哥よみをえらひて五人に
よめと侍りしにまいりて

風こしの雲吹はらふ峯にてそ月をはひるの物と知ぬる
み空行月をは軒にやとし置いていつち心のあくかれぬらん
むら雲を背より風にはらはせて立出る月の影そさやけき
秋風の露吹むすふ竹の葉に清くもすめる夜半の月哉

よさの海の浪まにやとる月みれば天の川邊に我やきぬらん
續後拾千鳥なくるなのみなとに風さえて波まにやとる有明の月

秋くれは軒はの月はさそはれて轉寢なからあかしつる哉
山の端にふかく入ぬる月影は世をうき雲に住や佗ぬる
此世をは月ゆへに社おしみつれ暫しそ暗きやみにまとはし
出るより木の葉隠れの夕つく夜かくてやつるに雲に消なん

實家卿家にて月哥人ゝあまたよみ侍しに
久堅の天津み空に雲まけは月の光そ庭に數ける

まこもかるすさの入江のこもりえにいかに尋て月の澄らん
こやの池に月しやとれはなかもやる心も水のうへにすみ晃
むら雲の秋はいつこにかくるれば只月ひとり空にすむらん
閨の内にいとて月に打とけしいたらぬ里のあらは社有め
出る山入山のはと月影はいつこか終のとまり成らん
秋の夜の月の光は浮雲の晴るそ影をそふる成ける

左兵衛督成範卿法勝寺にて哥よみ侍しに月を
月影を雪かとみれば白すけのまのゝ萩原枝もたわます

故郷月

忠盛朝臣家會

干載古郷の板井の清水みくさゐて月さへすます成にける哉

月照山水

哥林苑

山の井の水はにこさし木のまよりりくる月の影やとし晃
水上月 忠春己講房

むすひあくる岩まの清水清ければ手にもち月の影を泣けき
重家郷の家哥合月

かきくもる折こそあらめ月影は晴るにつけて物そ悲しき
清輔朝臣家哥合月

新後撰

思ふ事有てやみまし秋の月雲吹はらふ風なかりせは

おなし所にて山月といふ心を

わたつみの海人となりてそ月そみん都の山の端に隠れけり

雲間月

哥林苑

今はゝや天の戸渡れ月の舟また村雲に島かくれせて

月照已屋

同處

あれまさる宿は心もとまらねはもりくる月そ佳かはりなん

江上月

おなし處十首哥中に

吹風にみ空は晴ぬ秋の月玉江の水は誰かはらへし

俊成卿十首哥中月

我こゝろをくらさりせは秋の月千里の外に獨ゆかまし

右大臣家百首中月五首

宿るへき岩まのみ草たかためにはらへは月の出かてにする

かく社は誰もみるらめと思へとも語らまほしき夜半の月哉

我心いつちさそひて行ぬらんかこたは月の曇りもやせん

なかわれはいとゝ物こそ悲しけれ月は憂世の外と聞しに

干載此世にて六十はなれぬ秋の月しての山路もおもかはりすな

月

宇治前大僧正房

めもあやに近けき月のくせなれや今宵初めてみる心地する
哥林苑にて月の哥あまた讀侍しに

天津風いつち雲をはいきなひてうたゝも月を獨捨らん
さゝ浪やこたかみ山に雲晴てあしりの興に月落にけり

師光君の小野宮にて哥合し侍しに海邊月
かもめゐる難波ほり江に月さえてこやの蘆垣敷もかくれす

按察（公通）十首哥中月
風をさへさそひて月やたとるらん玉江の底も月の晴ぬる

旅宿月 尾坂哥合に

ことならはまた夜をこめて朝たゝむ山路の程を送れ月かけ

八月十五夜

暮るかと思へはあけぬ兼てよりいつら待つる秋の一やは

經盛卿家哥合に

月清みかひのしらねをなかむれはいつかは雪に空は晴ける

月送行客

師光家會

旅の空をくるとならは秋の月村雲かくれよき道なせそ

歌林苑十首月

社頭月

三輪山杉のまにゝもる月は亂れてちれるぬさかとそ見る

野宿月

月清み秋の野原はいつこにか草の枕をむすひきためん

澗底月

谷ふかみ山井の水にすむ月は心のうつるかゝみ也けり

湖邊月

よこの海に釣する海士のうけの緒の靡くもみゐる夜半の月哉

已屋月

月影のかへのくすれをすとをれはとかめかほなる菝かな
恨女見月

月見ても待らんとおもひもならは今まで宿になかめせましや
恨身見月

月みれば身のうき事のおほゆれは曇るは晴る心地こそすれ
戀古人見月

月をたに詠むとすれは何となくみしよの人そ數へられける
湖邊月をよめる 哥林苑

新古

難波かたしほひにあさる蘆たつも月かたふけは聲の恨むる
依月客來といふ事を或所

君に我ひるとはいつか契しととがむはかりにすめる月かな
海邊月

千載

宇治前大僧正御房にて

なかめやる心のはてそなかりけるあしやの沖にすめる月影
あかし集

住吉歌合

社頭月

住よしの松の行あひのひまよりも月さえぬれば霜はをき覺
同

月照古橋

影供會

朽めおほみ勢田の長橋澄わたり月はあしみもたとらさり鳧
深山曉月

有明の月のみこそはかつらきやすゝ分わふる道しるへなれ

有馬にまかりてしほゆあみ侍しに月のあかゝりし夜
有馬山いなのはしはやに月もれはいてゆへもなく袖を濡ける

遍昭寺にまかりて月をみて
古郷はこすのひまよりもる月の影さへみれば忍ふもちすり

月前閑談 或處

睦言ををのれすゝめて月影のまたつきなくに入らんとす覽

荒屋見月といへる事を

吹風にかつや板まのあれまざる枕に月の影のもりそふ

九月十三夜 哥林苑

長月のもち月しもはいかなれは影を今宵にゆつりそめけん
またある處にて

名にたてるこや長月の十日あまりみよとも月の隈なかる覽

右大臣家月十首哥合中に秋月四首

月得秋勝。有潤九月

今そしる秋くはゝれるとしはさは月も光をそふるなりけり

關路月

逢坂の關のこくれを厭ひても夜をとをすへき夕つくよかは

月前述懷

風雅
ななむれは身のうき事の覺ゆるをうれへ顔にや月もみる覽

月催無常

よそにかく今宵は月をななむとも明日やあたりの雲と成覽

日吉の哥合に月

隈もなき影にあはれをさしそへて心の限りつくす月哉

賀茂にておなし心をよめる

宮古たになくさめかぬる月影はいかゝすむらんおは捨の山

依月惜生涯 哥林苑

うしとていいかゝは此世厭へきうたゝある夜半の月の影哉

湖上月 同

さゝ浪や比良の高根に月すめはしかつの浦に雪を降しく

池上月 同

千早振あそのみおきにすむ月は誰手向たるかゝみ成らん

遍昭寺哥合に月

更科もみ空や晴ん池水にやとれる月の影さへはみし

爲業入道哥合し侍しに海邊月

山高みはるかにみれはすゑの松月の波さへ越るなりけり

駒迎をよめる 哥林苑

はしり井の水には影のやとれとも立こそなつめ望月の駒

八月十五夜月くまなかりけるに宇治前大僧正御房へ

奉りし

名にたてる月をは軒にもちながら心にかゝる君か宿かな

月添秋思 隆親會

小夜更てむしそわふなる我とく月すむまゝに物や悲しき

おなし心を

啼虫の聲きくよりも小夜ふかき月みる折そ秋はかなしき

月にこそ秋の思ひはまさりけれくらふの山に我やすまゝし

池上月

隈しなき月はかりにて池水に入山のはもうつらさりせは

旅行屬

行道にけふはちかへと初雁の我みやこへと聞そ嬉しき

海上初雁

こしの海の底にしつめる玉章を初かりかねそ空によむなる

深夜雁

更行は夜寒になるを心なく衣かりかね鳴てすく也

夜泊鹿

哥林苑

夜をこめて明石の瀬戸を漕出れは遙かに送るさをしかの聲

遠聞鹿聲

左大將家

大江山鹿の音とをく聞ゆなりいくのゝ外に妻を戀らん

ある處

霧かくれ野しまか崎に鳴鹿はいつれの方の妻をこふらん
住よしにてしほゆあみて九月ばかりに侍しによめる
暮て行秋の木末はさひしきに松吹風を音にかはらぬ

已上二百二十八首。哥百七十六首カク。不審。

林葉和歌集第四

冬哥

哥林苑人々四季の哥よみ侍しに初冬のこゝろを
冬くれはかくれさり鳧難波女か芦のあなたのこやの住かも

山家初冬

清輔朝臣會

いつしかと人めも草も枯ねとやおろす嵐の今朝ははけしき
又ある處にておなし心を

今朝よりは懸樋の水は音もせとほろをたゞく風を烈しき
右大將(實定)長樂寺にて深夜時雨といふ事をよまれ侍

し

月をこそ哀とよひになかめつれ曇る時雨も心すみけり

範兼卿家哥合に時雨

月詠
かきくらしかた岡山はしくるれとをちの里は入日さし鳧

經盛卿家哥合に

音つれはあはれそへよと横の板に兼ねて時雨や契をき劔

住よしの歌合に旅宿時雨を

千載
もしほ草しきつの浦のねさめには時雨にのみや袖は濡ける

おなし心を人にかはりて

かりほさすならの枯葉の村時雨哀は横の音はかりかは

またある處にて

横の板にいつもさこそは隆雨のなとや時雨は音の身にしむ

行路のしくれ 頼政家會

おもはすに時雨は過ぬ木蔭とてたのむ木葉を降もおやまぬ

月前時雨

或處

月影のさしくるおなし板まより音してもるは村時雨かも

時雨易晴

哥林苑

餘波をは草葉のうへにとゝめをきて時雨の雲そ露も残さぬ

或處にておなし心を

山めくる時雨の跡を見わたせばやかてさし行夕つく日かな

所々時雨

夕つく日さすや岡邊を隔てつゝこのもかのもとに時雨降也

深夜時雨

小夜更て人はしつまる横の戸にしくれのあしそ高く成行

さよふけて打音つるゝたひもに我袖さへそむら時雨する

殘菊をよめる

しら菊をなれ色ゝに染をきて今朝なと霜の置かくすらん

落葉驚夢

範兼卿家會

横の板に紅葉亂れて散よはゝいつかは夢のやすくみえける

哥林苑人々大井河に田をかりて十月はかりにうたよ

み侍しに

ふき集

けふみれは嵐の山は大井川紅葉こきおろす名にこそ有けれ

山路落葉

教長入道會

音羽山こえつゝゆけはうすくこく錦を袖に折そかへつる

落葉をよめる

冬の夜はしくれのみかは横の板に木の葉降にも袖はぬれ覺

右大臣家哥合に落葉

しなかととりゐなのしは山吹風に下す紅葉やこやの八重ふき

雨中落葉

哥林苑

雨のあしのしけく成行音はして木の葉は閨に洩こさりけり

木の葉をは閨の板まにとゝめ置て獨もりくる初時雨哉

故郷落葉

同

淺茅生とさこそ成行宿ならめ木の葉の下に鶉なく也

網代落葉

隆房朝臣會

宇治山のもみち流てあしろ木の手もとにあらふ錦とそみる

哥林苑哥合に落葉

立田山梢まはらに成まゝにふかくも鹿のそよくなるかな

俊成卿十首哥中に雪

日をへつゝみゆきつもりぬ吉野山入にし人や思ひけぬらん

寒野雪

哥林苑

雪ふれば花の色ゝ露もなし野邊にもうつる我心かな

雪

同

降雪に峯のたつ木もしられねはしほりし枝もかひなかり覺

教長入道哥合に

今日も猶雪降やまぬよしの山いつら常盤の山のみとりは

日吉哥合に

あさ風のさむけきなへに菅原や伏見のたゐにはたれ雪ふる

野宿雪

仇に社野へのかり庵はさしつるに思はぬ夜半の雪の上ふき

重保はしめて神主に成て賀茂寶前にて卅講のつゐて

千とせまて雪つもるへき宿なれば花咲松も君のみそみん

哥林苑にて

春みとり秋くれなるに見し梢みな自妙に雪降にけり

雪埋樵路

哥林苑

つま木こる山ちは雪の深ければ世にふる道もたえやしぬ覽

雪朝山越 同

今朝もなをあまきる雪の猶ふれは駒もなつみぬさやの中山
狩人もこぬものゆへに雪ふれはかた山きゝすふしとわふ也
菊こもの一重を敷きてさぬるよとしらてや雪の風ませに降
日を経つゝ消て又ふる雪みれは散てやみにし花のみそうき
關路曉雪

月照山雪

けぬか上にふらてかさなる白雪はこしの高根に照月の影

神樂

哥林苑

君か爲玉くしのはをとるかさし星さゆるまてうたひ明さん

雪中神樂

あまくたる神のしるしの榊葉に雪の白ゆふかけそへてけり

閑中雪

たつねこむ人こそあらめ我さへに立出へくも見えぬ雪哉

橋本寒蘆

風吹はさのゝ船はし波こすとみゆるはあしの穗末なりけり

八橋のと絶をみれは霜かれのあしのはのみそくもて也ける

氷爲旅鏡

朝立て旅の鏡とみよとてや山井の水のうす氷せる

雪中佛名

かつきゆる雪とも罪をおもはしや三世の佛を拜むしるしに

雪中待春

哥林苑

降雪になくさむへきをいとゝしく花とみてしも春を戀しき

山家待春

同

あるしなきこゝちこそすれ花ゆへに春まつほと冬の山里

山陰のたるひの下に住宿はうらゝに照ん春をしそ思ふ

梅花先春開 同

驚のきるん春までやつさしと梅には雪のおほひしてけり

歳暮述懷

しはしかと我身のうさを思ひしにこそもことしも歎暮しつ
十二月つこもりころに天王寺にまいりて歸しに船を
年くれぬいそけと申しをきゝて

歳暮歎老 哥林苑

日にそへて身に添老を暮ていぬる年の一夜におほせつる哉

歳暮述懷

範兼卿會

何しかは送りむかふと急くらむまたこん年もおなし憂よを
くるとあくときをうしとのみ歎て果は今年もけふに成ぬる
前大僧正御許にて

今年にて又こむ年も見えぬれと猶こりすまに春をまたるる

俊成卿 十首 哥中歳暮

歎つゝ今年も暮ぬ露の命いけるはかりを思出にして

としのはてに申ける

かく計り厭ふ命を人なみに明日は千とせとやいはんとす覽

右大臣家百首の内 歳暮五首

花をまち月をおそしといそかれし日數は年のはてそ悔しき
暮はつる年のしるしのなかりせは残り少くなるもしられし
いつとても過る月日はおほけれと今夜は年をそふる悲しき
一年の夢のみはては今夜そと思ひなからさめは社あらめ
さても猶暮ぬる年のおもひ出はいとふ命のいけるはかりか
已上六十六首。

林葉和歌集第五

戀歌

右大臣家百首内 初戀五首

またしらぬ戀路に深く入しより露分衣ぬれぬ日はなし
何となくなかめにぬるゝ袂かな戀てふものは是かあらぬか
人心とけよといはふ玉すさをむすひはそめしいみも社すれ
戀はさはみし佛の身にそひて袂をぬらす名にこそ有けれ
今日社はふみそめつるを紅のいつあかりける戀の千しほそ

按察大納言(公通)家初戀の心を

またしらぬ是や戀路の坂な賀ふみそむるより身のみ苦しき
又ある處にて

またなれぬ戀路に深くをし入て行衛もしらぬ人や誰なり
せきもあへぬ泪の川にたへ兼てその葉をさへもらしつる哉

右大臣家百首内 忍戀五首

忍ひかねみかきの原につむせりの雲に袖そあらはれぬへき
戀すてふ氣色を人にみえしとて打そはむくやあやしかる覽
むねにたつ戀の煙をけふまでも我なれはこそ思ひしつむれ
夢にたに打とけなはやと思へ共それもうつゝのならひ成覺
もらさしと思ひつゝめと心なき涙のとかは君ゆるさなん

哥林苑人とかたをわかちて歌えらひて哥合し侍しに
戀哥三首

おもひきや夢を此世の契りにてさむる別れを歎くへしとは
あはれてふ言葉も哉それにたにけなん命をかへつと思はん

思ひかね猶戀路にそかへりぬるうらみは末もとをらさり覺

又後のたひの哥合に戀の心を

夜もすから物思ふ頃は明やらぬ闇のひまさへつれなかり覺

清輔家の哥合におなし心を

あふにたにかへん命はかなきに憂人ゆへに身をや捨へき

爲業入道歌合に戀

大かたはうきにたへたる身なれ共戀てふ物を忍ひかねぬる

範兼卿家哥合に

我戀をねにたてゝ啼物ならは答へもあへし遠の山彦

またおなし處にて神に祈戀といふ心を

三輪川の清きなかれにいくしたて夢にみんとや我は祈りし

人のもとへつかはさむとて人のこひしかは

しぬはかり思と兼てかきやりしもの葉にさは我やおちなん

左大將(實定)家にて

しなはやとあたにもいはし後世は俤たにもそはしと思へは

白川にて人々哥よみ侍しに

定めなき露の命をもちかほにあふにかへんと待かはかなさ

賴政家の會に

秋の野をいつかは夢に分きつるなとやね覺の袖の露けき

師光君家にて人々百首哥よみ侍しに戀哥十首

わきもこをかた待よひの秋風は萩のうは葉をよきて吹なん

うしとても思ひもたえぬ物故にさのみつらさを人に語らし

身にそへる君か俤心あらは行てもかたれ馴る姿を

戀しなん命を誰にゆつり置て難面人の果をみせまし

同
君やあらぬ我身やあらぬ覺束な憑めしものみなかはりぬる
身をつめは哀と思ふ岡のへに霜かれ立る妻なしの木は
我戀は人しらぬまのうきぬ繩苦しいとみこもりにして
忍ふ草かたみに摘てすくせとしけき人めを猶もりぬへき
夢にたにあはす成ぬるね覺社又たのむへきかたもしられね
君こすは聞へも入らしはらひつる床の思はん事もはつかし

初戀の心を

日吉哥合

獨寝の床の秋風身にしむやよそに聞こし戀には有らん

又哥林苑人々十首戀哥よみ侍しに

戀草はなへてかるともいなやいな忍ふはつまし袖しほれ覺
秋風の身に寒き夜の獨ねはぬしさたまらぬ物をこそ思へ
しるらめや涙の床のあやむしろをに成まてにしき忍ふとは
暫し社うしつらしともいはれければ戀しさ只ひたすらに
我ながら身をはうらみつ君も又うたゝある物と心をは知れ
君かさは夜床の衣うらかへれなれる姿や夢にみゆると
戀しともうしとも思ふ我涙なとや袂に色のかはらぬ
我こゝろめにこそ見えぬ曇る日の影と君にはそへてし物を

夢にとてみえぬ物からまところめは俤にさへ立わかれぬる
こむとてこぬか辛さに比れはこしとてこぬは嬉しかり覺

内大臣(兼通)家戀哥十首よませ侍しに

花の色も月の光もかはりけり物思ふ時のわかなかめには
夢しと夢をいはいはし憂はうくつらきはつらくみえぬ物かは
限あれば逢てふ名社惜からめなけの言葉はくやしからしを
おのつから戀のたえまのひまのうつし心はうらみ成覺
月影は物思ふとしもなれとも戀にはまつそ友と成ける

衣手につく覽すみを陪つゝはあやむとたにもよそに聞はや
思をめみそめさりけん古へをこふにさへ社かなはさりけれ
色は有てなとや涙の心なきつゝむとすればいと落そふ
あかつきを思へはつらき憂人も寢覺よりこそ戀しくはなれ
曉の床に秋風吹こすは心にはまけぬ我身ならまし

右大臣家百首内 初逢戀五首

珍らしく今夜はかりやさよ衣うらをうらにや打返すへき
新篇 逢事は夢のみにとこそ待れしか現までとはおもはさりしを

今更にいとゝいとは鳥の音を待てのみ社あかしかねつれ
あはれとも先みるはかり今夜我枕のちりをしはしはらはし
朽にける袖のためしをみせをかむ又難面やならんと思へは

同百首 後朝五首

なそや我しかまのかちのあひ初て返らぬ道を習はさりけん
あひもみて歸りし宵の袖たにもいとかく迄はひちすや有劍
おもへたゝ夢にたにこそ人をみてあしたの床は起うかり覺
一夜たにと社かねては思つれ今朝起うしといふそつれなき
しまさするおもへなたは過ね共今朝のおき社思ひ陪ぬれ

同百首内 遇不逢戀

逢坂の關の杉むら過なからもとの清水にぬれかへりぬる
千束まで我立をさし錦木を君は一夜にこりはてにけり

同 曉の鳥を思へははつかしき一夜はかりに何いとひけむ

忘るなよわすれしとこそ頼めしか我やはいひし君を契し
うつゝともなくて一夜は明にしを其夢をたに又もみぬうさ
中院入道右大臣久我山庄にて山家冬戀といへる事を
よまれしに

夜をさむみまつ人もこぬ柴の戸をあやなくたゞく山嵐の風
師光君の家にて歌合し侍しに

獨れてまぢのみ明す鳥の音をいとはん世にはいつか成へき
清輔朝臣歌合し侍しに祈神戀といへる事を

さも社は君を祈らめなそやこはうさかの杜の神もつれなき
成範卿家にておなし心を

つれもなき君にしなれば眞鳥住うなての杜の神もたよらす
見書増戀 哥林苑

引返しこまかにかける玉章も恨むところのなくは社あらめ
顯輔卿家哥合に後朝戀

新千載
さのみやは今朝さへ君を恨へきをきて來つるは人の咎かは
おなし心を 或處にて

あかすして別るけさの道芝はかすよりほかの露やをきそふ
夏夜戀 哥林苑

から衣かへしてはねし夏の夜は夢にもあかて人わかれけり
先人おはせし時家に哥合し侍しに戀兩人といひし題

をいはけなく侍しとき 十三歳
我戀はふたかみ山のもろかつら諸共にこそかけまほしけれ
おなしこゝろを 哥林苑

とにかくにたえぬ思に戀しなは誰にかへつる命とかいはん
大納言(實定卿)家にて戀

夢にさへかへすけしきのしるければ返す物うき小夜衣哉
老後戀

姿こそおひその杜と霜かれめ袖のけしきは和哥の浦波
思ふとてえそ立そめぬ錦木を千束まつへきよはひあらねは

一會後被妨戀 範兼卿家

二夜とも越みてしかな相坂の關守しはし打ちねなむ
重家卿家哥合に

衣くになるへき人もなきものを明ぬと鳥の誰につく蘭
戀哥ある人のこひ侍しかは

夢をたに思ふはかりもむすはしや扱もや戀の暫しやすむと
哥林苑にて

世中ははてや何かは夢ならぬあひみぬをしも現と思はし
或人のもとにて

佗つはあふとみる夜の夢をたに君か情と思はましかは
寄貝戀

我戀は海人もすさめぬうつせ貝幾しほぬれて年の經ぬらん
經盛卿家歌合

ざりともし戀しぬる身を君とていつ迄よそに聞んとす
後のたひの哥合に

新千載
たのめ置し人もきまさぬ秋の夜はまた鳥の音を待か苦しさ
影供會に

中く夢もけしきはうかりけり俤のみそおもかはりせぬ
歌林苑十首會中戀

思へたゝ戀しぬるまで難面てやみにし我といひてなにそは
媒變約戀 同

もらさむと寛の水のうけくゝて何のふしゆへとこほる寛
忍戀 同

つゝめ共あまる思ひの言葉は心にもあらてちりそしぬへき
被謗他戀 同

なくとも人やくるしき我涙みるめにさへもあよりける哉
巨來夕歸戀 同

あくと待ちくると慕て何時迄か我なつさはん人のよつまに

寄水鶏戀

同

水鶏そと人はきけとて忍ひ妻敵きもす覺問はすしもあらし

人のもとにまつといふうへわらはのありけるをある

人の思ひかけてつかはさむとてあなちこひしかは

たひ／＼よみてとらせ侍し

我心むすはれつゝすくせともまた打とけすいはしろの松

又のちに

かくはかり涙はあらへと高砂の松はつれなく色もかはらす

見返事増戀

哥林苑

まつはしのふみそめつるは嬉くて返りとにそ袖はぬれける

戀田舎人

同

忘れすよひなのすまゐになれそめしうなひ乙女かその儼

待返事戀

同

ひく墨のたかひてもこはそれをたにもし習せぬ印と思はん

寄硯戀

同

玉章をかくに落そふ涙こそやかて硯の水と成けれ

被猜木人戀

右大臣家

たなはしに我黒駒のあしおれと思ひぬにこそ妹はぬぬらめ

經盛卿哥合に

思へ只うき計りなる袖ならはぬるとも夜はかへさましやは

或處にて

戀しぬと知せてかひはなけれども聞えはてなは斯と告やれ

季經朝臣家哥合に

いたつらにしほるゝ袖を朝露に歸る袂と思はましかは

乍臥無實戀

哥林苑

うしみつは過ぬる迄もなつさへとまた何事も語らはてきぬ

被艶女戀

同

女郎花いたくたはれて人にまたいはれの野への露にそまつな

獨臥歸戀

道芝をわくとして露そおしからむうつりかもせぬ今朝の袂は

寄秋風戀

同

秋風もやゝ吹立ぬとはかりや戀せぬ人はよそにきくらん

寄殘菊戀

同

もとの色に移ろひ戀る菊も哉かれにし人にかくとみすへき

寄竹戀

夜を寒み獨ぬるよは竹の根のとかくふせともふしうかり晝

寄草戀

山陰の雲にぬるゝまろ小管まろしもひとりしほれさりけり

遍昭寺歌合 戀

いもかもる勿來の關をはかれ共鳥ならぬ音はかなはさり晝

觸事思出戀

哥林苑

をのつから立はなるれば儼を荻ふく風のまたさそひくる

尋山家人戀

是やそといもか家路を尋れば門田の稻葉そよと答へつ

寄寒草戀

日にそへて霜かれ行けは葛の葉の有しはかりもえこそ恨ね

戀學問姑

實房卿家會

窓の内に垣はの雪を集めても妹かふみこそまつみちれけれ

及曉途會

啼ぬなる鳥はそらねにあらねとも明てそとをすあふ坂の關

成契久戀

たのむるにのふる命も年ふれは限しあれやなをそけぬへき

依賤被厭

さのみこそ心はかゝれむさし鑑さしもや君か我をさくへき

忘他事戀

内大臣家にて

郭公なくへきほとも忘れられて物思ふ時そまたて聞つる

或女のかきたえたるおとこの許へやらんとてこひし

かはよみてとらせ侍し二首

君ならて誰にかとはんしはしたに人を忘るゝ道を教よ

つらからぬ人をも人は忘るめり憂は何ゆへとこほるらん

有馬にしほゆあみにまかりたりしに人ゝあまた瀧水

驚夢といふ事を

旅ねする枕に落る瀧つせは夢にもいもをみせしとやさは

頼輔朝臣家哥合し侍しに忍戀

あやなしやせて人めを包むまにもとせし程の詠たにせず

依戀留城外

とりすかるこひのやつこにしたはれて立とまりぬる旅衣哉

經年戀

宇治僧正御房會

歎つゝ年そへにけるむへこそは戀を命と人のいひけれ

不知在所戀

哥林苑

いつこともしらせぬに社しられぬれ我を勿來の關にや有覽

戀の哥とてよめる

自ら逢にかへんとまつ命それさへいかにけなんとす覽

契後隱戀

哥林苑

帝木のふせやといひて今朝は又隠るゝに社そのはゝはたて

不慮絶戀

自ら暫しとたえを橋にして廳てふみたにみせしとやさは

不遁夜戀

公通卿會

三とせまで待つる戀のしるしなくあかしもはてぬ新枕かな

降信哥合し侍しに

餘所にみる人たに忍ふ袖の上を君しもうたゝ岩木成らん

被慰人戀

哥林苑

三年迄あはぬためしはなくや有と聞を暫しの玉のをにせん

辭後會戀

蓬坂を又はこえしといふに社もとの清水にぬれかへりぬれ

旅行戀

笹わくる袖とはいひつ旅衣露のひるまを何にかこたん

契經年戀

まてといひし其の言葉は枯はてゝ茂りにけりな軒の忍ふは

隔夜遇戀

誰にまた二夜とたにも笛竹のふしもつゝかぬ音をなかつ覽

立聞音戀

實國大納言會

なつかしき今一聲を聞やとてたゝすむ軒に小夜更にけり

後朝戀

同處哥合

明ぬ共かへらぬ物としらすへく我や例しに今朝はならまし

中ゝにあはてこし夜の袖たにもいつかは斯はひちて歸りし

戀老彌切

哥林苑

露の命のこりすくなく成ぬれはあふにも誰かかへんとす覽

年年會戀

同

月ことのたえまをこそは歎しか今はとしにもなりにける哉

度々延約日戀

けふといふもの葉にかゝりくる露の命ものふる限りそ

戀催道心

同

後の世のけふりをしらて是をさは戀にこかるゝ思ふ夢なき
隆親君哥合し侍しに

いけるにもあらぬ物ゆへなそやこは戀は死せぬ病成らん
人にかはりて

なく涙露とし置は眞葛はふあたの大野もせはくやあらまし
戀の哥あまた人々よみ侍しに

あふとみて醒める床のわりなきにうたゝ有物は夢に知にき
よそにのみ荻ふく風はわたらん獨ね覺の床はなすぎそ

或處哥合に人にかはりて
夢にたゝあはす成ぬるね覺にはかへす衣を恨みやはせぬ

從門歸戀といふ事を人にかはりて
あけよとて叩ぐ門かはかくとたに知れて社は立もかへらめ

月前戀

右大臣殿歌合

よしさらは君にも今夜我ゆへの涙もよほせ山のはの月
按察(公通)十首歌中夜戀といふ事を

誰とねていとひとすらむ鳥の音を獨そ我は待明しつる

後成卿十首哥中戀

夢しと夢をもいはしそれを社戀のなくさの玉のをにすれ

遇不逢戀

哥林苑

思ひさやうかりし夜半の鳥の音を待とにして明すへしとは

昔思出戀

同

侘はむかしなからに身にそひて我のみ年の老にける哉

詞和不會戀

同

玉つさをうれしゝとまきもてはみな偽の言の葉かさば

隔川戀

尾垣哥合

戀渡る中にしもなと名にもおはぬあふくま川の流れその劍
兵衛佐經正家哥合に戀の心を

あひもみはのひん命をやかてきは其一夜にはいかゝ戀へき
又おなし心を

うしや我よひくゝとのあらましを思出にして世を過しつゝ
日吉歌合

命をはあふにかへんとまつ物を猶いたつらに先立ねとや
住吉會

我戀は今をかきりと夕暮萩吹風の音つれて行
新吉

人にかはりて
うかりつる夢をちかへて頼む哉逢と見夜もまさしからねば

今夜さはうれしかりつる袖に又もとの涙を猶つゝめとや
當夜違約戀

晚風催戀

同

何とこは萩の夕風さてもあらて我戀をさへおとろかすらん

寄夢戀

同

逢と見る夢のさむるはかへるにて又其暮にゆかは社あらめ

寄雪戀

同

けぬか上に友待雪はまちつてあはて年ふる身をいかにせん

臨期違約戀

同

たのめをさし夜半と思ひてくれは鳥何にあやかかる心成らん
をのつから暫しつれなき君なるをしらて儚く戀やしぬへき

思ふにもよらぬ命をしはしとて哀つれなき君にや有らん
戀しぬときいはしとて是を猶いけるには又すへき物かは

路頭見戀

同

女郎花立るあたりはよきて行ん道行すりは袖ぬらしけり

關道歸戀

同

なをさりの心や君に先立て道をとをさぬ關と成けん

輒不通書戀

同

人傳にたえすもりこし水壺の跡さへなとや打もまかせぬ

契夜有障戀

ある處にて

今夜さへ猶いな船のいかにこは引くゐに棹のさはり勝なる

留書報言戀

同

鳥の跡を我はつゝむといふならは誰言の葉もふみな散しそ

老後戀

同

しほれぬる袂にそへていとしく老の波さへ包むとをしれ

旅宿に故郷を思ふといふ事

同

何となくおほつかなきは古処の妹か戀しくなるに有らん

寄秋花戀

同

つれもなき人にみせはや女郎花あたしの野邊に招けしきを

欣蒙芳言戀

同

をのつからしめちか原と頼めをかは露の命もそれにかけ劍

隔物談戀

同

立にける跡をもしらで物こしに契はてつと思ひける哉

不用誓言戀

同

ちか事もうき身はこりぬ我といへは神をも神と君か思はぬ

改名藏戀

同

こゝをさもあらぬ人そといふならは我も名を社かへて尋め

被妨親戀

同

かそいろはいかに恨て諫む共戀しなすとしていけるへき身を

秘知音戀

同

むつれくる人にはみせし戀衣立そふ老の波もはつかし

喚後又歸戀

相坂の關の名社に成ぬるはあやしやいかにふみやたかへん

遣車待戀

通成朝臣家會

まつ方の車の音は我門を過ぬまでこそうれしかりけれ

喚後歸戀

今夜さへいねとかへすは秋の田のかりに契しものはかさは

見書増戀

玉章は玉まく葛にあらねとも恨て露をいとこほるゝ

逢不會戀

かたらひしとやくやしき郭公日をへて雲のよそに成行

逢坂を越しは夢とみしかとも袖の清水はうつゝ成けり

人のこひしかは女にかはりて

今はたゝ人めはかりの言の葉をかきなたえそと思ふ計そ

歎短夜戀

哥林苑

あふとても命にかへぬ旅ならはせめても夏の夜をは恨みし

浅ましやまたむつもの程なるをいかに鳴ぬる鳥の音そこは

依戀赴遠路

はるゝと波路を分てこゆるきの急くと君はしらすや有劍

高砂の松としきかはいかばかり磯邊の浪のいそかれもせん

借他名遂戀

其人と名のるに君かとけぬれは其名の主そうしろめたなき

曉戀

曉のね覺の床のさむけきに身にそふ物はうらみなりけり

聞無實怨戀

哥林苑

君かけふなき名をたつとらむるは我になき名を立るゝ覺

成契久戀

新拾
あひ見ても忘るゝ程も成なまし有し契りのまも成せは

歎空疑戀

ちかともいなたてそめし新枕まことにかはす折もこそあれ

夜寒戀切

ひとりねの床はさこそはさひしきを猶身にしめと降霰哉

依戀忘衰老

姿をは戀のやつれにおほせつゝかくともつけて老はきに晁

違女札得戀

あらずとて返さまうきは横の戸をさゝて待んとかける玉章

立門空歸戀

明る迄たゞきしめせぬ水鶏をまはかなく人はとはぬ物かは

寄艸花戀

たゞはかれ萩の葉風よそれとたに玉ゆら心なくさみもせん

寒夜増戀

よひとともこぬはうけれと風さむみ曉に社身にはしみけれ

失中人戀

かこたれて立かくるゝかなか人いつかは聞し人のよ妻と

寄網代戀

あしる木の手にもかゝらぬ君によりひをへて物を思ふ比哉

隔物臥戀

かへしあれば越ても行しなそまかくよれば枕をのけて臥覽

引放逸戀

立なをりまちはかりつる睦とにねたくも袖を取ゆるへつる

爐邊女談

睦ものわかつてすさひのはいうらをよそけに妹か思ひ顔なる

契明夕戀

飛鳥川あすと逢瀬を契るにそ又よとむへき物と知ぬる

戀爲罪業

たひゝの空頼めにしならはすは今夜のあすも嬉からまし

戀催道心

君ゆへに落る涙はわたり川しつまんせにそ落もあふへき

隔三夜戀

味氣なしさいさこりたつる錦木を法の爲にとになひかへてん

責誓言戀

物いみの程社あらめ昨日さへみよとや君かかきやたゆへき

依月増戀

ちかをとをたゝ人をうらみぬ人まにも月には袖のぬれぬ物か

曉戀

おもへたゝ人を恨みぬ人たにも月には袖の濡ぬものかは

不語終隱戀

見ぬもうしみてもわりなし夢ゆへに物を思はぬ曉もかな

不知身程戀

聞はてん袖をはつせといひつるをねたくもさもと思ける哉

被厭下女戀

さしもなを厭ふなる覽芹つみし人たによには有とこそきけ

不知居處戀

いなしきのひなの住ひにたへし迎我を厭ふかうなひ乙女は

寄鹿戀

中ゝにとらふす野邊と聞ならは早思ひねの夢にみてまし

妻戀ること

はたくひもなき物をしかな思ひそ我もさそなく

厭戀思後世

くれなるの涙の色の戀衣けふ墨染に思ひかへしつ

延約日戀

たのめをきしその日をのふる度とにいかにつゝまる命成覽

被叱親戀

さそかしと親の諫めを思へともことはりなくもぬるゝ袖哉

煩戀歳暮

一とせをこひに暮してつゐにけふしほりはてつる我袂哉

不誤被怨戀

かへりては誰うらむへきとならん三とせもまたぬ新枕をは

有隣不遇戀

賴政朝臣會

はゝ木ゝと其中垣のみゆればや有なからかくあひみさる覽

送女歸戀

おろしをくいもか朝ての俵のまた小車にのりにける哉

迎不遂戀

重家卿哥合

ひくによる物なりなからあつさ弓なと思はずにふさぬ心は

約冬戀

冬來なはまた春ともやいひやらんさてもや命猶いけるへき

稱物忌戀

物いみと常はいへとも細々と人のいふをはなとや咎めぬ

失返事戀

吾妹子かうらにかけりしあしてをは難波のひきかすめけん

〔あしの服雙〕

戀延齡謀

たのむるにのふる命はなきなかつ涙や玉のをと成らん

初通書戀

水莖のあとがきなかしけふそやるあふくま川と祝そめつつ

見後手戀

ねすなけとみもかへらぬはいとゝしく心にくさの増る君哉

嫌中人戀

もゝはちにかへても云んけにも君中人からのつらさとならは

空疑戀

あやまたぬたひさへいもか疑へはよしや實をしらぬ成覺

嫌會所戀

難波女かこやならなくにいかにこはこもかしこもあしくと云

待惡戀

たのめぬに床うちはらふ折もあれはまして今夜は思ふ計そ

乍隨不遇戀

しほれ葦の浪にしたかふ程よりもなとや下ねの心つよさは

中人違約戀

いはせ川中のとたえの丸はしは道よりふみもかへすなり覺

欲絶戀

絶なんと思ひたつより中ゝにうかりし事も忘れそする

寄石戀

苦のむす岩ほと成し人たにももの葉にこそ打はとけゝれ

寄催馬樂戀

宇治僧正房

今日にてそ淺き心はくまれぬるいまはたのまし飛鳥井の水

契久戀

まてといひて年や經ぬ覽月影をかくやはさへし軒の忍ふは

被嫉妬妻戀

それゆへと思はぬ旅の詠をもいかにやかくはさのみ疑ふ

立田山夜半にこえしを歎ける人たに世には有とこそきけ

戀遠人

前大僧正房

はるゝと山また山を思ひやる心さへこそくるしかりけれ

憑不來

頼めつゝこさりし夜半はいかゝせしとたにも君か問社有め

隔遠路戀

陸奥のあいつの里に君はありと思ふはかりそ頼成ける

隔山戀

さゝ浪やみつの濱邊に妹しあれば春とやはわくしかの山越

人々戀の哥よみ侍しに

夢にあはゝ覺しと兼て思しにそれも叶はぬ身をいかにせん
偽にたのめしによりいける命猶それもかな千世も經ぬへき
今はさはやりし玉章かへさなん手にやふれ劔形見にもせん
關にすむ夕つけ島に我ならん鳴てもつゐに相坂におり
をのつから打まるとめは打おこしいかにせたむる胸の思を
見る人もしるき思ひをしのふれはうら山しきはほたる成覺

玉とゐし小笹か原の白露を袖のうへとは思はざりしを
うたかひし枕やいかゝおもふらん床ひつはかりなれる我戀
心を我かたきとは思ひぬる戀のやまひも人しつけねは

いさやさはみたれあはんと言しかと又何事に忍ふもちすり
大空のなからましかは憂人の心を誰になけきかけまし
こりはてぬ今はまたしと思へとも荻ふく風にはかられに覺

我床は涙のよと成はてぬ是こそ戀のすみか成けれ
さり共とあらましとをせし程にそれにてつゐによを盡つる

夢をたに現になさんと思ひしに有しうつゝのなとや夢なる

後朝心ある所にて

逢にさは身をやかへつる朝露のをきていくへく心地社せね
我ならぬあふ坂山の葛の葉もかへるとてこそ露もこほるれ
今そしるよひのうつゝは明て後かへる朝の夢にそ有ける

忍戀

忍ふれは人社あやめとはさらめなとや君さへしらす顔なる
しるからぬ景色なりせは何しかはつねはかへにも打向へき
中々に君はあはれをかけすとも人にしられて戀もしなはや
かはらやの下やく烟下にのみさのみはいかゝ思ひこむへき
たえやらぬ涙を玉の緒にはしていつきるへしとみえぬ戀哉

依賤被厭戀

あしからし物をと我はえをいはぬ難波の蜃となれる身なれば

已上二百八十三首。

林葉和歌集第六

雜

祝

右大臣家百首 内五首

君か代は濱のまさこの上に又うちをく涙の数もこえなて

春日山神のちかひにかゝりつゝ恵をまつとみゆる藤波

神風や玉くしのはをとるかさしうちとの宮に君をこそ祈れ

君をわか心のまゝに祝をくその言の葉もかきりこそあれ

三笠山木高き藤のうら葉にはわきて春日も先やさすらん

太皇太后白川にはしめてわたりあさせたまひて左大

將^将等^等なと参りて和歌會あらんとせしに。ちかちか

と参とありしかは讀て侍しかとも左大將の京の家に

火ちかしとてにはかにとまりにき

月照松

幾千世か君はみるへき有明の月に花さく松のこすゑを

おなし心を

月影も松のみとりに色はへて千世まですまん氣色なる哉

よゝをへて木高き宿の松なればかゝれる月の影をすゝしき

風生竹

千世ふへき宿とはかねて知ぬらん竹の葉風もそよと答ふる

此君の千世のみかけのあたりこそ風のつてまで涼かりけれ

風さやくまかきの竹のふしをにそゝや我君萬つ世までと

正月三日人のもとにまかりたりしかは中門に松をた

てゝいははれたりしに歌よめと侍しかは

春にあへる此門松を分きつゝ我も千世へんうちに入ぬる

公通卿十首哥よまれ侍しに竹爲友と云心を

此君のなからましかはいつとなく誰と千歳の數をかそへん

百首哥讀侍しに祝の心を

いつとなく君に齡をゆつりはの猶とことはにさかゆへら也

大納言^會家十五首歌中に祝

天てらす月日にめくむ位山としに木たかく成をますへき

經盛卿家哥合に祝を

鶴龜もよはひつきなん後は猶君かみかけにかくろへてすめ

大納言^會家哥合に

萬代と君をよはへは春日山やま彦さへそ聲あはすなり

俊成卿十首哥中に祝の心を

君か代にしらたま椿幾たひか猶さかゆかん杖にきるへき

清水寺地主權現のおまへにて人ゝいはひの心をよみ

しに

音羽山きよき流れの瀧の糸は千世を経つゝも君をむすはん

中院入道右大臣住吉に参りて哥よまれ侍しに

君か經ん千とせのかすによる涙を松にかけてや神も知らん

綠竹久友

葉かへせぬ哥のはやしに枝かはす此君たちや千世の我とも

鶴週年友

年をへてなれそふ田鶴の數みれば我千世迄もたのもしき哉

月契多歳

しらはやな幾よろつ代か三笠山君と有明の月は住へき

賀茂神主重保かむぬしに成てはしめて正月に哥合し

子の日して千歳の數を水かきの久しかるへき程をこそまて
君かひく千日の松をことしより今幾千世も神のまに〜

すみよしにまいりて人々祝の哥あまた讀侍しに三首
君か代の數とや神も定むらんしき波かくる住吉の松

君か經んよはひをかねて幾千世と涙のかすとの住吉の松
君かへん千世のかさしかいつとなく涙もてゆへる住吉の松

又祝のこゝろをよめる

君か經んよはひを千々に分て見は其ひとつこそ萬代ならめ

皇后宮亮季經家にて人々祝の哥よみ侍しに
春の日の光に匂ふ藤なれば末葉までこそ咲きかへけれ

法性寺殿三十五首の月の哥よませ給し中に

曇りなき影をかはして萬代に君そ三笠の山のはの月

ある人一條わたりに春日をあたらしく祝ひまいらせ
て其御前にて歌なとよむものはへりしに

めつらしく若葉さしそふ藤花いとそ北へさかへましける

別

百首哥よみ侍しにわかれの心を

新古
かりそめの別とけふを思へともいさやまもの旅にも有らん

登蓮法師つくしの方へ罷り侍りけるに哥林苑の人々

餞し侍しによめる

新古
遙々と君かわくへき白浪をあやしやとまる袖にかけつる

又そなたへまかりし人を餞すとて

遙々と文字の關路を隔てすは文見てたにもなくさめてまし

敦頼あつまのかたへまかり侍しに哥林苑人々餞し侍しに

新拾
是をみよ戀しかるへき行末を思ふにたにもぬるゝ袂よ

又そなたへまかりしを餞し侍しに

歸こんその日はつけよかねてより行あふ坂の關に待みん

素覺入道津の國へ下り侍しに哥林苑人々餞し侍しに

住吉のかたと聞よりいとしくまづに久しき物や思はん

賀茂神主重保こしのかたへまかり侍しを又哥林苑人

々餞し侍しかは

歸るへき道とはきくを我涙いかにしるらんうつせみの世を

あかつき物へまかり侍し人をわかれおしみて

しゐて猶行なん君と聞からにかつみなからも戀しきやなそ

式部少輔範季みちのくになりてくたり侍しに聲の範

光又おなしく相具してくたり侍しに送り遣し侍し

心をは松にかけつゝ武隈の二木の千世をとみに祝はん

またあつまのかたへまかり侍しに人のもとへよみて

送り侍し三首

待うへき人はなにかはかり初の別れに袖をかくはぬらさん

東路のかたときくとも我はいさ心つくしのわかれとぞ思ふ

都鳥見えん渡りは思ひ出よ有やなしやの情はかりを

又あひしりて侍る人のとほき處へまかり侍りしかは

我心そへてしやれば旅ころも立わかるともおほえさりけり

羈旅

百首哥中に旅のこゝろを

宮古出てひとり明石の旅のうらにありす顔なる友千鳥哉

又後百首中に

旅ねする我ならなくに逢坂の關山鳥もひとり鳴也

遠き所へまかり侍るとて野宿して心におほえ侍し

都社思へは旅ねつゐに我これはふすへき野へにはあらずや

按察大納言（公）巡わたのへにてしほゆあみられ侍し時
頼政朝臣にぐして鹽ゆあみに下りあひて侍しかはき

ゝつてよはれ侍しかはまかりてよめる

君ますと兼て知せはいとゝしくつなてを急旅にやあらまし

海路晩望といふ事を降房朝臣のもとにて

まか千鳥もろてに急けかけてこく江島の沖に夕日さかりぬ

旅宿月といふ事を 或處にて

夜をこめて我は立ぬる旅の庵に猶有明の月をやとれる

すみよしに鹽ゆあみて侍し時海上晩望といふ事を

さても世をふるかとみるそあはれなる霞にまかふ沖津島守

はるゝと沖こく船のあとみればむかしの人の心しられぬ

右大臣殿百首内 旅五首

有馬山たかはかりしき夜もすからふしも定めぬ草枕かな

かへりみし都の山もへたてきぬたゝ白雲にむかふはかりそ

みやこのみ戀しき旅のうきねにはうらうへかくる袖の白浪

宮古人おなし月をはなかわともかくしも袖はぬれすや有覽

こしかたも又行さきもいかにこは雲と波とに成はてぬらむ

已上五十一首。

簡内

左點百五十八首。

右點七十五首。

左點四百三十七首。

但左點は當座人ゝ并後日傳聞人ゝ聊有二感氣二哥等也。

右點は撰集并所々打聞等被撰入一歌等也。
無點は不レ及三沙汰一謬歌。但依レ多レ召所レ令三注進一也。

治承貳年八月廿三日

右林葉集者。俊惠法師俊賴朝臣子息。歌也。此寫本者。將軍

家當德院殿。以三御物御本。所令三書寫之本也。以三件本

書寫之按合畢。

右林葉集上下二卷以所藏舊本書寫以一本按合畢

群書類從卷第二百六十九

和歌部百廿四 家集四十二

寂然法師集

春

谷の水峯のあらしもゝろともに春立けふといかてしるらむ
 ちればおしにほひはまさる梅の花いかにかすへき春の山風
 春雨も日をへてふりぬみよしのゝ吉野の山に花やさくらん
 よしの山花咲ぬればあぢきなくこゝろにかゝる峯のしら雲
 山さくら咲るたかねのしら雲はいづれか花の梢なるらむ
 千羅中
 この春ぞ思ひはかへす櫻はなむなしき色にそめしこゝろを
 本のもととは花故にやはすみそめしちれば心のあくかれぬ
 花盛いさ木のもとに暮してむさかすはなにのみにか成へき
 おしめとも風にみたれて散はなをむすひとめよ青柳の糸
 むら鳥のわかれやおしき花のちる梢にきつゝうくひすの鳴
 山櫻ちる木のもととはたちうくて休むとなしに日を暮しつづ
 谷河の春のなかれをむすふにはたよりうれしき花を社くめ
 あさみとり霞にきゆる鴈かれのこゝろほそきは春の明ほの
 つくゝと春の日くらし降雨は月みる秋のこゝろこそすれ
 小山田の種まくよりそ哀なるいなはのかせをかねて思へは
 春雨のまたれぬ色もかはらねはちしほにみゆる山ふきの花

夏

をそ櫻また散やらぬ花やあると外山ふみ分とふ人もかな
 入ぬるかおほつかなしや山のはに霞かゝれる春の夜の月
 このもとは花よりほかの友もなし誰をみをきて春の行らん
 行春のかたみはかりに残しける花のかけにてけふは暮さん
 をしみつる花にかへたる時鳥鳴音を待もくるしかりけり
 すむ人の心そみゆるうの花をひとへにかこふをのゝ山さと
 ゆふかけて片岡になく時鳥かものみあれになのりすらしも
 卯花にほとゝきす鳴かた山のかきねにいかてみをかくし剣
 あやめ草さ月もしらぬ山里の軒のしのふをよそへてそみる
 たつぬとて宿にとゝまるよひもなし山時鳥いもやいさめん
 たつねつゝ生田の杜のほとゝきす蘆のしのやの忍ひねに鳴
 あぢきなくまたしと思へと郭公あかね名残もときは成けり
 まつといひあかすと歎くとにかくになにのむくひそ山時鳥
 きゝもあへす涙こほれぬほとゝきす老のね覺の曉のこゑ
 いくかへり聞てかあくところみようちはへてなく山時鳥
 こゝろ社聲にをたらぬほとゝきす更行空にひとりやすらふ
 松蔭の岩ねにしける苔むしろなつもかよはぬすみかなり覺
 ひくらしのなく片山のならのはにかせうちそよぐ夏の夕暮

秋

秋はきぬとしも半はにすぎぬとや萩吹風のおとろかすらむ
 あさちほら主なき宿の萩のはにたれにか風の秋をつくらん
 秋風にうつらなく野を來てみればうへにし萩のまかき也覺
 あるしなきまかきはあれてをのれのみ秋を忘れぬ女郎花哉
 みにことも誰にかいはむ小萩咲籬をたうにすくさすもかな
 かねてより心はすみぬ秋のよの月まつみねのこからしの風
 里はあれて月はすみます秋の夜を哀といふもなへてなる哉
 過ぎにし昔をさらにさそひきて心にやとす秋のよの月
 月をみて哀しむやとことにみを分て社とはまほしけれ
 里わかぬものにしあれば秋のよの月の心をはちつゝそみる
 忘れつゝひるかとおもふ秋のよの月とは虫の聲をしらす
 月影を袖に移してみるのみやもの思ふ人のとりどころなる
 思ふことなくてなかつめは中ゝに月の哀やなへてならまし
 心すむちゝの哀をあつめてや秋の月をはみかきいつらん
 此世には心とゝめし秋の月すこしはやつすくもゝあらなむ
 露ふるき蓬かもとをかきわけて月はみるやととふ人もなし
 いかならん雲なり共おくれしと月のみ獨り契りおきける
 蓬生に成行やとはきりゝす鳴ねを床のものゝと社きけ
 ちりつもる紅葉分きてよそにみは哀なるへき庭のおも哉
 はかなくて暮行秋のかなしさをおもひしらす鹿のこゑ哉

冬

をとせぬに冬の景色のしるき哉こほりにけりな谷のした水
 月は猶おなし空をもなめけり野へのけしきそ秋は淋しき
 かきくらし物を悲しき神無月なかむる空もうち時雨つゝ

月止

山めぐり染をく色とみし程にはては木の葉も時雨とそふる
 霜枯のよもきか庭のさひしきに菊のみ秋の名残なるかな
 もみち葉のちるを歎し梢より月のもるこそうれしかりけれ
 色めきし花のかつらに女郎花いたゝく霜のあはれなるかな
 花にのみ心はあれやきゝすなく枯野のすゝきみる人もなし
 みよしのゝ山へに雪の積るにはまつふる里を冬こもりける
 たつねきてみち分わふる人もあらし幾重もつもれ庭の白雪
 花さかぬ梢はみえすおほかたは雪のうちをそ春といふへき
 おきつかせ身にやしむらんから衣うきゝの浦に千鳥鳴なり
 霜近る蘆のしのやにね覺してひまやしらむと待ぬよそなき
 行年をゝくりむかふと云程にさためなきよのはてを悲しき

戀

ますかゝみみし儚の身にそひて心は君にうつりぬるかな
 袖にみつなみたの玉をぬきたためて戀きかすを付にみせはや
 戀さのつらさにさくる物ならは今までかくは歎かざらまし
 月詠 君故におつる涙のおしければかたしく袖をほしそわひぬる
 うたゝねの夢にも人のつらければ驚く程にぬるゝ袖かな
 月詠 かく計人の心をくたきけむむくひおもふもうらめしのみや
 うらみかね思へはつらし世中に戀といふ事を誰はしめけん
 つらきをは思ふあまりに忘れぬ戀き事いなくさめもかな
 明ぬとて常は厭ひし鳥の音のひとりしぬればまたれ顔なる
 かへるさの萩にかゝる涙こそうらみしよりも色増りけれ

雜

上西門院の女房法勝寺へ花みにまかると聞て京へ出たりけるついでにしたしき女房のもとへつかはしける

花見にときくに心のたくふ哉すかたは苔にやつれはつれと大原にて澄憲僧都の説經しけるをきゝて申つかはしける

きく人のころもに玉もかゝるまで涙こほれし法のはかな如法經書てうつみまいらすとて人ゝよみけるに

朝日待かすに入身そたのもしきいつへきとは遙なれとも月前遠情といふことを

天のはらへたてぬ月をしるへにてもろこしまてもゆく心哉

おもはぬふなてしてゆく人に

雲ゐにてむかしなかめし月のみや旅の空にもはなれさる覽

西住法師みまかりぬと聞て西行法師かもとへつかはしける

千哀傷

みたれすとおはりきく社嬉れきても別はなくさまねとも

骨をひろひて高野へ人のゝほりてかへりぬと聞ていひつかはしし（露響）

入さにはひろふかたみものこり覺かへぬ山路のともは涙かはらからなる尼のすみかにまかりたりけるに草ふかくなりて哀なりければかへりてのちひつかはしける

滋きのとされる住家をかき分てしかとはむとは思はさりしをイ覺

ある人ゝ法文百首をみて和せられたりければ

濱千鳥はかなきあとを止めすは涙のかゝるたまもみましや

住よしにまうて、松にかきつけゝる

松風の音はいつことわかねともなを住よしの秋をことなる舍利のこゝろを人ゝよみしに

これその涙にくれしけふより分ちいてたる山のはの月涅槃會の日人ゝそのこゝろよみけるに

墨染の袂そけふは露ふかきつるのはやしのあとのみなしこ天王寺へまいるとてよめりける

風雅

心有てみるとしもなきなには江の春の景色は惜くもある哉

諸行無常のこゝろを

月詠

みにかふるひとも有けることのはに心かゝらぬすゑの露哉

常在靈鷲山のこゝろを

そはか

ときはなるつるのはやしのあやなくも薪つきぬと思ける哉

仁和寺の法印の西山にこもりたまへるに九月十三夜

に月を詠しける

なみち分むなしき舟に見し月の名残にこよひ袖ぬらしつゝ

迷懷のこゝろを

いつくにか我身すまゝし斯計うきよに山のおくなかりせは

無常のこゝろを

朝かほの花に宿れる露のよははかなきうへに猶そはかなき

みし人もかくれのみ行あた雲にいつたくふへき月日成らん

人のよみたる歌やあるとてこひたりけるに

出しより家の風をもわすられて散らす計のものを葉をなき

乍入撰集漏三家集二歌

世中をつねなきものと思はすはいかてか花の散にたへまし

陸奥同のしのふもちすり忍ひつゝ色には出しみたれもそする

火盛久不燃といへるこゝろをよめる

烟同にもしはしたなひけとりへ山たち別にしかたみともみん

悲鳴咽痛戀本群と云るこゝろをよめる

新勅 たちはなれ小萩か原に鳴鹿はみちふみまよふともや戀しき

十如是のこゝろをよみ侍ける

本末究竟等

同 をさゝ原有かなきかの一ふしにもとも末はもかはらさり晁

たいしらす

同 つくくゝとむなしき空をなかめつゝ入相の鐘にぬるゝ袖哉

八月十五夜によみ侍ける

續後撰 なにめてゝ秋のなかはゝこよひそと思ひかほなる月の影哉

十戒うたよみ侍りけるに

續後拾 なかきよをいかに哀とてらすらんむなしき空にすめる月影

十戒歌よみ侍けるに不自讃毀他

續後撰 もかみ河人をくたせはいな舟のかへりて沈むものと社きけ

勸發品受持佛語作禮而去

新勅 ちりくゝに鷺の高嶺をおりそ行みのりの花を家つとにして

弘決秋九月從慈始入天臺といふ心を

新後撰 長月の有明の月ともろともに入りけん峯を思ひこそやれ

寂然大原にすみ侍りけるに高野より山深みといふこ

とをかみにおきて十首歌よみてつかはしける中に

玉璫 山深みなるゝかせきのけちかさに世に遠さかる程ぞ知るゝ

西行

此返事に大原の里といふことを下の句におきて五十首をよみてつかはすとて

ひとりすむおほろの清水友とては月をそやとす大原の里

父なくなりて後日數も残りすくなくなりて侍りける

風雅 君にわかおくるゝ道の悲しきはすくる月日も早きなりけり

秋のうた

風雅 木からしに月すむ峯の鹿の音をわれのみきくは惜くも有哉

さぬきよりみやこへのほるとて道より崇徳院にたてまつりける

慰にみつゝもゆかむ君かすむそなたの山を雲なへたてそ

崇徳院松山におはしましけるにまいりて日かすへて

都へかへりなむとしけるあかつきよめる

同 歸る共後にはまたと頼むへきこのみのうたてあたにも有哉

おもふことありける比

同 つくくゝとことそともなき詠して今宵の月もかたふきに晁

もろともに世をそむきなんとちきりける人にこゝろ

ならすなからふるよしをいひて

同 はかなさはけふともしらぬ世中にさり共のみはいつを待覽

かへし

同 思ひ入心とならはいたつらにあたしこのよをすくさゝら南

述懷のこゝろをよめる

同 何事をまつとにてかすくさまし浮世をそむく道なかりせば

題しらす

相空法師身まかりにけるを西行法師とふらひ侍らさ
りければ

猶後撰
とへかしなわかれの庭に露ふかき蓬かものこゝろ細さを

返し

西行

同
よそに思別ならねは誰をかはみより外にはとふへかりける

寂蓮法師集

五首 左大臣家會春

色はみな雪の朝の梅かえに春のものとて鶯のなく

夏

いかにかくみるも聞もと卯花にほととぎす鳴玉河のさと

秋

小鹿なく夜半の寐覺を思ひ侘なかむれば又あり明の月

冬

ふる雪に軒はかた敷深山木のをくる梢にあらし吹なり

戀

いまは我うきを限となかめてもこゝろの外はなれし面かけ

殘菊 北野會 公景勸之

秋の夜の有明の空にみし月の影さへ殘るしら菊の花

時雨

神無月はかなく過る夜の雨をいかにもてなす椀の板やそ

嵯峨に住ける比九月はかりあさましき程に世にしら

ぬかせ吹てよもきの庵たのむかけなく成にけるをみ

て殿法印へ申ける

我庵は都のいぬるすみ侘ぬうき世のさかとおもひなせとも

返し

道を得て世を宇治山といひし人の跡に跡そふ君こそはみれ

九月はかりにはらかなる僧の身まかりて侍り（け晚

懸る人のもとへ十月になりてつかはしける

とへかしな秋のわかれもむさし野の草の緑りを知人そしる

二條院宮白川にはしめて住給ひけるころ祝のこゝろ
をさうしに書付よとおほせられければ

水上の程に遠き白河のなかれの末をおもひこそやれ

隆房卿別當の時都の政みなむかしにあらためられけ

るとき七條の市のたちけるを追せければ上の三條四

條のあせたりけるにもとのことくにむらかりわたり

ければよみて遣しける

いにしへの跡をそたのむかつまたの池にも鳥の歸り棲よに
返し

いにしへのあとに歸らはかつまたのいけらん限物は思はし

出雲の大神に下向して侍りけるころ兼宗申遣ける

かくばかりふかき思ひをしるへにて八雲のそこに尋入ぬる
かへし

きく人も八雲のそこはしる物を尋ぬる道をまよふ成ける

左大臣殿の御會四季戀

なかめつるけふは昔に成ぬとも軒端の梅は我を忘るな

春雨はふるともなくて青柳の糸につらぬく玉を數そふ

權別當 簾多當々夕落花

かせ吹は軒の木間をつたひきて花もふる舞さゝかにの糸

内大臣殿座主御十首の歌合あるへしとて薄暮卯花

卯花のかきね計は暮やらて草の戸さゝぬ玉河のさと

曉更盧橘

夜をのこすね覺の床もくちぬへし花橘の昔かたりに

遠山郭公

ほのかにも聲をかはらぬ時鳥花は雲かとみえしおのへに

風前夏草

秋の色ものへの緑にこもるらん結びなはてそしのゝ小薄

蟬聲夏深

秋風もかよふはかりの梢より松をはらふや蟬のもろこゑ

螢火秋近

いまはたゞ一夜計や夏むしのもえ行末は秋かせの空

後白河院かくれさせ給ひて三四年の後五月御供花の

時六條殿にて池水久隆

昔よりたえぬなかれをしら河のせきいれし末も思ひ社やれ
郭公述懷をます

みな人の涙もよほすほとゝきすふるき御幸の跡よりやこし

秋戀在野外

宮城野を霧のたえまにみしよりも残る色なき秋のおもかけ

被妨客人戀

かち人の濡れぬ例もさかつきの底にかくへきゑに社有けれ

閑居聞虫

しけき野に荒宿といひなからあまりなれたる虫のこゑ哉

旅宿鹿

秋の野をね山のすそに分なして袖にかたしく佐保鹿のこゑ

紅葉淺

とやまなる松の緑にはゝそ原みえ分程に色付にけり

山路霧

こゝろせく杉の庵の名残かなゆくゑは今朝の霧にまかせて
を^を1

擣衣夜深

秋といへとふかき恨は衣うつ〔下關〕

民部卿哥合山花

たつね入山下かせのかほりきて花に成ゆくみねのしら雲

初郭公 同會
新編古れし集
あくかるゝ人の心もほとゝきす里なれそむる夜半の一こゑ

深雪

我もまち人をもとはむ道そなき雪の朝のをのゝ山さと

夜思水鳥

谷ふかき夜半のうきねや松かせのほのかに埋むをしの一聲

深夜千鳥

すまの浦のあまのいさりひ數きえて歸る浪路に千鳥なく也

故郷初雪

つま木こる跡も昔に成ぬとやよし野の宮の今朝の初雪

鳥羽殿御遊和歌社にて建仁元年四月

翁さひ人ないとし誰もみなとはにあひみん千世の始を

瑩座主報恩講

夏むしのよそに成ゆく思ひまてうき身にやとす袖の露かな

照射

消ぬとやともしを鹿の思らんはやまかすその木葉かくれを

泊

たれか又磯の庵に宿からむ漕よる舟の便ならては

末の秋あつまの道にて手越はつくらと云所を

仁和寺教王院にて梅花久匂といへる心を

あたりまで三室の山はのとかにて松かせにほふ宿の梅かえ

東の方に侍りけるころ十月計閑居虫

よそに思ふ人めのみかは虫の音もかれのゝ末の庵なりけり

海邊冬月

清見かたかへりし秋はとゝまらて月は關路に有明の空

繪島を見にまかりて

名に高き繪島の磯をけふみれば跡もとゝめす浪そかくなる

旅宿虫

蛭まちかき都をふるさとのかへに聞なすね覺なりせは

宇治山喜撰跡なといふ所にて人ゝ哥よみける秋の事

也

あらし吹むかしの庵跡たえて月のみそすむ宇治の山本

東のかたにおなし旅なる人のつまなる女の身まかり

にけるをきゝてなけきければつかはしける

ことゝはて思ひしよりは都鳥聞てくやしき音をや鳴らん

かへし

都鳥聞てくやしき夢の中におとろかすにそねはなかれける

羈中時雨

神無月たひねの空をなかわれは袖より外もうちしほれつゝ

故郷雪

前大納言殿御會

山家雪

住わひぬ我たに人を尋ねはやと山の末の雪のかよひ路

雪中遠望

たかりの軒はやけぬといとふ簷雲にあまきる雪の梢を

家隆悦時ひさしく申さてつかはしける

うれしさも袖につゝまて過にけり苔の衣をいむとせしまに

かへし

嬉しさをいみける苔の袖にしもつゝむといはぬ恨ををせし

彼よりそへてつかはしたりける哥

色ふかくうれしからぬは君に猶とはれぬあけの衣成けり
返し

嬉しさをみかたの海の浪なれば靜かにぞ思ふあけのそほ船

水鳥 兼宗の哥會

嵐ふくひらの湊にゐるかもはうきねなからも浦つたひけり

網代 同

風さゆるあしろのひをはよる浪の下より結ふ氷成けり

定家少將に成たりけるにことさら三日過てよるこひ

申へきよし思ひけるほとに雪の朝申つかはしたりけ

る定家卿

三笠山ふみゝし日より待しかと今朝の雪さへまた跡もなし

かへし

君ならて跡をはつけし三笠山はや雪かゝれしゐか梢に

又これよりつかはしける

神に社つゝみやすへき嬉さを聞よりやかて身にそしみける

立秋 左大將御會當々

おほかたの秋くるよひや是ならん色なき露も袖に置けり

同家十三首内 泊瀬花

けふも又三輪の杉村行くらし花に分入小泊瀬のやま

宮城野

宮城野の小萩が露を分行は色こそかはれしのふもちすり

須磨園

月ならてすまの關守友そなきしはしな過る海士の釣舟

深草里

秋の色のはれまてこそおもひしを霜かれわたる深草の里

清見關

みやこ思ふ心のせきは清見かた浪まにつたふ石の細みち

野草秋近 式部卿會當々

秋の色に分なす程をかそふればけふばかり社萩か花すり

藤三位季經ふるき今の歌よみの和歌草又けさうふみ

を取あつめてほくしき紙にして結縁經かき供養しけ

るに普門品多於姪欲等の心を

思あまる筆のすさひを書かへて法のしるへと成そうれしき

納涼添述懷

いにしへの野中のし水くむ人のこゝろしらるゝ夕すゝみ哉

水邊惜曉月

有明の月をやとして山の井のあたりは秋も立うかり覺

曉聞郭公 鳥羽院にて五月十五日

ほとゝきす有明の月の入方に山のは出る夜半の一こゑ

松風暮涼

さほ鹿や猶秋まてとしのふらん夕は今も松に吹かせ

遇不逢戀 影供哥合

里はあれぬむなしき床のあたり迄身はならはしの秋風を吹

已上々

季經卿三位して侍けるを久悦も中さて程へてつかは

しける

ふるき跡はさらにもとはす位山昔にこえむおりを待まに

かへし

老か世にかまへてのほる位山むかしの跡にいかゝこゆへき

中將公衡三位せられて侍けるにつかはしける

君かため春を聞こそうれしけれ心よはきは花にのみかは

返し

はな故の春まで君かおもひけんこゝろをしるも哀ならずや
文治六年三月十七日殿法印もとより

朝夕におもひのみやるみつかきの久しくとはぬもろ心かな
かへし

君はよしひさしく思へ水かきのむかしとならむ身の行衛迄
重保かために一品經歌勸ける其ころ所勞ありてける
人にかはりて藥王品

夏虫の身をともしける光こそやみにまよはぬしるへ成けれ

院御會 山家五月雨

ぬれてほす菊の露たにある物を幾千世かふる五月雨のそら

雨中萩

しつかなる音こそ風にかはるなれ軒端の萩に雨そゝくよは

舍利報恩講 雪中閑法

鷺の山名残を跡のしるへにて雪ふみ分る法には人

範玄法印奈良の別當に成て侍ける春よみてつかはし

ける

今年よりならの都の八重櫻をのか物とも君そみるへき

夏草籠水

風吹てなひくにしるしさゆり葉の下よりかよふ庭のやり水

白河の花ちりかたに人々まかりければ風あらく吹て

名残なきまで花の散ければ

たつねつる人は家路も忘られて花のみけふはねにかへる哉

師光入道のもとにて聞談與人戀といふ事を人々よみ

ける

ひとりねのあたりに聲はかよひきて契はよその枕也けり

歸鴈

又もこは待へき身こそ歸る鴈秋までやはと打なかめつゝ

海邊霞

蘆の葉もまたうらわかき津の國のこやの隔はかすみ成けり

ひえの山に道命阿闍梨房今にあり罷りてみるに處の

有様まことにこゝろほそかりければかき付ける

ことの葉に心の色はくちすしてむなしき跡は峯のしら雲

座主の御房報恩講

ひえの山大乘院景氣重山は枕の下湖は麓なりけり

月きよみ涙の千里をかたしきて枕のそこは有明の空

同

故郷に一むら薄うへてたになれしこゝろを野邊の夕暮

殿法印九月計山へ登りて道よりの哀共書つゝけてつ

かはしたりける十首歌和すへきよしありければ

おもひしりて思ひをこする人もかなみ山の秋にかへる心を

返し

心こそおよはぬ山のおくなれと秋のあはれはかへりつく迄

本

鈴虫のこゑも山へに聞ゆ也いかに成へき我身なるらん

返し

鈴虫もよにふる道をいとへはや野へをはすてゝ山に鳴らん

本

大嶽のみね吹かせに霧はれてかゝみの山に月そくもらぬ

かへし

山のはも又ならひなき大たけにさこそは月の隈なかるらめ

本

をのつから笹の野へをかき分てしか住宿をとふ人もかな
かへし

嵐山この葉ふり敷麗よりしかすむ宿を思ひこそやれ

本

きく袖の露のふかさも有物をね山のすそのさをしかのこゑ
と拾
をしか鳴らん拾

かへし

をししか鳴おなしね山のすそなれば聞わく袖を露も置そふ
と拾玉

本

もる月はねやの板間に影ふけて我身の秋を思ひあかしつ

かへし

詠めつゝたのめし月も影ふけぬ我世の秋はいまいくよりも

本

鹿のねをおくるなからの山かせを稲葉にきくや志賀の里人

かへし

しかの音をいなはの風につたへきて世を恨たる志賀の里人

本

初時雨人もきてみぬ山かけに夜のにしきををりそめてける

かへし

君かすむ宿の梢は月かけのくまなきよるの錦なるらむ

本

かきくもり山めぐりするむら時雨ものゝ哀をそめて過也

かへし

かきくらす物の哀の山めぐりしくれをそむるこゝろ成けり

本

法の水淺く成行するの世をおもへはかなしひえの山寺

かへし

法の水ふかきなかれも絶ぬへしせき入て山の陰に住すは
東路を越くる春の跡なれやけさあ坂の雪のむら消

花はみな散はてぬとも梅枝のふるさとゝはむ驚もかな

ときは木のかたなる谷の岩つゝしいつこよりさす日影成覽

春の日の長閑にかすむ山里に物あはれなるいかるかのこゑ

御所先度百首

しら雲のかさなるみねにたつねつる春は都のこすゑ成けり
はな集

百首哥めしける中に

志賀の浦やけふ立かへる春風にこほらぬなみも遠さかる也
新古今

軒ちかき花立はなのほひきてねぬよの夢はむかし也覺

夕立のはれ行空の雲間より思へあへける夜半の月哉

よそにきく峯の嵐も萩の葉に里なれそむる夕暮の空

うつし植し小萩かもとも秋の野に成果ぬとは思はさりしを
新古今

野分せし小野の草ふし荒はてゝみ山にふかきさをしかの聲
新古今

のへはみな思ひしよりもうら枯て雲まにをそき有明の月
新古今

雪ふれば道もたえなん山里をしくるゝまてはとふ人もかな
新古今

あと絶る山路の雪を哀ともこゝろはかりそ我をとひける

みな人の心も涼しいはし水ひかりを君か袖にまかせて

袖の上は千重にも露やかさぬらんしのたのもりの秋の下草

山のはを軒の梢に住なしてまより出る晨明の月

今は只雲の八重たつおくにてもあたりをとほむ山人もかな

すむ人のかよはぬ程は跡もなし庭よりおくの旅のほそ道

住わひて猶山ふかくあとたえは誰をかこゝに松たてるかと
浦ちかき山路の末に日は暮てふもとの庵に海士のものほ火

尋つる木の下風に雪ちりて花ゆへ春も忘れにけり

御室五十首

かへる雁雲の浪路に數消て友をはなるゝあまの釣舟

夏の日はなるゝをいとふ衣手の身になつかしき秋の初かせ

あれ行は虫の音まては思ひしをうつら立也庭のしの原

夕されはたみのゝ島に鴈鳴て芦の丸屋にころもうつ也

山かせの音さへうとく成にけり松をへたつる峯のしら雪

君か代は眞如くちせぬ室の中に慈氏の朝日の光さすまで

庭の面を草にまかせて住程に庵までこそ人にしらるれ

夕暮は雲にしほりの道たえて名をたにしらぬ鳥の一こゑ

御所哥合十首 月多秋友

高砂の松もむかしに成ぬへしなを行末は秋のよの月

月前松風

月は猶もらぬ木間もすみよしの松をつくして秋風そ吹

雪似白雲

あらし吹峯につれなきしら雲の立かとみれば松の雪折

左大臣家花五十首

都より花のさかりを見わたせは浪まにしつむ白河の關

うきねする明石のおきの波の上に思ふ程にもすめる月哉

月影はいとくまなく空寒て秋の雨ふる松のかせかな

左大臣家十題百首内

かさゝきの雲の梯秋暮て夜半には霜の寒わたる集まさるらん

さひしさはその色としもなかりけり横立山の秋のゆふくれ

外山なる木葉かくれにつたひきて嵐に靡くむさゝひのこゑ

牛の子に踏るな庭のかたつふり角のあるとて身をな頼みそ

紫の雲路にかよふことさそふ集の音に浮世をはらふ峯の松かせ

これや此うき世の外の春ならん花のとはその明ほのゝ空

すむ月は玉の植木の本寒て御法のにはに在明の空

影供哥合 縁ある哥めしける時 旅歌

むさし野の露をは袖に分侘ぬ草のしけみに秋かせは吹

柳拂水

龍田川（さ懸）たしの青柳ゆく水に數かくものはしつ枝成けり

山のはゝ分よるまゝにあらはれて霞をこむる松のむら立

梅かえに色をはのこせ吹風もこゝろあればそ香をさそふ覽

左大臣家百首歌合 秋雨

小萩さくかた山かけのひくらしの鳴すすみたるむら雨の空

あふまての思ひは事の數ならてわかれそ戀の初なりけり

淺ましやなとか思ひのさしも草露置あへす果はもゆらん

しくれ行松のみとりは空はれてあらしくもる峯の紅葉ゝ

貴賤更衣

人なみに賤か袂のかはるこそ花のころもの名さへ惜けれ

賀茂哥合

世中のうきは今こそ嬉しけれ思ひしらすはいとはましやは

おもひねの夢たにみえて明ぬれはあはても鳥の音社辛けれ

さひしさにうき世をかへて忍はすは獨きくへき松の風かは

老若歌合

たにふかき霞の窓は明やらて雲にいさよふ鶯のこゑ

くれて行春のみなとはしらねともかすみに落る宇治の柴船

よをかきね心になれてほととぎす初音をあかぬ名残成ける
夏ふかき杜の梢も空蟬の羽にをく露はあきのゆふ暮

思ひ餘りなるともなき虫の音のしのに籠れる野への夕風

たれとなく戀しかるへき今宵哉月影いとへさをしかのこゑ
新古 暮ら雨の露もまたひぬ横の葉に霧たちのほる秋の夕くれ

さひしさを誰しのへとか小倉山秋のふもとにさをしかの聲
をしかなぐちんい

しくれつる夕日の色も袖さえて山陰さむし菊のむら露
山かけにくもりもあへぬむら時雨名残は月の影よりそふる

已上 十首御所老若哥合

うつろはてしはし日影を待程は露にそかゝる朝顔の花
あら磯の岩もとゆすり立浪のたえましくまてぬる袖かな

里とよむ市の中にも有ぬへし心を人はすみ染のそて

浅茅原ふるきそとはに契をかむ隣とならは哀ともみよ

柴の戸をとてあくるや誰ならん通ひなれたる峯の松かせ
たれとなく人を咎むる里の犬のこゑすむ程に夜は更にけり

已上 圓位法師勸進

雨後紅葉

立田山こえ行みねのむらしくれ梢にのみそ跡は見えける

新古 山家送年

たち出てつま木折こしかた岡のふかき山路と成にける哉

已上 右大臣家句題百首

五月雨は苦の下もる谷水の山とよむまで日數ふりぬる

大井河るせきの水やこほるらんはやせにをしの聲くたる也
新古

和哥の浦を松の葉こしになかむれば梢によするあまの釣舟

已上 大輔勸進百首

若水

鶯の涙のつらゝ聲なからたよりにさそふ春の山水

寄雲戀

人しれぬうらみは空の雲なれやつもれば袖の雨とふるらん

聞戀

いかにして露を袖にさそふらんまたみぬ里の萩の上かせ

祈戀

貴船川百瀬のなみも分過ぬれ行末の袖を契りて

已上 左大臣家百首歌合

資盛卿哥合

花の春月の秋たに人とはぬ柴のいほりの五月雨のころ

左大臣家歌會

月といへは伯母捨山の秋の空なかわる宿はさらしな里

或所歌會 鹿

鹿の音におもひを分る秋のよは身より外にも物そかなしき

秋の夜ふかく少納言定家かもとへまかりて物申ける

ほとに思ひかけすみすのうちに松虫のなき侍りける

をこの聲はいかにとたつね侍りければ嵯峨野の方よ

りなむさそひたると申ければ歸て又の日さがへまか

るとて故郷のかたへ言傳あるなど申て

住わひは野へのかよひちつけやらん友をはなれて松虫の聲

かへし

いまはとて都に友を松むしのなく音をかれし君かゝよひち

九條哥合 雪
ふりそめる今朝たに人のまたれつる深山の里の雪の夕暮
十月計に東の方へまかりけるに箱根と云山をなむこ

えける所のあり様あやしくよの常にはかはりけりは
るかに峯に上はて海をわたり谷にくたりては雲をふ
むさるほとに風は木葉をまくりあけてしくれの麓よ
りのほりければ讀侍ける

たひの空雲ふむ峯を分行は時雨は袖の下よりそする

冬哥の中に丸雪を

窓ちかき椎の下柴音つれてみ山の里に霰ふるなり

左大臣家哥會 夏戀

新告
思ひあれは袖に螢をつゝみてもいはゝや物をとふ人もなし

同家哥會 秋戀

大方の秋くるよひやこれならん色なき露も袖に置けり

出雲のきつきの宮にまいりていつも河の邊にて

出雲川ふかき湊をたつぬれはゝるかにつたふわかの浦なみ

日吉社會 社頭祝

やはらくる光の庭にゐる塵の末をも山と神を守らむ

後白川院かくれおはしまして後の御事ともを經房卿
に奉行すへきよし被_ニ仰置_一たる事を承及て彼卿のも

とへ申つかはしける

玉簪
いさきよき心もしるし入月のなき影をさへ君にまかせて

かへし

同
なきかけをみよとて月の入しよりいとゝ心の闇にまよひぬ

嵯峨の釋迦をおかみ奉りて

續告

わしの山二たひ影のうつりきてさかのゝ露に有明の月

民部卿經房吉田宅色紙形に無量義經十功德品文_ニ是

經諸佛室宅來去至一切衆生發菩提心

にほひこしもとの都の法の花散しく末は墨染の袖
壽量品

東屋のまやの板まにやとりきてかりにも住る夜半の月哉

百首哥めしける中に春歌に

志賀の浦や釣するあまの袖寒て歸る浪路に氷しにけり

建仁元年大内花盛に御幸あり花の下にて御製

雲の上に春くれぬとはなけれどもなれにし花の影を立うき

御返事すへきよし仰そくたれは

いかばかり雲の花も思ふ覽なれし御幸のあかぬにほひを

世をのかれぬときゝて左大將實定

續千
世中をいてぬとなとかつけさりしをくれしと思ふ心有物を

かへし

同
人をさへ道引ほと身の成せは世を出ぬとはつけもしてまし

伊綱かもとより明石もすまもかせやさむけきといふ

哥を入道素覺常に言出しゝ事をなとかきて

知らめやすまの浦風身にしめし人もなききに鳴千鳥をは

返し

おりゝの友とみしたに濱千鳥とひをくるゝはさ社なかるれ

圓位上人熊野に籠たるころ正月に下向する人につけ

てつかはしける文のおくにたゝいまおほゆるをを筆

にまかすることかきて

霞しく熊野かはらを見渡せはなみの音さへゆるく成ぬる

かへし

霞さへ哀れかさぬる三くま野の濱ゆふくれを思ひこそやれ

都移りのころ少將公衡朝臣のもとへつかはしける

おもひきや宿は都の宿なからひなのすまゐにならむ物とは
返 し

故郷はひなのすまゐに成ぬとも宿もる月の影はかはらし
秋の月はイ

人丸の墓尋ありきて柿本の明神にまうてゝ

古きあとを苔の下まで忍はすはのこれる柿の本をみましや
玉翠 たつね集

かくれて思ひかけす尋あかりてよみける

おもひかね昔の末にまよひきぬとめし道の行衛しらせよ

高野にしばし籠たりけるころ教長宰相入道病に煩て

いまはと成にければ頼輔卿とふらはんとてまかりける
程に身まかりて後彼山にのほりたるよしをきゝて

つかはしける

たつねきていかに哀となかむらん跡なき山の峯のしらくも
新古

返し

たつねきてむなしき空をなかくても雲と成にし人をしと思

櫻井の僧正かくれ給て後年久成て彼住給ひける山里

をまかりて見ければいと物さひしくあれはてて庭も

まかきも秋のゝらと成侍りければよみける

植置し笹の花も秋のゝらと成はてねとはおもはさりけむ

攝津國の蘆屋といふ所にしほゆあみける時布引の瀧

見にまかりて月出るまでありけり

山かせに雲のしからみよはからし月さへおつる布引のたき

仁和寺法印覺性より九月計に

われならぬ月もすみける山里をとほすは君か名こそ惜けれ
返し

山里の秋の哀をとほすは社月故しはし君にまたれめ

爲業入道のもとより
くれぬとて君か急し月影は猶わか宿に有明の空
返し

返し

あかさりし名残の空を思ふにはまたいてやらし山のはの月

三輪社に詣てしるしの杉に書付ける

三輪の山あはれ幾世に成ぬらん杉の梢に宿をまかせて

住吉に詣てよみ侍ける

ふりにける梢もしるきすみよしの松に過たる風の音かな

百首哥中に杜間菫を

色ふかきしのたの杜のつほすみれ千枝の滴や雨にそふ覽

出雲の大社に参りける道美作國に懷繩か侍けるかく
ときゝてなとともなはさりしなと云つかはして

いにしへも思ひ出雲のかひもなく隔てける哉その八重垣を
返し

返し

思ひあれは隔つる雲もなかりけり妻もこもれり出雲八重垣

院南野にまかりけるに野中の清水にてかれ飯たへて
新後撰

くむ人はまたいにしへに成ぬとも野中のし水思ひわするな

出雲の大社に詣て見侍ければ天雲たな引山のなかは
まてかたそきのみえけるなん此世の事とも覺えさり

ける

やはらくる光や空にみちぬらん雲にわけ入ちきのかたそき

うちのおほひまうち君はかなく成給て後北のかたけ

ふりにそはぬ恨のあまりにや世をのかれきて彼空敷

山の麓に住たまひけるを春よりして秋にも成にけれ

はさのみやはとて出給ふへきよしを人々申なと聞程

にけふなん出給ふへきとてもよほしかほなる車の音

ともあまた聞ければまちかき山人の思ひやりける
行衛なきかすみの空をなかめきて思ふもかなし葛のうら風
かくてのち日比の山住の跡をまかりて見ければ人の
音もし侍らて松のひゞきのみなむかよひける

たれもみな忍ひし跡に松風のをとのみ残る秋のゆふ暮
よこの海の氷のはてに船とめて浦路も遠き浮ねをそする

神祇

のとかなるはこやの山にはるくくと神と君との契りをぞ知
此ころは八雲の末のとの葉に思ひ出雲のいにしへの空
萬代を松生る濱にとしふりて君かためにやすみ吉の神
さかりなる和歌の浦浪立そひてめくみもしるき玉つしま姫
うき身今やそうち人の數なれば〔下闕〕

古池菖蒲

荒はてし池のみきはもあやめ草引につけてそ打はらひける
あやめ草けふ引あとに見ゆる哉たてをく石も池のこゝろも
菖蒲草けふひく跡そ池水に立をく石も有とみえける

遠山郭公

たつぬへき行衛もしらすほとゝきす外山の奥の雲に入こる
雨後夏月

所々照射

いかにしてしかの立とを忍らんともしの影は葉山しけやま

家々納涼

末結ふ隣の人やまちつらむせく手にくゝる山の井の水

霞

春といへはちさとの外も一にてかすみをかきる明ほのゝ空

端午

檻

閑居

晴

人しれぬ淫野になれてあやめ草忍はぬ宿の妻をこふらん
有明の月はこのれる日かけにも先かたふくはあさかほの花
木葉分て庭にたゝすむ鹿のみそ都にうとき友と成ける
雲消る遠の山もとみわたせは檜原は庭の蓬成けり
橋のにはほもいまは六月に思ひのきはのほとゝきすかな

五月雨

降そめてたえくみえし庭たつみ一つく五月雨の空
五月雨に軒も臚のし水さへ見しにもあらずおもかはりして
さみたれに室のわたりをみわたせはおりる雲を汀成ける
あま人よいかに日かけを松しまやをしまか磯の五月雨の空
五月雨にみつの濱松浪かけて梢にのこるまのゝうら風
時鳥かた待よひの山の端にさもあらぬ月はやく出にけり
夢なれや卯花月夜ふくるよの垣ねに忍ふ鳥の一こゑ
鶯のふる巢をつけし跡なれば雲路より鳴時鳥哉

將軍

下のおひの結ふ氷に手をかけてそらにそうつる弓はりの月
和歌二百九十五首

右寂蓮集以一本及流布印本校合了

兼好法師集

石山にまうつとてあけほのに逢坂をこえしに

雲の色にわかれもゆくかあふさかの關路の花の明ほの空
あふさかのせき吹こゆる風のうへに行衛もしらすちる櫻哉

雪ふる日にみこひたりの中納言とのより

あとたえてとはぬ日數もふる雪におほつかなさの積る頃哉
ふる雪に里をはかれす跡つけは待らむ人のかすにもらすな

返し

跡つけて今こそとはめうき身をもまつらん宿の庭のしら雪

七月七日月のかたふくを

天河みをゆく月はなかるともあふせにかけよ雲のしからみ

よふことり

春の夜のくらふの山のよふことり心の闇をおもひこそやれ

無動寺にて夏のよあくるまで月をみて

とりのねのきこえぬ山のかひもなしさても明ゆく短夜の月

まつりの日しのひてまかりすき侍しをくらの大納言

とのゝくるまよりつかひのあれは

忍つゝいてつるみちにあふひ草君みるへしと思ひかけきや

返し

わかたのむ神のしるへに葵草おもひかけすといかゝ思はむ

ふかくさにかよひしころあか月きぬたうつを

衣うつ夜寒の袖やしほるらん曉つゆのふかくさのさと

彈正宮にてたえてひさしきこひといふ題を

蓬生の宿のかよひちいつのまにかれにし跡もしもをへぬ覽

左大臣殿にて落葉風にしたかふといふ題を

空にのみさそふ嵐にもみち葉のふりもかくさぬ山の下みち

小將ためつらの君久しくとひ給はすとうらみやりた

る人のもとよりいひおこせたる

いまそしるとはゝやとこそおもひしにけに身を捨る心也覺

返し

浮身をもとはれやせまし思ふよりほかなる君か心なりせは

ほうりむにこもりたるころ人のとひきてかへりなん

とするに

もろともにきくたにさひし思ひをけかへ覽あとは峯の松風

いかたを

大る河つなくいかたもある物をうきて我身の寄かたそなき

をくらの宮のすみ給けるところといふ堂にとまりて

有明の月おもしろき曙にいろゝの花をおりて佛に

たてまつるとて月のこり露むすはんあしたまかきの

花をおりて佛界に供せんとかゝれたる事をおもひ

てゝ

昔おもふまかきの花を露ながら手を取りて今もたむけつる哉

ならひのをかに無常所まうけてかたはしに櫻をうへ

さすとして

契りをく花とならひのをかのへに哀れ幾世の春をすくさん

頼阿母のおもひにてこもりゐたる春雪ふる日つかは

す

はかなくてふるにつけてもあは雪のきえにし跡をさそ忍覽

返し

なけきわひとともに消なて徒つらにふるもはかなき春の淡雲

やまさとのすまひもやう／＼としへぬることを

淋しさもならひにけりな山里にとひくる人のいとはるゝ迄

續現存

とふらふへきことありてみやこにいてゝ
立歸りみやこの友そとはれける思ひすてゝもすまぬ山路は

法華經の序品

いつかたものころくまなく照すなり時まちえたる花の光に

祭主定忠身まかりて追善に結縁經の歌すゝめ侍しに
方便品

をしなへて一つ匂ひの花そとも春にあひぬる人そしりける

五百弟子品の心を

あま衣なれにし友にめくり蓬てみぬめの浦の玉もをそかる

中御門入道大納言經繼卿の白河の山庄にてこれかれ
題をさくりて哥よみ侍しに變戀を

あた人にならひにけりなたのみこし我も昔の心ならぬは

八月十五夜報恩寺にて人々あまた歌よむよしきゝ侍

しをわづらふこと有てえまからて申つかはし侍し

月に憂身をあきゝりのへたてにもさはらて通ふ心とをしれ

返しをくらの大納言實教卿

諸共になかめそせまし秋霧のへたつるよはの月はうらめし

そのころやむことなき人のとふらひおはしたるに

とはれぬるつゆのいのちはつれなくともろきは袖の涙成堯

こよひとたのめけるおとこのあらぬかたへまかりけ

れは女の下ませ侍し

はかなくそあたし契をたのむとて我ためならぬ暮を待ける

冬の夜あれたる所のすのこにしりかけて木たかき松
のこのまよりくまなくもりたる月をみてあか月まで

物かたりし侍ける人に

おもひいつや軒の忍ふに霜さえて松の葉分の月をみしよは

世をそむかんとおもひたちしころ秋の夕暮に

そむきてはいかなるかたに詠めまし秋の夕も憂世にそうき

とにかくにおもふことのみあれば

盡もせぬ涙の玉のなかりせはよのうき數になにをとらまし

はいにもあらてとし月へぬることを

うきながらあれは過ゆく世中をへかたき物となに思ひけむ

ならひそと思ひなしてや慰まむ我身一つにうきよならぬは

たのもしけなることいひてたちわかるゝ人に

はかなしや命も人の言の葉もたのまれぬ世をたのむ別れは

あらしの山の花をみて

おほる河くたすいかたしはやきせにあかてや花の陰を過覽

むめのはな

みても猶あかぬにはひはつゝめとも袖にたまらぬ梅の下風

木のもとを過てそさらにしられる袂にうつる梅の匂ひは

三月はかりつれ／＼とこもりゐたる頃雨のふるを

なかむれは春雨降て霞むくけふはたいかにくれかてにせん

かくしつゝいつを限としらま弓おきふすくす月日成らん

やなきの風にみたるゝを

物おもふ心となしに青柳のみたれてなにもえわたるらん

春雨にやなきの糸はそめかけつ花の錦をはやもをらなむ

世中思ひあくかるゝころ山さといねかるをみて

よの中をあき田かるまで成ぬれば露も我身もをき所なし

人にもものいひをめて

かよふへき心ならぬは言の葉をさりとわかて人やきく覽

つらくなりゆく人に

今さらにかはる契とおもふまではかなく人をたのみける哉

さためかたくおもひみたるゝことのおほきを

あらましもきのふにけふは變る哉思定めぬ世にしすまへは

ともすれは鳩の浮巢のうきなからみかくれ果ぬよを歎く哉

世をのかれてきそちといふ所をすきしに

風^俗思^たつきそのあさきぬあさくのみそめてやむへき袖の色哉^{かは集}

修學院といふところにこもり侍しころ

遁れても柴のかりほのかりの世に今幾程かのとけかるへき

遁れこし身にそしらるゝ憂世にも心に物のかなふためしは

身をかくすうき世のほかはなけれとものかれし物は心成覺^{うきよをも集}

いかにして慰む物そ世中をそむかてすすす人にとはゝや

花をみて

花の色は心のまゝになれに覺ことしけきよを厭ふしるしに

後二條院のかゝせ給へる歌の題のうらに御經かゝせ

給はむとて女院^{西華門}より人々によませられ侍しに

夢逢戀を

うちとけてまゝとろむとしもなき物を逢とみつるや現なる覽

侍從中納言殿^{爲藤}にて人々題をさくりて哥よみ侍し

に木殘雪

山ふかみこするに雪やのこるらん日かけにおつる被の下露

花の雲

やまたかみまかはぬ花の色なれやなきたるそらに残る白雲

薄暮歸鴈

ゆきくるゝくもちの末に宿なくはみやこに歸れ春のかり金^{打聞}

わするゝ戀

われ計忘れすしたふ心こそなれても人にならはざりけれ

ほとゝきす

五月きてはなたち花のちるなへに山時鳥なかぬ日はなし

よ河にすみ侍しころ靈山院にて生身供の式をかき侍

しおくにかきつく

うかふへきたよりとをなれ水莖のあとゝふ人もなき世成共^{續現藝}

もちたるあふきをほとけにたてまつるとてかきつけ

し

常にすむみ山の月にたとふなるあふきの風に雲やはるらん

堂のはしらに永仁五年公世の二位の五部大乘經くや

うにのほりて筆ひきけるよしなとかきて

ひくことを哀としらはなき世まてかたみにしたへ松の秋風

とかきつけたるか霧にくちのこりてかすかにみゆる

もあはれにてかたはらに

松風をたえぬかたみときくからに昔のことのね社なかるれ

ほりかはのおほいまうちきみをいはくらの山庄にお

さめたてまつりにし又の春そのわたりのわらひをと

りて雨ふる日申つかはし侍し

さわらひのもゆる山邊を來てみればきえし烟の跡そ悲しき^{續現藝}

返し延政門院一條

みるまゝに涙の雨を降まさるきえし烟のあとのさわらひ^同

人にをくれて佛事なといとなむに

しるへしてあとゝふかひもなき物はたれも涙にまよふ成覺

あつまへまかり侍しに清閑寺にたちよりて道我僧都

にあひて秋はかへりまてくへきよし申侍しかはそう
つ

かきりしる命之せは廻りあはん秋ともせめて契りをかまし
返 し

行すゑの命をしらぬわかれこそ秋ともちきるたのみ成けれ
みちにてよめる

峯の嵐うらはの浪もきゝなれぬかはるたひねの草の枕に
あつまにてやとのあたりよりふしの山のいとちかう
見ゆれば

都にておもひやられしふしのねを軒はの岡にいてゝみる哉
うみのおもてのいとかなる夕暮にかもめのあそ
ふを

夕なきは浪社みえね遙く／＼と沖のかもめのたちゐるのみして
こよろきのいそといふところにて月をみて

こよろきの磯よりとをく引しほに浮へる月はおきに出に覺
むさしの國かなさはといふ所にむかしすみし家のい
たうあれたるにとまりて月あかき夜

故郷のあさちかにはの露のうへにとこはくさはと宿る月哉
さかみの國いたち河といふところにてこのところの
名を匂のかしらにすゑてたひの心を

いかに我立にし日よりちりのゐて風たに聞をはらはさる覽
きよみかせきにて

清見かた浪ものとかにはるゝ日は關よりちかきみほの松原
たこのうら

田子のあまのやく鹽竈はふしのねのふもとに絶えぬ煙成暈
一とせ夜にいりてうつつの山をえこえすなりにしかは

ふもとなるあやしのいはりにたちいり侍しかとこの
たひはそのいはりのみえねは

一夜ねし螢のまろ屋のあともなし夢かうつゝかうつの山越
心にもあらぬやうなることのみあれば

すめは又うきよ成けりよそなから思ひしまゝの山さとも哉
断干

なにとかくあまのすて船すてなからうき世を渡る我身成覽
山里のかきほのまくす今さらに思ひ捨にし世をはうらみし
うとく成ゆく人につかはしける人にかはりて

人めもる中とはなしにともすればとはぬ月日の積るころ哉
又

わか方のとたえにしりぬほかに又かけひの水のわくる心は
絶切戀といふことを

わすられてたえむ命もあひみしに思へはかふる我身也けり
寄雲戀

峯つゝき嵐にうきてゆく雲のうつりやすくそ思ひかけてし
たのみこしのちせの山の峯の雲よそなからやは立別れなむ
空にたつ名のみのこりてうき雲の跡なきものは契り也覺
續後拾

年もへぬさてや初瀬の山風にわかれしまゝの峯のしらくも
かのえさる

つらからは思ひたえなて棹腕のえさる妻をはしゐてこふ覽
五月廿日ころ御子左の中納言とのゝ庚申に

郭公聲舊 山田早苗 閑中五月雨
深夜夏月 風前夏草 螢火秋近

きゝてしも猶こそあかねほとゝきす鳴やき月の日數ふる聲
水こゆる田のもの早苗色そへてうつつるは山の陰にそ有ける

晴れやらぬ心の友となかめてもひとりそくらす五月雨の空
ふくるまも有けるものをよみなから明ぬと聞し夏の月かけ
うち靡く草葉涼しく夏の目のかけるふまゝに風たちぬなり
とふ螢またつけこさぬ雲よりゆきかふ秋とかせや吹らん
入道大納言(爲世)とのにて九月十三夜水うみの月氷に
似たりといふを

にほの海の氷のひまはなけれども打出る浪や秋のよの月

恨絶戀

かはりゆく心はかねて知れしをうらみしゆへと思ひける哉

いのりてたつぬる戀

しるへなきおきつのはまに鳴たつの聲を哀れと神はきか南

しかのこゑちかし

秋山のすその草のむねわけにそよくをきけは鹿を鳴なる

山家

山風のたまらぬともすまれ覺身をなら柴の庵むすひつつ

山深みまたれし鳥の聲をたにきかていくよのねさめしつ覽

後宇多院よりよめる歌ともめされ侍りけるにたてま

つるとて僧正道我に申つかはし侍りける

人しれすくちはてぬへきことの葉の天津空まで風にちる覽

返しそう正

ことはりや天津空よりふく風を森の木葉をまつさをひける

神無月のころはつせにまうて侍しに入道大納言(爲世)

もみちおりてことおほせられしかはめてたき枝にひ

はらおりかさしてもたせたれとみちすからみなり

すきたるをたてまつるとて

世にしらすみえし梢はつせ山君に語らんことのはもなし

返し

こもりえの初瀬のひはらおりそふる紅葉に増る君か言のは

正中(後醍醐)二年春宮より哥合のうためされ侍しに山

路花 稀逢戀

けふも又ゆくての花にやすらひぬ山わけ衣袖にほふまで

いつまでと問はるゝ度に長らへて心長くも世をすくすらん

民部卿殿(爲世)にてをのゝ歌よみてほめそしること

ありしに 立春

けふよりは霞たなひくあつさ弓やしまのほかも春やしる覽

若水

盡もせぬ君かやちよをいくかへりわかえてくまん春の若水

早蕨

いまも又萌わたる也とき過てかれにしをのゝ春のさわらひ

歸鴈

歸る鴈しはしやすらへ山のはの雲たにまよふ明ほのゝ空

盛花

かきりなき色も匂ひも猶そひぬ花はけふとやわきて待けむ

初郭公

み山いてゝはなたち花にほとゝきす宿とふほとや初音成覽

五月雨

もかみ河はやくそまさる天雲ののほれはくたる五月雨の頃

泉

月やとるせかの水のすゝしさにあそふ今宵そ鳥の鳴まで

蘭

ふちはかま野はらの露を分かねてたかぬき捨しにはひ成覽

駒

迎

松虫

爐火

網代

寄雪戀

寄嶺戀

寄湖戀

寄野戀

寄橋戀

延政門院一條時

返し

忍ふらん昔にかはる世中

ひえの山にて四月十日

今も咲花のところ

いにしへは昨日やこえしひきつれてけふ逢坂のもち月の駒
秋寒き霜のちにや松むしの名にあらはれてねをはなく覽
埋火のあたりは春とおもふ夜の明るひさしき闇のうちな
をふねさしいさみにゆかむ武士のやを宇治川の網代もる頃
白雪の降にし中のかよひちはあさきにしもやたえはしめ劔
きくもうし有しにもにぬ言のはをなにと伊吹の峯の木枯
心を氷とくたくすはの海のまたとけそめぬ中のかよひち
契りあらは又や結はん一夜ねしにゐ手枕の野邊のわかくさ
ふりにけるためしにたにも思出よ長柄の橋のかけはなる共
延政門院一條時なくなりてあやしきところにたちい
りたるよし申おこせて
おもひやれかゝるふせやのすまひして昔をしのふ袖の涙を
忍ふらん昔にかはる世中
ひえの山にて四月十日
今も咲花のところ
人にしられしとおもふころふるさと人のよかはまて
たつねきてよの中のことゝもいふいとうるさし

年ふれはとひこぬ人もなかり覺よのかくれ家と思ふ山路を
されとかへりぬるあとはいとさうし

山里はとはれぬよりもとふ人のかへりて後を淋しかりける
いかなるおりにかこひしき時もあり

あらしふくみ山のいほの夕くれを故郷人はきてもとはなん
秋の夜おほろのし水をたつねて

おほはらやいづれおほろのし水ともしられす秋は澄る月哉
とをきくにへゆく人に餞すとして

別れ路をしたふ涙にくちはてゝ袖はたむけにきる程もなし
藤原行朝すゝめ侍しかしまの社のうた

時鳥なかぬかきりはたち花のにほふかきねそ人たのめなる
月やとる露のたまくら夢さめておくての山田秋かせそふく

風さやく岡の冬草けさのまにうつもればはてゝ雪そふりつゝ
一すちに厭はゝかくもたのめしと思ふより社猶まよひぬれ

あしはらやあまてる神のみをうけて國平けし神そこの神
春日野の露にそうつる東路のみちのはてよりいてし月かけ

うたをよみをきて身まかりにける人の追善に其歌の
一字をはしめにをきてけちえん經の歌すゝめ侍しに

る文字
流轉せし古里人を忘れすは無漏のみやこにいつかむかへん
こくらくに往生すへき事なとくをきゝて

舟しあれはちひきの石も浮ふてふちかひの海に浪たつな夢
五條ゐのくまといふとをかくして

いかて我室の國にも生れこてうゐのくまはうけつくす覽
宇治の御經藏の沈ありときゝて人のもとより

かつきせぬ浮世の蜚もほしあへぬ汐たれ衣やりてみせはや
やらい

沈をふたされつかはすとてうちふたつたてまつると
くつかふりにをきて

うきも又契りかはらてふるに今たもと濡つゝ露やくたくる
屏風のゑにもみちにかりなきわたるところ

いとはやも紅葉して覺雲井ちをなきて過なる鴈のなみたに
九月十三夜大覺寺二品親王(寛尊)よりめされし三首哥
に寄月待戀

高砂のおのへを出る月たにもさのみは松にさはるものかは
藤原基任かもとにててこたかれ歌よみしに

降雪にみち社なけれ吉野山たれふみわけておもひいりけん
今日いてゝつま木とらなむ降雪にそともの山路絶も社すれ

かちの宮にて(尊風二品親王)人々歌つかうまつりしに
すみかま

新後拾
すみかまも年のさむきにあらはれぬ烟や松のつま木成らん

正月十二日春たつ日民部卿(爲定)家の庚申に早春雪
年越えしするしもみえす降雪のあまきる空はけふそ霞める

初聞鶯

きゝて社おとろかれぬれ雪のうちもまつへかりける鶯の聲
恨別戀

きぬゝの名殘計にしほらはやかへる袂のくすのした露
夕旅行

寄神祝

ことゝはむこゆへき山と行末に見ゆるやゝとのまかき成覽
うこきなく絶ぬためしときふねなる山を河せに世を祈る哉
先坊御時御歌合につかうまつりし五首元享三年の事
にや

秋ふかき霜をきそふる淺茅生にいくよもかれす攝衣かな

今宵たにうちも拂はてさむしるに積れる塵や人にみせまし
繰かへすたのみもいさや神垣の森のしめなはくちし契りは

けふのみといはたのをのに秋暮れてはゝそ色つき降時雨哉
さゝわくる露ともみえし我袖を秋より後はなにゝまかへむ

ひとり花のもとにたつねいりて

みぬ人にさきぬとつけむ程たにも立さるかたき花のかけ哉

とをく花をたつね

偽のくものいくへにこりもせてつめにまかはぬ花をみつ覽

かつらき山の花

かつらきや花のさかりをよそにみて心そらなる峯のしら雲

池に花のうつりたるを

影うつす花のあを葉と成にけりむらゝみゆる池のうき草

海邊の春曙といふ事を

花ならぬ霞も浪もかゝるなりふち江の浦の春のあけほの

御子左中納言家にて春風春山春旅

みなと河散にし花の名殘とやくもの浪たつ春のうら風

名に高き花のところときゝしにもこえてそみつる鹿の山越

とりの音にあきたつみちもみえわかす深き霞やさよの中山

建武二年内裏にて千首哥講せられしに題をたまはり

てよみてたてまつりし七首春植物

新千
久かたの雲ゐのとかに出る日のひかりにゝほふ山さくら哉

夏動物

時鳥待とせしまに神なひのもりの梢はしけりあひにけり

秋天象

よもすからそらゆく月の影さえて天の河せや秋こほるらん

冬天象

霜さえしやたのゝあさちうつもれて深くも雪のつもる頃哉

戀天象

蟹のすむ里のけふりの立かへり思ひつきせぬ身を恨みつゝ

戀植物

徒になき名計をかりこものうきに亂れてくちやはてなん

雜地儀

せり河のちよのふるみちすなほなる昔の跡は今やみゆらん

大覺寺のたきとのといふあたりにすむ人のもとへ十

月ばかりしくれふる日たつねいきたるにはゝ山の

ふもとにて薄のおほくまねきたるを

かれ残るすそのゝおはな秋よりも招く時雨に袖やかすらん

みつとりを

芦邊ゆくかものはかひに涙こえてはらはぬ霜も置やそふ覽

ある人のもとにてをのゝ五首の歌よみしに山路の

ゆふへの雪

よしの山みねの嵐のさえくれてふみ分かたくこほる雪かな

野外冬月

冬かれはのかせになひく草もなく氷る霜夜の月そさひしき

海のはとりのちとり

難波かたみちくるしほに風たちて蘆の葉さやき千鳥鳴なり

連夜待戀

待程の頼み絶えなはいかゝせむこぬよの数のしられすも哉

たえてのちあらはるゝこひ

思ひいつるかひこそなけれ今更にうき名たつなる昔語りは

むら時雨ふりみふらすみをしなへて處もわかす冬はきに覺
くれていにし秋はきのふとおもふまに嵐の音の冬こもる覽
秋は早すきにしあとの手向山いまたにぬさとちるこの葉哉

こほり

すむ月の影こそよとめあすか河心ありてもこほる涙かな

みよし野の山よりおちし瀧の糸のたえて久しく氷るころ哉

雪

をさゝふくみねの嵐も音さえて夕のどこにつもる雪かな

あさくもりのそらいとおもしろし

朝またきくもれるそらを光りにてさややくみゆる花の色哉

山田に水まかするを

せりつみし春のあらを田うち返し水は心にまかせやはせぬ

なけく事あるころ心地そこなひてこもり侍しを新中

納言ほとへてとふらひ給とて

數々にとはまほしさを思ふまに積りていとゝ言のはそなき

いはぬたに憂身の咎はしらるゝを恨はいかに苦しからまし

返し

今そきく恨しほとの日かすをも思ひ乍らにすくしけりとは

等閑にかこたはかくやしらさらいはれぬはかり深き心を

としすけの中將入道の身まかりしに追善の結縁經の

うきながら暫し漂ふ水の泡のきえなてすさむ世とは頼ます

基任かすゝめ侍しあみた經のうた

いつか又よの浮雲のほかにもむこれよりにしにすめる月影

懷舊

なき人の俤さへにたえねとやうたて月日のとをさかるらん

月をみて

おもひ出る涙に月のくもらすは昔なからのかけもみてまし

花にむかひてふるきをおもふ

春の日のななき別につくくとなくさめかねて花をみる哉

山吹

よしの河いはこすなみにかけみれば散につきせぬ山吹の花

菩提樹院のふちにまかりて

咲き匂ふ淵のうらはのうらとけてかけものときき春の池水

たかゝり

鈴のおとは近く聞えてはしたかの茂みの木ゐに隠れける哉
はし鷹の木ゐにかゝりて暮す日は我も家路に歸りかねつつ

ほとゝきすのはつね

つれなさはなく一こゑにわすられて名残をしたふ時鳥かな

淨弁律師つくしへまかり侍しに火うちつかはすとして

打すてゝ別るゝ道の遙けきにしたふ思ひをたくへてそやる

これとしの朝臣の家にて河を

千歳ともなにか待へきいすゝ河濁らぬ世にはいつもすみ臈

遍智院宮よりめされしによみてたてまつりし歌

よる浪の音さへとをくかすむ也しほのひかたの春の明ほの

いく里の人にもをくれ春風のさそふにつきぬ梅のほひは

あさなゝゝ咲そふ花の白妙に峯のかすみの色そはれゆく

さても猶よをうの花のかけなれや遁れていりしをのゝ山里

さたかにも思ふ心にはほとゝきすきく一こゑを猶たとるかな

夏野ゆくたなれの駒のむねわけになつむはかりも茂る草哉

よの中のうきたの森に鳴蟬もわかことよそにゆく方やなき

たへてのみなかむるまゝに心なき我身しらるゝ秋のゆふ暮

木のまよりしたは残らすやとるなり露もる山の秋のよの月

生駒山あらしにうきてゆく雲のへたてもあへすふる時雨哉

手枕の野へのはつ霜さゆる夜のねての朝けにのこる月影

ものおもふわかなやよそにふりぬ覽今は涙をとふ人もなき

儚しやいとほるゝ身の命もてあふにかへむと頼む計りは

關守のまどろむほとゝ契る夜はふけてうれしき鐘の音哉

とのよりめされし名所の歌にいそまのうらの戀

涙かくるいそまのうらの磯まくらゆめにもうとくなる契哉

女につかはさむとて人のよませし

しらせはやこのはかくれのむもれ水下に流れてたえぬ心を

あはむといひなからさもあらさりける人につかはし

ける人にかはりて

たのめをく言のはなくはあはぬまに變る心を歎かさまし

秋の夜とりのなくまで人と物かたりして歸りて

有明の月そ夜ふかきわかれつるゆふつけ鳥やそらね成けん

しはすのつこもりあはれなることとおもひつゝけ

てうちもまどろまぬにかねのをといと心ほそし

春ちかきかねのひゝきのさゆる哉今宵はかりと霜やをく覽

驚かす鐘の音さへきゝなれて永きねふりのさむるよもなし

なき人をとふらひて

をくれゐてあとゝふのりのつとめ社今は儚き名殘成けれ

夜もすから雨も涙もふるものをなとかへりこぬ別なるらん

あはれなる夢をみてうちおとろきたるにかたるへき

人もなければ

さめぬれと語るともなきあか月の夢の涙に袖はぬれつゝ

みすもあらで夢の枕にわかれつるたまのゆくゑは涙なり臈

山寺に念佛してゐたるにみやこよりたつねくる人の
中にわかきおとこのいとねむころに物かたりしてか
へるすまゐはいとたつきなしやなに事かしのひかた
きなとふは思ふ心ありてやとみゆるも哀にて
山さにとひくるともわきて猶心をとむる人はみえけり
なにこともほとあらしとおもへは

うきこともしはしはかりの世中をいく程いとふ我身成らん
いつかたにも又ゆきかくれなはやおもひながら今
は身をこゝろにまかせたれば中々ことたりてのみ
そ過ゆく

そむく身は流石にやすきあらましに猶山深きやとも急かす
よの中ありしにもあらすうつりかはりてなれみし人
もなくなり行ことを

語るへきともさへまれになるまゝにいと昔の忍はるゝ哉
あしたのかすみ

宿ことの朝けの煙たつとしもわきてはみえすかすむ空かな
いはひ

わかの浦の眞砂や千世のあり數によむとも盡ぬためし成覽
春 月

夜もすからかすめる月の影なから行かふ雲やはれくもる覽
涯さはをとのみこそきこゆなればそ谷河の春の夜の月

山さとのさひしけなるを

身をかくす山路のおくもすむ人の心はよそにしられぬる哉
世中あやふきさまにきこえしもほとなくなちちなをり
にしかは中納言とのに

世々をへておさむる家の風なればしはしを騒くわかの浦浪

平貞直朝臣家にて歌よみしに旅宿の心を
古里はなれぬ嵐にみちたえてたひねにかゝる夢のうき橋
おもひをのふ

數ならぬみのゝを山のひとつ松獨覺めてもかひやなか覽
耐ぬるか身は浮船のつなてなはひく人もなき世を渡りつつ
忍によりてまされるこひといふ事を

ともすればつもる月日をかこつかな人めは人の心ならねは
月にむかひておもひつゝけし

風そよく竹のは山の秋の月のとかにすまぬ世こそしらるれ
思ひをく事そのよに残りけるみさらむあとの秋の夜の月
身を隠す宿のかきほのしのすゝき忍はすほにも出にける哉
ほとゝきすなきぬへき夜のさまかなと人のいふをき
ゝて

なきぬへき夜半はたのまし郭公待らんとこそ猶しのふらめ
ゆふくれにはるゝとみねとひこえて鴈のゆくを

山のはにゆふゐる雲はのとけきにをのれ別れて鴈の行らん
又もこむ秋社いとゝたのまるれとまる年なき春のかり金
いとせめてこひしき頃とふるさとに霞のころもかへる鴈金
和歌所にて初聞鶯といふ事を

きくからに春そのとききうちふき都にいつる鶯のころゑ
にし山の花見ありきしに

あふ人に又さそはれてたちかへりおなし山路の花をみる哉
朝とにたちそふ峯のしらくものゆきゝもみえぬ花さかり哉
花のちるを

待ほとの花の心のつれなさもさきてはあたになとかはる覽
人のよませしに

いつまでとしのふの露を袖にみてきえたにはてぬ物思ふ覧
久しくをとつれぬ人のかりいひやりし

花そめの色ともきかぬ目数さへとはねはやすくうつる比哉
ともたちのきて世のありにくき事なと語をきゝて
ならひそと思ひなしてや慰まむ我身一つの浮世ならねは
としころたのめわたりける女のかりつかはすへき哥
とて人のよませ侍し

偽にわれのみなさてことのはをたのむ計の年そへにける
おなし人に又つかはしける

玉かつらたえすも物を思へとやかけてたのめし人の難面き
冷泉の大納言殿にて歌合に夏草

おほあらしの森のしつ枝もわかぬ迄のへの草葉の茂る比哉
不逢戀

述 懷

同し世にいけるをさすかたのむ哉あふにはかへぬ命なれ共
ともすれは我身ひとつと託つ哉人をわくへき浮世ならねは

御子左中納言家歌合に依花待友
さきなはと頼めし人のとはぬまは宿より外の花をたにみす

祈不逢戀
たちなるゝ神のみむろの榊葉のかはらぬ色はづらさ成けり

寄草戀
時過て人もすさめぬあやめ草うきにふりぬるね社なかるれ

小野つき松をかくして
淋しさをなくさむものは四のをの月待ほとしのしらへ也けり

折句にやかた舟
山人のかへる家路はたえゝにふくなるふえのね社聞ゆれ

これもおなし家の歌合に晴天歸鴈雨中懷舊
歸る鴈はねうちかはす雲もなしなきたる空に數はみえつづ
きゝなれぬ草の庵の雨の音に昔しをいかておもひ出らむ

西林院（承覺親王）宮にて題をさくりて歌よませられ侍
しに五月雨

降をむる空よりやかてさみたれの日數しられて雲を重なる
青蓮院二品親王より花契多春といふとをよませられ
侍しに

くれ竹のそのふに匂ふ花にこそ千世の春しる色はみえけれ
雪ふる日ひらの山にのほりて

残りつる枝のしたみち猶たえてあらし吹しく峯のしら雪
花のさかりたしまのゆよりかへるみちにてあめにあ
ひて

藤花
しほらしよ山わけ衣春雨にしつくも花もにはふ袂は
藤大納言とのゝ松のおの花みにおはせしにさそはれ
たてまつりて山さとの花を

人めをはいとひやすると山里のあるしもとはて花をみる哉
花まち殿にてほたる

とふ螢なそやうき世の濁江にかけをかくさてもえわたる覽
前坊御まへに月の夜權大夫殿さふらはせ給ひてみき
なとまいりて御連歌有しにけむこう候よし人の申さ
れたりければ御さかつきたまはすとて

ましてしはしめくるはやすきをくるまの
とおほせかけられてつてたてまつれと有しかはた
ちいりてにけむとするをなかとしのあそむにひきと
ゝめられしかは

かゝる光の秋にあふまてと申す

忍絶戀

世にもらはいかにせんとそ思ひこし心やすくもたえし中哉

懷舊

夢くて又やすきなんこし方に歸るならひのある世なり共

千鳥

わかの浦にみ代の跡ある濱千鳥猶かすそへぬね社なかるれ

網代

知へせよたなかみ河の網代もりひをへて我身よる方もなし

落葉

^{新編古}逃えぬおいその杜の紅葉はゝちりかひ曇るかひなかり晝

春のころ哀傷

わひ人の涙になるゝ月かけはかすむを春のならひともみめ
みし人もなき故郷よ散まかふ花にもさそな袖はぬるらむ
歸りこぬわかれをさても歎く哉西にとかつはいのる物から

兼好法師集補

兼好法師か母身まかりにける一めくりの法事の日さ

け物に添へて申つかはしける 前大納言爲定

^{新千載哀傷}わかれにし秋は程無くめくりきて時しもあれとさそ慕ふ覽

かへし

兼好法師

^同めくり逢秋社いと悲しけれあるを見し世は遠さかりつゝ

題知らす

^{新拾遺冬}あし鴨のはらふつはさに浪こえてうは毛の霜や猶氷る覽

夕旅を

^{同旅}旅の空幾夕暮に待ち出てゝ山のは變る月を見つらん

忍久戀を

^{同戀一}しのふ山又こと方に道もかなふりぬる跡は人もこそ知れ

旅の歌とて

^{新後拾遺旅}都思ふ草の枕の夢をたにたのむ方無く山風を吹く

雑の歌に

^{同雜上}後の世を歎かぬ程そ知られる身のうきにのみ袖は濡つつ

寒草を

^{新編古今}手枕の野への草葉の霜枯に身はならはしの風の寒けさ

忍戀を

^{同戀一}みさひ江の底の玉藻の亂るとも知らるな人に深き心を

祈戀を

^{同戀二}いかにせん神のうけゝる御被とて見し面影も忘れはてなは

題知らす

^{同戀三}こぬ人を猶こりすまに松山は幾夜浪こす契りなるらん

絶戀を

^{同戀五}うきたひにこれを限りとかこちしははかなくたのむ心成晝

羣書類從卷第二百七十

和歌部百廿五 家集四十三

元可法師集

春

曉立春

ねぬる夜の昨日をこそ別れ共ゆふつけ鳥の音にぞ驚く

山子日

さかの山千世のふる道今もなを松をためしの子日にそひく

若菜

けさは先跡なき雪をふみわけて歸るさまにや若なつまゝしたまるともみえぬ雪まの若な哉かたみに摘もかひやなか覽うきみには野守もつけし春のゝに我と出てや若なつまゝしなへてしる雪まなればや野へとにさそはぬ友も若菜摘らん

梅

さそひ行物とや風のおもふらむ木のもとさらぬ梅の匂ひを中垣のへたてをこえて咲梅や主さたまらぬ花とみゆらむさそひくる風のたちえの梅かゝに思のほかの宿をとふかな

近衛前關白家にて題をさくりて百首のうたよませられ侍りし時雪中梅

空にふる色さへ梅のにはひにてそれともみえぬ春のあは雪

鶯

春さむき雪の山ちの鳥なれや朝日に出るうくひすの聲はつせ山ひはらの谷の雪のうちに猶こもりえの鶯の聲

宗匠家にて題をさくりて三十首の哥よませられしとき

しき島の道ある春のうくひすはと葉の花やとり成覽

聖廟にて一日三百三十首よみ侍し時若草

もえ初る萩の焼はらいつよりか風のやとりも人にしられん

おなしき時霞

立わたる霞のひまにあらはれて雲ゐにたかきあまのかく山

おなしきとき松霞

はるゝとかすめる松の梢より一夜をこめて春やたつらむ

夕霞

はつせ山入相の鐘のこゑ近し霞のおくやをとなかるらむ

大納言忠光卿の家にて題をさくりて歌よみ侍しとき

野春雪

雨とのみ野への艸葉やおもふらむ空より消るはるのあは雪

餘寒

さへかへる雲にあらしの音羽山はるとは何の色にみゆらむ

春月

いつもたゝなみたのとかとこつ哉春しらぬ身の袖の月陰
天津空かすめる夜半はなかくに涙いとはて月をみるかな
いとゝさへ野守のかゝみ俤も見えぬはかりにかすむ月哉
木のめはるこれや柱の影ならむみとりに霞む春のよの月
ことゝへは霞めるかけのすみた河月も都のともやこひしき

歸雁

しはしなを雲井の雁の玉章もやらてみまくのほしきはる哉
花鳥の歸る道にもともなはてひとりと雁のなにいそくらん
あつまのかたへおもひたつこと侍し時人く來りて
うたよみ侍しに歸雁

我になとこゝろも色もかはるらむ都を出る春のかりかね

橋邊歸鴈

あまつ雁手にたにとらぬ玉章をかけてそ歸る春のかけはし

杜春雨

くれなるに秋やかはらん春雨の染るみとりの衣手のもり

宗匠爲定卿よませ侍し時の哥の中に岸柳

青柳の陰行とはみとりにて岸へにとをき水のしら波

近衛前關自家によませられし哥の中におなし心を

あまの河岸のやなきや七夕の春もあきひく糸とみゆらん

河柳

年へたるたつたの河のふし柳ふしても猶や木たかゝる蘭

花

ゆきてみむ高まの山のさくら花よなる程や雲にまかふと

尋花

またしらぬ山ちの奥の花もみつ浮世のほかの宿もとむとて

見花

朝日さす峯の霞のたえまより色さへにはふ山さくらかな

山花盛

よしの山かさなる雲をいく重とは分てもしらぬ花さかり哉

大納言忠光卿家の障子の系に哥よませ侍しときよし

野山かけるに(ところい)

もろこしの吉野ゝ山も遠からし花につゝける山ちなりせは

落花

身をさらぬ心を花になしてたにちるを別となをしたふかな
いとへともとすれば花を誘ふ哉あないひしらぬはるの山風
みをたにも捨し心に散花をさのみは何とおしむわらん
うたてなとあるし思はて山風のさそへは袖に花の散らむ
けふは猶山たちはなれ雲消てなかるゝ川そはなになりゆく
ありて世にはては春たにうければや暮ぬさきにと花の散覧
よしの河まさらぬ水もたきにそふ色と計やはなのちるらん

養子

養子なりし僧身まかりて侍し頃寄花述懷といふを

老か身の果をもまたて散花をやしなひえつとなに思ひけむ

雲雀

雲に入鳥とやなりて行春のすゑのゝひはり猶あかるらむ

藤

をしなへてかゝれる藤の花うたみめならふ松もあかぬ計に

忠光卿家

の障子の繪に春日のやしろ鳥居に藤のかゝ

りたるところ

春日山ぶちの鳥ゐる春のいろに身をもはつへき宿とみゆ覽

苗代

しき島のうたかた水をせき入て誰なはしるに種をまきけん

暮春

三月盡

さのみなと春ははつせの山嵐花より後もはけしかるらむ
あすや猶春にをくれて哀てふことをあまたにおもひ出まし
花をこそさそひつくさめ春をさへ殘さぬけふの入あひの鐘

夏

首夏

きのふまで馴こし花の彌生山なさへ夕月をかはる夕ふかな
かつさむる現は夏に來にけりとむすふもあたし春のよの夢
更衣

墨染の衣はいつもかはらねとよその袖にもなつそしらるゝ

杜更衣

花のかのこきに染しを蟬の羽の薄きにかへつころも手の杜

池菖蒲

かけうつす軒のあやめは池水にぬさしとゝめぬ草とみゆ覽

大納言忠光卿家に褒貶の歌侍しに旅宿菖蒲

こよひ猶あやめを草の枕にておもひそ出るよもきふの宿

待郭公

待かひやつるになからむ時鳥うき世によきて鳴音成せは

鳴ぬへきふしのすそのゝ村雨になを時しらぬほとゝきす哉

時鳥いかに待てかまちえしとこそ初ねをこゝろにそとふ

郭公未通

里わきてなく比も猶忍ひねとおもふにたのむほとゝきす哉

聞てなをこゝろつくせと時鳥きたかにもなきねをや鳴らん

杜郭公

ほとゝきす忍ふころの初音とや人もなきさのもりに鳴覽

ほとゝきす生田のもりの幾度もとはゝこたふる初ねとも哉
關郭公

せきの戸をあか月出る鳥ながら八聲はなかねほとゝきす哉
郭公類

時鳥珍らしけなくおもへはやあかねもしらすねをつくす覽

盧橘

ふるさとの昔はいつのむかしをか花橘の香にほひけむ

にほひくるはなたち花やうたゝねの夢より後の昔なるらん

雨中早苗

みわ河の水をもせかて五月雨のふるの早田にとるさなへ哉

五月雨

行水の清たき河も名のみしてにこるなかれの五月雨の頃

五月雨は日とにまさる水莖の岡のやかたをとふ人そなき

音羽川かは音たかしあふさかの關のこなたの五月雨の比

さもこそはうきぬの池の菱の葉もみかさ沈む五月雨の頃

夏草

夏草をいかに分てかこと繁きうき世のかるゝ道もとめまし

焼し野もけふはみとりの夏草に花もこもりて秋や待らん

紫のゆかりもいとゝみえわかすひとつ緑のゝへの夏草

いかにして色の千種に咲ぬらむひとと植しなてしこの花

木間夏月

みしか夜はおなし木のまもあけはてゝ中々月そ心つくさぬ

夕立

ならの葉にあられの音を聞しより猶風はけし夕立の空

過ぬなり梢はるかに鳴神の音羽の山のゆふたちの雲

樹陰水室

とけやらぬうたの氷室の山陰に夏をよきける楨の下かせ
納涼

谷陰の岩の清水よそにてはあつき日しもそいと涼しき
鵜川

下り行身はなゝそちの鵜かひ舟たのむ一せもなき此世哉
大納言忠光卿の障子の繪にうち河にうかひ舟かきた
るところ

夕やみの色なる楨の島津鳥うちを夜川とかゝりさす覽也イ

瀧上蟬

木のまよりおちくる聲や鳴蟬の涙のたきとよそに聞らむ

螢

生田河しつむみ草の玉かともみゆる螢にことやとはまし
いと猶みたる玉のかすそへて浪のうつせにとふ螢かな
はかなくもおもひにもえて終夜かつく水にとふはたる哉
しけりあふ野へをもやくとみえつるやもゆる螢の光なる覽
あひしりて侍し女身まかりてのち寄虫哀傷といふこ
とを

もえて行夜半の螢やこゑをたにきかて別し玉とみゆらむ

夏萩

みそきするかも河風此まにかはらてあすや秋を告まし

秋

初秋風

敷たへの枕さためてみる夢もおとろきやすき秋の初風
かくとたに人はつけねと物おもふ心にしりぬ秋のはつかせ

七夕舟

いまははややすの舟つにふねかせ此夜はふけぬ天の川長
七夕衣

七夕の涙なからやかへすらん昨日かしつるきぬの袖
織女のいをはたたてゝおるかうへに重ねて猶や衣かさまし

七夕扇

たなはたの扇の風に霧よりもまつはれぬるやおもひ成らん
七夕別

萩風

けさはたと立かはる覽あひみまぐ星は昨日に限りやはする
吹しほる程は中／＼音たえてよはれはそよく萩のうは風
萩の葉のそよくをとより絶にけり風のかけたる夢の浮はし

萩

花の色にうつろひ果てきたかにはをくともみえぬ萩の上露
紫のゆかりの草の枕ゆへまはき咲野にあまたひねぬ
眞萩原露たにおもき花のうへに心をしもやそへてをかまし
おちぬへき露の契もあたなれはおらてそみつる秋萩の花

薄

里人のゆきゝの岡の花薄夕露はらふそてとみえつる

手になるま弓のをかの花すきまねくはたれに心ひく覽
行かへりふりけむ袖のおもかけを残すしめの花すき哉

女郎花

なにたにもめてさか野の女郎花靡くをみては如何過へき
女郎花いまは契の秋そともしらてや風になをなひくらん

露

有明の月かけなからかたしきて袖になれたる露のたまくら
たのむなよさもあたしの草のはにしはしと懸る露の命を

虫

ふしておもひ起て歎くや秋の虫のさせるとなき大和言のは
よる山を過んものとや夕くれの籬になるゝすゝむしの聲
くへき脊かねてしるしやさゝかにの雲のはたての松虫の聲
霜をけは千とせもまたて枯にけり名のみ常盤の松むしの聲

鹿

いつれにかぬる夜の夢の覺めぬらん嵐にたくふさほ鹿の聲
明石かたせゝの追風更るよにしかのねちかしあはちしま山
いほもらて聞よはもかな心にもおもはていとふさほ鹿の聲
終夜よそにのみして小山田をもる人こゝとしかやなくらん
鳥のねにおとろかされて門田よりわかるゝ時と鹿や鳴らむ
聞たひにおとろかすとて鹿のねに枕さためするいほり哉

雁

あまつかせけき吹こゑや寒からむうきたつ雲の衣かりかね
わか門の稻おふせ鳥も時過て刈田のおもに鴈をむれるる

霧

名もしるく山は朝日にあらはれて霧に棹さすうちの河舟
あくる夜も鳥のそらねとたとる哉猶霧くらきあふ坂の關
ひろせ川袖つく水の流さへ淺くは見えぬきりのうちかな
霧こむる麓の河はみえわけて空に有明の山のはの月

宵のまは霧たちくもるあふくまに河風ふけて月そさやけき
ふもとをば猶立こめてふしのねの霧よりうへにつもる白雲

月

月影も秋もはしめのみかの原いつみなれてはしたひわふ覽
めてこすは月にもいかで忘れまし積れは老の秋のあはれを
むかしこそ月みる夜半はかこたるれ思ひ出れはくもる涙に

窓くらき軒はの竹を吹わけて風より出る宿の月かけ

みなな河氷てけりなつくはねの峯より出る月のひかりに

名とり川みなそこかけて埋木のあらはれぬへき月の影かな

むは玉の闇のよころやわたすらん月に絶たる夢のうきはし

初せ河井手こす波のしらゆふに光も清くやとる月かけ

月影もなかれの音も山河のよとなき水に先こほるらむ

月前萩

萩はらや音も光も身にしみてするこすかせに月そさやけき

月前席

すかこものとふの浦人七布にもみふにもねすや月をみる覽

居待月

更ぬまに出へき影もしら露のをきゐていそく山端の月

浦月

しきたへの床のうら浪よるとひてねて明すへき月のかけ哉

近衛前關自家にて歌よませられし時水郷月

行とのはやきを月にかこつかなゝかるゝ水のよとのさと人

浦島か箱根のうみの月に猶あけてくやしき程やこえまし

關の戸の明行夜半をかこつみは月にも鳥のねこそ鳴るれ

島つたふあしはや小舟ななき夜に幾浦かけて月をみるらん

うきなから身はあらましの山端に羨しくも月を隠るゝ

秋田

露結ふ小田のなはてのかりしほも靡く穗波の色に見えつゝ

掃衣

あまつ風いとゝ夜寒の里人や月をも霜とくもうつ覽
聲にたにねられぬみ社から衣うつ人よりも夜さむしりけれ

南都西南院にて哥よみ侍ける時里擣衣

またきよいかすかの里の夜寒をもしるよししてや衣うつ覽
月かけに秋をく霜のあさ衣夜をかかねてや打あかすらん
みよし野の里のたのものかりころもよると契て今やうつ覽

鶺鴒

いか計みにしむものそうつら鳴夜は深草のさとの秋かせ

紅葉

けふは又杵にまさる色もなしひとしほそめの木々の紅葉は
はてはまた露をも染るもみち葉や此世にむくふ色にみゆ覽
染つくすからくれなるの錦きや千束にあまる色とみゆ覽
はし紅葉庭に立枝の色よりやおもひのほかの人もとひけむ
霜かれの芦のおち葉のなかれ江に數そふをのゝみなと舟哉
はつせ山夕くれなるの日影こそ檜原を染る色とみゆらめ
あらしやま染る梢のくれなるに日をへてかはる瀧のしら糸
忠光卿の家の障子にうつつの山のもみちを旅人の分て
のほりたるどころ

日のもとの秋とはみえすうつつの山からくれなひの蔦の下道

月前菊

をきあかす霜の籬のにははすは月とはかりやしら菊の花

三位爲重卿石山にまふて侍りてよませ侍し歌の中暮

秋鳥

曉のしきの羽かきかきつめむもゝ夜もまたて暮る秋哉

秋雨

松にこそ晴るまもなく時雨けれ染えぬ雲のあとの山かせ

暮秋

紅葉はを猶こきいれむ立わかれ行とも袖に秋やとまると

閏九月盡

うきものくはゝる秋とおもはてやけふの別を猶したふらん

冬

初冬

新後拾

ふゆを社時雨も告れ定めなき世はいつよりかはしめ成けむ

岩橋の夜の契の神な月けふやしくるゝ雲をかくらむ

時雨さへなへては染ぬ梢かなにしこそ秋とみゆるはかりに

ほしあへぬ老のねさめの衣手は夢そ時雨のはれまなりける

落葉

空蟬のからくれなるに見し色も今はむなくちゝ木のは哉

誘はるゝ心木葉にたくへてや風のすみかもゆきてうらみん

幾重ともしられぬ庭の木の葉哉散をは風やさそはさるらむ

くち果てもとの跡にや歸るらん木のはに埋む家のかよひち

寒草

色々の秋のかたみも今はたゝあたのおほのゝしものした草

霜

老ぬれはいたゝく霜の起ふしも身を心にそまかせさりける

冬曉

水に入かも河風さむけれはゆふつけ鳥もこすゑにそなく

田殘鴈

花になく鳥とそみゆるしら雪のふるのかり田におつる鴈金

氷

夜をかさねみきはやとをく成ぬ覽よすれは氷る志賀の浦浪

風さむみ曉おきにむすふ手の雫も氷るやまの井のみつ

寒蘆

難波かたなかれぬあしの枯葉こそ氷につなく舟とみえけれ
水鳥

なつみ河氷れる比は山か雪もすみえぬかたとかもや鳴らむ
世わたるはくるしき物と水鳥の下やすからぬ思ひにもしれ

千鳥

沖つなみ夕しほなからさゝしまの磯こす浪にたつ千鳥かな
霜さゆる浦の苦屋の鳥のねに又ねをそへて立ちとり哉

人の追善しける日題をさくりて歌よみける時千鳥
つのくにのこやの寢覺の友千鳥跡をとふにもね社なかるれ

叢

たをやめのかさしのかつら空にのみかけて亂るゝ玉叢哉
身にちかき衣のうらにかけなからみさりし玉とふる叢哉

てい

さらぬたにぬきも留めぬ白玉のをのゝ淺ちにちるあられ哉
風さやくるなのさゝはら玉ちりて宿なき床に叢をそしく
ぬきとめぬ玉のをすての山風にいとゝ亂れてふるあられ哉

雪

埋めともひと木を松のしるしにて雪に隠れぬ志賀のから崎
もしほやく蜃の磯屋はうつもれて窓なき雪にたつ煙かな

竹の葉に降しら雪や木にあらず草にもあらぬ花とみゆらん
ふりにける跡こそみゆれみよし野の里は昔の雪のあけほの

新後拾

うつもれぬけふりを宿のしるへにて雪に汐くむ里のあま人
いとゝ猶雪にはよもとおもふ社霜よりかれし人めなりけれ

昨日までよそなる雲と峯の雪みきはにたにもつもるけふ哉
いとゝなを雪のとさしと成しよりむくらの宿はとふ人も無
山のはにあはたつ雲のその儘に消あへぬ雪の日數をそふる

鷹狩

はし鷹のとや野の草の冬枯につかれの鳥や又こもるらん
けふ幾日かたのゝみ野のなら柴に馴てもあかす狩くらす覽

消あへぬ雪のふる道跡とめて又くるす野のけふの御狩場
枯のこる交野のみのゝ村柴に鳥ふみたてゝあさるかり人

はし鷹の峯飛こゆる左羽にみぬおち草のつかれをそしる
みねこゆる疲れの鳥の落艸をつくるやたかのほこ羽成らむ

御狩はに木ある鷹のをしへ草しけみも鳥の隠れかそなき
今いくか残る日なみの御狩場にかた野の眞柴ふみならさまし

宗匠家にて

更行はをみもおほみもおなし色に霜をかさぬる山あひの袖
歳暮

夜の程に行てはくへき一年を別になして何したふらん
老の波歸らぬ水のしからみもかけてかひなき年のくれかな

かく計くるしき老のさかそとしらてや年のこさむとす覽

戀

初戀

いかにして袖の涙の初しほにさのみはふかき色のみゆらむ
おもひたつ今よりやかて迷ふ哉人にとふへき戀路ならねは

開忍戀

よそにのみきくの池水もらさしと人め堤を猶やせかまし
契戀

ちきりしも偽ならはたのむとしらてや人の遠さかるらん
なからへむ命もしらぬあたしみに行末まてと何たのむ覽

逢戀

うつゝとも夜にやしらんまたなれぬ戀は夢路をたとる心に
いまよりや逢にかへむとおもひしもおしかりぬへき命成覽

別戀

きぬくを送るは辛き鳥のねの懸てかたみと成やしなまし
せめて身に曉計うきものとかこちて出んきぬくもかな
よしさらは只夜をこめよ明ぬとて辛かるましき別ならねは
深き夜の鳥は鳴ともつらからし別を人のいそかさりせは

顯戀

新後拾
いかにせむうたの焼のに臥鳥のよそに隠れぬ戀のつかれを

被厭暖戀

うらみしよ賤かさめの身の程を我たにうしとおもふ心に
いかにせむうきみといひて逢を命にたにも人のかへすは
忠光卿のいへにて褒貶の哥よみける時におなしこゝ
ろを

逢とおもひもかけす雲もなくなきたる朝の賤かかたいと

久戀

なからへて猶歎けとや命をもあふにかへしとつれなかる覽
人もうく我も報は世うかけてたか情なさもはてやなか覽

欲言戀

よしさらはしらせてたにと思ふ社忍ふにかへぬ心成けれ

隱戀

しられしなみを浮草にみかくれて水の心のわきかへるとも

寄月戀

よるといふ契は月にあり乍わたらぬ中や久米のいははし

寄霞戀

暮はてむ春をやなかにたのまゝし霞計のへたてなりせは

寄杜戀

いかにせん逢みぬ先にかつちらは名さへ浮田の杜のしめ縄
かくとたにいはせの杜の木枯にわか言の葉のいかて散けん

寄原戀

あふとはるなのふし原臥て思ひおきてそかこつ人の辛さを

寄關戀

こえてたにつらき隔はいかさまにふみたかへけむ逢坂の關

寄橋戀

しかりとて現にかゝるよしそなき絶なはたえぬ夢の浮橋
のこるよはイ
わたらてやさて山すけの橋はしら立名を何と思ふはかなさ

寄忍草戀

かれねたゝ心のおくの里の名を草葉につけて人もこそしれ

寄思草戀

霜さやくをはなかもとの草はなと枯れとなかに猶茂るらむ

寄下草戀

とはるへきたよりたになく枯果ぬ生田のをのゝ霜のした草

寄菅戀

契のみさもあさは野のみわこ菅なにねふかめて思ひ染けむ

寄松戀

岩代の松にむなしき中ならは結ふやつらき契なららん

寄檜戀

遠さかれかり場にたてる檜柴のなれすは辛き色やみえぬと

寄舟戀

身のよそになるとを落す早舟のめにたにみえす過る夢なさ

寄淚戀

うしとたにいはぬにぬるゝ袂かなこゝろをしるや涙成らん

寄玉戀

さふね河神にもつらき名をたてゝ玉ちる涙に身をや沈めむ
宗匠家にて題をさくりにて哥よみ侍し時おなしこゝろ
を

^{新千} 偽の言の葉とにをけはこそなみたの露の玉とみゆらめ

寄鏡戀

山鳥のおろの鏡はおろかなる中にかけてや猶くもるらむ

寄棹戀

みるめかる千尋の海にさす棹の及はぬ中に身もつかれつつ

寄衣戀

むらさきのねすりの衣涙にもあさはかならぬ色はみゆらむ

寄糸戀

夢にたに猶夏引のいとせめて戀しき時はなにをたのまん
すちよはみ逢みむまての玉のをも猶たのみなき賤かしけ糸

寄布戀

むねあはぬ思ひよいかてあす迄の命よいかにつふのほそ布
ある人たびゝ文をつかはしけれともむなしくもとの
文のみ返し侍ける女のもとへ又ふみをやるとて哥
よめと申侍しに

返すさへ手やふれけんと思ふにそ我文乍うちもをかれす

近衛前關白家にて題をさくりにて百首哥よませられ侍
し時

いまこむといひし夜との偽やかはらぬもうき契なるらん

おなしとき寄糸戀

絶ぬへき程をしらるゝよるたにも頼まぬなかの賤かしけ糸

聖廟にて三百卅首哥法樂し侍し時寄雲戀

雜

いかにせむ夢の契もなき中におくるあしたの雲と消なは

寄枕戀

さのみやは逢瀬もよとのこも枕ならへぬ中に思ひみたれん

浦船

よるへなき浦のすて舟主やたれとへとしら涙立さはきつゝ

夕

儂くもおとろかぬ哉行するの日毎にちかきいりあひの鐘

夢

いつもかくなかきねふりの覺ぬ身は現や夢のたゝち成らん
世中はねてもさめても夢なれば現とおもふ時のまもなし

古寺鐘

初瀬山檜原の風にひゝきて猶夜をこむる入あひのかね

旅

草枕ゆめをたのみのふる郷もねられぬ夜半は遠さかりつゝ
朝露のかこと計に東路の道のはてまでもおもふはるけさ

すみた河よしことゝはて故郷にわか思ふ人の有よしにせむ

うつつの山あふ人あらはとひてまし行すゑしらぬ薦の下道

月にゆくさよの中山なかゝにあけは麓に宿やからまし

南方退治發向の時天王寺にて人ゝ題をさくりにて哥

よみける時旅友

このたひは旅としもなしつれて行友を都とおもふ比かな

應安六年八月おもひのほかのもありて白川關こゆる

とておもひつゝけ侍ける

秋風の吹につけてそ都出てつもの日數もしら川の關

名所泊

うろちより入にしむろの泊ふね法にもとまる心はなれよ

田家

まところまで守あかせとや小山田のいほりはもに夜寒成らん

山家

すめは猶かはらぬ物を世のうきめみえぬ山路と何尋ねけん
山深くさのみはいらし世のうきは聞につけてそ猶厭はるる
そむかむといふ人とのかれこは山や中々うき世ならまし
やま里に住はてよとや世のうきをくる人との先かたる覽
山さとに又のかれ來る人そなきわか佳ほとやうき世成けむ

近衛前關白家にて題をさくりて百首哥讀せられし時

窓竹

榮にも雪にもあらぬ竹の葉を窓には風のなにあつむらん

同關白家にて憂喜依人といふとを人々によませられ

しとき

追風をむかふといひてとまる社こゝろの舟路なりけれ

法印淨弁もとにてかんなの題にて哥よみ侍し時わか

み世にふるといふとを

有増のなくは何をかかすならて我身世にふる慰めにせん

おなし時ひとつこゝろを

世を捨る人に心をあひそへてのかれぬ先に山ちをやみむ

世をのかれて高野に住侍けるころおなし時に遁世し

て都に住侍し人のもとより

世をすつるおなしみながら住山の深きやふかき心なるらん

と申をこせて侍ける返し

いとへたうき世を厭ふ心たに深くはふかき山ならずとも

述懷

うきことを世の習そと思ふこそ身をすつましき心なりけれ
儚しと人をはいひて捨ぬこそみの程しらぬこゝろ成けれ

かくて社只世にはすめ捨るとはいふへき程の憂身ならねは
のかれはと思ひし程はなけれ共捨てはさすか身社やすけれ

世のなかをいとふこゝろも淺きより深きにうつれ墨染の袖
うき時は世をのかれしと思ふ社みをもうたかふ心なりけれ

世のうきも今いく程と思ふ社老になくさむこゝろなりけれ
背かむと思ひ定むる身成せは世のうきしもや嬉しからまし

きためなき世の習ひこそ中々に數ならぬみのたのみ成けれ
淨弁法印かもとにて題をさくりて百首歌よみ侍し時

懷舊

おもふ社ことはりなれと聞人のおもふ計のいにしへもかな

懷舊

我のみや忘れはてまし思ひてのなきか忍はぬむかし成せは

懷舊

いと猶忍はれむとやいにしへの立もかへらて遠さかる覽

心には過こしかたのちかけれとかそふる時やむかしなる覽

涙ゆへくもるもつらしいにしへを忘れて月を見る夜半も哉

なにを音を音になして忍ふ覽うきはさなからもとの身にして

數に過しむかしをしのお哉老は物をや忘れさるらむ

釋教

よしあしと道をあまたに分る社心ひとつのさと成けれ

一枝をさけし法の花にこそ心ひらくる人は見えけれ

まよふそと思ふこゝろの初め社まことの道のしるへ成けれ

墨染の衣のうらのたまゝもうけかたきみを又やしつめん

よしあしと聞けはそ迷ふいかにして心の外の道にいらまし
高野に住侍し比奥院に通夜し侍し時思ひつゝけ侍り
ける

新撰告
高野山うき世の夢も覺ぬへしその曉を松のあらしに

神祇

いかにして神のうけひく程計心のしめをかけてたのまむ

南都西南院にて題をさくりて哥よみ侍し時春日

東路の道のはてよりさしてこしみかさの山を神代はるけき

寄月神祇

さやかなる月のみふねを猶かけて神代忘れぬから崎の松

・僧正宗縁かもとにて歌よみ侍し時寄神祝

君を守り神をあかむる契のみたえすや世々にむすふはや玉

代々たえぬ手向ともなれ神垣のちりよりなれる大和ものは

集中所載。伊登々亂天降靈哉。諸本作「亂矢散者玉靈哉」。

管觀ニ熱田宮藏日本書記。其本悉用ニ反故紙。中有三元可懷

紙。乃此歌存。就以按訂。可謂「奇遇」而已

源弘賢

右元可法師集一卷以屋代弘賢藏本按正畢

宗祇法師集

春

立 春

あら玉の春たつらしも天の原ふりさけ見れは霞たなひく

草菴にて人々廿首哥よみ侍し時海霞

伊勢の海や春は雲のあま衣しほなれそめてたつ霞かな

海邊霞

あま人もからぬみるめをいせ島や霞によするはるの夕なみ

雪中鶯

花としもえやはみ雪の山陰にこゝろもしらぬうくひすそ鳴

草庵の月次會に鶯呼客

さそふとも人しとはすは梅かゝを鳴ねにしめよ宿の鶯

春 雪

かすみつゝ今朝うちゝるは山里に消るもしらぬこそ白雪

梅花薰簾

梅かゝにねぬ夜しられて玉すたれあくるもまたぬ鶯のこゑ

三十首歌よみ侍しに梅香留袖

梅か香ももとのねさしの浅からて色こき袖に猶にほふらん

宗匠 飛鳥井入道大納言家にて三首哥講せられしに月前梅

夜を寒み梅かゝちかき手枕に月はかすみてはるかせそふく

梅の哥の中に

そことなき梅のにはひのしるき夜はやみの現に春風そふく

夢のみか梅咲みねのもろこしもにほひに近き夜半の山かせ

春 草

みえ初て露たになれぬ若艸のすゑ吹むすふ野への春かせ
河邊柳

いなむしろおきふししけく山もとの河そひ柳春風を吹

老ののち攝津のくにの閑居にて五十首哥よみ侍し中

に岸柳を

下もえし草葉の色をもそくとくわかれて靡く岸の青柳

春田雨を

なをさえて霜はをくともかへすへき岡へのさなへ春雨を降

湊歸鴈

ゆらの戸や湊こき出るかちの音もはるかに霞むかりの一聲

艸庵にて三首哥講せしに歸雁似字

これやその別とかいふ文字ならむ空にむなしき春の雁かね

都とをき所にて歸雁をきゝて

古里と思ふはかりの戀しさや身はなをさりの春のかりかね

細川京兆(政元)すゝめられし太神宮法樂百首續哥に

駒とめて猶かへりみよあふ坂や月の宮この春のあけほの

三十首哥の中に春駒

はなちかふ春野をみれば旅人の朝たつ駒もいはへてそ行

春月

身やはあらぬ露もくもれば恨こし月にあはれむ春のよの空

いかにせむ春に霞める月としも思ひなされぬ老のみるめを

霞む夜をならひときけは老のみの慰さむ月は春のみやみむ

宗匠家月次三首會に尋花不定處

咲さかす今朝は宮古の春霞いつれの花におもひ立らん

初花

消もあへすけさやは櫻雪とのみ思へはかほるはるの山かせ

寄霞花

かすめたゝさきも咲すも春の山たゝをしこめて櫻とそみむ

周防國に侍し時百首歌よみしにおなしこゝろを

俤はかすめる花もとをからて梢にまかふはるのやまこえ

遠望山花

いかにみておもひもわかむ曙のとを山さくらみねのしら雲

尋花

一もとにとまらて過は花はたゝおほかた春の山ちとやみむ

宗匠家にて古今の一句を題にて人々五首うたよみ

し時はなのところは

心とめむ花のところはいつとも思はしいはし咲を限に

おなし家會に花主といふとを

我庵の梢ともみし春はたゝ遠近人に花をまかせて

深夜思山花

ふしわひて花やいつくの山端にかつなくさむる有明の月

月前見花

いたつらに人はねぬ夜をうくひすや月と花とに心みゆらん

紀元家許にて侍し三首會に朝花

うちしめり花は色そふ朝露にみたれぬ程の春風を吹

折花

折とらはおしとおもふも我なから心にゆるすはなのひと枝

交花

馴ぬとて花に忘な深山木のかたはらにたにあらしわかみを

宗匠家の會に志賀花園を

かはかりのあはれはぞへし古の春やは老木志賀の花園

五十首哥の中に山花

うつりこし世のあらましの色々は花に跡なきみよしの山
盛花

みよし野の春の雲のを見ぬ人や花は程なきものとする
人の世にたのむ盛もいかならん咲そふ花はやま風そふく

寄花逃懷といふを

なからへて思へは人に見えぬへきうきめを花に猶や忘れん
源氏物語卷名を題にて哥よみ侍しに匂兵部卿宮

ぬれつゝや猶身にしめむ春雨の名残に匂ふ花のしたかせ
散かたなる花の露のをきたるをみて

しほるやとおもふは辛し夕露も花にやとるを猶あはれなる
花のころ待人のとはす侍し時

寄雪花

跡もなき雪にやあすは慰さめむ春にけふこぬ人はうけれど
庭の面はこそ見し雪のかたみにて跡なき花をいつも尋ん

無風花散

上杉民部大輔亭にて二樂院下りたまひしときの會に
花そうきかねてうつろふ秋の色を風より先にいつならひ劔

花
いかにせんいとふ心にまかせてもちらは形見の花の嵐を
草庵にて三十首哥よみ侍し時同じ心を

花哥中に

ちらせたゝ風の誘はぬ世成とも花にいかなる限りをかみん
あやにくにいとへはちらす世成共花には風を誰かしたはむ
あらしにはことの葉つきて花をのみ恨む計にちるさくら哉
うらむへきかた社なけれさそひ行風の宿りは花にみゆれと

春鳥といふことを

春ちらす風のやとりをしら雲にたつねわひてや鳥も鳴らむ

源盛郷もとにて哥よみ侍しに夕雲雀

思ひすてぬ草の宿りのはかなきもうき身にゝたる夕雲雀哉
かたし舎にて曉きゝすの鳴しを聞て

河欸冬

霞たつとやまの庵の東雲にありかもしらぬきゝす鳴也
水の色は花ににこれる影ながら猶清たきの岸の山ふき

橋邊款冬

駒とむるいたゝのはしの夕浪にこはれて匂ふやまふきの花
寄花逃懷といふを

三十首哥中に松上郎

山吹の花をしみれば老か身のとはすかたりも驚かれぬる
咲かゝる汀の松に竹河のふちのみとりもそれかとそみる

暮春

たかつの人丸によみて奉し哥の中に春欲暮
うつりきて月は有明花にはあらし宿とふへくもみえぬ春哉

夏

新樹露

行春や人に忘れん打すてゝ散にし花の跡の思ひを
下草の露さへをのか秋の色をよそけにしける木からしの松

三十首歌よみ侍しに杜新樹

卯花隔路

郭公秋にはあはすこのころの牛田のもりを一聲もとへ
あなうとも花をはいはし雪なからさらても埋む宿の道草
夕卯花

月はまた山のはくらきたそかれに光さきたつ庭のうの花
世中長閑ならさうし比一日百首よみ侍しなかに葵を
末の世の露のみたれにあふひ草猶そのかみそかけて戀しき
雲間郭公

村雲の空にやまたむ郭公おもひきたむるしるへならねと

蒲生兵衛尉宿にて宗匠下り玉ひし時の會に山家待郭
公といふとを

時鳥わかすむ峯の待もまたえぬる身とは思はさらなん

初聞子規

子規わかまつことをしるやとおもひもあへぬ夜半の一聲
またてこそ聞へかりけれ郭公さてや心もおもひしつめむ

郭公一聲

たかしたふ今一ころを郭公思ひかへしてこゝになくらん

ほととぎすのうたの中に

たか里もあすやさかまし時鳥今一聲の夜半の行末

時鳥頻

なくころの數にやとらむ郭公おちかへる山の瀧のしら玉

菖蒲

けふふくや何の菖蒲もみえさらんさらても軒は草の宿りに

五十首歌の中に早苗多

みな河皆堰かけて筑波ねやすそはの早苗とらぬ日はなし

草庵の會に盧橘を

昔こそ人もかゝけむ道芝に露けくにはふ宿のたち花

夜盧橘

いかならん花たち花の匂ひにか思ひさまさむいにしへの夢
たか軒のにはひともしなき立花に月のかつらの追風そふく

杜五月雨といふとを

たのむ影もなくてふる身の悲しきは雪の杜の五月雨の空

五月雨の歌の中に

待てけふかとおもふをやみたに曇り暮せる五月雨の空

三十首歌のなかに夏草滋

常夏の花のあたりを忘草生る野へとはいつあらしけむ

瞿麥露

唐衣ぬるとも露の夕陰にやまとなしてこおらてやはみむ

鵜川

山蔭やこしけき中のうかひふね此世の闇をみるさへそうき

螢

いたつらに身を焼すつる蟲よりもえて難面影そはかなき

河螢といふとを

さゝれ石の思ひはみえぬ中河にをのれうち出て行はたる哉

紀元家月次三首の中に蓮

池廣み清き渚のはちす葉にひろふはかりの玉そこほるゝ

藤原國雄かもとにて三首よみ侍し中に夏煙

限あれば雪さへ消るふしのねに絶ぬけふりを哀とそみる

泉

山城のいつみの小菅それなから岩しく庭にまかせてそみる

百首歌の中に行路夕立

行なやみてる日にたのむ木のもととはぬるとも出む夕立の空

蟬

あつき日の影よはる山に蟬をなく心の秋やゝかてくるしき

晩夏蟬

遠からぬ秋をまかけし鳴せみの薄き羽にをく露のいのちは

秋

三十首歌の中に早涼至

すゝしきはけふ立初る秋としもみえぬ音羽の山のしたかせ

早秋風

この夕また秋かせの宿やなき旅ねして行いせの濱萩

七夕

人の世の淵瀬にそおもふいつの秋わたり初けん天の河なみ

夕月夜影ふけ行は萩の音もやうらかなし星合の空

閑居五十首歌の中に萩風

あくれともうしとも聞を暮毎の心や萩にうたかはるらん

三十首歌の中に萩露

おもふとも風よりやうき露ならんしほるなまちそ萩萩の花

萩移水

いはれ野のふる枝の眞萩花咲は池にもとの心をそしる

野草花といふことを

秋の野の露分ころも行かへり花にしほれぬ夕暮そなき

野薄

風吹は一野にたてる花すゝき思ふ計の袖もはかなし

宗匠家月次の哥に秋草

紫の色こき時の秋ならはなへて野分や吹すしもあらん

閑居秋風といふを

さひしきも身になれはてし山里は秋吹かせの夕くれもなし

秋夕感思

身は老ぬなへの思ひの露までもかゝらしとすれば秋の夕暮

秋もわきて夕は老の何なれや思ひも露も身をくたく覽

老のゝち哥よみ侍し三十首歌の中に尋虫聲といふを

聲にこそさそはれもこめ松虫の思ひの露を身にやかくへき

夜虫

終夜ねを鳴むしのおもひをそ螢よりけにもゆるとはみる

たかならぬ思ひによるの蟋蟀夏虫のみやはかななるへき

曉鴈

おき出て山端みればなく鴈も空にたな引東雲のくも

本能寺日譽法印坊にておなしこゝろを

露けさをそのころならぬ天津鴈こそかく社聞しね覺に

左右聞鴈といふことをある人しるてよませ侍しに

聞のうへにをくれさきたつ行鴈を傾ふく月にむかひてそ聞

深夜鹿

おく山のあらしにたへて鳴鹿やうき世の人の心なるらん

鹿聲遠

さやかなる嵐のつての鹿のねも猶其山のそことしもなし

野外鹿

花すゝきわか手枕の野へとたにおもはぬ妻に鹿の鳴らん

草庵の會に田家鹿を

我もらぬいねかての夜に悲しきは鹿をふ庵の曉のころ

百首歌の中に露底樸花

朝良のはかなきうへにむすへはや花にはをもぎ露とみゆ覽

權を

老は猶夕かけまちぬ露なからうつろふ花をはかなくやみむ

山端月

更て澄かけはあれとも月は猶山のはのほろ夕やみのそら

河月

水ならぬ水をしきて月影の清きかはらに秋かせそふく

湖上月

鐘の音はあらしに更て秋の月浪にいさよふ志賀の山もと

月そすむ大宮人も秋は来て波に棹させしかのからさき

江月

月そすむなを漕わたせ松浦ふねほり江に秋の夜は更ぬとも

周防にて讀侍し百首の中におなし心を

霜かれのさひ江のあしへゐる鴨の鳴ねも悲し有明の空

島月

誘れていはゝや月にうさねするみつの小島の人ならずとも

疎屋月

月たにも猶かけとめよ住侘て身はかれゆかん露のやとりに

宗匠家月次三首に終夜見月

待うかれ出にしまゝに幾里の夕つけ鳥を月にきくらん

晨明月

みる人も心すむへきあか月に待てや出しありあけの月

貴賤憐月

憂身なとおなし雲るに詠むらん月にそ人をわかすみるとも

三十首哥の中に月前情

月に猶身は憶るゝ世の憂めみえぬいつくもありて行やと

關路惜月

清見かたまた明やらぬ關の戸をたかゆるせはか月はこゆ覽

野草欲枯

しほれかしあたの大野の秋風はいつれを残る艸葉とかみむ

峯の松になくねはたえし蟬の羽の夜のあらしに衣うつこゑ

越後に下侍し時かのくににて題をさくりて哥よみ侍

し中に聞擣衣といふとを

月草のはなたの衣うつこゑもうつろひよはる有明の空

海邊擣衣

聞わふるね覺の袖にこす涙をしらてやあまの衣うつらん

三十首の中に曉霧

きり立て山かせさひし古郷のさほの河原のありあけの空

山朝霧

拂ひ行松のあらしのひまみえて一村ふかき峯の朝きり

崎霧

秋の日はかち野に暮てたつのとふみほのみ崎に霧立わたる

紅葉の哥のなかに

時雨こそきためなからめ山姫の染る心になにをわくらん

うちそよく紅葉のうへの一しくれ色をのみやは俤にせむ

山姫の思ひの色のした染にこゝろつくさぬ初しくれ哉

越後國にてよみ侍し哥の中に紅葉深

うすくこき梢のしるし染はたす心やをのか千しほ成らん

老後三十首哥よみ侍し中に紅葉映日

夕日をやかねて時雨の染つらんかけに照そふ峯の紅葉は

河邊紅葉

河風はさそひ行ともしからみを梢にかけよ秋のもみちは

紅葉霜

霜にとや思ひをきけん夕時雨染のこす山の今朝の一しほ

五十首歌の中に殘菊句

獨情暮秋と云とを

みひとつに限られて慕ふけふの秋も老にはにたる人やかな覽

雨中紅葉

心とめて時雨や染し紅葉くに露のはへなき秋もある世を

冬

草庵月次三首哥に山館冬至

たまさかの人めも草も秋は猶あともえし庭に峯の木からし

初冬時雨

染のこす梢ありとや神な月まさたつ山に今朝しくるらん

夕時雨

この比はゆふへの袂空の雲秋はなみたもしくれさりけり

艸菴にて題をさくりて哥よみ侍しに時雨

夕まくれわれゆへ袖のしくるともしらてや空の雲は過らん

時雨雲

跡もなき時雨とみれば夕くれの袂に歸るやまのはの雲

閑居にて五十首哥よみ侍し中に朝時雨

あさからはぬるゝいく夜の露よりも一時雨にやたえず散覽

谷落葉

道たえてはらふ人なき谷の戸の夕日かくれにちる木の葉哉

霜埋落葉

吹たむる木の葉を庭にみたるそと風や霜にとちめをきけん

橋落葉

山河や瀬々の紅葉のうきはしを空にもわたす峯の木からし

三十首哥の中に木枯

をのれとも散もみち葉を木枯のいつ吹をめて名には立らむ

おなし三十首に水木無音といふ事を

なかれつゝ水もしらへし琴の音の緒をたつ計りいつ氷らん

寒草霜

白妙の花ふりはへて神垣やくすのかつらもゆふかつらせり

冬月

すさましき光もつらし冬のよの月に我世のかけやそふらん

ひととせのうつりかはりて亘る夜は霞も霧も月にさひしき

しろたへの光やふすま夜を重ね月におほえぬ岡岡イの山かせ

湖千鳥

とひ捨し名残やつらき小夜千鳥あさつま山の陰に鳴也

越後にて哥讀待し中に海邊千鳥を

たちうかれ夕鹽みては汀さへ興津河原に千鳥鳴なり

千鳥の歌のなかに

なにことをうらみわたりて濱千鳥もに住虫の音を忘るらむ

水鳥

さよふけて鹽風わたるあしのはのしなへうらふれ千鳥鳴也

みなと川夕しは見ては山のはに渡るもさはくあちの一むら村鳥イ

三十首の中に水鳥多といふを

鷗うく入江にみすやあしかものさはく中にも静かなるよを

冬海

なみ風の心にも似す冬の海を長閑に渡るあまのつり舟

霰

小笹原ひろはゝ袖にはかなさも忘る計の玉あられかな

朝雪

つもるかとおき出てみればさえし夜の月より薄き峯の初雪

三十首の哥よみ侍し中に雪朝望

朝戸あくる袖にさえきてあらち山はらふ計のみねの淡雪

殘雪

庭はまたはまゆふはかり降雪にいく重たかねの遠のしら雪

池邊雪

自妙の山をうつせる池水はみ草を雪のたえま成ける

遠村雪

いつもみし外山の里を朝ほらけ雪にそおもふ誰かすむらん

野外雪

としのうちにみし色々の白雲のたつ野と成て雪そつもれる

越後にて讀侍し哥の中に磯雪

浦かせは鹽ひにさえて磯の松梢の雪に波そくたくる

海邊松雪

いかにせむ春の海邊も忘れねと雪のあしたに住よしの松

爐火

冬の夜はたく火を友とおる枝の心つよさも老を悲しき

圍埋火

埋火も螢はかりに更るまのね覺は夏の幾夜をかへし

爐邊閑語

かきつくしかたれはむねの埋火も消て夜深き床のさむしろ

鷹狩

山高み鷹ひきすへて狩衣すそはのとたち今やとそまつ

たつ鳥に心もやらぬ箸鷹のみえぬつかれをいかしてらん

一より

にやかてとりかふ箸鷹のその振舞をみぬもしらるゝ

歳暮雪

ひとゝせの過行道はかきくらし雪の積るを猶しるへなる

又はよもと思ひし昔のとしの暮にめくりあひて七十

にむかへる比つれなさにならひてたのむ心の侍るを

なけきてよめる

かきりぞと思ひし暮はめくりあひぬ頼むや年の果にも有寛

歳暮

網代木にいさよふ程の暮をたに年やはみせぬうもの河浪

いひもあへす移るは年のあた波をはかなく袖にせく水かな

戀

初戀

見初ても程は雲るに夕月夜ほのめかすへきたよりたになし

閑居五十首哥のなかに寄雲戀

人しれぬきは思ひも中空にかゝらて消よ夕くれのくも

審露戀

儚くや秋にもかけむわかうへにをきそめし夜の露の恨を

忍戀

思入しのふの里はあさくともいつくの山をなをやたのまむ

忍親眼戀

かゝる嘆きありとはみえしその原やふせやに生る影も耻し

言出戀

夏虫のいはぬ思ひをそれとたにしられは何か聲もゝらさん

三十首哥中に戀雲

名にたかき岩木の山を君としもなと白雲のかゝりそめけむ

おなし三十首に戀煙

夕けふり遠近人も哀しるおもひをよそに君のみやみむ

寄煙戀

われとやはけふりをたゝん君にこそ思ひけたるゝ思成とも

跡もなき煙とやみむ戀しなはよゝにもゆへき胸のおもひを

不逢戀

難面にかへてや消む朝露のはかなきながらうけかたきみを
永からぬ命の内をかたいとのこなた彼方に世をやつくさむ
祈不逢戀

越後にてよみ侍し哥の中に祈戀を
しるしなきみそきに袖はぬれ増る神も心になみやこすらん

とにかくに祈りそわふる戀せしもうけぬ誠を神にしらねは
隠住所戀といふを

家しあらは猶たつねみむ玉島や人のこゝろの秋の河きり
草庵にて哥よみ侍しに通書戀

ひと筆のみえはや心言葉をつくしていはゝかきりもそなき
待戀

たかならぬ哀も待はつれなきにはかなや人をうらみつる哉
時ならぬあらましにのみ待事をけふとて頼む夕くれもかな

戀日

つらからん夕を空にいそくやとたのめぬ中は曇る日もなし
寄月戀を

おもひたえむ限あらはそこぬ人の待るゝ月を恨みてもねん
三十首歌の中に戀月

戀風

さしこもる心のゆるひもなき夜半の恨をいかて月につたへむ
吹風に身をなすとてもいかゝせん心の松の人にみえすは

日暮れは心ほそくも身にそしむ松にかゝらぬくすのうら風
忍逢戀

待ふけぬきかし誰もとかたる夜の月をいかなる人かみる覽
袖におちむうき名やとらん夢はかりみし世の床の山河の水

老後三十首哥よみ侍しに寄組戀
うつろはむ物としならはあたし野の花の下組なにゝとけけん
宗匠家月次三首に疑行末戀

憂身にはか計やはともの葉にかゝるにたのむ行するそなき
艸庵月次會に憑誓言戀

儚しや千々の社にかけすともたゝ一とにみえむまことを
越後にてよみ侍し哥の中に依忍久戀

猶幾夜としを渡らん行河もありてはみえぬ人めつゝみに
後朝戀

朝ほらけうはの空なる雲をたにかたみにとめぬ夢を儚き
五十首哥の中に寄枕戀を

はかなくていはすやなりし枕にもしらせ置へき今朝の思を
三十首哥の中に戀塵

跡にたゝむ名をし思へはわか心塵をいつとも猶やみたれん
寄虫戀

人はたゝわれかとおもふ心たになくてや聞かん松虫のこゑ
老後三十首哥よみ侍し中に寄山鳥戀

戀わひぬあらはいさめむちゝ母の遠山鳥の音をのみそなく
寄都鳥戀

いつかきて影をもみせし都鳥涙の川は水かさまれと
寄獸戀

契あれとみなればそれもうしとてや咎むる犬にかとよす覽
寄鏡戀

なにかおもふたとへは君か俤も鏡のうちのかりのかたちを
寄木錦戀

うれへをは身にとりかけてゆふかつら長くや人の思放れむ

寄船戀

まほならぬ人の心のかちかはとも角にもとりを煩らふ
藤原國雄許にて哥よみ侍しに夏戀を

恨しよさても思ひは晴れやらぬ五月雨髪のゆふかひもなし
草庵の月次會に絶恨戀

猶しはし覺さらましをぬるかうちに思ひかけきや夢の浮橋
寄身戀

をそくとて此身をうけは人にやはあふは別の世をも歎かん
寄心戀

忘れなむうしとて人を一かたにうらむるのみや心なるへき
寄忍草戀

忘れ草人したつねは岸もなくみつ鹽さそへそての浦かせ
恨戀

よしさらは憎しともいへ其をたに恨ところのある人にせむ
雜

攝津國の閑居にて五十首哥よみ侍し時曉述懷

さそひ捨て山のはちかくなる月に老は幾夜か涙かくらん
浮島の松を見侍し曉

難面であはれこの世のなみのうへにたてるや誰も浮島の松
老後草庵に松をうへ侍し時よめる

引植し松によはひをゆつりをきて苔の下にや千世の陰みん
遠村竹といふを

山陰や竹一むらにかこはれてすむ世のほとに誰としらねと
名所鶴

徒にあけぬ暮ぬと老か身はうねのゝ田鶴の音をのみそ鳴
古寺鐘

夢さそふ鐘は麓に聲おちて雲に夜ふかき嶺のともしひ

夕まくれ遠山寺はそことしも見えぬ木するに入あひのかね
山家經年

うへし世はわすれ草生る山里の軒はゝ松のかけおほふまで
山家夕

夕暮はぬるとも袖に山深み世のうきにたにならひこし身を
山家の哥の中に

をのつからうき世をしらぬ山賤そのかれて後も羨まれぬる
心より老こそたより山里に住はてぬへくおもひきためは

草庵にて侍し會に山家水
たえぬなかれとまらぬ水のいつれをか我住山の行末にせむ

おなしこゝろを
むもれてもすめは住世をわか庵におもひもならへ苔の下水

田家水

小山田のかひやの光ほのくとかすみそ渡る遠のさはみつ
三十首の哥の中に樵夫歸

儚しやたきゝつきなん夕を思はてけふもかへる山ひと
自影の讀

うつしをくも我影ながら世のうさをしらぬ翁を羨まれぬる
遣唐使餞

船出せは心をぬさの追風に吹もかはるなもろこしのそら
遠所へくたり侍し時宗匠禪門二樂院なと餞別のよし

にて訪におはせし時題をさくりて哥よみ侍しに旅行
心をやせて都にとゝめをきて行衛なきみを待人にせむ

おなしこゝろを
たれをしもこふる都そ住なれし名残はかりの涙ともなし

源盛郷許にて旅宿思都といふとを

旅ねともおもはすしはしうつる夜の都の夢は峯の松かせ

五十首哥の中に野旅

しらぬ野へあらぬ庵もやとるまの契おもへはふる郷もなし

本能寺にて宗匠わたり玉ひし時の會に旅宿

たれとなき都のこゑをあしかきのちかき旅ねに哀とそきく

旅宿雨

嶺たかみ椎の葉そよく夜の雨に家に在ともやすくやはねん

鞆中雲

いつくとも又も眺めむ古郷のかたみの雲はやまかせそふく

鞆中嵐

身こそ猶行ゑもしらぬあらしにも雲は宿かる夕暮の山

筑前國芦城山を越侍しにたくひなくさかしき道すか

らつゝけ侍し

世中はあらき山路に残る駒のふみもさためぬ物を社思へ

筑紫の大島を通侍しに千鳥のいたうなくも浦かなし

さまさりて

濱千鳥こゑうちわひむ大島の浪のまもなくたれを待らん

三十首哥の中に海路暮

しら雲の八重の鹽ちを過ぎてまた夕浪のうきねをやせむ

旅泊のこゝろを

湊風さ夜更ぬらしうきねする由良の筈やに月かたふきぬ

筑前の蘆屋といふところに泊侍しになたのしほやと

いへるよりもおもしろき波なれば夜もすから月を見

侍りて

鹽やかぬあしやの秋は哀なる月にけふりやいとひそめけむ

秋のよ更級に旅ねして侍しに見し夜の月は光なきこ
ちし侍て

いつくにて月を哀と思ひけむおは捨山のありあけのそら
つくしにて哥よみ侍しに旅泊の心を

なかめつゝ月より西におもひやりし旅ねも馴ぬ有明の空

宗匠月次三首會に残月越關

見つゝこし不破の關屋のさひしさを横たつ山の月に残れる

木丸殿の舊跡荊萱の關を越るとて

數ならぬ身をもいかにと人とはいかなる名をか荊萱の關

白河の關を越侍しに能因法師此關になこりをとめ侍

しことを思ひて

行末の名をはたのます心をやよゝにとゝめんしら川の關

於村松十首詠哥冠置名號

なかめやる一村松の木間よりたくひなみまによするふね哉

村に霞そめぬる松のはの色や真砂の山におとらん

このまよりしはしやすらふ月影をまつ陰悲しかりふしの床

くれて行春のけしきや真砂山かすみはかりのうら風を吹

うつるらし春をもしらぬ松かえに磯うつ波の花をうつるふ

さゝ浪や夜のまくらに聲そへてむすひもあへぬ夢の悲しさ

海原や舟の行衛もしら浪の哀うき世のわれそたゝよふ

ほしあへす月そやとれる心あれと蟹の袂にかゝる夕しほ

さひしさはいとゝまさきの海の波かへる昔の跡のあはれさ

釣垂るあまの小船の哀れ世をたゝあらましのけふも暮しつ

文明三のとし東下野前司常縁より古今集傳受の後年

をかかねて相傳のうへに猶のそむとありてたてまつ

りし長哥

久かたの あまのうき橋 すらとをく たえせぬ世々の
ことわさは いつれの道も かはらねと 猶しき島の
やまとてふ ことの葉のみそ たくひなき かゝるやあしの
身にしあれば 雲井にみゆる ふしのねの およふたよりも
なかりしを そこゐしられぬ わたつ海の 深きめくみの
しらつゆを 我かけそめし 道しはの かれすもおもひ
なけきつる 年の数さへ すてにはや 五とせ六とせ
過ぬれば 猶いたつらに そはりゆく 老木の松の
おもほへす かゝる嬉しき 春にあひて いま一しほの
もの葉を さくかうへにも 我たのむ 神のおまへの
櫛はの さしていたらん 道をおしへよ

反歌

身にあまる露をはしらて天雲の心たかくは君いかにせむ

老後三十首哥よみ侍しに述懐を

言の葉の道こそうけれさらてやは心のきはを人にしらせむ

述懐泪

捨やらて世のうきたひにこほれてふ涙は心あるかひもなし
ひたすらに世の理もしらぬ身とみゆへきものをうき涙かな

述懐の哥の中に

思へ共人をはいはぬことほりに猶身の上のしられぬるかな
世の夢にたへぬこゝろの誰ならば深き山にも身をなけく覽
等閑に世をは捨てと思ひこし心ふかさそ人におくるゝ
よしや身は跡なき夢と思ふたに夢にはたへぬ世こそ有けれ
よしあしのたかひに變る世成せは定めなく共身をや頼まん
沈み行みくつも何かつからんうかふも泡のきみを待まに

老後述懐

しらすりし世の理のよしあしを思ひわくさへ老を悲しき
老ぬればうき世の友もかれ行を厭ふに悲しやとりとやせん
行末の浮世を遠くおもはぬや老の辛さのやとりとやせむ
雑の哥の中に

ものとのいのるにかなふ習あれは誰かうき世を思しまし
宗匠(家イ)月次會に懷舊

おもふへきむかしもなきみ折くの涙は何をわすれざる覽

寄月懷舊といふとを

みるたひに佛たちぬ忘るなと月に昔の人や契りし

思往事

昔いかに我みし程の此世たにかゝるをやはと戀しき物を

東に侍し比たのむかけとも思ひし人煩しかはその氏

神に祈なとし侍しその歸るさにむなく身まかりけ

るよしを聞て

きのふまで千世もと祈る人をしも佛にたのむ道ぞかなしき

上杉民部大輔定昌逝去のよし聞てこしちのはてまで

下り六月十七日かの墓所に詣て侍しにいつしか道の

草しけくなりしを分暮してかへるさに

君忍ふ草葉うへそへ歸るさの苦の下にも露けくやみん

程なく文月十日比かへり侍し道に觀音のおはします

堂にとまりてかの名號を句のかしらにをきて哥よみ

侍し中に

瀬にかはる世をはや河のみなれ棹さして迎へよ岸遠くとも

さまゝに にかたちを分る誓あらはうつゝにみする像もかな

常徳院殿光かくれおはしましぬるよしを草庵に折ふ

し人々あつまりて哥よむほとにつたへ聞て花といふ

題にて

するゑの世のあらき風をも治むへき人なと春の花に散らん

おなしころ西のくにへ下り侍に明石の月くもりてい

たつらなる夜この君の御哥にかゝみ山とおもひしと

もなとあそはされけるとおもひいてまいらせて

鏡山光かくれしおもひにやあかしの月も猶くもるらん

おなし君のおほむ周忌に懇志のあまりに法華の四要

品をすらせて宗匠をはしめ結縁をたのみ申侍しとき

懷舊の哥に

けふにやはあらぬとめくる月も日もそのよそ夢の春そ悲敷

同じ第三回の御佛事のころ入道政行朝臣廿八品歌人

人すゝめ侍し中に常不輕品を

くるしくもおこなふ道よ曉のあらしにわふる法の師のこゑ

おなし時の懷舊に

おとろきしそのよの夢の春のかせとしも花に恨てそ吹

釋 教

かくとたに御法にとをき身をしれは猶墨染の袖をぬれそふ

迷ふ身の爲とてとける道ならば御法の末の世とおもはし

鷺の山ひろふ木の實のたねよりやかゝる御法の花も咲らん

細川京兆すゝめられし太神宮法樂百首の中に山眺望

いすゝ河しらゆふ花の浪のうへに神ちの山はかすみ棚引

宮崎の松原のいつれとなく神さひたるをみて

一木にはいかにさためし箱崎の松はいつれも神のしるしを

住吉の社にたてまつりし歌の中に

あはれとも神そしら波瑞籬やたのむ老木の松の朽葉を

寄月神祇

にしの海にのこる光を古郷の月とやしたふすみよしの神

高つの人麿に三十六首の哥たてまつり侍し中に寄道

祝を

末の世になりてもむかしありきてふ人をそあふく敷島の道

五十首哥のなかに寄松祝

あへてあはむ草木やしるへ折のこる心のまつに御代の春風

右宗祇集一卷以百花庵宗固藏本書寫一校畢

羣書類從卷第二百七十一

和歌部百廿六 家集四十四

嘉喜門院御集

春

白雪の猶かきくらしふるさとのよしのゝおくも春はきに覺
としなみのすゑの松山たちこえて又あら玉の春はきにけり
ものゝにあらたまれとも春をへておなしねにのみ鶯の鳴
とふ人のあところ見えぬ庭のおもに積らてきゆる春の淡雪
きえやらぬのはらの雪をふみわけて若菜摘にといつる里人
春なからふる白雪の下きえに緑をいそくのへのわかくさ
たつねても我をは誰かとひもこん植てかひ有やとの梅かえ
いそのかみふるのゝ草はゆききえてみとり色そふ春雨を降
新集春上
いきうしと思はぬ旅の空なれや人やりならぬ春のかりかね
花とみてまつ日かすをやなくさめん櫻にかゝる峯の白雲
春下
櫻ねつゝわけ入まゝにさく花の匂ひも深しみよしのゝおく
櫻花さきてとくちるならひこそ我身の春のものおもひなれ
春下
あふさかや嵐の風にちる花をゆくもかへるもおしむ春かな
嵐ふき花ちるころはよのうきめ見えぬ山ちもかひなかり覺
咲そめしそなたは風にかつちりて残るかたえに花を少なき

正平廿三年後村上 世中りやうあん侍し比この春移
しうへられし櫻の散たる枝につけて内後堀河の御方
より
植置しむかしの人のかたみとて手折櫻はおもかけもなし

御返し

かたみとてたをる櫻の花たにも散てあとなき色そかなしき
天授二年後堀河 やよひのはしめつかた如意輪に御こ
もりありし比御影堂のまへの花につけて内の御かた
へ奉られける

こゝのへに色そへて見よむかし思ふみのりの庭の花の一枝
御返し

なきかけを花によそへてしのへ共是もあたなる色そ悲しき
花にたに心はそめし遠さかる春のわかれのうきにつけても
還御のついでに入内ありしに花のこすゑとも残なく
さきてあたら夜の月のひかりもおりをえたるやうに
侍しかはこよひはこの花のもとにあかざるへきよし
申され侍しかともいそく事ありてくわん御ありしか
はつとめて花を一枝まいらせらるゝとて

難上
おしむにもよらぬ別は憂ものと君ゆへ花やおもひしりけん

御返し

同

あかすして別れしまゝにとめをきし心や花をさそひきぬ覽
物思ひなき世の春もをのつから袖にかすめる月のかけかな
住の江の松はふりぬる色なれとわかむらさきにさける藤波
暮てゆく春のなこりといはねともまかきにしるき山吹の花
春下
ふく風のめに見ぬ方にさそはれて花とともにや春も行く覽

夏

なれたにもしはしかたらへ時鳥よの人とはうき身なりとも

夏

あし引の山たちはなれ時鳥をのかさ月はさとなれて鳴

にけり集

正平廿三年五月五日とし／＼のしきなとやおほしめ

しいてけん一ほん(新宮)の宮より

今けふ集はまたあやめの草にひきかへてうきねのかゝる椎柴の袖

御返し

同

思はすよあやめもしらぬ墨染の袖にうきねの懸るへしとは

しめしは集

あまのすむ里のしるへの烟たにたえてほとふる五月雨の空
年へぬる宿のふる木のたち花はいくそのかみのかに匂ふ覽
難波かたあしのしのひの数そひてもえつ／＼とふや螢成らん
蟬のはのた／＼ひとへなる衣でのもりてす／＼しき月の影かな
松の風いはもる水のをとまても秋にす／＼める山かけのいほ
みそきするなみのしらゆふ秋かけて川風す／＼しみな月の空

秋

から衣たもとす／＼しく秋風のたつ日よりこそ露もをきけれ
なつ衣うすきたもとにふきそめて哀しらする秋の初かせ
七夕のくる／＼まつまにさきたちて秋風わたる天の川なみ

やよひの夢のゝちは絃をたちけんいにしへのためし

ならねとなにとなき御あそびも物うくて年月ををく

られ侍しに天授三年七夕の御樂ありしかは御ちやう

もんのために入内ありしついでにそのかみのことな

とやおほしめしめてけん御樂はて／＼後御ひはかり

にてたひたひす／＼め申されしかは小樂ともせう／＼

あそはし侍しにとし／＼の御たむけおり／＼のもの

ゝねなと過にしかたの事物哀におほしめしつ／＼けら

る／＼よし申されて

雪下

かくてのみ

そのかみの秋おもひゆる集

このまゝに絶すきかはや雲の上にむかしをのこす峯の松風

御かへし

同

あはれとも君を聞けるいまは世にふきたえぬへき峰の松風

はや集

つきの日夜部のしきなと申されたりし御かへりこと

のついでに東大寺のねはかりそむかしにもかはらぬ

心ちしておほしめしたさる／＼とおほく侍しまゝに

なを心つよくものかれ申されさりしくやしうなと申

されて

四のをのしらへにそへし松風は聞しにもあらぬねにや有劔

さらにまたなれし其世そ忍はれしきかなすとのねのみ流れ

御かへし

松に吹風はむかしの秋なからなかはの月やおもかはりせし

はかなくて過越秋や忘れんかきなす琴のねにしたてすは

をしなへて秋のゆふへは露ををく哀しるへき草葉ならねと

風ふけはぬきも止めすさ／＼かにのいと亂れつ／＼置ける白露

秋上

はきか枝にをけらん露の白玉をはらはてみせよへの秋風

のへとをみおはなか末も打なひきのとかにわたる秋の夕風
なにとかく秋のあはれをしりかほに夕は袖になみたそふ覽

正平廿三年八月つねよりもあはれなりし夕暮に春宮

(昌慶院)の御かたより

おもひやれ同じ空にやなかむ覽なみたせきあへぬ秋の夕暮
御かへし

せきあへぬ涙のほともおもひしれおなしなかめの秋の夕暮
秋下

ときはなる名にはならはて松虫のよな／＼霜に聲のかれ行
きり／＼すみなしもかれのあさちふに露の命や消のこる覽
暮て行秋やかなしききり／＼す聲の限りはなきあかしつ
よそにかく涙もよほすつまそともしらてやしかの獨なく覽
つまこふる野へに心のあくかれてをしか鳴なり秋のゆふ暮
古郷の雲井はるかにけさきなきいまた旅なるはつかりの聲
いとふへきくまこそなけれ澄渡るはまな橋の夜はの月影
まつらなるたましま川のきよきせに光をそへてみかく月影
おもひやる都の空のおもかけもおなしなかめの秋の夜の月
すみよしの松の秋風よさむなる聲うちそへて衣うつなり
さと人もくるゝ夜とに秋風の身にしむ比ところもうつ也
明渡るをへの松はあらはれて霧にしつめる秋の山もと
しら露の色もひとつに咲菊の花はいつよりうつるひぬらん
けんとか(建徳二年(後龜山))なか月の末つ方ひはの大な
る枝につたの紅葉のかゝりたりしをわきてそめける
もなにとなく御めとまる心ちしてとて女御殿よりま
いらせられたりし御返事に
秋下
君かはや秋の宮井にうつるへきほと／＼みちの色に社しれ
を集

と申されたりし御返事を内の御かたより
ちらて猶秋は千とせにめくるともはこやの山の峯の紅葉は
又たち返り

又たち返り

の葉の色をそへすは露時雨をむるもみちもかひやなか
ゆく秋や道まどふ覽紅葉はのちりかひくもる山のあらしに

冬

あし引の山かきくもり神無月けふもいくたひ時雨ふるらん
かよひこしあとは木のはに埋もれて嵐にたとる山の下みち

なには江や汀のあしのよもすから結へる霜をはらふ浦風
あまつ空雲のみをゆく月影をこはれる袖にやとしてそみる
かたしきの袖にたまらぬ白玉はねやもるよはのあられ成晃
降り積るほともしられて拂はねとをのれとおつる松の白雪

ふん中(後龜山)二年霜月廿日比雪いたうふり侍し目こ
その冬あさのにて御らんせられし雪のしきなとおほ
しめしいつるよし申されて

かきくらす嶺のしら雪それなからともにみし世の俤はなし
御かへし

思へ只とふにつけても降る雪にみし世を忍ふけさの詠めは
おしと思ふとしもはやくゝれ竹の一夜のほとになれる春哉

戀

いかにして心のうちにせきとめんうきなゝるへき袖の涙を
隠しつゝうきにたへなて戀しなは後の世迄や苦しからまし
うかりける契のほとも錦木のちつかの後を思ひしりぬる
行末を猶やたのまんなみた川なかれて後のあふせありやと

おもひかは涙の淵に沈む身はあふせもしらぬ物にそ有ける
 偽もさのみはよもと思ふこそ又このくれのたのみなりけれ
 あふまてとおもひし物をあか月の又きぬくぬる袖哉
 たちかへり袖ぬらせとも契きや我中川のみつのしらなみ
 はかなくそ人の契をたのみける我偽りもしらぬならひに
 おりくの辛さを何か歎きけん忘られてたにあられる哉

雜

難波江や蘆邊をさして行舟のいやとをさかる波のをちかた
 雲かゝる山の幾重をわけすて宮をよそにへたてきぬ覽
 淋しさはまたなれさりしむかしにて松のあらしにすむ心哉
 山蔭のしほのいほりの淋しさをうき世にかへて誰かすむ覽
 昨日といひけふと暮してあたし世を只等閑にすくす儂さ

正平廿三年倚廬の御所よりあはれる事とも申され
 侍し御文のついでに

おもひやれ見しおもかけもかき暮てなき人こふる袖の涙を
 御かへし

かきくらす涙とさくにいと又ほさぬ袂をぬらしそへぬる
 めう（如も）いさう院の方丈より御とふらひなと申され
 侍し御文のついでに

いまさらにぬれそふ袖の涙哉昔をかけておもふあはれに
 夢とたに思ひもはてぬはかなさにさむるうつも囈迷ふ覽

御かへし

人しれぬなきのほとは思しれむかしをかけておつる涙に
 夢とたにおもひもはて悲しきはさむるうつこの別なり覺
 その比よるのつるといふさうしこの所に侍しを右の

おと申いたされて返しまいらせらるゝとて
 昨日はとひけふはとはるゝ仇し世の夢の内なる夢悲しき
 御かへし

仇し世の習ひはさそとしりながら猶背かれぬ身を歎きつつ
 恵あらは猶行末もおなしくは變らすまもれかすかの神
 此御歌とも再三見まいらせ候ぬ。さきにも關白のも
 とへ申つかはして候ことく御哥とに殊勝に候程に。
 いづれをもらし候へきにて候はねとも。又あまり
 に無念なるへきやうに候ほとに。墨をつけまいらせ
 候。これはみな集に入申候へきにて候。たひた
 ひ申入候へるに。かなひ候ましきよし承り候て。す
 てに面目をうしなひ候へきにて候つるに。いたされ
 候ぬるのみならず。一見仕候つるより先た感涙さ
 きたちて。とかくのせひもわきかたく候ながら。こ
 の松風の御贈答まめやかに。目をおとろかし心をま
 とはし候ぬる。代々の集ともに。おそらくはか
 るたくひはすくなく候はんすらむとおほえさせお
 はしまし候。大かたみとりをいそぐ雪の下さえより
 さむるうつゝのわかれにいたるまで。墨つけて候ふ
 んは。とゝあはれにもおもしろくも。一かたな
 らすおほえさせおはしまして候。これほとにつもり
 候ける物を。たゝ山かけの紅葉にてのみ。三吉のゝ
 たにふかくうつみをかれ候ける事。まめやかに
 あさましく口惜覺て候。我なからおそれをかへり見
 候はて。たひゝ申入候ける事。いまこそかしこく
 そとうれしく候へ。このうちきゝも人ことになにと

やらん申けに候とうけ給り候へとも。かほをそはに
なして老のあやまりもわすれはて候と。一すちに數
奇のあなかななるゆへにて候へは。冥の照覽も候は
んすらんなと覺候つるに。しかしなから住よし玉津
島の大明神の御道ひきにてかゝる事も思立候けると
まて覺候て。いまはとひたつばかりにこそ候へ。か
やうのその葉ともひろひをき候ぬれは。とに／＼新
葉の色ふかく行末までの跡となり候はんすると覺て
候。なを／＼松風の御哥とも。たゝ身にしむはかり
にても候はす。ひまなきまでさそはれし。袖の時雨
もとはりすき候ぬる。此たひの御ゆうなどは。たゝ
大かたにのみひゝきわたり候へるに。我身ひとりに
かきり候て。たへかたく候。袖のうへはその御ふる
とゝもにひきなされけるゆへとおほし。半の月の御
面影ともゝ。むかしより猶むかしさへおもひいてら
れ候ぬる。松風をそのふるとゝきゝなして袖の時雨
の日まもなきかな。くもりなきなかはの月の影をこ
そ。たた君か代のためしにはひけ。申すこし候ぬる
心ちして。とめ候ぬる。

詠三十首和歌

春五首

早春霞

今朝よりは春立ぬとや足引の山をしみれは霞たなひく

澤若草

雪きゆるさはへの水のあき風になひくほとなき春のわか草

曉梅

心をは色にもかにもそめはてつ軒はの梅にありあけの月

花満山

雲とみえ雪とまかひてよしの山峯にもおにも花は咲けり、

江上暮春

難波えやあしまの小舟こきかへし暮行春もしはしとゝまれ

夏三首

溪卯花

谷深きしつかいほりのうつき垣花さけはととふ人もなし

野郭公

月出ぬ山へかへらてほとゝきすの中の森にしはしかたらへ

雨後鷄川

かつら川うふねのかゝり影見えてたゝ一とをりする村雨

秋五首

月前萩

とへかしの人は音せて下おきのすゑこす風にやとる月影

夕虫

わけ行ははや聲たてゝ夕つく日さすや岡への松むしの鳴

海邊鹿

月のこる磯山かけに鳴鹿のこゑにはぬれぬあまのころもて

閑庭薄

露ふかみのとなる庭のむら薄人こそわけぬあき風ぞ吹

名所擣衣

すまのあまのまとをの衣ぬきかへて鹽くまぬよや月に打覽
冬三首

朝寒蘆

うら遠く鹽引はてゝみなと江の蘆の枯はにのこる朝霜

深夜千鳥

風さむさまのゝ入江はさよふけてうつらも浪に千とり鳴也

古郷雪

すきやられてしはしはこゝに眺めてんたかふる里の庭の白雪

戀五首

聞聲戀

かひなしや人の氣配もたゝそれと聲きくまでの中川のやと

稀戀

折々のもの葉をたに留めすは何につけてかかこちやらまし

増戀

さても身のありしにまさる心哉人のつらさは思ひしれとも

恨戀

おほよそはさも社あれと思へかし我身をしらぬ恨なりとも

被忘戀

かはらしの心ならひにまたるゝよ忘れはてぬと人は思ふに

雜九首

旅行

わけすくる山また山のしら雲に猶ふる郷やへたてゆくらん

旅宿

憂なからこゝも旅ねと思はすは暫しもかくて我やすむへき

旅泊

舟とむる磯邊の浪のうつゝにも夢にもうとき都なりけり

山家松

さらてたに物のさひしき山里の軒はの松にさるさけふなり

山家橋

山深みひとり眺めて淋しきは目もくれ渡るそはのかけはし

山家苔

をのつから心やすめる山里の岩にこけむす庭のやり水

寄神祇祝

代々かけて神や守覽わきて我たのむきたのゝ松のしらゆふ

寄水述懷

いつ迄といはかき沼の木隠れてよに現れぬみつからそうき

寄雲述懷

身をかくす人もこそあれ雲ふかき山の奥迄たつねてそみん

齋宮女御集

ちかきほとにわたらせ給てをとつれきこえ給はねは
女三宮より

へたてけるけしきをみれば山吹の花心ともいひつへきかな

おはんかへし女御四

いはぬまをつゝみしほとに山はイ榎の色にやみえし山吹の花

みかとイ上村雨におとろかせ給ていそきわたらせ給
しに

雨ふらはみかさの山もある物をまたきにさばく雲のうへ人イ哉

女御殿うせ給てさいの御とふらひの御かへりさい

宮

かけみえぬ涙のふちは衣てに渦くあはのきえをしぬへき

まうのほらせ給へるにうへの御とのこもりたるほと

なれはたゝにおり給てつとめて

後拾

れぬにおふる菖蒲のうきねして果はつれなくなる心かな
後にうちよりまとをにあれやときこえさせ給へる御

かへりに

新古

なれゆくは浮世なれはやすまの海士の驪やき衣まとを成覽
おりしらす女御

もしほやく煙になるゝあま衣幾そたひかは袖のぬれける

又御かへりに

嘆くらん心をそらにみてしかなたつ朝霧に身をやなさまし
うへのひさしく渡らせ給はぬ比秋の夕暮にきんをい

とめてたく引給にうへしるき御そのなよゝかなるを
たてまつりていそきわたらせ給て御かたはらにゐさ
せ給へと人のおはするにも見いれ給はぬけしきにて
ひき給をきこしめせば

秋の日のあやしきほとのとたそかれに萩ふく風の音を聞ゆる

ときゝつけさせ給へる御心ちなんいとせちなりしと

そ御日記にはありける後にまうのほらせ給へると聞

えさせ給へとさもあらぬにと人をなときかせ給てつ

とめて

鶯のなく一こゑにきけりせはよふ山人やくやしからまし

いかなるおりにかありけん御すゝりに入給たりける

かはと見てかけ離れ行水の音にかく數ならぬ身をいかにせん

おかし比

いかてなを春の霞に成にしか思はぬ山にかゝるわさせし

うへより御ふみのありける御かへりに

うすらひにとちたる冬の鶯はをとなふ春の風をこそまて

ふくにおはしましけるにさとにて内よりまとをなる

御ふみに日ころおほしあつめたるをとてならひのや

うにてたてまつらせ給へりける

立くもるさほの河霧あれすのみ日たけぬ空に程のふるかな

つゆもひさしき

吹風になひく淺茅は何なれや人のこゝろの秋をしらす

たれにいへとか

しらなくに忘るゝ物は覺束なにもにすむ虫の名にこそ有けれ
白露のきえにし人の秋まつととこよのかりも鳴てとひけり

いはんかたなのよや。めのみさめつゝ

里わかすとひわたるなるかりかねを雲井にきくは我身也晝
たくひあらしかし

うらみつの濱におふてふ蘆しけみひまなく物をおもふ比哉

あらしわか身を

眺する空にもあらてしくるゝは袖のうらにも波はたつ覽

あはれのさまや

新古
ほのかにも風はつてなん花すゝきむすほゝれつゝ露に濡共

ふか集
かきりなりけり

秋の野の萩のしたねになく虫の忍ひかねてはほに出ぬへし
は吉集

見くるしのさまや。れいの山ふところ

谷河のせゝの玉をかきつめてたかみくつにかならんとす覽

いかなる事かありけん

さかさまにいふとも何か幸からむ返すゝも身をそ恨むる

すけなりかむすめ。はるまいらんとときこえて。ある

男につきにけりとときゝ給て

むすふ人ありける物を冬川のはるくる風とおもひける哉ゝ

れむせい院の池にうき草のあるをおほしみたるゝ比

にやありけん

玉華
身のうきにいとゝ浮たる浮草のねなくは人にみせしと思

おなしみやにてむかひたる西のたいにほりかはとの

ゝ北のかたすみ給より

花すゝきほとたに遠き物ならゝ音せぬ風もうらみさらまし

御かへり

いつかたの風にか秋はかよふ覽人しれすのみ靡くおはなを

又野分したるつとめてきたのかた

玉華
ちかき野の野分はをとせさりきや萩ふく風を誰かきく覽

御かへり

はひこれる葛の下ふく風の音も誰かは今はきくへかりける

又北の方かたゝかへして歸り給へる又の日

いかてかは人は聞けむわか袖は露をくのへにをとらぬ物を

あめのふるに三條の宮にて

雨ならても人もなき我宿は浅茅か原とみるそかなしき

東三條院にて

玉華
我ならて又うちばらふ人もなきよもきか原をなかめてそ降

内にて御まへのふちをなんしのひてこく人ありとき

かせ給て

朝とにうすとはきけと藤の花こくこそいとゝ色まさりけれ

ちゝ宮(重明)のおはしけるときに。はゝうへの御かた

ちなとを。いまのきたのかたのかたりきこえ給ひて

御くしのめてたかりしは。またあらんとて。とりた

てまつらせ給ければ

かたもなく成にし君か玉鬘かけもやするとをきつゝをみん

とてたてまつらせ給ふ。ちゝみやうせ給て又の年の

正月一日

いむなれとけふしも物の悲しきは年をへたつと思ふなり晝

雪のふる日心ほそきに

はかなくて年ふる雪も今みればありし人にはをとらさり晝

まゝはゝの北のかた

見し人の雲と成にし空なれば降雪さへもめつらしきかな

むまのかみのはらから少將のみやつかへすへしとき
かせ給てすきくれのとの給へは少將

數ならて梓のそまに立ぬ共すきのもとをはいかゝ忘れん
御かへし

わすれしといふにもよらし三輪の山杉の本には雨もゝり晁

前たいの御そふに御てつから物かゝせ給へるものと

もをむまのないしに見せにつかはしたりければうへ
の見せんと給はせしをかくれさせ給しかはくちお
しかりしにうれしくとて馬の内侍

たつねても跡はかくても水くきの行衛もしらぬむかし也晁

とて申に入て御ふみにはしたにたゝのかみのあるに
書つく

君にのみとゝめてをきし古のたえにし跡をみるそ悲しき
濱千鳥あとあるをたにとゝめねはたゝしら波にかへす計そ

御かへし

古のなきに流るゝ水くきは跡こそ袖のうらによりけれ
水くきのはかなきたにもきえなくに行ゑしらぬは昔なり晁
はまちとりみなれし跡をおきつ涙かくすやあさき磯ま成覽

せえう殿の女御の御もとに

たまさかにとふひありやと春日野の野守はいかゝ告やしつ覽

御かへし

春日野の雪の下草人しれすとふひありやと我そ待つる

野の宮におはしける比三條殿よりまゆみのもみちの

ひとはあるにさして

木枯の風のたよりはちかけれとひとは忘るゝ物にそ有ける
伊勢にくたり給ておなしみやの御てくらつかひにく

たりたるに御ふみのなかにありければ
ふりかへん人はとふへき雪きえのとくる便りも滞りけり

うちにおはせし時ひゝなあそひに神の御もとにまう
つる女におとこまであひて物いひかはす

そのかみはさしも思はてこしかとも思ふと社となりぬれ

女のかへし

神代より思ふ事たに有物をあたかもひにいかゝなるらん

おなしひな社の前の河に紅葉ちる所にて

風さへや神のあたりを拂ふらん早きせゝにもちる紅葉はを

むまのないし山ふきにさして

八重乍仇にみゆれば山吹のしたに社なけるてのかはつは

御かへし

やへなからあたにみえける山吹のひとへ心を思ひこそやれ

ひさしく里におはしける比おなしなしいしのもとに

後拾

夢のおほめかれ行よの中にいつとはんとか音つれもせぬ

伊勢の後の御くたりのたびむかしおほしいてゝ

世にふれは又もこえけりすゝか山昔の今になるにや有らん

宮御かへし

鈴鹿山しつのをた卷もろともにふるには勝るとなかりけり

たいわらの宮に

後拾

おほ空に風まつほとくのくものゐの心ほそさを思ひやらなん

御返し

同

おもひやる我衣手はさゝかにのくもらぬ空に雨のみそふる
一品の宮よりかみをつかせてこれに物かゝせ給てと
きこえたまへりければとかみをつきてかゝせ給て宮

蛛のゐのかくかくへくもあらね共露の形見にけたぬ成へし
御かへし

かくよりもわりなくみゆる蛛のゐを露の形見にみるそ嬉敷かたや

伊勢の御くたりに齋院より

秋霧のたちて行らん露けきは心をそへておもひやるかな

御かへし

よそ乍たつ朝霧は何なれや野へにたもとはわかれぬ物を

もゝそのゝ宮に御とかりきこえさせたまひて返した

てまつらせ給に

聞ならす程はへにけるとなれとあはぬ戀路そかひなかりける

御かへしあい宮

岩の上に松のたとひを引かけてよにあふ事は違ひしもせし

伊勢より

人をなを恨みつへしや都鳥ありやとたにもとふをきかねは

御かへし

とはねとも深き心はいせの海の底なる蜃にをとりやはする

みねのきみうせ給てのころ

世中もいはほのなかも儚くてみねの煙といかてなりけん

御かへしおなし

はかもなき世を捨ててし人を待けふりと成てききに立ける

一品宮より伊勢の御くたりに

わかれ行はとは雲井をへたつとも思ふ心はよりもさはらし

御かへしおなしおりに女御殿より

秋霧とたちる広の空よりもいまはときくの露そこほるる

御かへし

菊にたにおきける露をむへし社をくるゝ袖の苦しかりけれ

しのひてくたり給へればあまに成給ひぬと聞てつち
みかとゝいふ

あまを舟なるとにはやく漕出るかいの滴に君もいかにそ

御かへし宮

浅ましく船流したる海士よりも我袖の裏のしもゝかはかす

兵部卿宮入道し給へりしに伊勢より

かゝらても雲井の程はなけきしにみえぬ山路を思ひやる哉

女三宮御さうしかゝせ奉り給けるにあして長歌なと

かゝせ給ておくにおなしとこる

新吉

みな人のそむきはてにし世中にふるの社の身をいかにせん

伊勢に大よとのうらといふ所に松いとおほかりける

御はらへに

大よとのうらたつ涙のかへらすは變らぬ松の色をみましや

七月七日に

わくらはに天の河浪よるなからあくる空にはまかせすも哉

おなし日かたわきてせんさいあはせさせ給けるを雨

いたうふりてその日とまりぬかた人心もとなかりけ

れは女御殿

天川きのふの空の名残にも身にはいかなる物とかはしる

ためちかゝはらからためくにさい宮のかみなり五月

五日まいりて宮の御まへのやり水をみかはの池とな

んいふなるをたいはん所に

今年おひのみかはの池の菖蒲草長きためしに人もひかなん

しのひてくたり給て女御殿より

鈴鹿山ふるのなかみち君よりもきゝならす社をくれ難けれ

くたり給ひはつかなるへし御かへりいせより

鈴鹿山をとにきくけん君よりも心のやみにまとひにしかな
又御かへし

はかなくて雲となるとも山彦の答はかりは空にいかにせん
女三宮御ふくぬきたまへるころ一品宮にいせより

秋はてゝ野への草葉も色^{あは}なりあらぬ色なるころもいかにそ
いせよりれいけい殿の齋宮のみやに

浦とをみ遙^{れか}なりとも濱千鳥みやこのかたをとほぬ日そなき
御かへし

とひくるをまつほとすきは濱千鳥浪間に猶を恨みらるへき
うちにて何の折にかありけん

玉露^はこち風に靡きもいてぬ朝舟は身をうらみつゝこかれてそ降
ちゝみこうせ給て後御かへり

歎^同きつゝ雨もなみたもふる里のむくらの門の出かたきかな
ひさしくまいり給はさりければ

ぬきをあらみまとをなれ共麻衣^{あま}幾^{よまて}そたひかは袖の濡^{ぬれ}れけん
御かへし女御

もしほやく煙になるゝあさ衣^あうきめをつゝむ袖にや有らん
うへの御夢にみえさせ給ければ

ぬる夢にうつゝのうさも忘られて思ひなくさむ程^その儚^きさ
又ことおりに

侘ぬれは身をうき雲になしつゝも思はぬ山にかゝらすも哉
常盤なる松につけてもとふやとて幾度春をすくしきぬらん

御返し女御殿
忘れゆく春の氣色にかすむとてつらきよしのゝ山もとほり
女御かへし

常盤山色かはらめや春かすみたなひくかたはともになるとも
池に藤のかゝりたるを女御殿

紫にやしほそめたる藤の花池にはひさす物にそ有ける
女御殿御かたにはなのありけるを御覽せんとありけ

れは梅ひとえたおりて上
見つゝのみなくさむ花の枝ならはつけて心を思ひやらまし

御かへし
梅花しつえの露にかけてける人のこゝろはしるへみえけり

はるまかて給て秋やきこえ給けん
春ゆきて秋まてとやは思ひけんかりにはあらず契りし物を

なやませ給ける比上
かゝるをもしらすや有らん白露のけぬへきほとも忘ぬ物を

いかなるおりにかありけむ
いかにそやなのりそれかととはんにも忘れる里^{やあま}はつけなし

經信卿母集

ひんかしやまにはな見にいきたるにうくひすいたく
なく戀にはるかなものをと人のいふに

都にははなさきぬとやかたらし谷の鶯見にやいつるを
なかつき九日まかきの菊おもしろき色に人きてみる
とみるまてにめもあやなりや宿のむら菊
錦しく

しもつき神まつるところにさかさす

常盤なる山の櫛をとりとりて變らぬやとのしるしにはさす
ちかき所のはなのちるををしむ

梢ゆへとなりのはなををらん哉さかしらなりと風や思はむ
石山にて夜ひとよ水鶏なく

暗くとも心易くもあけしかしに岩戸をたたくゝゐなそ
ほとゝきすのなかぬと人のいふに

ころも社かたらひしはや時鳥よに我宿はすきしとそおもふ
きよみつにこもりてほとゝきすのなく

いかてこの山時鳥かたらはんをわかやとに尋てもこと
七てうには霧たちわたりてあかつきやをあくる程に

人のゆきかふをみて
あけぬるか河せの霧の絶間よりをちかた人の袖の見ゆるは

ひさしくをとせぬひとに
をのつからさ社はあれと思ふまにまゝに人の訪すなりぬる

百和香あつめてうたよまするにとのつちはりのはな
をくはへよといふ

いかてかは行きておるへき色々にむらこに匂ふつち針の花

やよひ三自ちさきいへに桃の花をみてゐる馬にのれ
るひと

賤のめの園生にたてる桃の花すけるなこれを植てみけるは
あきのくれかたすゝきのまねく

我宿のまへわたりする秋ならば垣根のすゝき招きとゝめよ
しはすのつこもりにはこのふたにゆきやまをつくり
てつもりけりといふに

ふりおほふ箱根の山の白雪も春のあけはやいかゝと思ふ
かまといふ所にすみける僧のこ姫きみの御いのり
のしゝけるかなくなりたまひてのちかひなく御祈の
おりにしことといひたる返し

思ひきやかまとのやまに祈りしてよその烟となさむ物かは
十四首

うたよむ人のいへゝにしふはあるなる。數のおほきすく
なきをいはず。みつからのえらひなしたるもしらて。のち
の人のくはふへきにあらす。いにしへよりありしかすをも
ちゆへし。此集十四首とつたへためれは。そのまゝにて見
いつるをもをひかくなり。

ちゝ朝臣。美作守にてくたり侍りしとき。くしたりけるに。
かのくにゝて日いたうてり日をへてあめふらす。いかて田
うへむとてたみうれへ侍しに。うなての社にかくらへいゆ
はし。さまゝいのりして。あめをこひ侍しに。この人い
また十二三はかりにやありつる。法樂に琵琶をひかせ侍し
かは。ひろまへ處せきまで。人たちいりてきゝ侍し。この
國のことなれはとて。くめのさらやまを。こえいとおかし
うひく。俄に空くらかり。あめしきりにくたりしかは。た

ちこみつる人。笠もとりあへすぬれにけり。あめ四日つゞき。たみよろこひをなしけりと父の朝臣も日記にしろしをかれけり。

琵琶琴上手といふ中にも。よのつねの人にはあらさきし。ときの調子のしらへをなしては。やよひの日かすのうちに。夏のせちのきたるをわきまへ。う月のうちに。はるのせちのあまれるをしり。なつよりあきにうつり。秋よりふゆにかはり。冬より春のたつとそるんにまきれす。よるひるの時のうつるをもたれこめぬて。もかいひきては。きたかにおもひえたり。あるよとくまかて侍へきとありと。道方卿いりつふしたるよ。女もいとゐきたなういねたりけるを。みちかたふとめさめて。まひより申つるに。かひなくもいねたまふものかなと申されければ。まくらなるひはひきよせ。つまならし。またうしみつなり。ひむかき。はかまの紐さしたまふとも。とらひとつにうつりぬへし。をそくはあらしものをと申されしかは。よふかしとはおもひながら。それもちかふともやといそかれて。

とらひとつ丑みつよりもうかりけりといひすてゝいてにけり。つとめて。あのこつく。ときたかはす侍しかは。猶せちなるものにおもはれけり。

出羽弁。そめとのゝ中將。れいのけからはしきに。さとにまかてゝありし。わかき人ゝともなひ。ほしあひのそらをば。中宮のすけのはゝのもとにて見侍るへきよしを申しゝに。にはかにあめはらゝとふりきて。神なりそらのひかり。おとろおとろしうひらめきわたり。したいになりとゝろくをと。ちまてうこき。五十七十になる人もきかぬをと

なれば。中將はあつこえたるものをかつき。みゝをふさき。あせしとゝになりて臥したり。わかき人ゝの。さはき恐るさまつくしかたし。かゝればこよひのまとひは。むなしかるへきといひやる。あれより。

天の河逢瀬はしらすなるかみの今宵は思ふなかやさく覽かへし。

思ふ中さけぬ例もあるものを七夕もうき神にやある覽はゝのふか「か節懸」くにやまさとにゐて。

袖よりもこほれやかゝる山里の垣ねのむはら花に露をくかきりあれば。日かすたち。ほとけのわさもはてゝ京にかへりねと人ゝいふ。ふく衣をぬくとて。

藤衣ころもへすしてぬきかふる名残もうらの日敷なり晝ほとけのつゝりといふはなよめといふ。百和香あつむる人花の咲のへをそけふも尋ねつるこれや佛のつゝり成覽あれたるやにてつき見る。

みる人の心は空にあこかれて月の影のみすめるやとかな圓融院のみはかうのとき。人ゝまいりしに。きたのゝ社のまへにて大臣上達部みな車よりおり侍りければ。宮司など立いてゝとくめさせ給へしなといふ。經信朝臣は。車なからやりわたさるゝを。宮司いてむかひ。こゝにて人々もおりさせ給ふにといへとも。さらぬていにてすきたまふ。これはいかなることにか侍る。はつあるへきなとあきひあへる。はうにこえたり。また御八講もはてぬに。うちにきこえけり。かのはゝきみのちゝは。大宮女院のしかうの人に侍しかは。此人わかゝりしときよりしるしめして。いたはりおもほしける人なり。その御所の左衛門出羽なときゝ

俊成卿女集

おとろきて。はやく母のもとへつけしらせて。きたのへはいはくし給へしといひをくられしかは。母少納言かおもふところ社あらめとて。おとろきたるこたへもなかりしに。御はかうはてゝかへり給しに。かのこたちのもとより。かくしらせてさふらふしかありしやとゞはれければ。彈正式に。四位は二位に車よりおりすと侍る。菅右府二位にて待るに。神になりたまひても。みちにたかふ事あるまじきなれば。車よりおりなは。かへつてたかへるすちに。神もつけ侍らしとこたへ申されければ。母さこそとて。なをたゞに見ぬ。よのつねの女こゝろならは。さしをきものすへきものにはあらず。また内にてしかありつることを。殿上人などの問ひきかれしありしに。はゞに申されしにおなしくこたへられし也。はたして。ことなく正二位の大納言までになり給ひし也。

經信卿郢曲にたへたりしも。はゞおふしたてたれはなめりすみところにはよるそとて。西洞院のはかせか。あたりちかふすみかへて。おさなきよりふみをよませたりしかは。わかき時より作文のきこえもありしなり。

三十四に成し十五夜の御うたの中にこけのなめことおはしますときゝしに

いにしへの秋の空まですみた川月にことゝふ袖の露かな

ひとゝせ北野の歌に故大納言通具のよませし冬月

秋の色にみたれし露の影よりも枯野の霜にすめるよの月

山家夕嵐

眞柴たぐ篠の庵の夕煙いとゝかすかにふく嵐かな

こそこの八月十五夜

花の枝に露のやとかす宮城野の月にそ秋の色はみえける

百首の中に春

明やらぬ谷の戸過る春風にまつさをはるゝうくひすの聲

夏

澤水に秋風ちかし行螢まかふ光もかけみたれつゝ

岩たゞく谷の下水音きけはむすはぬ袖そまたきすゝしき

秋

むくらはふやとゞはわかす秋は來て心つくしに月そもり來

秋風（信治）に外山の鹿は聲たてゝ露吹むすふ小野の淺茅生

風ふけはしのにみたるゝ苺萱も夕はわきて露こはれけり

月みはとたのめし秋のよもすから又恨めしく打衣かな

冬

新後藤 松しまやをしまか磯による浪の月の氷にちとり鳴なり

戀

新後拾 しらさりき結はぬ水に影みても袖に雫のかゝる物とは

なつ衣うすくや人の成ぬらんうつ蟬の音にぬるゝ袖かな

みる程そしはしなくさむ歎つゝねぬ夜の空の有明の月

清見かたうきねの波にやとる夜は月に心のとまる也けり

思ひねの夢のうき橋と絶して覺る枕にきゆるおも影

こきはなれ行月影そあはれるむしあけの松の風の音哉

月花五十首

山花

をしなへて風こそかほれ春の山咲櫻あればさかぬ梢も

古寺花

なへて世の花ともいはしをはつせの山の櫻の曙のいろ

湖

にほの海はるは霞のしかの波花に吹なすひらの山かせ

はしのもと

かつらきや高間の山のやま風に花こそわたれくめの岩はし

松のあいたの月

大かたの秋もさひしき木の問より月もる松を風はらふらむ

山家

山深み秋かせふかぬねさめたに月にはみつる床の涙を

野路

結びをく人はかりねの草の原枕の露に月をすみける

月前秋風

涙とふ床の月たにさひしきに深き秋なる風の音哉

旅泊

袖のうへになるゝかほなる光哉月こそ旅の心しりけれ

月前草花

風さむみ下葉かれ行秋のよの露にそ氷る淺ちふの月

菊のまかき

秋深き菊の垣根の月かけに霜かと露を消かへりける

くれの秋

長月の有明かたの空の月心ほそくそかたふきにける

寄風戀

いかなりし風の便に聞初て身にしむ戀のつまと成けん

寄衣戀

朽はてゝ涙のつまとしらさりき契りし中の夜半のさ衣

北山三十首 春

しる人も嵐にまかふ梅のはな色をも香をも散にまかせて

尋入はるの哀も深きよの花に霞めるみよし野の月

うき世とやあたに契し山櫻まかふも峯に消る白雲

夏

時しらぬ苔のさ衣けふとてもかへらぬ春のかたみとは見し

待なれし夜半の契を時鳥涙にむせふしのゝめのそら

袖の香のむかしとたにも忘にし花橋の猶にはふらむ

さみたれて浪よせまさる須磨の浦の藻鹽にくたす蟹の袖哉

人とはぬ庭のよもきの跡もなく茂りにけりな夏のふるたに

秋

秋來ぬと末こそす風に下萩の露きえかへりむすほゝれつゝ

はらひかねくもるも悲し空の月つもれば老の秋の涙に

すみまさる月はかりこそかはり行くき世の秋を猶忍けれ

あたにをく露のやとりの野への庵に今いくたひの秋の月影

かりに來て露のみいとゝ深草の里はまゝに野への秋風

冬

秋かけて染し梢も時雨つゝ木葉散しくみ山への里

霧こめしまかきの萩も霜かれて嵐にはらふ野とそ成行
白妙の袖の水に影さへてむすひかねぬる冬のよの月
あたらしき春といそきしけふことに我身ふりぬる年の暮哉

戀

なかれての名をさへ忍ふ思川あはても消ぬ瀬のうたかた
うかりけるねにあらはれし袖の上にぬるかほ成よその月影
ちきらすな今こんまでのかたみとはそのよの月の明方の空
朽はつる尾花か本の思ひ草はかなの野への露のよすかや
みてもまたいかにねしよの俤のうつもまよふ夢の通ひ路

衛門督のとのへの百首春

いかにして氷とちたる柴の戸にもりくる春の苦の下水
武藏野の草のゆかりになく雉子春はむかしのつまならね共
露なから董つみにとなけれ共野をなつかしみふる袖哉
風にちる花ゆへ悲しうつり行色はむなしとそむく世なれと

夏

しのはしな我もむかしの夕まくれ花橘に風はすくらん

秋

月影もおもひあらはともし初てむくらの宿に秋は來にけり
なかむれば空やはかはる秋の月みし世をうつせ袖の涙に
今はとてそむくうき世をかりの庵に秋は曇らぬ月のみを澄
とへかしな淺茅吹こす秋風にひとりくたくる露のまくらを
みし人もなきかすそふ世中にあらましかはの秋の夕くれ
松かせに契りし秋も更ぬとや伏見の里に衣うつらん
との葉も枯行小野の淺ちふとなれる籬の秋の色哉

冬

時雨つゝ冬は來にけり秋風のはらひ捨たる蓬生の宿
眞木のやに霰ふるよの夢よりも浮世をさませ四方の木枯
さえわたるをしまの波の月かけを氷にうつす蟹の袖かな

戀

うらめしや思ふ心をかすめてもおほるにうつす春の月かけ
しるへせよ蟹のをふねの便りにもそなたの風の跡の白波
なれく秋にあふきを置露の色もうらめし閨の月影
やすらひに出にしまゝの天のとをおし明方の月にまかせて
ほしわひぬ蟹のかるもに鹽たれて我からかゝる袖のうら波
思ひ出よ朝倉山のみねの月よその雲間にかけはたゆらん
くちにけりかはる契の末の松まつに袖こす浪の手枕

雜

たひ衣きつゝなれても露深き宮城か原の秋の月かけ
浪の上の月の行衛にこきわかれたよふ船のよの習ひ哉
新古今のうきよのさかの野へのおり五條へまかりて
うくひすの聲をきゝて

おもひきや君なき春の古郷にきて鶯のなかん物とは
かきりときゝていそきまうてしおりむかしのきたむ
きのあけほのこともたゝいまのやうにあはれにて
きえはつる夕もかなしあけくれの夢にまよひし春の古郷
てゝのふくのおり

いかにせん露さへ秋の夕とて泪の淵の袖のみたれは
露もをけ涙もかれ藤衣はさても苔の袖はなれにき
世の常に染てもあさし藤衣かへすくもよをそむく身に

以上以村井古巖藏本按合畢

詠百首和哥

霞

朝日さす三笠の山の雲井より霞そめたる千世の初春
雪分し岩のかけ道跡たえて霞にたとる春の山人

須磨の蟹の氷し袖の浦波に春は霞藻鹽たれつゝ

霞行夕のくものたえ／＼に古郷おもふ鴈そなくなる

朝ほらけおほるに霞む山端に代々のむかしも残る月かけ

花

よそにのみ峯の白雲たちかさね櫻咲そふかつらきの山
さとの名は吉野の山とあれにしを花そ都のかたみなりける

はるのきる花の衣や山風にかほるさくらの八重の白雲

さけはちる花のうき世とおもふにも猶うとまれぬ山櫻哉

春來ては風より外にとふ人もなき山里に散櫻かな

暮春

くれぬとも谷には春をしらせけりふるすにかへる鶯の聲
哀なり春としてしたふ別まてうきよにおしむ心ならひに

めくりあはん我かねことの命たに心になふ春の暮かな

暮はつる空さへ悲し心からいとひし春のなめせしまに

わかれ行跡なき雲の形見とて今宵はかりの春雨を降

郭公

おもひつゝぬるよかたらふ時鳥さめさらましの夢か現か
在明の空にまかへて時鳥月の行衛もあかぬしのひね

袖のかをわすれかたみの橋にむかしとふ郭公かな

おもひ出て尋やきつる時鳥ふしみのさとのまつの夕暮

ほとゝきす雲のよそにや過ぬらん朝倉山の夜半の一聲

五月雨

さみたれはよもきか下葉水こえて垣はあれ行撫子の花
待出し月もいく世をへたつらん晴せぬ峰の五月雨の比

水まさる宇治の川おさ高瀬さす身をうき舟の五月雨の比

五月雨は波うつきしの松枝もなひく玉にもみかくれそ行

苔ふかみ軒の雫か五月雨の雲間の風は猶こほれつゝ

初秋

涙もる袖をや秋のやとりとてあさをく露のまつむすふらん
露もまた染ぬ木葉も故郷を尋やきつる秋の初かせ

さひしさも哀もいかにしのへとて秋の來ぬらん淺茅生の宿

萩の葉にむすひやをきし風の音身にしむ秋の露の契を

吹かへすまくすか原の秋風も恨そめたる小男鹿の聲

月

里はあれて庭も籬も秋の露やとりなれたる月の影かな
月みてもち／＼にくたくる心哉我身ひとつのむかしならねと

わすれなん夜半の寢覺の秋とたに袖の涙の月はなれにき

まてしはし同じ空行秋の月又めくりあふむかしならぬに

うきよをも秋の末葉の露の身に置ところなき袖の月かな

紅葉

しくるれとよそにのみ聞秋の色を松にかけたる蔦の紅葉
いろにみよ秋の思ひの深きえにこかれて染るよもの言の葉

紅にちしほや染し山姫の紅葉かさねの衣手のもり

わかれ行秋の涙の時雨つゝ野にも山にも色かはるらん

たつ田川水にも秋や暮ぬらんもみち亂れて影そなかるゝ

水

秋果し枯野の草にむすひつゝ氷を露のかたみ成ける
打はらふ霜のつはさの音さえてをしの上毛に氷る月かけ
袖氷るさよの河風さむしろにかたしきかぬる宇治のはし姫
まれにこし山のかけはし音もなし氷にとつるせゝの白浪
大井川はや瀬の水もむすひつゝ氷る嵐の山風そふく

雪

花の色はかれにし秋の霜の枝にまたひらけたる雪の白菊
見し人もつもる跡なき面影は雪ふるさとのむかし成ける
かきくらし日數ふるやのゝきとちて空にはふかき雪の白雲
まかへこし月と花との哀まで雪にこまれるみよし野の山
ひとやたれやとはいつくと埋もれし木の葉に雪の猶積る 覽

忍戀

はかなしや忍の山の夕煙さえなん空のあとのしら雲
いかにせんしくるゝ空の思ひ草下葉にむすふ露の亂れを
うらもなくかけもやとさしせく袖の泪の色を月もこそとへ
しきしのひ朽なん床の跡までもぬれし涙の露もゝらすな
わきかへりしたにぞ咽ふおもひかはせゝの岩間の水の白波

あはぬ戀

初鴈の涙の露も色に出て尾花にましろ咲るあき萩
かけてなをたえぬも悲し玉のをのあはすはなけの契計に
さゝわけし袖のためしのぬれ衣はさていく夜の道芝の露
たのめつゝかならず人にあはぬよの習ひ迄うき夜半の月影
行衛なきあふをかきりの白雲もたえてわかるゝ峯の松風

後朝戀

きえわひぬ命をあたにかけ初し露の契をむすふ別は
せきとむる袖のしからみ涙のみ又かきはらずしのゝめの空

契をく夕もつらし松かせのいろやみとりにおもひ初けん
かたからぬよしの悲しき別まで有しにまさる曉そうき
あふとみてさめにしよりもはかなきは現の夢の名残也けり
あふてあはさるこひ

初時雨心のまゝにふりぬれとまつ色かはる人のことのは
わすれしの契も夢のかたみにてぬるよ涙の床にきえつゝ
面影はうき身にそへて忘しにかはらぬ月は有明の空
吹すくる行衛もとはぬ萩の葉に待よひふけし秋風の聲
枯果る契も悲し跡たえてふる野の道の霜の下草

恨戀

たえはつる心のうちを恨ても猶たとらるゝ夢のうきはし
うき侘てうらみや渡る契こし笛やも波のあまの釣舟
あちきなく残る恨の永き世にはかなかりけるうたゝねの夢
恨よとかさねやそめしきさよ衣涙の露もちきりはかりを
なれゝて秋にあふきを置露の色も恨しねやの月かけ

旅

むし明の松に秋かせ吹過て涙もとめぬ浪の音かな
心のみ嫉捨山とすみなれし月にやとかるさらしなのさと
是もまたかりそめふしのさゝ枕一夜の露のちきりはかりに
むすひ捨ていつれる月を峯の庵心ものこる明かたの空
月のすむ雲井やいつく旅の空おなしひかりにやとる露哉

山家

身をかへてやとかる芝の庵にも誰とふ月の秋のひかりそ
あすをたに待てかりねの露乍幾よへぬらん苔のさむしろ
八重葎とちし岩かきうちかるゝ草の戸さしを拂ふこからし

露しけき野邊と成行山里に心も月もすみまざるらん
山ふかくそむくもおなしうき世とて猶秋風に鹿を鳴なる

眺望

あま小舟島かくれ行朝霧に遠きむかしの跡のしらなみ
むさし野や草の原こす秋風の雲に露ちる行末の空

分なれし雲の翅に秋かけてこしちの空に鴈をなくなる
浪にとつる色にや秋のこえぬらん宮城か原の末のまつ山
雲はるゝ松浦の沖のあきの月もろこしまてもすめる空哉

述懐

數ゝに忍ふともなきむかしまで心にかゝる賤のおたまき
しるへなき雲に跡とふ蘆たつも道ある空の光をそまつ
住なれしやとも軒端の忍ふ草猶思ひをく露をこほるゝ
なき數の哀はかりやとゝまらん誰もむかしの跡となりなは
かきつめて誰しのふへきかたみとは泪の底のもくつなれ共

祝

萬代をみかきかまりのまつかせのこゑ
(本ノマ)

とをくかけそめて花やひらけしきたのふちなみのみやま
にすむひかりとなる萬代のかげ

天の下かけとあふけはみかさ山峯に月日のひかりをそさす
行末をまもり初けん神代よりつたへし跡や君か代のため
東君あしなくしてきたれども。山間跡をのこし。北風聲す
さましけれとも。野草いろをます比。ちかき野に遊覽する
に。若菜つむ女の童五人。かたみひちにかけたるあり。を
のゝ哥くちすさめり。いとあやしくて。むかひていはく。
いつくの里よりいかなる人のきたるかたとへば。かれらは
こたへていはく。さたまれる家もなし。たゝ人にしたかへ

る身なりといふ。いとあやしくて。もしやかんの人をたふ
らかさんとするにや。又は仙女かたとふに。皆あさわらひ
て。若菜をつみて行にゆきつれたり。石上つゝしの根なと
にこし打かけて。かたみかたはらにさしをきて。やすみ
たるとはにありて。此女ともいふやうは。いさや我らかあ
りさま。哥によみもきかたてまつらむといふ。いとゝお
とろかされて聞居たるに。一人の女よめる

又ひとり
色に出る花やもみちのはてゝは土より出て土に社いれ

又ひとり
一露もつゝかぬ水のつらゝ哉うはの空なる聲になかれて

またひとり
薪つき煙も空にきえて後いつくにいける火の残るらん

又ひとり
松か枝萩のはむけに打なひきをのれかほ成風の音哉

又ひとり
限りなく虚き空といふめるを心の果といかゝとはまし
これをきくに。池水火風空をよめる。されはこそたゝもの
にあらざりけりと思ふに。我等か言なむち一生つき給はん
ときは。われらも故郷にみなかへされ申へきものともにて
侍る也。其時は御身とでも。いつれの處にかかへり給ふへ
き。いふかしきといひてきゆるかこくうせぬ。すなはち
坐して一念不生の所に向て。しはらくねふりたるに。黒
雲西の山端にしつみて。白雲東嶺にこもりて。ねにゆく鳥
むらかりわたる。遠寺の鐘におとろかされて。道に人に語
り奉しを。一句そへたまへり。後一宿花の心をすゝむへき
と。

千五百番哥合に

新古 梅花あかぬ色かもむかしにて同しかたみのはるのよの月
同 風かよふ寢覺の袖の花のかにかほる枕の春のよの夢
題しらす

同 恨すや浮世を花のいとひつゝ誘ふ風あらはと思ひけるをは
同 磯の上ふるのわき田を打かへし恨かねたる春のくれかな
夏のはしめのうたとてよみ侍ける

同 折ふしもうつれはかへつ世中の人の心の花染のそて
題しらす

同 橘のにはふあたりのうたゝねは夢もむかしの袖の香そする
同 とはりの秋にはあへぬ涙かな月のかつらもかはるひかりに
和歌所歌合に田家月を

同 いなは吹風にまかせてすむ庵は月そまともにもりあかしける
題しらす

同 吹まよふ雲井をわたる初雁の翅にならすよもの秋かせ
同 あたに散露の枕にふし侘て鶉なくなりとこの山かせ
千五百番哥合に

同 さえわひてさむる枕に影みれば霜ふかき夜の在明の月
題しらす

同 霜枯にそことも見えぬ草の原誰にとはまし秋の名残を
母の身まかりにけるをさかのほとりにをさめ侍りけ
る夜よみける

同 今はさはうき世のさかの野邊を社露消はてし跡としのはめ

千五百番哥合に

同 かくてしもあかせは幾よ過ぬ覽山路のこけの露のむしろに

和歌所歌合

同 古里も秋を夕はかたみにて風のみをくる小野のしの原
同 寄風懷舊といふとを

同 葛の葉の恨にかへる夢のよをわすれかたみの野への秋かせ
同 和哥所にて述懷のこゝろを

同 おしむとも涙に月も心からなれぬる袖に秋をうらみて
五十首哥たてまつりしに寄雲戀

同 下もえにおもひ消なん煙たに路なき雲のはてそ悲しき
水無瀬十五首哥合に春戀の心を

同 面影の霞る月そやとりける春やむかしの袖のなみたに
被忘戀のこゝろを

同 露はらふ寢覺は秋の昔にて見はてぬ夢に残る面影
水無瀬戀十五首歌合に

同 ふりに覺時雨は袖に秋かけていひしはかりを待とせしまに
同 通ひこしやとの道芝かれゝに跡なき霜のむすほゝれつづ
和哥所哥合に遇不會戀のこゝろを

同 夢かとも見し俤もちきりしもわすれす乍うつゝならねは
落葉のこゝろを

同 ふみわけて更に尋る人もなし霜に朽ぬる庭の紅葉々
老の後都を住うかれて野中の清水を過とて

同 わすられぬもとの心のあり顔に野中の清水影をたにみし

寶治元年十首哥合に山花

綱拾春下

春はまた花の都と成にけり櫻ににはふみよしのゝやま

寶治二年百首哥奉りしに落花

同 けふとても櫻は雪とふる里の跡なき庭に花とやはみる

月哥として

同難秋

なにかむれは空やはかはる秋の月みし世をうつす袖の涙に

せ集

同 秋の月を雲井のかたみにて見しよの人のかはるおもかけ

寶治元年十首哥合に旅宿花

同旅

露けさを契やをきし草枕あらし吹そふ秋の旅寐に

建仁二年戀十五首哥合に夏戀

同戀四

はかなしや夢もほとなき夏の夜のね覺はかりの忘かたみは

題しらす

同難下

身をかへてあらぬ命のきえぬまをなき數にたに誰か忍はん

建仁元年八月十五夜和哥所撰哥合に

新後醍醐下

深山曉月 秋の夜のかき哀をとめけりよしのゝ月の明方の空

最勝王經吉祥天女品のこゝろを

同釋教

ちかひあれは空行月の都人袖にみつなるひかりをを思ふ

名所百首哥奉りし時

同戀二

歎つゝ伏見の里の夢にさへむなしき床をはらふ松かせ

名所哥中に大井川

玉懸寶

大井川岩波はやく春くれて筏のところに夏そ來にける

寶治百首哥に湖月を

同秋下

にほの海や秋のよわたる蜃小舟月にのりてや漕つたふらん

同 正治二年百首哥に

かたしきの袖に馴ぬる月影の秋もいく夜を宇治の橋姫

順徳院の御名時所百首哥めされけるに美豆御牧

同旅

船とむるみつのみまきのまこも草刈らて假寝の枕にそしく

寶治二年百首哥奉りける時澤若菜を讀侍ける

同難一

誰となくしのふ昔のかたみにもふる野の澤に若菜をそつむ

千五百番哥合に

同平

みても猶あかぬ夜のまの月影を思ひ絶たる五月雨の空

同秋下

寶治百首歌奉りしに秋田

小山田の庵もる賤の秋の袖よとかる露ををきあかしける

寶治百首哥奉りける時間擣衣

同

あちきなくいそかぬよはの枕まで夢路とをさすうつ衣かな

同後拾

秋くれは身にしむ物となりにけり昨日も聞し萩の上かせ

同秋下

寶治百首歌奉りける時杜紅葉

時雨行生田の森の秋の色をとほてそよそにみるへかりける

建保五年内裏五首哥合に冬河風

同難上

橋姫の待夜むなしき床の霜はらふもさむしうちの川かせ

千五百番哥合に

風雅春下

高砂の松の緑もまかふまで尾上の風に花を散ける

同夏

建保三年影供哥合に雨後聞蟬といふ事を

雨はれて雲吹風に鳴せみのこゑも亂るゝ杜の下露

寶治百首哥に寄關戀を

同戀一

こえてまた戀しき人に逢坂の關ならはこそ名をも頼まめ

寶治百首哥中に見花といふとを

風雅難上

たつぬともおもはて入しおく山の庵もる花をひとり社みれ

寶治二年百首哥奉りける時六月稜

新千夏

みそきする麻の葉末のなひくより人の心にかよふ秋風

建仁二年影供哥合に忍戀

新拾戀一

ひとしれす思ひ忍の山かせに時そともなき露そこほるゝ

題しらす

新後拾

つもりぬる別は春にならふともなくさめかねてくるゝ空哉

名所百首哥たてまつりける時

同夏

五月雨のをやむ晴間の日影にも猶雲ふかし天のかく山

寶治百首哥奉りける時

同秋上

風かはるなつの扇はてになれて袖にまつ置秋のしらつゆ

たちこむる關路もしらぬ夕霧に猶吹こゆる須磨の秋かせ

建保内裏三首哥合に秋野月

同

おもひ出よ露をひとよのかたみにて篠分る野への袖の月影

水無瀬殿詩哥合に山路秋行といふとを

新羅古秋下

心さへうつりもゆくか龍田山木末に秋の色を尋ねて

建長三年影供哥合に行路紅葉といへるとを

同

時雨行秋の山路は紅葉葉のうつるふ色やしるへなるらん

群書類從卷第二百七十二

和歌部百廿七 家集四十五

小町集

はなをなかくめて

古
花の色はうつりにけりな徒に我身世にふるなかくめせしまに

ある人こゝろかはりてみえしに

後
心からうきたる舟に乗りそめてひとひも涙に濡ぬ日そなき

まへわたりし人にたれともなくてとらせたりし

空を行月の光を雲井よりみてやゝみにて世ははてぬへき

かへしあしたにありしに

雲晴て思ひ出れとことのはのちれるなけきは思ひ出もなき

たいめむしぬへくやとあれば

新勅
みるめかる蟹の行かふ湊路になこそ其の關も我はすへぬを

をみなへしいとおほくほりて見るに

なにしおへは猶懷み女郎花おられに覺な我が名たてに

古
夏みくにの町が歌也
やよやまで山ほとゝきすことつてむ我世中に住わひぬとよ

あやしき事いひける人に

玉璫
結ひきといひける物を結び松いかてか君にとけてみゆへき

めのとのとをき所にあるを

新干
よそにこそみねの白雲と思ひしにふたりか中にはや立に覺

山里にて秋の月を

續後拾
山さとのあれたる宿をてらしつゝ幾夜へぬらん秋の月影

又

新勅
秋の月いかなる物そわか心なにともなきにいねかてにする

人と物いふとてあけしつとめてかはかりななきよに

なにもを夜もすから詫ひあかしつるそとあいなうと

かめし人に

古
秋の夜も名のみなり覺あいとあへはとそ共なく明ぬる物を

新勅
長しとも思ひそ果ぬ昔よりあふ人からの秋のよなれば

かへし古今此三字ナシ
やむことなき人の忍ひ給に

をみる
現にはさきこそあらめ夢にさへ人めつゝむとみるか詫しき

人のわりなくうらむるに

同
あまの住里のしるへもあらなくに恨みむとのみ人のいふ覽

ゆめに人のみえしかは

同
思ひつゝぬればや人のみえつ覽夢としりせは覺さらましを

是を人にかたりければあはれなりける事かなとある

御かへし

同 うたゝねに戀しき人をみてしより夢てふ物は頼み初てき

かへし

新勅 頼ましと思はむとてもいかせん夢より外に逢ななければ

古 いとせめて戀しき時はうは玉の夜の衣をかへしてそぬる

人の心かはりたるに

同 色みえてうつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける

みもなきなへのほに文をさして人のもとにやるに

同 秋風にあふたのみ社かなしけれ我身空しくなりぬと思へは

人のもとに

新干 和田つ海のみるめは誰か蒟果し世の人となしといはすは

つねにくれとえあはぬ女のうらむる人に

古 みるめなき我身をうらと知らねはやかれなて蜚の足たぬくる

同 人にあはむ月のなきよに思ひ置て胸はしりひに心やけおり

同 夢路には足もやすめすかよへ共現にひとめみしとはあらず

同 かさまゝつあましかつかはあふ事のたよりに涙は海と成覽

われを君思ふ心のけすのへにありけはまきに逢みてましを

新拾 よそにてもみすは有とも人心わすれかたみをつみて忍はむ

宵々の夢の玉しあしたゆくありても待んとふらひにこせ

ゐてのしまといふたいを

古 おきの井てみをやくよりもかなしきは都しまへの別也けり

同 今はとて我身しくれと降ぬれはもの葉さへにうつろひに覺

かへし

同 人を思ふ心この葉にあらはこそ風のまに／＼散もまかはめ

きたまらずあはれる身をなけきて

後 蜚のすむうらくく舟のかちをなみ世をうみ渡る我を悲き

いそのかみといふ寺にまうてゝ日のくれにければあ

けてかへらんとてかの寺にへむせうありと聞てこゝ

ろみにいひやる

後 いはのうへに旅ねをすれはいと寒し苔の衣を我にかさん

同 世をそむく苔の衣は只一重かさねはうとしいさふたりねん

申たえたるおとこの忍ひてきてかくれてみけるに月

のいとあはれるをみてねんことこそいとくちおし

けれとすのこになかむれはおとこいむなるものをと

同 ひとりねの侘しきまゝに起あつゝ月を哀といみそかねつる

わすれやしぬるとある君たちのゝ給へるに

新勅 みちのくの玉つくり江にこく舟のほにこそ出ね君を戀れと

やすひてか三河になりてあかた見にはいてたゝしや

古 侘ぬれは身を浮草のねを絶て誘ふ水あらはいなんとそ思ふ

あへのきよゆきかかくいへる

同 つゝめとも袖にたまらぬしら玉は人を見ぬめの泪なりけり

とあるかへし

同 をろかなる涙を袖に玉はなす我はせきあへす瀧つせなれば

みるめあらは恨みむやはと蟹間は浮ひて待んうたかたのまゝ
いづとは時はわかねと秋のよそ物思ふ事のかきり成ける
古のなく山里の夕ぐれは風よりほかにとふ人をなき
も草の花のひもとく秋のゝに思ひたはれむ人なとかめそ
漕きぬや蟹のかせまもまたすしてにくさひかける蟹の釣舟
五月五日さうふにさして人に

あやめ草人にねたゆと思ひしは我身のうきにおふるなり
新助 ぬ人をまつとなかめて我宿のなとてこの暮悲しかるらむ
露の命はかなき物を朝夕にいきたる限あひみてしかな
人しれぬ我が思ひにあはぬ夜はみさへぬるみて思ほゆる哉
戀佐ぬ暫もねはや夢のうちにみゆれば逢ぬみねは忘れぬ
ものをこそ岩ねの松も思らめ千代ふる末もかたふきにけり
新古 木枯の風にもちらて人しれすうきものはのつもるころかな
風庭 夏の上の佐しきとは夢にさへみるほともなく明る也けり
新古 現にもあるたに有をゆめにさへあかても人のみえ渡る哉
王彦 春雨のさはにふるをとをともなく人にしられてぬるゝ袖かな
四のみこのうせ給へるつとめて風ふくに

今朝よりは悲しき宮の秋風や又あふともあらしとおもへは
新後拾 われか身にきにける物をうきとは人のうへとも思ひける哉
新古 心にもかなはさりける世中をうき身はみしとおもひける哉
新拾 つま戀るさを鹿の音にさよふけて我かた戀を明しかねぬる
新古 卯花のさける垣ねにときならてわかとを鳴うくひすのころ

秋の田の假庵にきゐるいなかたのいな共人にいはまし物を
非手のやまふきを

新後拾 色も香もなつかしきかな蛙なくるてのわたりの山ふきの花
新古 霞たつ野をなつかしき春駒のあれども君かみえ渡る哉
難波めの釣する人にめかれけむ人もわかと袖やぬるらん
千度ともしられさり覺うたかたのうきみはいさや物忘して

人のむかしよりしたりといふに
新後拾 いまはとて變らぬ物を古もかく社君につれなかりしか
浪の面をいて入鳥は水底をおほつかなくは思はさらなん
あしたつの雲井のなかにましりなは

なといひてうせたる人のあはれなるころ

久かたの 空にたな引 うき雲の うける我身は

つゆ草の 露の命も またきえて 思ふものみ

まろこすけ しけさそまさる あら玉の 行年月は

春の日の 花のにほひも なつの日の 木の下陰も

秋の夜の 月の光も 冬の夜の しくれの音も

よの中に こひもわかれも うき事も つらきもしれる

我身こそ 心にしみて 袖の浦の ひる時もなく

あはれなるに かくのみ常に おもひつゝ いきの松はら

いきたるに なからの橋の なからへて せにゐる田鶴の

しまわたり うらく舟の ぬれわたり つかうき世の

くにさみの 我身かけつゝ かけはなれ つか戀しき

雲のうへの 人にあひみて このよには 思ふをなき

みとは成へき

日のてり侍けるにあまこひの和哥よむへきせんしあ
りて

千早振神もみさは立さはき天のとかはのひくちあけ給へ

やり水にきくの花のうきたりしに

飛鳥集にはたつみ

瀧の水木本ちかくなかれすはうたかた花もありとみましや

かきりなき思ひの儘に夜もこむ夢ちをさへに人はとかめし

かれたるあさちにふみさしたりけるかへりことに小

町かあね

時過てかれ行をのゝ淺茅には今は思ひをたえすもえける

あたなに人のさはかしういひわらひけるころいはれ

ける人のとひたりけるかへりとに

うきとを忍ふる雨のしたにして我ぬれ衣はほせとかはかす

ともすれは仇なる風にさゝ波の靡くてふもわれなひけとや

忘草わか身につまむと思ひしは人の心におふるなりけり

わかこく物思ふ心けの末に有せはまさにあひみてましを

みちのくへいく人にいつばかりにかといひたりしに

陸奥は世を浮島もありといふ關こゆるきのいそかさならん

さためたるともなくて心ほそきころ

すまの浦の浦漕舟の梶よりもよるへなきみを悲しかりける

いかなりしあかつきにか

ひとりねの時は待れし鳥のねのまれにあふ夜は侘しかり覺

なかれてとたのめしとは行末の涙のうへをいふにそ有ける

見し人のなくなりしころ

新古今 あるはなくなきはかすそふ世中に哀いつれの日まで歎かむ

夢ならはまたみるよひも有なましなに中への現なりけん

むさしのに生とし聞けは紫のその色ならぬ草もむつまし

世中は飛鳥川にもならはなれ君と我とか中したえすは

むさしのゝ向の岡の草なれば根をたつねても哀とぞ思ふ

みし人もしられさり覺うたかたのうき身はいさや物忘して

世中にいつら我身のありてなし哀とや云んあなうとや云ん

我身社あらぬかと耳たとらるれとふへき人に忘れしより

なからへは人の心もみるへきに露の命をかなしかりける

よの中を厭ひてあまの住かたはうきめのみ社みえ渡りけれ

はかなくて雲と成ぬる物ならはかすまむ空を哀とは見よ

吾のみや世を驚と鳴わひむ人の心の花とちりなは

はかなくも枕さためすあかすかな夢かたりせし人を待とて

世の中のうきもつらきもつけなくにまつしる物は泪なり覺

吹むすふかせはむかしの秋なから有しにもあらぬ袖の露哉

あやしくもなくさめかたき心かなをば捨山の月もみなくに

縮氣無きねくたれ髪をみせしとては隠れたるけさの朝顔

誰をかもまつちの山のをみなへし秋と契れる人有らし

白雲の絶すたな引峯にたに住はすみぬる物にそありける

もみちせぬ常盤の山は吹風の音にや秋を聞わたるらん

古
いつとても戀しからすはあらね共あやしかりける秋の夕暮

拾
長月の有明の月の有つゝも君しきまさは待もこそせめ

われこひめやも集

あさか山影さへみゆる山の井の淺くは人をおもふものかは

なかつ雨を

留後
なかつゝ過る月日もしらぬまに秋の景色になりにける哉

春の日の浦々を outcome なにわさしてか螢は過すと

古
木のまよりもりくる月の影みれば心盡しの秋はきにけり

天つかせ雲ふきはらへ久堅の月のかくるゝ道まとはなむ

あはれてふ事こそうたて世中を思へはなれぬはたし也けれ

同
世中は夢かうつゝかうつゝとも夢としらす有てなければ

同
あはれてふものは毎にをく露はむかしを戀るなみたなり晝

同
山里は物のさひしき事社あれ世のうきよりは住よかりけれ

わい

又他本 五首

小倉山消しともしの末も哉しかならはすはやすくねなまし

古
別つゝみるへき人もしらぬまに秋の氣色になりにける哉

かたみこそ今は仇なれこれなくは忘るゝ時もあらまし物を

新古
はかなしや我身のはてよ淺みとり野へにたな引霞と思へは

後
花咲てみならぬ物はわたつ海のかさしにさせる沖つしら浪

右小町集以流布印本校合

檜垣姫集

きよはらのもとすけか國守にてくたりたるに。いたくさかりすきたるきこえあるに。こどもの消息したるに。なりといふ人おなし里にてあるに。ふみをゆつ（おく拾遺）りし

いなり社人の思ひはなすときけ今は我身はふるのやしろそなてしこの。いへにのみしくおほく咲たるを。人のこひにおこせたるに。たゝ一枝やりたるに。いかゝおもひけむ。よのほときなからほらせてけるを。をしあてにきな覽とおもひて。うたかはしき所にかくいひやる

露のみのをきてみつれば床なつの花はねなから盗まれに晝くきのたむすけともといふ人。けさうする女のもとに。ふみをこせて。やかてはしめてきたるに。れいならすあやしくおほえしに。その心かけたる女にかくいひやる

ひとつかひ習はさりける鴛鴦のみつからきたる物としら南かたらひし人のうせにしか。おさなき子をあまたうみをきて。二三年はかりになりにたるに。その父ちかき人なれば。ひきつれてゐてきて。哀なるものかたりともしいてゝうちなくに

嬰兒の髪かきなてゝみるゝなを戀しかるらむとしなとおいおとろへて心地のみつねならす。くろしうおほえて。なやましきに。あはれなと思ふへき

千などいふもの。ゆめになきに。なましとくなる人をこといひつけて。たのむやうなれと。まもの心さしもなけれと。たゝなるよりは。なをいひふるゝもあるに。おくのくにゝそくたりにける。おくのといふは。大すみまつまのところなるへし。のほりてときゝてかくいひやる

きえぬへき命なれ共露の身のおくなるまつをまつと社ふれかくいひやりしかと。ふのつかひといふ事にてなむとて。とはすなりにけり

五月計消息をこする男のなをひころへぬるこゝちす。ものこしにたにと。せちにいはすれと。わかし(こしち)日のこゝちもせねは。つきなくて思ひもたえて。なをあくらはしにこの月たてゝなといふつゐてに

人のいむ此月なみをたてゝ社おもはすならんことも恨みめいとのこほりにものいひし府官の心かはりて。めまうけて。そこにのみつきて。いとたまさかにをとつるゝに。たゝならんやは。おなしさまの人のみゆるに。いつちそとゝへは。いとへそまかるとたはふるゝに。このところをいとしまのこほりとそいふかし

いとしまをかけて飛とはまてや鳥おにも羽にも言傳へせむ虎のかはのしりさやを題にてひこのかみのよませしに

海へとて行みな虎のかはの尻さやけからぬは涙のよこせはつゝみのたき

うさのくにとしかわかくて太宰府のけむ官にて肥後國にきたるに。そのをりはせといふところに尋きて。これや名たかきひかきとはきこゆるとゝひしに。をとろへはてゝゆゝしけになれるをみて。心をとりしけんを。くにとしかいふ

君ならぬ人のよのすゑいかにせむ心はせ社すみかなりけれなとかくおいにけむなとおしみに

心はせすみかとならば君はさはこゝより外にゆく處あらし四天(金盞)寺山を題にて

老ぬれば年はかくして有ぬへししわうしや待人にみゆればさくらの花のいへにいみしうさけりしに月さへわりなくあかゝりしかは一人なかめて

月かけを色にてさける櫻花雲かくれなはちりぬとやいはむ香椎宮の祭の使さゝれたる少貳の。その日いみしく歌むへかなり。さる事あらはいかゝせむとて。わさとひこに尋ねきて。をりはしらぬ。たゝつかひつへからむ。歌ひとつといひたるに。たいもなけれは。たゝ思ひやりに

千早ふるかしひの宮のあやすきは幾代か神のみそき成らんこひのうた人のよみしに

逢まては身をもかへてむと思ひしに今は命のおしくも有哉大隅さつまのなかにひしかりのはいまはちかくとよみしに

春の駒を打出てみれば秋こひしかりのはいまはちかく有覺またおなしたいを

たかゝひし家は何處と道問ひし狩のはいまは近くならずや

きりのみなど

立しきり霧のみなとか降くらむときやは秋のせきに入ぬる
夜こしのやまを

きみかいし昨日のまとのあたらぬはやこしの山のあれば也覺
しりたる人のむかへたれば。筑前國にしはしあるほ
とに。日ころになれば。かへりなと思ふに。けむ
なる人のめはなましそくなるに。けふ計はなをとま
りたまへなといへと。日ころすへき事あれば。せち
にいてたつに。雨さへわりなく降まさるにとて女出
ゐて。かゝる雨にはいかてかなといふに。むかへ人
みの笠なとあり。たゝとくくといそかせは。まか
りまうしもしあへぬまで。いそきたちて。あまさう
そくなとしさして。さらはひこのかたにおはするた
よりあらはといふまゝに。かくいひかく

ふらはふれ三笠の山の近ければみの島迄はさして行きなん

筑前のこふをそ御笠の山とはいひける。

きやはらのもとすけのかみ京へのほりしに。かとの
の所によひて。はしめちくこのかみなりしに。ほと
もなく此國にきて。ふたゝひあひみつるに。今はわ
れも人もおいにたり。またつくしのかたくへきにあ
らす。いさかし京へなとたはふるに。めのすはうの
命ふものなとかつけて。いまかくいふと思ひもいて
じものをなとやうにいひたるに

白河のそののみつひてちりたらんときにそ君を思ひ忘れむ
かみの子すゑとものぬし。あはれにかたらひなとす
る程に。年比のめこともすてゝ。ほうしになりて。

暫しは肥前のくにせふりのみたけにをこなひて。も
ろこしにいにしなこりのいみしうかなしといへは。
よのつねなり。そのめことも。いまはと思ひなりて
京にのほりなむとす。みつからはその人の心をくみ
ゝるにも。また有つるこゝろはへ思ふに。わりなく
いみし

かれぬへき草の末ともしらすして露の命を何にかけゝむ
おいにきはめてすみかもなくなりて。てつから水く
むきはになりて。をけをひきさけて出るにしも。く
にのかみしはし出らるゝみちにさしあひて。めかと
なる物みつくて。なとかくはなと見とかむるに。名
高きひかきなりと人のいへは。はたかくるゝに。よ
ひいつ。はつかしけれと。かくれ所もなくて。をけ
をきしにをきてゐたれば。いかていとかくは有しそ。
あはれなとあれば。おもひわひて

老はてゝかしらのかみは白河のみつはくむまで成にける哉

たちさらて紅葉をよませしに

しかの音はいくら計のくれなるを降出るからに山のそむ覽
すきものともあつまりて。よみかたかるへきすゑを。

つけさせむとて。かくいふ

わたつみのなかにそたてるさほしかは

いてこれかすゑ付けよといへは

秋の山へそそこにみゆらん

京におとこをやりと

人を待宿はくらくそ成にける契りし月のうちにみえねは

題不知

秋かせの心やつらき花すゝき吹くるかたをまつそむく覽
つくしからゐてのほりて。ある男もとのめのもとに
すゑたる心いとよくて。うちかたらひてゐたるに。お
とこはこゝかしこひとのくにゝのみありきければ。
ふたりのみなんゐたりける。つくしよりきたる女
としのひておとこをかたらひたりけるにはとこそい
ひける

夜半に出て月にみえずは逢を知らず顔にもいはまし物を
このもとのめ心いとよき人にて。男にもかゝるもな
むあるといはざりけれと。男ほかのかたより人かた
らふなりときゝて思ひたりけれと。心にもいれて猶
さる物にてなむをきたりける。又よはふおとこもあ
りけり。世中心うしかゝる事きゝいれしなといひけ
るものなん此男をやうゝ思ひつきやしにけむ。返
事なとして。もとのめもとにふみをひきむすひてを
こせたるをみれば。かくかいたり

身をうしと思ふ心にこりねはや人をあはれとおもひそむ覽
とこりすまによみたりける。かくて心のへたてたる
事もなく哀なれば。いと哀と思ふ程に。男は心かは
りにければ。ありし事もあらねは。かのつくしにお
やはらかなとありければ。いなんといひければ。
男も心かはりにければとゝめてなむやりける。もとの
めなん。もろともにありならひければ。かくてゆく
事をいとかなしと思ひける。山さきにもろともにゆ
きてなん。船にのせなとするほとに。男もきたり。
此うはなりこなみ。ひと日よ。よろすの事をいひ

かたらひて。つとめて船にのりぬ。今は男もとのめ
は歸りなんとて車にのりぬ。是も彼も悲しくと思ひ
ける(ふはとい)に船に乗たまひぬる人のとて。ふみを
もてきたる。たゝかくありける

ふたりこし道ともみえぬ浪の上に思ひかけても歸るめる哉
とありければ。男も女もいいたうあはれかりなき
にけり。漕出ていぬれば。えかへしもせずなりにけ
るに。くちおしかりける

相知りたりける人の忍ひて男あるにあはむといへ
は。家のかきを夜ふけてたゝけ。さらはをきてあは
むといふに。あひわたるほと五六日男の音もせねは。
いひやりし

さゝれ石の音たえにけるあふものかたき巖となりやしぬ覽
又あるほむに。この歌ありとぞ。

元久二年五月廿九日校合了。

從三位治部卿平朝臣判

右檜垣女集以扶桑拾葉集及一本校合了

本院侍従集

おほえおはしけるかむたちちめ(師輔)の次郎なりける

人。(兼通)年十八(天慶五)はかりなるか。おほえはいとか

しこかりけれと。かうふりえぬ有けり。おほち(忠孝)は

太政大臣にてなむおはしける。いもうと(安子)は。き

さきはらのみこ(舟吉)に奉て。藤つほにそさふらひ給

ける。おほむいとこ(侍従)さふらひ給けり。その(師輔)

この次郎君おもひかけ給ひて。かくよみていれ給け

新勅
色に出て今そしらす人しれす思ひかけつる深き心を

などの給て。御さとはいつくそとの給ひければ。女

ほそとのにて物なといふに

新古
我宿はそこともなにかをしふへきいはて社みめ尋ねけりやと

男

同
わか思ひ空の烟とたくひなは雲井なりとも猶たつねてむ

またおとこ

我ならぬ人は待ともすきくれば哀をすてゝひくかたによれ

返し

君ならぬひとはまたねとすきくれの引とてよらむ心弱さよ

男にやりとをいさゝかあけて物いひけるに。ひとこ

ともつゝましようおほえて。むねいたし。やきいし(病色)

あてむとて入にければ。男わひていにけり。又のあ

したに

あはすして歸りしよりもいとゝしく苦しと云しとを侘しき

ねぬるよの苦しきとはとふものをこたる折を嬉しかりける

返し

ねぬる夜の苦しきものをこたるは我かくれたるしるし成覽

返事はなし。おとこ

身を捨て露のみともにきえぬとも哀とふへき人のなき哉

女かへし

夏のよの露とおきゐて明してはあやにく我や濡きぬをきむ

とてまかていければ。あしたに女の里にはあらて。

本院なりけり

そま河の流れひるまを君はしれ我おり立ていかたしはせむ

返し

いかたしの心のすきはそま山の川のひくれもよそに社見め

さて物きこへむと。せちにの給ひければ。たゝ物こ

しにて。うけたまはらむとありけるに。此女のつか

ひける人をかたらひて。いり給にける。さらに人も

しらぬ事なりけり。又のつとめて。おとこ

露のおきてあかぬ心にわかるれば我衣てそかはかきりける

返し

同
衣手のぬると聞にもいとゝしく我さへ夏のよそうかりける

男ひとりねて又のあした

袖ぬれてほしをわつらふから衣君か手枕ふれぬよひには

かへし

我ために思ひしあらはよそにても君か袂はぬれしとを思ふ

おとこ

新干
忍ひつゝなきやすから戀わひて泪の淵に集とかひてそふる

返し

同
うかひても君はねに覺いかなれは露とおきゐてなきぬれしたもとそ集明す覽

男

うかひても袂のみ社ぬれまされ我もねられす君こふるよは

女

なけきつゝあなおほつかかなから衣ぬれ増る覽袖をみぬまは

おとこ

續干
朝すかたもなしからころもとにほしそわつらふ我袖はよな袖の集とにそほちまされは

かへし

同
ほす人も有とこそきけからころもうすぐ成行人のたもとは

おとこ返し

人しれす有明の月と出しよは露も我みもをきそまされる

女返し

よなくに成ぬと思へは白露のおきてぬる覽袖もからしを

おとこかへし

つみにのみそはぬにきては夜とに露の置ゐてあかし社すれ

又男いてゝすなはち

ほのくと明行程はうちなひき東雲よりそねはなかれける

女返し

等閑にしのめよりそあけ暮はうは露はかり置といふなる

かくてすみ給ほとに。この女又ひとのぬすみていに

ければ。おとこいみしうなけき給て。女あはれと思

ひ。かくなむいひやりける

玉穂

世中を思ふもくるしおもはしと思ふも身にはやまひ也けり

男かへし

忍ふれと猶忘られす思ほゆるやまひは君に我をまされる

女

思はすもある世中のくるしきにまさる病はあらしと思ふ

この女うちにまかりければ。いといみしうとをくて。

なけき給けるに。ひさしうありて。女のいひた

わか身ゆへうしとは思ひをきなからつらきは人の心なり覺

かへし

身のうきと思ひしりぬる物ならはつらき心を何かうらみむ

さ集

かくてこの女服になり給ぬときとて。とふらひきこ

えたる返事に。いつも時雨はとの給ひければ

返し

音にのみ聞わたりつるふち衣ふかく戀しと今をしりぬる

いひて

女のとまたちのもとより。しう君のもとに。この

女のほかさまになりたるを。いかにおほすらむと

返し

はかさまに靡くをみればしほかまの煙やいとはる集もえ渡る覽

鹽かまのもゆる煙はもなき物を空になき名を立を俗しき

とあれば。まつおほすらんことこそおほゆれとて。

御かたのこたちのいひやる
初秋の花の心をそこはともなくうつるふ色といかにみるらむ

男返し

時わかす垣ほにおふる撫子はうつろふ秋の程もしらぬを
又かへし

色かはる萩の下葉もある物をいかてか秋をしらすといふ覽
といひやる。

そのころ兵衛の佐になり給てけり。堀川大納言とか
や。

^{一本云}右此本者。二條家爲定卿。以_二自筆之正本_一寫之。藤雅教

右本院侍從集以横田茂語本書寫校合了

小馬命婦集

堀川院にさふらふくち女のかへりひ。いみ給とて。殿もう
へも。のこりなくいて給ひぬ。はかなき身はかゝるつゐて
にもとおもひて。つれ／＼におほゆ。ひむかし山よりみゆ
る家ともみむとて。たゞすみ出るに。それよりもめてたき
池。ところ／＼をみて。人の國せかいも。かくやとおもひ
やらる人ゝあれと。きかせむとおもふ人ありて。思ひいつ
るたはふれととぞ。

水のつらにふよう（糸思）にて捨たる舟あり

譬へつゝ岸のほとりに身を捨て繫かぬ舟ものとけかりける

洲崎に松い^ぬといたうてたてりみにゆけは千鳥みな立

ひとりねをみにこそきつれ我ならて松か崎にも千鳥住けり

はちすのいとおかしきを立よりてみれはいかなるか

けか見えけむ

池水のそこなる我もおいにけりかけにはちすとみるそ悲數

山なかにえたも葉もなきくちなしのたゞひとつふた

つなれるを

是は此耳なし山のくちなしかいふかひなくにみもなりに覺

池つらにはらひけるもくつくちふさ（糸思）にあり

刈すつる池のもくつの今はとてくちたる身にも哀とそみる

このしたの汀にあしはやう／＼いてゝたてり

人しれぬかけとや頼む葦のほのけふはまほにも出にける哉
山のしりべに沼ありかみもしもゝみえすたゞになか

る

行ところ有へき物を沼水のいてこしかたもおもほえぬかな
水のいとふかきところに柳おひたり

誰かみて名につけそめし淺みとり深き江に社生はしめけれ

み山のしりへにくさくものおほ(生)したる中にた
ていしあり水のしりはかはやなり

音にきくたてしまかと思ぬるからき水にもつけてみる哉

みまやのしりへにいたりてすさひして

獨ねはかひなかり覺駒なへてかけのむまやとまちて頼まん

もちふむとし比いひわたるにつれなければふちにさ
して

久しきをまつとやふちの思ふ覺かゝるをななく宿にしも咲

なをつれなきを日比をとめて月月になりて卯花に

さして

玉な明かめ集くれて日頃へに覺卯花のうきよのにはなけきせしまに

返し

いとしく日頃へ行は卯花のうきにつけてそ忘ればてぬる

おなし人物かたりなとしてつとめて

そこはかとさしてくきなき言の葉の流石に飽ぬけさそ戀數

又いかなるおりにかもちふむ

むは玉のよるにもふみはあらね共みえぬは闇に劣らさり覺

返し

待侘て心はやみにまとはれよむは玉つさはよにもさはらし

そつ殿のみふをかたらひて久しう音信さりければ

たつやとそ待てへにける網鳥の間はれ初てはかゝるへしやは

かへし

露はらひ朝たつきしの草かくれとへとゝはねと思ふ心あり

なかつ月になりてみふ

行過る秋の草はにやとりして立らんきしのもたのまし

返し

大かたの秋社野へをわかる共ことなし草はたゞしきゝすを

又黄なるうすやうを萩の下葉にえりてしろかねを露
にをかせて

をし立尾上にしける秋はきに下葉のうへをしる人のなき

萩のした葉のこきを見て

露かゝる萩をもをきて棹鹿のまつわひしらになくを社まで

これよりまゆみのもみちにつけて

朝な霧へたつめるさは山のにしにさす枝は露や置らん

返し

たのむにし西にさすえのうつりなはやへや隔てむ棹の山霧

又みふほとへて

かきくもれ冬のこのはも散にけり淺ちかもとは露を待なり

十月にこほりをもみちにいてみふかおこせたれば
神無月たか朝こほりほともなくきえて哀と誰かいはまし

としのはてかたにうらみてもちふん

さゝかにの糸よりもけによはき身に年月はこふもの侘しさ

霜月のつこもりかたに梅の花につけておとこ

冬や春はなや春への梅ならぬ雪に通ひし色はそれにて

返し

しらぬまに年のゆきゝの花なれば折につけつゝさかむ計に

又こと人のけさうしけるほとに名たちにければもち

ふむひさしうをとせてこりぬやといへりければ
奥山のをのゝ音にも驚かてこりぬやとたにいふかあやしき
おとこ

哀にそ思ひわたりしもかみ川わかいなふねの行と歸ると
かへし

いかさまにせよとかあまりかしま成生田の浦のいたく恨むる
いとつかに物いひてゐなにくたるおとこはるか
なりていへる

新干
つれ／＼と思ひやりつゝ鶯のほのかに聞し聲を戀しき
返し

戀しくは都のまつに鶯の鳴てそこましきなん集花はちるとも
又かへし

心にもあらぬ難波のなからへてよそにへむとは思ひけむは
此たひは返事なければおとこ

山ひこの答ふる聲のきこえねはなかむる空はまとはるゝ哉
返し

よふこ鳥いく聲鳴ぬ山ひこの答ふはかりはあらずそ有ける
又の日その國なるおとこかくいへり

とふとはたえ／＼なるを鈴鹿山をときくにのみ歎かるゝ哉
返し

玉露
數ならぬ身ははし鷹の鈴か山とはぬに何のをとをかはせむ
いひはしむるおとこ

いかにしてぬるとつけまし吹風にたより空なるあまの釣舟
うちはに夕たちしける比おとこ

なるかみのをりにもかへす唐衣日も夕立はいつとなければ

かへし
夕立のよるの衣はのかへりて雲のみにのみそならむとをしれ
いしはらにすむおとこ久しくきこえねはとて
いとしく燃社わたれいしはらの中よりわれて出る思ひは
おとこのとはぬかうらみをこせたれば

とはぬはし恨むる物と思ひせは幾そ度かはいふへかりける
おとこのもとにむかへたるに琴をひかするにをむな
とたえたれば男の心もかはりたるやうにみえしかは

いかなれば哀と思ひし睦言のふかきをたゆるよと成にけん
此おとこ日くるれば出ていにけりいもうとのおとこ
もおなしとところなる出ていにければおなし心になけ
きていもうとのいひをこせたる

夕されはひとつかひにて行君ををしとはいかゝ思はさるへき
〔題詞〕

佗ぬれはをしともいはず池にすむわするゝ鴨と我ぞ知へき
齋宮の女別當よそにあひて何ともいはて又の日袖の
中にやといひたる返事にへたうの君

主しらて空にうきたる玉をたに結びとゝむる物とこそきけ
たゝみの中よりきり／＼すのさ月はかりに出きたれ
は

きり／＼すむしろいかにか思ふ麗たゝみの中に秋はきに晝
もちふむ八月はかりに物なといひてつれなかりけれ
は夕くるゝまていみしうゝらみをきて出ぬとおもへ
と又たちかへりてかうしをうちたゝきてひとりこち
し

戀さのぬるに任せてねられねはおきてそきつる夜半の白露

返し

いかてかは夜半の白露置つらんね覺の床もたゝならなくに
そきやう殿の宮女へたうのもとよりとし月ふれとた
いめむすへき事もなきことゝあれは夏齋宮女別當に
かくなんきこえたりしこよひこそきこゆへかりけれ
とて

いかにせむゆかすはあはしこすはみし幾世を限る命ともなし
齋宮女御さいしゆよしのふをめしてこれか返事せよ
とおほせられければ

ゆかす共こす迎逢はてやまはやめ此世とのみは契らさりしを
女へたう

逢もみす命もしらすつきもせずこひのみ山となりぬ計そ
返し

しけからは戀のみ山もいりてみむ枝を交する影はありやと
返し

我ゆへはちすの上にてもとへあはれ何處に君を尋ねん
このよしのふかをりのほりにこの文を尋ねにきけれ
はよしのふ

かりかねにあらぬ我身のとしをへてつてのみ渡る君か玉章
かへし

かけてくるつての玉章なかりせは歸る鴈とも待たれさらまし
堀川とのゝあさりの君いたくわつらひ給とて母のもの
とおはしてたゝう紙に書付てこまこそみよとて

新告
なからへむ年も思はぬ露の身のさすかに消んとを社思へ
返し

露の身のきえは我こそ先たゝめをくれむ物かもりの下草

堀川の後うせさせ給へりし五七日七月七日にあたり
たりければもとすけかいひをこせたるあまになりた
るときゝて

たなはたにかしゝ衣を色にみるらむ袖を思ひこそやれ
返し

きてしよりぬれてのみふる藤衣かるたなはたのなきそ悲敷
さとに久しくゐたりしに人々の久敷とはさりしかは
玉華
ひとりしてみしかきりをは忘れしと誰かは我を思ひ出たる
け集

建長五年七月十四日。以三戸部本書寫畢。此後亦於有
他本一者可遂二校一也。但難讀所。亦落字之所。有少
少而已。

右小馬命婦集以村井敬義本書寫一校了

馬内侍集

後涼殿の御局にうへわたらせ給ふて梅のはなのすくなく咲たるをけちめもみえしかしすくなければとおほせられしかは

盛りありてちらまういかにおしまし心のとけき梅の花哉

おなし年の三月中宮の御かたにはなをかめにさゝせ給ひてこれかちる心よめとおほせられしかは

ちらしとや頼め初けむはかなくもとまらぬ花にそふ心かな七月七日にはすのたまを作りてさりにし人のをこせたれば

思ひあまり頼めし中のくやしきは此世とたにも契らざりし

ともたちのもとよりあまに成なんとありしはいかにといひたれば

しかすかに悲しき物は世中をうき立程の心なりけり

さりにし人のもとよりいかにそ人やかたらひたるとあれば

きみか新拾ごと思はぬ人のつらからは我も心はあくかれなまし

左大將久しくをともし給はて

あふ事のなきさなればや都鳥うらみて跡も絶てとひこぬ

なとかそれよりもあればかへし

とはぬまは袖朽ぬへし数ならぬ身よりあまれる泪こほれてその夜たひなる所にきあひてまくらもなければ草をむすひてしたれば

逢新古ことはこれや限りのたひならん草の枕も霜かれにけり

あるきむたちいまくとてすかせは

頼めくる君しつらくはよもの海に身も投つへき心ち社しすれ

返し

挿はへてかさしの花の其おりも仇なる物とみえにしものを

左大將こほりをつゝみて身にしみてなんおもふとあれば

逢事後拾のとこほるまはいか計り身にさへしみて歎くとか聞

人をよせねはしゐていりきたるがわひしければちかことをたてゝ後にあはむとてやりたれば一日はかりありて

祈りくる我かたをかのちかをもをそくたゝすの神にも有哉返し

あふとをかたをかとのみ思ふ身は何にたゝすの神にかく覽

ふみをこする男の秋とたのめたるころなか月はかり煩らひていひをこせたる

命あらはさりとのみ頼みたるあき待つけん心地こそせね

左大將こほりしたるかたなと書きたるあふきをわか

心かはりなはおこせよとの給ひしかは奉るとてこほりたる池のつらにをむなをすへてけふりをたゝせてかく

もえ出るむねの思ひはたかけれとなみたの河は猶氷りけり

十月はかりにあからさまにきたる人のかへりなんとするにしくれのすこしすれば

かき曇れしくとならば神な月けしき空なる人やとまると

しはす二ありし年しのひてやみなむまたはなこそと
いひし人のうるふ月はいかゝ思ふといひたれば
みそかにも有へき物をゆきふるに袂のうるふ月の侘しさ

人おほくかたらふとてあるきむたちのもとより

色々の花のなかにも女郎花いかなる枝に露とまらん
をむなともたちの御もとに久しくとはぬ事といひて
つらからは扱もやみなて春の日の恨まほしきあまにも有哉

返し

つらしてふ心有けり春の日のわかうらなきにおもひける哉

しそくなりし人のあるおとこにかたらはれてこれな
んひとつまつとておこせたれば

ひとつ松結ひけりとも今そしるゝくる心はときはならしを

左の大將とのかへり給ひて雨ふるにははるときゝた

まひて

つかのまも戀しき人はつれゝとなかめにものや思ひ増覽

久しくありておほしいてゝ

ほとふれば忘れやしにし春雨のふるものみそ我は戀ひしき

返し

いとゝしくぬれのみまさる衣てに雨ふるとを何にかく覽

むけにをとつれ給はぬころ

後拾
くもてさへかきたえに覺さゝかにの命を今は何にかけまし
歎つゝふれとも數にあらぬみはいかゝはすへき賤のをた卷

かへし

かくて社よそにふれ共さゝかにの如何に戀しき物とかは知
雪のいみしくふるにおはしてあかつきにかくきなら

ひてこそはいかゝおもふへきとのたまへは
忘れなは越路の雪の跡たえてきゆるためしになりぬ計りそ

返し

年ふともきゆるよもあらし白雪の千歳の松にふりし積れば

かくてしのひて有ほとにえあはておとききみ

今さらになにかわふへき君ならて此よのとは思はさりしを

返し

何かその露のほたしにあらぬみも君とまらへき此世ならねは

やまさとなる人に雪のふる日

ふればかつ消ぬる雪としりなからなに山里のしひて戀しき

かゝるへきとにあらすといひてあはぬ人のもとより

なか月はかりにまたらなる草はををこせたれば

人こゝろまたらにみゆる草なれば枯ぬる人のしるし成へし

かくてその冬うちとけてもあはさりければとしかへ

りて二月ついたちころにつほみたる花にさして

あたにはと頼みし風しあらからは盛もなくて花や散なん

返し

風も荒く花も程なく散ゆかは浮身をいかに成ねとかおもふ

もとの人なと聞つけてさはかしくて得あはぬなりけ

りおなし人こゝろうきことやさゝけむうしたれば女

もむつかりてあはさりければ五月五日におとこ

うき事をいつわすれてかあやめ草たえぬしたねを立る待覽

返し

忘れぬ憂につけても菖蒲草いかにしたねの長からめやは

かくてあるにさはれなといふころくれなゐのはなを

おとこの見せにをこせたれば

くるしとて色に出ればあさえけり染てくやしき花をみる哉
五月みやの御まへにあめいみしくふるにほとゝきす
のなきてわたれば人に歌よませたまひしに
とふかたそまつしられ覺郭公いかになくねそあま宿りせて
おとこのし文字八字よむ比いひにをこせたるか例な
らすや有けむ

知そめしとやくやしきしのふ草しる人もなし絶やしなまし
このおとこよをかねたる夜ゆめにやみえけむいひた
るに

思つゝぬる夜の夢を知らぬ身は胸にたく戀さめたにもせよ
長閑なる春の浦にもすかためは猶こゆるきのいそかしやなそ

あるおとこのもとより

なきたむる涙の玉を衣手につゝむ人めに程そへにける

つかひあしくしてみつけられてこひたる人さりぬと
聞てこのきみ

人しれすぬれわたる身はなみた川いはれの池を哀とと思ふ

返し

おもほえず涙の川にぬれ衣をわれより外に誰かきるへき

龍田山に二日はかりありてたつたやまもいかゝとて
吹風にけになんかすそ女郎花忍ひにかゝる露をしらなむ

とあれば

さかのいろなるこゝろとやきく

といひしかは

をみなへしつゝむわか身はのへなれや

おなしき九月はかりに

思ふ人やゝ過ぬとや菊のはな雨を聞ても露にぬる覽

ほかにとて返しつなとかをととはいひたりしかは
みつからきたるにあはねは九月九日きくにさして
菊のうへの露をはきてなみたこそわたの衣の袖も乾かね
しのひたりし人のもとより
朝もになかるゝとこのまくら哉我もうきゝの心ちのみして
きりゝすのなきしをひとりことに

なきなたつ袖も有しをきりゝす草露けしと何なけくらん

五月五日にこのきみ

新古

時鳥いつかと待しあやめくさけふもいかなるねをか鳴らん

かへし

同

五月雨の空くもらす郭公ときに鳴ねは人もとかめす

その夜きたるにおくにあるかけはみえてなしとてか

へしたれば

ほのみえし月を戀つゝかへるさの雲ちの浪にぬれし袖かも

今はかきりといひたりしかはしかのうらにとのみい

ひやる三日はかりありて

しかの浦にたのむ涙は盡せねとせきもとゝめぬあふ坂の關

返しはせてしはし有ていし山へまうつときゝて

逢坂のせき山こゆるけふさへやなをやなみたの盡せさる覽

といひたりしかは

白露の末ゝこゆるあふさかのいとはるさめに袖を濡ける

また七月七日に

けふとたに契らぬなかは逢さかを雲ゐにとのみ聞わたる哉

返し

あふ事をけふとなかけそ鵲のはしきくたにもゆゝしき物を

人のきたるにわたのころもとたのめやしけむ

流れ行との葉にこそしら露の命をかけておきかへりつれ

これをきゝてあきのふのあそむ

さ月山み山かくれの草木とやものはたにもかけてちりこぬ

またあるとおとしのふ草につけて

しのふ草しのふやつまといひなから夜深く露のをける袖哉

返し

物おもふに秋は深くそ成にける軒のしのふの色かはるまで

このおとこけさかへりつる道にほとゝさすのなきつ

るといへは

こゝろみに空にかよひて時鳥人のためなるねこそなかるれ

大風ふきたるつとめてひはたにさしてある男のもと

今朝みれはとまれる宿もなかり鼻忍ふの草もいかゝ成にし

おとこのとをき所へいくとて

草枕たひねの衣かはかすは夢にもつけむ思ひをこせよ

たひねのところより

獨ぬる宿にふすふる蚊遣火のさよふけかたに燃かはりつゝ

久しくあはてなてしこにさして

逢とはから撫子のはるけくて思ひわつらふとこなつの花

つゝむとありて文なともかよはぬほとかきあつめて

をこせたる

井せきする岩まの水の打忍ひ忍ひかねてそねはなかれぬる

いかなればしらぬに生るうきぬなは苦しや心人しれすのみ

浮草に枕やすらむをしりの夜はのとけきいやはねらるゝ

我戀にくらへてしかな雨ふれば庭のうたかた敷をかそへて

ね覺には聞もしつ覽夜もすから雨の聲にはをととりやはする

返し

五月雨によ一夜あめは忍ふれとそれより他の聲はせさりき

齋院よりうつへをたまへれば

歎きとてほとゝ思ふ斧の音は祝のつえをきるにそ有ける

かへし

をのゝ音も尋ねさりせは玉椿祝のつえをいかてしらまし

人のもとにかれたるもみちの枝をやりたれば

霜枯のあふくなけきの枝なれば深き色とはみえすそ有ける

左大將ちかことふみをおこせ給ふてかはりのふみを

こせよとせめ給しかは

千載

千早ふる賀茂のやしろの神もきけ君忘れすは我もわすれし

やすのふ文をこすれといひもはなたねはうりにかき

て

うりふ山そのほとゝのみ頼めつゝ久しくなるは辛きわさ哉

左大將兵衛のすけにておはせしとき卯月に物をいひ

そめたまふて

新古

郭公こゑをはきけと花のえにまたふみなれぬ物をこそ思へ

返し

郭公忍ふものをかしは本のもりても聲の聞えける哉

(此返し歌脱たり新古今によりて補ふ)

此男ふみをこするを女いみしくいふときゝて

岸ちかみうこかぬいはゝつれなきに何と聞らむ浪のした水

しはるゝもといひたれば

かくれともうこかぬ岸の岩の上にいさ白波の碎けやはする

なをきせよとあるに二日はかりありてわたをたせた

れば

しつのはの松にもあらず思ひよりあまりなかけそ岸の藤波
ある人三月はかりとをき所より
井手近きいもねぬ宿の淋しきにいとゝかはつも聲は立つゝ

またあき

秋風の吹はみたるゝ花すゝき結びし心われにつけなむ

人をよせさりしかは

敷妙にふしみふさすみ歎く共猶うかりける身をいかゝせん
いせへくたる人みちより

鈴鹿山 こえもならはぬ道すからこふるはいかに侘しとか知
しのひたる人とおらはいかゝ思ふかきりなめりかし

といへは

舞

人とはゝいかゝこたへむ涙たに心してやは袖をぬらさぬ

雨ふる日いみしくふるともかならずまいらんとあれ
はさらなりとて

なかれつゝ忍ふる袖に比ふれはけふ降くらす雨はあめかは
つゝむもありてあはてのみ有るにつの國へなんまか
りぬる有様にしたかひてかれよりも参らむといひた
れは

忍ひてもいかゝはすへき芦の屋の其やへふきの隙もあらしを
ゐたるまへより人のいきけるにこゑきこゆるほととな
れはおほつかなくてなんまかるといひいれたれは
まち侘てたてつる聲によふこ鳥雲井なからもこたへつる哉

といはせたれは返し

呼子鳥ひなをもとめてなくならはよそなる聲に慰めもせよ

しのひたる人かはたけをうへよとておこせたれは
風ふけは梢かたよる河竹のよゝになれなはねそたえぬへし

あはたの右の大との(道兼)夜ふかく歸らせ給て日かけ
をたまはせたりしかは御かへりきこえさせし
包め共うきに人めのおしければあけは日影のまはゆからまし

もりといふ所を忍にかきてよみしかは

春は花あきは紅葉とさそはれて人も立よる衣手のもり

かめのかたをつくりてこにうす物をはりてほたるを
いとおほくこめたりさふらふ人々によませさせ給ひ
し

君か代をかめのおなしにみすとてや河への螢ひかります覽

十月はかりにおもへるもよみてと宮より仰られし
は

千載

ねさめして誰か聞らむ此頃の木のはにかゝる夜半の時雨を

とし比もろともによりふる人よそになりてとしとに
人のもてきけるうりをさゝけるも有けるとしをこす
とて

年毎にしらす顔なるうりつくりかりもりしつる秋にも有哉
なかつたえたる人あしるになむ日ころあるとてもみち
にひをゝつゝみてをこせたるに

日をへてもいかにとふらんあしろ木に夜思出る人はとにて
かりそめにおもひし人のまめやかにかたらふ人いて
きぬと聞てうつろひたる萩のしたはに書きて

うつろふは下葉はかりとみし程にやかて秋にも成にける哉
人のこまつといふ所に侍りしに雪のいたうふりしか
はつかはしゝ

朝ほらけ思ひやる哉ほともなきこまつは雲にうつもれぬ覽
返し

埋むとも雪は消えなむ春きなはとふへき人のなきを社思へ

とをき所よりたよりあるにとはぬひとに

年ふ共すくす傾りをみさりせは忘れぬ哉となをたのまゝし

さるへき所に夜なぐとのゐして曉にはくるものゝ

ほかにとまりたりければ

けさみれは露むすほゝる朝こほりとくる物とも頼みける哉

しのひたるころにある人ふみのかへりことせねは

歌を得よまぬなめりとてなにはつをかきてをこせた

ねは

冬籠り忍ふとすれは難波津にさくや此はなちりもこそすれ

ゑしたる人のもとにふみをやりたりければ返事もせ

ぬに

山彦もこたへぬ春の呼子鳥なけとやこそ絶ぬかきりは

むかしみける人こゆみをたよりにつけて今みつから

とりにこむといひけるか大かたにきたれとまたみえ

ねは

日くらしにまち心みむあつき弓はからす人の思ひいてよと

返し

ひくらしに春のうらみも梓弓思ひためたるつらきこゝろを

かたらふ人おほかる男のとをき所なりけるかのほる

ときくにまたみかありときゝて

こよひさみいづれの里の月をみて都に誰を思ひ出らん

かへし

宿とにねぬよの月は詠むれとともにみし夜の影はせさりき

よにそらことをいはれてなげくにふみをこせかたく
待人のたえてをとつねねは

後拾

うかりけるみのふの浦のうつせ貝空しき名のみ立はきゝや

まつ人なきはえあふましきとを人々いひてこのこ

ろしも日もくるゝをなといひて

袂のみひるまもなくて此比の朝日にくるゝ空をみるかな

人のもとよりこよひはいきやすへきとあれば

よしさらは戀しきとは忍ひつゝ絶えずはたえぬ命と思はん

返し

戀後拾

今さらには忍ひそわふる時鳥もとつ人よとねのみなかれて

おなしところにするはゝてゝたましつめ(靈魂)してま

いらすとて

身から社にも角にもあくかれめ通はむ魂のを絶たにすな

とてまいらせたれば

世にも皆憧れにたる玉なればうらなきつまに留る物かは

かたらふ人のあはぬ比ほとゝきすの鳴つるはきゝつ

やといひたれば

心新古のみ空になりつる郭公人のためなる音こそなかるれ

むかしみしともたちのかもの祭のしたいし余第司に

いてゝかくなんまいりたるといひたれば

きみしもある道のゆきゝも定む覺過ぬる人はかつ忘れつつ

くらまにまいりたるにとり井のもとに櫻いときかり

なるをみすへき人もかなとおもふにもあかねは

をもみめ集

かしはきの若き葉にさして

さはに皆おりたちぬ共はを若みわかゝり染めし宿の菖蒲は

五月のなかあめにあやめのおちたるを宮御らむして
あはれうたよめとおほせられしかは

菖蒲草何れの澤にねをとめて身をは長めにくたしはつらむ

女ある人のもとに物いふにつゝめはかきの下葉にか
きてをこせたる

露とけて思ひもをかしもの故にしたにこかれて何か忍ふる

いものほに露のとまれるを

つれなくともか下葉に置露はいかにとまれる物とかは知

おとこかひをこすとして

數ならて千尋の濱に拾ひつゝかひや有とそけふを待ちつる

ときゝてもとよりある人あしくするにむけにあはね

はいひをこせたりし

中空にかくてや絶ゆるさゝかにのいと淺ましき心なりけり

人のこむとてこさりしかは風のふきしに

頼め置て君こぬ宿の風の音は夜となればそはけしかりける

こむといひし人きて夜一夜ありけれとあはてつとめ

てなとこすなりにしと云ひやりたれば

終夜田子の浦波よせし音をふしの高根に聞かさりけるに

しのふる人にいひつかはしける

おこし火の炭をは灰にかくしつゝ埋まれぬ名の戀を社思へ

兵衛のすけなる人かたらふとみな人きゝてのち中將

にふみかよはしければ人のきゝていひたる

柏木はあめも人めもしけしとて三笠の山にふみかよふとか
さらにわすれしと契りたる人にたえてある所をたに

しらせねは

行かよふ跡たえぬるかみつくきの流れてとかや人の頼めし

人をかたらひてあふおりあはぬおり有しかはあふき
のはなしてをきたるにかきてをこせたりし

つき草のうつし心やいかならんむらゝしくも成ぬへき哉

かたらひてとし比ありつるひとのゆふさき人のむこ
になりぬと聞いていかたのかたをつくりてかきてやる

新拾

大井川人めもらさぬけふやさば柚のいかたしくれを待らん

正月にそらのけしきなどもよしよめとみやのおほせ
られしかは

うらことにあまはみるらむ初春のけぬるき風に涙やなこまん

おとこ恨てひさしくをとせて

新古

つらからは戀しきとは忘れなてそへてはなとかしつ心なき

返し

かりにても心をかへてみましかは今は長閑に成もしなまし

久しくこねはいひやる

をは捨の月はいかにか出たりしなくさめかたき人はみる覽

このおとこつゝみてさるへきおりゝあふほとにい

し山へ參るときゝてかへりて三月はかりに

返し

あふ坂の關のまにゝ花をみて春のきにける程もしられす

諸ともにあふともなくて逢坂の關のまにゝ花をみにけむ

人かたらふときゝ給ひてなかのくわむはく(道隆)

あやしきはぬれぬ人なきそめ川のかゝらぬ袖も朽果ぬへし
みちの國のかみこうりをたちぬるつきのなりとてう
たはわすれて侍さりける返し

霧ふかく鳴しかをみよりふのゝけにかりもりの心也けり
 きむたうのきみこそ春やりたりしむめのはなをふ
 みにさしてをこせたれば
 むかしにたる梅のはなかな
 といひたりしかは

梅花むかしのをうたかへと空のけしきのかはれるやなそ
 さねかたのきみえてきたりこのふみありけるを見て
 うらやまし散くる跡や都鳥ならひ有せはをくれましやは
 すけゆきあふきををこせてこれはいかにわすれやし
 にしといひやりたれば

時鳥忘るらんこそうの花のかけとそふへき我としらすや

みそきの日しのひてかたらふ人のもとより

うしろめた神も聞かれぬとなれば我を忘るゝ御穢しつらむ

ある人こゝろを有けむ

人こゝろよしみつしほの今よりは我つらくとも田子の浦波

中關白とのおはせんと給ひてまへわたり橋のかき

りおゝせてすき給ひぬれば

こち風にこのみしるくてたち花のたのめしもの過ぬめる哉

つれゝなりし日人のふみをこせるに

かすかのに誰かまつとはつけつらんけふの子日に鶯のなく

かくて得あはぬころ風ふくつとめて

朝日さす草のゝもとに家あしてすはへする日はとに悲しも

此おとこおなし人を中へゐていきて京へ登るとて

雪ふる日

山高み雪ふるさとに君をゝきておほつかなくも思ふへき哉
 このおとこ京よりふみをこせたるに雪なむいみしう

ふるといひをこせたれば

我思ひ都のかせとふきてしはふりつむ雪はあらしとをしれ

日ころありて夢になんみつるいかゝといひたれば

人しれすねられぬ床のさひしさを誰とか夜の夢とみつらん

るいなる人のせいすればあはてのみあるにおとこ

くれいかに如何にしてかは大井川井堰の水はよりぬへしやは

返し

大井河井堰につゝむ我なれやけふ暮かたになけきををする

をとりたる男やなきにふみをさしてをこせたれば

吹風になひくとやきく青柳のいとあさましくおもひよる哉

わか心とかれにし人正月に

別れては春に社また成にけれ年はたゝにそとまらさりける

又たれもゝはなれてとし比になりて三月ばかりに

あめふる日

思ひきや春のなかめの長閑きに君を雲井になさむものとは

右大將ものし給ての比いき所もしらすほかにあれば

しのふれは空に涙もきりみちてこひしき人やいとゝ成らん

人のあくかれてこさりし比あるところになつむしの

なきければ

きみをのみ待虫のねのある物をいつれのゝへの露にぬる覧

こせちのところしにひてあるに大とのゝ少將にて

おはせし時見つけ給てかゝるもなとありしかは

三笠山日影まはゆき影みるにさし離れすはかゝらましやは

ときこえしかは

つらしといふ君もとはり忘られて人めをつゝむ我な恨みそ

おなし所にてあるおこと

ほのかにもみはや慰さむと思ひしに心をしらぬこゝろ之覺
都にもなへてはいはし櫻はな誰にゝほひをまつかたらまし

たきをおとせはいろゝのはなうきたり

山高みゝたれておつる瀧の糸はあやさたらぬ錦なりけり

つゝしつはきのはなさきたる所にて

鞍ま山おほつかなしと人とはゝ名にはたかへる道と答へむ

むかし見し所の花をある所にうへさせ給たりければ

まいりたれば

宿かへて匂ひをとるな梅花むかし忘れぬ人もある世に

またある人

むめの花いくとせ春をへたてゝか昔わすれぬけふにあふ覽

まいりたる人

しる人に匂ひなかけそむめの花昔のもいかにてしのはむ

むかしのともたちのもとより大きなたちはなをふ

みの中にいれて

類なき戀する人のあたりにははな立花もかはかりやなる

かへし

思ひきや花橘の香はかりもこひしき人にならんものとは

正月ついたちの日いまはとしころとも聞えつへしと

いひたれば

年はかくあらたまるめる世中に雪ふり増る身をいかにせむ

つゝむとのみある人に

峯の雪谷のこほりにとちられて跡みえかたきみわの山もと

返し

三輪の山しるしの杉もみえぬまで降つむ雪に跡たえてやは

ある人この人のかたらはむとひとにもいひ文をもを

こせむと思ひける程にそざるなるきむたちなんとの
女かたらふときゝてきくにさして

ちらすとして菊に心かけたれば花こそいたくうつろひにけれ

ともたちのもとなりしその人にはなれて又のとし中

の子の日の松をむすひてけふは中のねのひととはしら

すやとて

誰をけふまつとかいはむかく計忘るゝ中のねたけなるよに

はしめのやうにもあらずなり侍人のねところにあふ

きをわすれたるやるとて

朝またきあれ行床に我を置てまた忘らるゝならひなりけり

しはしたのむへくもあらぬ人のもとに

ちる花に枕さたむとみし夢は明る夜比をいくよかそへん

七月七日けふの空のけしきいかゞ見るといひたれば

歎きつゝあまの川なみなかむれば絶まかちなる雲そわたれる

おなし日をみなへしをうへよとてひとのをこせたれ

は

彦星にしの人やかよふらんけふしも匂ふをみなへし哉

いたくあれたる人のいへにもみちちりて人もおさ

ゝなきかきくおもしろくたてり女なかめたるに

木からしのしける紅葉に跡たえて人もみえこぬ宿のしら菊

いみしき事ありともよそゝにならしと契りける人

さしもなくなりてをかせたるてはこそさへにこひに

をこせたればやるとて

後拾

玉くしけ身はよそゝに或ぬともふたり契りしをな忘れそ

人ようさりこんとてこさりしを其をこたりをもしら

むとてようさりはかならずとあるに

同

續詞

待ほとこのすきのみゆけは大の川たのむる暮もいかゝと思
とき／＼みゆる人むまはそこに入るといひたれは
あゝかたて行衛もしらぬ春駒のおも影ならてみゆる社なき
ある所の御まへにきくあはせ給とてあるものゝ月あ
かきにこひありくをみて

月影にまかふと思ふきくの花うつろふ色はもにも有かな
はらからなる人のほゝきといふ所にてをとせねは
たよりにつけて

後拾

ゆかは社あはてもあらめは木々のありと計は訪つれよ君
なかあしくなりし人秋になりて此ころはいかにとい
ひたれは

きみしあればね覺の風もしらざりき秋珍らしき比にも有哉
返し

君により人を戀しとしらるればきみを哀とおもひそめつる

ゆのこしまといふ所をくのかみにすへて

行かへり長閑ならねはこしかたのしのふ計にまつ人もなし

よの中のいとはかなきころむかしさふらひしところ
に

いかゝせむいかゝいはまし日暮しのなきても餘るよの儚さを
さるへき所にてしのひてよる／＼きける人まかてゝ
つとめて

秋近き萩の下葉のかけてたにもりにし露そよるはつゆけき
返し

かけ草の下葉にかゝる露にても戀しといかに思ひ出けむ
ものへ行人にかゝみとらすとて

續千

みなれよとそふる鏡のかけたにも曇らてすくせ人忘る共

とう三條の花をるりのつほにさしてたのこいのはこ
にすへてこれはちりにけるをあたらしくさしてまい
らせよとて少納言のくら人につかはしゝ

櫻ばな誰に心をかよはしていかにゝほひをとゝめさるらん
さふらひし人のほかなるにふみ給とて

しめのうちの同しいかきの都鳥馴にしとを尋ねてそとふ
をろかならずちきりせる中いかゝありけむおとこ
君もいひ我も契りしものはゝかくしもかれん物とやはみし
ゑに女のものへまうてつる山ちにいろ／＼の花ちる
をとゞまりてみる

色／＼の花の心をちらさらは故郷ありとおもはましやは
此ころもろともにある人つとめてのはきのけしきな
むといとあはれなるかならすおきて見むとちきりて
みるつとめてしも露といふものなしせむさいともよ
くかはきたりうき事かきりなくて

萩の上の枝もたは／＼をく露をつゆけさいかて乾きたる覽
このあかつきにとくおきんこれはをそきなりとてお
きよといへは

結置てとくと思ふ共さゝかにのいかに纏はむ露ならぬ身は
物かたりする人いつくにかあらんわかやうに絶えて
ねぬ人はあらしものをたれとかたらはんと思ひつら
ねられぬに夜ふけてほとゝきすのこゑ一たひなきて
やみぬれはいつこならむとおほえて

やと／＼になくねはゆめか郭公ねぬ我はかりきくよしも哉
やむことなき人の御文一たひ有て又をとつれもなけ
れは五月つこもり比に

とふ蝨まものこひにあらねとも光ゆゝしき夕やみのそら

をとろへはてゝうち院に住に歸る雁をきゝて

後拾

ぬ

ん集

とゝまらん心そみえぬ歸るかり花のさかりを人にかたるな
殿上にてなき名をいひたてければ

燃こかれ沖の焼野のくゆる上にみえぬなき名をおほす成哉
右馬内侍集以村井敬義本校合

羣書類從卷第二百七十三

和歌部百二十八 家集四十六

伊勢集上

いつれの御時にかありけんおほ宮す所(七條后)ときこ
えける御つほねにやまとおや(織藤)有ける人(伊勢)さ
ふらひけりおやいとかなしうしてをとこなともあは
せさりけるを御息所の御せうと(神平)年頃いひわたり
給けれとしはしはさらにきかさりけるをいかゞ有け
ん思ひつきにけりおやいかにいはんとなけきわたり
けるを年ころへにければきゝつてけりされとすく
せ(宿世)こそはありけめとてにいはさりけりたゞわ
かき人はたのみかたき物をとそいひけるほとに時の
おほひまうち君にむこにとられにけり其をりにそお
やもされはよといひければ女はつかしと思ほとに此
男のもとより人をこせたり此女の家は五條わたりな
るに來てかき(柿)の紅葉に哥をなんかきつけゝる
人後撰すますあれたる宿をきて見れば今そ紅葉このはゝ集の錦おりける
女心うき物からあはれにおもほえければ

同
なみたさへ時雨にそひて故郷は紅葉の色もこさまさりけり
とてねすもちの紅葉につけてそやりける男いとおか

古今

三輪の山いかにまちみん年ふとも尋る人もあらしと思へは
をとこ返し

同
もろこしのよしのゝ山に籠るとも思はん人に我をくれめや
をとこのもとより

後
世をうみの淡と消ぬる身にしあれば恨むる事はさなかりける
ならさかにおいてをこせたりける

同
わたつみと頼めし事ものあせぬれば我そ我みのうらを恨むる
やまとに三月はかり有けるにさうくしく寺めぐり

せんとしてりうもんといふ寺にまうてたりける正月十
一日はかりになん有ける此寺のありさまは瀧は雲の
中よりおつるやうになん有ける仙人の岩やといふ所
はいとあはれに年つもりて岩の上に苔やへにむした
りみるにあはれにたうとくのみおほえてなみたはお
つる瀧にもおとらすなかむるほとにさかもとにて雪
かきくらし降ほとにいさ哥よまんといふに此女

古
たちぬはぬきぬきし人もなき物を何山姫の布さらすらん
とよみたりければと人よますなりにけり今日はみち

に出てこしといふ所にやとりぬ

みもはてす空にきえなて限りなく厭ふ浮世に身の歸りくる

とひとりこちてそてしほるはかりなきぬらしたりけるかゝるほとにかの御息所の御もとよりはやのほらせよとめしたりければはや(縁)のほり給ひね宮つかへをこそせよと思しかと思はせていふになんしぬる心地してける扱のほる路にて伏見といふ所にて

名にたてふしみの里といふことは紅葉を床にしければ成覺

つかうまつるに此男は又をこそあはんといへりあはて有けるに此男のあにゝあたる男有けりたのみ給

なあなおきなわれを思へなとせちにいふ文なとかよ

はせてさらにあはさりければかくいふをもとの人しりたりけり女の里にて前栽のおかしかりければ手すさみにおはなをむすひたりけるを初めの人きてみて

古

花すゝき我こそしに頼みしかほに出て人にむすはれに覺

とて物を聞たるはやといひければ人かすならさらん

にはなとかはとてこそなと打とけたるけしきにてい

へは男もいとあはれと思ふ女はされとあはてやりつゝ

ゝあにの男なとかまいり給はぬ人のこゝろをいひて

後

ひたふるに思なわひそふるさるゝ人の心はそれそよのつね

返し

世の常の人の心をまたみねはなにか此たひけぬへきものを

此男御心のつられければよしのへなんまかるとて

同

ひたふるに厭ひはてぬる物ならは吉野の山に行ゑしられし

返し

我宿とたのむ吉野に君かこは同しかさしをさしこそはせめ

かくてみやす所なやませ給ければあつまかさふらふきの藏人といふして此はしめの男あからさまにしもにおりよ物いはんといはせたりければ返事に心をしはしなくさめてといふふるものはしをなんいひたりけるをとこ

よひのまにはやなくさめよ石上ふりにし床も打拂ふへく

返し

わたつみとあれにし床を今更に拂はゝ袖やあわと消なん

といひたりければ人ゝよひのめさましてなんあはれかりけるまた人かすともせぬに心さしいとふかき人そひていひける文をこそせけれと返事もせさりければ

山かつといへ共かひそなかりける山ひこそらに我答へせよ

猶返事もせさりければあかぬとけいせよともいひは

なてといへりければ

いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬよ成覺

かゝるに時の大臣流され給むこにて(敏)兵衛のすけ

より但馬介になされてなかせれるをたゝにてはさ

しもおほえてやみにしをかくとほくなかれゆきたる

かあはれなる事といひたりければ

かけていへは泪の川の瀬を早み心つかからやまたはなかれん

同女年へていふともなくいはすともなくよはふを返

事もせさりければこゝらの年月に成ぬれとなとかみ

つどとの給はぬといへりければたゝみつとのみそい

へりけるそれより此女をみつとそついたりけるをと

このをこせたりける
立歸りふみゆかさらは濱千鳥あとみつとたに君いはましや

返し

としへぬると思はすは濱千鳥ふみとめてたにみへき物かは
夏のいとあつき日さかりにおなし人

返し
夏の日のもゆる思ひのわひしきに水こひ鳥のねをのみそ鳴

徒にたまる泪のみつならはこれしてけてといはまし物を

かういふ人々の事をもきかて宮つかひをのみしける
に時の帝幸多めしつかはせ給けりよくそけしからぬ
人の事をきかさりけるとみつからも思ふおやなとも
いふほとにはらみにけり男君をそうみたりける我心
いとうれしと思ひけりつかうまつる御息所は后にゐ
給ひぬうみたる子はかつらといふ所におきて雨のふ
る日うちなかくてゐたりければ宮のよみて給はせた
る

月つぎのうちのかつらの人を思ふとや雨に涙のそひて降らむ

御返し

古ふる久堅とこの中におひたる君なれば光りをのみそたのむへらなる

かくて帝おり給て三年といふに御くしおろし給て仁
和寺といふ所に住給ふ時ときさいの宮おはしましか
よふ時にきさいの宮世になくかなしとおほすつかふ
まつりし人もいみじうかなしと見たてまつりしもと
すみ給し所に帝おはしまして御とききこしめすつか
うまつりし人々君たちなとめしあつめておろし給ふ
宮の御方よりかくよみてまゐらせたる

言の葉に消せぬ露はをくらめや昔おほゆるまゐしたれば
御返し

うみとのみ閑居の中は成ぬめりそなからあらぬ君かみゆれば

となん此帝につかうまつりて子うみたりし人はよに
さひはひなき物なりければうみたてまつりし君八ツ
に成給ふとしうせ給ひにければいみじうかなしと思
にもおろかにおほゆればさらにいふかひなししなん
と思にもしなれすよるひるなくほとにみつとつけた
りし人のもとよりいひをこせたりける

思よりいふはおろかに成ぬれば例へていはん言の葉そなき

とあればさらに物おほえて返事せすかへるとしの五
月の曉時鳥の鳴を聞てひとりこちける

しての山越てきつらん時鳥戀しき人のうへかたならむ

いまは男を心うかりてみやつかへをなんしけるきさ
いの宮の御ころるかきりなくなめき給ふて世にた
とふへくもあらずなんおはしましける此人さうしに
は前栽をうへてなん住ける秋里にまかてゝあるにか
の宮よりなとかまゐらぬまゐれ花盛も過ぬ松虫も鳴
やみぬめりとの給はせたりければ御返にきこえさせ
ける

松虫も鳴やみぬなり秋の野に誰よふとてか花みにもこん

御返し

よふとしもねには聞えて花すゝき忍ひに招く袖もみゆめり
又まゐらす

人もきぬ尾花か袖にまねかれていとゝあたる名をや立南
常になやましようのみし給ひけるをつひにみな月の八

目になんかくれ玉ひにける淺ましうかなしくてつか
うまつりし人ゝもさまゝにあつまりてよるひる戀
なき奉るに後の御わさのくみのいとをなんよりける
しもなる人いとはよりはて給ひつや今は何事をかし
給ふ雨をなかくてなんこゝには侍といひあけければ
いとはよりはてゝいまはねをなんよりあはせてなき
侍といひたりければしもの人

より合せてなくなる聲を糸にして我泪をは玉にぬかなん
興つなみ あれのみまさる 宮のうちに 年へて住し

伊勢の蟹も 舟なしたる 心ちして よらむかたなく
かなしきに 泪のいろの くれなるは われらか中の

しくれにて 秋のもみちと ひとゝは おのかちりゝ
わかれなは 頼むかけなく なりはてゝ とまるものとは

花すゝき 君なき宿に (可脱職) むれ立て そらをまねかは
はつかりの 鳴わたつゝ よそにこそみめ

いとみそかに人にあひたりけるを人ゝやうゝいひ
のゝしりけり男のかうふりのはこに玉をなん入たり
けるそれかをに

瀧津せと名に流るれば玉のをのあひみし程をくらへつる哉

こ中宮のまた東宮の女御と聞えし時題給はせてよま
せ給ける屏風の哥男のきあひて物いひたる繪なん有
ける梅花見たよりにもいひそめたる女にをとこ
見し人に又もやあふと梅花さきしあたりにゆかぬ日をなき

返し

一度にこりにし梅の花なればちりぬときけと今はみなくに
櫻花盛りおなしをとこ

わかもとにいささそはれよ櫻花なに山里にかくれてはさく
返し

世にさかぬ物にありせは山櫻人にあまねくつけさらましや
藤の花さきたるを男來てかいまみて女のもとへやる

藤の花けふみつるよりこむらさきむらゝ色を深く成ぬる
此男來てかたとに立やすらふ花たちはなにほとゝきす

鳴男のよみてをこせたり

とにたてるわれや悲しき時鳥花橘のゑたにゐてなく

返し

何とも君をはしらし時鳥きながらなくはさかにやはあらぬ
六月みそきしたる所に男きあへり男

年なかに我歎きとは成ぬれば且に身をくともうせしと思
返し

歎をはなてゝはらふる大ぬさははや河のせに流れ出ぬめり
七夕の日

朝またき出てひくらんけふのをに心なさをくらへてし哉
返し

棚機のなかきをゝしてくらふ共心のかたやまつはたえせん
秋の野に花見にいくと聞て男

秋の野に出ぬとならは花すゝきしのひに我を招きやはせぬ
返し

何方にありとしらめや花すゝきはかなき空をまねきたて南
男せちに物いはんといふほとに時雨のすれはかとよ

りいひいるゝ

わたつみの底し深くはいれす共時雨にだにもぬらさゝら南
しひていひければよひ入て物なといふ女

ふりとけぬ時雨はかりに山彦の聲をはかなくきゝかはす哉わかざい

しはすに男來りあひぬへきやうなりけるをおや聞付てさけきければ女

夜こゆとたれかつけゝん逢坂の關かたむめり早くかへりね

といふほとにゆきのいみしうふれば

歸るさの道の行へもおもほえずこほりて雪の降しまされは

といふほとにあげぬれば男

新古あふ事のあかぬよなから明ぬればわれこそ歸れ心やはゆく

長恨歌の御屏風亭子院のかゝせ給て所々よませ給ける帝の御手にて

續後紅葉はに色見えわかつてふる物はものおもふ秋の泪成けり

かくはかりおつる泪のつゝまれて雲の便りにみせまし物を

かへりきて君おもほゆる蓮はに泪の玉とおきゐてをみる

續後拾玉すたれ明るもしらてねし物を夢にも見しと思ひかけきや

くれなるにはらはぬ庭は成に覺悲しきもの葉のみちりつゝ

これはさききにかはりて

導へする雲の舟になかりせは世をうみなかに誰かとほまし

るる雲の人はきえせぬ物ならはみをと涙はなになかさまし

月も日もなぬかの夜の契をはきゝしほとにも又そわすれぬ

消し身に又もけぬへし春かすみかすめるかたを都と思へは

木にもおひす羽もならへす何しかも涙ち隔てゝ君を聞らん

内侍督の御四十賀きよつらの民部卿し給ふ御屏風にわかなつむ所

拾春の野のわかなならねと君か爲年の数をもつまんとそ思ふ

梅のかたはらなる竹にたかなぬくとて

竹の葉に散かゝらん梅花雪の中をもほるとみるへく

櫻の花さける川つら

水底にうつる櫻のかけみればこの川つらを立うかりける

池のつらなる松に藤さける所

わか宿のかけともたのむ藤の花立よりくとも涙にをらるな

石井ある所

わくとのみめにはみゆれと我宿の岩井の水はぬるまさり覺

瀧のもとなる人

水上とむへもいひけり雲井よりおちくるともみゆる瀧かな

鶴立る所

遙なるほとに立まふあしたつはわかまへちかく涙もよせ南

鶴雲ゐにあそふ

拾大空にむれたるたつのさしなからおもふ心のありけなる哉

藻かりたるあま

心して玉もはかれと袖もにひかり見えぬはあまにそ有ける

松のすゑの海にひたれる所

海にのみひちたる松の深緑いくしほとかはしるへかるらむ

わたつみより舟こき出たる所

はるゝと雲をさして行舟のゆくすゑ遠き心ち社すれ

あまの家烟たつ所

袖ぬれてあまのたく火はみえねはや雲と烟の立のはるらむ

亭子院の六十の御賀に京極の御息所のつかうまつり

給御屏風の哥子日する所に小松いとちいさきおほかり

松に藤かゝれる所

頼みつゝ懸れる藤は松の木の千世といふ事もあかづそ有ける

竹おほかる所

年ともに生そふ竹の世々をへてかはらぬ色を誰とかは見ん

北の宮の御もたてまつるにおとゝの御送物の屏風の

哥水のつらに松ある所

いにしへの心もたえず行水にわか松かけもけふこそはみれ

舟に乘てうき草とる所

ねをたえて水に浮へる浮草は池のふかさをたのむなるへし

女郎花折て硯のもとにおける男

女郎花見るにこゝろはなくさまていと昔の秋を戀しき

かりする人の田舎の家の田などのまへなるにちこう

よりたる所

かりにくときくに心のみえぬれは我袂にはよせしとそ思ふ

神樂

年ともに神をそいのる榊葉の色もかはらてあらんとおもへは

きさいの宮の五十賀内にてせさせ給しに御屏風の哥

はらへする所

みそきつゝ思ふをそいのりつるやは萬代の神のまに

七月七日たらひすへてかけみる所

あらはなるかたにしも住あしたつは千世をみよてふ心之覺

是も後の宮の御賀おはきおとゝのつかうまつり給し

御屏風の繪に松に鶴立る所

すみの江の濱の眞砂をふむ田鶴は久しき跡をとむる成へし

紅葉散まにさけのむ

まとゐする身に散かゝる紅葉はゝ風のかつくるにしき成覺

陽成院の帝の御七十賀にうちみたり箱に鶴龜菊など

まきたり

露かゝる菊の中なるあしたつはいま幾度か千世かそふらん

式部卿の宮の前裁合に草のかう

草のかう色かはりゆく白露はこゝろをきてもおもふへき哉

りうたん

風さむみ鳴臈かねの聲すなりうたん衣をまつやかさまし

新勅

心のみ雲のほとも通ひつゝ戀こそわたれかさゝきはし

新千

梅の花香にたに匂へ春立てふるあは雪と色まかふめり

ふる里はたれきかめとや鶯の花より後に春をつくらん

亭子の帝の小野なるゆきとしか家に梅花御覽しにみ

ゆきせらるゝに

經古

思出て見にこさりせはむめの花誰に匂ひの香をうつさまし

關こゆる道とはなしにちか乍らとしにさはりて春をみぬ哉

櫻花あたにちらさぬをたにわか心にもまかせてしかな

齋院の御屏風の哥春山に行人あり

散ちらすきかまほしきを故郷の花見てかへる人もあらなむ

萩の花見たる所

うつろはんをたにおしき秋萩にをれぬはかりもおける白露

京極院に帝おはしまして宴せさせ給ひまぬれとあれ

ばまゐりて池に花ちりなんとする心を

年を経て花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふ覺

春もになかるゝ川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなん

又の日

返しするなは

櫻花ひとさかりなる物なれはなかれてみえすなるにや有寛

歌合の時亭子院

浅みとり染てみたる青柳のいとをは春の風やよらん

水の面にあやふきみたる春雨や山のみとりをなへて染らん

青柳の枝にかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそ見る

みる人もなき山里の櫻花外の散なん後そさかまし

あふ事の君にたへにし我身よりいくらの泪なかれいつらん

哥合のうたかすかのとき

山櫻ちりてみゆきにまかひなはいつれか花と春にとはなん

ぬれつゝも雨には行んまつかさは千年の春をもらさゝら南

やをとめのをみの衣のきながらになれぬ程をは誰かしる

みそめすもあらまし物を故郷の花に心のとまりぬるかな

宮に

もろともにありし昔を思ひ出て花見るとにねそなかれける

からさきにて

なみの花おきからさきてみえつるは水の春とも風を成ける

家の花散を見て

おひ風の我宿にたに吹こすはるなからよその花をみましや

春物おもふ頃

櫻花匂ふともなく春くればなとかなけきのしけりのみする

白玉をつゝむ袖のみなかるゝは春は涙のさへぬなるへし

四月一日宮にて
いつくまで春はいぬらん暮はてゝ別れし程はよるに也にし

返し兵衛の命婦

くれはてゝ春の別のちかけれはいくらの程もゆかしとそ思

春のよの夢にあへりとみえつれは思たえにし人をまつかな

風さへももてきはくかな櫻花心にたにもちるをまかせて

二聲と聞とはなしに時鳥夜ふかくめをもさましつる哉

なてしこいとおかしきを隣にやるとて

いつこにもさきはすらめと我宿のやまと撫子誰にみせまし

ひとりのみぬる床夏の露けきは泪にさへや色は染らん

年を経て物いひわたる人の

たのめつゝあはて年ふる偽にこりぬ心を人はしらなむ

返し

夏虫のしるゝまとふ思ひをはこりぬかなしと誰か見さ還

はるかみの宰相の北方のまへよりわたり給とてせう

そこをのみいひ入給へりければ月のあかき夜になん

雲井にてあひかたらはぬ月たにもわか宿過て行時はなし

五月雨に物おもふ時の村雨は身よりふるとはまと成けり

夏虫のおもひに入てなそもかくわか心からけなんとはする

朱雀院にて心にもあらて人の鶴を殺してけるを今一

つの鶴いみしう戀てなきけるを雨の降日なん

なく聲にそみて泪はのほらねと雲の中より雨と降らむ

九月九日よふかさなりければ

菊の上におきゐるへくもあらなくに千年のみをも露に爲哉
大和におや有けるをうせて後初瀬にまふすとして
なくたにもしる人にせよ山ひこも昔の聲は聞しれるらん

後 獨行事こそうけれ故郷のならのならひてみし人はなみ

山のへにて

同 草枕たひとなれはや山のへに白くもならぬわれとまるらん

帝前栽うゑさせ給て和哥よめと仰られければ

同 植たてゝ君かしめゆふ花なれは玉と見えてや露もおくらん

しをに

うけたむる袖をしをにてつらぬかは泪の玉の数は見てまし

露たにもおくとはいえぬ秋の夜はふけしを西に月のみゆ覽

いかなれは西に見ゆ覽月かけのまかふまでにも悲しき物を

うき事をおもひつらねてかり金の鳴こそ渡れ秋のよなく

七條の御息所の御五十賀をおほきおとゝのせさせ給

ひし御屏風の繪に秋の月かけ

我やとめてりみつ秋の月影は長きよみれとあかすそ有ける

家の前裁にすゝむしはなちたる夜いたうなけは

拾 いつくにも草の枕をすゝ虫のこゝをたひとは思はさらなん

なき事人のいひける頃

よとゝもにわかぬれ衣となるものはわふる泪のきする成覺

しからみに袖をかくせとせきとめすなかるゝ物は泪なり覺

古 わひはつる時さへ人の悲しきはいつこをしのふなみた成覽

新勅 あひみても包む思の侘しきは人まにのみそねはなかれける

久しうおとせぬ人に

古 故郷にあらぬものからわか爲に人の心のあれてみゆらん

亭子院の御屏風の和哥

古 うきしつみ淵瀬流るゝもみち葉は深く淺くそ色もみえける

ひたはへたる所

ひたはへてもる綱をのみ引時は稻葉に露をとまらさりける

花のいとおもしろきを折て式部卿の宮にまいらすと

て

故郷のあれはてにける秋のゝに花みかてらにこん人もがな

御返し

秋の野に我松虫の鳴といはゝをらてねながら花は見てまし

人の

いはせ山谷の下水打しのひ人のみぬまはなかれてそゆく

返し

瀧つせの速からぬをそ恨つるみすとも音をきかんと思へは

はらからのなくなりたるを戀わたる頃

秋うたて人の物いふ頃

しるといへは枕たにせてねし物をちりならぬ名の空に立覽

浦ちかく浪の打よるさゝれ石の中の思ひをしるやしらすや

みよし野の山のした風さむからしいもせの川も浪高くみゆ

白浪の打おとろかすうきしまに立る松たにねこそわふなれ

難波瀉みしかき葦のふしのまもあはて此よを過してよとや

沖津藻をとらてやゝまんほのゝと船出しとも何によりそは

人にしらるへきかきりしられてつらく物の有ける頃

人しれす絶なましかは侘つゝもなき名そとたにいはし物を

人の心かはりたる頃繪に松に涙こえたる所を見て

古 松かけて頼めし事はなけれ共なみのこゆるはなほそ悲しき

友たちなる人つくしへゆくに

後 おさへつゝ我は袖にそせきとむる舟こす汐になきと思へは

返し

おくれすそ心にのりて歸るへき我は涙を涙になしつゝ

うたかふ事ありて人の玉を給はせたれば

玉ならぬ身のうき事はきよけれとみかける物にいはぬ也覺夢にてもみつとはいはし朝な〜我面影にはつる身なれば

人のそらこといひける頃

うき事のかくわく時は涙川めのまへにこそおちまさりけれ拾さもこそはあひみる事ん集の難からめ忘れすとに云人のなき

返し

年ふれといつも我こそ忘れすの濱千鳥とはなさわたりけれ

又返し

逢事のかたにありゐる芹たつのすになく聲は聞えやはする稿後泪にそうきてなかるゝ水鳥のぬれては人にみえぬものから

おとこ

庭鳥にあらぬ聲にも聞えなん明ゆく時はわれも鳴にき

返し

曉のねさめの耳にきゝしかととりより外の聲もせきりき有はてぬ命まつまのほとはかりうき事しけく思はすもかな

屏風に七夕のかけみたる所

わたるといふ影をたにみし七夕は人のぬるまを待も社すれ年をへて思ひはすみに有年らおきひはつかぬ物にそ有けるたか爲にこる歎とか打つけになひもしらぬ我におほする

屏風の繪に夜ひと夜物おもひたる女のつらつえつき
たる所

夜もすから物思時のつら杖はかひなたゆきのしられさり覺

屏風の詞

拾山里にやとらさりせは時鳥さく人もなきねをやなまし

是も繪に碁うちたる所

をのゝえもくつ計にはあらね共歸りにたにもみる人の無き

屏風の繪に藤の水のつらにさける

をりとめてみまほしきに藤の花陰をたにとや浪のをる覽

式部卿宮のうせ給て御四十九日はてゝ人ゝまかつる

に

かなしさをまさりにまさる人の身にいかておほかる泪成覽

君により儚きしにや我はせんこひかへすへき命ならぬに

ことかりたる人に

あふものかたみの聲のし高からはわかなくねとも人は聞なん後

人に

みにそへる影とも人を爲てしか後ろ安さをみせんと思へは夢ならてあふ事かたき世中は大方とこをおきすやあらましぬきとめて數もみるへく新王のを計りたにもあふよしも戦わかもや雲の中にも思ふらん雨もなみたもふりにこそふれ身の浮ふ事をもしらてかは中におりたちぬへき心地社すれ

伊勢集下

八條の大將の四十賀權中納言のし給ふ屏風の繪に子
日松家に植たる所

^{數後}千歳ふる松といふ共植てみる人そかそへてしるへかりける

柳ある家

我おもふ事はしらねと青柳のいときへなひく物にそ有ける
巖に鶴たてり

岩の上をすみかにしたる葦田鶴は世を長閑にも思ふへき哉

女郎花おほかる野に鷹手にすゑ人たてり

^拾秋の野の花のなたてに女郎花かりにのみくる人にをらるな

文をこせたる人のあるをたかもとにあるそとはす
れはおやのなくなりたるいかに侍るになん有ける
大空にとふてふものとほければ雲の上にそさして聞ゆる

返し女

漸千鳥つはさのなきをとふからに雲ちをいかて思かくらん

家ちかゝりければ又男

翼なき鳥と成なは飛さらすまちかきえにもすまんとそ思

此返事にかみをむすひてやりたりければ

なこの海の清きなきさの濱千鳥ふみおくあとを浪やけつ覽

返し女

なこの海の荒そまさらん奥つ浪なこまなかたの淺さ求めよ

又男

なこの海しあれ増るへき物ならはこかるゝ船を打よせよ浪

返し女

荒なから舟よすへくも思ほへすかた定めても浪のたゝねは

又男

なみ高みうらへによらぬわれ舟はこちてふ風や吹と社まて

女

追風に舟はなほりて吹ぬ共あまのいかりにとゝまりやせん

又男

風吹はゆかんゝとまつ舟にいかりをおろす人はあらしな
をとこ

玉葛われくる事を君しみはつらなからにもたえしと思ふ
をんな

をんな

打はへてくるを見る共玉葛手にたにかけしむすひしらねは

子ありときゝて

玉葛むすひもしらぬ物ならはこのいてきなんとそあやしき

かくいひてまいらんゝとはいひてさすかにえこて

初雪のふる日

神な月時雨計りはふらすしてゆきかてにのみなとかなる覽

返し

雪ませてみへき物かは神な月時雨に袖のぬれも社すれ

返し

風吹はとまらぬ雪の命もていかむとおもふものはかなき

春宮の御息所の御賀を中務の宮のし玉ひける御屏風

にわかなつめる所

春日野のわかなの數は残してむ千とせの春も君を積へき

いなりの山こえしたる所

いなり山行かふ人は君か代をひとつ心にいのりやはせぬ
をしからぬ命なれ共心にもまかせたゝねは浮世にそふる

亭子の帝をりの給はんとしける秋

白露のおきかはらん百敷をうつるふ秋は物そかなしき
後別るれとおひもおもはぬ百敷をみさらんもの何かなしき
をしぬ集

とかきたりけるをうへ御覽してかたはらに書付させ給ふ

身一つにあらぬ計をおしなへてゆき歸りてもなとかみき覽
人のもとに尾花のいとたかきをやりたればしのふ艸
をなんをこせたりける

花すゝきはにいて出すあるやとは昔しのふの草をこそみれ
後宿もせに植なめつゝそ我はみる招く尾花に人やとまると
ゆくとくとみれ共飽ぬ秋の野はゆきもやられす止る共なし
たとへくる露と等しき身にしあらは我思にもけなんとそ思
しほるとも泪ならねはふらしけん春雨社はあはれとも見め

仁和寺なる人

白雲のたな引かゝるみやまにはもる月影もよそに社みれ
返し

雲かゝるてる日曇れるひまなればあかきに月はみえぬ成寛
時雨ふる冬の木葉のかはかすそ物おもふ人の袖はなりける
ぬれゝて色増るめる紅葉はに袖はなる共散すもあらなん
露乍へなんとそ思よそにても人やけぬるときかんと思へは
濁江はかたふかく社あれにけれ身をはちすさへみれば生覺
みかと物へおはしましけるまゝかつらなる家におは
しまして花御覧してかへらせ給けるに花にむすひつ
け給ける

梅花かた枝殘さす散にけりかこひてたにやをしまさりけん
御返し

春霞み立なからみし花なれとふみとめてけるあとそ悲しき
うちとのにて

水もせにうきぬる時は柵もうちののとも思ほえるぬ哉
後
見えぬもみち整集

いとこの別當のもと正勝懸り
山風に聲きくよりはくれなるのひとめ計もまつみてしかな

返し

紅のひとめはかりはそむれとも人はかりにてうすくも有哉
おく露をなにあかすとか秋の野のいとゝ泪をかりくはふ覽

あふきのみたれたるに

むすひけん人の心のあたなれはみたれて秋の風にちるらん

男のあたなりしに

住の江の岸にきよする興つ涙まなくもかけておもほゆる哉
住の江のめにちかゝらは岸にゐる涙の數をもみるへき物を

こさまさる泪の色もかひそなきみすへき人の此よならねは
驚に身をなしかへは散までも我物なりとはなは見てまし

今はとて別るゝたにもある物をしられぬ袖のまして侘しき

返し

さらはよと別し時にいはませは我も泪におもほれなまし

雲ちをもしらぬ我さへもろ友にけふ計とぞ鳴たりつる
お厭懸

ねもたゝにかれぬる野への紫はなかくと思しとを絶にし

人

時鳥鳴て絶にしやとなれとすみきと思て鳴つゝそふる

我宿はむへもふるすと成にける君ふるさとの花のなゝれは
さかい

又

山ひこのよそに答へし聲なれとことゝひし社戀しかりけれ
返し

人

よそにてもへなと思ひ戀數はなれての後はあらしと思へは
逢事も頼むる事もあやまたは世にふる身にもあらしと思

返し

いふともたかはぬ事にあらませは後うき事を聞へさらまし

常にそら名たちければ

千々にたつわか名きよめん百敷の人の心をまくらとも哉

返し

泪のみしる身のうさもかたるへく人の心をまくらにもせよ

おとにのみ聲を聞哉あし引の山下水にあらぬものから

やせ渡る川は袖より流るれととふにとはれぬみはうきぬめり

人のもとに秋まかりていと夜更て歸りきてとめて

深しよの行あひの霜にうてしかと身に寒く當らさり劔

頃をへてあひみぬ時は白玉のなみたも秋は色かはりけり

紅に泪うつるときしをはなといつはりとわれおもひけん

返し

紅の泪しこくはみとり色の袖もみちてもみえまし物を

人のちいさき子をこれ子にせよとてをこせ給へるに

女

かた時の人をみしまになる物は只かたおひになるを怪しき

七夕の繪に

河とたにかたみに見えぬ物ならは忘るゝ程もあらまし物を

をりはへてなきぬへらなり時鳥しけるなけきの枝々にゐて

人のはらからなくなりたるをとふらふとて

程もなく誰もおくれぬ身なれ共とまるはゆくを哀とやみし

同
そむかれぬ松の千年のほとよりは共にくんと暮はれをせし
ともくとしたふ泪の川水はいかなる色にしてなけれけむ
同
そふ
みえてゆくらん集

人

春霞はかなく立てわかつとも風より外に誰かとふへき

返し

同
めに見えぬ風に心をたくへつゝやはかすみの別こそせめ

うきながら人をわすれんもかたみ又心にそかつさはりける

霜かれの野へと我身を思ひせはもへても春をまたまし物を

住里は雲井ならねと初鴈のなきわたりぬる物にそ有ける

深きおもひそめつといひしその葉はいつか秋風吹て散にし

返し

心なき身は草はにもあらねとも秋くる風にうたかはるらん

聲立てゝねたに泣れすうき物は身の待れぬけさにそ有ける

年へぬるわか思ひにや秋の野の草木もあへすこかれ散らし

秋ならてちる木葉にもみえなくに露やは人の心ともなる

よもの蟹のかつきわふてふ白玉とみしまに袖は海となりにき

ぬれ返り玉かつけともあかなくに頼みし事の絶てなければ

三月晦の日鶯のなきしに

ゆく春と聲く鳴しうくゐすは夜のまなみたをたむる也覺

秋の月ひとつにあかぬ物なれば涙をためてうつしてそみる

春かすみ立をみすてゝ行かりは花なき里にすみやならへる

そこともしらてはかへわたりたるに男かくれたると

なん思ひつるといひたる返事に

思川たえすなかるゝ水のあわのうたかた人にあはて消めや
人こふる泪は春をぬるみけるたえぬ思ひのわかす成へし

いとおもしろき櫻を折て人のかりやりたりければ

櫻花色はひとしき枝なれとかたみにみればなくさまなくに

返し

みぬ人の形見かてらは折らざりつ身に準へる花にし有ねは

友たちなる人の思事ある比とふらふとて

世中はいかにやゝ風の音聞にもまつはものやかなしき

返し

世中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心地のみして

法しやう寺にて后宮おはしましける比御供にて

久方の月のまとかになるほとは紅葉そむ共しくれさらん

わか爲になにのあたとか春風のをしむとしれる花にしも吹

朝なゝ袖をやしほるきりゝす夜はすからに鳴明しつゝ

法皇御くしおろし給ての頃七條の後のみや

人わたすとなになきを何しかもなからの橋と身はふりぬ覽

返し

ふるゝ身は泪の中にみゆればやなからの橋にあやまたる覽

秋の野にねてのみあかす白露はひとりある人の泪成へし

いとまたき過ぬる秋の形見にて枝に紅葉そちりさしにける

あふ坂の關は夜こそりまされくるゝをなとて我頼らん

返し

もりませと夜は猶社頼まるれぬるまもあらはこえんと思へは

さく花は年にかへれと空蟬のよをためしにて散にそ有ける

濁りなくみかゝれにける白玉は拂ふ袖にもちりたにもるぬ

かねもりか家にみちたつねこうしてをる男

やへとつる道は夢にも惑らしぬる玉にたに逢ふと見えねは

人

形見にも身をしる雨の降りし哉我もせきあへす君もこしかは

濡かへりせかれぬみをにひかれてや我さへうきて流より劍

夢とても人にかたるなしるといへは手枕ならぬ枕たにせず

忘らるゝ我身をしらて濱千鳥ふみとめてたに見へき物かは

面かけは水にうきてもみえずやは心にのりてこかれし物を

返し

心にやのりてうかれしあふみてふ名は徒にみつかけもせて

夏虫のおもひにいりてなそもかくわか心からけなんとはする

われまねく袖とはしらて花すゝき色かはるとそ思ひ侘つる

あひもみぬ年のわたりに濡つるも身を深からぬ心とやみる

わかゝく物は思はし棚はたにあふなぬかをそまつと思へは

わするてふ事をもしらぬ棚機や年のわたりをまちてあふ覽

かきりなく落つる泪や河と見て渡りかたくはなりまさる覽

枇杷のおとゝ

かくれぬの底の下草みかくれてしられぬ戀はわひしかり覺

返し

みかくれにはつか計の下草は長からしともおもほゆるかな

鶯のなくねをまねふ山ひこを友ありかほにともめつる哉

梅花ちるてふなへに春雨のふり出つゝなくうくゐすのころ

足引の山は遠しと時鳥里に出てもねをそなきける

匂ふかの君おもほゆる花なれはをれるしづくに袖の濡ぬる

ひたふるにけなはけな南露の身の玉ともみえず消まるとふ覽

水葦の通ふはかりをすくせにて雲の乍らもはてねとやきく返し

雲井にも通ふかなしと思ふへき人にすくせをつけまし物を霜雪の消えてうき身の事こそたはむまでさえかゝりけれ白露のおきてあひみぬとよりは消かへりつゝねなんとぞ思物へゆきける人かへりて

またかゝるたひしなければ草枕露けからんと思はざりしを年の内にあひてもあはすなけき劍人のうへ社我身なりけれ思ふ事なくてやみけん中をしも我身のうへになによそふ覽院の帝物へおはしましけるに女郎花おほかりと御らんして堀に給へりけるを奉けると聞て枇杷のおとゝ女郎花ほりけん枝のふしとに過にし君はおもひ出やせし返し

女郎花堀もほらぬも古へをさらにかくへきとならなくに右京のかみなてしこのおほかるを見て我袖にうつらはうつれ手もやますつみやいれにし撫子の花返し

こさかきりとはつみ入て撫子にうつれる袖の色をみせまし故中務宮よりことかり給て返し給とてあつまと春のしらへにかりしかはかへし物とも思はざり覺返し

程もなくかへすに増るとのねは人のとかめぬねをやそふ覽又あれより

かへしてもあかぬ思をそへつれば常よりこゑのまさる成覽返し
常よりやそふる心もかへりけんしらぬ聲なることも聞えぬ

年ふれと忘れはてぬ人のうへは心とめてそ猶きかれける戀さにしぬてふとはきこえぬを世のためしにも成ぬへき哉かにひの花につけて

花の色のこきを見すとてこきたるをおろかに人は思覽やそわらひを人にやるとて我爲に歎きこる共きかなくに何にわらひをたきてつけまし

四月にさける櫻につけて院の殿上人の物へおはしますにもまいらてとまれるかもとにとまりゐて春戀しくや思ふ覽花もかくこそおくれたりけれある人

濁江のすまんこと社難からめいかてほのかに影をたにみん返し

すむものかたかるへきに濁江のこひちに影もみえぬ成けりまつ人の見えぬからにやさよ更て月のいるにもねはなかる覽九條の御息所の御もとにこはこあはせの頃紅梅のつほみたるを入て奉りたるをきさいの宮君にとしおもひかくれば鶯の花のくしけをしまさりけり御返し

みつこのえの形見と思へは鶯の花のくしけをあけてたにみす人のあはぬよとありしを聲にたに聞ての後は時鳥あはぬ五月はあらしと思返し

聞とをなかゝとおもひし時鳥いむ五月をは過しやはせぬ時雨する日かえてをゝりて

新出
このはのうつろふたにも有物をいとゝ時雨の降まさるらん返し

時雨にしぬれと濡ぬるものは、うすなからにも濡すもあら南

隣ちりくる花を見るよりはねこめに集の櫻の花を見て

かきこしにみれともあかす櫻花ねなから風の吹もこきなん

返しあきたゝの少將

櫻花うゑて我のみみんとかはとなりありきや人のするとて

人

かりそめにそめさらましをから衣かへらぬ色に恨みつる哉

返し

身に泌てふかくしなれば唐衣かへすこと社しられさりけれ

ある人を見てをとこ

見す聞かすあらましものを賤機のためぬきみたる思せましを

返し

なほさりの行手にかゝるたてぬきは長からしとも思はゆる哉

川の瀬にうきてなかるゝほとよりは衣の袖のぬれすも有哉

すむかたをしるしとまねく花薄心よはくそ風もふくらし

京極なる家にいきてそのわたりなる人に

此里のしるへに君も出こなん都のほかにはききにけり

わか袖のかはりにをれる花薄人をまねくとしらさらんやは

花すゝきよふこ鳥にもあらねとも昔戀しきねをのみそなく

さよ更てねられぬ時は時鳥君にきかれぬねをを鳴ぬる

人待て鳴つゝあかす夜なゝいはたつらねにも成ぬへき哉

來てみればなこの浦までよる貝の拾ひもあへす君を戀しき

新古今

思いつやみのゝをやまのひとつまつ契しとはいいつも忘れす

大淀の松はつらくもあらなくに恨みてのみもかへるなみ哉

風吹は岩うつ浪のおのれのみくたけて物をおもふ頃かな

興つ風ふけるのうらに立浪の名残にさへやわれはしつまん

あま舟のかよひこしより鹽かまのほは出ます思つきにし

朝なゝしほやくあまの藤衣なるとはすれとあはぬ哉

人しれす思するかのふしのねはわかをやく絶すもゆらん

風吹はいく田の浦のいく度かあるゝ心を人にみすらむ

わかせこにならしの岡の呼こ鳥君よひかへせ夜の深ぬまに

陸奥はいつくもあれと鹽かまの浦こく舟のつなてかなしも

袖の浦の色のはまとは成ぬ共なにかいかはあらんとす覽

あつま池のはしたにおふるたまさかい久く成ぬ夢に逢見て

津の國の難波ほり江にこく舟のみきはもみえすまさる我戀

君を思ふわれか心は堀かねの井よりも猶そふかさ増れる

あふみのや志賀の浦浪うらめしく尋きたれとかひなかり疊

新拾

石清水いはぬ物からこかくれてたきつ心を人はしらなん

ありし時ひゝきのなたと有しかは戀しからすのさきそ行覽

みまさかやくめのさら山さらゝに昔のいもし戀らるゝ哉

玉川にきらすてつくりさらゝに昔のむかし戀しきやなそ

山城の岩田のもりのはゝそ原みつゝや妹か家ちゆくらん

かたをかのあしたの原を過行は山ほとゝきす今ぞ鳴なる

をちへゆくこちこそ河のたかしも色ざり難き縁をそめん

はつかにも君をみしまのあく田川あくとや今は音つれもせめ

新古今

さらしなのをは捨山の有明のつきつもゝのをおもふ頃かな

古

しほの山さしての磯にすむ千鳥君か御代をは八千代とぞ鳴

おとにきく天の橋たてはしたてゝおよはぬ戀も我はする哉

住よしの興にきよする沖つ波なみのよるゝあひみてし哉

夕されはさほの河原に住たつのひとりね難き音をぞ鳴なる
忘なはよにもこしちのかへる山いつはた人にあはんとす覽

いはせ山苔の下水うちしのひ人の見ぬまになかれてそふる
おとなしの山の下ゆくさゝら涙あなまわれも思ふ心あり

我戀はありその海の風をいたみしきりによする浪のまりなし
春日野のなかのあさかほ面影にみえつゝ妹か忘れぬかな

人はいさ我はかすかのしのすゝき下葉しけくも思ひ亂るゝ
秋風のおとはの山の谷水のわたらぬ袖の色こきやなそ

棹鹿の妻こふ時に成にけりさか野の花も下紅葉して
おとは山木の下風にかほとりのみえかくれせし聲の戀しき

難波かた玉江の芦をふみしたきなく覽たつはわか爲にかは
いかこなるものきゝ山の谷水のにこらぬおとに聞ゆなる哉

むさし野の草葉に宿る白露のいくかあるへき我ならなくに
たなゝしのあまの小舟の荒き磯にあなたつゝし我獨ゐて

磯に出て漁りする日のきえぬればふけ井のうらを尋つる哉
心のみ雲井のほとに通ひつゝ戀こそわたれかさゝきのはし

音にのみありと聞つるみよし野の瀧はけふこそ袖に落けれ
岩くゝる山井の水をむすひあけてたか爲をしき命とかしる

岩城の野中のまつをひきむすひ命しあらは歸きてみむ
みよし野の山の下風さむからしいもせの河の浪たかく見ゆ

白浪の打おとるかすうきしまにたてる松たにね社わふなれ
かこのしままつ春をになくたつのあたなる聲聞人もなみ

白浪のよする磯まをこく舟のかちとるまなくおもほゆる哉
沖つもととらてやゝまん漕舟のふなてしとも何によりそは
かたしきの衣もさむし松風に秋のふくともしらせすもかな

新勘

み山木のかけのこ草は我なれや露けゝれともしる人もなし
浦ちかみ浪打よするさゝれ石の中の思ひはしるやしらすや

蓮葉のうき葉の下による浪の君に心をよせてこそふれ
山川の霞へたてゝほのかにもみしはかりにや戀しかるらん

夕闇は道たとゝし月待てかへれわかせこそそのまにもみん
山水を手にもすひても心みんぬるくはいしのなかも頼まし

天つ風雲吹みたれ久堅の月のかくるゝ道まとふへく
しるらめや我衣手は秋霧のおほつかなくてふるにぬるとも

けふ有てあすはきえぬる露の身の思ひおくへき言の葉も哉
空蟬の葉におく露の木かくれて忍びゝにぬるゝ袖かな

卯花の匂ふ五月の月きよみいねす聞とや鳴ほとゝきす
ある大納言のひえ坂本におとはといふ山のふもとに

いとおかしき家つくりたりけるにおとは河をやり水
にせき入て瀧なとおとしたるをみてやり水のつらな

る石にかきつく
おとは河せき入ておとす瀧つせに人の心の見えもする哉

女四宮へとふらひ聞ゆとて
こゝら世をきくか中にもかなしきは人の涙もはてやしぬ覽

とてまいらせたるに御返もなければまた
ことたにも通ふ世ならはなき人の泪のほとも聞はきまなし

なくなりにける人の家にまかりて朝にかしこの人に
つかはしける

なき人のかけたにみえぬやり水の底に泪をなかしそこし
九月八日隣より菊にわたおほひにをこせたりける朝
にほりてやるとて

數しらす君かよはひをのはへつゝなたゝる宿の露となら南

返しまさたゝ

露たにもなたゝる宿の菊ならは花のあるしやいくよなる覽

人のをこせたる

いせの海にあそふ蟹共成にしか浪かき分てみるめかつかん

返し

おほるけの蟹やはかつくいせの海の浪高き浦に生るみるめを

我家を人のになして花をやるとて

花の色昔ながらにみえつれば人のやとゝもおもほえぬ哉
松山につらきながらも波こさんとはさすかに悲しきものを

かへし

あちきなくなと松山に浪こさんをは更におもひはなるも

したにのき

此花をいかて散さすなりつらんかはかり風の吹したにの木

せんたにの木

草枕袖は露にもぬれしかとわか袖ぬれし淵せたになし

きちかう

我宿にあきちかうしものおくみればけふは紅葉を染る也晝

かまつほくさ

山田をしそほつ計もありつれば秋もからんとわかまつほくさ
憂身とりきともつらは氷る共いつまもらはかもあるもしるへき
うつせみの思に聲したえさらは又も雲井に露もおくらん

明ぬともたゝしと思ふから錦君か心しかたなゝらすは

宇田院よりおはれて人のかたにきける人のもとに

のけさまに人におはれし我なれやせなか合に人の成らむ

返し

はゝつくりせなか合に成ぬともおなし心にむすはれせん

きしもなくしほもみちなは松山を下にて浪をこさんとと思

みえもせずふかき心をかたりこは人にかちぬと思ふ物かは

もゝ數の花を折ても見てし哉むかしも今も思くらへて

家をうりて

飛鳥川淵せもしらぬわか宿はせにかはりゆく物にそ有ける

歸りくる道にやけさはまとふ覽これになつらふ花なき物を

難波なるなからの橋もつくる之今はわか身を何にたとへん

申務卿の宮の家に舟つくりておはしはしめける同院

御覽しにおはしましてよさりつかた歸おはしましな

んとしけるをりによみて奉りける

水の面に浮へる舟の君ならはこゝそとまりといはまし物を

ものへゆくに

諸共に身をしわけねはめにみえぬ心を君にたくへてそやる

ものへかつらやるとて

けつりこし心もありて玉かつら手向のかみになるか嬉しさ

有原のとしはるかなくなりけるを聞て

かけてたに我身の上と思ひきやこんとし春の花をみしとは

春秋子をなくなして思なけきて

春は花秋は紅葉とちりしかは立かくるへき木のもともなし

おやにおくれたる頃男のとふらはぬに

なき人もあるかつらきを思ふにも色わかれぬは泪なりけり

故式部卿宮の御てかゝせ給けるをみて

なき人の書とゝめけん水莖はうちみるよりも流れそめける

中宮うせさせ給ける頃かいねりこしとて檢非違使の道にあひてきらんとしければ

深草に君まとはしてわふる身の泪にそむる頃とやはみぬ
ふくぬきてかへりて

こゝ乍けなんとそ思よそにても人や消ぬときかぬと思へは
院の帝と今の帝とおはしましける時

日の光かさねて照れば紫のほしもふたつに色やなるらん
よそにきく袂のみ社そほちけれあまねく法の雨はそゝける

返し

いつはらす心をよする法の雨のそゝくしるしにぬるゝ袖哉

屏風に瀧おちたる所

限りなく心をおとす瀧つせはきにつたはりて流れこそすれ

ある人のいましたるに櫻のいとおもしろくさきたる
をまたくるまであらすなといひおきたるにいかなる
にかこねは散花につけて

待わひてふすまに花は散にけりうき身成とや枝にとまりし

あひしりて侍る人のいとかれゝにまうてければ

たひをへてかけに見ゆるは玉鬘つらゝなからみえぬ成鬘

つらく成たる人に

わたつ海の深き心の變らすはなにかは人をうらみしもせん

むすめのをとこたえにければかはりて

か^拾くはかりうしと思ふに戀しきは我さへこゝろふたつ有^拾鬘

人の返し

もしもやと逢みんとを頼ますはかくふる程に先そけなまし

わかな

君により千とせの春は摘へきをわかなの種は野へに残さん

四月晦日の日

こかくれて五月まつとも時鳥聲ならはしに枝うつりせよ

卯花のさけるさかりは月清みいねす聞とやなくほとゝます
かたをかの朝の原をきて見れば山ほとゝきす今ぞ鳴なる

時鳥よふかき聲は月まつといもねて明す人をきゝける

打とくる山への聲はほとゝきす長きよに社きかまほしけれ

心のみ雲井のほとにかよひつゝ戀こそまされかさゝきの橋
望月の駒引わたす影みれはおほつかなくもみえずそ有ける

やま井に雪のふりかゝりたるを

拾

足引の山井にふれる白雪はすれる衣の心ちこそすれ

かゝみてふせさせたまひけるにうらに鶴のかたをい
つけさせて

千年とも何かいの鹽浦にすむ田鶴の上をそ見るへかりける

忍ふとも君はしらしなみぬ人ののとかに物を思ひなすらむ

秋頃月を見て

月影の軒のあまりにさし入てなをあか心あくからしつる

時鳥をまつ

五月こは鳴もふかなん時鳥またしきほととの聲を聞はや

橘

五月まつ花たちはなの香をかけは昔の人の袖のかそする

時鳥をきく

今朝きなきいままたたひなる時鳥花たちはなに宿はからなん
としなかをあひみあはすみ嘆きけん人のうへ社我身也けれ

かしらしるき女を見て

後

ぬきとめぬかみのすちもて怪しくもへにける年の數を知哉

逢さりし戀に我身のきえませは且みるゝは惑はさらまし

くるとかたかりける人に七月八日

いむといへは忍ぶ物から夜もすから天の原社羨まれけれ

むかしひと所なりし人の年頃いかにそといひたるに

身はやくなき物の成にしをきえせぬものは心成けり

山櫻を折て人に

君見よと尋てをれる山櫻ふりにし色と思はさらなん

春頃

青柳の糸よりはへておるはたはいつれの山の鶯かきる

物かたりなとしてかへりぬる人のもとに

時鳥はのかなるねを聞初てあらぬもそれとおとるかれつゝ

人のもとに

人心あらしの風のはやければこのもえあへす枝をしほるゝ

男のひとのもとにあたにあるといへるに

飛鳥川瀬せにかはる心とはみなかみしもの人もいふめり

返し

厭はるゝ身をうれはしみいつしかと飛鳥川をも頼むへき哉

故中宮うせさせ給へる頃とほたうみの内侍けうをこ

せたりける返し

世のなかを 夢のまゝは 聞しかと 現なからに

ふかくさの 山のけふりと わか戀を しらぬ雲ゐに

守りあけて 松のかとにて ふしまろひ むなしき蟬の

もろ聲に なくは雲ゐに 聞ゆらん 人は宮ひと

かへるさは ゆきゝの道も おもほへず 立ゐならしゝ

おほとのは 玉のみすすへ あけてけり おつる涙を

袖ならず 物にためつゝ みましかは いかなる海と

成なまし おもへとあかす わひしさに いとゝ秋さへ

きにければ かなしき事は かなしさの あひかさなれる

むしのねの おのか聲ゝ

かくしつゝ しはし計は はまちとり いてゝも人に

しはしたに 打かたらひて ありつゝし 今は限と

さとに出て ひとりなかわる 事のおひしき

いかなるをりにか有けん

つれゝの 春ひたすらに なかむれは 瀧つ白あは

めのまへに せけとせかれす なかれつゝ 我身はあわと

うかひつゝ きえみきへすみ もゆる火の 心ははひと

あふれつゝ あるかなきかに わひをれは みしとしるしと

うくるすの 行かてにのみ なく聲は かたらん方も

なくたえぬ あひかたらはぬ 鳥たにも 人のあはれは

しるものを 萬もつらき はまちとり あとふみやれは

やまひこの こたふ計を わきにして 心とはねは

こくふねの ほにあけてこそ うらみられけれ

中務集

子 日

野^{風雅}へに出てけふ引つればときはなる松の末にも春はきに^{わかぬ集}覺

家の春を見る所

野山にも見るへき物を我宿の花をなかつて日は暮^{をはくらしつイ}にけり

藤花を見て春をおしむ所

藤の花咲を見すてゝ行春はうしろめたくや思はさるらむ

山里に時鳥なく

山里もまれに成けり時鳥^たまでともなかな聲を聞かな

田のほとりにかりしたり

袖ひちて植し春よりまもる田を誰かはしらて狩にきつらん

九月九日菊のわたにておもてのこふ女

老にける身にはしるしも白菊^{はな}のつゆの名たてに成ぬへき哉

前齋宮の五十賀の御屏風わかな

わかなおふる野をしめおかん君か爲千年の春も我を摘へき

つるのあそふ所

君といへは命をゆつるあしたつは雲のなかをやむもひ出覽

はまつらに松おほくたてり

うらちかく波立松は色かへて世に住の江に生る也けり

はまに貝ひろふ

あさり^いするうらも長閑に浪たけふはかひある心地社すれ

三條のおほひまうち君の賀權中納言のつかふまつれ

る屏風の繪に花見て歸る所

あかてけふ歸ると思へは花櫻^{やま}をるへき春をつきせさりける

池にのそきたる松に藤かゝれり

君をおもふあたし心もなき物を池の藤なみまつ越にけり

たちはなに時鳥のなくに

色かへぬ花立はなに時鳥千よをならする聲を聞ゆる

野に狩したる

女郎花かりのたよりと聞しまにあまたの秋は野へに來に覺

やり水のつらに菊さけり男文書

なかれつゝかけもみるへく汀なる菊に戀しき人はならなん

年のうちに春立雪ふる梅さきたり

降雪の下に匂へる梅花しのひにはやく春はきにけり

村上の先帝の御屏風に野火やく所

春はかく野をのみやくと思ふまになへて草木のいかに燃覽

春ををしむまに歸鴈なく

とゝまらぬ春を惜むにいとゝしく歸る雁さへ鳴わたるらむ

さしに藤さける

河岸に生たる松に藤なみのかゝれと年のつきぬ也けり

五月五日田舎家に女共いとくりさうふふきたり

あやめ草てひきのいとも身にかけて永日くらし人を戀しき

田まもる人馬のはむをもしらてねたり

まもりくる山田のいねにすさふよは夢とそ鹿の音をも鳴哉

村上の先帝の御屏風に國々の所々の名をかゝせ給へ

るよしの山

後從

よし野山ゆきかふあとも絶にしを霞を春のしるへ成ける

飛鳥川

新古今
定なき名にはたてれと飛鳥川はやく渡りしせにこそ有けれ

石 上

同
いそのかみふるき渡りを來てみれば昔かさしし花さきに覺

伏 見

櫻花散かふそらはくれにけり伏見の里に宿やからまし

もるやま

人めのみもる山になくよふこ鳥忍ひに誰をまつねなるらん

す ま

捨遺
もしほ焼烟になれしすまのあまは秋立霧もわかすや有けん

佐保山

初かりの夜ふかかりける聲によりけささほ山を思やらるゝ

しかすかのわたり

新勅
ゆけはありゆかねは苦ししかすかの渡に來てそ思わつらふ

うきしま

たのまれぬ心からにや浮しまに立よる浪のとまらさらなん

なこそこの關

みちのくの勿來の關と聞つれとなくゝなほも越ぬへき哉

御屏風萩の下に鹿なく

新拾
人しれす萩の下なる棹鹿もほに出る秋や音にも立らん

常 夏

うちはへてみる常夏にあかね哉日とにまさる色のみゆれは

十二月晦日に

新舊古
程近くきぬ成ものをいかなれば春にもあはて年のこゆらむ

村上先帝の御屏風の繪に田舎家に男まらうと來れり

梅の香をとめてきつればめつらしき驚ならぬ聲も聞かな

きしの聲

春霞あきたつ野へに立鳥も忍はぬねにや人もしるらん

近き山のさくら

我やとの春の山へのつまなれば外の花ともおもほへぬ哉

四月みあれひく

君をのみ祈り置ては打むれて立かへりなん加茂の河なみ

五月五日

しるき香も匂ふなる哉あやめ草けふこそ玉にぬく日也けれ

泉

新千
下くゝる水に秋こそかよふらしむすふ泉の手さへすゝしき

秋の曉花を見る所

有明の光りにまさる女郎花長きよにみんつゆにおきつゝ

野の紅葉をみる

けふをらぬ人もさそはぬ紅葉はによのま吹くる山嵐のかせ

冬こもりしたる池

氷ぬる池の汀は水鳥の羽風に涙もさはかさりけり

雪降に物へゆく人

雪ふかく行東路も遠ければ道にて春にあひぬへき哉

朱雀院のわか宮の御もきの御屏風の和哥子日

小松原野へにいつれと友なはぬ春の霞も立ましりけり

梅の花見る所

梅の花おる手もとをみつる哉香を尋てもとはんとぞ思

柳あり

くりかへす春はきぬれと青柳のいとはふりすもみゆる色哉

道行に時鳥をさく

打はへてまじくる道の時鳥たゝ一聲や聞てやみなん

神まつる卯花さけり

祈るをも聞きたよりには卯の花の盛をさへや神はみるらむ

初鴈を旅人さく

玉響

初かりいたひの空なる聲きけはわか身をむきて哀とぞ聞

やり水に紅葉うきてなかる

もみちはおち積りぬる谷水は秋のふかさそ底にみえける

かくらしたる所

小夜更て霜はおけとも山人のおれる榊の色はかはらし

たかき山に雪ふる所

瀧の糸は皆とちつらむよしの山雪のたかさに音をかへつゝ

御屏風松に藤かゝれる

うとからてかゝれる藤の花なから松に心はたかはさらなむ

うめ

あかぢにイ
かへてなほ千世までかさせ梅花花もかはらて春も絶すは

道行人時鳥を聞

行道もはるけきほとは郭公聲に心のとまりぬるかな

六月寂する所

君か爲いのる心はみなかみもなかるゝとくけふやしるらむ

前栽うえたる所

露をたにおとさてはりつ女郎花うへはいつれの秋が見さ覽

御屏風に秋の野に花見る所

花の色のあかぬ限りしかへらすはやとゝも秋の野へや成覽

御屏風池のほとりの柳

水底にかけのうつれる青柳は浪のよりけるいとゝこそみれ

浦遠く立つる春の霞をはやくしほかまの烟とをみる

よと共にもしほ焼つゝ誰か爲か火にも水にもいれる我身そ

卯の花の盛にのみや山里のかきねもしろく人のみるらむ

かくら

年とに神ををいのる榊はの色もかはらてをらむと思へは

たかふなほる所

つちわくる底来てみれば吳竹のこもれる春のよともしられす

吹風にみたれぬ岸の青柳はいとも波さへよればなりけり

まつの下に水やれり

いにしへの心もたへす行水にわかまつかけもけふ社はみれ

坊城の右のおほいとのお五十賀中宮し給ふ村上の先

帝のめしたる紅梅

吹風に匂ひかはらぬむめの花たか染いてし色にか有らん

子日

水底に色さへかはる小松原千とせ千代そふ野へに來にけり

岸近き松にかゝれる藤浪は春のなこりに立とまるらむ

山櫻ひとしらねとも清瀧の底なる花やなかれ出けん

住よしのきしの藤浪春ふかくいくしほにかはいろまさる覽

五月雨の夜も明方に歎かな物おもふ事や秋に成らむ

河水にかけのかたふく山吹はかはつの聲をあはれとやきく

山吹の花のさかりはかはつなく井手にや春の立とまるらむ

白浪のおるかと思えて遠方のきしのまにゝ咲る卯はな

かた岡のみかきの原の鶯は花ちりぬとや音をはなくらん

みつあきらの少將哥合するに夜梅

匂ふ香のしるへならずは梅花くらふ山にも折まとはまし

柳

同し

繰返す年へてみれば昔柳のいとほふりせぬみやならん

りなりけり集

同少將むすめのもゝかに子目にあたりたりければ一條の左大殿に物なとして奉らるゝに

春雨に空のけしきをつゝめともけふの小松は猶を引つる

朱雀院御時講めすに奉る

今さらに老の袂に春日野のゝわらへなるわかなつむ哉

御覽してひけこにわかなて少將を使にて賜る

春日野におほくとしはつみつれと老せぬ物は若な也けり

御返事

年つめとしさなる若なにもけふたに我やあらんとす覽

女一宮の御いかにすあまなとして奉れ玉ふに

涙たてゝたつの影さへみゆる哉千世の數そふしるし成へし

水底に影をみせつゝあしたつも君には千世をへたてさり覺

雲井にて君を見るへきたつなれば千代もいと社遙けかりけれ

人のうふやに七夜

千年待君ありそ海のかけみれば小松も今そおひはしめける

物へいく人につるのかたをぬさにして

君かゆく雲ちおくれぬあしたつはいの心もしるへ成けり

秋物へいく人に

風よりは手向にちらせもみち葉も秋の別は君にやはあらぬ

さぬきにてかけあきら

もみち葉の錦にみゆるうらゝは波のあやをや立かさぬ覽

返し

色ふかき紅葉をめる浦くはみちこし汐のなみやましけん

大貳のくたるに

老ぬれと猶ゆくききそいのらるゝ千年までにもいきの松原

風吹に物へいきける人に

風吹はおもほゆるかな住の江のきしの浪にもあらぬ君さへ

物へいく人に

時のまもあまた度のみ悲しきは君か行へきみちにそ有ける

物へいくに雨ふるとととまる人に

なく泪空にみてるや大空にけふしも雨のふりとゝめつる

返し

こきませて泪に雨もふりつるにいつれによりて君とまる覽

白山の雪の餘波はさむくともかたみの風はあふきつゝゆけ

物へいく人に扇やるととて

君かゆく舟路にそふる扇にはこゝろにかなふ風を吹ける

順朝臣の能登守にてくたるに

雲ふかく春ともみえぬこゝろにもをりし梅社花さきにけれ

返し

梅花色は雪にもかよふめりかへるやとまで人はとはなむ

又返し

いつはたとまつほと過し白山にゆきゝのあとを尋をらめや

豊後守にてくたりたる人の又筑後にて下けるにやる

別ゆく君かたもとをいのりにときにし道へもゆくこゝろ哉

身にかゝる扇のかせをそふる哉ふなちをゆかかん君か爲とて

けふにあれたる所に時雨ふり男きたり

神無月空の時雨も故郷に君尋くる袖もかはかす

法師ふかき山にゐたる所

あと絶て入にし日より西山（よしのやま）の瀧の音にも人めきこえぬ

人の家のまへより水なれたる男有けり

いかてかはすまて行らん河浪の立とまらるゝやとの前より

旅行人あり雁なく

行人にそふる心のあやしくもしる人なきとまとひぬる哉

ゆくをたゝおもひやらなん鴈かねの歸る聲たに聞ぬ雲井を

たつときく空をなかもて春霞かりの別そはかなかりける

あさりしたる所

あさりしてかひありけりと思身を恨てふると人やみるらん

身をぞ底かつくともたくなはを長くくる人あらしと思

あれたるやとの紅葉家のうちに散入たる所

空見えて影もかくれぬ故郷は紅葉はさへそとまらさりける

七夕の繪ある所に

さよ更てけふわたる颯天の河かけこそみえね水まさるらし

七夕の繪の中宮のひひなあそひにかはらのかたすは

まにつくれりひゝなの車のかた七月七日

棚機もけふはあふせと聞物をかはとはかりを見て歸らん

麗景殿の女御中宮に奉れ給ふ扇（ひのあし）にあしてにて

白浪にそひてそ秋は立くらし汀（しづみ）の芦もそよといふなり

棚機の心やそらにかよふらんけふ立わたるあまの河きり

三條の女御なてしこ合し給に

あしたつのおれるはまへの撫子は千世をや色も引はそふ覽

垣はなるやまと撫子色ふかきけふやこふてふ人をまたまし

なてしこの花のかけみる川浪はいつれのかたに心よすらむ

なてしこの花咲そむる夏の野にけふ日くらしの聲の聞ゆる

村上御門御時の菊合にすはまにつるさく有

玉（たま）たつのすむ汀の菊は白浪のをれとつきせぬかけそみえける

同御時に御前に紅梅ををらせて鶯のすなとつくらせ

給ふて

鶯（う）の歸（き）れる山（やど）の梅花香をしるへにて人はとはなむ

きたの宮のうちに奉り給ふあふぎに

君か手にまかする秋の風なればなひかぬ草はあらしと思

新（あらた）告（こ）袖の浦の浪吹返す濱風は雲の上まですゝしかるらん

七月七日一品宮の御このかけものゝれうとうの少將

奉れるあしてのぬひものして

銀河（ぎんが）かはへすゝしき棚機にあふきの風を猶やかさまし

東宮の殿上人あふぎ奉れ給へる

こよなくてけふはすゝしき袂よりあふく風さへ秋に成つゝ

中宮の御さうしかゝせ給ひけるに玉ざゝの葉わけに

やとるつゆはかりとある哥を書いてまゐらせたりけれ

は宮より

みれば猶のへにかれせぬ玉笹のはわけの露はいつも絶せし

續（つづ）告（こ）御返し

消ぬまをうき事にする玉さゝの露はかせまつほとそ久しき

堀川中納言あふたき（たけ）の所にめしたりけるに

山（なつ）のしけりを分て鳴鹿をいかてともしの人尋ぬらむ

後撰の哥とも書て人につかはすに

サ
如也

なまき人のもの葉うつす水莖のかきもやられて袖をぬれぬる
人のさうしかゝせけるおくに

サ
歸後置

我よりはひさしかるへきあとなれと忍はぬ人は哀とも見し

村上の御時にいれもしの仰とありて上たきといふも

し裳ありといふといれさせ給ふ

よゝをへて落くる瀧のしら糸にぬける玉とはあわやみる覽

雪をゝもみ枝は驛けとくれ竹の下に變らぬよこそ見えけれ

人交響かよはしたるをとこあり

戀わたる君をみしにはあらねはや思ふにまけてけふは戀しき

返し

あひみての後さへ物の悲しくはなくさめかたく成ぬへき哉

山里にかよふ人あるやうに聞て

千早振三輪の山もとへにければ戀しき人もあらしとぞ思

返し

音にのみありとはきけと三輪の山杉の生たる門たにもみす

人のひさしくおとつれぬに正月一日

いつそもや霜かれしかと我やとの梅を忘れぬ春はきにけり

また人に

定なく仇なる物をみるよりはときはにあらぬ色をやはみぬ

返し

住の江の我身なりせば年ふともまつより外の色をみましや

雨ふるとて待人のこねは

ふるによりきはる心もうきものを雨のみ辛くおもほゆる哉

梅につけて人に

みぬほとにうつろひぬらん梅花ふかゝりきとも後にかた覽

返し

鶯のやとの花たに色こくは風にあてゝをしはしたなん
あてしとてまもれと風の吹きつゝ有にも増るかを如何せん

みのむしのつける枝につけて人

うつろけぬ花のあたりを尋つゝいをれる虫をあはれとぞ思

返し

散かたの花のあたりはいとゝしく昔うつろふ色と社みれ

宮の御もきの哥よみて奉りしをみたまひて右大將

よし野山瀧の白いとちつれとはやくしりにし聲は忘れす

みしかききやうをねこめにひきて女三宮より

露しけき浅ちか原の花なれはみしかきほとに秋を知らない

御返し

浅ちふの下に咲ける花の色を虫のねとにたれかひきけん

知たりける人のはやういきける所にまたいきたりけ

るに

みる人の袖をあやなくぬらす哉野中の水のふかきはかりに

かへるのかれたるをおこせて人

かれにけるかはつの聲を春立てなどかなかぬと思ひける哉

返し

誰かゝくからおきては忍ぶ覽よみかへるてふ名をや頼みし

はやうすみし家のさくらをはこに入て人

年をへて折ける人も今はなくに春を過ぎぬ色をみよ君

かへし

明暮にとはぬ計を玉くしけそなる花のいつか忘るゝ

さくらのまたはへしたる枝のあかきにつけて

春過て秋はまたこぬ程なれば花か紅葉かえこそ定めぬ

又人

あふと見し夢を頼て春の日のくれかたきをも詠めつる哉

返し

心してあらまし物を夢にてもいかておもなくみえわたる覽

又人

頼めともむなしき空を詠めつゝ忍ひに袖のぬれぬ日そなき

返し

あはれとも思ふ心の空なるはなかわと人をきけは也けり

五月まゆみのもみちにつけて大納言

時雨をはまちもつけてや山のはのおのれまたきに紅葉染劔

返し

まちかれて移ろふ枝のあたりに人はしらぬ秋やきぬ覽

又人

君こふる泪もそてにもりぬれば我より外に人やしるらん

返し

我こふる泪なからもみにそひて後ろめたくもしらすなる哉

又人

身の上も人の心もしらぬまはとそともなきねをのみぞ鳴

返し

君たにもことそとしらぬ泪をはいかにしりてか哀とぞ思

又人

はかなくて同し心に成にしを思ふかとおもふらむやそ

返し

わひしきを同し心と聞からに我身をすてゝ君をかなしき

又人

澤水の心をしれる君なればつねよりまさるけふをしらまし

返し

まさるらん汀のほともしらねともよとの濱へぞ思ひ出ける

思事ある比人に

あるよりも亂れ増りて蟹のかるもの思ひす共君はしらすや

ある人

かくしつゝ世をや盡さんみちのくのあふ隈河はいかゞ渡覽

返し

阿武隈を渡りも果ぬ物ならはかはなかゝに我いかにせん

きたるにかへしたればまたきて

秋風になひく心はくすのはの吹かへさるゝをりを侘しき

返し

心より吹にもあらぬ秋風はかへるくつはのうらみさらなん

又人櫻を見て

人しれぬ我身なりせはやと乍ら花見にこともいはまし物を

返し

花見にといひかてらにて人しれすをるとも風に散さすも哉

ある人しのひて物いふほとに時鳥のなきければ

こよひこそしての田長も聞つめれ今や五月の空にしられん

返し

時鳥きゝわたるらん五月雨の空もにたに人はなさまし

かたらふ人に物いひて

現とも夢ともわかつて明ぬるをいつれのよにか又はみるへき

夢にても思ひしわかれ物ならはみて忘なんとのわひしき

又人

うつゝには心もこゝろぬぬるよの夢とも夢と人にかたるな
琴をかりて人に

年をへておとに聞つる琴の音を手にならしつる秋を嬉しき

返し

音にのみ聞けるもにおとらめやならしそむるに秋のそふ覽

かたゝかへに人の家にいきて歸てつとめて萩に朝か
ほのかゝりてさきたるを折てかれより

初秋のはきの朝かほあさほらけ別し人の袖かと思ふ

返し

袖の色も見えやはしけん朝顔のひるはうつろふ別ならぬに

よへの月みけんやと人のいへるに

いつとても哀と思をぬぬる夜の月はおほろけなくくそみし

人のこむとてこねは

契けんひをも過ぎぬ棚機は我もかくも思はさらなむ

返し

棚機の契りけんひは過すともたとふへしやはともゆゝしき

また

ゆゝしとも思はさり疊棚機の忘れぬ中のあらまほしさに

秋の月あかき人

戀しさはおなし心にあらすともこよひの月を君みさらめや

返し

さやかにもみるへき月を我はたゝ泪にこもる折をおほかる

年頃ありて人來て歸て

衣たにへたてし宵はうらみしに玉たれのうちの聲を悲しき

返し

うちとなくなれもしなまし玉簾たれ年月を隔て初けん

又人

しくれにも雨にもあらて君こふる我衣手のぬるゝ頃かな

返し

こさまさる紅葉ならねはぬるらめと色の深さも知れさり疊

秋いたく風吹日人に

秋はきの色つくたにも有物を心すこくも風のふくかな

返し

いねかてに成へき君か風の音は萩の葉ならぬみにそしみける

誰にかあらんまた人

秋のよの夢ちと思はゝいたつらに行て歸るも恨さらまし

返し

行かへる道もをくれぬ心にてまとひし我は誰を恨みむ

雨のふるよ人の來けるに

月見にとこぬよひあまた過にしを雨もよにこしと思ける哉

人に

袖しきてふしゝ枕を思出て月みるもにねをもなくかな

七月八日

いむといへは忍ぶ物からよもすから天の川社羨れつれ

人

高砂の尾上にたてる松をたにをれば折つる我としらなん

返し

たかさこの松は我われとも霜かれにまされる枝を知人そなき

門さゝで和泉守順朝臣のかきをへたてゝあるに梅を

こなたの人みなとりたりといふを聞て梅をやりたれ
は順

るせきにもさはらす水のもる時はまへの梅さへ残らさり晝

返し

井堰にもさはらていかてもりに劔杉の丸杭くひも飽かぬに

又順

和泉にはあらぬ眞垣のしまちかみ浪の越つゝもると社きけ

又返し

打ゆこほる浪のおとせはもらぬよりしまきの風を吹かへさるゝ
みつあきらの少將に

木高くて雨もさはらぬみかさ山かけに隠ぬ人をイはあらしな

同所にてかけあきらかうはひをゝりて

常にかく恨て過す春なれと梅にやこりすのちもまたなん

返し

立てぬる春とぞ聞し春霞かくさく梅におくるへしやは

又これ誰かならん

おもふとちまとひておれは梅の花心にくゝやふかくみゆ覽

同少將二月十餘日の夜の月のあかきに

春のよのよひるなからもなからへんと思心も命たへすは

返し

此春をのふる心のはしめにて千世すくるまでふるまてと思ふやはさみ

人にかはりてある女にみつあきらの少將

如何せんたえまかちなる岩橋を頼わたらんことのかたきよ

返し

かつらきのつらきくめちの岩橋のそなたもたゆる心とぞ聞

又返し

たえまなくわたさましかは葛城の神もとけてそ我頼まゝし

人にかはりて

おとろかてあらまし物をみも果ぬひるまの夢の戀しかる覽

又人のれうに

待ほとひイの遠たうみこそ侘しけれなこそ其の關に今はさはらし

はりて

雨ふるよ人と物なといゝてぬぬるをおもふひとにか

七月七日

をやみせぬ雨にしほれて床夏はこよひふしぬと聞はまもか

星まよふほとをまつイあふとて棚機まつイのやすき空なき雲井也けり

けふとみなしらぬ人なき棚機まつイのなかさへそらに夜や深す

こよひこそ風もすゝしく天の河浪立わたる君も見えけれ

何事をおもふともなく終夜ねぬに明ぬる夜をを恨る

ぬる折もなくてや床を明すへき夢とたに社つらきををみめ

かゝらんと思はん人の夢路にもつらき心をみえしと思ふ

よそにのみあふみの海はかひなくて戀しき浪を立直りける

かくてのみ憂に命のたへぬれば頼めぬよまてまたんとぞ思

かひなくて明石の浦の秋風に戀しき浪を立わたイまさりける

秋風の吹おりにしも問ぬかな萩の葉ならは音はしてまし

月影のおなし色なる梅花うけなんともいと折てみつへかりける

仇にちる花も春ともみなからにみつの上社まついけれけれ

けふまでとなかれ出ぬる水上の花は昨日やちりはてにけん
侘しくはならぬ^あまでにもうれへつゝ人に言へきものなき哉
年月の行らん事もおもほえず秋はかりのみ人のみゆれば
戀し共いはすゝろにおもほえて人にしられぬねなく頃哉
有したにうかりし物をあかすとして何處にそふるつらさ成覽

問ふとはいさや哀と思へ共つらくはいかゝしらせさるへき
うさまさる我身にしらてよそにのみ聞し昔に返してし哉

まつ人のたえぬ^みからにやさよ更て月の入にもねはなかる覽

見し人をみゆやと夢を頼にはめもあひかたき物にそ有ける
今はとて散ゆく花のわりなさは露のおくにもおかれさり覺

長夜をいかにあかして女郎花朝^{あかつきおき}かはなればつゆけかるらむ

遙なる山ならなくに夏虫のそらにとふ火とみえにけるかな

山のはゝ池の底にも見えなゝん入とも月のかくれさるへく

うしと思心のくまのなき時はつらさかくれぬ物にそ有ける

人待となきつゝあかす夜なくは徒らねにもなきぬへき哉

日くるれはまつぬる萩はさを鹿の鳴聲にたに驚きやせぬ

戀しきも心つからのわさなれはおき所なくもてそわつらふ

たなはたの夏の日くらしくるしくてなとかくなき命成覽

つきさはくころ

天河めつらしきとおほかりと夜こそ此ころさはくてふなれ

うちすてゝ別の秋のつらきよにいと吹そふ木枯のかせ
あはたの右大殿夜深く歸り給てこたにひかけをつゝ

みて給はせたりしに聞えさせし
包め共こたに人めの茂きよにあけは日影のまはゆからまし
ある所よりころもてのもりといふ所を繪にかゝせ給
てよみにたはせたりし
春は花秋はもみちとさそはれて人のたちよる衣手のもり

馬内侍集

羣書類從卷第二百七十四

和歌部百二十九 家集四十七

加茂保憲女集

しきしまの世中。わかみかとの御しそく。國のうちのつかさ。ちゝのかと。すきにし年ころならへる月目のなかに求むれと。我身のこと悲しき人はなかりけり。年のつもるまゝに物思ひしけりける時におもひけるやう。はかない鳥といへと。生るゝよりかひあるは。すたつと久しからず。はかない虫といへと。ときにつけてこ糸をとなへ。身をかへぬなし。かゝれば鳥虫にをとり。木にはをよふへからず。草にたにひとしからず。いはんや人にはならはす。ちはやふる神代より人をさかしき者にしけるそ。空をとふ鳥といへども。水に遊ぶいといへとも。はりをまうけ糸をすけて。そのまなこをとちて。深き海といへと。きをくほめ。かちをまふけて。をのつから渡りぬ。すへてかそへは。はまの眞砂もつきぬへう。たこの浦浪もかすしりぬへう（もい）なし。又おとこ女さまにしたかひ。あけの衣としことに色まさり。つたなき松にすむたつは。みの衣としふれと色をかへす。のそみは深けれと。谷のそこに身をしつむるををなけき。あるは世をそむき。のりに趣いて。心をふか

き山にいらて。みのをかけて。石のたゝみに身をかけて。苔の衣。きの葉をつきにして。松のはをくふ。これは齡をたもつときゝたり。さるによりて。戒をたもつものよにこそ。身をもやつし。人と均しからね。ゆくさきは露にぬれて。草のうへに居。われよりあかれりとみし人の。つみのそこなるを救はむと。身よりかしき人のみなり。女はかしき玉のうてなのいへとし（家刀魚）ともなりて。面白きを時につけて見きゝ。はかなき八重葎にとちられて。目のひかりたに稀なりといへとも。露のをのつから光を見せ。虫のをのつから時をしらせ。草のをのつから花の色を見せ。かくさまゝなるを見れば。わか身の悲しきも。命は幸ひをさためたらぬ世なれば。さりともと若き頼みに頼みしを。いま年のおいゆくまゝに。あはれなるを思へと。いやしきには友とする人もなし。つたなきには宮ひかなることなし。かゝれと心ひとつに歎きて。あしたには白妙の衣に。くれなるの時雨ふりしき。ゆふへには墨染のやみに暮まとひて。あるときに胸に思ひをたきて。灰にかきつくれば。煙となりて雲とゝもに亂るゝ時には思ひなかりて水にかけは。波とゝもにみたるゝにと。心をはなくさの濱によせ。かたちをはかひあるさまにもてなして。おもし

ろきとを心にこそ思へ。たれにかはいはむ。珍らしきとて葉をいひ出たれと。誰か頭をかたふけ。深きあちはひをもしらむ。よになき玉をみかけりといふとも。たれかた(手)のうち(葉)にいられて。光をあはれひむとおもへと。てい(こち)の中にいふるを。遙にその蓮いやしからす。谷のそこに匂ふからに。そのはちすいやしからす。宮の内の花といへとも。さくもは隔なし。ひんがしの山に秋のもみちてらす。西の山に春の花ひらけすはこそあらめ。そらにすむ月のかげ。はかなき水にうつらすはこそあらめ。おほきなる河。ちいさき川も。なみのさま隔なしとおもへと。人よりをとれる人の。すぐれたる才あらはるゝを難しいへと。人にまさりたる人の。をとりまするさいは。劣りたるもの葉の面白きにはあらず。人のかしこきなりといへと。冬の雪いつこのに(雪)劣らすと思へと。こしのかたのにはしかす。鮭といふいの冬いてくれは。北へなかるゝ水すらも友とせり。鶴といふ鳥を冬の川にかひて。あらき嵐にすゝむとなし。鷹といふ鳥を夏の野にかりして。あそふとなし。松の子の日いつもおほかれと。夏の野にいてゝひかす。あやめ草おほかりといへとも。春の子の目にひかす。おなしくくらふる駒といへとも。かしこきには負けぬ。同じきかち弓といへとも。まことに當らぬはまけぬ。おなしきすまひといへと。力よはきには勝ちぬとおもへは。いかてかへたてのなからむ。賢きはかしこく。幼きはおさなく。高きはたかく。短きはみしかく。長きはなかうこそはあらめとおもへは。昔よりたかう短きをきためとり。時をわきをきたるに。今わか身にみたれ物思ひのまゝに。つけむ言のはを。

わかつてやはあるへきとて。ある時は長きよをあかしかね。有時は短き日を心もとなかり。人しれぬ戀なきにしもわかねは。枕さためぬうたゝねのほとに夢さめ。花かすみ露につけ。草はにつけ。鳥虫につけ。あるおりに独りありあけの月に。あさちか露おきゐて。秋のよひのまに心のゆかぬところなく。もろこしまて思ひやれは。づるむれつゝ、えいひとりはむ。蘆原の中つ國なまめかし。たをやかなる言葉まさり。さかし賢きことは。もろこしにはをとり。山のすかた海のほとり。あやしう甲斐ありて面白しといふ人にあはゝ。なにはのまにつけさむ。されと人の心あはすして。おかしきとは少くして。うきとは多かり。賤のをたまきくりかへし。いやしき心ひとつを千くさになして。いひ集めたれは。あるはよそ文字。あるははたもしなとして。いひあつめたれは。みそもしにたに。つゝくることかたきを。とりあつむれは。近江のうみの水莖もつきぬへく。かきあつめは。みちのくのまゆみの紙もすすき合ふましく。心にいるゝもの葉の哀なれば。おくと臥すと。思ひ集めたるもとも。なみたにくたし果てゝんと思へと。やみのよの錦なるへしと思て。あけくれみれは。水のあはにたに劣れりけり。なかれての世に人に笑はれぬへければ。なをかりの涙に。おとしはてゝんと思ふものから。なを書あつめてけり。春夏秋冬しきなり。よろつよ照す日のもとの國。とたまを保つに叶へり。おこきなき奈良の都のひんかしには。萬世の影みゆる鏡の山さやかにすめり。千年ふるすゝかの關よりこゆる年の一日よりは。蟹のたく繩くり返し。千草のいせの海をうたふ。西は限なき我君の御代にす

みよしのはま。よゝにかれせぬ松おひたり。うきとはみな忘れ草しけれり。嬉しきことは盡せぬあし原に田鵜おりる。年をつめる舟ちの帆をおろす。泊りかひある海にさはかしきなみなく。空にくれたる雲なく。霞たなひきわたり。

水草も心をとへ。とり虫もこゑくさえつれば。人もよろこひをなし盛りとする春のゝとけき。池のほとり。花のあひたと。心のほときはらかに。松のたてさまよなれたるに。藤はひかゝり。こけの衣あをやかなるに。黒木のはし渡し。白妙のさきおりゐてのとなるに。あかねさす日の色ころも。ふかきも淺きもきたる人まいり集まりて。はるのかたのあつまことを。くれたしこゑにしらへ。むめかえにきゐる鶯なと搔ならして。まさいらくなと吹きあそぶ。うちにはなかな癒しきて。なかもきたる人そよりきて。かしら白きおきな女。はかため(齒圖)おほしきとをいひとゝめて。あゆの口をうつくしみ。かけもうかはぬ餅のかゝみとして。はるけき行ききを見て。かみもゆるさぬ幸ひを。ほしきにしたかひて預り。人もゆるさぬもの葉を。心のまゝに樂しむ。またほとにあひては。草のいほりに久しきつまをかさりて。戒をは保たすして。とふきを保てるさまとも。いつとみこゝろさしてはと。身をもち餘りて。老のふくろ腰にあまりて。いへとしまち喜び。かやのゝたにゝはしくこなとよひあそふほとに。やうく氷とけて。谷のひゝきおほく。おつる水にかほまさりて。あしのをたちきるとて。ひさきをまねひて。卯花しらかさね所々ほころひて。山のはを出るゆみはりの。ひさかたのとく入かけをせしかは。おとろきてやうくまとゐる月のかつら。そらものとも

とはてにおりて。てるひをも見あれとてひく。いはふ社のところなく露のいほりも變らぬ衲きし。ゆふたすきかけて。いそかぬ人なくさはくほとに。郭公の聲さみたれなるほとに。かくれぬのあやめ草をもひきあらはし。淺茅か中のよもきをもあさりいて。つまをさためたるうへめとも。たれをこひちにおりたるにかあらん、そほちうたふほとに。月日つもると。おほぬさになりゆくは。流るゝ水にたくへ。風にまかせてすゝみ。ひねもすになく空蟬の露をまつ命。心ほそくくらしかねたる夕やみに。飛わたりたる螢のひかり。小男鹿は照射の光におとろく。水にやとれるかけを。いをはおつ。ともすなつの水のかさりに。大殿のとしひは消えぬ。てるひにもきえぬ氷をも。ひみつといひて。熱しゝといふほとに。よけたるに。ほのかなる夕立にそゝける雨は。わたつみにふる雪のまのはり。(ちすい)このまよりわつかなる影見ゆる月のこと。あかす見ゆる程に。たつたひめ色をそめわく秋に。まゆみのもみちあかく。こたかき所々に。移ろひわたりて。雨にたとふる七夕の。ちきれる月日をまちて。忍ひのつまをも取らすして年ふれは。つねにあかぬとはをかはし。めつらしくてか。よはひ星の。いとまなくわたる雲路のあした。夕なれすならねは。うきともならはす。いまはすましといふ空もなく。まれにあふ曉の。なみたをとおしたる露とあつめて。うつふしふみをかきはしめけるよりなむ。あめつち星そらと云ひけるもとははしける。むさしあふみ。初めはうつし。人はをのか心のみしかきをもちて千歳の契り。數しらぬものはをかはせは。いはきならねは。おこきて程もなく下ひもうちと

けて。なれたるすかた。つくろはぬかたちを。玉くしけ明暮は。ます鏡かけをならへ。あいなしみしる程に。そめし紅あくにかへりて。契りし松に波高く。ちかひしものは泡ときえぬれと。七夕はゆゝしとそいふめる。女郎花たをやけき野へに。はなすゝき打なひくゆふくれに。たひとく行ほとに。むまのおもてまゝにしも見えねは。もちつきの駒といふは。せき水影をれはにやあらん。風のこゑ夜とにまさり。むしの聲心すき山さとに。小男鹿うち鳴。萩の下葉色つくをなかつて。心ほそける女。はかなくちきりし人をまつとて。かきつらねたる雁をは。くるかと思ひて。なよ竹のなかき夜をあかしかねては。春日となけれと。いりくるも緑の色を心にしみてかはりたり。月のひかりを袖にうつしなとす。よひもつち音は高くなり。虫の聲をはみしかく成まさりて。あけたては霧たつ野へに狩するあた人。宿かりなとするに。よさらに成にたりとて。菊に綿おほひて。あさかほにしほめるこをよなおむなにしはのふれと露たまりて。こからしの嵐にむすはれたり。きりくすめは。あさことに置まさる白妙の月しるゝ見る人もなくて。むはたまの炭をおこして。くひものに心をいるゝほとに。おほやけ私さかき葉とりいて。やまゐして摺れるころも年ことにみれと珍らしといふや。いかなるそ。おりかへす。むまのあかれは空もくらぬ日かけをかさして。まひあそふほとに。ゆふきりふたかりて。山にはのりしときたえて。花ほころひす。里にはともしき宿に煙たえて。霞たなひかす。もの思ひまきるゝとなし。袖のこほりをときわひて。ねさめの床のかりの聲をあはれかりて。はらわたをたえて。思

ひやれるとはくらけれと。おほつかなからす。あけたてふ。ふりわけ髪のも。はかなきを立てたるはか(機)にかゝれる鳥。ゑにうたれんををしらすして。くる人をかへり見たるさをしか。雪にあはぬとりは。ゆきをよきたふ(茶壺)と思へり。氷にとちらるゝいをは。冬をむすへる網とおもへり。みほに在るあみのほとにおいて。かしうしみかたとせられうもてありくとさはきて。いつしかとおやよにあひ見むとまては。わらはへはとくをにしなむと心もとなかりて。こゝかしこ打ならして。いつしかとそ語らふめる。かくときにつけて。にくからぬ世中の命も。さかへもをとろへすは。何の悲しひかあらむ。されともひとのしるとてあはれひは。めこなくして逍遙すとて。春は子の目とて野へにいゝ。をのか命をは松にあえよとひきのへ。鳥をはころし。秋をはもみち見ると。のへにましりて。たかをはなちて狩すなとりして。きたるもの狩衣なるにより。つねならぬにやあらむ。されといひてなにともいかゝうきはせむ。よをそむきたる法師こそは。物の命をころさすして。この身をかきらめ。をはらよらへ。それすらよくのほうしはくひなや。かゝれは。なを難波津のかほのほりへの舟のさせひけなり。ほうらいの山かめのこうを盡くすとも。とものうちけるこのてなり。きこりの腰なりけんよきよりも。あめのしたなる世中は。をのゝえ朽ちぬへうなんありける。世中はしまりけるとき。昔はにはたゝきといふ鳥のまねをしてなむ。男女はさためけるに。草のたねならて生ひけるは。この鳥のをしへたりけるになん有ける。さてその人のことも。廣くなりて。かしこきはたかき人となり。おさな

きは。けすきみと定めける。人はみなをなしゆかり也。されは高きいやしきなそは。とりこにこそあれ。いつもれ懸かたかき卑しきあらむ。おなし類にこそあらめとて。たかき女にも。いやしきおとこ心をかけ。いやしき女にも。たかき男あるへければ。おとこ女のなかを定めわひて。すくせにまかせける。またかく同じし人のことと。よくもあしくもなかりければなむ。幸ひもいまに定まらざりける。かのおなし人のこともなかりけり。昔たかき卑しきなく。にしひんかしなう。春秋ふしかたらふにより。つねなきとはと。とはにと云ひける。おとこの心といふもの。つよく有しもせよ。めつらしくはつかなるに。心さしをつくし。いひそむるなさけのとは。たをやかなるみやひには。なにをかすへきとて。はまのちくさなるは。まつになはつといふ歌をつづけて。おなしきうゆのうちとて。やまと歌とてよみかはし。あさか山をしひいて。あはつの河にかけをならへて住むといひ。あつきの袖のくれにひきつては。まかきの島に待わつらひ。涙のかへることに打わひて。限りなき深きをいひ。はるけき行さをちきれば。あはれを知らぬやうなり。まくるを深きとも見たまへかし。くらへ馬のはやうよりといへは。月のほのかなるに。ゆみはりのをしいていは。いと思はすなりや。ためらひてこそといへと。月よにひかれて。心もよりぬへければ。たゝあまの刈藻のこしにてをといひて。はかなく亂るゝ衣のせきを隔てゝ。たましくけ明ゆくをおしむに。鳥ふた聲三聲なけは。なみた打おとして。立ぬれはとなし。ひにくれもすくせのもり。くにのまつはらにこそあらめとそは。みとりにこそおもへ。

心のうちには。見のつゝにもまさりて思へと。うへにはつれなし。顔つくとて。はこの内なる鏡にうかへる影を。それかゝと心けさうをしてまつくれ。かへるあした露けしといひて。すむはかけをらして。をこつりさをにかゝれるを。くゆる煙さきたゝす。つくしみつくさかへるを。かたし。ひと虫を玉といひしかと。あまたのふみを見もいれす。くれ竹のひとたにとまらす。ふしみの里になしつれは。あさちか原の露しけく。おくと臥すに。おきつ涙。あれたる床に舟とうかへる心をはつくし。すくせをはおもへは。いろなるなみたちぬへうなむ。なほとり浦の蟹なれは。ひととの哀なるにはなは。いなひのゝいなひはてす。しかまに染むるあなかにいへは。かけまくならの宮このふることゝなりて。なけきのみやまのへにやなくなる。なつするゝかそふるときは。なにゝあふみの筑摩の神を恨みつゝ。こぬ人ゆへにひねもすに戀ひくらし。よもあかこるもをかへし。まれなる夢にたましゐをあくからし。ほのかなる蜻蛉に心をまとはし。した紐のとくるをしるしに思ふ程に。ゆふつけ鳥しはゝ打なき。夜やうゝあけゆき。目さしいつるまで。あしたの床ものうく思はえて。とくあくれは。あすとも知らぬ世中に。なそをゝして。つかきはのりにていはすれは。なきふしにやむはれむ。からにしき面白しといへと。つゝにたえて。やかてある面白き。さくら。つねに散らすは。ひとにいとほれなむ。みちとせをらす。花にをかはためしにせん。鶴あしはらにすますは。いかてか千とせをかせん。かるかやみたれす花にをかは。たをけき名をは残さむ。する衣めなれなは。なにをかは

珍らしきにはせん。つゆの命のほど。あさかほのしほまぬ
先にたにたはれすは。なにをかはたはれにはせむと。おと
こはいかたの如何にと見あけて。心すきくれを見せ。いか
ためありともみせず。よこはしりのせきにもさはらすめは。
池水のいひくたすを。かは竹の葉茂きとには云ひつゝ。
いひ集むることとも。おほそらを紙ひとひらに取りなして。
かくともといふやうなり。この歌はあめの帝の御時に。もか
さといふ物おこりて。やみける中に。かもうちなる女。よ
ろつのひとにをとれりけり。さるなかに唯もかさをなむ。
すくれて病みける。かさのみにもあらず。おほくの病をそ
しけると。からうしてこの歌よりなん。よみかへりける。
そのほと冬のはしめ。秋のをはりなりければ。草木も風も
やう／＼枯れもていく。つれ／＼なるまゝに。珍らしき病
なりとて。此瘡のそやみ(癰)をかきをければ。疾去ること
によくなむ。見ん人ゆゝしく(と)思ひぬへしとて。いさゝ
か色にもいたさす。たゝ心ひとつに思ひて。わか身のはか
なきと。よの中の常ないこと詠むるゆふへ。そらにたま
る虫をよみ。ある時はあまたのたましをかたりにて。う
た合をして。かゝまけは(を)心ひとつにさためなとして。そ
なくさめて明し暮しける。見る人はさもこそやまひたかし
そらめ。つねにゝよひ(神)人なむ。これをこのむかはなと
いへと聞いれす。わつかにすゝき菊なとうへて見んとしけ
るを。此疾につきて知らぬ程に。菊も枯れにけり。まして
かゝるをを思ひこめてや。やみなんや宜しからむと定む
るに。なをあかねは。かゝる事をいかなる人しけん。心も
なかりける人かなといはゝ。おほよその人のなたてなへけ

れは。あかせるなり。たいもしらする人もなし。たゝよまる
ゝ時を。面白きにすれは。冬も櫻こゝろのうちにのみたる。
なつの日にも心のうちには。雪かき暮しふりて。きえまか
ひなとすれは。定まる事なくて。かき集むるても定めたら
す。はしにかくへきことを奥にかき。おくに書くへきとは
端にかき。定まるとなし。もかさのさかりに目をさへ病み
ければ。枕紙に面白きもみちを。人のをいたりければ。お
もひあまりて。

曇りつゝ涙しくゝわかめにも猶もみちはゝあかく見え
正月の比ほひおもひあまりてはなかうたもあるへし
春霞たなひきわたるけふよりやなへて草木も花こゝろつく
霧晴ぬあさまの嶽にいとゝしくけふは霞のたちやそふ(平間)
池水の影もたえせぬはるひすらかけをもともに遊ぶ鴈か
鶯はおしむとやなくあさくもりちりゆく雪の花の名残に
さ夜ち鳥はねうつ涙のをとす也よそのはる風氷とくらん
松ひきて千代とも祈るけふしまれ降ほともなくきゆる初雪
うらすくたつかは霧を見亘せはあさはむ鶴の上も霞めり
わびをのみちたつ雪もきえぬめりけふしやのへに若菜摘
春をに人はおゆれと難波なるあしの上そひはうら若くみゆ
人のよにうきにも春はかよふらしうへのみ草も色かはり覺
春駒のすさむるよとの若草もつまにはしかぬ物にそ有ける
君まさはうつしにもせよ梅の花とくとりとめよ風散すめり
春の野に若な摘とて花かたみ心にもあらぬつまをとつる
鶯の花のえをにこつたひてあすもはるひにゆるきなく也
こきませの花のにしきを春風のたちきてさとへかへる雁金
苗代草の水ををくなくなるたねしあればうへにまかせて蛙鳴なり

とりあへぬ花をおしむと永日にさえつりやすく驚そなく
 春霞たなひきわたる青柳の糸はけふりによるかとそ見る
 ゆふつけのしたりも永き春の日のあけはうら^{あけはうら}鳴を悲しき
 春の日にこのめもえつや打まれてかたかきかはし人の行覽
 青柳の糸にやいをはかゝる覽おろせるかけの綱にたれば
 山川もすむかたをかにもち鳥こゑきく春は夜のにしきか
 春雨に野山もいろはそめてけり人の心をいかてぬらさむ
 わたつみの汀は色も劣らねとしはかきはらふ螢は増れり
 櫻花にほひそたくふ心かなちらはちるへきものならなくに
 色も香もみきはにやとる山吹のおもかけたにも散残らなむ
 わかるれと春はひにもならなくに紫にそむ藤をかゝれる
 花のえにはねうちかはし呼子鳥なけとも春はとまらざり
 なみかけて人のおしむにむめつ川春の暮をはさしもつかえ
 東野に任せし駒のけふはいて色にあをはとよに光るらん
 櫻花えたにはつゆもとまらてあたなる涙ののこりぬる哉
 春雨の種まくかゝわたつみにふれはや石にみるのおふらん
 春立てはこのめに燃ゆるほのほ哉時につけたる戀にや有覽
 浮世には花ともかなやとまらて我身を風に任せはつへき

夏

うつせみのときよにかはるなつ衣人の心をいかてをるらん
 しろたへにさける卯花いりちとてかせのかみつ衣かけしも
 年をにやそうちひとのやひらてにかしはきの森うすく成覽
 わかすき秋の野わけて打忍ひ結びやせましほにあらす共
 夏草は枕にすへく成にけりたひゆく人のやとにかるらん
 めつらしき初聲にしも郭公むかしの人のこひしかるらん
 里とにことにかりくる時鳥ねたきはまきのとにもさはらす

すり衣かもの社に夕たすきそてかたかけてみたるらんやそ
 けふみればほにそ出にける忍ひつゝ駒のすさめし妹をき草
 柳とる我になきかせ郭公ねかひなまめくきみかおほきみ
 人まては敲くくるなをそれかとて儚く明る夏之夜そうき
 むらさきのそこまで匂ふ杜若かけさす水はひにや有らん
 五月山雲もよに時鳥たかさとへとかよはにきつらん
 けふ見ればたまのうてなもなかり晁菖蒲の草の庵のみして
 時鳥たひにありかや此さとのあやめのくさのやとに結へる
 枝なから冬の夜半くる橘の花はふ^ひひときにあふかも
 まもかと行きて見てしか仇し野は此五月雨に如何なれると
 かるこにも玉まきする五月雨をせちにも人に思ふへき哉
 ふしかへり澤水むせふまこも草かけをも人はからんとや思
 おほぬさにをける朝露けさわけて衣の袖をひきぬらしつる
 小倉山ひみゆるかたにやとかれは簀のすたくかつは成けり
 てれるひに露待侘てとひかへるみくつてふなは澤にや有覽
 はちすはのしける池水ところなみ旅の空成ひとかやとさす
 なつのよの草刈笛のくちなれてかへるさかなし夕暮の空
 かく計千草しほみて照日にもひとりなむ袖はかはかし
 冬をへてもしにおふるむきの秋はよさむ^{せみ}せみのは衣

五月せみの聲むきの秋をく

たに水はかたかけおふる夏草は岸ゆくかけの駒をすさむる
 空すみてかゝみとすめる夏の日ば飛かふ鶴の鳴さへそうき
 五月山このもかのもに隠れかねはかなきものほとし也晁
 てなるれと猶火鼠のかはほりは暑さを勝るをきやしてまし
 大幣にかきなてなかずあまかつは幾その人のふちをみる覽
 撫子の何むつまじき常夏をよるしも見ぬそわひしかりける

うへしときわか種とりし夏の色はつまとる計成にける哉
ゆみはりの有明の月の月の内に入影おしき夏にもある哉

秋

霧まよふ秋はきに曇をくれしとおもひて草木いまや色つく
七夕のあまの川船秋をにいかなるほしか綱てひくらん
七夕のわかるゝあきの袖ひちて星のみわたるかさゝきの橋
七夕にかしゝ衣を秋をに風ふきかへすこひをせんかし
女郎花人やたのめてこひつらむいもとをかきたる秋の夕暮
秋の野に放ちすてたる駒のおはくらは露をうつし置ける
おもふにはなるとなしと鈴虫のこゑふりたつる秋を悲しき
山田守我衣手に露はをけと草葉にしてもうつろはななくに
ほのめきしひかり計に秋の田のみもり侘しきころの色かな
山田もる庵につまなきわれとてや夜なゝおそふ秋の白露
秋風にあはれそへむと雲路わけはねふりわけて鴈はきに
秋霧のしめゆひそふるおほそらにいかてか鴈のとひ通ふ
蟹かたなきすれはいもかきぬしてうちあはせ聲となふ也
小男鹿も聲ふりたつる秋とてや萩のしたはも色にいてぬ
風吹は秋の白露まろひあひて結ふ草葉も色にいてにけり
見渡せば浪とそ見ゆる秋の野に帆にあげて舟や漕わたる
藤袴ほころひわたる見はほかにぬきせん人を戀しかりける
小男鹿のしからみふする秋萩の露はえならぬ物にそ有ける
秋風の寒きよひまにおきのはにそゝのかされて人を戀しき
蛸はしはしはならすあさかほの花見る心やすすけくもなし
しら露のきゆるをおしみ下草にたまふきむす秋のよの風

冬

萎る覽草木にたくふたましるを心をかせやふけらかしつる

なみならはよも山をに吹かへす雲のいほりそいかゝしつ覽
秋の夜のねきめのほとを鴈かねの空にしればや鳴わたる
秋のたのさなから年をへてければ残すくなき月日也けり

あえよとて菊の白露のこへともすきにし齡かへらさりけり
もみち葉は色めく秋にあざりして木草に袖をひかれぬる哉
山かつのそのゝ紅葉はあかけれとやみなるよるの錦也けり
野山ゆき松たけくめるつゝらこのいくふし秋をくり返す
淵と成せとのみなるかよの中をふみ迷はせる秋かみちかき
紅葉ゝの降しく山にましらひてみのしろならぬいろかきつ
あさほめの色きぬ照すぬねかとにうへに紅葉の袖は見え
紅葉はは秋にそしむるよの中をみむるの山は名のみなり
秋風にかれにし人そこひらるゝ夜とも衣もかれやしつ覽
故郷へ秋は歸りぬ□さひける山のにしきをけころもにきて
人もみなかれゆく野へに花薄露にのみこそむすはれにけれ
打はへて機織る虫のある物をつゝりさせてふ聲やなになり

冬

こゝまではあざといへり

わたつみに風浪高し月も日はしりふねして冬のきぬれは
冬をいたみうすき衣とかへつれと心はのへにくきに成けり
もみち葉の積れる上にをく霜のなからはきて物を社思へ
くれなるのせになかれめや菊の花霜にもうてぬ色を悲しき
時雨ゆへ我たちよればこの本はたのむかひなく成にける哉
山人のあしの上しもきえかへりみちにわふれて歎きこる
冬の野に消むれたる花薄むすし紐をまつかれにける
冬の夜をかことふしもをおほす覽をのかは風に草も枯つゝ
人もかれ虫も音せぬ山里にたれかはしはしたちとまるへき
夕つくよ光を見すはあそひおの山のは近くよひそきにける

雲晴ぬあられをみればふりはへて寒さのくるに侘しかり晁
 自妙の雪にいろつくさねかつら冬はくれ共をとろへなくに
 久方の日てるかたにも冬の野はしみ社まされ色は見えずて
 影みえてなれにし芦も冬くれはまれにくらしな人やすさめぬ
 冬寒み来る池水ゆくかりのかけとちらめよひとさるふへに
 冬河のなみのよいまに氷れるを風もてをれる綾かとそ見る
 冬こもり人も通はぬ山里のまれのほそみちふたゆくきかも
 のりのしのもつて□冬なれば山のたき聲とちやしぬらん
 山川のいさからほりのとちたるは風社あみと吹むすひけれ
 あさあともさなから滑て川千鳥氷れる身にそ冬はすみける
 わきかへりたきりて見ゆる山川も冬にはあへす水すらしも
 しるたへの鶴のうはけにおく霜のまされて見ゆる朝則かな
 水鳥のうへはこほれる羽ころもいて入あらふ浪のまもなし
 冬の夜をひとりね覺におきたれはおなし心に鴈もなく也
 石におふる海まつねはかたけれと年をき積る川に老ぬか
 とひりせる孰れかみわの杉のかとはり知らす雪の降れは
 芦田鶴の聲をほにあげて我戀は天のかはらに今そふなつる
 芦田鶴の雲のかくれにとひかくれ人にしられぬ戀を侘しき
 雲路にもたうちにまかふ鴈かねの思ふあたりにゆき難き哉
 おもへ共我身はよそにとふ鳥のなと人なれぬ戀にかある覽
 雪高きみちなきは□我なれやあたたえ人のふみ見さるらん
 ふすとおくと床よはひする歎にはこたま出来物にそ有ける
 涙もて思ひけてともわか戀はほのほに見ゆる物にそ有ける
 いへといへとさもうこきなき心哉いはきよりたに出る思を
 あま衣ちしほそむれとよと共に色なき心いかてみせまし
 風吹は浪のしめゆふなけれあしのふしおきこひに沈む比哉

君をのみ戀つるあまのたまのをはさほにかゝれる命成けり
 たのめねとまつひとしづめにたかきこの屋上にすくすを侘しき
 夜の程は浅かのめまといひなからなとうとまれぬ心なる覽
 かく計人のかたむるあふさかをいかて心のゆきかへるらん
 みぬ人を雲井のよそに戀そめて踏むあとさへにまとふ頃哉
 たくひなくとイいのちたえなはわかこひにいかなる人か下巻
 あふとの雲井とをくて我戀はいのちにかよふほとに悲しき
 濱千鳥あとにたましる道ふ也みつからみえぬいきかより雨
 玉章の命をかけし我戀のあはゝとさへもなきわたる哉
 亂れつゝ戀を社すれむまきむまの亂れておほす神ならなくに
 色みえぬ言のはたにもある物を心にそめはひとやかりなん
 あし垣の中によのはのあちきなきあふと波によらは濁つゝ
 逢ての戀
 しぬといへと猶魂はほのめきしみてはからさへ無心地する
 侘ひつゝも頼むになれは玉章の使をやるそけきは戀しき
 ほのかにも結ひし水の面影にみえて戀しき君にもある哉
 待といひて君をみとりの色深く長閑きかけにちよは隠れん
 あはざりし戀に我身はきえにせはかへるゝは惑はさちまし
 ある社は侘しかりけれ憂をにたれかけぬよといひはしめ劔
 慰むやと思ひける社をろかなれみても戀しきよに社有けれ
 あへるよを命にかふる物ならはなきてそひて見るへくマコ
 紅のはつはな染の色ころもきつゝみれともあかぬいかな
 ひとりねに哀と聞しゆふつけをけさなく聲は恨めしきかな
 逢てあはぬ戀
 逢てあはぬ戀

みし人の聲ならね共さよふけてね覺になくそ侘しかりける

〔系有讀解〕

見てたにもまとひし心侘ひぬればあはてものちなりけり
白糸のいかなるなつか結び劔うちへふしのなきを侘しき
思ふてふあひみし時のものは辛きにはる物にそ有ける
戀わひて面影にのみこひいれはひとつ身になる心地社々豊
しきのうた。ひ哥とはさるものぞ。おきてさうそいとあ
はれる。あるはたひゆく人のおもしろきところにつけて。
またみつみのかたつける。山寺の心すくたうとけなる
に。きのもとにめくりて經をよむに。聲のたうとくきこゆ
るに。うみにはふねの漕行をとあひてあはれるに。し
けるやのなかにわつかにたひ〔たひ〕と〔たひ〕のゆくみゆ。
心ほそけて。あむまひとむまはかりゆく。おとこなと行。
つほさかのうつ〔壘〕に。このはのさしおほえわたるもおか
しきに。かはらよりのりのもたせて。ゆくほとあはれる
に。よみなとすへて。いひつくすへうもあらねは。た
はしなり。あるは心ほそきやとに。つれ〔と〕と雨のふるを
ななめいたるをなむ。まなこをはなかるゝ水にたとへり。
汐ならてはちすの海にこく舟のおくの聲をそほにとあけつ
水もなき空に網はるさゝかにの懸れる虫をいを見と見るらん
雨降れば庭にきしろふ泡沫を何れかまづはきゆるとを見る
わたつみを波のまに〔と〕見渡せはてなく見ゆる世中のうさ
いせの海に藻鹽焼蟹の風を痛み空をしほむる君にそ有へき
足引の病やむてふほうのかはふきよる風もあらしと思ふ
そむけとも天のしたをしはなれねはいつこにもよる涙成堯
かりそめの旅とむすひし草枕もみちするまで我はへにけり
泪もておもひつゝけし水莖のふてのうみと〔系有讀解〕もりにける哉

ときにのそみてつかひめすゝきしのもみち
染めし色も時にのそめは紅葉々のあたりの海に散かゝり堯

にはたゞき

かとをたによきし心を思ふにはくなふりはてゝ遠き山路を
にはたつみ岸のみ残るあはみなに斧のえくたすなかも成堯
かけともに見えたる月を浮雲のこせをふくるみにそ有ける
我もくよ深きなけきする鳥のこゑにやなけきこりしゆく〔本ノマ〕覽

あしろのひをうちに

さまざまも變らて涙は網代木の同じうちなるいはにそ有へき
すまひくさほて吹く風にふきつゝら何そしる覽定めなきよを
かたわきて吹風によるすまひくさ露に移るそかひなかりける
よにいれて月の影さす櫃のとは夕つけ鳥のふねもあけさる
人めなき山にもみとはいれつれと隠れぬものはうきゝ也堯

ひをのかへし

早きせも淺きは違ふ同しうちもひをそかはねををぬ成へし
梶のをとによる漕く舟は哀なるみる人なみのあはかひなし
あしたつの聲さへ雲にかくれせは哀をいかて空にしらまし
玉櫛箭鏡の浦にすむ千鳥おほつかなみにとふくゝとゆく
契りあればいかゝ遡れむ。むまるとも。かひこめくちて。
とりのこの。かへりては身のうきことを。おやのむすへる。
心のうちに。いつかあらはひくゝむと。なくゝこもりあ
りければ。をのかふねゝおひたちて。かくれしおやのは
ねころも。みなわすられてとひならひ。あるはかしこな
るすこの。かしこきたかとなをふるひ。あるははかなくさ
すらへて。たつとあるとにおもひつゝ。なけきのえたをおり
のほり。いまやはかなきしにすると。さえつるこゑをさく

ひとは。いそひするとや思ふらむ。あはれかなしきわか身
 かな。冬なりしときゝみにせは。たとかへしするかせふき
 て。おしむ草木もありなまし。人なみなてひとゝなり。
 ものおもふとはおはさはの。いけるかひなしと思ひつゝ。
 なをふるもはふはのせき。ひとよりこそはこえさらめ。ひ
 としくたにもなるやとて。はかなくすくすなつ冬を。あつ
 しきむしといふほとに。とし月なみにこゆるきの。いそか
 めわれはつれゝと。うくらのしたにはひふして。かなふ
 人なみしとみ山。ふきあけおろすかせのをとの。朝ゆふへ
 になしきは。かせきのこゑにいとに。こたふるかこ
 とときゆれは。なとしもこゝにあるかとそ。こゝろにかな
 ふよふことり。よふにしたかふ山ひこの。ひゝきはかりを
 たのみつゝ。まれにかゝれるたかすたれ。なみたはかりの
 いていりに。くちはてぬれはいとゝしく。心のうちも見え
 はてゝ。身をはつかしのもりの下。かけにかはらぬ我身と
 や。人や見るらんあししけみ。かつはつれなくなりながら。
 したさはかるゝわかむねは。やすけくもなしなるたきの。
 おちつむたうはおほかれと。我身ひとつかすならぬと。
 おもひしかともよの中の。うきとをつらふいれつれば。な
 らへにわふるあしのねの。けふりにたれもなりはてゝ。ゆ
 ゝしゝといふほとに。あすそせになるあすか河。ふちの
 こゝろにまつはれて。たかきいやしきなみたかは。みなか
 みはやくなりにけるかな。

草深く茂れる宿をいてゝいなはたかゝりのとならむとす覽
 思はしと心をもとくこゝろしもまとひまさりて戀しかる覽
 とをからぬ袂に淵はあり乍身はすてかたき物にそ有ける

天の河浪間にみゆるあかはしはくもまに浮ふほかけ成へし
 思ひきやふたゝひきてし墨染の衣にちかくなれん物とは
 山里にしろ人もなきほとゝきすなれにしさとを哀とそなく
 思ひわひくさきを頼む山里は冬くるときそわひしかりける
 冬の夜の涙のかゝるむはたまのかみは氷にむすほれつゝ
 浅ましきとは夢かと驚けとうつゝはさめぬ物にそ有ける
 身の泡に思ひくたせはめみかけてたゝすきくれの衣とそ思
 かへし

程へてそ網はかくへきすきくれのさるは身の泡に久しかるへく

またかへし

堰もあへぬ瀧津心をくれゝといかゝ見なれて久しかるへき

入にむめをこひたれば

あひ思ふ君かためにはむめか枝に折れはいとゝ〔下闕〕

返し

うくひすのかよひし枝をおりつれば〔景〕

日ねもす小あめふりくらしてさくららの花やうゝほ

ころひてとりのごゑとありややなきのいとみとりみ

たれてにはのおもてあをやきなせりにはたつみきえ

かへるゐると見るほとにきゆめるみつほとをとら

ぬものは我身なりけりと見ゆるにて

雨の足もかす社まされ淀河のこもの汀もいかゝなるらむ

常よりもこもの汀はまされとも浅ましく社人はつられ

已上百十六首内他人哥

加茂女保憲女

私云。歌員數百十六首云云。而二百餘首在之如何。以二

他本二可ニ接合ニ哉。

小大君集

わすれぬかきりとおもへと。はかしくしうもおぼえ
す。人ことをといふことのやうなり。

正月一日のとなるへし

後拾
いかにてをくるあしたに云を昨日をこそとけふを今年と

女御たちのおほむつほねに候ける時の御佛名のまた
の夜まいりたるに人々あつまりいてとくまいれと
せむれは何とならんとおもふに。けつり花を庭にさ
したりけるに雪のかかりたるよめとなりけり。こゝ
ろもえす。

としつまは誰かは雲を拂ひあへむ菊の上ともしはし社みめ

きのふつかひしとくさ(未題)のおちて露のかかりたり

けるをあしたに人のとりあけたりければ

信濃野のとくさ（におけるしらつゆは）のうへに置露のみかける玉と見えにける哉

雨のふりけるよのよひに月のいるをみてよめる

大空にちりにしはなや匂ふらん雲のはるともみゆるよひ哉

竹のある所にて風のふくにいみしうさゝめきければ

風ふけは浪やはさく河竹のなかるゝ水にこゑのかよへる

十月に女院（東三條）御はかう有てきくあはせさはきけ

れは

神無月ほとけの限りあらはるゝ庭のまもなく花をふりける

いつのまに法に移るふ菊なれや過し物ともみえぬけふ哉

覺束ななにききつ覽もみちに霧のかくせる山のふもとに

君しあればなみ木の花もたのまれすいたくな吹そ木枯の風

いとあまたあれと。かゝれはとめつ。

源宰相右兵衛督にはかにをみにめされてそのあをす

りを朝のまにせめられてやまゐをかさぬるに氷のつ

きたれば

かきりなくとくとはすれと足引の山井の水は猶そこほれる

といふかの御うへのかくなむとあれは

足曳の山井に氷る水といへはとくとも袖のほとそしらるゝ

人のもとにきける人の三年はかりさらにみえさりけ

るをこむとてあすは明はてくるまはるてといひた

りければあやしうひさしき事と思へと人をやりてそ

ひてといはせたりけるをつとらへてうちにもえい

らてみしていとねたかりければおとこ藤大納言（朝さ）

とか

岩橋拾のよるの契りもたえぬへしあくる侘しきかつらきの神

返しおとこ

秋たては見しと思ふ葛城の神のよるにてやみぬへきかな

此おなし人なをしすかたにてきてこよひは内のとの

ゐなりこれをきたれとてまきゑのさやにちんのつか

さしたるかたなをきいていぬるか三日はかりをとも

せさりけるにかたなとりてみけるにさひたりければ

女

ときをきしさやの刀もさひにけりさして久しく程やへぬ覺

とてやりたりければ

かねよはみかへる刀に身をなしてつかのまもなく戀や渡覽
おとこ心ちそこなひて四五日はかりうちへもまいら

てありけることゝいひてありける書に

かくてもやきえんと思ふ白露のおきゐて結ぶ水くきをみよ
をんな

露によりくるゝ影まつ草のはにかゝる折しも消ぬと云へき

これを見て。みかなんなきしといひけるこそ。そら
となれ。

くすたまを女のかりやるとおとこにかはりて

沼とに袖をぬれぬるあやめ草心にゝたるねをもとむとて

返し女

くるしきになにもとむ覽あやめ草淺かの沼におふと社きけ

みのゝかみよりみつ妻なくなしてのころ霜のいみし

きあしたに人

此頃後拾の夜半のねさめは思ひやるいかなるをし霜はらはんはらふ覽

返し

冬の夜の霜打拂ひなくとはつかはぬをしのわさにそ有ける

これなかのあそむやまひにわつらひてみかはのしほ
ちをよひに宮權大しんむねまさをやりていはせける

に更にきゝいれさりけるをしひていひければすこし
よろしきをたのみにてあかつきにといひてねぬるに

よなかはかりにおき出手あらひかねうちて佛にもの
まうすをとしければさやゝとおもふにをともせず

なりにけりてしをおこしていつちかおはしぬるそと
てもとむれとなく成にけりあさましようてかきをきて

にけにけり

後拾
ななきよの道やみにまるとへる我をきて行くもかくれぬる夜そのはの月かけ集哉

入道の返しあしたにそありける

重なれるみ山かくれに住人は月をおしへんあふきたになし

二條のみきのおとゝ翁八月はかりにまいりたまふ
てうたひとつよませて給はらんとうへにせめ聞え給

へはせむかたなくて草の葉の上にとありし御かへり
はこれなり

露ふかき草葉のうへもいひかたみ何につけてか秋をとふ覽

秋の夜の草は上の露の身をそれにつけてもかたりをか南

かくいひこめられぬとていて給ぬ。

せんえう殿の御つほねよりみそきのひかつらにあふ

ひをかけてうへにまいらせ給へるおろしをたまはせ

たるに

瑞籬のあたりになれぬきねよりも神にいちしるし今は挿さし

返しわすれにけり

また五月五日さうふのねを鶯につくりて梅のえたに

すへ給へる

新古
梅かえにとりたかへたる時鳥聲のあやめも誰かわくへき

かへし

なのりせて梢にこすは郭公はるかけてこし鳥とかやみむ

すみやう經よませんとかやそありし。

宮にすりの藏人とてさふらひし人の大はん所にひと
り有けるをそれとらへよとゆきよりにおほせられけ

れはとらへて更にゆるさてふしぬるを夜ひとよいと
をしと思ひふしておきていく程にいひける

なかくれよ朝ねの髪の手よむすふ契とみれば悲しかりけり
返し

ゆきより

長かれといはすは長くあらしとやあやなく君かめにはみゆ覽

うへとのゐとておまへにちかく候人ゝあやしきくれ
のまくらをおとして出たるにあか付たるを人ゝ彼殿
上にやりたり

後拾

道しはやおとろのかみにならされてつもれるか社草枕なれ

さふらはさりし人ゝはいみしうわらふに。あるたゆ
ふのうへにをきたりければ。とのあせしはからかり
て。返しはまくらさためすと見えしや。

殿上にすみもてくるおとこをそくまいりたりとて
その時に候しくらいいまはうへにまいりしよその人
のとらへてかみになはをゆひつけてゆるさゝりしか
はものよりのそかせたまうてこはたかゝらせ給ふか
ともこりはへるへくとてゆるさゝりしかはねうはう
かたより

大原やすみのかしらのなはゆるせこのめに涙浮ふといふ也
といはせたりしかは。ゆるしてけり。われには思ひ
ましたり。とおほせられしこそ。

人のもとにまかりたりけるおとこの見侍けるをしら
てほかけにこ侍従といふ人のさし出て人に物いひけ
るおとこ

みつのえのあまにとはちや白波のよる光るてふ玉もかくやと
いかにいはんなどいひけるにねたりけるねことに
今つけむあまのみるめの恥かしく袖にとまらぬ玉もちり劔

宮さくのとまり。

たうのみねにあるたいとこ天徳のさりゑ金利息のか
うろにいれむとてはい花ほう(梅花)さふらふなるし

はし給はらんと申たりければ

春風にちりはてにけん梅花たゝかはかりそ枝にのこれる

中將の命ふにむまのないしの八月はかりにいひやる
見そめけるとも秋とか

枝しけみしたにもみつる萩のはな秋しりそむる人や戀しき
返し

色またてすゑにし消ゆる雪ならはつるに錦は見てややまし

えあはぬ人にいはいはむとておとこのいふ

けふはわかきえはてなまし中ノに後を頼まむ命しらぬに
殿上人かつらより舟にてわたるにほしのかけのみえ
ければゑものかみきんたうのきみ

みなそこにうつれるほしのかけみれば

さねかた

あまの戸わたるこゝちこそすれ

をくらの森のおほつかなきにかへしたれそや

ねたきわかをくらの里にやとりして紅葉の色をよそに聞哉

はつ雪のあしたにむかしを思ひいてゝ

めつらしといふ入れれとも初雪の昔ふりにしけふを戀しき

さねかた

ふりぬ共きえせぬ物にあらませは袖はぬれしなけふの初雪

みちのふの君人のもとにおはしてあしたに

露よりもはかなかりける心かなけき我なにしておきてきつ覽

かゝる人ゝもおはせぬを思ふに。いとかなしくてか

きもやらす。

おなし人ふくぬきたまひし

かきりあればけふぬきすてつ藤衣涙のはてそ知れさりける

またみちのふの君さねかたの君に三月中のほと
散のこる花はあるやとうちむれてみ山かくれに尋てしかな
かへし

また散ぬ花もあると尋みむあなかしはし風にしらすな
ためよりみちのくにのかみにてくたる日三條のおほ
きおほいと(和歌)のせんし給に

武隈の松をみつゝやなくさめむ君か千歳のかけにならひに
正暦五年のほとはいみしう人しぬそのころもくのく
ら人さとより

をきもあへす儂き空の露をいかて貫きとめん玉のをも哉
返し

玉のをも片糸なるはかひもなしたゆれは露もとまらさり覺

また門宮

草のはにあらぬよなれとともすれは露は我みの上かとをみる
かへし

をのかまたきえぬに消る比なれば露こそ人を露とみるらめ
これはみな人のあふきにあなり。此かへり宮の御
今はさはとまるへきよの玉ならす白き蓮の露をみかゝむ

かんけゆのそうにてありし むらよ

常よりも常なき比の露のみをいかにいひてか日を暮さん
かくいひし人のなくなりにか(は勝勢)

見る程もなくて消ぬる露よりも誰か此世につゆにとまらん
ひい

宮の御もとゆひよりてまいり給ふもはたゆふとのな
んつかうまつり給しをきたのかたうせ給うていみは
てゝの程にめしたるにつかうまつりをくとなむみ侍
をさし今もとめて参らんと聞えをき給て三四日あり

て物の中より侍けるを見たまふるにも哀なるとおほ
くなときこえ給へるに

ほしわふる袖のなかにや有つ覽之をを玉のをにはよらまし
御返し

玉のをゝ君かためにとよりをきて衣のうらを見すを成にし
みやに宮の御いかの事ためたふの君つかうまつり給
にまつのみいりたるををのかたにつくりてありしと
ときわはきいかて長閑き物はあめの下ちよまつ枝の陰にさりける
そのかへしをおほせことにて

誰にかはこゝらの年を算へこん松の一はを千世とをきつゝ
東三條の院にわたらせ給ていけのうき草とものむつ
かしけなるはらはせ給ていとおかしけれは

後拾

君すめはにこれる池もなかり水集覺みきはのたつも心してゐよ

女のもとに物をたにいはいはむとてきたりける人あした
に

消かへり有かなきかの我身かなうらみてかへる道しはの露
かへし

あはれとも草はの露やとはれまし道の空にて消なましかは
おなし人

ひたふるにしなは中々さもあらはあれ生てかひなき物思身は
返し

なくなればなけの哀もいはるゝをさは心みに憶れねたま
かへし

身のうきにはひふす芦のかりにても頼む計のものはそなき
おとこ松を結ひて

染かへしいくしほへてか磯のかみおふる松はを結びをく哉
かへし

いそのへはむすひもしてん高砂の松にはをよふ人やなか覽
おなし人をむなのもとにきてかとをたゞきけるにあ
けさりければかへりてあしたにうらみたりければ
をんな

尋ぬへき人も覚えぬ我かとのよるはむくらのね社さすらめ
返し おとこ

草葉たに心有らしやへむくらいる人わきてねやのとさせは
といひてきたるになをかたければ

此世にはつきしもはてし思ふと命ののちはいつかたゆへき
かへしなるへし

我しなはいつこをはかと尋てか此世につきぬともかたらむ
おなし人つねにいへはいまなといふかときまになり
ぬへしときゝて

我やあけしうら鳥のこか玉くしけ結ひし袖の空にみえねは
返し

玉くしけ袖から雲のたちしより空の眺めをからぬ日をなき
かへし

空に社つらきかすかけかはしきの百はかきには過やしぬ覽
扇のぬひ物したるをもたせ給てこれ見よとおほせら
れて給はせたるに郭公のうの花くひていくかたあり
たくにやはとて

垣ねいつるたよりにうつる卯花を惜むと聲はたてぬ成へし
これをさねかたに給はせたれば

郭公なくにしちらは卯花のかきねなからそきくへかりける

住吉にこ大將殿のまうて給けるにゆふひの入ほとに
空いと心ほそうて松のしたに涙のよするをみちのく
のかみためなか

松みればこかれぬ物を住のえのいかなる涙かしつ心なき
三條の中納言殿にありし大夫君くものすに花をふき
かけたるを見て

笹蟹のくものをはたはうすけれと散くる花はもらさゝり晝
さねかたの中將人のかりやらんとてためたうの君に
かくいはむはいかゝといひける哥

い^詞かてかは思ひ有とは報すへきむろのやしめの煙ならては

おかしなといひて。ためたうの君わかけさうする人
のかりやりてけり。女もきゝてわらふ程にわたりけ
れば。をむな。

此ころはむろのやしまもぬすまれて

といひければ

えこそはいねおもひなからに

かねもりかおほ井にてよめりし

大井河そま山風のさむけくにいはうつ波を雪かとそ見る
^{新拾}

おなし人大監物なりし時ないし所にみかきまうしに
^{き集}

おほとねりのひきいてにきたりにある人内侍のすけ
のしるやうありてそこに有けるおりなりければまへ
にありけるたちふといふうりをきなるしきしにつゝ
みておほとねりなりけるおきなにとらせたりければ
くらつかさにつきてそこよりいふ

山しろのとはにかよひてみてし哉うり作りける人の垣根を
かへし

とことはゆけは成覺うり作りそのもなきにたてりしや君
又の目つかさめしにするかの守になりてよろこひ申
にまいりて袖よりおとしをきたりしはいとこそ
うりつくるそのふもしらす人しれすおつる涙やそほつ成覺

いとからくとそありし。

たなはたのあしたに春宮にてひむかしにたちはきの
むきのありしかたにひきたるいとにくものすをかき
ければゆきよりにしかけくとなむおとりたてると
おほせられしかは

簞

壁のもろてにいそく七夕の雲のころもは風やとくらむ
とありしをさねかたの君にかたり給ふゆりしかはた
ちなから

彦星の

くへき背とやさゝかにの雲のいかきもかけてみえ劔
藤大納言少將にておはせし程に。女御御方七夕まつ

りしたるところにきて。ものいはむとありしかは。
すのもとにてなにかといひておはしにけるをそれよ
り給へりけりと人きき給へりけりとて。あしたに
よるつのちかこと文にかきてみせよとおほしくてあ

千載

七夕にかしつと思ふあふをそのよなき名の立にける哉
あるやむことなき人のもとに忍ひて十年はかりかよ
ふ程に。こよひかくてといひたりけるを。まらうと

おほくてあそひしなとして。えさらさりければ。又
の日そのをいひて。こよひは命にあらは。かな
らすとあるに

女

後撰

おしからぬ命は我もゆつりてむたのむるを誰にみせまし
おなし人そのよ物たにいひあへてとそいひし

終夜ひちあかしつる衣手の今朝もかはらぬ程をしら南
とあればかへし

よそなりし袖もやひちしむへこそはこゝに涙の止らさり覺
おやの思ひにてれいくる所にえこさりける人この程
にありきしたらはとちかひけるを。うけひかさりけ

れは。つとめて人わりなくといひて
わりなしやそらとにより誓ひせはけふ迄あらん物とやは思
とあれば

誓ひてもありとたのめはたまさかに神の外なる程にも有劔
世中はかなきころせんさいの露を見て

植てみる草はそよをはしらせけるをきてはさゆるけの朝露
ゐなかへやるふみのあけところに

天河うき木にのれる我ならば君かあたりに今はきなまし
心さしふかゝらぬおとこの花そめのかりきぬせさす
るやるとて

人こゝろうす花染のかり衣さてたにあらて色やかはらん
ちいさきうりのきなるをおなし色のかみにつゝみて
あきみつの少將のかりやるをきゝたかへてよりひら
にとらせたれば

雲のたつりふの里の女郎花くちなし色はくひそわつらふ
こゝろときめきしていひたりしかひなければかへし
もせてとりかへしてはしめの人のかりやるとてわれ
かとないひそといひければ

あり所こまかにいつらしら瓜のつらを尋ねて我ならさなん

左近のきみにとのたまへりしかはわれとしられにけり
とねたくて

瓜ところこにはあらし山城のこまかにしらぬ人な尋ねそ

五月五日

諸共に逢みぬ沼のねをひけは忘れやしにしなかつらぬなか
雨ふるとてこぬ人のふらぬにも見えねは

ふらぬ夜の心をしらておほ空の雨をつらしと思ひけるかな

おなし人いみしうわつらひてけふはしぬへしなたの
みそとのたまへりしかは

君によりくれまつ草にをく露のかゝらん程をいかゝ頼まぬ

ふみをこする人かへりをもせぬいみしう恨みてこた
みはかりといひければことにて

ふみなみそわたしもはてぬ岩橋そ中ゝ道の空にわひなん

ひたちのかみなりよりかかれ侍しころ

あた人のかりにとひ來我宿に今はむくらのねこそはふらめ

おなし人のきたりけるにとも人のありしかはけはひを
えていみしうゝらみ侍しかはつとめてこれより

恨む覺心はまたやとけさらむをきつる霜のけさのさむさに
また人に

殊更にうらむともなし此比のね覺はかりはしらせてしかな
宮にてゆみいさせ給にくらうなるに人めすにをそけ

れは

待ほとにひさしかりけり行すゑのまた遠ければ武隈の松

さねかたの君おやにをくれてなけくときく比

そこはふち淵はせならぬ涙川袖のわたりはあらしと思ふ

うりのあをきなるををしのかへりみむきたるよしを
これはいかゝいふへきとあしてにかきてまいらせたり
つれば宮より

うりふの、澤にすみぬるをし鳥の雲ゐにかよふ心あるらし
返し

心をし雲ゐとしめは葦田鶴のよはひとのみは思はさらまし

おほむいしなとりのいしをつゝませ給けるに三十一
有つればひとつにひともしをかきてまいらせける

苔むさは拾ひもかへんさゝれ石の數にみなとるちよは幾つそ

七月七日大入道(兼家)との、御いみなる程にすゝきに
ひきたるいとを

世中に包まぬ年の秋ならはおかしからましけふのなぬかも

ふみなとをこせける人のもののにきてほともなくか
へりきたれば

たゝ今そきつると思ふ袖のうへの裏うへもなく成にける哉
かへし

大空のたひの空なる濡衣をたかもとゝてかかたへきつらむ

九月はかりに同じ男に

花薄はしに出に覺わいかて人にしられてむすふわきせん
返し

結ふともくともいそく花薄またきほに出て人にしらすな

又かへし

ほに出てたゝにもあらし花薄風のよするをいとはさらなん

しらぬとあるかへり事に

頼めとや頼まれしとや定なきいのちにかゝる心といふらむ

又このころものへゆくとして

わかれ行かたしの道にをく霜のきえむ雫に袖やぬれなん

かへし

かりすてゝゆきなん後の衣手は君ひとりしもぬれしと思

又

おとこ

むすふてはとになるとも花薄とくるまてたに忘れさらなむ

かへし

花薄くもてに人に結はれていつかとくると待そはかなき

くにより

おとこ

霜枯におきてこしよりひとりねの袖のさむさのまさり行哉

返し

霜かれのわひしきとは思へともをきては露の草はならぬに

おとこ

そらとゝいふへけれ共神無月思ひいてつゝかつはしらるゝ

おとこ

つねよりも戀しくなりて神無月たえすも袖のうるふなる哉

ひさしうなりてきたりいりみちにちりありとをんな

いへは

我ならぬ人も起きふす處にはちりのみゐると云そあやしき

かへし

ちりならて又ゐる人もなき物を殊になき名もたつそ侘しき

十月におまへの菊いみしうつろひたるをみて

誰かゝく錦はかけし神な月はたをる虫のこゑもたえにき

子目おとこ女のもとにいひたりけるうたはおほえす

女かへし

のへなからちきりしを待ならはつらき心も猶やたのます

つゝみの大宮にものきこえけるに四月に郭公の聲を

ふたりながら聞たりける程におろかになり給にけれ
はきこえけり

初聲をふしてやきゝしほとゝきす聞にたかはぬ心ち社すれ

春宮にてなすひのゆゝしけなるにはかたのつきたる

を見て

くひ處みれはうねなるおい茄子うへたる人のくへる成へし

ためよりかいひける

人しれぬ心のまゝにひろひけるかひなか覽と思ひけむやは

返し

鶯花戀下

君かかく忘れかひこそひろひけれうらなき物はわか心哉

霜さゆる二見の浦のをしのうへを君より外に誰かはらはむ

せえう殿の人ゝさくらうたのもとにすゑつけたる

ちらて千とせをすくさましかは

とそありける職上人ゝのつけゝる

おしむあまりめやなれなましさくら花

をし鳥をこにいれてをこせたるに

人よれと今はたちけもなき鳥のこに籠れるや何のうたかひ

なてしこを人のかりやるとて五月五日くすたまにつ

けゝる

なてしこのけふ引そふる菖蒲草さはの物とは思はさらなむ

雪のふかきかをたさふやとはかりいひてかへりたる

に

ゆきすりにあと尋ぬれは消えに覺いつから越の方にか有劔

うちにまいるにさねかたの中將月こそいとあかけれ

とのたまひしかは

雲の上にさそはさりせは久方の身にそふ影もをくらさらまし

清少納言集

詞書蠹欠

一本とはくやぶれてみえずと本にてかくべし

その葉は露もるへくもなかりしを風に散かふ花をきく哉
返し

春も秋もしらぬときは山川は花吹風を音にこそきけ
きくことある人たひくくれとも物もいはてのみ人
をはうらみていか計契し物かとかくしもうきとさう
らみたる返しに

身をしらて誰かは人を恨みまし吹きて辛きつらさなるをは
おなし人にあひてゑする事ありていみしくちかこと
をたてゝさらに物いはしといひにやりてまたのつと
めてこれよりも

我ながら我心をもしらすしてまたはあはしといひてける哉
せんたてゑしたるふはこみせたりといひしけにたえ
ての後をこせたる

けふまでもあるかあやしき忘れし日こそ命の限なりしか
清水にこもりたりしに大殿の上(倫子)のおし所からい
ひをこせ給へりし

おもひきや山のあなたに君をきて獨都の月をみんとは
ひとたうひたりときくをいみしくあらかふに人しり
ていひのゝしりて夜ことなんゆくとさゝて

濡衣とちかひし程に現はれてあまたかさぬる夜ともきく哉
めのをとゝにすむときく比くらつかさのつかひにて
まつりの日たつともろともにのりて物みるとさゝて

あしたつの雲井のなかにまじりなはなといひてうせ
たる人あはれにおもほゆるころなかうた

ひさかたの 小町集 ぞらにたなひく うき雲の うける我身は
つゆくさの 露のいのちも たまきえて おもふ事のみ
もろこすけ しけさそまさる あらたまの ゆくとし月の

はるの日の はイ 花のにほひも なつの日の もイ このしたかけも
秋のよの 月のひかりも ふゆのよの 時雨のをとも
よの中に こひもわかれす うきことは つらきもしらぬ

わか身こそ 心にしてみて 袖のうらの ひるときもなく
あはれなれ かくのみつねに おもひつゝ いきの松はら
いきたるよ なからのほしの なからへて せにゐるたつの

なきわたり いつかうき世の みくさみの 我身にかけて
かけはなれ つかこひしき 雲のうへの 人とあひみて
このよには おもふとなき 身とはなるへき

宵々の夢の 小町集 たましひあしたかくありかてまたむとふらひにこよ
みるめ刈あまのゆきゝのみなとちに勿來の關も我はすへぬに
たいこの御時にひてりのしければあまこひのうたよ
むへきせんしありて

千早振神も見まさはたちさはき天のと河のひくちあけたへ
やり水にさくらの花のなかるゝを見て

同 瀧の水木の下ちかく流れすはうたかた花をありとみましや

とさらにうらむともなし此比のね覺はかりをしらせてし哉
ちるを社あはれとみしか梅花はなやことしは人をしのはむ
右小大君集以古寫卅六人集掇合畢

又の日

いつかたのかきしと神の定めけむかけかはしたる中の葵をかたらふ人のあさてはかりかならずこんといひし日もみえず久しくなりておほつかなく成にければ御心のつらさにならひにけるなにとかはといひたる返事に

よしさらはつらさは我に習ひ疊頼めてこぬは誰かをしへし宮のあはた殿におはします比さねかたの中將まいり給ひて大かたに物なとの給ふにさしよりてわすれ給ひにけりなといへといらへもせて立てにける則いひをくり給へる

後拾

上集

忘れすやまたわすれすよかはらやの下たく烟下むせひつゝ

かへし

實方集

しつゝの

賤のをは下たく烟つれなくてたえさりけるもなによりそも

人ゆいまゑにやまとへなんゆくといひたるにこゝ乍程ふるたにも有物をいとゝとをちの里なきかせそ

くらまにまうてゝかへりて

戀しさに

また夜をこめて出ぬれば尋てきぬるくらま山かな

住吉にまうてゝいとゝく歸りてきなんそのほとゆめ

わすれ給ふなといひたるに

標吉

いつかたか茂りまさと忘れ草よし住吉になからへてみよ

いくとせもゆめゝ忘れ給ふなといひをきてよつきといふにかへりきてくれ竹につけてをこせたりけれ

は

忘るなよゝと云ひしは吳竹の節を隔つるかすにそ有ける

はるかつらの枝のもえたるにさして

花もみなしけき梢に成にけるなとか我身のなるかたもなき

返し

契てししけき梢のほともなくうらみときにはいかゝなる覽のりかたなりくまのにまうつとてそのほとにはきなむといひしか歸りたるとはきけとをともせてきたる(可)とはきゝたりやとあるに

いつしかとまつの梢ははるかにて空にあらしの風を社まて

おもひいつやこゝには十廿となん思ひいつるとある

に

そのなにを思ひける社悔しけれかすしる計りくやしき物を

ほたいといふ所にせ經きくとて人のもとよりとくか

へりねおほつかなきにとあるに

もとめてもかゝる蓮の露を置いて浮世にまたはなにか歸らん

すはうを人のとりたるをえさせよといへは

しらせはや衣のうらにあるよりは泪の玉の袖にかゝるを

おなし人みなつきはかりにはきの青き下葉のたはみ

たるを折て

これのみようへはつれなき夏萩草イのしたはこく社思ひ亂るれ

女のなにふみともあらていふをみんといへはをこす

とて

名取河かゝるうきせをふみわけは浅し深しはいひも社すれ

かたらふ人のいもうとのこのすかゝるならましかは

おもはさらましといひたりしに

わたの原そのかは浅く成ぬともけに白浪やよせぬとをみよ

人のもとにはしめてつかはす

たよりある風もやふくと松しまによせて久しきあまの釣舟
のかるれと同しうき世のなかなれはいつくも何か住吉の里

四きの御さうしにおはしまし、比うへの右京命ふよ

みのほとにまいりて女房たちの中に

とゝめをきし玉しゐいかゝ成ぬ覽心ありとはみゑぬ物から

いしはしある所にて段上人ともの物いひけるまへを

入道この中將なりのふの許に君のわたり給ひけるを

入道この中將なりのふはきんたちのねすならて此い

しはしに哥よみかけ給へとせめられけれども

よるのまにいしはしはかりねてゆかん

といひかけてたてまつりけるに久しかりければすた

れのうちを君たちををしゝといひければあなかま

たまへとみつねものおもえすといひつゝ猶久しかり

ければこの中將まちやすらふほとにおまへにめしあ

りとてとのもりつかさのきたれは

くさのまくらに露はをくとも

といひすてゝいりにけるを。みな人も中將もあやし

とおもひければ。こや人につたへかたりけん。いと

なんまゝにや。

みのゝ五せちいたさせ給ひしとしたつの日のゆふさ

り女房もわらはもをしなへてあをすりのもからきぬ

に山あゐしてゑかきてあかひもなとをむすひかけた

れは殿上の人ゝなと珍しかりてをみの女房とつけ

てたましりたり人よりも頭中將よりいしけさうし

給ふ右兵衛なとかたぬきひきつくろひなとするに

ひもとくれは

千載

足引の山の水はのこほれるをいかでかひものとするなる覽

といふいらへはそれやなといひゆりてとみにもいは

ねはさばかりのはかなきとをほくすへきにもあらず

またとをくるたらん人のさしをよひていふへきにも

あらねはおもひわつらひてかたはらなる辨のおもと

に

千載

うはこほりあはに結へる紐なれはかき日影にゆるふ成へし

右清少納言集以屋代弘賢藏本書寫以一本校合畢

はかり集

紫式部集

はやうより童友たちなりし人に年比へて行あひたる
かほのかにて十月十日のほと月にきほひて歸にけれ
は

新古
めくりあひてみしやそれ共わかぬ間に雲隠にし夜半の月影

その人遠き所へ行なりけり秋のはつる日きたる曉に
むしのこゑあはれなり

千載
なきよはるまかきの虫もとめかたき秋の別やかなしかる覽

さうのとしはしといひたりける人まいりて御手より
えんとある返事に

千載
露しけき蓬もと集中の虫のねを臆けにてや人のたつねん

かたゝかへにわたりたる人のなまおほくしきとあ
りて歸りにけるつとめて朝かほの花をやるとて

稻拾
おほつかなそれかあらぬか明暮の空おはれする朝かほの花

かへし手を見わかさぬるにや有けん

同
何れそと色わくほとに朝顔の有かなきかになるそかなしき

つくしへ行人のむすめの

西の海を思ひやりつゝ月みればたゝになかるゝ比にも有哉
返し

西へ行月のたよりに玉つさのかきたえめやは雲のかよひち

はるかなる所にゆきやせんゆかすやとおもひわつら
ふ人の山さより紅葉を折てをこせたる

露ふかきおく山里のもみちはにかよへる袖の色を見せはや

返し

嵐ふく遠山さとのもみちはゝ露もとまらんとのかたさよ

又その人の

もみちはをさそふ嵐ははやけれとこの下ならてゆく心かは

ものおもひ煩ふ人のうれへたる返事に霜月はかり

霜水玉露とちたる比の水くきはえもかきやらぬ心ちのみして

返し

ゆかすとも猶かきつめよ霜水水の上にて思ひなさん

賀茂にまうてたるに子規なかんといふ明ほのにかた

杜鵑聲まづほととはかたをかの杜のしづくにたちやぬれまし

やよひの一日かはらに出たるにかたはらなる車に法

師のかみをかうふりにてはかせたちをるをにくみて

はらへとの神の飾の御手座にうたてもまかふみゝはさみ哉

あねなりし人なくなり又人のをとゝうしなひたるか

かたみに行あひてなきかかはりに思ひかはさんとい

ひけり文の上にあねきみとかき中のきみと書かよは

しけるかをわかしく遠き所へ行別るゝによそなから

別おしみて

新古
北へ行かりの翅にことつてよ雲のうはかきかきたえすして

返しは西のうみの人なり

ゆき巡り誰も都にかへる山いつはたとさくほとと遙けさ

津の國といふ所よりをこせたりける

難波難波かたむれたる鳥の諸共にたちゐるものと思はましかは
かへし

つくしのひせんといふ所より文をこせたるをいとは
るかなる所にてみけりその返事に

^{新下}あひみんと思ふ心はまつらなるかゝみの神やそらにかけて集しる覽

かへし又のとしもてきたる

行巡り逢をまつらのかゝみには誰をかけつゝ祈るとかしる
あふみの水うみにてみおかさきといふ所にあみひく
をみて

みむの海に綱引民のひまもなくたちるにつけて都戀しも

いそのはまに鶴の聲／＼になくを

いそかくれ同し心にたつそなくなかおもひ出る人は誰そも
夕立しぬへしとて空のくもりてひらめくに

^{新古}かさ曇りゆふたつ浜のあらければうきたる舟そしつ心なき

しほつ山といふみちのいとしけきをしつのおのあや
しきさまともして猶からきみちなりやといふをきゝ
て

^{新古}しりぬ覽ゆきゝにならす鹽津山世にふる道はからきものと

水うみにおいつしまといふすさきにむかひてわらは
へのうらといふ入うみのおかしきをくちすさみに

おいつしま島もる神やいさむ覽波もさはかぬわらはへの浦

こよみにはつ雪ふるとかきたる目目に近きひのゝた
けといふ山の雪いとふかうみやらるれば

こゝにかくひのゝ杉むら埋む雪をしほの松にけふやまかへる
返し

あしほ山松のうは葉にけふやさはみねのうす雪花とみゆ覽

ふりつみていとむつかしき雪をかきすてゝ山のやう
にしなしたるに人ゝのほりて猶これ出てみたまへと
いへは

古里に歸る山ちのそれならばこゝろやゆふと雪も見てまし
としかへりてからひとみにゆかんといひける人の春
はとくるものといかてしらせたてまつらんといひた
るに

春なれと白ねのみ雪いや積りとくへきほとのことなき哉

あふみのかみのむすめにイナシけさうすときく人の
ふたこゝろなしなとつねにいひわたりければうるさ
くて

水海に友呼千鳥ことならばやすのみなとをこゑたえなせそ

うたゑにあまのしほやくかたをかきてこりつみたる
なけきのもとにかきて返しやる

^{新下}四方の海に鹽焼あまの心からやくとはかゝる歎きをやつむ

ふみのうへに朱といふ物をつふ／＼とそゝきかけて
なみたの色をとかさたる人のかへしに

^{新古}くれなるの涙にいと／＼とまるとつる心の色とみゆれば

もとより人のむすめを得たる人なりけり文ちらしけ
りときゝてありし文ともとりあつめてをこせすは返

事かゝしとはにてのまいひやりければみなをこ
すといみしくえんしたりければ正月十日はかりの
となり

とちたりし上のうすらひとけ乍さはたえねとや山の下水

すかされていとくろうなりたるにをこせたる

東風にとくる計をそこみゆるいしまの水はたえはたえなむ

今は物もきこえしとはらちたれはわらひて返し
いひたえはさ社はたえめなにかそのみはらの池を堤しもせる
夜中はかりに又

たけからぬ人かす波はわき返り三原の池にたてとかひなし
櫻をかめにさして見るにとりもあへすちりければ桃
の花をみやりて

わりて見はちかまさりせよ桃の花思ひくまなき櫻おしまし
返し人

桃といふ名もある物を時の間にちる櫻にも思ひおとさし
花の散ころ梨の花といふも櫻も夕くれの風のさはき
にいつれと見えぬ色なるを

花といは、何れか匂なしとみん散まかふふ色の異ならなくに
とをき所へゆきにし人のなくなりけるをわやはら
からなとかへりきてかなしき事いひたるに

何方千載の雲もとときはたつねましつらはなれ劔かりの行を
こそよりうすにひなる人に女院かくれさせ給へる
存た無いとうかすみたる夕暮に人のさしをかせたる

雲の上も物思ふ存はすみ染にかすむをさへあはれなる哉
返し

新千
なにかこのほとなき袖を濡す覽かすみの衣なへてきる世に
なくなりにし人のむすめのおやの手にてかきつけた
りける物を見ていひたりし

夕暮にみし方かれし鶯の子のあとを見る／＼まとはるゝ哉
おなし人あれたるやとのさくらのおもしろき事とて
折てをこせたるに

散花をなけきし人は木のもとの淋しきとやかねてしりけむ
思ひたえせぬと。なき人のいひける事を。おもひ出
たるなり

ゑにものゝけつきたる女のみゑ無なむき形かきたる
うしろにおにゝなりたるもとの女を小法師のしはり
たる形かきておとこは経よみてものゝけ責めたる所
をみて

なき人にかををかけてわつらふも己か心の鬼にやはあらん
返し

とほりや君か心のやみなれはおにのかけとはしるくみゆ覽
ゑに梅の花みるとて女をつま戸おしあけて二三人あ
たるに皆人ゝねたるけしきかいたるにいとさたすき
たるおとこのつらつえついてなかつたるかたある所

春の夜のみまよひに色ならぬ心に花の香をそしめつる
おなしゑに嵯峨野に花みる女車ありなれたるわらは
の萩の花にたちよりておりとる所

玉葉
棹鹿のしかならはせる萩なれや立寄からにをのれおれふす
世のはかなきとをなけくころ陸奥の名ある所くかい
たるをみてしはかまの浦

新古
見し人のけふりとなりし夕より名もむつまじき鹽竈のうら
かとたゝきわつらひてかへりにける人のつとめて
よと共にあらき風吹く西の海も磯へに波はよせすとやみし

増拾
かへりては思ひしりぬや岩かとうきてよりけるさし仇波
年かへりてかとはあきぬやといひたるに

すま

たかきとのほるのたよりに驚の霞にとつるやとをとふらん
世中のさはかしきころあさかほを人のもとへやると

玉華

さえぬ間の身をはしる／＼朝顔の露とあらそふ世を歎く哉
世をつねなしなとおもふ人のをさなき人のなやみけ
るにから竹といふものかめにさしたる女はうのいの
りけるをみて

若竹の老ゆくするをいのる哉この世をうしといふ物から
身をおもはすなるとなけく事のやう／＼なめのめにひ

たふるのさまなるを思ひける

数ならぬ心に身をは任せねと身にしたかふはこゝろなり覺
心たにいかなる身にかかならん思ひしれ共思ひしられす
はしめて内わたりをみるにもものゝあはれなれば

身のうさは心のうちにしたひきていまこゝのへに思亂るゝ
うきを思みたれて青柳のいとひさしくもなりける哉
返し

つれ／＼となかき春日は青柳のいとゝうき世に亂れてを降
いかばかりおもひそしぬへき身をいといたうすめ
くかなといひける人をきゝて

續古

すとも集

わりなしや人社人といはさめみつから身をや思すつへき
くすたまをこすとて

忍びつるねそあらはるゝ菖蒲草いはぬに朽ちてやみぬへければ

返し

けふはかくひきける物を菖蒲草みかくれにぬれ渡りつる
土御門殿にて三十詣の五卷五月五日にあたれりし

妙えやけふはさ月の五日とていつゝの巻にあへるみのりも

その夜池のかゝり火にみあかしのひかりありて書よ
りもそこまでさやかなるにさうふの香いまめかしう
にほひくれば

かゝり火のかけもさはかぬ池水に幾千代すまむのりの光そ

おほやけとにいひまきはすをむかひたまへる人は
さしもおもふ事のしたまふまじきかたちありさま
よはひのほとをいたうこゝろふかけに思ひみたれて
すめる池の底までてらす篝火のまほきまでもうき我身哉
やう／＼あけゆくほとにわたとのにきてつほねのし

たより出る水をかうらんをさへてしはしみるたれば
空のけしき春秋のかすみにもきりにもをとらぬ比ほ
ひなり小少將のすみのかうしをうちたゝきたればは
なちてをしおろしたまへりもろともにおりてな
めりたり

續後撰

影みてもうきわか涙落そひてかとかましき瀧のをとかた

返し

獨りて涙くみける水の面にうきそはるらむかけや何れと
あかうなれはいりぬなかなきねをつゝみて

新古

並て世のうきに流るゝ菖蒲草けふ迄かゝるねはいかゝみる
返し

何事とあやめはわかつて今日も猶袂にあまるね社たえせね
うちにくるななくを七八日の夕月夜に小少將のき

み

天の戸の月の通ひちさゝね共いかなるかたにたゝく水鶏そ

返し

^同横の戸もさゝてやすらふ月影に何をあかすとたゞく水鶏そ

夜ふけて戸をたゞし人つとめて

^同終夜水鶏よりけになくくそ横の戸口にたゞき侘つる

返し

^同たゞならしとはかりたく水鶏故明てはいかに悔しからまし

朝霧のおかしきほとまへの花ともいろくみにみた
れたる中にをみなへしいときかりなるを殿御らんし
て一えたおらせさせ給ひて。きてうのかみより。こ
れたゝにかへすなとて給はせたり

^{新古}女郎花さかりの色をみるからに露のわきける身社しらるれ

とかきだるをいとく

^同白露はわきてもをかしをみなへし心からにやいろのそむ覽

ひさしくをとつれぬ人をおもひいてたるおり

^{下載}忘るゝは憂世の常と思ふにも身をやる方のなきを侘ひしき

かへし

^{新古}たかさとともひもやくと郭公心のかきりまちそわひにし

みやこのかたへとてかへる山こえけるによひさかと
いふなるところのいとわりなきかけちにこしもかき
わつらふをおそろしとおもふに。さるの木の葉の中
よりいとおほくいてきたれば

ましも猶遠方人の聲かはせわれこしわふるたこのよひさか

みつうみにていふきのやまの雪いとしろくみゆる

名に高きこしの白山ゆきなれて伊吹のたけをなにと社みね

そとはのとしへたるかまるひたうれつゝ人にふまる
ゝを

心あてにあなかたしけな苦むせる佛の御顔そとはみえねと

人 けちかくてたれも心はみえにけんとはへたてぬ契ともかな

返し

へたてしとならひし程に夏衣うすき心まつしられぬる

峯さむみ岩間こほれる谷水のゆく末しもそふくなるらん

宮の御うふやいつかの夜月のひかりさへことにくま

なき水のうへのはしにかんたちめ殿よりはしめたて

まつりてゑひみたれのゝしり給ふ杯のおりにさしい

つ 珍しき光さしそふさかつきはもちなから社千代はめくらめ

又の夜月のくまなきにわか人たち舟にのりあそふを

見やるなかしまの松をさしめくる程おかしく見ゆれ

は 曇りなく千とせに澄る水の面にやとれる月の影ものとけし

^{新古}御いかの夜とのゝ哥よめとのたまはすれば

いかにいかゝ數へやるへき八千歳の餘り久敷君か御代をは

との

^{續拾}芦田鶴の齡しあらは君が代の千年の數もかそへとりてむ

たまさかに返をしたりける人後にも又もかゝさりけ

るにおとこ

^{續古}折ゝにかくとは見えて笹蟹のいかに思へはたゆるなる覽

返し九月つこもりに成にけり

霜かれの淺茅にまかふ笹蟹のいか成おりにかくとみゆ覽

なにのおりにか人の返事に

新古
いるかたは訝かなりける月影をうはの空にもまちしよは哉

返し

同
さしてゆく山の端もみなかきくもり心のそらにきえし月影

またおなしころ九月つきあかき夜

千載
おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくかれぬとも

六月はかりなてしこのはなをみて

かきねあれ淋しさまさる常夏に露をきそはん秋までは見し

物やおもふと人のとひたまへる返事九月つこもり

花すゝき葉分の露やなにゝかくかれ行野へにきえとまる覽

わつらふとある比なりけりかひぬまの池といふ所な

んある人のあやしきうたかたりするをきゝてこゝろ

みによまむといふ

世にふるになそかひ沼のいけらしと思そ沈む底はしらねと

又心ちよけにいひなさんとして

心ゆく水のけしきはけふそみるこや世にへつるかひ沼の池

侍従宰相の五節のつほね宮のおまへいとけちかきに

弘徽殿の右京かひと夜しるきさまにてありし事なと

人ゝいひ出て日かけをやるさしまきはすへきあふ

きなとそへて

後拾
おほかりしとよの宮人さしわきてしるき日影を哀とそみし

中將少將と名ある人々のおなしほそとのにすみて少

將の君をよなくあひつゝかたらふをきゝてとなり

の中將

御笠山おなしふもとをさしわきて霞にたにのへたてつる哉

返し

さしこみている事かたみゝかさ山霞ふきとくかせを社まて

紅梅を折てさよりまいらすとて

玉葉
埋れ木のしたにやつるゝ梅の花香をたに散せ雲のうへまて

卯月に八重櫻の花を内にて

後拾
こゝのへにほふを見れば櫻かりかさねてきたる春の盛か

かとぞ思ふ集
さくらの花のまつりの日まてちりのこりたるつかひ

の少將のかさしに給ふとて葉にかく

新古
神代にはありもやし劔山櫻けふのかさしにをれるためしは

む月の三か内よりいてゝふるさとのたゝしはしのほ

とにこよなうちりつもりあれまさりにけるをことい

みもしあへす

改めてけふしも物の悲しきは身のうさやまたさま變りぬる

五節のほとまいらぬをくちおしなと弁宰相の君のた

まへるに

めつらしと君し思はゝきてみらんすれる衣のほとすきぬ共

返し

さらは君やまゐの衣すきぬとも戀しきほとにきてもみえ南

人のをこせたる

うち忍ひ歎きあかせは東雲のほからかにたに夢を見ぬかな

七月ついたち比あけほのなりけり返し

玉葉
東雲の空きりわたりいつしかに秋のけしきに世はなりに覺

七日

風雅
おほかたを思へはゆかし天の河けふの逢瀬はうらやまれ覺

契し

銀河あふ瀬はよその雲井にてたえぬ契りし世々にあせすは
かとのまへよりわたるとてうちとけたらんを見むと
あるにかきつけて返しやる

玉華

等閑のたよりにとはん人とにうちとけてしもみえしと思
月見るあしたいかにいひたるにか
よこめをも夢といひしか誰なれや秋の月にもいかてかは見し

新勸

九月九日菊のわたをうへの御かたよりたまへるに
菊の露わかゆはかりに袖ふれて花の主に千代はゆつらむ
時雨する日小少將の君さにより

同

雲まなく眺むる空もかきくらしいかに忍ふるしくれるる覽
返し

同

ことはりの時雨の空は雲まあれと詠むる袖を乾く世もなき
さにてゝ大納言の君ふみたまへるついでに

同

うさねせし水の上のみ戀しくて鶺鴒のうはけにさえそ劣らぬ
返し

同

うちほらふ友なき比のね覺にはつかひし鴛そ夜半に戀しき
又いかなりしにか

なにはかり心つくしに眺めねとみしにくれぬる秋の月かな
すまの御らんする日内にて

たつきなき旅の空成すまゐをは雨もよにとふ人もあらしな
返し

いとむ人あまた聞ゆる百敷のすまゐうしとは思ひしるやは
雨ふりてその日は知らんとゝまりにける。あいな

のおほやけともや。

はつ雪ふりたる夕くれに人の

戀慥てありふるほと初雪は消ぬるかとそうたかはれぬる

返し

新告

降れはかくうさのみ増る世をしらて荒れたる庭に積る初雪
小少將の君のかき給へるうちとけ文の物のなかなる
をみつけて加賀少納言のもとに

同

暮ぬ間の身をは思はて人の世の哀れをしるそかつは悲しき
誰か世に長へてみんかきとめし跡は消せぬかたみなれとも

返し

なき人を忍ふる事もいつまでそけふの哀はあすの我身を

右紫式部集以細井嘉樹本校合畢

群書類從卷第二百七十五

和歌部百三十 家集四十八

和泉式部集 第一

春

春霞たつやをそきと山河の岩間をくゝるをときこゆなり

後拾

春日野は雪ふりつむとみしか共をひいつるものは若菜也是るのイ 堯

後拾

ひきつれてけふはねのひの松に又今千歳をそ野へに出つる

同

春はたゝ我宿にのみ梅さかはかれにし人も見にときなまし

後拾

花にのみ心をかけてをのつから人は仇なる名そたちぬへし

後拾

春の目をうらゝ傳ふあまはしそあな徒然と思ひしもせし

後拾

春の夜はい社ねられね起るつゝ守るにとまる物ならなくに

後拾

梅か香におとろかれつゝ春の夜の闇社人はあくからしけれ

後拾

あきまての命もしらす春の野の萩のふる枝をやくとやくき集 哉

人もみぬ宿に櫻をうへたればはなもてやつ身とそ成ぬる

玉華

つれゝと物思ひおれは春の日のめにたつものは霞なり堯

みにとくる人たにもなし我やとのはひりの柳したはらへ共

隠れぬもかひなかり覺春駒のあされはこものねたに残らす

後拾

河邊なる所はさらにおほかるをるてにしもさく山吹のはな

後拾

岩つゝし折もてそみるせこかきし紅をめのきぬにたれば

後拾

花は皆散り果ぬめり春深きふちたにちるないましはしみん

後拾

櫻いろにそめしころもをぬきかへてやま時鳥けふよりそ待

後拾

庭のまゝゆるゝおふる夏草をわけてはかりにこむ人も哉

後拾

夏の日をあしにあたればさしなから儚く消ゆる道芝の露

後拾

夏の夜はまきのと敲き門たゝき人たのめなるくひななり堯

後拾

山川の垣ねにみえし卯の花はみさきのさかり也けれ

後拾

かきしと誰か思はむ千早振神のまれゝゆるすあふひを

をのかみな思ひゝに神山のこのてかしはと手とにそとる

常夏におきふす露は何なれやあつれてせこかまとをなる覽 手

手に結ふ水さへぬるき夏の日はずしき風もかひなかり堯

後拾

螢火はここのした草もくらからすさ月のやみはなのみなり堯

後拾
人の身も戀にはかへつ夏虫のあらはにもゆとみえぬ計そ
詠には袖さへ濡ぬ五月雨にをりたつたこのもすそならねと
花こそあれはな橋をやとにうへて山時鳥まつそくるしき
かやり火の烟けふたきあふくまによるは暑さも覺えさり覺
聲聞はあつさそまさる蟬の羽のうすき衣は身にきたれ共
後拾
思ふ事みなつきねとて麻の葉をきりにきりても拂ひつる哉

秋

朝風にけふおとろきてかそふれは一夜のほとに秋は來に覺
ひとひたにやすみやはする七夕にかしても同じ戀社はすれ
うしと思ふ我身の秋にあらね共よろつにつけて物を悲しき
ねこしにもほらはほら南女郎花人にをくるゝ名をは殘さし
後拾
秋の田の庵にふける苔をあらみより來露のいやはねらるゝ
風ふけはいつもなひけと秋くれはことにきこゆる萩の音哉
里人の衣うつなるつちの音にあやなく我もねさめぬる哉
風聲
かりかねのきこゆるなへにみわたせばよもの梢も色付に覺
玉露
鈴虫の聲ふりたつる秋の夜はあはれにものゝなりまさる哉
白露のかけてをきたるふちはかまほころひに覺霧や立ちむ
人もかな見せんさきせむ萩の花咲ゆふかけの目くらしの聲
秋ふけはときはの山の松風もいろつく計身にそしみける
入までも詠つる哉わかせこか出るにいてしありあけの月
棹鹿の秋たちすたく萩原にこゝろのしめはいふかひもなし
まづつかきにはひくるくすを訪人はみるにかなしき秋の山里
後拾
ありとても頼むへきかは世中をしらす物はあさかほの花
新吉
頼めたる人もなければ秋の夜は月みてぬへきこゝち社せね

後拾
はれすのみものそかなしき秋霧は心の内にたつにやある覺
をちつともるもみちの色に山河の淺きも深きなかれとそみる
ともかくも散さぬわさはしてましを一夜計の紅葉也せは

冬

紅葉はこの此木のもとにあるをみて神名月とは言にさりける
しろなから露の置たるしら菊をけさ初霜に見そまかへつる
秋はてゝ今はとかるゝあさちふは人の心にとるものかな
世間になをもふる哉しくれする雲間の月のいてやと思へと
後拾
とやまなるまさきのかつら冬くれは深くも色の成にける哉
夏なさる集のせしよもきの門も霜かれてむくらの下は風もたまらず
置く霜をはらはぬ程はをしなへて鷗のうはけの衣手をする
聞の上に霜や置らむかたしけるした社いたく訝のほるなれ
宿はあれてあられしふれは白玉をしけるかもみゆる庭哉
ぬる人を起こす共なき埋火を見つゝ儂くあかすよなるゝ
冬の池のつかはぬをしはさよ中にとひたちぬへき聲聞ゆ也
天の原かきくらかりて降雪を夜めにはあかき月かとそ見る
後拾
見わたせばまきの炭焼けをぬるみ大原山の雪の村きえ
さひしにイ
わかぬれはけふりをたにもたゝしとて柴折たける冬の山里
水こほる冬たに來れはうき草のをか心とねさしかほなる
水りみな水といふ水はとちつれば冬はいつくも音なしの里
後拾
下もゆる雪間の草のめつらしくわか思ふ人にあひみてし哉
せこかきてふしゝかたはら寒き夜は我手枕を我そしてぬる
かつけ共みるめはかせもたまらねは寒きに侘る冬のあま人
新吉
數ふれば年の残りもなかり覺老ぬるはかりかなしきはなし

戀

いたつらに身をそすてつる人を思ふ心やふかき谷となる覽
つれ／＼と空をみらるゝ思ふ人あま降りこむ物ならなくに

見えもせんみもせん人を朝におきてはむかふ鏡ともかな
田子の浦によせてはよする浪のとたつやと人をみるよしも哉

よそにては戀し増れはみさこゐる磯による舟さしてたにせず
新勅 牛イ 牛イ

さもあらはあれ雲井乍も山のはに出来るるの月とたにみん
後拾

黒髪の亂れもしらすうちふせはまつかきやりし人を戀しき
夢にたに見えもやすると敷妙の枕うこきていたにねられす

おしと思ふ命に添ておそろしく戀しき人のたまかはるもの
新勅 たま

逢事を生のをにする身にし有はたゆるもいか悲しと思はぬ
逢津海に人をみるめのおいませは何れの浦の蟹とならまし

君こふる心は千々に碎くれとひとつもうせぬ物にそ有ける
後拾 後拾

かく戀はたへすしぬへしよそにみし人社をのか命なりけれ
涙川同じしみよりはなかるれと戀をけけたぬ物にそ有ける

我袖はみつの下なる石なれや人にしられてかはくまもなし
山かけにみかくれおふる山くさのやますよ人をおもふ心は

かれをきけ小夜更行は我ならてつま呼ぶ千鳥さこそ鳴なれ
世中に戀といふ色はなけれ共ふかく身にしむ物にそ有ける

いつれのみやにかおはしけむ白河院まろもろともに
おはしてかくかきていへもりにとらせておはしぬ

われか名は花ぬす人とたはたて只ひとえたはおきて歸覽
日ころみておりてさゑもんのかみ返し

山里のぬしにしられておる人は花をも名をもおしまさる

とあるふみをつけたる花のいとおもしろきをよろか
くちすさひにうちいひし

おる人のそれなるからにあちきなくみし山里の花の香をする
さゑもんのかみの返事又宮せさせ玉ふ

しられぬそかひなかりける飽さしし花にかへつる身をおしませ
また左衛もんのかみ

人しれぬ心のうちをしりぬれは花のあたりに春はすくさん
一日御ふみつけたりし花をみてまろなんさいひしと

人のかたりければかくそのたまひし
しるらめや共山里の花の香はなへての袖にうつりやはする

かへし
知られしとそこら霞のへたてしに尋ねて花の色はみてしを

また左衛もんのかみみちのくのかみのくたりしころ
それにうちそへたるをそみし

いまさらに霞のとつる白川の關をしいてはたつぬへしやは
まろかへし

行春のとめまほしきにしら河のせきをこえぬる身共なる哉
いなりまつり見しにかたはらなるくるしきさまのち

まきなとりいれてまろかくるまにとりいれしとき
むのふの少將くら人の少將いひけると聞しを一日ま

つりみるとて車のまへをすくるほとにゆふかけてと
りいれさせし

稻荷にもいはると聞しなき事をけふはたすの神に任する
かへし

何ととしらぬ人にはゆふたすきなにかたすの神にかく覽
といひたれはみてくらのやうにかみをしてかきてや

る

神懸て君はあらかふたれかさはよるへに溜る水といひける
かつさとのゝたへきみのとうをかりてなかえをかけ
たまへりしと人にはさらにとらせねともていひや
りし

と人はゆるさゝらましゆふたすきかくる車のなかえなり共

まさみちの少將なとのり給へりしそれやよみけむ

ゆふたすきかくる車のなか江社けふの葵のしるしとはみれ

雨いたうふる夜よひと夜思ひて侍るに

つれ／＼とふるやの内にあらね共おほかる雨の下を住うき

夕くれのしかのこゑ

よも山のしけきをみればかなしくて鹿なきぬへき秋の夕暮

あかつきかたにたきのおとのきこゆれば

あはれにもきこゆなる哉曉の瀧はなみたのおつるなるへし

ゑに山寺ほうしりのゐたる所にきこりとりのやのかへる

所に

すみかそと思ふも悲しくるしきをこりつゝ人の歸る山邊に

田まほる家に人ゐたる所

ともすれはひき驚かす小山田の只管いぬぬ秋の夜な／＼

八月計りにいとおもしろき雨の降日

うしと思ふ我手ふれねと凋れつゝ雨には花のをとるふる哉

あきころたふときとする所にまうてたるにむしのこ

ゑ／＼なけは

心にはひとつみのりを思へとも虫のこゑ／＼きこゆなる哉

とをくてをこなひするをとを聞て

かなしきはむなし身乍ら遙かにも佛によるのこゑをきく哉

有明の月をみて

限りあればかつ澄わたる世間に有明の月をいつまでか見ん

又十たい七月七日

としとにまつもすくすもわひしきは秋のはしめの七日也新干曉

風

ふきとたにふきたちぬれば秋風に人の心もうこきぬるかな

月

みる人も心に月はいりぬれといてといてにし空はくもらす

露

玉かとしてそれは消ぬる白露を／＼きながら社みるへかりけれ

霧

夕きりにあれたちぬればあちきなし

虫

其事といひてもなかなぬ虫の音もき／＼なしに社悲しかりけれ

雁

まもるとて山田のいはにすむ人のほになく雁の聲を聞哉

萩

萩原をあさたちくれは枝はさもおれはおれよと花咲に曉

女郎花

花よりもねそみまほしき女郎花多かる野邊をほり求めつゝ

さくいはいとそ

長月といふにてしりぬ君か代はけふして菊のとかれしと

又七月七日

天の川こよひななめぬ人そなきこひの心を知るもしらぬも

風

同花 秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむ計あはれなるらむ

くもりなきイ

雲井なる月とはみえてちりもぬ鏡に向ふこゝちこそすれ

露

葉にやとり枝にはかゝる白露をしるく咲たる花とみるかな

きり

秋霧に行衛も見えず我のれるこまさへみちの空にたちつゝ

むし

鳴虫詞花のひとつこゑにもきこえぬは心／＼にものやかなしき

かり

物おもへは雲井にみゆる雁金の耳にちかくもきこゆる哉

はき

みるもにあたら物をとおほゆるは鹿たつ野邊の萩の花哉

をみなへし

女郎花さけるさか野の野へに出ていもに心はをかれぬる哉

又イ 七月七日たなはた

羨ましけふを契れる七夕やいつともしらぬ人もある世に

風

ほりうへしかいもある戦わか宿の萩はの風を秋も知らする

月

小倉山いりにし人は秋の夜の月はなをこそきゝわたるらめ

霧

秋霧のたつ田の山にあふひとはたつたの山にゆきや過らむ

露

白玉のしけるにはとてわりつれば露に衣のすそはぬらしつ

女郎花

うしろめたかわかしめし野の女郎花花みる人に心うつるな

はき

さをしかは秋になりにつり萩の上の露くれなるにみち

むし

笹蟹のすかく糸をや秋の野に機をる虫のたてぬきにする

雁

ゆきかへりいつくも旅の雁金は長閑き折もなしとなくなり

九日

君かへむ千代の始のなかつのけふこゝぬかの菊をこそつめ

し

はりまのひしりのおもとにけちゑんのためにきこへ

吟道

暗きよりくらきみちにそいりぬへき遙にてらせ山のはの月

ものゝあはれにおほゆればものへなむまうつると聞

に

いかばかり心深くもあらぬ身もうければ谷のそこへ社ゆけ

世間はかなき事を聞て

忍ふへき人もなき身はある時にあはれ／＼といひやをかまし

いし山より歸るにとをき山の櫻をみて

都人いかにとと見えもせんこの山さくら一えたもかな

おなしみちなる寺にいらて見ればこゝの花はさかさ

りければ知りたりしそのありしをととはするもなけ

れは

さきぬ 櫻狩とて來つれとも此木のもとにあるしたになし

それ迄の命たえたるものならはかならず花のおりに又見ん
おなしころ人のもとよりさくらの花を又見すへき人
もなければ御れうにとてたゞ一枝をなん折たるとて
又見せん人もなければ山櫻いま一枝をおらすなりぬる
かへし

いたつらにこの一枝はなりぬめり残りの花を風にまかすな
はるころひさしくをとせぬ人の山ふきに日ころのつ
みはゆるせといひたるに

^{後拾}とへとしも思はぬ八重の山吹を許すといはゝおりにこんとや
あめいたくふる頃ものむつかしうて

いかにせむ雨の下社住うけれふれは袖のみまなくぬれつゝ
ものへいく道にかはらやに日やといふものつくるを
みて歸りてその夜月のうちくもりたるを見て
あはれこの月社くもれ晝見つる火屋の煙はいまやたつらむ
又人のさうするを見て

たち昇る煙につけておもふかないつまた我を人のかく見む
なけくことありと聞て人のいかなることそととひた
るに

とも角もいはゝなへてに成ぬへし音になきて社みせまほしけれ
つれゝのなかめ

つれゝとなかめ暮せは冬の日も春のいくかにおとらざりけりイもならぬ哉
あれたるやと
そ々に我はひとかとおもはすはあれたる宿も淋しからまし
ねさめのとこ

語らはむ人をまくらと思ははやね覺の床にあれとたのまん
あかつきの月

曉の月みすきひにおきて行人のなこりになかめしものを
うつみひ

ぬる人ををこすともなき埋火を見つゝ儚く明す夜なゝ
あしたのしも

かた敷てねられぬ闇の上にしもいとあやにくに置る今朝哉

袖の水

あさにも氷とちつる我袖はたかほりをけるいけならなくに

庭の雪

^{詞花}待人のいまも來たらはいかゝせむふまゝくおしき庭の雪哉

夕暮になとも思ひのまさる

うたゝねの夢

はかもなき世を頼む哉宵の間のうたゝねにたに夢はみずやと

たゝにかたらふおとこのもとより女のかりやらんう

たとこひたるやるとて

^{後拾}語らへは慰むともある物を忘れやしなんこひのまされに

あやしきとに人のいみしくいひしにそのおりはもの

もいはてつとめていひやる

とほりにおちし涙は流れてのうき名をすゝく水とならまし

二月のさくらのをそきころ

またせつゝをそく櫻の花によりよもの山邊に心をそやる

ものいみしうおもふころ風のいみしうふくに

身にしてみてあはれなる哉いかなりし秋吹風をよにきゝけむ

露よりも世のはかなきを人のいふを聞て

草の上の露に例へし時たにもこは頼まれしまほろしの世か
かたらふ女ともたちの世にあらむかきりは忘れしと

いひしかをとせぬに

きえはつる命ともかな世中にあらはとはまし人のありやと
ほうしのきてあふきおとしていきたるにやるとて
後拾雅六
はかなくも忘れにける扇かなをちたりけりと人も社みれ
三月はかり人のこむとてたゝにあかしたるつとめて
いひにやる

夜の程もうしろめたなき花の上を思ひ顔にてあかしつる哉

九月はかりとりのねにそゝのかされて人のいてぬる
に

人はゆき霧はまかきに立とまりさもなか空になかめつる哉

あかそめか許より

後拾朋
行人もとまるもいかと思ふらむわかれてのちの又の別れを
さりたるおとこのとをきくにへ行をいかゞきくとい

ふ人に

千載別
別れても同じ都に有りしかはいとこのたひの心ちやはせし

世中さはかしきころかたらふ人の久しうをとせぬに
世間はいかになり行ものとか心のとかにをとつれもせぬ
ものいみにてあるちかき所に人のきてえ出すといひ
たるに

隔てたる垣のまわたる月ならはかたらはす共影はみてまし

人の屏風の哥よまするにはるの

はるものはな盛りは我宿にきと来る人のなかるせぬなし

野の花を馬にのりたる人三人はかり見てすくる所

あるかきり心をとめて過るかな花もみしらぬ駒にまかせて

山花をかすめらん

花はなを人に見せなんへたてたる霞のうちに風もこそふけ

いて井あり女なてしこを見る

咲しよりみつゝひろに成ぬれとなを常夏にしく花はなし
松にふちかゝりたるくるまより人ゝをりてみる
藤浪の高くも松にかゝる哉すゑよりこゆるなこりなるへし
遠き山を入こゆ

こしかたを八重の白雲へたてつゝいとゝ山ちの遙かなる哉

海にのそみたる松につたのもみちのかゝりたるを
紅葉するつたし懸ればをのつから松も仇なる名を立ぬへき

琴引笛ふきあそひする所

きく人のみゝさへさむく秋風にふきあはせたる笛の聲哉

山のふもとに家ありもみち散て人なし

散ちらすみる人もなき山里のもみちはやみのにしき也けり

人山をこゆるに前に橋あり
橋くちてよくへき道もなかり曇みねより渡る雲ならなくに

はまの松原にふるきあまの家あり

いつかたの風にさはりてあま人の濱の苦屋をあらしはつ覽

海つらに鷹すへたるたひ人雪降たる

空にたつ鳥たに見えぬ雪もよにすゝるにたかをすてける哉

雪のしろきつとめて人のもとより

續詞
けさはしも思はむ人はとてまし妻なき閨のうへはいかゝと
返しよりのふ

妻なしといふはまろやは數ならぬ聞にしもこそ心置かるれ

いさかひする事ありておとこの家をさるとてつねに

するまくらにかきつくる

かはりるんちり計たに忍はしなあれたるとこの枕みるとも

つらき心ありし人のゐなかよりきてをとせぬ
來たり共いはぬそつらきある物と思はゝ社は身をは恨みむ

和泉式部集 第二

わか心のつらきをみてたえにし人に心ちあしきころ
いひやる

あるほとに昔語もしてしかなうきをはあらぬ人としらさて
おもふとはいへともすれはうちえしつゝいてゝゆく

ほかにゐてしぬはかりおほつかなしといひたるに
今はとていくおり／＼し多かれはいと死ぬ計思へともみす

雨の降日つれ／＼と詠るにむかしあはれなりし事な
といひたる人に

おほつかなたれそ昔をかけたるはふるに身をしる雨か涙か
こゝろにあらてよそ／＼になりたる人にあめのふる

日
をのかしゝ降れともあめの下なれば袖計社わかすぬれけれ

あちきなきとのみいてくれは人のかへりことをたえ
てせぬはいかなればかくおほつかなきそといひたる

に
夏草のかりに立名も惜ければ只そのこまをいまはのかふそ

こよひ／＼とたのめて人のこぬにつとめて
こよひさへあらはかく社おもほえめけふ暮ぬ間の命とも哉

人にあひて物いひしところを目ころほかにありてき
てみればいたうちりはみたるを見ていひやる

逢とのありし處を来てみればさしも思はぬちりそゐにける
人のもとにわすれ草しのふ草つゝみてやるとて

物思へは我か人かの心にもこれとこれとそしるくみえける

人の久しうをとせぬに

もはりやかつ忘れぬ我たにもあるかなきかに思ふ身これ

こゝろかはりたるおとこのまくらしはしおもひかは
るなどないふに

いさやまたかはるも知らす今社は人の心をみてもならはめ
梅の散はてたるをなかくて

おほろけに惜みし花は散りに晝枝にさへ社めはとまりけれ
人のいまさくらもさきなんといへは

まさ／＼に櫻もさかむみにはみん心の梅のかをはしのひて
遠所へ行人によのなかのはかなき事といひて

それとみよ都の方の山きはむすほゝれたる烟けむらは
九月はかりにいとつれ／＼にて人にいひやる

秋はき哀を知らはしらさらむ人もこゝをそたつねきてみん
くならん世までもおもはんなどいふ人のわつらふ

ころをとせぬに
忍はれん物ともみえぬ我身哉あるほとをたに誰かとひける

みわたしなるところにみゆる人々にいひやる
あらはにもみゆる物哉玉垂のみすかしかは誰かくるな

しのひてもものいふ人のあるにと人のあればいそきて
出るにあふきかはりにけりやるとて

語らはむ人もなかりつとりかふと思ひしにやる扇なりけり
ものよりなつころきたるおとこのをとせぬに

夏衣きてはみえねとわかためにくすき心のあらはなる哉
月のあかき夜人に

月をみて荒たる宿に詠ればみにこぬまでもなれにつけよと
いしやまにこもりたるを久しうをともし給はてそち

の宮

せき越てけふそとふやと人はしる思ひたえせぬ心つかひを
かへし

あふみちは忘れぬめりとみし物を關うち越てとふ人やたれ
またいつかかへるとあれは

山なからうくはうくとも都へは何かうちての濱もみるへき
みやの御かへし

うきによりひたやこもりと思へ共近江の海はうち出てみよ

ある人のあふきをとりてもたまへりけるを御らんし
て大とのたかそと間はせ給ければそれかときこへた
まへければとりてうかれ女のあふきと書きつけさせ
たまへるかたはらに

こえもせむこさすもあらむ逢坂の關守ならぬ人なとかめそ
そちの宮たちはなの枝を給りたりし

かほるかをよそふるよりは時鳥きかはや同し聲やしたると
返し

同しえになきつゝをりし時鳥聲はかはらぬものとしらなむ
おほ雨のあしたよひはいかと宮よりある御返事

夜もすからなに事をかは思ひつる窓うつ雨の音をきつゝ
かへし

我もさそ思ひやりつる夜も盡らさせる妻なき宿はいかにと
いし山にありけるほとみやよりいつかはいつるなと

のたまひけるにや
心みよ君か心も心見むいさみやこへときてさそひみよ

みやよりもみち見になんまかるとのたまへりけれと
その日はとゞまらせ給てその夜風のいたくふきけれ

はつとめてきこゆ

紅葉は夜半の時雨にあらしかし昨日山邊を見たらましかは
十月はかりそちのみやよりいかにつれ／＼にとのた
まへれは

花見つゝ暮しゝ時は春の日もいとかなき心地やはせし
そちの宮うせ給てのころ

後拾
かる藻かき伏猪の床のいを休みさ社ねざらめかゝらすも哉
おなしころふのとのに

さるめみてよにあらしと思ふ覽哀をしれる人のはぬは
ふのとのより

袖ぬれていつみといふなは絶にきと聞しを數多人のくおなる
返し

かけみたる人たにあらしくまね共泉てふなの流れはかりそ
又おなし殿より東宮のなをたゝにかゝせて

をとにのみならしの岡の時鳥をかたらはむきくやきかすや
その御ふみをかへしたればまた

人ゆかぬ道ならなくに何しかもいたゝの橋の踏かへすらむ
かへし

猶やめよ踏返さるゝをはたゝのいたゝの橋はこほれもをずる
あふきはらせてはらからたちにくゝろさすとて

今そかく隔れ島なる我なればはり集めたるかはほりそこは
ある人のこむといひたるに

もしも來は道のまそなき宿はみな淺ちかはらに成はてに覺
つのくにより人のいひをこせたる

忘草つゝ人ありときゝしかはみにたにも見すゝみよしの岸
かへし

忘れ草つむほとゝ社思ひつれおほつかなくて程のへつれは
はるつかたの人のきたりければ花もみな散にければ
みちなりなとにや

いたつらにかへらむ事を思ふ哉花の折こそつくへかりけれ
返しおとこ

散に劔花を今はいかゝせんみてすくしけん人にとはゝや
このおなしおとこ又やまふきのちりはてにたたるに
けふは又なにゝかきつるかとへたに散りも残らすやへの山吹
かへし

散にきといひてややまむ山吹のおり枯したる枝はなしやは
むらさきのをり物のひたゝれをゝきたりけるをやる
とてよりのふに

色に出て人にかたるな紫のねすりのころもきてねたりきと
とちい

七月八日大將殿よりありしは忘れて御返にきこゆ
七夕のけふのよはひのうちかへり又待遠にものや思らむ
彦星は思ひもよらん中々にあきはきのふのなからましかは

正月七日おやのかうしなりしほとに若菜やるとて
こまゝに逢とはきと無名をはいつらはけふも人の摘ける

返しおや

なきなそといふ人もなし君かみに老のみつむと聞そ苦しき
いなりにまうてゝ御前なるほとにしかのなけは

思ふ事しかたになくはいとゝしく高きみ山のかまよと思はん
まさみちの少將ありあけの月を見ておほしいつるな
るへし

ねさめしてひとり有明の月みれば昔見なれし人そこひしき
かへし

ねられねと八重むくらせる横の戸にをし明方の月をたにみす
知りたる人の馬にのりて前わたりするを

いはましをわれか手なれの駒ならは人に従ふあゆみすな共
知りたりし人の月あかき夜きて返りにしにつとめて
いひやる

とこの上の枕も知らてあかしてき出にし月の影をなかめて
またいつみのかみみちさたかめのくたるひわかくた
るおなしひなりければ

中々にをのか舟出の旅しもそきのふの淵を瀬とも知りぬる
かたらふ人のきたりけるをきよまはるゝとありとてか
へしければつとめてかういひやりたる

契りしを違ふへしやはいつくしきあらいまみ清まはる共
かへし

すさのをの尊を祈るともなしに越てそまみし浪のやえかき
ある人のものいひにきてひとへのなりければぬきを
きて出にけるつとめて

音せぬに苦しきものをみにちかくなるとていとふ人も有疑
しのひてかたらふ人のわつらひてこよひはえすくす
ましといへりければまたのつとめて

覺束な夜のまの程も白露のおきぬやすらむしにやしぬらん
一日もをこたらすをとせんとちきりし人の心ちのあ
しくおほゆる日しもをとせて又の日をとつれたる
にきのふはとて

かくやはと思ふゝそ消えなましけふまでたへぬ命也せは
物いたくおもふころ夕くれに

夕暮の哀はいたくまさりけりひとひものはおもひつれ共

七月七日まつ人のもとにいひやる

そのほとゝ契らぬ仲はきのふ迄けふをゆかしと思ひける哉
ときゝこし人のたえてのちその人のしそくなる人
の

かりにこし蟹もかれにし浦淋てたゝみる儘にをのかしわきは
かへし

蟹はよもかれしと思ふ磯なれて波のたつやとはぬ計りそ

観身岸額離根草 論命江頭不繫船

みる程は夢も頼ますはかなきはあるをあるにてすすす也覺
をしへやる人もあら南尋ねむ吉野の山のいわのかけみち
観すれば昔の罪を知るからになをゆのまへに袖はぬれけり
の身をしらてイ

住の江の松にとはゝや世にふれはかゝる物思ふおりや有しも
れいよりもうたて物社悲しけれ我よのはてに成やしぬらん
儂くてけふりと成し人により雲井のそらのむつまじき哉

さえぬ共あしたには又をく霜のみならは人を頼み見てまし

鹽たづぬイのまによもの浦々もとむれば今は我身のいふかひもなし

野邊新古みればお花かもとの思ひ草枯ゆく程になりそしにける
ひねもすに歎かしとたに有物をよるは微睡む夢も見てしか

誰か來て見るへきものと我宿のよもきふあらし吹き拂ふ覽

人とはゝいかにこたへむ心から物思ふ程になれるすかたは

庭のまもみえすちり積木葉くすはかても誰の人か來てみん

ねになけは袖は朽ても失ぬめり身のうきとそ盡せさりける
新勅

花を見て春は心もなくさみきもみちのをりそものは悲しき

難波いりえイ瀉みきはの芹にたつさはるふねとはなしにある我身哉

れいよりや時雨やすらむ神無月そてさへとをる心ち社すれ
たらちめの諫めし物をつれゝと詠むるをたに問ふ人なれ
るりのちと人も見つへし我床は泪のたまとしきにしければ

暮ぬ新古なりいくかをかくて過ぬ覽入相の鐘のつくゝとして
めり集

さを鹿の朝たつ山のとよむ迄なきそしぬへき妻こはなくに
新古

命たにあらはみるへき身のはてを忍はむ人もなき悲しき
の集

野邊新勅に出るみかりの人にあらね共とり集めてそ物は悲しき
にか集

塵新勅のゐるものと枕はなりぬめり何の爲かはうちも拂はん
にけ

惜と思ふ折やあり劔ありふれはいとかく計うかりける身を

るもをさて風にまかするあま舟の何れの方によらむとす覽

すみなれし人かけもせぬ我宿に有明の月のいく夜ともなく

れいならすねさめせらるゝころはかり空とふ鴈の一聲も哉
よりイ

春たゝはいつしかも見む山邊の霞におれやならむとす覽

えこそ猶うきせと思へと背かれぬ己か心のうしろめたさに

軒はたにみえすすかける我宿はくものいたくそ荒果にける

ほとふれば人はわすれてやみにけん契し事をなをたのむ哉

と山ふくあらしの風の音きけはまたきに冬の奥そ知らるゝ

りんたうの花とも人を見てし哉枯やははつる霜かくれつゝ

にほとりのしたの心はいかなれやみなるゝ水の上そ情なき
續後拾遺

露をみて草葉の上と思ひしはときまつほとの命なりけり

なにのためなれる我身といひ顔にやゝとも物の歎かしき哉

限りあればいとふまゝにも消ぬ身をいさ大方に思ひ捨てむ

さなくとも淋しき物を冬くれは蓬のかきのかれゝにして

るいよりもひとりはなれて知人もなくく越んしての山道
吹風のをとにもたえてきこえすは雲の行衛を思ひをこせよ
ねし床にたまなきからをとめたらはなけの哀と人もみよかし

春歌

春日野に千よもへぬへし神のます三笠の山に來たりと思へは
野邊に出て松をためしに引て社萬代經へき程は知りぬれ
花にあかてけふも暮なは水の面に浮へる月をかく社は見め
かけにさへ深くもいろのみゆるかなはなこそ水の心也けれ

夏

あふひ草かさして行と思ふよりいそきたるゝ加茂の川浪
幾たひか身にはきゝつる時鳥みちの空にもほのかなるかな
夏草をわけてやきつる山里のかきねのはなは雪とこそみれ
駒の足にくらへてみれとけふは尙菖蒲の草のね社せちなれ
夏のひも君か爲にもあはならすむすひし水の氷りとけめや
諸共にのとけくゐたれ芦田鶴の立へき岸もよらぬきしなり
清きせになごしのせらへしつるよりやを萬代は神のまにく

秋

七夕のこよひあふせは天川わたりてぬると思ふなりけり
野邊なからおられましかは女郎花露も落さてみるへき物を
人もこゆ駒もとまらず逢坂のせきはしみつのもるなかり
誘はれて人も來に覺常よりもこよひの月をいらぬくさなき
風ふけは門田の稻も浪よるにいかなる人かすきて行くらむ
秋はひをかそへてゆかむよりてみる綱代の涙は色も變らす
めつらしきみゆきなり覺秋の月時雨のそらとおもひける哉

雲林院にすむころ越後守のりなかに

きかせはや哀を知らん人も哉雲のはやしのかりのひとこゑ

節分のつとめて

けふよりは蘆まの水やゆるからむたつのたちとの水薄れて
内侍うせて後頭の中將みつからき懸こえむとのたま
へるに

涙をそみせは見すへき逢みてもとにはいづがたのなければ
かへし

頭中將

たち出る涙の程をみるときは草葉はこひとしられやはする
白妙の梅もなにせんゆきをそ春の花とはいふへかりける
菖蒲草よとのなからのねならねと荒たる宿はつまと社みれ
なのみにそこまのあたりのうり作り只秋霧のたつを吐みれ
つれくなりしおりよしなしとにおほえし事

世中にあらまほしき事

夕暮はさなから月になしはてゝ闇でふものなからましかは
を續後撰しなへて花は櫻になしはてゝ散てふものなからましかは
世中にうき身はなくておしと思ふ人の命をとゝめましかは
世中ははると秋とになしはてゝ夏と冬とのなからましかは
みな人を同じ心になしはてゝおもおもはぬなからましかは
人に定めさせまほしき事

いつれをかよになかれとは思へき忘るゝ人と忘らるゝ身と
なき人をなくて戀んとありなから逢みさらむと何れ増れり
思へともよそなる中とかつ見つゝ思はぬ中と何れまされり
はやきせと水の流と人の世ととまらぬとはいつれまされり

あやしき事

世間にややしき物はしかすかにおもはぬ人のたえぬなり覺
世中にあやしき物はいとふ身のあらしと思におしきなり覺

くるしけなる事

世中にくるしき事はこぬ人をさりととのみ待にそ有ける
よの中に苦しき事は数ならてならぬこひする人にそ有ける
あはれなる事

哀れなるをいふにはいたつらにふりのみまさる我身なり
哀なるをいふにはなき人を夢よりほかに見ぬにそ有ける
哀なる事をいふには都出て行たひみちのとをきなりけり
あはれなる事をいふには人しれすもの思ふときの秋の夕暮
哀なる事をいふには心にもあらてたえたる中にそありける
帥の宮にて題十給はせたる

大井河のいかた

ゆふくれの鐘

山寺のかすかなる

山田の紅葉

おくら山の鹿

岸にのこるさく

くさむらのむし

おくら山の鹿

大井河くたす筏のみなれ棹さしいつるものは涙なりけり
詞花

夕暮は物を悲しき鐘の音をあすもさくへき身とし知らぬは
そむきぬと浮世の人しかよはねは窓にむかへる心ち社すれ
小山田のもるももらぬもよの人のすへてはかりの宿り成堯
いつまてと待をはかなき心ともさか野の花のをくれぬる哉
紅葉はの散もをらましかめ山のこふをつくしてなり社すれ
岸の上の菊は残れと人の身はをくれさき立ほとたにそへぬ
をけはかつきえぬる霜をみるまに草むらとに虫を鳴なる
いかばかり秋は悲しき物なれはおくらの山の鹿なきぬへし
あかゝらぬ心のくまをたつぬれはきよたき川の月もすみ堯
みちさたさりて後帥の宮に参ぬときにて

赤染衛門

新古
移ろはて暫ししのたの森を見よかへりもそするくすの浦風

返し

同
秋風はすこく吹共くすの葉のうらみかほには見えしとを思

皇太后宮うせさせ給へる御法事の物とて色々の玉

玉葉
数ならぬ涙の露をそへたらは玉のさかりをまさんとそ思ふ

かきり
そへ集

霜のしろき朝寒

手枕の袖にも霜は置けるをけさ打みれば白妙にへにして

人のかへりことに

二字衍歌

まところまで獨詠し月みればおきながらしもあかしかほ也
をそくまいりいみしく侘れは

霜の上に朝日さすめり今ははやうちとけにたる景色みせ南
君はこすたまゝ見ゆる童をはいけとも今はいはしとそ思

たまくらの袖はわすれ給にけるかとのたまはせたる

人しれす心にかけてしのふをばまくるとやみるた枕のそて

月はみるやとのたまはせたるに

更ぬらんと思ものからねられねと中々なれば月はしもみす

まゆみの木のおいたるを見せ給て

とはふかくもなりにけるかな

とのたまはすれは

しら露のはかなくをくとみしほとに

霜のしろきつとめて

我上は千鳥はつけし大鳥のはねしにしも猶さやはをかねと
人のかへりとに

二字衍歌

霜かれはなにぬれたる袂そとさためかねてそ我も詠る
うつろはぬ常磐の山も紅葉せは如何ゆきてのゝに見む
高瀬船はや漕出よさはるとてさしかへりにし薫まわけたり

人のかへり
其夜より我床の上は時雨ねとすゝろにあらぬ旅ねをそする

今のに君やきませや戀しとてなもある物を我ゆかめやは
人のかへりことに

恨む覽心はたゆなかりなくたのむよをうく我もうたかふ
雨風はけしき日しも音つれ給はねはきこえさする
霜かれはわひしかりけり秋風の吹には萩のおとつれもしき
人につれ

つれとけふ數ふれば年月にきのふそ物は思はさりける
夕くれにきこえさする

なくさむるきみも有とは思へともなを夕暮は物ぞかなしき
人のたのめてこす侍りければつとめてつかはす

後拾
をきながら明しつる哉ともねせぬ鴨のよはけの霜ならなくに
おなし心にとあるかへりことに

君は我はわれともへたてねは心にあらむものかは
こちあしきころいかゝとのたまはせければ

たえし比たえぬと思ひし玉のをの君により又おしまるゝ哉
雪のつとめて

初雪といつれの雪とみる儘に珍らしけなき身のみふりつゝ
ふみつくるとて人あれはとのたまはせられたは

遠なみ君來まさすは我ゆかんふみつくるらむ道をしらはや
霜いとしろきつとめていかゝ見るとのたまはせられた

は

さゆるよのかすかくとは我なれはいく朝霜をおきあみらる
雪もふり雨もふりぬる此冬は朝しもとのみおきあては見る
つくなくけしきを御らんして

なをさりのあらましに夜もすから落る涙はあめと社ふれ
とのたまはすれば心ほそきとのたまはせつるを心み
たれて

現にて思へはいはんかたもなし今宵のを夢になさはや
御返し

われさらは進みてゆかん君はたのりの心をひろむ計りそ
梅ははや咲に晝とておれはちる花とそ雪のふるはみえける
御返し

冬の夜はめさへ氷りにとちられて明しかたきを明しつる哉
なをよにもありはつましきをのたまはすれば

くれ竹のよのふるもおもほゆる昔かたりは君のみそせむ
橘につけて人に

誰にこはなほみせましや我おれは山時鳥さらにきなかつ
物にまいりたるにたつねんかたもなきといひたる
人に

いきてまた歸りきにけり郭公しての山路のともかたらむ
ともかくもいへといふおとこに

そのかたとさしてもよらぬ浮舟の又漕はなれ思ふともなし
けさうするおとこひんなきおりきて歸とてさりぬへ

からむおりおとろかせといふに
なにはかた折ふす芦のあしのねに又ねぬ人を驚かすやは

和泉式部集 第三

れいの人にて物いふ所にたちよりたれとをともせね
はかへりてうらみたるに

聲たにも通はんとはおほしまやいかなるとの浦とかはみし

物へいく人いましはしのいのちの(はと幾)おしきとい

ひたるに

朝後撰惜むらむ人の命はありもせよまつにもたえぬ身社なからめ

久しうをともせぬ人に

千載うらむへき心計りはあるものをなきになしてもとはぬ君哉

人によのはかなきとをなといひて

玉葉

いかにせんいかにかすへき世中を背けは悲し住はすみうしうちめ集

うへのきぬをはりきりていとおしき事といひて

露草にそめぬ衣のいかなればうつし心もなくなしつらむ

十一月菊の色したるきぬおやのもとにやるとて

此きぬの色しろたへになりぬ共しつ心あるけころもにせよ

やむことなきおとこに

白浪のよるには靡くなひきもの靡かしと思ふ我ならなくに

こゝろにもあらずあやしき事いてきてれいすむ所も

さりとなくをおやもいみしうなけくと聞いていひや

るかみのもしはよのふるとなり

古へや物思ふ人をもときけんむくひはかりのこゝち社すれ

はかもなき露の程にもけちてまし玉と成劔かひもなき身を

外にもやまたうきとは有けると宿かへて社しらまほしけれ

殘てもなにゝかはせん朽にける袖は身乍らすてやしてまし

涙にも浪にもぬるゝ袂哉をのかふねゝなかなぬとおもへは

悲しきは此世ひとつかうきよりも君さへ物を我思ふなり覺

にこり江の底にすむ共聞えすはさすかに我を君こひしやは

過にけるかたそ悲しき君を見てあしくらしを月日と思へは

微睡まはうき世夢共見るへきにいつらは更にねられさり覺

花咲ぬ谷のそこにもすまなくにふかくも物をおもはるゝ哉

隠れつゝかくてやゝまんたらちねの惜みもし劔あたら命を

春雨のふるにつけてそ世中のうきも哀れとおもひしらるゝ

十二月つとめてのうたとて□のおとこのよませし

打はへて涙にしきし片敷の袖のこほりそけふはとけたる

極樂をねかふ心を人ゝよむに

願くはくらき此世のやみを出てあかき蓮の身ともならはや

みやの御殿のさくらを

花もおしちらて千とせをすくきなん君か都ににほふ櫻を

世のはかなき事なといひてなくにちかくふしたる人

の袖のぬるゝをあいなわさやといふに

おほかたの哀をしるにをつれ共涙は君にかけてこそおもへ

或所に几帳の帷いれてまいらせたれば袋かへさせ給

へるに

袖みれば嬉しきものを包みたる袋かへしつかけてのみ見ん

花の時心不靜雨の中に松緑をますといふ心を人の

朝後拾讀に

のとかなるおり社なけれ花をおもふ心の内に風はふかねと

松はそのものと色たにあるものをすへて緑も春はとなり
燈の前に花を思といふ心

夜のほとにちりも社すれあくる迄ほかけに花をみるよし哉
ひにあてゝみるへき物を櫻花いくかもあらてちるそ悲しき
燈の風にたゆたふみるまゝにあかてちりなん花をこそみれ
祭の日御前に人すくなにてさふらふに葵に御てなら
ひをせさせ給て

玉簪
ゆふかけて思はさりせは葵草しめのほかにそ人をきかまし

おほんかへしきこえむもはゆければゆふを御み丁の
かたひらにゆひつけてたちぬ

同
しめの内をなれさりしよりゆふたすき心は君に懸てし物を

丹後にくたるに宮よりきぬあふき給せたるにあまの
はしたてかゝせ給て

秋霧のへたつるあまの橋立をいかなるひまに人わたるらむ

御返し

思ひたつそら社なれ道もなくきりわたるなるあまの橋立

たいふの命ふにとまる人よくをしへよとて

わかれ行心をおもへわか身をも人のうへをもしる人そしる

人のかへりとに

はなゝみのさとゝしきけは物うきに君ひきわたせ天の橋立

出門の所にきたる客人にしひてとらせし

有明と佐野の舟橋みつるより物うく成ぬよさのわたりは

こまやかなる人の文を見て

身は行ととまりぬるはさきにたつ泪をもとく心なるへし

入道殿より尼になりなんといひしはいかゝとのたま
はせたるに

あま船にのりそわつらふよさの海にをいやはす卿君をみるめは
人

行さきもすきぬる方も戀しきはみちの空にやゆきとまり南
丹後よりのほりて練たる糸宮にまいらすとて
白糸のくるほとまてはよそにても戀に命をかけてへしなり
なを或人にのほりて

與佐の海に浪のよるひる詠めつゝ思ひし事をいふ身とも哉

前栽のおもしろきをみていひあつめたる

あらさしと思ひし宿を花により萩の原ともなしてみる哉

我心ゆくとはなくて花薄まねくを見ればめこそとまれ

女郎花いつこにうへん我宿のはなにてみるにおしくも有哉

いをしねて夜とにきけはあはれにもなきまざる哉鈴虫の聲

我やとを人に見せはや春は梅なつはとこなつ秋は秋はき

これを見て一品の宮の相摸

はるの梅なつのなてしこ秋の萩きくの残りのふゆそしらる

内侍のうせたるころ雪の降てきえぬれは

なとて君むなしき空に消に劔あは雲たにもふれはふる世に

同ころ殿の中納言失給へるにとふらひ給へるに

とはるゝも人はかく社おもはめと嬉しきまてに君を悲しき

宮より露をきたるからきぬまいらせよ經のへうしに

せんとめしたるにむすひつけたる

新古今集

置と見し露もあり覺はかなくてきえにし人を何にたとへん

とゝめ置て誰を哀と思ひけんこはまさるらむこはまさり覺

内大臣とのゝ若君をわたし奉り給へて見たてまつら
んとありければこゝにわたりて見奉り給へとありけ
れはいづみ

こひてなく涙に影は見えたるをなかゝ〔る脱〕までも何にか渡らむ
雪の降日

身にしみて物のかなしき雪けにもとゝこほらぬは涙成けり
若君の御送におはするころ

この身社このかはりには戀しけれ親戀しくは親をみてまし
つねにもたりし手はこをおだきに誦經にせさすとか
きつくる

縁 侘とさくたにきけ鐘の音にうち忘らるゝ時の間そなき

これをきゝて僧都の母いかゝとひとりければ

つくゝとをつる涙にしつむ共きけとて鐘のをとつれし哉

同じころさかみかめのもとよりをはのもとに

親をゝきて子に分れけん悲しひの中をはいかゝ君も見る覽

返し

親のため人のもとは悲しきをなにと分れをよそにきゝけん
とかイ

木幡僧都の家やけたる人つていひやるはしに

出にける門のほかをししらぬ身はとふへき程もさたずきに覺

かへし

とはぬをも恨むる心今はなし車にのらぬほとそうかりし

きぬともやるとて

もしほ草やき劔あまのすて衣思ひのほかにありけるをみよ

かへし

藻鹽草くゆらぬものをあま衣なにかくなみのたちかさぬ覽

同僧都母許に故内侍ともこともにうの花見しとなど

いひやりたれば

郭公なきかけにてもふる里のこけのかきねをいかにこふ覽

かへし

古里の垣ねにのみそ我はなく死出のたをさは葬らひもせず

宮法師になりてかみのきれをおこせ玉へるを

かきなてゝおほしゝ髪筋もになり果ぬるをみるそ悲しき

しはすのつこもりかたにあかつきおきてみれば月い

りかたになれば

としくれてあけ行空をなかむれば残れる月の影をこひしき

祭主輔親かむすめの花にきしをつけていひたる

春の野に風はふけとも

かへし

鶯のねくらの花とみるものをとりたかへたるこゝち社すれ

流れつゝ水のわたりの菖蒲草ひき返すへき根やはのこれる

同日清少納言に

駒すらにすさめぬ程に老ぬれば何の菖蒲も知られやはする

かへし

すさめぬにねたさもねたし菖蒲草ひき返しても駒かへり南

石藏の宮の御許にちまき奉るとて

深さはのこもをそかれる君か爲たまは衣の袖にかくらむ

返し

深さはのこもはかたみにかりけれと君か涙の玉をかくれる

いかなる人にかいかてたゝ一たひたいめんせんとい

ひたるに

玉璧

世ゝをへてわれやは物を思ふへき只一度のあふとにより

また人のかへりことに

頼むとて頼みける社はかなけれ晝間の夢のよとはしらすや

安藝守の婦子うみたるこゝぬかの日ちこのきぬやる

とて

なぬか行濱の眞砂をかすにしてこゝぬかゝへかすへつる哉
はやうわかれし人のもとに

それなからあるかなきかと昔見し人にとひてや我はしらまゝ
人の來るをひんなければかへしたるつとめてよへは

いねとありしかはまてきたるといひたるに

言儘にいきける物をいくにても留むへく社あるへかりけれ
あさからぬもゆへおつる涙かは浮ふ共いふしのふともいふ

あきのきたのかたにたき物こひたるとてやるとで

塵はかりにほひたになし君かすむ籬の菊の香にをくるはせ

内侍もうせてのち人のもとに

ひきかくる泪にいとゝおはゝれて蜚のかりける物もいはれず

人のかへりことに

玉の緒を見るに儚き笹蟹のいかてしはしもかき通はゝや

おなし人に

古はありけるるときゝなかなをかなしさのふりかたき哉

人のかへりことに

よと渡り雨にはいとゝ眞菰草まゝにそれをねになかれにしつし

人のかへりことに五月五日

涙のみふるやの軒の忍ふ草けふのあやめはしられやはする

おなし人に

何事もみなふりにける君か爲いかなる事をいかにきかまし

五月五日ちまきを人のもとにやるとて

ふか澤田汀かくれの眞菰草きのふあやめにひかされに覺

やなきにみのむしのつきたるをみて

みのむしになるを見るゝ青柳の糸にのみよる我心かな

雨ふらはむめの花傘あるものを柳につけるみのむしのなそ

このかたしたるわりこをさいす（巻）すけちかかりて

かへすとてかりのこをいれて

いせしにによさの海より飛通ふうはの空にもかひになし覺
かへし

飛通ふよさのしまつをよそ人はとりも留めはかひもあらまし

石藏より野老をこせたるてはこにくさもちるいれて

奉るとて

はなのさと心もしらす春の野に色々つめるはゝこもちるそ

とのゝ中納言の御返事

冬の野にかるてふかやはかれもせよ人の心に霜はをくやは

秋るなかよりきたる人に

秋風のそにつけても待れつるころもかさぬる中ならね共

やまとよりのほりたりと聞人のをとつれぬる

大和よりきたるときけと唐衣たゝもろこしの心地こそすれ

人の返事に

たち歸り心のくせのならひにてそはこまほしく思ひなす覽

公資かめともろともにきてまくらこへはいたしたる

にかへすとてかきつけてかへしたる

たひとにかるもうるさし草枕たまくらならは歸さゝらまし

かへし

草枕その結びめのたよりにはちたひも干たひかさんとぞ思

人のかへりことに

かけたるはうしと社思へたまさかに車は何の心をかやる

雪いみしうふるひ

かくしつゝひをのふれはいとゝしくゆきゝの道や滞るらむ

僧都の母いとこひたるやるとて

このふしにたえも社すれまゆ籠りいと少くもひきてたる哉

かたらふ人の來るに棕やるとてしきたるかみに

夢にたもあふとみる社嬉しけれ残りの頼みすくなけれとも

冬のはてつきた雪のいみしうふる日人かりやる

ふりはへてたれはたき南ふみつくる路見まほしき雪の上哉

五月五日菖蒲草の根を清少納言にやるとて

これその人のひきける菖蒲草むへ社ねやのつまと也けれ

かへし

ねやものつまにひかるゝ程よりはほそくみしかき菖蒲草哉

またかへし

さはしもそ君はみるらむ菖蒲草ねみけん人にひきくらへつゝ

おなしき人のもとよりのりをこせたりければ

まれにても君か口より傳へすはときける法にいつか逢へき

ひとのもと物忌にてなむと聞て今日のつれゝゝにこ

ゝろはへのいとにくきもよくなむといひたるに

何にともうきにつけつゝ思ひ出て忘るゝ時の又にあらしな

卯花みにいきてかへりてつとめて

おりしまれきのふかきねの花をみてけふきく物か山時鳥

小(山)田のなかつかさの内侍□侍けむたき物すこ

しとこひたるに

夢計りあはせたきものなかり覺烟となりてのほりにしかは

内侍なくなりてつきのとし七月にれいやるふみにな

のかゝれたるを

諸共にこけの下には朽すしてうつもれぬ名をみるそ悲しき

いかなる人にか

あさましやぬぬ共人は見え覺とゆめとも夢に人にかたるな

ひく人もなくてきのふは過してき我忘れぬにおふる菖蒲は
またいかなる人にかいひ侍る

いとゝしくものそ悲しき定めなき君は我身のかきりと思に

戀しさはそれにしも社増りけれあふを限りと誰かいひける

情なさは思ひしもせし一日たにいかてか過す心地すらむと

有なからつらきも苦しなき人をおもひのみやは思ふなり覺

契あらは思ふかと思はましあやしやなにのむくひなる覽

けふしなはあす迄物は思はしと思ふにたにも叶はぬそうき

よそにふる人は雨とやおもふらむわかめにちかき袖の雫を

日にそへて憂ものみも増る哉暮れてはやてあけすもあら南

いみしうふみこまかにかく人のさしもおもはぬに

藻鹽草やくとかきつむあまならて處おほかるふみのうら哉

羨ましきもわか胸のさばく哉いかなる人の身かはうこかぬ

忘れなんそれは恨みす思ふらむこふ覽とたに思ひをこせは

いくかともしられす成ぬかすにせし泪の玉もこほれ落つゝ

絶はては絶はてぬへし玉のをに君ならんとは思ひかけきや

我袖になみたとのみそおもひしを心にかゝる君もありけり

なぬかにもあまりに覺な便あらはかそへきかせよ興津島守

わりなくもたかくせらるゝ歎哉みそかにと社君もいひしか

守の大和よりのほりたる日人のもとにやる

待人はまてともみえてあちきなく待ぬ人社まつはみえけれ

また人に

恨むなよ我名たてつとみる人のなに思ふそとゝはゝ答へん

かきくらし雨はさ月の心ちしてまた打とけぬほとゝきす哉

身のうきも人のつらさも知ぬるをこはたか誰をこふる成覽

あふひをやるとて
皆人のかさしにすめる其草の名は何とかやいひてきかせよ

また

くすりてふあふひもすきぬ今はたゝ戀忘れ草ひとりとも哉
はかなくて忘れぬめるは夢なれやぬるとは袖を思ふなり晝
我たまのかよふはかりの道も哉まとはむ程に君をたに見ん

和泉式部集 第四

よさの海のあまの仕業と見し物をさも我やくとたるゝ潮哉
増鏡いと見くるしやむへこそはかけ見し人の影は見えけれ

内侍なくなりたるころ人に

歎くやとなき折ならはなにゝよりおつる涙も人にいはまし

玉葉

あひにあひて物思ふ春はかひもなし花も霞もめにしたゝねは

〔モノマ、〕

つらしともそれはひては思はぬに猶身にしむは葛のうら風
とへと思ふ人はくちなし色にしてなにゝこふ覽八重の山吹
狩人のしたにみをのみ焦せともくゆる心のつきすもある哉
うき事もこひしきとも秋の夜の月にはみゆる心ちこそすれ
人きてかへりぬる十月はかりに

我宿の紅葉のにしきいかにして心やすくはたつかある覽
猶干うらむへきかたゝに今はなきものをいかて涙の身に残り劔

たむこにありけるほとかみのほりてくたらさりけれ
は十二月十より雪いみしうふるに

待人はゆきとまりつゝ味氣なく年のみこゆるよさのおほ山
人のかへりことに

としをへて物思ふとはならひにき花に別れぬ春しなければ
たんこに

玉葉

ふれはうしへしとても又如何せん雨の下より外のなければ
おなし人に

うきにおひて人もてふれぬ菖蒲草たゝ徒にねのみなかれて
山とかいへ出たるにはよめもろともにそありけるお

とこのおり／＼をこせたる文とをとりもたりける
ほかにゐたりけるほとその文のうらにふみかきてか
のは／＼のをこせたりければ

から衣つまとは君になりはてむ結をとめよあこかたまつさ
山里にて人に

よをかきる山里にても君をまつ心はかりそかはらさりける
は／＼きのにうたうのめに

いつかまた我身をやらん山里もいと物社かなしかりけれ
夕くれにちいさきうりを齋院より給はせたるにかき
つけてまいらす

夕霧はたつを見ましや瓜生山こまほしかりしわたりならては
なかつかひたりしあまのけさにむすひつけ／＼る

味氣なし我ときるへきけきのをの結ほ／＼れたるとけは／＼南
かしはのよりなにとかやさかみへやるとて

いをたにもやすくねさせて沖風の吹落したるかしはの／＼露
けむもちゆきつねか

うちはふく浪の上をはきぬなるにす隠れたるか鳥の見えぬは
人のをきたりけるか／＼みのはこをかへしやるとて

影たにもとまらさりけり増鏡はこの限りはいふかひもなし
後拾 現にて夢はかりなるあふ事をうつ／＼計りの夢になさはや

雨もよにかよふ心したえせねは我衣手のかはくまそなき
そら物は雨にぬれ／＼我袖の風にみなからかはかぬやなそ

限りなき物思ふ身とそ思ひしをけさはたとへん方のなき哉
たとふへき方はけふ社なかりけれ昨日をたにも暮してしかは

暮してもあくるとたになかりせはなに思はまし何思はまし
迎もかく角てもよそに歎く身のはてはいか／＼はな覽とす覽

いと／＼しく覺束なきに年月のゆきかへるかとみゆるけふ哉
花も皆夜ふくる風に散ぬらん何をかあすのなくさめにせん
ひをたにも幾かに成ぬと思ひしをけふふた月に成にける哉

三月三日

しつのめの垣ねの桃の花もみなすく人けふはありと社きけ
郭公夢に一こゑき／＼つれとうつ／＼ならひにいまたねられす
折て見し人の匂ひのおもほえてつねよりおしきはるの花哉
花見てもひをは暮しつ青柳の糸くるしきはよるにそ有ける
おりよくは見にこぬまでも我宿の櫻咲ぬとつけまし物を
うへよりは萩の下葉の下露のしほれておつる秋にも有かな
かくれなき物にそありける夏衣うすき心はきてもみね共
忘れぬとつみうる心ちする物をけふのみそきに拂へ捨てん
花薄まねくたよりのかひもなし心しりなる人し見えねは
我をこそかたらはさらめ足引の山ほと／＼きすなき／＼かせ南
かけにとてかくる／＼人はなかり覺みをうの花は盛なれとも
菖蒲草さ月ならねと我袖にひとしれぬねはいつかたえせん
めの前にかはりぬめりと見る物を又忘れすやありしよのと
ねられねは月を見るたにある物を身にもしみつる夜はの風哉
小夜中に月を見つ／＼もたかりにゆきとまりても詠らんとは
おちつるこのの上は降雪のわれも獨は詠めさらまし
何事も心になふ世なりせはひとり盛の花を見ましや
いは／＼しや戀のみわたる心にはたえまあり共おほえさる覺
君かすむ渡りと思へははつせ河おりたちぬへき心ち社すれ
にうたう殿のこしきふの内侍子うみたるにの給はせ
たる

よめのこのこねすみいか／＼成ぬらんあな美しと思ほゆる哉

御返

君にかくよめの事たにしらるればこのこねすみの罪輕き哉
心にもあらてよそになる男のもとに雨のいといたく
降日なみたの雨のとくひたるに女もこと人いてきに
ければ

をのかしふれ共雨の下なれば袖はかり社わかすぬれけれ
てはこをきたるやるとおなし人に

あふとを今は頼めぬ中なれとまた社あけぬしまのこかはこ
人かたらひたる男のもとよりわするなどのみいひを
こすれば

玉響

いさやまたかはるもしらす今社は人の心を見てもならはめ
おなし人つねにわすれぬよしをのみいひをこすれば
哀とも思ひやせましよそになる心のあらぬこゝろなりせば
月あかき夜人きて物かたりなとしてかへりてつとめ
てさてやあかしたまへりしとあれば

とこの上の枕もしらすあかしてき出にし月の影をなかめて
かたみに忘れしなと^三字^三符^三言^三 いひて久しう音せ
ぬに

さらはいかに我も思ひやたえぬへき同し心に契りてきとて
ことこゝろつきたる男さすかにとき／＼きてみるに
見る毎になと歎かする君な覽をのかかたみにをのれ成つゝ
たのめぬにとたのむる人のをとせぬに
とほりやかかつ忘れぬ我にてもあるかなきかに思ふ身なれば

たのめて見えぬ人につとめて

を字脱敷

休らひに横の戸こそさゝさらめいかてあけつる冬の夜な覽
もろともにとのみちさる人のゐ中へ行に

をくれしと我をもすてゝ出たつは涙にのみやさは契りけむ

といひやりたるかへりことにをくるゝかつらきとの

みいひたる我もさすかにいくへきにもあらねは

流ゆく泪のかはにうき物はをくらす人とをぐれぬる身と

ゆくみちよりとゝまるたましひをかたみにはせよと

いひたるに

わか玉は旅の空にもまとひなんとむへき袖の中はくちにき

この人のうへを思ふさまにていぬとかたるを聞て

契りしはおもふさまにて思ふとてあらましをいひし成暁

さみたれば物おもふ事そまさりける詠のうちに詠くれつゝ

男のほかにある夜人に物いふさまにみゆれば

ねぬる夜の夢騒かしく見えつるはあふに命をかへやしつ覽

久しう逢ぬ人をおもふとてみちもおほえすなといふ

に

今よりはふるのゝみちに草しけみ忘れ行にはさそまとふ覽

雨のいたうふる日涙の雨のなといひたるに

後拾

見し人に忘られてふる袖に社身をしる雨のいつもをやまね

おなしおとこかくてはいきたるこゝちもせずといひ

たるに

ありとても今は頼めぬ中なれとひたすらなくはなきなとそ思

かならずこよひといひたるおとこにえあふましかり

ければ

むは玉の今宵計りを思ひつゝまंतरまさらは夢にをみえん

八月はかりに人のきてあふきをおとしてけるをみて
竹のはに露いとおほくおきたるかたかきてあるほと
へてやるとて

玉露
しのゝめにをきて別れし人よりは久しくとまる竹の葉の露

ほかにかよふおとこいかにおもふにかありけんいま
たたゝひと月の程わたするなといひたるに

其事といはぬさきよりいつとても憂を忘るゝ時しなけれは

世のいとさはかしきころ

夢さにつけてそ歎く夢のよを見はてす成し人によそへて

物をも思ひし程にはかなくてあさちかするのよと成に覺

八月十日の夜ゝなかはかりに

まともめは吹驚かす風の音にいと夜寒になるをしを思ふ

十月はかりに物にまてゝ夜とまりたるにたきの音風
のをとのあはれにきこゆるにかたはらなるつほねに
はやうきゝし人のをとすれはいとしのひてさしをか
する

うき世にはあらしの風をしるへにてみし山水に袖を濡しつ

人のもとにいくなりときくおとこのきくの花につけ
てかはらぬよいひたるに

かはらしといかゝたのまむ今はなをうす紫の色ときゝゝ

うらみて久しうをとせぬ人のもとにことはりをたひ

ゝゝいへとかへりこともせねは

此たひはとにいてゝ恨みてむあはすは何のみをかすつへき

しもいとしろきつとめて人に

打拂ふともねならねはをしとりの上毛の霜もけさはさながら

る中なる人のもとよりひてりしてくにのみなやけた

るをわひたるに

小山田のなとひたふるに思ふらむ露のおくてはありも社すれ

かたらふ人ありときくとおとこのとまりにけ

れはつきのあか月いひやる

めに近き袖にもらすは人のよの月ともよそにみるへき物を

いとちかきところにかたらふ人のわたりたるにもの

いみにてえあはす

隔てたる垣の間わたる月ならは語らはすとも影は見てまし

久しうとはぬ人からうしてをとして又もととはねは

中後拾遺三にうかりし儘にやみにせは忘るゝ程に成もしなまし

はきのいとおもしろく咲たるところに雨ふる日まら

うとのきて物かたりして歸に

雨もよに急くへしやは秋萩の花見るとではわざともそくる

いかなる人にかありけんわつらふときゝゝていひやる

さまゝに心をきたる露なればたゝに草葉の上とやはさく

時ゝゝくる人のもとよりくれゆくはかりといひたれ

は

後拾遺二

詠めつゝとあり顔に暮してもかならず夢に集の見えは社あらめ

物へいく人にあはんとおもふにえあはてあふきにか

きつけてやる

是に耳よそふるたひは扇てふなにはいまれぬ物にそ有ける

ひさしうありてとひたる人のかへりことにいしをつ

ゝみてたゝこれを見給へとて

あふとをありし身ながらある物と思ひ出てや人のとふらむ

ものへいく人に

新千別

ある程はうきを見つゝも慰めつかけ離れなはいかに忍はん

人のもとよりおもはむかたにといひたれば

忘らるゝ時のまもなくうしと思ふ身を社人の形見にはせめ

いとおほつかなきまでをとせぬ人に十二月つこもり
の日

歎かては何れのひをか過ししとけふたにとひて人は知かし

さくらの花のまちとをなりと云ひて

くるゝまもしらぬ命にかへつゝもをそく櫻の花をこそ見め

こしちのかたなる人に

いそきしもこしちのなこの月はしもあやなく我や歎き渡覽

つらけれとわすれしとおもふ人に

うしとても人を忘るゝものならば已か心にあらぬと思はん

時々うらめしき人のいまはをとせぬに

其かみはいかにいひてか恨み劔うきこそなき心なりけれ

たひゝやるかへりことせぬ人に

なみかへる跡も見えねは水の上にかすかさける心ち社すれ

十月はかりとしころ久しうをとせぬ人に

をとせて秋の過行年毎にうきくもかともしらすかほなる

夜ことに人のこむといひてこねはつとめて

今宵さへあらはかく社おもほえめけふくれぬまの命とも哉

なからのはしを見て

あり覺と橋はみれ共かひそなき船なからにて渡ると思へは

水のほとりに千とりのたゝひとつたててるを見て

友をなみ河せにのみそたちるける百千鳥とは誰かいひけん

あしおほくつみあけたる船にいきあひて

芦わくる程にきに覺たつ浪の音にきゝてしこやなにはかた

しほみちぬとてふね出す所

をのれたゝみちくる汐もありけるを思人とそ我はふなつる

くるまかはにて

くるまかはいふなやなとて流れけん恐しけにも見えぬ渡を

あみひかせて見るにあみひく人ともいとくるしけ

なれば

あみた佛といふにもいほは救れぬこや助くとはたとひ成覽

風にさはりて船とゝめたる所にかいひろひてもてき

たるを見て

見る人も渚にをれはかひなしと思はぬあまのしわさ成へし

そこに風にさはりてひころありけるに

網のめに風も止らぬ浦にきてあまならなくなになかゐつる哉

かりやして濱つらにふしてきけは都鳥鳴

事とはゝありのまにゝ宮古鳥都のことをわれにきかせよ

いもねられぬまゝにさくれはきぬのぬれたるもあは

れ也

淺茅生にやとる露のみをきゐつゝ虫のねられぬ草枕かな

さくら井こゆる日

こえくれはたゝちなり覺さくらゐとなのみそ高き所成ける

月おもしろきに京をおもひやりて

見るらむとおもひをこせて古郷のこよひの月をたれ詠らん

又

宮古にて詠し月を見るときはたひの空ともおほえさりけり

しのひたる人のいとふなるきぬをきてかしかましと

てぬきをきたるやるとて

をとせぬは苦しき物を身にちかくなるとていとふ人も有覺

いとかくつらきをもしらてなむたのむといふ人に

心をはなはし物そあるよりはいさつらからん思しるやと

われも人もつゝむことある中におとこかく心にもか
なはぬ事といひけるにかならずつねにうらみらるゝ
かむつかしければ

^{詞花}をのか身のをのか心になはぬをおもはゝ物^{は集}を思ひしり南

いつもへいく人に

めもはるにかく村雲は隔つともをしはかりには思をこせよ

夕くれにとをきさくらを見やりて

匂ふらん色も見えねはさくら花心あてにもななめやるかな

秋の夜の月いといたうくもりたるに

詠れとめちにもきりのたちぬれは心やりなる月をたに見す

とをくきぬうつをとときこゆれば

いたつらにあかす月かなうらやましせこか衣を人はうつ也

久しうとはぬをいかにおもふらむといふ人に

岩の上のたねにまかせてまつ程はいかに久しき物とかは知

物おもふころあるやうある人に

身のうさをしるへき限りしりぬるを猶歎かるゝ事やなにも

こゝろうきをみるゝたのむはわか心にもあらぬに

やといふおとこに

我もわれ心もしらぬ物なれはいかゝつるにはなると社見め

よのはかなきころ夢はかり人にあひて

ある程にとひ見てし哉たえにしはいか計うきよとかありしと

あるやうある人にすきにつけて

見てはさはたつねけりやと心みんしるしにたてる杉の下門

つねなきこゝろ見はてむとてなむこのよにかくてあ

ありぬへき人もありける世間に我こそ夢とみねはたのまね

わりなくうらむる人に

^{後拾}

つの國のこやとも人をいふへきにひま社なれ蘆のやへふき

る中なる人にほとゝきすにむすひていとなかきしや

うふのねをくはせて

そこまてはきこえしもせし郭公袂にかゝるねをみてをしれ

人に

たくひなき浮身なり覺思しる人よにあらはとひもしてまし

かたらはんといふ人に

心みにいさかたらはん世間のこれになくさむ事やあるとも

四月はかりにたちはなのさきたるを

橘の花さくさとにすまへともむかしをきとふ人のなきかな

おなしころしやうふのかのすゝろにすれば

郭公しのひのころもきこえぬにまたきえこゆるあやめ草哉

物おもふころうのはなを見て

時鳥むへもなきけり卯花のをりはものこそあはれ成けり

とをき所へいぬる人をおもひやりて月に

あまの原いつも詠る月なれとこよひは空にやとりぬるかな

人しれすおもふ事あるをはらからにかくなんいふと

て

岩躑躅いはねはうとしかけていへは物思ひ増る物を社思へ

れいのものへいにし人をおもひ出て

いかならむせこかたひねの草枕いとかく露は置るしもせし

ものおもひつゝくるにかなしければ

^{續言}何事も心にしめてしのふるをいかで涙のまつしりにけむ
^{に集}
^{ぬらひ}
聞えしもきこえす見しも見えぬよに衰いつ迄あらんとす

三月つこもりに

中々にさきてちりぬる花ならはひをへて物は思はさらまし
草のいとあをやかなるをとくいにしへ人を思

浅茅原みるにつけてそ思ひやるいかなる里にすみれ摘らむ
たれわけんたれかてなれぬこまな覽やゝ蔑り行庭のむら草
そのほとのはのね覺の時鳥まつ一聲をほのかにも哉

かりのこを人のをこせたるに

いくつゝついくつ重ねて頼まゝしかりのこのよの人の心を
しのひて人にもいふ戸くちにて

しるければ枕たにせてぬる物をまきのとくちやいはんとす覽
たちはなを見てむかしの人をおもひ出て

かほる香はそなからそれにあらぬかなはな橋のみなりけり
九月つこもり久しうをとせぬ人

秋深きあはれをしらはしらさらむ人も心そたつねきてみん

かたらふ人ひさしうをとせぬに

よの人はうらみもやせむ我はにゝかゝるしもこそ哀成けれ
たひにたつ人のもとよりたきのはむといひし物のあ

りしたまへといひたれとうせにければ
徒にあれば我身もあるものをはなれむまとて人やとりけん

おかしとおもひしおとこのけさうせしがをとせぬに
ありしふみにかきつけて

跡をみてしのふもあやし夢にても何事のまた有しともなく
雪のふるひいかゝなと人のいひたれば

かきくもる中空にのみ降雪はひとめも草もかれゝゝにして
わさとうらむへき事もなき人の久しうをとせぬに

あちきなく思ひを渡る恨へきことそともなき人のとはぬを

しのひてかたらひたる人のたゝあらはれにあらはる
ゝをかゝるをはいかゝ思と人のいひたるに八月はか
りに

風をいたみゝしたはのうへに成しより恨みて物を思ふ秋萩

物へまうつときゝてもし其所へかといひたるにさな
れは

いかばかり心深くもあらぬ身もいければ谷の底へこそゆけ

おやはらからなとおなし所にはかにほかゝになり
て後たうときとするにいひやる

其中にありしにもあらずなれるみをしらはや何の罪の報と
物思ふころおもふとある人に

新勅

更にまた物をそ思ふさなくとも歎かぬ時のある身ともなし
つれゝと夕くれになかめて

同花

夕暮に物おもふ事はまさるか我ならさらむ人にとはゝや
雪いといったう降日はゝかる事ありてなんといひたる
に

忘れ草つゝむゝとことつけてしのふる雪の音もせしとや
いなりにまうてたるにみをくりつといひたる人に

あふゝも尋ねてきたる人ならはよそに見過て歸らましやは
ひころほかにてはらからのもとにきたるにふともえ

あはてことかたにあたるに
よそなるを何歎きけんあふとのある所とてあはゝ社あらめ

人の夜ふけてきたりけるをきゝつけてねたりけるな
とつとめていひたるに

後拾
ふしにけりさしも思はてふえ竹の音をせまし夜更たり共
つねにわかうへいふときく人のあふきのいとわろき

をもちたるをとりてかきつく

大方はねたさもねたし其人にあふきてふなをいひやたてまし

久しうをとせぬ人のもとよりほととぎすは聞たりや

こゝにはふたゝひみたひなむきゝたるといひたるに

一こゑもわれこそきかね郭公ことかたらはて人のへぬれは

正月一日はなを人のをこせたれは

^{新勅}春やくる花や咲ともしらさりにのそなる埋木なれは

草々に生とはきけとなきなをいつらけふたに人は摘やは

おなしころせうとにせむといひたる人の久しうをと

もせぬに

いつのまにいくへ霞の隔つれば妹背の山の方は見えぬそ

和泉式部集 第五

いかにいひたる人にかありけむ

素盞鳴の尊を祈る共なきにいとしく久かるへき床の上哉

おなしところなる人のもとかたばをきてからなてしこ

を山とならぬなむあるとてをこせたるに

かひなきは同じかきほにおふれ共よそふるからの撫子の花

五月五日くすたまをこせたる人に

ひき出たるほを思へは菖蒲草つくる袂のせはしくも有哉

またあるやうある人に奉るとて

心ねの程を見するそあやめ草くさのゆかりにひきかけね共

^{續古}

身のうきにひける菖蒲の味氣なく人の袖迄ねをやかくへき

しのひくる人のつとめて人のあらはれぬる事といふ

におなし五日

引は社のきのつまなる菖蒲草たかよとのにかねを止むらむ

おなしあさかほのはなを人のもとより

きりのまに見し朝かほの花を社けふの菖蒲はいとゝ分れぬ

そのよはやうみたる人ゝきあひてあはれなるもの

かたりなとするを人のもとよりいかにあやめのねに

よそふらんといひたるに

あやめ草そのねならねと時鳥なきこそしつれもとの人として

心うしと思人のもとより梅をゝこせたれは

むめつかは井闌の水ももる中と成にける身をまつそ恨むる

いくところなとある人雨のふるひつれゝと物かた

りなとして

見るまゝに思ふや軒の玉水ももらさぬ中とたれかしるらん
つのくにといふ所にすゝきをうへをきて京にきたる
にかのくによりおひにたりといひたるかへりことに
植をきしわれやは見へき花薄あしのほにたにいたさすも哉
もろともにゐ中へなといひしおとこさりてを女をゐ
ていくときゝて

中く

にをのれふなつるひしも社昨日の淵をさもと知ぬれ
いくかさねといひたる人に

續後撰

とへと思ふ心そたえぬ忘るゝをかつみくまのゝ浦のはまふ
うたこひし人のなくなりけるをとかうして又のひ
いかゝととひたるに

新撰古

ひとすぢ集

思やる心はたちもをくれしをたゝ下みちのけふりとやみし
月いとあかき夜女のもとより男のもとにうたよみて
をこせたりければいかむとていてたつほとにあめふ
りければつとめてやるに

こてふかと思ひておもひたちしまにさし曇にし月の通ひし
こゝちあしきころ人に

後拾

あらさらんこのよの外のおもひてに今一たひのあふとも哉

七月七日人のもとに
棚機にをとる物かはものをのみ思ひを渡るかさゝきの橋
ものへいくとて人に

何方へ行とはかりはいひてましとふへき人の有身と思はゝ
又人に

詞花
我のみやおもひをこせんあちきなく人は行衛もしらぬ物故

おやなといふことありければしのひてはらゑらとも
なとむかしありしやうにて物かたりするあはれにお
ほゆれば

いにしへのありしなからにある人も心のなしに物を悲しき
おとこのもとよりきえぬ水のあはかなといひたるに
吉野河をのかみのあはにあらね共岩うつ波はいかゝ碎くる
また人に

なかむれは思ひしらるゝ世間のうきもあはれもしる人ぞ知
人のつとめてのかへりことに

おきてゆく人の心も白露のいまゝてきえぬ事をこそおもへ
物にまてゝこもりたるつほねのかたはらなる人のか
たらはんなどいふにあすはいてなんとてかくいふ

尋すはまつにもたえしおなしくはけふくれぬまの命共かな
ゑにはなゝみといふところをかきたるに

よさの海の蟹のあまたのまてかたにおりやとり劔浪の花波
はしたてにむまにのりたる人あるところに
こまならん人はなれたり行衛なく船なかしたるあまの橋立
つくしなりける女京なりけるおとこにかならすあは
んとたのめてこと人かたらひたりときゝておとこの
いひやる

頼むとてたのみかたきは此よかないかきの松に涙はこゆ共
八月つこもり人のもとにはきにつけて

後拾
かきりあらむ中ははかなく成ぬ共露けき萩の上をたにとへ
人のかへりことに

いつとなくさのみ露けき花の上を何かは風にしらせしもせん
ほうりんにこもりたるにかたはらなるつほねよりく

新拾

たものをあふきに入れてをこせたるに

いか計つとむるもなき物をこはたか爲にひろふこのみそ
おもはずにこゝろうき事ありければなむこゝろもゆ
かぬとおやたつ人のいひたるに

慰めにみつるにこすはつきもせず憂身を耳やみてやみぬへし
山よりきたる人のよそなからはえなんとをるましき
といひたるに

秋霧はたちかくすともいもかすむならの宮古の道は忘れし

人にたのめておもひにあはれなれはいふ
頼めても憐くのみそおもほゆるいつをいつ共しらぬ命を

人にたのめて思にあはれなれば宵に物にいきてあか
月かたにかへりて物かたりなとしてとをる人に

誰となく月はみつるをけさは先思ひ起せよこゝもかしこも
つらき事なきにしもあらぬ人のあちきなくうらみた
るに

我爲に人のうきをつらからはなに事にかはつてしのはん

なま心うしとおもふ人おほかたにきたるに
うきをしる心なりせは世中にあり覺とのみ見てやみなまし
ちきりしをなむたのむといひたるに

人をこそ思ひもいてめ身のうさにつけて計は忘れやはする
九月はかりに人をそくあくとかへりぬるに

秋の夜も明てやはやむきときはまてかしまきのと計をたに
まいりたりしかと人のおはすとさゝしかは返りにし
といひたる人に

厭へ共限ありけるみにしあれは有にもあらてあるを有とや
物思ふころやまてらにてかへるとて

後拾

なにしかは又はきてみんいとしく物思ひまさる秋山寺に
いみしうものおもはむとちきりたりし人のと人かた
らひたりといひつけてをとせぬに

いひしを頼むやさらは人をもに恨はとふもありぬへけれど
たゞよひのまに人のきてとくかへりぬるつとめて
休らはてたつにたちうき横のとをさしも思はぬ人も有けん
後拾

雪のいといたうふりてきえかたにはしめて人の思ふ
事のつもりぬる事なといひたるに

いつしかたとふる雪も消ぬるにうはの空にも思ほゆる哉
かみまつる日人くきてかしはのあるをととりて歌か
きてとせむれば

神山のまさきの葛くる人をまつやひらての數はかくなる
はかなうてたえにしおとこのもとよりあはれなるこ
といひたるかへりもに

玉琴

頼むべき方もなければ
たゞにある男のとかくあらんには必きてみんといひ
たるかそのほとなるにをそくきければ
いたつらに物をそ思ふまつほとこの命もしらすけふや／＼と
おなしころとふへしとおもふにをとせぬに

玉琴

ゆくすゑと契りしをはたかふとも此ころはかりとふ人も哉
とかくあらんにはとはむといひし人のをとつれてや
みにしかはほとへてかくといひやる
契りしはあすかのふちの水なれやいつら此世に間人もなし
おなし人つねにこなたにもひさしう見えねはかくい
ふ

我故に人の中さへたゆめれとそのむくひさへおそろしき哉
二月つこもりかたに人きて物かたりなとして花の
ちりにけるさうしなといふに

いたつらにかへらん事を思哉花のおりにそつくへかりける
臚けにおしみし花の散にける枝にさへこそめはとまりけれ
これを聞て人さくらはいまさきなんちりにける花を
はなにかおもふといひけるに

まさまに櫻もさかはみにはみん心に梅のかをはしのひて
ものへいく人にあふきたひとつとらすとて
二つなき心はみには見えしとてしるし計にそふるあふきそ
また

立歸り都のかたへいそかすはいつあふものあらんとすらむ
おもへともおもはすとのみうらむる人に

まこも草まゝにわれはおもへともさも浅ましきよとの澤水
雨のいたうふるひおなしころになかむといひたる
人に

人にたにとふそあやしきいか計なかつくる我と社みれ
たちなから人のものなといひてかへりぬるつとめて
涙さへ出にしかたを詠つころにもあらぬ月をみしかな
詞花

かへされてなまねたうおもひけむよへはくやしかり
けんかしなといひたる人に

歸るへきあとたに見えすしけれは入ぬる人は惑ふ山路を
ものへいく人にまくらはことらすとて

忘らるなうら鳥のこか玉くしけあけて恨みんかひはなく共
さしくしのはこにかきて

さまくに神をそ祈るさしくしのさしはなるか心細さに

三月つこもりかたにちりはてがたなるえたにつけて
人に

散にしはみにもやくると櫻花風にもあておしみしものを
なま心うかりける人のもとへゆくに

あるほとんうきを見るたに憂物をつらき心はとめてや行
すみよしにまてたりける人いとほとへていかうなと
いひたるに

忘れ草摘ほと社思ひしかおほつかなくてなからへつれば
つのくになる人たひくふみやりしかは見ぬかとい
ひたるに

なには人なにはの事をかけりけんた此たひそみつの濱松
四月はかり人きて夜更て

夏の夜をあかしもはて行月をみにこむとたに思ひ起せよ
なといてゆくとてまつとをしたつれば女

かく計たへかたくうきまきのとをさして行方ありけなる哉
梅の花ちりてくちおしかりし人のまた四月廿餘かの
程にきたるに

今日も又なにかはきつるひとへたに散も残らす八重の山吹
おりからしたる枝はをかすやといひたれば

さてのみはやましと思へ枝をさへおりからしてそるて山吹
かたらふ人おほかりなといはれけるをんなのこうみ
たりけるたれかおやといひたりければほとへていか
うさためたると人のいひければ

此世にはいか定めんをのつから音をとはん人にとへかし
こむとたのめて見えすなりにけるつとめて

くゐなたに敲く音せは横のとを心やりにもあけて見てまし
風雅

かたらふ友たち二三人きあひたりときくにいひやる
語らはゝをとりし物をなにをいふ共いふといひかはす覽
くらき夜ほとゝきす待こゝろ

たちはなのもとにて
こゝにして待心みんほとゝきす花たち花のかをにくしとや

ほとゝきすの聲を山へにたつねにいくを聞て
時鳥きゝつときはその山のふもとに我はいへゐしつへし

物いみにてこもり居たる人のもとよりことつてやら
んほとゝきすのこゑきけといひたるに

心してきくへかり覺ほとゝきすその一聲にかよひけりやと
かならずこむとたのめしおとこにそのひ

暮ぬまの命ともかなぬぬる夜は忘れに覺とあすこそはいへ
けさうする人のきて物なといひたる程にこと人のき

ぬれはこれかれたち分るゝほとにあふきをかたみに
とゝりかへてけりつとめてはしめの人にいひやる

語らはん人もなかりつとりかふと思ひしはゝやあふき成覺
おとここれはなとかすてつるとりにたまへとりかへ

なくはあしかりなるとてをこせたる
人もなく鳥もなからむしまにては此かはほりも君も尋ねん

あめいといたうふりうらめしきことやありけんみを
しるなといひたりければ

うかる身の雨の下にもふれはなを人は身をさへ知せてし哉
五月はかりきよみつにこもりてかたはらのつほねを

かたらひていへとて御前にゐたるにいひおこせたる
あめうちふるほとなり

やかてこそかきくもりぬれ郭公なき別れつるしのゝめの空
おとこおもひしりなむとおもひしにつれなきことな
といひたれば

哀をはしらぬならねといかゝせむ只思へかしこりすまにやは
月いとあかき夜人のもとよりその人ともわきてまた

しかしといひたるに
皆とに君をこそまてこと人は

人のふみのあるを見て六月はかり
にはのまゝおふる草葉を分きたる人も見えぬに跡社有けれ

いまはほかにときく人のもとにゆふくれにいひやる
^{玉葉}夕くれは人のうへさへなけれぬ待れし頃に思ひあはせて

七月一日人に
今宵より誰を待ましいつしかとおきのはかせは吹むとす覽

秋花とものさきたるにやますけのさきたるをみて
をとぎけは人の物思ひやますけの心みかほにさける花かな

人のもとにその夜
たゝにしもほしあひの空を詠しな天の河風さむく吹也

いとつれゝなる夕くれにはしにふしてまへなるせ
んさい共を唯に見るよりはとて物にかきつけたれば

いとあやうこそみゆれさはれ人やはみるちゐさき
まつに

のちゝもまつばかり社しのはめと恨むるよりも頼しき哉
たけ

ありし人あらはきなまし風吹はうへうちをよく竹のよとに
かしは

柏木はやとにほりうへむした草をかりに人くるなのみ也覺

はき

今さかは人もきてみむ秋はきの下葉の色はわれのみそみる
やまふきあやしう咲たるところなり

かはつなく井手にならへる山吹はむしの聲する秋も咲けり

まゆみいろつきたり

さくよりもまたきまゆみの色つくは秋に入日に露や置らん

あうすち

こつたひしむめをは置いてこれたにも驚のきとひとしいふ覽
のきのくものい

思はしを荒たる宿にかき暮すくものいかに風したまらは

七月七日たなはたまちとをにおもふらんと人のいひ

たるに

ひこほしは思ひもす覽中／＼に秋は今宵のなからましかは

この頃ものいふこゑを立きゝて人の聞えんなどいひ
たるに

萩の上に露をさそへし鴈金のうはの空にもきゝてけるかな

なき事をひてなけくと聞てわれをあまかつにせよと

いひたるに

あまかつにつくともつきし憂事はしなとの風を吹も拂はむ

おさなきちこの病みけるをあはれとおもふへき人の

聞ていかゝといひたる

いかばかりおもひをくとも見えざりし露に色へる撫子の花

いまよりはちよそへんといひたるに

ちよふへきこまつときけは今よりは只朝夕のくさと頼まん

ぬれ衣をのみきるといまはゝらへすてゝむと人にい

ひてのちいかなるゝとありけんなをこりすまのわた

りなりけりといひたるに

かさねつゝ人のきすれば濡衣をいとをしとたに思ひ起せよ

このころ袖の露けきなどいひたる人に

秋は猶思ふもなき萩の葉もすへたはむまで露は置けり

人にしたくつれたるといひたるにそなたなん疑かは

しきといひたるに

そなたより涙かく共今はよに我かたききしの松はこさせし

うしろめたな心あるをわかこゝろそへてみてしかな

といひたるに

引かへて心のうちはなりぬとも心みならはこゝろ見てまし

はりまのひしりのもとに

舟よせん岸のしるへもしらすしてえも漕よらぬ播磨かた哉

しくれいたうふる日はやう見し人に

ひまもなくしくれ心ちはふりかたくおほゆる物は昔成けり

こそその春いし山にまうてたりしに山中にとまりて休

みなとせしをまたのとしの秋まへを渡るにさそかし

と思ふにあはれにてとはすれば人なしすゝきそなさ

けなけにすくみてたててにかきてむすひつく

すきゆけとまねくおはなもなかり覺衰なりしは花のおり哉

みちのくにのかみにてたつをきゝて

詞花

もろ友にたゝまし物をみちのくの衣の關をよそにきくかな

むめさくらいつれおもしろしと人のいふに

櫻より色はさこそはふかゝらめかさへとなりくれなるの梅

さりにけるおとこのとをきとこゝろへゆくをいかゝお

もふといひたれば
千載別れても同じ宮古にありしかはいと此たひの心ちやはせし

雨のいといたうふるころ

新勅

いかにせん雨の下社すみうけれふれは袖のみまなく濡つつ
櫛中納言の屏風のうたさくらさきたるいへにまらう

とおほかり

植しうへはかゝれとそかし櫻花みにとて社は人のきつらめ

まつにふちかゝりたる所人々おほくよりて見る

とはふちちて千年をすくさ南松の常盤にきつゝみるへく

人の家にきんひきふえふきてあそひしたり

笛のねは紅葉をふくにあらねとも響にえたもうこくつき哉

いとほかなきところにて人に物いひて

現こそはかなかりけれ夢をたにいてこそ人は見ると云なれ

花山院哥合七月七日

あまの原今宵なかもぬ人をなきこひの心をしるもしらぬも

人のかへりとに

新勅

よの常のとも更におもほえすはしめて物を思ふあしたは

干鼓 まつとて

ゆふくれにきこえさする

またましもかはかり社はあらましか思もかけぬけふの夕暮

とりのこゑにはかられていそき出てゝにくかりつれ

はころしつとてはねにふみをつけてたまへれは

いかゝとは我社思へ朝なゝなをきかせつる鳥をころせは

月あかき夜あるやうあり

ひと夜みし月そと思へと詠れは心はゆかすめは空にして

人のかへりとに

君を社末のまつとは思ひしかひとしなみには誰かこゆへき

人

あふ事はとまれかくまれ歎かしを恨みたえせぬ中と也せは

月あかき夜人に

心見に雨も降なんかとすきて空行月のかげやとまると

れいのかへりとに

袖のうらにたゝわかやくと汐たれて舟流したる蟹と社なれ

七月七日

詠らん空をたにみす棚機にあまるはかりの我身と思へは

人に

ねさめねはきかぬなる覺おき風に吹らん物を秋の夜ことに

徒然と秋はひころのふる儘に思ひしくれぬあやしかりしも

いてゝきこえさす

山をいてゝくらきみちにをたつねこし今一度の逢事により

風ふき物あはれなる夕くれに

秋風はけしき吹たに悲しきにかき曇る日はいふかたそなき

うとゝしううち曇る物から雨のけしきはかりふる

はせんかたなくて

秋のうちに朽はてぬへしとはりの時雨に袖を誰にからまし

消ぬへき露の我身はのゝみそあゆく草はに悲しかりける

露まゝとろまてなけきあかすに雁の聲をきゝて

まゝとろまてあはれいくかに成ぬ覽只雁かねを聞わさにして

九月はかりあり明に

新勅

我ならぬ人もさを見ん長月の有明の月にしかし哀は

彌干

よそにてもおなし心に有明の月を見るやとたれにとはまし

人こひしきに

おしまれぬ涙にかけてとまらん心もゆかぬ秋はゆくとも

君ををきていつち行らん我たにもうき世中にしゐて社ふれ

人のかへりとに

あさのまに今はひぬらん夢はかりぬると見えつる手枕の袖

おなし人の返とに

道しはの露とをさゐる人により我手枕のそてもかはかす

本云

右從_レ一三迄者。京極黃門定家卿以_ニ自筆本_一令_ニ書寫_一。從_レ

四五迄者。民部卿局以_ニ眞筆_一寫焉。即時再三校合畢

右和泉式部集得一本校合了

群書類從卷第二百七十六

和歌部百卅一 家集四十九

相摸集

いとわれはかりとのみおほゆる。あつきの袖にくちはてにける深山木を。いかにとはかり。小高き陰もやと。たのみしおりは。残りゆかしう。花もみ 雨かせにつけても。おのつから散る言の葉をかきをきたらは。みくす。によらん流れなりとも。淺きかたにやと。せきとゝめてしを。あいなう袖に涙のかゝりける身にと思ひしらればはてぬる折しも。面なきことを。今更に心もなき水莖のあとにまかせて。あらはしてんも。いとうしろめたけれど。けふや我世のとのみ物哀なる露の命にをくれんなかに。もし思ひいてん人もしあらは。人しれぬ形見ともなれかしとてなん。忍ひもはてすなりにける。昔のことをは忘れはてにければ。いまさらのをたにもと思ふほとも。なをふるめかしき。

寛弘二條の御時はかりにや天王寺の哥とて人々よむ
おりのありしに西大門

こくらくに向ふ心はへたてなき西のかとよりゆかんとぞ思
かめ井
千世過てはちすの上のほるへきかめ井の水に影は宿さん

ふね

うき島に港をいかてはなれけんのり通ひける舟のたよりに

塔の君

みかきけるこかね變らぬ塔を社君かはたへの形見とはみれ

佛しやう

はひきえてわかちし玉もつとむれはいと光をかす増ける

弓

おもはすにあたや佛と成にけん法になひきし弓にひかれて

おかみのいし

おかみけるしるしの石のなかりせは誰か昔の跡をみせまし

くろこま

のかふかなかひの黒駒はやめ劔法にはにもあはぬ我身を

いけのはちす

人しれぬ涙はつみのふかき哉いかなる池のはちすおふらん

ある所に庚申のよ天地をかみしもにてよむとてよま

せし十六百春

浅みとり春めつらしくひとしほに花の色ますくれなるの雨

つきもせぬ子日の千世を君かためまつひきつれん春の山道

ほかよりはのときき宿の庭櫻かせの心も空によくらし

そのかたと行ゑ知るゝ春ならはせきすへてまし春日野の原

夏

やとちかき卯花かけは波なれや思ひやらるゝ雪のしらはま
かたらはゝおしみなはてそ時鳥聞なからたにあかぬ聲をは
みしまえの玉えのまこも夏かりにしけくゆきかふ遠近の舟
瀧つせによとむ時なくみそきせん汀涼しきけふのなてしこ
關

冬

虫のねも秋すぎぬれは草村にこりゐる露のしもむすふころ
このはもる時雨計の古里は軒のいたまもあらしと思ふを
えこそねゝ冬の夜深くね覺してさえまさる哉袖のこほりの
枝きむみつもれる雪のきえせねは冬とみる哉花のときはを
小一條院に和歌十首人の許によりしをみてしのひて
心みんと思ひしかともまねふへくもあらずこそ七月
あまの川をわたる

ほともなくたちやかへ覽七夕のかすみの衣なみにひかれて
天川かけみにわたるたなはたの月のかゝみはくもらさる覽
草村の露玉ににたり

玉のをの亂れたるとて草のはをむすはゝ袖に露やこほれん
あさことの草はの露とみるものを忘れてをける玉かとそ思
秋かせ

ひとへたにあつかりつるを夏衣かさねきるまで秋風そふく
あさきり

花みるといそきおきつる我よりもまつ朝霧のたちける哉
をみなへし

野へことにおりこそつくせ女郎花伏見の里はむくらはふ迄
我宿のはきの下葉のけしきまで秋は色にもいてにける哉

ゆふつくよ

あかすとしてうらみしもせし夕つくよ有明までも我を待みん

せみのこゑ

したもみち一葉つゝちるこのしたに秋ときこゆる蟬の聲哉

いはひ

まなつるもおりゐしかたの松原にいくその千年敷をしる覽

こひ

いかてかはあまつ空にも霞むへき心のうちにはれぬ思ひを

人のしるへきほとにもあらぬことを残りなくふみよ

りはしめてあらはすとさく人にこりすまにちかくと
りよせてよひゐのてならひにかきつくる

いかにせんくすのうら吹秋風に下葉の露のかくれなき身を

いかにせんとかりの原にゐる鳥の恐しき迄かくれなきみを

いかにせんときてもみえぬうたゝねの夢計たに隠なきみを

いかにせん我濡衣の色ふりてあしのしたにも隠れなきみを

いかにせん沖こく舟のしるゝのみ波に浮きつゝ隠なき身を

いかにせんしほひの磯の濱千鳥ふみ行く跡も隠れなきみを

いかにせん人も渡らぬこひ川のあとに流れて隠れなきみを

いかにせんほとなき袖のこもり江に沈める戀の隠れなきみを

いかにせん山田にかこふかき柴の暫のまたに隠れなきみを
よそなからにくからすみし人のをとせさりにしに

逢事のなきより豫てつられればさそあらましにぬるゝ袖哉
おほえなき人のせうそこをあやしかり聞えたりしか

は

かすめても何かいふへき朝緑うはの空なるとならなくに

かへし

かすむるも覺束なしやあさみとり春にしられぬ埋木にして

さしもあるましき人のかならずこん待てとありしか
は

頼むるを頼むへきにはあらね共まつとはなくて猶や待まし
時鳥の聲を夜深くきゝて

きかてたゝねなまし物を時鳥なかゝなりや夜はの一聲

ゆふやみにとたのめたりける人にあはて六月ついた
ちにをとつれたる返事に

五月雨の闇はすきにき夕つくよほのかに出ん山のはをまで

とはかりいひやりたりしかは三日はかりありてその
人の許より

有明の心地こそすれよひ／＼にまつにひさしき山のはの月

かへしれいならず人のもとにありければ

しら露にまさるゝよひの月影は有明よりもめつらしき哉

はつかあまりのころ物こしにわりなきさまにてあひ
たりけるあしたに

身をつめは哀とそみし夏のよの有明の月のいりもはてぬを
かへし

明かたに出にし月も入ぬらん猶なか空の雲そみたるゝ
また

くるすのゝひむろの氷いつ迄か結ほゝれつゝとけしとす覽
かへし

草深きひむろの氷埋もれてしたにきゆともとけはてめやは
まかりあはんといひし人に。月比をまで。かならずあ

はんといはせたりければ。またいつらこれもやすき
ぬへきなど

あふとをたのめぬにたに久方の月を詠めぬよひはなかりき

かへし

なかつゝ月にたのむる逢事を雲にてのみすきぬへき哉

七月七日人の許より

逢事をおほつかなくてすくす哉草葉の露のをきかはるまで

返事

いとゝしく覺束なさやまさりなん霧たち渡る秋のしるしに

八日かへりかちなるおりにや

かへさすはかさまし物を七夕にあひてもあはぬのちの心を

かへし

七夕にゆかしきほとん逢事はまつもかへすも物をこそ思へ

いとひかすとして

たなはたの糸にかけてもくるしきは心の内のみたれなり覺

てならひに

たなはたも哀は空にしりぬらん物思ひまさる秋のこゝろは

なにとなく物むつかしければ思ひむつかりたるに人

のかへりことに煙も涙もとのみいひやりたればまた

たちかへり

さかみにはあり共いはす富士の山烟もなみもなにゝかく覽

かへし

いつことも思ひそわかぬ富士の山みを離れたる烟ならねは

又人いかなるおりにか

うつゝとも夢ともなくて明にけるけさの思ひはたれ増る覽

返事

みぬ夢もあらぬうつゝもをしなへてくたすや袖の涙なる覽
ものへまうつるに心地れいならずおほえければ。道
よりかへるに。諸共にまうつる人につけて。みてく

らのかざりをたてまつるとて心のうちに

心にはさしも穢れぬみてくらをおはたしめの斯な咎めそ

かへりても猶なやましければうちなげきて

きのふけふ歎く計の心地をはあすに我身やあはしとすらん

夜いとふかう更けてきたる人にあはてみちのとをさ

もいとおしければ

なをさりにきて歸るらん人よりはをくる心やみちに惑はん

ある所にいつこともなくてさしをかせし

いかにして忘るゝ事を習けんとはぬ人にやとひて知らまし

宮つかへ人あまた出るたる所にわたりたるころ。あ

はんといふ人を大かたにたちあるやうにて。いさも

やといひしに。なをく忍ひて。かたへには知らせ

てとのみいひしかは。すへきかたもなくて

みやきのゝ風の便によそへすは露のもるへきかたのなき哉

かへし

露はよも露もゝらさしみやきのゝ萩の下葉のひまはあり共

八月十六日はかりに。よひの月はみきや内になんさ

ふらひしといひたる人に

かきくらしわかみぬ秋の月影も雲の上にはさやけかりけん

野わきいみしうしたる日ゆるきの森はいかゝと人の

とひたりしに

ありわふる身の程よりは野分する浅ちか原の露はのとけし

同日

はやち吹く茂みの野らの草なれや起ては亂るふせは片寄る

虫のこゑくをきゝて

いかにして物思ふ人のすみかには秋より外の里をもとめん

あめなか月はかりうちつゝきひまなきころ

人しれぬ思ひのみかは大空もさみたれならぬさみたれそ降

軒のたま水かすしらぬまで。つれくゝなるに。いみ

しきわさかな。いしたのかたにも。すへきわさのあ

るにと。おのか心くにしつのをのいふかひなきこゑ

にあつかふも。みゝとまりて

雨によりいたのわせも茹ほさてくたしはてたる比の袖哉

またこれすゝしき風

もみちほもこけのみとりにふりしけは夕の雨を空に涼しき

風のさはきにをとつれたる人の久しくなりにければ

荒かりし風の後より絶ぬるはくもてにすかく糸にやある覽

九月八日のよ物いひて曉にいてぬるを。そののちい

かてとまつに。さもなくて二日はかりありて。をと

つれたりし返事に

こゝぬかの菊をとてや過くすへき露の置たるあしたともイ之晝

といひたりしかは

初霜にうつろひ易き花なれはきくにつけてはとはしと思

なか月のはつかあまり時雨おかしきほとの夕くれ

に。ある所にさしおかせしとしころのまき懸たの方

を去りてはなれるたまへりときゝしかは

人しれす心からにやしくるらんふけ行秋のよはのねさめに

いかてきゝ給けんひさしくありて彼より

年へぬるしたの心やかよひけん思ひもかけぬ人の水くき

つかひ人とゝめて返事

もりにけんいはまかくれの水くきに淺き心をくみやみる覽

人の許より身つからは外にてをといはせしをおもひ

いてたるにや

初霜のをきふしそまつ菊の花しめのほかにはいつか移ろふ
かへし

をきそめは霜枯ぬへき色をみてうつろひかたきしら菊の花
風いたうふく日梢のこらすありしにある所に

言のはにつけてもなとかとはさらん蓬のかとも分かぬ嵐に
返し

やへふきのひまたにあらは蘆のやの音せぬ風はあらしとをしれ
又かへし

こやとても風に靡かはくゆりつゝあしひの煙たちやまさ覽
皇太后宮うせさせ給ひて又のよ月のいみしうあかき
をみて

あめの下雲のとかにもあらぬよにすみても見ゆる秋の月哉
大たにゝいて給しに御送りの車などの打つゝきたり
しかいみしくあはれにて

哀君雲のよそにも大たにの烟とならんかけをやはみし
そのころかの宮の宣旨のもとに

とはゝやと思ひやるたに露けきにいかにそ君か袖は朽ぬや
返し

涙川なかるゝみをとしらねはや袖はかりをは君かとふらん
十月になりて同宮の人のなかに誰ともなくてさしを
かせし

神無月しくるゝころもいかなれや空にすきにし秋のみや人
返したつねておこせたりし

言のはをみるにつけても神無月いとゝ時雨をふり増りける
なか月の末つかたあはんといひたりし人のみえさり

しかはつこもりかたに

たのめしをまつひかすのみすきぬれは猶秋はつる程を知哉
いかなるおりにか人のもとから

さりとてはとけぬ物から中／＼によはの時雨の驚かすらん
返し

おとろかすしくれの比か神無月うちとけてやは夢をみる覽
あやしきこといひつけて。さるへき物ともなとした

ゝめて。けきやかにほかへいにけるのちに。うつろ
ひたる菊さかりにみゆるころ。むつかしきゆかりに
て。とき／＼通ふ若き人のゆへなからぬか立よりて。

いかにまた人は外になと問ひしついでに。この花を
めとゝめて。たゝには過ぎかたくやありけん。かく
いひし

植をきし人の心はしら菊の花よりさきにうつろひにけり
かへし

うつろひし残りの菊もおり／＼にとふ人からそ哀なりける
さかりすきてくちたるなしを。おさなき人の許にや
るとて。たゝならしとて

をきかへし露計なるなしなれと千代ありのみと人はいふこ
かへし

露にてもをきかへてける心さし猶ありのみとみるそ嬉しき
神無月はつせにまうつるに稻荷のしものみ社にてみ
てくらたてまつる

殊更にいのりかへらなり山けふは絶せぬすきとみる覽
あとむらといふ所にやとりて鹿なく

鹿のねに草の庵りも露けて枕なかるゝあとむらのさと

すかたの池にて

行人のすかたの池の影みればあさきそ底のしるしなりける
良因といふてらにてふるの社の紅葉をみる

よしみねのてらにきて社千早振ふるの社の紅葉をはみれ
ならの鳥居のまへなる木ともにかけたる物おほかり
何ならんならの社の榊にはゆふとはみえぬ物ぞかゝれる

まてつきて房のまへに谷ふかくもみちの多かるをい
つくそととへはなへくら山といふ

春ならて色もゆはかり焦るゝはなへくら山のたきゝなり覺
たかふちといふ所あり

旅人はこぬかあり共たかふちの山の雉子はのとけからしな
そうこといひつくて久しくみえぬ人に

ありふれはうき世なりけりなかつらぬ人の心を命ともかな
はやうみし人のむまにてあひたるに

綱たえてひきはなれにし陸奥のをふちの駒をよそにみる哉
かへし

其かみも忘れぬ物を蔓ふちのこまかならすもあひ見ける哉
まつりのかへさ見て又の目六はら密の説經きゝにま

うてたるにきのふ紫野にみえし車のかたはらにあり
しかはこととはてゝいつとて葵をやるとして

きのふまて神に心をかけしかとけふ社法にあふひなりけれ
されはよとのみみゆれは

忘るゝを歎くもなにか憂身には兼て思ひしことはりそこは
袖のしづくも見苦しうひきかくされて

あやしくもあらはれぬへき袂哉忍びねにのみぬらすと思に
をのれけふたきはけにこそ

かきつめて胸のあまりにくゆる哉こやいかなりし中の忍そ
わりなかりし所に菰といふ物をあたり近くひきたり
しも忘れかたきふしにや

あやめにもあらぬ眞菰を引かけし假のよとのも忘れぬ哉
したゆふもさなからほとへにけれとつゝましきこと
のみあれば思ひたつ事もなくてさすかに

諸共にいつか逢へきあふことのかたむすひなるよはの下組
文ともあたゝしうちらすときゝし人をほいなしと
恨みたりしかは彼より

常盤山露ももらさぬものはのいろなるさまにいかてちる覽
とあらかひたりしかは

色かへぬ常盤なりせは言のはを風につけても散さましやは
大方ふみを皆かへしむといふをさもあらて奈良ま

てなんもてかはしてみるときゝてなをこゝろつきな
うて

水壑もあとたへねとやまかせつゝたつたの川に流しはつ覽
返し心やましようこそ

流すにもせくにもあらす水壑のたえんかたみと思ふ計そ
返事

絶ぬへき形見と聞けは水くきの岩間をなにゝもりはしめ劔
また人のもとより

戀しともえこそいはれぬ中々にいはゝ愚になりぬへければ
かへし

忍ふるに餘る思ひも有物をいはぬにみえぬいひかたきとは
月いみしうあかさ夜

人しれす人またさりし秋たにもたゝにるられし頃の月かは

いなつまのいそかしきをみて

いなつまは照さぬ背もなかり晁いつらほのかにみえし蜻蛉
はらからとのみいふ人のせきのひまあらむおりはと
いふもあやしければ

東路の其はらはきたりとも逢坂まではこさしとぞ思ふ
ちかう見ゆる人のよるつに心もゆがすおほゆれはう
ちなげかれて

我乍ら我身をいかになしてかはみゆるに見えつ身をはずへき
いかてきけん昔ふみをこせし人のもとより

獨りぬるおりもやあると人しれす心のうちになけきつる哉
返し

なれもせずぬきかへもせぬ片敷の袖をはかけて誰かとふ覽

昔かたらひし人遠き國より登りて訪つれさりしかは
女かたへにあり

神かけて頼みしか共東路のことのまゝにはあらずそ有ける
道にことのまゝの明神といふ社のあたりに。旅人のや
とりければなるへし。

かよふ所ある人のほかよりくるまゝにきくもあるは
まもかといひしかは

待つ程の袖たにうきをなにとてか思ひもよらぬ濡衣をきん
ところせけならん戀の哥ふたつはかりよみてえさせ
よと人のいひしかは

ひとあるこしな

かまと山口かしまともすればもゆるしくるし心つくしに
つきもせず戀に涙をわかす哉こやなぐりのいてゆなる覽

いみしう思ひける人を筑紫にやりたる人の語はんと
いひければさりともしき森にはえやならはさら

んと思ふこそつゝましけれどもなとやといへる人に
これより

東路のたまのわたりは玉敷のかたはしにたにあらしとぞ思
心くらへにてすくしける人をかたらひそめてのちう
ちつけにをとつれしにたえまあるほとにこれより

いひ出ていへて絶るもよそ乍ら見えてそみつる人の心を
いかにきくやうありてにか人のもとにきこえたりけ
る

ゆきかひの道のしるへにあらましを隔てける哉足柄の關

とあるふみをさるたよりありて人のみせにをこせた
りしのちかれよりふみたえたるやうなりしかはさい
はれしもとの人に

なのみしてあと絶に晁ゆきかひの逢坂ならぬほかのせき道
返し

ゆきかひのあふ坂ならぬ關道は絶けんあとのかひやなか墮
しるへにならましをといひたる人は殊更になみこえ
にけりときしを猶もとの人もたえすなん通ひ給と
きつてたゝならしとて

あら磯のみるめは猶やかつく覽末のまつまてなみたか、共
返し

あら磯の底のみるめをかりにてもよゝ恨みけん蟹をしる覽
又かへし

うらまてのみるめかるへきかたそなきまた波馴ぬ磯の蟹人
この人を時これより驚かしなとせしを。あらいそ
の人たつねきて。心えぬさまに男かたからはかくし
給ぬ物を。へたてたるおこかましなとやうに。いひ

さはくときゝしかは。かのもとの人に。かくいはまほしかりしあら磯も。しほやく煙になりしほと的事にや

をとなしの山に社ゆけ呼子鳥よふとは人にきかすへしやは堰難きなこそもあるをしほ浦のよひさか迄もかゝりける哉あさま山かすむけしきはしるくとも袖に煙の猶やたつへきいはせ川水社すきて速からめかきつくしきと聞くを危うきみしまえを舟出し人もおりゝの波のなこりに袖やぬる覽うき世をもたればかりにか慰めん思ひしらすもとはぬ君哉かさまきはして。こまやかにやりてしかは。あやしう見ときかたかりしを。なめけなりとて。つゝみかみにかきつくる

狩人はとかめもやせん草茂みあやしき鳥のあとのみたれをふみをこするほともなくみつからあはすとて人のむつかりしに

信濃路やいなやいかなるかけ橋をふみもならさて先渡り南家のうちにふしてある人のもとに忍びて人のきたりけるを便なき程にてえ遇はさりければよへはくちなしの下にて明しつることゝ恨みたるふみをみせていかゝいふへきと人のいひしかは

梔子の木のもといかに答へまし主は誰そと人のとひせはものより上りしにみのゝ守何事にか關かためてしはしあらせしをこれも同じほとに上りあひて京にていひたりし

あふ坂を君もみしかはいとゝしく今より後はたのまるゝ哉返し

逢坂もゆるさしと社思ひねのせきはかたむる物としりにきめのくにゝあるほとにふみおこせし返事をせねは此頃は人のつらさも獨していふきのたけもかひなかりけりかへし

色深きをやまのまつをかきたからなにあた事をいふき成覽遙なる所なる人のにくき事なんあるときゝしかはひとりまつ君ならね共うきをきくはわれのみ歎かしき哉あはんといふ人のもとに渡りたるに門をとみにあけさりしにからうして入て二日はかりありてかへりにしのちこれより

から國のみかともかくや歎きけんわかれの後の戀の侘しき返し

まほろしの雲のいはとをたゝき劍夕の空におとりやはせし年わかき男のわれにまさりたる人の女をおもひかけてかゝる人ありとしらせんさやうにいへつへき事とせめしかははなれぬ人とときゝて

みなれきにしほやくあまのほとよりは煙の高き物を社思へいひ出ては聴てなきなになりぬ共忍ひはつへき心地社せねちいさき小手はこそを人のおさなき娘の許へやるとてよませし

明暮は袖うちかけてはくゝまむ我こてはこになり心みよ返しおや

袖かけていはぬ先より人しれす君かかけこになりぬとを思綾織になたちし人を思ふて通ひしころとがむへき人のもとにやりし

ふみ繁み綾に織りたつ糸によりこちくるとはた思はさら南

返事なたかき人の御さかしらなるへし
いつくにかよるらんとのみ白糸のあやしかりけるふし處哉
返し

わくらはにまねくるふしや絶なましいとあやまちの繋ぐみゆれは
かくいひかはす人の家は。これより北なるへし。そ
のなか垣をへたてゝ。いと忍びて。いく所あるを。

家上なる物語ひて。思ひはなれたるさまに見えな
から。なをこれよりも。うち忍びまきるゝおりありし
かは。隣のあはれたるかたにやりし

いつとなくなみやこす覽する松まかきのしまに心せよ君
かへし

誰もその同じ波にしかけくれはたけくまならぬ松と社みれ
返し又はたはのりことになりけるにや

思ひたにかけぬもの哉なみゝにいはるへしとは高砂の松
又かへし

高砂と思ふへしやはあた波のよなゝよする汀ばかりを
これをきゝて。ゑしたる人

白波のかけおりてのみ年ふるはみな住吉の松にやあるらん
この人ゝかよふ人ゝあまたあるなかに。昔おやの方
のたよりにて使ひけるものゝ。まめやかなるをも忍
ひつゝかよひければ。誰もさるかたのあやしの物と
みゆるしたるを。なにことにかありけん。たなはた
がいみしう腹たち恨みこめたるふみこそみえしか
と。このたかさことなる人の八日をこせたりしか
は。これよりやりし

露やいかにける物にもかゝり劍機織めさへ告むはかりに

又忍びのなか垣のふみにや。こなたもあなたも。つ
ゝましければなと。こと多く書きつけたるほくの
えしかは。裏にかきつけて。れいの人にやる
さまゝになにへたつ覽北のかた今はあれゆく南はかりを
返し

我は西君は南といふめれとあれにしきたのきたのかたにて
またこれより

南よりにしにはゆかむさりかたき君社なかの北のかたなれ
人のもとにてあまた人ゝ

ねまちの月をふしてみるかな

といふもとをなんつけつるときゝて
いさよひもたちまちにやはいつるとて

九月の朔に人にもいふおりに。夜いとう更けて。
ほのかにかりのなくをきゝて。すくしてもあるへき
に。かれきけいかゝといふ人のありしかは
心そらなるたひのかりかな
また人

一聲もきかぬねさめはなけれども
さやはいはむと思ひつると心の中に

めつらしき聲ときけともさ夜なかに
きりゝゝすのいと近うなくをきゝて人

かへちかくなくきりゝゝすかな
といひしかはまたひんかしおもてにありし人

夢にてもぬることかたき秋のよに。
いとゝしくおきふすことの露けきに

もみちに山寺にわたりたるほとまらうときて人も

なかりけりといひて。もみちの限りをなんおりて歸りにけるとき。その人にいひやりし

君へき折としりせは故里の紅葉をのみそみるへかりけるしはすのついたちころにいみしう色こきもみちをふみのなかにいれていひたりし

みる人もなき我宿の紅葉は風たにしらぬ物にそありける

返し

吹風ものときき宿のしるしにや紅葉なからもときはなる覽つの國にすむこやの入道哥物語などおほかたにいふ人なりけり門のまへをわたるとていそくことありてえまいらすなにかいひたれば

なには人急かぬ旅の道ならんこやと計もいひもしてまし

ふくにおはする人のゆかたひらの袖を鼠のそこなひたれはときかへてふるきはとまるをみるもあいなうあはれにて

ぬきかふる袖をつたへてふちころもみるも涙のたよりと覺

人のおやの服ぬくとて河原にいてしに我もそのゆかりにおひをせさせたりしにやかてすつともろともにてたりし人はおりてはらへなとすめり車よりおひをいたすとて

藤衣ぬく人ましていかならんおひをとくたに袖はぬれけり

うちわたりに思ふ人ありときし人に秋ころ

九重の雲路にかよふ玉章はかけてまつこそひさしかりけれ

亭子院の説經ひと諸共にきかへる道にしりたる車にて人のまうてたりけるをそれなめりと思ひていひやりし

行末もかけはなれしなりの道めぐりあひぬるみつの車は

はかなきことにむつかりし人あやにくに物かたり哥などありける限りあさりいて、皆焼きてしをせむかたなくて歎くころ近くてきく人のいかにそといひたりしかは

〔お無〕

あきはて、跡の煙はみえねとも思ひさまさんかたのなき哉

かゝることきたらんと思ひし人につれゝのわりなかりしかは

あら磯のあまはやけともこりすまに猶かりつへき物語り哉

返し

あま人は又も社やけこりすまになにかりつむる物語りかは人のもとより

心からくるしき物を思ふ哉かゝらさりせはなけかましやは

返し

ふかゝらぬ人の上まで苦しとやうきみにそへて物を思はんたえまかちなる人いかて對面をかなといへは

わたらしや磯の懸橋ふりぬたにまとをにみゆる中の景色をなにとにかあらん物思ふ女の集とておほえなきことゝもを書きいたしてこれみしりたらん残りかきそへてかならすみせよと人のをこせたりしかは

汐たれてよそふるあまもこれは又かき劔方もしらぬ物をは

とてかへしやりたればたちかへり

よさの浦に藻鹽草をは搔つめて物あらかひは拾はさら南

返し

うきめかる心ならひに鹽すきてうたかひたえすよさの浦人ふつきの八日あかつきに風の哀なるをきのふの夜よ

りといふことを思ひ出て
曉の露は涙もとまらてうらむる風の聲そのこれる

包むことありてたまさかにみゆる人しつ心なくてあ
はたしき心地のみすれば思ひたむもうるさうて
こまにかいひけんやうに

逢事そやかて物うき曉の夜ふかきをわれおもひいつれば

よそなる人のいかてみつからとのみくりかへしかき
たるふみのはしに

逢事は猶よそ乍らなからへよとく忘れなはとくやなけかん
返しきく事のありしとて

忘るとも行く覽方を思ひてはとまらぬ人はあらしとをしれ
ねたさにたち返

ゆく方もとむめる道もまたしらぬ程になきなわたちにける哉
これよりいかてこれか答のやうなる事いはやと思
ふほとになをかくつれなくてやみぬへきなめりと恨
みしかは

放れにし駒のおりにも我ならぬ人をはえ社なつけさりけれ
返し

はなるれとあらふる駒のなき物を君か心はなつきしもせし
また

引かへてなつけむ駒の綱たえにいかのかひの人はみるへき
人のもとより

いかにせんみこもり沼の下にのみ忍ひ餘りていはまほしきを
返し

うきてのみ末も流れぬ沼ならは影みるおりもあらしとそ思
常にしもあらぬ女とち長月はかりのよるあひて。よ

ろつの物語りするに。この人もとしころの人に忘ら
れて。そのなけかしさいひ。われも常よりことに思
ふ事ありかしなとかたりあはするおりしも風ふくお
りにありしかは

我もこひ君もしのふに秋のよは

思ひいらたるにやものもいはねは

かたみにかせのをとそ身にしむ

人にもへたてゝあひてかへりてつとめて

有明の月はなかもし今よりは物思ふつまとなりまさりけり
返し

山かつの垣根のこかけかけみねとものにし月を哀とそみし
袖ふれてなれぬ中にもから衣さてのなこりは物を社おもへ

かたをかの岩ねのこすけ今更にみたれやまさん人に靡かは
おとこ

かへせ共うらめしからぬ心哉夏野のくすのうらはならねは
かへし

をたまり暮の裏葉にあらね共歸らぬ野へはなしと社きけ
この人にふちなとたつねをきてあはんといひしかは

流れいてんうきなにしはしよとむ哉求めぬ袖の淵はあれ共
れいの人

白波は立よりくれとかひもなし人をみるめはおひすと思へは
かへし

いかてかはいかこの海に昔より人のみるめを人のかるへき
よになくなりたる人をおとしやせまし山川の瀧とか

やといふことやありしむつまじかりけんかしとつね
にいふ人のありしかはむつかしくて

うたかたのきえはつるまで濁りなく音にはきゝし山川の水
いかなるおりにか人の
かたしきの袖はかさねぬ物ゆへにおりゝ風の驚かすらん

返し

風の音も身にしむ計り寒からてかさねてましをよはのき衣
つねよりも思ふ事あるおり。心にもあらで東路へく
たりしに。かゝるついでにゆかしき所みんとて。三
年といふとしの正月菖根にまうてゝ。なにこともえ
申つくすましようおほえしかは。道にやとりてあり。

つれつれなりしおり。心の中におもふことを。やか
てたむけの幣をちいさきさうしにつくりてかきつけ
し百なから。みなふるめかしけれとも。やかてさしは
へて。けしきはかりかすむへきならねは。まことに
さかしう心つきなきことおほかれと。俄なりしかは。

社のしたにうつませてき。精進のほとは。ときとい
ふ事をそせし。初春五首

春山に霞たち出ていつしかと時のしるしやありけんともん
春くれはたにかくれる驚もみやこにいてゝなかとそ思
思ふことひらくるかたを頼むには伊豆のみ山の花を社みめ
つみやらぬわか心哉このめよりおつる涙のしつこのみして
した氷りまた打とけぬつゝらをは春の山への風にまかせん

中 春

春雨のふりぬることを思ふには只つくゝと袖そそほつる
年おほくかへしきぬれとあれぬるは我中山のふる田なり
なへてきておほす計りに小山田のなはしろ水は神を結はん
若草をこめてしめたる春の野に我より外のすみれつますな

春の野のきゝすなり共我はかりかりにあやうき物は思はし
はての春

時にあひて惜むと思へは桃の花みちとせ迄もたのまるゝ哉
青柳のいとうきふしの繁けれはくるしき迄に思ひみたるゝ
雲かゝる山の櫻はをしなへておもしろく社なかにみえけれ
聲たてゝ澤の蛙やすたくらん八重山吹の今さかりなる
むらさきのむらこの糸にみゆる哉松にかゝれる池の藤波

早 夏

雪かとしてけさおとろけはうの花の夏のかきねにさけるゝ
我せこかくはるひさなへおきながら白きやたこの裳裾成覽
郭公みやまにたかくいのる事なるときこゆる聲をきかはや
くす玉を袂にかくるさ月には嬉しきよにそあふちなるへき
ふたかにに我うちかみを祈る哉この手拍のひらてたゝきて

中 夏

ひきなからうきの菖蒲と思哉かけたに宿のつまし分かねは
時鳥なくへきつまは我宿のはなたち花の匂なりけり
眞菰草よとの渡りにかりにきて野かひの駒をなつてし哉
まちわひて今うちふせは時鳥あかつきかたの空になくなり
涙たにもきえぬ思ひの身をつめは澤の螢もあらはれにけり

終 夏

なかゝと思ひ暮せと夏の日のあつかはしきは我身なり
したにのみくゆる我身は蚊遣火の煙計りごとゝやはみる
我宿のませのゆひめもあたなれは露にしほるゝ常夏の花
涼しさを尋ねきつれば蟬の聲きかぬこかけのありかたき哉
おほぬさに千年をかけていのる哉神の心もなこしと思へは

早 秋

けふよりや秋のさかひに入りぬ覽こくらかりつる夏の山蔭
七夕に心をかしておもふにもあかぬ別はあらせさらなん
篠すゝきまたほに出てぬ秋なれと離くけしきのとにも有哉
はしあひの影をなかめて天の川空に心のうかひぬる哉
てもたゆくならす扇のをきところわするはかりに秋風ぞ吹

中秋

思ふことなりもやすると鈴虫の聲ふりたてゝなきぬへき哉

いしくしほの時雨ふりてか立田姫くれなるのはを深くそむ覽
しら露のをくてもはらぬ我なれと袖はそほつの心地社すれ
唐錦ふたむら山のもみちはをたゝてこそみめ秋はすくとも

初冬

衣更けふはとくせむうらもなくなるれとうとき色はうとまし
風の音に残りあらしと思ひし秋のかたみのもみちこそちれ
人しれぬ心の中は神無月しくるゝ袖もおとりやはする
初霜は處わかすやをきつらん移ろひをむる菊のまかきに

中冬

闇の上に霞もふれは時のほとに心にもあらぬ玉を社しけ
冬河のをしのうきねやいかな覽つねの床たにさゆる霜夜に
花さきし草ともみえずかれたるに雪社庭のおもかくしなれ
乙女手かかさす日影のなにしおはゝ曇らぬ豊の明ともかな
あさけして出てつる妹を待つ程は歎きこりつむをのゝ炭竈
埋火にあらぬ我みも冬の夜はおきながら社したにこかるれ

はての冬

烟立ふしの高根に降る雪は思ひのほかにきえすそありける
あつまやの軒のたるひをみ渡せは只しろかねをふける之梟

冬のよをはねもかはさてあかす覽遠山鳥そよまにかなしき
梅か枝にかゝれる雪の消えさらは春待程はのとけからまし
思ふ事月日にそへてかそふれは年のはてまてなりにける哉
さいはひ

御山迄かけくる涙の導かはよにあるかひもひろはさらめや
あめつちの神のひるめん幸を袋にうけてかへりしかな

み山への高き朝日にあたりなは長閑くのみそ曇らさるへき
み山なる富草の花つみにとてゆるきの底をふり出てそこし
うちかつき門を廣めて今年より富のいりくる宿といはせよ

命を申

吳竹のよになからふる物ならば伊豆の方をそふし拜むへき
うき世そと思ひすつれと命社さすかに惜き物にはありけれ
命たになかすにあらはつの國のなにはのとを嬉しかるへき
都なるおやを戀しと思ふにはいきてのみ社みまほしけれ
むれてゐる鶴におとらし芦のねの短かかるへき命なりとも

子をねかふ

たきものゝこをみんとのみ思ふ哉ひとりある身の心細さに
たらちめの親の生たる時に社このこかひある物としらせめ
何事も心にあらぬ身なれともこのたから社まつはほしけれ
光あ覽玉のをのこゝみてし哉かきなてつゝも思したつへき
岩に生る松のためしもある物をほこめのおもと種を重ねよ

うれへをのふ

何れをかまつ憂へまし心にはあたはぬことの多くもある哉
いつとなく波のかゝれは末の松かはらぬ色をえこそ頼まね
かけまくもかしこけれ共思ひあまり百千の事を憂へつる哉
泣くゝも又誰にかは憂ふへき猶ことばりの験あらせよ

數ならぬ我は我にそいとはるゝ人とひとしきめをみてし哉
思

佛とも神ともたのむしるしにはならへて思ふをかなへよ
とにかくに思ひ亂れて思ふ哉わくる思ひのひとつならぬに
なぞもかく思ひ絶せぬ身なるらん室の八島のこゝならぬ共
もえ焦れ身をさるはかりわひしきは歎きのなかの思之けり
心の中をあらはす

忍ふれと心の中にうこかれて猶ことのほにはあらはれぬへし
てにとらんと思ふ心はなけれ共ほのみし月の影そこひしき
水もほしあまつ星をもやとしつゝのとけからせよ谷川の底
しつのおになひきなからも身にそしむ位の山の峯のまつ風
あはれひのひろき誓を招くといはぬをなくしらせつる哉
夢

いかてとく夢の驗をみてし哉語り傳ふるためしにもせん
まとろめはさめぬる夢の世なれ共嬉しき事をみるよしも哉
淺からん夢の限りはしきたへの床のちりとも打拂はなん
ぬるたまの中にあはせしよき事を夢々神よちかへさらなん
いつくしき君か面影あらはれてきたかにつくる夢をみせ南

雜

聞くれの心にかけて葛根山ふたとせみとせいてそたちぬる
東路にきてはくやしと思へ共伊豆にむかふそ嬉しかりける
み山ちの音にきゝつるさかゆけは願ひみちぬる心地社すれ
日のもとやこのみかとはは敷島や倭うたをはいとはさら南
淨めつゝかき社流れ水莖のしるしもはやくあらはれよとて
いかてか見つけゝん四月十五日にかの山にあるそう
のもとから權現の御かへりとおこせたりしかはあ

さましうこそかきつけけれとうるさければとゝめつ
身にきけるみそちあまりの玉章をかさゝれぬれば光をそ増
はしめの春

霞たちいてこし時のしるしには千年の春にあふとしらせむ
驚のなくねの空になかりせは都の人をいかてみまましや
思ふことひらかんと思ふ物ならは花の都のゆくすゑを思へ
このめよりおつる雲のつくゝと靜かに今は若なつません
下水けぬくゝならはうちとけて何のつらゝか今はあるへき

仲春

春雨のふりてつゝきてとひしかは嬉しき方に我をそほつる
中山のふる田あらさす今年より我守りつゝなてゝおほさん
小山田にたねをまきつる物ならはなは代水は我にまかせよ
なにか思ふなにをか歎く春のゝに君より外に董つませし
都よりたゝ假初にきたる身は雉子のたとひひかすもあら南

はての春

いひかけしもゝことなから桃の花みなひらけぬる人を見哉
我宿の雲井にさける櫻花みる人ことにあかすとそいふ
青柳のいと珍しき人みれば又やくるとそあひまたれける
澤水に蛙なくらん山ふきの花のさかりはつきせさらなん
緑なる松にかゝれる藤なればむらこの糸とみゆるなるへし
夏のはしめ

我宿の垣根にさけるうの花も雪のふるとそおとろかれぬる
みやまへにこたかくなけは時鳥今そかたらふ聲もきこゆる
五月雨のなへひきうへていもかこし社のもとに又もみえ南
てかしはにひらてをさしてこし人の祈りいてゝし人は見賀
皇月まつ人はかりには我宿のゆふたすきしてかけてみよ君

中夏

心さしふかき入江のあやめ草軒のつまゝてひきかけてみよ
時鳥なくねそらなる物ならははなたち花のかをとかめなん
眞菰草まことに人のかりつめは野飼の駒もなつくとをしれ
うの花のうらみさらなん時鳥人にくからぬよにしすまはは
世中をてらすばかりにおもひなすなにか簗を哀とはみし

はてのなつ

夏の日のあつかはしきは思へとも心にいれていふにつく哉
常夏の花おひ繁るませかきもゆひかためては露ももらさし
なく蟬のなかぬ木蔭はなけれどもみ山かくれば涼しかり覺
下のにみくゆる思ひはかやり火の烟をよそに思はさらなん
みたらしになこしのはらへする人をみるに我さへ頼もしき哉

はつ秋

いつしかと秋の初風ふきぬれは心の中はすゝしかりける
なかことを歎くなるらん七夕のわかれはよその物と社みめ
星合の空に心のうかふまであまの河へをなかつめるかな
いまはとて扇の風をわするなよ又こん年の夏もこそあれ
我をのみ頼むと聞けはしのすゝき今はほに出て歎くへき哉

なかの秋

宮木野のこはきか原になく鹿の涙の露にしほれしもせし
疑ふな千世の秋まで鈴虫のよにふるしるしありとしらせん
朝貞の花にやとれる露の身はのとけく物をおもふへきかは
雲井までふるさところふる秋の夜は膈の涙や露けかるらん
曇りなき月の光をなけくには思ひくまなき物にそありける
はての秋

年をへてかけをならへてみる人も老せぬ物はさくのしら露

風寒み妹かころもてうつちの數しらぬよも過ぎぬへき哉
衣手は山田のそほつと思共おとろきもなきよにのみそへん
しら露の年をかさねて奥山の紅葉の色はふかくそありける
あかへりし紅葉の色も散りぬれば秋のわかれも悲しかり覺
冬のほしめ

こゝにきて衣をかへて行人は千代の襖にあひぬとをしれ
千早振いかきのもと常盤木も嵐のかせはいとはざりけり
色々にうつるふ時の折にしもこきかせみたるたまそ亂るゝ
神無月しくるゝ空を歎くなよふるにかひあるよともしらせん
我宿も霞ふりしく時はみな玉のうてなになりかへるめり

なかの冬

めもあはてふしかぬる夜は冬川のをしの浮寝に驚かれつゝ
ときはなる山の木陰にすむ人はゆき社花とみえわたりけれ
大原や炭やきゝたるいもをしてをのゝ山なる嘆きこらせし
埋火も君にもあらぬあま舟も冬はうきよにこかれてそゆく
はての冬

年をへて煙たてともふしの山きえせぬものは雪としらん
風さむみはれうちかはし今よりは遠山鳥のひとりねさせし
しろかねにふきかへた覽東やの軒のたるひをゆきみてし哉
春をまつほとはやとなる梅かえに降積雪をなかつてそおる
いたつらにすすす月日は年をへて我身につもる物としら南

さいはひ

思ふこと鳴門の浦に拾ひつゝかひありけりと知らせし哉
さひはひを朝日にそへて今よりは都のかたにやらんとそ思
我宿のとみ草の花つませてはさかへを開く身とそなるへき
すへらきや神代頼まん人はみなやらん方なきとみを社せめ

今年よりかをとを開きて富をまで八十氏人のあともつかせん
いのち

吳竹のこちくの聲を聞しよりよに永らへんふしはそへてき
あちきなくなにかうきよを歎く覽松にかゝれる露も社あれ
たひらかにあらまくほしき物ならは都の方をなかも計りそ
つの國の難波の事も思はすてなかくに遊ふたつのよをしれ
よもなかく汀に茂る芦のねはむれるたつになにかおと覽

予まうす

獨のみある物ならはたきものゝこはえ安しと思ひしらなん
このかひはありぬへらなり浦毎によせる波の數しらぬ迄
ひかりあらは祈りし事もかなひぬといはせてし哉撫子の花
何かそのわきて頼まん今よりはこの寶をはえつと知らなん
中々にかしてし種はうたかはす今はふたはになりぬ覽かし
何れをもなにか恨むる今よりはこの寶をはえつと知らなん

うれへ

何れをも何かうれふる今よりはあたはぬ事もあらしと思
なくゝもうれへし君かことはりを様々に皆かなへてし哉
波のこす松は色社まさりけれあさくたのむな思ひそめてき
いと嬉しよに厭はれし今よりははいや増りなる身とをしらせん
さしなからみなことはりは音にきくたゝすの神と諸心して

おもひ

限りなく思ひこかるゝ身なれとも哀とみればさめもしぬ覽
なにことかかなはさるへき眞心に神佛にもかけていのらは
ともかくも思ひみたるなひた道に我をたのまん人の心は
やそしまの松の千年を數へつゝ思ふもなき身とはしらすや
いにしへは歎きこりつゝすきに覺今は何かは思ひこかるゝ

心中

いはねとも頼みをかけはなにもか心の中になはさるへき
みそらゆく月の影をも身にそへて心の中にさやけからせん
にこりなく心の中に水すまはのとけきほしのかけもみえ南
松風のいとゝ身にしむ物ならは君か千年をひさしかるへき
あはれひに又あはれひをそへたらは此世彼世に思ひ忘れし

夢

夢ならはもかたさまに誓ひつゝ語りあはせんしあらせん
嬉しきは身にあまるまでみちぬ覽夢心地にも思ひあはせよ
あしき事夢にあはせし敷妙のちりある床をはらふはかりそ
よき事にあらぬ事をは夢はかりみせしとのみも急かるゝ哉
今は只身をも離れぬ影なれば夢ならずともみえさらめやは

雑

箱根山あけくれ急きこし道のしるしはかりはありとしら南
何事か悔しかるへき伊豆にきて身の榮ゆへき影をみつれば
足引の山より高きさかゆけと君そ□よのためしとはみる
水壺のあとかきたてしあとみれば深くも我を頼みつる哉
日のもとの山となる迄積るともものは見れは誰かいとはん
玉くしけふたみながらそ任せつる明暮たけの末のよまでに
とありしかは。またこれよりたゝならんやはとて。さ
て其年たちのやけにしかは。かゝる事のさうして。
かならずかゝる事なんある。けからはしきほとに。
をのつからと人のいひしかは。あやしくほいなくて
登るへきほと。ちかくなりて。れいのそうはうにや
りし。これよりもしきのやうなることあれと。さか
しうにくければかゝす

玉章にみかきそめたる光をはゆふしてかけししと思
うちはへて我くりかへすたく繩をうみもひか南よその蜚人

正月

行末の遙かなるへきしるしにはまつとしかへる空に霞めよ
はつ花のいのりならねはよそへつゝ身を驚のね社なかるれ
埋れ木のなかには春もしられねは花のみやこへ急かるゝ哉
春の日のさしてつらしとなけれとも猶とけはてぬ薄氷かな
春日野のの森もなそやと思ふかな年つむ若なかつみなけれ

二月

ふりはへてゆきし心は春雨のあしよりさきにいそかれし哉
すき心ひとにつくれはあらをたの打頼むへきなかやまほこは
苗代のみなみなかみにまかせて思はん方にかつとも引けとて
もえまさる焼のゝ野への壺重つむ人たえすありと社きけ
假のよを現とみるもはしたかのとりあつめてそ物は悲しき

三月

桃の花もゝちの願ひひらけなほみなゝりはつる心地社せめ
色ふかく心にしれる山櫻さかすたれかよそにいふらん
くることも心になひくたよりあらは柳の糸もたえしと思
盡きせすはのとかにゐての里乍らかさしにおらん山吹の花
藤の糸をなみやよりきのおりつらん紫地なる錦かゝれり

四月

しめの中にちる卯花は咲かゝる神のゆふにそあやまたる覽
かたらひしもたかはす時鳥こたきかけにかくれにし哉
みとしろの苗引連れておりたちしたこの姿よいかにみえ劔
片山の柏のくほてさしなからおひなをるみるさかへとも哉
さつき待つ程ならね共ゆふたすきあやめもわかす祭る比哉

五月

深からぬよとの汀の菖蒲草ねたきに何かかきてみるへき
古のわすれかたきにいとゝしく花橋のかをやのこさん
野かひにも放ちやせまし眞菰草はなれの駒の長閑からぬを
時鳥人にくからぬよにすまは聲はかりをはおしまさらなん
ほともなき身のみこかるゝ螢をは人しれす社思ひあはすれ

六月

夏の日を一につにいりていふ事をあつかはしとは思ふへしやは
とこなつにあたなる花の露なれば心をかれぬおりはなき哉
鳴聲もみな月はては空蟬の木にはからをやしはしとゝめん
蚊遣火のふせけと思ふをこそ夏煙の中にたちそざりにし
思ふとしけさふもとにみそきするせゝの川風吹きはらは南

七月

秋風はおきの葉にこそふけはふけ心の中のすゝしきやなそ
織女のとしふるいとほたえぬ共むすほゝれたる物を社思へ
天川わたるあふせはほとなくてへたつる年のとをけなる哉
秋きぬと古き扇をわすれなは又はりかへよゝこめならぬに
ほに出て風のなひかはしのすゝきそよや下葉の露は結はし

八月

をしかふすこはきか原におく露のこほる許の色をこそませ
鈴虫の聲もたえせずをとつれんよゝふるしるしありと思し
儚さをまつ目のまへにしらすはまかきの上の朝貝の露
故里を雲井になして鴈金の中空にのみなきわたる哉
隈なしとなけくならねと秋のよの月に心はあくかれそする

九月

露を重みいかはかりかはかゝる覽こかねの玉とみゆる玉哉

夜寒なる風に急きてから衣うちおとろかすねさめをそする
そほつをも何ならし銀秋の田のひたおもむきにあらぬ物故
言のはの色の深さをたのむ哉露もゝらすなみやま木のもと
紅葉ちる秋のわかれの悲しさに物思ふとはむかしこりにき

十月

たちかはる冬の衣のすきまなく千世を重ねんひろまへにして
うらもなきひむろのまへの榊葉はあらし嵐の風もふかしな
秋ことにしもはかくせと菊の花をき所なき心地こそすれ
ともすれはかき曇りつゝ神無月猶を時雨のひまなかりける
みつかきのかけかゝやける臺にはあられを玉の數と頼みし

十一月

霜こほり冬の川瀬にゐるをしのうへしたものを思はする哉
常葉山ゆきふりかゝる夕暮は名をわすれたる花やさくらん
庭火たくかくらのにはのいちしるく我榊葉のさしはやさ南
やくとのみなけきをこりて炭竈の煙たえせぬ大原の里
うきてのみ沖に別るゝ庭小舟なきさにかちやとゝこほる覽

十二月

けふりして年ふりぬるとこしの山雪ともみえぬみねの白雪
夜を寒み乍らわふなる山鳥のおはにもふれてよそへさら南
思ひやれ雪けの垂氷ひまもなくかつゝ注ぐ宿のつゝらを
年ゆきて春のとくへき比なれば梅のたちえにめをつくる哉
はては皆やらひてすすす年月の物おそろしや身にとまる覽

さいはひ

わたつみの底をそ頼む今よりは思はぬ方のうきうからすな
都にてさいはひくれはあさひ山にしさまにとく昇りにし哉
さきのよに種うへをかぬ身なれ共猶つみてんとみ草の花

とくもとくめにみすみすもみせし迎祈しをかしすらへらきの神
九重のやそうち人も人しれすとへと思ふはわきてさりける
いのち

吳竹に嬉しき節をそへたらはまつもこちくも聲をきかせん
松の上にかゝれる露の消えすして碧の海となる迄もみん
たむくるにをくられたらは都より神の心でおもひをこせん
萬代をわれにゆつるか聲たえすなかつの濱になきわたる覽
和歌の浦に汀のたつしはくゝまゝ芦の下ねそよなかゝる

こをねかふ

たき物のこ計しみて戀ひしかとかひなかりける身を悔る哉
拾ふへきかたも渚にみゆる哉こをやいふらんうつせ貝とは
撫子の花もひらけぬませのうちは露の光もなしと社きけ
これやこの寶の山に入なからたゝにて歸るためしなるらん
ふた葉にもおふるこ草のみゆる哉猶中川のあさきなるへし
うれへ

今も猶うれへかちにそなりぬへきあたはぬものあらん限は
うかりける身の怠りのことはりに憂へて後もわれのみをずる
神乍ら人なからとふうらめしき憂へしものはしもならねは
そのかみにうれへし事は程へてもわれ片をかにたえず共哉

おもひ

人しれぬ胸の思ひのさめたらはあはれを注ぐ雨とたのまん
思ひわひ思ひしものしるしあらは□かきみ佛いつか忘れん
ひたみにち思ひ入にし方なれと惑はさるへきしるへをそ待
かすことに思をわけていふとても猶やそ島の松はつきなん
思ふにも叶はぬ世とは知り乍ら猶歎かるゝ身をいかにせん
心の中

いひ出て心の中にくたくれはみつを結びていしやうつらむ
月影を心の中にまつほとはうはの空なるなかめをそする
みちのくのそてのわたりひ涙川心の中になかれてそすむ
しき涙はたちとまる共ふきこなん心の中になつかうらしま
あはれひをあらはすとみはなにか心の中に思ひしをせん

夢

夢事をちかふる夢のみえたらはねても醒めても嬉しと思はん
いさや又賢しき事の見えぬよに夢をはいかと思ひとくへき
しきたへのちりは夢にもまさり覺よなく積る涙なかれて
夢事を急きもみせんよとにも只夢ぬしのかみをおかまむ
現とも夢とも分かす身にそへるかの幻とさらは頼まん

雑

ふたつなき心にいれて箱根山いのる我身をむなしからすな
くやしきも忘れやせん足柄の關のつらさをいつになり南
此度は心もゆかぬさかみちにわたりにしより物をこそ思へ
はしるゆにゆきかよひにし水莖は神の心はゆかさらめやは
曇りなくたてる日の本かすならてあればや袖の乾かさる覽
願ふ事みちくるとやたましくけふたみの浦にかひもよす覽
はるかなるほとにありしおり。めにわつらふことありて。
ひなたといふ寺にこもりて藥師經なとよませ
しついでにいてし日はしらにかきつけし
指てこしひなたの山を頼むにはめも明かにみえさらめやは
いし山にまうてたりける人にかはりて
あふことはありかたくても石山にうちつる戀の光みえなん
かもにまうててかみしもに書きつけしことみな忘れ
てきふねはかりにや

みるめかるものつてより繁からは嬉しきふねの便と思はん
はる

徒然となかき春のみみつくせとあかぬは花の匂ひなりけり
山里にかゝるすまゐるは鶯の聲まつきくそとるところなる

さわらひや萌出てぬらん春のゝに焼原あさる人しづくみゆ
しもかれんほと遠けにもみゆる哉今もえ出る庭の石草

花ならぬなくさめそなき山里は櫻はしはしらすもあら南
吹きよらは亂れもやせん青柳のいとこそ風は後めたけれ

澤水に蛙もなけはさきぬらん井手のわたりの山ふきの花
霞たに山ちにしはしたちとまれすきにし春のかたみ共みむ

夏

山かつのしはのかきねをみ渡せはあなうの花の咲る處や
むかしみし人をそしのふやとちかく花橋のかほるおりく

うくてよにふるのゝの沼の菖蒲草ねかくる袖は乾くまもなし
よるをしる螢はおほくとひかへと覺束なしや五月雨のやみ

早苗ひきもすそよこるといふ田子も吾も袖はしほとからしな
あとたえて人もわけこぬ夏草のしけくも物をおもふころ哉

なきかへるしての山ちの時鳥憂世にまよふわれをいさなへ
かやり火は煙のみこそたちまされ下のかかれは我を侘しき

秋

一重なる夏の衣はうすけれとあつしとのみはいはれぬる哉
ぬるかりし扇の風も秋くれはおもひなしにそ涼しかりける

織女はあまの羽衣おりかけてたつとあるとや暮をまつらん
色かはる萩の下葉をみるとても人の心を秋をしらるゝ
萩の葉をなひかす風のとききは哀みにしむ秋の夕くれ
我もやいれかてにする山田寺かりてふ聲にめをさましつる

すきかてに人のやすらふ秋のゝは招く薄のあれはなるへし
浅茅原野わけにあへる露よりも猶有かたき身をいかにせん
秋ふかき夜はのねさめはわりなしとしらせ顔なる虫の聲哉
女郎花さかり過たる色みれば秋はてかたになりそしにける

冬

このはちる嵐の風のふくころは涙さへこそおちまさりけれ
いつも猶ひまなき袖を神無月ぬらしそふるはしくれ之けり
此頃はをのゝわたりにいそく覽冬まぢかほにみえし炭やき
獨ぬる我身は霜にあらね共冬のよなゝをきをあらるゝ

雪

雪をかぬ人の心もいかなれば草よりさきにかればはてぬらん
冬の池にうきねをしたる水鳥の上聲をきけは物そかなしき
涙かはみきはにこほるうは氷下にかよひてすすころかな
炬火をよそにみる社はかなけれきゆれば我も灰となる身を
數ふれば年のおはりに成に覺我身のはてそいとゝかなしき

雄

數ならぬ身の理をしらさらは恨みつへくもみゆる君哉
とひわたる人もやあると人しれすまつに音せぬ都鳥かな
人もうし我身もつらしと思ふには裏うへに社袖はぬれけれ
我とやうきにつけても忘れぬと形見につらくみえまし物を
あふことのかたきになれる人は猶昔のあたとおもほゆる哉
忘れ草たねを心にまかせてやわかためにしも人のしけらす
身にしみて辛しと思ふ人にのみうつる心の色にみゆれば
はやぐよりしたのうらみは深けれと上をつれなき淀川の水
あかしはまいくらかさねにあらね共恨をつくす人の心を
一時もうたてなけかしと思へ共ならひにければ忍はれぬ哉
ひまなくそ難波の事も歎かるゝこやつ國の芦のやへふき

世中をうちあきつゝあふみなる安きとはねをのみそなく
音に聞くやすのかけはしかけてのみ歎きそ渡る心ひとつに
すかはらやふしみを君かことくさにうち歎かるゝ事や何事
とことには絶ぬ歎は山しろのくせになりぬる心地こそすれ
思ひきやしらぬ山へをなかつて都戀しきねをなかつとは
かつきする蟹のたくなはうちへて物歎かしく思ほゆる哉
いともけに覺えなしや目に近くうきをはみしと思ひし物を
しはしたに慰むやとてさころもの返すゝもなをそ戀しき
小筵にふしていをたにいまぬれば戀にしくもの又なかり覺
くりかへし我はこふれともろかつらもろ心なる人のなき哉
いつとなく戀するかなるうと濱のうとくも人の成まさる哉
命たにあらはと計たのめ共なにかこのころ戀をしぬへき
つれもなき人をしもやはしのふへきねたさもねたき我心哉
下組のゆふてたゆくや思ふ覺ねてもさめてもわかこふる人
こふれ共ゆきもかへらぬ古に今はいかてかあはんとすらん
身の憂を思はぬ山にゆきしより涙をさこそとゝめさりけれ
くみより心つくしになく哉君ゆへものをおもひそめ川
あつまちの浅間の山にあらね共思ひにもゆる胸を侘ひしき
思はゝや苦しやなそと思へ共いゝ侘ひしやむつかしの世や
これはまことに。いはけなかりしうることにかきつけ
て。人にみせんこそあさましけれ。

秋のすゑつかたとをきほとにくたりにける人のこせ
ちいたすとのほりたるを恨むることやありけん
秋たちて 過にしのは 神無月 しくれのみして
とを山を 雲井はるかに なかめつゝ 思ひいつれば
わか袖の くちはをなにゝ かきつめて あらしのかせに

まかせてん ちらすところは なしとのみ きくにつけても
霜かれて うつろひはてし まかきにも をき所なき
露の身は さゝのつらゝと 結ほゝれて きえみきみすみ
まちしまに 山ゐにすれる おみころも きみかためとは
きゝなから きへき物とは へたてつゝ とよのあかりも
しらねは おほつかなしと なけきしは さてもありしを
なかゝに くやしきまざる このたひの ゆめをはいかて
ちかへまし よろつにつけて たけからぬ ねをのみなけは
とこの浦の ひるまもみえす みつしほの 身をうき舟と
こかれつゝ ゆくゑもしらぬ 心地して いまはみるめを
かりにたに かつかむかたも なきさなる わすれかひをは
わかために ひろひをきける いせの蟹の いとまもなみに
ことよせて をとをたにせて かへるらん つらきなこりを
かきとめて ぬるゝしつゝの つくゝと 思ふにもなを
あやしきは 池のをしとり みなれつゝ したにかよはぬ
ものゆへに かけ見きとのみ おさましく いひもらしける
ものには 野中の水も いとゝしき みくさのみゐて
たえぬれと よしやかけても いはしろの むすひまつなる
なかなれは そのゆかりをは かこたねと しめのほかにて
ひきそめし 下根はかれにし むらさきに さしおとろかす
ひさかきの はひよりもけに われそくたくる

三十かうのうたあはせにさみたれを

五月雨はみつのみまきの眞菰草かりほす隙もあらしと思

ある男御氣色のかはれるはいまはまいるましきと
ひたるかへりことに

のかはねとあれ行駒をいかゝせんもりの下草盛りならねは

かれゝゝになりゆく人のもとに夕暮にさしをかする
夕暮はまたれし物を我はたゝゆく覽かたをおもひこそやれ
さきのみちの國のかみより肥後になりてきたるに
たひゝに、君が千年やまさる覽末のまつよりいきのまつ原

右相摸集以百花庵宗固本校合了

群書類従卷第二百七十七

和歌部百三十二 家集五十

赤染衛門集

詞花

秋法輪にまうてゝさかのゝ花おかしかりしをみて
秋の野の花みる程の心をは行とやいはんとまるとやいはん

つとめてかへるに空いみしうきりわたるにひくらし
のなきしに

いとゝしく霧ふる空にひくらしのなくや小倉のわたり成覽
中の關白殿（道隆）の藏人の少將ときこえしころはら
らのもとにおはして内の御物忌にこもるなり月のい
らぬさきにとて出給にしのちも月の長閑にありしか
はつとめてたてまつれりしにかはりて

移拾

いりぬとて人のいそきし月影を出てのちも久しくそみし
同人たのめておはせすなりにしつとめてたてまつれ
る

同

やすらはてねなまし物を小夜更てかたふく迄の月をみし哉
をなし人わりなきものこしをときとり給ひて返し給
ふとて

いくたひの人のときけん下紐をまれにむすひて哀とを思ふ

返しかはりて

いくたひか人もとくへき下紐の結びにしぬる心ちする身を
八講する寺にて 大江爲基

おほつかな君しるらめや足引の山下水のむすふころを

返し

けふきくを衣の浦の玉にしてたちはなるをも香をは尋ねん

又

昔をもかけてわすれぬ物なればたもつに玉のかすやまさ覽

返し

かす増る玉とはかけしいたゝきの一つの玉もわろき物かは

今よりはなといひしかとをともせて五月もすぎぬ六

月ついたちころに橋につけて

まちくらし五月のほともすきにけり花橋はいかゝなりにし

七月七日説法せさすときゝてやりし

たまさに浮木よりける天川龜のすみかをつけすや有へき

おなし人わつらひしころ藥王品を手つかからかきてこ

れ形見に見よくるしきをねんしてなんかきつる後の

世にかならずみちひけといひたりしに

此世より後の世までと契りつる契りはさきのよにもして覺

かへし

ためもと

程遠き此世をさしていにしへにたれこととしてまつ契り劔

此人みかはになりてくたりしにあふきしてやりしに
すはまにかきつけし

惜むへきみかとは思へとしかすかの渡りと聞けは只ちぬ哉

そこともいはてさし置かせたればゑし共をよひてみ
せければその人のかくせしといひければかくいひけ
る

おしまぬにたゝにもあらぬ心して別をわふる人をしらなん
とあるになをしらす顔にてその比はしめて通ふ人あ
りときゝしかはいひし

只ならぬ別をわふる心をおしまぬよその人もしれとや
くたるへきほともちかうなりぬるをいかたいめん
せんといふをさもあらぬはくたるとて

人しれす袖は濡つゝわかるとも絶しとそおもふやつ橋の水
返し

八橋のくもての水の別れなはとひわたりつることや待れん
くによりいひたる

宮古にてあひみさりしをつらしとは遠き別の後そしりける
返し

あひみても別の後のつらさをたゝ我のみや思ひしらまし
老たる人のわつらひしころおなし人とふらひにきて
物語しあかしてかへりて二日はかり有てよへもまい

らんとせしかとみたり心地わりなくてなんとて
なむらんことを思ひてぬぬる夜の月は心も空にてそみし
返し

君かみし有明の空にあらねともひとりなむる月はへに覺
ほとへて月のあかきにきたるにかたかかひに人のお

はせしかはひんかうてかへしてつとめてやりし
かへりけん空はいかにそ月影のやとをすきしも哀とそみし

返し

晨明の月や我身と思ふまでみしにかなしくなりし空哉
しくれいたうふる日おなし人
神無月今はめなれてつけすともしくるゝたにも空にしら南

返し

よとゝもに詠る空のけしきにてしくるゝ程もしりぬへき哉
文の返事をせねはおなし人

忍へ共慰むかたもなきよりは厭ふもしらぬ身とならはなれ
かへし

いとふへき浮世をたにも厭はねは人をはさしも思はさり覺
かくてのみすきぬへかめることみたり心地もいまは
にやおもほゆるとて

程をたに人のつけ南きえぬ共よにへましかは今日そと思ん
かへし

定めなき此世のほとをつくすとも後の世までも猶頼めかし
おなし人のもとに葵をやりたりしを年へて祭の日お
こせて

としことにむかしは遠くなりゆけと
といひたりしに

あふひはけふのこゝちこそすれ

此人攝津國とられたりしをとひたりしかはよにあり
へんと思はぬ身に侍れはかゝる事もなけかしうもあ
らぬを母の思ひなけるゝをみるなんだゝならぬな
と哀なる事ともをかきて

吉野山月の影にかはらすはありし有明によそへてもみんな
かへし

ありし夜の有明の月は曇らめやよしの山に入はてぬとも
又ほとへてあれより

ありはてぬ身たに心になはすて思ひの外の世にもふる哉
とあるを見るにみかはのかみなりしほととのありさま
ちの左大弁のおほえのほととおもひいつるにい
とあはれにて

心にもかなはぬ事ありやせし思ひの外の世こそつらけれ
わつらひしに君よりもといひたりしに書きつけてお
こせたる

昔より浮世に心とまらぬに君よりものを思ふへき哉
返し

浮世にはなに心のとまる覽おもひはなれぬ身とも社なれ
わつらふこと重くなりまさりて常もえをとつれてい
ひたる

程へつゝ覺束なきか悲しきは今消えぬともたれかつくへき
とおもふなんあはれなると有返事に

ありてたに覺束なきはある物を消なん後のよはいかせん
又ほとへてあやしきみたり心地のなを今はかきりと
思ふにもきこえぬはおほつかなければなとあはれな
る事ともをかきて

程遠きしての山路にましりなはおほつかなさも増り社せめ
かへし

かはかりもあらしと思へは死出の山越なん計悲しきはなし
なを心ちおこたらす死ぬへきなめりかならずすみちひ

き給へとて

今はとてうき世をよそにみるまでも花橘はたのみてをみんな
返し

たのむへきいろかはらめや橘のたか計りの契りなりとも
心にもあらぬ事出きて久しうをとつれていひたる

跡たえて忘れはつるをつらしとも思はぬ程になりにける哉
かへし

つらしとも思はぬ人や忘るらんわすれぬわれは猶つらき哉
この人のるいなる人なはよるつかくれなしめめやか
になりにたる事の嬉しきこととて

なをさりの心も今はたえはてゝわれをとほねと哀とそきく
かへし

我ははや忘れはてにき猶さりの心はたへぬ人こそありけれ
親のなくなりたるころ雨のふりたりし日とふとて

人の世はなしととき社悲しけれふるもあはれにみゆる雨哉
かへし

雨雲とつるになるへき世中はふるとみゆるもけにそ悲しき
この人法師になりてのころ正月七日ひけこに若菜を
いれてやるとて

春日野にけふの若なをつむとても猶みよしの山そ□しき
かへし

小夜更てひとりかへりし袖よりもけふの若葉は露けかり晝
ものへいきし道に雨のふりしかは簀をかりてかへす
とて

みかさやま麓の露のつゆけさにかり心みし野へのみのくさ
文やるをかなの返事は今これよりといふをいかへは

みかさやま麓の露のつゆけさにかり心みし野へのみのくさ
文やるをかなの返事は今これよりといふをいかへは

ふへきとのたまへりし人にかはりて

僞にきのふ頼めしけふの目を暮れなはあすをまたや待へきはつせにまうてゝ道にふかをき川といふかいとあさかりしかは

さゝら波空のかけさへかくれぬにふかをき川となに流れ劔おなし道にはつかしけなる男のいきあひたりしかはわりなき心ちして

うきかけを行かふ人にはつせ川くやしき道にたちける哉おもひかけたる人すゝをおこせて

戀わひてしのひにおつる涙社手につらぬける玉とみえけれかへし

ちつらなる涙の玉もきこゆるを手につらぬける數は幾らそさかなき人思ひかけけりとさくにやかていへり

あら波のうちよらぬまに住のえの岸の松陰いかにしてみんかへし

すみのえの岸のむら松陰とをみ波よするかを人はみきやはおなし人

岩代の松にかゝれる露の命たえもこそすれむすひとめよ返し

結ひてまたえんを松のはゝかりにかけはにてみる露の命そいちこをひわりこにいらておなし人

くれなるの袖匂ふまでぬける玉何のもるとも數へかねつゝかへし

もりつらん物はことにて紅の袖にはなにの玉かとそ見んあるさんたち庭をかりてかへるとて

今すこしこしけき森のあたりに人たのめにて雨もらし晁

かへし

こすはこすこしけき森の下なれば雨宿りする人もあるらん大原の少將入道わらはにはおはせしころあきしるき扇をおこせ給ふて

白露のをきてし秋の色かへてくちはにいかて深くそめましきくち葉にしてたてまつるとて

秋の色のくちはもしらす白露のをくにまかせて心みやせんおもひかけたる人のふなをおこせて

さまかへて世を心みんあすか川戀路にえつるふな人そこれかへし

飛鳥川淵こそせにはなるときけ戀さへふなになりける哉久しうをともせてしはすつこもりに

頼みつゝとふを待まに春きなはわれ忘るゝになりも社すれかへし

春きなはわするゝ數やまさらまし年社せめて嬉しかりければやうすみしところにかしら洗ひにいきて

古郷の板井のなかはすみながら我みつからそあくかれにけるかたゝかひにきたる人のとのる物をいたしたればつとめていひたる

よよとりのあしたの原の女郎花移りかにてや人はとかめむかへし

宿かせは床さへあやな女郎花いかてうつれるかとかこたへん雨のふる夜つほねに人のありしつとめて大原少將入道のなてしこにさして

撫子のくれなるふかき花の色も今宵の雨にこさやまされる

御返し

雨水に色はかへれとくれなるのこさも増らすなてしこの花
風いたうふく夜ほかにありてつとめてとこなつにさ
して

霜やをく風にや靡く床夏のよるのうへ社とはまほしけれ

かへし

風におれ霜にかるとも床夏の我世のことはたれか知るへき
秋わつらひしをとひにきたるをうたかひておなし人
かりにくる人にとこよみせければよを秋風におもひなる哉

かへし

秋風は雁より先に吹きにしをいと云井にならばならなん
津の國にいきていひたる

戀しきに難波のこともおもほえずたれ住よしの松といひ劔

返し

なをきくになかゝしぬへし住吉の松とはとまる人やいひ劔
おほやけところにてはえまいらしなといひて
住のえにはねうちかはす蘆鴨のひとりにならんほとこの秋風

かへし

はねかはす程も稀なる芦鴨のうきねなからん思ひ出やせん
おもひうたかふにやかていふ
かたかりし岩にねさせる松の上に儚き露な結ひをかせそ

かへし

種まきて松を淋しき岩の上にねさしてのみややまんとす覽
又いひたる
虫のちをつふして身にはつけす共思ひ染つる色なたかへそ

かへし

むしならぬ心をたにもつふきては何につけてか思ひ染へき

ゆめ／＼ちひきのいしにてをといひたりしに

まつとせし程にいしとは成にしを又は千引にみせ分かつて

かへし

松山の石は動かぬけしきにて思ひかけたるなみにこさるな

つねにあふこともかたければ

我戀はさかさまにこそなりにけれ昔を今になしておもへは

かへし

つらきいまを戀し昔にかへしては思ひ出たにもなくや成南

恨むへきことやありけん今日を限りにて又はまいら

しとていぬるか書つかたをとつれたるにやりし

あすならは忘らるゝ身に成ぬへしけふを過ぎぬ命ともかな

返し

後れるて何かあす迄世にもへんけふを我目にまつやなさし

さてひころをとせぬをこれよりはなにしにかはおと

ろかさん程へてすまひ草にさして

すまひ草たふるゝ方に成ぬるか心こはしとかつはみえつゝ

返し

何にかは心もとらんすまひ草思うつるにかたこそあるらめ

ことにおもはぬ女のもとに物いみにさしこめられて

いひたる

身はこゝに心は空にとふ鳥のこにこもりたる心地こそすれ

かへし

空にのみならへる鳥の心にも猶このめにはさはるとそ見る

今はたえにたりといふ所にありときつてやるみわの

山のわたりにや

宿は松にしるしもなかりけり杉むらならは尋ねきなまし
かへし

人をまつ山ちわかれす見えしかは思ひ惑ふにふみすきに晁
人の中にてとのにまいりしをみておなし人

門の戸の車にのりて出しかは思ひにむねの内をこかる
かへし

門のとの車には猶のりぬへし思ひのうちにいらぬ身なれば
兵衛佐なる人を思ひうたかひていひたる

柏木はけしきの森になりに晁なけきを今はいつちやらまし
かへし

かしは木やならはのいかなるのとてか

竹なる霜のとけて下草の露とみえしに
詞調
竹の葉に結へる霜のとけぬれはもとの露ともなりにける哉
かへしおなし人

さゝ結び解て露とはなりぬれともとおつれば霜と社みれ
おなしころ物へゆくほとにかたゝかひに人のきたり

しかはといふ物をいたしてほかにわたりてつとめて
やりし

ひとりねのをしの上毛の霜よりもおきては我を思やりつる
かへし

小菰にそめし羽ころもしきつとも上毛の霜は誰かはらはん
恨むへき事やありけんさうすくせさせし人の久しく

をとせぬにしゝしておひに結びつけてやりし
結ふ共とく共なくて中たゆるはなたの帯のこひは如何する

かへしあふきなとくしたればにや
結へとかとくとかおひのゆふかたをまつに扇の風を涼しき

又かへし

とくとまた扇の風の急かぬにうらをわれなに結びめやなり
世の常なきもをいひて法師にやなりなましとおもへ

ともおもひすてぬことゝいひて
世中をみなむなしとはしりながら浮身の君にさはるへき哉
かへし

續後撰
我もなし人もむなしと思ひなは何か此世のさはりなるへき
恐ろしきめみて外にあるころそら事を人のつけけれ

は
玉はこの道のそらにて消にせはうき事ありと誰かつけまし
かへし

つけつらん人の誠にあらすとも浮身のとかになり社はせめ
箏をおさなき人におこせて

おやの爲昔の人はぬきけるを竹のこによりみるもめつらし
かへし

雪をわけてぬくこそ親の爲ならめこは盛なる爲とこそきけ
京極殿の池にかゝり火ともして人ゝこ舟にのりて

あそふ藏人爲資かちとりしたるにやる
波さはく風にまかせて行舟の帆かけにみゆるかちとりや誰
かへし

思へ共いはねの浦をこく程は磯のなのりせせられさりける
同殿の池水に業遠が筏のかた作りてうかしたりしを

みて
君か御代流れて澄る水の面に千年をさしてみゆるいかたし

正月に業遠かうつえして大盤所へ入たりしに
いかなりしつえの盛の日影ともたかことたまともみえも分れす

かへし

業遠

わきてこそ思ひかけさす山端に我ことたまの杖もきりしか
殿のうへ（益主）の春日にまいらせ給し道にて伊與守兼
資かむすめの花をおりて

かへし

山かくれ匂へる花の色よりもおりける人の心をさみる

殿（道遠）に侍従といひし人に業遠か物いひてのちとを

ほとにくたりてかへりてをとつれさりしかはいとと

ほうて業遠にいひし

きてなかはあはれならまし鶯の花によそなる春もありけり

六條の源中將と經房の中將と花みんと契りてにはか

に源中將はみたけ精進していかにそ花見にはありき

給ふやといひたるをいかゝいふべきとありしにかは

りて

我はまた思ひもたゝす花櫻君やみたけの山もこゆらん

御前の花さかりなるころ御物いみにてほかにわたら

せ給へるころおりてまいらせし

おりこそあれ匂ふ盛に憶かれてかへりて花のちるを恨むな

一條殿櫻御覽しにわたらせ給ひしに。なやむことあ

りて御供にまいらさりしかは。かへらせ給て。ちり

たる花をつゝみてたまはせたりしに

さそはれぬ身になけく櫻花ちるをみつ覽人はいかにそ

帥殿にしたしき人のゆかりなりしは。えまいるまし

となんあるときゝしかは。里にある母上の御前のお

ほせことにて花のさかりなるを見せまほしくなんあ

續後撰

るとおほせられたりしにまいらせたる

もろともにみるよもありし花櫻人つてにきく春そかなしき

さてまいりたれば庭につもりたるをかきあつめて雪

まいらせんとていたされたりしに

雪をのみ花とはみしかうちかへし花も雪かともゆる春哉

春の月あかき夜きんたちあまたまいりてあそふに内

より御物忌にこもりたまへとてきたればかたき物を

とてみちかたの辨

いつる空なき春のよの月

とありしに

古郷にまつらん人をおもひつゝ

櫻おほかる山寺にみんと思ひてまうてたるにみなち

りにけりその夜月のあかゝりしに

花の色はちるをたにみて散に晝なくさめにみん春の夜の月

五月ついたちころゆふくれに時鳥のなくをとのゝ御

前おなしきほと。かなうたよめとおほせられしに

めつらしくけふさく聲を時鳥とを山里はみゝなれぬらん

五月五日右大將殿よりさうふあはせしたる扇にくす

玉をゝきてこれかかちまけさためさせ給へとありし

にとのは左大臣におはしましゝかは

左にやたものとたまも結ふ覽右はあやめのねこそあきけれ

とのゝ御前物かたりつくらせ給て五月五日あやめ草

をてまきくりにして。けちかうみるをむなつしをと

て

我宿のつまとはみれと菖蒲草ねもみぬほとにけふはきに晝

これか返しせよと仰せられしかは

あやめふく宿のつまともしらさりつねをは袂の玉と社みれ
けちかうなりてあかつきにおとこ

かくからに暫しとつゝむ物乍ら鳴のはかきのつらきけさ哉
返し

百羽かきかくなる鳴のてもたゆくいかなる數をかんす覽
かゝることきこえて。すけなうもてなされて物なけ
かしけにて女

新告
いかにねてみえしなるらん曉の夢より後は物をこそ思へ

女院のひめ君ときこえさせしころ。いしなとりのい
しめすを參らすとて

すへらきの後への庭の石そこは拾ふ心ありあゆかさてとれ
御障子の繪に前栽植させて男女のみたる所とのゝ御
前の

ほりうふる草葉に虫の音をそへて千代の秋迄聲をきかせん
とて又よめとおほせられしに

花をみて野へに心をやりつれば宿にて千代の秋はへぬへし
殿のうへ法輪にまうてさせ給へりしに月のいとあか
ゝりしにすけかたの辨

にしへ行月を慕ひてこしほとにふかき山にもいりにける哉
女房この月をみ給ふらんやとありしに

をちにみし山の此方にみる時も月にはあかむよもなかり覺
なりまさ(譯政)つねふさ(釋原)の中將など笛などふきあ
はせて。とよらのてらのと口すさひたまへる。とこ
ろからにや。いとおかし。こよひのやうなる夜また

ありなんや。いみしきよのさまかなと 相方 弁
忘れん身をおもはす小倉山今宵の月をおもひいてなん

とありしに

君をこそまつはしのはめをくら山月にそ月も戀しかるへき
ほとへてわたくしにまうてたりしに。かの君のもと
にかよふ人のまうてたりしにつけてやりし

君はきて思ひやいてし月みればおも影さへそそふ心ちする
すけかた
かへし

行かへりみるたひとに戀しくて月なきときも思ひ出せし
九月晦日業遠かいひたりし
けふをなを同じ心におしまなんあきはてぬとは誰も思はし
返し

暮はつる秋の一日をとゝめてんいくとなかきの心ならまし
同人丹後に通ひしころ。はしたてのすなこをえさせ
たりしに

ゆきかへる道のたよりにうしろめた濱の眞砂の數や知にし
十月に前女院の菊合に

露よりも玉のうてなに菊の花うつろひてこそ色まさりけれ
庚申の夜菊を

月影のしもにや菊はうつる覽よこそ色のてりまさりけれ
同題を人にかはりて

をきてみる菊の眞垣の露の上にこかねの涙の影そうつれる
もみちにありきしに。ひとりみるにあかすおほえ
しかは

誰にかはつけにやるへき紅葉はを思ふ計りにみん人もかな
十月に賀茂にまうてたりしに。ほかのもみちはみな
ちりにたるに。なかのみやしろのか。またちらてあ
りしに

しめのうちの風たによらぬ紅葉かな神の心はかしこかり甕
元輔か昔すみける家のかたはらに清少納言すみしこ
ろ雪のいみしくふりて隔ての垣もなくたふれて見わ
たされしに

あともなく雪ふる里のあれたるをいつれ昔の垣根とかみる
おほやけ所に内にもとにもあまたゐて物語してこよ
ひよりは思ひきこえんあすふみたてまつらんといい
し人にほとへてたれとはなくていはせし

あすよりはと背に頼めしもの葉を明けても待し今も恨めし
人をおもひかけたるを女もその心をえてものこしに
こゑをかへていらへをしてつとめてやるにかはりて

我はきみは我ともしらさき誰と名のりて誰をとひしそ
さぬきのかみこれすけかめのよきかつらもたりとき
ゝてかりてといひしかはむつましう語らふなめりか
ゝることまでにいふはとめなんいふといひしに
疑ふをくるしと思はゝ玉かつらかみをかけても誓ふ計りそ
かへし

思ふ事なきにもあらず玉葛かみをはかけしいなわつらはし
ひさしうをとせぬ人にうりにかきて

とへと思ふ人の音せてうりふ山久しくなるはつらきわさ哉
せいき君といひし人のかたはらのつほねなるに經よ
み給へといひしかはくらし火をともしせ給へといひ
しかはあふらをやるとて

消ぬへき法の末には成ぬ ともしみをともしてそきくへかりける り集
ある寺にハ ハきしにかたはらのつほねに男なくな
りたる女のいみしう泣くけはひのせしかは

袖の上にうけしほとけき玉ならは衣のうらもぬれやしぬ覽
とのにはなさくらといふ物語を人のまいらせたる包
紙にかいたる

かきつむる心もあるをはな櫻あたる風にちらさすもかな
返しせよとおほせられしかは

みる程はあたにたにせす花櫻世にちらんたにおしと社思へ
まつりの日あるきんたちの葵にたち花をならしてい
ひたりし

いにしへのはなたち花をたつぬれは
とありしに

けふあふひにもなりにけるかな

おはりへくたりし七月ついたちころにて。わりなう
あつかりしかは。相坂の關にて。しみつのもとにす
ゝむとて

越はては都も遠くなりぬへし關のゆふ風しはしすゝまん
大津にとまりたるに綱ひかせてみせんとてまたくら
きよりわりたちたるおのこともあはれにみえしに
朝ほらけおるせる綱の綱みれば苦しけにひくわさにありける
それより舟にのりぬふくろかけといふ所にて

古に思ひいけんたよりなき山のふくろの哀なるかな
七日えち川といふ處にいきつきぬきしにかりや作り
ておりたるにようさき月いとあかう波をとたかうて

おかしきに人はねにたるにひとりめさめて
彦星はあまのかはらに舟出しぬ旅の空にはたれをまたまし
又の日あまつといふ所にとまるその夜風いたうふき
雨いみしうふりてもらむところなし頼光かところな

りけり壁にかきつけし

草まぐら露をたに社思ひしかたかふるやとそ雨もとまらぬ
水まさりてそこに二三日あるほとにひをゝえてきた
る人ありこのころはいかであるそとゝふめれば水ま
さりてはかくなんきるといへは

網代かと思ゆる入江の水深みひをふるたひの道にもある哉
それよりくひせ川といふところにとまりてよる鶴か
ふをみて

夕やみのう舟にともすかゝり火を水なる月の影かとそみる
又むまつといふところにとまる夜かりやにしはしお
りてすゝむにこ舟にをのこふたりはかりのりてこき
わたるを何するそとゝへはひやゝかなるをもひ涙み
に沖へまかるそといふ

沖中の水はいとゝやぬるか覽ことはまなゆを人のくめかし
京いてゝ九日にこそなりにけれといひてかみ
宮古いてゝけふこゝぬかになりにけり

とありしかは

とをかの國にいたりにしかな
くにゝて春あつたの宮といふ處にまうてゝみちに驚
のいたうなく森をとほすればなかのもりとなんもう
すといふに

驚の聲するほとはいそかれすまた道なかのもりといへとも
まうてつきて見れはいと神さひおもしろき處のさま
なりあそひしてたてまつるに風にたくひて物のをと
ゝもいとゝおかし

笛の音に神の心やたよるらん森のこかせもふきまさるなり

そのころ國人はらたつことありて田もつくらし。た
ねとりあけほしてんといふときゝて。またますたの
み社といふところにまうてたりしに神にまうさせし
踐の男のたねほすといふ春の田を作りますたの神に任せん
かくてのち田みなつくりてきとそ

和泉式部と道貞となかたかひて。そちのみやにまい
るときゝてやる

うつろはて暫し信田の森をみよかへりもそする葛のうら風
かへし

秋風はすこくふくとも葛のはの恨みかほにはみえしと思
みちさたみちの國になりぬときゝて。いつみしきふ
にやる

ゆく人もとまるもいかゝ思ふ覽別れて後のまたのわかれは
かへし

別れても同じ都にありしかはいとこのたひの心地やはせし
みちさたきたるとて道なれはおほりにきて物語なと
してかく遙にまかることの心細きことなといひてか
へりぬるにさるへき物なとやるとて

こゝをたに行くかたのとは思はなんこれより道のおく遠く共
かへし

いささらはなるみの浦に家居せんと遙なる末のまつとも
一條院にさふらひし左京の命婦いつみのかみのめに
てきたるにいひたる

都路の心もしるくしほりして君たにあると思ふみちかな
返し

しほるともたれか思ひし山道に君しもあとをたつねける哉

又これよりいかてみつからなといひて
あはしてふ道にたに社あふときけ只にてすきん人のつちさよ
かへし

命婦

山をたに思ひ隔てぬ道なればこれよりすきん心地やはする

秋の野をあるきしさか野にもおとらすみえしかは

花の色は都の野へにあらね共いつこも秋のさかにさりける

またすゝきのみおほかる野にていたうまねきしに

いつかたにゆきとまらまし花薄をちにも招くこちか共みゆ

野ちかき處による泊りたるに虫のいたうなきしに

一夜たにあかしかね集能ぬる秋の夜になく／＼すすす虫を悲しき

たかちか（暴風）まさむねかむすめに物いひそめて。ほ

ともなう。みたけにまうてゝかへりては京にしてし

はしもなくてくたりたりしかはいみしくてやらせし

心にもあらてそ歎くよしの山君をみたけのほとなかりしを

又のちに

出てこし道のまに／＼花すゝき招く宿のみかへりみそせし

かへしあねの和泉式部

とまるへき心ならねは花すゝき只秋ゆくとまたせてそみし

もとありける所みまさかになりていくともになかる

とて京へいくをほいなうやおもふといひし女房に

契り劔昔はこゝのなかなれはくめのさらやまさらに恨みん

又女房のおとこの京へのほりたるにふみをおこせた

るにいはせし

いつくまで思ひ出にしいまはとて忘れゆき劔道そゆかしき

同國にて又女房の人にもいひけるつとめて關こえ

てなといひたる返しにかはりて

行違ふ關のこなたそ歎かしきいかななるみの浦ぞと思へは

三河のかみすけたゝくたる道にてはしゐてわかき

人のかたに扇おこせて

あふきかと猶たのみてそ人しれす心をよせて君にまかする

かへしかはりて

あた人のゆくてにならす屏かな風たつへくもあらぬ所に

任はてゝのほりしかあはれにて

心たにとまらぬかりの宿なれといまはと思ふは哀れなり晝

尾張よりのほりて殿にまいりたりしに弁内侍まいり

あひてところの物語なとしてまかてゝつとめて

昔のと今のといはゝおほかるをまつなに事を我かたりせん

返し

ふる事も新しうのみおもほえて今は昔もきゝやわかれし

たかちかか藏人のそみしにならて内記になりしかは

左ゑもんの命婦のもとに奏せよとおほしくて

わか歎く心のうちをしるしてもみすへき人のなきそ悲しき

さて藏人になりていとまなうてえいてさりしかおほ

つかなくて装束やりしついでに

何事を思はんとこそおもひしかみぬもくるしき思ひなり晝

白馬日式部晝にてわたりしをみてまたの日まさむね

かむすめのいひたりしきりてのちなれは

いつくにかめの留りけん行するおほよそ人と且は見ながら

返しかりて

行する程をたそとややすらひしおほよそ人の哀なりしに

その人齋院長官かふきみといふ人にあひぬときゝて

たかちかにかはりてやりし

千早ふる神のかみや思ふ覽人はひとゝもきかぬところに
返しあねの和泉式部

そのかみの人をも人と思はねはさしはなれたるしめの榊葉
つかさめしにもれてむつかしく思ふに櫻の花をみて
思ふこと春とも身にはおもはぬに時しりかほにさける花哉

おなし春花みにありきて

我宿のなけきは春もしられねはいてゝそ花の盛りともみる
あまとなるへしときく人にすゝをおこせて一條院左

京命婦

羨ましいかなる人かわかさめぬ夢まほろしのよをそむく覽
えたる人にかはりて

つらぬける玉の光をたのむともくらくまとはん道を悲しき
七月七日めにやらんとたかちかゝいひしにかはりて
うらやましけふをまち出て七夕のいかなる心地して暮す覽

はやうすみしところにありますむ人ほかへなんいぬへ
きをさらぬ先にこゝにてたいめせん古里のみゆきは
猶あらんなんよかるへきといひしに

忘れにし昔や更にこひられんよにふる里のみゆきせりとも
人のもとにときゝくる男のおかしけなるうりもて
きてえさせたるをいかにいはましといひしにかはり
て

つらけなる景色とみるにうりふ山ならし顔にもうちいたる哉
人のむすめの幼きをけさうしけるにまた手もかゝす
とてかへりこともせぬにやらんとたかちかゝいひし
にかはりて

和歌の浦のしほまに遊ぶ濱千鳥ふみすさふ覽跡なおしみそ

おとなになるほとをしはしまと親のいひたるにや
らせし

高砂の松とてやとりすくすとも我をこすへき波もこそあれ
又荻にさしておなし人に

風そよく荻の上葉の露よりもたのもしけなきよをたのむ哉

又

まろねする夜はの白露おきかへりめたにもみえて明す頃哉
又おなし人にゆふくれに

夕暮はくものいとなむすかきかな宿もなきみの心ほそさに
又十月はかりやらんといひし

霜枯の野へに朝吹く風の音の身にしむばかり物をこそ思へ

たかちかゝあきのふかむすめに物いひそめて新蔵人
にていとまなくてえいかぬにやらんといひしにかは
りて

曉のしきのはねかきめをさめてかくらんかすを思ひ社やれ

返し中將の尼

夢にたにみぬよの數や積るらん鳴のはねかき手社たゆけれ

同人に雪のふるひやらんすかへしかは

みよしのゝ山のはつ雪なかむらん春日の里も思ひこそやれ

かへし中將尼

なかめやる山へもみえす思ふより杉の木の葉やゆき隠す覽

此人をこゝにむかへてすみしを。はかなしをゑして
むつかしきことゝもなとありしに。そのころはせに
まうてたりしに。もみちをおらせ見せんと思ひしに

かうはらたちにか物にさしてをきたりしかは。か
れたりしをみて

苞にとておりし紅葉もかれに覺嵐のいたく吹きしまきれに
春になりてほかへわたりしにそのまへの梅のさきた
りしをおりてやりし

いか計なとかはへまし咲花の散ん迄にまてはまてかし
ちこそこゝにむかへてをきたるに駒のかたをつくり
ておこせて

わか野になつかぬ駒と思ふにはてなれにけるを慰めにせん
かへし

其駒は我に草かふ程こそあれ君かもとにはいかにはやれは
この人こと男のもとにやりけるふみをもてたかへて
きたりしにたかちかにかきつけさせし

たれとまたふみ通ふらん浮橋のうかりしよひももうき心かな
しりたる人のかもにまうてあひてよきみちをしつゝ
かくるゝか御前にてはともの人をかくしていたるを
しりにけりとしらんと思ひて

たゝならすよき道しつる事社あれ面て並ふるけふは嬉しな
おなし御社にこもりしにくるれば鳥とものかしかま
しかりしかは

夕暮はこすゑの床やまかふ覽これかかれかとなくからす哉
月のあかゝりしに

あまてらす神の光やそはるらん森のこのまに月そさやけき
正月に長谷寺にまうてし道にて子日なりとしてしる人
まつひきなとしてみのをの所みしかは

思ふ事みなみちすから子日してみのゝを山のまつをひきみん
くらまにまうてしにきふねにみてくらたてまつらせ
しほとにいとくろうなりしかは

ともし覽方たにみえす鞍馬山きふねの宮にとまりしぬへし
尾張になりてめつらしけなう物うき心地して十月に
くたりしにせき山のもみちの袖にちりかゝりし

あちきなく袂にかゝる紅葉哉錦をきてもゆかしと思ふに
むすめの大津まできてしはしはこゝにあるへしとき
ゝてかへりぬるにこよひなを舟いたしてんとてよも
すからこきゆくにかうともしらしかしと思ふにあは
れにていもねられぬにかりのなくを

雁もこく舟は雲井になりぬとも都の人はいらすやあるらん
すくなかみといふ所になりけりとかちとりいふを
きゝて

千早振すくなかみてふ神代よりかみかへとはいふにやある覽
又車にてゆく道に河におち入たるさふらひのあるに
哥よみてとらせんと女房とものいひしに

ふからゝぬ水の底にや沈むへきあさしや人もいかにみつ覽
返し左近大夫頼忠といひしものなり

おり立て君に仕ふるけふなれば淵をも知らず惑ふなるへし
國にいきつきたりしにはつ雪のふりしにかみ

初雪とおもほえぬ哉このたひは猶ふる里をおもひいてつゝ
返し

めつらしきもはふるすおもほゆる行かへりみる處なれ共
送りにきたりし人ゝ京へかへるをみてとまりにし
人のおほつかなうおほゆるにうらやましければゆき
ふりし日なり

ゆきかへる人に心をそへたらはわか故里をみてもきなまし
參河守菅原のためよくたるときてはやうはらか

らにすみし人なれば昔の人あらましかは近きはとに
てよはらましなといひてかへりてうさの使にいきた
りければ丁子ゑんなどさま／＼つゝみておこせて
唐國の物のしるしのくさ／＼をやまと心にともしとやみん
返し

始からやまと心にせはく共おはり迄やはかたくみゆへき

又の年の春丹波になりかはりてのほりぬ殿の三十講
にまいりたるにみちまさの君のあはれなるいろにて
つほねのまへにわたりたまひしにきこえし

墨染の袂になるとき／＼しよりみしにそふちの色はこひしき
秋雨のいみしくふる日はきの花につけて人にやりし

つまこひにしかはしからむ秋萩を雨さへしほるおしき比哉

あさかほの花をとくみんとてつま戸をあけたれば露
いみしうをきたるを

朝顔のとくゆかしさにおきたれば我よりさきに露はるに覺

大覺寺のたきとのをみて

あせにける今たにかゝり瀧津せの早くきて社みるへかりけれ
十月にもみちのいとこきと移ろひたる菊とをつゝみ
て人

秋はてゝ今は盛のもみち葉と移ろふ菊といつれまされり

かへし

紅葉はの散をも思ふ菊ならてみるへき花のなきもなけかし
はつせにまうてたりしにならに泊りたる夜月のあか
／＼りしに

いくよへて荒し都のみかきねをみかさの山の月はかはらて
春門のかたをみいたしたれば。さねなりの兵衛督む

りてたち給へるを思ひかけぬ心地して梅のたちえや
とかきて奉りしかは。うちゑみてなんおはじぬると
ありしのち。ほとへて殿にかへり入たりしかは弁内
侍まいりあひて兵衛督なんかゝる事のありしを。そ
の哥をしらさりしかは物もいはてなんやみにしのち
に人にとひてなんき／＼し。さはかりのはちなんなか
りし。あふことあらは。かくなんわふるとたにかた
れとなんのたまひしといふを殿の御前きかせ給て。
いみしくわらはせ給き。さてまかてゝ二日はかりあ
りて。しはすのうちに。せちふんしたりしあしたに
弁内侍に一夜の御ものかたりこそ思ひいてらるれと
て

便あらはきてもみよとやかすめましけき春めける梅の立枝を

とのゝ御前御覽してみつからおほせられたる

春とにきてもみよといふけきしあらは霞を別て花も尋ねん

たちかへりまいらす

誠にやたつぬるおりはありけると待心みん花のちるまで

夜ふくるまゝに月のくまなうすみゆくをみな人はね

たるにひとりなかくめて

みつるよりか計あかき月はなしこれを驚ろく人のあれかし

おかしきゑふくろを人のかりやりしをみちまさのき

みの道にあひてとり給ふてければふたをたて

うせぬ共みはなきならし二ついみは君かとつるな社惜けれ

くらまにて月のあか／＼りしに

鞍馬山月の光のあかけれはいかなりし夜のなにかとそみる
佛法僧となく鳥をきゝて

みつなからたもてゐる鳥の聲きけは我身一つのつみを悲しきはりまよりきたる人のはりをおこせていひたる山をく人も昔はある物をちひさきはりとおもはさらんかへし

雲のよりくたをか□すけつへし海の底なるはりをえつれば一條院の御そうそうは七月八日にそありしみにいとあはれにて

今宵こそ夕つめもなけくらんけさの別はつねのことにて冬になりて。ものへいくみちに。一條院に人もなけれは。車をひきいれて見れば。前栽の霜枯たるも。よろつ哀なり。ひたきやをみて

後拾

消にける衛士のたく火の跡をみて烟りとなりし君を悲しきものへまうて道に河に影のうつりたりしをみて

河水に沈めるかけをかつみてもうく社ものは思ひしらるれ地こくゑにはかりに人をかけたるをみて

罪はよに重き物そときゝしかといとか計りは思はさりしを丹波守なくなりて。日の誦經にすとして装束ともとりいてたるにむつきにきたりしかはねりかさねのしたかさねのあさやかなりしに

かさねてし衣の色のくれなるは涙にしめるそとなりけり夜ふかき月をなかむるに虫の聲のみして人はみなねしつまりたるに定基僧都のはゝのいひたる雲ゐるにたにもある物を袖にやとれる月をみる覽返し

在明の月は袂になかれつゝかなしきころの虫の聲なかりのなくを

別てもかへる秋たにありといはゝ假のよなから嬉しからましそのころはり人を人のよければやるなりといひたりしに

あしよしのはりめもわかす今はたゝ藤の衣はとちて社されきりいみしくたちたるつとめて人のいひたるなかむへきかたたにもなき秋霧に哀はかりやまされさる覽返し

涙のみ霧ふたかれるころなれば心のそらはるゝよもなしまへなる櫻の木もみちしたるに

涙のみしくるゝやとの梢にはほかよりさきにもみちに曇十月にやのうへにこの葉のちりつみたるを風のふきちらしたるをみて

つまならてあれ行閨の上とてや木の葉を風のふきちらす覽しろき杖のをかしき前栽のつえとかきつけたりけるをみて

獨していかなる道にまよふ覽千年のつえも身にそはすして梅の花もさきにけり櫻の花みなさくけしきになりにたりと人のいふをきゝて

君とこそ春くることもまたれしか花も櫻もたれとかはみんな花をみて

こそ春ちりにし花は咲にけりあはれ別のかゝらましかはおなしころ花をおこせていひける我宿の櫻のさきてちるを見はもの思ふ人もなくさみなまし返し

散花のつねなきよとはみえぬれと猶そむかしの春は戀しき美作三位花につけて

花の色も宿も昔にたかはしをかはれる物はころもなりけり
かへし

花にたに心もかけすあるしなき宿は昔のこゝちやはする

五月五日同三位

墨染の袂はいとゝこひちにてあやめの草のねやしける覽

返し

あやめ草けふのたもとの玉とては涙をかくるねのみなり覺

同日定基僧都のはゝ

なかつゝけふ墨染の袂にはあやめにあらぬねやかゝる覽

返し

いつとともねのみかゝれる袂にはけふの菖蒲も別れさり覺

月のあかき夜

五月雨のそらたにすめる月影に涙の雨ははるゝよもなし

ほとゝきすをきゝて

わかれにし人はいかなる時鳥しての山ちのものかたりせよ

秋石山にまうてゝ鹿の聲をきゝて

つまこふる聲を悲しき別れては鹿はいかなる心地かはせし

又つとめてかへるに山かけなる露の朝日のさしたる

に猶きえてあるを哀なりしおりのこと思ひいてられ

て

朝日

朝日さす山した露のきゆるまもみし程よりはひさしかり覺

山科のわたりに家のいたく荒れたるを弟に後れて此

ふたとせにかうなりにたると人いふをきゝて

獨こ

獨こそあれゆく床はなけきつれぬしなき宿はまたもあり覺

ものよりかへるにまちとりいそきし人もなきかあは

れなれば

故里をみればものゝ悲しきに家をいてぬる身とやならまし

同じころはつせにまうてゝよる泊りたる所に草をゆ

ひて枕のれうとてえさせたり諸共にまうてたりし旅

のありこま思ひ出られて

ありしよのたひは旅ともあらさきひとり露けき草枕哉

かりのゆきかへりなくに

あはれなる旅の空とや思ふ覽かりやをすきすなく聲のする

道にていとくるしければ野にふして

はかもなき野への露とや消なまし烟とたにも誰かなすへき

きとのといふ處に宿らんとといふをたれそと思ひてと

へはいはせし

後拾

名乗せは人しりぬへしなのらすはきの丸殿をいかてすきまし

いそのかみにて

行くとては我もめなれぬ石の上便にふるゝなに社ありけれ

かへるにうちの渡りにさきゝ宿りし所のけからは

しきことありといひしに

日をへても昔みなれし網代木によせしとなせそうちの川波

雪いみしくふりたりしに石山に涅槃會にまうてしに

打出の濱にていと深くつもりたりしに

關こえてあふみちと社思ひつれ雪のしら濱こゝはいつこそ

その日禪林寺僧正にきこえし

別れけん昔のけふをいつくにてさかさもしらて我すくし劔

そう正御返し

稀にてもけふにしあへはすくし劔罪は春邊の雪にけぬらし

又あまてらにて涅槃經とくをきゝて

新後拾

今はとてときける法の悲しさはけふわかれたる心地社すれ

梅の花につけて定基そうつの母

よそへてもみまほしきを春かけて待こし梅の匂ひ香れる
かへし

みてもかつあはれなる哉梅の花春にはまたやあはんとす覽

また僧都の母

もしもまた春にあらずは梅の花誰みよとかはさくへかる覽

又これよりかへし

忍ふへき人なき身こそ悲しけれ花をあはれとたれかみさ覽

梅の花にかさして人のおこせたりしに香のわろかり
しかは

春毎に櫻たひとそきゝしかと梅をかさせるかそつきにける

五月五日語らふ人のもとよりくす玉をおこすとて

いつ連も戀ひぬには無し今日はいとくかくと計の菖蒲にもみよ

かへしとうしみのねにしたるかともになかゝらぬは

同じくは永くひけかし菖蒲草ねをかへてさへ短きやなそ

六月つこもりかうしんなりに

夜もすからおきける露の涼しきは秋のとなりや近くなる覽

せみのもぬけ見て

きえて後我心みるわきも哉かむりしからのあはれなるかと

秋のはしめにとこなつにつけて定基僧都母

とこ夏の花をのみてけふまでに秋をもしらて過しける哉

かへし

花はさは床夏にのみにほはなん人の心に秋をしらせし

石山にまうてしにせき山の杉のわつかにみゆるをち
かくなりぬやとゝへはすきのあなたいと遙に侍ると

いひしに

すきくいていくら計かすきてゆくあまねき門のしるしきか所

關山にてしはし休むとて尾張にたひくたりしあ

りさま思ひいつるに心ほそけにてあるか哀なれば

昔みし關の關守それならすわれとしらすなのちのなのため

ひころこもりたるに夜たにゝ猿のなきしに

たよりなき旅とは我そ思ひつゝきをなれたる猿もなくゝ

かへるへきほと近くなりてかはつのなきしに

歸るへきほと近きを惜むとかはつの聲のあはれなる哉

歸るみちにあしおほかる所に水鳥さまゝにあそふ

水鳥はをしもたかへもかよひ鳧芦鴨のみはすまぬなるへし

かたふたかりければとまりてかへるせたの橋のした

を舟にてすくとて

宮古人まつほとすきて思ふらんせたのはし舟今そこきゆく

あまにならば諸共にと契りし人にさもいはてなり

たりしかはいひたる

諸共にきんやきゝやといさなひて法の衣を思ひたてかし

かへし

人を社まつはさきにと思ひしか後るゝはかり悲しきはなし

橋造りたるひしりの河原にてはし(戀)のゑをすへし

ときゝていきたればせいありとてきよ水にてなんす

るといひしかはうちまうつとて

けふ社は嬉しき橋と思ひつれ渡しはてすはいかさまにせん

まうてつきたればみなことはしまりて花なとちらす

ほとなりしに

春ことに櫻さくやとまつよりは佛にちらす花をこそみめ

女院にけい(啓)すへきもありてまいりたりしに一條

千載

院御とおほせられいてゝまさひら（尾衛）か御文つかう
まつりし程の事とも仰せられていみしく泣かせ給ひ
しかはかなしくおほえてまかつてゝつとめてまいらせし
常よりもまたぬれそひし袂かな昔をかけておちし涙に
御返し

同

全集

現とも思ひ別れてすくる世にみしよの夢をなにかたりけん
正月につかさ召始まる夜同し院に雪いみしうふりし
にまいりてたかちか（聖廟）か事啓してまかつてゝまいら
せし

思へたゝかしらの雪をはらひつゝ消ぬさきといそく心を
いつみをとまうしゝになりて。のちのつとめてそ御
かへしはたまはせたりし

拂ひけるしもありてみゆる哉雪まをわけて出る泉の
とおほせられたる御かへしに

人よりもわきて嬉しきいつみ哉雪けの水のまさるなるへし
夢かたらぬ目といふ物のありしをかきうつしてをき
しついでに

夢にたにみえすなりけん後よりは是や形見にならんとす覽
櫻の花をおらせて定基僧都の母

つれゝと物思ふとも忘れ覺いくかもあらし花をみるまは
かへし人ゝのいと多くなくなりしころにて
みる儘にいとゝものゝみ悲しけれ散行花によをたとへつゝ
ある寺にかねいしかいみしうおそろしけにみえしを

後のをかねてみる社悲しけれかゝる炎にいるにやある覽
五月はかり草のしけきなかに山吹のさきたりしを
我宿は八重むくらかと見しほとにやへ山吹の花そにほへる

むすめのもとによりきよか文おこせたりけるにまた
てもかゝすといはせたれば只鳥のあとをみんといひ
たるに
浦なれぬ千鳥のあととありもせし空に翔るを人はみよかし
又おなし人

おきつしまたまもかり舟浦風にしつ心なき物をこそおもへ
かへし

たまもかる沖津島人こち風にいたくもわひしうらなれぬ覽
つねに返事もせねは思ひたえなんと思ふにとゝまら
ぬ涙とやうにいひたる返し

とゝまらぬ涙計そあはれなる思ひたえなん人はひとにて
さかしらなりといひたれば又の日

さかしらの嬉しかりしを同じくはよきさし出ありと聞はや
返し

よからはそよきささるといらふへき引立もなき心地社すれ
夜ことにすのこにゐあかすをみいるゝ事なければか
へりてつとめて

おきてふしふしてはおきそ明しつる哀やすくや人はねつ覽
返し

歸りつる程はいぬるとみえつるをいつのまにかは起てふしつる
風ふき雨ふる夜れいのすのこにゐあかしてかへりつ
とめて

綿津海に夜半ともいはす世を過す蟹のを舟もかくはこかれし
かへし

こかる覽を舟も波に沈むとてあまよの風のふきもさえつる
けちかくなりてふみおこする返事をむねやみてせね

は

胸ひしけなけく歎きもありふれはあく心地する物としら南
かへしれいのかはりて

程もなくあくときく社ゆゝしけれとてもかくても歎かしのよ
かくてありつきて後なに事にゑするにかよるゝの
みきてあか月にいとく歸るにすこし日高くなりて
いてぬるつとめて手箱のふたにくた物をいれておこ
せてけさはいとあかくなりつれはしたなくおほえつ
ることゝいひければそのふたにかきつけてやりし
あけはなと悔しきことか浦島のこはいつよりの心つかひそ
小鷹狩しになんゆくとてたちとりにおこせたりしに
むすひつけさせし

千載

狩にそといはぬさきより頼まれす立とまるへき心ならねは
この人の車をかりてさかのに花みに出ける人のかへ
すとして色ゝの花をさしておこせたるをいかゝいふ
へきといひしにかはりて

花の色はゆきて見す共秋の野のおりつるまをそ待へかりける
おなし人のもとにすゑのりかきたるをみていはせし

八月十五夜のことなり

君ならぬ人來りせはとひてましこよひの月はもにみゆやと
法輪にこもりたりしに曉にしとみをゝしあくる人の

鹿のいと近くもありけるかなといひしに

朝ほらけ薔をあくともえつるはかせきの近くたてる之けり
雨ふりもの心ほそかりしに

さらてたにとふ人もなき山里に雨にやことをつてんとす覽
大井川に舟のこきわたるをみて

雨やまぬかけをし渡る高瀬舟をちかた人のくるかとそまつ
くつはむしの近くなきしに

秋の野をわけてはかりは誰かこんくつはの聲の近くする哉
あるきんたちのおはしてさかのに花みつるついでに
そねなん心さしといふたよりとはおもひそとの給
ひしに

便にもこすはいかゝはまたれまし花みつる共いふそ嬉しき

月のあかき夜大井川しろくみえわたりけるに
大井川しろくてらせる月をみてこかねの池をおもひ社やれ
野分したるあしたにおさなき人をいかにともいはぬ
おとこにやる人にかはりて

新古

あらくふく風はいかにと宮城のゝ小荻か上を露も問へかし

法輪にこもりたりしに風のいみしうふきしに

山おろしの風の聲のみ烈しくて井堰の水はもれとねられす

檀林寺の鐘のつちのしたにきこゆるをいかなるそと

とへは鐘堂はなくなりて御たうの隅にかけられたれ

はかうきこゆるそといひしにきさきのおほしをきあ
はれにて

ありしにもあらず成ゆく鐘の音つきはてんよそ哀なるへき

入相の聲にも心ほそかりしかは

儚くてくるゝ入相の聲きけと我世つくとは覺えやはする

いしやまよりかへりしにあはた山にて目くれてまつ

もたる物をくれにけりとて泊りたるに月もいまたい

てぬほとにて

足引の山路はくらくなりぬとも月をまつにてうらむと思

大將殿にむすめのさふらひし時あまにとてめを給は

らせたりしに

綿津海の年ふる蟹の身なれ共かゝる嬉しきめそみさりける
おほん心なれくにならせ給へりしころ。さか野に
花みになんゆくとの給はせたりしに。むすめにかは
りて

わすれ行心の秋のつられければわれこそさかの花をたにみね
おなし人の久しく音つれたまはさりしに。れいのか
はりてきこえさせし

忘れなは我もわするゝわさも哉わか心さへつらくもある哉
御返し

片時も忘れぬ物をゝしなへて忘るといふやたか身なるらん
とのたまはせられたはまた

人をのみわすれざるらん心にて昔をたにも思ひ出よかし
おなし人ひさしく音つれ給はてなとらみぬとのた
まはせたりしに

恨むとも今はみえしと思ふ社せめてつらさのあまりえけれ
又たのめたるにほとへて

頼めつゝこぬよはふとも久方のつきをば人の待といひかし
御返しかはりて

今はなと待とたにやはいはれける頼むる事はつきもせね共
おなし人ある所の五せちのかしつきに。おほしうつ
りたりしに。れいのかはりて。きこえさせし

天照すとよのひかけに面なれて山井の衣いつれめつらし
そのとのゝ姫君の御乳母ちよはいふによしみちか
ものをいひそめてやる人にかはりて

よもすからちよはたれとか契りつる我爲に社短かゝりけれ

おなし大將とのたえ給ひて後つねにこしきふらひゆ
きてとのゝおほしいてゝおほせらるゝ事なとかたる
をきくにめつらしくおほえて

思ひたにかけぬに聲のきこゆればさらに昔のこゝち社すれ
ちこを人にとらせておほつかなけにおもひたる人五
月五日くすたまをやるにかはりて

いかさまにおひなりぬ覽菖蒲草みぬまはねのみたえぬ袖哉
むすめのかたに夜更けてかたとゝく人のありしをあ
けねはつとめておとこ

さしてまつ人をはしらて八重葎心かとなくたゝきける哉
かへしかはりて

八重葎さしはへてやは來りけんかとあくからに憎くも有哉
あるやんことなき人このかとより車をひきいれてか
たはらなる人の家になか垣のあきたる處よりおはせ
しにきこえし

人をとふたよりとは見て濡衣きたるかとこそ嬉しかりけれ
かねつねの中將花につけて人に

いとまなみ山への櫻みるほとに春は仇なる名そたちぬへき
かへしかはりて

心こそ野にも山にもあくかれめ花につけては思ひ出よかし
おなし人雪のふりてほとなく消えたるつとめて

みちふりのたより計はまちもせんときてはみえし雪の下草
あるやんことなき人しのひて物の給ひてほとへてを
とつれ給へりける返事にかはりて

人にたに語らざらんうたゝねの夢計にてたえぬとならば
なしさまなる人夏うす氷なとありける返しかはりて

ひとたにもまたしらぬまの薄氷みわかぬ程にきえねと思
ゑしたることありなとやきゝ給へらんむすめのもと
にともたゝの宰相

和田の原たつ自波のいかなればなこり久しくみゆるなる覽
かへしかはりて

風はたゝ思はぬ方にふきしかとわたの原たつ波もなかりき
四月はかりにむかへなる人のこ家に公信中納言のお
はすときゝし夜うの花につけて車にさゝせし

卯花のかけにしのへとほとゝきす人と語ふ聲さへそきく
たかいへの中納言のおはしける女におとこの忍ひて
文やりたりけるをきゝつけて使をとらへてうちなと
して文をはとりてやり捨てられたるときゝて女のも
とにつかはしゝ

いかなりしあふせなり劔天川ふみたかひてもさはきける哉
かへし中納言

そら言よふも違へす天川さらはつきてそかたうたれにし
又これより

なみゝの事にも非す天川さてはたせをもかくそうたまし
なてしこのすゝきになりたるをみて

おひかはるこや撫子の花薄まねかは人もゆきてみつへし
くらまにて衣のたきといふところを

秋毎に紅葉の錦きてみるをころものたきといふにそ有ける
菊を植て花さくへきほとに遠くにし人を思ひいて

うつろはんことをたにみて菊の花ゆく暗道の露をこそ思へ
よる時雨のいとあらゝかにふるにまつ人ありける人

にいひし

いとゝしくめたにもあはし獨ねにおとろく計ふる時雨哉
夜ふかき月のいるまでなかくて

みればたゝわかよかと社思はれ西へかたふく山のはの月
人のかうふりするところに人にかはりて

くらる山たかくあふけは萬代の雲のうへまでみえのほる哉
あるあまの袈裟のおろしこひたりしにやるとて

導かん佛のいてんあしたまでこれはかせふの衣とをしれ
わかき人のあまになるときゝてやりし

浮世とはかつ見乍らも背かぬにいかばかりにて思ひたち劔
こよみえさせたりける人の心かはりにければしはす

のつこもりに返しやるに人にかはりて
忘らるゝ程もしらてやすくさまし是に月日のかつなかり

忘れにたる人の常にまへよりわたるをいかにいはん
といひし人にかはりて

今はかくよそのよそにそ涙川わたるとみるにぬるゝ袖かな
ときゝゝわたる所によいこはのあまたあるをひとつ

こふにおしみしかはいてたるまにとりてかへりたる
をいかでか消息なくてはといひたりしに

盗む共こは憎からぬ事としれこふにはしらすいかにかにせん
はつせにまうてゝみちに泊りたる家の松の木に杖を

つかせたりしを見て

老にける我身はなにゝかゝらまし松も千とせの杖はつき
のりなかく母の春ころいとをこひたりしを。けから
ひたることありしころ。いまこのほとすこしてとい
ひてのち忘れて七月七日思ひいてゝやるとて

なにをしてやなきのまゆをわすれけん

おなし人ひさしくをとせて物語ゑのおかしきをおこ
せたりしに

るみ乍ら猶社つらき君なれやかきたえてやは音せさるへき
この人の國にたゝといふ所にかうともいはていにけ
るをきゝてやりし

今とたにいはんはいとや難かりし只に行き劍人のつらさよ
六月ふたつありし年の後の六月七日たゝの源賢法眼
のいひたりし

常ならはけふいそかまし七夕のあまの羽衣うるふへき哉
かへし

織女のまつに月日のそふよりはあまり七日のあらはあれかし
四月ついたちまで散らぬ櫻ありしを道明あさりにや
りし

^{彌平}またちらぬ花に心をなくさめて春すきぬともおもはさり晁
かへしあさり

春はさは花よりほかのことやなき野への霞のたちも社きけ
またこれより

おしめ共たちやはとまる春霞ねたしのこれる花をおもはん
五月ついたちころあさり

^{後拾}時鳥まつほとゝこそ思ひつれきゝてのちもねられさり晁
かへし

まことにそうちたにふさてあかしつる山郭公なくやゝと
おなしころ山寺にこもりたりときゝしにやりし

^{彌平}やま深くなくらん聲を時鳥さくにまさりておもひこそやれ
あさかほゆふかは植てみしころ

ひるまこそ慰むかたはなかりけれ朝夕かほの花もなきまは

秋の夜ひとりおきあかして
諸共におきゐるよはの露たくは誰とか秋の夜をあかさまし

人のいたく思ふは罪深くなる物をかうおほゆること
ゝいひたる人にいかにいらへんといひし人にかはり
て

深からぬ心のしふは何ならしまとをいはぬ罪はありとも
^統四月一日くらまにまうてたりしに鶯のなきしを
鶯のみゝなれにたる聲よりはやま時鳥けふねなけかし

久しくをとつれぬ人のきてまへちかき萩にむすひつ
けていにけるをつとめて見てやりし人にかはりて

^{後拾}今宵社よにある人はゆかしけれいつこもかくや月をみる覽
きたりん^(無能林)に八かうきゝしに殿のをむしさうあ
ひて葵にかきておこせたりしその歌は忘れにしかへ
し

蓮葉の露をはきてそのかみに人にあふひも嬉しかりけり
つの國に通ふおとこのめのもとに今なんいくといひ
てのちもまたありときゝし人にかはりて

^{後拾}ありてやは音せさるへきつの國の今をいく田の森といひしは
花みに俗ひしりのたう^(堂)の庭に花いみしうちりつ
もりて人かけも見えず。ひしりの拂ひつくるひし思
ひいてられて

植をきしぬしなきやとの庭櫻ちりつもる共たれかはらはん
いか^(五十日)のほとなるちにくす玉をやるとて

をひたらんほとそゆかしき菖蒲草二葉より社玉とみえけれ
花さかりに雨いみしくふりしころ御前の花いかなら

んと思ひて殿にまいらせし

ちりやすき雨にやうつる櫻花みるまの色をたれにとはまし

とのゝ御前御かへし

またちらて雨に匂へる花かさをいかてか雨のふりてきつ覽

またおほせられたる

いはね共みゝなれにたる春雨に花のこと葉はふりに社ふれ

花みにありきしに山の井といふ寺の櫻のふたきある

をもろともなる人

山のゐのふた木の櫻さきにけり

といひしに

きみにかたらんこぬ人のため

又いみしくちるところに庭のまもなくおかしくみえ

しに

千載

踏めはおしふますはゆかん方もなしちりつむ庭のはな櫻哉

こころつくしのやま集

とのにさふらひし女房をかたらひしに久しうをとも

せさりしに

續後撰

契りこし心のほとをみつるかなせめて命のなかきあまりに

法花經の心をよみし

序品

いにしへのたへなる法をときければ今の光もさかと社みれ

方便品

ときをかていりなましかは二つなく三つなき法を誰廣めまし

譬喩品

もゆるひの家をいてゝそ悟りぬるみつの車はひとつなり晝

信解品

親とたにしらてまふか悲しさにこの寶をもゆつりつる哉

藥草喩品

法の雨は草木もわかつて注け共をのかした社うけまさりけれ

授記品

つきゝの佛におほくつかへてそ蓮を開く身とはなるへき

化城喩品

後拾

こしらへて假の宿りにやすめすはさきの道には猶惑はまし

五百品

同

ころもなる玉ともかけてしらさりき夢覺て社嬉しかりけれ

人記品

諸共にさとりをひらくこれこそは昔契りししるし之けれ

法師品

すみかたき心しむろにとまらねは法とくもそ稀になるへき

寶塔品

大空に賣のたうのあらはれて法のためにそ身をはわけゝる

提婆品

わたつみのみやをいてたる程もなくさはりの外に之にゆる説

勸持品

身にかへて法をおしまん人にこそ忍び難きを忍ひてはみめ

安樂行品

名をあけて褒もそしらし法をたゝ多くもとかし少くもせし

涌出品

いかてかは子よりも親のわかゝ覽老ては若くなるにや有覽

壽量品

ありなからしぬるけしきは子の爲にとめし藥をすかすゝ晝

分別品

佛にてえたるこふすを數へすは塵計たにしらすあらまし

隨喜品

世中にみてし寶をえんよりは法をきくへきことはまされり

功德品

たもちかたき法をかきよむ報にはみそすみきよき鏡之けり

不輕品

みる人を常にかるめぬ心こそ終に佛の身にはなりぬれ

神力品

空までに至れるしたの誠をは法をたもたん人そしるへき

屬累品

流れても仇にすなとそかきなつるうと難き法をとけとて

藥王品

ともしつる我身ひとつの光にてあまたの國を照しつる哉

妙音品

こゝにのみありとやは見るらくにも妙なる聲に法を社きとけ

觀音品

身をわけてあまねく法をとく中にまたわたされぬ我身悲な

陀羅尼品

法守風聲るちかひを深くたてつれば末の世までもあせしとそ思

嚴王品

佛には逢こと難きゆつるとてこをゆるしてそ親もすゝめし

普賢品

行末の法をひろめにきたりける誓ひをきくかあはれなる哉

維摩經十喻

このみはあつまれる蟻のことし

うきながら身には譬へん水の泡のためしにとらはぎえぬへき哉
水のあはのことし

雨ふれは水にはにうかへるうたかたの久しからぬは我身なり覺

ほのほのことし

夏の夜の火影にまよふ鹿みれば只みつからの事にそ有ける

はせを葉のことし

秋風に碎くる草の葉をみてそ身のかたからぬ事はしらるゝ

まほろしのことし

新古今

夢やゆめ現や夢と分かぬ哉いかなる世にか醒めんとす覽

かけのことし

水に浮ぶ影は中にもあらね共それはありとは頼むへきかは

ひゝきのことし

いつまてか聲もきこえん山彦のよろつにつけて物そ悲しき

うかへる雲のことし

行ゑなく空にたゞよふ浮雲にけふりをそへんほとそ悲しき

いなつまのことし

いなつまの光とゞまる程みれば我身計の物にそありける

かたらひし人の久しくをとせきりしに

心にもあらすうきみの命哉きえなはたゆるほとをみましや

ある寺に八かうせしにひころつほねならひにていひ

そめたる人つねに文おこせなとしてありしか秋のこ

ひしきことなといひたるに

まことにそ西に心をかけしより秋を忘れぬ身となりぬへき

おなし人のかうする處にまかりあひて歸にあの人の

車に後れにしをまたの日はしまちつけきりしと恨

みたりしに

めくり劔ほとそ悲しき後れてはひとりや六の道にまといひし
ある所の女房のおもはんと契りしかとたえて昔わす

續後撰

れにき今よりといひたりしに

今よりといふ行末もいかゝならん集あらん昔契りしものわすれせは
またさやうなる人に

忘れしとかたみにいひしもの葉をたか空言になしてよか覽

定基僧部のはゝ家作りて渡らんにはまつせうをこそ
ん池のおかしきもみせんと契りしかと音もせてわた
りにけりとさゝて七月七日にやりし

天の川けふやゝとまちたれば早くわたりて君はすむとか

正月七日いなるのわたりにすむ人すぎといふものま
うしわたりわかなをおこせたりしに

春日野の若なかとこそ思ひしにいなりの山のすきもつみ覺

綱拾
おなし子日なりしに

何れにかまつてかけまし子日野に若なもけふはつむへかり覺

子日しにゆきたる人の小松にあをのりをむすひつけ
てこれをやうみ松といふらんといひたりしに

松山に波のかけたるものみればあやうかりける子日なり覺

三月卅日に花のちるを

おしむにし花の散すはけふも只春ゆくと社よそにみましゝ

山寺にて逆修せしに四十九日になる日

思ふにそ悲しかりける我ならてけふをは誰かとふへかりける

思ひかけたる人のいひたえて年へて文やらんといひ
し人にかはりて

年へぬる思ひとたにも思へかし今にわすれぬ心なさを

しはすに月のあかき夜きゝに雪のふりかゝりたるを

月影は花の色かとみゆれともまたふるとしの雪にさりける

正月七日若な人にやるとて

春日野のけふなゝ草のこれならて君をとふひはいつを共なし

はちすのつほみたるを身にてなすひの恐ろしけにふ
しつきたるをかほにしてほうしのかたをつくりて人
のおこせたりしに

極樂の蓮と身をはなすひにてうきはこの世のかほにさりける

さもいひつへき人のあきのかみになりしにつかうへ
きようありてくれをこひたりしにたゝすこしのくた
し文をしたりしかはかきつけてかへしゝ

中々にわかなそおしき柚川のすくなきくれのくたしふみ哉

人に忘られたる人の五月五日枕のうへに菖蒲を人の
をさけるをみて

綱拾
かはくまもなき獨ねの手枕に菖蒲のねをやいとゝそふへき
かへし

ふたりねしとしかはるまで菖蒲草とはぬを我も哀とそみる

秋くものゐをいみしくかきたるをみて

我宿のあるしも今は歎くまし雲のやへかきひくもなくみゆ

春ためよしかきて物語なとしてへいちうか花のしつ

くにぬるとみしとよみたるとなんとかとみてかたり
てかへりてのち久しくをとせさりしに

春なれと花のしつくやみえさきし涙をかけていふ人もなし

親なくなりたりしそをとひたりしにいひたる

いかにそとふにそいとゝ紅の涙の色のかすはまされる
とありしかへし

墨染の色は常にてくれなるの涙やしほのかすはまされる

雪のいたくふりたるにほうりんにまうてゝつとめて
かへるに雪に大井川の水まさりけるとておのことも

衣ぬきてこしゝにこしにこそたちけれときゝて

かち人の渡るをみれば雪深み大木の川もこしにそありける

三世佛に花たてまつるといふ題をよみてと人のいひしに

おしむには心もけかる同しくは佛にちらすはなとなしてん

二月にくらまにまうてしに岩まの水のしろくわきかへりたるか雪のやうにみえしに

玉簪

きえはてぬ雪かとそみる谷川の岩まをわける水のしら波

つとめてかへるにきしのかくれ所もなきをみて

身をかくなき物は我ならてまたは焼野のきゝす之堯

人におとろきていとはなやかになきしに

み狩する人も社きけ春の野にたかくるとみてきゝすなく覽

梅の花の折ておさなき人のすひつにさしたるを

うしろめた風ふかすとも埋火のあたりの花はちりやまさ覽

おなしころほうりんにまうてたりしに花はまたさか

ぬに雨の雪の花のちるとみえしに

つねはたゝちるたにおしき山櫻ふりにふるともみゆる雨哉

花みにありきて

花にたにあはてやと社思ひしかいまは命にまかせてをみん

いみしうちりまかふを

おしみにときつる心もあるものをみるさへにしもちる櫻哉

庭につもる花を風のふきちらすを

ちりてたにみるへきものを櫻花庭をさもはくかせの心よ

菊の花おかしき所ありとていぬる人のをそうかへる

春はなみし山寺をみれば庭にもみちのちりつもりたるを

花ちりし庭に紅葉の積れるをいつれまさりておしとみえ劍

ある寺のゆやのまへにしはといふ物を多くをきたる

なかに紅葉のまじりたりしを

背しはにませてかりけん紅葉はもえぬ計の色もかひなし

人のもとよりくらきほとにひをおこせたるに

網代木によるときはきゝし物なれとひを暮すとはけふ社はみれ

ものへゆく道に川におのこともものおりたちて棹して

水をかきゆるかせは波のたつやうにみゆるをなに業

するそとゝはすれはいをせくゝといひしに

白波のよする汀とみえつるはいをの命のたつにそありける

山寺に籠りたるにかるのゝなかに火のみゆるをなき

人のことすると人のいひしに

心ほそたれかけふりとなるな覽遙にみゆる野へのともしひ

草の中に蝶のしにたるをみて

浮世には長らへしを思へ共しぬてふはかり悲しきはなし

いみしう世のはかなきころ久しくをとせぬ人に

きえもあへす儚き頃はと集の露計ありやなしやと人のとへかし

とをき程におとこのいきたる人九月はかりに風のい

たく吹夕くれにいひたる

まつ人のうちくるこまは音もせて風の聲のみあらきやと哉

かへし

あらく吹風を心にうらみつゝひとりしぬらん袖を悲しき

同じ頃ほうりんせし集に籠りたるに風のいたく吹きしに

重出

山嵐に風の聲のみはけしくてゐせきの水はもれとねられす
十月はかりにはつかしきいまゝいりのあるころもの
つきて恐ろしけなる聲をし人のありしかははつかし
うてかくいひし

霜枯の虫もねよはくなるころににの聲とか人のきくらん

舉周かちこのいかの物をせさせられたりしに

常葉山こたかき松をはしめて枝さしそはれちよの春く

時くくるおとこの淵は瀬になるといひたるにいは
せし

後拾

ふちやさは瀬にはなりける飛鳥川淺きを深くなすよなりせば

年ころ思ひかけたりけれとえいひいてゝありける人
のけしきみせてのちにおとこ

忍草しのひし折もありにしをあかぬは人の心なりけり

女にかはりてかへし

今更になにかは露のもりつ見しのふの草のさてもやみなて
きたりんにありしひしりの竹の枝にはちのすくひた

るをおこせて釋迦佛のゝ給なりとて

我宿の汀に生るなよ竹のはちすとみゆるおりもありけり

とありし返し

末の世は竹も蓮になりければ佛にうとき身ともおもはし

同寺に五月に水まさりてなかれぬへし釋迦佛よかは

にわたし奉らんとひしりのいひしに

にこりなき横川の水に君すまはこなたの岸はいかゝわた覽

花みしに皆ちりければ口おしうて庭なるをかきあつ
めて

玉簪
花を社ちらさぬさきにとたつねつれ雪を別ても歸りぬる哉

久しくをとせぬ人におきにつけてやりし
をとつれぬ人の心の秋やなをいかなる萩のはかはそよめく
ちくせんのかみみちなり國にてなくなりぬときゝて

まかり中にきたりしか思ひ出られて
歸るへき程をたのめし別れこそ今は限りの旅にはありけれ
むすめのなくなりたりしに服すとて

風聲

同
我ため

にきよと思ひしふち衣身にかへてこそ悲しかりけれ
おなしころ源大納言うせさせ給へりしに御むすめの
みまさかの三位にきこえし

親のためおつる涙やいかならんこは世にしらす悲しかり覺
年ころつかひし人のひたちへくたるとてすみし方の
前に菊を植をさしか花さきたるをいまたかくともし

らしかしと思ふに悲しければ
東路の人しるらめや植をさし菊の露たになくきえぬとも

風吹に木のはのちりしを

ちりまかふ紅葉をみてもねをそなく我用の風のつらさに
又のとしの秋すみしかたの前栽いろゝに咲みたれ

たるにのりたゝかかゝる懸きて哀なることなといひ
て

植をさし人は露よりあたなれと花の昔の秋にかはらぬ
といひしに

朝夕にわか撫子のかれしよりかきほの露はあきもわかれす
大はら少將入道わつらひ給ひしにまうてゝ近きほと

にあるに月のあかゝりして
すみかまの煙は空にかよへとも大はら山の月そさやけき

をもうくなりまさり給ふとありしに物のみ哀なるにき

しのたちゐせしに

山ふかくすまふ雉子のほろ／＼と立ちにつけて物を悲しき

うせ給ひしかは命ななきも心ほそうおほえて

いとへ共あまり憂身のなからへて人にをくるゝ数も積りぬ

御いみに籠りたるそうどものれうにひきほしゝてた

てまつりしに

ひきほして袂にかはくと思へ共涙をまさるみるめたえては

天王寺にまうてしになからの橋をすくとて

我はかりなからの橋はくちに覺なにはのももふるゝ悲しき

すみよしにて

末のよはあせもしぬらん住吉のまつ其神をみたらましかは

西大門にて月のいとあかゝりしに

こゝにして光をまたん極樂にむかふときゝしかとにきに覺

聖靈院に夜ふけてまうてたりしにみあかしのあかく

見えしに

よを照す法のともしひなかりせば佛の道をいかてしらまし

舍利おかみ奉るとて

わかも劔昔にあらぬ涙こそなをさりなからうす悲しかり覺

かめ井をみて

こうをへて救ふ心の深ければかめ井の水はたゆるよもあらし

太子の額き給ふとて額にあて給ひけるいしをみて

たちゐける跡を見社悲しけれ石やその世にあへらましかは

塔の露盤のこかね太子ぬり給ひてこの光うせんおり

佛法もうすへしとちかひ給ひけるかくもりて見えし

みかきけんこかねの色もくもりつゝ法の光もきえぬへき哉

念佛寺にておきあかすあかつきにしきのなくをきゝ

て

よもすから我とるかすの亂るゝを鳴の羽かきかきやつく覽

かへるに風のいとあらくていしへといふところにと

まりて日ころあるにかりのなきしを

波まゝつ舟は泊りにやすらへと風にはへては雁そきこゆる

水鳥のおほくうかひたる所をみて

水鳥のうきてうき世をすくすまにいくよのせゝを心みる覽

供なりしきふらひのあの寺にてにはかになくなり

しにかへるに聲もせぬかあはれにて

出てこし日やは限りと思ひ劔歸るにかはるたまたにもなし

よにとく車にのりて京に入ほとに

貝ひろふ浦はなにとみえねとも都のかたみ嬉しかりけり

舉周かいつみはてゝのほる儘にいと重うわつらひし

に住吉の給ふと人のいひしかみてくらたてまつられ

しにかきつけし

頼みては久しくなりぬ住吉のまつ此度はしるしなんみせてよ

千代へよとまたみとりこにありしより只住吉の松を祈りき

かはらんと祈る命はおしからてわかれと思はん程を悲しき

たてまつりての夜。人の夢に。ひけいとしろき翁。こ

のみてくらをみなからとるとみておこたりにき。

いかのほとなるちこをちゝのむかふるにやゝ人にか

はりて

別れともしらす顔なる俤にこひしとたにもおもはすもかな

うふきぬをとゝめたりけるを守りにする物なゝりと

てこひたりければやるにかはりて

みる程の守りと思へはみをころもこたに形見のなきそ悲敷
そのちこの父なくなりていもうとのもとにあるをむ
かへければすてはなちてし物はなにしにかやうにと
いひたるかへりことにかはりて

撫子はおなし垣根と思ひしを露さへきえんものとやはみし

山里にゆきたりしに送りの人くかへりて二三日を
とせさりしかは心ほそうおほえて
送りをきて人もみえねは古へのしはの舟ともおもほゆる哉
いつへきほとは近く蛙のなきしを

歸るへき程の近きをおしむかと蛙の聲のあはれなるかな

王昭君か胡の國にいきつきての思ひよみてと人のい
ひしに

後拾
なけきこし道の露にも増りけり馴にし里をこふる涙は

ないしのかうの殿の御さうそうのつとめて

もえつ覽よるの煙のさひしきにけさ浮雲のたつをこそみれ

皇太后宮うせさせ給ひて四十九日の御佛のれうのた
まとて人くめしにまいらすとて

別れにしたまはかへるにかたければ涙のみ社袖にかゝれる

入道殿おはしまさて後みたうにまうてたるにいと淋
しく池のうき草しけかりしに

古のかへにたにこそありときけ池にうつれる影もみえなん

かねふさの君春まつ心の哥よみてこれさためよとあ
りしに正月一日きこえし

いつしかと霞める空のけしきかな春まつ人はいかゝみる覽

梅のつくり花にさとのをとりませたるをみて

何れとかわくへかる覽梅の花かをたにつくる人のありせば

人のもとより櫻の枝をいとおほきにおりておこせたりしに

我ためにおれる心はうれしくてはなおしますとみゆる枝哉

櫻おほかる山寺みんとてまうてたりしかとちりにけりその夜月のあかゝりしに

(重世)
花の色はちるをたにみてちりにけり慰めにみん春のよの月

四條中納言のこゝに花のなきおりおかしき花みえはおこせよとなんありしといふ人のありしかは花をつたへよとてやりし

櫻さへさかりになへて成ぬとも花なき宿はしらすやある覽返し

我宿におとらぬ花はありやとも今はたつねしなき名たち覺さてのち人春つきたる花のおかしきにつけてきこえし

續拾
山かくれ人はたつねす櫻花はるさへすきぬたれにみせまし

とひこす集
ちいさき櫻を植たりしに年へて花さきたりしに
植をかは人もみよとそ思ひしを花さくまでもあればあり覺

人のもとよりはすのうき葉に露をくきて蟬のしにたるをいれておこせて

なにこともうきてうき葉に空蟬の涙は露とをきてきえける

とてありしおりしも子どものいきたる蟬に緒をつけてあそふをとりにてをきかへてやるとて

空蟬の露の命のけぬへきをたまゝむすひとゝめめる哉

かたらふ人の七月八日のよ物語してあか月にかへりしにつとめて贈りし

西拾

そて

れい

ひし集

織女のきのふ別れし空よりも明るはけきそわりなかりける
前栽を植しにくはれたるをみていにし人をのか家の
花のかしきをみせはや残らすなりぬめりしこそい
とおしけれといひたるにいろゝの花をみてやると
て

我宿をせめてみたれば秋の野の花てふ花は秋にしもあらず
人の家うるをみにゆきてかへりてともかうもいはね
はあれよりみおとりしたるか音もせぬはといひたる
にやる草ふかくはきおほかりしところなり
しけかりし萩のやふ社戀しけれしかはかりたに我宿はなし
ものへまうつる道にすまひ草の花のいとおほかるを
佛に奉覽といへはわかおほうおらんとあらそふをみ
て

ゆく道の左右なるすまひ草かたわけて社とるへかりけれ
とのうへへの八幡よりかへらせ給ふとてかとのまへ
すきさせ給ふに風いたうふきしに庭の尾花いたくま
ねきしをおりてをひてまいらせし

我宿の庭の尾花のおれ返りまねくとたにもみてやすきぬる
のちの九月つこもりの日
かねつなの中將
なか月の日かすまされる年たにもあかねは秋の別々けり
かへし

秋のたゞ日数はそはてけふにかく別れぬ年のある世々けり
もみちみにとなせにゆかんと契りし人のをともせさ
りしかは

うしろめたくと急かて紅葉ははとなせの瀧のおちも社すれ
女院左近の命ふにのりたゞすみしをめの少納言の

ないしにうつりたりときゝてのりたゞにやりし
後拾
誠にや嶺捨山の月はみなよにさらしなのあたりとおもふに
夜ふくるまで月をみて

千歳
もの思はぬ人もやこよひ詠む覽ねられぬまゝに月をみる哉
月夜よりは曇り雨降らん夜はかならずこんと契りけ
る人の雨いみしくふりける夜みえすなりにければつ
とめてやらんといひしにかはりて

曇るともあらしと思ひし空ものあらはれはかりふりし雨哉
なにかひらかおのこゝむませたりしにうふきぬぬふほ
とにおほえし

後拾
雲の上にのほ覽までもみてしかな鶴の毛衣としふとならば
七日夜

同
千代を祈る心の内のすゝしきはたえせぬ家の風にさりける
舉周か殿上して草ふかき庭にておかみしを

新古
草わけてたちゐる袖の嬉しさにたえす涙の露をこほるゝ
これをきゝてかねつなの君のいひたる

こほるらん涙の露もことはりやたえすふく覽いへの風には
かへし

ふき増るいへの風たにたえせずは露こほるとも更に歎かし
いつみはてゝのちみかはになりての年石清水の祭の
つかひをみにいてゝ

色ふか
くかさしのふちもみゆる哉嬉しきせゝの涙をほりて
五せちの料とて女院より菊重ねのかさみをようと
もふものなから人にぬはすなとてたまはせたりしぬ
ひてまいらすとて

色ゝ
に匂へる菊にてを掛けて露にはかゆる心ちこそすれ

道命あさりなくなりてのちほうりんにまうでたりし
にすみしはうの櫻のさきたりしをみて

玉露

たれみよと猶匂ふらん櫻花ちるをおしみし人もなきよに

かねつなのきみめなくなりていみすきてのほとにい
ひたる

とはぬかな別れて後の悲しきは忘るゝほとになりやしぬ覽
かへし

いかにともいはぬ涙のむせかへり心に嘆くほとをみせはや
前齋院の御さうそうに其夜かゝることをつくしへく
たりにし御めのとのむまこはしらしかしと思ひしに
哀れにてその人をしりたる人にやりし

もえはつる烟をしらてかまと山よその空なる雲とみるらん

女院のあまにならせ給ひし日

望告

歎かしとかねて心をせしかともけふになる社悲しかりけれ

またの日弁内侍のもとに

みちひかんかけにつけては嬉しきをなを悲しきはなにの心を

よかはのかくてうそうついてゝおはせしに四條中納
言經ならひにおはしたりしにきこえし

行方もなく社物は悲しけれいかてみなみをたつねきつらん

かへし中納言

し水をはみなみにとふとみゆれ共心は西にかくとしらなん

秋よりわつらひて十月一日ころによろしくなりてみ

れは庭草も霜かれて薄の花ともさはやかになりにつ

るをしらぬもあはれにて

すきにける秋を悲しき時雨つゝ一人やしての山をこえまし
なを心ち苦しうて夜ひとよなやみあかしてとをみい

たしたれは下草の露のいとほのかなるか朝日にあた
りてたのもしけなくみえしに

下草のあるかなきかに置露のみゆとも誰かしるへかりける
たかちかゝ住むかたにたてしとみなとせさするをみ
てこなたにもせさせよといひしついでに

またも亦またき方をは作るめり荒はあれたる宿にあれとや
かよふ女のもとにたきものこひたるおこすとしてくゆ
る煙なとやうにいひたるかへしゝてといひしに

たき物のくゆるはかりのことやなを煙にあかぬ心なりけり
五月五日内大臣殿のわか君の菖蒲のいとなかきをた
まはせたりしにたかちかにかはりて

長きねもいつかはみまし菖蒲草君かひくこそ嬉しかりけれ
おなし日菖蒲につけてかねふさの君の

かきたえて問はぬにみえぬ菖蒲草如何なる事の憂にか有覽
かへし

菖蒲草思はぬかたにねをさすは口しかゝこぬに生るゑけり

十月に有明の月のいみしうあかきにはかにかき時
雨またうちあかりつゝ哀なるをひとりなかくて

神無月有明の空のしくるゝもまたわれならぬ人やみるらん

たかちかゝ急かしきことありとて久しうみえさりし

かは覺束なうおはえて

あひぬへき此夜にたにも見難くてなかく別ん後を悲しき

たかつかさ殿のうへの御賀關白殿のせさせたまふと

て御屏風の哥めしゝに

臨時客

後拾
紫の袖をつらねてきたる哉春たつことはこれを嬉しき

子 日

^{詞花}萬代のためしに君かひかるれは子日の松もうらやみやせん

花 見

春毎におしめとちるかつられければ花の心をうらみにそゆく

山家卯花

山里のうの花かくれ時鳥うしろめたきをしかやなくらん

あやめ

五月雨のいつかすきてもあやめ草軒のしつくは玉とみえ甍

とこなつ

庭のおもにからの錦ををるものは猶常夏の花にさりける

こ ひ

^{後拾}つれもなき人も哀といひてまし戀する程をしらせたにせは

いはひ

数しらぬ濱の眞砂のとしをへて君か數へんよをそみるへき

とをくゆく人に扇をとらすとて

手にならす扇の風をそへたらはあゆく草葉につけて忘るな

むすめの風いたうふきし日ものにまうてしに

風にたにあてしと社は思ひしか吹にさはらて行くか悲しさ

六月にさくら井のひじりのもとにゆきたりしに驚な

きしを

はるめける聲にきこゆる鶯はまたさくらゐの里にすめはか

もろともなる人淀川をみて恨めしき人のにし國へい

にしをとおもふにやこゝより舟にはのるかなといふけ

しきの心くるしうて

これよりは舟にのりしと淀川の聲はつれなくこかるめる哉

春より秋になるまで月日のゆくゑもしらぬに虫のこ

ゑをほのかにきゝて

すきかはる程もしらぬにほのかにも秋とは虫の聲にてそ聞

おなしこる鴈のなくをきゝて

^{後拾}おきもるぬ我とこよこそ悲しけれ春かへりにし鴈もなく迄^{なり}

あまになりたりし人にやりし

古への鴈のかすにも後れにき此世にもまたさきたちぬとか

かや井とのゝふもとにてもみちをみて

秋ゆけとのときき宿の紅葉哉風たにあらくふかぬなるへし

關白殿に集ともあつめさせたまふとてこゝにもあら

んまいらせよとおほせられたればみな忘れにけるを

たゝおほゆる限りかきいてゝまいらすおくに

これならて思ふ事のみ數なきをかき集めてそ君にみせはや

右赤染衛門集以流布印本按合了

群書類從卷第二百七十八

和歌部百三十三 家集五十一

伊勢大輔集

忍ふるなかにものいひ始めたる男つとめてやらん歌
こひしに

正月一日

あしもゆる沼の水はとけたれとゆくかたもなき谷の下水

同 七日子日にゆきふる

後拾
人はみな野への小松をひきにゆくけさの若菜は雪やつむ覽
かれにける女のもとに紅梅を折ておこせたるに
くれなるの色に匂へる梅のはな人あく人のいかてをりけん

雲林院の櫻を都のにくらべよとて人のおこせたりし
に
しら雲のかゝるやまへの櫻花これはこれそと君にをりける

女院上皇の中宮と申ける時。内におはしましに。な
らから僧都のやへ櫻を参らせたるに。今年のとりい
れ人は。いままゐりそとて柴式部のゆつりしに入道
殿（通）長きかせたまひて。たゞにはとりいれぬ物をと
おほせられしかば

詞花
古へのならの都の八重櫻けふこゝのへに匂ひぬるかな

とのゝ御まへ殿上にとりいださせたまひてかむたち
め君達ひきつれてよろこひにおはしたりしに院の御
返し

續後拾

こゝのへに匂ふをみれば櫻かりかさねてきたる春かとそ思
月あかきに院の御まへの面白きにとて皇太后宮（冊子）

の女房たちむつまじき殿上人たちにかくされてまゐ
りたりしに影のほのゝ見えしに物いひにやれとお
ほせられしに

新古

うき雲はたちかくせともひまもりて空行月の影をみる哉
返し

同

うき雲に隠れてと社思ひしかねたくもひまのもりにける哉
人の心なんうらみてまゐりにけるとときゝておなし人

ふみおこする返事をせねば

身の上にしらすしもあらし人の爲人の辛きはつらき物そと
返し

うき身から人のつらきも知りぬれば猶此道にふみゝすも哉

和泉式部院にまゐりて始めたる夜逢てもものなといへ
とおほせられしかば夜ひとよ物語などしあかして年
ごろかたみに心がけしほとのことなといひ出てつと

めてつほねよりいひたりし

思はむと思ひし人と思ひしに思ひしかとおもほえしかな
かへし

君を我おもはさりせは我を君思はむとしもおもはましやは
三條院の御時院の里におはしましゝ時こせちに昔お
ほえて殿上人ひきつれてまゐりたりし中に

後拾
はやくみし山の水のうは氷うちとけさまは變らさりけり

一條殿雅集の上勸修寺にて御堂供養せられしにこと
をかりてかへしおこせたりしに

おく山のたかねの松をふく風に思ひそ出るそのかみのこと
道まさの中將ゆきふるよ御とのゐしてまかてゝつと
めて

けさみつる庭の白雪いかならしよゝを積れるけしき成つる
返し

ふりてつる人の心の白雪はつらゝにのみそ思ひきゆめる

紫式部きよみづに籠りたりしにまいりあひて院の御
れうにもろともに御あかししたてまつりしをみて櫓の
葉にかきておこせたりし

新千
心さし君にかゝるともしひのおなし光にあふかうれしき
かへし

同
古へのちきりも嬉し君かためおなし光にかけをならへて

松に雪のこほりたりしにつけておなし人
おく山の松はに氷る雪よりも我身よにふる程そはかなき
返し

きえやすき露の命にくらふればけにとゝこほる松の雪かな
ある人の田舎のかた晝にかきて海のほとりに家有こ

れなん我すむところとありしにかきつく

浦ちかき鹽のいほりの柴の戸は人ならすとて浪やたつらん
雪中竹

枝たはみ雪降つめはなよ竹の末葉も見えすふしかへりつつ
一條院うせたまてのちハイ。なにはに君をおはしていみ
しうなきたまひけることと人の語るに

後拾
思ひやる哀なにはの浦さひて蘆のうきねはさをなかれなむ
（頼親いせにたてたる寺のかひなむうせにたるとて僧
のこひにおこせたるにそへてやりし）
本ノマ、

かすかなる谷のほらをそ思やる風のみや吹しくとふらん
年ころありし人のまたしのふるほとに石山にこもり
ておとせぬに

後拾
みるめ社あふみの海にかたからめ吹たにかよへしかの浦風
なか月十よかおなし寺からいつるにまゐる人せきに
あひたり

なのりしてけふはゆかなむ野も山もきりへたてたる逢坂關
世中さはがしきころ久しうおとせぬに

後拾
なき數に思ひなしてやとはさらんまた有明の月まつ物を
人のもとにゐて人にかはりて

同
けふくるゝ程まつたにも久しきにいかで心をかけてすき劔
月あかき夜右大殿の御たうみに人々おはしたりし
につとめておほ殿
よの常にあらしとまかふ瀧つせのこゑものりと思なす覽
返し

瀧津せは法の聲にそなみよりし涼しきかせも吹かよひつゝ
まさみちの少將すゝ（珠戀をおきてつとめてとりにお

こせたるやるとて

新拾

人しれぬ思の珠のをとならはなにしてあはぬ數をとらまし

火佛日同人

諸共にむすひし水はたえにしを何をかそゝくけふの佛にかへし

涙をそけふは佛にそゝきつる結ひし水のたえし計に

しつかなる有明の月

新古

有明の月はかり社かよひけれくる人なしのやとの庭には

そちのゆかりにてつくしへくたりにけるむすめに

千とせまていきの松原いく君を心つくしにこひやわたらん

返し

いきの松いきても君にあふことの久しくならむ程を社思へ

新後拾

人のふみをととりたかへてもてきたりしにそへて

なとて人うきたる雲のかけ橋をふみたかふなと教へさり劔

後拾

年ころすみし所をたえてはかにわたりて又の年の五月五日

哥合さみたれ

新古

いか計たこのもすそもそほつ覽雲間も見えぬ頃のさみたれ

六月はらへ

後拾

水上もあらふる心あらしかし波もなこしのみそきしつれば

七月七日

七夕のよるの衣をきたるよはかへすうらをもしらせすも哉

男ある人を年ころ思ひわたりけるにその人なむものにまゐりにけると聞てかねてさかにいきゐて木葉にかきてとらせける

いゑつね

おく山のこの葉かしたの行水は人こそしらねすまぬ物かは

これか返事せさきしなん口惜しかりしといもうとの君のかたりしかはかの人にはかりて

新編古

落積るこのは隠れの忘れ水すむとも見えすたえ間のみして

又かへし

いし間ゆくしたには通ふ谷水もこのはを茂み上そつれなき

またかへし

山隠れさのみこののはの散つまは石間の水はおとたにもなし

秋來人に

煙こそたつともみえね人しれす戀に焦るゝ秋と知らなむ

かへし

霧まよふ秋の空にはそゝにたつとも見えぬ戀のけふりを

こまむかひ

ひきつれてくる秋とに逢坂の山のは出る望月のこま

つくしにくたりし人にきこえし

いはねとも同じ都はたのまれき哀雲をへたてはてつる

ある山里にまかりたりしにいへつねかもと近しとき

ゝていひつかはしゝ

うらさひて葛はひかゝる山里の家ゐたつぬる人もあれかし

返し

葛かつらくる人もなき山里はわれ社人を恨みはてつれ

かへる道にひきいれてみしに難波わたりおほえて處

のさまいとおかしすゝりにおきし

後拾

こも枕かりの旅ねにあかさはや入江のあしの一夜計に

を集

かへしをおしはかりておこせたりしをおかしかりし眞菰草假そめにもあかさなむ長くもあらし夏のしのゝめ

つくしにつねこと云所にあまのしほやくところ
秋は霧春は霞に立まかひしほやくけふりつねことそみる
御住吉詣に

新拾

なからへん世にも忘れしすみよしの岸に波たつ秋の松かせ
古にふりゆく事そ哀れなるむかしなからの橋をみるにも

みこそ

れ集

院の御菊あはせに左のとうにて
長きよの例しにうゝる菊の花ゆくすゑ遠く君のみそみむ

又

めもかれすみつゝ暮さむ菊の花さくより後の花しなけれは
殿のうた合にさくら

後拾

しらくのはなより集

君か世の遙にみゆる山さくら年にそへてそ匂ひましける

郭公

後拾

さゝつともきかすともなき時鳥心まとはすさよの一聲

しか

夕霧に妻まとはせる鹿のねやよるぬる時もおとろかるらん

院の白川殿におはしますころ右大殿もおほすことある
なるにおほととのゐに候たまふつとめてこのほにか

きてたまはせたり

後拾

世中にふきよるかたもなき物はこのは散ぬる木からしの風

かへし

おちつもるこの山里のこの葉をはかへしの風も吹かへさ南

御前にて少納言命ふとをひきしかは同殿

ことのねことにきこゆなるかな

とありしかは

草むらのむしはこゑくすたけとも

かや院の御時うたあはせ月

君みると空にしればやくもりなく萬世をのみくらす月かけ

まつ

昔より名にたかさこの松なれば雲の上まで枝をさしける

千鳥

行方はさよ深けれと千鳥なくさほの河原はすきうかりけり

いけみつ

池水のよゝに久しくすみぬれはそこの玉もゝ光みえけり

こひ

塵つもり床の枕もさひにけり戀する人のぬるよなけれは

葉かへせぬ松のねくらに群るつゝ千歳を君にみなゆつる也

うの花

うの花のさける垣ねは白波のたつたの川のゐせきとそみる

皇后宮(寛政)のうた合月

後拾

みるはてに

くもりなき空の鏡とみゆるかな秋のよなく照す月かけ

かり

衣うすみ旅のみそらに鳴雁はおのか羽風やよさむ成らん

山田

秋の夜は山田のいほに稻妻の光のみこそもりあかしけれ

いはひ

住のえにおひそふ松の枝ことに君か千とせの数そこもれる

おなしみやの東三條の御堂めてたしときゝて舟にて

さしわたりじに御まへのかたを見やりて岸のやなき

青柳のいとなつてにひく舟は岸ちかく社よらまほしけれ

その御堂に殿の御あふきにむすひつく

積るらむ塵をいかにてはらはましのりの扇の風のうれしさ

に集

同宮に御むすめの御まへにありつるとてちいさき瓜
をおこさたりしに

葉隠れす立もいてはやこまの瓜の其つらに社ならまほしけれ

大納言殿御覽して御返し

君をのみこまのゝ瓜とまつ物を同しつらにもなりてみよかし
かたしけなく美しうおほせられたりしかはたちかへ
り

夜をつかむ事はさらなり敷島の道をさへ社君は知りけれ

うち殿のさうし藤子の晝を歌によむへきところゝ
をかきうつしてたまはせたりしに人の家あり垣ねに
梅さきて人きてたてり

垣ねにはやつれてさけと梅のはな匂ひは人にしらせ社すれ
ふるき家にもみち散おほひたり

古里はしくれのいたまもとてや散もみちはを風の吹らむ
しかの大僧正のために九十賀殿のせさせたまふける
につゑの歌めせはまゐらす

萬代を竹のつゑにそちきりつる君し久しくつかんかために
かへし

君を祈る年の久しくなりぬれはおのか榮ゆくつゑを嬉しき

院の三條の民部卿の家におはします頃にはかに行幸
ありて近き人ゝのいへめされしにそのよしをそうせ
しかは歌をよみてまゐらせよとおほせられしかは

年後拾つもる頭の雪はおほそらの光にあたるけふそうれしき
いへを返しにすとおほせられたりし
ゆかりありて東宮の若宮みたてまつりしにさうしか
たの鏡をみてたまはせたる

同 君みればちりもくもらて萬代の千歳をのみますかゝみ哉
返し 東宮大夫

曇りなき鏡の光ますゝもてらさむかけにかくれさらめや

なかつのことにや民部卿うへのたきもの合て心みよ
とてたまはせたりし

あり難きものと社みれはる咲し梅の匂ひの秋もかはるは
かへし 民部卿

梅かえは焦るゝ秋も匂ひけり春とめかたきものと見しかと
皇后宮から昔のやへ櫻をたまはせて女房

これやこのならの都の八重櫻匂ひわかすもしられさりけり
三ゐうせてかやうのことも尋ねまほしうて

あとくれて昔こひし敷島のみちをとふゝ尋つるかな
かへし

やへ玉華葎たえぬる道とみつれとも忘れぬ人はなほ尋ねけり
これをきゝてさかみ

ふみ通ふ人たになきは敷島の道知ぬ身のうきにそ有ける
又

磯のかみふるのゝ道のしるへには今日ゆく末も君社はせめ
なりのふよをそむきしに麻の衣やるとて

けふとしも思やはせし麻衣なみたの玉のかゝるへしとは
返し

同 思ふにもいふにもあまる事なれや女の玉のあらはるゝひは
その人なくのちわさの經の外題四條中納言にかゝ

せきこえしにそへられたりし
極樂の蓮の花のひものうへに露の光をそふるけふかな
かへし

ひものうへに蓮の露を結びおけはみかける玉の光こそませ
おなしころさかみ

みし月の光なしとや歎くらんへたつる雲にしくれのみして
かへし

月かけの雲かくれにしこの宿にあはれをそふるむら時雨哉
同人二月十五日のひのいりかたに

つねよりもけふの入日の便にやにしを遙に思ひやるらん
かへし

けふはいとゝ涙にくれぬにし山思ひ入日の影をなかつて
同日夜半ばかりに人

いかなれはけふしも月のさよ中にてらしもはてて入しなる覽
かへし

夜を照す月かくれにしさよ中は哀やみにやみなまよひけむ
又のとしき日に

別れにしその日はかりは歸りきといきも歸らぬ人を悲しき
おもふ人ふたりあるをとこなくなりたるに末の人に

かはりてもとの人のかりやりし

ふかさ社ふちのたもとほまざるらめ涙はおなし色に社しめ
むすめのとりこしたるほとひさしうみえさりに

たらちめの親をはすてゝこはいかに人のこをのみ思ふ我社
かへし

人のこの親になりてそ我おやの思はいとゝおもひしらるゝ
かれゝゝなる九月許に菊をうゑてなむいぬると聞き

ことのほのかれゆく人に秋の菊先朝しもにうゑやおきつる
わつらひし頃馬頭と云人のたひゝとひたまひける

新古
うれしさをおもひおきつゝしのふ草わすれぬ物を秋の夕露
かへし

秋風のおとせさりせは白露も軒のしのふにかゝるへしやは
御せちにいてたる人のもとにある人のいひたりし

をみ衣かさねし人や誰ならむかみならませは我もしなまし
かへし

ひかけせしをみの姿はみしかとて山井の衣うちもかさねす
正月一日こうみたる處にちこのきぬやるとて

珍らしく春立そむるつるの子は千世のむ月をかさぬへき哉
おなしく七日わかなを人のおこせてこれはおいたる

人のためにつみたるといへりしに

我ために雪間の若菜つみければ年かへりてそ嬉しかりける
同日うまこのもとから

あら玉の年も若菜も摘人はうつゑつきてやのへにいつらん
返し

卯つゑつきつまゝほしきをたまさに君とふ日のゝ若菜成堯
ふしみといふ處にて名あるところゝ歌によむにあ

しまのいけ

うらわかきあしまの池の水の色は淺みとりにそ波も立ける
かさとり山

ふらはふれ笠とり山のこのしたは秋の時雨もゝらしと思
ふしみの里の戀

つきもせず戀する人はねもいらて伏見の里の夜こそ長けれ
かたらむと云人の久しくおとせぬをつゝしにつけて

いひやりし

いふやとていふ程をまつ岩躑躅いはす迎やはいはてやむへき
又

語らばて程のへぬれは時鳥君忍ひねそたゆるよもなき

五月六日さかみある人に

人しれす 〔まづ〕社菖蒲草昨日をたゝにすくすへしやは

返かはりて

あやめ草ひく人しけきよとのには何かは深きねをも尋ねん

おなしほとの人はいひたる

人のよも我よもけふかあすか川

とありしに

水のあはよりけにそはかなき

山里に侍ほとこともものしたひまうてきて所のさまの

おかしきに題にて歌よみ集めたりしを哥合にせん定

めよといびたりしに

浦の波にも我はかたよらしなには人社あしよしはみめ

おなしところ山里の時雨

とふ人もなき山里のむら時雨ふたよりみよりおとろかす哉

人々さくの哥よむをきゝて

さまの色のをはすてし身なれとて菊に心をうつろはす哉

九月盡日すけみちの大貳のもとから

年つもる人こそいとをしまるれけふはかりなる秋の夕暮

かへし

哀かく暮行あきのをしさには立ならふへき老のなみかは

思ふことあるころ萩をみて

おきあかし見つゝ詠むる萩のうへの露吹みたる秋のよの風

東國へまかりにし人のむすめをまわひて

いきのをのたえなむをりは君きても哀いつこと我を尋ねん
かへし

息のをのいきてみるへき君なれはかきる別はあらしとそ思

院の御堂にて百わかうつまれしになもしらぬ華をみ

しりたるやとせはせたまひしに

衣てにをし開きてをみそなはせたうめに咲くほうたぐの花

院のうち殿におはしましける頃人々きくをもてあそ

ふ

なへてのは霜かるらめと法のうちのきくは盛の色を常なる

右大殿まゐりたまふみちに時雨にあひて

宿近くあへる時雨はなになれや山路なりせは濡やまさまし

京せんりしと云人のおほけさぬはせしにかたなやあ

るといひたりしおこすとて

にんにくの衣をぬへる君なれは惑をたゝむしるしをそやる

かへし

西の方猶とくゆかむそうかりの衣をぬへる糸にひかれて

僧もとからものくむかひにかきたりし

さくししの法を聞つゝ世を救ふほうすのはたと是をいふかひ

かへし

ふかきしを尺しえさする法のしにもくらのかゆをくみて報はん

茄子といふものをさかにつくりてかれたる木のえた

につけて人

思はさる事のみさま哉もとなすひからきの枝にならん物とは

かへし

珍しやからきの枝のもと茄子つくらさるにはいかてなりけん

ふちのきの舟ににたるにひらたけをほしてこれを題

にて哥よみてといひたる人に
海士人は鹽木もつみに岩藤のひらたけわたにさしてゆか南

はかうせし頃つけすといひて人

恨ても猶つらきかな廣めけんのりの衣にかけすと思へは

返し

たまさかに廣むる法の衣にも立おくれけんみをやうらみぬ

よからすや思ふらんと思ふ人のちかうゐたるに

夢よゆめ心へたつな蘆かきのまちかきほとに成ぬとなら

かうろといふあそひところの山とのかみといふ人そ

すみしそれなくなりてふるき難波の里にかへるとて

そのころ人々うたよみしに

芦の葉のうらかへりたる難波人ふるの社をかけぬひやなき

おとせぬ人に冬の末つかた

忘^{新勅}られてとし暮はつる冬草のかれはゝ人もたつねさりけり

うまこのいかなりし日

三位

嬉しきは千世の小松のはるゝと榮へはしむるいくか成覺

按合了
從三位行治部卿平朝臣判

右以織部正源乘尹本按合了

康資王母集 稱伯母集

いまの世の御時歌の心しれらんをとこ女のなかにい
ひはしむるふみおのゝ(にイ)やれとおほせられけ

れは

春宮大夫

としふれといはて朽ぬる埋木の思ふ心はふりぬこひ哉

返し

深からしみなせの河の埋木はしたの戀路に年ふりぬとも

おなし人周防の内侍にもつかはすと聞てねたみ侍

みしまえの浦みつ汐にまかふ芦のねたく末葉にかゝる白浪

返し

同大納言

みつ汐^{千歳}の末葉を洗ふなかれ芦の君をそ思ふうき沈つゝ

うらみ哥と侍けるをまつよしときゝたかへて

時鳥まつにかけてもさゝかにの何れのよひかしるきとそみる

返し

しるしありて待夜もあれや郭公^{なイ}なかゝけし雲のふるまひ

四條の宮のはいらいに雪のふりし年

立ならふ油の白妙ゆきふれは鶴の毛衣むれきたるかな

おなし宮の御住吉まうて

住吉の松と聞ては年ふれとかゝるときはの色をこそみね

おなし宮の扇合に鹿^イ毛

色にいてし秋しも鹿の鳴なるは花のをりとや妻はたのめし

殿上人あまた参て梅のかころもにうつるといふ題を

新後拾

梅の花ひもとく春の風にこそ匂ふあたりの袖はしみけれ

宮の宇治殿におはしますころ殿まゐらせ給ひて女房

さそはせ給ひてをくら見せさせ給それよりやがてかへらせ給ひて京よりおくられたる

春なれば花のみやこへ歸るまにをくらの里は霞へたてつ御返し

見すてつる人の心もみゆはかり此里の花ときはならなん臨時祭の御ものいみなりければよひにかんたちめよひにまゐりこもり給ひてこの御かたにてあそび給歌あるへしなとさためらるゝほとに歸鴈のなきしをやかてこれを題にてみすのうちにもよるへきなりとしなかの宰相中將の有しかは

鴈かねの花のをりしも歸るらん尋てたにも人はをしむにそのかへしおなし宰相中將

ふる郷に花の都をとひ過て歸る鴈かね思ひやるかな

此哥を宇治殿きかせ給ひて。つねなかの大納言を御つかひにて。よへの事ならん。をかしくきかせ給を。

ろくあるへきとや。やかてかの申さする事をと。おほせられたりしかは。いつれの御時か。みつねに月を弓張といひけるは。なにのゆゑそと。とはせたまひければ。山のはさしていはなりけりと。まをしてこそ。ろくは給りてはへりければ。そのつらにこそさふらはすともとを御かへり申侍りしか。攝政殿の七番哥合に櫻

詞花

紅のうす花さくらにははすはみなしら雲とみてや過まし此哥の持なるよし申て侍りしかは殿

同 白雲は へたつれと集 御返し そ 白雲にたちまさらねと紅のうす花さくら心にそしむ

同 白雲はさもたゝはたて櫻色ぐれなみの集に今一しほを君しそむれば郭公

山金華ちかく浦こく船はほとゝきす鳴わたりこそとまりえけれこの哥をきゝてよりつながおこせて侍りたりける

年へぬるふな木のくちも時鳥鳴わたりにそゆられよりぬる返しおしはかりてつかはしゝイモ

時鳥きゝ知人はたつねけりひくかたもなき舟のわれをも雪

新勅 ふみゝけるにはの跡さへをしきかな氷のうへにふれる白雪いはひ

君か代はまさこの數もあかす共せゝの千鳥も猶そゝふらし後の二條殿の八月十五夜月の宴せさせ給とて哥めし

ゝかは參らせし水上月

秋の夜も氷むすふとみゆるまで水のおもしろく照す月影おまへの前裁のおかしきを大殿御覽して人ゝのね

いりたらん折にをらせにまゐらせんなどあらかはせ給ふになりふさの少將のおりにまゐりて見つけれ

られてにけしうしろてのおかしさとイモうしゝまもとにや花はねなからあらはれしまもる人めは雨ならね共

おほととの御返し人目をは何かつゝまん秋の花色にいてゝ社ひきもうゑしか

かや院とのゝいつみのふたかたに侍をいとみかはしかいらせ給ひてたて石をいろとり岩のかとにあはせてふたをつくらせ給て書をかき鶴龜を作りてみきは

に立たれたり内の御方のすけの命ふ深きあさきこなたかなたの鶴龜の遊ぶ泉はいはるゝけり

返し

かた／＼にすむ鶴龜の心をや泉もくみていはるゝともなる

菊の花ひさしといふ題をうへの人々参りて讀しに

新勅
長月に匂ひそめてし菊なれば久しく霜もおける之けり

うへわたらせ給ひたる御ともに少將の命ふまゐりて

菊ををりて色をもかをもといひかけ侍りしに

色わかぬほしとやみまし白菊を雲のうへ人わきてをらすば

月きくをてらすといふ題を

露みたれこゝろ／＼に咲菊の色わくはかり照す月かけ

殿より母のしふめし／＼そへて参らせし

後拾
尋ねすは昔のつてのものはこのもとにてや朽果なまし

右大臣殿(顯慶)の宰相中將ときこえし時五節いたして

まかて給に

新勅
をみ衣かへらぬ物と思は／＼や日影のかつらけふはくるとも

返し又の日

同
かへりてそ悔しかりけるをみ衣その日影のみ忘れかたくて

同じ夜ふりける雪の山ゐにはつもらさりしかは

ふりけれと山ゐに雪のつもらぬは日影さし出し名残之けり

殿上よりくだ物申たりしに花たち花を折ておくられ

師賢

新勅
時鳥こよひいつこにやとるらん花たち花を人にをられて

返し

同
ほと／＼きす花たち花の宿かれて空にや草の枕ゆふらむ

もろ時の中將母の哥合にあかつきのほと／＼きす

名にしおは／＼こたかくなけや時鳥おとはの山の明仄の聲

わたくし所の哥合に五月雨

五月雨に野原の草もみこもりて影をみつゝや駒はあさらむ

小野宮のみたうおかみ侍りしに御せん／＼法も頓て

きけと仰られしかは所のさま瀧のおとになみよりて

たうとく侍しかはまうさせし

新勅
今夜こそ身のうき雲も晴ぬらめ月すむ水に影をやとして

御返し

月のすむ水の心しむすひては曇りなき身と思ふはかりそ

雲林院の菩提講き／＼侍りしにしん殿の御かたより御

車にいひつかはしたる

法のためわれのみぬらす袂かは山時鳥來ても鳴なり

御返し

袖ぬらす雲のはやしのみのりをは時鳥のみ聞てやはなく

山里に冬こもりなから侍しに正月一日猶雪の降侍れ

は

降雪に空は春ともみえねとも竹のよこめて鶯をなく

山里の春の明仄見渡せはみとりのそらに霞たなひく

おなし六日わかな人につかはすとて

身をしれはあしたの原もたのまれてけふは籬の若菜をそ摘

なと若菜をはおこせさりしそといふ人に

竹結ふこのめまとはになりゆけは摘し若菜も其日もりにき

二月雪ころもにおつといふ題を

新勅
梅ちらす風もさえてや吹つ覽かをれる雪のそてにみたるゝ

岸の柳

さを姫のかさし成らし青柳のしたれる糸に玉そかゝれる

花見にまかれりしにみな散にけり

新勅
さくら山花のした風吹にけり木のもとに雪のむらきえ

わらひはいかゝといふ人に

ふりつみし峯の雪氣の餘波にイかや物うけにのみ見ゆる早蕨

こしへまかる人に

ゆく鴈みてもイはかへる山ちの雪をみて花の都をおもひ出なん

母の山里に侍りしころはらからともいきあひて所の

さまにしたかひだる題ともをよみてあはせ侍しいけ

はるかせにけのこけりのとけしより新拾
淺縁はるのうすらひとくるより結びかへたる青柳のいと

三月つくる日

我をしむ心もつきぬ行春をこさてとゞめよ鶯のせき

四月一日やまふきの散のこれをりたるをイ

春風や衣かへとてたちおきしやへの山吹ひとへ残り

ある所に歌よむ人々有てうのはな月に似たりといふ

題をよませ侍りしおこせたりしをイ

白妙にうの花さけは此ころの月は垣ねにすむかとそみる

とほきたち花

たかつまの花たち花に吹風をよそなる袖のかはかりにしむ

よとのこあやめひく

あやめひく賤の袂やたゆからん尋かゝらぬぬましなけれは

ねさめつイして便にきけは時鳥つらき人をも待へかりけり

秋たつ日

初秋の立田の山のこするをけさいはけふや一しほ時雨そむらん

たなはた
あふともなれすやあ覽ひこほしのま遠にきたる天の羽衣
法性寺といふ所に侍しころくしたる人と親しくて治

部卿七月七日にかたゝかひにおはして八日にかへり
給ふに

よそになる今朝の別をたなはたの昨日の暮に返しても哉しイ

月ひるをかこつといふたいを

忘れつゝ晝かとそみる秋の月さやかなるにもおほめかれ晝

となせのたきの紅葉とゝもにおちてを見はへりて紅葉のと
もにおち侍しかはイいとおもしろく侍りしを

紅葉はにもとの白糸こさいおりませてから錦にもおつる瀧哉

はつせにまうてゝさほ山の紅葉の散みたれたるに

さほ山の嵐をいとゝぬがせつる紅葉の錦みにきたれとも

そのみちのやまたのわたりにとゝまりてイ

遠山田もるいほりには秋の夜の露もいねてやおき明すらん

衣うつ

我か袖の霜はらふまをさよ衣うちたゆむとや人はきくらん

九月つくる日

心ほそ露を霜をやむすひおく秋をゝしかも鳴わたるとて

冬のはしめ

見し人も花も木葉もかれはてゝかきねをあらす冬にきに晝

庭の月冬イ

庭もせに水流ねと冬の夜の月の光はうすはイこほりして

山ちのこほり

氷りゐてこし山みちも忘れぬ水の音こそしるへ成しか

さうしのゑに木すゑに残たる紅葉に雪かゝりたるを
山里のもみち過ぬる冬木には雪の初花咲かへてけり
いけの水とり
なかれ行水のあわとて思ひける雪も拂はぬをしのうはけイきねを

正月に雪のあした見わたされて

あたらしくふるやの軒もけさも成に覺いみな白雪のうはふきをして

佛名

時しまれけふしも雪の降つむは罪をきやせんかこと也けり
年おきて久しく母のもとにまからさりしかはかれよ
り

新千
たらちねの親をはすてゝこはいかに人のこをのみ思ふ我社

かへし

同
人のこの親になりてそ我親のおもひはいとゝ思ひしらるゝ

うまこにくしたりし人のみちのくにゝなりてくたる
へしと聞て

つられれとらなくをつる涙哉衣の關もとゝめかたくて

六條院の人ゝかたゝかへて曉にかへらるゝに

月もみし草の枕と思ひ出てちりぬほとに又かへりこよ

よしなし事いひたる人の返事に

見る人の心をしらは風ふきて雲なかゝりそ山の端の月

前栽の中にらんのかほりいてたるにほりかはにきこ
ゆる

たれかぬし日も少くれの藤はかま

ときこえしかは

ふきとく秋の風やしるらん

つねのふの大納言ひんかしおもてに参りたるにとを
やかにていらへし侍るにいますこしきこゆる程にと

いふあかして（ゐりてい）たつとて

秋の夜はいくたひうきにあげつらんぬい

とありしかは

つゆはかりこそかすはおくらめ

右の大殿のたけのたいに月のもりたりしを
たけのよなかにいつる月かな

とおほえしこれつけよとのたまはせしかは
ふけにけりこやふしまちのほとならん

ひたき屋に雪のつもりたるを

宮の下野

いかてかつもる次たきやの雪

といへは

けむりたつふしのしらねもかゝるにや
山に花のちりしきたるを人

花のころもを山はきたるか

とあれば

浅みとりかすみの空にたちければ

例ならぬころ前齋院大貳とかたらひあかしてつとめ

てこれより

千載
しぬとても命こころをわくる物ならは君にのこして猶戀やこひなし集ましを

返し

大貳

思ふにし命かなはゝ残しおかてもろ戀に社もえはもえなめ

このかへしをむすめなる人

かたこひの苦しかりしも慰めて命しあらはと思ける哉

侍従の宰相よしなし事の給て

冬のよにつかはぬをしの獨ねにあやなく袖のぬれにける哉

かへし

冬の夜の池のみきはにうき寝せしをしの毛衣羽いさもやさえ劔

すけつなの中納言のまつりの日車参らすにした簾

やあると尋ねられしかは物もなみそとにこそはとき

こえ(申たリイ)しかへすとて

玉すたれかるにはあらず葵草下の心にかくとしらなん
返り

諸人のかさすその日の葵草心のしめはそらはかいにかけなん

哥のころかとをたゝくとはすればすけなかの弁のい
ひあはすへき事なんあるといへとあけすさらは今有
明のほとにこりすまゐらんとありしかとおともせね
はこれより

あまの戸の有明かたとたのめしをへたつる雲の過も行哉
返し

在明の月もまたれす天の戸にいれねはそれを歎にそする
かゝるほとに帥になりてかれより

君をのみこふる心をいのちにて今までこそはいきの松原
返し

よそなからいきの松にてつくしては命あり共何にかはせん
とほくまかるに宮よりさうそすくつかはしたる御
かへり

旅衣はるかにたゝは秋霰におほつかなさはいかゝ詠めん
きしにかりやつくりて月いとちかくみる心ちす

遠けれと雲井の月はみる物をあはれ都のかゝらましかは
ゆふつく夜のいとおもしろきころいつこよりともな
くて京よりふみあり經信の大納言のこ

東路後拾のたひの空をを思ひやるそなたにいつる月を詠て
返し

思ひやれしらぬ雲井ちイもいる方の月よりほかの詠めやはある
かしこにてすまひのつかひにつけて隆綱の宰相中將

同かへるべき
あふとのほとををかきりて待人は過る月日を嬉しかりける

返し

同やイ
東ちのかやか下にし亂るれはいさや月日の行もしられす

宮の下野かきたえてふみもおこせねは
あつまちのイ

しもかれのちの冬草しをれして跡たにみえぬ忘水哉
返し

よそなから心を人につくま川深きに跡はみゆる物かは
待かねてはゝのもとより
伊勢大輔集

いきのをのたえなん後は君きても哀いつくと我を尋ねん
返し

同
息のをのいきてみるへき君なれば限り別はあらしと思ふ
る集

ゆゑありし人のあつまにとゝまりてゝを侍しにのほ
りにわかれをしみ侍しにあふきとらせはへりし

雲井にて月を詠めんとよりにも思ひし出はあふきてもみよ
そむきぬときゝて大を殿の宰相中將の母

かけていへは袖のみ濡てそむく世の哀をえ社とはて過つれ
返し

苦のそとふに露けさまさり晁したふ泪はかけしと思ふに
その宰相中將家にあはれなる事ありと聞てとむらひ
きこえし

新千
このころの寢覺の風にいかはかり夜深き露を袖にかくらん
返し

同
すみなれし故郷人もなき宿と集にかたしく袖は露もかはかす

通俊中納言後拾遺つくるに歌こひ侍しかはつかはし
て侍りしかはこれをなんひかりにてとてよめる
(本マム)

年をへて君かかきつむもしほ草玉もをかれ心ちこそすれ

返し

いかばかり光もみえし濱千鳥ふみしたきたるもしほ草には
つねみちの帥のむすめの宮にさふらひしかおとなと
なりていひかはし侍しを人にくしきこえてかたみに
おほつかなくなりて侍に中垣に櫻いとおもしろくさ
きて侍るに

まちかきにはふとならは山櫻白雲計へたてすも哉

かへしいれす

わつらひしを知さりけるよしふ人に

思ひ出て誰をか人のとはましなうきにたへせぬ命之せは

物思ひみたれたるに(こころ)よふこ鳥のなくを

世の中をなそやといふもよふこ鳥我なく聲をこたふとや聞

いてたちたるをしはししらせしと思ふ人の云遣したる

こゝのへのおほうち山の時鳥いつかりにはなかとすらん

返し

忍び音をまつさとならは郭公みやまの^{こゝろ}うちも出すやあらまし

はかなき人にたへたる命哉といふ人に

しはし社磯の泡ともたゆたはめきえとまるへき水の上かは

またおなしといひ(を申イ)たる人に

山したの目かけの草の朝露はおく物とてもおかれやはせん

かゝる世にイナシ我のみそいしかねにてであると申人

に

みな人は水のあわにて消ぬるにそこゝそ石の身には有けれ

天王寺まうての舟にまくら(を)なく

舟ちには草の枕もかりえねは袖敷たへにねてあかすかな

住よしに人々のまゐりしにつけて参らせし

住のえのうきにおひたる葦よはみ涙ひきたてん折をまつ哉

その神主國基か持ふつ堂たて侍しにつまとをえさせ

侍とてかくいひつかはしたる

横の戸を西にあげてや詠むらんさきたつ月にもつてをして

返し

月のいるそなたをあけて詠むれば君思ひ出る妻となる哉

山さとのイナシ哥よむ人のいひて侍し

山さとの淋しきつねは誰かとふ春秋くらん人のなかには

返し

春秋もたゝひとはなそ山さとは峯のあらしを絶すおとする

とのゝひ(む)この家に説經きゝにまかりて紅葉散亂

おかしきよのけしきにて(なん侍し)

今宵こそ罪も嵐にちりぬらめおつる木の葉ともろ心にて

返しおほえす

神樂をよめる

さかき葉や立まふ袖の追風になひかぬ神もあらしと思ふ

基俊の家の説經きゝ侍しにくるまにいひつかはし侍

し

たゝひとつ門の外にはたてれとも鬼こもりたる車之けり

返し

御法こそこの車にはこもれるに心のおには我と名のるか

九月十三夜六はらにひとくまうて來集りてふみつ

くり哥よみ侍しに

名にしおはゝ今夜はかりは心して月のあなたに露はたゝ南
風ふくに(夜)むすめのもとより

雲はらふ風につづても山里の月影いかにさえて住らん

返し

風はやみさえもさえずも山里は都の月を俤にたつ

山里の五月雨のをかよりおつるを見侍りて

さみたれに高根の雫おちたためて麓はいかに淵と成らん

うむこしのひしりのもとに初てまかりて

闇からむしての山路の導へせよみしよの月の照すと思はん

千日の講はしめたるに其ひしりの行はれし日きかて

かへりにこしし人に

中くきかて歸るも心あれなわか聞たにもをしき御法を

おなしひしりの雪を丈六の佛につくりたてまつりて

供養しつるよしいはれてかく

いにしへの鶴の林のみゆきかと思ひとくこそ哀なりけれ

返しほとへて

日をそへて雪の佛は消ぬらんそれも薪のつきぬとやみし

そのひしりのわつらはれしによろしうと聞しかは

うかりしに我命をはかへてしを君いきぬれば生てみまほし

よかはのひしりの弟子になりて侍しかはくとかくのを

りよひきこえたりしにおりられさりしかはいひつか

はし

光にて雲の家をも出にしをてらしはてなんおほそらの月

道つねか筑紫よりのほりてからものなとつかはして

かくよめる

山のはの月をわすれてあはれ我そらも人に成やしぬらん

返し

姨捨の山のはの月忘れす思ひ出けりみるそ嬉しき

まさふきの帥のふたゝひなりたるよろこひに
かくしあらは千年の数もそひぬらん二たひみつる箱崎の松

かへし

箱崎の松に千年のしるければふたゝひのみか三たひ社みめ

人の扇に手かゝせ侍につかひにつかはしける

かたみとてかけとも手にも結はれす年のやそせの水莖の跡

この衛（ゑ）の關白とのゝ若君をうつくしうみたて

まつりてつくりたる鳥の聲するを奉るとてよめる

新羅古
身につもる年に萬代とりそへてけふわか君に奉るかな

殿の御かへり

よろつ代もあかす思ふに取そへてゆつる齡を嬉しとそみる

以下五首一本元
君のみや花の色にもたちかへて袂の露はおなし秋なる

後拾
ふきかへすこちの返しは身にしみき都の花のしると思ふに

同
さきかたき御法の花に置露ややかて衣の玉となるらん

同
わしの山へたつる雲やふかゝらんつねに住なる月をみぬ哉

金葉
うかりしに秋は盡ぬと思ひしを今年も昔の音こそなかるれ

里イ
山川の水の流をかきやるに石まをしけみゆかぬものは

寛治八年關白前太政大臣馬場院哥合に祝ひ心を

よろつ代をまつのを山の陰茂み君をそ祈るときはかきはに

右伯母集以古寫三本校合了

弁乳母集

しら川殿の花の水にちるを

白川のちかきわたりにちる花は梢にかゝる波かとそみる

天王寺にまうてゝ龜井の水を

萬代をすめる龜井の水やさとはとみの小川の流なるらん

弓を

神代より佛もあはふせきけりこやのり弓の始なるらむ

嵯峨のに花見にいてたる宮よりたまはせたる

露なから折てをかへれ女郎花さかのゝ花も見ぬ人のため

御かへし

松虫のねなからこそは女郎花わか都にはひきてかへらめ

大とののかまのこしにかゝせ給へる

うら山しむすほれたる下紐のとけぬや何の心なるらむ

御かへし

下紐は人のこふるにとくなれはたかつらきとか結ほゝる覽

大殿まとかきたる扇にそらこととをもをたはふれさせ

給て

まとのみ心はみえて梓弓もるやにあまる春にも有哉

御返し

まとにみる人しなれば梓弓かははなれたる心ちこそすれ

又殿

梓弓ともねも絶て夜もすからかははなれたる事をしと思ふ

萩の末ををりてかめにさゝせ給へるを

朝ゆふに風のみしけき野へよりも久しかるへき萩のすゑ哉

宮春宮に入せ給へる殿上人こゆみいて宮の御かたにか
かけもの申てひはりこの上に的かきたるにふたに花
をちらして書つけて大盤ところには入たる

かちまけの弓のやませに散花をまとの外の人もみよかし

とあれはかねのまとを盛なる枝につけて

あつさ弓おなしまとるのうちなればちらぬ櫻の花を社みめ

宮の御前に前裁うゑて人々哥よみけるに

庭もせに植たる花は君か代をのへとそみゆる秋の宮人

おなし宮程なくうせさせ給ひての御忌に姫宮の御ま

へ御堂におはしましゝに十さいたうの地こくのゑを

人々よむに十八日つるきに人のつらぬかれたるを

いかにせん劔の枝のたはむまておもきはつみのなれる成覺

一品宮枇杷殿に十月にかへらせ給へるに御ちやうな

るさうふを御覽して

菖蒲草なみたの玉にぬきかへて折ならぬ共ねをそかけつる

かへし

江侍從

玉ぬきしあやめの草は有乍らよとのはあれん物とやはみし

又のとしの春大納言参り給ひてすひつの灰に手習に

花の香の匂ふにものゝかなしきは

とありしに

はるやむかしのかたみなるらん

と聞えければ大納言との

香をとめて君かかたみに惜まるゝ花のすかたは風もよか南

御かへし

形見そと思はて花をみしたにも風をいとはぬ春はなかりき

大なこんせんやう殿の御まへに花のいみしう散けれ

はいかゝ見給ふとありしかは
ちるこそ花のさかりなりけれといひしかは
咲さかぬ所もわかすふく風は

歸る雁

後拾

折しもあれいかに契りて雁金の花の盛りにかへりそめけん
殿上より郭公を山すけしてむすひて
なてしこにもかたらふは時鳥とて入たれば
花たち花の枝をわすれて

殿上人内に御忌におほくこもりて若宮の御方にくだ
ものゝおろし申ければいたすふたに一にはかうはい
一にはしろき梅をおろはしにて色をも香をもとて
結びつけたれば

つねのふの君

しる人のしるなる花の色なれば君みるらむとおもほえぬ哉
返し

しれは社しらぬ人をもしらすとは知をしらすといふ人や知
野宮にさふらひしを人のもとよりあたり淋しき旅ね
所にていくその事をおもひてんといひたりしに

續詞

木の葉ちる峯の嵐に夢さめて何事をかは思ひのこさむ
院うせ給ひて三位のもとに

哀君いかなる野へのけふりにてむなしき空の雲となりけん
御かへし

思へ君もえしけふりにまかひなて立おくれたる春の霞を

白川殿にと聞し頃

何故に都のほかに旅ねしてしかのなく音に聲をそふらん
かへし

哀をはしらぬ山路もなかりけり思ひもかけぬ鹿さへそなく

うへうせさせ給ひて五月郭公の鳴ければ
古郷へとつてやせし君獨こえけんしての山ほとゝきす
もとの人はそのかみ忘れにきとありしかは

いその神ふるの社を忘るればうしろめたなき三輪の山もと
小家に竹をさしたひしるをとははやしといふに

虎のふすのへならねとも賤のをの宿こそ竹の林なりけれ
松の尾行幸春宮の女房みけるにさか野の笹のうへに

たてゝ花ともをさしてその野を一くるまつゝきたり
すゝきのくるまに

續古

打まねくけしきことなる花すゝき行過かたき心ちこそすれ
返し

行過ぬけしきともみす花すゝき招くにとまる人しなけれは
人にかはりて

君たにもねたゆる宿のあやめ草あまりうきには引人もなし
四條の宮に家の紅梅をたてまつりたるに外にわたら

せ給へるにみるにめてたく咲たれば

後拾

かはかりの匂ひなりとも梅の花賤の垣ねをおもひわするな
古郷の遠くなるまゝにいとしく秋は露けき草まぐら哉

これいせん院うせさせ給ひて女院よりさいるんの女
房のもとに

こそそのけふかや契し神山につみし葵のかけまくをし
御かへし

かけまくは畏しとこそ祈しをはかなかりける葵草かな
齋院おりるさせ給ひてこそそのあふひを

なつかしきかさへそつらき神垣に今はかれぬる葵と思へは
宮の御四十九日の御そうそくのあまにてありしをみて

花にのみ染したもとを打かへし涙のかゝる色そかなしき
春日まつり

ひととせに二たひまつる三笠山さして千年のかけと社みれ
時鳥を

きかてたゝあらましもを郭公み山へかへるけきの一こゑ
残の木ゝに雪のふりかゝりたるか櫻にゝたるを

神無月もみちにふれる初雪はをりたかへたる山さくらかな
むこになりたるつとめての哥人のこひしに

岩代にちよをすく覽程よりもまつはくれこそ久しかりけれ
かくら岡にて子目せし人にたかつねい

舟岡も遠きわたりに子目してつなてにちよの松やひくらん
春宮の御まへに菊をおほく植させ給ひてまうすにあ

やにくにたまはせねは
玉登
星とのみゝてやゝみなん雲のうへに惜さきつらませ給ふ白菊の花

と申たれば
同
色ゝにうつろふ菊を雲のうへのほしとはいかゝ人のいふ覽

大殿たんはの家にわたらせ給ふてこのゐたる家のむ
かひにて萩いとまねくとおほせらるゝとありしかは

あなかしこ招き申せと萩のはのそよと計りのあふせ事なし
いつものうへ萩をこひてをそうとり給ひしかはなと

かとは聞へたりしかは
忘れつゝ堀も植なてやみなまし萩ふく風の音なかりせは

御かへし八月なれば
はに出て秋も半になりぬるをけふしも萩のそよといふらん

九月西の院にいつもの母うへのいみにておはせしに
おなし比故三位のおはせしか思出られて

かきしくれ思ひ社やれ見し夢にかはらぬ宿そらイの秋のけしきを

少將のちこ生れたるにみのゝかみのきぬおこすとて
新拾
鶴の子の巢たち始むる色衣けころもちよにやちよにかさねてそきん

かへし
いのるめるあまたのつるの色衣にまた萬代を我はかさねむ

六てうにわたりたるになか島の松のいとこたかくめ
てたきに

淺からぬちよのけしきと見ゆるかな此中島の松のみとりは
かみかへし

みとり子の心ちこそすれ中島の姫松えたる宿のあるしは
四月に郭公のなきければ

時鳥新拾み山出なるしはつこえのひ音はいつれの里のたれかきく覽
五月雨

おほつかな遠方人やいかならむをやみたにせぬ五月雨の比
し

秋ふかみよはの時雨にね覺して遙にしかの聲をきく哉
年比宮の御祈に石山にまうてつるにみかとにゐさせ

給ひて例には似すこゝちのいとめてたくおほえて
かゝる世にあふさか山は越けるをなとよみけん走井の水

せきに人のあひたりしかは
走井の水のこゝろも行はてゝうれしき旅の逢坂の關

齋宮のくたらせ給ひしに
ふりすてゝ雲を遙にすゝか山かゝらん物とおもひかけきや

初雪
見渡せは岩まの小さゝうへしろみけき初雪はふりにける哉
ひたりのかたにこひしかは

あやめ草引かひ有て見ゆるかなみきはにまさる淀の澤水

七月七日たなはた

かた／＼に心こそえね七夕のいく行あひのはしめちきりし
むら／＼に見ゆる紅葉のにしき哉霧はたゞてや秋は過にし

正月音つれすとありけるに七日子日なりければ

いつしかと思ひをまつに鶯のけふめつらしき初音なる哉

春秋の千草の花の色はみな一もと菊にうつろひにけり

いく田の海に身なけたる女のけさう人の二人ながら

落したるを人々よみしに

玉穂 後れては生田の海のかひもなし沈むみくつとともに成なん

内侍あまになり給しにあかそめ

導かん方につけても嬉しきを又悲しきは何のころそ

繪に死出の山に鬼に追れて女のなきてこゆるえしあ

りし(あり)

新編古

つくりこし罪をともにてしる人もなく／＼越るしての山哉みち

二條院哥の題をかきて殿上人に出しては(ち)よりをと

らせ給ひしに大井をととりて

君か代はのとかにすめる大井川流れてみゆる千世のかけ哉

たけくまこひたる女房のこひしかは

昔よりちよの影をもしらぬ迄面なれにけるたけくまのまつ

春宮の御さうふのねめしたるに参らせて

玉穂

谷深き岩ねのあやめ君かためなき例を引いてつる哉

三井寺よりくしたる人にしの關よりかへるに

名をのみやたのみて越んあふ坂のせきは宮古を隔てつる哉

かへし

ふの殿とそきし

逢坂は心のかよふ道なればへたてんせきにさはるへしやはかへらい

かたらふ人の懇に申さんとあれは我もさおほすきは
よき事と申たるに御文のうちに萩の葉におもはすな
る事の有ければ

夕風にひき驚かす萩のはのそよとはかりに今はこたへし

とあれは

世の中にふといなる物おほかれと君はかりなる人のなき哉

又かへし

何事もさらはといひしかひありておなし心に思ひける哉

なといひかはして恨てひころありて

つらしとて心のさらにわすれなは

とていかにも／＼これか末をたに思はんまゝにつけ

てやめとあれは

あはれなからにたえこそはせめ

九月九日おなし人

玉穂

春の日も何になかしと思ひけんをなかしとよに集

菊につけて御かへし

同

秋もまた過ける君と聞物を久しきくればけふのみやしる

かゝる心さしをいかにおもふとありけるに

同

さらてたに露けき比をなそかく秋しも物を思ひそめけん

ほのかにおなし事はんとありしに常に恨かちにて

中あしきころ

君はきみ我はわれにて過すへきいまはこんよと契し物を

かへし

御被して此ものはや八鹽ちの汐のやをあひにさすらはして

と聞えたればよひとねたましたひけるに

ましるへき炎のさまを聞しかは思ひけちてはやましと思

おなし比ふの大なこんの北方におはすと聞て

我ならてあらしと思へはとはれ覺けふもや秋の暮は久しき

おなし人おはしたるに門もあけねはされと松虫はな
くめりたけからすあれは

契置し君すきとはす成ぬれば宿にはたえす松虫の鳴

思ひいつく^{るにイ}とあれはそれに

思ひいつる^{王盛}とはうつか覺束な見はてゝさめし明暮の夢

とあれはかへし

見^同もはてゝさめ劍夢を思ふにもこれを現といかてしらせん

櫻を宰相のもとより獨見るかひなしとあれは

遠にみんうしろめたなし山櫻散とまるへき匂ひならねは

雪ふるに人のもとより

羨まし降つむ雪はむらさえぬとけぬは松のつらゝなりけり

かへし

かき暮し降つむ雪は積るとも春のつらゝはうちとけぬへし

おなし人

しのひ音はさく人もあらし郭公猶さよふけて我にかたらへ

おなし人

めもあはて明しつれ共秋のよにねぬと語らんせめて辛くは

また

雨と降なみたに袖はぬるれ共おもひはけたぬ物にそ有ける

青みし人のむかへかうの所にほうしにてありしに

夢のうちにみし俤のかはらねはなほありしよの心ち社すれ

十月晦日かたにこゝちあしうするとほかになしとて

せさいの萩の根をほりたれば

見るからに露そこほるゝ我宿のもとあらの小萩秋を果ぬる

昔みし人かゝみのみしをおこすとて

形見^{續後拾}にと思ひてみればますかゝみ戀しき人のかけも忘れぬ

かへし

ますかゝみ明くれみえしうき影を今は限りとともに忘れぬ

又

増鏡かけはなかめる君なれと猶わすられすなれし面かけ

ある人心くらへにて音もせてかくてまけぬへしとあ

れは正月朔日

鶯のこゑならねとも霞むより君かとふ日を待こそはすれ

たえて音せぬ人の今のみかとあさせたまひてたかう

なをしけうおこすれば

君か代はうれしかりけり吳竹のものはしけき節をみるとも

しほゆの所にくらけのありしを

山端^{續千}をいつるのみこそさやけれ海なる月のくらけなる哉

右大弁のうへのあまになりたるにすゝやるとて

契ありし昔の友の玉とみて衣のうらにかけてわするな

おなし人つくしへくたるに

續後拾

惜からぬ命なれとも諸共にかまほしきはいきの松原

五月はかりに四條宮のうちにおはしますに参りてよ

旅ねするひとりふせやに小夜更てかたらひ明す時鳥哉

かへし

時鳥すきかてにのみかたらひて旅ねの床や淋しかるらむ

右弁乳母集以西尾海鷗本校合了

出羽弁集

おこなひに心いりて正月のついたちさとなるにさす
かにつれく日に日の過もかそへられて人のかりやり
たりし

なからふる我身そつらきさりととも頼し人も問ぬ春まで

かへしかこのかみ（櫛笠）つねあきら

きなくへき鶯たにも春霞立や遅きと音つれやする

すはうのせし（前司）たかたこそそのしはすに親に後れ
て勸す寺といふ所にこもりゐて歎くにやりし

山さとに霞の衣きたる人春のけしきをしるやしらすや

返し

限りあれや霞の衣きたれ共たち出ぬ身に春もしられす

宮のあふみ殿へ子のひのたまへる

ひきたえて千年の春はすくれとも松の緑の色はかはらす

かへし

ことに出て誰もいはねの松はさそとしふるまゝに色増り暈

七日ゆきのいみしかりしにやまとのゝたまへりし

いかにしてわかな摘らん雪深きはる共みえぬ空の氣色に

かへし

さかさまにかへらぬ年を積ためて若なはよその物と社みれ

宮のせし（宣旨）とのゝ年たちかへりてしるしも見えす

はれまなきに九重はいふせさもまさりてなとやうに

よみたまへりし御ふみとも失なひて忘れて御返しのか

きりおほゆるそあやしきはすにせち分してしな

り

年の内にたちにし春の日數にそ殘るつらゝもあらしと思

この雪のはれまなきに昔いまのと思出られてもの哀

なるほとにしもちくこ弁の御もとにたよりのありし

につけてきこえし

雪もよにふりにしもの戀しきを哀君もや思ひ出らん

御返事もさるやうにありてとなかければとゝめす

年月はゆき積れ共もろともにこしちのとはいつかわすれむ

このはつかのほとに經ほとけ供養し奉るに女院のさ

ゑもんのないしちかければ車なからたちてきゝたま

ふかかへりかくのたまへりし

嬉くも君かみ法に參りあひて見えしつまきもこらむと思

かれたる木の。ひかきといふものにそひてたて

りけるを。見たまへるなるへし。

かへし

諸人にひろめしのりも薪こる君にましてそ嬉しかりける

せうとの君からうしてちくこに成たるにさいもの命

婦のはらからも此度さかみになりたればおなし心に

うれしからんとにや常におとなひたまへぬ人なれと

かくのたまへぬる

この春はいもせの山の埋木もこなたかなたに花を咲ける

かへし

いもせ山たゝにはあらず埋木の匂ふはかりの花ならねとも

この里はよるつのまうちとあつむるほうしせうとの

かたはらなればたよりにはしるもしらぬもうちおこ

なふにとほたあふみのせしのりしけとか湯あみにき

たかくいひたる

鶯のこゑをしきかぬわれか身は春の過るもしられさり覺
かへし

埋れきとみえぬ君しもいかなれば今まできかぬ鶯の聲

いつみのあまうへと聞えつるをはすさか糸道といひ
て山里よりも世はなれたる所にてなくなり給へるに
さきの齋院の君はその人のとりわき睦ましく物した
まひしかはいみにこもりてよろつしたゝめはてゝち
るになんやかてほかへわたるとなとあるふみに
あるもかくさまゝ別るなき人は何れの道におもむきぬ覺
とあるかへし

悲しきはめのまへよりもなきひとの赴むく道をしらぬ成覺
二月一日宮に参りてあふみ殿に其後かきたえてきこ
えさりしを思ひいてゝ

いつとなき松の緑もこの春はちしほ増れる色をみせはや
あふみ殿

くらふれとちしほの松も限りあるを枝さしかはす契をそ思
おまへに大枝なる櫻を植させたまひける花のいとお
かしう見ゆるをわかおほん心からしもねをのみした
まてへたう殿のたまへる

雲井まで匂ふとみれとともすれば霞隔つるはな櫻哉

御かへし

雲の上に匂ひをちらす櫻花かすみもいかゝへたてやるへき
参りたるすなはちさい院の長官の尋きこえたまへる
ことゝ人のつけたまひしにうちいはれぬる

餘りあれば我たに思ひすつる身をいかなる人の忘れさる覺

これは二月つこもり頭弁参りて人々物かたりなとし
てあしたに哥よみて参らせんに何事を題にせまじよ
ろつものめなれたるにもてはなれたらんともかな
なとたこ舟後のないしにとりわきてきこえ給めりし
をみしにいとめ出たくそあめりし人と人のおほんも
なれとおかしければなん

春はたゝ柳櫻にあらず共つのくむあしをみてもすきなん
かへしないし

澤水に角くむあしを見るときとも雲井の花のいかゝわすれん
いつみの尼君のをりの薄墨をはかなきとふらひな
とならはしたる人のとはて過にしかたへおなしほと
のふてに成たるをとひにやりたりし

薄墨のそてをかけてやすくす覺われをも人の思ひすつとて
返し馬のかみつねのふ

問はすとして恨みさらなん中々にかくれば袖のぬれまさり覺
物語などのつひてにかく参らぬなとかはかなき事に
つけてもうち驚かさせ給ふましきいみしうおほしあ
なつりたりとある人に今かならずきこえさせんかう
きゝつればうるさきまてなといひたるに日ころも久
しう宮にも参らすなとあるにおかしからんともかな
云ひやらんとなる事なきはよしなしなと思ふほとに
このころの櫻よのつれの春よりもいみしきを一枝折
せてあれよりみふのたいふさたなかなり
をちこちの花の匂ひし常ならはたれかはくるゝ春を惜まん
かへし

花ちらす春も盡せぬよなりせば人にとはれぬ身とやならまし

さるはあの契もこれよりと思ひきこえつるにさすかにとて又

よの常のとはいはいしと思ふまに覺束なくてすぎぬへき哉となむおもひつるといひたれば又立かへりかれより人にとはれぬふしなんうちときかたきなといみしうすかして

たか宿も垣ねの櫻ちりぬれと我そとふらふ人やおとする

また

いか計いふせからましよの常の事を云はしと我もつゝまはとあるかきねの返しをまた

とふらふと猛き言のはさらはたゝ春の春のみまちや渡らんあふみのかみやすのり三井寺につくる山里に櫻の盛にきてみよとありしをいとよきをそなといひしかとさかりになるまで思ひもたゝてやみぬるに其頃あしこにありてみも驚けとやえならすいみしきを一枝折てたゝものもいはておこせたるに

一枝をみるにもいとゝ山櫻今とてゆかぬ身もなけつへしかへしあふみ

山櫻きてみる人もあらなくにまつとてしらぬしつえなるへしひとゝせもみし櫻もとのさくらまた散残りてやとれいのたこのないしをしるへとしきこえていてたつにあへきに宮ちかき所にいてゐて山はかすみにとちられ空のけしきもまたいとたゝしうくらき程に急きいてたれとあなたのかたよりかへる車のあるをねたくも先立たる人の有けるかなとてないしおもひのほかのくるまかな

とのたまふを哥になさんとてかけてたにといひ侍しかはこさこ(小左近)

われよりほかに花みける人

たといふものゝ手ふれぬを見てこさこ

花みると苗代水にまかせつゝうちすてゝける春の小山田

とあれば

春のたをまかする人はなくはなく返すゝも花をこそみめ

たつぬる櫻はところゝまじりて桃の花のめもあやにおもしろく匂ひたるに

まちもあえぬ櫻かひなし桃の花みちとせの春これを尋ねむ

こさこ

みちとせの花にうつるふ君なればまたぬ櫻も心ありけりないしの御しるへはたひゝになりぬるかうれしきことなといひ

春とに花のしるへとなる君ははかなゝからもあはれ契やないし

春とに花なかりせはわれに君なけの衣もかけすやあらまし

盛りすぎぬと思ふにいみしうめてたき匂ひとも残りたるにまことに心もなくさみてみる

花をこそ惜みにはくれ春とにいのちをのふる山さくら哉

今は散ぬらんと人のおしはかりたまへるにかく盛りすぎぬといとかなしくて

尋ねつるほとをまちつる櫻はな山の嵐とたれかいひけん

こさこ

はる霞立かくしつゝ君まつと風にしられぬ花とこそみれましてとくいてたゝてなとくち惜ければ

名をきけはちりての後に尋ねれと猶たのもしき櫻もとかな
こさこ

ないし

ちるをたにみにと行つるかひありて尋ねきにける櫻もと哉
ないし

またさかりなる花もありけり

こさこ

山ふかくこゝろのまゝにたつぬれは

おほむかたゝかへに大宮とのにわたらせたまふこと
六月十よ日いつみの涼しけさ小高き松の年ふりにけ
るこすゑなとたゝにてすすきせたまふ所のさまなら
す七月七日なと必ず御あそひありぬへきはとなるを
とくしかるへき程にあらねと其日思ふさまならす
あたりくたるをたゝけしき計とてよき日なりける
權たいふ正のすけなとさるへき人ゝすこし参りたま
て庭の松いくらの年をかゝきれるといふ題をたしま
のかみさねつないたしたるをとの人ゝいとようよみ
あつめたまひいかに女かたも殊更にひとつにいたせ
とにはかにはへしかはせし殿

庭の松みとりの色の深ければみつのそこ迄ちきるなりけり
大納言きみ

めつらしき君きまさすはちよ松の契れる數も誰かしらまし
さいそう宰相の君はかり泊りさふらひて山のかたな
りつるやもたふれてのゝしるをとなるおかしきこと
やあるへかりつるおほえしてやみぬるをせしとの猶

人々の思ひたまへらんともゝすこしはかり聞かむ
なとせめたまへはまつさらはいかゝときこえしかは
おほしたることを

天の河あさくもあらは七夕のこの音たかきみつせかさしや
大納言の君

秋風のすゝしくたゝは七夕の重ねやすらんあまのはころも
やまと

いかはかりななき契を結びけん空にたえせぬ七夕のいと
しゝうの命婦

たまみたるうはゝの露は七夕の絶せぬ糸にぬきとめてみん
又例のみないひとられたてまつりて物もおほえすの
みそ

底きよき泉の水にうつしてそ星あひの空もとにみえけり
風をうらみたまひて源少將

これやさは秋のはつかせ七夕の雲の衣も吹みたるまで
たふれしや人々二三人なくなりけりと聞にあさま
しくて

あらき風吹につけてもいとゝしく露の命をかなしかりける
大納言殿まかてたまひてよろつに水のなかれも月も
松風のひゝきもこひしきととのたまて

たちなみし面影との戀しきにすみうかれぬる宿のみつかけ
おほむかへし

戀しともいかは頼ますしら波の立かへらはそまこと思はん
やまともまかてたまで猶くち惜くこゝろうくてやみ
にしかせをうらみて

花ちらす折ならねとも身にしみて恨めしかりし夜半の風哉

かへしを

片敷のをりにふく共か計りにさらは身にしむ風はあらしや
かう面白くめてたかなるはなとかみせまほしきなど
いふましきとらみて前さい院のつほねより

みにこともいふ人やあると瀧のいとを心にかけて暮す頃哉
かへし

さ計りに思ひよりては瀧の糸のなとくる事のかたく成へき
これはまことにいひつくすへくもあらぬとのゝありさ
まのおかしさに思ひあつめし獨と四日によみあつめ
られたりし松のたいをあるしとゝの御心のうちおも
ひやられて

年へぬる契はけふやしらる覽かゝるみゆきを松のみとりに
みすのまへちかき松の年ふりいみしきかけに月のあ
かきにおりて梢を見あげたる心ちあいなうたのものし
くて思ひつる心に今そかなひぬる木高き松の陰にか
くれていつみのいみしうすゝしきに手をひたしなと
して

えに深き泉の水はありながら結はぬ夏のいかてすきけん
心のうちも吹はらはれて思ふをなき心ちすれば

いけるよを此宿にたにすくしては物思ふとは長くたえなむ
うちかへしてあいなければ

あちきなき宿に成に覺この夜にはとゝめしとのみ思ふ心を
れいせい院にいらせたまふを水の流のたちわかれぬ
るいとわりなくて

ゆく水の流れあふせはたえすとも戀しかるへき敷を社かけ
かやうの事ともゝおなし心にこそゆきていひあはせ

なとしたまふ宮のすけ七日のことすくしてと思ひつ
るもかくすさまじくなりぬれはいつしかと國へくた
りなむとてようざりなんきやうはいてぬへき又はえ
たちかへり参らしなとまかりまうしゝたまふさでい
つかのほりたまはんするときこゆれば年かへりて二
三月計にやと思ひはへるとあるをきゝていひたまひ
ぬるにたてまつれりし

かへる雁またきくまでと思ふかなつねは惜まぬ命なれとも
そのころおかしきこうりとももの御まへにあるをおろ
してうしまる太夫の御もとにかくかきつけてたてま
つりし

戀しくもなりにける哉うりふ山きりまを分て立もいてなむ
大夫の御返し

みすのうちにいらぬ我身を恨つゝうりふ山にも出ぬなるへし
またおほむつかひのあれば

たまたれのみすのうちに光をもちゝの秋には又誰かみん

京極殿にうちのわたらせ給しにこの宮つかさともみ
な悦びさはさしたましにたかまさは服にてそのよみ
せずなりにしをそのほとすくしてすへきに思ひたる
かすこし月日の過たるを里よりふみおこせたる次で
に身をなきたるけしきにてふみをかきておこせたる
まめことの次にかきてやりし

君をのみ思ひしる覽うきとを忍ふにかゝるあしはらのよを
かへし

忍ふれとうきことしけき葦はらに深き恨のいかゝなからむ
あはれと思ひし人のなこりの心はへのかたみ計もな

そはいなきをうらみなとするにいにしへの物語など
してかへりにしにやりし

忘れぬ昔かたりの名残には恨みもはてゝ哀なる哉

もろもとの少將わつらふとありて久しう参らて有け
るもたゝ世のさへることありてこそはなと思ひてあ
るにかゝるにとはぬをなといみしうなん恨みますと
きこえよとゝもよりかいひしかはこゝにもさやうな
るものみおほかるをかうこそきこゆへかりけれとて
とはすとて君や恨るわれもまた哀いかなることを思へば

かへし少將

我はかり物思ふ人はなき物をなほさりとそきみかうらみは
この大宮とのゝほとのことともかさ集められたりけ
るをさゑものないしのつたへてさかみ君にみせたま
へりければれいのいみしきこちたきことはともにな
むめつるいかはかりなるをとをほめられたまふ物
とかおほすふみにもかきつゝけてたてまつれとあり
しかと饅のうへにさし置て失なひてやみにきとかた
り給しかはたゝあれよりあるをと思ひてかきしふみ
の次にかたはらいたきことゝものもりにけることな
いしのうしろめたうものゝたまふなとかきて

した紅葉あさき心に任せつゝちる言の葉をいかにみるらん
かへしよのつねならぬすかしことはおほくてふたつ
見る人も心にそしむ紅葉はのちるたひことに色のまされば
吹風につけてちれともつきせぬはこたかき峯の紅葉成けり
とありし返事にまた

深山木は小高けれ共ことのはゝ谷の底にそおちつもりける

またあれより

色深きかけあらはるゝことのはに山した水も錦をそして
とあれはまけしとてきくかに

小山田のうちに任せていふをまゝと思ふすきものもなし
みまさかに宮のさふらひなりともといふかくたりた
りけるもしらぬになとかかゝるたよりも音信まし
きと恨みて宮のすけ

いかにしてかゝる便りにとはさ覽うしとそ思ふ音なしの寵
返し

頼みたる心の程をしりぬれば恨みられてそかなしかりける
うこそ近のないしのすけの伊豫にくたり給ふけるみ
ちによろつの人にみせまほしき所々のおほかるにか
はねしまん心とまりしかはさすかにその事としる
しあるともみえてしろき石のひまなかりし處のめく
るゝみしかとなにともなくてこそありしか
それとみん跡はかもなしかはね島埋まれぬ名を誰残しけん
かへし

そのはかとみえてそきけむかはね島猶きく人はたゝちぬ哉
はきの色こく咲たるをちりなは惜しとてこいよの北
の方のおこせたまへるかへりことに

色に社猶めてらるれいくちたひ浮世の中にあき萩の花
かへし

定めなく浮世のなかを秋萩のうつろふ色におとりやはする
さい院の長官なかふきの君のうちの御まへにて菊の
哥おかしうよみたりと御まへにもほめさせたまひ人
ゝもいひしかはいひやりし

いとさしも我を思はぬ君なれとたゝ人しれす嬉しとそきく

かへしなかつさの君

色深く頼む心のしるしにはことのはわきて人のとふらむ
寛政二年きさらきすゑの一日。已刻なかはより黄昏に
寫をへり。出羽の辨といふ文字をかしらにおきてよめ
る

いそきつゝてに任せたるはしり書
のこりて年のへむもはつかし

遠 清

右以加々美遠清本書寫得一本校合了

祐子内親王家紀伊集

かやる（金陽院）とのゝ七番の哥合に櫻

詞花 朝またき霞なこめそ山櫻たつねゆくまのよそめにもみむ

郭 公

新勅 聞きてしも猶そまたるゝ郭公なく一こゑにあかぬ心は

月

金華 鏡山みねよりいつる月なれば曇る夜もなきかけをこそみれ

一宮のうた合にくに／＼のおかしき所ゝのなを題に
て人ゝ哥よまれしに秋の湊

續後撰 おとに聞あきの湊は風にちるもみちの舟のわたり也けり

殿上のけさうふみの哥としたゝの中將のおこせたま
へる

金華 人しれぬ思ひありその浦風に涙のよるこそいはまほしけれ

かへし

同 音にきくたかしの濱のあた涙はかけしや袖のぬれも社すれ

あきのせちにいる夜つねにくる人のこさりしかはつ
とめて

袖のうへの露けかりつるこよひかなこれや秋立初なるらむ

人のもとより

續後撰 人しれす思ひそめてし山河のいはまの水をもらしつるかな

返しいまはさやうの事思ひはなれたれは

同 かひなしや岩まの水をもらしてもすむへきとの此世ならねは

人のもとより

玉華 あふものかくてたえなは哀我よゝのほたしと成ぬへき身そ

かへし

なとやかしくはかなき夢を後よのはたしと迄は思ひたとするそ

みあれのひ人のもとより

千早振あら人かみに事よせつけふの葵をかきゝさらめや

返しおなしところにかたらふ人のありしかは

もろかつらかたゝかくる心をは哀ともみしかものみつかき

右大とのゝたいともたまはせたりし中に郭公

郭公行へもしらぬ一聲にこゝろそらなる五月やみかな

はたる

かへるさは篝もかけし藻かり舟澤の螢ひましなければ

ひはなとひきくらしつゝあそひて日くるればかへりし人に

わか戀はあまの原なる月なれや暮れはいつる影をのみみる

かたらふ人いせへくたりたるにさるゆかりありてそのわたりのと常にさく

ふりはへてとはん物とは思はねと耳のみとまる鈴鹿山かな

七月八日

つねよりも萩のあさ露しけきかなこれやわかれの涙なる覽

ちるとふみかけとありし人に

あた浪を君こそさめ年ふとも我まつ山は色もかはらし

月待女といふものかたりを見て

いにしへの月まつ里をみるにこそ哀うき世はたくひ有けれ

いみしく忍し人に

恨むなよ影見えかたき夕つくよおほろけならぬ雲間待身そ

何とてか心にかゝりそめにけん神のゆるさぬ中のあふひを

うちとのに渡らせおはしましたりしにさふらひあは

ぬを口惜しかりてさぬきより参らせたりしとしつな

神な月あさひの山もうち時雨いまや紅葉の錦おるらむ

返し

きみゝねはあさ日の山もみち葉もよるの錦の心ちせし哉

七條宮の四條との右少弁か集をかりてうつみひとい

ふ所に哥はなきにかくかきつけられたりし

もろともに君もはかなくきえにけり埋火いかて煙たてけん

かけていへは驚かされて埋火のきえにし事はきえて悲しき

宇治とのに日ころありて我ひとりかへりてありしに

うちとのより

里なれぬ山ほとゝきすかたらふに都の人のなとかおとせぬ

御かへし

都にはいかばかりかはまちわふる山時鳥かたらひし音を

宇治とのにわたらせおはしましたりしにうちの里に

すみつきてゐたる宮の女房

あき霧のたちるにつけて待しかとあふみの海の心せしかな

返し

秋かせにふけの里人音すやとわれも心にかゝる川なみ

月のあかき夜なかつるか五條の家をみて

にこりなき泉にやとる月をみてすむらん人の心をそくむ

おもふとありて山里にすむころ

簀鷹のすゝろにかゝる住居してのへの雉子と音をのみそ鳴

女なとくして山里にゆきたる人のもとにおこせたる

驚もみやこの人をこふとてやふかき山へに我ことは鳴

とありし人にかはりて

霞わけ思ひこそやれ鶯のはね打かはす花のねくらを

おなし人またよそなりしをり

心からひまもなきまで青つゝらくる／＼物を思ふころかな
返しまた世になれぬ人にかはりて

山ふかみくる道もなきあをつゝらなにとて人の尋ねそむ覽

東北院のちこかもとに人々ことひくをきく我もひは
ひきなとしてかへりて後にちこかもとより

そらすみて棚引雲もなき夜半は半の月を思ひこそやれ

かへし

思ひ出る半の月をみてしよりほのかにきゝしとはこひしき

七日おかしきふみとも人々のもとにみゆるにさもな
ければ

細下 春たつとさくにつけても春日野の若菜をなとか人の忘るゝ

はるたつとよはるゝなにてなん

人のかへりことをいかにせねは

かきつむる藻鹽の煙立かへり靡きなひかすきくよしもかな
返しなきまさりてわつらはしきとやありけん

わりなしや藻鹽の煙ひと方に靡きもえこそやられさりけり

玉葉 戀しさにたふる煙のあらはこそ哀をかくる折もまちみめ

難波江の芦間分ゆくみなれさをみなれし人のこひらるゝ哉
上御門の右の大とのにかたゝかへに渡らせおはしま

したりしに瀧のいとおかしきを

せきたる心殊にもみゆる哉おとわの河の流ならねと

駒むかひのうたよめとおはせことありしかは

月影もせきの清水にすめるよはさやかにみゆる駒のかけ哉

左京權太夫百首のうち鶯
我ならぬ人きくらめや珍らしきあしたのはらの鶯のこゑ
わかな

さそはねとかたみそ見ゆる若菜つむ心はのへに通けりとも
にぞ見る百首
梅

まつ人はおのつからきぬ我宿の梅の匂の色しこければ
さわらひ

またきにそつみにきにける遙くといま萌出るのへの早蕨
さくら

たくひなくみゆるは春の明ほのに匂ふ櫻の花さかりかな
山ふき

山ふきの花みる人や昔よりこゝを井手とはいひなかしけん
し百首

三月盡

けふのみと空に暮行春なればとゝむる關もかひなかりけり
ころもかへ

身にしみて花色ころも惜しけれとけふは單に立そかへつる
あふひ

續古 年をへて松のを山のあふひこそ色もかはらぬかさし成けれ
たなはた

續後拾 七夕の逢瀬のなとか稀ならんけふひくいとのたえぬ物から
はき

新古 置露もしつ心なく秋かせにみたれてさけるまのゝ萩はら
ふちはかま

藤袴たれになれけんなつかしき香に匂ひつゝ色はふりせず
き百首

秋きりの立へたてつる麓には遠かた人そうとく成ゆく

月

久かたの月を遙になかむれば八十鳥めぐり見る心ちする
衣うつ

頼めおきし程ふるまゝに小夜衣うらかなしかるつちの音哉

九月盡

たまさかに逢て別れし人よりもまさりてをしき秋の暮かな

冬のはしめ

風はやみ冬のはしめは山かつの賤の松かきひまなくそゆふ

霜

をく霜は忍ひの妻にあらねともあした詫しくきえ歸るらん

霰

かきくらし俄にもふる霰かな深山おろしの風にたくひて

雪

白雪のふりしきぬれば苦むしろ青根かみねもみえす成行

千鳥

うら風に吹上のはまの濱千鳥浪たちくらし夜半に鳴なり

戀

人しれぬ戀にはみをもえそなけぬ留ま寛なをせめて思へは

はしめてあへる

つれなさと思ひこりすと歎しをけさは嬉しき心なりけり

あひてあはぬ戀

陽炎のはのみし人の戀しさにあるにもあらず戀そけぬへき

暁

おもふも有明の月のあかつきに心すみます物にそ有ける

苦

打ならず人しなけれは君か代はかけしつゝみも苦むひに覺

關

越ぬより思ひこそやれみちのくの名に流れたるしら川の關

うみのみち

舟とめてみれどもあかぬ松風の波よせかくる天のはし立

おもひをのふ

いくめくりすくしきぬ甕春秋のそむる衣をうつろはしつゝ

のこりおしはかられて。これをまとならねと。お

ほくはうるさくて。

春霞みちもほのかになる儘にかへりみまさん逢坂のせき

返し

おもひやる心はかりはかよふらん霞へたつる關路なりとも

齋宮にくたる人霜月はかりに

旅衣うら吹かへす秋風にひとりねさめて戀しかりしを

かへし

神風もか計り身にはしましかし片しく袖のさゆるよなく

右祐子内親王家紀伊集以内山永恭本抄合了

群書類從卷第二百七十九

和歌部百三十四 家集五十二

二條大皇太后宮大貳集

年のうちの題百二十はかりかきいたして右近少將師
時よませられしみな忘て立春

谷河の氷吹とく風のをとや春立けふのしるし成らむ

臨時客

諸人のまつひきつれてくる宿に春の心はやまにさりける

卯 禁

幾度かちとせこもれる卯杖つき君かさかゆく春にあふへき

あをむま

霞たつ春の七日にひく駒は野への若菜に色そかよへる

よふことり

我をしもよふこ鳥にはあらねとも聲する方に心をそやる

うくひす

玉露
春毎にきくとはすれと鶯の聲にはあかぬ物にさりける

なく東
春のあけほの

たとふへきかたなき物はよも山か霞こめたる春の明ほの

歸 鴈

櫻花さくをみすてゝ鴈かねの雲路にかへる聲そきこゆる

櫻をうへて

玉葉

見る集

いかに又またせゝて櫻花見る集咲はともなくちらむとすらん

春つかた熊野へまいらむたむけにぬさすこしと山の
ひしりのこひにつかはしたりしに

たてぬきに柳櫻をゝりみたる春の錦を手向にはせよ

返し

せきの神をぬす人に思ひなむ山のとむくる春のにしきは

人のもとにまかりてかへるとて

時こそあれ春しも歸かりかねは花に心をかけやとむらむ

山里にまかりたるに竹のかたはらに花おかしう咲た

るを風いたくふきて竹の葉も花も程なきしつのやに

ひまなく散かゝりたるをみるほとにきやうよりなに

ことを申たりしに

見せはやなさゝの庵に春風のたくみにおろす花のうはふき

本院にて花盛

柳葉のときはならひに櫻花しめの内にはちらさすもかな

東山わたりに花の咲をむるも散もさまゝ心のとま

るもあはれに思ひしられて

心をは咲散花にたくへつゝわれなにの身にならむとすらん

本院におはしましゝに人々参りて花見し中に
櫻花この春よりは吹風にちらさぬ物としらせてしかな

かへるほとに花にむすひつけてやり水になかす

散花は水にもしはしよとみけりきてみる人そ風も吹あへぬ
弘徽殿のはそとのゝうちに齋院の花かやおほくちら
されてをしをかれたる

源中納言

思ひいてゝなをさりにたにとへかしな下句關

返し

この月に匂ふ櫻をみてもまつみかきの花を思ひこそやれ

おなし人おなし殿のひんかしおもてにきりたてをし
をきて二三日まいらぬ程に花のさきたれはかくなむ
とつけにつかはしたる返事にそれなはいかゝせむす
るとありしに

おりうへし枝に櫻とつけやらは散やちらすやなとか尋ねむ

返し

ちらすなとおりてあつけし花なれは心靜かに思ふとをしれ

花見にまかるとてこ少將に

君ならてまた誰をかはさそふへき花見にゆかむ春の山道

齋院の花をみてまいらせし

そのかみはなれしみかきの櫻はな梢はるかにあかすみる哉

御かへし

おりてこそ匂ひはみえめしめのうちに霞こめたる花の梢は

仁和寺の一品の宮にまいりて花の夕はへのほかより

もおかしう見えしかは女房のもとに

めつらしくみるおりからか山櫻いつれの春もかくや匂ひし

花みるときゝて六條院の女房

尋ねらむよもの櫻を思ひやる心さへこそ花と散けれ

返し

諸共にみてもおしゝてあやなしや花に心をちらしそふらむ

中宮のたいはむ所より

御占

さきたつるこゝろをしらて櫻はな尋ねる人に成やしぬらむ

御かへし

心こそさきにたつとも山櫻いとかはかりの匂ひをはみし

花を尋てとをくいたる

花みると春は心のあくかれて山路ふかく尋ね來にける

三月つく

年をへてけふに心をつくす哉おしむにとまる春はなけれと

岩戸あけしその神代よりしはし猶過行春をとゝめさりけむ

四月一日

夏衣たちかへりけるけふよりは山時鳥ひとへにそ待

四月一日ころさかりの櫻を人のをこせたる瓶にさし

ておまへにをきたるに三四日散らす源中納言のかり

つかはしゝ

雲の上に千とせを契君か世は花もときはの櫻成けむ

をこせたりし人のいかゝ申たりしに

めつらしと雲の上まで尋ねみき春よりおちして櫻を

とのゝ(師實)ひこの君にみせたれは

春はいかに契をきてかすきにしと後れて匂ふ花にとはゝや

返し

とはましを花の物いふ世なりせはあかて過にし春の行衛を

四月はかり初めてつかはしたるたかつな宰相の女

忍ひかね郭公とやなりなましかたらはまくのほしき君ゆへ返し

うちとけむおりそまたるゝ時鳥忍ひかねたる聲をさくにもかきつはた

あた人の宿にはうへし杜若心へたつる名にもこそあれ

うのはな

卯花は垣ねわたり月なれや咲る盛はやみなかりけり

賀茂のまつり

いかなれはうつきとわけてみつ垣の神の代よりは祝ひ初けむともし

狩人の夏の夜深くいるさ山ともしの影のみえみ見えすみ

さみたれ

五月雨の日かす積れは庭の面に舟出しぬへく見えわたる哉ほたる

ぬきみたる玉かとそみるさしちかみ草葉に迷ふ夜半の螢は

女院(藤原)の根あはせに人にかはりて

君か代の長きためしにひけとてや宿に菖蒲の根さしそめけむ

蟬

夏山もとよむはかりにあけたてはまもとに蟬の聲そきこゆる

いつみ

夏の日もむすふ泉のすゝしきは人にしられて秋や來ぬらん

みな月二あるとしののちの七日に

つねよりも歎やまさる七夕は逢まし暮をよそになかめて

みな月のあまれる年は彦星のこふる歎そ日かすそひぬる

みな月はらへ

思ふとみなつきはつる今宵よりやかてなこしの御被ををする

すかぬきするほとに七日なむ必ずゆくへきと人の申たりしに

夏はつる夕に秋のみそきして七日の空をわれも待かな

七月七日まゆみの葉に書つけて

七夕の梓のま弓かすとはいるかそくに君きませとそ

兩せん(倉)か十二より六十になるまで年ごとに

七夕に讀てたてまつりける哥をうせて後いもうとの

見せにつかはしたりしに

七夕に心よせけるけふかさはわたりもしなむかさゝきの橋返し

いかはかり嬉しからましけふとにた彦星の逢夜なりせは

うるふ七月七日(天永元歌)

暮行を待もやすらんなはたは過ぬる月のけふのならひに

萩

秋霧のたつにまかせてのへとにをりかけてけり萩の錦は

うつら鳴小萩かもとをうちみればけふこそ花の盛也けれ

薄

しら露は結ひをけとも花すゝき招く萩のほころひにけり

鴈

ふるさとの淺茅かすゑ葉色つけは初かりかねそ雲ち分ける

鹿

色ならて身にしむものは秋のゝに妻こひかぬる小男鹿の聲

鈴虫

秋毎にきゝならせともいかなれはふりせさるらむ鈴虫の聲

霧

朝なゝ立河霧に道みえすいたゝの橋は名のりしてゆけ

くつはむし

駒なへてくる人もあらしと思へともおとろかれぬる轡虫哉

いなむほせとり

秋くれはいなむほせ鳥の涙かも草の葉とに露そこほるゝ

夜ふかく衣をうつをきゝて

誰かまた秋の夜深くねさめして衣してうつ音をきくらん

ついたてしやうしのゑに紅葉ひまなく散かゝり瀧お

ちたる山のもとに人ゝあまたみたる所色紙かたに物

かけと仰られしかは

落瀧つたきのみなみ昔せすは錦をさらす山路とやみむ

九月のつこもりのひ

いかゝせむ今日はかりなる秋の日はおしむ心を共に盡ぬる

うるふ九月つこもりの日

つれよりも秋の數そふ月なれと暮行けふはあかすも有かな

紅葉

神無月よもの山邊は色々にもみちの錦たちそきにける

叢

叢降時にしあれば賤のやも玉のうてなとみえ渡るかな

霜

霜枯と誰かいひけむをくからに千種の花の咲くと見ゆるを

をし

冬の池に住なれにけるをし鳥の霜打拂ひよはに鳴え

みそれするに人久しくをとせすといひたるに

降みたれ我身それともおもほへすある物とてや人の恨むる

ほうりむ（法勢）にまいる道に雪かきくらしふるに

身のうさは消ぬ成けり小倉山ゆきまといぬる道のそらかな

さらてたにとふ人もなき山里に道みえぬまでふれる白雪

雪のふる日しろいものをふたに入てつかはしたる

かきくらす雪けの雲に埋れてかたはれやらぬ月の影かな

かへし

降きらす雪けの空の雲間よりかたはれ出る月とこそみれ

賀茂にこもりたるに雪のいみしうふるに心ほそいう

ちなかむる程に神の御おろしとてくほて（華燈）をいれ

たるに

御被して詠めわひぬる雪もよに神のひほろきとくは嬉しき

まさなしや春はいてすとよ年のくれ

わかすつる年はくれねと宿とにやらふは老のおにゝさりける

くれぬるをとりとゝめはやなど人の申たりしに

暮ぬれと年は中ゝかへりなわとゝめ難きは我身なりけり

本院にて人ゝ参りて松の葉水にぬいすといふ心よま

せたまひしに

長閑なる水に移れる松かけは千世をはかばとみする也けり

人の祝の哥こひしに

神風や吹そめしより花すゝき君にそなひく八百萬よと

一日ころ春宮わたりの人こひしに

峯つゝきおひそふ松の枝もにちとせを契る君か御代かな

右近申將おなし所にゐられたりしに九月つこもりの

ひたゝれしに

命あらは秋のけふにはあひもせむ別るゝ君をいつとまたまし

とほりに君こそ急く道ならめおしむ涙はなとかと（あま）らん

おやの思まで十三日になる日

なき玉はかけたに見えすなき玉は人の爲なる名に社有けれ

おなし年のつこもりの日

別れにし年はけふにて限れともこふる涙はつきせさりけり

七月七日ふく（悲）ぬくにきしにもまさるこゝちして

ふち衣けふしもなかつ泪川あまの河水そひやしぬらん

齋院にてかうしむ（庚申）の夜くしのおまへにて夏の夜

の戀をとりにて

したもゆる戀の煙に夏の夜は山路ならねと戀しとやいはむ

哥合をせさせ給はんとせしおり

戀千載をめし人はかくこそつれなけれ我涙しも色かはるらん

人のこひしに夏の戀のこゝろ

泪さへたきりて落る夏の夜の戀こそさむるかたなかりけれ

齋院にてこうしむの夜春のよの月

萬代を霞てなひくしめのうちにおほろけならぬ春のよの月

秋の月をみて

長閑にもなかつるかな天の河雲ふき拂ふ秋のよの月

八月十五夜

月影はおなし山よりいつれとも秋のなかはゝ照まさりけり

月のあかき夜源中納言

みぬ里もかくやくまなく照すらん月の光にわか心あれ

かへし

尋ねくる人も有やと月かけをおほろけにやは誰もなかわる

ふの院の人はいをのみねて月みすとかや有るとかや

かへし八月廿日よひの月出てのち源中納言より

たれか又有明の月をなかつ旅のそらなる雁金をきく

いづくにもおはせむ所を尋ねてといひしかと今宵は
家にねてときくこそおかしく月あかき夜右少將おは

して急きかへるととてとよりぬへき哥とありしに

よりかけむまさきの葛たゆたひぬ思ひの綱の君にみえねは

ある山里に伯（重）の母なといきあひて存の月いつる

程に

いつかまためくり逢ふへき足引の山ふところになし待の月

あらしなをと思ふうき世の思ひ出は月みるほと心の心えけり

をはすての慰めかたき月影といとかはかりは詠めさりけむ

いかばかり隈なき夜半の月なればかゝる涙に曇らさるらむ

いつころの月かすくれてはおほゆると人のとひしに

十月はかりの風うちふき時雨つゝ隈なしとみれと雲

りかちなるこそ見すてゝいりかたき心ちすれと申に

そよ我もしかなむおほゆるといふに

思ひますはれみはれすみ半なる月を哀と君もみければ

是をきゝて右近少將月あかき夜よ更てしくれぬよの

月はみていたつらにやとねたるとておはしたりしに

よとゝもに君と有明の月をみは所もわかすおりもさためし

九月十三夜

いつも照月ぞと思へと長月のこよひは光をにみゆらむ

長月の今宵の月は晝なれやさやかになるにもおほめかれ晝

時つなかむすめのひこの君かうたをよくよみてつか

はしたりしに

いかて君ふかくしりけむ古へのあとかはりゆく敷島のみち

返しこの院のせむひこ

しるへする人にもあはて敷島の古き道にはまといひこそすれ

かむし（庚申）の夜あやめ草くのかみにて戀
新勅あな戀し八重の雲路にめもあはす暮るよなくさばく心か

あはせたきものすこし

逢みてもはては涙のせきもあへず立歸れせこきても恨みし
おなしもしなき哥こゝろ見に

逢とよ今はかきりの旅なれや行末しらてむねそもえける

なをはしめつをはてにて夏のこゝろ

鳴聲はかはらし物を郭公きくたひとにおとろかれつゝ

あをはしめきをはてにて

あまの河今やたなはたわたるらむ更行空の風を涼しき

四季にありし。みなわすれて。

人のもとにくしのおまへの黄塵ふみの事おもひもか
けす心もえねとも

ありかたき身の程人にみせむとや黄金の色の石に成りけむ

夢のうちの戀

うたゝねの夢みる程もなき夢の現に戀ぞぬれまさりける

上陽人

燈火のつくるをきはとなめつゝ哀いくよを歎來ぬらむ
紅にたとへし顔もしも降てうとき人には見えしとそおもふ
すきかへる程もしられぬ窓のうちに春と告つる鶯のこゑ
長き夜は明やしぬらむおほつかな窓うつ雨に驚かれつゝ

楊貴妃

君とわれこの世のゝちの後も又木とも鳥とも成てちきらむ
道のへに駒引渡す程もなく玉のをたゝむ契りとやみし
淺ちふに秋の夜つらくまところます虫とゝにも鳴あかす哉

秋かせに空やは花みたれつゝ

涙の玉を袖に散ける

星合にかけて契しもの葉はなき恨と成にけるかな

獨寢の床はしとろに亂れつゝ鐘より後もあかしわひぬる

后

さよ中に契しを忘すは玉のかさしをそれとしらしや

道のへに絶にし玉のをなれともなを後の世はなかく結はむ
思ひきや浪路へたてゝ幻のまつてはかり聞かむものとは

かけていひし星合の空を眺めつゝ心をたく身とそ成ぬる

齋院にまいりてつゝまじうくやしうのみおほゆるに

いかにと人の申たりしに

暫しなとあつきの眞弓引みつゝ思ひためらふ程なかりけむ

かへし

ためしなく歎にやその梓弓おもひの外にひきはなれしを

身をなきにして思ひしつまれと申たりしに

なき物とさまゝみつる身にそひて歎は絶す又いかにせむ

返し

我かれすさゐたつまとや春日野にのりの鏡いさ尋みむ

と申たりしにおかしく

さゐたつつま盛ならねは白露のをけりめにせむ事のかたさよ

久しうをとせすと恨たる人に

今よりも君にはつらく成ぬへし恨るからにそふと思へは

返し

恨むるをとふにしなきはかきたえて忘る計に成やしなまし

何かと人の申たりしに

いつとなく海士のかるもの思ひわひ我焼良に藻汐たれつゝ

風吹は空にたゝよふ雲よりもうきてみたるゝ我こゝろかな

あらしかし此よのほか尋ねとも涙の袖にかゝるたくひは

かく計うきをもしらて長らふる身より外にはつらき人なし

の中なりしを人の語らひたりしに

我袖は荒磯浪にぬるれともいきたるかひはまたやひろはぬ
後拾遺きこえしころ。りやうせんか集をいもうとの
をこせて申へきところやいかゝといもうとの申たり
しに

巻こめし黄金の玉の聲なれやとまれる跡も見にそしめける
返し

いかてかは聞もしるらむまきためし黄金の玉の聲はあれ共
かへし

名にたかき黄金の玉のその聲もいかてしらまし君し告すは
源中納言かくら哥なとにしうたひて鳥なきぬとて急
き出られしに

神のますゆふつけ鳥も心あらはあくとな告そ忍ひ音にたつ
このせうそこを左京太夫われつたへむとてあきては
かりまいらむとて出給けるをなとかなときこえたり
ければたいふ

かへる雁玉章かけて立ぬれば雲の上にはいかゝとまらむ
かへしたはらんとありしほとに過にければ

旅のそら玉章かけて行雁も契りしほとをすくしやはする
弘徽殿のほそ殿に左京權太夫俊頼もの語して今しは
しも侍へきをいみしうひえ侍ればと申せは女房しき
物をたてまつらはやといらふるに數物はいしたゝみ
侍けりといらへたるに人にかはりて
いしたゝみ有てふ庭を君にまた數物なしと思ひけるかな
かへし

名にしおはゝ身もさえぬへし石たゝみ片數袖に衣かさねよ
おなし人存つかた同ほそ殿に参りてする人を彼し

はし水かへといひとゝめよとあるを。いらへもせて
たつおり。水かへと申侍しかは。そらことならむと
て行過るに南のえむをいましも見むやうにかゝるを
こそあれ。なにの料ならんと申せは。たなはしにも
なれかしといらへたれば。いと情なきことさらは足
おれん馬をあつけまして。さはかちよりかへるはか
りなといひて。しはしありて。たちかへりぬるに
おほつかな春の夜深きはなれ駒跡を華ねむかたもしられす
返し又の目をこせたりしふみのとはこそおかしかり
しか

とりつなけみかきか原のはなれ駒うき世に荒て跡も定めす
かねふさの集たつぬとて

木のもとに落つもりけむ言の葉を君計こそ世にはちらさめ
返したかつなの宰相のうへ

木の本に落もつもらぬもの葉は只風にのみまかせてを見し
ものに籠りたるに近きはく(木)の母のかりまかりて
かへりたるにをとつれたれば

今よりは舊蒲のこほり宿からむをとむすめゆへ君もとひ覺
返し伯のはゝ

をと娘そのゆへのみか蘆垣もかく間近きをあすもさねこよ
また返し

あすもさね行てこそみめ櫻人とよらの寺の近きわたりに
おなし人みたをくりてをこなはれしを思出て

臙けの契りとそ見むむへ法をふり放したる音をきゝしも
殿の肥後の君三恵のあか月にそあはまほしきと申し
に

曉もよをへたてつれば久きにけふこそいらめ西の門には
人おもふ心は藤の花なれやとひくる程をまつにかゝれる
すゝりかめにさうふのねをきりていれたりし生いて
たりしをまいらすとて

誰かみし世にすみのえの諸人の硯の瓶にさすあやめをは
返しつる君

すみのえの硯の瓶のあやめ卓千世のためしにひきて社みめ
齋院に参りて後ある宮つかへ人おなし所にも思ひし
かくちおしく身つから思ふにかたふたかりてなと申
たりしに

逢事のたかひをめにし中なればふたかる方もいかゝなか覽
久しうをとせぬ中に

^{新下}簞蟹のくもてにさ社とはす共かく書たえん物とやはみし
これをきゝて源大納言のふふさぎを今は左大臣との
のまぬきとそいふかし

如何にかくたゆとはいふそ簞蟹のくものしるしをみせむと思に
法花の玄義ありときゝし所にかりにつかはしゝ
覺束なまたふみなれぬ道なれと法の爲には尋ねつるかな

二三日ありてほかに尋ぬとてつかはしたりし
おほろけの契りならてはありかたき法の道をも尋ねつる哉
返し

尋ねける契りも嬉しこれやさばまものこのみ拾ふてふその
うんこし(雪居き)のひしりあかゝねのうすときゝてか
ゝみなとつかはすとて

しるへせよ鏡に移るゝよりもこはいて難きうみの世なれば
人のくとき(功勢)つくりし所にはうもち(釋也)つかはす

とて

消かたき昔の人のともしひに思ふ心はをとりしもせし

齋院今はうちにのみおはしますに里にいてさせおは
しましたるに人々参りて神樂してあそはるゝにうち
(鳥羽院)にて宮人うたはせおはしますゝめてたさ思ひ
出られて

ゆふしてやかみの宮人たまさかにもり出しよはゝ猶そ戀しき
かへし源中納言

ゆふしてやかけてないひそ宮人の雲の上にて遊ぶけしきに
本院におはしますゝおり人々あまた参りて琴ひき御
あそひありしにその夜まかりいてゝ又の日まいらせ
し

友にのみあかてかへりし琴の音はけふに戀しき物にそ有覺
返し左大將今は左大臣殿

琴の音のつまをとあかす思ひせはしめの内にそ引とゝめまし
鷹かりにきゝすのうちなきてとひ立しみしあはれに
こそ

御狩野にとひ立雉子ほろゝとなくゝ我も悲しとそみる
こ少將はなれぬ人に通ひをめられたるころ

なからいの夜比のほとも白糸や結び初けるすちはかはらて
人のなかゝ身をはなけすやいかにと申たりしに

かりそめとおもひ絶にし憂身にも猶歎かるゝ折をおほかる
ある所にたつねらるゝ集たてまつるとて

谷かくれ埋れにけるもの葉も木の本ならて散すあやなさ
ちらさしと思ひし草子をかくもありけりとて見せに

人のをこせたりし。さもやとおほゆるわたりの人の

手にてありしかは

いかゝせむなたの鹽焼き風はやみ思はぬかたになひく煙を

賀茂にあらんつるほとにまいりてその夜また参りたる人をとりてもの申けなるけしきにて夜ふくるほとに獨ことに

千早振神のしるしをみたらしのみつともいかて思ひにし哉

と申しを聞つたりしこそ哀に

瑞籬の神のしるしを取もみてけふより社はみふねなるらめ

人の哥よみてと申しに

哥めせと心たくみの儚さはをのゝ音してえこそつくらね

人の戀の哥よみてと申しに

我にてはけにたへかたし戀の道人にかはるも苦しかりけり

うちのこそむのおほんもひき遊はせおはしますをきゝたりとて

玉華

ことの音はむへ松風にかよひ晝千年をふへき君にひかれて

とこそ申さまほしかりしか。

内に人々の集召しゝにまいらすへきよし一の宮のきの君のかり中につかはすとて

君にこそ尋てもみめわかうらに立へき波の跡はありやと

返し紀伊のきみ

いかてかはわかの浦浪なこりありと雲の上まで立登るらむ

かれゝなりける男のたまさかにみつからなとつて

に申てほとふれはましかねてかやうに社申さましか淺きより絶やはてなむ山の井のみつからとのみ空たのめしか

かやうなしておかしやかなる見ところあらしと人のまうせはあらまじことさへかきて人猶ある事なき事

の傳へてこよなかる方にもくめると片はらいたくてしらぬにはあらて思ふあたりに數のみ多くつもりてかへすゝみくるしう

隔ておほうみそち計にもすきやせむ我またしらぬ數島の道

あなかしこゝ百八十四。このうち廿人。

これはかくし題

くつはむし

數ならぬかゝるみくつは席田の鶴のよはひに何かいのらむ

むらすゝき

紅にみゆる山邊は時雨つゝいくむらすゝきかくる錦そ

ものをおもひによせてたかはかり

いはひ

君か代の千年をかねて角田川かりにもあたの影はうつらす

とりはゝき

あふ事をいつかとまつのふか縁はゝきの露は色そかはれる

すたれかけ

風に散雲をあたにも我は見すたれか煙をのかれはつへき

はなかもし

妻こひは苦しかりける秋は唯はなかな虫かをよりてとひみむ

かきひたし

小山田に鳴こそきぬれ百羽搔ひたしかけねは音もかくれす

へすゝ

紅葉ゝは杵の森やみなかへすすくれて色の深くみゆれは

うちのこそむにかくし題に。よみにくきものとおほ

せられしついでにかや。

ほとゝきす

頼めしを待わたるほとときすくしきなれ衣を形見にそ見る

他人歌

己上百九拾七首
大貳 大宰大貳高階茂嘉女
母入貳三位

成章卿 春宮亮美遠男
母施夢院使組重平女

康平元年正月七日

正三位

同二月十六日薨于任所

太宰大貳
年六十九

二條太皇太后宮 令子

白河院御女

寛治三年六月廿八日

御母中宮賢子

卜定

四年四月十五日

入紫野院

承德三年六月廿一日

退之依御病

嘉承二年十二月一日

爲皇后宮

天皇即位日准母儀

長承三年三月十九日

改皇后爲太皇太后宮

大治四年七月廿六日

落飾

天養元年四月廿一日

崩于二條堀川第

御年六十七

待賢門院堀川集

なをさむき

山陰のふせやは春もしらねはや軒端の垂氷とくる間もなき

わかな

山賤のしはの垣ねのうちせはみつめる若菜のほともなき哉

物のみうくてすゝろにくらして

徒に年をのみつむ身にしあれば若菜はよその物とこそみれ

かきの柳糸に似たり

山かつの道にさほせるあせかきにいとほしけなる玉柳かな

山賤の園生にかこふかきしはの絶間にみゆる青柳のいと

かきしへたてたる花

あかすみる梢の花し中垣のこなたにちらす風もふかなむ

ちりて後花しおもふ

山櫻こそゑみとりになりぬれとかはらぬものは花の面影

なほしろ

苗代はをのかひきく急くとも秋のたのみのさためなき哉

すみれ

雪華
行やらて心のとまる春の野にしはし菫の花やつまゝし

古里のあさちか原に所えてすみれの花そあるしかほなる

田のいへの山ふき

吹にけり苗代水にかけみえて田中のさとの山ふきのはな

玉葉

何とかは急きもたゝむ夏衣憂身をかふるけふにしあらねは

野のほとゝきす

待とは淺からぬともほととぎす野中の清水たえ／＼そなく

ふるさとのほととぎす

風簾

とふ人もなき古里のたそかれに我のみ名のるほととぎす哉

新院の御前にて時皇の哥十たひて御返とく／＼とめ

せはやかてかきてまいらせてしかと皆忘れにけりこ

れひとつそおほゆる

みとり子やふりわけ髪の昔よりあかてやみぬる時鳥かな

きかてのみ我そやみぬる郭公君は千とせもきかんとすらむ

よるほととぎすのなきつると人のあれば

いかにして聞かさりつらむ子規物思ふ人はいやはねらるゝ

あやめ

こやの池に生ふる菖蒲のなかきねはひく白糸の心ち社すれ

ひく人もなきみこりの菖蒲草いつかとたにもまたれさり覺

おひたゝてあらまし物を菖蒲草かゝる汀のうきをしりせは

五月雨

瀬をはやみ駒ひきなへしやす河にふな渡りする五月雨の頃

うへ木のかけ秋に似たり

緑なる梢は色もかはらぬに下ふく風を秋にかよへる

七月七日かちの葉にかく

たなはたに物思ふもかきたらはけには心もなくさみなまし

たなはたにあまの羽衣かさねても恨やすらむ年のへたてを

はき

露しけみ花色衣かへるともまたもきてみむ野への秋はき

しか

小男鹿の妻こふる音にあちきなく我さへ袖をぬらしつる哉

月

ななき夜の月をおもへは月影のかたふく方にすむ心かな

たひのやとりの月

宮古いてゝとをちの里の旅寝にも面かはりせぬ秋の夜の月

ふねのみちの有明の月

有明の月に心やすみぬらむ聲うち出る沖つ舟ひと

月をみて

うき世にも月に心は慰むをつゐにいかなる闇にまとはむ

ありあけ

山里のかけひの水にかけすみみて心ほそきはあり明の月

また月の哥ともてか

ありしにもあらぬうき世にかはらねは月そ昔の形見成ける

のこりなく成行秋をしりかほに光おしますてらす月かけ

ゆふへのむし

風に艸葉かたより夕されは虫の音さへもみたるなるかな

草のなかのむし

淺ちふにをのか聲と啼虫はこゝろ／＼をいかてしらまし

きり／＼す

露しけきのへにならひてきり／＼すわか手枕の下に鳴なり

きり／＼す夜深き聲に夢さめて壁のあたりはいこそねられね

遠きむらに衣うつ

から衣いつれの里にうつならむ遙につちの音きこゆなり

田家のかせ

宿ちかきおくての稻葉打なひき哀身にしむ風のをとかな

詠めやるとをちの里のもみち葉は秋とゝもにそふかく成行

秋のはて

かれゝの淺ちに結ふ夕露をかたみにをきて秋の行ぬる
山里の秋の暮

山里の麓の野邊の眞くす原かへる秋こそ恨かほなる
しくれ

かきくもり時雨は音もなければとも名残にふるは木葉成けり
山里のゆふへのしくれ

人もこぬみやまの里に音するはたそかれ時のしくれ成けり
海のほとりのおつるは

心あらは海士もいかにか思ふらむ紅葉ちりしく松かうら鳥
旅のやとりの落葉

木の葉散やまかたつきのさゝの庵は埋もれぬへきふし所哉
ちとり

汐のみつ磯邊のちとり浪なれて共に立ぬる聲そきこゆる
水の上の千鳥

あひかくるさほの河瀬に立つ千鳥又いつかたへ鳴渡るらむ
しはすのつこもりの夕くれに物をおもひつゝけて

世をうらみ身をなけきつゝ明暮にとしも心もつきはてに覺
玉懸

暮はてゝいつこまで行年なればよのまにけさは立かはる覽
新院の百首の中の春

雪ふかみ岩のかけ道あとたゆるよしのゝ里も春は來にけり
霜は

いつかたに花咲ぬらむとおもふより四方の山へにちる心哉
宿ちかきまかきの中に咲をこそつほ菫とはいふへかりけれ

ほとゝきす雲のに過る一聲は空耳かとそあやまたれける
五月雨の日をふる里の庭の面はみくさもとらぬ池かとをみる

まこも草たかせの庭に茂れとも末葉もみえず五月雨のころ
秋

たなはたのあふせ絶せぬ天河いかなる秋か契りめけむ
みやき野に朝たつ鹿も心せよ本あらの小萩花咲にけり

はかなさを我身のうへによそふれば袂にかゝる秋の夕露
水の面に

さらぬたに夕さひしき山里の霧のまかきにをししか鳴なり
すむかひもなき世中の思いてはうき雲かけぬ秋のよの月

秋の來るけしきの杜の下風に立そふ物はあはれ成りけり
雲の浪かけてもよるとみえぬ哉あたりを拂ふ月のみふねは

立田姫もろこしまても通へはや秋の梢のからにしきなる
冬

晴くもり時雨の空をなかくても定なき世をおもひしらるゝ
蘆そよく汐風さむみかたしきの入江につたふあちの村鳥

ふる雪に園のなや竹おれふしてけさは隣のへたてなきかな
昔なと年の終りをいそぎけむつもればもと成ぬる物を

戀

かくとたにいはぬに茂き亂れ蘆のいかなる節にしらせめまし
袖ぬるゝやま井の清水いかてかは人目もらさて影をみるへき

あら磯の岩にくたくる波なれやつれなき人にかくる心は
夢の事みしは人にも語らぬをいかにちかへてあはぬなる覽

頼めすはうき身のとかと歎つゝ人の心をうらみさらまし
笹かにのいかさまにかは恨むへきかき絶ぬるも人の咎かは

新

干載

憂人

忘れに

あふこ

ふかく

神

色々

長き

夢の

行人

道す

忍ふ

旅の

はか

いは

君か

早苗

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

萩の

枕のしたの菰

黒髪の別ををしみきりくす枕のしたにみたれ鳴かな

あしまのこほり

蘆ねはふ入江の氷結ほれ長からぬよを歎かすもかな

戀

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

枕のしたの菰

黒髪の別ををしみきりくす枕のしたにみたれ鳴かな

あしまのこほり

蘆ねはふ入江の氷結ほれ長からぬよを歎かすもかな

戀

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

變

なけく

山彦の答たにせぬ歎にもこりすをのゝおとろかしつる
いつしか人きゝのゝしりければ音もせさりけるにや
らんとてこひしに

浅ましや人めもりぬとことよせて絶はてぬるか山の井の水

たえにける男の口おしき事とも人にいひなとするか

またをとつれたるにやらんとてこひしに

うしとのみ秋のけしきはきく物をいかに音する萩のは風そ

ふみをこする人の絶て又音つれたるにいひはなちた

らん哥と人のこひたるに

玉葉
山の井の浅き心をしりぬれば影みむとは思ひ絶にき

絶にける男の年頃ありてみつからなといひたりける

かをとせぬにやらんとて人のこひし

ひたすらに思ひたえにし山河のなとみつからと驚かしけん

跡絶てふるの野中のみつからとかけしにいとぬるゝ袖哉

五月五日絶にける男のかりやらんとて人のこふに

菖蒲草
かけても今はとはぬまに浮根計りそたえせさり覺

はなれたる男の子をむかへたるにそのちこのもとへ

くす玉やるとて人のよませし

ひきかへて玉ぬきかけよ菖蒲草うきみこもりの慰めにせむ

男の鏡のかけかはりぬなといひたりける返事にかは

りて

かはるらん疑はしさを増かゝみ心もかくやあらんと思へは

今はあふましきよしと又こへは

恨わつときせぬものはなみた哉逢見むとは限と思ふに
(仁和寺)
にわし殿に九月行幸ありてくらへ馬有しに新院くら

るの御時きくせんしうをちきる

雲の上の星かとみゆるさくなれば空にそ千世の秋はしるゝ

同
月

はかなくも月に心のとまる哉すみはつましき身をは忘れて

くしたる人のなくなりたるをなけくにおさなき人の

物語するに

いふかたもなく社物は悲しけれこは何事を語るなるらん

よろつの人のなくなるをきゝて

玉葉
をくれて涙さへ社とゝまらぬ見しも聞しも残りなきよに

さまかへさせおはしましゝ日やかて御供になりてさ

ふらふにをくれまいらせぬるを思ひて

諸共に家を出にしかひもなくまことのみに立をくれぬる

御前にさし出てもいつかたかと哀にて

これやさは舟流したるあまならむ涙の海による方もなし

むかひにゐられたる別當の行幸にまいらるゝとて出

立のひしめかるゝ氣色も聞ゆるに雪うちふりてしつ

かにあはれるにさしをかず

誰續拾も皆けふのみゆきにさそはれて消にし跡をとふ人もなし

おはしましゝ折にも似す心ほそくあはれに御所のか

たにも人のをともせず引かへあらぬ世のこゝちして

浦の君もなきさにかへりきて涙にしつむ里の海士人

六月十日ころにわしにいてたるに庭も梢もひとり深

くしけりあひてかすかに人影もせずこれにすへそめ
みイ
給ひしころのを只今の心ちしてあはれつきせぬ日く
にイ
らしの聲たえすきこえければ

玉葉
君こふる歎のしけき山里はたゝ日くらしそともに鳴ける

七日朔日いつしかおきのをとするに
草ふかきあはらの里のすまゐりて露の命のほとそしらるゝ

藥草喻品

艸も木もおのかさま／＼生に覺ひとつの雨の注くしづくに

壽量品

月影は世をうき雲にかくれねと驚の峯にはすむところきけ

雲のたゞよひたるを

風聲

それとなき夕の雲にましりなは哀たれかはわきてなかつむ

心かはりたる男の灌佛のつくりものに松に鶴のゐたりけるを／＼こせて

新拾

ちとせまで契しふかき中なれば松の梢に鶴をゐにける

といひて返しこひしかは

同

鶴のゐる松とてなにかたのむへき今は梢に浪も越なん

人の年わかき男の物いふ女いたくわかしなといひけるかまさりてわかき男に逢にけるとき／＼て男のよまするとてこひしに

さるた妻結ふをたにもわかす連角くむ野へに聞はみるへき

うみ

わたつ海は底もひとつにみゆればや風のまに／＼波も立覺まくら

夢のよの思ひしらるゝねさめには枕の露そともにをきける

むしろ

秋ふかみ風さむしろに袖しきて芦のしのやにいく夜へね覽しかのこゑ

夜もすから妻戀かねて小男鹿のうらめしけなる曉の聲

右是本春二條家爲定以三自筆正本一令書寫一畢。尤可爲證本一也。

文祿二年臘月中旬

雅敬

待賢門院堀川集補

久安百首歌に

宿ことのつまに引かるゝ菖蒲草たかよとのにかねはとまる
千載雜上

残りなくわかよふけぬと思ふまにかたふく月にすむ心哉
同雜下

秋は務きりすぎぬれば雪ふりてはるゝまもなきみ山への里
同春上

ときはなる松もや春を知りぬ覽初音をいはふ人に引かれて
同

白雲と峯のさくらは見ゆれとも月の光はへたてさりけり
留後撰春中

花さかぬ梢は春の色なからさくらをわきてふれる白雪
同夏

待つ程に劣りやはする郭公かたらふ聲のあはぬなこり
千載雜三

長からん心も知らす黒髪の亂れて今朝は物をこそ思へ
留後撰秋上

重ねてもあかぬ思ひやまさるらん今朝立かへる天の羽衣
同秋上

つれなきをいかに忍びてすくしけん暮待つ程も堪へぬ心に
同秋上

逢坂の關の杉むら霧こめてたつとも見えぬゆふかけの駒
玉葉集

ふたつなき玉をこめたるもとゆひのとく事難き法とこそ聞け
千載雜下

短歌

時知らぬ。谷のむもれ木朽はてゝ。昔の春の戀しきに。何

のあやめもわかすのみ。かはらぬ月の影見ても。時雨に

ぬるゝ袖の浦に。鹽たれまさるあまころも。あはれをかけ

て訪ふ人も。浪にたゝよふ釣船の。漕き離れにしよなれと

も。君に心をかけしより。繁きうれへも忘草。忘れ顔にて

住の江の。松の千年のはるゝと。梢遙かに榮ゆへき。常

盤のかけをたのむにも。なくさの濱の慰みて。ふるのやし
るのそのかみに。色深からて忘れにし。紅葉の下葉残るや
と。おいその森に尋ぬれと。今はあかしにたくひつゝ。霜
かれゝに衰へて。かき集めたる水壺に。浅き心のかくれ
なく。流れての名ををし鳥の。うきためしにや。ならんと
すらん。

徳大寺左大臣の大将のよろこひ申つかはすとて
月精賀

うれしさにつゝみもあへす池水のいひ出難きみくつなれ共
同

西行法師をよひ待ちけるにまかるへきよしは申なか
同

らまうてこて月のあかゝりけるに門の前を通ると聞
新撰教

きてよみてつかはしける
同

西へゆくしるへと思ふ月影の空たのめこそかひなかりけれ
同

返し
同

立入らて雲間をわけし月影は待たぬけしきや空に見えけん
同

歳暮の心を
同

白雪のつもれる年を数ふれば我身も共にふりにける哉
留後撰冬

戀歌の中に
同戀一

友こふる遠山鳥の増鏡見るになくさむ袖のはかなさ、
同戀二

思ひやる心つくしのはるけさにいきの松社かひなかりけれ
同戀二

旅の心を
同旅

旅にして秋さり衣寒けきにいたくな吹きそむこの浦風
同旅

待賢門院かくれさせ給ひにけるを香隆寺に納め奉り
留吉全集傳

ければよみ侍りける
同

夏の頃西行法師の許へつかはしける

新後醍醐下

此世にて語らひおかん郭公しての山路のしるへともなれ

法性寺入道前關白家歌合に

續後拾遺錄二

つれなしと且は心をみ山木のこりすも斧の音つるゝ哉

子の日にあたりたりける日神祇伯顯仲が許に養ひたりける兒の許へ申つかはしける

新千載雅上

いさ今日は子日の松の引つれて老木の千代を共に祈らん

返し

神祇伯顯仲

同

祈るとも老木の松は朽はてゝいかてか千代をすくへかる覽

待賢門院かくれさせ給ひけるは御忌にこもりて九月

盡日申つかはしける按察使公通

新拾遺錄

世中にうかりし秋と思へとも暮ゆく今日は惜くやはあらぬ

返し

堀河

同

限りなく今日のくるゝそ惜まるゝ別れし秋の名残と思へは

二條院讃岐集

内裏に柳垂といふとを

青柳のなひく下枝にはきてけり吹春風やともの宮つこ

關路霞

我はさそしらせて過は見えきらん霞にまかふ不破の關守

花によるこひの色有

をのか咲雲ろに君を待つておもひせきもる花櫻哉

つねよりも山の葉しろき曙は夜の間に咲る櫻成けり

花留客人

暫しとも我はとゝめし春のうちはきとこん人を花に任せて

二條院宅十八御時月のあかゝりける夜終夜南殿の花

御覽して曉ちかく成てきとへ出て次の日まいらせたりし

花ならす月も見をきし雲の上に心はかりは出すとをしれ

御返し

出しより空に知にき花の色も月も心に入ぬ君とは

みて

同比雨の降し日南殿の花の庭の水にうつりたりしを

庭たつみうつさゝりせは雲の上に又類ひある花と見ましや

花の盛に心ならす里へ出しにまいらせける

あかすして雲井の花にめかるれば心空なる春の夕暮

御返し

御製

いつとても雲ぬの櫻なかりせは心そらなるとはあらしな

夜ひる花を思

散花の見えぬはかりを惜みける心はひるにかはらさりけり
賀茂の歌合に

新續古

春霞分行まゝに尾上なる松の緑そ色かはりぬる集まさりける

花

爾後拾

咲初て我世にちらぬ花ならばあかぬ心のほとはみてまし

里にゐて後に花はいかゝなとうちわたりへたつねける
次に

おもひきや雲井の花の咲かす人傳にのみ聞かむ物とは

よふこ鳥

くる人もなき物ゆへによふこ鳥なれとならしの山に鳴らん

つつし道をほさむ

いつ方もちらさて行む岩つゝし左も右もまくりてにして

雨後躑躅

春雨にしほれくゝて岩つゝし晴るけふこそ色まさりけれ

春の暮の哥あまたよみたりし次に
我のみのイ

身ひとつのなけきならねは暮て行春の別を問人そなき
今はとて別るゝ春の夕霞こよひはかりや夏をへたてむ

いつくにか暮ぬる春はとまる寛年は我身にそふとしりにき
惜みつる春を限と思ふには残れる花もみるそらそなき

時鳥

鳴捨て雲路過行ほとゝきす今一こゑは遠さかる也

たひのやとりの郭公

諸共に旅ねする夜のとゝきす梢やなれか庵成らむ
聲ならすしのたの杜の時鳥いつ里なれて宿にきなかん

遠村卯花

里遠みまた咲やらぬ卯花やさらしもやらぬ布とみゆらん

尋てあやめを引

長きねはあかぬ心を知へにてまたしらぬまの菖蒲をそひく

年とにあふひをかく

憑こし其かみ山の葵草おもへはかけぬ年のなきかな

あめの後のさなへ

名残なく晴ぬめれとそ早苗取田子の小笠はぬくよしもなし

あかつきのともし

思ひきや鹿にも逢ぬともしすと有明の月を待つへしとは

かやりひつきぬ

さもこそは短き夜半の友ならめふすかともなく消る蚊遣火

ふくるよのう河

さきた河くたす鵜舟にさす笛の音寒るまで夜はふけにけり

古里のたちはな

橘の花吹かせをとめくれは珍らしけなきみきり也けり

たけのうちのほたる

河竹のよとにともす篝火はやとる螢のひかりなりけり

いつみにむかふてともをまつ

獨のみ岩井の水を結びつゝそこなる影も君を待らし

月前のなてしこ

照月の光を霜とをきながら盛にみゆる床なつの花

くゐないつれのかたそ

檣の戸をあけぬ音にやしるか覧水鶏はそこを叩きけりとは

風そよくならの木陰に立よればうすき衣を先しられける

萩花露おもし

月清

秋萩にこほるゝ露のしけければ折ふす枝をあくまで見る

薄の風になひくをみて

なほさ集

吹かぬまは靡かぬにこそ花すゝき風に隨こゝろとはみれ

おきのこゑに夢おとろく

軒ちかき萩の上葉の音せすは心とさむる夢にそ有まし

庭前蒔萱

契あれや野邊の蒔萱うつし植て思ひみたるゝ友となしつる

萩を

しからめは花もちる覽小萩咲く野へには鹿をすませすも哉

寺しつかににして虫の聲をさく

鐘をたにうち忘にし山寺に入あひは虫の聲のみそきく

月

暮ぬとて待つる月の影清みいつれはひるに又なりにけり

雲間月

きたたらぬ雲の絶間の月かけは消て又ふる雪かとそみる

時雨

音はかり夜半の木のはにたくへとも時雨は庭に積らざり覺

時雨のうちのたかかり

時雨ととゝめやはするみかりのゝ狩場の小野にあかぬ心は

十月はかりによもすから木のはのちりければ

明はてはさてたにもみむ木葉ちる庭をは霜の翁かくしそ

難波瀉みきはの苜は霜かれてなたの捨舟あらはれにけり

水鳥の上毛の霜は拂へとも下の氷やとくる間もなき

奇石戀

我戀はしほひに見えぬ奥の石の人社しらねかはく間そなき

あかつきのわかれを

新古

明ぬれとまたきぬゝになりやらて人の袖をもぬらしつる哉

今さらに戀しといふも頼まれすこれも心のかはると思へは
一夜とてよかれし床の小筵にやかても塵のつもりぬる哉
今更にいかにすへき新枕年の三年は待わひぬとも
たのむれば涙の河もよとみけり人の情や非せき成らん
逢との前にかはる心をしら露の消はともにと何おもひ
逢と見る夢をさめつるくやしさに又まともめと叶はざり
夜とゝもに清水に袖は濡せともこゆるよもなき相坂の關
今はさは何と命をかけよとて夢にも人の見えするらん
雨中歸戀
いたつらに歸るそらより降雨は分て袖こそぬれまさりけれ
みしかきよを恨むるこひ
夏の夜を何なけくらむひたすらに行て逢みぬ時もこそあれ
昔見ける人にあひたる人にかはりて
中絶し野なかの水の行末になかれあひてもぬるゝ袖かな
しのひて心をかよはす戀
人しれす下に行かふ芦のねや君と我とか心なるらん
白地にはるかなる所へまかりたりしに都なる人の許
より
かくてのみ絶て命のあらはこそかなはぬまでも待心みめ
返し
待かねて絶す成なむ命をも我あらはこそ哀ともみめ
仁和寺の女院にさふらふ人の許より獨ねなと度々申
つかはす返事に
女郎花亂るゝのへに入しよりかたしくよはゝ有しと思ふ
返し
女郎花みたるゝのへはめもたゝて我故郷の花を戀しき

寄虫戀

我戀はをちのにすたく虫なれや啼とも人のしらはこそ有め
初たる戀のうた讀あひたりしに

思ひかねけふいひそむる玉章に絶ぬ契を結ひつるかな

形見を留て隠たる戀

そこたにしらせていにし我せこか留る笛の音にそなきぬる

歌によりてまさる戀

うしと思ふ人の心を種とするとの葉をしもみるそかなしき

述懷 賀茂哥合

いはてのみ憑そ渡るよそなからみたらし河のをとに立ねと

内におもひをのふる心をあまたよみあひたりしに

我も又ふりなむとの近ければ長柄の橋をよそにやはきく

春日山生そふ松の枝とに木高くならん影をこそまで

遠さかるその古の戀しきに何行末のちかく成らむ

人の袖をもと言哥を御らむして 御製

ぬらさるゝその袂にはあらね共聞にくちなむとそはかなき

御かへし

數ならぬ涙もいかにしられまし人の袂をぬらさゝりせは

中宮の御方にわたらせ給て女房のから衣をとりてお

はしましたりしを尋る人もなかりしかは二三日はか

り有て返しをかせたまうとて結ひつけよとおほせら

れしかは

思ひかねかへしつる哉から衣夢にもみゆるぬしや有とて

三河内侍の哥をよしなと人く申あひたりしかはつ

かはしける
花の香の身にしむはかり匂ふ哉いかなる家の風にか有らむ

返し

春の内に匂ひはかりの花の香をいかなる家の風とかはみる

三河内侍人よりはとに頼むなといはれしに

今よりはたのみ渡らん八橋の下の心は我もしらねと

あり所しらねはいはぬなと申ける人につかはさんと

て人の申けるにかはりて

わたつ海の底ともなとか知さらむみるめ絶ぬる心なりせは

春のころこむとたのめたる人のさもなかりければ夢

に見えけるしるしもなきこゝちして

春の夜の夢には人の見えしかとまさしからても過にける哉

かへし

春のよの夢にしけにも見えたらはまさしからてはいかゝ有へき

白地に立はなれたる人のもとより

逢みても有ぬへしやと心みに立はなるれはぬるゝ袖かな

かへし

逢みてもあるへき事のあれはこそかねて心を心みるらん

心と有けるころ忍ひて住所の庭草も打拂ともなかり

ければ露のしけくをきたりけるをみて

思ふとしけみの庭の草の葉に涙の露はをきあまりけり

したしき人の年頃うとくて過るにひとつわたりにあ

ひていひつかはしたりし 大殿三川

玉葉
その葉の露はかりたにかけよかし草のゆかりの數ならす共

返し

紫の色に出てはいはねとも草のゆかりをわすれやはする

雨降は思ひこそやれいつみなるしのたの杜の下陰くさ

壽量品の心を

けふ聞は光もふるき月かけを出る初と思ひけるかな

浅茅原と成にける所に花の残て咲て侍りけるをおりて人につかはしたりければ

思ひきや花も我身もをくれゐてありし昔を忍ふへしとは

よをへたつる水雞

横の戸をたゞく水雞に驚けはねぬ夜ぬるよそおなし數なる

初の夏郭公を待

年とにまたぬうきのみ先たちてこゝろもとなき時鳥哉

ほとゝきす鳴つる空の五月雨にぬれぬる袖もなつかしき哉

門をあけぬ戀

明やらぬ真木の戸さしを待ほとに横くもわたる山端そうき

いつみにて

あかす猶むすふいつみにほとふれは心のうちに秋は來に覺

雨後郭公

五月雨に雲間の月のはれ行をしはし待ける時鳥哉

曉月

大かたに秋のねさめの露けくは又たか袖にあり明の月

二條院讃岐集補

千五百番歌合に

歸りゆく越路の雪や寒からん春は霞の衣かりかね

今春はとて春の有明に散る花や月にも惜しき峯の白雲

枝に散る花こそあらめ鶯のねさへかれゆく春の暮哉

たをりつゝ花橘に香をしめて我手枕にをしき袖哉

神祭る卯月の花もさきにけり山郭公ゆふかけて鳴け

夏夜の月の桂の下紅葉かつゝ秋の光をそ待つ

よと共に灘の鹽焼いとまなみ浪のよるさへ衣うつなり

あはれなる山田の庵のねさめ哉稻葉の風に初雁の聲

さひしさに秋の哀をそへてけりあれたる宿の萩の上風

女郎花よかれぬ露を置なからあたる風に何靡くらん

人は皆心の外の秋なれや我袖はかりおける白露

世にふるは苦しきものを横の屋にやすくもすくる初時雨哉

ふる雪に人こそとはね炭釜の煙はたえぬ大原の里

霜結ふ冬の夜なゝ重なりてなれのみ枯れぬ庭の浅茅生

打はへて苦しきものは人目のみ忍ふの浦のあまのたく繩

蛙なく神なひ川にさく花の言はぬ色をも人のとへかし

ふけに覺是やたのめし夜半ならん月をのみ社待へかりけれ

あはれゝはかなかりける契り哉只うたゝねの春の夜の夢

新古今集二

富士のねも立そふ雲はあるものを戀の煙をまかふ方なき

新古今集上

身のうさに月やあらぬと泳むれば昔なからの影をもりくる

新古今集一

さかぬまは花と見よとや三吉野の山の白雪消かてにする

同難二

影たけてくやしかるへき秋の月闇路近くもなりやしぬらん

同難三

後の世の身をしる雨のかき曇り苔の袂にふらぬ日そなき

同難四

いその上ふるのはさ田に綱はへて引く人あらは物は思はし

新古今集二

天雲のよそなからたにいつまでか目に見る程の契なるらん

新古今集

百首歌たてまつりし時

同秋下

なく蟬の聲も涼しき夕暮に秋をかけたる杜の下露

同冬

散りかゝる紅葉の色は深けれと渡れば濁る山川の水

同難二

折社あれなかめにかゝる浮雲の袖もひとつに打しくれつゝ

同難三

涙川たきつ心の早き瀬をしからみかけてせく袖そなき

同難上

昔見し雲井をめくる秋の月今幾年か袖にやとさん

新古今集

正治百首歌に

同難上

千鳥なくそかの川風身にしみて眞菅片しきあかす夜半哉

新古今集

露けさは置わかるらん床よりもなめわひぬる有明の月

新古今集

面影る秋のなこりを留めおきて霜のまかきに花を見る哉

同難中

都出て深く入りにし奥山に猶残りける夢の通路

新古今集一

戀歌とてよめる

同難教

みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ浪の下に朽ぬる

同難教

入道前關白家に十如是歌よませ侍りけるに如是報

同難教

うきも猶昔の故と思はすはいかに此世を恨みはてまし

同難教

京極前太政大臣家歌合に

同難教

秋の夜はいと長くそなりぬへきあくるも知らぬ月の光に

同難教

登蓮法師筑紫にまかりけるに歌林苑にて人々饑し侍

同難教

るとて

同難教

月詠別

同難教

ゆく人を惜む秋もかはかぬに又おきそふる秋の夕露

同難教

暮春の心を

同難教

身ひとつの歎ならねはくれてゆく春の別をとふ人そなき

同難教

題知らす

同難教

千載戀五

新古今集

君こふる心の闇をわひつゝは此世はかりと思はましかは

同難教

建保四年内裏歌合に

同難教

古への春にもかへる心哉雲井の花に物わすれせて

同難教

いかなれは涙の雨はひまなきに阿武隈川の瀬絶しぬらん

同難教

戀歌の中に

同難教

君待とさゝてやすらふ楨の戸にいかて更ぬる十六夜の月

同難教

土御門内大臣家歌合に海邊歳暮

同難教

荒磯の岩たちのほりよる浪の早くもかへる年の暮哉

同難教

題知らす

同難教

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

新古今集

雪菟春上
春風は更に雪けに吹かへて峯の霞そ雲かくれゆく

二條院讀岐。伊勢國にしろ所侍りけるに。わつらひあるによりて。鎌倉右大臣にうれへんとて。あつまにくたり侍りけるに。ほいの如くなりて。かへりのほり侍りければ。申つかはしける

善信法師

玉葉羅二
をはたの板田の橋のとたえしを蹈直しても渡る君哉

返し

二條院讀岐

同
朽ぬへき板田の橋の橋作り思ふまゝにも渡しつる哉

新千載春上
前大納言經房家歌合に

風かほる花のあたりに來て見れば雲も紛はす三吉野の山

題知らず

同戀三
こえて後物思ひける逢坂は關もる神や許さゝるらん

新拾遺春下
春の歌とてよめる

日にそへて立そ重なる三吉野の吉野の山の花の白雲

月の歌とて

新拾遺春下
もろ共になれし雲井は忘れぬに月は我をそ知らす顔なる

小侍從集

春

たつ春のこゝろ

春たつとしらてもみはや天の原霞むは今朝の思ひなしかとあらたまる春はけさかと思ふより出る日影もめつらしき哉

左大將の家の百首のうち山さとのたつ春

とけぬなる笥の水のをとつれに春しりそむる深山への里

うくひす

けふともうき身は春のよそなれば外に啼也鶯の聲

むめ

おる袖にしますもある哉梅かゝの思ふ心のふかさはかりは

さくら

年ふともちらて櫻の花ならはめなれてかくや惜まさらまし

うみの邊の散花

ちる花を吹上の濱の風ならはまたも梢にかへりさかせよ

そま人に山の花をたつぬ

とへとこの賤をはすきぬ我身にもおはぬ櫻の花はいさとて

歸 膈

三月盡

新拾遺
身につもる年の暮にもまさり晝けふ計りなる春のなけさは

夏

衣かへ

おしみこし花の袂はそれ乍ら浮身しかふるけふとならばや

うの花

いたつらに咲てやちらむ山賤の身の卯花はおりもしらねは

あふひ

新吉

いかなれはそのかみ山の葵草としはふれとも二葉なるらん

曉のほとつきす

夜もすからまたれくて時鳥聲ほのくくと啼わたる哉

早苗

早苗とる山田のぬしをおいにけるこん火までの命いかにそ

花たちはな

軒ちかき花たちはなはいにしへを忍ふの草のつまと社みれ
うつしうへぬこのくにならは見ましやは花橋はかく匂ふ共

蚊遣火

月詠

夏くれはむろのやしまの里人も猶かやりひや思ひたつらん

とをきむらの蚊遣火

けさみれはをの山かつもあれやこのせれうの里に立る蚊遣火

なこしのはらへ

みそき河なかるゝみをの瀬にはやく身にしむ風は先立に覺

秋

たのいへのたつあき

山田もるすこか麻衣ひとへにてけさたつ秋の風はいかにそ

七夕のゆふへのこゝろ

なかくこの夕暮やたなはたの思ふ心をつくしはつらむ

萩

萩か花おもけにみゆる露計りちらさむ風はさもあらはあれ

やしろの邊の月

住吉とあきたれそめしそのかみに月や變らぬ今宵なるらん

月前のとをき心

新拾

いとふらんくめちの神の心まで思ひやらるゝ夜半の月がな

月ゆくみちをくくる

ふきをくる雲井の月のくもるまは我影たにもそはぬ旅かな

水の邊の月

隈もなき月影うつすこよひこそおほろの清水名を替りけれ

もみち山にみつ

紅葉

限り有て秋はゆくとももみち散龍田の河にしからみもかな

まつ紅葉をへたつ

おりつれば松はわれと思ふ覽ひまに紅葉の色をみむとて

秋のくれ

新勅おきてきく

けふ暮る秋のたかみやこれならんをくもあたる露の白玉

みる集

冬

はしめの冬

初時雨ねさめの床にをとつれてもらぬに満るかたしきの袖

旅のとまりの時雨

草枕おなし旅ねの袖に又夜半の時雨も宿はかりけり

雪

かき曇りあまきる雪のふる里をつもらぬさきにとふ人も哉

枝しけきしのたの森の陰のみやけふふる雪のつもらさる覽

氷

みなかみや薄氷ならんきよ更て笕にうつる水まれになる
百首の哥のなかにたきのその水
山隠れ人もとひこぬ瀧水はつらゝにのみそ結はれにける

水鳥

氷しく汀のひまやせはからんむれる鳥の飛わかれぬる

山家のあらし

嵐にも尾上の鐘はひゞきけり霜はかりそと何思ひけむ

百首のうちたかゝり日くれぬ

み狩するかたのゝましは折しきて旅ねをすへきこよひ成晃

としの暮

かそふれは物うかるへきけふをしも年暮ぬとて何いそく覽

戀

新古

まつよひに更行かねの聲きけはあかねわかれの鳥は物かは

千載 君こふとうきぬる玉のさよ更ていかなるつまに結はれぬ覽

朝とにかはる鏡の影みれば思はぬかけのかひもなきかな

戀 思ひあまりみつのかしはにとふもの洗むにうくは涙成けり

今こそ逢夜にあふと見し夢をいはぬにいむと思ひあはれ

なからへはさりとともこそ思ひつれけふを我身の限成けり

今こそは絶はてぬとも君ゆへにとまる心は身をものはなれし

たらちめは戀に命をかふへしとしらて我をおほしたてけむ

つれなさは君のみならずかくはかり思ふにたえぬ命有けり

夜まさる戀

いかねしときそや夢に見し事はそれさへに社忘れにけれ

雨によりてまさる戀

玉華めしを集

頼むればまつ夜の雨の明方にをやむしもこそ辛くきこゆれ

たかひに思ひしらする戀

さてをしれいはて思ひし心をは習はす年らありしはかりに

かとをすくるにいらぬ戀

すきぬなりもとみし道を忘れねはあゆみとゝまる駒を早めて

身をくはんしていひいてぬ戀

さる澤の池になひきし玉藻こそかゝる歎のはてときゝしか

夢の中にちきるこひ

千載 見し夢をさめぬやかての現にてけふとたのめし暮をまたはや

源氏によする戀

帯木のありしふせやを思ふにもうかりし鳥の音こそ忘れね

神樂によする戀

人こゝろはなたの帯のされはこそかねて思ひしなかつた(千載)

木によする戀

玉華 いかなれはくちぬる袖を涙かゝるいはねの松もさて社はあれ

としの暮の戀

恨見むもいつしかなれはあすよりはいはてや門の松と見ええし

道心をおこす戀

嬉しくも戀路にまといふ足柄のうき世をそむくかたへ入ぬる

雑

高倉院位のおほんときてうきさんの行幸に御ふえはし

めであるへしといふさために人々あまたまいりて萬

歳樂一はかりふかせたまふあけかたにかへりて人々

の御なかにとて 左大將

笛の音の萬代までときこえしに山もこたふる心ちせし哉

御まへにさふらふにおほんかへしつかふまつれとお
ほせことあれば

萬代とはつねの笛になのらせて末をみかさの山やこたふる
正月七日中宮の御かたへ若菜まいらせさせたまふに
まうけの君いはひまうせと人々ありしかは

生たゝん二葉の末を今年よりこはみくまのゝ若なとをしれ
うへおほんかせのけむつかしくおほしめしたるにさ
まゝの物みゆ哥よみたらはなをるへしとおほせこ
とあれば

君か代はこしの里人かすそひてたえすそなふるみつき物哉
建春門院の御かたの詞記三昧に聴聞にまいれとあれ
はまいりたるに一院もおなしおほんかたにおはしま
すほとなりうちへまいりてまたの日これより
泊りゐて歸らぬけふの心をそうらやむ物と我は成ぬる

御返し

中宮權大夫時忠

世のつねの住家をほらのうちにして歸らぬ人と君をなさはや
左大將の三條の家に大宮おはしますころなればあそ
ひまいらせてかへらせたまひにしかはひさしくをと
なきにこれより

かつまたの池にそたえしみつからをよそなる物と何思ひ劍

おほんかへし

かつまたのいけらむ限り忘れめやまた鳥のゐる世に歸る共
おなし人月おもしろき夜くしてあそひてつとめてあ
れより

新干

ならひにきあかぬ別の曉もかゝる名残はなかりし物を
おほんかへし

同
たくひはしらぬ集

これそけにためしはあらめ古のあかぬ別は身をもうらみき
久我のおほいとこのしのひて物申ころ五月なかはのほ
とよし程なきにとて久我に二三日あそひて歸りたる
にあれより

はかなきもあふ名なり晝夏のひもみる程有と覺えやはせし
返し

思ひわひ絶る命もある物をあふ名のみやははかなかるへき
おなしひとのもとへ月をなかくめて

風雅

なかもらん同し月をは見る物をかはすに通ふ心なりせば
返し

同
こよひ我とはれましやは月をみてかよふ心の空にしるくは

おなし人久我にて簪なともしておもしろきあそひ
ありしのち久しくをとなきに

哀いつよかはの簪かけきえて有し思ひのはてときかれん

同し人のもとよりひか事をきゝてうらみつかはして
見くるしかりしふみともかへしたへといひつかはし
たるに

思へたゝこの言の葉をかへしてはなにゝかくへき露の命そ
修理大夫つねもり宮のすけにてつねに申かはすに久
しくをとつねねは

玉露

忘るゝはおなし浮名のこれはたゝくやしきものそはぬ計そ
かへし

玉露

悔しさのそふ計にもなれにせは忘るゝ迄にとはさらめやは

左兵衛督しけのりのもとへ七月二あるとしの七月七
日

玉露

天つ星そらにはいかゝ定むらん思ひたゆへきけふの暮かは

隆信かねてより九月十三夜もろともにみむと契りて
人くさそはれて外にてあそひて又のひ
人しれぬ心はそらにあくかれて思はぬ里の月をみしかな
かへし

雨ふれとわひつゝねにし月影をいかなる里にさは眺めけむ
さきの左衛督公光ありかしらせすと恨みつかはした
るにみわのやまならずともさふらふらむといひつか
はしたるにほとなくたつねて人つかはして

^{玉葉}まつらむとなにをしるしの杉にてか心もしらぬ宿を尋ねん
かへし

^同人しらぬ心のうちの松のみそ杉にもまさるしるし成ける
おほいのみかとの右大臣かくれさせたまひて大宮へ
人くの御なかにとて

深山木の頼みし影もかひなくてたまらぬ雨とふる涙かな
おほいのみかとの少將宮へまいりて尋ねさせたまふ
にいてぬと申せはまちかねていつとて局なる硯のふ
たにかきつけたまひし
いとせめてまつは苦しき物そとは昔は君も思ひしりけむ
返しやかてまいりあひて

なをさりにまつとはすとも君はよも更行鐘の聲はなけかし
石清水の行幸の御ともにまいりたるせうとの權別當
成清もよろこひしたるとて人く悦申なかに殿上よ
りとてまたこと宮に御ふみに
嬉しとや神も心に石清水にしきをきつゝかへるけしきを
返し

思ひやれ誓ひし夜はのうきはしを錦たちきてかへる心を

みやの内侍殿のもとより罪深き夢みてわひさせたま
ひしををたうときひしりに語れはまいりてこまかに
うけたまはらんと申すいかゝといひつかはしたれば
誘ふへき人とふならはしるへせよさてや思ひの家を出ると

歌のとくひにて申かはすに定長出家しつときとて
したひみむ同じし和哥の浦千とり思ひ入ける末たかはすは
源三位頼政もの申ころ二三日をとつれぬにかせさへ

^{玉葉}おこりて心ほそければ
とへかしなうきよの中にありて心とつける戀の病を

いかはいきしなはをくれし君ゆへに我もつきにし同じ病を
おなし人はゝかるを有てしはしをとせてしはすのつ
こもりに

とこほる春よりさきの山水を絶はてぬとや人はしるらん
年こもりに物にこもりていてゝかへし
とこほる程かときし山河の絶はてけるは春そしるゝ
おなし人この暮と契つゝあまたすきぬるにそのさは
りともこまかにつゝけて今夜をかならずと申たるに

筏おろす^{玉葉}杣山河の淺きせは又もさこそはくれのさはらめ
かへし
きのふより涙落そふ杣河のけふはまさればくれもさはらす
大内にさふらふころ。よりまさもさふらふに五月雨
日かすへて晴間なきに大宮へ参たるに同じく頼政ち
かき程にいてたるに月めつらしくさし出たれば

雨雲の晴間に我もいてたるを月はかりをやめつらしとみる
返し

雨の間に同じ雲井をいてに覺もりこはなとか月にをとらむ

ともにはかり有て久しくまさぬに十月一日につほ
みたる菊の枝につけて

君をなを秋社はてね色かはる菊もみよかしひらけたにせぬ
かへし

いさやその開けぬ菊もたのまれます人の心のあきはてしより
かくて二三日ありてうつろひたる菊につけてこれより

開けぬを秋はてすとや見し菊の頼むかたなくうつろひに覺
かへし

移ろはゝ菊はかりをそ恨むへき我心にはあきしなければ
あはのかみたゝのりになき名たつころ頼政かもとよ

りときめかさせたまふらんこそ愛てたくと申つかは
したる返事に

よそにこそむやの蛤ふみゝしかあふとは海士の濡衣としれ
中將たかふさ八條のいへに内の女房あまた見にゆき

たるに面白くてなるこかけなとしたりみ遊びてたち
かへりこれより

ほのみつる門田の稻にひたはへてしか厭はすは又もゆかはや
返し

いとふまで思ひなかけそ鳴子なは稻葉の風のまねく心を
かくて後さまかへてやはたに籠りたるに宮古より人

ゝあまた哥をくられたり 五條三位としなり
かの岸へ渡りにけりなあまを舟すまは逢瀬をと思ひし物を

これは返しとはなくて細かなるもの返ものおくに
すみし世に逢瀬なかりし石清水おりうれしくそ思ひ出たる

新三位よりすけ

王^皇 君はさはあまよの月か雲井より人にしられて山に入ける^{イぬ}

同 返し
すむかひもなくて雲井に有明の月は入とも何かしられむ^{なにとかいふも集}

かくてこもりぬたるに思はずに宮の御もとより今ま
て申さぬなとこまやかにおほせられたるに

とふ人も波にたゝよふ海士小舟うらみは磯にこき歸りぬる^{いませイ}

石清水きよき流の末ゝに我のみにこる名をすゝかはや^{おもひをのふ}

そむきにししるしはいつら立歸りうき世にかくて墨染の袖
覺ぬ世の夢にこの世を見るたにもうきは久しき歎ならずや^{にくてイ}

人命不停過^に於山水といふ文を
山水は結ふ氷によとみけりすきゆく年をせくかたもなき
心經

新^古 色にのみ染し心のくやしきをむなしとゝける法のうれしさ^そ

いはひ
君か代を何にたとへん二葉なる松もちとせの末をしらねは

宮白川殿の御わたりにいはいひ二首。たけ風になる。
月まつをてらす

うち戦く風なかりせはいかにしてよる我友を有としらまし
あけぬとやねくらのたつは思ふ覽月にしもふる松の玉枝を

咲にけり三笠の山の梢までたのみをかくるふちのしるしは
君か代は菊のした水むすひける人のよはひもなにならぬ哉

右以三爲定卿自筆之本。不違一字。今書寫校合了。

入撰集此集不見哥
戀の哥とてよめる

千載戀四

戀ぞめし心の色のいかなれは思ひかへすにかへらさるらん

百首哥たてまつりし時

新古今冬

思ひやれ八十の年の暮なれはいかはかりかは物はかなしき

題しらす

同戀三

つらきをも恨ぬ我にならふなようき身をしらぬ人も社あれ

百首哥たてまつりし時山家心を

同雜中

しきみつむ山路の露にぬれにけり曉おきの墨染の袖

和歌所哥合に海邊秋月といへるこゝろをよみ侍ける

新勅撰秋上

沖津風ふけ井の浦による波のよるとも見えず秋の夜の月

後京極攝政百首哥よませ侍けるに

同秋下

いくめぐり過行秋にあひぬらん變らぬ月の影をなかめて

後京極攝政家百首哥よみ侍けるに

同戀三

雲となり雨と成ても身にそはゝ空しき空をかたみとやみむ

正治百首哥たてまつりける時

續後撰夏

さのみやは山井の清水涼しとてかへさもしらす日を暮すへき

題しらす

同戀三

待も見よあふ夜をたのむ命にて我もしはしの心つよさを

正治二年百首歌に

續古今夏

咲にけり遠かた人にことゝひて名をしりそめし夕かほの花

題しらす

同戀三

諸共にあかぬ別の衣ゝにいつれの袖かぬれまさるらん

後京極攝政百首哥に

同戀二

何とも夢ときよにさめやらてうつゝに人を恨つる哉

千五百番哥合哥

頼めつゝこぬよを待し古を忍ふへしとは思ひやはせし

千五百番哥合に

をとりて猶過ぬるかいつくにも心をとめぬ初時雨かな

題しらす

同

霜かれのあさち色つく冬野にはおはなそ秋のかたみ成ける

二月廿日あまりのころ大内の花見せよと小侍從申け

れはいまたひらけぬ枝につけてつかはしける

從三位頼政

新後撰春上

おもひやれ君か爲にと待花の咲もはてぬにいそくこゝろを

返し

同

逢事を急かさりせはさきやらぬ花をはしはし待もしてまし

心月輪のこゝろを

同尺教

いさきよく月は心にすむ物としるこそ闇のはるゝ成けれ

千五百番歌合に

同戀二

浪高きゆらのみなとをこく舟のしつめもあへぬ我心かな

戀のうたの中に

同

住吉の神に祈りし逢をのまつも久しく成にけるかな

平忠度朝臣山里の花見侍けるに家つとはおらすやと

申つかはして侍ければ家つともまたおりしらす山櫻

ちらて歸りし春しなければと申て侍ける返事に

玉露春下

我爲におれや一枝山櫻家つとにとは思はすもあれ

同秋上

稀にあふ秋の七日のくれは鳥あやなくやかて明ぬこのよは

同秋下

正治二年百首歌たてまつりけるととき秋哥

詠めても誰をかまたむ月夜よし夜よしと告む人しなけれは
前右近中將資盛家に哥合しはへりけるによみてつか
はしける

同戀三

おなし世にあるを頼みの命にて惜むも誰かためとかはしる

正治百首歌たてまつりける時羈旅

續後拾遺旅

今宵もや宿かりかねむ津國のこやとも人のいはぬわたりは

高倉院御時内裏より女房あまたいさなひて上達部殿

上人花見侍けるに右京大夫折ふし風の氣ありとてと

もなひ侍らさりければ花の枝につけてつかはしける

風雅泰中
さこそはれぬ心の程はつられと獨見るへき花の色かは

題しらす

新千載併諸

思ひこし夕くれなるの儘ならてくやしや何のあくにあひ劔
しのひこし

男のつらくあたりけるにつかはさんとてこひける人

にかはりて

新拾遺戀一

なひきける我身あさまの心からくゆる思ひに立煙かな

戀哥の中に

同戀二

身のうさを思ひもしらぬ物ならは何をか戀の慰めにせむ

千五百番哥合に

新後拾遺冬

跡つけしその昔こそ戀しけれのとかにつもる雪をみるにも

きさらきはかりに小侍従あつまよりのほりぬときき

て法橋顯昭許より今はよし君まちえたりかくてこそ

都の花をもろともにみめといひつかはしたりける返

事に

新編古今上篇

あひみむと急きし物を君はさは花ゆへのみや我をまちける

同
正治二年百首歌に

何とに露も心のとまらまし月をなかめぬ此世なりせは

同
正治百首歌たてまつりける時

同羅中

朝夕の煙はかりをあるしにて人はをとせぬ大はらの里

六皇太后侍女

小侍従

石清水別當光清女
母小大進源大宮小侍従

入選集歌數凡五十四首歟

千載

新古今七

新勅撰五

續後撰二

續古今六

續拾遺二

新後撰四

玉葉十一

續後拾遺一

風雅二

新千載二

新拾遺四

新後拾遺三(二)新續古今三

右小侍従集以屋代弘賢藏本校合畢

補遺

述懷を

月詣羅下

身にとまる齡計をしるしにて花をはよその物と社見れ

無量義經の心を

今牌和歌集

さまよひに流るゝ法の水なれと其水上はひとつなりけり

千五百番歌合に

雲葉春下

思へとも聲はたてしと忍ふるをうらやましくも呼子鳥哉

群書類從卷第二百八十

和歌部百三十五 家集五十三

建禮門院右京太夫集

家の集などいひて哥よむ人こそかきとゝむるとなれ
これはゆめ／＼さにはあらずたゝ哀にも悲しくもな
にとなく忘れかた／＼おほゆるものとものそのおり／＼
ふと心におほえしを思ひ出らるゝ儘に我目ひとつに
みんとて書をくなり

われならて誰か哀と水くきのあともし末の世にのころとも
高倉の院の御位のころ承安四年なといひしとしにや
正月一日中宮(壽禮)の御かたへ内の上わたらせ給へり
し御ひきなをしの御すかた宮の御ものゝくめしたり
し御さまなどのいつと申なからめもあやにみえさせ
給しを物のとをりより見まいらせて心に思ひし事

雲の上にかゝる月日のひかりみる身の契りさへ嬉しと思
同し春なりしにや建春門院たいりに暫しさふらはせ
おはしましゝかこの御かたへいらせおはしまして八
條二位殿御まいりありしも御所にさふらはせ給しを
みくしけ殿の御うしろよりおつ／＼ちと見まいらせ
しかは女院むらさきの匂の御を山吹の御うはき櫻の

御こうちきあを色の御唐衣てふを色／＼にをりたり
しをめしたりしをめしたりしかはいふ方なくめてた
く若くもおはします宮はつほめる色の紅梅の御をか
は櫻の御うはき柳の御こうちきあか色の御から衣み
な櫻を織りたるめしたりし匂ひあひて今更めつらし
くいふ方なく見えさせ給しに大かたの御所の御しつ
らひ人々の姿とにかゝやくはかりみえしおり心にか
くおほえし

春の花秋の月夜をおなしおりみる心地する雲のうへかな
頭中將さねむね常に中宮御方へまゐりて琵琶ひき歌
うたひあそひて時／＼とひけなといはれしをことさ
ましにこそとのみ申てすきしにあるおりふみのやう
にてたゝかくかきてをこせたり

松風のひゝきもそへぬ獨言はさのみつれなきねをやつくさ
返し

よのつねの松風ならはいか計あかぬ調にねもかはさまし
おなし人の四月みあれの頃藤つほにまいりて物語せ
しおり權のすけ維盛のとをりしをよひとゝめて此程
に何處にてまれ心とけて遊はんと思ふを必ず申さん
なといひ契りて少將はとくたゝれにしか少したちの
きて見やらるゝほとにたゝれたりしふたあるの色こ
き直衣指貫わかゝえてのきぬその比のひとへ常のと
なれと色とにみえてけいこ姿まゝに繪物語にいひた
てるやうに美しくみえしを中將のあれかやうなるみ
さまと身を思はゝいかに命もおしくてなか／＼よし
なからんといひて

羨ましきとみる人のいか計なへてあふ心を心かくらん

たゞいまの御心のうちもさあらんかしといはれは
ものゝはしにかきてさしいつ

なか／＼に花の姿はよそにみて葵とまてはかけしと思ふ
といひたれはおほしめしはなつかしも深きかたにて
心きよくやあると笑はれしもさるゝとおかしくそあ
りし故建春門院の御爲に御てつから御經かゝせおは
しまして内裏にて御八講行なはれし五くわんの目女
院たち后のみや／＼三條女御殿白河殿などみな御ほ
う物たてまつらせ給しそなたにゑんある殿上人もち
てまいりし氣色おもしろくも哀にもありしに中宮の
御ほう物は二枝を宮のすけしけから權亮これりなとも
たれたりしとおほゆ故女院いらせ給ておはしまし
御方をとりはらひてたうちやうにしつらはれたりし
もあはれにて

九重にみのりの花の匂ふけふや消にし露もひかりそふらん

近衛殿二位中將と申ころたかふさ(隆房)しけひら(重衡)

これより(舞盛)すけより(舞盛)なとの殿上人なりしをひ
きくせさせ給ひて白河殿の女房たちさそひて所々の
花御覽しけるとてまたの日花の枝のなへてならぬを
花みける人々の中よりとて中宮の御方へまいらせら
れたりしかは

さそはれぬうさも忘れて一枝の花にそめつる雲のうへ人

返し

雲のうへに色そへよとて一枝をおりつる花のかひもある哉

すけもりの少將

もろともに尋ねてもみよ一枝の花に心のけにもうつらは

いつの年にか月あか／＼りし夜うへの御笛ふかせおは
しまし／＼かことに面白／＼きこえしをめてまいらすれ
はかたくなはしきほとなると此御かたにわらはせお
はしまして後に語りまいらせさせ給ひたりけるをそ
れは空ことを申そとおほせ事あるとてありしかは

さもこそは數ならさめ一筋に心をさへもなきになす哉
とつふやくを大納言の君と申は三條内大臣の御むす
めとを聞えしその人のかく申と申させ給へは笑はせ
おはしまして御扇のはしにかきつけさせ給たりし

笛竹のうきねをこそは思ひしれ人の心をなきにやはなす
なにとなくよみし哥の中に春たつ日

いつしかと氷とけゆくみかは水ゆく末とをきけさの初春
春きぬと誰うくひすにつけつ覽竹のふるすは春もしらしを

鶯有慶音

長閑なる春にあふ夜のうれしさは竹のうちなる聲の色にも

對月待花

はや匂へ心をわけて夜もすから月をみるにも花をしそ思ふ

往事戀

哀しりてたれか尋ねんつれもなき人を戀てふイわひいはとなる共

仙家卯花

露深き山路の菊をともしして卯花さへやちよも咲へき

かた思ひをはつる戀

興津波岩うつ磯のあはひかひひろひわひぬる名社おしけれ

くもる夜の月

曇るよをなかくあかして今宵社ち里にさゆる月をなかくれ

夕にすくる野の花

心をは尾花か袖にとゝめをきてこまにまかする野への夕暮
たかひにつねに聞く戀

ありときかれ我もきゝしも辛き哉只一筋になきになしなて

谷のほとりの鹿

谷ふかみ杉のこすゑをふく風に秋のをしかを聲かはすなる

ねさめのたう衣

うつ音にね覺の袖そぬれまさる衣はなにのゆへとしらねと

名をかへてあふ戀

厭はれしうき名を更に改めてあひみるしもを辛さをひける

野亭夕の夏草

ゆふされは夏野の草のかた靡きすゝみかてらにやすむ旅人

連夜のくゐな

あれはてゝさす事もなき櫛の戸を何とよかれす叩く水鶏そ

夜ふかき春雨

ふくる夜のね覺さひしき袖の上を音にもぬらす春の雨かな

とをき澤の春こま

はるかなる野澤にあるゝはなれ駒かへさや道の程もしる覽

くらき空の歸かり

花をこそ思ひもすてめ有明の月をもまたてかへる雁金

曉のよふ子鳥

よをのこすね覺にたれをよふ子鳥人もこたへぬ東雲のそら

山田のなはしろ

山里は門田のをたの苗代にやかくかけひの水まかせつゝ

ふるき池のかきつはた

あせにけるすかたの池の杜若いく昔をかへたてきぬらん

名所のすみれ

おほつかなならひの岡は名のみして獨すみれの花を露けき
所々のやまふき

我宿のやへ山吹の夕はへに井手のわたりもみる心地して

海のみちの春のくれ

いかりおろす波まに洗む入日よりくれ行春のすかたえけれ

瀧のへんののこりの雪

水こそ春をしりけたきつせのあたりの雪は猶そのこれる

さわらひ

紫のちり計してをのつからところゝにもゆるさわらひ

船のとまりの花

高砂の尾上の春をなかわれは花こそ船のとまりなりけれ

友船もこきはなれ行こゑすなり霞ふきとけよこのうち風

花落衣

さそひつる風は梢をすぎぬなり花は袂にちりかゝりつゝ

老人を戀

つくもかみこひぬ人にも古はおも影にさへみえけるものを

雨中草花

すきてゆく人はつらしな花薄まねくま袖に雨はふりきて

月依所明

名にたかき姨捨山のかひなれや月の光のことにみゆらん

關をへたてたる戀

戀わひてかく玉章のもしのせきいつかこゆへき契りなる覽

山家初雪

春の花秋の月にもをとらぬはみ山の里の雪のあけほの

さいはらによする戀

みし人はかれ／＼になるあつまやに茂りのみます忘れ草哉
山家はなをまつ

(ひま街巻)

山里の花をそけなける梢よりまたぬ嵐のをとそものうき
中宮の御かたにさふらふ人をきんひらの中將のせち
にいひしころ物をのみ思ふよしを返さうれへられし
に秋のはしめつかはしゝ
秋きてはいとゝいかにかしくる覽色深けなる人のものは

返し

時わかぬ袖の時雨に秋そひていかばかりなる色とかはしる
小松のおとゝゝ(兼盛)の菊あはせをし給しに人に代りて
移しうふる宿のあるしもこの花も共に老せぬ秋をかきねん

風雅

おなしおとゝの大臣の大將にてよろこひ申給しにお
とうとの右大將ともし給へりしいきほひゆゝしくみ
えしかは

いとゝしく咲そふ花の梢かな三笠の山に枝をつらねて

いつれの年やらん五せちのほと内裏にちかき火の事
ありてすてにあふなかりしかは南殿にようよまうけ
て大將をはしめ衛府のつかさのけしきとも心ゝにお
もしろくみえしに大かたの世のさはきも外にはかゝ
るもあらしと覺えしも忘れかたし宮は御て車にて行
けいあるへしとそきこえし小松のおとゝ大將にてな
をしにやをひて中宮の御かたへまいり給へりしこと
からなといみしくおほえき

雲のうへはもゆる煙に立さはく人の氣色もめにとまる哉
やしまのおとゝ(兼盛)とかやこのころ人はきこゆめる
その人の中納言ときこえしころ五節に櫛こひきこえ

たりしをたふとて紅のうすやうに蘆わけ小舟をむす
ひたる櫛さしたるかなのめならぬにかきて押つけら
れたりし

芦分のさはる小舟にくれなるの深き心をよするとをしれ
返し白うすやうにて

芦分て心よせける小船ともくれなる深き色にてそしる
なにとなくてみきくもに心うちやりてすくしつゝな
へての人のやうにはあらしと思ひしを朝ゆふ女とち
のやうにましりゐて見かはす人もあまたありしなか
にとりわきとかくいひしをあるましのとやと人のと
を見きゝても思ひしかとも契りとかやはのかれかた
くてやおもひのほかは物思はしき事をひてさまゝ
思ひみたれしころさにてはるかに西のかたをなか
めやる木すゑはゆふ日の色しつみてあはれなるにま
たかきくらしゝくるゝをみるにも

玉葉

夕日移る梢の色のしくるゝに心もやかてかきくらす哉
秋の暮をましのあたりになきしきり／＼すの聲なく
なりてほかにきこゆるに

とこなるゝ枕の下をふり捨て秋をはしたふきり／＼す哉
常よりも思ふ事あるころ尾花か袖の露けきをなかも
いたして

露のゐるお花か末をなかわれはたくふ涙をやかてこほるゝ
物思へなけゝとなれる詠め哉たのめぬ秋の夕暮の空

秋月あかき夜

名にたかき二夜の外も秋はたゝいつもみかける月の色哉
たち花をみつ人のみよとてつかはしゝ返しに

心ありてみつとはなしに橘の匂をあやな袖にしめつる

かけ離れいへはあなちにつらき限りにしもあらね
となか／＼めに近きはまたくやしうも恨めしくさま
／＼思ふ事多くて年もかへりていつしかの春のけし
きも浦山しく鶯のをとつるゝにも

^{玉葉}物思へは心の春もしらぬみに何鶯のつけにきつらん

とにかくに心をさらす思ふ哉さてもと思へはさらに社思へ
うせにしせうとのために阿彌陀經かくにも

まよふへき闇もやかねてはれぬ覧かきをくもしの法の光に

内の御かたの女房宮の御かたの女房車あまたにでき
んしゆの上達部殿上人くして花みあはれしになやむ
事ありてましらさりしを花の枝に紅のうすやうにか
きてつけてこ侍従のとそ

^{風雅}さそはれぬ心の程はつられと獨みるへき花のいろかは

風の氣ありしによりてなれば返しにかく聞えし

^同風を厭ふ花のあたりはいかゝとてよそ乍ら社思ひやりつれ

花をみて

數ならぬ浮身も人におとらぬは花みる春の心えけり

おほろのみかとのさい院いまた本院におはしましゝ
頃かの宮の中將の君のもとより御垣のうちの花とて
おりてたひて

^{風雅}しめのうちは身をもくたかす櫻花おしむ心を神にまかせて

返し

^同しめの外も花といはん花はみな神にまかせて散さすも哉
この中將の君にきよつねの中將の物いふときゝしを
はとなくおなし宮のうなる人に思ひうつりぬとき

ゝしかは文のついでに

袖の露やいかゝこほるゝあしかきを吹渡るなる風の氣色に
返し

吹わたる風につけても袖の露みたれそめにしもそくやしき

とかく物おもはせし人の殿上人なりしころちゝおと
ゝの御もとに住吉にまうてゝかへりて洲濱のかたの
結ひたるに貝ともを色々にいれてうへに忘れ草をゝ
きてそれに花田のうすやうにかきて結ひつけられた
りし

恨みてもかひしなければ住のえにおふてふ草を尋てそみる

返し秋のことなりしかはもみちのうすやうに

住の江の草をは人の心にて我そかひなき身をうらみぬる

太皇太后宮よりおもしろき御繪ともを中宮の御かた
へまいらせさせ給へりしなかに昔ちゝのもとに人の
手ならひしてと葉かゝせし繪のましりたるいとあは
れにて

めくりきてみるに袂をぬらす哉繪島にとめし水莖の跡

四月はかりしたしき人にくして山里に有しころ時鳥
のなきしに

都人まつらん物を時鳥なきふるしつるみやまへの里

花橘の雨はるゝ匂ひしかは

橘の花こそいとゝかはるなれ風ませにふる雨の夕暮

五月五日宮の權太夫時忠のもとより樂玉まきたる箱
のふたにしやうふのうすやうしきておなしうすやう
にかきてなへてならすなかなきねをまいらせて
君か代に引比ふれば菖蒲草なかつてふ恨もあかすそ有ける

返し花橘のうすやうにかく

心さし深くそみゆる菖蒲草なかきためしにひけるねなれは
歎く事ありてこもりゐたりしころ。さうふのねをこ
せたる人に

菖蒲ふく月日も思わかぬまにけふをいつかと君をしらす

なりちか（成程）の大納言のむすめ宮の權のすけのうへ
なりし人はしるゆかりありしもとよりくす玉をこす
とて

君に思ひ深き江に社ひきつれとあやめの草のね社あさけれ
返し

ひく人のなさけも深き江に生る菖蒲を袖にかけてかひある
すゝりのついでに手ならひに

哀なり身のうきにのみねをとめて袂にかゝる菖蒲と思へは
秋の末つかた建春門院いらせおはしまして久しくお
なし御所なり九月つくる日あす還御なるへきに女官
して薦てのしたゑしたるたんしにたてふみ紅のうす
やうにて

歸り行秋にさきたつなこりこそおしむ心のかきりゝけれ

返しうへしろき菊のうすやうにかきて誰としらねは
女房の中へともゝりの中將まいられしにもつくまゝと
によのけしきなこりおしかほにうちしくれて物あは
れけなれと

立かへり名殘をなにかおしむ覽千年の秋ののとかなるよに
三位中將維盛のうへのもとより紅葉につけてあをも
みちのうすやうに

君ゆへは惜き軒端の紅葉はもおしからて社かくたをりつれ
をイ

返しくれなるのうすやうに

我ゆへに君か折けるもみちこそなへての色に色をへてみれ
忠度のあそん西山ののみち見たるとてなへてならぬ
枝をおらせて結びつけたる

君に思ひ深きみやまののみちはを嵐のひまに折をしらす
返し

おほつかな折こそしらね誰に思ひ深きみ山のみちなる覽
みくしけ殿のさとに久しくおはせしころ弁の殿のそ
の里へまいりて歸りまいられたりしになとか此たよ
りにもをとつればせぬとのたまひしかは

なをさりに思ひしもせぬ言の葉を風の便にいかゝ散らさん
春のころ宮の西八條に出させ給へりしほと大かたに
まいる人はさるもにて御はらから御をひたちなとみ
な番におりて二三人はたえすさふらはれしに花のさ
かりに月あかゝりし夜あたらよをたゝにやあかさ
んとて權のすけらうゑいし笛吹つねまさ琵琶ひき。み
すの内にも琴かきあはせなと面白くあそびしほとに
内よりたかふさの少將御つかひにて文もちてまいり
たりしをやかてよひてさまゝのことゝもつくして
後にはむかし今の物語などして明方までなめしに
花はちりちらす同じ匂ひに見わたされ月もひとつに
かすみあひつゝやうゝしらむ山きはいつといひな
からいふかたなくおもしろかりしを御返を給りてた
かふさのいてしに。たゝにやはとて扇のはしをおり
てかきてとらす

かくまでの情つくさて大方の花と月とをたゝみましたに

少將かたはら痛きまでゑいしすんして硯こひてこの
座なる人々なにともみなかけとて我あふきにかく
かた／＼に忘らるましき今宵を誰も心にとめてを思へ
權のすけは哥もよまぬ者はいかにといはれしをなを
せめられて

心とむな思ひ出そといはんに今夜はいか／＼やすく忘れん

つねまさのあそん

嬉しくも今夜の友の數に入てしのはれ忍ふつまとなるへき
と申しをわれしもわきて忍はるへきこと／＼心やりた
るなとこの人々の笑はれしかはいつかは申たるとち
んせしもおかしかりき又月のまへの戀月のまへの祝
といふ人を人のよませしに

千代の秋すむへき空の月も猶こよひの影やためしなるらん

つれもなき人を情もしられけるぬれすは袖に月をみましや

ゆかりある人の風のおこりたるをとふらひたりし返

事に

情をくことの葉とに身にしみて涙の露そいと／＼こぼる／＼

ふくになりたる人とふらふとて

哀とも思ひしらなん君ゆへによそのなけきの露もふかさを

小松のおと／＼うせ給て後北方の御もとへ十月はかり

きこゆる

かきくらす夜の雨にも色かはる袖の時雨を思ひこそやれ

とまるらん古き枕にちりはゐて拂はぬ床を思ひこそやれ

返し

音つる／＼時雨は袖にあらそひてなく／＼あかす夜はそ悲數
みかきこし玉の夜床にちりつみて古き枕をみるを悲しき

なりちかの大納言とをき所へくたられにしのち院の
京極殿の御もとへ

いかばかり枕の下の水るらんなへての袖もさゆるこのころ
旅衣立わかれにし跡の袖にもろき涙の露やひまなき

返し京こく殿

ちん殿

床のうへも袖も涙のつ／＼らゐてあかす思ひのやる方もなし
日にそへてあれ行宿を思ひやれ人をしのふの露にやつれて

安元といひし始の年の冬臨時祭に宮のうへへの御つほ
ねへのほらせ給御ともにさはるもありてえまいらて

さしも心にしむかへりたちのみ神樂もえ見えりしく
ちおしくて御視の筈にうすやうのはしにかきつけて

をく

朝倉やかへす／＼そ恨つるかさしの花のおりしらぬ身を

さとなりし女房のふちつほのおまへのもみちゆかし
きよし申たりしをちり過にしかは結ひたるもみちを

つかはす枝にかきてつく

新勅

吹風も枝にのとけきみよなればちらぬ紅葉の色をこそみれ

宮の六條殿にしはし出させ給ていらせ給し行けいの

いたし車にまいりたりし人のその夜の月おもしろか

りしをと／＼花殿のかたなとにて人／＼くしてみ

て其曉いて／＼とめてよへの月に心はさなからとま

りてと申たりしかは

雲のうへをいそぎ出にし月なれば外に心はすむとしりにき

兼光中納言のしきしなりしころむくを六つ／＼みてを

こせたるにいか／＼いふへきとはりまの内侍いはれし
かは

六の道をいとふ心のむくひには佛の國にゆかさらめやは
雪の深くつもりたりしあした里にてあれたる庭をみ
ゐたしてけふこん人をとなかめつゝうす柳の衣こう
はいのうすきぬなときてゐたりしに。かれ野のをり
物の狩衣すはうのきぬ紫のをり物の指貫きてたゝひ
きあけていりきたりしおもかけ我ありさまには似す
いとなまめかしくみえしなとつねは忘れかたくおほ
えて年月おほくつもりぬれと心にはちかきも返く
むつかし

年月のつもりはてゝもそのおりの雪の朝は猶そ戀しき
山里なる所にありしおりえんなる有明におきてゝ
まへ近きすいかいに咲たりし朝貝をたゝ時のまの盛
りこそあはれなれとて見しをもたゝ今の心ちするを
人をも花はけにきこそ思ひけめ。なへてはかなきた
めしにたにあらさりけるなと思ひつゝけることの
みさまくなり

身の上をけにしらてこそ僅の花をほとなき物といひけめ
有明の月に僅みしおりも忘れかたきをいかてわすれん
せうとなりしほうしのとに頼みたりしか山深くおこ
なひて都へも出さりしころ雪の降しに
いか計山路の雪のふかゝらん都の空もかきくらすころ
冬の夜月あかきに賀茂にまうてゝ

神垣や松のあらしも音さえて霜にしもをく冬のよの月
人の心の思ふやうにもなかりしかはすへてしれすし
らぬ昔になしはてゝあらなと思ひしころ
常よりも面影にたつ夕かな今やかきりと思ひなるにも

よしさらはさてやまはやと思ふより心よはさの又まさる哉
同じもをとかく思ひて月のあかき夜はしつかたにな
かめいたしたるにむら雲はるゝにやとみゆるにも
みるまゝに雲ははれ行月影も心にかゝる人ゆへになを

いと久しくをとつれさりしころ夜ふかくね覺てとか
く物を思ふにおほえす涙やこほれに劔。つとめてみ
れば花田のうすやうの枕ことのほかにかへりたれば
移りかもおつる涙にすゝかれて形見にすへき色たにもなし
心ならず宮にまいらすなりしころ。れいの月をなか
めてあかすに見てもあらさりし御面影の淺ましくか
くてもへにけりとかきくらし戀しく思ひまいらせて
戀わふる心をやみにくらさせて秋の深山に月はすむらん
其頃ちりつもりたるをを。いかておほくの月日へに
けりとみるにも。あはれにて。みやにてつねはちか
くさふらふ人ゝの笛にあはせなとあそひしこといみ
しくこひし

おりく其笛竹をもとたえてすさひしもの行衛しられす
宮の御産なとめてたくきゝまいらせしにもたゝ涙を
ともにてするに皇子むまれさせおはしまして春宮
たちなときこえしにも思ひつゝけられし

雲のよそに聞そかなしき昔ならは立ましらまし春の宮こそ
となりて庭火の笛のをとするにもとしく内侍とこ
ろのみかくらに維盛の少將やすみちの中將などの面
白かりしねともまつ思ひ出らる

聞からにいと昔の戀しくて庭火の笛のねにぞ啼ぬる
おほやけの御かしこまりにて。とをく行人そこく

によへばとまりなとさゝしかは。そのゆかりある人
のもとへ

ふしなれぬ野路のしの原いかな覽思ひやるたに露けき物を
しりたる人のさまかへたるかこんといひて音もせぬ
に

頼めつゝこぬ偽の積るかなまとの道に入りし人さへ

すひつのはたにこもきに水のいりたるかありけるに
月のさし入てうつりたるわりなくて

めつらしやつきに月社宿りぬれ雲井の空にたちなかくしそ
なに事もへたてなくと申契たりし人のもとへ思ひの
外に身の思ひそひて後さすかにかくこそともまたき

こえにくきをいかにきき給ふらんとおほえしかは
夏衣ひとへに頼むかひもなくへたてけりとは思はさらなん

さきのよの契にまくるならひをも君はさりとと思ひしる覽
はしめつかたはなへてあるともおほえすいみしく
ものゝつゝましくて朝ゆふ見かはすかたへの人々も
ましておとこたちもしられなはいかにとのみ悲しく

おほえしかは手習にせられし

ちらすなよちらさはいかにつらか覽信夫の里に忍ふもの葉
こひ路には迷ひいらしと思ひしをうき契にもひかれぬる哉
いくよしもあらしと思ふ方にのみ慰むれとも猶^悲戀しき

そのかみ思ひかけぬ所にてよ人よりも色このむとき
く人よしあるさふまとの物語しつゝ夜もふけぬ
るに近くあるけはひしるかりけるにや。ころは卯月
の十日なりけるに。月の光もほのゝにて。けしき
も見しなといひて人につたへて。その男はなにかし

の宰相中將とそ

思ひわくかたも渚による波のいとかく袖をぬらすへしやは
と申たりし返事

思ひわかつて何と渚の浪ならはぬらん袖のゆへもあらしを
もしほくむあまの袖にそ沖津浪心をよせてくたくとはみし
また返し

君にのみわきて心のよる波はあまの磯やに立もとまらず
すゝろくさなりしをついてにてまことしく申わたり

しかとよの常の有さまはすへてあらしとのみ思ひし
かは心つよくてすきしを此思ひのほかなるををはや
いとよくきゝにけりさてそのよしほめかして

うら山しいかなる風の情にかくもの煙うちなひきけん
返し

消ぬへき煙の末はうら風に靡きもせすてたゝよふ物を
またおなしををいひて

哀のみ深くかくへき我をゝきて誰に心をはすなるらん
返し

人わかす哀をかはすあた人に情しりてもみえしと思ふ
まつりの日おなし人

行末を神にかけてもいのる哉蔡てふ名をあらましにして
返し

諸かつら其名をかけていのるとも神の心にうけしと思ふ
かやうにてなにこともさてあらて返くやしき事
思ひしころ

こえぬれは悔しかりけり逢坂を何ゆへにかはふみはしめ劔
車をこせつゝ人のもとへゆきなとせしにぬしつよく

定まるへしなときしころ。なれぬる枕に硯のみえしを引よせてかきつくる

たれか香に思ひうつると忘るなよな／＼なれし枕計はかへりて後見つけたりけるとてやかてあれより

心にも袖にもあまるうつりかを枕にのみや契をくへき

おなしよ床にて郭公をきゝたりしに。ひとりねさめにまたかはらぬこゑにてすきしを。そのつとめてふ

みのありしを返事のかいてに

諸共にことかたらひし曙にかはらさりつる時鳥かな

返しに我しも思ひいてつるをなとさしもあらしとお

ほゆるをもをいひて

思ひ出てね覺し床の哀をも行きてつけゝる郭公哉

又しはしをとせて文のこま／＼と有しを返事になに

とやらんいたく心のみたれてたゝみえし橘の一枝つゝ

みてやりたりしにえこそ心えねとて

昔思ふ匂ひかなにそを車にいれしたくひの身にもあらぬに

返し

侘つゝはかさねし袖の移りかに思ひよそへて折りし橘

たま久しく思ひ出たるにたゝやあらましと返々思

ひしかと心よはくて行たりしに車よりおるゝをみて

よには有けるかと申しゝをきく心地にふと覺し

有けるといふに辛さの勝る哉なしになしつゝすくしつる程

夢にいつも／＼みえしを心のかよふにはあらしをあ

やしうこそと申たる返事に

玉聲
通ひける心の程はよを重ねみゆらん夢に思ひあはせよ

返し

同

けにもその心の程や見えつらん夢にもつらきけしきえつる人の女をいふ人に五月すきてと契けるを心いられし

て忍ていりにけりとときく人のもとへ人にかはりて

みな月をまてと頼めしわか草を結びそめぬと聞くは誠か

せんなき事をのみ思ふころ。いかてかかゝらすもか

なと思へと。かひなきも心うくて

思ひかへす道をしらはや戀の山はやましけ山分いりし身の

いつかたにか經の聲ほのかに聞えたるもいたく世の

申しみ／＼と物かなしくおほえて

まよひ入し戀路くやしき折にしもすゝめかほなる法の聲哉

ち／＼とおと／＼の御もとに熊野へ参りたると聞しを

てもしはしをとなければ

忘るとはきくともいかゝ三熊の浦の濱ゆふ恨かさねん

と思ふもいと人わろしひとゝせ難波かたより歸りて

はやかてをとつれたりし物をなとおほえて

沖つ波かへればをとせし物をいかなる袖のうらによる覽

常に向ひたる方はときは木ともこくらく杜のやうに

て空もあきらかにみえぬもなくさむかたなし

眺むへき空もさたかに見えぬまで繁きなききも悲しかり覺

東は長樂寺の山のうへ見やられたるにしたしかりし

人とかくせし山のみねをとほのみゆるも哀なるにな

かめいたせはやかてかきくらしして山もみえす雲のお

ほひたるもいたくものかなし

詠めいつるそなたの山の梢さへたゝともすればかき曇る覽

雲のうへもかけはなれその後も猶とき／＼音信し人

をも頼むとしはなれとさすかにむさしあふみとか

新舊
流れて

やにてするになか／＼あぢきなきことのみまされ
はあらぬよの心ちして心みんとほかへまかるにほう
くともとりしたゝむるにいかならん世までもたゆま
しきよし返ゝいひたるもの葉のはしにかきつけし

とたのめしかとも水莖のかきたえぬへき跡の悲しさ
宮にさふらふ人の常にいひかはすかきてもその人は
このころはいかにといひたる返事のついでに

雲の上をよそになりしうき身には吹かふ風の音も聞えず
治承などのころなりしにやとよのあかりのころ上西
門院女房ものみに車二はかりにてまいられたりしと
り／＼にみえしなかに小宰相殿といひし人のひん額
のかゝりまてことにめとまりしを年ころ心にかけて
いひける人のみちもり(籬)のあそにとられて歎く
とき／＼しげに思ふもことばりとおほえしかはその人
のもとへ

さこそけに君なけくらめ心をめし山の紅葉を人におられて
返し

何かけに人の折けるもみち葉を心うつして思ひそめけん
なと申しゝおりは。たゝあたもとこそ思ひしを。そ
れゆへ底のもくつとまてなりにしあはれのためしな
さ。よそにてなけきし人におられましかは。さはあ
らさらまし。かへす／＼ためしなかりける契の深さ
もはかなさも。いはんかたなし。大かたの身のやう
もつくかたなきにそへて心のうちもいつとなく物の
み悲しくて。なかめしころ秋にもやゝなりぬ風の音
はさらぬたに身にしむに。たとへんかたなくなけ

れて星合の空みるも物のみあはれなり
つく／＼と詠めすくして星合の空をかはらすまた詠めつる

西山なる所にすみしころ遙なるほと事しけき身のい
とまなきにまつけてやゝ久しくをとつれすかれたる
花のありしにふと

とはれぬはいくかそとたに數へぬに花の姿をしらせ顔なる
この花は十日あまりかほとにみえしにおりてもたり
し枝をすたれにさしていてにしなりけり

哀にもつらくも物所思はるゝのかれさりけるよゝの契に
まへなるかきほにくすはひかゝり小笹うちなひくに
山里は玉まぐ葛のうらみにて小篠か原に秋のはつかせ

月の夜れいの思出すもなくて
俤を心にこめてなかわれは忍かたくもすめる月かな

冬になりて枯野のおきに時雨はしたなくすきてぬれ
色のすまじきに春よりさきにしたためくみたる若葉
のろくしやう色なるかとき／＼見えたるに露は秋思
ひ出てをきわたしたり

霜さゆる枯野の萩の露の色秋のなこりをともに忍ふや
なにとなくねやのさむしろうちらはらひつゝ思ふこと
のみあはれは

夕されはあらましことの面影に枕のちりをうち拂ひつゝ
あくかるゝ心は人にそひぬ覽身のうさのみそやる方もなき
宮にさふらひしまさより(雅題)の中納言の姫をち殿と
いひしか物いひおかしにくからぬさましてなにこ
とも申かはしなとせしか秋のころ山里にてゆあむる
とて久しくこもりゐられたりしにことのつめてに申

つかはす

ましはふくねやの板まにもる月を霜とやはらふ秋のやま里
めつらしくわか思ひやる鹿のねをあくまできくや秋の山里
いとしく露やをきそふかきくらし雨ふるころの秋の山里
羨ましほたきりくへていか計みゆわかすらむ秋の山里
椎ひろふ賤も道にや迷ふらん霧たちこむる秋のやま里
くりもゑみわかしかる覺と思にもいてやゆかしや秋の山里
心さしならは定めて我爲にあるらん物をあきのやま里
このころはかうし橘なりましり木葉もみつや秋の山里
鵜ふす門田のなるこ引なれてかへらまうきや秋のやま里
歸りきてそのみるはかり語らなんゆかしかりつる秋の山里

返しもたはれそのやうなりしをほとへて忘れぬ冬ふ
かきころわつかに霜かれのきくの中にあたしくさき
たる花をおりてゆかりある人のつかさめしになけく
とありしかいひをこせたりし

霜かれの下枝にまじる菊みればわか行末もたのもしき哉
と申たる返事に

花といへは移るふ色もあるときく君か勾ひは久しかるへし
上らふたちて近くみし人のとりわきなかきやうな
りにわか物申人のこのかみなりしは御ゆかりの上
にやかて宮人にてことに常にみし人のしのひて心か
はしてかたみに思はぬにしもあらしとみえしかと世
のならひにて女かたは物おもはしけなりしをまほな
らねと心えたりしかはちとけしきしらせまほしくて
男の許へつかはす

よそにても契哀にみる人をつらきめみせはいかにうからん

立かへる名殘こそとはいはねとも枕もいかに君をまつらん
おきて行人のなこりやをし明の月影しろし道芝の露
返とあいなのさかしらやさるはかやうのこともつき
なき身にはことはもなきをとて

我思ふ人の心ををしはかりなにとさま／＼君なけくらん
枕にも人にも心思ひつけてなこりやなにと君をいひなす
あけかたの月を袂にやとしつゝかへさの袖はわれを露けき
宮のまうのほらせ給御ともして歸りたる人ゝ物かた
りせしほとに火も消ぬれとすひつのうつみ火はかり
かきおこしておなし心なるとち四人はかりさま／＼
の心のうちともかたへは殘さすなといひしかと思ひ
／＼にしたむせふことはまほにもいひやらぬしも我
心にもしられつゝ哀にそおほえし

思ふとちよはの埋火搔おこし闇のうつゝにまともををする
誰もその心の底は數々にいひいてねともしるくそ有ける
なと思ひつゝくるほとに宮のすけ(重寶)の内の御方の
番にさふらひけるとていりきてれいのあたこともま
としきともさま／＼おかしきやうにいひて我も人も
なのめならすわらひつゝはては恐ろしき物かたりと
もをしてをとされしかはまめやかにみな汗になりつ
ゝ今はきかし後にといひしかとなを／＼いはれしか
ははては衣をひきかつきてきかしとてねてのち心に
思ひし事

あたゝにたゞいふ人の物語それたに心まとひぬるかな
鬼をけにみぬたにいたく恐ろしき後の世を社思ひしりぬる
この人もよしなしををいひてくきのゆかりをなにか

思ひはなつたゝおなしことゝ思へとつねにいはれしかは

玉璫

濡そめし袖たにあるを同しのゝ露をはさのみいかゝわくへきとぞ思ひしを大かたにはにくからすいひかはしていつまでもかやうにたにあらんといはれしかは

新勅

忘れしの契たかはぬ世なりせは頼みやせまし君か一こと

いへは同じことをのみ返さ思ひてあはれゝゝわか心に物を忘れはやとつねは思ふかかひなければ

さる事の有しかとたに思はしと思ひかけても寝たれさり覺なにとなき事を我も人もいひしおり思はぬ物のいひはつしをしてそれをとかくいはれしも後に思へはあはれにかなしくて

なにとなきもの葉ことに耳とめて恨し事も忘れぬ哉

母なりし人の様かへてうせにしかとに心さし深くと人にもいひをきなとせられし五月のはしめなくなりにし後はよろづ思ふ計りなくてあかしくらしゝに四十九日にもなりてきられたりしきぬ衣なとりいてゝこもり僧にとらせあせう上人にたてまつりなとせしにきぬのしはまでもきられたりしおりにかはらて面影いとゝすゝむ悲しさに

きなれける衣の袖のおりまでもたゝその人をみる心地して思ひなしもいとゝかなしき事のみ申まきりて

哀てふ人もなき世に残り居ていかなるへき我身なるらん高倉院かくれさせ給ぬときゝしころみなれまいらせしよの事かすゝゝ覺てをよはぬ御をなから限りなくかなしくなに事もけにすゑの世にあまりたる御とや

新編古

なと人の申にも

雲の上に行末とをく見し月のひかり消ぬと聞くを悲しき

中宮の御心のうちをしはかりまいらすいかはかりとかなし

かけならへ照日の光かくれつゝひとりや月のかきくらす覽

壽永元暦のころの世のさはきは夢ともまほろしとも

哀ともなにともすへてゝいふへきはににもなりしかは。よろづいかなりしとたにおもひわかれす。な

かゝ思ひもいてしとのみそ。いまゝてもおほゆる。見し人ゝの都わかるときゝし秋さまの。とかくいひても思ひてもこゝろもことはをよはれす。ま

そのきはゝわれも人もかねていつとしる人なかりしかは。たゝいはんかたなき夢とのみそ。ちかくもと

をくも見聞く人みなまよはれし。大かたの世さはかしくて心ほそきやうにきこえたりしころなとは藏人

頭にて。とに心のひまなかりしうへ。あたりなりし人も。あいなきことなりなといふをもありて。さらに

また有しよりけにしのひなとして。をのつからとかくためらひてそ物いひなとせしおりゝゝも。たゝお

ほかたのことくきにも。かゝる世のさはきになりぬれは。はかなきにかすにたゝいまにてもならんとは。

うたかひなき事なり。さらはさすかにつゆはかりの

哀はかけてんや。たとひなにと思はすとも。かやう

にきこえなれても年月といふはかりにしもなりぬる

情にみちのひかりをかならず思ひやれ。もし命たと

ひいましはしなとありとも。すへていまは心をむか

しの身とおもはしと思ひしたゝめてあるなん。その
ゆへは物をあはれともなひのなこり。その人の事な
と思ひたちなは。思ふかきりをもよふまし。心よは
さもいかなるへしとも身ばかりおほえねは。なに事
もおもひ捨て人のもとへ。さてもなといひて文やる
事なとも。いつこの浦よりもせしと思ひとりたるを。
なをさりにてきこえぬなとおほしそ。よろつたゝ
いまより身をかへたる身と思ひなりぬるを。猶とも
すればもとの心になりぬへきなん。いとくちおしき
といひしもの。けにさることゝきゝしも。なにとか
いはれん。たゝ涙のほかはこの葉もなかりしを。
つるに秋のはしめつかた夢のうちのゆめをきゝし心
地なにかたとへん。さすか心あるかきりこの哀をい
ひおもはぬ人なけれと。かつみる人ゝもわか心のと
もは。たれかあらんとおほえしかは。人にもいはれ
す。つくゝと思ひつゝけて。むねにもあまれば。
佛にむかひたてまつりて。なきくらすより外のこと
なし。されとけに命はかきりあるのみにあらず。さ
まかふる事たにも身と思ふやうに心にまかせて。ひ
とりはしり出なとは。たえせぬまゝに。さてあらる
ゝ返さうくて

又例したくひもしらぬ憂事をみても扱あるみそうとまじき
いはんかたなき心地にて秋ふかく成行けしきにまし
てたへて有へき心ちもせず月のあかき夜空のけしき
雲のたゝすまる風のをとことかなしきをなかくめつ
ゝ行衛もなき旅の空いかなる心地ならんとのみかき

くらさる

玉華

いつこにていかなる事を思ひつゝ今宵の月に袖しほらん

夜のあけ日のくれなに事を見きくにもかたとき思ひ
たゆむ事はいかにしてかあらんされはいかにしてか
せめては今一たびかく思ふことをもいはんと思ふ
もかなふましきかなしきこゝかしことうきたるさま
なとつたへきくもすへていはんかたなし

いはゝやと思ふ事のみ多かるもさて空しくやつるになり南
おそろしきものゝふともいくらもくたるなにかとき
くにもいかなる事をいつきかんとかなしく心うくな
くゝねたる夢につねにみしまゝのなをしすかたに
て風のおひたゝしくふく時にいとものおもはしけに
うちなかくてあると見てさばく心にやかてさめたる
心地いふへきかたなしたゝいまもけにさてやあらん
とおもひやられて

波風のあらきさはきに漂ひてさこそはやすき空なかるらめ
あまりさはかしき心地のなこりにや身もぬるみて心
地もわひしければさらはなくなりなはやとおほゆ
うき上の猶うきはてをきかぬ先に此世の外によしならぬれ
と思へとさもなきつれなきも心うし

あらるへき心地もせぬに猶たへてけふ迄ふるそ悲かりける
かへる年の春ゆかりある人の物まいりすとてさそひ
しかは何事も物うけれとたうときかたのことなれば
おもひおこしてまいりぬかへさに梅の花なのめなら
すおもしろき所あるとて人の立入しかはくせられて
ゆきたるにまことに世のつねならぬ花のけしきなり

その所のあるしなるひしりの人に物いふをきけはとしゝ此花をしめゆひてこひ給へし人なくてことしはいたつらにさきちり侍るあはれにといふをたれそとふめれはその人としもたしかなる名をいふにかきみたりかなしき心のうちに

思ふと心のともに語らはんなれける人を花もしのはゝ

そのころあさましくおそろしくきこえしことゝもにちかくみし人ゝむなしくなりたるかすおほくてあらぬ姿にてわたさるゝなにかと心うくいはんかたなきともきこえてたれゝなと人のいひしもためしなくて

哀さは是は誠か猶もたゝ夢にやあらんとこそおほゆれ

しけひらの三位中將のうき身になりて都にしはしときゝしころとにゝ昔ちかゝりし人ゝのなかにも朝ゆふなれておかしきをいひ又はかなきこととも人のためはひんきに心しらひ有なとしてありかたかりしをいかなりけるむくひそと心うし見たる人の御かほはかはらてめもあてられぬなといふか心うかなしさいはんかたなし

朝夕にみなれすゝその昔かゝるへしとは思ひてもみす

返ゝ心のうちをしはかられて

またしなぬ此世のうちに身をかへて何心地してあけ暮す覽またこれもりの三位中將くま野にて身をなけてとて人のいひあはれかりし。いづれもいまの世をみきくにも。けにすくれたりしなと思ひ出らるゝあたりなれと。きはことにありかたかりしかたちようい誠に

春風
悲しく

むかしいまみるなかに。ためしもなかりしをかし。されはおりゝにはめてぬ人やはありし。ほうちう寺とのゝ御賀に青海波まひての折なとは。ひかる源氏のためしもおもひ出らるゝなとこそ人ゝいひしが。花も匂ひもけにけをされぬへくなと聞えしをかし。そのおりゝのおもかけはさるゝにて。みなれしあはれいづれもといひなから。なをことにおほゆ。おなし事と思へと。おりゝはいはれしを。さこそといらへしかは。されとさやはあるといはれし事なと。かすゝ悲しともいふばかりなし

春の花色によそへし俵のむなしき波のしたにくちぬる

ことにおなしゆかりは思ひとるかたのつよかりけるうき事はさなれとも。此三位中將ときよつね中將と心よくなりぬるなとさまゝ人のいひあつかふにものこりて。いかに心よはくやいとゝおほゆらんなど。さまゝ思へと。かねていひしことにてや。またなにとか思ふらん。たよりにつけてことの葉一もきかす。たゝ都いてゝの冬わつかなるたよりにつけて申しやうに今は身をかへたと思ふを。たれもさ思ひて後の世をとへとはかり有しかは。たしかなるたよりもしらす。わさとは又かなはて。これよりもゆゑ懸ふかたなく思ひやらるゝ心のうちをも。えいひやらぬに此ゆかりのくさは。かくのみみなきゝしころ。あたならぬたよりにて。つたふへき事有しかは返ゝかくまでもきこえしと思へとなといひて

さま／＼に心亂れてもしほ草かきあつむへき心地たにせず
おなしよと猶思ふ社悲しけれあるかあるにもあらぬ此世に
此はらからたちのをなといひて

思ふ事を思ひやるにぞ思ひくたく思ひにそへていと悲數
なと申たりし返事さすかうれしきよいひていまは
たゝ身のうへもけふあすのことなれば返／＼思ひと
ちめぬる心地にてなんまめやかにこのたひはかりそ
申もすへきとて

思ひたらめ思ひきりても立歸さすかに思ふことそおほかる
今はすへて何の情も哀をもみもせしき／＼もせしところ思へ
さきたちぬる人この事いひて

あるほとりあるにもあらぬうちに猶かく憂事をみるそ悲數
とありしをみし心ちまして又いふかたなし。またの
年春そまゝにこの世のほかなき／＼はてにしそのほと
のとは。ましてなにとはいはん。みなかねて思ひし
ことなれと。た／＼ほれ／＼とのみおほゆ。あまりに
せきやらぬ涙も。かつはみる人／＼にもつゝましけ
れは。なにとか人は思ふらめと。心ちのわひしきと
て引かつきて。ねくらしてのみそ心のま／＼になきす
くす。いかて物をわすれんと思へと。あやにくに面
影は身にそひ。ことのはことにきく心地して身をせ
めて悲しきといひつくすへきかたなし。た／＼かきり
ある命にて。はかなくなときくをたにこそ悲しき
事にいひおもへ。これはなにをかためしにせんと返
／＼おほえて
なへてよのはかなき事を悲しとはかゝる夢みぬ人やいひ劍

ほとへて人のもとよりさてもこのあはれいかばかり
といひたれはなへてのことのやうにとおほえて
さてもけふまてなからふる世のならひ心うく。明ぬ
くれぬとしつゝ。さすかにうつし心もましり。物をと

かく思ひつゝくるま／＼には。かなしさもなをまさる
心地す。はかなく哀なりける契のほとも我身ひとつ
の事にはあらず。同じゆかりの夢みる人は。しるも
しらぬもさすかおほくこそなれと。さしあたりては
ためしなくのみおほゆ。昔も今もた／＼のとなるか
きりある別こそあれ。かくうきとはいつかはありけ
るとのみおもふさるゝにて。た／＼とかくさすか思ひ
なれにしものみわすれかたさ。いかて／＼いまわす
れんとのみ思へと。かなはぬもかなしうて

ためしなくかゝる別に猶とまる面影はかり身にそふそうき
いかて今はかひなき事を歎かすてもの忘れする心にも哉
忘れんと思ひても又立歸なこりなからんことも悲しき

た／＼むねにせき涙にあまる思ひのみなるも何のかひ
そとかなしうて。後の世をはかならす思ひやれとい
ひし物を。さこそそのきはも心あはた／＼しかりけめ。
またをのつからのこりて跡とふ人もさすかあるらめ
と。よろつあたりの人も世にかくろへて。なに事も
道ひろからしなと身ひとつのことに思ひなされて悲
しければ。おもひおこして。ほくえりいたして。れ
うしにすかせて經かき。又さなからうたせて。もし
のみゆるかまはゆければ。うらに物おしかくして手

つから地藏六たい。すみかきにかきまいらせなど。
さま／＼心さしはかりとふらふも。また人めつゝま
しければ。うとき人にもしらせす。心ひとつにいと
なむかなしさも猶たへかたし

すくふなか誓ひ頼みてうつしをくかならす六の道導へせよ
なとなく／＼思ひねんして。あせう上人の御許へ申
つけてくやうせさせ奉る。さすか積りにけるほうく
なれば。おほくて。そんなうたらになにくれさらぬ
事も多くかゝせなとするに。なか／＼みしと思へと。
さすかにみゆる筆の跡ことの葉もかゝらてたに昔の
跡は涙のかゝるならひなるを。めもくれ心も消つゝ
いはんかたなし。そのおりとありし。かゝりしおり
わかいひしことのあひしらひなにかとみゆるか。か
きかへすやうにおほゆれば。ひとつものこさす。み
なさやうにしたゝむるにも。みるもかひなしとかや
源氏の物かたりにあることおもひ出らるゝも。なに
の心ありてとつれなくおほゆ

悲しさはいとゝもよほす水莖の跡は中／＼きえねとそ思ふ
か計の思ひにたへてつれもなく猶なからふる玉のをもうし
夏ふかきころつねにゐたるかたのやりとはたにのか
たにてみおろしたれば竹の葉はつよき日によられた
るやうにてまゝに土さへさけてみゆるよのけしきに
もわか袖ひめやとまたかきくらさるゝひくらしはし
けき木すゑにかしかましきまで鳴くらすともなる
心地して

ことゝはんなれもや物を思ふらん諸共になく夏の日くらし

なくさむ事もなきまゝには佛にのみむかひ奉るもさ
すかおさなくより頼みきこえしかとうき身思ひしる
事のみありてまたかくためしなきものを思ふもいか
なるゆへそと神も佛もうらめしくさへなりて

さりともと頼む佛もめくまねは後の世までを思ふ悲しさ
行衛なく我身もさらはあくかれん跡止むへき浮世ならぬに
北山のへんによしある所のありしを。はかなくなり
にし人のりやうする所にて。花のさかり秋の野へな
と見にはつねにかよひしかは。たれもみしおりもあ
りしを。あるひしりの物になりてときゝしを。ゆかり
ある事有しかは。せめての事にしのひてわたりてみ
れば。おも影はさきたちて。またかきくらさるゝさま
そいふかたなき。みかきつくるはれし庭も浅ちかは
らよもきかそまになりて。むくらもこけもしけりつ
ゝ。ありしけしきにもあらぬに。うへしこはきはし
けりあひて北南の庭にみたれふしたり。藤はかまう
ちかほり。ひとむらすゝきもまゝに虫のねしけき野
へとみえしに。車よせておりしつまとのものとて。
たゝひとりなかわるに。さま／＼おもひいつること
なといふもなか／＼なり。れいの物もおほえぬやう
に。かきみたる心のうちながら
露きえし跡は野原となりはてゝ有しにも似すあればてに晝
跡をだに形みにみんと思しをさてしめいとゝ悲しさをそふ
東の庭に柳さくらのおなじたけなるをまかせてあまた
うへならへたりしを一年の春もろともにみし事もた
ゝ今の心ちするに木すゑはかりはさなからあるも心

うくかなしくて

うへてみし人は枯ぬる跡に猶殘る梢をみるも露けし
我身もし春まであらは尋みん花もその世の事なわすれそ

また物へまかりし道に昔のあとの煙になりにしか。

いしすへはかりのこりたるに草ふかくて秋の花とこ

ろくくにさき出て露うちこほれつゝ。むしのこゑ

は。しはしくるまをとめてみるも。いつをかきり

にかとおほえて

又さらにうき故郷を歸りみて心とむる事もはかなし

たゝおなしことをのみはるゝよもなく思ひつゝたえ

ぬ命はさすかにありふるにうきことのみきゝかさぬ

るさまいふかたなし

定なき世とはいへ共かく計りうきためしこそ又なかりけれ

女院大原におはしますとはかりは。きゝまいらすれ

と。さるへき人にしられては。まいるへきやうもな

かりしを。ふかき心をしるへにて。わりなくたつね

まいるに。やうくちかつくまゝに山みちのけしき

より。まつ涙はさきたちて。いふかたなき御いほり

のさま御すまゐることからすへてめもみあけられす。

昔の御ありさま見まいらせさらんたに大かたのこと

から。いかゝともなのめならん。まして夢うつゝと

もいふかたなし。秋ふかきやまおろしちかき梢にひ

つきあひて。かけひの水の音つれ鹿のこゑ虫のねい

つくものことなれと。ためしなきかなしさなり。都

そ春のにしきをたちかさねてし人々六十よ人有しか

と。みわするゝさまにおとろへはてたる。すみ染のす

かたにて。わつかに三四人はかりそさふらはるゝ。そ

の人々にもさてもやとはかりそ我も人もいひ出たり

し。むせふ涙におほれて。すへてこともつゞけられす

今や夢昔やゆめと迷はれていかに思へとうつゝとそなき

あふきみし昔の雲の上の月かゝるみ山の陰そかなしき

花の匂ひ月のひかりにたとへても。ひとかたにはあ

かさりし御おもかけあらぬかとのみたとらるゝに。

かゝる御ををみなから。なにの思出なき都へされは

なにとて歸るらんと。うとましく心うし

山深くとゝめをきぬる我心やかて住へきしるへとをしれ

何事につけても世にたゝなくもならはよとのみおほ

えて

歎きわひなからましかはと思ふ迄の身を我乍ら悲しかり覺

なくさむことはいかにしてかあらんなればあらぬと

ころ尋かてら遠く思ひたつことあるにもまつおもひ

いつること有て

歸へき道は心にまかせても旅たつほとはなをあはれこ

都をはいとひても又なこりあるをましてと物を思ひ出つる

心さしの所はひえ坂もとのわたりなり雪はかきくら

しふりたるに都ははるかにへたゞりぬる心地してな

にの思ひ出にかと心ほそし夜ふくるほとにかりの一

つらこのゐたるうへをすくるをとのするもまつあは

れとのみきゝてすゝろにしはゝとそなかるゝ

うきかたは所からかとのかるれといつくも假の宿と聞ゆる

關一こそこえぬるはいくほとならしを梢にひゞくあ

らしのをとも都よりはものほかにけしきに
關こえていく雲井までへたてねと都には似ぬ山おろし哉

つく／＼とおこなひてたゝすしに見し人の後のよ
とのみいのらるゝにも猶かひなきことのみ思はしと
てもまたいかゞはそをもを立出てみれば橋の木に雪
の深く積りたるをみるにもいつのとしそや大内にて
雪のいとたかく積りたりしあしたとのるすかたのな
へはめるなをしにてこの木にふりかゝりたりし雪を
さなからおりてもちたりしをなとそれをしもおられ
けるにかと申しかは我たちならすかたの木なれば契
りなつかしくてといひしおりたゝ今とおほえてかな
しきこそいふかたなき

立なれしみかきのうちの橋も雪ときえにし人やこふらん

とまつおもひやるこのみる木は葉のみしけりて色も
さひし

ことゝはんさ月ならても橋に昔の袖のかは残るやと
風にしたかひてなるこのをとのするもすゝるにもの
かなし

有しよにあらず鳴子の音きけは過にしとそいと悲しき
はるかに都のかたをなかむればはる／＼とへたゝり
たる雲井にも

我心うきたつまゝに詠むれはいつくを雲のはてとしもなし
十二月一日ころなりしやらん。夜に入て雨とも雪と
もなくうちゝりて。むら雲さはかしく。ひとへにく
もりはてぬ物から。むら／＼星うちきえしたり。ひ
きかつき臥したるきぬをふけぬるほど。うし二はか

りにやとおもふほとに。ひきのけて空を見あけたれ
は。そにはれてあさき色なるに。ひかりこと／＼し
き星のおほきなるか。むらもなくいてたる。なのめ
ならすおもしろく花のかみに。はくをうちゝらした
るによう似たり。こよひはしめてみそめたる心ち
す。さき／＼もほし月も見なれたるをなれと。是は
おりからにや。ことなる心地するにつけても。たゝ
物のみ覺ゆ

玉璫
月をこそ

詠めなれしかほしのよの深き哀をこよひしりぬる
ひましへまいるに雪はかきくらし。こしのまへいた
にこちたく積りて。つやしたるあけほのに。やとへ
いつる道すから。すたれをあげたれば。袖にもふと
ころにも。よこ雪にていりて。そてのうへははらへ
とも。やかてむら／＼こほるか面白にも。なにこと
もみせはやとおもふ人のなきあはれなり

何事を祈かすへき我袖の氷はとけんかたもあらしを
いたく心ほそきたひのすまゐにともまつ雪きえやら
てかつ／＼あまき空をなかめつゝ

さらてたに降にしとの悲しきに雪かきくらす空はなかめし
夜もすからなむるにかきくもりまたはれのき一方
ならぬ雲のけしきにも

大空ははれも曇りも定なきを身のうき事いづもかはらぬ
そともなるこのをとなひもさひしさそふ心地して
大かたのよものこすゑ野へのけしきも年のくれなれ
はみなかれ野にて吹はらひたるなにとなくなこりな
きよのけしきも思ひよそへらるゝことおほし

秋すきてなるこは風に残りけり何のなりこも人のよそなき
わつかなる谷川のこほりはむすひなからさすか心ほ
そきをとはたえくきこゆるにおもふことのみあり
て

谷川はこの葉とちませ氷れもしたには絶ぬ水の音哉

また夜をこめて都へいつる道はしかのうらなるにい
り江にこほりしつゝよせくるなみのかへらぬ心地し
て雪つもりて見わたしたれば白妙なり

うら山し志賀の浦ちの氷とちかへらぬ波も又かへりなん

海のおもてはふかみとりくろくとおそろしけにあ
れたるにほとなきみわたしのむかひにうるはしきふ
なちにて空はあなたのはたにひとつにて雲路にこき
きゆるをふねのよそめに波風あらくなつかしからぬ
けしきにて水草もなき濱へにたへかたく風はつよき
にいかそ波にいりにし人のかゝるわたりにもある
と思ひのほかきゝたらはいかにすみうきわたりな
りともとゝまりこそせめとさへあんせられて

玉翠
戀し

のふ人にあふみの海ならはあらし波にも立ましらまし
む月のなかはすくるところ何となく春のけしきうらう
らとかすみわたりたるに高倉院の中納言典侍といひ
し人はまのうちにさふらはるゝかあはんとありしか
は昔のことしれる人もなつかしくてその日をまつほ
とにさしあふことありてとゝまりぬこよひにてあら
ましと思ふよあれたる家の軒はより月さし入て梅か
ほりつゝえんなりなめあかしてつとめて申やる
衰いかにけさはなこりを詠めまし昨日のくれの誠なりせは

返し

思へたゝさそあらましのなこりたに昨日もけふも有明の空
ことなる事なき物かたりを人のするにおもひいてら
るゝ事有てすゝろに涙のこほれそめてとゝめかたく
なかるれば

玉翠

うき事のいつもそふみは何としも思ひあへても涙おちけり

二月十五日ねはんゑとて人のまいりしに。さそはれ
てまいりぬ。おこなひうちしておもひつゝくれば。
釋迦佛の入滅させ給けんおりのこと憎なとのかた
るをきくにも。なにもたゝ物の哀のことにおほえて
涙とゝめかたくおほゆるも。さほとのことはいつも
きゝしかと。此ころきくは。いたくしみくとおほ
えて物かなしく涙のとまらぬも。なからふましきわ
か世のほとにやと。それはなけかしからすおほゆ
世中の常なきことのためしとて空かくれせし月にそ有ける
殷富門院皇后宮と申しころ。その御方にさふらふ上
らふのしるよしありて聞えかはしゝか行あひて。ひ
くらし物語して歸給ぬるなこり雨うちふりて物あは
れ。この人もことにかわかもふおなしすちなるこ
とをおもふ人なりしかは。なつかしくもあり。さま
くそれもおひしくおもひいてられて申やる
いかにせん詠めかねぬる名残かなさらぬたにこそ雨の夕暮

返し

詠めわふる雨の夕に哀またふりにし事をいひあはせはや
四月廿三日あけはなるゝほとに雨すこしふりたるに
東のかたの空に郭公の初音なきわたるめつらしくあ

はれにきくにも

明かたに初音聞つる時鳥しての山路のことをとはや
あらすなるうき世のはてに時鳥いかで鳴ねのかはらさる覽

五月二日むかしの母のき日なり心地なやましかりし
かとてなとあらひて念佛申經よむ法師よひて經よま
せてちやうもんするにも又こん年のいとなみはえせ
ぬこともやと思ふもさすがはれにて袖もまたぬれ
ぬ

別にし年月日にはあふことも是はかりやと思ふ悲しさ

やよひの廿日あまりのころ。はかなかりし人の水の
あはとなりける日なれば。れいの心ひとつに。とか
く思ひいとなむにも。わかなからん後たれかこれほ
とも思ひやらん。かくおもひしとて思ひいつへき
人もなきかたへかたくなしくて。しくしくとなく
よりほかのことそなき。我身のなくならんよりもこ
れがおほゆるに

玉簪

いかにせん我後の世はさても猶昔のけふをとふ人もかな

よもの梢も庭のけしきもみなこゝちよけにて。あをみ
とりなるに。なにとなき小鳥とものさえつる聲く
も思ふことなけなるにも。まつ涙にかきくらされて
晴わたる空のけしきも鳥のねもうら山しくそ心ゆくめる
つきもせず憂事をのみ思ふ身は晴たる空もかきくらしつゝ
としゝ七夕に哥よみてまいらせしをおもひいつる
はかりせうゝこれもかきつゝ

七夕のけふは嬉しさつゝむらんあすの袖社かねてしらるれ
鐘のねもやこゑの鳥も心あれな今宵はかりはもの忘れして

契けんゆへはしらねと七夕の年の一夜そなをもとかしき
聲のあやは音はかりして促織露のきぬをや星にかすらん
さまゝに思ひやりつゝよそなから詠かねぬる星合のそら
天河漕はなれ行船のうちのあかぬ涙の色をしそおもふ
きかはやなふたつの星の物語たらぬの水にうつらましかは
よゝふとも絶んものかは七夕にあさひく糸のなき契りは
をしなへて草村をにをく露のいもの葉の霜けふにあふ覽
人かすにけふはかさましから衣涙にくちぬ袂なりせは

ひこ星の行合の空を眺てもまつこともなき我を悲しき
年をまたぬ袖たにぬれし東雲に思ひこそやれあまの羽衣
哀とや思ひもすると七夕に身のなけきを愁へつるかな
七夕のいはの枕はこよひこそ涙かゝらぬたえまなるらめ
いく返り行かへるらん七夕のくれいそくまの心つかひは
ひこほしのあひみるけふは何ゆへに鳥のわたらぬ水結ふ覽
哀とや七夕つめも思らん逢瀬もまたぬわか契りをは
七夕にけふやかす覽野へもに亂れるなるむしのころもは
いとふらん心もしらす七夕に涙の袖を人なみにかす
何事をまつかたるらん彦星の天河原に岩まくらして
七夕のあかぬ別の涙にや雲の衣の露けかるらん

何事もかはりはてぬる世中に契りたかへぬほし合のそら
けふくれは草葉にかくる糸よりも長き契は絶ん物かは
心こそ稀に契し中なれば恨もせしなあはぬたえまを
哀ともかつはみよとて七夕に涙さながらぬきてかしつる
天川けふの逢瀬はよそなれと暮行空を猶もまつかな
うらやまし戀にたへたる星なれや年に一よと契る心は
あひに逢てまたむつ事もつきしよにうたて明行天の戸そうき

打はらふ袖や露けき岩枕苔のちりのみふかくつもりて
曇るさへうれしかるらん彦星の心のうちをおもひこそやれ
よひのまに入ぬる月の影までもあかね恨やふかき七夕
七夕の契り歎きし身のはては逢瀬をよそときゝわたりつゝ
なかもれは心もつきて星合の空にみちぬる身のおもひかな
露けきは秋の野へにもまさるし立わか行天のはころも
彦星の思ふ心はよふかくていかに明ぬる天の戸ならん
七夕のあひみる宵の秋風に物思ふ袖の露はらはなん
秋ことに別しころと思出る心のうちを星はみるらん

七夕に心かはしてなけくともかゝる思ひをえしもかたらぬ
世中はみしにもあらずなりぬるにおもかはりせぬ星合の空
かさねても猶や露けき程もなく袖わかるへき天のはころも
思ふ事かけとつきせぬ梶の葉のけふにあひける故をしらはや
よしかさしかゝる浮身の衣手は七夕つめにいまれもそする
かく計かきて手向るうたかたをふたつの星のいかゝみる覽
何となくよはの哀に袖ぬれて詠かねぬる星あひのそら
えそしらぬ忍ふゆへなき彦星も稀に契りてなけく心を
なけきても逢瀬をたのむ天川此わたりこそ悲しかりけれ
かきつけは猶もつゝまし思ひなけく心の内を星よ知らなん
引糸のたゝ一筋にこひゝてこよひ逢せもうらやまれつゝ
類ひなき歎きに洗む人そとて此ことはを星やいまはん
よしやまた慰めかはせ七夕よかゝる思ひに迷ふこゝろを
は このたひはかりもやと思ひてもまたかくかすつもれ
いつまてか七の哥を書つけんしらはやつけよあまつ彦ほし
わかゝりしほとより身をようなきものに思ひとりに

しかば只心より外の命のあらるゝたにも。いとほし
きにまして人にしらるへきこととは。かけてもおも
はさりしを。さるへき人ゝさりかたくいひはから
ふことありで。おもひのほかにとしへてのち。また九
重のうちをみし身の契りかへすゝ定めなく。わか
心のうちもつれなくすそろはし。藤つほのかたさま
などみるにも。むかしすみなれしもの思ひ出られ
てかなしきに。御しつらひも。よのけしきもかはり
たることもなきに。たゝわか心のうちはかり。くた
けまさるかなしき。月のくまなきをなかつて。おほ
えぬこともなくかきくらさる。昔かろらかなるうへ
人などにて見し人ゝおもゝしき上達部にて。み
なあるにも。とそあらまし。かくそあらましなと思
ひつゝけられて有しよりもけに。心のうちは。やら
んかたもなくかなしきと。なにゝかはにん。高倉院
の御氣色にいとようにまいらせさせおはしましたる
上の御さまにも。かすならぬ心のうちひとつたへが
たく。きしかたこひしく月をみて

今はたゝしめてわするゝ古を思ひいてよとすめる月かな
五節のころ霜夜の有明に宮の御かたのゑんすいにて
白うすやうのこゑなとのきこゆるにもとしゝきゝ
なれし事まつおほえさらんや
霜に冴る白うすやうの聲きけは有し雲をそまつおほえける
とにかくに物のおもひつゝけられて見出しだるに
またらなる犬の竹のたいのものととしありくか背内
の御かだにありしが御使なとにまいりたるおりゝ

よひて袖うちきせなとせしかは見しりてなれむつれ
尾をはたらかしなとせしにいとようおほえたる見る
もすゝろにあはれなり

犬は猶姿もみしにかよひけり人のけしきそ有しにもにぬ
その世の事みし人しりたるをのつからありもやすら
めとかたらふよしもなしたゝ心のうちはかり思ひつ
ゝけらるゝかはるゝかたなくかなしくて

我思ふ心にたる友もかなそよよとたにもかたりあはせん
五月五日さうふのみこしたかみはしのあたりのきの
けしきもみしよにかはらぬにも

菖蒲ふく軒はもみしにかはらぬにうきねのかゝる袖を悲數
人のうれへ申事のあるをさるへき人の申さたするを
きけは後白河院の御時おほせくたされけるなとして
さめやらぬ夢とおもふ人の藏人頭にてかきたりける
とてその名をきくにいかゝあはれのことものめな
らん

水の泡と消にし人の名はかりをさすかにとめてきくも悲數
面影もその名もさらは消もせて聞みること心まとはす
うかりける夢の契の身をささてさむるよもなき歎のみする
隆房の中納言のなけくこと有てこもりゐたるもとへ
これはかりは昔のことをもをつからいひなとする人
なればとふらひ申とて五月五日
つきもせぬうきねは袖にかけなからよその涙を思ひやる哉
返し

かけなからうきねにつけて思ひやれ菖蒲もしらて暮す心を
大宮入道内大臣うせられたりしころ公經の中納言も

かきこもりて五節なともまいられさりにしろきう
すやうの色くくしをかきたるにかきて人のつか
はせしにかはりて

迷ふらん心の闇を歎くかなとよのあかりのさやかなるころ
返しうすにひのうすやうに

かきこもる闇もよそにを成ぬへき豐の明りにほのめかされて
親宗の中納言うせてのち昔もちかくみし人にて哀な
れは親長のもとへ九月つくるころ申やる空のけしき
もうちしくれてさまゝのあはれもことにしのひか
たければ色なる人の袖のうへもをしはかられて

くらき雨の窓うつ音にねさめして人の思ひを思ひこそやれ
露けさのなける姿にまかふらん花のうへまで思ひこそやれ
露きえし庭の草原うら枯てしけきなきを思ひ社やれ
わひしらにましらたになくよるの雨に人の心を思ひ社やれ
君かこと歎きくのはてはうち詠めつゝ思ひこそやれ
又もこん秋のくれをはおしましなからぬ道の別たにこそ

返し 親長

板ひさし時雨はかりは音つれて人め稀なる宿そかなしき
うへ置し主はかれつゝ色くの花咲庭をみるそかなしき
はれまなきうれへの雲にいつとなく涙の雨のふるそ悲しき
秋の庭はらはぬ宿に跡絶て苔のみふかくなるそかなしき
夜もすから歎きあかせる曉にきしの一聲きくそかなしき
くちなしの花色衣ぬきかへてふちの袂になるそかなしき
思ふらんよその歎きも有物をとふ言の葉をみるそかなしき
くれぬとも又も逢へき秋にたに人の別をなすよしもかな
九月の十三夜もはりのまゝにはれたりしに。親長の

ものゝきたなとひまなくして。うちあんしたるけしきもなくて。きとひきそはめ。はかなきものゝはしにかきて。わかき人ゝ大はん所にありし中をかきわけゝ。うしろのかたによりて。ふところよりとりいてゝたひたりし

名にしあふよを長月の十日あまり君みよとてや月も冴けき返しこれも物のほしに

なに高きよを長月の月はよしうき身にみえは曇りもそするみちむねの宰相中將の。つねにまいりて女官など尋るも。はるかにえしもふとまいらす。つねに女房にけさんせまほしき。いかゝすへきといはれしかは。此みすのまへにてうちしはふかせ給へ。いつもきゝつけんするよし申せは。まことしからすといはるれは。たゝこゝもとにたちさらて。よるひるさふらふそといひて後。つゆもまたひぬほとにまいりてたゝれにけりときけは。めしつきしていつくへもをいつけとてはしらかす

萩の葉にあらぬみなれば音もせてみるをもみぬと思なるへし久我へいかれにけるを。やかて尋てふみはさしをきて歸にけるに。さふらひしてをせければ。あなかしこ返事とるなとをしへたれば。鳥羽殿のみなみの門までをひけれと。むはらからたちにかゝりて。やふににけてちからくるまのありけるにまされぬるといへは。よしとてありし後さるふみ見すとあらかひ。またまいりしかとも。人なきみすのうちは。しるかりしかは。たちになきといへは。またはたらかでみし

かども。あまりものさはかしここそ。たち給しかなどいひしろひつゝ。五節のほとにもなりぬ。その後もこのことをのみいひあらそふ人ゝあるに。とよのあかりのせちゑの夜さえかへりたる有明に。まいられたりしけしき。いうなりしを。ほとなくはかなくなられにし。あはれさあへなくて。その夜の有明雲のけしきまで。かたみなるよし人ゝつねに申しつるに

思ひ出る心もけにそつきはつる名残とゝめし有明の月

限りありてつくる命はいかゝせん昔の夢を猶たくひなき霞と消煙ともなる人は猶はかなき跡をなかもすらん

思ひ出るものみそ只例しなきなへてはかなき人をきくにも

建仁三年のとし霜月の廿日あまり幾かの日やらん五條三位俊成入道の九十にみつときかせおはしまして院より賀たまはするにをくり物の法服の装束のけさに歌をかゝるへしとて師光入道女宮内卿殿に歌はめされて紫の糸にて院のおほすことにてをきてまいらせたりし

新拾
なから

へてけさそ嬉しき老の波八千代をかけて君に仕へんとありしか給はりたらん。人の歌にてや。今すこしよからんと心のうちはかりにおほえしかとも。そのまゝにをくへき事なれば。をきてしを。けさそのそ文字。つかへんのむもしを。やとよとなるへかりけるとて。にわかには夜になりて。二條殿へきとまいるへきよしおほせこととして。範光中納言の車とてあれは。まいりて文字ふたつをきなをして。やかて

新拾

君を猶今日よりも又數ふへきこゝのかへりの十の行末

賀もゆかしくて。夜もすからさふらひて見しに。昔の事おほえて。いみしく道のめんほく。なのめならすおほえしかはつとめて入道のもとへ申つかはすとて返しにかたしけなきめしに候へは。はうくまいりて。人目いかばかり見苦しくと思ひしに。かやうによるこひいはれたる。猶昔の事も物のゆへも知ると知らぬとは。まことに同じからすこそとて

同
ヤイ

龜山のこゝの返りの千年をも君か御代にてそへ譲るへき

返すくうきより外の思出なき身ながら。年はつもらいていたつらにあかしくらすほとに。思ひ出でらるゝ事どもを。すこしつゝ書つけたるなり。をのつから人のさることやなといふには。いたく思ふまゝのことかはゆくもおほえて。せうくをそかきて見せし。是はたゝ我眼ひとつに見んとて書つけたるを後に見て

碎さける思ひの外の悲しさも書あつめてそ更に知らるゝ

老の後。民部卿定家の歌を集むることありとて。書をきたるものやと尋ねられたるたにも。人數に思ひ出ていはれたるなきけ。あり難くおほゆるに。いつの名をとか思ふと問はれたる思ひやりの。いみしうおほえて。猶只へたてはてにし昔の事の忘れ難ければ。その世のまゝになと申とて

言の葉のもし世に散らは忍はしき昔の名社とめまほしけれ

返し

民部卿定家

同しくは心とめける古への其名をさらはよゝに残さん

とありしなん。うれしくおほえし

伊尹 一條攝政

義孝 少將

行成 權大納言

行經 參議從三位

伊房 中納言太宰師

定實 左京大夫

定信 宮内大輔

伊行 宮内權大輔

夜鶴抄作 一切經宣伊經皇后宮亮

行能

建禮門院右京大夫

右京大夫集以古寫本併印本校合畢

補遺

なき名たつことを歎さけるに人の許より思ひやる袖も露けしと申たりければ

月詠難下

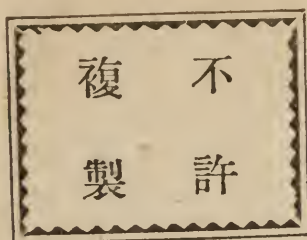
何か思ふ露けかるらん袂にてわかぬれきぬの程は知るらん

新千載雜中

歎く事侍りける頃よみ侍りける

いささらは行方も知らすあくかれん跡留むれば悲しかり覺

昭和六年十二月二十日 印刷
昭和六年十二月廿五日 發行
昭和十三年七月二十日 再版
昭和十六年十月二十日 三版發行



發行者

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

永島喜代次郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七 電話大塚七一八

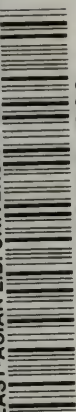
發行所

印刷所

印刷者

配給元 日本出版配給株式會社

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7930